THE CENTRAL REVIEW

中央公論

4-1923

春季大附錄號

420　4　38

第三十八年　第四號　第四百二十號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



今や社會はあらゆる方面に
健腦の人を要求す
故にあらゆる腦神經病者は

腦病良藥
健
腦
丸
を要求す



主効
腦充血　神經痛　頭痛　眩暈
腦膜炎　腦貧血　耳鳴　健忘
逆上症　卒中　中風　便秘

特長
逆上を引下げ、便通をよくし怖るべき中風卒中を未發に防ぎ腦充血を快治し記憶力を增進す。

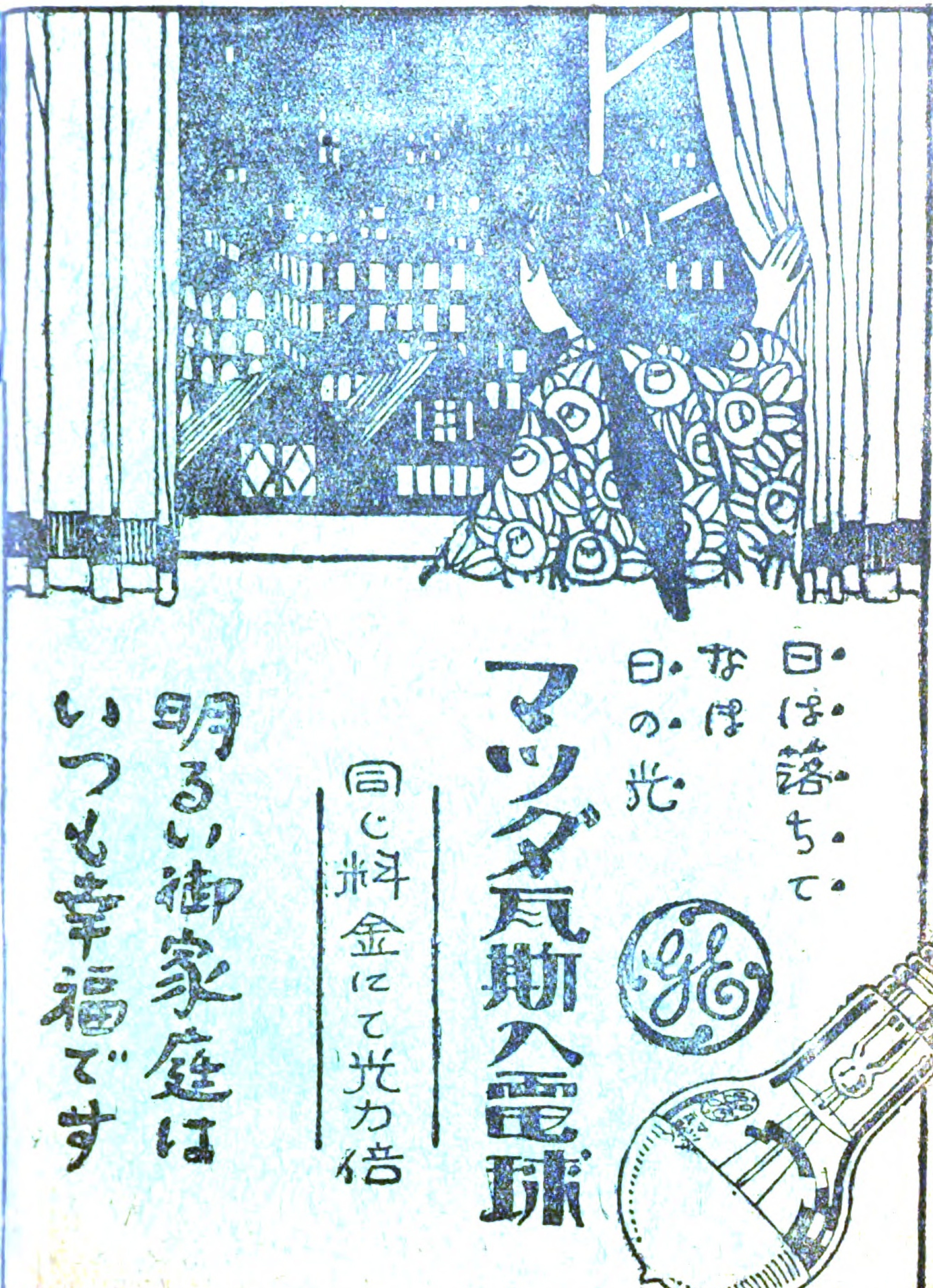
改正價樂

五回分	參拾錢
四日分	六拾錢
一週分	壹圓
二週分	壹圓八拾錢
三週分	貳圓六拾錢
五週分	四圓
十週分	七圓

全國各藥店に取次す

本舗　大阪市順慶町　東京市箔屋町　**丹平商會藥房**

卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社


日は落ちて
なほ日の光
マツダ瓦斯入電球
同じ料金にて光力倍
明るい御家庭は
いつも幸福です



水鶏笛ふく芭蕉　　安田靱彦畫筆

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ煙草も一度「カロット」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

昨年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御注文がありました店員が此事を主事に報告しますと主事は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確心を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですねー、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立ちになつて「カロット」を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんねー」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇をして歸りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

弊堂は日比谷交叉點から銀座に向つて行けば右側八軒目です、何うか一度誰方も御來店の上御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロット」を壁に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徴

外見少も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の爽快期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

日、英、米專賣特許出願中

カロット　金貳圓

パイプ　水牛銀模樣付　五拾錢
同　新流行ベークライト製　七拾錢
同　象牙製サック入　壹圓五拾錢

パイプは三種の內希望の品御用命願升

送料（內地十八錢　台、朝、樺四十五錢）
引替送料（內地卅五錢　台、朝、樺五十五錢）

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

東京市日比谷有樂町一丁目貳番地

榮川堂

振替東京五二九壹壹
電話丸の內一九一七

文學博士 鈴木宗忠著

社會哲學の諸問題

△菊版ボプリン美裝箱入▽

定價金參圓
書留送料廿三錢

最新刊

社會哲學は、獨逸に於ては既に四十年來研究せられてゐるが、我國に於ては未だ獨立に研究せられたるを聞かず。これを研究するには一方に於ては社會學及び社會科學に通ずると共に、他方に於て哲學に造詣を要す。本書は斯學の權威たる著者が多年研究の結果を遺憾なく發表せられたるものである。

東京巣鴨町三丁目十七番地
天地書房
振替口座東京四〇三二三番

新刊

東京帝國大學講師 文學士 長井眞琴著
根本佛典の研究
菊判箱入 ボプリン美裝
定價三圓八十錢 送料二十三錢

文學博士 補永茂助著
日本倫理思想の系統
菊判箱入 ボプリン美裝
定價三圓八十錢 送料二十三錢

文學士 岩橋遵成著
東洋倫理思想論
菊判箱入 ボプリン美裝
定價三圓五十錢 送料二十三錢

東京女子高師教授 文學士 土屋幸正著
倫理學原論
菊判箱入 ボプリン美裝
定價三圓八十錢 送料二十五錢



サンエスは執務に著しき加
速度を呈させます。
如何となれば走筆の輕快な而して
インキ注入の手續を簡約したる
新樣式の獨創品を新製しま
したから！

新製品は
◇23年式自働吸入ペン
◇眞空式吸入ペン

細沼株式會社
東京・大阪・福岡・名古屋・札幌

大正十二年

中央公論

四月一日發行

春季大附錄號

第卅八年第四號

第四百二十號

日支條約改訂問題

支那と日本との間に近く起ることあるべき條約改訂問題につき、我々國民が十分の了解を得て居らぬことは、色々の意味に於て甚だ憂ふべきことである。

大正四年の日支條約につき、支那側に於ては改訂論が昨今益々熾になり、中には直に無効を宣言すべしとの極論を爲す者すらある。孰れにしてもこの問題は遠らず兩國政府の具體的交渉案件となるべきは疑ない。當局者としてはいろ／＼掛引もあらう。が、我々國民としては之に對し果して如何なる態度を執るべきか。愼重なる攷究を要する點である。

對支政策上外務省の執つた過去一年の措置に付ては、上下兩院に於て頗る猛烈な攻撃の的となつたことは人の知る所である。内田外相の指導下に於ける我が對支外交が、冷靜なる政治的批判の壇上に於て、如何の價値を有すべきかは、今論ずるの限りでないが、上下兩院の所謂外交通が異口同音に難ずる所の論點なり根據なりに付ては甚だ感服の出來ぬものがある。曰く退讓外交だ。曰く先帝陛下の御遺業を傷く。曰く何。曰く何。斯くて讓歩そのことが當局の一大失策なるが如く響き、從て一般世人をして現状の頑迷なる維持その事が外交の一大要諦なるが如く妄想せしむるの恐なしとせぬ。是れ豈當世開明の民衆の眞實の要求であらうか。

吾人の觀る所を以てすれば、抑も外交上の得失は讓歩そのことに直接の關係を有するのではない。主張すべきを讓るの失態たるは固より論を待たぬが、讓るべきを頑強に主張するも亦決して策の得たるものではない。讓歩その事が無條件に失態と視られたのは帝國主義時代の謬想だ。侵略は罪惡だからとて、有てるものを拋棄てよとは云はぬが、讓るにしても取るにしても、我々はモ少し新時代の理想に立論の根據を立て直さなければならぬ。少くとも斯うした議論の些かの響きだに政界操觚界に聞えぬのは我々の甚だ遺憾とする所である。

内田外相の從來の施設に付ては、政治的見地から觀て、幾何の批評を容るゝ餘地はあらう。併し我々國民の覺悟を作る上からは、之等の點は深く詮索するの必要はない。我々としては、只問題の要諦を正義と平和との着眼

點から何物にも捉はるゝ所なく理解して置けばいゝ。更に具體的に云はゞ、支那側の改訂の要求は無理か當然か、無理とすれば何處までが無理か、當然とすれば何處までを讓るべきか、之等の點を掛引なしに理解して置くのが必要だ。理否如何に拘らず自己本位に立脚して、一點一劃の微も相手方の要求には耳を背けんとするは醜の極だ。之を憂世愛國の當然の發露と信ずるに至ては、自ら日本國民の氣魄を傷くるも甚しいと謂はねばならぬ。

詳細の論疏はいづれ他日の機會に讓る。極めて簡單に吾人の本問題に對する立場を聲明すれば斯うである。(一)所謂日支條約並に其他の從來の取極に依て日本の支那に於て占むる所の地位は、何と謂つても正當の範圍を超えて居る。古い國際思想から云へば相當の根據もあつたらう。從て一概に無條件に之を棄てよと云はるれば之に抗辯すべき理由もあるが、相當の方法を以て迫り來る改訂の要求には、今日の新形勢の下に於ては虛心坦懷之に應ずべき筋合である。(二)既に有てる者が其の有てる所に過分の執着を示すを常とするが如く、奪はれたるものはまた同收に急なるの餘り動もすれば其の要求を不當の極度に主張したがるも人情だ。此時に方り我々日本人としては、出來る丈冷靜に事物の眞相に透徹し、向ふから要求せらるゝまでもなく、我から進んで最も正しい解決案を示すべきではないか。(三)此點に於て支那側の具體案は必しも吾人の首背し得るものではない。併しさうかと云つて彼の要求に全然耳傾けざるは餘りに利己的である。我々は彼の過度を責むるの他方に於て、自らの不當を反省せざるの過に陷つてはならない。

支那側の言ひ分は今の所餘りに亂暴のやうだ。併し其要求の裏には確に一面の眞理がある。この一面の眞理に付て、我々同胞の間に一人も同情の聲を擧げぬのはどうしたものか。上下兩院の議員は擧つて退讓外交は怪しからぬと云ふ。政府當局者は、支那側の改訂要求に對しては唯斷乎たる拒絕あるのみなどゝ一部の政界に媚びて居る。斯くして不當の地位を飽くまで固守するを國利民福の爲だと思ふなら、我々國民に取つて之れ程難有迷惑なことはない。

我々は茲に聰明なる讀者に諮る。讀者諸君は引續き帝國主義の甘夢に耽つて世界の進運に落伍しても構はないか。將たまた讓るべきは快く讓つて彼我の交通を平和と正義とに移すを可とするか。偏に冷靜なる判斷を乞ふ次第である。

中央公論

卓越性の創造と鑑識とを論ず

田中王堂

一、先づ卓越性の意義を劃す

『時代はそれぞれ殊なるが、其等に在つて卓越したものは悉どく平等である』此れはウイリヤム・ブレエクの意見として、ウオルタア・ペエタアに依つてあの『文藝復興』の中に引かれたものである。何人にしても、的確にブレエクのこの句の志向を理會しようとすると、倏ちこゝに『平等』なる言葉の中に含まれた意味の曖昧さに氣付くであらう。例へば、フイヂヤスの彫刻とミケランジエロの彫刻と、若しくは、ホオレスの詩とウオズウオスの詩とは、それぞれ、當の時代に於て卓越したものであつたから、其等を産出した異なる生活の要求を標準として評價すれば、各、平等であると



第卅八年第四號
春季大附錄號
第四百二十號

いふことにも取られ得るし、又、此等の孰づれにしても、若し其れを産出した時代に於て卓越性を有つたものである限り、其の後になつて、如何に時勢は推移し、随つて、如何に生活の理想は變遷しても、總べての異なる時代を通して、其の卓越性の意義に或は價値に毫釐の差も生ずることは無いといふことにも取られ得るのである。若しこの「平等」なる言葉が此等の中の前の方を意味するならば、漠然ながら或る意義を成さぬことはないが、後の方を意味するならば、何等の意義をも成さず、全然事實に反した宣言であるとせねばならぬ。

時勢は常に推移する。随つて、生活の理想は絶えず漸遷する。どうして獨り其れの發露たり、表現たる藝術だけが其の様式と精神とを變更しないわけに行かうか。遠き過去の所産であつても、其等の中で極めて優秀なるものになると、現代に至つても、其の卓越性に於て猶ほ現代の殆ど總べての作品を凌いで居ることは事實である。其等は永遠性を稟ち得たものとして賞讃されて居る。然し、現在に於て其等が有つて居る卓越性は少なくとも其等が出現した當時に於て、其等が有つて居たものとは大分に異なつたものであることをわたくし共は知らねばならぬ。つまり、其等の有つて居る卓越性なるものは現在にはたらく生活の理想に依つて改釋され、改味されて、新たに發見された、若しくは、創造された卓越性である。表面、奇矯に過ぎるやうであるが、眞實、それほどでもないあのウォルタア・ペエタアの有名な解釋に随へば、さきに其等が有つて居た卓越性はロオマンチシズムとしての其れであつた。今其れが保つて居る卓越性はクラシシズムとの其れである。

かういふわけであるから、第一義に於て卓越性と言へば、其れは必然に現在に於ける生活の理想に依つて其れの指標として産出されたものに限られねばならぬ。いつの時代に於ても、若し或るものが眞に卓越して居るならば、其れは必然に其れに先立つあらゆる時代に於て出現したあらゆる作品に於て見出だすことの出來ない一つの新奇なものを具へて

居らたければならない。總べて新奇なものが悉とく卓越したものでないことは明白であるた、眞に卓越したものは、其の卓越を構成する一つの必須なる要素として新奇であらねばならぬことも明白である。斯くして、卓越性と新奇性、若しくは、獨自性との間には切り離すことの出來ない密接の關係があるのである

普通に、生活の他の總べての機關に優れて遙かに永遠性に富むと想像されて居る藝術にしても、其れが有てる卓越性を吟味して來ると、この通りである。わたくし共が他の機關、例へば、政治、道德、敎育、學術等に就いて卓越性を語る時、其れは必然に現在の生活を標準として一層作用的に、隨つて、一層時效的に解釋されて、始めて一つの意味を有ち得ることは多言を須ゐない。そこで、わたくしは生活の機關の種の一切を念頭に置いた上、其等に共通するものとして、卓越性の意義を劃して孰づれ何の種の機關にしても現在の生活を（醇化し、同時に富化するといふ二重の意味に於て）助成するものが卓越性を有つたものである。そして、或るものが他の或るものに優れて一層適切に其れをなすならば、前者は後者に比して一層多く卓越性を有つたものであるとしようと思ふ。わたくし共にして『助成する』といふ言葉を極めて廣汎に極めて豐潤に、そして、極めて柔軟に解釋して、其れをして、產業に關してと、藝術に關してと、又、學問に關してと、信仰に關してとに隨つて、その場合、その場合に應じて、必要なだけ異なる色彩と異なるパアスペクチヴとを取らしめるならば、こゝでわたくしがして居るやうに、現在の生活を醇化し、富化することに依つて其れを助成するのを卓越性なる言葉の有ち得る意義の一切であるとすることに十分の根柢があるとわたくしは信ずる。否、之れを外にして卓越性なる言葉が如何にして或る一つの意義を有ち得るかをわたくしは知らぬ者である。

二、卓越性と不卓越性との相對價値の一事例

卓越性と不卓越性とが生活に於て雜居する時に、前者が後者を壓して、おのれの價値を論理と實績の上とに於て擧げるのは、（恰も金剛石の最も能く其の光りを發するのは泥土の中に於てゞある如く、）或る危機に際してである。この危機を濟ふために卓越性と不卓越性とが、各、其の平生の主張に隨つて應用された時に、兩方の內具價値は倏ち判明して來る。

人類の歷史に於て、卓越性と不卓越性との主張が時を同うして生活の公準としてまざまざと其の優劣の試驗された場合は尠なくなかつた。わたくしはこゝに其等の中より一つの顯著な事例を取り、當時の生活の構成と要求とを標準として、其れを助成するものとして對立した卓越性と、不卓越性との相對價値に一瞥を與へて見たいと思ふ。其れはペリクリィス時代のアテンス生活に於けるソフィストと、悲劇作家ソクラティスとの三角關係からである。

古代に於て聰明無比なる希臘民族の中でも、殊にアテンス人は慧敏と多角才とを以て其れの特徵とし、夙に自由の氣魄と討議の精神とを養成したのであつた。彼等は彼等の中の遠征者より得たる見聞に據り、如何に信仰や、法律や、善惡の標準が異なる民族の間に異なり、又、アテンス人の其等と異なるかを知るに及んで、彼等は漸く信仰や、法律や、善惡の標準は從來彼等が信じて居たやうに萬古に亘つて不易のものではなくして、時處境の異なるに隨つて、常に異なることを曉るに至つた。そして彼等は、輕薄にも、信仰にしても、法律にしても、善惡の標準にしても、時處境の異なるに隨つて異なるものならば、其等には、最早や、何等の權威もあり得ないものと速了するに至つた。

この悲むべく、恐るべき好尙の先頭に立つて、其の燎原の野火に油を注いで居たのはソフィストと稱する一味の徒であつた。終に彼等の思想の最高頂を示した（人といふ言葉を各個人といふ意味に取つて、）「人は萬物の尺度である」といふ意見が彼等の首魁たるプロタゴラスに依つて發せらるゝに至つた。彼等はこの論法と態度とを以て、不廉な謝禮の下

に富人の子弟に投ぐるに辯論の術を以てし、年少氣銳なる彼等の好奇心と功名心とを挑んだのであつた。

然し、實を言ふと、アテンス自づからが一大ソフィストであつたのであつて、プロタゴラス、ゴオジヤス、ヒピヤス、その他のソフィストに至つては、アテンスの精神を反映したに過ぎない。彼等は嘗て物理の法則として、『萬物は流轉して、一物も停止せず』とヘラクライタスが喝破したものを直ちに移して其れを道德の法則としたのであつたが、この根本情操は既にアテンス人一般の心の中にはたらいて居たのであつた。

斯くして、ソフィストは皮相の意味に於て、確かにアテンス人の情操を代言して居たのである。然し、終極の意味に於て、彼等は人間の本質を、隨つて、アテンス人さへもの本質を代言して居たものと言はれようか。何故ならば、アテンス人の生活と雖も『各個人は萬物の尺度である』と言ふだけでは到底言ひ盡されぬ何物かが存在し、はたらいて居なければ、現に、彼等の生活は成り立ち得なかつたからである。「萬物は流轉する」と觀ようとしたところにアテンス人の慧敏が現はれる。然し、その流轉の中に一定の旋律を發見することの出來なかつたところに彼等の淺智と德性との缺陷が示されて居る。何故ならば、アテンス人の如く遠心的たる一面に偏して、求心的たるの一面を全然忘れた國民は、久しからずして其の協同生活の解體を見なければ止まないからである。

悲劇作家は總じて守舊の人々であつた。隨つて、彼等は總じて慷慨悲憤の人々であつた。彼等はアテンス人の情操を知らず、其れに依つて養成されたアテンスの好尙を曉らずして、日に日に、尊き習慣の、信仰の、そして、傳統の滅び行くのを坐視するに堪えなかつた。そこで、彼等は一向に其等の貴きことを、彼等の生命よりも貴きことを高調することに依つて其等を既倒に輓回しようとした。然し、惜しいかな、彼等は以て敵と戰ふ武器を有たず、戰術を講じなかつた。彼等は過去の情操と表現とに賴つて敵が既に弊履として棄てた習慣や、信仰や、傳統を辯護し、支持しようとして

居たに過ぎない。新らしき酒を求める者に向つて、古き袋に盛つて古き酒を薦めて居るとは、實に戲曲作家の罪である。彼等の心血を注いだ言說もアテンス人よりしては、たゞ、其等の修辭と心理描寫との美に對して賞讃を得たに過ぎないのも當然の結果である。

それでは、三角關係の一角を作つたソクラティスはどうであつたか。彼れは生粋の一個のアテンス人であつた。同時に、彼れは一個のアテンス人たることを窮めることに依つて、さうであることを卒業し、超越して居たのである。彼れは一個のソフィストであつた。或る意味に於ては普通のソフィストよりも以上のソフィストであつた。彼れが神の冒瀆者とし、青年の腐敗者として、アテンスの法廷より宣告されたのには十分の根柢があつた。然し、彼れは一個のソフィストたるに止まらず、極端にソフィストたることに依つて其れを破産せしめたのであつた。ソクラティスはソフィストの用ゐた武器を用ゐ、ソフィストの使つた戰術を使つてソフィストと戰つた。彼れは世間のソフィストと等しく過去の習慣や、信仰や、傳統が其の權威を失つて了つたことを認めて居た。隨つて、彼れはそんなものを辯護することに依つて、道德の頽敗を支持しようとはしなかつた。彼れはアテンス人の眼前に横はつて、彼等の何人と雖も否定することの出來ない協同生活といふ儼たる一大事實を分析することに依つて、ソフィストの根本思想の誤謬を正さうとしたのであつた。彼れは（彼れの論法の意味を劇化すれば、）結局ソフィストに對つてかう言つたのである「如何にもあなた方の考へ、且つ、教へて居る通り、わたくし自身と雖も其等の習慣や、信仰や、傳統のやうなものが最早やわたくし共の生活を統率して行く權威があるものとは信じては居ない。然し、其れに拘はらず、わたくし共は共同の目的のために協同生活を營んで居る。さうして居る以上は、わたくし共はそれだけのことをして居ることに於て、既に、わたくし共は一致して、わたくし共の總べてにまで共通して善であり、正義であるものが在ることを一樣に認めて居るではないか。さう

して見れば、君等が格言として居る、人といふことを個人といふ意味に取つて、「人は萬物の尺度である」といふことは誤謬であつて、そこには、個人と個人との間を結び付ける尺度があるといふことが眞理ではないか」と。

以上、わたくしはアテンス人の生活を醇化し同時に富化するといふ意味に於て其れを助成する方法として、ソフィストの其れと、悲劇作者の其れと、ソクラティスの其れとの三つを擧げた。前の二つは不卓越性の標本とし、後の一つは卓越性の標本として。然し、（わたくしの叙述と說明とに信の置けるものとして、）讀者はそこにどれだけ默會するところがあつたであらうか。

之れを要するに、ソフィストと悲劇作家との見解が不卓越性しか有つて居なかつたのに反して、ソクラティスのが卓越性を有つて居たのは、當時の世相に關し、ソフィストと悲劇作家とは、同じ淺薄さを以て、一向に其れの全體を純然たる流轉とのみ速了し、さうして、ソフィストは其れを歡迎して之れが勢の昂進に努め、悲劇作家は其れを杞憂したがために、其れを抑制しようとして、他の時代の資源より、安定の要素を拉し來つたのであつた。彼等の所爲に反して、彼れは彼等よりも人間の生活の永遠性に徹して居たがために、彼れは流轉の皮相の下に其の流轉そのものを機關として優に安定の眞核のはたらくのを認得したのであつた。つまり、彼等に取つて盲的動搖はソクラティスに取つては動的平衡であつたのである。わたくし共はソフィストと悲劇作家との取つた見解を沒批判的と呼び、ソクラティスの取つた見解を批判的と呼ぶのである。何故ならば、前者は現實の一部を其れの全體と誤認し、この誤認に據つて一つの人生觀を立てようとしたのであるが、後者は現實の一部の指標をどこまでも追窮して行つて、遂に、必然に其れと關聯する全體を發見し、其れの志向に隨つて一つの人生觀を立てようとしたからである

さうすると、いつの時代に於ても生活を構成し、そこにはたらく總べての要素に、それぞれ相當な意義と權利とを許

した上、其れを統一するのが批判的であり、卓越性を有つたものであつて、纔かに其等の一部にのみ意義と權利とを許した上、或は其れを放縱し、或は、其れを拘束しようとするのが沒批判的であり、不卓越性を有つたものである。

三、卓越性は天賦か獲得か

卓越性と不卓越性とをこのやうに解釋して來ると、（そして、之れが或る意味を有ち得る唯一の解釋であると信ずるが、）生活を統一する方針として卓越性の不卓越性に優ることは明白である。然し、卓越性は天賦であつて、獲得ではないのではないかといふ疑も起り得る。現に、確かに、其れは天賦に過ぎないと立論した者もあつた。勿論、たとひ其れがさうであるとしても、其れが人間の生活の一つの事實である以上は、なほ其れは、十分わたくし共の觀照に價するであらう。然し、其れが眞にさうである場合には、其れはわたくしのこの論文には極めて緣の遠きものとなる。わたくしが其れに就いて如何に論議を費すも、其れの存在と性質とに關しては何等の影響するところはなからうからである。然し、わたくしは嚴たる事實の根柢に立ちて、卓越性の獲得であることを信ずる者である。尠なくとも、獲得としての卓越性は天賦としての卓越性を支配することの多いのを信ずる者である。言ひ換へれば、一つの與料の中には、其れよりはたらき出さしめ得る志向と努力との如何に依つて、或る範圍に限つて、おのれを卓越性ともなし得、又、不卓越性ともなし得る自由と自發性とが含まれて居ることを信ずる者である。

わたくしは與料としてこの世の中に卓越性と不卓越性との差別の存在することを否定しようとする者ではない。其れは何人に依つても否定されるのには餘りに顯著な事實である。（若し與料として）、卓越性と不卓越性との差別が全然ないとしたならば、一つの兵學校より一人の元帥が出るならば、どうして他の總べての生徒も等しく元帥とならない

か。一人の天才の同胞生はどうして悉とく天才となり得ないか。否、賢愚の相違と才能の適應性の相違とは同じ両親の間に生れ、一つ家庭に育てられた兄弟の間にも存在する事實である。わたくし共は如何なる方法を以てしても、此等の間の差別を平等にすることは出來ない。又、そんなことを企てる必要もない。たゞ、わたくしは此等の各がそれぞれおのれの本質を基本とし、標準として、獨自の構造と作用とを保ち、そして、其等をはたらかせながら、(比較的に言つて)不卓越性より卓越性に進むことは可能である、隨つて、さうすることは此等の各に與へられた特權であり、又、此等の各が負ふ義務であると言ふのである。若しわたくし共の總べてに取つて、これだけのことをする可能性のあることが實績に依つて證明され得ないものならば、人間の用ゐ來たつた教育や、懲戒や、尊敬は原始時代より今日に到るまで幾千年間繼續された一大イルウジョンであつたと謂はねばならぬであらう。然し、事實は歴然さうでなかつたことを證據立てて、わたくし共の本能を裏書きして來て居るのである。

四、保守の心理

ウォルタア・バジオットは彼れの『物理と政治』の中で、『今日、吾々歐羅巴人は進歩といふものを生活の常態と考へて居る。然し、人類の四分の三は現に保守の狀態にあり、保守の外に生活狀態といふものを知らないのであるから、彼等より見れば、保守が常態であつて、進歩は寧ろ變態であらねばならぬ。吾々歐羅巴人に取つてさへも、進歩が生活の常態となつたのは、こゝ二百年以來のことである』といふやうな意味のことを書いて居る。事實は確かにバジオットがこゝに語つて居る通りである。さうすると、さきに掲げた卓越性の劃義に隨つて、其れは必然に其れの成分として新奇といふ一要素を含まなければならぬものとするならば、その限りに於て、保守の狀態に在る人々は、彼等が實際に行つ

て居つた力量だけでも（心得方、やり方に依つては、）發揮し得たと思はれる卓越性を常に十分に發揮して居らなかつたものと言はなければならない。こゝで、わたくしはこの間の事實や關係の細密なる觀察や議論に入ることはしない。たゞわたくしの傳へようとして居る事柄の意味は一つの引例に依つて釋明することが出來る。こゝに久しく鎖國の政略を續けて外國よりの刺激と壓迫とから一切遠ざかつて居た一つの國民があるとする。彼等の生活は、久しく昌平無事に慣れた結果として、懈怠と懦弱とに陷墮するを免かれなかつた。然し、若しこの國民にしても、過去に於て相當に洗練された文化を有つたものであるならば、一旦、外國との交渉が開かれ、其れよりいろいろの刺激と壓迫とを受けることとなると、彼等は從來彼等の有てるものの組織を立て直して、其れの勢力を糾合し、其れの應用の方面を轉換するだけで、倏ち、彼等の生活は活氣と緊張味とを增し來たつて、全然別物の觀を呈することは隨分あり得る。さうすると、この國民の資力に與料としては同一であつたが、ただ環境の變化するに伴れて、さきには、其れを不卓越のものに止まらしめたものを、後に至つて、始めて其れを卓越のものに進めたと言はねばならぬ。

人間に取つて何が一番厭物であり、重荷であるかと言つて、生活の樣式の改造に過ぐるものはあるまい。人間は彼れに取つて、普通の場合に於て、最大苦とされて居る死を遁れる一事のためには大抵の苦は忍ぶが、彼れにして一通り彼れの生活を存續するに足れるだけの生活方針を有つて居ると、其れが彼れに取つて有害なものとならない限りは、或は、尠しぐらゐはなつても、改造して、其れを更に優れた生活方針となさうと考慮する如きは異例であるやうに思はれる。

言動に關しての活潑、不活潑の相違も、確かに人間の幸福を決定する一つの要素ではあるが、更に大なる要素は、思索に關しての活潑、不活潑の相違である。されば、生活の方針を改造するに必要なる思索に關しての活潑は極めて貴いものであるが、同時に（不幸にして、）極めて稀有のものである。之れがために、古來、衆に先だち、衆を率ゐてさうす

ることの出來た者は、人間の中の最優者、若しくは、最雄者として、最高の權威を歸せしめられることになつた。行ふといふことは人間に取つてさうむづかしいことではない。行ふといふことだけならば、多分、人間に與へられたものの中で最も一般的の性質であらう。たゞ、或る場合に方つて、善く、正しく、適當に行ふといふことが最多數の人に缺けて居る能力なのである。特に、其れが意識しなければならない程度に、過去に工夫された習慣や、制度や、傳統を破却してなされねばならない時に。

個人としても、國民としても、思索には活潑であるが、行爲には不活潑の者があるやうに想像されて居るが、之れは事實に反する想像に過ぎない場合が多い。例へば、印度人の如きは實行には短であるが思索には長じた民族であると稱せられて居る。わたくしはさうは考へない。彼等にして眞に思索に長じて居つたならば、實行にもそんなに短なる道理はない。然しながら、彼等の長じて居るのは實行の前提たる思索ではなくして、其れの否定たる擬似思索、即ち、瞑想であるとわたくしは思ふ。彼等は幾世紀間、幾十世紀間、思索に代ふるに瞑想を以てして來た。その結果として、實際に於ては、實行に價値を置きながら、信仰の上、若しくは、理論の上では、其れを必然の惡と見做すやうな不合理を敢てすることになつた。

『吾々の各は、てんでに、自づから布が織れ、靴が造れるならば、最も善く自分の嗜好に適した着物を着、自分の足の形に適した靴を穿くことが出來るであらう。然し、事實、其れが出來ないから、止を得ず、吳服屋から買つた着物や、靴屋から買つた靴で滿足して居る。其れと同樣に、若しわたくし共の各にして、てんでに自分に適した道德が造られるならば、これほど結構なことはないであらうが、事實、それが出來ないから止を得ず、立法家や、道德の教師の造つた道德で滿足して居るのである』とバアナルド・ショオは言つて居る。事實、彼等がさうして居ると、人間に固有する性

情よりして、彼等は其れの評價を功利の範圍に止めずして、其等の領域にまで移して了ふ。こゝに、保守の氣は一層沈滯し、濃厚となつて、彼等の進取の氣象と自己の精神とを窒息させることになる。

わたくし共は自分の及ばない人々の性格、若しくは、事業に對しては、其れの効果を理智に依つて理會するのみならず、其れの功德を感情に依つて鑑賞しようとする傾向がある。こゝに至つて、わたくし共が過去より繼承した生活の方針は（其れをして意義を保たせようとするならば、）どこどこまでも一つの實驗（experiment）たらしむべきのに、其れを教權（authority）と化して了ふ。これが、わたくし共がわたくし共の生活を改造するに方つて、有力なる障礙の種子となるのである。こゝに、神話が生じ、流派が生じ、秘傳が生ずる。そして、彼等は相競つて過去より取り殘されたぼろぼろな衣裝を着けて假裝行列をなし、彼等の開祖を尊ぶつもりで、其の實、反つて其等を辱しめて居るのである。『天が下に舊きものなし』といふのは、『天が下に新らしきものなし』といふよりも一層の眞理であるやうに思はれる。然し、山川草木日に其の風光を新たにして居るに拘はらず、人間に在つて、其れを受け入れる感能が徒らに鎖されて居る間は、其れを舊しと視るより道はないのである。彼等に取つては、眞理はいつでも過去に於て發見されたものであり、美はいつでも過去に於て創造されたものである。眞理や美に對する彼等の義務は、如何にして、其等をさうと認識し、若しくは、觀賞し得るかの道を講ずるか、それでなければ、彼等自づから其等に似せて、遙かに低級なものを發見し、若しくは、創造することを努めることに限られるのである。

然しながら、感ずる毎に、考へる毎に、行ふ毎に幾分づゝか生活の組織の變更されることは免かれない人間に在つては、必要に應じて其れを改造することを怠つて行けば、いつか之れが報を受けなければならない。其の報とは、制度と理想との背反である、機關と機關との間の乖離である。それで、どんなに保守の民族でも、突然改革とか、革命とかい

ふものに見舞はれなかつたものは一つもない。たゞ、其等の改革、若しくは、革命は最近に至るまで、そして、或る特殊の民族を外にしては、概して自己生産を保障するほど、詳しく言へば、一度成就された改革、若しくは、革命は其れの精神と構造とのはたらきに依つて、絶えずおのれのはたらきを昂進さして行くほどに反省的でもなく、分析的でもなかつたために、其等の多くは朝(dynasties)の更代を意味して、文化の進歩を意味さなかつたのである。

實を言ふと、人間の生活が文化の或る過程に達すると、それ以上に其れを改造して行くのには、謂ふところの常識だけでは不十分であつて、種に於て其れとは異なるものが必要であつたのである。然し、これまでのところ、さういふものは大多數の民族が工夫することの出來なかつたものでもあるし、又、工夫しようとも思ひ付かなかつたものなのでもあつた。それは生活の如何なる部分に關するにしても、常識は其れを無雜作に一つの全體と取つて了ふから、其れの改造に就いて、新しい方法を見出し得ないのである。若し其等を分析して幾個かの成分となし、其等の成分の性質に隨つて、其等がそれぞれ生活の他の部分に入り込んで、其等の成分となつて居るのを見た時に、其等を横斷し、若しくは、縱斷して、そこに新たに總合を計るならば、生活はどんなに自由になり、新爽になり、豐富になるか解らない。近世に於ける學問も、産業も、政治も、乃至、道德さへも、在來の經驗を新たに分析し、新たに總合することに依つて改造されて行つて居るのである。わたくしは、こゝにこの Organon を科學と呼ぶのであるが、さうする精神は今を去ること五百年前に方つて、史家に依つて『文藝復興』と呼ばれて居る時代に於て、獨り歐羅巴人が創造した道具である。斯くして、人間は始めて自己生産を保障する科學を得て、彼等の改革を、若しくは、革命を回律的のものに止まらしめずして、前進的のものにすることが出來たのである。

五、卓越性の創造に與かる者は誰ぞ

『ゲエテは或る事がこれまで何世紀間、何千人、乃至、何萬人に依つて眞理であると承認されて來ても、其れが果して自分に取つて眞理であるか、どうかといふ一つの問を發することに依つて、近世生活に於て人類解放の第一人者となり得たのである』とマシュウ・アアノルドは語つて居る。然し、このことは獨りゲエテに限られたことではなく、昔より今日に至るまで、總べて政治に於て、道德に於て、藝術に於て、學問に於て、新らしく革命の事業を企てた謂ふところの一世の導師に共通のものである。この世の中では、どんな大きな運動と雖も、その初め、或る個人に依つて幽室の中に著想され、終に、街頭と田畝とに在る大衆の希望となり、信念とならなかつたものは一つもない。現に歐羅巴人の生活に取つて、之れが燈明臺となつて居る學術の研究法と道德行爲の批判法とは、倶にアテンスの一彫刻師、ソクラティスの思想の結晶ではないか。嘗ては、亞細亞人の殆ど全部のために、實行には戒律を、憧憬には對象を與へ、彼等の一喜一憂を支配して居た佛教も、其れの源を繹ぬれば、セイロン島の一小王國の太子悉多の情操の組織化ではないか

然しながら、他の一面より觀れば、特定の樣式の中にソクラティスの思想の結晶を限り、歐羅巴人の生活に特有なる學術の研究法と、道德行爲の批判法とにまで養成したものは何んであつたか。悉多太子の情操の組織化に特定の方向を與へ、終に其れを印度人の性情に痛切なる大乘佛教にまで脚色したものは何人であつたか。此等のことよりも、尙ほ一歩溯つて、抑もソクラティスの思想そのものや、悉多太子の情操そのものは如何なる種の milieu の中にのみ出現し得るものであるか。ソクラティスといふものが無かつたならば、ソクラティスの思想の出現する筈はないし、悉多太子といふものが無かつたならば、悉多太子の情操といふものの出現する筈のないことは明らかである。然しながら、アテン

スの文化といふものが無ければ、印度の文化といふものが無ければ、ソクラティスの存在し得ず、悉多太子の存在し得なかつたことも明らかである。どこから見ても、ソクラティスが徹底的に希臘人であることは、どこから見ても悉多太子が徹底的に印度人であると同様である。それだけ彼等は彼等の祖國の傳統を分受して此の世に生れ、且つ、人と成つた者である。彼等の思想とか、情操とかいふものも、畢竟するに、其等が對つて說かれた民衆の心に前以つて深く根さして居た思想や、情操を代言したのであつたから、あんなに速かに、しつかりと彼等の生活に依つて結晶され、組織化されることが出來たのである。

このやうな考察は特にゲエテの場合に於て一層眞實性を有つて來るやうに思はれる。ゲエテはロオマンチシズムの時代に生れた最も偉大なるロオマンチストであつた。マシユウ・アアノルドはゲエテが近世生活に於て人類解放の第一人者となり得たのは、彼れが或る事に就いて、其れまで何萬人の人々がどう考へて來ても、其の考が果して自分に取つて眞理であるか、どうかといふ一つの問を發したところにあるといふが、若し眞に彼れがさうすることに依つて、夙に近世生活に於ける第一導師となつたのであるならば、そこには、彼れの解決が出て來たるや否や、恰も大旱の雲霓を望むが如く、其れを受け入れて自分のものとしようとして待ち構へて居た大方の民衆のあつたことが證據立てられるのである。さうすると、其等の民衆はやゝ模糊たる意識を以て、小なる規模に於て、てんでに彼等の心の中でゲエテと同じやうな問を發し、同じやうな解決を求めて居たのであると言はねばならぬ。一層剴切に言へば、長い間の過去の制度や、傳統に對する民衆の情操が先づ成り、たゞゲエテは其れに一つの articulation を與へたに過ぎないとも見られ得る。尤も articulation を與へるといふことは、獨り天才の能くするところのものであつて、極めて高貴な事業ではある

始めて火藥が發見されたのは支那に於てであつたと言はれて居る。それは西洋に於て其れが發見された時期に先立つ何世紀かの前にあつたが、當時の社會生活は其れの効力を認識しなければならぬやうにも、又、認識し得るやうにもなつて居らなかつたから、其れは其れの發見者の名と供に永く暗黑の中に葬られて了つた。之れに反して、それより何世紀後れて西洋に於て火藥が發見された時には、そこなる社會生活は既に戰爭や産業に於て其れの應用を必要とするやうに準備されて居たから、其れの威力は容易に認識されることになり、直ちに社會生活の中に入つて其れの重要なる組織の一つを形造することになつた。この事實を端的に文明史的に解釋して、火藥は、其れが西洋に於て發見されるまでは、未だ曾て何處にも發見されたことはなかつたといふのである。何故ならば、人間に依つて生活に對照して何等の意義も認められない物質は十分な意味に於て存在するとは言はれないからである。そして、其れに意義を與へるものは、いつでも、其れの存在に先だちて其れに似寄つたものを欲求し、其れが出現するや否や倏ち其れを理會し、受用する民衆なのである。

グラッドストンは曾てホオマアの事業を評して、『彼れは民衆より水蒸氣を取り、雨と化して後再び其れを民衆に還した』と言つたが、斯くの如きは、總べての天才の事業に共通する特徴である。如何なる方法に依り、如何なる種の雨を作るかといふことは何人も窺ひ知ることの出來ない天才の心の奥邃處に於ける神秘のはたらきであるが、既に彼れにして之れが材料を民衆に依つて供給される水蒸氣に取る以上は、其の結果が必然に水蒸氣の構造に依つて制限を受けなければならないことは明らかである。言ひ換へれば、彼れは其れから極めて巧妙に雨を作り得たにしても、黄金を作り得なかつたことは明らかである。斯くして、ホオマアが彼れの人格を通してどれだけ彼れの材料を醇化し、美化しても、わたくし共が彼れの詩に於て當時の希臘人の情操や、氣象や、道徳觀念や、生活狀態を最も眞實なる乾光の下に見るこ

とが出來るのである。

事實、かういふわけであるとすると、文化の轉換は全然英雄の所爲に依つて決せられるとするカアライルの意見を賛せず、又天才と稱せられる者も、畢竟するに、環境の所産に過ぎないとするバツクルの意見にも同ぜず、わたくしは多數の民衆と少數の指導者と、倶に、卓越性の創造には缺くべからざるものと主張する者である。但し、前者は水蒸氣を供給するものとして、後者は其れを雨と化すものとして。

して見ると、總べての國民の文化は（相對的の意味に於て）多數の民衆の欲求と其れを材料として居る少數の指導者の意思とより成り立つて居ると觀ることが出來るのである。されば、若しそこに或る種の卓越性、若しくは不卓越性が見出だされるならば、其れは、此等の二つの成分の總合果として始めて理會さるべきものである。

六、我が國民生活に於ける卓越性の缺乏の徵候を點檢し、其れの由來を究明す

さきに擧げたわたくしの解釋に隨つて、卓越性とは個人的にも、協同的にも、（過去に於て賦與され、若しくは、獲得されたものとして）そこに現存する才能を出來るだけ經濟的に、卽ち、合理的にはたらかせる修練、又は、體得のことを言ふのならば、現にわが同胞に依つて營まれつゝある生活の中に、どれだけの卓越性が見出だされるか、否かといふ如きは一つの嚴肅なる問題にはなり得ないと思はれる。何故ならば「樹は其の實に依つて知らる」。わが社會生活の各方面に於て顯はれて居るいろいろの徵候は、かゝる疑問を容るゝ餘地なきまでに明瞭に卓越性の缺乏を語つて居るからである。

現にわが同胞に依つて營まれる生活は卓越性の闕如したものであるとはわたくしの確信である。然し、この一言から

して、若し讀者の中にわたくしを以て、無雜作に、徒らに悲歎慷慨を事とする一個の悲觀論者とする者があるならば、彼れは全然わたくしの態度も、心事も理會しない者と言はねばならぬ。わたくしの平常の言論が能く證明して居る通り、わたくしは一個の樂觀論者である。或は（近時流行の言葉を借りれば）一個の改善論者（meliorist）である。特にわが祖國の前途に對しては多大の光明と光輝とを期待して居る一個の眞摯なる改善論者である。若しわたくしにしてさうでなくして、一個の悲觀論者であつたとしたならば、わたくしが見て以て彼等の缺陷とするところのものに就いて、之れが改善の道を圖るために、わが同胞に對つて、警告を發し、忠言を呈するといふことが、既に大なる矛盾であらねばならぬ。何故ならば、悲觀論者とは、語義の示す通り、この世の中を少しも改善の餘地なきほどに純乎として至惡のものと觀て居る者の謂に過ぎないからである。わたくしは過去の歴史や、現在の狀態を諦觀して、わが同胞の素質の中には確かに貴き或るものの潜んで居ることを十分に推じて居る。然し、今日のところでは、彼等は如何にして共れをして表面にはたらかしむべきかの術を知らない。彼等には短所と等しく長所がある。然し今日のところでは、彼等の長所とするところは彼等の短所とするところのものに掩はれて、共の用をなさぬのである。

それでは、わたくしは如何なる事實に基づいてわが同胞の生活に於ける卓越性の闕如を高調するか。如何なる事情の下に共れが馴致されたと理會して居るか。此等の二點に就き、一通りわたくしの見解を陳べねばならぬ。

わたくしは便宜のため、こゝに掲げた順序を轉倒して第二の點よりわたくしの說明を始めることとしよう。

『總べては行き詰つて了つた。わたくし共は總べての立て直しをしなければならぬ』とは平常わが社會生活の現狀に留意する人々のよく口にするところである。此等の言葉の前半は事實の眞相を語らうとするものであつて、その後半は共れに對して自然にはたらき出す感情を語らうとするものである。然し、要するに、これだけでは、なほ一般の印象や

一般の希望を語つて居る衝動の言葉に過ぎぬ。總べての意味を含んで居るやうで、其の實、何等の意味をも有たないことにもなる。わたくし共は此等のものに分析と反省とを加へて、其等を理智の言葉にまで發展させ、一體、『行き詰つた』とは事物の如何なる關係を指すのであるか、『立て直す』とは如何なる方策を以て如何なる結果の成就を講ずることであるかを明らかにすることに依つて、此等は始めて一つの意味を有つに至るのである。衝動はあらゆる善きもの、正しきものの發端ではあるが、一つの善きもの、正しきものも、衝動としては完成されぬ。其れの完成のためには、衝動は必らず概念、即ち、手段を作つた計畫にまで化せられねばならぬ。こゝに於て、わたくし共は現存の生活狀態の缺陷の改善に取つて緊要なるこの衝動概念化に關して一つの工夫を施す必要がある。そして、わたくしからすれば、其れの最も優れたものは、其等をそれの主因（とわたくしの史感と史識とが斷じてゐるもの）にまで溯源し、さうして、出來るだけ簡明に、出來るだけ直截に、其の主因に含まれた主成分を分析し、敍述することである。斯くして、わたくしは明治維新當時に於て、わたくし共の父祖等が始めて西洋文明の來襲を蒙つた時代と事件とにまで溯源せねばならぬ。

誰れでも知つて居る通り、わが國が外國の文化に接觸したのは明治維新の前後が初めてではない。遠い以前に三韓の文化に接觸したこともあるし、支那の文化に接觸したこともある。然し、其等の文化に接觸した場合と、西洋の文化に接觸した場合との間には、非常な意味の相違があつた。さきの場合に於ては問題は自國の生活を修飾するか、否かの一事に止まり、そして、其れの選擇は全然當方の自由意思だけで定まつたのである。後の場合に於ては、問題は決してそんな悠暢なものではなかつた。其れは選擇の事柄として來らずして、强壓の事柄として來たつたのであつた。先方に接觸の意思の存する限りは、其れは直ちに當方の意思を決定するものであつて、當方としては、結局、死活を賭しても其れを受け入れなければならなかつたのである。わが國に幾倍するの兵力を擁しながら、『吾等の意思に從つて吾等と

交通を開け、否らずんば、汝の存在を斷たん』と言ふのが、彼等の用ゐた威嚇の意味であり、彼等の取つた手段の意味であつた。

一つの廣汎なる評價の標準よりすれば、わが國に長所、短所がある如く、西洋諸國にも長所、短所がある。然し、今日生存競爭の最大利器となつて居る近世文明の基礎の上に馳驅することになると、彼れは大人であつて、我れは孩兒に過ぎなかつた。兩者の强弱の差は比較を俟たずして旣に明瞭であつた。そして、たとひ彼等の意思に聽いて、一旦彼等と交通を始めたところで、たゞそれだけでわが國の存在と自由とに對する威嚇と壓迫とが全然取り除かれるわけではない。優越せる兵力と、富力と、智力との後勁を恃んだ彼等は、（當時の世界の文化と道德とよりすれば當り前のこととして）特に、法理に於てとか、經濟に於てとか、乃至、武力に於てとかいふやうな、はつきりした區別を立てずに、此等のものを合併し、混同して、弱者たる我が國を抑壓したのであつた。東洋の諸民族に似ず、勇敢の氣象に富んで何物にも勝りて屈辱を嫌つた大和民族の全精神を支配した當時の理想が、一日も速かに西洋諸國に對抗し得る强國となり、其等よりの干涉と橫暴とを免かれて、名實倶に完全なる一獨立體とならねばならぬといふ一事に集中されて居たのは極めて自然のことであつたと言はねばならぬ。

然し、わが父祖等は如何なる手段に依てこの目的を達しようとしたか。そこにはたゞ一つしか無かつた。其れは西洋諸國が恃んで利器として居るものを取つて自國の利器とすることであつた。勿論、自國と雖も三千年の舊邦である。あの際に十分に役に立つものもあつたし、現に役に立つて居つたのであるが、彼等はそんなことには氣が付かなかつた。西洋諸國の强きは彼等が現に有つて居るものを有つて居るからである、自國の弱いのは西洋諸國をして强からしめて居るものを有たないからである、と一圖に考へたのであつた。そして彼等は一にも二にも西洋の諸國が文化の道具として

居るものを移植し、採用することにした。彼等に取つての唯一の目的は、强兵であつた、强兵の方便としての富國であつた。然し、彼等が實際に富國强兵に著手して見ると、其等は生活のいろいろの機關、國家のいろいろの設備を待つて始めて實現されるものであることを覺つた。さういふわけで、郵便も、鐵道も、産業も、教育も、道德も、宗教も、學問も、藝術も、次第に彼の土より此の土に移植し、培養されることになつた。そして、勿論、此等のものは、その固有の性質からして徐々と民衆の智力を增し、情操を潤ほして、彼等の生活に影響することにはなつたが、彼等首唱者の希望は、其の卓見や〻俗流を抽んじた横井小楠、福澤諭吉の如き者に至つても、なほ最後の理想として富國强兵の實を擧げて自國の獨立を全うするの外には一歩も出でなかつたのである。

斯くして彼等は彼等が西洋に於て見出だした生活の機關や、國家の設備を手當り次第、想ひ付き次第に、理會を以てではなく、信仰と好奇心とを以て持ち歸つたり注文したりしたのであつた。そして、旣に其等のものは與つて西洋諸國を强くして居るのであるから、さうして行きさへすれば、わが國もいつか强くなるであらうといふぐらゐが彼等の最上の智慧であつたのである。然し、等しく、同時に西洋に於て見出だされたと言つても、そこには、舊いものもあれば、新らしいものもある。其等は各、異なる文化を代表し、異なる人生觀を代表して居る。例へば基督教の教理とミルやスペンサア等の思想との到底一致すべからざるものであつたことは多言を要するまでもなく、學校制度に就いて見ても、幼稚園と、小學校と、師範學校と、産業學校と、大學とは、各、異なる世紀に於て、異なる目的を以て獨立に創設され發達して來たのであつた。わたくし共の父祖等が、此等のものを、全然此等のものに關聯した歴史や行き掛かりを有たないわが國に移植するに方つて、若し彼等にして十分に批判の見地に立ち得て、わが國の文化と要求とを標準として、此等のものの各の構成と、志向と、實利とに從つて取捨し、選擇するの見識と自由とをはたらかせ得たならば、後來、

わたくし共か陷つたところの混亂と困惑との大部分を免れることが出來て、わたくし共はどんなにか幸福であつたらうと想はれるのである。然し、彼等はさうしなかつたのである、さうすることが出來なかつたのである。彼等は西洋の文化に關しては、全然、無知識であり、無理會であつたに拘はらず、實驗と想像との上から、其れの機關と設備とをわが國に移植することの最大急務なることを感得して居たから、あのやうに振舞つたのである。あの場合に於て、彼等に對つてあれ以上のことを望むのは、畢竟するに、一つの出來ない相談であらう。たゞ、かへすがへすも、わたくしが無限の不滿と輕侮とを懷くを禁じ得ないのは、此等の父祖等の善意から醸され、さうして貽された禍根が、彼等よりも一層多くの智識と一層多く反省の餘裕とを有つて居つた彼等の後繼者等に依つて、この五十年の久しい間、尠しも取り除かれず、改善されなかつたことである、更に其等の機關と設備とを擴張し、增大するに方つて、彼等はたゞ樣に依つて胡蘆を畫き、尠しも其等の混沌體と矛盾體との整齊と整理とに著眼することもなく、著手することもなくして、晏如として來たつたことである。

福澤諭吉の『自叙傳』の一節に、わが國に於ける最初の軍艦、開揚丸の米國への初航海に關する記事が載つて居る。其れは當時海軍兵學校の第一期生であつた勝安房と、彼れの同僚とに依つて操縦されて行つたのである。其れの使命は二年前に教師として米國よりわが國に招聘された一米國人が病を得て歸國することになつたために、彼れを本國へ送り還へすことであつた。彼等血氣の人々は纔か一年半か、二年の練習を積んだのに過ぎないのであるが、この航海は非常に困つた場合の生ぜざる限り、一切自分等の手に處置しようと彼等は確く定めたのであつた。それで、航海中は別にこれといふ變つた事もなく、終に首尾よくサンフランシスコに入港することが出來た。然し、こゝに一つの事件が生じた。それは、日本の軍艦の入港に對して、米國の海軍から敬意を表するために、禮砲を打たうといふ交渉を受けたことであ

る。この交渉を受けて當惑したのは日本の學生たちである。彼等は海軍術を學ぶことなほ日淺いに拘はらず、この初航海に艦を操縦することだけは爲し遂げたが、まだ彼等の一人も大砲を打つ練習をして居らなかつた。隨つて、米國海軍側の禮砲に對して、滿足に答禮し得る手腕に就いて自信を有ち得た者は一人も居らなかつたのである。答禮に失敗しては日本海軍の恥辱になるから、米國海軍側に交渉して禮砲を見合せて貰ふのが最上であるといふやうな意見も出たのであつた。然し、その時、其のやうな事は、一層日本海軍の恥辱である。他の者に打てないといふならば、自分が打つて見せる。若し失敗した時はたゞ割腹して自分の不敏を謝すのみである、と主張した一人の硬骨漢が現はれた。終に、此の青年に任せることになつて、彼れは目出たく答禮をなし卒せたといふのである。福澤氏はこの一條の挿話に註釋して、この負け嫌ひの氣象こそ東洋の他の民族に缺けて、獨り日本民族のみが優に有つて居るところのものである。若しあの場合に支那人、若しくは、朝鮮人であつたならば、到底、縱かに一年半の修業で米國まで航海する自信も有てなかつたらうし、一度も大砲を打つた經驗のないのに答禮を發しようとする勇氣も有てなかつたらう。この日本人に獨特な負けず嫌ひの氣象こそ日本をして今日あらしめた所以であると讃して居る。

わたくしは福澤氏のこの註釋に全心を以て贊肯するに躊躇せぬ者である。確かに、或る意味に於て日本人の長所を成して居るものは其の勇猛心と果斷力とにある。若しわたくし共にして此等の二つの特徴を缺いて居つたならば、今日わたくし共は他の東洋民族と共に同じ運命を追うて居たかも知れない。然し、或る意味からすればわたくし共がこのやうに勇猛心と果斷力とに富み過ぎて居るといふことが、今日わたくし共が有ち、且つ、苦しんで居るやうな平凡にして複雜な、そして、そこに何等の高鋭なる理想の閃きなき雜色文化を捏ち上げたのであるとも言はれ得る。わたくしはこゝに、ふと、才人バジオツトが英國人に對して下した評語を思ひ出すのである。『若し英國人にして起つて行ふ前に、慮

つて考へることをもう少ししたならば、彼等の過失の大部分は犯されないで濟むであらう」と。この評語は英國人に對してどれだけ適切なものであるかをわたくしは知らぬ。たゞわたくしはわたくし共日本人が、この五十年間、實行に馳せる前に、もう尠し反省に思を致したならば、わたくし共の現に有てる文化は一層自由に、一層柔軟に同胞の性情と要求とを滿たし得るものになつて居たに相違ないと考へざるを得ぬ者である。

斷は識にあらず。果斷はたゞ既成の生活方針の中を選擇して行くには役に立つが、既成のものを改造して行くのには、若しくは、新らしきものを創造して行くのには見識でなければならない。

わたくしが、こゝで、斯く言つたならば、讀者の中には、其れは死兒の齢を數へる愚に倖しきものであると嗤ふ者があるかも知れない。然し、このわたくしの感想は決して死兒の齢を數へると倖しきものではないのである。何物にしても、苟しくも、其れが人間に依つて爲されたものである以上は、彼れに取つて全然過去に屬し切つたものであると言はれ得るものは一つも有り得ない。現在は過去の延長であり、發展であるのに過ぎないから、過去は依然として其れの一つの要素としてわたくし共の心の中に存し、且つ、或る結果を産みつゝある。されば、過去を正しく改造して行くことの外に、この宇宙間に、わたくし共に取つて正しと稱せられ得る行爲は一つもあり得ない。隨つて、わたくし共にして、明確に過去に於けるわたくし共の行爲が如何なる意味で過失であるか、其それが如何にして構成せられたかを理會することは、やがて現在に於て新らしく正しき行爲を實現し行く第一歩であり、第一條件であるのである。

次に、わたくしの考察は第一の點に移るであらう。

急場の要求を滿たすために、西洋文明がどんなに輕卒にどんなに無雜作に、取り上げられたにしても、若しわたくし共の國民生活の方にして其れを同化し、個性化するだけの準備が出來て居つたならば、其れは恰かも消化し易い、そし

て滋養に富んだ食物の如く、何等の故障をも起すことなく、たゞ其れの成長を助けることとなつたのであらう。然し、不幸にして、事實、さうするだけの準備が出來て居らなかつたために、其れは刺激と滋養とに富んだ、然し、同時に不消化の食物として、同化され、個性化されない多くの成分を殘したのである。此れが終にわたくし共の國民生活の中に慢性胃腸加答兒の因を成したのである。

わたしく共の國民生活に西洋文明を同化し、個性化するだけの準備が出來て居らなかつたといふことには二重の意味が含ませられて居る。其等の一つは文化の程度に關するものであつて、他の一つは文化の性質に關するものである。前者は當時わが同胞が置かれた境遇に關聯するものであり、後者は生活に對して彼等の有つて居た態度に關聯するものである。

わたくしは、さきに、他の標準に據つて評價すれば、當時に於てわが國の文明が必らずしも劣つて居て、西洋文明が必らずしも優れて居たといふことにはならない、然し、生存闘爭に於て最利の武器とされたものからすれば、西洋文明が優れたものであり、わが國の文明が劣つたものであつたことは明白であつたと言つた。わが國の文明が一も二もなく、西洋文明の前に慴服し、平服して了つたのは極めて自然であつたのである。其れより以後必要に應じて、若しくは必要ありとの想像に任せて、西洋文明の機關は其等の系統や關係に何等の內觀も批判も施されることなく、後から、後からと堆積されて行つた。そして、一層悲しい事には、わが同胞は吳越を同載し、玉石を同架しながら、さうすることより生ずる矛盾と消耗とに氣付くだけの智力と時間との餘裕を有たなかつたことである、有ち得なかつたことである。されば、彼の土に於ては、（生活と其れの機關とは同體であるから）生活の樣式の變遷と倶に其れの機關も改廢されて行つたが、此の土に於ては、（生活と其れの機關たるべく輸入されたものとは同根でないから）彼の土に於て其等のものの改廢

が行はれる度毎に、此の土に於ては、たゞ、舊きものの上に新らしきものを積み重ねて行つたのである。英國の憲法は作られたのでなくして、生長したのであるといふ諺がある。が、わが國の生活の機關は作られたほどにも行かず、纔かに拾ひ上げられたのに過ぎぬ。

概して、劣等なる文明を有する國が、高等なる文明を有する國に接觸した時、前者が後者に對抗せんとして、新たに生活の機關を工夫するよりも、既に後者の有てるものを適用した方が捷徑であるがために、自然さうすることになるのである。然し、一旦さうして來ると、兩者の文明の間に見出だされる間隔が大きければ大きいほど、さうすることはたゞ前者をして後者を模倣せしむる習慣を馴致することに依つて、反つて前者に伏在する本質の發動を抑壓することになる場合が尠なくない。わが國に於ても、確かにこの傾向が顯著にはたらいて來たのである。外來の文明の機關が纔かに自國の生活の粉飾として採られた三韓の其等、若しくは支那の其等に接觸した場合に於てもさうであつたが、外來の文明の機關が自國の生存の保障の武器として採られた西洋の其れに接觸した場合に於て、特にさうであつた。

然し、西洋の文明の機關に接觸して、わが國に於て模倣の習慣が馴致され、それがために、わが國の本質の發動が沮害されるに至つたのは、そこにわたくし共の見逃してはならぬ重大なる一つの要素が卓越してはたらいて居た。其れは、彼我の文化の程度の相違から來たつたものではなくして、彼我の文化の性質の相違から來たつたものである。

西洋に在りても、文藝復興前に於ては、希臘人に依りて著想された宇宙觀と人生觀とが支配して居た。其等の特徴を一口に言つて見れば、自然物の樣式も、人間生活の態容も、初めより決定されて居て、人間の努力はたゞ其等を發見するに止まるとされるところにあるのである。つまり、彼等に取つては、自然物と人間生活とは悉く旣定(finite)のものであつたのである。然るに、文藝復興の時期に至つて、歐羅巴人は俄かにおのれの欲望の發揮とおのれの力量の權威と

に關して新たなる自覺を得て來た。そして、希臘人が自然物に於て、人間生活に於て、既定の樣式又は態容と觀て居たものは、畢竟するに、當時の人間の力量の限界を語るものに過ぎない。本來、自然物と人間生活とは等しく未決定(infinite)である。其等は人間の努力次第に依つて無制限の範圍に於て變改され得るものである。自然物も、人間生活も、等しく既定のものではなくして、未決定のものであるといふことになつたのである。

そして五十年前、わたくし共の父祖たちが始めて接觸し、一個のスフィンクスとして其の怪異なる相貌に驚歎の眼を睜り、其れの內に潛在すると容易に推せられた厖惡の心に不安と恐怖との念を懷いたのは、斯かる假定と信念との上に築かれた近世文明であつたのである。

然るに、當時わが國の文明の精神となり、骨組みとなつて居つた宇宙觀と人生觀とは希臘人の其等に等しきものであつた。否、わが民族には希臘人の有つて居た自由研究と、自由討議との精神が缺けて居たがために、公平に見て、彼等のに比して更に保守的であり、固定的であつたのを免れない。わが父祖たちは彼等の傳承して來た文明に文藝復興式の洗禮を施すことなく、隨つて、近世文明の精神を會得することなく、又、會得しようとする苦心を重ねることなく纔かに彼等の所産だけを利用しようとしたのである。言ひ換へれば、萬物を既定のものとする精神を以て、其等を未決定のものとする精神に依つて產出された諸の機關を利用しようとしたのであつた。彼の土に於て、其等の總べては時々、刻々に改善され改造されて行つたのに、わが國に於てはたゞ之れが送迎の一事のみに忙殺されて行つたのに大した不思議はない。

さうすると、今日、わたくし共の有てる生活をして支離せる形骸の複雜あつて、統一ある精神の富贍を缺かせることになつたのは、彼我の文明の程度の相違と其等の性質の相違との二つより來たつたものであるが、どちらかと言へば、

其れは前者より來たつたよりも、後者より來たつた方が遙かに多いのである。この事實はわたくしからすると、現にわが社會生活に慢性として横溢せる不卓越性を化して卓越性とする覺悟を養ひ、方法を講ずる上に取つて、極めて貴きヒントをわたくし共に與へるやうに思はれる。

七、わが社會生活に彌漫せる不卓越性の標本としての教育

正確な造語は覺えて居らぬが、横井小楠に『西洋の機械の技術を學修し、東洋の道徳の精華を發揮するのは、何も富國强兵といふやうな小さい目的のためではない。仁義を四海に布くためである』といふやうな宣言があつた。横井小楠と言へば當時その聰明に於て天下に比肩する者なく、新文明の大先達であつたが、それでも新文明を建設するのに、日本が西洋より借用するの必要あるのは、たゞ、其れの機械の技術、即ち、物質文明だけである。道徳の精華、即ち、精神文明に至つては固有のものを皇張すれば、それで十分であるといふ意見であつたのである。この二元觀には、(其の後の多年の經驗が優に證明した通り、)大なる謬見が含まれて居ることは爭はれないが、現に仍、三千有餘年の獨立した國家と文明とを有てる一民族の情操を代言して居るものとしては十分の根柢はあつた。

わが國が始めて西洋諸國に接觸して自國の獨立のために彼れの長を知り、おのれの短を覺へたのは、武力と富力とだけに於てであつた。然り、確かに此等の二點だけに於てであつた。その後、此等のものの依つて繫がるところを繹ぬるに及んで、其等は殖産、學術、政治、道徳等と不可分の關係にあることがだんだん解かつて來た。そこで、單なる富國强兵論者も、終には此等のものを悉とく歐化するに止まらず、國語や人種までも歐化しなければならないといふやうな極端な、然し、淺薄な意見を抱くに至つたのである。然し、三千有餘年來、固有の學問や、藝術や、道徳や、趣味を涵

養し、受用し來たつたわが民族の有てる情操の總べてが、如何に急場の必要に迫られたからとて、かゝる功利一遍の計畫に依つて、尠しも剩すところなく滿足され盡す筈のものではない。そこには必然に滿足されない或る surd が殘るに定まつて居る。機械は西洋にあるが道德は固有のもので十分である、否、固有のものでなければならぬ、と主張したのは國民の心の奧底に潛む此の surd のために代言して居るのである。されば、明治初年に於て自國の獨立がやゝ保證されるや、否や、暫らく應急手段のために壓抑されて居た此の surd が漸く擡頭し來たり、終に『國粹保存』の名に依つておのれの權利と權威との回復を企てるに至つたのは極めて自然の理であつた。

斯くしてわが國民生活に於ては、其れの情操は二分されることになつた。こゝ五十年間、孰づれの情操にも時に消長あるを免かれなかつたが、未だ、一度も、大處、高處よりの見識より止揚されて、全く一つの方角に向つてはたらく一つの動力、若しくは、理想とされたことはない。刻下に於ける我が國の文明の最大缺陷は、否、あらゆる缺陷の唯一の病根はこゝに伏在するのである。この缺陷の最も顯著な標本はわが國の敎育である。特に國民敎育である。

國民敎育の年限を延長せねばならぬとか、其れに從事する敎員の優待法を講ぜねばならぬとか、校舍の增築を、若しくは、改築を圖らねばならぬとかいふことは、よく識者の話題に上ることであるが、わたくしは、彼等が其れの內容が如何に構成されて居るかを彼等の話題とする者の無いのを見て不思議に禁えない者である。彼等は果して一度でも其れを檢討したことがあるのであらうか、或は、既に檢討したが、其れに滿足して居るのであらうか。

わたくしがどうしても、其れの缺陷と思惟するものを、思惟せざるを得ざるものをこゝに端的に道破して見れば、其れが、窮極、現代に處し得る聰明にして善良なる市民を造るものになつて居らぬといふ一事に歸する。一國の敎育にして、其れの社會生活に適する市民を作り得ないとしたならば、世の中に、敎育として之れに勝るの缺陷が又とあり得る

であらうか。

わたくしは、わたくしの如何なる事實を指してさう思惟するのであるかの理由を暫しく敷衍せねばならぬ。

わたくしがこゝで指して居る事實は他でもない、元來單一なる處世の覺悟を作る道具であるが、姑らく注意の向けられる方角の異なるに隨つて、(たゞ教授の、若しくは、學習の便宜上)二つの科目となされて居る理科と修身とが互に相容れざる原理の上に組織され、理科は實驗主義の上に立てられ、修身は教權主義の上に立てられて居ることである。そして、此等は生活の二つの道具として一個の兒童に課せられて居ることである。斯くして、五十年前、小幡氏に依つて唱導された『西洋の機械を學修し、東洋の道德の精華を發揮する』ことが、今日に於て依然として處世の要諦として敎へられて居るのである。恰もわたくし共はその間の尊き、然し、苦き經驗より何物をも學ぶところが無かつたかの如く。何と驚歎すべき事ではないか。實驗主義は總べての物を未決定のものとし、おのれの欲求を標準として其れに制限を劃すことを生活の方針とし、教權主義は總べての物を旣定のものとし、おのれの欲求をして其れに服從せしめることを生活の方針として居るのである。兩者は其れの理想に於て到底兩立し得る二つの主義ではない。どうして氷炭相容れざる處世の覺悟が同一兒童に課せられ、そして、其れの結果として、彼れが聰明にして善良なる市民たることが期待されようか。

斯く矛盾せる二つの假定、否、想像が恰かも二重眞理であるかのやうに當事者に依つて何の疑惑を抱くこともなく並び說かれて居るのは、畢竟するに、皮相なる計算に依つて取り上げられた外來文明と、眞摯にして頑强なる感情に依つて擁護される固有文明との間に頒たれた社會感情の發露であるから、歷史的には十分の根柢はあるが、此等の二つをして國民教育の中に對峙せしめて居るのは、彼等が眞劍に、汎く、深く、そして、强烈に自分等の生活に含まれた志向と

其れを取り捲く要請とを吟味したことが無いからである。若し彼等にして一度さうしたならば、理科が具體化されると同時に、修身が流動化され、此等の二つのものはたゞ一つの天衣無縫の方針と渾化し去るべきであるとわたくしは固く信ずる者である。

然し、故らに立入つて教育の是非を論じようとするのは、わたくしのこゝの目的ではなかつた。たゞこゝに教育の一事を擧げたのは、其れの內容を組織するものは、わたくし共のあらゆる他の活動の內容を組織するものを代表し、隨つて其れに見出だされる缺陷は、他の其等の缺陷を代表して居るものとわたくしは見たからである。

何故にわたくし共の生活の要求と理想とを標準として、わたくし共の產業に新らしい發明が生じないか。何故にわたくし共の生活の要求と理想とを標準として、わたくし共の政治は實質に於て代表政治とならないか。何故にわたくし共の生活の要求と理想とを標準として、わたくし共の藝術は、わたくし共の哲學は、特に、後者は完全にわたくし共の情操を運用するヴエヒクルとならないか。此等の疑問に對する答は唯一つである、唯一つで十分である。其れは、此等の總べては其れの形態を未決定のものとしながら、其れの精神を既定のものたるに止め、其れの形態と其れを運用する筈の精神との間に絕大なる扞格を生ぜしめて居るからである。

さきにわたくしが擧示した卓越性の釋義に隨つて、若し卓越性といふものが最も經濟的に、そして最も合理的に、現在置かれた境遇と、現在有てる才能との整齊、若しくは、統一を成就する資格のことであるならば、其れが產業にせよ、政治にせよ、藝術にせよ、將た、哲學にせよ、今日、わが國に於て卓越性を有つたものの出現を待つことは黃河の淸きを待つと等しく極めて望みなきことである。

八、如何にせば不卓越性を卓越性と化し得るか

（假りにわたくしの見解が正しきものとして、）既にわたくし共は卓越性とは如何なるものであるかを知り、そして、現にわたくし共の生活に於て不卓越性は如何にして生じ、如何にして繼續されて居るかを知つた。さすれば、この不卓越性を化して卓越性となすの道は、之れを遠きに求めずとも、近きに横たはつて居るべきである。今日、世の中にはおのれの學ぶところ、信ずるところ、興味の赴くところ、そして、聰明と判斷との限られるところに隨つて、それぞれ、異なつた計畫に依つてわが同胞の聰明と幸福とを增進しようとして居る者が可なりに饒い。之れが目的を達するために、或る者は國際主義を唱へ、或る者は國民主義を唱へ、或る者は社會主義を唱へ、或る者はカント主義を唱へ、更に、或る者は一種の神秘主義をさへも唱へて居る。其の他、細かに個人個人の憑據するところに立ち入つて仔細に點檢すれば、ウオルト・ホイットマンのデモクラシイを信ずる者、コオルの自由主義を奉ずる者、トルストイの無爲主義を讃する者、そして、クロポトキンの無政府主義に憧がれる者、實に千樣萬態を極めて居る。わたくしは、此等のものの總べては、尠なくとも其等の或るものは、或る意味に於て、自分の生活といふものの意義と目的とを理會する上に取つて、刺激となり、參考となり、教訓となり、或は指導となるもののあることを尠しも疑はない。然しながら、わたくしからすると、たとひ此等の或るものが正しきもの、善きもののみを含んで居ると假定しても、彼等が此等を利用し、大用するためには、彼等は其れに先立ちて一つの缺く可からざる準備を要するとわたくしはどうしても考へざるを得ないのである。其れは他でもない。其れは、彼等がおのれの生活を全體として、近世文明の原頭に浸してそれより洗禮を受けることである。言ひ換れば、彼等の生活の中に尠しでも、既定の思想、若しくは、情操の痕跡を殘さないやうに、其れの最小組織

に至るまで、其等をして未決定の思想と情操とに支配せしめることである、否、未決定の思想も情操そのものにまで化せしめることである。わたくしはわが同胞にして、いつか一度、この苦行に依つて、彼等の靈魂と身體とを擧げて一變し、一新せざる限りは、彼等にしてどんなに頻繁に、隨時、西洋に於て流行し出す新らしい主義や、學説や、設備を拾ひ上げ、どんな熱心を以て其等を信仰し、宣傳しても、其等は結局、既定のものとなつて、彼等の生活を解放するものとはならずして、反つて其れの桎梏を增すものとなるに定まつて居るとわたくしは、無責任にではなく、この五十年間、わが同胞が閲みし來たつた經路に依つて推測せざるを得ないのである。

それでは、わたくし共日本人たるの資格を以て、現代文化の原頭に浸りて、其れより洗禮を受けるのに、どれだけの心掛けと手段とが必要であるか。それは、

一、わたくし共の生活、即ち、わたくし共に獨自の境遇と才能とを標準として、西洋文明を發生的にと同時に、作用的に改釋し改判すること、と、

一、過去に於て、わたくし共が外來文明を、特に、最近五十年間に於て、西洋文明を採用して來る間に、知らず、識らず、作り出した成績に鑑みて、個人として、社會人として、其れへの反應の形に於ておのれの性情の特徴を會得すること、とである。

九、結論として、此の立論の理由を釋明す

往時、伊太利の志士マジニは豐潤なる文學の才能を多分に惠まれて生れた一人であつた。然し、彼れは、當時、祖國が他國の支配に屬し、其等の兵力と權力との下に氣息奄々たるのを觀て、慨然筆を投じて戎軒に從ひ、そして、言つた。

『自分は聊か文學の才能に富んで居ることを知つて居る。然し、獨立なき國に偉大なる文學の興りよう筈はない。自分は先づ自國の獨立を圖らねばならぬ。若し一旦自分の業にして成るあらば、他日、自分より更に偉大なる詩人出で、自分の墓の上で自分のために詩を歌ふであらう』と。

わたくしはわが民族の、否、人類の自由と幸福とのために、わが國の産業に於て、政治に於て、道徳に於て、學問に於て、藝術に於て、卓越したものの出現するのを、否、此等のものが、總べて、卓越性そのものとなることを望んで止まない。然しながら、わが同胞にして卓越性の如何なるものであるかを知らず、晏如として不卓越の生活を持續して居る間は、産業に於ても、政治に於ても、道徳に於ても、學問に於ても、藝術に於ても、眞に卓越性を有つたものの興りよう筈はないではないか。この社會生活の中に在つて、自分だけは卓越性を有つたものを作り出して居ると揚言する者があるならば、或は、其れはわたくしの卓越性として居るものとは、大分に別種のものでないかをわたくしは虞れる者である。わたくしの卓越性として居るところのものは、必然に、(其れが産業であるにしても、政治であるにしても、道徳であるにしても、學問であるにしても、藝術であるにしても、)わが同胞の現に置かれた境遇と、現に有てる才能との最切統一を促がし、彼等の最深要求を滿たして居るものでなければならぬ。若し、世の中に、わたくしのこの見解が空疎な揚言に過ぎざるかを疑ふ者があるならば、彼等は、たゞ、宜しく過去に於て如何なる時代に在り、如何なる民族に取つても、卓越性を有つたと一般に認められて居るものは、産業にしても、政治にして、道徳にしても、學問にしても、藝術にしても、其れが如何なる種のものであつたかを省察すべきである。

「名譽とは自分を知らない人々に持て囃されることである。」此れは佛蘭西の一諷刺家の言葉であるが、わが國に於て、或る物に對して、其れが卓越性を有つたものとして持て囃してゐる者は尠なくないが、彼等の大數は果して　さうする理

由を與へ得るであらうか。哲學や評論の流行といふ如き（わが國に於ては、確かにほんの一種の流行である。）狹い範圍に限つてさへも、ミルやスペンサアが、持て囃された後で、トルストイが持て囃され、ジエムスが持て囃された後で、タゴオルが持て囃され、更にこの頃になつては、獨逸哲學、特に、カント主義が持て囃されて居る事實からしても、どうもわが同胞は（さきにわたくしが說明した意味に從つて）此等の卓越性を認めての上とは思はれない。然し、斯く言つたからとて、讀者はわたくしの眞意を誤解しては困る。一體、わたくし共にして、總べての物を正用する方法をさへ把持して居れば、天地間に一物としてわたくし共の睿智と德性との開發に資することの出來ないもののないことをわたくしは十分に心得て居る。正しき道を以てすれば、此等の學說や人生觀よりわたくし共の學ぶところの多かるべきをわたくしは決して疑はない。たゞ、わが同胞が爲すがやうに、一朝、或る人に依つて、或る新らしきものが、紹介され、宣傳さるれば、現にわたくし共の生活の要求が如何なる種のものであり、其れの理想が如何な方角に向つて居るかを省ず、倏ち、無制限に其れの價値を誇張し、其れの眞理を絕對に信ぜんとする人々の態度をわたくしは非難するに過ぎない。それで、尠しパラドキシカルのやうではあるが、わが國に於て、一部の人々が或る物の卓越性を讚歎するのは、その實卓越性の何たるかを知らざるがためであるとわたくしは斷ずるのである。若し彼等にしてわたくしのこの推斷に不服ならば、わたくしは彼等に對つて、何故に其等がわたくし共の生活に取つて、彼等が讚歎する程度に、卓越性を有するかの理由の說明を篤と乞はなければならぬ。

わたくしは不敏と雖も旣にヒユウマニズムの上に立てる一個の思想家である。隨つて、國際主義者であり、平和主義者である。然し、充實した國際主義と平和主義とは眞正なる國民主義を竢つて始めて成立し得るものなることを確く信ずる

が故に、わたくしはわが同胞に對つて、彼等に取つての卓越性は如何に創造され、如何に認識さるべきかを說くの一緊要事たるを切に懷ふ者である。

ボルシェヴィキとコオペラティヴの對抗戰

澤田謙

政治的獨裁王

ボルシエヴイズムとコオペラテイヴとは、現在のロシア社會の二大潮流である。前者が政治の實權を掌握せるに對して、後者は經濟の大動脈をつかんで立つ。ロシアの社會改造は、この二大勢力を中心として、渦を描きつゝ進行するのである。

ボルシエヴイキが、現代ロシアの政治的獨裁王たることは動かされない。もとより彼等の革命は、政治に限定さるべきものではない。彼等はその革命の當初より、いわゆる『社會革命』を標榜せる以上、『政治革命』に滿足するものにあらざるは、言を俟たぬ。但しロシアにはロシア特有の社會的因素ありて、その社會革命の完成を妨害するのみならず、彼等の革命形式は、その進行にすら一大障害をおくのである。なぜならば、マルクス・エンゲルスの學徒たるボルシエヴイキは、都市工業勞働者を足場としてその革命を就行したるものにして、人口の八割七分以上を占むる農民は、彼等の革命的基礎ではないからだ。

都市工業勞働者と、村落農民との異同の、社會學的考察はしばらく措く。少くともロシアにおいて、農民の大部分は社會の革命的分子ではなかつた。村落農民は革命の異邦人であつた。彼等は政治革命に參加しなかつたばかりでなく、革命政治にも參與しなかつた。まことにロシアの革命は、工業勞働者と農民とを、全然隔離してしまつたのだ。革命は工業勞働者を獨裁政治者の地位にまで引き揚ぐると共に、村落農民を被壓者の地位に陷したのである。彼等は共に、昔日ツアーの獨裁政治の下においては、同一の運命に悲鳴をあげ、抗爭する兒であつた。いま、一たびツアーが崩壞するや、一は共產者として權勢を誇り、他はその壓下に不遇をかこつ。

『プロレタリアの獨裁政治』といふ言葉を、マルクス・エンゲルスの著書のなかに、發掘し來つたボルシエヴイキは、これをその國家政策の第一位においた。彼等はその建國の基礎を『ロシ

ア勞農ソヴイエート共和國』において、『すべての權力をソヴイエートに！』と號令するのである。もとより一個の革命家として、彼等の巧妙なる『革命戰術』の前に、叩頭するのは自由である。しかし一介の學徒としては、われらはまづ彼等の欺術を摘發しなければならないのだ。

もしプロレタリアなる言葉のうちに、農民をも含めて言ふならば、『プロレタリアの獨裁政治』といふ警語は、何等の意味をもつことはできぬ。獨裁政治とは、少數者が絕對の權力者として、多數者を壓服するといふ意味の、歷史的觀念だ。從つてプロレタリア——人民の大衆——が、人民の大多數に對して獨裁政治を行ふといふのは大きな矛盾だ。それは矛盾の上に建立された絕對性原理である。しかし事實は矛盾以上だ。彼等は矛盾を欺僞してゐるのである。彼等はまづプロレタリアといふ言葉で、人民の大衆(農民をも含むを)彼等の仲間に引き入れたるが如き風を裝ふと共に、獨裁政治といふ語で、共產者(農民を除く)の行ふ眞の獨裁政治(農民に對する)を合理化せんとしてゐるのだ。

されば彼等は『ロシア勞農ソヴイエート共和國』と稱すと雖、まことは『ロシア共產者ソヴイエート共和國』と言はねばなるまい。『すべての權力をソヴイエートに！』とは、『すべての權力をボルシエヴイキに！』の誤植であらう。なぜならロシアの農民は、全く共和國の統治者の地位から驅逐されて、全然被治者の地位にあるからである。端的にいへば、ボルシエヴイキの政治は、都市工業勞働者を根據として、村落農民を統治する政治だ。こゝにおいて『プロレタリア(都市工業勞働者)の獨裁政治』なる語は、はじめて生彩を發揮し來る。

ロシアの人民の大衆たる村落農民は、獨裁政治の主體にあらずして、純然たる客體だ。從つてボルシエヴイキは、農民にとつては、ツアーと何の異るところがない。共に獨裁政治者だ。『ロマノフ王朝の獨裁政治と、プロレタリアの獨裁政治』との差異は、單に、一方の少數政治者が貴族に基礎をおくに對して、他方の少數者が、階級に目覺めたる工業勞働者なりといふに過ぎぬ。』(スパルゴ)農民はいまもなほ、ロマノフ王朝の下にありしときと同じく、『プロレタリアの獨裁政治』の下にあつて、悲鳴をあげ、抗爭し、農民の自由とデモクラシーのために、戰ひつゝあるのである。

ロシアの農民問題の特色と重要はこの點に存する。ボルシエヴイキの農民政策の意義もこゝにある。勞農ロシアの社會構造のうちに、その勞働者と農民との間に、いたましき分裂ある事實に徹底せずんば、ロシアの農民問題は了解されない。從つてボルシエヴイキとコオペラテイヴとの對抗戰も、その眞意義を

發揮しないのである。

自由主義運動

一九一七年二月の革命は、無抗爭の裡に、ツアーの政府を顚覆した。專政制治を擁護する機關銃は二三時間にして沈默した。その後はあの廣いロシアの領土に、一つの抗議の聲さへ聞かれなかつた。ツアーと運命を共にする十三萬の地主貴族は、ロマノフ王朝を防禦するため、一指をさへ擧げなかつた。宮廷を守るべきチノウニキすら、沈默のうちに革命を通過したのである。ツアーの政府は無抗のうちに顚覆した。

しかるに、一九一七年十月、ボルシエヴイキが勢力を握つたのは、全然抗爭と爭鬪の結果であつた。官僚は大臣より下吏に至るまで、一揆とボイコツトの態度をとつた。中產階級は、大銀行家より小店主に至るまで、おそろしい恐怖に滿たされた。政黨と政治家は、十月黨よりインタナショナリストに至るまで、アレキサンダー・グチコフよりマクシム・ゴールキ・マルトフに、至るまで、激しい反抗と敵對の態度をとつた。十一月二十二日、ペテログラード會議は、六名の棄權者を除くの外、四百六十六票を以て『ボルシエヴイキの權力僭奪に反對する』動議を通過した。十一月二十六日、ペテログラード大學同盟は、滿場一致を以て『僭奪者の權威を認めず』との決議を可決したのである。何故であるか。

ツアーの倒れたるは、一世紀に亘る、ロシアの解放運動の結末である。その背後には、巨人『輿論』が立つてゐた。ボルシエヴイキの天下は、馬上に握つたる權力である。彼等は輿論を代表しない。その背後に立つ勢力は、ロシアの社會政治運動中のほんの一部分を代表するにすぎないからだ。

ロシアの社會政治運動には、大別三つの潮流がある。自由主義運動と、社會主義運動と、勞働運動がこれである。ツアーの巨屋を倒壞したのは、この三大潮流の合流せる大洪水だ。ボルシエヴイキを興したのは、その一潮流の一支流にすぎぬ。まづ、この三大潮流を遡つて、その水源を踏査して見やう。

ロシアに最初姿を現はした社會政治運動は、自由主義運動であつた。時代は十八世紀の初頭、カテリナ十二世の時にまで遡る。もとよりそれは一方に於て、フランス革命の餘波でもあつたが、他方に於て、ロシア人民の胸裏に秘する、民本的精神の發露である。しかるに「民本主義の精神は、この國土に强勢であつたにも拘らず、これを表明すべき機關は、憐むべく弱勢なものであつた。』(ビユラード)彼等は專制政治の重壓の下にあつて、

社會運動にまで燃え上ることはできなかつた。從つて自由主義運動は、すべて秘密結社の形をとつて、『自由主義の聖火を、灰の下に育てゝゐた』(アントネリ)のである。秘密結社はみな『カルボナリ』の形に倣つた。一つは立憲王國を主張するペテログラードの『北方結社』、他は小露西亞の官吏よりなる、共和主義の『南方結社』、最後は聯邦を夢むる『スラヴ同盟』である。

『時々小さな焔が、すぐもみ消されてはしまふが、焔え上つて、この暗黑世界を照明して、火はまだ消えないでゐるといふことを示した。』(アントネリ)十月黨運動の如きこれである。この有名な疑獄事件では、三百二十一名の嫌疑者、(大部分は貴族)が逮捕された。五名のものは死刑に處せられた。有名な『內閣第三部』即ち政治警察大臣が出來たのはこの時だ。これから焔が上る度毎に、灰は掻きまわされ、犧牲者は堀り出された。そのうちには、ツルゲニエフの追放、ドストイエフスキのシベリア流謫をも含む。

アレキサンダー二世の卽位とともに、永く壓服せられたスラヴの自由主義は、漸く息づき始めた。それは自由主義の黃金時代であつた。ツアーの帝國はこゝに變形するかと思はれた。追放者は招還され、外國の旅行居住は許され、改革は約束され、農奴の廢止は準備された。皇帝はヘルツエンの新聞『警鐘』(コロコル)を讀むやうになつた。

然るに一八八六年の、アレキサンダー二世暗殺事件と共に、時勢は急轉して、自由主義は再び暗黑時代にさまようことになつた。アレキサンダー二世、アレキサンダー三世、ニコラス二世、共にニコラス一世型の專制主義者であつた。自由主義運動のルネツサンスは一九〇五年に至つて始めて到來したのである。

自由主義は永く灰の下にかくされてゐた。しかし彼等は灰の下に燃え擴がることを忘れなかつた。智識階級、貴族社會、大學方面、實業界、みな自由主義者の占領するところとなつた。かくして、ロシアの專制政治は、道義的方面より崩壞し始め、第一回のデユーマ(議會)が開かるゝや、『國民進步黨』は、忽ち支配的地位に上つた。一九一七年二月の革命に、第一線に立つたのは自由主義者であつた。

久しく灰の下に埋もれてゐた自由主義はかくして、革命と共に焔々たる大火にまで燃え上つたのである。ロシアは遂に自由主義の天下となるかと思はれた。

社會主義運動

しかしロシアの社會政治運動には、も一つの強い潮流があつ

た。社會主義運動がこれである。

『若しロシアにおける現代社會革命運動の創設者として、唯一人の人物を選べといふならば、その榮譽はアレキサンダー・ヘルツエンに與へられなければならぬ。』（スパルゴ）この運動における彼の影響は甚大たものである。彼は一八一二年モスコウに生れた。両親は非常な金持で、彼は贅澤と共に、立派な教育をうけついだ。二十二歳の時、ウラルの小都に追放され、六年の後、一八四〇年モスコウに歸つた。その後、バクーニン等と共に革命運動に携はつてゐたが、一八四二年再びロシアを追放されて、以來彼は彼の故國の土を踏まないのである。一八四八年の革命の日にはパリに居た。それからプルードンと共に『人民の友』を發行したり、倫敦でコロコル（警鐘）を發行したりして、ロシアの青年達に、革命的精神を鼓吹したのである。

ロシアに社會主義運動が起つたのは、これら國外追放者の感化によるものだ。これに對應して國内には、ロシア特有の、インテリゲンチア運動が起つた。インテリゲンチアは、もと自由主義と社會主義との双生兒である。彼等は主義よりも情熱の持主であつた。大學の學生の間に燃え上つた、社會革命の情熱の火は、忽ちにして農村の隅々にまで擴がつた。革命婦人の斷髪團が現れたのは、この頃のことである。

一八六一年の頃、社會革命運動は、自由主義運動と合した。社會主義運動の發達は、十九世紀後半のことである。一八六一年には『人民解放協會』が成立し、一八七一年以來チヤイコウスキの「相互教育協社」は、ロシアの大都會に渉るやうになつた。大部分は學生である。

シユヴアロフ伯の弾壓政策の實行によつてロシアの社會革命運動は、二系統に別れるに至つた。ドルグーシンの徒はバクーニンの主義を採用して、ロシアの支配階級に働きかけることの不可能を信じ、下級人民に働きかけることの必要を論じた。『森林と人民の間に行け』といふバクーニンの言葉は、彼等の警語となつた。

一方ツカソフ等のナバト及びキエフ、オデツサにおける『ブンタリ』は、『人民の意志』といふ新機關を作つて、恐怖主義を採用した。彼等の信條は、ニコラス・モロゾフの次の信仰告白に明瞭だ。『われらは、ナイフを、ダイナマイトを、爆弾を、毒物をとらなければならぬ。この種の行動によつて、官憲は恐怖に襲はれる、一般公衆はつねに興憤する、人民は墮落する、我黨はその活力を發揮する、そして現在の權力者の威信はさへぎられる。』

この恐怖主義の『ナロドヴオルチ（人民の意志）に對して、

ドルグシンチの主義を奉ずる『ナロドニキ』（人民の友）が對抗する。この社會主義運動の二大潮流は、ある事件を機緣として、明確に分離するに至つた。それは一八八三年十一月、ナロドヴオルチの機關雜誌、『ヴイエストニク・ナロドイ・ヴオリ』（人民の意志の警告者）の創刊號に、ナロドニキの首領、プレハノフの『社會主義の諸問題』といふ論文の掲載を拒んだからだ。こゝでプレハノフ一派のナロドニキは、『勞働解放協會』を創つて、これと全然分離するに至つた。その目的は、彼の宣言に明らかなる如く、勞働階級の間に平和的な宣傳を試み、且つ『政治的爭鬪に沒頭して、社會主義の缺くべからざる諸問題を忘却してゐる、革命黨』の批判をなすといふにある。

プレハノフのこの努力にも拘らず、『時代の兒は、デモクラツトにあらずして、革命社會主義者であつた。』（アントネリ）一八八六年十二月の終り、アレキサンダー・ウリアノフ（レーニンの長兄）は、ナロドヴオルチの名において、次の宣言を發布した。『唯一の爭鬪方法は、秩序的恐怖主義だ。――この恐怖主義は、復讐手段ではない。專斷的制斷ではない。無自覺なる失望の叫びでもない。況んや現在の經濟組織を討滅する直接方法ではない。それは專制政治の政策に反抗する、準備的、自發的、打算的革命鬪爭である。專制政治はもはや立脚の基礎を失つた。』

すでにナロドニキとナロドヴオルチの二大黨派に分れてゐた社會黨は、一八九五年以來、更に分裂した。一八九五年、レーニンはマルトフと共に、ペテログラードに、『勞働階級解放のための鬪爭同盟』を作つた。同年『ロシア社會民主勞働黨』ができた。この分裂は、一九〇三年の社會民主勞働黨第二回大會において、ボルシエヴイキとメンシエヴイキとの對立となつて現はれた。

かくして革命當時におけるロシアの社會黨は、三大分派をもつてゐたのである。メンシエヴイキ社會民主黨、ボルシエヴイキ社會民主黨、社會革命黨がこれである。

ボルシエヴイキが、ロマノフ王朝を倒したる、ロシアの社會政治運動の、全班を覆ふものにあらずして、その分派の一部分を代表するものなることは、上述によつて明らかである。なほ更に次の記述は、この事實を更に强調するであらう。

勞働運動

ロシアの社會主義運動について、注意を要するは、その有力なる黨員が、すべて智識階級出身であることだ。社會黨は人民の間から生れたのではない。彼等は人民に向つて行動するので、人民の方から來たものではない。

これをボルシエヴイキについて見るに、レーニンは貴族の出で、父はシムビルスク州知事、彼はカザン大學に學んだ學生だ。

トロツキは猶太殖民者の子で、文筆家だ。ルナチヤルスキはモスコウ州知事の子で、文學評論家として有名だ。チノヴイエフは中産階級の出身だ。チチエリンはもとの外務省の事務官、カメネフはモスコウ大學の學生、マルトフはペテログラード大學の學生、ウリツキは技師、リコフは飜譯官である。

ロシアの社會政治運動の第三潮流たる勞働運動は、社會主義運動と、全然獨立に生れた。そして獨立に發達し來つた。のみならず、『勞働者運動は、政治問題についてさへも、社會主義者と結合することを、拒んだやうに見える。』（アントネリ）

勞働者階級は近年に至るまで、ロシア人民のうちの、ごく無勢力な階級であつた。農奴解放以來、多數の解放者は生活のために、賃銀勞働者となつたけれども、その數は一八六一年において、僅かに五十二萬を數へるにすぎなかつた。一八七五年の『南露勞働者同盟』の組織は、ロシアの勞働階級が、政治生活に、こわ〲ながら踏みこんだ第一歩である。一八八三年にはペテログラードに、『勞働解放』といふ協會が出來て、『勞働者』といふ機關新聞を發行した。

一八九一年といふ年は、勞働運動の發達については、記憶すべき年だ。この年の恐ろしい饑饉は、多數の勞働者を都市に追ひやつた。かくして勞働者の數は激增し、革命の精神を呼吸するに至つたのである。

一八九八年には『ロシア社會民黨勞働者黨』ができた。一九〇〇年の五月一日には、ハルコフに、始めて勞働示威運動が起つた。一九〇二年には、ドン河畔のロストフで重大な勞働爭議が起つた。

この澎湃として起つた勞働運動に對して、皇帝政府は方策を誤まつた。政府は常套の警察政策を以て、勞働運動を煽動し、この中に間諜を入れて、彼等を過激化せしめ、以つて鎭壓の口實とせんとした。しかし共同運動は個人的運動ではない。ツアーの政府は自ら播いた種を刈らねばならなかつた。

一九〇五年一月二十二日、プテイロフ工場の爭議の結果、勞働團體は、冬宮の前に示威運動をなして、ツアーに請願した。この平和的運動は、小銃の一齊射擊でむかへられた。時に日露戰爭の結果として、險惡なるロシアの政治經濟狀態は油をかけた薪であつた。虫くつたツアーの政治は、たゞ口火をまつた。口火は冬宮前の小銃一發できられた。この運動は、忽ちにして全露に蔓延し、鐵道、印刷所、製飽所の同盟罷工、海軍の暴動

は、踵を繼いで起つた。

一九〇五年八月六日、皇帝はドユーマを開設して、人民との第一妥協を試みた。自由主義者は、この思ひ設けぬ捷利によつて、爭闘を中止した。しかし勞働者は滿足しなかつた。新らしいストライキが、鐵道勞働者に起つた。一九〇五年十月十三日には、勞働者代議人ソヴイエートが作られ、革命運動の中心となつた。

このソヴイエートは、社會黨と全然獨立に成立したものである。純粹の勞働者團體であつた。その議長のクルスタレフは、當時何の政黨にも屬してゐなかつた。レーニンは當時フインランドにあつて、ボルシエヴイストの新聞に立て籠り、戰闘的社會主義を指揮してゐたが、この勞働運動には直接に關係しなかつた。

十月三十日には總同盟罷工が宣言された。しかし農民との連絡もなく、自由主義の思想的援助もない勞働者は、屈するの止なむきに立至つた。勞働者代議人ソヴイエートは捕えられた。かくして勞働運動は一時息をひそめたのである。

一九〇七年三月十七日の勞働組合法によつて、組合は官廳の許可を要することになつた。法律實施以來四ケ月間に、許可を拒絶された組合は六十八に上る。勞働運動指導者に對する壓迫は、秩序的に行はれた。例へば、ペテログラード金屬工業者サンデイカーは、一九〇七年から一九一一年までに、首領を十度かへた。彼等は投獄されたり、シベリアに流謫されたり、國外に追放されたりしたのだ。

にも拘らず、金屬工、印刷工の組合組織は、漸次困難の間にその基礎を固めた。一九一三年、ペテログラード、リガ、モスコウに於ける勞働運動は、十五萬の勞働者を網羅したのである。

一九一四年の戰爭と共に、時態は急轉直下した。軍需品工業の必要は、婦人と、小兒と、不熟職工を、勞働團體の多數者とした。この訓練なき勞働者の加入は、勞働團體の素質を、煽動にのり易い、熱頭のものと化したのである。かくして革命の準備はでき上つた。

二月革命

かくしてロシア社會政治の三大勢力が建立された。自由主義者は、第四デユーマの「進歩團」に立て籠つて、立憲主義、議會主義、民本主義を主張する。社會主義者は、革命主義、民本主義だ。勞働運動は、主義はない。——たゞ政治の實權を握るといふ、確定的政綱あるのみである。

こゝに一九一七年の革命が起つた。最初は食糧供給の不足に

對する、民衆運動であつた。二月二十二日（新暦三月七日）プテイロフ工場の委員會が組織された。經營者は工場を閉鎖した。その報復手段として、同盟罷業が宣言された。二十四日、ストライキは擴大して、市街電車は走らなくなつた。婦人はパンを要求して街路を練つて歩いた。方々で騷擾が起つて、警官は群衆に解散を命じた。九日の夜には、河向ふの勞働者街（本所深川といつたやうなところ）で、委員會が組織された。二月二十五日には總同盟罷工が命令された。警官はネヴア河の橋を守つてゐたが勞働者は氷の上を渡つて市街の中心に擴がつた。流血の市街戰が起つた。

これまでは、運動は勞働者プロレタリアに止まり、單なる叛亂で、革命ではなかつた。しかるにこゝに政府が致命的の誤ちを犯したために、叛亂は革命となるに至つたのである。皇帝のデユーマ解散命令がこれである。

デユーマは叛亂に對する皇帝の牙城である。たとへその占有者は自由主義者なるにもせよ、自由主義は叛亂の防衛者だ。しかるに一度解散の勅令が下ると共に、自由主義運動は、勞働運動と行を共にするに至つた。デユーマは、解散命令を無視して、議事を進行するに決した。秩序再建のための實行委員會が任命された。

この間勞働者は兵營に宣傳を始めて、軍隊は漸次勞働者に加擔し、革命の色はいよ／＼濃厚となつた。しかるに叛亂には指導者といふものがなく、ジヨージ・アスタホフといふ、青年士官が、牛耳をとつてゐたのだ。そこで實行委員會の成立と共にこれが指導者の地位につくに至り、三月十三日には、軍隊は士官に率ゐられて、デユーマに進軍した。

かくして革命は完成し、皇帝政府は顚覆したのである。

社會政治の三大潮流は、何等の默契があつたわけではない。唯革命に際して行動を共にしたにすぎぬ。彼等は革命の成功と共に、始めて顏を合せたのである。

若し訓練ある人民ならば、彼等はこゝに新時代の新政策に一致すべき、協同點を發見するであらう。然るにロシアには、そこに超ふべからざる溝渠が横はつてゐた。第一は心理的に、スラヴ人は、妥協交讓といふことを知らない。彼等は『絕對』に向つて、眞つしぐらに突進する。第二に社會的に、ロシアの社會は、きびしい階級制度に縛られて、彼等はデモクラテイツクな、或は國民的な感情さへも抱くをえなかつたのである。かくして彼等は、妥協を超えて、各自の理想へ向つて、競爭し始めたのだ。

自由主義者は、その政治的訓練と、思想的權威とによつて立

つ、社會主義者は、五十年の人民運動奉仕と、その人民の間の民本的宣傳の威力を有する。しかし實際の努力をもつてゐるのは、勞働運動だけだ。彼等はまづソヴイエートを作り『平和、土地、自由』の三大政綱の實現に進軍した。彼等は一時自由主義者と合體したが、後社會主義者もこれに加入して、こゝに變態的のケレンスキー内閣ができたのだ。

しかし聯立内閣は、先にのべたる如く、ロシアには永續しない。至るところに不和が生じ、至るところに軋轢を生じた。乘ずべき間隙は、隨所に見られた。就中、ケレンスキーには、何等の實質的勢力がない。こゝに突如としてボルシエヴイキが起つたのだ。そしてボルシエヴイキは、一擧にして天下の權を簒奪し、前に起つた三大潮流を、脚下にふまへて、マルキシズムの名において『プロレタリアの獨裁政治』を號令したのである。十月革命がこれだ。いでや十月革命の戰況を略記して、いかにしてボルシエヴイキが、革命を横取りし『ロシアはツアーの專制政治から、ボルシエヴイキの專制政治まで、何等の變化なき回轉を示した』かを述べるであらう。

十月革命

十月二十四日（舊暦）、假政府の議長ケレンスキは、假議會に對して、ボルシエヴイキの陰謀を摘發する演說を振つた。彼は議會の喝采の裡に叫んだ『國家が裏切者のために顚ずくとき、假政府は、予も諸君と共に、破滅するであらう。

しかしながら、われらは、國家の生命と、名譽と、獨立を裏切ることはできぬ。』翌十月二十五日には、彼はキシユキンに政府の一切の權力をまかせて、ひそかに汽車にのつて、軍隊を集めに出立した。實は逃亡したのである。

ケレンスキの失意の雄辯の前日、二十三日の新聞には、ペテログラードの軍營に對して、『ペテログラード勞兵代表者委員會理事會の軍事革命委員會』の署名なくしては、命令を執行すべからず、との要求が發せられた、との報が一齊に掲げられた。ケレンスキが、悠然たる狼狽のうちに、假議會に對する雄辯に耽つてゐる間に、軍隊の動搖は、その波動を擴大して行つた。翌二十五日の朝、士官學校の生徒はケレンスキの前に現はれて、命令を乞ふた。彼は答えた。『假政府の首長として、及び總指揮官としては、私は何もしつかりしたことは言へない。明日何が起るやら、私にはわからぬ。諸君が決心に至るやうな材料は、なにも與へることはできぬ。しかし、私は古い革命主義者として、新らしい革命主義者たる諸君に訴えたい。すぐに諸君の部署に歸つて、革命のかち得たるところを、防備しなさい。』

この演説は、翌日の新聞の報ずるところによると、『士官學校の生徒の間に不滿の念を與えた。その一部は動搖を始めたのである。』士官學校の生徒は次に、軍司令官の前に現はれた。軍司令官は眞青な顔をして、一語をも發するをえない。假議會も同樣である。かくして『ケレンスキの假政府は、カードの家のやうに倒れてしまつた。』（アントネリ）のである。

この間反對黨は着々として活動の歩を進めた。二十四日の眞夜中には、武裝した自動車隊が市街にあらはれた。一隊は電信局へ、一隊は郵便局へ走り去つた。二十五日の朝には、赤衛軍はルスキア・ヴオリアとビルジエヴィア・ヴイエドモスティの印刷所を占領してゐた。國立銀行は七十名の水兵の占領するところとなつた。四臺の荷物自働車と、一臺の武裝自働車が、アストリア旅館の前に現はれた。アストリア旅館の士官團は、無抵抗の降服をなした。

この間冬宮に立て籠つたケレンスキは、コサツクと、士官學校に電話をかけて、出動をかけ合つてゐたが、結局駄目だと知つて、彼はすぐにペテログラードを逃げだすことに決心した。

この夕六時頃、二名の兵士は、軍司令官の本營に、自轉車でかけつけた。彼等は『ピーターとポオル』城堡の代表者として本營の明渡を迫り、もし拒絶さるゝならば、城堡とオウロラ號は發砲すると、申込んだ。三十分間、内談があつた。しかし結局決定はなかつた。軍司令官本營は、水兵と赤衛軍に占領された。

この時まで、何等の騷擾も流血もなかつた。この日の唯一の發砲は、電話交換局の前で、士官學校の生徒と、水兵との衝突があつただけだ。しかしこれも二三發の小銃と共に落着した。市街は常態をあらためず、市街電車は走つてゐた。電話はまだ活動してゐた。

九時、冬宮に向つて、四五發の大砲が發射された。十一時には、デユーマの代表者が、オウロラ號に説得に行つたが、駄目であつた。一時、再び冬宮に砲彈が飛んだ。二時、冬宮は降參した。閣僚は捕へられた。かくして抵抗は姿をかくしたのである。

翌二十五日の朝十一時、假議會はマリイ宮で開かれた。しかし何等の決定を見なかつた。一時、リトウスキ軍と水兵が、マリイ宮を占領して、假議會は解散した。

『勞兵代表者ソヴィエート中央實行委員會』は翌二十六日の朝、會議を開いた。委員會の多數は、反ボルシエヴィキであつた。トロツキは、デーン、リバー、マルトフ等の反對にあつて、ボルシエヴィキは、委員會室を歩み去つた。

これと同時に『ソヴイエート第二回民會議』が開かれてゐた。こゝではボルシエヴイキが多數黨であつた。ボルシエヴイキ二百六十人、メンシエヴイキ　六十人、メンシエヴイキ・インタナショナリスト　十四人、無政府主義　三人、獨立社會黨三人、無所屬二百二十人、無宣言　四十七名。實行委員はボルシエヴイキ十四名、社會革命左黨七名、よりなり、他の政黨は參加を拒絕した。

同日の夜、ペテログラード勞兵ソヴイエートの會議が開かれた。トロツキ、レーニン、チノヴイエフは、クーデターの成功を宣言して、會議の喝采を博した。

二十六日、デューマが開かれた。ボルシエヴイキはデューマ制度に反對して、退場した。同日夜、『祖國及び革命擁護國民委員會』が開かれて、『假政府を復活し、デモクラシーの力の上に立つて『立憲議會』を作り、無政府と反革命より救ひ出さう』としたが、この會議は、ケレンスキ軍とソヴイエート軍との干涉のため、不成立に終つた。

同日の夜九時、『勞兵代表者ソヴイエート第二會議』が開かれた。會議は新らしい『中央實行委員會』を選擧した。委員百名のうち、七十名はボルシエヴイキである。會議は大多數を以て、新政府の組織に關する決議を通過した。而して、『人民委員會』なる『假勞兵政府』を樹立した。『人民委員』の大部分はボルシエヴイキにして、實質に於いて、決して『勞兵政府』にあらざりしは、勿論である。人民委員會議長レーニン、內務委員リコフ、農務委員ミリウチン、勞働委員シユリアプニコフ、陸海委員、アントノフ、ワリレンコ、デイベンコ、商工委員ノギン、教育委員ルナチヤルスキ、財政委員ステパノフ、外務委員トロツキ、司法委員ロモフ、食糧委員テオドロヴイツチ、遞信委員グリエボフ、民族委員スタライン。

かくしてボルシエヴイキの時代は現出したのである。

プロレタリアの獨裁政治

ボルシエヴイキは、かくして一指をも動かさずして、革命を建立した。レーニン曰く『革命を建立するためには、一つの流血をも要しなかつた。たゞ革命を保持するために、多くの流血を見たのである。』このレーニンの一語こそ、十月革命の、プロレタリア革命にあらずして、ボルシエヴイキ革命なることを、告白するものである。

ボルシエヴイキが、その革命を、一の流血なくして建立したるは、彼等の潜勢力が、輿論の上にありしやの外觀を與ふる。しかし、先刻述べ來りし如く、彼等は民衆の間から生れたので

はない。民衆の一部（都市勞働者と赤衛軍）を指導して、天下の權を握つたのだ。しかも彼等は、民衆の門に伍して民衆を指導したのではない。民衆の上に立つて彼等を操縱したのだ。ボルシェヴィキが、妖術者の如くに、その杖を動かすとき、意の儘に群衆は動いた。ボルシエヴィキは妖術者である。しからばその妖術の極意は、いづこにあるか。

洪水の如く襲ひ來つた革命も、ケレンスキの聯立内閣に至つて、停滯した。水は深淵に澱んだ。しかし革命は停滯を嫌ふ。深淵に湛えられたる水力は、動くべく吐口を求めた。しかるに優柔不斷なるケレンスキ内閣は、この革命心理を知らなかつた。彼等は國家改造の實際的施設をなす代りに、内閣の椅子に腰をすえて、いかにして國民議會を召集すべきやといふ問題を、連日議論してゐたのだ。水は益々激した。

革命を成就したる民衆にとつては、皇帝政治の壞滅は、手段にあらずして、目的であつた。彼等はその目的の實現をまつた。最初の日から、過去は全部消え失せたのだ。彼等はたゞ、その目的の實現を待つた。月は日に繼いで經過する。しかし民衆の期待する實際問題は、一つとして解決されない。平和は來らない。土地は自由とならない。パンは多量とならない。水量は益々堤防におしよせた。

彼等はかういふ惡魔の囁きを耳に聞いた。『お前達が自分で權力を握らないうちは、お前達が、お前達の希望との間に立つてゐる、障害物を除り去らぬうちは、神聖な熱意をもつて待ち望んでゐる土地は、永久にお前達のものにはならない。お前達が單純な信仰をもつて欲求する、自由はお前達のものにはならない。永久にお前達は何もえられないぞ。……』

こゝにボルシエヴィキは、慧星の如くに出現した。彼等は眞向からマルクス主義を振りかざして、社會組織を根底から覆へせ、プロレタリアの自由なる直接行動によれ、と呼號した。彼等は高塔の上に立つて、妖術の杖を振りながら、民衆に叫んだ。

『プロレタリアの獨裁政治』

『すべての權力をソヴイエートに！』

民衆は潮の如くに塔の下に集つて、妖杖の動くがまゝに動いた。

若し平靜なる常識者ならば、その妖語の論理的矛盾を解くに難くなかつたであらう。しかし革命心理は、論理學の法則に從つては動かない。それは『本能の衝動』によつて動く。かくして『流血なき革命の建立』がなつた。かくして『血に塗るゝ革命の保持』が始まるのだ。

何故といふか、ボルシエヴイキの革命は、洪水を支えたる堤防に、蟻の穴をあけるだけで成就された。しかるに水は必然の勢を以つて、『プロレタリアの獨裁政治』『すべての權力をソヴイエートに！』といふ方向へ、潮の如くに流れたのである。潮はボルシエヴイキの立てる高塔をも、一緒にさらつて流れた。潮を指導せりと自負せるボルシエヴイキは、潮の上に泳がなくてはならなかつた。彼等は妖語の効果に、再び欺かなくては、ならなかつたのだ。

洪水の潮の上に泳ぐボルシエヴイキは叫んだ。

『われらは一つの權力を樹立せんとす。その目的は、兵士と、勞働者と農民との欲求を、滿たすこと以外にはない。國家は民衆から、すべての奴隷狀態を解放する機關だ。……農民も、勞働者も、兵士も、國家の事業は、自分の事業だと思はなくてはならぬ。これが新らしい權力の、根本原理だ。』(十月二十五日、ペテログラード・ソヴイエートに於ける、トロツキの演說)

『カムレードよ、勞働者と農民の革命の必要は、つねにボルシエヴイキの說くところであつたが、それは今や確立せる事實だ。しからば、勞農革命の意義は如何、まづ第一に、ソヴイエート政府を作らなくてはならぬ。我等の組織から發生した權力を、ブルジョアの參加なき權力を。……われらは、プロレタリアの社會主義國の組織に着手しなければならぬ。』(同日同時、レーニンの演說)

十一月五日(舊曆)レーニンは、人民委員會議長の名において、民衆に訴へた。

『カムレード、共働者よ、國家を指導するものは、諸君自身なることを記憶せよ。もし諸君が團結しないならば、もし諸君が自分の手に、すべての仕事を握らないならば、誰も諸君を助けるものはない。……

『カムレードよ、勞働者、兵士、すべての共働者よ！ いますぐにこの場で諸君の手の中に、すべての仕事を握れ！』

農民ソヴイエートの反抗

十月二十四日の夜、ボルシエヴイキが、內閣をのつとつた時、彼等を助けるものは、ペテログラード勞兵代表者ソヴイエートと、二三百の武裝せるボルシエヴイキ黨員と、それから軍隊內の極く弱勢なる同志にすぎなかつた。他の人民はすべて、敵意と猜疑をもつてゐた。積極的に反抗の態度はとらなかつたけれども、靜かに事局の發展を待つてゐたのである。

しかしボルシエヴイキは躊躇しなかつた。强力を有するものは、彼等の一團だけだ。革命の建立は强力のみを以て足る。し

かしボルシエヴィキの革命を保持するためには、時の經過に抵抗するには、強力は無力である。『プロレタリアの獨裁政治』と『すべての權力をソヴィエートに！』を、實質的に樹立するためには、民衆の基礎をえなくてはならぬ。民衆の間から發生せざりしボルシエヴィキは、こゝに最も苦心を要する。

ロシアの民衆の大部分は農民よりなる。農民こそボルシエヴイキの、力の基礎となさんと欲したものだ。しかるに農民において、彼等は眞の抵抗者を見出したのである。

ボルシエヴィキは、農民にとつては、全くの異邦人だ。農民はボルシエヴィズムの何であるかさへ知らない。ボルシエヴィキも、農民のため何等力を用ゐたことはない。マルクス・エルゲルスの學徒たる彼等は、却つて農民に對し、冷淡と敵意をさへ持つた。『土地の國有化』が社會民主黨の政綱にとり入れられたのは、漸く一九〇五年である。それも時勢の要求に強要されての話だ。

しかるに、時勢は更に進展した。ボルシエヴィキは天下の權を握ると共に、農民をとり入れることの、革命保持のため、絶對に必要なるを覺つた。そこで農民六月大會の決議せる法律を、その内容すら調べないで、これを實施すると宣言した。そして政治的の示威運動とパンフレットによつて、勞働運動と農民運動とを密接に結びつけんとしたのである。

しかしこの泥和政策には、重大なる障碍があつた。農民六月大會の選擧せる、農民ソヴィエート實行委員會がこれである。實行委員會の委員は、主として智識階級、學者、活動的政治家で、その十一月二日の委員會においては、三十三票對二十六票（五名缺席）の多數を以て、次の決議を通過した。

『農民ソヴィエート實行委員會は、立憲議會召集までの期間内における、この問題の唯一の解決法は、罪人たるボルシエヴィキを除外せる、聯立内閣を作ることにあると信ずる。』

この時には、ボルシエヴィキは、まだ公然と農民に戰を挑む決心はつかなかつた。しかし數日を經過して、十一月十三日、實行委員會の召集せる農民大會が、上掲の實行委員會の決議を通過するに至つて、ボルシエヴィキの農民に對する態度は、明瞭となつた。

翌日、左翼の異端者と、其他の少數の委員を以て組織せる、新らしい大會が開かれた。この大會が何を代表するものか、誰も知らない。議長に選ばれたのは、有名な『恐怖主義者』スピリドノヴァだ。その翌日、この大會は示威運動を起して、勞兵代表者ソヴィエートと結合した。このことは、翌日の新聞に、

賑々しく書きたてられた。大會の決議に從つて、勞農兵合同の中央實行ソヴイエートが出來た。委員は農民大會より百八名、陸海軍より百名、勞働組合より五十名を選出するのだ。かくして、ボルシエヴイキ政治は、勞農の結合をはからんとした。

しかしこの方法の不完全なるは、言ふまでもないことだ。そこで政府は、農民階級に對する基礎を强固ならしめんが爲めに、新たに農民大會を開くことにした。各地方の農業區から選出した委員は、五百名以上に上る。この選擧方法のいかなるものかは、後に說くが、形式だけは各農業區の正式代表者で、しかも純粹の農民だけの集りであつたことだけは、明らかだ。實見者の言によると『一番人目を打つことは、灰色の帽子が大部分の優勢を占めてゐることだ。農民服をつけてゐない奴はほんの少しだ。農村の役人や町人で、ソヴイエートの政治的活動に、加擔してゐるものの少ないことは、これでもわかる。

この大會の左翼は、スピリドノヴアの統率するところで、少數の無政府主義者、少數のボルシエヴイキ、これにボルシエヴイキに加擔せる社會革命黨の左翼が大多數を占めてゐる。中央はツエルノフを首領と戴く社會革命黨の本部で、右翼は『革命の祖母』ブレシユコウスカヤの周圍に集つた、穩和派である。

左翼は第一戰において奇捷を博した。スピリドノヴアは、二百六十九票對二百三十票を以て、チエツノフを破つた、そこで大會は、忽ちにボルシエヴイキの操縱するところとなり、農民六月大會の選擧せる中央實行委員會の、反對決議を通過した。かくしてボルシエヴイキ政府は、農民大會を支配するに至つた。ボルシエヴイキは、農民問題の第一回の試驗を通過した。

第三回農民大會には、開會早々、勞働者大會、兵卒大會との結合を決議した。この決議は滿場一致をもつて承認されたのだ。ボルシエヴイキの捷利は、これを以て完結した。

しからば、農民は果してボルシエヴイキに歸服したか。農民大會は正直に農民の意見を代表してゐるか。いな。農民大會の開會中における、ボルシエヴイキ政府の干涉政策は問はずとも、次に述ぶる農民ソヴイエート選擧の狀況は、農民大會の最高擬國家にして、農民の決してボルシエヴイキに屈したるにあらざる所以を、雄辯に裏書するであらう。

干涉選擧政策

ボルシエヴイキ、『プロレタリアの獨裁政治』を主張し、『すべての權力をソヴイエートに！』と號令する以上、彼等はプロレタリアのソヴイエートを、建國の基礎となすの義務を要する。しかるに純粹のプロレタリアは、都市勞働者に限れるを以て、

農村ソヴイエートを、自己の支配下におくためには、特別の苦心を要するのだ。

理論から言つても、『プロレタリアの獨裁政治』とは、少數者――都市勞働者――の階級政治である。『最貧農民』卽ち農民中のプロレタリア分子は、ボルシエヴイキの共働者として受け容れたけれども、彼等の農村における勢力は微弱である。こゝに都市勞働者の農村支配が必要となるのである。(ロシアの共產黨機關紙『共產者』紙上――一九一八年四月、――ラデツクの記事に據る。)

こゝにおいて、ボルシエヴイキは職を失つた都市勞働者を續々とその故村に歸還せしめ、彼等をして『貧農民ソヴイエート』を作らしめるのである。貧農民ソヴイエートの大部分は、都市工業の破壞によつて、職を離れた勞働者によつて組織さるゝもので、『農村ソヴイエート』が『憲法に違反する』行動をなすときは、必ずこれにとつて代るのだ。(イズヴエスティア、一九一八年十月十日)こゝにあるアメリカ人が手に入れた。ロシアの舊地主の記事を摘要する。

『ボルシエヴイキに對する不滿と嫌惡の念は非常に强い。どこからか援助がくるといふ考えを與へるだけで、人民が立ち上つて、共產者を殲滅さすための、充分なる理由となる。この不滿と嫌惡の念によつて考えれば、各種の委員會(ソヴイエート)の選擧に當つては、他の政黨の候補者が輩出しなければ、ならない筈である。それにも拘らず、委員會はすべて共產者が占領してゐる。

『この說明は至極簡明である。

『ボルシエヴイキが、しきりに公言する選擧の自由とは、要するに特定人物間の選擧の自由を意味するにすぎぬ。被選擧人名簿は前以て、ちやんと用意してあるのだ。例へば、ある郡で六名の委員を選擧するときには、七名乃至八名の名前を揭げて、このうちから六名を選ばせるのだ。

『この點について、最も代表的なものは、モスコウ州×××區における、昨年二月の選擧である。私はその郡には土地を所有してゐた。

『選擧人は殆んど全部、二百名ばかりも集つたが、そのうちこの町にやつて來た共產黨員は、たつた十二名であつた。それで、委員を七名選擧するのであるが、被選擧人名簿には七名の氏名しか擧げてない。總て共產黨員であることは勿論だ。

『地方ソヴイエートは、十二名の共產黨員を、一軒の家に招待して、食事と茶と砂糖を饗し、一日に十留の日當をだした。他のものには何も與へられない。宿所さへも供されなかつた。

『しかし彼等は、從來の經驗によつて、かゝる待遇が何を意味するかといふことを、よく知つてゐたので、こういふ危急に對する準備を怠らない。みな最後まで留まることに決した。

『選擧日は確定されてゐたけれども、一度一度と延期された。四回まで延期した後、ソヴイエートは、もはや何とも致し方がなくなつてしまつた。

『選擧の結果、十二票對全票を以て選擧されたのは、すべて十月黨員と立憲民主黨員であつた。するとこの當選した七名のものと、富有な選擧人とは、ソヴイエート共和國に對する煽動の故を以て、直ちに逮捕された。三日の後、新らたな選擧日が告示された。しかしこの度は、選擧場は機關銃で包圍されてゐた。

『翌日の機關紙には、ヴエレア郡において、共産者が滿票を以て當選せる旨、書きたててあつた。しばらくして農民の一揆が起つた。これを鎭壓するため、支那人とレッツ人とが送られた。三百人の農民は殺された。それから逮捕が始まつたのだが、處刑されたのは、何名位か譯らない。』

これは革命に反對の、地主の書いたものであるから、多少の偏執は免れない。こゝにボルシエヴイキの機關紙から、ボルシエヴイキの地方政策を摘出する。ことはレーニンが大學生活をおくつた、カザンに關するものだ。

『カザン、七月二十六日、ソヴイエートの重要なる椅子は、社會革命左黨の占むるところなるを以て、特別委員會は、假ソヴイエートを解散した。政治の實權は今や、革命委員會の手にある。』(イズヴエステイア)

『カザン、八月一日、勞働者の心理狀態は、革命的である。もしメンシエヴイキが宣傳を敢てするならば、彼等に對する脅威は、死あるのみ。』(イズヴエステイア)

『カザン、八月八日、農民ソヴイエート假委員會は、貧農民を含まず、且つその心理狀態は反革命なるをもつて、これを解散した。』(プラウダ)

一九一八年四月、ヤロスラウ・ソヴイエートはボルシエヴイキ政府のため解散された。そして新たに選擧が命ぜられた。この選擧において、メンシエヴイキと社會革命黨とが絕對多數を占めた。(ループル・ルス)人民は立憲議會を要求したのである。これに對するボルシエヴイキの政策は、砲火を送ることであつた。ボルシエヴイキの官報は曰く。

『ヤロスラウの反對黨は、わが軍の鐵火に蹂躙されて、講和を求めて來た。これに對する回答は、二倍せる砲火の形において與へられた。』(イズヴエステイア)

群衆恐怖政策

『ボルシエヴイキの執權は、恐怖政治に始まる』(スパルゴ)彼等の誇る『流血なきクーデター』はペテログラードに限る。他の諸地方は、すべて殘酷なるクーデターの犧牲となつた。彼等は輿望を擔つて天下をとつたるが如き風を裝ふと雖、その執權方法は、すべての將軍の常套手段と、何等の差異を見ない。こゝにサラトフにおける、ボルシエヴイキのクーデターを紹介する。

『サラトフに起つたボルシエヴイキのクーデターは、こんな具合だ。私は自分の眼で事實を見た證人である。

『サラトフといふのは大きな大學街で、智識の中心だ。多數の學校と圖書館はもとより、人民の智識程度を向上するために、各種の設備がある。サラトフのゼムストーヴオは、ロシアにおける最良のものの一つであつた。この州の農民は、數年に亘る革命社會黨の宣傳によつて、目覺め、よく組織されてゐた。市會と農業委員會は、社會主義者よりなる。人民は立憲議會の選擧準備に活躍してゐた。彼等は候補者の名簿について討論し、候補者の履歴並びに各政黨の綱領を研究してゐた。

『十月廿八日の夜、ペテログラードよりの命令によるものとの理由を以て、ボルシエヴイキのクーデターが、サラトフに突發した。その手先となつた勢力次の如し。軍隊、これは人民の大衆とは何の縁故もないものだ。弱勢なる勞働黨、それから指導者としては、若干の智識階級、これはこの時まで、この都市では何の活動もしてゐなかつたものだ。

『そはまことに、兵力によるクーデターであつた。市の議事堂には、平等、直接、秘密の普通選擧によつて、選擧された社會主義者が、會議を開いてゐたが、これは忽ち軍隊の包圍攻撃にあつた。先登には機關銃が据えつけられた。それから爆撃が始まつた。これは一晩中續いて、傷けらるゝものと殺さるゝものとが續出した。市の裁判官達は、逮捕された。

『しばらくにして人民に對して宣言書が、嚴かに宣布された。曰く、「人民の敵」と「反革命」とは顚覆された。サラトフの權力は、勞兵代表者ソヴイエート(ボルシエヴイキ)の手に移りつゝあると。』

これは恐怖政策の序幕にすぎない。かくの如くにして天下の權を握つたるボルシエヴイキは、その執權を保持するために、更に大規模にして、更に秩序整然たる恐怖政策をとらざるを得なかつた。『全露特別委員會』と、『州特別委員會』『郡特別委員會』は、この恐怖政策の、秩序的實行機關だ。そは法律化せる

恐怖を代表する。

革命の當初、暴力に反對する人を嘲つて、トロツキイは言つた。『諸君はわれ等が、われらの敵に對して適用しつゝある、温和なる恐怖政策に反對してゐるが、今に見ろ、これから一ケ月もたゝぬうちに、フランス大革命の恐怖政策を模範とせる、もつと恐ろしい形式の恐怖が始まるのだ。我等の敵に對しては、牢獄ではない。ギロテインを適用しなければならぬ。』と。トロツキイの約束は果された。フランス大革命もいまだ知らざりし『群衆恐怖』が始まつたのだ。

特別委員會は命令する。

『……かくの如きは、社會革命黨、白衛軍、及びブルジョアに對して、群衆恐怖を實行すべしとの、數度の布告にも拘らず、いまだ何等の恐怖の實現せられざるを證するものである。

『かくの如き事態は、決定的に停止されなければならぬ。心弱さと柔和さには、別れをつげなければならぬ。地方ソヴイエートの發見せる社會革命右黨員は、すべて即刻逮捕すべし。ブルジョア及び官吏階級より、無數の人質をとるべし。些少たりとも反抗するもの、白衛軍において些少たりとも動くものには、直ちに群衆銃殺を適用すべし。これらの件に關する能動義務は、特に地方實行委員會に課せられたものである。

『……群衆恐怖を適用するについては、些少の躊躇も、些少の疑惑も許されない。』(全露特別委員會週報)

『ペテログラードの勞働者と勞働婦人よ！……穴倉と屋根裏と土藏と家畜小屋と、其他すべての場所を捜せ。……同時に、意志の薄弱なるものと、訓令を注意深く讀まざるものとの爲に、之を最後として、自由武裝解除の期限を定める。この最後の延期を利用せざるものに對しては、最早何等の餘地もない。この訓令の實行を怠るものに對しては、この度はこれを故意と看做し、我等はこれを、ソヴイエート政府の命令を無視する「反革命者」として、これに對すると同樣の態度をとる。』(イズヴエステイア)

モスコウ駐在米國總領事は次の如く報告してゐる。(一九一八年九月三日)この辛辣なる命令の效驗、以て見るべし。

『五月以來、いわゆる反革命鎭壓特別委員會は、公然特許せられた恐怖戰を開始した。數千の人は、審問さへも受けないで、一括して銃殺された。この處刑の動機として申渡された政治的意見について、全然無知なるもので殺されたものも多い。ウリツキイの暗殺と、レーニンの暗殺計畫は、この大虐政の結果だ。これまでボルシエヴイキの共働者であつた社會主義者が、從前ツアーの虐政に對して反抗せる方法を以て、彼等に對するに至

つたのもこの故である。

「『群衆恐怖』これがボルシエヴイキの回答だ。ペテログラードの官報は、次の如く布告した。『ウリツキイの暗殺事件に關聯して、反革命鎭壓ペテログラード特別委員の命により、五百の人が銃殺された。銃殺さた人の名簿と、もしソヴイエート首領の生命に對する新なる試みをなすものあるときは、將來銃殺さるべき候補者の名簿は、追つて之を公布する。』

『モスコウでは、一般命令の下に「富有者と、一切の前官吏」を逮捕するために、「一般捜査」が行はれつゝある。設備の惡い牢獄は、その收容能力以上に滿員になつたので、毎夜數十人の人が、仕方なしに銃殺されてゐる。つまらない理由でも、又單に「ボルシエヴイキの權力に危害あるかも知れない」といふ理由の下にでも、死刑の判決は下るのである。

『この事態は、人道のために働かんとするすべてに對して、聲高く救を求めつゝある。』」

農民政策

干渉選擧政策と、群衆恐怖政策とによつて、ボルシエヴイキはまんまとロシアの政治的獨裁王となつた。しかし人民の信望をえざる獨裁王は、最も困難なる統治政策に當面せざるをえない。農民政策がこれである。

顧みるにボルシエヴイキ革命は、活動的なる都市勞働者と、無關心なる村落農民との、合成せる革命である。若し人口の八割七分を占むる農民が、その政治的意見に忠實に活動したならば、ボルシエヴイキはその革命を成就しえなかつたに違いない。しかし農民は政治に冷淡であつた。革命に無關心であつた。彼等は革命に左袒も右袒もしなかつた。これボルシエヴイキが、その弱少の勢力を以つて、革命を建立しえたる理由である。

しかし弱少の努力を以て成就せる革命を保持するは、レーニンの言へるが如く、建立ほどには容易ではない。強壓政策は一時的には偉大である。しかし永續はしない。農民は、――ボルシエヴイキに欺かれたる農民は、――時日の經過と共に呟きだした。

「助けてくれ！私達は破滅しつゝある。われらが餓死しつゝあるとき、農村にはどんなことが行はれつゝあるか、知つてゐるか。例へば、私の村のオルカイを御覽、こゝでは買占で一ぱいだ。特に鹽だ。鹽は一ポンド四十留で賣つてゐる。市民會は何をしてゐるのか。ソヴイエートは何をしてゐるのか。彼等に報告すると、彼等は手を振つて言ふ。『なあに、一般の現象なんだ

よ。」

『これぱかりではない。土民兵は、大將から共產者に至るまで、アルコールの醸造をやつて、一瓶七十留で賣つてある。土民軍と密接の關係のあるものは、誰もこの仕事を平氣でやつてゐる。

『饑餓は私達の頭の上にゐる。それだのに市民も「官憲」もそれを認めない。人民裁判官も酒を飲む。勝訴しやうと思へば、酒を飲ませさへすればよいのだ。

「私達は恐ろしい不潔の裡に生活してゐる。石鹸は一つもない。人も馬もみな皮膚病に罹つた。夏になつたら疫病は避け難い。もしモスコウが私達を顧みないなら、われ等は滅亡してしまう。

『村のソヴイエートと、國のソヴイエートとの選擧があつたが、投票はソヴイエート政府の憲法に逆反して行はれた。村の資本家は、共產者の風をして、徴課を免れるために政黨に入つた。そしてこの連中が選擧されたのだ。

『勞働農民はかくして政府にそむきつゝある。』

農民の求むるものは、美しき政綱ではない。パンだ、生活だ。政治問題ではない。經濟問題である。政治問題に無關心なりし彼等は、經濟問題に對しては、死力を盡して頑んばる。

しからばボルシェヴイキは、農民の生活に對して、何等かの保障を與へたか。彼等は農民の經濟を救つたか。『農民ソヴイエート』は政治上の權力に上つた。『土地法』は與へられた。しかしこれは農民の求むるものではない。農民は形式よりも實質をとる。

『政綱製造業者』と異名をとつたるボルシェヴイキは、農民に對して何等の實質を與へない。農民が餓えて死につゝあるのを目前に眺めながら、レーニンは平然として言ふ。

『數千の訓令を書いて、農村の生活を改良することができると期待したならば、われ等はたしかに完全な白痴だ。しかし訓令によつて歩むべき路を指示しなかつたならば、我等は社會主義の叛逆者といはれても仕方がない。これらの命令は、現實の事實としては、即時且充分には實行されないであらうが、それでも宣傳としては、重要な役を果したのである。(共產黨第八回大會に於いて)

レーニンが呑氣なことを言つてゐるまに、農民は益々餓えた。饑餓は宣傳によつては救はれない。農民はボルシェヴイキに望を絶つて、他に救を求むるに至つた。

こゝに突如としてコオペラティヴが現はれる。コオペラテイヴは、デニキン・コルチャックの徒ではない。五十年の傳統を

負へる純粹の經濟團體だ。彼はボルシユヴイキの如くに、外國追放者の智識階級から下つて來たものではない。農民の間から生れたものだ。彼は政綱を說かない。たゞパンを提供する。農民はボルシエヴイキを去つて、コオペラテイヴについた。

かくの如くにして、政治的獨裁王たるボルシエヴイキと、經濟的協力者たるコオペラテイヴとは對抗する。前者は劒を以て威壓するに對し、後者はパンをもつて懷柔する。彼は都會を立脚地とするに對し、此は農村に根をはつた。

ボルシエヴイキとコオペラテイヴとの對抗戰は、一面において、政治と經濟の戰だ。都會と農村の戰だ、ロシアの社會改造の問題は、この對抗戰を主なる興味として展開する。

しからばコオペラテイヴとは何であるか。更に思を新にしてその起原に遡り、その勢力の根原を探り、而してその對抗戰に及ばねばならぬ。

コオペラテイヴの出現

ロシアにコオペラテイヴが始めて出現したのは、一八六五年コストロマ政廳、ロジエステウエンスコエ村の、消費者組合である。革命前五十年のことだ。五十年の歲月は、短いやうで長い。ボルシエヴイキが地上に現出した日に較ぶれば甚だ長い。しかしその發達の顯著なるに考へ合せれば、おそろしい短いものだ。

ロジエステウエンスコエ村に芽生えたコオペラテイヴは、年と共に大氣に息づいて、すくすくと生長した。一九一二年には、組合數十八萬、會員數五百七十六萬に上つた。一九一九年には、組合數は一躍八十萬、會員數は二千萬となつた。會員は戶主を標準としてゐるから、一家族五人平均とすれば、コオペラテイヴは、まさにロシア全人口の一億人の人民を代表してゐる譯だ。その後會員數はまだまだ增加したに違いない。惜しいことにその後の統計はえられない。

コオペラテイヴが始めて芽生えたのは、十九世紀の中葉のことであるが、その急速の發達を遂ぐるに至つたのは、二十世紀に入つてからのことである。一九〇五年といふ年は、まことにロシアのコオペラテイヴ運動史に、一轉囘を與えたものだ。

この年まで、ロシアのコオペラテイヴ運動は、皇帝政府の限りなき壓迫を蒙つた。皇帝政府は、この年若き運動を、嫉視の眼をもつて見た。ロシアには傳統的な『行政處分』といふ武器がある。この刄物は、ロシアの農民の間から生長する力を、縱横に切りまくる。既存のコオペラテイヴの事業が、妨害を蒙るのみではない、新らしい組合の組織の出願は、いつでも却下さ

れる。然らずんば、故意に遲延される。發起人は虐刑された。シベリアに流刑されることさへ珍らしくない。

この政府の干渉政策は、一九〇五年を轉期として、ガラリとその態度を一變した。ロシアの第一革命は、見事にうち敗られたけれども、當路者の頭のなかに、水々しい印象を與えることには成功した。彼等は漸くにして革命の眞義を悟つたのだ。これまで一様の『反逆者』といふ色で塗られてゐた『進歩派』もその内幕を見れば、多種多様な混合色からなることを明らかにした。ほんとの革命分子は、社會革命黨の左翼と、正眞のプロレタリアばかりだ。だからこの革命は、人民自身の間で喰ひ止められ得る。いや、喰ひ止めなくてはならぬ。政府が、人民の洪水を、徒手容拳を以て防がうとするのは、非望に近い。人民運動は人民運動を以つて防がねばならぬ。この『革命の洪水に對する堤防』として選ばれたのが、すなはちコオペラテイヴなのだ。

コオペラテイヴの會員は、殆んど全部が農民だ。農民のうちでも、やゝ富有な自活農民だ。彼等の根本思想はデモクラテイツクで、ソシアリステイツクではない。況んや革命的ではない。進歩的だ。——少くとも當時の政府にはそう見えた。——そこで彼等は態度を急變して、これまでの抑壓の繩を解いたばかりではない。卻つてその設立の獎勵を始めたものだ。政府の一部局として、コオペラテイヴ獎勵の一課が設けられた。

かくして、ロシア農民生活の砂漠のなかに、社會的活動のオアシスが現はれた。國家の建設的・創造的分子は期せずしてコオペラテイヴに向つて輻輳した。建設事業に傾向をもつてゐるインテリゲンチアはこれに走つた。革命の敗北に失意したラデイカルも之れに向つた。地方青年の進歩派も、その旗幟の下に走せ參じたのは、もちろんのことだ。

これまで、散在的で、統一のなかつたコオペラテイヴは、こゝに一つの理想と目的とをもつた、統一運動と化した。これまでのやうに、單に農村の小商人や仲介業者の搾取から免れやうとする、自利的な組合ではない。社會組織の改造を目的とする、一つの大きな社會運動となつたのだ。

コオペラテイヴ運動と、ボルシエヴイキ運動とは、ともに社會改造の運動である。しかしそは運動として兩極端に立つ。從つてその理想、目的、手段、方法は、興味ある對照をなす。彼のプロレタリアを目標とするに對して、之は農民を對照とする。彼の武力革命を讚美するに對して、之は平和的進歩を提唱する。彼の改造が上より降り來るに對して、この改造は下より建て上げる。彼の政治的なるに對して、之は經濟的だ。彼の權

力的なるに對して、之は暴力的だ。あらゆる點において、ボルシエヴイキとコオペラテイヴとは對抗する。

コオペラテイヴが、ボルシエヴイキと並んで、現代ロシアの二大勢力たり、而してこゝに沈默なれども激烈なる對抗戰を演出する所以は、まことにコイペラテイヴ自身に内在するその特質にある。ボルシエヴイキの發達史を述べて、その特質を明らかにせるわれ等は、次にコオペラテイヴの内情を究明して、その特質を明らかにしなければならぬ。

生産者組合

一口にコオペラテイヴといふが、その組織は雜多である。これを在來の分類法によれば、およそ生産者組合、信用組合、消費者組合の三に分つことができる。

生産者組合といふのは、地方小農の生産品の直接販賣を掌る組合で、その多くは兼ねて、日用品を組合員に供給する役目を果たしてゐる。なかでも出色のものは、シベリア乳酪組合聯合會だ。

この聯合會の始めて設立されたのは、一九〇〇年で、本部をオムスクに有する。聯合會の動かしてゐる乳酪製造所二千餘、販賣店二千三百五十に上る。會員たる組合數四千五百、組合員合せて五十萬戸以上である。

支部はシベリア内部に四十、購買部をモスコウ、ハルビン、サマルカンド、ウラデイオストツクに、事務所をロンドン、コペンハーゲン、ボストン、ニウヨークに有する。資本金は、會員組合の資本金を除き、九百萬留に上つてゐる。

聯合會は、バタ、チーズ、卵類、穀類、肉類、菜類などの、シベリア物産を、ロシア及び海外に送り、その分配店を通じて、組合員に必要品を供給する。一九一八年のシベリアのバタ生産額の六割、八千萬留は、コオペラテイヴの生産にかゝる。戰爭開始以來、一九一七年九月一日までの間に、聯合會が軍に供給した食糧品の總額は、二億留に上つた。

シベリア乳酪組合聯合會の、目覺ましい發達は、次の二つの表によつて明らかであらう。

第一表

年度	資金運轉額（千留）	乳酪製造所	分配店
一九〇八年	二、三八〇	六五	一二
一九〇九年	二、九三四	一〇八	二〇
一九一〇年	四、三五五	一八一	三四
一九一一年	四、二五〇	二一八	五四
一九一二年	七、四八五	三二八	一三三

一九一三年	一四、〇六六	五六三	五〇二
一九一四年	二〇、二〇八	五六三	五〇二
一九一五年	三四、八五四	九〇二	六八一
一九一六年	七三、四九八	九二二	六九四
一九一七年	一六〇、三六七	一、四一〇	一、一六七
一九一八年	二一八、〇五六	一、九九四	一、九八二
一九一九年	—	二、〇八八	二、三六〇

第二表

年度	聯合會が乳酪製造所へ供給した額（一千留）	聯合會が乳酪製造所より蒐めたバタの量（プード）	聯合會が分配店へ賣つた貨物の額（一千留）
一九一三年	四七四	六三一、四六一	二、二八四
一九一四年	六六三	六七八、七九三	八、九九九
一九一五年	一、一一八	八一八、三九六	一〇、六七〇
一九一六年	一、三七一	六六四、八五六	一九、七三〇
一九一七年	二、〇四九	九五七、三一九	二五、〇三三
一九一八年	四、〇五六	一、七八二、九八三	一二一、二二二

なほ聯合會は、組合から豫金をとる、バタや貨物の相互保險もやつてゐる。乳酪製造所以外に、聯合會は、石鹼工場機械工場、製粉工場、製綱工場、印刷所などを所有してゐる。宛然たるシベリアの一大企業だ。

シベリア乳酪組合聯合會のほかに、目ぼしい生産者組合は、亞麻業者中央聯合會だ。この聯合會は、一九一五年の設立で、一九一八年の資本金は、二百三十五萬二千留、資金運轉額は、四億二千萬留（一九一七—一八の十一ケ月）である。

目的は、亞麻糸を、仲介業者の手を經ないで、直接に國内及び國外の製麻工場へ賣ることと、麻糸と麻種の品種改良とにある。

農民は地方組合に亞麻糸を持つて行くと、こゝで檢査をうけて、檢査證をうける。この際市價の七割五分乃至九割を農民に引渡す。この麻糸は、地方聯合會の倉庫に搬入されて、こゝで再び檢査をうけて、品質を決定する。この販賣は、すべて中央聯合會が掌る。

ロシア産の亞麻の大部は、この聯合會の手を通じて販賣輸出されるのである。次表の如し。

年度	取扱量 斤數	取扱量 全生産に對する比率	輸出量 斤數	輸出量 全輸出に對する比率
一九一五—一六年	一、七三三	〇、五—〇、六	一、〇三三	一、三
一九一六—一七年	五、六五五	四、八—七、〇	五、五五九	三六、七
一九一八—一九年	四、六六六	一五、九—二〇、八	八、三三三	六〇、〇

戰時と戰後の經濟的危機にあたつて、この聯合會は、特殊の能力を發揮し、亞麻業については、ロシア經濟の大動脈となつた。殊に革命後の貧弱なるロシア貿易は、主としてこの聯合會の手を通じて行はれたのである。

人民銀行の物資部

生産者組合の發達は、中央聯合會の組織より始まる。シベリアの乳酪業者組合と、ロシアの亞麻業者組合とが、異常の發達を遂げたのは、ひとへに中央聯合會の組織の力によるものである。こゝにロシアの生産者組合の中央聯合會を組織するについて、驚ろくべき貢獻をなしたものは、モスコウ・ナロドヌイ銀行の、物資部の努力である。

モスコウ・ナロドヌイ銀行は、ロシアのコオペラテイヴ全體の、金融の中心をなすものだ。これは信用組合を論ずるときに詳説する。たゞ、その物資部の活動は、生産者組合に關すること多きを以て、こゝにその努力の一半を紹介する。

物資部は、モスコウ・ナロドヌイ銀行の創立の翌年、一九一三年の設立にかゝる。銀行はもと、コオペラテイヴの金融機關として設立されたものである。がロシアのコオペラテイヴの中心たる地位を占むるに至つて、その組合員のために、器具や日用品を供給し、同時にその生産品を、最も有利な方法で、賣捌く方法を講ぜねばならぬ立場に立つた。この必要に迫られて設立されたのが物資部である。かくして物資部は、一方農業組合の購買の中心として、農業組合を代表して大規模の注文を市場にいだして、その購買品を各農業組合に賣り捌くと共に、販賣の代理店として、ロシアの農業組合の生産品を、全世界の市場に提供するの機關となつた。

物資部の、五年間に亘る異常なる進歩は、これを化して、偉大なる、事實上においては獨立の一機關となした。しかも全ロシアに亘る農業組合や、信用組合とは、密接なる關係を有する。こゝに物資部獨立の要求が起るのは自然の數である。

物資部獨立の要求は、各種生産者組合中央聯合會の變形といふ形であらはれた。元來物資部首腦者の根本方針は、農業組合の獨立中央聯合會設立といふ、一定の政策に指導され來つたもので、彼等は一歩一歩この地盤を堅めつゝあつたのである。

物資部改造の議が成立したのは、一九一八年六月の、モスコウ・ナロドヌイ銀行の、株主總會である。この決議によつて、物資部の購買方面は、新設の農業組合全露購買聯合會へ、その販賣方面は、各個獨立の農業組合中央聯合會へと讓り渡されたのである。

一九一八年六月の、モスコウ・ナロドヌイ銀行の株主總會において、その獨立を決議されたる、全露農業組合購買聯合會(ゼルスコサユウツ)は、同年十一月、正式の設立を議し、十二月創立總會が開かれた。

ゼルスコサユウツの目的は、『農產品の購買、處理、販賣に從事せる、すべてのコオペラテイヴ機關を統一して、以つて、地方の私經濟に必要なる、各種の器具と材料の共同購買の組織となり、且つ、その生產品の處理、運輸、倉庫、販賣をなすこと、並びに、農業組合の全部を統一して、以つて、各會員の物質的福利を增進し、その道義的發達を期する目的を有する』ものである。

その設立については、物資部の貸方並に貨物、約三千七百九十萬留は、そのまゝゼルスコンユウツに引繼いだ。第一年における購買額は、約四千五萬留と計上されてゐる。

農業組合の中央聯合會として、新らたに物資部から獨立した、生產組合中央聯合會は、大麻業者中央聯合會、馬鈴薯全露聯合會、果樹園藝中央聯合會、穀類聯合會、家禽生產品(卵類)販賣中央聯合會、クスタルスピト等である。これらの各種農業組合の中央聯合會は、各種農業者の販賣機關として、その生產物の、有利なる販賣を掌どる。乳酪業者聯合會、亞麻業者聯合會の機能と、大體において似たものである。

ゼルスコソヴイエト

これらの生產者組合は、それぞれ一個の企業形態として、獨立の賣買行爲を行ふ。彼等は個々の利益と目的とを有して、獨立の設計の下に、その業務を行ふものである。しかしこれをコオペラテイヴとして觀察すれば、ともに共通の利害關係を有するものだ。かるが故に、個々の中央聯合會の業務の牴觸、活動のくひちがい、紛爭や誤解の調停などのために、一つの統一機關を要求するのである。ゼルスコソヴイエト(農業聯合組合理事會)はこの要求に應じて、生れ來つたものである。

ゼルスコソヴイエトは、一九一八年十二月、モスコウに組織された。これは企業組織ではない。從つて賣買業務はしない。その使命は、農業組合の、指導的、協一的中心をなすにある。

ゼルスコソヴイエトの創立總會において、その目的は次の如く決定された。(ロンドン、『露西亞のコオペレーター』より)

(イ) 國內交易、海外貿易、運輸、工業原料の發展、國內の財政政策等に關する、すべての問題について、農業組合の連帶と統一とを促進すること。

(ロ) 農業組合の生活より生ずる、すべての問題を、調査解

決すること。

（ハ）政府及び公の機關に對して、農業組合の利益と必要を代表し保護すること。

（ニ）農業組合の事業に關する報道を、蒐集刊行し、各種の調査を實行し、定期不定の刊行物を發行すること。

（ホ）講演、講習、學校、展覽會等を組織すること。

（へ）農業組合の法律上の權利を擁護し、その會員に法律上の勸告と助力を與ふること。

（ト）農業組合機關を教育指導すること。

（チ）聯合會其他の機關を援助するために、熟練せる事務員、雇員等を供給すること。

ゼルスコソヴイエトは、ゼルスコサユウツの一部であるが、また同時に獨立團體だ。その理事の半數は、ゼルスコサユウツの選擧にかゝり、その半數は、會員たる各農業組合中央機關の任命にかゝる。ゼルスコソヴイエトは、理事のうちから執行機關を選擧する。

ソヴイエト中には、四部を設けてある。

（一）行政、法律部は、所屬機關の顧問としてその質問に答へ、官憲に對して、各機關を代表する

（二）組織部は、農業組合の組織を企畫し、所屬各組合の間の、誤解や紛爭を解決する。

（三）經濟部は、農民の土地耕作法の基準を引き上げること、其他の經濟政策の諸問題に關する手段を研究する。

（四）出版宣傳部は、月刊雜誌『農業組合の使命』其他の刊行物を出版する。

ゼルスコソヴイエートは、内部に對しては、各農業組合に對する統一機關なると共に、外部に對しては、現在ロシアの農民生活を擁護すべき、一種の戰鬪機關である。戰爭と革命と内亂とは、國家の經濟組織を、根柢から破壞した。もとよりこの國の經濟政策の第一問題たる、農業資源の開發問題は、いよ〳〵重大となつた。まことに農業の發展は、ロシアの改造問題の先頭に立つものだ。而してゼルスコソヴイエトは、これが解決の使命を有する。

もとより各種の農業組合は、農業及び農業者自體改良進歩を目標とする。しかるにその活動は、正常の賣買行程の存在を前提とする。この前提は革命によつて根柢から搖り動かされた。そはもはや農業の繁榮は、農業自體では解決できなくなつた。『一個の農業問題』ではなく、『國家問題』となつた。かくしてゼルスコソヴイエトは、この國家問題に對する一戰手として立つのである。

農民は、必要なる器具と機械とがなくては働けない。その生產物の賣買は、運輸の秩序を恢復するにあらざれば、成就されない。その他、國家の貿易、關稅、農業と工業との關係、國家の財政、これらに關する問題も、また農業の改造——從つて國家の改造の緊急問題である。ゼルスコソヴイエートは、農業組合を代表して、これらの國民經濟の根本問題に當面するのである。

これ等の諸問題は、ひとり農業組合死活の問題ではない。全國家の經濟生活の死活問題だ。たゞわが農業組合は、——わがゼルスコソヴイエトは、眞の民衆の代表者として、これらの難問題解決のために努力するのだ。もちろんボルシエヴイキは、これが解決の責任者だ。しかし政治的手段がよくこれを成就しうるや否やは疑問だ。疑問であるばかりでなく、コオペラテイヴは不可能だといふ。こゝにゼルスコソヴイエトは、國民經濟の改造の責任を、その双肩に擔ふのである。

消費者組合

生產者組合を一覽したから、次は消費者組合に進まう。

消費者組合も、生產者組合と同じく、その單位は、小さな農村のうちの、小さなコオペラテイヴだ。農村のうちに、消費者組合の要求がおこると、すぐに『寄合』がもよほされる。『寄合』ではすぐに『事務員』が選擧される。それから會費や株金目論書などが起草される。事務員の監督委員會も選擧される。かうして組織ができると、すぐに巡回裁判所に登記する。

消費者組合の、組合員數は無制限だ。會費は一年五留乃至三十留位で、株金は十留乃至百留位だ。一人十株以上を所有すべからずとするを原則とする。表決權は、株式數によらないで、一人一票といふことになつてゐる。

株式の拂込は、準備金其他の基金に宛てる。大ていは、一部拂込にして、未拂殘額は借入金としておく。消費者組合の組合員の責任は、持株の株金の額に限定される。それから、多く消費者組合は、組合員から預金をとる。預金と株金に對しては、銀行預金の利子率を超えざる利子を支拂ふ。消費者組合の利益は、一九一七年三月二十日の法律によつて、株式資本の六分を超ゆべからずと定められてゐる。

かくの如くにして消費者組合は、各村落に發生する。かく發生せる消費者組合の數は、一九一九年には四萬に上つた。その資金運轉額は、一九一八年において、すでに百億留に達したのである。以つてその盛んなるを見るべきだ。

しかし、かくの如くにして成立せる、個々の消費者組合は、

そのまゝの存在としては、盛んなりと雖ども、力强いとはいへない。これがほんとの有力なる社會的勢力となるのは、一つの組織に融合したときだ。その昔、帝政時代に、政府がコオペラテイヴに壓迫を加へた時代、その方法は、主として聯合會制度の否認であつた。いまその制限は徹廢された。消費者組合は、盛んに地方聯合會を組織しはじめたのである。

この地方聯合會を、一つの全國的組織にまで發展させて行くことは、消費者組合組織の最後の完成だ。その完成の議は屢々あつたが、その實行は困難であつた。而してこの困難なる實行の任にあたつたのは、モスコウ地方聯合會であつた。

『消費者組合モスコウ聯合會』の設立されたのは、一八九八年のことだ。一度これが成立するとその顯著なる發達は、漸次に實質上の『中央聯合會』たる地位を獲得して行つた。モスコウ聯合會が一九一四年に賣つた物資の額は、一九一四年、一千萬留。一九一五年、二千二百八十萬留、一九一七年四億留以上に上る。

かくして『消費者組合モスコウ聯合會』が、名實ともに『消費者組合全露中央聯合會』に變形されたのは、一九一七年である。一名これを『ツエントロサユウヅ』とよぶ。ツエントロサユウヅは、世界最大の消費者組合なると共に、世界唯一の消費組合の國家的組織だ。會員は、各個消費者組合二十、地方聯合會三百六十一、地方組合四萬六千、組合員數一千五百萬戶、一戶五人と見積もれば、七千五百萬人の人間を代表するわけだ。

ツエントロサユヅの規則によれば、その會員資格は、

（イ）一萬人以上の組合員を有する、消費者組合聯合會及び協議會。

（ロ）一萬人以上の組合員を有する、消費者組合。

（ハ）一萬人以上の消費者組合員を有する、混合コオペラテイヴ聯合會及び協議會に限られてゐる。

ツエントロサユウヅは、歐露に事務所五十、シベリアに二十、トルキスタンに七、海外に十八を有する。海外事務所は、モンゴリアを除き、倫敦、クリスチアニア、ヘルシングフオルス、ストツクホルム、神戶、上海、横濱、香港、ハルビン、コンスタンチノープル、巴里、マルセイユ、ボガラ、紐育である。

ツエントロサユウヅの事務は、代議員會議と理事會と、事務局とによつて行はれる。代議員會議は、各會員聯合會又は組合に對し、一萬人毎に一名、但し十名を超ゆるをえず。理事會は、代議員會議の互選により、二十名以上、年期四ケ年とす。その職權は、各聯合會に對する命令の準備及び承認、事務局員候補者の指名、事務局の企案の審査承認、其他一定の財政問題

である。事務局は、五千以上十八名以下よりなり、ツエントロサユウツの一切の時事問題を處理し、外部に對しては、すべての關係において之を代表する。

ツエントロサユウツの事業の發達を一覽すべき表は次掲の如し。

年度	會員數	所屬聯合會報	資本額（チルーブル）	資本運轉額（チルーブル）
一八九九年	—	—	〇、八	三一
一九〇四年	—	—	一二、	三四七
一九一一年	五四九	一	九一、	三、五九七
一九一二年	七七六	七	一六〇、	五、九二一
一九一三年	一、〇二六	九	三三五、	七、九八五
一九一四年	一、三六〇	一九	三一九、	一〇、三四三
一九一五年	一、七八七	四三	六八三、	一三、八五五
一九一六年	三、六七〇	一五五	六六四、	八六、六六一
一九一七年	四〇、〇〇〇	三五六	二、二〇二、	三三〇、五六〇
一九一八年	—	三〇九	三三、三七六、	二〇、〇〇〇
一九一九年	—	三六一	一六六、八四九、	—

次にツエントロサユウツの組織と、その事業とを略說する。

ツエントロサユウツ

經濟組織部

ツエントロサユウツの商業關係は、商業委員會が掌る。委員は聯合會中の、最も經驗に富める實際的商人で、議長は事務局の一員がこれにあたる。日々の商業事務を掌るのは、經濟組織部で、（一）ツエントサユウツの商工業上の活動に關する經濟問題を研究する、（二）その活動に關する問題について、材料を供給し、專門の勸告を與へる。（三）政府及び商業機關との取引について、ツエントロサユウツを代表する。（四）商業上、組織上の特別事業を實行する。（五）『商業部』といふ機關紙を發行する。（六）ツエントロサユウツの各部の事業を統一して、その經濟政策を完成する。

つまり、ツエントロサユウツの總務部である。

分配部

現在、ロシアの產物の殆んど全部は、ツエントロサユウツを通して分配されてゐる。これは所屬組合のみならず、非コオペラテイヴに對しても分配してゐるのだ。この分配事務を掌るのが分配部で、一九一八年の十一ケ月間において、國家の纖維官憲から、ツエントロサユウツに引渡して、分配せしめた纖維品だけで、二億六千萬留に上る。

紡績部

穀類部は、穀類、製粉、碾割などの分配を掌る。一九一八年には、タムボフ、サラトフ、サマラ、ウフア、シムビルスク、チストポル各地方に代理店を設け、饑饉と運輸破壊とに對して戰ひながら、その秋中に、二千五百輛の穀類を分配した。

砂糖饑饉のため、別に砂糖課を設けて、その分配を掌らしめ、なほ石油及び石油工業品を取扱ふため、石油課を設けた。

脂肪部

脂肪部は、穀類部から獨立して、脂肪類を買入れ、これを脂肪工業場に供給し、その製品（石鹸、蠟燭等）を分配してゐる。

魚肉日用品部

この部は、魚肉、罐詰、野菜其他の日用品の分配を掌る。一九一八年の資金運轉額は、一億一千三百萬留に上る。

木材石炭部

この部はもと魚肉日用品部の一課としてあつたが、當時その購買額二百萬留に上り、その發達の顯著なるに鑑み、新たに獨立した。主としてカマ・ヴエトルガ・ウンヤ河流域地方の森林地の開拓に從事してゐる。

雜貨部

雜貨第一部は、茶、煙草、マホルカ、燐寸、菓子などの日用品を取扱ふもので、一九一八年の資金運轉額は、一億留以上に上る。

第二部は、文房器、事務所用具、ランプ、陶器、寶藥、活動寫眞、建築材料などを取扱ふもので、一九一八年の取扱高は、約四千萬留に上つた。

食品部

モスコウ、ペテログラード、其他のコオペラテイヴの中心たる都市に對して、肉類、乳脂類、卵類等を供給する目的で、これらの都市のコオペラテイヴに對し、日々二千頭の牛と、一千頭の豚を供給した。これまで貿易業者の手中にあつた卵類の取引も、またこの一手に收むることを得た。一九一八年の資金運轉額は、一千萬留に達した。

金物部

これは一九一八年の末に設立されたもので、地方の小工業者の製品を買入れて、目下の金物不足を救はうとするものだ。

纖維部

纖維品の商賣は、國家の獨占となつてゐたが、政治的なボルシエヴイキの組織では、どうしてもうまく行かないので、一九一八年十月に至つて、國家官憲と、コオペラテイヴとの取引を許すに至り、纖維部は、一九一八年末までに、三億留の資金運

轉額を見、すでに一萬ペール以上の注文をうけて、一億留の分配を了した。

なほ一九一八年には、倉庫事務と、纖維品生産業務を開始し、すでに十四の工場を有して、五十萬ピースの粗布を織り上げた。なほ地方小工場の製品を合せて、纖維部は、一九一九年内には、自分の商標の下に、百萬ピース、三億留の商品を市場に出す計畫である。

靴革部

靴革部は、纖維部から獨立した、一部で、政府より靴革の受渡をうけて、その二割五分の分配を了した。

工業部

ツエントロサユウヅの所有工場は二十ある。その購買高は、約二千五百萬留、資金運轉額一億四千八萬留に上る。主なる工場は、モスコウの化學工場、菓子パン製造所、燐寸工場、石鹼工場、タムボフ州の煙草工場、リアザン州の製靴工場、クルスクの石鹼工場、ニジニノヴ・ゴロドの澱粉工場、クルコフの煉瓦工場、グルガンの屠殺場及び罐詰工場、カヤンガのチーズ工場、ドルジヤンスカヤの石炭、其他製粉工場四、漁業數ケ所、果實製造所數ケ所である。これらの工業の監理をしてゐるのが工業部で、他に特別工業委員會があつて、新企業の計畫、工業部事業の一般問題、人事問題などを取扱ふ。

運輸部

ロシア窮乏の最大原因の一つは、運輸機關の破滅だ。これを幾分たりとも救濟せんとするのが運輸部の仕事である。運輸部は、港灣設備、關税、荷積等に關する一切の問題を研究すると共に、ヴオル河及びその支流に、運送船を所有して、運輸事業を掌つてゐる。

特別代理店は、すでに、リビンスク、カザン、ツアリチン、アスカラカン、ペルム、サラトフの各地に設けてある。なほヤロスラウ、シムビルスク、ウラデイミル、リアザン、ムルマンスク其他に増設の豫定だ。船着場、倉庫などの設備は、各所に設計中で、すでにニジニノヴゴロドには、大きな倉庫が建造中である。

保險部

保險部は、所屬組合及び聯合會の財産を保險するのが目的で、なほ火災保險及び運輸保險もやつてゐる。この目的のために二百萬留の特別基金を設けてある。なほ保險部の努力によつて、全露コオペラテイヴ保險聯合會ができたので、本保險部の保險は、大ていこれに再保險することになつた。

勞働部

勞働部は（一）一般的勞働保護及び健康狀態に關する監視（二）社會保險及び醫藥の補助（三）トレード・ユニオンとのタリフ協定の起草實施（四）被雇者罰金規定（五）勞働問題に關する統計（六）ツエントロサユウヅ工場の使用人に對する教育施設等を掌る。なほツエントロサユウヅとその使用人との間に爭議が起つた場合には、勞働法の適用解釋について、ツエントロサユウヅを代表して、政府との交渉の任にあたることになつてゐる。

秘書局

秘書局には、教育、教育者養成、出版、統計の四部があつて、倶樂部、圖書館、遊園地、劇場其他教育遊樂の設備を設け、教育者を養成し、書籍、パンフレツト雜誌を刊行し、消費者組合の統計を蒐集してゐる。

ザクプズビイト

消費者組合の中央機關としては、シベリア・コオペラテイヴ聯合會の名を擧ぐることを忘れてはならぬ。

シベリア・コオペラテイヴ聯合會は、一名ザクプズビイトといふ。一九一六年の設立だ。これは最も複雜なる企業形態で、同時に製造業者であり、輸入業者であり、輸出業者であり、卸賣業者であり、小賣業者であり、委託販賣業者である。ザクプズビイトは、バタ製造器具、其の他シベリアに必要な種々な物品を買入れ、バタ、卵類、チーズ、蜂蜜、蠟、羊毛、人毛、革、豚毛、毛皮其他の原産品を賣る。製造業者としては、石鹸、化學品、細綱、フエルト、精製羊毛、罐詰、綿糸、製粉、煉瓦、印刷物等を製造する。

ザクプズビイトの本部は、ノヴオニコラエスクにある。支部はイルクツク、ブラゴエチエンスク、浦鹽、ハルビン、ニコラエフスク、（以上西比利亞）モスコウ、エカテリンブルグ、ペテログラード、ニジニノヴゴロド、（以上歐露）サマルカンド（トルキスタン）にある。海外支部は、倫敦、紐育、ストツクホルム、上海、神戸に設けてある。

ザクプズビイトは、三十四の聯合會よりなる。所屬消費者組合、一萬に上る。その重なる業務は、バタの蒐集と輸出で、シベリアの各地方のバタを取扱つてゐる。一九一八年三月の年會で、バタ工業改良の決議が通過し、ミルク工業について、專門家を養成することとなつた。

なほザクプズビイトは、シベリアの毛皮商賣に偉大な勢力を持つてゐる。北シベリアの土人は、主として狩獵と毛皮の販賣で生活してゐるのだが、これに喰ひ入つた寄生蟲は、仲介業者

で、寄生蟲は化して主人公となつてしまつた。仲介業者は、毛皮を買つて日用品を賣るのだが、土人の無知と無力とに乘じた彼等は、暴利以上を暴ぼる。その利益は三百乃至五百パーセントと稱せられた位だ。だから土人は、終日を狩獵に暮した上に、その毛皮と日用品とを交換して見ると、大低は借金となつた。土人が爭つてコオペラテイヴに集つて來たのはこの故である。

コオペラテイヴは、この仲介業者の仕事を受繼いだにすぎぬ。たゞ異なるのは、暴利を廢した丈けだ。コオペラテイヴは土人に、毛皮の價格の九割を前貸しする。一九一八年ザクプズビイトが分配した高は、トボルスク政廳の北部だけで、製粉六百噸、その他布類、茶、燐寸、バタ其他價格約千二百萬留に上つた。しかも價格は、普通の商人よりずつと安い。だからコオペラテイヴは、安い値段で品物を土人に賣るばかりでなく、土人に毛皮から多くの貯蓄を得せしめるに至つたのだ。この毛皮商の中心となつてゐるのがザクプズビイトだ。

一九一八年、ザクプズビイトの、購買販賣業務を表はす數字次の如し、

購買製造の部	
製造品購入高	一六三、六九〇 千留
魚類購入高	二〇、一三一
所有工場製造品及原料品購入高	一五、二四六
石鹸	一、三二六
化學品	一、〇四二
毛皮外套フエルト靴其他	三、八八一
製粉	七七〇
鹽	三、四二二
煉瓦	二六一
書籍、雜誌其他	一、〇四八
購買製造品合計	一九九、一六八
販賣の部	
政府に對するバタ受渡	一四、五〇三
政府のバタ委託販賣	一一、九九六
毛皮及び原品	七、六九一
販賣品合計	三四、一九一
購入販賣總計	二三三、三六〇

右の取扱商品の他に、ザクプズビイトは、年内に次の購買をなしてゐる。店舖九十二萬六千留、事務所五十一萬留、工場七十四萬八千留、住宅三十一萬三千留、動產百四十八萬七千留、

モスコウ、ナロドヌイ銀行第五回發行株式三千八百五株、九十五萬一千留。

一九一八年、一九一九年兩年の一月一日における資本金は次の如し。

資本	一九一八年（千留）	一九一九年（千留）
所有資本		
株式資本	八四四	一九、七〇四
積立資本	五五八	一、二九七
運轉資本	三六一	三九〇
工業資本	四〇一	一、三三四
原價償却	—	一三六
保險	—	二七
基金	—	三七
合計	二、一六七	二三、九二八
借入資本		
預金及借入金	一四	一九八
聯合會前納金	三四七	二五、五二七
銀行信用	七、七八七	四〇、五九四
其他機關工場信用	九二三	七一、八七〇
合計	九、〇七三	一三八、一九〇
總計	一一、四二〇	一六一、一一九

信用組合――人民銀行

信用組合については、その最高機關として立つてゐるものは、モスコウ、ナロドヌイ銀行である。いまではロシアのコオペラテイヴ組合の約半數は、モスコウ、ナロドヌイ銀行の金融をうけてゐる。一九一二年の設立だ。

ロシアに中央コオペラテイヴ銀行を設けたいといふ考へは、ずつと前からあつた。普通の私立銀行から金融をうける便宜のない人々のために、金融の道をつけることは、コオペラテイヴの使命の一つだ。もとより各農村に、信用組合や預金貸出組合は澤山できてゐた。しかし、個々獨立の組合が、その勢力の甚だ微弱なのはいふまでもない。金融の方面でロシアの農村を救濟する唯一の方法は、中央コオペラテイヴ銀行を設立することにある。

この企案が始めて實際案となつたのは、一九〇七年、八年の國立農業銀行設立の議で、これはプロシア式により、政府が官營の金融機關を設立して、コウペラテイヴ組合を援助したいといふのである。この案はほとんど成立しかけてゐたが、成立を見ずして葬られてしまつた。

この機運に乘じて、一九〇八年の、全露コオペラテイヴ大會はコオペラテイヴ自身の中央銀行設立案を通過した。大會は討議の末、モスコウ委員會案を原則として承認し、なほ細則の研究をこれに附託した。委員會は更に一九〇九年一月、コオペラテイヴ組合代表者大の會を開いて、細則を論議し、遂に定款規定を設立した。これが政府の認可を得たのは、一九一一年のことである。

モスコウ、ナロドヌイ銀行は、かくの如くにして生れた。その使命は、定款第一條に示す如く、『小さな信用機關や、各形態のコオペラテイヴ施設に對し、その業務を容易ならしむるため、金融の道をつける』ことにある。業務をはじめたのは、一九一二年五月九日、モスコウのミアスニツカヤ街の、小さな事務所である。

最初の資本金は百萬留で、一株二百五十留、四十株であつた。そして法律により、資本の半額は、六ケ月後に、國立銀行に拂込んで、預金とすることになつてゐた。しかし發起人側では、この五十萬留の金が、期日までに集まるかどうかさへ、疑を持つてゐた。そこで政府に期日延期の請願をなした位である。それに、コオペラテイヴだけでは、拂込が滿株にならぬことを恐れて、私人の會社工場にまで頼んでまわつた。しかし盇をあけて見たら、案外の景氣で、期日以内に規定の半額以上の拂入があり、十月一日までには全部拂込を了し、十一月以後も、續々として第二回拂込の應募があつた。

銀行株の持主に、私人が多少とも交つてゐるのはこのためだ。しかしその割合は、第一回株式募集のときの、一割五分にすぎぬ。あとは全部コオペラテイヴが持つてゐる。

第二回第三の增資が、引續いて行はれた。銀行の資本は四百萬留となつた。第三增資以來、私人に持株を賣ることは、全然禁止せられ、コオペラテイヴ組合に限つて、持株を割宛てることゝなつた。かくしてモスコウ、ナロドヌイ銀行は、純然たるコオペラテイヴの銀行と化し、從つてその人民（ナロドヌイ）銀行たるの名に恥ぢぬものとなつたのである。

その後の增資（第四、第五、第六）によつて、一九一八年十二月には、株式資本は一億留となつた。設立の際に比すれば、まさに百倍したのである。

モスコウ、ナロドヌイ銀行は、純然たるコオペラテイヴの銀行だ。まづその所有者について見るも、その九十九パーセント以上は、コオペラテイヴである。このことは一九一九年一月一日の株式の分布表について見てもよく分る。

信用組合聯合會（一七九）　三七、八二〇（株数）
信用組合及び貸出貯蓄組合（二、八〇三）　九、五九三

消費者組合聯合會（二二七）	三八、八二〇
消費者組合（四、三〇七）	一七、一五二
生產者組合聯合會（一三）	三、三四八
生產者組合（一、〇八三）	三、八八五
混合聯合會（二三五）	二三、〇五二
全露聯合會及地方聯合會（一七）	六八、四一五
私人或は工場	一、五五九
合計	二〇二、九五四

銀行の持主がコオペラティヴであるばかりでなく、その業務の華客もまたコオペラティヴに限定されてゐる。コオペラティヴ以外に對しては、決して貸出をしない。だからその利益も、また全然コオペラティヴの獨占するところだ。

ボルシエヴイキが天下をとつたとき、その第一政策として、銀行國有を斷行したことは、有名な事實だ。しかしモスコウ、ナロドヌイ銀行だけは、上述の如く名實ともに人民の銀行であつて、人民により、人民のために存在するものであるがために、いかなるボルシエヴイキも、これに一指を染めることができなかつた。現在では、ボルシエヴイキの國立銀行と、コオペラテイヴのナロドヌイ銀行だけが、唯二の銀行として存立してゐる。そして對抗してゐる。近時、ナロドヌイ銀行の預金が急激に增加したのは、私立銀行が、ボルシエヴイキのために、全部倒壞された結果である。

モスコウ、ナロドヌイ銀行の一九一八年十一月一日現在、貸借對照表次の如し。

貸方の部	（千留）
現金及び銀行	五四、八二五
有價證券	二三、六三三
不動產	一、二六五
商業手形割引	七七六、三四〇
『ロロ』取引先	三三、七二〇
『ノストロ』取引先	三三、九三七
支店勘定	二七三、八八二
業務經費	一〇、〇五一
雜種貸方	七五、四八六
貸方合計	一、二八三、一四二
借方の部	
資本金	一〇、五六〇
預金	六〇五、八二五
再割引及再抵當	一八四、三六九
『ロロ』取引先	九、七六八

『ノストロ』取引先	二一、一五九
利子受取	一六、〇七二
支拂滿期準備預金	五八、三六九
支店勘定	二七五、三一二
雜種借方	一〇一、六九五
借方合計	一、二八三、一四二

モスコウ、ナロドヌイ銀行は、コオペラテイヴの金融機關としてのみでなく、コオペラテイヴのために、購買販賣の中心機關たる役目を果たした。その『物資部』の活動については、すでに述べたから、こゝに略す。

シンクレドサユウヅ

政治上においても、シベリアの諸共和國は、ロシア共産國の支店格で、半ば獨立したやうな、半ば從屬したやうな、關係になつてゐる。經濟上、コオペラテイヴについて考へても、シベリアはシベリアで、半ば獨立した發達をもつてゐる。生産者組合の、シベリア乳酪聯合會、消費者組合のザクブズビイト等は、それぞれ獨自の組織をもつて、シベリアを根據として存在してゐる。信用組合においてもまた、シベリア信用聯合會は、侮るべからざる勢力だ。

シベリア信用聯合會は、一名をシンクレドサユウヅといふ。シンクレドサユウヅは、チエルビンスクより浦鹽に至るまで、シベリア全部の信用組合及び聯合會全部よりなる。各聯合會は、三十乃至百五十の信用組合よりなりシベリア全部にて、千三百五十の信用組合がある。而して各信用組合は三百乃至二千の組合員を有するを以つて、その組合員全數は百萬以上、即ち、シベリア農民の七十二パーセントに當るわけになる。

シンクレドサユウヅの組織は、シベリア乳酪聯合會や、ザクブズビイトと、全然異なつた團體だ。その基礎たる信用組合は、小都市又は大村落に設立された組合組織で、預金をとつて、これに一定の利子を支拂ひ、更に利子をつけて組合員に貸出すものだ。組合員は一定の金額を預金しなければならぬ。組合の負債に對しては、無限責任を有する。貸出は組合員に限り、しかも組合員の仕事を援助する場合に限定する。なほ穀類、皮革、毛皮、豚毛、羊毛、其他の原産品に對しても、金を貸し出す。この方面において、金の供給を集中し、原産品の販賣を有利にし、必要品の購買を便利にするために、信用組合は聯合運動を起し、この結果として出現したのがシンクレドサユウヅなのだ。

シンクレドサユウヅの業務は、從つて三つに分かれる。第一

は、信用組合員に對する貸金の分配だ。組合員の責任は、自分に開かれた信用額の倍額といふことになつてゐる。例へば五百留の信用限度の人は、一千留の責任、一千留の信用限度の人は、二千留といふ具合だ。その信用限度の總計は七億留に上る。

信用組合の活動は、はじめこの銀行事業に限定されてゐたが、その發達に從つて、漸次活動範圍を擴張して、組合員の原産品の販賣に向つた。而してこの勢を促進したものは、言ふまでもなく「戰爭」である。

戰爭の必要は、すべてこのコウペラテイヴに對して、食料品の供給を命じた。そして必要に迫られて工場を起し、原料品を製造品に化して行つた。現今においては、シンクレドサユウヅは、海外に、麻、羊毛、毛皮、原皮、種子等の輸出をやつてゐる。

さらにシンクレドサユウヅは、組合員に對して、その必要品供給の機關として役立つ。物資缺亡の今日現下最大の事業は、この方面に傾注されてゐる。目下は主として農具、繩網、機械修繕具等の輸入である。一九一八年には、モスコウ、ナロドヌイ銀行を通して、北米合衆國から、多大の機械を買ひ入れやうとしたこともある。シベリアの羊毛、麻糸などは、この交換物として輸出の準備をやつてゐた。しかし爲替關係の影響、運輸の破壞などのために實行さるゝに至らなかつた。

ボルシエヴイキとコオペラテイヴの對抗戰

以上は、はなはだ概略ながら、ボルシエヴイキとコオペラテイヴの、出生と、發達と、現狀とを、明らかにしえたことと思ふ。これよりいよ／＼結論に入らんと思ふ。

ボルシエヴイキは、天より降下せるものである。コオペラテイヴは、地より芽生えたものだ。彼はボルシエヴイキのやうに、理想に乘つて天翔ける快絕を有しない。たゞ現實に對する現實の叛逆が、叛逆の必要が、知らず識らずのうちに、こゝまで發達せしめたものである。

コオペラテイヴもまた、ボルシエヴイキと共に、資本主義に對する逆徒だ。たゞ彼は、幼者が直に老者に變形する能はざる如く、社會の組織は一朝にして變形するあたはざるを知れるが故に、彼れは革命の兒とならなかつた。ロシアの農民をボルシエヴイキたらしむるには、あまりに彼等の經濟生活は悲慘であつた。彼等の問題は、いかにして政治的權力を握るか、といふことよりも、いかにしてその日その日を送るかといふことにあつた。ヴイジョンは心の糧である。理想は美はしい。しか 女神

を追求すべく、彼等はあまりに空腹であつた。――コオペラテイヴとは、ロシア四億の空腹の所産である。

資本主義と皇帝政治と、個人主義と軍國政治とは、ロシアの農民に、空腹をみたすべき方法を供さなかつた。政治と制度との力によつて、生活を糊塗する能はず。さりとて糊塗せざれば、死よりほかない。死は社會進化の大動力だ。彼等は僅かに死より免れんがために、こゝに自ら救ふの方法を案じたのである。――コオペラテイヴは、ロシア農民の死の悲鳴だ。同時に死に打ち勝つ努力の叫喚である。

コオペラテイヴが、空腹の問題であり、生死の問題である以上、――政治の問題でなく、社會組織の問題でない限り、――口腹の慾と生活とが保障さるるまでの間は、その政治形態と社會組織とが、いかなる根本的の革命をうけやうとも、ロシアの農民はコオペラテイヴより離れ去ることは出來ない。

然らばボルシエヴイキ革命は、ロシアの農民に、滿腹と生活とを與えたか。然らず。與へられたのは、前よりも甚だしい空腹と、窮困とだ。ロシアの經濟生活は、ボルシエヴイキ革命の社會改造の實驗のために、その實驗に適するやうに、すべての社會組織的大建築を倒壞し去つた。銀行と運輸と、市場と商店と、すべては影をかくした。實驗室は生活場ではない。ロシアの農民は、實驗室においても生活しなければならぬ。彼等がますますコオペラテイヴの結束を固くしたのはこの故である。

ボルシエヴイキが『革命の兒』なることは、一點の疑もない。コオペラテイヴも、別な意味における『革命の兒』だ。革命が、農民の生活を奪ひ去つたとき、ロシアのコオペラテイヴは長足の進歩をとげた。上述のロシアのコオペラテイヴの發達史を讀了せられた讀者は、彼等の急激なる進化の大部分は、戰時中と革命中に行はれたといふ事實に氣付かれたであらう。

コオペラテイヴは資本主義者ではない。さりとて社會主義者でもない。資本主義と社會主義と、いづれを擇らぶかと訊ねられたら、必らずや卽答に窮するであらう。彼等は、たゞ、農民の生活をよりよく保障するものを、フオ・ベタアとして擇ぶにとゞまる。これロシアの社會革命のまつたゞなかに、農民の大部分がこれを雲煙過親した所以であり、共産主義の『高遠なる理想郷』が、まさに發足せんとしつゝある(?)にも拘らず、彼等がなほ勇氣をかき集めて、これに反抗する所以である。

この意味において、ボルシエヴイキとコオペラテイヴの對抗戰は、理想と空腹との戰である。權力と生活との爭鬪である。同時に智識階級と無知なる農民、政治と經濟との對抗戰である。

過去五十年のあひだ。資本主義に對して惡戰苦鬪し來りしコオペラテイヴは、いま再び、共産主義の理想と權力と理路と政治に對して、その空腹と生活と無知と經濟とを以つて、より不利なる戰鬪を開始せざるをえぬ破目に陷つたのである。

土地國有論

世にコオペライヴほど『實際的』なものはないといふのはこの理にもとづく。『この（コオペラテイヴの）運動に、その生活を費やしてゐる人々には、最も善意における「實際的」な人である。ある人が私に言ひ表はしてくれたやうに「彼等は每晩帳簿の締めくゝりをしないではゐられない理想家なのだ」』（ブユラルド）ボルシエヴイキはその對コオペラテイヴ政策――換言すれば農民政策――の第一步において、この第一の特性を見過つた。それはボルシエヴイキの『土地國有論』にあらはれる。

資本國有、銀行國有、鐵道國有、財產國有。これらの宣傳が、都市プロレタリアの甘心をかつて、彼等の恐ろしいばかりの喝采を博したと同じ意味で、『土地の國有！』といふ聲は、忽ちにして虐げられし農民の間に風靡し、人口の八割七分を占むる農民がすべて、自分の援助者になるものと信じてゐた。ところがこの目算はがらりとはづれた。それは例の通り、都市のプロレタリアからは支持を得た。しかし當の對手の農民は、贊成の代りに反對をした。何故であるか。

都市工業と、村落農業とは、その根本において、到底溶和すべからざる、根本の特異性がある。マルクスがあの椽大の筆をふるつて、『社會主義』乃至『共產主義』を鼓吹したのは、近世の都市工業の絕大なる發達に眩惑されて、これを根據としてすべての社會論をやつたのである。彼は農村問題には、傍系としてより觸れなかつた。彼の眼には『農業』は『工業』の寄生虫としてうつつた。「社會の金城鐵壁たる農民は、全滅されつゝある。」（資本論）と思つた。從つて彼の社會改造論は、すべて工業を中心として、農業は、改造工業の隸屬物たらしめ、農業を工業化することによつて、全經濟組織の變革を完成せんと試みたものにすぎない。その根本の誤謬は、『工業』と『農業』との、混同にある。而してボルシエヴイキの土地國有論なるものも、畢竟マルクスの亞流、――農民問題に對する無知、から起つた「盲者の勇」にすぎぬ。

『土地國有』とは、一切の土地を國有として、その「所有權、使用權、監理權を國家のものとし、これに工業流の大規模生產を行ひ、農民を工業勞働者化せんとするものだ。彼等は、資本主義の時代において、『工業』が專制君主なりしことに眩目され

て、隱れたる『農業』の勢力を失れ、社會主義の時代においても、また容易に『農民を全滅』して、工業化せしめうるものと思つた。しかし事實においては、少くともロシアの場合に於いては、農民はかく容易に『全滅』できなかつた。『彼等は、マルキスト——社會民主黨の綱領たる土地の國有を欲しなかつた。』（スパルゴ）却つてコオペラテイヴによる、農民のコムミユンを欲した。これは永く農民の生活に喰ひこんだ生活で、生活は一朝にして滅び去ることを得なかつたのである。

『土地の國有』は、ボルシエヴイキの主張であつて、ロシア農民の主張ではない。ロシアの農民は、却つて『土地の共有』を欲する。農民の根本心理はこゝにある。而してコオペラテイヴの最終目的はこゝにある。從つてボルシエヴイキの策戰は、第一歩において、まんまと失敗に歸したのである。その失敗の根本原因が、農民の歴史と生活とを理解せざりしに基くことは上述の如し。革命は政治を變更しうるも、生活と傳統とに拘束された經濟は、一擧にして變更しうるものではない。

次にあぐるレーニンの演説は、ボルシエヴイキの土地國有論の失敗に對する、失望の聲なるとともに、ボルシエヴイキの對農民政策——以つて對コオペラテイヴ政策の、轉期を劃するものである。

『今やわれ等は、反革命をうち敗るといふ問題よりも、もつと比較をこえて解決の困難な問題に當面しなければならぬ點にまで到達した。われ等は、上級ブルジョアの組成員から、主要なる生産品を取り上げるのではなくて、無數の小さな所有者からこれを奪取しなければならぬ。そこには、たつた一つの方法しかない、プロレタリアの獨裁政治、憐れみを知らぬ鐵腕の力、これが社會革命を完成するのだ。今起りつゝある新らしい困難に對するに、われらは新らしい援助者、貧困に蝕くはれた國民の數百萬の援助を乞はねばならぬ。』と。

かくの如くにして、新らしい農民政策、新らしいコオペラテイヴ政策、『憐れみを知らぬ鐵腕の力』が、縱横無盡にふりまわされて、農民とそのコオペラテイヴとを、破壊し去らんとするのである。

農民強壓政策

土地國有論の失敗によつて、ボルシエヴイキの政策は、第二期に入る。農民のコオペラテイヴ強壓政策がこれだ。彼等は無謀にも、權勢をもつて、實力を威壓し去らんとするのである。

權勢をもつて實力を威壓せんとする政策は、ボルシエヴイキの發明した政策ではない。それはロシア皇帝政治傳來の方策だ。

皇帝政治はこれを用ゐて、散々にがい經驗を嘗めた。强壓は、一時的に奏功する。しかし永久の力を持つことはできない。それにロシアの農民は、强壓の下に堪え忍ぶことには慣れて來た。彼等はさらでだに數百年の經驗をもつ。强壓に對して反抗することなしに、これを默してしのぶ。そして上に逼ひ上る代りに、横へ横へとのび擴がる。

强壓政策は、皇帝政治を失敗せしめし如く、ボルシエヴイキを失敗せしめた。壓迫さるれば壓迫されるほど、根强くなるのは、ロシア農民の特性である。ロシアのコオペラテイヴは、横勢の壓迫の下に、その地盤を堅めてしまつた。

强壓が實力に打ち勝つことのできないのは、古今の歴史の明示するところだ。しかるにボルシエヴイキは歴史を無視して叫ぶ。『奏効せざる强壓は、强壓でない。弱い心を除き去れ。人情を胸奥からとつてしまへ。そして、强壓を奏効せしめよ！』と、彼等は、壓力の强ければ强きほど、効力の少なき事をさとらずして、壓力の失敗は、その『弱心』に基くものだとなすのだ。

『だが、「獨裁政治」とは、偉大な言葉だ。偉大な言葉は、これが使用を、無効に歸せしめてはならぬ。獨裁政治は鐵の法則だ。搾取者を、賊匪と一緒に壓迫するに、革命の効果と、迅速と、無慈悲をもつてすることだ。しかも、われ等の法則はあまりに手ぬるい。鐵よりもむしろ、ジヤムに類似することが、しばしばある。』とレーニンは激語する。

ボルシエヴイキの慘虐は、世界の耳目を聳動せしめたところだ。しかも彼等は、これを目するに、『鐵よりもむしろジヤムに類似する』と稱する。ほんとの鐵とは、何を意味するのか。恐らくはロシア農民全部の餓死であらう。

ロシアの農民を餓死せしめることは、あるひは容易であるかも知れない。しかし農民の全部が滅び去つたときは、同時にボルシエヴイキの滅亡するときだ。農民の强味はこゝにある。いかにボルシエヴイキが威嚇しても、コオペラテイヴが屈服しない理由もこゝにある。農村は强壓政策の下に全く荒廢に期した。想像以上の饑餓に陷つた。かくして農村は刻一刻に、「死」へと導かれる。これと歩調を俱にして、ボルシエヴイキも、刻一刻と死路につかなくてはならぬ。

ボルシエヴイキは、さらに政策を一變しなくてはならぬ立場に立つた。

『農業狀態は絶望的である。革命の初頭にあたつて、地主の所有地から盜んで來た農具は、すべて破損して、誰一人これを修繕するものはない。それに農具がいくらあつたつて、種子は全

くないのだから、何の役にも立たぬだらう。種子はもつてゐても、播種する意思はなく、却つて內々これを賣却しやうと思つてゐる。なぜなら、昨秋の穀物は、ボルシエヴイキのために、小額で買收されてしまつたからだ。農民は自分のうちに入用なだけを耕作し許された分量だけを貯藏するのである。從來の私有地は、いろ〳〵な烏合の衆の委員會や、ソヴイエトの執事がこれを監理してゐる。殆んどすべての場合において、土地に殘された一切のものは影をひそめた。巨額の勘定が提示され、金錢の授與があるが、夥しい損失を覺悟の上でなくては、土地は何物も生產すまい。ボルシエヴイキが盜んで賣却された家畜が、今では富有な農民から、再び徵發されてゐる。』

　これはアメリカのある代表者が、フインランドからよこした報告の一節だ。農村は。かくの如くにして滅び行く。而して『滅び行く農村』の姿を見て、驚ろいたのは、そして怖れたのは、農民よりもむしろボルシエヴイキであつた。そしてボルシエヴイキは自らその政策を更らためた。

　ボルシエヴイキは、農民との『餓死戰』に、ついに自ら降伏し去つたのである。

『數千の法令を發布して、これで以つて農村の全生活が、變革されうるものと期待したものならば、吾人は完全な白痴であつたと、いはなければならぬ。しかし若し、法令に依つて、步むべき道を示すことを怠つたならば、吾人は「社會主義」に對する叛逆であつたであらう。これらの法令は、現實の實施においては、即刻且つ充分には、實行されなかつたであらうが、プロパガンダとしては、重大な役目を演じたのである』と、レーニンは言つてゐる。ボルシエヴイキ、あるひは『完全な白痴』ではなかつたかも知れぬ。しかし單に『道をさし示す』がためにあれだけの慘虐をあへてした彼等は『完全な虐王』と稱せられても、致し方あるまい。或はそれは『プロパガンダとしては、重大な役目を演じた』かも知れぬが、その爲めに、ロシア全農村の生活の破滅をもち來たすとは、あまりにプロパガンダの犧牲の大なるに、驚嘆するのほかないのである。

農民妥協政策

　ボルシエヴイキは、三度農民政策をかへた。かれ等は一轉して、農民との妥協を試みたのである。

農民はプロレタリアではない。社會主義者でも、共產者でもない。ボルシエヴイキから觀るならば、全然異端者である。從つてその農村全滅政策は、主義と理論の上からは、最も徹底せる政策だ。しかしこの政策は、第一に、強壓が實力を顚覆する

の魔術を有せざる限り、事實上實現不可能である。數千の法令が、農村の全生活を變革する能はざるは、有史以來の公理だ。ボルシエヴイキの横勢をもつてするも、『歴史の公理』は破壞することはできなかつた。

第二に、農村を滅ぼすことは、同時に自己を滅ぼすことであつた。農村の饑餓は同時に都市の餓死を意味する。この意味において、ボルシヴイキの純理的徹底は、自滅促進政策にほかならない。彼等は、自滅せざらんと欲するならば、新らたなる政策にうつるよりほか仕方ない立場に立つた。

彼等はこれを、新たなる『階級區別』の『創定』となづける。これまでの『最貧農民』と『富有農民』との、二種に分れてゐた農民階級を、新らたに三種に『區別』しなほして、これらに對し、『中流農民』なる新階級を『發見』したのださうである。事實においては、農民の大部分を占むる『中流農民』を、さんざ苦心の結果、漸く探しあてたのださうである。そして、これと妥協せんと試み始めた。ロシアのコオペラテイヴが、このいわゆる『中流農民』に屬するのは、斷るまでもない。

が、とにかくそれは偉大な『發見』であつた。この發見に基いて、ボルシエヴイキの農民政策は展開する。この轉機に立つて、レーニンは叫んだ。

『われ等は、勞働階級のうちに、新らしい勢力の源泉を求めなければならぬ。(といふのは)農村の中間階級を惹き入れなければならぬ。これらの中間階級は、すでに一年の經驗を有する。より經驗のつんだ人々と共働する所以なるを以つて、彼等の勢力を伸張することができる。然り、勞働階級の前衛は、破損してしまつた。中間階級がこれをよく修繕することは、できないことかも知れない。しかしこれによつて、われ等の失ふところは多くはないのだ。

『メンシエヴイキと社會革命黨とは、二つの階級に分れてしまつた。(そのうちには)われ等と共働してゐる、專門家や事務家の團體がある。彼等は反革命ではない。彼等が共働してゐる間は彼等が立憲議會を信仰しやうが、「神」を信仰しやうが、彼等の欲するまゝのことで、われ等の關するところではない。いま一つの階級、すなはち、ストライキ煽動の目的で、われ等の列に入つてきたにすぎない者は、これを粉碎しなければならぬ。』

(イズヴエスティア)

全露中央執行委員會の議長カリニンは、尻馬にのつて更にいふ。この方が、もつと正直だ。

『農民は、いつでもわれ等の同盟者であつた。しかるに、近時に至つて、農民の間に、疑惑の聲を聞く。われ等に反對する政黨

が、われ等と農民との間に、楔をうちこもうとしてゐるのだ。われ等は、中流農民の勞働階級なることを、信念しなければならぬ。彼等は工場を掌中に握つてゐるけれども、農民の個人の農場を、攻撃したこともないし、攻撃しやうともしない。共産者の舊綱領も新綱領も、農民の土地を集中化して、かれらをコムミユンに追放しやうなどといふことは、言つてゐないのだから、これは益々容易にできるわけだ。却つて反對に、農民經濟的企業のレヴエルを調整向上せしめ、技術上其他の方法で助けるやうに、あらゆる努力を惜しまないといふことは確然と言つてゐるのだ。私は私の新らしい地位に立つて、この政策に固執する。こゝにわれ等の從ふべき政策がある。………』(セウエルナヤ・コムニナ)

『手前味噌』といふことがある。また江戸にはこんな笑話がある。――ある女に焦がれてゐる男があつて、友達にその後どうだと聞かれた。男の曰く『半分はできてゐるのだが』『半分できてれば結構ぢやないかと言へば、それが私の方だけできてるので半分だ。――いくらボルシエヴイキの方で、中流農民は勞働階級だ『われ等の同盟者』だと言つても、中流農民の方でいやだと言つたらどんなものだらう。『半分だけできた』話に堕してしまいはしないか。

もつとも、片棒だけで駕籠をかついだ例もあつたさうたから、何とも言へないけれども、少くともこの場合においては、ボルシエヴイキだけの態度變更では、コオペラテイヴとの妥協は成立しなかつた。――こゝにボルシエヴイキの、第四の態度變更が必要となつた。

ボルシエヴイキの覺醒

しかしボルシエヴイキは失望しない。いくら苦境に陷つても、決して『失望』といふことを知らないのが、ボルシエヴイキの特色だ。彼等は犬のやうな樂觀主義者である。折角片棒をかつぎ上げたのに、肝腎の相手の片棒が、知らぬ顔をして煙草をふかしてゐれば、大ていの駕籠かきなら、怒つてしまふところだが、ボルシエヴイキは怒らない。彼は笑ひながら言ふ。『中流農民が、われ等の側に、直ちに歸服しやうなどとは、われ等は期待はしてゐない。しかし、若しわれ等の政策を正確に指導して行けば、一定の期間の後には、躊躇は終止して、農民はわれ等の側に移つて來るだらう』(レーニン)

ボルシエヴイキは、三回の失敗の經驗によつて、こゝに持久的の農民政策を採るに至つた。生活に根柢せる農民のコオペラテイヴは、決して性急なる法令による改革の、よく變更しうる

とところではない。この理を悟つたのは、流石にボルシェヴィである。ボルシェヴィキとコオペラティヴとの對抗戰は、こゝに持久戰に入ることとなつた。

ボルシェヴィキが、二度ならず三度までも、農民政策に苦い經驗をなめたのは、その農民生活と、農村經濟とに無知であつたためである。この點においては、マルキシストの弱點を、最も露骨にあらはしてゐる。都市工業についてかくまで敏感にして、かくまで研究のつんだ彼等は、村落農業については、著るしく鈍感であり無知であつた。かれ等は、農村が結局都市にリードさるべきことを、何等の檢討なしに論決して、農村問題を問題外においた。このマルキストの根本的理論上の弱點が、いしくもロシアの革命運動に大なる缺陷として現出したのだ。

この事實に眼覺めたのは、流石にレーニンであると、感服しなければならぬ。彼は曰ふ。『こゝにおいて、人々は、地方の事情について、實際の經驗と智識とを持たねばならぬ。しかもわれ等は、まだこれを持つてゐない。このことを自認することを、われ等は決して恥づるものではない。卻つて公然と認めなくてはならぬ。われ等は決してユートピストではない。だから純粹の共産者社會に生れて、その教育をうけた、純粹の共産者のみの手で、共産者社會が建設されるものだ。などとは嘗つて夢想したこともない。かくの如きは小供の物語だ。われ等は、資本主義の廢墟の上に、共産主義を樹立しなければならぬ。しかも資本主義に對する爭鬪によつて、鍛錬された階級のみが、これをなしうる。プロレタリアも誤ちのないものでなく、又資本主義社會の弱點をもつてゐないものでないといふことは、諸君もよく知つてゐる。プロレタリアは、社會主義のために爭鬪すると共に、同時に自己の缺點に對しても戰はねばならぬ。數十年の間都市において、懸命の爭鬪を續けてきたプロレタリアの最良にして最も進歩的な分子は、この爭鬪の行程のうちに、都市生活の文化をすべて模倣することはできる。そしてある程度においてそれを獲得した。ところが、諸君の知る如く、最も進歩した國と雖も、農村はまだ無知に沈淪してゐる。この事實は、われ等のコムレードの到るところ忘却してゐるところだ。そしてこのことは、農村から私達にやつて來るすべての言葉が、特殊の明瞭さを以つて描き出す事實だ。地方の智識階級や、地方の役人から來るものでなく、實際的の見地から、農村における事業を監視してゐる人々から來る言葉は、みなこの事實を闡明してゐる。これらの聲はすべて、農業部門についてはわれ等に特別の價値あるものだ。これ等の聲は、現時において、特別に價値あるものだ。私はこれを確信する。私はこの爲

大會のために、書物からでもなく、法令からでもなく、『生活』自體から、この態度をとらなければならぬ。中流農民に對するわれ等の關係を、もつと明瞭にするためには、この精神の下に働かねばならぬといふのは、この故である。』

善哉！　ボルシエヴイキがこの態度に立つとき、始めてコオペラテイヴとの對抗戰は、同一水面の上に立つことを得る。これまで、ボルシエヴイキの農民政策は、すべて的のないところに放たれた矢であつた。從つて、ボルシエヴイキが、やつきになればなるほど、コオペラテイヴは、冷然としてゐるより外なかつた。從來コオペラテイヴは、たゞ陰忍し、持久し、泰然し、自若し、たゞ自らのつとめを、忠實に實行して行くよりほかに、仕方はなかつた。しかるに今や、ボルシエヴイキは、正面からコオペラテイヴに襲ひかゝる。然らば、第四回の農民政策とは何を意味するか。

コオペラテイヴの『發見』

農民の生活と經濟との、皮相を去りてその眞相に直入するに及んで、ボルシエヴイキの『發見』したことは、偉大なるコオペラテイヴの勢力である。かれ等は言ふ。――

『聯合國のおもなる目的は、社會主義ロシアを壓服するに、兵力によらずして、その商人とシンヂケートとによる、平和的征服を以つてせんとする。

『このため、國際資本の基本的目標は、ロシアを農業國として、西歐資本の單なる殖民地として止めんとするにある。

『かゝる事態において、われ等の限定されたる輸出基金を顧みるとき、外國よりの輸入は、殆んど限定的に、生産用の機械と、必要なる機械部分とに制限せねばならぬ。われ等に提供されたる、集團消費の目的を、追求すべきやうな狀態にあるのではない。かゝる贅澤が許されるのは、たゞ例外の場合にとゞまる。何よりもまづわれ等は、外國から汽關車と、その必要部分と、汽船とを得なくてはならぬ。

『われ等の輸出基金は原料品だ。われ等の工場に要する殘りの品だ。それから外國資本が許す範圍の借金だ。』(『經濟生活雜誌』)

然り、現在のロシアの經濟を恢復するのは、外國貿易より外ないであらう。しかしボルシエヴイキ自身にこの能力があるか。彼等は輸出基金として原料品をもつてゐるか、否。工場に用ゐて餘る位の殘餘品があるか、否。ボルシエヴイキはこれをもたぬ。これをもてるは、コオペラデイヴばかりだ。然らば、外國の資本は、ボルシエヴイキに金を貸すであらうか。否。外國

から借款のできる能力のあるのは、コオペラテイヴばかりだ。

こゝにおいてボルシエヴイキは、やむを得ずコオペラテイヴに頼らざるをえないのである。――こゝに彼等はコオペラテイヴに着目しだした。

『白衛軍に對する、戰線における猛烈なる爭鬪と、燃料の缺乏と、運輸の破壞とは、わが黨の最良にして最精なる力を傾注せしめた。コオペラテイヴの問題に對し、適當なる注意を拂つて、コオペラテイヴ機關のなかにおける、われ等の地位を力强める力も時間もなかつた。加ふるに、經濟的破滅の影響によつて、われ等のコオペラテイヴ機關は、顯るしく力を失つた。ためにわれ等の注意を惹かなかつたのだ、消費者組合は分配すべきものをもたず、生產者組合は何も生產せず、原料品を買ひ集める組合は、何も買ふべき品を見出すを得なかつたのである。

『こゝに變革の希望がある。われ等は、生產力を增加しやうとしてゐる。穀類其他の生產物を用意する事業は、うまく進行してゐる。封鎖の撤廢は、外國貿易の復活を可能ならしめた。

『この外國貿易を、どの範圍まで、またいかなる方法で組織すべきか、われ等はまだわからぬ。しかしどの道、外國から、機械、器具、其他のわれ等の必要品を受けとるためには、われ等は、亞麻其他の原料品を、送らねばならぬ。その用意は增大しなければならぬ。

『この用意と分配との增加事業のためには、われ等は手近にあるすべての努力と、方法と、機關とを利用しなければならぬ。コオペラテイヴもその一でなくてはならぬ。今や消費者組合に改造されたる、消費者コオペラテイヴをして、生產物の分配のみならず、生產及び輸出の兩方面において、人民を滿足せしむるに必要なる、一切の用意を增加するの仕事をなさせなくてはならぬ。この目的のためには、一切の用意事業は、單一計畫にもとづき、ソヴイエト政府の單一目標に從つて、實行されなくてはならぬ。コオペラテイヴは、社會主義制の最も重要な器具とならなくてはならぬ。』(モスコウ、プラウダ)

こゝにおいて、ボルシエヴイキの、コオペラテイヴ乘つ取り策が發生するのである。ボルシエヴイキが、一たびその經濟政策に目覺めたるときは、すなはちコオペラテイヴに降服せざるをえざるときである。しかし强頑なる彼等は『降服』を欲せない。實質においてはとに角、その形式と理論とにおいては、コオペラテイヴを『降服』せしめなくてはならぬ。こゝにおいて、かれ等は、コオペラテイヴの『化合』なる原則を『發明』するのである。

コオペラテイヴ化合政策

コオペラテイヴ化合政策について、まづ彼等の言ふところを聞けば、かうだ。

『資本主義的統治の下においては、一つの企業の各員は、獨立に働らくので一つの一般的計畫によるものでない。社會主義的企業の仕事は、一般的計畫に從つて實行されなければならぬ。從つて、この國の產業的企業は、すべて一つの機關の監理の下にあることが必要だ。われ等が產業の、最も重要なる部門は、國民經濟最高理事會の監理の下にある。しかるに農業と關聯せる小企業は、今日までのところ、各種の聯合會に化合せられおるにすぎぬ。例へば亞麻聯合會、馬鈴薯聯合會の類だ。現在において、これらの諸聯合會を、一つの組織に化合することは、社會主義的政治の利害關係である。われ等は、これらの小さな分離した諸組織に、全國家の福利の繫る今後の貨物の交換の實行を、任せることはできない。貨物の交換は、國家がこれを實行しなければならぬ。國家內に、一つの暴利もなくなるといふことと生產者と消費者との間に、何等の叛離もないといふことが、各々の勞働者と農民との利害の關するところである。正常なる貨物交換の組織がなくてはならぬ。法令に從つて、すべての生產と消費との組織は、一つのコオペラテイヴの聯合會に、即ち、一つの中央聯合會に化合せられなくてはならぬ。農業コオペラテイヴを含まざる、消費者コオペラテイヴ組合は、非常に重大なる組織となるであらう。從つて、わが黨がこれ等の組織の支持をうることは、すこぶる重大である。これはその管理員として共產者を任命する方法による。』（プラウダ社說）

このプラウダの社說は、『產業の社會化と、生產手段の社會有』とを旗旆としたものでその主張はまことに堂々たるものである。すべての生產、分配、消費を、一つの社會的（もしくは國家的）計畫の下に行ふといふことは、共產主義の年來の主張であつて、そこに何んの不思議もない。たゞ疑ふらくは、そのコオペラテイヴの監理員に、共產者を任命しなくてはならぬといふ一點にある。

もとよりコオペラテイヴは、資本主義の個人的生產、分配、消費、に叛逆して起つたものである。それが着々として、地方聯合會より中央聯合會へと、化合運動を起しつゝあることは、上來の記述の立證するところだ。いまやコオペラテイヴは、『はなればなれの組織』ではなくて、一つの統一的な運動と化してゐる。尤も、すべてのコオペラテイヴを連絡指導する中央機關はない。しかしその故を以て、コオペラテイヴを、はなればな

れな存在と看做すことは、おそろしい謬見だ。その各の聯合會に内在する、理想と目標と目的とは、事實において、すべてのコオペラテイヴを連結し、一大運動と化してゐるのだ。形式上その上に一つの中央機關を作る如きは、まことに易々たる事業だ。放任しておいても、コオペラテイヴは、おそらくは自働的にこれをなすであらう。なんで『共産者を監理員として加入せしめる』必要あらんや。

――これは理論上の話だ。理論を以て論斷するは、いまだ皮相の觀にすぎない。事實においては、ボルシエヴイキにとつては、理論は『借り物』で、本體は、コオペラテイヴの『乘つ取り政策』にあるのだ。言葉をかへて言ふならば、彼等は漸くにして、コオペラテイヴが、彼等の最大の勁敵なるの事實に目覺めた。彼等が自惚れを去つて冷靜に考へるとき、ロシアの天下はボルシエヴイキとコオペラテイヴとに、二分されてゐるといふ事實にぶつつかる。二つは暗默の對抗戰に從つてゐるのだ。一は政治的に優勢だが、經濟的には殆んど無勢だ。もしこのままに推移するならば、ついにコオペラテイヴのために、實際の獨裁王たる地位を奪はるゝかも知れぬ。危い哉、こゝにボルシエヴイキのコオペラテイヴ『乘取り策』は所以し、こゝにコオペラテイヴ『化合論』は發生するのである。

されば、レーニンは『すべてのコオペラテイヴの勢力は、消費と生産のための、中央ソヴイエート機關に聯結して、新らしい經濟生活を形成し、全ロシアを含む一つの共同經濟同盟となさなくてはならぬ。』と言ふのだ。見よ、彼等は着々として、コオペラテイヴを侵蝕して行く、彼等は權威を以て、外部より威壓する代りに、權威を以つて内部より食ひ入らんとするのである。

コオペラテイヴの國家監理

一九一八年九月二十六日付、國民經濟最高理事會の法令により、一九一七年三月二十日までに組織されたる、コオペラテイヴ組合と組合聯合會は『國民經濟最高理事會コオペラテイヴ部』に登錄すべきこと、登錄を怠るものは、爾來之れをコオペラテイヴと認めず、且つ法人としての權利を失ふべき旨規定せられた。この登錄制度は、ボルシエヴイキのコオペラテイヴ乘つ取り政策の第一步だ。

この登錄制度が、すべてのコオペラテイヴを、自己の手中に收めんとする、ボルシエヴイキの決心の一端をあらはすものなることは、一九一九年三月九日の、北部國民經濟理事會コオペラテイヴ部、特別會議の議事がこれを證明する。この特別會議

には、ナロドヌイ銀行其他の、コオペラテイヴ機關の代表者も、これに參加してゐたが、その報告によるに、『ナロドヌイ銀行と、國民經濟理事會コオペラテイヴ部との關係が論議された。コオペラテイヴ部の部長スメルケンが、報告をしたが、その要點は、コオペラテイヴ部は、北部地方のすべての經濟生活を規正する機關の一部であるから、すべての機關と最も緊切なる關係において、コオペラテイヴを指導し、コオペラテイヴ組合の、一般的活動について、有權的役目をとらなくてはならぬ。』彼は續いて曰く。『コオペラテイヴ組合開始の許可を發するの權も、またコオペラテイヴ部の監理するところでなくてはならぬ。この部はまた、コオペラテイヴ機關を檢査し、これに對して訓令を發するの權利を有さなくてはならぬ。』更に進んで、『右の二つの機關は、代議人として、互いに代表者を交換しなければならぬ。』といふのである。この報告の原則は採用された。こゝに注意すべきは、このコオペラテイヴ部なるものが、純粹のボルシエヴイキの政治機關であることだ。

一九一九年十一月十二日付、北部地方國民經濟理事會の、法例第百二十九號は、次の如く命令した。

(一) すべての形態のコオペラテイヴ、並にこれ等コオペラテイヴの聯合會にして、ペテログラード、及びペテログラード政廳の支配下にあるものは、その活動に關する報告を、北部地方國民經濟理事會コオペラテイヴ部に對して、五通の副書と共に、差出さなくてはならぬ。

(二) 右屆書は、二週間內に提出しなくてはならぬ。

(三) 上記の期限內に、屆書を提出せざるコオペラテイヴ機關の經營者は、裁判所に回付せられる。

書式は、名稱、所在地、性質(消費者組合、生產者組合、信用組合)賣店數、所有企業、組合員數、町人、勞働者、農民の別、包容地域、株式資本、一九一八年內の每月の賣上高、一九一七年及一九一八年における、會費其他の收入財源、一九一七年及び一九一八年前半期の生產高、所屬組合、がこれである。

人民委員會理事會、(內閣)は、更らに次のやうな法令を發布した。

『コオペラテイヴ組合及びその聯合會にして、法律又はソヴイエット機關との契約により、生產分配に關する國家契約を履行するものは、國家監理人民委員會の機關の支配に服すべきこと、ソヴイエト機關に準ず。其他の活動に關しては、私立企業と同樣なる監理に服するものとす。』

これらの法令と決議によつて、コオペラテイヴは、漸次に國家のすなはちボルシエヴイキの監督支配の下に立つことになつ

た。しかしながら、これを以つてコオペラテイヴが、全然ボルシエヴイキの自由になるものと夢想したならば、大へんな間違いだ。コオペラテイヴは、その『自治』に特色を有する。その『衆民』に勢力の根元を有する。從つて、外部よりの監督支配は、單に皮相の支配にすぎぬ。そは決して內部の實質を蝕すことはできない。形式は國家の支配下にあつても、實質はコオペラテイヴの自治に存する。

ボルシエヴイキは、さすがにかゝる外的支配を以つて、自得するの愚ではなかつた。さらに方面をかへて、內的蝕入をも企てた。コオペラテイヴの內部に、共產者をどしどし加入せしめる。コオペラテイヴそのものを共產者化する。――これがほんとのコオペラテイヴ乘つ取り策だ。それは、コオペラテイヴの役員選擧戰にあらはれ、諸中央機關の役員任命にあらはれた。

かくの如くにして、コオペラテイヴとボルシエヴイキとの對抗戰は、漸次に『外部』より『內部』へ、『形式』より『實質』へ、『權力』より『理想』へと進展して行く。

コオペラテイヴ乘つ取り策

コオペラテイヴの『乘つ取り策』――その內部に食ひ入る政策は、ボルシエヴイキの發見した最後の農民政策だ。

『コオペラテイヴ組合及びその聯合會の、臨時局と監理ソヴイエトとは、一九一九年三月二十日の法令の基礎により、常設機關に代位さるゝに至つた。こゝにおいてか初めて、勞働者の大衆が、消費者組合の生活に參加するに至つた。豫備的性質を帶ぶる仕事は、古い、半ブルジョア的のコオペラテイヴを、新らしいコオペラテイヴに改造することにあるやうだ。これがソヴイエト露西亞の社會主義的構成の連鎖の一つとなる。

『わが黨の機關は、このコオペラテイヴの根本的改造に參加することを怠つてはならぬ。われ等は出來る限りを盡して、われ等の感化力を力强めなくてはならぬ。上記の選擧會において、古いコオペラテイヴ主義者は、事態を描くに最も暗い色彩を以てするに違ひない。彼等の意見に從へば、一九一九年三月二十日の法令は、コオペラテイヴを暗殺するもので、食料供給のために、何等の利益をもち來さないといふのだ。この見地は排擊倒壞しなければならぬ。從つて、われ等の機關は、その責任ある代表者を、絕對にすべてのコオペラテイヴ會議に送らねばならぬ。彼等は、目下行はれつゝあるコオペラテイヴの組織に關するわれ等の正確なる共產主義的見解を披瀝せねばならぬ。

『何んと言つても、現在の消費者組合は、社會の社會主義的組織の方へ、大なる一步を進めたものだ。これによつてわれ等

は、全人民の供給に關する、協力組織的制度へと移りつゝある。これと同時に、新らしい分配の體樣が、すべての勞働者を集めるといふ主義の下に建設されつゝある。人民のすべての必要、すべての需要は、統合せる消費者組合によつてのみ滿たされる。かくてこの方面に要つてゐる渾沌と不秩序を脫するを得る。この純粹に社會主義的なる道程へ、歩を進めうるもの、ソヴイエトを除いて、世界に何があらうか。

「常設局及び監理ソヴイエトを選擧するについては、われ等の代表者は、これ等の機關のうちに、堅固なるソヴイエト——同じことだが、——共産者の多數を入れなくてはならぬ。もし勞働者と農民とが、コオペラテイヴの內部に起りつゝある變革の意味を、明確に理解するを得たならば、彼等はコオペラテイヴの支配者には、わが黨に屬するもののみを選擧するであらう。ソヴイエト政府が、最も困難なりし事態の下における、二年の經驗を顧みれば、このことに疑の餘地はない。

『わが機關が、コオペラテイヴ運動に、能動的な立場をとりさへすれば、有利なる結果は得られるにきまつてゐる。長時ならずして、一九一九年三月二十日の法令は實現實行されるであらう。そして分配の堅固にして統一せる體樣は建設されるであらう。消費者組合とその地方聯合會を改造したならば、すべての消費者組合を統一する、ツエントロサユウゴをも、新らしい原則に從つて改造し始めることができる。

「退步的コオペラテイヴの前に、廣い前途が開らかれた。コオペラテイヴの體樣を、漸次に完成して行けば、われ等は同時に、人民の全經濟生活の組織を、急速に社會主義的原則へと移すことができる。』（モスコウ、プラウダ）

私は、モスコウ、プラウダの記事を、繁をいとはず記載した。これによつて、ボルシエヴイキの策戰は、大分明瞭になつたことと思ふ。彼等は、高壓を去つて、平地の爭鬪に移つた。そして性急なる革命を排して、持久戰に入つたのである。——かれ等の着目するところはコオペラテイヴ役員の選擧戰にある。この選擧戰に勝利を得さへすれば、勁敵コオペラテイヴは、自己の意の儘なりと信じたのである。——モスコウ、プラウダは更に言ふ。

『現在いたるところに、コオペラテイヴ組合の事務局の選擧が行はれてゐる。これ等の組合をして、それに課せられた重要にして困難なる仕事を、正當に實行せしめむと欲するならば、この選擧には、最も愼重な注意を拂はなくてはならぬ。そしてこれら事務局にて出來る限り多數のわが黨員を選擧し、以てコオペラテイヴとソヴイエト政府との將來のすべての軋轢を破壞

し、コオペラテイヴを、ソヴイエト政府の一機關たらしめなければならぬ。

『これがわが黨のすべての地方機關の遭逢せる事業だ。中央委員會はすでに、回章を以つてこの事業を指摘した。さあ、これ以上時間を空費することなく、われ等はこの重大なる仕事を始めなくてはならぬ。』

かくの如くにして、コオペラテイヴ機關の選擧場には、いたるところに『赤旗』がひらめいた。その活動は目覺ましかつた。而してその結果は………

ソヴイエト政府の失敗

モスコウ、プラウダ紙の直言する如く、ボルシエヴイキが、コオペラテイヴの選擧戰に熱中せるは、要するに『コオペラテイヴを、ソヴイエト政府の一機關たらしむる』にある。然らば果たしてコオペラテイヴは、意の如くに『ソヴイエト政府の機關』と化したか、われ等は、即斷すべく充分の材料をもたないことを遺憾とする。

たゞこゝに、ロシアのコオペラテイヴ運動の首腦者の一人で、ソヴイエト露西亞から、ほうぼうの體でイギリスまで逃げて來た マラホフ氏の記事がある。私は『ロシアのコオペレタ』から、その記事の一部を譯載して、ボルシエヴイキとコオペラテイヴとの、對抗戰の結果を、判斷するの一資料とする。

『かくの如くコオペラテイヴは、ソヴイエトロシア內に行はれつゝある、强暴力については、干與することをしない。產業と、價値や財產の集積との破壞については、高見の見物をしてゐた。その根本の目的は、經濟的不秩序と戰つて、餓えとその結果に對し、人民の自己防衛を組織し、その組合員の經濟的利益と生產的資源とを、保護するにある。

『ボルシエヴイズムが、人民の大衆の利益を侵害する限り、コオペラテイヴはこれと戰つた。そしてその戰には成功したと言はねばならぬ。最初ボルシエヴイキは、コオペラテイヴを『ブルジョアの偏見』と宣言したので、コオペラテイヴとボルシエヴイズムとの間には、戰爭狀態が起つた。しかも勝利者として出現したのは、コオペラテイヴであつた。破壞されたコオペラテイヴ機關は、ふたゝび復活した。投獄されたコオペレタは解放された。その間われ等の友僚にして、その生命をもつて刑罰を支拂つたものもあつたけれども。

『コオペラテイヴの代りに、政府が樹立しやうとした「コムミユン」は大衆の容るゝところとならなかつた。その試驗には否定的の結果が現らはれた。中產階級の利益を代表するコオペラテ

イヴとの戰において、ボルシエヴイキは、完全な敗北を蒙つた。これに反し、コオペラテイヴの主義は、人民のうちに充分に行き亙つた。

『ソヴイエト政府が、コオペラテイヴに向つて兵器を振ひ、暴力の下に敷いたときでも、彼等の行動はこの運動の實質に影響を及ぼすを得なかつた。このことはモスコウ、ナロドヌイ銀行とツエントロサユウツの國有化について、最も顯著にあらはれてゐる。

『第一の場合についていへば、モスコウ、ナロドヌイ銀行は、いまだコオペラテイヴ機關として殘つてゐる。株式は價値ないものかも知れないが、銀行の帳簿には、各コオペラテイヴ機關から受けた金額が記入してあるから、右の金額は正確にその機關の支拂つた金額に該當するのだ。銀行の支配人は、從前の通りコオペラテイヴが選擧する。割引委員會は從前の通り、コオペラテイヴの代表者よりなる。

『ツエントロサユウツについても同樣だ。人民執行官ができて、監理を實行してゐるのは事實だ。しかしコオペラテイヴは、決してその支配權を侵されてゐない。ツエントロサユウツの支配はコオペラテイヴに責任を有する。能動權は、事業の經濟的政務的方面と共に、コオペラテイヴの手にとゞまつてゐる。法令の成功したのは、分配店に新らしい名「コムミユン」といふ張札をした位のものだ。

『その他の全露中央機關、並に地方聯合會と各コオペラテイヴ組合とは、國有も管理も免れた。コオペラテイヴの基礎は、健全で破壞されてはゐない。なぜなら地方聯合會は破壞されてゐないからだ。ソヴイエトの法令は、一片の紙屑となつた。國有化の試みは、いまゝでのところ、コオペラテイヴの能動權にも、自治權にも、主義理想にも、一指を染めることはできない。』

彼はなほ進んで、コオペラテイヴがボルシエヴイキに「占領」されなかつたばかりでなく、却つて着々として、その主義理想に基づく、分配、生産、販賣の方面の發達や、教育事業の貢献をなしたことを述べた後、言つてゐる。

『コオペラテイヴの中央機關は、國家の經濟生活の現狀に顧み、現在では純粹の經濟的產業的目的にのみ耽るを得ないで、國家の改造と、その經濟生活の改築とに關する一般問題の研究と實行とに、ます／＼注意を轉じつゝある。コオペラテイヴは、ロシアの農民と勞働者とが、直ちに兵器をすてゝ、內亂を終止することを希望する。そして、その代りに鋤耕と建設事業との、新らしい原則を闡明すべきである。目下この運動は　そ

の内部に潜勢力を蓄へつゝある。道義的の意味においては、そは成育し、成人し、力強くなつた。しかし肉體的の意味においては、廢滅の一般的運命を分つて、骨ばかりになつた。けれども、破壞に代るに建設事業が來ることあらば、その骨は肉を得て、再び健實な發達を始めるであらう。』

この記事の筆者は、純粹のコオペレタで、しかもボルシエヴイキを親の仇のやうに思つてゐる人だから、その敍述も結論も、全部そのまゝに受け容れることはできない。しかし、彼れ之れ綜合して考ふるに、――ボルシエヴイキとコオペラテイヴの對抗戰は、まだいづれの勝利ともきまりがつかない。それは『煙の立たぬ戰闘』に、汗を流してゐる。――といふことが出來やうと思ふ。

全國の消費者團結せよ！

惟ふに、「政治」をもつて「經濟」を變革せんとするボルシエヴイキの政策は、マルクスの唯物史觀に對する叛逆者だ。或は彼等が政治革命を、かくまで容易に成功し得たる實例をあげて、社會革命の時機すでに到來せるを主張するであらう。然り「政治」によつて「經濟」が變革を受けうべきは、たゞ「經濟」が動きつゝある場合に限る。都市工業については、まことに「經濟」が動きつゝあつた。しかし農村經濟においては、事理必ずしも然るを得ず。これボルシエヴイキが、コオペラテイヴとの對抗戰に、しば／＼手を燒いた所以である。

マルクス、エンゲルスの社會革命原理は、農民經濟を無視して立つ。これ彼等の學說の致命的缺陷にして、同時にボルシエヴイズム實行上の、根柢的障害だ。農民經濟に根本的の特色ある所以に徹底することなくしては、マルキシズムは、社會の部分的革命論に墮せざるを得ぬ。從つてボルシエヴイズムもまた、都市革命以上にその範圍を擴大するの權利をもたぬのである。

この意味において、ボルシエヴイキとコオペラテイヴとの對抗戰は、都市工業經濟と、村落農業經濟との、對抗戰であるといふことができる。かくの如く、その對抗戰の意義を、内的化することなくしては、その眞相に徹することは不可能だ。實際運動としても、その對抗戰が、外的より漸次内的に遷りつゝあることは、すでに述べたところである。理論上においても、その眞相は右の點に存する。

資本主義經濟は、その政治と經濟と法律とを、すべて都市中心主義に書き替へた。のみならずその學說をもすべて都市化してしまつた。かくの如くにして農村問題は、久しく顧みられ

す、塵に埋もれて不遇をかこつ身となつた。しかもこの不當なる農民の取り扱ひは、ロシアの革命において、始めて第一の反抗の叫びを擧げたのである。それは正當の反抗だ。壓迫さるゝものは内に力を蓄する。從つてその爆發力は、皮相よりは力強く響く。

農民問題はひとり社會主義的社會の問題にとゞまらない。同時に資本主義的社會の問題である。もし眞に憂國、憂社會の士があるならば、都市經濟と農村經濟との根本的特色に、思ひをひそむべきであらう。然らずんば革命ロシアの悲慘は、これを十倍二十倍して、他のいはゆる「文明國」に復讐し來たるであらう。

近時革命ロシアの慘狀を顧みて、そのコオペラテイヴ運動に着目するものが、漸くその數を增して來た。多くは、ロシア復活の礎石は、コオペラテイヴにあるとの意見を持する。『ロシアの經過しつゝあるやうな、社會的紛亂のうちにおいては、いかなる團體も、いかなる組織も、その影響を免れることは出來ない。コオペラテイヴもまたたしかに、革命の旋風のために、悲しむべき攪亂を蒙つた。彼等は經濟問題に固執して、政治問題を無視するといふ、安全なる政策を拋棄するの、誘惑に陷つてしまつた。(かくして)彼等はボルシエヴイキ政治に對し、避くべからざる爭鬪に入つた。しかしこれが永久に覆へされるべく、その組織はあまりに廣く普遍し、その利益はあまりに完全に證明されてゐる。そこにコオペラテイヴ運動がある。そしてロシアのデモクラテイツク制度を發達せしめんと欲する勢力に對しては、力強い同盟者として進展するであらう。』(ブユラアド)

日本においても、消費者組合運動は、漸くにして目覺めて來た。豫言者ならぬ予輩は、その運命の如何を判斷する特權をもたぬ。しかしながら、少くともそのロシアの實例においては、最も堅實なる團體として、資本主義の暴力に對抗し、さらに共產主義の暴力に對抗して、人民大衆の利益のために戰つて來た。否現在と雖ども戰ひつゝある。希望はすべてコオペラテイヴにかゝる。この健實なる發達を除外して、社會革命を論ずるは、ボルシエヴイキの覆轍である。「革命」(眞實の)を志すものは、コオペラテイヴに來れ。「革命」(僞の)を打破せんと欲するものもまたコオペラテイヴに來れ!

全國の消費者よ團結せよ!

世界の平和を促進するに必要なる經濟的手段

法學博士　堀江歸一

國際平和の望み

國際聯盟の規約に依つて、國際間の平和が維持されると云ふようなことは、聯盟成立の當初から、聯盟に屬する如何なる國の國民と雖も、一片の常識を備へる以上は、念頭に上さなかつたであらう。兎に角國際間の平和は理想として希望す可きものであり、此理想を實現することを標榜する國際聯盟も亦指斥す可きものでないと云ふ考から、恰も耶蘇教國民が眞實の信者であると否とに拘はらず、基督降誕祭や復活祭の如き祭式に騷ぎ廻ると同じ態度を以つて、之を迎へたに過ぎなかつた次第であらう。苟も國際平和の實現を期する以上は、人道の發揚に重きを置かなければならぬことは、論を俟たない。國際聯盟が此事を承認し、國際間に於ける勞働條件改善に關する諸原則を規定したことは、當然であると考へられる。斯くて華盛頓に第一回國際勞働會議が開かれて以來、近頃に至るまで、數次の會合を重ねたけれども、關係諸國の勞働條件に幾何の改善を告げたかと云へば、殆ど擧證す可きものはなく、寧ろ或る國に於ては、戰後の經濟的恢復に必要であると云ふ理由に藉口して、勞働條件の退步を來した例さへあるのである。啻に勞働會議ばかりではない。軍備縮小を目的として開かれた華盛頓會議にした所で、獨逸に課する賠償金の輕減を主題とした英佛伊の首相會議や、其他の會議にした所で、露西亞の政治的形式を承認して、諸國との間に通商を開始し、斯くて物資の缺乏、物資配給の不備に依つて、慘憺たる苦境に陷つて居る露國幾億の民生を救濟する運動にした所で、將た又國際間に於ける債權債務の關係を調節し、債務の重きに惱む國に財政上の小康を保たしめようとする

計畫にした所で、遂に成効の緒に就いたものは、一として之を見るを得ない、却つて佛國をして武力を以つて、獨逸に壓迫を加へる單獨行動に出でしめる程の次第であり、財政上の關係、已むを得ざる事情を除いては、陸軍の縮小も、華聖頓會議の決議以上に於ける海軍の縮小も共に、行はれる見込がないとすれば、一時世人に依つて望を屬された國際平和の如きは、如何としても之を、求めるを得ないのである。

國際上の大國主義

從來世間では、戰爭と平和とを以つて、相對する事柄とし、戰爭さへ終熄すれば、其れで平和が維持されるものとするようであるが、是れは大なる誤解であつて、國際間に平和を樹立するには、總て社會に於ける秩序を確保し、苟も人民をして其生を樂ましめる工風がなければならぬ。此點に於ける用意に缺けて居つたならば、假令ひ國際間に戰爭は熄止したとしても、國內に於て同胞相食み、隣保相爭うの慘狀を呈せざるを得ないのである。以前一國が鎖國の狀態に居つたり、又一郡一邑が他に對して、孤立して居つたりした場合に、其地方に於ける衣食資料の增加する割合を超越して、人口が增加すると、忽にして有の如き慘狀を生活上に生ずるものと考へられた。隨つて之を免かれるには、退いて人口の減退を謀るか、進んで他國を侵略するか、二途の一に出づるの外なかつた。戰國時代に於ては、何れの國も後者を以つて、立國の方針としたし、封建時代に爲つて、諸國が大なる政權の下に壓迫されて、私に領土の擴張を行うことを許されないように爲ると、山間の僻地を領土內に持つ地方に於ては、人工的方法に依つて、人口の增加を抑制するの已むを得ざるに至つたのである。

此關係が何時までも國民の腦裡に存して居つた結果として、經濟上に永く大國主義なるものが主張されたのである。即ち一國にして大なる領土を擁しなければ、經濟上の繁榮は期せられない、其抱擁する人口の割合に、大なる面積を持たなければ、國民生活の豐滿を謀るを得ないと云ふ考が大國主義の根柢であつて、本來本土の廣大なる國であれば、之を維持し、擴張することに勉める一方に、本土が純然たる嶋國であつて、隣接地の存しない場合には、海外に殖民地を設け、本國殖民地間の關係を密接にして、以つて本來の大陸國と異ならざる實を擧げようとしたのである。然しながら一國の國土が狹隘であるとか、狹隘なる國土に於て、多くの國民が棲息して居るとか云ふことを以つて、國民の生活難の由つて生する所以としたならば、是れは大なる誤解に基く議論である。一國が農業の如き、

牧畜業の如き、林業の如き土地と密接の關係を持ち、土地の有する天然力を抽出して、富とする產業に重きを置き、國民の多數をして是等の事業に依賴して、衣食の資を求めしめて居る時代に於ては、國土の廣大なる國であれば、其廣大であるだけ、富の產出される方便に豐なる道理であつて、面積の大なる國土こそ、强國たり富國たる要素を備へて居つたと同時に、多數の國民を國內に給養するを得たと稱されるを得たのである。斯くて一國自ら政治上に於ても、經濟上に於ても、霸業を立てようとするには、必ず面積の廣濶なることを必要とし、之を廣濶ならしめるに就ては、武力に訴へて、他國と抗爭することを辭さなかつた。一國にして既に此方針を以つて、國策を律しつゝある場合に、他の一國獨り物外に超然たる態度に出でたならば、後者は國を擧げて、前者の蹂躪に任す外なきに至るのである。玆に於てか或る一國に端を發した軍國主義や、帝國主義は必ず他の諸國を驅つて、同一の渦中に投ぜしめざれば已まない次第である。斯くて諸國が軍國主義や、帝國主義を以つて相對峙し、阿弗利加、南亞米利加、支那の如き茫々たる原野に於て、互に利權を爭うて居る間には、各國の利害に左したる衝突を惹起さないが、諸國の利用に任さるゝ利權には自ら限りがあり、或る一國が限りある領土なり、其領土と他國との交通を制する港灣河川なりを占領するに至れば、他の諸國は之に對して平なるを得ない。此不平を緩和する爲めに案出された政策は所謂門戶の開放機會の均等であつて、一國と他國との新開地に於ける通商企業其他の關係には、何等の差別殊遇なからしめ、同等の地步に居つて、競爭を自由にし、勝つ者は勝ち、負ける者は負け、負けたからと云つて、已むを得ざることゝして、之を諦める外なきものとしたのである。

門戶開放機會均等の價値

門戶開放機會均等を主義とする外公政策は米國に依つて、主張され、日英兩國之に和して、專ら支那を始め極東の方面に適用され斯くて幾年の間、獨露其他の支那に試みようとする領土分割の野心を阻止する利益の著しきものあるを得た。卽ち門戶の開放、機會の均等は目標とする或る領土を列國の自由競爭の下に置くものであつて、此點から云へば、斯る主義に對しては、一言の抗議を挾む餘地を見出さゞる位、公平に見へる。其一時列國の對支政策を律する基調と爲つたのも、亦怪むに足らないようなものゝ、其自由競爭の裏面には大なる不公平の潜むことを知らなければならぬ。卽ち英國の如き、東洋は勿論極東方面に力を伸してから、年の久しきものあり、確乎たる根據地

を擁し、之を基礎として、他に勢力を張ることの容易なるものもあれば、合衆國の如き、資本に富み殊に支那關係の事業に向つては、其公益事業であると、營利事業であるとの別を問はず、巨額の投資を試みて、惜まないものもある。然らば自由競爭と云ふことは、競爭國の總てを同等の地位に置くものではなく、單に既存の勢力を有する國をして其之を有しない國に比較して、優秀の地位に立たしめ、而して斯る既存の關係は其儘にして、單に將來の平等を期圖するものであつたならば、既存の勢力を有せざる國が競爭場裡に於て、壓倒されることは論を俟たない次第であつて、時に武力に訴へて、此既存の關係を打破することが却つて自國に利益を與へる所以と爲るかも知れない。獨逸が先年來頻に英國殖民政策殊に殖民地の統一に妨害を加へる態度に出でたことの如き、自國は殖民政策に立遲れの姿であつて、容易に力を對外的に發展させることが困難であり、其發展を求めるには、世界に於て最も廣濶なる殖民地を抱擁する英國の覇業を挫折させ、又は之を打破することを以つて、最も捷徑であると考へた結果であると認められる。隨つて獨逸が歐洲戰爭の導火線に點火するが如き處置を敢てしたのも、英國の對外的勢力を打破し、英國をして幾多の長年月に亙つて、印度に濠洲に支那に領有せしめた利益を獲取するこ を目的として、乾坤一擲の快擧に出たものであると想像される。

日本に對する世界門戸の閉鎖

果して然らば或る國が幾ら門戸開放とか、機會均等とか云ふような主義を領土殊に新開の領土又は他諸國と經濟上の競爭を試みる場所に適用したとした所で、其爲めに關係諸國全體の滿足を博し得るものでなく、門戸開放、機會均等の裏面に於て必ず或る國の獨占的專私や、市場壟斷の伴うことの免かれない以上は、一國の獨占や壟斷に依つて、損害を蒙る諸國の怨恨が凝つて、國際間の平和を攪亂する所以となること、論を俟たないのである。之を日本の國際的地位に顧みて、吾人は如何なる觀察を下し得るであらうか。國際間に於て國民の生活標準に高低の差を生じ、或る國に於ては、多數國民が優良なる狀態の下に生活して居るに反し、他の國に於ける多數國民の生活が遙に貧弱なる程度に置かれて居るとすれば、其原因の一部分は天然資料の分賦される狀況の利不利に繋がること多しとしなければならぬ。固より精神的方面から考へて、一方の國民が勤勉であるに對して、他方の國民の懶惰であると云ふことも、一の原因として、擧げられるかも知れないが、其勤勉であり、又懶惰であるが如き、必ずしも、人の天性に固着して、離る可からざる性癖

であると解するよりも、寧ろ自家の能力を富源の豐富なる所に用ひて、能率の大に擧げられる爲めに、一方の國民は勤勉に對する刺戟を受けるが、他方の國民は其能力を應用す可き富源に乏しく、隨つて勤勞の効程が少しも發揮されないとすれは、斯る場合には、勢彼等を驅つて、懶惰放縱の民たらしめねば、已まない。然らば勤勉であるのも、懶惰であるのも、一生を安樂飽滿の狀態で送るのも、困苦窮乏を忍ぶのも、一に四圍の境遇の然らしめる所に依り而して其境遇の良否は天惠の厚薄に基くもの大である以上に、天惠の乏しい所から天惠の豐かなる所に向つて、人口が移住し、世界の各地方に於ける人口の分布は其地方の有する天然資料なり、又其開發されて、人の利用し得る富源なりに比例し、天惠の大なることに依つて、人の勤勞を刺戟し、勤勞に對する刺戟は次第に人の有形的狀況を改善し、終局に於ては、世界に生を享けた人々をして同等の生活程度に就かしめる傾きを生じなければならぬ道理である。此點から考へれば、新開國にして天惠の豐富なるものは、國の總てを開放し、天惠の分布に就て、他の諸國と均衡を得るに至るまで、總ての外國人を收容し、彼等をして縱に其技能を天然資料の開發に、將た又其利用に資せしめ可き筈であるのに、新開國の他に對して臨む所は決して斯の如き自由寛容を主とするものでない。一國に存する富源は成る可く其國に生を享けた少數の人の間に、之を獨占し、以つて其れ等の人々だけの幸福を求める共に充てようとする、而して一方に多數の人を收容して、其能力を利用し、多々益々天然資源の開發を盛ならしめることが如何に關係諸國全體の利益であるかを知らないのである。斯くて濠洲は所謂「白濠洲」の出現を理想とし、濠洲全體の領土二百九十七萬四千五百八十一平方哩に對する人口は五百四十三萬六千七百九十四人であつて、一平方哩に對する人口の分布は僅々一人八三であるに拘らず、固く國を鎖して、他國民殊に有色人種の入國を制限して已まない。北米合衆國は一平方哩の領土に對する人口分布は三十一人九の割合であつて濠洲に比較すれば、聊か濃密でありとするも、其現に開發された富源や、又今日地中に埋藏されて、將來の開發を待つ富源に對照して、考へたならば、其稀薄なることは論を俟たない。然るに合衆國の移住民法は次第に其規定を嚴峻にして、外國人殊に有色人種の入國を拒否する方針を取つて、數十年來渝る所を見ないのである。現に千九百二十一年五月成立した移民法に於て「或る一年度内に合衆國に入國を許可せらるゝ外國移住民の數は其國民として外國に出生し、現在合衆國に居住する者の三分に限らる可し」と制限した一事に徴しても、如何に合衆國が其天惠に屬する天然資料を

多數の國民に分配することに、卑吝であるかを知るに足るであらう。

通商自由の精神

新開國が天然資源の獨占を希望して、他國民殊に生活條件の劣等である他國民の入國を制限するのは、現に其國に住居する國民だけに利益を頒ち、他をして之に與らしめまいと云ふ排他心の甚だしきに出づるものであつて、通商自由の精神に背反することは、論を俟たない。十七世紀から、十八世紀の末に至るまで、歐洲に於て極端なる「マーカンチリズム」の思想が國際經濟上の關係を律するや、一國は他國を虐げ、又殖民地を役して、以つて自國の利益に副はしめることを期し、通商上に制限を加へ、束縛を施して已まなかつた。斯くて生じたる所は國際經濟上に於ける暴虐であり、壓制であつて、國と國との間に於て、又一國と其殖民地との間に於て、本來密接なる可き關係を疎隔することの少なからざるに見たのである。左ればこそ「マーカンチリズム」に代つて起つた通商自由の主義に於ては、一國と他國との經濟的關係を律する場合に、內外國民に對する同等の待遇、一の外國民と他の外國民とに對する同等の待遇を以つて、根本の原則とした。斯くて、或る國が外國の貨物に輸入稅を課するにしても、其稅率をして他國の同種貨物に課するものに對して、何等の差別を設けることなからしめ、船舶の出入、國民の移出入に就ても、亦差別を置かず、而して通商自由の理想を實現せしめることを期したのである。隨つて今日如何なる國の間に、通商條約が締結されるにしても、其締約國が國際間に於て、對等國である以上は、必ず通商自由の原則が認められて居る。日英、日米の通商條約盡く然るを見る次第であるのに、合衆國には通商條約以外に、移住民法あり、又各州に行はれる個別的法制あつて、常に日本人の入國、住居並に營業を制限する一方に、日英條約は英國の管轄に屬する殖民地に及ばない結果、濠洲、加奈陀、南阿弗利加をして終始一貫日本人を排斥する偏頗なる制度を設けしめて、已まない。即ち日本國民は自家の能力を適用すれば、依つて以つて多大の富を生產し、其生活を飽滿ならしめ可き天然富源を自已の到達し得る或る場所に控へながら、其場所が單に外國の領土であるの故を以つて、之に近づくことが出來ず、他國民の利用するに任せて、拱手しなければならず、而して之に對しては、通商條約に認められた通商自由の規定の如き、畫ける餅と同樣であつて、何等の用を爲さないとしたならば、日本國民たるもの、不平不滿の沸騰するに至ることは論を俟たないのである。

日本自ら人種差別に甘んずるか

合衆國、濠洲、南阿の如き天然富源に豐かである新開國に於て、日本に向つて、鎖國の態度に出る原因の一ツは人種的差別の僻見であり、他の一ツは勞働條件の劣等であり、生活程度の低い日本人の移住して、自國勞働者の生活や、職業に壓迫を加へる掛念に存する。往年ベルサイユ講和會議が世界平和の確立を謀ると云ふ高い見地に於て、催ほされた際に、日本が人種差別の撤廢を列國に要求したのは、頗る時機の宜しきに適つたものと見られよう。然らば其後國際聯盟の會議や、其他の國際會議が開催される場合に、日本政府の代表者は常に人種差別の撤廢を主張し、之を貫徹することに就て、不斷の努力を試みたかと云へば、さうではなく、唯一度の主張で、其れが列國に排斥されると、日本自ら往年の言論は之を高閣に束ねて、知らざるものゝ如くであり、更に內國に於ける勞働條件を改善し、之を優良なるものとして、漸次に國民の生活程度を高くし、一方に勞働條件の劣等なる國民の入國を求めると云ふ非難を避け、他の一方に日本國民の海外移住を圓滑ならしめる道を講じたかと云へば、政府の方針は全然反對の方嚮に向つて居るのである。即ち第一回勞働會議に於て、我政府代表者は我國を特殊國の班に置き、列國に對して、殆ど憐れみを乞ふが如き態度を以つて、他の諸國の實行せんとした勞働條件に對して、幾多の猶豫や、除外例を要請し、其決議として成立したものゝ一部分を國內法とする爲めに、第四十六議會に工場法改正案を提出した程の次第であつて、假令ひ此改正が實行されたとしても、少年工婦人勞働者に對する保護は勿論、壯年勞働者の勞働時間に對する制限も亦甚だしく不備なるものであつて、直に諸外國と比肩するまでに、我國勞働者の勞働條件を上進させ、以つて合衆國其他をして移住民入國に就て、從來我國に加へつゝある制限を緩和せしめるに足らないのである。

斯の如く論ずると、我國民をして世界に散在する天與の富源に近づくを得せしめないことに就ては、其富源を壟斷し、獨占せんとする二三の國に偏私的思想の盛んであることを以つて、重なる原因とするが、同時に我國自身にも亦負ふ可き責任の存することを知らなければならぬ。唯後者は日本人の如き、深く之を考へず、單に前者のみが強く其眼底に映ずるのであつて、此事が日本と他外國殊に新開地方を擁する國との間に於ける交誼を妨げたことの如何に大であるか、之を測り知るを得ないのである。而して其孰れの原因に基くを問はず、天然資源を少數者に壟斷獨占されて、如何ともするを得ない、我國民として

は、第一退いて國内に存する富源だけに、民生を繫き、人口も減退させれば、生活程度を低下させて、顧みないか、第二其れとも邁進して積極的に他國をして其富源を開放せしめるか、二者の孰れかを取つて、正しき道としなければならぬ。我國に於て産兒制限とか、小家族制度とか云ふような退嬰を事とする議論の行はれる一方に、從來合衆國に向つて、武力を用ひようとする强硬論の行はれて已まない所以であり、又支那に對して寬大を事とする主張の存すると共に、一方に支那に向つて、領土上の野心を逞うし、此一事に望を繫ひで、軍國主義に左袒したり、軍備縮小を不可なりとする論者の跡を絕たない所以であると解される。

通商の自由と關稅の障壁

通商自由の主義が發展して、今日の國際通商上の關係を律することは、前論の如くであり、而して偏私獨占を事とした「マーカンチリズム」に代つて、國際上の關係に一道の光明を放ち諸國をして自由の道程に就かしめるに至つたことは、明白の事實である。通商の自由は必ずしも自由貿易と同一の意義を有するものではなく、固より關稅の撤廢を誘導するものでもない。唯自由貿易の下に於て、通商自由の主義の最も徹底するに至ることは、論ずるまでもなからう。英國は如何なる形に於て、所謂自由貿易を實行したかと云へば、決して關稅の撤廢でもなければ、輸入稅の絕對的輕減でもない。或る種類の物資に對しては、相當に重い輸入稅を賦課する、然し之を賦課する場合には、二ツの要件に服する。其第一は國内に同種類の生産品の存在しない輸入品を課稅目的物とするのであつて、斯の如くして其輸入稅が保護的關稅と爲ることを避け、充分に國庫收入關稅たらしめることを期する。更に第二の要件は國内に同種の生産品のある外國輸入品に課稅する場合には、外國輸入品に賦課される輸入稅と同率同額の物産稅を外國輸入品と同種類の内國産物に賦課するのであつて、斯の如くして輸入稅に保護關稅たる働きを除き、純然たる國庫收入を目的とする關稅たらしめるを得るのである。英國流の自由貿易なるものは、斯る形態に於て行はれたのであつて、國際間に於ける物資の流動し、出入することを絕對に自由にすると云ふ點から考へたならば、遺憾とする所のあるを免かれないが、尙ほ國際貿易上に於て、偏私不公正の行はれることを除却したことは論を俟たないのである。即ち假令ひ其自由貿易なるものが物資移動の絕對的自由でないとしても、貿易上に於ける偏私や、不公正が除却されゝば、其結果として國際間の貿易は必ず發展し、一國をして他國に依賴す

る所を大ならしめると共に、他國をして一國に對して、同樣の關係に居らしめる。即ち一國は他國から年々若干量の食料品なり、原料品なりを輸入しない以上は、國民生活を維持することも出來なければ、國民産業を存續させることも亦不可能と爲る一方に、既製品の多くの部分なり、國民の勤勞なりを外國市場に賣却して、始めて國民に職業を豐富ならしめ、又其所得を充實せしめるを得るのである。隨つて一旦自由貿易の下に、國際經濟の關係の密接に爲つた曉に、此關係の如何なる方面に於ても、些細なる龜裂を生じたならば、其結果として國民生活上に障害を招くことは、勢の免かれざる所であつて、斯くて自由貿易は國際平和と雁行す可きものであり、又自由貿易は其必然の結果として、國際平和を誘致するものと考へられた所以である。左ればこそ歐洲戰爭に於て、戰爭の爲めに國際經濟上の關係の攪亂し、又其關係に斷絶を招いて、最も甚だしき窮境に陷つた交戰國は果して如何なる國であつたであらうか。平生通商の自由に依つて、他國に對して、自國を開放し、自國亦他國に依賴することを以つて、經濟政策の基調として居つたに拘はらず、戰爭の爲めに、此關係を拘束され、又打破されることの甚だしかつた國こそ、即ち最大の窮地に陷つたのである。固より英國は多年自由貿易を標榜し、諸外國に依賴する所の大であつたゞけ、一時獨逸が潜航艇封鎖を宣言し、到る所に潜航艇を出沒させて、英國と諸國との交通を妨害した時には、英國官民をして戰慄を禁ずること能はざらしめたのであるが、幸にも背後に合衆國や濠洲を控へ、殊に潜航艇封鎖並に之に伴ふ慘狀が合衆國を刺戟して、聯合諸國に與するに至らしめた爲めに、戰局の後半期以後に於ては、平生自由貿易を政策としたことの破綻の戰時に暴露される弊を緩和したのである。流石に獨逸は平生保護貿易を主義とした時代が永かつたゞけ、英國ほど經濟生活に於て、他國に依賴しなかつた。然し國際經濟の圈内に居る一員として、近年内國に於て製造工業の發達するに隨つて、諸外國から原料品や、食料品を輸入すること、夥しき數量に上り、其供給を缺いたならば、一日として國民生活又は國民産業の安きを保つを得ない狀態に居つた。其際に世界多數の國を敵手とする戰爭に從ひ、日に月に酷烈なる經濟的封鎖を受けては、國力疲憊して、戰敗の憂目に會するのは、已むを得ざる所であつて、其打撃が深く國内に於ける經濟上の諸機關に浸潤し、今日に至つて、尙ほ恢復の緒に就かないことも亦怪むに足らないのである

國際經濟は平和の存續を必要とす

是等の事實は吾人の眼前に展開された所であつて、何等の秘密も存しなければ、又何等の掛引きも設けられない。而して事實を事實として推窮すれば、戰爭は一國をして國際間に國を立てしめながら、孤立經濟の維持を要求する、孤立經濟の圈內から、逸出して、國際經濟の一員と爲り、以つて他の諸國と經濟上の關係を密接ならしめるには、貿易上其他の交涉を自由にするのが、最も重要なる手段であつて、而して其れには國際間の平和の存續して、渝らざることを以つて、必要の條件とすると云ふ結論に到達するのである。國際間の經濟的關係を密接ならしめる爲めには、人、物資の出入の自由である可きが如く、資金の出入に就ても、亦其自由であることを必要とする。蓋し諸國の間を通じて、資本の放下に伴ふ安全の程度の違ふ以上は、其程度に應じて、金利步合に國際的差別の存することは、已むを得ざる所に屬するが、然も此程度を超へて、金利步合に高低の差を存したならば、資本の國際的移動に依つて、之を絕滅せしめるのが當然であり、又絕滅せしめることを以つて、有利であるとする道理であるに拘はらず、實際に於ては、其然るを得ないのである。如何なる國に於ても、資本家が資本を運用するに就て、臆病であることは、古來の定說であつて、此臆病心が資本の國際的移動を妨げる一原因と認められなければならぬ。然も彼等をして斯の如く臆病ならしめたのは、時々世界の平和を根柢から打破するような大戰爭が何等之を豫想す可き事情の存しない間に勃發し、或は資本家の買入れた外國有價證券の市價を低落させたり、或は外國の企業に向つて、直接に放下した資本の回收を不可能な狀態に陷らせたり、更に甚だしきに至つては、交戰國間に於て敵國民の財產たる故を以つて、對手國の管理沒收に任せるの危險すらなしとするを得ないからである。果して然らば從來の如く何時戰禍を蒙るか、測り知る可からざる場合には、資本の移動の妨げられたことも亦怪むに足らない。況や此外に國際間に於ける貨幣價値の變動とか、爲替相場の動搖とか云ふような異常の障害の加はるに於ては、益々資本移動の妨害と爲ることは、疑を容れないのである。

然らば今日の如く歐洲大戰の後々を承け、殊に戰爭が數年の久しきに及んだ結果として、戰爭の惹起す災禍の如何に大であるかに就て、深く交戰諸國民の腦裡に印象を與へ、忘れんとして忘るゝ能はさらしめるもののある以上は、當分の間幾年かを通じて、平和の存續することが推測されなければならぬ道理であるのに、諸國の經濟政策が依然として國際平和の存續を念頭に置かず、寧ろ戰爭の再發に備へる風のあり、又戰爭を挑發する趣きのあるのは、何故であるか、固より斯の如きは國際聯盟其も

の、無力を暴露したものであつて、國際平和は單純なる政治上の約定だけで成立させたり、維持したりすることの困難である事實を明にするものであつて、眞實世界の平和を維持する爲めには、經濟上に於て大なる施設を加へることを必要とし、其如何に依つては、經濟組織の根柢に或る更新を生ずることのある次第を覺悟しなければならないのである。私は左に序を逐うて、世界の平和を促進するに必要なる經濟的手段を論じたいと考へる。

世界平和促進の經濟手段—物資と人との移動

第一國際間に於ける物資移動の自由を認めること。

是れは純眞なる自由貿易論の提唱である。從來自由貿易が純眞なる形態に於て、行はれなかつた唯一の原因は戰爭の將來に起る虞れであつたが、同時に貿易の制限に依つて、或る程度まで、一國の經濟生活の他國に對して孤立し、又隔離して居つたことは、諸國をして、戰爭に干與するに就て、便利なる地位に就かしめた。私は此便利を諸國から奪ひ去つて、眞の平和を維持したいと思ふ。其れには貿易の自由に依つて、世界を通じて、廣く分業の制度を立てることを必要とする。卽ち或る國に或る物資を生産する特長があるとすれば、其特長の續く限り、此國は全力を擧げて、斯る物資の生産に當り、同樣の狀況の下に他の國に於て生産された物資と交換することは、諸國の間に經濟を共通し、諸國民をして最も著しく其特長を發揮せしめる所以である。斯の如く爲つたならば、總ての國の利害は互に共通し如何なる場合にも、其隔離されることを許されざる道理である。

第二、國際間に於ける人の移動を自由にし、苟も人種の差別に依つて、各國民の間に殊遇や、差別待遇を爲さゞること。

此一個條は之に依つて、世界の廣きを通じて、或る方面に於ける天然資料と人口の分布とを正しき關係に就かしめる趣旨に基いたものであつて、此事の行はれる以上は、多數の人民が或る狹隘なる土地に蹈蹐して、生活の困難を訴へるが如き悲慘事は絶滅する一方に、今日勞力の不足に依つて、天然富源を開發しようとしても、容易に之を開發するを得ない所に於ては、適當の數の勞働者を得、然も其勞働の能率は甚だ顯著であつて、一日の勞働を以つて、其勞働者なり、又は其家族なりの一日中に消費する物資よりも遙に多くの物資を産出すれば、其剩餘は資本と爲つて、更に生産を奬勵し、今日以上に國民の生活を發展せしめ得ることは、明白の事實に屬するのである。

天然資料分配の機關

第三、天然資料の産出高を分配するに就て、一國の獨占を許さゞること。

從來經濟上の先進國が其豐富なる資本を他國に供給する場合には、單に其放資に依つて、高率なる利子を獲得することを目的としたものではない、利子の獲得と云ふことも、固より其目的の一ッには相違ないが、同時に其放下された資本の働きに依つて、自國の最も必要とする物資殊に未開の富源を開掘し、斯くて自國の經濟的生活を完成充實する希望の伏藏されたことは、論を俟たない。英國が南阿共和國に巨大なる資本を注入し事業を經營したのは、南阿の金鑛を開掘して、金の産出を豐富にし、確實にし、以つて自國金貨本位制の基礎を堅固ならしめ世界金融の中心點たる地位を永久に把握しよう、又金剛石の産出を一手に收めて、世界の富を吸收しようと云ふ考へから出たのであつて、例へばトランスヴアール、オレンヂ兩國が英國資本家の利益に背馳する政治を行へば、直に兩國に武力的壓迫を加へて、英國の政權を及ぼすことゝしたるが如き、如何に英國が或る方面に於ける天然富源獨占慾を逞うするに努力したかを示す事例とするに足るであらう。列國が支那に對して私に期する所も亦天然富源獨占慾の達成に外ならない。一國の資本を以つて、支那の內地に鐵道を敷設する、其之を敷設するに就ては、支那內地に於ける或る地點と他の地點とを聯結して、支那の物資運搬に資し、斯くて支那人の生活を繁榮にすることを一つの目的にするに相違ないが、同時に此鐵道を通じて、自國物資の支那に於ける販路を擴張し、又鐵道の沿線に於て開掘された天然富源を成る可く有利なる條件の下に、自國の用に供するように運搬することが、重要なる目的と爲つて居るのである。即ち最も早く世界の或る未開方面に根據を置き、資本を投じ、企業を營んだ國は其處に特殊的利益を有すると稱して、優先的地位を保たうとする。斯くて生ずるものは、排他であり、專恣であり、獨占でなければならぬ次第であつて、斯る影響を受ける國の立場からすれば、之を以つて堪へ難きものであるとし、武力に訴へて、此獨占專恣の狀態を打破しようとするかも知れない。斯くて未開國の富源を開發し、未開國民にまで、文明の恩澤を光被せしめようとする計畫が却つて國際平和を攪亂する原因と爲るのは、吾人の返す〳〵も遺憾とする所である。今日世界工業國が燃料として石炭よりも石油に重きを置くように爲つてから、石油政策の確立を要望する聲の高きを加へると共に、油田の爭奪は到る所に行はれて已まない。而して競爭の激

まる所、遂に何等の衝突なきを得るであらうか、一個の問題たらざるを得ない。

世界の平和を確立し、又之を進捗する見地から云へば、天然富源の如き、其如何なる場所に於て、又如何なる國の人の勤勞と資本とに依つて、生産されるに拘はらず、廣く之を必要とする程度に應じ、又之を利用し得る實力の強弱に從つて、分配され可きものであり、其分配された曉に、生産された物資は是れ亦貿易自由の原則に依つて、廣く各國の消費に充てられることゝしなければならぬ。斯の如く分配を國際的支配の下に置くことを要する天然資料としては、鐵鑛の如き、石油石炭の如き固より其一たることを失はないし、更に之を廣くすれば、羊毛棉花、小麥、木材、皮革の如きも、之に列するものとしなければならぬ。歐州戰時に於て、聯合諸國は戰爭の遂行なり、國民生活の維持なりに必要とする物資に就ては、諸國聯合して、之を買入れ、又各國の必要とする程度に應じて、之を分配し、其れぐの國の生産上に長技とする所を發揚するに、遺憾なきを期せしめた事實がある以上は、戰後の今日に於て、之を再びするを得ない道理もないのであつて、此程度まで國際經濟上の關係を進めなければ、經濟の方面から、國際平和を實現するが如きは、之を望むを得ないのである。

資本の國際的移動に於ける自由

第四、資本の國際的移動を自由ならしめる經濟上の施設を完備し、苟も其自由に對する一切の障害を排除すること。

從來世界經濟上の交渉が種々の點に於て、局限されて居つたことの結果として、諸國の經濟社會は或る程度まで畸形的發達を遂げて居る觀を免かれない。或る國に於ては、資本の蓄積高甚だ多くして、之を放下運用す可き事業なり、其事業を組成する材料に乏しいが、他の國に於ては、資本の供給甚だ乏しきに拘はらず、之を需要する事業は頗る多く、資本の力に依つて、開發せらる可き富源も少なしとしない。斯の如く事情の異なつた兩者を對立させ、其間に何等の聯絡を通ぜしめなかつたならば、前者に於ては金利歩合の暴落を招いて投機思惑を刺戟し、遂に恐慌を誘致するに至るかも、知れないと同時に、後者に於ては何時までも事業不振を喞たざるを得ないことゝ爲るであらう。而して從來斯る場合の實現し、屢々資本の國際間に於ける移動の制限された原因は何れに在るかと云へば、第一貨幣制度の不備、之に伴ふ貨幣價値の動揺、第二元利金回收の不安、第三法律風俗習慣の相違等は其重なるものと認められる。随つて是等の原因の除却されることは、國際金融の圓滑を謀り、其圓

滔なることに依つて、世界的平和を誘導する所以と爲るのである。既に然る以上は、今日諸國の人々が戰爭の禍害に驚駭し、何としても其再發を防ぎ、而して國際間に於ける平和の永續を求める場合に於てこそ、國際金融の疏通資金移動の自由に就て、一段の努力を費さなければならぬ道理であるのに、諸國が實際に爲す所は如何なる方嚮に向つて居るであらうか。戰前と戰後とを比較すれば、諸國の貨幣制度が著しく不良と爲り、價値の基準とする所を失つた趣きの存するのことを免かれない。露西亞然り、獨逸然り、墺太利亦然りと云はれる。斯る場合に國際間の金融關係を疏通し、密接にするには先づ通貨の流通狀態を整理し、其基礎を堅實ならしむることを以つて先決問題たらしめなければならぬ道理であり、此見地から從來獨逸の爲めに、金貨クレデヰツトを開始せよと云ふ說もあり、又露國に對して通商上の關係を復興せよと云ふ要求も行はれる所以であるが、今日に至るまで一として實行の緒に就いたものはなく、獨逸に對しては却つて償金義務履行の壓迫は酷烈と爲つて、遂に佛蘭西のルール占領を惹起し、益々歐洲經濟上の關係を惡化せしめざれば已まない。

償金問題に關して、佛蘭西の獨逸に對して、取つた態度の善惡は姑く措き、歐洲諸國にして既に戰時聯合諸國の間に生じた協同的關係を以つて、有利なるものと認めたならば、何故に戰後に於て、直に諸國の貨幣制度を統一し、又之を統一する爲めに、各國の貨幣價値を確實ならしめる方策を講じなかつたのであらうか。固より今日多くの國に於て、貨幣價値が低落したり、又爲替相場が低落したりするのは、財政上に於て、政府自ら中央銀行に就て、借入金を爲し、中央銀行亦之に應ずる爲めに、銀行券を濫發する結果に外ならないが、獨逸の如きは、償金支拂の義務を荷うことの關係から、政府をして中央銀行に對する借入金に依賴するの已むを得ざるに至らしめるものである。然らば償金支拂の義務を輕くすることは、獨逸に於て通貨の價値を高からしめる所以であるのに、此點に關して、一歩だも進んだ所あるを知らない。若し夫れ合衆國と聯合諸國との間に存する債權債務調節の問題に至つては、合衆國が英國の爲めに、短期の債務を長期の債務に書換へることを承諾した位が讓步の關の山であつて、此以上には何事も爲さないとすれば、英國亦聯合諸國に對して、大なる援助を致す餘裕を持たない道理である。斯の如くして徒に時日を經過して居つたならば、世界經濟の恢復の難きは勿論、國際間に於ける經濟上の聯絡亦望たしとせざるを得ないであらう。從來支那に對する外國放資の困難なることは、支那の貨幣制度の亂雜であり、且つ貨幣本位の

銀貨に存する一點に出づるものと解され、此見地から諸外國・自ら進んで支那に幣制の改革を强要する態度を示したのである。然るに今や多數の國が支那と同じく幣制に混亂を招き、貨幣價値の最も確實である合衆國に對し、又近時價値の確實と爲りつゝある英國に對して、共に甚だしき價値の低落と變動とを示して居つては、正に國際間を通じて、幣制の基礎を搖撼された譯であつて、之を救治するに非ざれば、國際間に於ける資本移動を實現することは不可能である。

國際間に經濟的聯合の實を擧げようとする誠意があるならば、今日の如き正に國際間の幣制統一に多大の步を進める計畫を樹立立する好機會に居るものと考へられる。從來此種の計畫が試みられ、實行後の利益の如何に大であるかは、明に關係諸國に依つて、了解されて居つたに拘はらず、常に失敗に終つた原因は何處に在つたかと云へば、兎に角其時まで一國の貨幣本位として價値の確實であつたものを他國の貨幣に準じて、之を動かすことの苦痛を認め、之に堪へ能はざるものとした爲めであつた。然らば今日の如く諸國の貨幣制度が紊亂して、貨幣價値低落し、其常態に復せしめるまでには、貨幣價値に大なる引上げを行うことを要し、次第に依つては、貨幣單位に對する地金の純量にも變更を加へることの必要を生じてる居る時こそ、諸國の貨幣制度を統一する最好機であり、又斯くして世界の平和を經濟上の方面から誘導するに、大なる効果ある可き筈であるのに、此點に就て今日に至るまで、世間に何等の聲に接せざるは、如何に當面の問題に腐腦する爲めとは云ひながら、世人の眼孔の狹きを嘆ぜざるを得ない。

世界經濟の推移しつゝある狀態にして、右の如くであるとしたならば、吾人は不幸にも經濟上の働きに依つて、平和を促進する機運の到來することを考へるを得ない。戰前と戰後とを比較して、國際間に於ける經濟的關係は濃密を加へたかと云へば、必ずしもさうでなく、金融機關の活動の鈍つたこと、運輸機關の復舊せざること、戰時に於て荒廢した領土の未だ完全に恢復するに至らないこと、露國が經濟上の關係に於て、閉鎖され、其國民の多數は戰前に於けると同一の程度に於て、生產上に能率を發現しないことの諸點は相重なつて、國際經濟上の關係を疎隔するの趣きすらなしとしない。斯くて諸國の利害關係が融合せず、時に背馳し、時に抗爭することありとすれば、諸國が平和の關係を持續するのは、戰後國力の疲弊甚だしき一方に、國民の間に戰爭を嫌厭する念慮の强い間だけの事であつて是等の二點が改まり、國際間の勢力に均衡を失つたならば、何時戰爭の再發を見るか、殆ど測り知る可からざる譯であつて、

今日の如き不熟極まる國際經濟上の關係を以つてしては、到底戰爭を未然に防止する效果を持たないのである。

資本主義跋扈の餘弊

從來何れの國に於ても、經濟組織の根柢と爲つたものは、資本主義であつて、思ふに此主義たる、今後に於ても、其全盛を見ることは、往時に比較して、渝る所を見ないであらう。而して資本主義の下に、大なる資本が蓄積され、吸收されて、大量生產の下に、大規模の產業を維持するに至つたのは、資本主義の效果として、一般に認められるやうなもの丶、一方に資本主義の經濟上に及ぼした禍害も亦少なしとしない。其國內經濟上に於ける影響は姑く措き、單に對外經濟上に於ける關係に微しても、

第一、大量生產法の下に、單に內國だけの需要に應ずるに餘りある物資を生產する結果、其剩れる部分はダムピング（人爲的廉賣法）に依賴して、外國に輸出しようと試みること。

第二、ダムピングに依つて輸出を謀るよりも、外國に自國の政治的權勢を擴張し、其權勢に保護されて、自國の輸出貿易を伸張するの安全であり、又便利であるを認めること。

第三、更に資本家は外國に權勢を張つて、自己の事業經營に取つて必要とする原料の供給を豐富ならしめるに勉めること。

第四、斯くて資本家の團體は必ず政治上の勢力を左右し、一國政治の方針をして帝國主義なり、侵略主義なりに就かしめて已まないこと

の四點は最も明瞭に看取される。從來資本家の利己的精神に依つて、戰爭の挑發されたり、又外交關係を危殆ならしめたりしたことは、數限りなき所であつて、而して一旦戰爭の開始されるや、兵器の製造を始め、諸般軍需品の供給に依つて利益するものも、資本家であるが如くに、戰爭の齎す經濟社會の一時的繁榮に依つて、利益する者も亦資本家である。然らば資本家が平和を愛すると云ふが如きは、一場の付燒刄であつて、彼等こそ戰爭を好むことを本性とし、更に進んでは戰爭を挑發することを職分とする者であると斷定して、差支ないのである。戰爭の後に於ては、必ず經濟社會に打撃を及ぼして、資本家たると、勞働者たるとを問はず、總ての人々を苦境に陷らしめることは、勢の免かれ難き所であつて、今日歐洲諸國なり、北米合衆國なり、日本なりの經濟社會が不振の狀況に沈んで居るが如き要するに右の原則の適用に依るものに外ならないが、資本家の如きは、戰時の變動に乘じて、充分の利益を占めた一方に、

戰後の悲況に處しては、不景氣に伴う損失や、不利益を營業費縮小とか、職員勞働者の解雇とか云ふような形に於て、俸給衣食者や、勞働者の負担に移し、飽くまでも、戰爭に依つて獲得した利益を死守することを期して已まない。戰爭は資本家に取つて何處までも有利なるものであり、勞働者に取つては戰時には自己又は子弟を殺し、戰後には當時生き殘つた者の生活を脅かす不利益千萬のものであると云はなければならぬ。

之を何れの國の事例に徴しても、軍閥に附屬する一團の資本家がある。御用商人と稱せられるもの、卽ち是れであつて、其大なるものは大工場を構へ、大資本を擁して、兵器其他の軍需品を製造し、其小なるものと雖も尙ほ政府の爲めに、糧食被服を請負ひ、又人夫を供給する任に當る。獨逸のクルップ、英國のアームストロング、ヴヰカース、日本の三井、三菱、大倉、高田の如き、如何なる大なる富を擁し、富豪として社會上に地步を占めるとした所で、一個の戰爭商賈人(ウォーア、トレーダース)であつて、其願ふ所は軍備の擴張であり、其欲する所は戰爭に依つて、軍隊軍艦の動かされることに外ならない。戰爭の行はれる度毎に、彼等の財嚢は常に其大を致して誤まらない。昔は萬卒の骨を枯らして、一將の功を成すと云はれたが、今日は萬民の膏血を絞つて、富豪の財嚢を豐にすることが戰爭に伴う必然の產物であつて、歐洲戰後交戰諸國に於て、資本徴課金制度に依つて、戰時に增加した富に對して課稅することを必要とする說の起つのも亦偶然でない。然も資本家の代表者に依つて、政權の左右されつゝある今日に於て、此說の行はれないのは、敢て疑問とするに足らないであらう。

斯の如く論じ詰めて來ると、從來の戰爭なるものは、領土の擴張とか往年或る國に依つて、蒙つた戰敗に對する雪辱とか、國の地位を向上するとか、種々の理由が附會されるが、同時に資本家の政治上に跋扈跳梁することの戰爭を誘致するに與つて力あつた一事は吾人の何としても看過するを得ざる所である。然らば世界的平和を促進する經濟上の手段を求める場合には、資本主義を制限する必要に接せざるを得ないであらう。卽ち從來の如き營利の觀念を以つて行はれる生產でなく、社會の效用を目的とする生產であつて、始めて生產の方便をして社會の必要に一致せしめるを得るのである。現に我國に於ても資本家は社會に對して、如何なる所業を爲すであらうか。彼等の期する所は利益獲得の外に、何ものもないのであつて、時に物資の減產に依つて、時價を引上げ時に物資を增產すれば、其大部分を外國に輸出し、內國に於ける時價をして生產費以上に高からしめる。孰れにしても其目的は暴利を獲得する一事であつて、而

して外國に販路を擴張する場合に、代價の低廉のみを以つてして、意の如く爲るを得ざるときは直に自國政府の權力に依賴して、外國市場を獨占したり、外國領土に産出される天然資料を壟斷したりすることを始めとして偏頗不公正なる關係を生ぜしめる方針を取る。而して此場合に他國の利害と衝突すれば、直に政府を使嗾し、政黨を左右して、事を外に構へることを辭さない。資本主義あるが爲めに、世界の平和の攪亂された事實は吾人の常に見る所であつて、其勢力に制限を加へることは、世界平和の道程に進むに就て、吾人の認めて、以つて必要とする所である。

斯の如く資本家は其辣手を内外到る所に伸して、消費者を虐げる、消費者が消費組合に據つて、自家の利益を防衞し、又資本家に當らうとしても、其力は頗る微々たるものたらざるを得ない。而して勞働者の如き消費者の一員として、資本家の壓迫を蒙るは勿論、更に勞働者として勞働條件を決定する場合に、直接に資本家を對手にして、相爭ふのであつて、資本家と勞働者との勢力の對等ならざる今日に於ては、後者は常に前者に依つて、壓迫される。斯くて次に來るものは勞資兩者の反目であり、階級的鬪爭でなければならぬ。從來の經濟組織にして其根柢の更新されない限り、資本家が勞働者を虐遇することは、生産費を低減して、物資の販路を海外に擴張する手段であると考へられる。即ち資本家は其資本家たる地位を鞏固ならしめ、又暴利獲得の手段として、勞働條件を成る可く劣等とすることを期し、又外國市場に於て、自國物資の販路を不自然に擴張しようとするものであつて、其國際平和を傷ける一原因たること、論を俟ない。

世界の平和は前途遠きか

以上私の論述した所を綜合して、考量すれば、經濟上の見地から云つて、世界の平和を期することは、極めて困難事とせざるを得ない。然しながら私は平和の到來の困難であることを理由として、平和に絶望し、戰爭再來に對する準備に意を致さしめる趣向を持つ者ではない、平和を妨害する經濟上の事情に對し、國民全體の努力を以つて、之を除却するを念とするものであつて敢て他意ある次第でないのである。即ち國際間を通じて、國際的分業の實現されるまでに、貿易自由の行はれる範圍を擴充し、人種的差別を除却し、人をして其好む所に居住し、又好む所の職業に就かしめ更に天然資料の分配に就ては、國際間に於ける代表國家の裁定に依り、之を分配して、最も大なる效用を發揮し得る標準を以つてし、國際間に於ける資金の移動

亦之を自由にし、其資實は最も安全なる方法の下に、放資者に收得せしめる保障を設け、更に進んで資本主義に制限を施し、社會的效用の爲めに、生産者をして生産に從はしめることは、世界平和を確保し、又之を促進するに必要なる經濟的手段であると認められる。

數年に亙る戰爭に依つて、國財を費し、民命を滅ぼし、國民をして戰時に於ては勿論、戰後の今日に至るまで、尙ほ饑餓窮乏の狀況に沈ましめる等戰爭に伴う影響の慘憺たるものが世間に暴露しつゝあるに拘はらず、世人尙ほ平和の尊重す可くして戰爭の恐る可きことを覺らないのは、何故であるか、之を覺れりとしても、平和促進に必要なる經濟的手段の一として講ぜられないのは、何故であるか。一の佛蘭西が賠償金條項を勵行すると稱して、ルール方面に軍事的行動を試み、歐洲の一角に平和を攪亂する所業を敢てしても、他國は之に對して拱手傍觀するのみであると云ふのは、何事であるか、抑も亦斯る軍事的行動の行はれた爲めに、砂糖鐵鋼等の市價の騰貴した結果は我國の經濟社會に中間景氣を齎す所以と爲り、中間景氣の何ものであり、又如何なる利害を及ぼすやを辨へず、佛蘭西の軍事行動を勿怪の幸であるとするような感情の我國民の一部に依つて、懷抱されるに至つては、私は言う可き所を知らないのである。

經濟は平和あつて始めて行はれる。平和と經濟との併行されなければならぬことは、天下の約束である。我國民が日清戰爭を手始めとして、最近の歐洲戰爭に至る數次の戰爭に於て、戰爭に依つて經濟社會に幻影的利益の生じたことに、何時までも心を奪はれて、平和と經濟との關係若しくは平和の經濟發展に及ぼす效果を無視するに至つては、之を愚とし之を陋とするも、尙ほ言の適せるものを見出すに苦む次第である。

列強に先じて對支領事裁判權の撤廢を提唱せよ

柏田忠一

一　はしがき

私は九年間上海に在住し、上海日日新聞を主宰し且つ辯護士として領事裁判の實際に觸れ、又た會審衙門と云ふ一大國際裁判所を通じて支那の現實を觀、正義の破壞、人道の蹂躙、之を背景として支那社會組織の毀損、國民性の下降等、種々なる惡果が次から次ぎと踵を接して生じ來るので、領事裁判權撤廢せざる可からず、治外法權は之を取去らなければ支那を救ふことが出來ぬと決心したのである。夫れから約一個年半歐洲に遊び、就中興味を以て埃及、バルカン、及び中歐諸國の、嘗て領事裁判制度の存在し又は現存して居る白人文明の跡を觀て愈々此の決心を強固にしたのである。青島を支那に還付し、郵便局を撤廢し、駐屯軍まで引上げた上、更に領事裁判權まで撤廢して了つては對支外交の失敗どころか泥棒に追錢であると憤慨する仁もあらう。一應御尤であるが、私の此の議論は對支關係ばかりでは無く、對外國の問題として日本は向後の東洋に於ける經濟戰に優勝な地位を占め且つ東洋の盟主として人道上からも強き發言權を世界の舞臺に得やうとするには領事裁判權を支那から撤廢して了はねばならぬと云ふ結果に外ならぬ。在支那人の一部には、以ての外の議論だと仰せになる人も有らうが、理論と實際の上から長い日を以て將來を論ずるならば、如何しても日本は率先して領事裁判制度を東洋の各國から撤廢せしむ可く第一戰線に立たねばならぬと思ふ。日本は自力で領事裁判權を撤廢した唯一の國であり、又た最も苦き經驗を有するパイオニーアとして、先づ現に苦しみもがきつゝある支那から此の片務的特權を撤去してやることに努力せねばならぬ。

華盛頓會議は一面に於て列強が支那に對する貪慾の共進會たる觀があり、他面に於て支那占領はお互に中止しやうと云ふ申合せの會議であつた觀がある。即ち列強が從來占領して居た或

る領土を返還したり、郵便局を撤廢し駐屯軍を引揚げやうと云ふことになり、治外法權も列國政府任命の委員より成る委員會を組織して調査し、其の撤廢に就き攻究せしむることとし、列國お互に支那に對して政治上經濟上の特權や特典を要求せぬことと云ふ樣な從來の白人の行動と比較して著しい豹變振りであつたのである。併し乍ら、詳細に研究して見れば、彼等白人の返還する特權なるものは、營養分を取り去つた殘滓で、此の殘滓をダシに、日本より各種の重要な特權を吐き出さしたのである。一例を郵便に取つても左樣である。日支間の郵便關係は普通郵便、特殊郵便は固より、小包、爲替、貯金に至るまで全く他の歐米諸國の夫れと比較にならぬ程數量も内容も多いもので、夫れ故に兩國間に特殊の取極めまで爲して居た程である。歐米の在支郵便局は大抵缺損多く經費倒れの有樣で特權とは云ふもの丶郵便局丈けは自から進んで撤廢しやうとして居た位なもので、同じく撤廢するなら日本のも同時に撤廢さしてやらうと云ふ算段から出たものである。何等痛痒を感ぜぬ殘骸特權を餌として日本を苦しめ、支那に對しては恩義を賣り、一擧にして兩得も三得もした奸計は見上げたものだ。併し實際の利益問題となれば彼等歐米人は決して自から進んで拋棄する如く寡慾恬淡では無い筈である。見よ、軍事的にも經濟的にも殆ど無價値なる威海衛の返還にすら英國は何んとか彼んとか條件を持ち出して居るでは無いか。威海衛と云へば、今日では夏期に米國のフイリツピン艦隊の避暑地として盛んに風俗が紊亂する以外に何等の取柄の無い所である。斯んな所を拋擲して日本には青島や濟南鐵道やらを拋棄させ、軈がては支那人をして利權回收熱を旺盛ならしめ以て關東州までも吐き出させようと云ふ、海老で鯛主義の實現と見て差支なからう。

其他、華府會議に於ては、駐在軍隊や領事警察に至るまで日本を眼の敵として議論が上下されたのであるが、之等も主客轉倒で、今日まで支那の領土主權を侵害した元兇は英、佛、獨、露、米等で、只、日本は最惠國約款のお蔭で彼等と同等の權利にあり付いて居る丈けである。バートランド、ラツセル氏が支那に遊んで「支那問題」(The problem of China 1922)なる一書を著し、その中に、次の如うなことを言つて居る。

支那は全く異なれる二個の外力に相對して居る、一は白人で他は日本である。此の原因を作つたものは白人種であつて、今日の日本は西洋人の産出物に外ならぬ、其所だから、日本の支那に對する行動は全く恩師白人の教育の賜に外ならぬ…

更にパ氏は支那の將來に就いて論じて曰く、(一)支那は白人國に隷屬するか、(二)日本の附屬となるか、(三)支那自から國力

を回復して獨立を保持するか、(四)一時的現象としては列强及び日本の共同管理の治下に置かるゝかの四つの場合を想像して批評を下して居るが、私の思ふには今迄での支那は實質的に第一の場合、即ち白人國に隷屬して居たのである。一八四二年の英支南京條約以來、北米、佛、白、瑞と相次いで各種の要求の下に條約が締結され、實に過去八十年間、名は獨立國であるけれども、其の主權を侵害され利權を侵奪された跡を眺むれば、亡ぼされた印度や埃及や乃至交趾支那と何等選ぶ所がない。自から手を下して斯る慘虐を敢てした主犯者たる歐米が、後からこわ〳〵尾いて來て辛うじて分配にあり付いた從犯者たる日本をば、恰かも主犯者の筆頭の如く元兇の如き地位に陥れたと云ふことは、外交手腕の巧妙とは云ひながら日本としては默つては居られぬ所である。

日本は巴里講和會議に人種差別撤廢案を提出して笑はれたが、華府會議で列强に先んぜられて郵便局の撤廢を提唱され、諾々之に贊成を餘義なくされる位なら、寧ろ、我は進んで彼等の最も痛痒を感ずる領事裁判權の撤廢を提議し、日本の正義と人道主義を現實に立證するに如くは無い。

領事裁判權の如何に其の國を毒するかは後に述べるが、最近希臘に勝つて其の實力を示した土耳其が頻りに領事裁判權の撤廢を主張して已まぬのは、若し之を許すことにたならば、土耳其は政治的にも經濟的にも到底獨立の體面を保持することが出來ないからである。

二　金儲けの法權

治外法權と領事裁判權とは其の內容を異にする、前者は外國の元首又は外交官等が其の所在國の裁判に服せぬと云ふ意味から出來するので消極的のものであるが、後者は、通常或る國の臣民が在留外國に於て自國の裁判權に服し其所在國の法權に依つて裁判を受けぬと云ふ積極的及び消極的兩面の權利を內容とするものである。更に前者は國際法上當然存する特權であるが、後者は條約に依つて規定され仍て生ずる所の權利である。

西力が東洋に侵入するに際し、最初は通商の形式を執つて來た、從つて商業上の西力は先づ東洋に植付けられ、之に亞いで政治力が扶植され、法律が東洋を壓倒したのは後のことである。彼等白人としては世界を白化する積りであつたであらうが、其の眼目とする所は金儲けである。併し乍ら、通常の通商、即ち對當の條約で商買する場合は商才の優れた者が勝利を得る譯であるから絕對優勢の地位を保障することが出來ない。即ち彼等は關稅の制限と領事裁判權とを以て東洋諸國に臨んだのであ

る。日本は安政五個國條約に於て關稅法權共に束縛を受け明治初年から稅權恢復の準備に取掛つたけれども容易に行はれない。明治十三年から十九年まで條約改正に全力を盡し或は法權のみを恢復せんとし又は稅權のみを恢復せんとし、時には双方共に束縛を脫せんと企てたけれども何れも成功しなかつた。丁度明治二十二年、墨西哥と對等條約が締結されたので、時の外務大臣大隈重信氏が之を機として歐米諸國との片務的條約を改正せんとしたが矢張り失敗に終り、明治五年を以て改訂の期限とした條約は實に二十有餘年を徒過して明治二十七年七月、日英通商航海條約の改正を初めとして同年十一月には日米、同二十八年には日伊と云ふ順序で改正條約は締結されたが、夫れは單に領事裁判權を恢復したに止まり關稅は僅かに一部分の恢復に過ぎなかつたのである。日本は世界大戰に遭遇するまで常に債務國の苦境に呻吟した原因は數次の戰爭を經た結果でもあるが、又た關稅及び法權の束縛に依り外國貿易上到底優勢な地步を占むることが出來なかつた結果にも因るのである。

現に、日本が條約を改正して關稅を引上げるまでは、橫濱、神戶、長崎其他の貿易港には外國商館櫛比して殷盛を極め、左手に輸入稅五分と云ふ低率の關稅を翳し右手に領事裁判權と云ふ利刀を提げて縱橫に貿易市場を暴れ廻つたので日本商人は到底彼等の敵ではなかつたのである。夫れが、條約の改正となり、治外法權、稅權兩つながら失つて平等の權利で取引するに至つて彼等は續々旗を卷いて日本を去つたのである。今日、上海、香港、天津、新嘉坡等に居る外商中には此の日本の落武者が非常に多いのである。

關稅が一國の財政に如何なる影響を與ふるかを國家の總歲入と比較して考へて見るに、英國では總歲入對關稅の比例は二割五分、佛國は一割二分、獨逸は四割七分、伊太利は一割三分、北米は六割强となつて居て何れも重要なる歲入たるを失はぬのであるが、支那に於ては輸入稅が其の總歲入に比し僅かに九分弱である。財政困難の極に達して居る支那としては其の改正を列國に哀訴歎願して已まざるは誠に當然で、同情の外はないのである。尤も、稅關は今日の所では列强の管理下に在るので、若し支那が獨力で關稅を取扱ふことになれば、今日よりも尙ほ惡い結果を來たすかも知れぬ。併し乍ら結果の善惡は必ずしも其の國の關稅改正を阻却せしむる原因とはならぬ。領事裁判權に至つては撤廢の理由が更に明瞭であるが、白人が容易に之を撤廢しやうとしないのは全く通商貿易上の打算から來て居る。

三　法權の割據

陸軍の駐屯よりも、軍艦の派遣よりも、平和的で且つ經濟的で而かも自國の商權を擁護し擴張するに絶大の效果を齎らすものは領事裁判權である。支那に於ける各國領事裁判權は全然被告主義で一貫され總て被告の國籍による當該國家の官吏が裁判權を有することになつて居るので、領事裁判權を有せざる無條約國の人民は此の場合支那人と同一視され、外國居留地內では會審裁判所で裁判され、其以外の支那內地では支那の裁判所で裁判される。被告の屬する國家は其の臣民を裁判するに當り如何なる方法を以てするも自由である、即ち其の法廷も、法官も全く自由であるから領事裁判所であらうと、正式の裁判所を設立して此所で取扱ふと勝手である。現に、英米は各々正式裁判所を上海に有し本國同樣の正式の裁判官を任命して裁判して居る。日本、其他の諸國は經費や人員の都合で領事官をして裁判せしめて居るが、日本では多くの場合領事官補をして裁判に當らしめて居る。刑事々件の場合は領事館警察署の警部又は警部補が檢事の職を行ふことにしてある（外務省通商局編纂領事官執務參考書參照）。其適用する法律も國內法的規定に一任されて居るが、民商事の實際に關しては屢々準據法に就き爭を生じ所謂法律の牴觸問題が持ち上がり國際私法に依つて適用法の如何を決せねばならぬ場合が多い。一九一五年の日支條約第五條には土地に就ては支那法又は所在地の習慣に則り協定の上決す可きこと、して居るし、我が法例第十條と民國七年八月の教令第三十二號法律適用條例第二十二條を對照して考ふると矢張り支那法を準據法とせねばならぬ事になる。一九〇四年天津に起つたマクドナルド對アンダーソン土地紛爭事件に於ても英國裁判官は支那法を適用して居る。尤も之は土地に關しての事であるが、多くの民商事々件に就きては英國は自國法を適用し支那の慣習さへも認めない場合が屢々起る。昨年七月二十八日上海英國高等法院に於ける家屋明渡事件にペーター、グレン判事が「吾々は英國法を適用する、上海の慣習の如きは問題とせぬ(Shanghai custom has got nothing to do with me.)と云つて大英帝國の權威を示さんとした。兎に角、支那との條約國白、英、丁、獨、英、佛、伊、日、キューバ、墨、和、諾、墺匈、葡、露、瑞、西及び北米の十八個國が領事裁判權を有して居たのであるが、此の內、露、獨、墺匈の四國は歐洲戰爭後領事裁判權を失ふたけれども尙ほ十五個國があり、夫れが各々領事裁判所、公使館裁判所、本國の正式裁判所（英米の如し）乃至本國の殖民地裁判所（戰前の獨逸）等に依り自由に裁判するし、上海の如く領事團裁判所に於て行政裁判を取扱ふ所もあるし、上海、天津、其他に於ては會審裁判所があると云ふ具合に

各々條約或は特殊の取極めに據つて裁判權を行使して居る有樣は恰かも戰國時代に群雄が割據して互に爭鬪を逞うして居たと同じである。加之、此の法權は支那法制並に行政の弱點に附込み隙さへあれば自國法權を延長せしむることに張膽明目して居るので、支那法權は南風競はず一歩々々退却して外國法權の跳梁跋扈に放任して居る。若し夫れ會審衙門に至ては支那人を被告とする事件でも、其の支那人が條約國臣民の使用人である場合には支那官憲は當該條約國領事の承諾なくては逮捕監禁することが出來ないのみならず領事は此の會審事件に立會ふことになつて居るし、又た、民商事件で支那人對支那人の事件でも、條約國臣民の利益が包含されて居る場合には當該國の領事が立會ふことになつて居るから、外國裁判權が侵入する機會は被告主義を更に擴張したものである。殊に容易ならぬは、條約に基く犯人搜索の權限は條約港内若くは居留地内に限定されてあるのに事實は此の境界を超へて外國の搜索權が延長して居る、縱令、夫れが支那地方官憲の了解の下に行はるゝと云ふも國際法上、一地方官が斯る場合に許否の權限を有つて居る筈が無いが之れも列強が權力を挾んでの無理行爲と見るの外はない。

玆に不可思議なるは支那の稅關其他に傭はれて居る多くの外國人である、此の數現在三千九百六十八人、内英人千百〇五人、佛千〇〇三人、露四百六十三人、米百七十四人、日本二百〇七人、伊太利七十五人、白百七十一人等であるが、是等の外國人中、例へば稅關吏が刑事上の犯罪を犯したとするも單に稅關規則に依つて免職されるに止まり、然る後、所屬領事館に報告されるに過ぎないのである。此の被告が後に改悛の情著しいとでも云ふ理由で又直ちに復職される場合が屢々ある。尤も此の場合に領事官が其の所屬臣民を更に處罰するは差支ないのであるが、否な處罰せなければならぬのであるが今日の實際は左樣で無いのである。

法權割據の弊として犯人搜索の困難なことである。領事官の警察權は租界又は居留地外には原則として及ばぬのであるから、犯人は直ちに租界外又は居留地外に逃走するを常とする、斯る場合には租界警察權は支那官憲に交渉して犯人の逮捕を依賴するのであるけれども容易に實績が擧がらぬ、例へば上海で田中大將に爆彈を投げた朝鮮人の一人が一旦我が領事館警察署の手に逮捕されたが其後脫獄逃走して遂に行方が明かでなく今日まで捕縛されずに居る。其他、上海の共同租界と佛國專管居留地とは各々別個の警察權で行政して居るから、若し犯人が道路只一つ隔つた佛租界から共同租界へ、又は共同租界から佛租界へ逃亡したとしても其所に迅速機敏なる警察權の發動は六ケ

數いのである。況んや支那內地に一歩を出づれば其所は外國人に取り頗る犯人の搜索に困難であつて殆ど手が付けられない。故に今日の如く財界が不況氣になり、商取引上の苦情が續出すれば支那人は往々租界外に逃亡するし、條約國臣民は法權を振り翳して被告たる有利な地位に隱れんとするし、領事裁判權といふ不完全極まる法權でお互が其身を擁護せんとするのであるから玆に貿易は不信義對不信義のものとなつて健全なる發達を遂げぬことになる。實際に於て、一方が或る特權の影に匿れて支那商人を苦しめるのであるから尾崎行雄氏の口調を借りて云へば、在支外國商人は、法令を以て彈丸に替へ、領事裁判權の影に匿れて支那商人を狙擊せんとする者である。

四　白蟻の如し

領事裁判權が其の義務國を蠹することは恰かも白蟻の如し。一度此の白蟻の爲めに喰ひ付かるゝ時は國家組織の餘程堅實なものでも七花八裂の慘憺たる運命に陷つて了ふ。日本でさへ其の創痍は久しく癒へなかつたのである。現に當時の名殘りとして外國の永代借地權が今に殘存して日本を惱まして居るではないか。況んや支那の如きに於てをやである。郵便局は撤廢されたけれども、內地河水航行權が存在して四百餘洲外國の國旗を揭揭した船舶を見る。之等は三十餘個の開港場を補ふて內地河水を航行して居るが、之等船舶上の貨物も人間も共に治外法權の恩典に浴するのであるから之亦頗る有力なるものである。果せる哉支那の船舶やジャンクで、單に名義丈けを外國に書換へ其の國旗の擁護の下にあるものは頗る多い。揚子江並に其支流、運河及び沿岸航路に夥しき英國商船を見るが、此の中には單なる名義丈けの英國船も居ることは注意しなければならぬ。此の表面上の英船は或る特殊な稅金を英國官憲に支拂つて、其の復雜極まる關稅、就中、內地關稅卽ち沿岸移出入稅、子口稅、常關稅及び釐金稅等に就き特別の利益を受けるのであるから、支那の歲入の上から見ても容易ならぬ問題である。更に注目に値するのは、全國の大海關七區、之に附屬する小海關四十三個所には一千有餘人の外國稅關吏が頑張つて居り、其の總占めたる總稅務司は實に英人であり其の下に有力なる英人稅關吏が無數に居るから、英國々旗を揭揚することの如何に有利なるかは問ふ丈けが野暮である。海關の手は更に常關と稱する支那古來の稅關にまでも及んで居る、卽ち(一)北淸事變の最終議定書第六條の規定に依り海關外人の管理する主なる開港場五十支里以內の常關は海關の管理に屬して居るし、(二)開港場の周圍五十支里以外の常關にして海關監督の管理に屬して居るものもある、

(三)此の外、財政部の直轄に屬する常關もあるが、此の總數全國を通じて本關五十餘、分關、分局實に六百數十に達して居るが此の悉くに外人は居る譯では無いけれども、茲に大英帝國の國旗を掲げて通航すると否とには非常なる特權上の相違がある。過去八十年に亘り外國權力の壓迫に苦惱し抵抗力を消耗して了つた支那人は外國人の影に隱れ其の庇護に依つて自己の利益を擁護せんとするは誠に自然の勢であると謂ふ可きで其の眞情憫れむ可きものがある。斯くして外國人中最も優權なりと目さるる英國人はトラスト其他の方法で支那人に代つて名義人となつて居るのである。英人たるもの實に他人の褌で角力を取つて居るものと謂ふ可きである。

トラストの最も著しき一例としては土地である。支那に於ける英國の權力の絶大なる結果として各地の租界に於ても英人は常に優勢な地歩を占める。例へば上海共同租界に於ては彼等は行政權を握つて居り、租界の警察權、司法權及び立法權は固より、特殊の事業例へば電燈、電話、瓦斯、水道と云ふが如きは皆彼等の壟斷する所である。經濟上の確固なる地歩を占むるには土地に據ることが必要で茲に英人は其の勢力を利用して土地信託の制を設けた。例へば在上海の英國辯護士プラット、マクレオド及び公易律師(今は上海に居らず)の如きは一人にて數百筆の土地信託を得て居る。故に英人は事實上彼等に屬せざる土地の上に名義上所有者として權利を有し、是に因つて彼等は地主として納稅者(Ratepayer)となることを得、上海の帝國議會たる納稅者會議に於て英人は常に絶對多數の議員を有することゝなつて居る。斯くして上海の行政立法は悉く英人の意思のまゝに動くから、上海は名は共同租界であるけれども實は英國の專管居留地たる觀がある。支那との締約國十八個國が共同にて管理する此の自治地帶は政治的には全く英國のもので、總歲入の六割强は支那人の負擔する所であるが、彼等は納稅の道具たるに過ぎなくて何等の參政權をも有つて居ない。一九一九年八月、支那人は遂に聯合して工部局(上海最高行政府)の增稅に反對した上海未曾有の事件がある。反對の理由は、支那人が上海の直接間接の稅金で市歲入の大部分を負擔して居るに拘らず何等參政の權利を附與されて居ないのは不當であると云ふに在つて、支那商總會(商業會議所)を通じて市參事會員の椅子を要求したのである。畢竟、增稅と市參事會員の椅子との交換問題であつたが、根本は歐洲戰爭の影響を受け、彼等支那人の權利思想が萌芽し來れる結果に外ならぬ。市は事態容易ならざるを看取し、財政顧問三名を任命することゝして落着したのである。

兎に角、水の低きに流るゝが如く、蟻の砂糖に集まるが如く、其の初め通商條約中に僅かに數個條の領事裁判に關する條項を挿入し、之を土臺として尺土寸地をじり／＼と占進し、今日では萬域萬里、利權と云ふ利權は細大漏さず外人の勢力に支配さるゝこととなつたことは其の根氣、其の執念深きことと驚くの外は無い。煩雜ではあるが其實際の一般を擧げて見るならば大體下の如くである。貿易港の占領、郵便局（是れは本年から撤廢）、租界及び居留地の獲得、租借地の領有、勢力範圍の設定、優先權の特定、內地貿易及び居住權、關稅の制限、內水通航權の獲得、之に附隨して埠頭及び倉庫を設置するの權、水路測量權、引船權等も順次に許された。水路測量權に就いては最初、一八九〇年、佛國軍艦が之を試み支那の抗議に遭つたのであるが、北京外交團は協議の結果、水路測量權も亦條約中に當然包含されて居る權利であると決定して了つた。此の時、米國公使のデンペー大佐は、支那に測量術の發達せざるを理由として斯る人道的仕事に對しては支那は抗議するの權利なきものであると主張したと云ふから、實に其の暴論に驚かざるを得ない。夫れから軍艦の內水航行權も最初問題とされた、何となれば斯る航行權は商船に限られてあるからである。實際、外國軍艦が內地の河水を自由に航行することになつては其の險吞なること測り知る可からず、支那は抗議したのは無理で無いのである、併し乍ら、一八五八年の英清條約第五十二條を解釋して軍艦も亦內水航行の權ありと頑强り、遂に一九〇三年米國砲艦ヴイラロボス號は內水航行を敢行したのである。

內地旅行及び通商の權も亦漸次擴張され、例へば外國商人が內地で支那人を代理商として雇入れた場合に此の代理商は單純なる支那人と看做されるのである（一八六三年の支和條約第三條參照）が然し今日の實際は左樣で無いこと前既に法權の割據の節に述べた通りである。其他合辦事業に投資の權、土地所有の權の如きも其の內容は擴張され、殊に耶蘇敎の傳道には租界外と雖も土地の所有が許容されて居るので、彼等によつて占領されて居る面積は實に莫大なものである。最も著しき例は浙江の名山莫干山（莫耶干將の二名劍を鍛へた跡だと稱さる）九江の廬山、漢口附近の雞冠山、山東の泰山等には夥しき土地を領有し夏時の避暑地として名を成すに至つて居る。租界及び貿易港內で外人の土地所有は許されて居るが、其の境界を越へることは出來ない筈であるけれども、條約文中に At other places なる字句があるのを英國政府は廣義に解釋して貿易港に接近せる地帶は之を包含するものとし此の筆法でドシ／＼租界外に土地を買收したのである。權力を有する英國の事であるから、暖

味なる條約文は悉く自己に有利に解釋して以て大英帝國の權威を示したのである。弱き者よ、汝の名は支那政府である、斯くして、鑛山採掘權、鐵道敷設權、耶蘇教傳道權の如き決河の勢を以て浸入して來たのである。日本の佛教布教權の如きも實は一八六八年のバーミンガム條約第四條中に當然包含されて居る可き筈なのであるが、外國宣教師團の防害か、乃至は外交上の失敗かは知らないが、兎に角一九〇五年以來屢々最惠國條款を以て支那に迫つたけれども遂に成功しなかつたのである。此の外國宣教師は內地深く浸入して密偵の役目もすれば間諜の役目もすると云ふ危險千萬なもので、遠く所屬領事の監督權を離れて行動して居るから條約上からは當然支那の地方法の適用を受く可き筈であるが（一九〇三年米支條約第十四條參照）實際は矢張り外國領事裁判權の支配下にのみ置かれて居る。斯る害毒を列擧すれば數も限りも無いが、其の潮の如く浸入する限に餘る特權の連鎖は白蟻の如く支那の骨髓深く喰ひ入つて居る。汎ゆる特權を外人に吸ひ取られ領事裁判權で追及されるので、支那人は商賣上優勢な地步を得ることが出來ないので、彼等は買辦（コムプラドール）と云ふ一種の請負又は代理の如き不可思議なものになつて、外人の下廻りとして商賣することを考へたのである。支那に獨立商人の大なるものゝ無いのは其の內て來る所以が斯んな所にある。

五　賄路の天下

支那の役人程賄路を取るものが無いと云ふが、支那に居る外國官吏も亦隨分賄路を取ることにかけては支那人に劣らぬ。上海に會審衙門と云ふ國際裁判所がある、租界內の支那人を被告とする條約國臣民との民刑事件並に支那人對支那人、支那人對無條約國人、無條約國人對無條約國人の民刑事件を取扱ふので事件の多いことも恐らく世界第一であらう。夫れに小は區裁判所事件や警察事故より大は大審院の事件まで悉く此の一審裁判所で處理するのであるから其の雜沓、其の混亂、まるで魚河岸である。茲に出入する裁判官は支那の裁判官と關係國の會審官であるが、事件が數國の臣民に關係ある場合には此の會審官の數は二名、三名と多きを加へ、夫れが各々自國人の利益の爲めに判決に干與するのであるから往々にして國際的爭議となる場合がある。往年、申報事件として上海の新聞界を騷がした事件の如きも利害關係國は日本と伊太利とであり、日伊の會審官に意見の相違があり、此の一個の同一事件に對し日本會審官と伊太利會審官とが各々別個の判決を下し茲に一個の事件に就き二個の判決が言渡された珍事件がある。紛爭に紛爭を重ね解決の途が

無く英國會審官が仲裁に入つたけれども容易に落着せず、結局は日伊の實力に訴へるより外なしとまで進んだのである。此の事件の原因たる申報は元來、日本新聞として登記された漢字新聞で上海に於て最も有力なる新聞であつたが、遂に結果は日本に不利で、該新聞は日本の國籍を離れて了つた。最近に於ても之に類した事件があるが法權割據の結果斯る活劇は屢々繰返されるのである。

訴訟を依頼する支那人は有力なる會審官を有する國の辯護士を依頼し以て自己の事件を有利に解決せんと謀るので、其の結果英米の辯護士は其の數も非常に多く、彼等は所謂背後に在る自國國權に威光を見せ、仍て以て弱き支那人の依頼心を滿足せんとするのである。此の弱點を充分に承知して居る支那の役人も亦決して拔目なく、辯護士を取卷く所の支那人の通譯、裁判所の使用人、何れも夫れ〲色々な方法で依頼人から金を絞り取ることにかけては一歩も讓らぬのである。某外國領事の如きは此の點に於て特に拔群の敏腕を有して居るとの評判で、正義も糸瓜も有つたもので無い場合も屢々であるとか聞く。憫れなる支那人は民商事々件でさへドシ〲牢獄の裏に繋かれるといふ世界に類例なき法律の下に泣いて居る。地獄の沙汰も金次第金さへあれば大抵の無理が通るのも亦會審衙門である。袖の下さへ使へば牢獄内で阿片を吸ふことも出來れば、夕刻には散步に出掛けることも出來るといふ珍無類な至極平民的に砕けた所もある。

前にも言つた通り、小は警察事故から大は大審院事件に至るまで、此の一審にして終審たる會審衙門で處理される所から車夫馬丁の科料事件より喧嘩口論の果てに至るまで押すな〲の繁昌で法廷は何時も滿員の盛況である。何しろ一個年五萬件以上も處理されるのであるから一日に百件多きは數百件の事件が短時間の間に右から左に片付けられて了ふ。故に警察犯處罰令の範圍に屬する事件から輕き刑事事件の如きは十數秒乃至二三分の時間で判決される。裁決流るゝが如しとは會審衙門を見て來た者で無ければ說明は出來まい。犯人が印度巡捕、支那巡捕乃至白人警官に依つて法廷に引き出され一二言訊問されたかと問ふと罰金何程、體刑何日と喰はされる。中には寃罪もあらうし誤判もあらう、又た不相當な言渡も有るであらうが一審で終審たる會審衙門では他に救濟の途が無い。泣く、喚く、罵詈嘲發、相呼應して地獄其のまゝの修羅場を現出する。會審衙門は前清時代より惡くなつたとは多くの人の言ふ所である。領事裁判所としても會審官としても、最も公正に規則通り裁判するのは恐らく日本丈けであらうとは之も定評ある所である。

今や、上海商總會を中心として會審衙門の撤廢運動が持ち上つて居る、此の裁判所の存在することは蓋し支那人としては堪へ得ざる所であらう。

領事裁判權の强味は以上の外に控訴及び反訴の場合に在る。領事裁判所に於ては同一事件に就ても反訴を提起することが出來ない。故に例へば日本人が米人より訴訟された場合に、日本人は此の米人に對し反訴を提起せんとせば米國の領事裁判所に於て別個の裁判をするより外は無い。更に控訴となれば、大抵皆な其の本國裁判所に於てせなければならぬ。英米兩國は上海に高等法院を有つて居るけれども、此所では其の臣民間の領事裁判所事件の控訴をのみ取扱ふので、他國人よりの控訴は彼等の本國裁判所が米國ならばマニラの法院に繫屬するのである。先年、上海で日本人某が諾威人を其の領事裁判所に訴へ、敗訴して更に控訴せんとしたら、該控訴事件は諾威の首府クリスチヤニア市の法廷で取扱はれるといふので止めた事がある。

葡萄牙領事館は國籍の賣買で有名である、一件何程かの料金(實際は非常に高額であるとの事)を以て直ちに歸化せしめ其の國籍を與ふるのである。犯罪を犯して訴追を免かれんとする支那人、又は民事上の訴訟を提起され又はされんとしたる場合之を免かれんとして葡國領事館に走る支那人は非常に多く、現に昨年此の問題は英國會審官と葡國領事との間に爭となつたのであるが、理由の如何を問はず罪は領事裁判制度に在ると私は思ふのである。

六　法制の改革

羅馬法や英米法が果して支那法に優つて居るか否かは疑問であること恰かも西洋文明が東洋文明の上に在るか否かが問題であると一般である。一體、種類や內容を異にした文明を優劣論で比較することは間違つて居る。東洋文明には東洋文明の特長があり、西洋文明には西洋文明の特質がある、相異れる二者を捕へ來つて其の甲乙を決せんとするのは小供じみて居る。支那の法制は白人等が當初考へた如うに淺薄なものでも無く下等なものでも無い。寧ろ、其の久しき間に亘り發達した、民情風俗の實際、國情社會の眞實に觸れた油然たる一大特色のある法制であることが研究の結果解つて來たのである。支那の法制を改革するならば、此の大特色を失はぬやうにして改良す可き筈のものであるけれども、目的たる領事裁判權の撤廢には矢張り、嘗て日本がやつた如うに西洋風に改正しなければならぬといふのである。否な西洋の法制に屈服し降參した事を事實の上で表明しなければならぬ。其所だから、清朝の末年に於て、伍廷芳

を委員長とし、日本の法學者を委員として組織した法律改正委員會の起草した草案は何んだ彼んだで久しく發布されずに放任してあつたのである。例へば民法の如きも草案が出來て居るが未だに發布されず、商法は僅かに商人通例及び會社法（公司條例）丈けが公布され、刑法は一九一二年三月三十日に大總統令で第一草案の或條項を廢止し、次で一九一四年の末に暫行刑律が議會の承認を得たが、第二次改正が此時から計畫され、一九二一年二月、第二次改正草案が出來た。其の參照した所の刑法は、一八七八年の匈牙利刑法、一八八一年の和蘭刑法、一八八九年の伊太利刑法、一八九三年の墺國刑法、一八九九年のスーダン刑法、一九〇三年の瑞西刑法草案、一九〇四年の埃及刑法、一九〇七年の日本刑法、一九〇九年の獨逸刑法及び一九一四年の獨逸刑法改正委員會の決議錄等である。

領事裁判權の撤廢は法律制度の改正を待て初めて出來る相談であるから、支那は過去十數年間に於て、六法は固より、行政各部の關係法令を一通り改正したのであるが、之と前後して裁判所の改良、監獄の改革をも行ひ鋭意列國の意を迎ふることに汲々として日も足らなかつた。財政常に窮乏して居る支那が兎も角、全國に亘つて四十四の高等法院及び檢察處、三十八の同上分院、百〇二の地方法院及び檢察處を有し、三十九個の模範的監獄を造營したといふ事は如何に彼等は外國法權の壓迫に苦惱して居るかゞ推斷に難くない。一九一七年八月十四日、支那は獨墺に對して宣戰を布告し、當時支那の領海内に碇泊して居た獨墺の船舶十二隻を捕獲し沒收して了つた。其の捕獲審檢處の判決は司法部で發行する司法公報に詳報されたが、其の文辭の正々たる、其の理由の堂々たる誠に申分の無いもので之が陳大理院判事に依り英譯され歐米に頒布された。當時倫敦の雜誌 The Contemporary Review に一英國法學者が次の如き讃辭を呈した、"It is not proposed to Consider in detail these decisions, but they are a diìinite Con'ribution to that great field of prize law opened by Lord Stowell."……

支那が其の古來の法制を全く棄てゝ西洋の法制に降伏することの可否は今暫らく玆に論じないことにするが、領事裁判權と之と形影相伴ふ居留地の撤廢は支那の政局を安定にし、國内統一の上から見ても實に焦眉の急に屬することゝ私は思ふ。何人も首肯する如く現今の居留地は革命黨又は反逆者の隱れ場所で軍費の調達、武器の密賣は居留地を樂屋とし、外國商人を役者として常に此所で演ぜられる。故に支那の政局は居留地を搖籃として恰かも時計のペンダルの如く左右に動搖して止まぬ。或人の言つた如く、支那の政爭は上海の樂屋で仕組まれて北京の舞

裏で演ぜられるとは全く眞實である。勿論、居留地が無くなれば同時に支那の政爭が消滅するとは云はない、併し南北の統一、政局の安定に一大關係を有つて居るものは居留地であることを斷言し度い。

法權の改革は領事裁判權の撤廢を目的とするもので撤廢の曉には居留地の廢止となり內地雜居となるのである。今日の實際は內地雜居も事實上支那に行はれて居るといふ有樣であることは、列強の臣民は條約上の制限を突破して內地深く闖入して居るに徵して見ても明かである。居留地と條約港とは支那に取つて刺胳の如きもので、白人は是によつて有色人種の膏血を吸つて飽くことを知らぬ。其の實害の如何に慘憺たるかは『法權の割據』の節に於て述べた通りであるが、尙ほ一つ附け加ふるならば外國銀行の紙幣發行權である。彼等は國內法に依つて支那に於て流通する紙幣を發行する特權を附與されて居るが、制限外の發行卽ち準備金なくして制限額を超過した或る額の紙幣を發行して居ることは公然の秘密と謂つてよい。單なる紙片に印刷して之を百弗十弗乃至五弗の金銀硬貨と同樣に流通せしめ、利息を得、擔保を供せしむるのであるから、其の數十百の外國銀行に吸收される支那の財產は蓋し想像以上に達するであらう。見よ、數十年前、一支那人より僅か數千余の銀貨を借用して設立したホンコン、シヤンハイ銀行は現今では銀二千萬弗拂込、預金英貨四百五十萬磅、銀二千三百五十萬弗、四十餘個所の支店及び出張所を有する大銀行となつた、其他、チヤータード、バンク。マーカンテル、バンク。オリエンタル、バンクコーポレーション。白耳義銀行。印度支那銀行。和蘭銀行。露清銀行等枚擧に遑あらずである。我が正金及び臺灣銀行も亦紙幣發行權を有つて居るが、之等紙幣が彼の排日騷ぎの時、其外國人の教唆によつて全く支那人間には流通杜絕の運命に陷つたのである。故に領事裁判權は之を敵本主義に逆用すれば隨分思ひ切つた殘虐行爲に出でることが出來る。

一八九八年七月十三日、時の英國外務大臣サリスブリー卿が北京公使クロード、マクドナルド氏に打電して曰く、『居留地の戰(the battle of Concessions)は吾人に有利だとは思はれぬ云々』と。成る程、支那の近世外交史は特權と居留地の爭奪戰の連續に外ならぬ。八十年間も此の爭奪戰の渦中に呻吟し備さに洋鬼(ヤンクイー)の害毒を嘗めた支那人は思へば氣の毒千萬の至りである。其所だから、如何に白人が學校を建て、病院を設け、宣教師をして神の福音を說かしめたからとて、支那人の洋鬼(ヤンクイー)に對する復讐心は決して消滅して了はう筈が無い。曾て、一支那人が病みて將に死なんとした際、其子を枕頭に呼んで曰く、外國醫

館の恩を忘れるなと。彼は屢々外務の厄介になつたからである。其子は父の遺言に基き遠路を上海まで來り、英國總領事に面會を求め恭しく贈物まで呈したが荷作の上には、大英國鬼總領事某閣下と漢字で書してあつたと云ふ。洋鬼は遂に何處までも洋鬼で、支那の法制の改革は實に此の鬼害を除去せんが爲めに外ならぬ。

七　日本法系

支那は領事裁判權を撤廢する爲め鋭意努力し、先づ其の法典の編纂を行なひ、大體に於て日本に範を則つたのである。此の意味からして支那は日本法系に屬するものと謂つても可からう。日本の支那に對する文化中、最も大きなものは司法であらう、其の法律が日本の飜譯であると云ふばかりで無く、之を運用する裁判官の多くは日本留學生であるからである。此の日本法を母法とし、日本の留學生を以て裁判官とする支那の法制を健全に發達せしむる義務は日本に在ると思ふ。然るに日本の學界は此の支那留學生の卒業後は丸で兎の生みつ放し同然に何等の連絡も指導もして居らぬのは、收穫期に其の果實を放棄して置く如うなものである。米國の如きは其の母校が歸國後の支那留學生に對し實に至れり盡せりである。

日本は自から領事裁判權の苦痛を經驗して、之を撤廢した後の國運隆盛に鑑み、日本法系擁護の精神を以て一日も早く支那をして領事裁判權の束縛から免れしめなければならぬ。對支貿易の如きも、關稅の改正と相俟つて地の利を有する日本は決して歐米人の爲めに敗らるゝものでは無いと思ふ。歐米人の貿易上有利なるは法權と關稅のハンデキヤツプに因るもので、日本が條約改正前嘗めさせられた苦い經驗である。日本の領事裁判權撤廢後、干潮の如く退いた外國商館は今支那に於て羽振を利かして居る。若し支那より領事裁判權を撤廢するならば、彼等は到底日支商人の敵では無いのである。日本人は其の風貌、言語、風俗の點よりして、且つは其の生活の簡易なる點よりして、必ず歐米人と太刀打して勝利を得ることが出來ると私は確信して居る。領事裁判權の撤廢と共に吾々は支那の法權に服し、日本の留學生諸君に依つて充分司法權が行使されんことを希望して止まぬ。支那人は由來、妥協商量に長じた國民であるから撤廢後は、支那の主權を侵害せざる範圍内に於て一時過渡的の便法を設くるも亦一策であらうし其點は敢て心配する程のことでもあるまいと思ふ。

歐米人は領事裁判權存在の理由を說明するに方り、或は宗教の相違から論じ、又或は東西文明の異同から說いて居るが、果

して然りとせば、彼等も亦其の本國內に於て東洋人に對し領事裁判權を許容せねばならぬ筈である。或る學者、例へばマルテンスの如きは、領事裁判權は權利であると同時に義務であると說いて居るが、斯の如きは耳を蓋ふて鈴を盜むの類である。

文明の相違を云々するが、夫れは東西文明には確かに相違があり、東洋文明の決して西洋文明に劣つたもので無く、否な寧ろ更に大きく深い文明であることも今日では承認されて居る筈である。彼のゲーテのファウスト以來の大著なりとして名聲を走せたミュンヘン大學教授オスワルド、スペングラー氏の『西洋の沒落』(Der Untergang des Abendlandes) に於て、印度、バビロン、支那、埃及及びアラビヤの文明を賞揚し、西洋文明のみが文明で無いと喝破して居るのは吾々としては寧ろ當然の感がするが、併し、白人自からが東洋文明に兜を脫いだ所に面白味がある。

既に、獨逸、露國、墺太利、匈牙利等の對支領事裁判權は撤廢されたのである。支那と云ふ世界に誇るに足る大文明の所有者を、巴爾幹半島に於ける群小國や、バルチック沿岸の諸小國や、南米に於ける半開國以下に置いて特殊な取扱をするのは如何しても其の理由を見出すことは出來ない。殊に況んや今日外國商人乃至宣教師は自國の領事裁判權や駐屯軍所在地を去る遙かに遠き支那內地に深く入り込んで仕事をして居るでは無いか。之等の事實も支那を以て危險千萬な國とする證據とはならぬ、却つて其反對の證據となるのである。

駐屯軍を引揚げたのも、郵便局を撤廢したのも實は時勢の然らしむる所であらう、領事裁判權を撤廢するのも最早や時の問題となつた、日本が若し率先して之を首唱しなかつたならば他日、再び華府會議の二の舞を演じ、只列國に追從するを餘儀なくされ、惡名は獨り自から蒙ると云ふ割の惡い事になりはせぬかと懸念されるのである。實際之を撤去する段取は列强共同で之を爲す可きで我れ獨り斷行す可き性質のもので無いことは勿論であるが、對支政策上、而して東洋の盟主たる以上、我は列强に先んじて其の撤廢を提唱せなければならぬと云ふのである。東洋に於ける經濟上の弱味を排除し、白人と對當の競爭を爲すためには、之を措いて他に無しと考へる(十二、二、四)。

無政治の發見から社會國家の發明へ

杉森孝次郎

政治は、現代に於いて、それの非存在によつて顯著だ。政治が、いかに現代に缺乏してゐるかは、第一には、最近の國際戰爭と、その後の國際紛爭とによつて、第二には、現時の階級鬪爭によつて、それから、第三には婦人參政の幼弱乃至未生によつて、そして、第四には、小兒の位置の不安によつて、最も具體的に答解される。

その名をあたひする政治が現代に存在するとは、政治の概念をいまだ曾つて正しく構成しえなかつた人のみが信じうる判斷だ。政治の常識的、科學的、及び哲學的定義は、その各自が反省することとだけを條件として完全に一致する。政治は、それのあるべきかたらとしては、人間協力の全體的範圍にむかつて、實に、その全體的範圍を直接の對象として　まとまとして、それを、あだかも一點の如くに觀じて、それに、組織を與へ、統整を與へ、結局、かくして、保導を與ふる代表的、實行的努力にほかならない。そのやうな努力が現代に未發達であることは、外交、外政、内治、内政、國策、國際政治などいふ名詞がさかんに通用しつつあるを見ても明白だ。現時に於ける人間協力の全體的範圍は、誰れがなんといつて反爭しようとも、事實上、全人類大だ。歐洲に戰火がつき廣がつたことが原因となつて、日本の經濟界が未曾有の程度に昂揚し、それの鎭火が原因となつて、日本の財界が急に薄ら寒くなつたことや、歐露に共產主義が崛起して、日本の思想界と青年の心調とが、魔杖に撫でられた催眠患者の容態に激變したことなどは、すでに陳腐な例證だ。このごろ、電車、乘り合ひ客の會話を聞聽したら、ルール占領の結果として、日本の染料がしたがつてある地質の友禪が騰貴したとか、瑞典パルプ工場の罷業が影響して、日本の紙價がのぼつたとかいふたぐひのはなし許だつた。かれらは、その方面の商賣に關係ある人人らしかつた。

實に、現代に於いては、職業界と專門界と、またこの兩者を廣義の生產界と見るならば、それに應ずる廣義の消費界とは、

決して國内的に限定されてはゐない。職業的、專門的、及び消費的興味と利害關係とは、各國境をば、風よりも自由にまたいで延び廣がる。われらは、いま、生産界及び消費界と簡單にいひ去つたが、廣義、最廣義の生産機能と消費機能とをかぞへつくすことは、すべての人のすべての内容をかぞへつくすことではないか。國家と國民とは、知識ある人人にとつては、いまや、ほとんど錯覺と幻覺とにすぎなくなつてゐる。正覺された國家と國民とは、眞に、全的社會と、全的社會民との不完全なるある部分にほかならないのだ。人間協力の全體的範圍は、二十世紀の青年代の前夜ともいふべき今日に及んでは、詩的理想としてでなく、科學的事實として、もはや、國家ではなく社會だ。國民ではなく社會民だ。

現代の一困難は、科學的事實としては、社會はすでに國家大や國民大ではなく、全人類大になつたにかかはらず、現代人の詩的及び道徳的理想に於いては、社會は依然として、いな、しばしば、從來にもまして、國家大であり、國民大であり、さらに小さく民族大でさへあることだ。科學の膨大に反比例して理想が萎縮したかたちだ。ちやうど、運轉手なき、あるひは、あれどもなきが如き小能の運轉手を乘せた猛勢な自働車のやうだ。戰爭も、その他の國際紛爭もそれゆゑに避けがたくされる。この際に社會が要する救ひはなんであるか。それは、その一とつは、疑ひもなく、眞正の政治だ。

外交、外政、内治、内政、國策、國際政治などいふ文字が公行してゐることとそのことが、眞正の政治の非存在乃至未發達をかたる。これらのことばは、すべて、各國を別個的に標準としたもののいひかただ。外、内、國と銘打つた場合は、くどくいふにも及ばずとして、國際政治といふだに、齊當ではないか。それは、智嚢、感情嚢及び意思嚢に於けるあまりに小さい經濟を示すでないか。國際の際は英語でいふならばインターだ。政治らしい政治は、現代の科學的事實を理解したものである以上、國際といはずに、單に社會といふとか、または、社會内、すなはち、インツラソーシャルとかいふべきだ。ことばは、一人の專用でなく、多數者の通用を條件とするから、ある少數者がそれらの廢、採用を、それらの表現に與へたとて、大した功績ではないが、また、場合を識別せずに與へてはわるいが、外、内、國、それから最も進んだところで國際といふ慣熟語に現代が滿足してゐるといふことは、單なる現象としてこそ、至つて小だと考へられる餘地もあらうか知らねど、それの背景としての現代國民心理及び現代社會民心理に於ける迷信と無想像を注意圏に入れて考察すれば、大きな問題だ。

日本は半世紀有餘前に廢藩置縣した。實は、廢藩立國した。近代的意義に於いての國は、民族的自覺を第一要素、主內容、支配條件とするがゆゑに、幕末日本から明治日本への移りは、封建的小地方主義から民族的全國主義への飛躍であつたのだ。見わたすところ、渾圓球上の全面にわたつて、維新の必要が熟した。先づヨーロッパを見るに、それが、今日、最も急要としてゐるところのものは、容觀的には、すなはち眞實の理性の判斷にしたがへば、國民主義的小異を忘れて、すくなくとも歐洲民主義的大同を思ふことだ。十九世紀のヨーロッパの誕生歌及び進軍曲であつた國民主義は、そのままのかたちに於いては、二十世紀のヨーロッパの挽歌であることが、歐洲戰の最高價の教訓であつたのだ。戰後、現在のヨーロッパは、しかしながら、この教訓に傾聽しない。ヹルサイユ條約は、ジエノア會議の成功を待つてそれの罪過を懺悔すべきであつたのだが、そのジエノア會議は流產した。獨佛間、英佛間、ロシヤ及びそれの西南隣、バルカン諸國、さながら元龜、天正の發達した擴大圖だ。

政治らしい政治は、十六億の人口を一人の如くに觀じて、すくなくとも一國民の如くに觀じて、立法し、行政することでなくてはならんが、現在のヨーロッパ人に、直ちにその意思を期待しえない事情があると假定しても、いまあるだけの歐洲の地面と人口とを、そこにいまあるよりも數すくない國家または國家的政治團體を分母とする分子として持つことが、現在のヨーロッパ人の自己保存のためにも、社會奉仕のためにも、最低限の一必要事だ。たとへば瑞典、諾威、及び丁抹の如きは、一團の新國家または聯邦を形成する方向に進步してはどうか。かれらの間には、比較的に、種族的及び言語的類同もある。勿論、かれらの間に競爭關係はあるけれども、すでに通貨に關しては共同政策を執り來たれる歷史もあり、いまはまた、かれらは、勞働問題の研究のための一組織を共有してゐる(バーンス氏による。フィンランドがそれに加はることもよからう。似た試案は、バルチック近邊の諸國にも、バルカン諸國にも、歐洲のその他の部分にも、多少の難易別、條件別を附して成り立つ。

いはゆる西半球または新世界としてのアメリカを見れば、そこには、マンロー說の進化したかたちがある。それと關聯して、早くすでに成功の曙光を投げつつある「汎米同盟」(パン・アメリカン、ユニャン)がある。南米及び中米は、いかにヤンキーの覇風に面をそむけながらも、合衆國の經濟的勢力の浸潤をいかんともしがたい近狀だ。經濟的に、現在の複數アメリカは、早晚、それは、實に、空想的に遼遠ならぬ、すなはち、現

實的意義ある將來に於いて、合衆國を先達とする單數アメリカになるだらう。そして、これは、人類社會全體から考へても望ましい將來だ。南米自身についていへば、それの雄藩ともいふべきブラジル、アーヂェンチン、チリ三獨立國の間には、一種特絶の盟約關係が結ばれてゐる。全南米的一大新國家または聯邦への礎地はでにいくらか準備されてゐると見るべきだが、それらの三獨立國をはじめとして、またそれらに限らず、およそ、南米及び中米の政治組織としての共和制は、元來、北米合衆國の共和制の成功に範を取つたものであるといふ事實が指示する如くに、北米合衆國と、南、中米の大部分との間には、單に地理的近親があるばかりでなしに、思想的近親があるのだ。

聯邦または聯邦的大國家を、隨所に新設する要があるが、この目的を達するためには、思想的近親が一大要件だ。單なる「同盟」、「協約」、「協商」、「聯合」といふやうな、從來ありふれた程度、性質の關係などは、それの成員たる各國の政治原則が、またその政治原則の原則たる常識原則、倫理原則、教育原則、哲學が、いかにかけはなれてゐるか、いかに相理解しうるかは、ほとんど問題とはならない。戰前に、ザアのロシヤと佛とがなれそめ、共産露に變はるに及んで佛が敵變した一事に見ても、ザアのロシヤとよりは、政治的原則や思想、趣味に於いて、ホーヘンツォレルンの獨と、はるかに高度の近親をたしかに有した英が、一九一四年の夏から二歳有餘間、前者と組んで後者に敵對した一事に見ても、この通則は察せられる。けれども、そんな一時的、臨時的、そして、單なる暫存的利害問題や感情問題を共通に所有することを基礎とする、また解決することを目的とする結合でなしに、深く、廣く、永く全體的に交友關係を確立するためには、その成員各國は、政治原則をはじめとして、文化生活の上に、ある最低限の共通目的の意識、自覺、もしくはその意識、自覺を、必要に應じて現實にしうる條件を必要とする。立國の理想に於いて共通の呼吸と脈動を感じうることが必要だ。憲法は、それゆゑに、現代に於いて、各國の愛國者の嚴正批判を要する。現代に於いて、反省の道德的責任を有する事實は勿論枚擧する遑なき數に達するが、憲法は、實に、眞つ先きに注目される一項だ。

いはゆる同盟や協商は例外だ。われらが要求するところの關係は通則だ。國際聯盟の如きも、通則を孤立にして、例外を共同にする範圍內の一現象だ。聯邦または聯邦的大國家の形成は、立法、行政の原因と目的と區域とを、通則的に共有するにあるから、その聯邦諸員の間に、利害の一致は必要だが、情愛はそれ以上に必要だ。そして、理性の自己主張としての理想に

至っては、この兩者を一とつにしたもの以上に必要だ。最後には理性が支配するからだ。

パン・アメリカン、ユニャンが成功すべきであると同じ理由にもとづいて、パン・ユーロピアン、ユニヤンが早く生まれ、育たなくてはいかん。それから、パン・エーシアチック、ユニヤンが、同様に生まれ、育つ必要がある。全アジア聯邦が、もしくは全アジア國とも稱へべき政治的大團結が、現在の蠢動しつつある、そして、蝸牛角上の爭ひにふけりつつある數億の人口のなかから、數億の人口そのものから、雄起すべきだ。この際に於ける支那及び日本の使命は眞に重い。政治的には、支那は制度の内容を充實すべき餘地を絶大に持ち、日本はそれの形式を進化すべき必要を最高度に持つ。

攻守同盟といふ慣熟語が示す通り、從來は、國と國との間の握手といへば、それは、攻めるためとか、守るためとかいふ戰爭的意義を主として帶んだものであつた。この習慣は、しかしながら、もはや時代錯誤だ。純粹の政治目的にむかつて、すなはち、政治は、それのあるべきかたちに於いては、人間協力の部分的範圍でなく、それの全體的範圍としての社會を直接の目的對象とする一努力であるべきだといふ意識に於いて、その眞正政治實現の一淮步として、われら現代人は、先づ、せめても、一二三の延長、隣接の獨立國や民族單位の間に、新たなる一國を成長させて、全延的に發達させなくてはいかんのだ。戰爭も政治の一形態にはちがひないが、もつと包括的な、全體的な、そして、支配素に於いてもつと純粹に文化的な、生産的な、創造的な政治の目的を目的として、廢孤國され、立聯邦されなくてはいかんのだ。その意味に於いて、廢國立社會されなくてはいかんのだ。唯一の社會國家が、あまたの民族國家や、わづかな帝國主義國家に、進化的に取つて代はらなくてはいかん。

全人類を國民とする唯一の社會國家への道程としての大小の國際聯邦のあひだの精神は、最後まで友愛であり、制度は最初から責任であるべきだ。

現代のいはゆる立憲代議制諸國に於ける選擧方法を見ても、いかに現代人が、政治がなんであるべきかを知らないかが明白だ。またいかに現代人が社會盲であるかが顯著だ。ちつぽけな選擧區の投票をさへ集めればいいといふ制度下に於いては、外交や、國際政治などに本氣に興味を持つことは、議員志望者に取つて精力の浪費を意味するくらゐの事柄になる。この點から考へても、選擧制を地方本位だけにして置かずに、職業本位、またその相手としての消費者または使用者本位にもし、且つ、

問題本位に分裂進化させる必要が切實だ。たとへば、對支問題、對露問題、對米問題の發見、研究、解決を目的とする組合の如きものが國内もしくは全國に形成され、その單數もしくは複數の組合が、それらの問題に對する議政的代表者を物色もし、推薦もするといふ事情が、すくなくともさしあたつて望ましい。いまの制度では、すでにあまりに小さい一國の、さらにまたあまりに小さい一地方の住民の特殊の利益と興味をばかり、政黨も、議會も、愛護すべく腐心する傾向が助長される。現代のいはゆる政治が、あらゆる意味に於いて、單なる地方政治にすぎないことは、現代政治を、どの側面から觀察してもすぐに露顯する一大不完全だ。

　地方政治なら地方政治、一國政治なら一國政治と、制限を明白にして意識し、また普通には呼ぶべきだ。政治といひつばなしにする場合には、それは、人間協力の全體的範圍としての社會を、純一の生活だと正解して、それを保導するために、組織し、統導することでなくてはならん。それ以下のものであつてはならん。

　もしも國家を、國家といふ名詞を、永久に政治の實體に對する本名として保存する必要を感ずるならば、その國家は、常に全社會的政治組織としての社會國家でなくてはならんといふ要件を、その人は、知らなくてはいかん。

　發見は現實だ。將來は發明によつて代表されべきだ。現代に政治らしい政治がないといふ事實を發見した以上、われらは、現代の進路のために、政治らしい政治を發明しなくてはならん。その政治らしい政治の發明は、社會國家の創作にある

　政治は文化の一機能にほかならない。文化の一機能としての政治は、全文化に奉仕することを目的とする。全社會と全文化とは、同體にして一質だ。一民族や一國民だけの文化に奉仕するつもりの政治は、實は、欺むかれた努力だ。文化は、それの本質に於いて、民族を支配するが、民族に支配されることは出來ない。文化奉仕の意識に於いて、われらは、政治の眞認識と、社會國家の生育を望む。

デルカッセからポアンカレーへ

(佛英外交の大變遷)

法學博士　米田實

一

一九二二年は佛蘭西に取りて、何等の凶年であるか、新春匆々有名な外交家政治家の、凋落するもの相踵ぐの觀がある。即ち一月十三日には「露佛同盟の親」アレキサンドル・リボウが死んだ、彼は最早八十二歳の老翁で、長く胃病を患ひて居たため、其命數も既に豫測され、餘り多くを期待されて居なかつた、然も此一月「プラス」に於て行はれた上院議員の補缺選擧に出掛け、猛烈なる運動を行ふて巴里に歸るや、聊か疲勞は感じて居たが、尚且家族や醫師の注意勸告を斥け、依然として佛蘭西政界に、活動を繼續して居たので、遽かに此事あらうとは思はれなかつたのである、ところが一月十三日（土曜）の夜八十二歳を一期として、彼の生涯は茲に終焉を告げたのである、餘りの急病に友人親戚中には、其臨終にすら間に合はなかつたものが多かつた。彼は屢外務大臣總理大臣の顯職に在り、其功績亦乏しく無いが、就中一八九〇年フレーシネ內閣の外務大臣として、在任二年間に於ける彼の活動努力の功は、顯著なるものでなければならぬ。一部學者は論じて曰く、公式に佛露兩國の外交代表者間に該同盟條約が調印せられたのは、一八九四年であるから、リボー時代では無いと、併し這は精神を忘れて形式の末に奔つた議論と言はなければならない、一八九一年既に一朝有事の場合には、佛露兩國相提携し、之に處する方法に就て、協議することを約束し亦翌一八九二年には成程外交代表者間の、調印は見るに至らなかつたが、軍事的に相互相援くるの約を爲せることを見れば、實際の佛露提携は此リボウの時代に於て、成就されしものと見て何の差支へがあらう。されば佛人が今日此老政治家の卒去に就て、痛悼の意切なるものあるは、決して無理なきことと言はねばならない。

然るにリボウ逝いて四十日、リボウ以上の外交家、佛蘭西に取りては一大恩人であり、歐羅巴に於ても殆ど其比類を見ざりしほどの、大外交家、換言すれば、英佛協定を確立し、佛伊の提契を定め、以て獨逸をして歐洲大陸に孤立せしめ、延いては今次の大戰爭に於て、佛蘭西側の大成功を招來した所の外交的基礎を作つた大外交家テオフイル・デルカツセ氏が、亦リボウの後を逐ふとは誰か之を期しやう。然もデルカツセの死も亦リボウの死の急遽なるが如く急遽であつた、而して彼はリボウに比して十歳の弟として、即ち七十二歳を以て永劫の眠に就いたのである、其活動力、其奮闘力、蓋しリボウ以上であつたことに鑑みて、佛國民殊に國際關係に通ずる識者側の之に對する哀惜の念は恐らくは一層深からざるを得ないであらう。されば此際予は少しく彼の人物と、其功業を回顧することも、決して無意味なことではなからうと思ふ、況んや彼が確立したる外交政策即ち、歐洲大戰に於て佛蘭西側の大成功を齎らさしめた所以の政策は、今や將に變轉の時期に際會して居るでは無い乎、否現に着々變轉しつゝあるのでは無い乎。見よ、「クレマンソー」を經、ミルランを經、ブリアンを經、今の首相ポアンカレー氏（前大統領）に至つて、今や英佛間の乖離は歴然として・否認し得可くも無い現實の問題となつて來たのである、即ち英佛間決裂の姿は、目下歐洲の大問題となつて居る佛蘭西軍のルール占領に於て遺憾なく現はれて居る。而して此佛英外交政策の變遷こそは、歐洲將來の國際關係を、左右するのみか、更らに世界の平和に影響を及ぼし、延て其飛沫は遠く我日本に及ぼす無きを保せられぬでは無い乎。

二

然らば「デルカツセ」とは如何なる人であるか、先づ其經歴を檢して見やう。彼は一八五二年佛蘭西の南部「パミエー」に生れ、刻苦自から身を立てたる人である、而して彼の最初の生活は、小學校教員より出發したものであつた、彼の教員在職當時佛蘭西の政界で最も聲名を馳せたる英傑「ガンベツター」は、彼等教員の間に於て評判頗る高く崇敬の的とされてゐたので、彼の地方の教員連も低い俸給の中より醵金して「ガンベツター」に敬意を表するため、献品することになつた、其時献品の使者に選抜されたのが、年猶若き「デルカツセ」其人であつた、而して彼は「ガンベツター」との會見に於て、一種の衝動を受け、彼をして志を大に政界に寄せしむるに至る動機を爲したとも謂れて居る。斯く政治に志した彼は、先づ教員の職を擲ち新聞記者に身を投じ、遂にプブリツク、フランセーズの記者

となつた、今日同紙は保守主義者の言論機關と化して居るが、當時は急進派であつた。彼はそれより地方の縣會議員の如きものに擧げられ、三十七歲にして初めて佛蘭西代議院の議員となり、爾來其職に居つたのである。身を官邊に置いたのは一八九三年即ち四十一歲の時で、此度彼よりも四十日前に死んだリボウを總理とする内閣に殖民次官となつたのが、彼の漸次人に知らるるの始めであつた。翌年四十二歲の時「デュプイ」内閣の殖民大臣となり、四年後の一八九八年にはブリスソン内閣の外務大臣となり、其職に留まること茲に八年の長きに亘り、此間に英佛提携の基礎を作つたが之が爲め獨逸の惡感を買ひ、遂に引退を餘儀なくせらるゝに至つたのである。

一九〇四年彼が有名なる英佛協約を作るや、利かぬ氣の獨逸皇帝ウイルヘルム二世は、一方に英佛協約を破碎し、他方にデルカツセを佛國政府より逐出さんと企て、モロツコ問題に就て、國際會議開催を要求した。當時デルカツセは外相として、飽くまで之に反對せんことを求めたのであつたが、時の首相ルビエーは此提議に、反抗するの力と決心を有せず、遂に國際會議召集に關する、豫備談判を開始することゝなり、デルカツセは憤然として其職を辭したのであつた。斯の如く獨逸皇帝は英佛協約の破壞には成功し得なかつたが、デルカツセを佛蘭西内閣より驅逐することには成功を收め、其企圖の一端は達成せられたのである、而して當時獨逸外交の衝に當れる、ビユーローはデルカツセ排斥の功勞に依りて公爵を賜つたのである。其後彼は議會に在り、海軍委員として、大に努力したが、一九一一年モニー内閣成立するや、海軍大臣として閣員の列に加はり、カイヨー内閣に於ても依然海軍大臣として留任し、更に一九一二年ポアンカレーを首相とする所謂全國一致内閣組織に際しても、彼は依然として海軍卿に留まり、佛蘭西海軍のために盡すこと多大なるものがあつた。而して彼の在任中に於ける功績即その外相として又た海相としての効績は今回の世界大戰に於て、遺憾なく顯現され承認された所である。一九一三年一月ポアンカレーが大統領に選ばるるや、彼も共に海相の椅子を去り、一度は駐露佛蘭西大使として赴任したが、次で歸國し、翌一九一四年世界大戰開始せらるるや、同年八月彼は赴いて外務大臣の職に就いた。斯くて彼は二度目の外相となつたのであるが、其任期は前回の八年の長きに對して、今回は一年二ヶ月を以て終り、即ち一九一五年十月辭職したのであつた、辭職の原因は戰爭政策に關する、他閣員との意見相違に因るもので、即ち彼は巴爾幹に於て、聯合國軍隊を活動せしむることに反對し、寧ろ其兵力を分割せず、佛蘭西戰場に集中するの得策なるを主張し、

その意見遂に容れられずして挂冠するに至つたのである。然かも引退後の彼も依然佛蘭西の政界の有力者として、活動することに變りはなかつた。

彼の容貌はと見れば背低く、體軀倭小なるため、佛蘭西議會にては、彼を綽名するに蚤の名稱を以てした、その鼻はブリアンの鼻の高きに比して、甚だ低く且反りかへつて居る、耳は非常に大きく額は縮んで居た、此風采擧らざる狀態は佛蘭西の雜誌其他に取りて狂畫の好題目とされた、併し奈翁後に於て現はれた佛蘭西の大外交家ターレランが、體軀小にして風采甚だ擧らざりし點に考へ及ぶと、デルカツセたるもの、何の愧づ可きことがあらう、否な、此中でも、其鋭い眼と締つた唇とは、彼の堅い決心と、眞面目さと、敏捷さを物語つて居たこと丈けは特記せねばならない、次ぎに彼の性格はと言ふと、非常に勤勉と嚴格とを以て名があり、又公平を以て知られて居た、彼は每朝必ず五時に起き、夜は必ず九時に寢る、朝起るや直に庭前の薔薇を弄り、次で散歩を爲し、朝餐を取ることを殆ど規則的に行つて居た。露都に大使として在任中も、矢張り早起と散步と早寢とは更に變りはなかつた、此習慣は露西亞の生活上甚だ不都合で、ホテルの主人などは彼の早起早寢には甚く困らされたと云ふ話がある。猶彼は大局を見るの明があり、常に其用意を忘れなかつたと同時に、極めて精細なる研究を怠らなかつた。曾て殖民次官たり大臣たりし二ケ年間に於て、佛國の殖民地問題に通曉すること驚くべきものあり、他の大臣の爲し得ざる所を究め、事物に對して相當の識見を有し、研究的長所を具備せることは、彼を知るものゝ齊しく認めて居る所である。彼は亦非常に嚴格にして、放漫なる態度を見なかつた。政治上の交際などに於ても固よりさうであつた、彼に就て殘されて居る一挿話は、彼が大臣在任中に貰つた鐵道等の無料乘車券を、大臣の職を辭するや否や直に返還せることである、之は普通の佛國政治家が却々實行の出來ない點である、彼は又た自から持するに嚴なるが如く、他人にも亦嚴であつた、此嚴格なる彼の性質が、彼の夫人を得たことに深い關係がある、彼の夫人は四十年前、或富豪の夫人であつた、一日彼は其富豪夫妻と汽車に乘り旅行しつゝある時、傍らに乘合せたる不作法なる一旅客が、喫煙禁制の客車中で盛に煙草を燻らすため、婦人側より抗議を申込みたる所、件の旅客は依然煙草を放さなかつた、之を見た彼は突然旅人の煙草を奪ひ取り車外に投棄てゝ了つた、投棄てられた本人は驚き怪訝の顏をしながら、喫煙を止めたといふ。之が遠因となつて、其富豪の死後未亡人となつた夫人をして、彼に心を寄せしめ、遂にデルカツセは自分の妻として同棲するに

至つたと言はれて居る。又た彼は政黨としては急進黨に屬して居たが、其進止行藏より見れば、黨人にあらずして寧ろ國家本位であつたことを知ることが出來る、彼は事の細目に通じて、然も大局を忘れなかつた男である、即ち木を數へて林を忘れず、木も數へたが林も亦見て居たのである。佛蘭西の內政に對してもさうであつたが、特に國際關係問題に於ては、常に大局を見而して將來の遠きを洞察した男であつた。彼は非常に愛國心強く、殆ど國家に獻身するの狀があつた、其一例を擧ぐれば彼は一九〇六年外務大臣を辭した後、力を佛蘭西海軍力の充實に注いだのである、彼は決して海軍問題を得意とする男ではない、寧ろ其方面には不得手であつた。然るに拘らず全力を海軍問題に傾倒し、腐敗せる佛海軍の改善に努力した、其動機は果して何に發して居るのであらうか。蓋し一九一六年佛蘭西がモロツコ問題に就き、獨逸に壓迫せられて、不本意ながらアルヘシラス會議を開くことに同意したのは、要するに佛蘭西が、獨逸の壓迫に對抗するだけの、武力を有せず、地中海、阿弗利加の海上の爭でも獨逸に及ば無い爲めであつた、ソコデ彼は最も痛切に佛蘭西海軍力の充實を圖ることの、緊要なるを感じ彼は自から進んで難局に當り、佛議會の海軍委員ともなり、後には自から海軍大臣の職に就き、佛蘭西海軍の建設改造に努力したのであつた。又た彼が世界大戰開始の少し以前に、駐露佛蘭西大使となつたのも、彼は愛國の至誠の爲めに自己の家庭生活を犧牲とし、又政治的運命の開拓をも犧牲に供したのであつた、何となれば祖國を離れて露西亞に在ることは、彼としては少くも政界に於ける地盤を失ふ所以であり、又露都ペトログラツドの生活は非常に不愉快なるものであつたからである。然かも當時佛國の利益は、彼の露都行を要求して止まぬものがあつた。それは外でも無い、當時佛蘭西の外交上に於て、最も重きを置かれたものは、云ふまでもなく英佛關係と共に佛露同盟の鞏固を期することであつた、然るに從前の駐露佛蘭西大使は、不人望のもの多く、常に失敗に重ぬるに失敗を以てした、彼が任に就く以前を見ると先づ二名の佛大使は相踵いで露西亞政府の希望により召還せられたのである、次に選ばれた大使は、一且露西亞政府の承認を得、既に官報に其任命を揭げられたる後に於て、有難からざる人物として、露西亞皇帝の拒絕に會した。彼が任命せらるる以前露都を去つた佛蘭西大使ルイも亦不評判にて、遂に露西亞宮廷の排斥する所となつた。斯る不運なる佛蘭西大使の繼續にては、同盟國たる佛露兩國の關係は、容易に改善さるべくもなかつた。玆に於てデルカツセは自から身を挺し、一切を犧牲に供して任に赴いたのである、是亦彼の熱

烈至深なる愛國心の表現で無くて何であらう。

三

以上は大體に於て彼の人物及性格を示したるものである、然らば彼の事業は如何と云ふに、海軍改革其他の事業も多いが、最も重大なのは、外交であつた、然らば彼は如何なる外交家であつた乎、少しく之を回顧すると彼の長所は、圓轉滑脱の材でもなく、亦燕尾服を着け宴會場裡に行はるゝ、華かなる交際術でもなかつた。由來佛蘭西人には言葉の巧みなる人多く、幾多の外國語を操るものも多いが、デルカッセは之に反して、外國語は頗る下手であつた、彼は二三ケ國語は讀み得たのであつたが、會話は餘り出來なかつた、併し其優れて偉とすべき點は、眞に國家の利害休戚を洞察し、目標を遠く將來に置き、國家の大策を確立し、對外政策を定め、之を實現することにあつたのである。此點に於て人物こそ異なれ、既に故人となつた我小村壽太郎侯は、幾分彼に髣髴たるものがあつた、小村侯は言葉は上手でなく、寧ろ沈默であつた、デルカッセ亦言葉は不得手で、沈默の場合が多かつた、彼は人と談ずることあるも、多くは自分の好める人、好める問題に就て能辯であつたに過ぎない、恰も學者詩人などの間に見る類である、小村侯は英國大使として、在任中は餘り評判も能くなく、其存在すら認められない有樣であつた、若し小村侯に優れたる點ありとすれば、之はデルカッセの風に近い點あることであつた、彼が常に將來に眼を注ぎ、目標を定め、其實現に向つて努力した點であり、常に遠大なる理想並に計畫を有つて居たことである。顧つて日本今日の外交家は如何、啻に其人なきのみならず、總て今日主義なるは、誠に歎ずべき次第である。

餘談は措て置きデルカッセの卓抜なる識見は、佛蘭西の對外交政策を確立し、之を實現したのである、勿論彼と雖も萬全を期することは出來ない、或一局部に就ての失敗なしとも云はれない、卽ち彼が聰明を以て尙且見方を誤つたこともある、一例を舉れば彼は日露戰爭開始の場合に於て、盟邦露西亞の戰勝を信じて居たことである、(併し彼は眞に爾く信じて居たのであるか、或は亦同盟國なるが故に、斯の如き態度を執らざるを得なかつたのか、是は自から別問題である、)併し斯かる些事は別として大體に於て佛蘭西を中心としての外交に於て、殆ど彼ほど見解を誤らず成功を收めたるものは、曾て一人もないのである。

彼の外交的事業を見るに、その小い事績はモロッコ問題に關し、西班牙佛蘭西兩國間に協商を作つたことであらう。卽ち佛

蘭西はモロッコを、自己の保護邦たらしむる方針であつたが、然もモロッコは地中海を隔てゝ西班牙と相對し、マリア及び其奥地一帶は、西班牙の勢力範圍にある關係上、彼との協定を巧みに行ふにあらざれば、佛蘭西はモロッコに於て地盤を確立すること能はず、從つて此協定を實現せしめたるは、全くデルカッセの成功と見なければならぬ。次には一八九八年西班牙と米國との戰爭に於て、其講和に努力したことである。即ち西米戰爭講和會議は、巴里に於て開かれ、該條約は巴里條約の名稱を冠して居ること、世人の記憶する所であらう、併し斯の如きことは抑も末に屬し、眞の彼の大事業は英佛の提契を定め、長く結んで解けざりし佛伊關係を改善し、之に依つて獨逸孤立を實現し、以て世界大戰に大勝利を博する根柢を、築けることに外ならないのである。

四

彼が成功の第一は、對伊太利外交であつた、抑も伊太利は奈翁三世時代、佛蘭西人の親厚なる同情を得、同國の軍隊の援助によりて、伊太利統一の大事業を完成したものであつた、又人種關係は同じラテン民族であり、長く親交は繼續されて居た。然るに獨逸の英傑ビスマルクの巧妙なる外交策により、佛伊間の關係は離間せられ、遂に不自然にも獨墺伊三國同盟を形成するに至つたのである。而して其同盟の主因何處にありやと見るに、佛蘭西のテュニス占領であつた、テュニスは伊太利の對岸に位し、阿弗利加の舊土耳其領土である、伊太利及佛蘭西人相半し、其勢力亦伯仲の間にあつた、然るにビスマルクは一八七八年の伯林公會の結果として、露獨の關係相離反し、國交舊の如くならざるに至り、獨逸としては、國策上の見地より第一に墺國と提携し以て、之に當るの策を講じ、一八七九年十月三日には、獨墺同盟協立の締結を見た。獨逸は單に露西亞のみを敵とするならば、墺獨同盟を以て十分なりとするも、顧て南方を窺へば、佛蘭西は普佛戰爭に依る怨恨を到底忘るるものにあらず、獨逸は前面と背後に佛蘭西と露西亞を敵としなければならぬ危險がある、從つて墺獨同盟のみを以てしては不十分なるを免れない、是が非でも伊太利を佛蘭西より離反せしめて、自己の味方に引入れ、玆に三國同盟を形成し、以て歐羅巴大陸に於ける、獨逸勢力擴張の基礎と爲さんと考へたのである。此反間苦肉の策として利用せられたのが、即ちテュニス問題である、尤もビスマルクは夙に佛伊を相爭はしめんと策して居た、先づ伊太利をしてテュニスを占領せしめ、以て伊佛相爭ふの機會を作らんとしたのであつたが、伊太利は其手には乘らなかつ

た。そこで伯林會議終了すると共に、獨逸は英國を利用し、佛蘭西をしてチュニスを占領せしめた、其理由は當時伯林公會の結果、英國は、土耳其領サイプルス島を占領し、勢力均衡の立場より、佛蘭西は英國を嫉視すること甚だしきものがあつた、其機會に乘じてビスマルクは、大いに英國を慫慂し、遂に英國のソルスベリー卿をして佛蘭西との間に、交渉妥協を成立せしめた、其結果サイプルス島を英吉利に占領せしめたる報酬として、チュニスを佛蘭西に占領せしむることに決定した、故に佛蘭西は一八八一年チュニスの蠻族佛領アルゼリー内地を侵し、大に人畜を害せりとの理由を以て、自國住民保護の名目下に、其軍隊をチュニスに送り、遂に同地を占領して了つたのである。玆に於て乎伊太利は從來佛伊の勢力相伯仲の間にありしチュニスを、故なく佛蘭西に占領せられたるを憤り、加ふるに南伊太利に於ける法王廳問題などもあつて、其の反佛感情は甚しく高潮された、さりながら伊太利も今や佛蘭西を向ふに廻はして、單獨に相戰ふ程の力なく、是非共獨逸の如き强國と提携し、歐洲大陸に地歩を確保したければならぬと決心し、一八八二年五月二十日三國同盟に參加したのであつた。

　一方佛蘭西に取りては、此獨墺伊三國同盟こそ非常に憂ふべき目の上の瘤であつた、先づ何よりも之が對抗策を講ずべき必要に迫られ、一八九一年、一八九二年、一八九四年の三回に亘れる會商に於て、所謂佛露同盟は確立されたのである、然かも之のみでは未だ佛國の安全と利益とを確保するに充分なりと思惟することが出來無かつた、玆に於て乎デルカッセ一度出でゝ、外交の衝に當るや直ちに、伊獨兩國の離間策に力を注ぎ、着々として佛伊の親善恢復に努力した、先づ通商上經濟上の問題に於て伊太利に讓歩し、好感を買ふに努めたる結果、佛伊兩國間のチュニス問題及之に伴つた關稅戰並に商業戰に因る軋轢は消滅し、即ち先づ一八九八年十一月伊太利佛蘭西間の、通商條約は確定され、玆に兩國の親善關係恢復の端緒を見た、更に一九〇〇年十二月には佛伊兩國間に、外交文書の交換を見、伊太利はモロッコ等に於ける佛蘭西の利益を、承認することゝなり、佛蘭西は亦伊太利をして、土耳其領たるトリポリーに於て、其勢力を增加せしむることに異存を挾さまぬ協定成立するに至つた、其結果として伊太利は一九一二年遂にトリポーを占領したるは、世人の熟知せる所である、即ちデルカッセはトリポリーを餌として、亦通商上の讓歩を好餌として、伊太利を佛蘭西の味方に引入れ、三國同盟に事實上の龜裂を生ぜしめたのであつた、玆に於て乎一九〇二年獨墺伊三國同盟條約の改訂せらるゝに際し、デルカッセは同年七月三日佛蘭西代議院に於て、議員

の質問に答へて「伊太利は決して佛蘭西を攻撃しないのみならず、獨墺伊三國同盟は佛蘭西の關する限りに於て、最早運用の力を失へるものである」と堂々聲明することが出來たのである。獨り之れのみに止まらず、一九〇三年伊太利皇帝ヴイクトル、エマニエルの佛蘭西を訪問せらるるや、一九〇四年には佛蘭西大統領ルーベは、外相デルカッセを伴ふて、首府羅馬を訪問した、此訪問の交換並に之に伴ふ外交々渉によつて、佛伊の親交は愈々鞏固を加へ來れるに反し、三國同盟はそれ丈け薄弱化したのである、這は何と云つても獨逸を孤立せしめんとしたるデルカッセの遠大なる政策の第一歩の大成功と云ふべきものであらう。」

三

デルカッセの事業が、啻に此對伊關係のみに終つたならば敢て歴史上の大記錄となるに至らずして終つたのであらう、然かも彼の國家を思ふ一片の赤心と卓見とは、此成功に乘じて更に手を對英關係に進めたのである。顧みて歐羅巴の外交史を檢するに、佛蘭西と獨逸との爭は、最も重大なる事實であるが、然も亦英佛の軋轢も極めて重大なる部分を占めて居る。十七世紀以來の英佛間の紛爭を見るも、一六八八年より同九七年に於けるオーグスブルク同盟時代の如き、一七〇一年より一七一年に及べる西班牙王位繼承戰爭の如き、其後に起れる墺太利王位繼承戰爭の如き、一七五六年より一七六三年に亙れる七年戰役の如き、又一七七八年より一七八三年に及べる米國獨立戰爭の如き、更に又一七九三年より一八一五年に亙れる佛蘭西革命戰爭並に奈翁戰爭の如き、皆佛英軋轢の跡ならざるはなく、一として重大なる性質を含まざるものはないのである。十九世紀に於ても英佛間には、依然として軋轢の歴史が繰返されて居る。十九世紀の初め英吉利は維納公會の條約によつて、サンピエール、マーチネツク等の殖民地を、佛蘭西に返還すべく約定せるに拘らず、言を左右に託して容易に實行せず、佛蘭西との紛議を釀せるは、世人の能く知れる所である。一八三〇年頃佛蘭西がアルゼリアに地步を占め、漸く勢力を扶植せんとするや、英吉利は之に非常なる妨害を加へ、アルゼリア、チユニス、トリポリーに於て英吉利領事は常に佛蘭西反對の態度に出で、回々教徒の煽動に努めたのであつた。チユニス問題に關聯しても英吉利は、一般政策の上より自からサイプルスを得、之を安全に確保する立場より自から佛蘭西にチユニスを與ふるの約を爲せるに拘らず、英吉利の民論は却つて佛蘭西に反對し、佛蘭西は自己の利益のため、東方問題を又復再發せしむる

ものなりと抗議して居るのである。併しながら是等は尚末節に過ぎない、殊に激甚を極めたるは、埃及ナイル河方面に於ける英佛の爭にして、最も注目すべき重大なる性質を帶べるものであつた。此紛爭は過去に於ける英佛間軋轢の傳統を繼續せるのみならず、兩國の關係をして頗る危殆に瀕せしめたる問題であつた。要するに十九世紀の後半は、阿弗利加問題に於ける英佛の衝突に、終始したと云つても過言ではなからう、彼のナイジヤー問題、コンゴー問題なども其一例であるが、就中埃及問題は頗る難澁を極め、英吉利の成功せるに反し、佛蘭西は常に失敗を繰返した、從つて佛蘭西としては英吉利に對し、深き怨恨を懷かざるを得ない狀態にあつた、例へば埃及に關しては英佛協同管理を實行し居たるに拘らず、一八八三年に至り佛蘭西外務大臣デュクレールの軟弱なる外交政策で、英佛協同管理は有名無實のものとなり、遂に英吉利自から之を支配するに至つた、佛蘭西人は不徹底なるデュクレールの軟弱外交振を甚た遺憾とし、同時に英吉利に對して尠からざる惡感を懷いたのである。又た一八八四年英吉利が佛蘭西に對し、一八八八年には必ず、埃及より退くべきことを約束し居たるに拘らず、期限を經過するも之を實行しなかつたなど、佛人の血を沸かした事件である。茲に於て佛蘭西は埃及方面に於ける、積年の失敗の跡を取返さんが爲め、且は殖民政策を復活せしめんが爲め、一八九五年以降マルシヤン少佐の軍を埃及に送り、大に活躍せしめたのであつた、マルシヤン少佐(後に少將)は非常なる困難と鬪ふこと約三年、辛うじてファショダに達した、然れども佛蘭西は之によつて、自己の地盤を該方面に確立すること能はず、却つて大なる恥辱を被り、軍隊を撤して屈服しなければならぬ運命に陷つたのである、それは何が爲めであつたかと言ふに、此時恰もキチンナー將軍麾下の英國埃及軍隊は、オモダルマンの戰場に於て、大勝利を得、凱旋の意氣を以て陣營を張つて居たのであつた。當時英吉利は佛蘭西に對して埃及スーダン方面より手を引かんことを求めたが、佛蘭西人民はマルシヤン少佐の軍、既にナイル上流に於て非常なる艱難を甞め、或程度の成功を贏ち得たる所より、今更撤退不可能なる所以を、盛んに絶叫せるも、政府當局側が顧みて自國の實情を考ふれば、未だ英吉利と相戰ふの軍備なく就中海軍力薄弱であつた、ソコデ佛蘭西は遂に英吉利の戰爭威嚇の下に、涙を呑んで屈服せざるを得なかつたのである

而して此屈辱に對しては、最も恨み骨髓に徹しなければならなかつたのは、デルカッセ其人であつたに相違ない、殊に彼の如く感情に強く、自説を取つて動かざるものに於て、屈服は一層

忍び得ざる所であつたに相違ない、殊に彼は外務大臣となる以前殖民次官であり大臣であつた關係上、彼が確立したる佛蘭西殖民政策が着々實行せられつゝある矢先き、屈辱的失敗を見た彼は自己の立場よりするも英吉利に對しては、一層憤慨の念を有たなければならなかつた筈である、然かも彼は凡庸の政治家で無く先見と遠大なる抱負とを有する外交家であつて、爲めに此間に處するの途を誤らなかつたのである。或佛蘭西の外交史家の言を藉りて之を云へば、彼は囂々たる佛蘭西人民の憤慨の叫びを超越して、遙かに遠き將來を見たのであつた。此事たる獨り佛蘭西人の憤慨のみならず、彼自身既に殖民行政に當れる責任者の立場として、將又普通の人情として、忍び難き所のものを能く忍び、以て遠き佛蘭西の利害を稽へ、深く祖國の將來を見ては、此場合一歩英國に讓歩するを可とし、而して友を作るの策に出でたのである、其結果英吉利は順潮に向し遂に一八九九年三月佛蘭西をして、バールエリー、カザール、ダルフオール地方に於ける英吉利の支配權を承認せしむる約束に調印させたのである、這は佛蘭西に取りて、大なる讓歩と云ふの外はない。

併しデルカツセは一面に於て、ナイル上流及び埃及に於ける英佛の紛爭を避くる爲め、斯くの如く多大なる讓歩を敢てすると共に、亦た他面に於ては決して佛蘭西の新らしき殖民地々盤を作るの策を忘れ無かつた、のみならず更らに佛蘭西將來のため、對獨競爭對獨軋轢の場合に於ける、有力なる味方を得るの策を忘れ無かつた、而して此策は巧妙なるデルカツセの外交によつて、着々進捗し遂に一九〇四年即ち明治三十七年四月に至り、有名なる英佛協約は締結され玆に將來獨逸帝國打破の基礎を築くに至つたのである。

六

蓋し當時デルカツセは考へた、英吉利の壓迫による佛蘭西の對埃及スーダン殖民政策の失敗は、甚だ殘念至極だが、然も殖民政策に於て長く英佛相紛爭するは、是れ取りも直さず殖民地以上に大切なる、佛蘭西本國を中心とする外交政策の根本に反するものである、ソコデ殖民政策に於ては大に英吉利に讓歩し、唯多少の保障を他の殖民地方面に獲得するに止め、茲に相互協調妥協を行ひ、佛蘭西に取りて最も大切なる、對歐洲大陸政策を成功せしむるの基礎を作ることが出來たならば、是程我佛國民に取り幸福なることはあるまいと。彼は更に考へた、以上の如く殖民地方面に關する妥協によつて、英佛の提携を爲することは、今日必ずしも困難の事業ではあるまい、何となれば

從來獨逸は專ら、大陸に於て佛蘭西と相爭ひ、殊に普佛戰爭以來佛獨敵視の狀態は、依然として繼續されて居るのみならず、最近に於てはビスマルク引退後、ウイルヘルム二世の世界政策の出現と共に、英獨の軋轢紛爭將に釀成されんとしつゝある折柄、之に鑑みての佛英提携策は、固より不可能ではなからう」と、而して彼は一八九八年及九九年に於ける英佛妥協以來、着々兩國提携の方針に向つて力を注ぎたる時恰も宜し、英吉利に於てはエドワード七世新たに帝位に卽き、英佛親善提携の主義に贊せらるゝの狀態となつた、彼亦エドワード七世陛下を動かし、其促進に就て努力を惜まなかつた。

斯くて英佛親善策は一九〇二年七月、佛蘭西上下兩院議員の英吉利訪問となり、一九〇三年五月英皇帝エドワード七世の巴里訪問となり、同年七月佛大統領ルーベの、英吉利訪問となりて現はれたのである、ルーベ大統領の倫敦訪問には、デルカツセ亦隨行して、英吉利外相ランスダウン卿と會見し玆に英佛協約の基礎は形成さるゝに至り、更に一九〇三年十月英佛仲裁々判條約の成立を見るに至つたのも、兩國親善策成功の一現象と見らるべきものであつた、同年十一月には英吉利議員團の巴里訪問を見るなどのことあり、斯の如く訪問交換及之に伴ふ交渉により、一九〇四年四月英佛提携の協約は愈成立を見たのである、餘談ではあるが英佛協約をして成立の期を促進せしめた點に於ては、我日本も亦與つて力ありと云はざるを得ない、卽ち日露の大戰は、英佛協約を實現せしむる上に於て相當の効果があつた。そを如何と言ふに、一九〇二年締結された日英同盟條約に於ては、日英兩國の一と他の一國と戰爭を開始した丈けでは同盟國の援助義務は發生せぬけれど、敵國に他の援助が來ると、同盟國の援助の義務は發生する譯であつた、換言すれば一國と一國との戰爭に於ては、同盟國は中立を嚴守するも、他の何れかの國が同盟の相手國を援助すれば、直ちに參戰すべき義務を生ずるのであつて、具體的に云へば一九〇四年二月日露戰爭開始せらるゝや、露西亞の同盟國たる佛蘭西が、之に參加することになれば、英國亦條約の文面により直に參戰することが當然であつた、佛蘭西が露西亞を援助せざれば、英吉利も日本援助の義務が無かつた、此際英佛兩國間に了解が出來ることは英佛共同して參戰の義務より、免るゝ便宜より云つても得策であつたと言へる。

而して此事實が將に成立せんとしつゝあつた、英佛協約を促進する上に於て或程度の効果を齎らしたことは疑ひがない、世人如何に批判を下すと雖も、此事實を否認することは出來ない。然かも之は唯だ時期促進の効果があつた丈けで、英佛協調

の根本は上記デルカッセの根本政策の成功と言は無ければならぬのである。

然らば此デルカッセの盡力によりて締結された、英佛協約は如何たるものであつたか、と言ふに、其内容に於ては埃及モロッコに關する協定を爲し、同時に暹羅及ニューファンドランド島に關する協定を爲したに過ぎなかつた。形式から云へば佛蘭西は全然、埃及に對する自己の主張並に權利を放棄し、一に之を英吉利に委ね以て、佛蘭西は英吉利に對し、埃及占領の期限を質問し、或は其他の方法により、英吉利の行動を妨害せざることを約し、之に對して英吉利は、モロッコに於ける佛蘭西の權利を認めたものであつた、即ち佛蘭西は其領有殖民地が長距離に亘りて、モロッコの領土と隣接して居る關係上、其秩序を維持し、且其必要とするモロッコの、行政的財政的軍事的改良に保障を與ふる權利あることを、英吉利に承認せしめたものである、換言すれば英佛は茲に埃及とモロッコの交換を行つたと云つても差支ない。同時に從來暹羅に於ては英佛の勢力爭ひ強く、容易に解決を見なかつたが、同協約によりて、メナーム河流の西方を英吉利の勢力下に置き、其東方を佛蘭西勢力下に屬せしめて、兩國紛爭の機會を一掃した、又た佛蘭西はニューファンドランド島に於ける、歴史上の權利を放棄したのである。尤もニューファンドランドに於ける佛蘭西の歴史的權利は、最早形式的に止まり、唯紛議の的となり、其地方の住民及英吉利人に惡感を與ふるのみで、佛蘭西に取りては、左程利益なきものであつたから、大局上之を放棄したのは、却つて賢明であつたと言はねばならぬ。

斯の如くにして英佛協約は謂ば、英佛間の地方的紛議の種たる問題を一掃せるに止まり、何等歐羅巴問題に就て公式に、英佛の提携を約したる譯ではなかつた。併しながら從來の兩國間の紛議を一掃せば、そこに兩國の親善自ら來るは、寧ろ自然でなければならぬ、況んや英佛兩國が双方紛議一掃の意味で決定せる事柄が、獨逸等の利益と相衝突し牴觸せんとする形勢あるに於ては、自然英佛の對獨競爭上の協力は來らざるを得ないのである、斯くの如くにして兩國の親善關係增加し來ることも、當然の勢ひと云はなければならぬ。從つて第一、英佛協約成立するや、獨り殖民地策のみならず、歐洲大陸策に對しても、兩國の接近を來したのである、第二、之のみで無く、更らに影響は英露の上に及んだ、即ち佛蘭西と露西亞との同盟國たる關係に顧み、又は日露戰爭に於ける露西亞の失敗、延いて其勢力失墜の事情にも助成せられて、茲に從來犬猿の如くであつた英露兩國は互ひに反目を緩和し、相調和するの機運を作り

出したのであつた。其結果はデルカツセが職を去つた翌年卽ち一九〇七年に於て、英露協約の締結となつて現はれたのである。卽ち玆に歐羅巴に於ける英露佛三國協商は形成された。斯くて此三國協商は我日本を加へて、總て四國協商と稱せらるゝに至つたことも、世人の記憶する如くである。

七

デルカツセの外交政策による英佛協約が、其後如何に佛國の爲めに運用せられたかといふに、其第一に擧ぐべきものは、モロッコに於ける佛蘭西の地盤確立である、蓋し右協約が成ると、獨帝及その政治家は奮慨の念に燃えたのである、彼等は是非共、佛蘭西に敎訓を與へ、以て英佛の關係を離隔せしめ、佛蘭西をして英吉利恃むに足らず、獨逸に賴るにあらざれば、到底國家的地位を維持する能はざる所以を、知らしめんと考へて着々、對佛壓迫策を始めたのである、是れ云ふまでもなく、英吉利が眞に佛蘭西を援助する力なきことを、見縊つて居たが爲めであつた。先づ一九〇五年春獨逸皇帝はモロッコを訪問し、其首長アブルアヂスに對し、モロッコに於ては各國平等の權利を有し、其何れの國にも獨占を許すべきものにあらざると同時に、各國に併合せらるべきものにあらざることを述べて、獨逸はモロッコ君長の利益のため、場合によつては、協議し相談に與るの意ある旨を仄めかし、同年十月モロッコ君長は獨逸側の立場に贊意を表し、獨逸はモロッコと共に國際會議開催を希望するに至つた、併し佛蘭西は獨り之に不同意を表したるも、遂に力なく、其反對派の首領たるデルカツセは、外務大臣の椅子より追はれ、一九〇六年一月アルヘシラス國際會議の開催を見たのは、世人の既に熟知する所であつた、處が同會議開かるゝと、英吉利が努めて、佛蘭西の利益を支持し、條約の義務を果せることは、是亦世間周知の事實であつて、爲めに獨逸の意圖は遂に成らなかつたのである。

次ぎに一九〇八年佛蘭西軍中に在る獨逸人の脫走問題、及び其の捕縛に關聯して、彼の有名なるカサブランカ事件が起つた、當時佛蘭西には强硬論者たるクレマンソーが首相として位に居つた爲めでもあるけれども英吉利の後援があつたことも、此問題で佛蘭西が不體裁な立場に落ち無かつたのであつた。次に最も重大の形勢を呈せるものに、一九一一年のモロッコ問題再燃であつた、モロッコ君長ムライ、ハフイッドは佛蘭西に對して援助を要求し佛軍はメッツ救援に赴くと、獨逸は此結果モロッコに於ける、佛蘭西勢力の確立を虞れ、獨逸資本家の利益及財産保護の名目下に、軍艦をモロッコ國アガヂール港に派遣

し、端なくも玆に問題を喚起したのであつた。一方其際に於ける英吉利の態度如何と見るに、種々批評を試むるものあるも、大體に於て佛蘭西援助の意思を表明したのである、是れ一九一一年七月當時平和論者として認められて居る大藏大臣ロイドヂヨウヂをして、英國の立場を强硬に聲明せしめたのでも相分る所である。此一事は大に獨逸をして反省せしむるに力があつた、同時にモロッコ問題による戰爭を防止する上に、尠からず効果を及せるは疑ひなき點である。勿論佛蘭西にても、當時總理大臣カイヨーが獨逸に對する、協和策を執れる關係上、舊佛領コンゴーの一部を獨逸に割き、以て獨逸をしてモロッコに於ける、佛蘭西保護邦の設定に反對せしめざる約束を結んだ、是れ即ち一九一一年十一月の獨佛協約である、佛人中には此協約を以て、不滿足とするもの多きは勿論なるが、然かも此故を以て、同問題發生の際に於ける英吉利の佛蘭西支持の態度を忘れてはならぬのである。

併しながら眞の英佛協約の効果は、斯の如き程度のものではない、之が最大効果を示したのは、何と云つても今回の世界大戰爭に於ける、兩國の提携でなければならない。

併し世界大戰爭に於て、佛蘭西は如何なる成功を收めたかは、殆ど世人周知の事實である、佛蘭西は今次の世界大戰に當り英吉利の援助を得、兩國相提携せる結果遂に、一八七〇年來の大失敗の恥辱を拭へるのみならず、多大の收獲を得て、歐洲大陸に於ける眞の雄邦の一として、數へらるゝに至つたのである、其獲得せる領土としては、曩に失へる面積五千六百方哩、人口百八十七萬のアルサス、ローレンを恢復したのである。ロレーンは一八七一年其住民の希望に反對し、且其代表者がボルドウ會議に抗議したる、歷史的事實を無視して、遂に獨逸の有に歸したものであつた、然るに今や之も英佛提携の賜として佛蘭西の手に歸るに至つた。其地域を物質的に見ると、獨逸に於ける鐵の最大產地であり、戰爭前獨逸の鑛鐵產額二千八百萬噸中、實に二千百萬噸はローレンから產出されて居た、ローレンを奪はれた獨逸は爲めに鑛鐵產額七百萬噸に減じ憐むべき立場に陷りたるに反し、佛蘭西は從來の鑛鐵產額一千八百萬噸に加ふるに、更に二千百萬噸を得て、總計四千萬噸の鐵を產し即ち歐洲第一の鑛鐵產國となり、世界に於て僅に之に對するもの、北米合衆國あるのみとなつた。次に佛蘭西は其領土こそ獲得せざれ、ザール流域の炭田を講和條約によつて、自己の手中に改めた、ザール炭田の石炭產額は約一千三百五十萬噸であるが、此石炭が佛蘭西の手に歸せることは、取りも直さず石炭の供給よりも需要多き佛蘭西として——石炭の供給四千百萬噸に

對し需要六千三百萬噸を數ふる佛蘭西に取りては、大なる收穫と云はねばならぬ、此二大地域を得たることは、確かに佛蘭西の成功なるのみならず、更に阿弗利加に於てはトーゴーランド及カメルン方面の、舊獨逸殖民地を委任統治地域として獲得し、又舊土耳古領に於て自己と歷史的關係深きシリアを自己の委任統治地域とした。是等は原料産地として、遠き將來に亘り佛蘭西に利益を齎らすこと、決して尠少ならざるものがあらう、兎も角デルカッセの政策は斯の如くして、多年の仇敵獨逸をして憐むべき敗殘の國たらしむると共に、佛蘭西をして歐洲大陸に於ける、最大最强の國たるを得せしめたでは無い乎。斯く述べ來ればデルカッセが、國家に對する貢獻は偉大なるものにして、彼自身としても亦以て瞑すべきである。而して後世外交史家は必ず彼の功業と其聲名を無限に傳ふるであらう。

八

然るに世界大戰終局すると、從來恰も兄弟の如く相提携し、協同的歐洲政策を執り來つた此佛英の關係が、漸く一變し始め、昨日斷金骨肉の友、今や吳越の間柄化せんとするは、何等の憾事であらう、彼等は獨り協同せざるのみならず、軋轢し衝突し、動もすれば關係破綻に近からんとする姿さへも呈して來たのである。先づ其第一の機會は亞細亞土耳其のシリア問題であつた。卽ち歷史的にシリアに深大なる關係を有し、事實的に其保護權を確立せんとする佛蘭西の立場と、アラビア人を後援して、近東及中東に自己の勢力を揮はんとする英吉利の立場とは、シリア住民の多數がアラビア人なりといふ事情のために、英佛間の軋轢を一層助長せしめなくては止まなかつた、幸ひ此問題は漸く妥協が出來、英吉利は其後援せるフェーサル王（ヘジヤス國王の子）をメソポタミア王に移し、僅かに難局を解決したが、併し兩者間の面白からざる記錄は、依然として殘されたのであつた。第二には一九二〇年希臘に於けるヴェネゼロスの沒落、及び之に伴ふコンスタンチノス皇帝の復位問題に際せる、英佛の衝突であつた、佛蘭西は飽くまでコンスタンチノスを排斥せんとし、英吉利は之を擁護するの姿を示し、尠からず相互間に惡感を釀成した。併しながら今日英佛間の乖離の、最大主因を爲し來れるものは何かと云へば、所謂對獨逸政策でなければならない。蓋し戰爭前には對獨逸政策によりて、英佛は一致し相提携されて居たのであつたが、今や亦對獨逸政策によりて、英佛は相離れ相衝突せんとするの狀を示し來つた。然かも其中で對獨問題に於て、最も甚しく英吉利と相爭ひ、デルカッセの非常なる苦心によりて、築き上げられたる、英佛協約

を、殆ど破碎せんとするかの感を起さしめつゝあるものは、現佛蘭西首相ポアンカレー氏の政治外交にあらずして何であらう。現に本年一月以來佛蘭西が、從來の英佛提携の傳統を離脫し、單獨に然も英吉利の意志に反して、ルールに出兵し、其地帶を占領したるが如きは、最も英佛親善の破綻を暴露したるものと云はなけばならぬ。

九

併し顧ると獨逸問題に因る英佛間の乖離は、講和會議時代より歩一歩現はれて居たのであつた、而してポアンカレーの思ひ切つたる果斷的政策を見るまでには、數名の首相が繼つて居り、そして其度毎に所謂デルカツセの親英政策英佛提携策から目下の乖離に至るまでの道筋を作り、即ちその一歩一階段を作つたのである、此階梯に立つた政治家中には、第一にクレマンソーが居り、ミルランが居り、ブリアンが居たのであつた。先づクレマンソーに就て云へば、彼は今や八十二歳の老翁、佛蘭西に於ける元老政治家にして、例のコンベ、ブルジョア等と併稱せられた先輩である。彼は一九〇六年から九年にかけて總理大臣となり、世界戰爭の終期即ち一九一七年から一九二〇年にかけて再び總理大臣の重職に就いた、最近の消息としては昨年末米國に使して、大いに佛蘭西のため米國の力を藉らんと努力した程の、愛國的活動家である。彼は恰も大戰の終末に於て、佛蘭西政界の行詰りに乘じ、殊に腐敗事件續發の後を承け、蹶然起つて內閣を組織し、遂に大戰の成功を收めたのであつたが、更に一九一九年巴里講和會議には、佛蘭西全權として米國ウイルソン英國ロイド・ヂョーヂと共に、所謂三頭として平和の大事業を遂行したのであつた。而して講和會議に於てもクレマンソーは旣に米國及英吉利全權と、對獨問題に就て意見を異にし、ライン問題、ザール問題に就て大いに抗爭して居たのである、就中一九一九年三月二日クレマンソーが聯合國に提出せる要求には、獨逸は必ずライン河を以て、其西方國境とすべきこと、獨逸はライン左岸に於ける前獨逸帝國の領土に於て、將來關稅同盟等を作らず、一切の主權を放棄しなければならぬと主張せるを始めとし、彼は佛蘭西の利益を擁護し主張すること強く、アルサス、ローレン獲得の外、ザール河流域の領土權をも、自から佛蘭西に收むべきことを主張し、其他戰爭犯罪人の處罰等、總て强硬なる態度を持して讓らなかつた。然るに此點に於て米國大統領ウイルソンは對獨逸に處するに寬大政策を以て臨まんとし、英吉利亦寧ろウイルソンの主張を支持する傾向を示すなど、旣に英佛の一致從來の如くならざるを見るに至つ

たが、併し未だ其破綻に向つて歩を進むるまでには至らなかつた。何となれば第一、クレマンソーの主張に反對を表するものに、米國のウイルソンなる大立物ある爲め、ロイド・ヂョーヂ對クレマンソー、英吉利對佛蘭西の紛爭は左程激からず、第二、クレマンソーが本來熱心なる親英論者であつたからである、如何に彼が親英派であつたかは、その一八九三年政界隱退を餘儀無くせられた事實でも證明せらるゝ、元來彼は曾て内閣顚覆者及内閣破壞者なる綽名を有し、フェリー内閣を倒し、フレーシネ内閣を顚覆したのであつた、前者の倒壞せる原因は彼が、佛蘭西の印度支那政策を攻擊せるに發端し、後者の顚覆せるは彼がその埃及行政を攻擊したのが其原因であつた。此攻擊は本來彼が佛蘭西の殖民地膨脹策に同情を有せざる爲めであつたが、然も埃及問題に關する彼の言論が極めて精細緻密を盡せるものであつた爲め、彼は世間から英吉利に買收されたる間諜なりとさへ噂せらるゝに至り、遂に人民の信望を失ひ、一八九三年五十二歲を以て、一度政界を隱遁し、玆に雜誌記者操觚業者と早變りしなければならぬ窮境に陷つたのである、別言すれば彼は酷く疑はるゝ程に親英主義者であつた、而して最近に於ても彼は親英主義者として承認せられて居たのである、從つて講和會議の際英佛間にはさしたる破綻を見るに至らなかつたが、併し他方面から見ると、此親英的なるクレマンソーの政策に就ては、佛蘭西國内常に非難の聲絶たず、一九二〇年一月十八日クレマンソーが、首相の職を辭する頃には、國内に於ける非難攻擊の聲囂々たるものがあつた、否な是れのみならず、一九二〇年一月七年を任期とする大統領ポアンカレーの後任者選擧行はるゝや、クレマンソー亦デシャネルと共に、其候補者の一人であつたが彼は共和諸黨間の豫備投票に於て三百八十九票を得たるに反し、デシャネルは四百八票を獲得した、此結果に見てクレマンソーは、一九二〇年一月十七日國民會議の公式大統領選擧投票の際には、自から候補を辭退したのであつた。然らば何故戰爭勝利の内閣責任者として、功勞高かりしクンマンソーが大統領たるを得ない地位に落ちたかと云ふに、是れ全くヴルサイユ講和條約に關して、彼が尠からず國民の不滿を招ける結果に外ならなかつた、大統領ポアンカレー氏の如き亦クレマンソーに反對し、戰爭の勝利者として功勞顯著なるフオツシュ元帥すら、クレマンソーに反對した一人であつたことを記憶して善い、併し同時に此事實はクレマンソーの政治下に於ては英佛關係が未だ險惡に進みつゝなかつたことを示すものと云へるのである。

十

クレマンソーが首相の地位を去るや、之に代れるはアレキサンドル、ミルランであつた。ミルランは一八五九年巴里に生れ西洋流に云へば七十四歳である、彼は巴里市會議員より身を立て、商務卿となり陸軍卿となり、就中陸軍卿としては佛蘭西陸軍改善の偉勳者であつた、而して一九二〇年一月クレマンソーの後を追ふて首相となるや、彼は歐洲問題、對獨逸問題の協議に於て、ロイド・チョーヂと相並んで二大人物であつた、然らば今彼が首相在任期約八ケ月間に於ける、英佛關係如何と見るに、クレマンソー時代に比して、兩國の乖離は更に一歩を進めて居たと云つて宜い。尤も彼とロイド・ヂョーヂを比較すれば、其性格は彼が英吉利人であり、ロイド・ヂョーヂが佛蘭西人であるかと思はるゝ有様があつた、即ち機敏にして活潑、大に論じ大に說くのが、佛蘭西人の特性なりとすれば、其姿は却つてロイド・ヂョーヂに多分に見られたのである、之に反して重厚にして寡默、或場合には遲鈍とさへ思はれ、同時に頑固にして動かざるを英吉利人の特長とすれば、這は寧ろミルランに見らるる所の性格であつた,此時代に於けるミルラン對ロイド・ヂョーヂ、佛蘭西對英吉利の關係を云へば、佛蘭西は英吉利の說得勸說に對して、更に動く所なく自己の利益を固持したと云つて宜い。尤もロイド・ヂョーヂが熱心に說得すれば、ミルランは一應之に動かされ、或は讓歩し、或は考へ直したかの如き姿を見せたことも少なくなかつた。併しながら數日を經過すれば、彼は再び後返りして元の頑固なる態度に變つて居た、ロイド・ヂョーヂはミルランを說得し得たりと得意がつて居ると、再會見の場合には其希望は裏切られ、舊の如き狀にあるを發見して驚いた例も少くない、併し此時期にありては對獨逸問題、就中償金問題等未だ決定し居らず、換言すれば獨逸が支拂ふべき償金の總額さへ、ミルランの首相辭職後、漸く八ケ月目に決定せるの實情より觀ても、英佛兩國の離反は未だ左程、猛烈なる域には達して居なかつたことが知れる。斯くて一九二〇年春大統領に選擧せられたる、デシヤネル氏が旅行中汽車より墜落し、極度の神經衰弱を起し、遂に辭職の止むなきに至つて、同年九月ミルラン代つて大統領に選擧せられたのである、ミルラン大統領となるや、彼に代つて首相となれるは、不幸短命のレーグ內であつた、レーグ氏は紳士ではあるが、力量なく智力なく、從つて聲望甚だ高からざるものがあつた。何故ミルランがレーグ內閣を組織せしめたかに就ては、即ちミルラン自身の大統領當選により、從來自己の閣員たりしものを、直ちに政權より離れ

しむることを欲せず、差當りレーグ氏を首相とし、以て自己の内閣の實質を繼續せんとする意嚮であつたと云はれて居る、さりながら無力なるレーグ内閣は、到底長く其地位を維持すべくもなく、所謂希臘廢帝コンスタンチノス復位問題、對土耳其問題、露西亞ウランゲル政府沒落後の問題、シリア出征軍費問題等にて、事毎に蹉跌失敗し、遂に一九二一年一月十二日代議院の不信任決議によりて辭表を提出し、玆にブリアン内閣の出現を見たのである。

然らばブリアン氏の對英態度は如何と言ふに、彼は内閣組織と共に、對獨逸問題に於ては相當強硬なる態度に出たけれど、同時に英佛の提携を飽くまで維持せんとする決心をも有して居た、蓋しブリアン氏は其雄辯に於て佛國政治家中有數の人であり、又一九〇六年文部大臣として、佛蘭西に於ける政府對羅馬教會關係即ち、政教分離問題を處分し、教育問題を解決せる歷史及び、其後三年を經て勃發せる有名なる、佛蘭西鐵道勞働罷業に對しては、鐵道人夫を豫備兵の資格を以て召集し、遂に罷業を打破せる彼の遣口に照らして、一面頗る鐵腕の人なるかの如き觀があつた、左れど翻つて彼の性格を見るに、彼は頗る公平で、極端派にあらず、事物を見る極めて冷靜にして、自己の地位を考ふると同時に、他人の地位をも考ふる餘裕を有つて居る政治家であつた。彼は對獨逸問題に於て強硬の態度を取るも、然も、英吉利の主張及び其大局論には耳を傾くるに吝ならざるものがあつた。併し彼の執政中、對獨問題は難關に際して居た。獨逸の償金總額が六百六十億圓と決定したのは、彼の首相時代であれば、之が輕減問題の起つたのも亦彼の内閣顚覆より三四ヶ月以前のことであつた、そこで公平な、兩端を見る彼は獨逸償金問題に於ては、英吉利の立場に讓步するものなりと、佛蘭西國民に考へさしむるに至つたのである。彼の對獨政策に就ては、一九二一年五月頃より頻りに反對論行はれ居たるに拘らず、彼は五月二十四日の代議院に於ける大演說を以て、一度反對論を鎭め、六月三日には巧みに信任投票を贏ち得たのであつたが、其年十月に入りて漸く彼の政策に對する攻擊の聲高まり、クレマンソーの友人たるタルヂユー及び、帝制派ドーテー等より盛んに反對せらるゝに至つた、而して一九二二年一月彼の有名なるカンヌ會議に於ける、彼の立場は大統領ミルラン氏の意に背きたると共に、佛蘭西代議院多數の意にも背馳し、彼は遂に辭職しなければならなくなつた。當時彼の考へでは、少くとも英佛提携を繼續することが、歐洲の平和維持の爲めにも、且佛蘭西の大局的利益の爲めにも必要なりと信じたのである、ソコデ彼は、一方に英佛同盟を確立し、之によつて東北よ

りする獨逸側の脅迫に備へ、以て佛蘭西を安全にすると同時に、獨逸償金問題に就ては、多少英吉利の主張を容れ、償金の支拂延期、其他獨逸財政に便なる方法の採用にも、敢て反對を辭せざる傾向を示したのであつた。ところが彼の此政策は所謂英佛同盟が僅々十年の期限にして、今日疲弊せる獨逸が到底再起の見込なき期間のみの同盟なるが故に、斯る効力薄弱の同盟は、無用なりとの理由によりて、多數佛國政治家の反對を受け、同時に斯の如き薄弱なる保障に對して、佛蘭西の利益を犧牲として、獨逸に讓歩するは愚なりとの非難起り、遂に彼は一九二二年一月十二日午後四時三十分、辭職を聲明するに至つたのである。吾人は彼がカンヌ會議中佛蘭西代議院の電報に接して、急遽歸國し突如辭職を聲明し、折角開會せる會議を中斷せしめ、不成功に終らしめたることを悲まねばならない、就中彼の心事が同じ一月十二日、在カンヌ英吉利首相ロイド・ジョーヂに送れる電報に瞥光を示すを見て、竊かに彼に同情を表せざらんと欲するも得ないものである。

十一

以上はポアンカレー首相以前の佛蘭西對獨對英態度の變更を示せるものであるが、然も此過去三四年間に準備され醸成され來つた英佛の疎遠は昨年一月成立せるポアンカレー內閣の施政に至つて、愈々險惡狀態に向つたのである。ポアンカレー內閣が成立したのは、一九二二年一月十六日の朝であつた、此內閣はブリアン內閣以上の對獨強硬政策其他一般對外硬を旗幟として、國民の前に立つたのであるが、然も新首相ポアンカレー氏の人物を見る時は、是れ何等不思議とするに足らないのである。ポアンカレー氏は齡六十二歲、クレマンソー、ミルラン諸に對しては遙かに幼弟の地位に在るにも拘らず、今日佛蘭西の政界に於て、最も國民の信用を集めて居る有力な政治家である。彼はローレンの生れで、少時から法律文學を學んだ、其家庭は立派で所謂佛蘭西のブルジョア階級に屬して居た、彼自身はさして野心家にあらず、進んで他人の地位を獲得せんとするが如き、獵官的人物ではないが、然も彼の出世は極めて早く、二十七歲にして代議院議員となり、三十三歲にして內務大臣となり、四十歲時代には巴里に於て辯護士として成功し、多數の報酬を得る一人となつた、四十三歲にして上院議員となり、四十九歲にして佛蘭西學士院の會員に擧げられ、五十一歲にして總理大臣たり、五十二歲にして大統領となつた、彼が早く首相たらんと欲したならば、既に一九〇六年に大統領ソアリエーより、內閣組織を勸誘せられた時、直に受諾して差支なかつたの

である、然るに彼は野心を有せず、謙讓自ら持し其組織を承諾しなかつた、彼は以前代議士に選擧せられたる時も、二ケ年間默々として、一度も演說しなかつた經歷を有つて居る程、遠慮勝の點があつた。併し彼は非常の愛國者であり國家主義者である、佛蘭西の名政治家クレマンソー、ブルジョア、デルカツセ等が急進黨或は急進社會黨に屬せるに拘らず、彼は所謂溫和共和黨で即ち中央系に屬した、從つて或分子から、保守的と批評せられて居る程である、彼が國家主義者なる所以は、ローレンに生れて十歲の時、獨逸軍の侵入に會し、其非人道的なる殘虐に憤慨せる記憶から、生み出された點も少なくないと云はれて居る、彼は一九〇一年時の總理大臣カイヨーが、モロッコ問題に就て獨逸と妥協し、獨逸に佛領コンゴーの一部を讓渡するや、則ち憤然として起ちアガヂール問題に就て痛烈な報告を爲し、カイヨーと獨逸との關係を指摘し、其內閣を破壞すると共に、一九一二年春自から總理大臣外務大臣として、佛國の政權を掌握したのであつた、其內閣には大外交家たるデルカツセは海軍卿として入閣し、今の大統領ミルランは陸軍大臣としてあり、ブリアンは司法大臣として加はり、最も有力なる國民的內閣であつた、而してミルランは陸軍のため、デルカツセは海軍の爲め、各全力を傾倒し、ポアンカレー之を總裁して、陸海軍備を充實し、以て今次の世界大戰に貢獻せしむること尠少でなかつた點は、誰か之を否認し得やう。而して此功績の爲か否か、一九一三年一月幸運は廻り來つて、彼は大統領に選まれ、空前の世界大戰中大統領として任を續けたのである。其間に於ける彼の行動は、殆ど愛國的の三字に盡きて居たと云つて宜い、無論彼の教養は頗る廣く、法律は勿論文學經濟財政に通じて居たが、其傾向より云へば、彼の智識彼の趣味は國際的と云はんよりも、寧ろ國家的であり、同時に彼の主張も其傾きが少なくなかつた。從つて世界大戰終了を告ぐると、彼が一に佛蘭西の大國としての地位を向上し、其利益を增進するの一主張に於て、自己の主張も努力も集中し來つたのは、彼としては寧ろ自然の趨向であつたかも知れない。而して今日彼が猛然英吉利の主張を排し、或程度まで獨逸膺懲の實を含め、亦或程度に於てはライン方面に於ける、佛蘭西の地盤確立の意圖をも含めて、對ルール策を斷行するに至つたのは、無論佛國民輿論の趨向もあるには相違ないが、彼の人物平素の思想將たその立場政策として寧ろ當然の進路と云はなければならぬのである。

十二

思ふにポアンカレーが、如何に對獨强硬政策を鼓吹し同時に

さに喧嘩して對英强硬態度をも主張したかは過去數年の歴史を顧みるものの、誰も認むる所であらう。先づ一九一九年クレマンソーがウイルソン、ロイド・ヂョーヂ等と共に、ヴェルサイユ講和條約を締結すると、彼は該條約は佛蘭西に對する保護の目的の爲めにも、賠償金獲得のためにも、十分の保障を與へ居らさるものと爲し、此立場に於て猛烈な非難攻撃を加へたものであつた。而してポアンカレーのクレマンソー攻撃は、一九二〇年一月の大統領選擧に於ける、クレマンソーの失敗にも反映し最近のポアンカレー對クルヂュー（クレマンソーの友人）の新聞紙上に於ける論爭にも、其反映を示して居る。次ぎに一九二〇年一月彼の大統領任期滿了するや、彼は自から進んで講和條約による賠償委員會委員長たるの地位を受諾した、當時彼は謂へらく「ヴェルサイユ條約によつて決定せる、獨逸賠償問題は、條約上賠償委員會の意思により、同會委員長を中心として外部の干渉を被らず協議せられ決定せらるべきものだらう」と、所が就任すると事豫期と違ひ、賠償委員會はさほど有力なる機關にあらず、屢々最高會議並に大使會議の干渉を受けた、換言すればロイド・ヂョーヂや其他佛伊内閣首相連の、干　を受けなければならぬことを發見したのである、ソコデ彼は憤然賠償委員長を辭し斷然ロイド・ヂョーヂ氏等を中心とする列國會議に攻撃の矢を向け始めたのであつた、即ち彼はブーロンヌ會議、ハイズ會議、スパー會議、サンレモ會議、巴里會議、倫敦會議、カンヌ會議と云ふが如き聯合國會議が、着々として佛蘭西の、對獨賠償要求及び、軍事的安全要求を破壞し行くを痛嘆し、ヴェルサイユ講和條約に依る對獨逸制裁は却つて一歩々々弱められつゝある事を非難し憤慨したのである。殊に彼は大統領を辭し、賠償委員長を辭したる以後、專ら新聞雜誌上堂々聯合國の對獨軟を攻擊し、佛蘭西に於ける對外硬論者を鞭韃し煽動したのであつた、彼が筆を執つたのは新聞としては例のルタンがありマタンがあつた、雜誌としては隔月評論がある。彼は辯舌に於てはブリアンの雄辯には敵しないが、其文筆に於ては其洗練せる所、到底ブリアン等の遠く及ぶ所ではなかつた、彼の文章は極めて深き素養より遂り、流麗なるものがあると同時に、彼が前大統領たるの地位も後援を爲して、能く一般人民に讀まれたのであつた、殊に近例佛蘭西大統領は退職後多くは、政界より隱遁するを常としたが、彼は大統領を辭したる後も、益政界に活躍を續けた。而して彼が試みた最も猛烈なる對外軟攻擊は、一九二二年一月彼が佛蘭西上院の外務委員として、カンヌ滯在中のブリアン氏に送つた電報であつた、該電報は佛蘭西に支拂ふべき獨逸の賠償に何等の變更を許すべからざ

ることを告げ、英佛協定は、現在の佛蘭西の條約權に何等の惡影響を及さずして、之を確保するものでなければならぬ、佛蘭西はゼノア會議に對しても、佛蘭西の權利の尊重が確約せらるゝにあらざれば、參加すべからざること等を説いた頗る強硬なる電報であつた、是が爲めブリアンは大に狼狽し、倉皇巴里に歸り、議會に出で自から辯明しなければならなかつた、然もブリアンの辯明は議會に於て嘲笑の的となり、遂に彼をして辭職の餘儀なきに至らしめた、即ちブリアン内閣破壞の責任者は、ポアンカレー實に其重きに居ると見ても決して過言ではないのである。

斯の如き歴史を有するポアンカレー氏は自ら内閣を組織すると、一九二〇年一月十九日代議院に出席して、其對獨強硬政策を聲明し、百七票對四百七十二票の大多數を以て信任投票を得たのであつた　其際彼が聲明せる重なる事項は、如何にしてもヴエルサイユ講和條約の規定を維持しなければならぬ、獨逸に對する賠償問題の讓歩は決して行つてはならぬ、對獨制裁問題に就ては強硬の態度を執らねばならぬことを説いたものであつた、而して此新政策聲明後彼は着々として、獨逸賠償金の強制徴收政策を執るのみか、寧ろ場合によつては進んで、一九一九年ヴエルサイユ講和條約協議の際一旦佛蘭西が主張して失敗したる、ラインに於ける自國勢力の確立、及び之による獨逸の國家的勢力の永久的打破を、企つるものなることを明かにして來たのである。

即ち彼は昨年八月倫敦に於て英佛伊日白五國會議開かれ、獨逸に對する償金支拂猶豫の問題協議せらるゝや、佛蘭西側の條件として「獨逸國内の聯合國占領地及東部國境の稅關、ルール炭坑の採炭課稅、獨逸財政の監督」等を主張して已まなかつたのである。然るに英吉利側は之に反對し烈しき兩國の爭を生じ、ロイド・チョーヂ、ポアンカレー共に自説を固執して相下らず、遂に會議は失敗に歸したのであつた、爾後賠償問題に就て、獨逸對白耳義の交渉も行はれたが、是亦滿足の結果を收むるまでに至らず、次で昨年十二月九日より同十一日にかけて、英佛伊を中心とする倫敦會議の開催を見たが、此處でもポアンカレーは、獨逸に二年間の償金支拂延期を許すことに同意するも、之が將來に對する保障として、聯合國の手に於てルール地方の部分的占領を爲すこと、ライン商工業を聯合國に於て經濟的管理を爲すこと、産出石炭に關稅を課することを主張した、此時六年勤續の英吉利首相ロイド・ヂョーヂ氏其職を去つて、居り統一黨首領ボナーロー氏英國新首相でなつたが、ボナーローも矢張りポンカレー案に反對し、獨逸に許さるゝ賠償支拂猶豫

は、獨逸の財政恢復を見せしむる程度の期間ならざるべからざること、佛蘭西は一切軍事行動を放棄しなければならないことを主張したのである、玆に於て又復ロイド・ヂョーヂ氏時代同様、若くはそれ以上に英佛葛藤は現出するに至つた。併し之が爲めに兩國共に破綻を見るは面白からずと爲し、更に會議を延期し、本年一月二日より四日に亙り、巴里會議を開くことに協定したが、愈一月巴里會議開かるゝと、英國は寛大なる條件で、獨逸償金支拂四ケ年猶豫案に同意したのに對し、佛蘭西は之に反對して二ケ年說を取つたのみか、獨逸の賠償不履行の場合に對する保障として、エセツンに聯合國委員會を設置し、炭坑森林を管理し、エツエン、ボフームを占領し、該占領地帶に稅關を設置すべしとの案を固執した爲め、遂に兩者の意見一致せず、同會議亦決裂の運命に陷つたのは、世人の齊しく知る所である、然かも同會議決裂を告ぐるや、佛蘭西は對英關係に斟酌するなく、英人の感情をも無視して、遂に一月十一日白耳義軍隊を誘ひ、白佛兩國軍隊によりて、エツセンを占領し、一月十六日にはドルトムンドを占領し、今やルール地方を其支配下に置いて居ることは、是亦世人の耳目に新たなる所である。

十三

何が故に佛蘭西はルール占領の手段に出でたか、是れ獨逸を償金問題で屈服せしむる方法としても、最も有力なる手段の一ではある爲めでもあるが、又萬一獨逸が償金支拂を爲し得ざる場合に於ては、之に代るべき保障として、佛蘭西の地盤をラインン方面に確立し、以て獨逸の償金支拂に代るに足るの大利益を獲得する所以の巧妙にして且有効なる方法と思考せられたからである。蓋しルール地方は、和蘭及び白耳義に近く、獨逸の西部に屬し狹小の地域ではあるが、獨逸全國の富の五分の一を占め、天下羨望の的とされ居る所である。其長さ六十哩幅三十哩、人口約四百萬を數ふるに過ぎないが、ライン河に注ぐまでの、ルール河畔一帶の工業地帶には、多くの石炭を産出し、從つて鐵工業を始め其他の諸工業大に發達して居る、世界大戰前に於ける同地帶の鑛山數は百七十五を數へ、多くは私人經營にして國有のものは三個しかなかつた、尤も多くの私立會社等は合同して一八九三年ラインニッシェ・ウエストフエリシエル・コレン・シンディカトを組織し、其本部をエッセンに置かれてあることは、世人の知つて居る所であらう、又例の獨逸の富豪フゴー・スチンネス氏を始め、チイスセン、フンケ、ハミエル等諸富豪の所有に屬するもの、クルップ會社を始めゲルセンキルヘン、ハルペナー、ヒベルニア、フエニックス諸會社に屬する

ものも少くないのである、而して此地域の戰前に於ける一ケ年の石炭產出額は、一億二千萬噸內外に達し、石炭豐富の結果、獨逸の各種產業は此地帶に吸收せられて、例の八萬の職工を有するクルップ鐵工場はエッセンに在り、又たゲルセンキルヘンの如き五萬三四千の職工を使役して居たのである、而して獨逸從來の製鐵類の三分の二は實にルールの工場から產出せられて居たものである。斯の如く獨逸に取り、最重要なる地域を佛蘭西の手に收むることは、果して獨逸に償金支拂の能力があつた場合には、少くも佛蘭西の主張に屈服せしむるに、最も有力なる政策であるに相違ないことは明瞭である、更に若し償金の支拂が急に行はれない場合に於ては、之によつてライン地帶に於ける獨逸地盤打破の機會が出來るのである、其第一は占領中ライン住民の心を動かし之を自動の形式で獨立せしめ以て、茲に佛獨間に於ける、一の緩衝國を作るが如き策を講ずるの機會を造ること是れである。

元來佛蘭西にては歷史上ライン地帶に重きを置き、彼のルイ十四世等は、所謂天然國境なるものを唱道し、ライン河畔までは、佛蘭西領土たらしむべしとの主張を爲したこともあつた、世界大戰に於て大勝利を博したる功勞者フオッシュ元帥は、一九一九年四月倫敦タイムス等に聲明して曰く、「吾々はラインに達したならば其處に止まらなければならぬ」と、此聲明に見ても佛蘭西が如何に同地を重視し居るかを窺ふに足るのである。佛蘭西はライン河地帶まで、自から領土を進むることが出來れば宜し、若し能はざる場合は、ライン地帶を獨立せしめて、少くとも獨逸より引離すことを、最も重要なる策と考へて居たのである、それは何故なるか、多年の歷史を有つ佛獨間の係爭、就中今回世界大戰に於て、佛蘭西は人口約四百七十萬の住居地域を、獨逸の爲め荒廢され其慘憺たる狀態は、國民の心を刺戟すること夥しく、是等の事情と相俟つて、獨逸を恐怖するの念頻く、將來再び獨逸の侵入し來るなきやを憂ふるに至つた。殊に佛蘭西人口の年々二十萬減少して居り此趨勢を以てせば現在三千九百萬の人口を有する佛蘭西は、今後五十年を經過すれば二千五百萬の少數となり、大國より小國と化せざるを得ない狀態にあるが、之に反して獨逸は戰爭前六千五百萬の人口を有し、アルサス、ローレンを奪はれ、舊普魯西領波蘭を失ふた今日でも、尚六千萬人を擁するのみならず、年々八十萬の人口增加を見て居る、此人口狀態の大差こそは佛蘭西をして、益獨逸將來の壓迫を恐れしむるものである、殊に獨逸が依然武器を隱蔽し居るの說があり、又た獨逸國內に於ける帝政派の勢力依然として減退せず、ルーデンドルフ其他が青年崇拜の的と

なつて居り、其他學校等で依然、ツライド、ベルンハルチー系統の教調が盛んに行はれ、例のフォーゲル、ワンデリンの勢ひが戰爭前よりも一層盛であること、露獨の接近が動もすれば行はれんとし、佛蘭西が波蘭チエックスロヴアキア等による屏障政策、即ち獨逸と露西亞とを隔離し、接近せしめざる政策が、豫期の如き効果を奏して居ないこと等のために、佛蘭西人の獨逸恐怖の念は、更に減少しないのである。從つて佛蘭西としては若し獨逸より、容易に償金が取れないものとすれば、せめて其間に於て永遠に獨逸を打破し、再び佛蘭西を苦むる機會の發生を防止せんと希望するに至るのは、同國としては多少自然でなければならぬ。

茲に於て乎佛人は今日ルール占領と一九二〇年のジユッセルドルフ其他の占領の永續を好機としてラインに獨立宣傳を爲し、ラインを獨逸より引離す好機會を作らんと考へて居る、勿論此佛國の愛國者連は公然斯く聲言するものが少いとしても、衷心熱心に之を希望して居るのである。併し之許りでは無い、佛國側ではルール占領で、第二の利益獲得策をも持つて居る、それは外でも無い、萬一ライン住民煽動策獨逸ライン分離策が、成功しないとしても、其際に於て佛蘭西は尚ルール占領によつて、一大經濟的利益を獲得する策があるからである、少しく之を說明せんに、元來佛蘭西は戰爭前に於て、一年の石炭消費額六千三百萬噸に達して居るが、其産出額は四千百萬噸しかない、爲めに二千二百萬噸の石炭は獨逸英吉利より供給を仰いで居た、加之世界大戰の結果、佛蘭西の石炭産地は獨逸軍に荒廢されたので、産出著しく減少し、需要は一層增加を來した、ヴエルサイユ講和條約は、其第四十五條に於てザール流域炭坑に對する所有權を、佛蘭西に與へたが、ザールの石炭年産額は僅か一千三百萬噸に過ぎ無い。そこでルールの炭産地は佛國の重視せざるを得ぬ所である、然かも之よりも大切なのは佛國の製鐵事業問題である、蓋し佛蘭西は獨逸より新たにアルサスローレンを獲得し、二千百萬噸の銑鐵産額を增加し、之によつて一年約四千萬噸に達する銑鐵を産することになり、盛に製鐵業製鋼業を起さなければならぬのであるが、之に要するものは石炭である、殊に製鐵業に要するコークに在りては、ザール炭田の如きに於ても、産出極めて少なく年産額僅かに百七十萬噸を超へぬ、此際必要なるコークを得んと欲すれば、一ケ年二千二百八十萬噸前後のコークを出すルール地帶（石炭年産額は一億二千萬噸）に注目しなければならぬ。而して現在獨逸が償金を支拂ふの期限は極めて遼遠で、茲十數年内には其履行不可能なるを考ふる時、佛蘭西は長期に亘るルール地帶占領により、漸次佛蘭西人

をして、ルール炭坑事業に喰込むの機會を作り、ルール地帶の獨逸系事業家をして、結局佛蘭西人と共同するにあらざれば事業を遂行すること能はざるを悟らしめ、以てルール地帶の石炭事業に佛蘭西の勢力を加へ來り、以て佛蘭西の製鐵業其他工業に十分の石炭供給を確保し、以て戰前の獨逸製鐵業を佛國に奪ふの基礎を築くことは、抑もルール占領が直接間接に、佛蘭西に及ぼす經濟的大利益と見られるのである、現に佛蘭西製鐵業者より、此問題に就て政府に建白せることも、一切に止まらないのである。斯の如き事情を考察する時、誰かポアンカレー及び佛蘭西政治家が多少の困難を排除して、ルール占領の擧に出でたる眞意を想像するに難からう乎。

十四

併し斯くの如く佛蘭西が英吉利を離れて、單獨に對獨強硬政策を斷行すればする程、英佛の乖離は益深められ、デルカッセが築いた親善關係は、次第に決裂を生じ無ければならぬ、それは何故乎と言ふに佛國の對獨壓迫は、英國の眞の利益をも脅威するものなる爲めである、別言すると佛蘭西が獨逸壓迫を利益とするが如く、英吉利は獨逸に對する緩和的政策を利益とする立場にあるからである。試みに今日獨英の關係を見やう、從來英吉利は、獨逸が世界政策を行ひ、海軍擴張を企てたる時期に於ては、海軍の競爭國として之を敵視しなければならぬ立場にあつた。又獨逸の航海業盛なりし時期に於ては、同じく獨逸を敵視して居たのである。併し世界大戰の結果形勢は變化し、英國は最早や獨逸を憂ふるに及ばぬこととなつた、即ち獨逸の海軍は全滅に歸したので一九〇七年以來激烈を極めた英獨海軍競爭も自然消滅し、從來獨逸側より來れる英吉利殖民地の脅威もなくなつたのである、次ぎに獨逸の有せる船舶は戰爭終了と共に多く英吉利の手に收められ、獨逸は航海業に於ても商業に於ても、直接英吉利の競爭相手とはなり得ぬ實狀に沈淪したのである。茲に於て英獨積年の疎隔は一掃し、利害衝突の機會は除かれたと言はねばならない、之丈けならば猶ほ善い、然るに今日英吉利として、最も重大視すべき問題が殘されて居る、それは何であるか、速かなる歐羅巴の經濟的恢復を圖る見地から、獨逸を寛大に遇せねばならぬことである、斯くの如くすることが、實に英國自身の緊切な戰後生活の利益の命令し、要求することとなること是れである、顧みるに英吉利は戰爭により約七百五十億圓の國債を背負込み、國貨亦自然膨脹を來せるのみならず。國民が自から失へる物質的損害も巨額に上つて居る、之を恢復するの手段は一に、戰爭後海外貿易を振興する外はな

いとは、同國官民の一致せる所であつた、然るに愈事業に着手し實際に當面して見ると、事總て意の如くならず、貿易は伸暢せざるのみならず、失業者續出し爲めに政府は、失業者救濟費として、一ケ年十億圓を投じなければならぬ有樣となつて居る、之は戰敗國たる獨逸の窮狀を中心とする歐大陸の經濟的不振の爲めであり、換言すれば、大陸の顧客が困窮した爲め英國品を買ひ得無い爲めである、就中獨逸は六百六十億圓の償金に苦しみ馬克紙幣の如き、從來五十錢のもの今や一毛に下落した程である、其結果英吉利の產物を獨逸に賣らんとすれば、生產費以下に之を賣却しても、尙買人なき難局にあるのみか、獨逸の未恢復的影響は、歐羅巴全體にも及んで居る、否な歐洲ばかりで無い、歐洲以外の方面に於ても獨逸は爲替關係から極めて低廉に賣り得る貨物を供給し、以て着々英國の貨物を驅逐して居る、從つて英吉利は之が對策として、是非共獨逸を救濟し、經濟的共存の立場に於て、獨逸との協同を圖らざるを得なくなつたことは、誰も解知し得る所であらう、然るに佛蘭西は如何と見るに、今や戰爭中獨逸軍によつて、蹂躙せられたる地域の恢復に忙はしく、對外貿易問題を重視すること、英吉利の如くならず、其失業者の如きも英吉利の百五十萬を算するに比して、僅かに五萬人程度にある、從つて此點で佛英の利害は一致せぬのみか、寧ろ前に述べた對獨恐怖に伴ふ佛國の安全確保策の必要より、强硬政策を執つて獨逸に臨んで居るのである、併し、茲に此原因事情を詳述するの遑は無い、唯だ讀者が知られ度いことは、英國の對獨逸寬大政策主張の根柢には自國の經濟的の眞利益保護てふ重大な主義があると言ふと是れである、然り、その衝突の本には、眞のセルフ、インテレストがある、然らば則ち今後此狀態が繼續するに於ては、誰か其英佛協約(アンタント)の終滅を告ぐる弔鐘たるを否定し得やう。

十五

以上で、予が所思は略ぼ之を述べ得たと考へる、此形勢は、實に英佛に執り、歐洲に執り、將た世界に執りて最も重大なものではあるまい乎、斯く言ふと、人或は疑はう「斯くの如き形勢なるに拘らず、如何なれば、英國は表面、思ひ切つた强硬態度を佛國に執るに至らぬであらう」と、併し之は近東問題土耳其處分問題、即ちメソポタミア、パレスチンの統治問題、君府問題、ダーダネルス、ボスフォラス海峽問題等を重視する英吉利としては、策戰上、ルール問題で反佛態度を執るを巧妙な外交と考へ無い爲めに外ならないのである、然も禍根は充分に植付けられたと見て差支ない。殊に忘るべからざることは、英吉利

人の性格である、佛蘭西人は機敏にして恬淡、英吉利人は遲鈍にして頑固である、佛蘭西人は喜ぶことも早ければ怒ることも亦早い、英吉利人は喜ぶことも遲ければ怒ることも遲い。併し漸を逐つて怒憤の念を加へ來る場合に於ては、最早收拾し恢復すべからざる程、頑固になるは英吉利人の特性である。吾人は之を思ふて、その將來を憂慮せぬ譯には行かないのである。

嗚呼デルカッセからポアンカレーへ、思へば兩國の外交も今や危機に瀕して居る、愈々英佛双方の隔離が完全になるの時來らん乎、今日迄少くとも兩大國の協調の上に立つて居た歐洲の外交的オルガニゼーションは如何に成り行くであらう、世界の平和は如何なる影響を經驗せねばならぬであらう。

銃殺問題から結婚問題へ

法學博士　穗積重遠

一

吉野作造博士が二月二十一日の東京朝日新聞鐵箒欄で軍隊に於ける銃殺を廢止せよと主張したのに對して、私は即座に贊意を表した。學者が他人の說に「即座に」贊同するとは輕卒だ、と云ふ人があるかも知れぬ。實際私は吉野博士に云はれるまでは銃殺問題に氣が附かなかつた。云はれて初めて成程と首肯したのだ。併し此「成程」は決して御座なりの輕卒な相槌ではない。既に久しく振り上げて居た槌が打ち遲れて相槌になつたのだ。私は兼々軍人の結婚問題について考へて居た。所が今吉野博士から銃殺問題を持ち出されて見ると、全く根本を一にし歸結を同じくする問題ではないか。そこで即座に成程と首肯したのだ。もし私が先に結婚問題を持出したならば、恐らく吉野博士の「成程」を贏ち得たであらう。即ち私自身の心の動きは「結婚問題から銃殺問題へ」である。併し話が銃殺問題から始まつたのだから、其方を先にして結婚問題に論及することにした

い。なほ問題は海軍にも共通なのだが、簡單の爲め主として陸軍についてのみ述べる。

二

私は歐米留學中諸國で監獄を見物した。研究的視察ではない眞の見物だつたが、死刑執行の設備までスッカリ見せて貰つた。

ドイツのマンハイムだつたかブルクザルだつたかの監獄と思ふが、斷頭臺を見た。ドイツでは「フアルバイル」（落斧）と云ふが、例の「ギヨツチン」である。勿論現代的改良を加へてあらうが、一見フランス革命流血の場面を想ひ浮べしめる。私は思はず顏をしかめて『こんな慘酷な道具がまだ用ひられて居やうとは思はなかつた』と云つた。案內の典獄は頗る氣色を損じて傲然として云つた。『何が慘酷だ。眞に一思ひに絕命する。何等苦痛を感ずる餘地がない。これ程正確にして理想的な死刑執行方法があるか。』

ロンドンの監獄では絞首臺を見た。我國のと大體同樣の仕掛だつた樣に思ふ。死刑執行練習用として等身大の人形があるのを用ひて、絞殺の眞似事をして見せて與れたが、眞似事でもよい氣持はしない。それに、イギリス人のことだからかも知れぬが、何となく無器用で手際よく行かず、ゴタゴタと隙がかゝるだけ悲慘な感じが强かつた。

アメリカではボストンの監獄で死刑用の電氣椅子を見せられた。これこそさすがにアメリカらしい文明式と褒めた所、『イヤやはり絕息に多少の隙がかゝつて思つた程理想的でありませんよ』と、アメリカの典獄は謙遜だつた。

三

これだけの材料で甚だ素人臭い死刑論――死刑存廢の根本問題までは遡らずに――を試みる。刑罰の目的については段々とやかましい議論もあらうが、要するに、(1)犯人を世間から隔離すること、(2)犯人自身の矯正、(3)世間への見せしめ、(4)被害者側の慰藉、と云ふ樣な所が刑罰の差當りの目的と云つてよからう。而して今日としては隔離と矯正との兩目的が重きを措かるべきで、「見せしめ」即ち所謂一般的豫防は、勿論かなりな効果があるには相違ないが、絕對的な利き目があるとは云ひ難い。被害者側の慰藉と云ふことも、人情上無視することは出來ないが、私はさう云ふ復讐的人情が段々になくなることを祈つて居る。『眼を以て眼を、齒を以て齒を』と云ふ時代は旣に遠い。所で死刑は隔離の目的を徹底的に達するものだが、其代り矯正の

目的は全然拋棄されたことになる。矯正の爲めならば其人の肉體又は精神に苦痛を與へると云ふ手段もあり得やうが、隔離だけの目的ならば苦痛を與へる必要はない。殺しさへすればよいので、苦しめて殺す必要はない。どうせ殺すのだから慘酷も何もあるものか、と云ふ議論は立たない。もし眞に殺すべきものならばそれを殺すのは慘酷ではない。不必要な苦痛を與へるのが即ち慘酷である。而して慘酷と云ふのは殺される人其人の苦痛だけの問題ではない。寧ろ結局は人間一人を殺さねばならぬことになつた其同胞に取つての感情の問題である。ドイツの典獄は斷頭臺上の死は無痛だから慘酷でないと云つたが、私はさう思はない。それは唯だ肉體上の苦痛を感じないと云ふだけの話で、身首所を異にすると云ふ事を考へるだけでも、斷頭臺に上されて愈々と云ふ時までの受刑者の精神上の苦痛はどれ程であらうか。流血裡の首なきむくろを目前に見るでもあらう執行者の感じ、遺骸を引渡された場合の遺族の感じ、それを傳へ聞く社會一般人の感じ、それ等を勘定に入れなくてよいものだらうか。絞刑は身首所を異にしないと云ふだけが斷頭刑よりましだが、まだまだ理想的とは云へまい。やはり比較的理想に近いのは電氣死刑でもあらうか。尤も現在の所アメリカの典獄が自白した樣な缺點があるかも知れぬが、それは避け得られぬ缺點でもあるまいし、兎も角も一般社會に取つての感じはこれが一番惡くない樣だ。而してその感じの惡くないと云ふ主要な一點は、隔たつた場所でスウイッチ一つ入れることによつて萬事畢ると云ふことなのである。

四

このスウイッチ一つでと云ふ點に、私は重きを措きたい。即ち死刑の方法は、一方ではなるべく苦痛少なく且つ肉體を毀損しない方法でありたいと同時に、他方ではなるべく機械的な方法の方がよいと思ふ。死刑の厭はしい根本點は、人が人を殺すと云ふことである。どうした所で結局それには相違ないが、併しそこが人情である。此手であの人を殺す又は殺したと云ふ死刑執行者に取つての感じ、あの人に殺されると云ふ受刑者の感じ及びあの人に殺されたと云ふ其遺族の感じ、これは出來得る限り稀薄に間接にしたいものである。私が留學中に見た死刑具の中で一番慘酷に感じたのは、ロンドン塔に保存されて居る歴史的な首斬斧と首斬臺とであつた。此首斬道具の前に立つて何とも云へぬ悲慘な感じがするのは、何夫人何伯爵を斬つた其道具だと云ふ歴史の爲め計りではない、血の痕かと黑い刃の曇りやまざまざと遺る臺の切込みばかりの爲めではない。この[illegible]

道具然たるもので人間の手が人間の首を無雜作に叩き切つたかと思ふことが、人をして慄然たらしめるのである。同じ斷頭臺でも前述ドイツ監獄のものがこれに較べれば悲慘の感じが薄いのは、それが機械的だからである。所で銃殺だが、ロンドン塔の首斬り程ではないにしても、死刑方法として隨分原始的なものと云はねばならぬ。それは機械的でなくて人爲的だからである。此眼で覗ひ、此指で引金をひく、覗つて打つて中てゝ殺す直接行爲だからである。鼻唄交りに斧を研いだロンドン塔の首斬り役なら知らず、國民義務を盡す爲めの入營兵にそれを遣らせるのは、吉野博士及び二月二十四日のアサヒグラフに於ける牧野英一博士の主張通り、極めて不穩當な事と思ふ。而して私は將校に執行させろと云ふ兩博士の議論――勿論それは已むを得ずんばと云ふ話なのだが――にも贊成したくない。方法其ものが不穩當なのであつて、誰が行へば穩當になると云ふのではないからである。三月一日のアサヒグラフに陸軍少佐滿田稻澤登氏の公平冷靜な意見が載つて居るが、其中に「銃刑は直接人を以て人を殺すのであるから、これは將來電氣裝置の自動銃でも用ふる事に改正したい」とある。至極贊成で、私の覗ひ所も正にそこなのだが、唯だ既にそこまで持つて來た以上、電氣銃と云ふ執着が遺憾に思はれる。

五

世間への「見せしめ」即ち所謂一般的豫防と云ふ刑法の目的からも、死刑を考へて見ねばならない。これも亦結局は死刑存廢の根本問題まで遡るべきだが、假に死刑存すべしとしても、極惡の犯罪に對して死刑を留保して置くと云ふことと其事だけで、一般的豫防の望み得べきだけの効果を擧げ得る。死刑を濫用し又は其方法を慘酷にすることによつては、其以上の効果を望み得ないのみならず、却つて其効果を減殺しはせまいか。此點は今評論すべき場合でないが、戰國時代から德川時代に亘つての嚴刑主義の成績を調べて見たらば、釜煎が石川五右衛門をヒーローにした、さうして彼が豫言した通り『世に盜人の種は盡き』ない、と云ふ様な結論が出て來はしないかと思ふ。

それ故『銃殺を廢せば軍規を如何』と云ふ様な議論は、私の承服せざる所である。軍規のみならずすべての秩序の重んずべきことは勿論の話だが、秩序は法律のみで維持されるものでなく、況んや刑罰が秩序維持の第一手段ではない。『之ヲ齊フルニ刑ヲ以テス』るは孔子の誡むる所である。軍規維持の根本義は國民が喜んで兵役に服することである。國民をして喜んで兵役に服せしめる根本義は、軍隊と國民とを別世界にしないことで

ある。而して軍隊を別世界にしない根本的方法は、軍隊に關して必要以上の特別制度を設けないことではあるまいか。

六

銃殺制度を辯護する爲めに武士道論を持出すのが見當違ひであることは、深く論ずるまでもあるまい。たとひ徳川時代の武家心理が其儘今日行はれて居るとした處で、切腹の場合の介錯と今日の重大犯人の死刑執行とは場合が違ふ。自裁して同僚の介錯を受けるのは武士の名譽であつたらうが、縛り首は太刀取が誰であつても武士の恥辱であつたに相違ない。更に又人を殺すことを慘酷だなど丶云つて居て戰爭が出來るか、結局人を殺すのが軍人の職分ではないか、と云ふ樣な議論があることを私は悲しむ。軍人の職分は平和を維持することだと私は信ずるからである。戰爭が已むを得ないとすればそれは平和維持の爲めに已むを得ないのである。而して戰爭をする以上人を殺すことが已むを得ないとしても、それは已むを得ずして初めて許さるべきことである。戰爭の爲めに戰爭をするのではない。況んや人を殺す爲めに戰爭するのではない。戰爭の爲めでなくして人を殺すことを、軍人としてもどうして忍び得やう。それが戰友だからとか戰友ではないからと云ふ樣な問題ではない。昔の所謂武士道には頗る人情的な方面と今日から考へて甚だ非人情的な方面とがある。前者即ちシヴアルリーの方面こそ眞の武士道として今日以後に維持せらるべきものであつて、後者即ちブルータリティーは武士道の餘孼に外ならぬ。慘酷が何で武士道であらうぞ。且又銃殺刑は寧ろ我國武士道の遺風ではなくて、我國が西洋の軍制を採用した際の附屬物であらう。それを廢止しては我國の武士道が立たぬと云ふ樣な問題ではあるまい。

併し斯う云ふ點の水掛論を始めたら際限のないことだし、銃殺問題は私に取つては寧ろ枝葉なのだから、此邊で一先づ切上げて今少しく大局高所に移りたい。其移り目に、先日偶然孟子を開いて成程斯う云ふ否銃殺論に適切な金言があつたと案を打つた一節を掲げて置く。

人皆有二不ㇾ忍ㇾ人之心一。先王有二不ㇾ忍ㇾ人之心一。斯有二不ㇾ忍ㇾ人之政一矣。以二不ㇾ忍ㇾ人之心一。行二不ㇾ忍ㇾ人之政一。治二天下一。可ㇾ運二之於掌上一。

七

銃殺是否問題は私に取つては寧ろ枝葉であつて、根本問題は陸軍刑法の適用範圍縮少である。法文について具體的に云へば、陸軍刑法第一條に『本法ハ陸軍軍人ニシテ罪ヲ犯シタル者

ニ之ヲ適用ス』とある罪の字を、『本法ノ罪』と云ふ風に修正したいと云ふのである。元來陸軍刑法第二編『罪』と題する部分には、叛亂の罪・擅權の罪・辭職の罪・抗命の罪・暴行脅迫の罪・侮辱の罪・逃亡の罪・軍用物損壞の罪・掠奪の罪・俘虜に關する罪及び違令の罪と云ふ軍事犯罪だけを規定して居るのであるから、考へ方によつては第一條の『罪』と云ふのも此等の軍事犯罪だけの意味に解釋されないこともなささうである。併し從來さうは考へられず、陸軍刑法第一條の『罪』と云ふのは普通刑法其他一切の刑罰法令の罪を含むと解釋され來つた樣である。それ故私は特に『本法の罪』と云ふ修正を提議するのである。タツタ三字の挿入に過ぎないが、これによつて陸軍刑法が普通刑法と對立する意味の特別刑法でなくなつて、純粹の軍規法たる軍律になるのである。私はそれが當然な事、又それで充分な事と思ふ。寧ろ今までなぜさう規定されなかつたか、なぜさう解釋されなかつたかを怪しむ。

八

陸軍刑法第一條の修正意見は、當然に陸軍軍法會議法第一條に對する修正意見を伴ふ。實際上は其方が大切な問題で、私の議論の中心點もそこにある。即ち同條に『軍法會議ハ左ニ記載シタル者ニ對シ其ノ犯罪ニ付キ裁判權ヲ有ス』とあるのを『陸軍刑法所定ノ罪』と云ふ意味に改むべしと云ふのである。言ひ換へれば、軍人の犯罪でも普通刑法上の犯罪其他軍律以外の刑罰法令違反は普通裁判所で普通の刑事訴訟手續によつて裁判處罰せらるべきものだと云ふのである。即ち軍法會議をして眞に文字通りの軍法會議たらしめよと云ふのである。私は大正十年の改正で軍法會議の手續が著しく普通刑事訴訟手續に接近して來たことを喜ぶ。併し同時に普通犯罪を擧げて普通裁判に移すの徹底的果斷がなかつたことを深く遺憾に思ふ。

九

そこで再び銃殺問題に立戻るが、軍人の死刑が銃殺刑である法律的根據は、陸軍刑法第二十一條『陸軍ニ於テ死刑ヲ執行スルトキハ……銃殺ス』と云ふ規定であるが、私の議論を推し進めると、少くも軍人が普通犯罪で死刑に當る場合には、銃殺と云ふ特別な死刑執行方法を用ふべきでないと云ふことになるのであつて、右の法文を『本法ニ依リテ死刑ヲ執行スルトキ』とでも改めようと云ふのである。即ち銃殺は軍律違反の爲めの死刑の場合だけと云ふことになる。これが私の最小限度の要求である。併し問題はそれだけでは盡きないのであつて、軍律違反の

爲めの死刑としても銃殺が果して其目的上必要適當であらうかと云ふ問題が残ること、前述の通りである。

十

要するに私は、軍人なるが故に普通犯罪についても特別の裁判處罰を受けねばならぬことが不當だと云ふのである。其論據は必しも一つではないが、こゝには最も根本的な論據を擧げる。それは外でもない。

憲法第二十三條　日本臣民ハ法律ニ依ルニ非ズシテ逮捕監禁審問處罰ヲ受クルコトナシ

同第二十四條　日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ奪ハルヽコトナシ

と云ふ國法の根本原則である。斯う云ふと直ぐに、陸軍刑法も陸軍軍法會議法も法律だからそれによる審問處罰は右の憲法規定に牴觸しない、況んや憲法第三十二條には『本章ニ掲ゲタル條規ハ陸海軍ノ法令又ハ紀律ニ牴觸セザルモノニ限リ軍人ニ準行ス』とあるではないか、と云ふ議論が出さうであるが、私はさう云ふ形式論をするのではない。犯罪處罰上すべての日本臣民に同等待遇を與へやうと保障した憲法の精神本旨にかなはぬと云ふのである。憲法第三十二條をこちらの論據に逆用すれば、同條は軍人について除外例を許すと同時に、其除外例を軍法軍紀に關する場合に限り、原則としては軍人も勿論日本臣民としての權利の保障を受くべき旨を宣言したのである。軍人だからと云つて普通犯罪について普通裁判官の『裁判ヲ受クルノ權』を奪ふことは、憲法の形式的違反ではなくとも、精神的違反ではあるまいか。而して精神的違反は形式的違反よりも更に大なる違反である。大正十年に軍法會議手續を著しく普通刑事訴訟手續に近づかせたことは、右の實質的憲法違反を多少緩和したものとして諒とすべきだが、折角近づいた普通刑事訴訟手續が更に一大躍進をなして再び軍法會議手續との大なる距離を作らんとして居る。それは即ち陪審制度の採用である。陪審法が今期の議會を通過するか否か、又其制度が果して豫期の效果を收めるか否か、これはいづれも疑問であるが、併し兎も角も刑事裁判の公正の爲めに有用な制度としてそれが實施された曉に於て、軍人なるが故に――殊に兵役の爲めの入營中なるが故に――其利益に浴し得なくて果してよいものだらうか。さりとて軍法會議に陪審を用ひるとまでに普通刑事裁判手續に追随することは恐らく出來なからう。それ故にこそ私は、軍法會議を眞に文字通りの軍律違反審判所とし、軍人の普通犯罪を普通裁判所に移せ、と主張するのである。

二

陪審の話が出たから、こゝで一つロンドンで軍人が陪審附普通裁判で裁判されたのを傍聴した話を挿まう。時は世界大戦の初期で、キッチナー將軍が盛に募兵を遣つて居た時であつた。被告は即ち其應募兵の一人で、カーキの軍服で出廷した。罪名は猥褻罪で、事件は大略斯うであつた。彼は愈々近日出征すると云ふので或夜十一時過に一友人の家へ暇乞に行つた。所が友人は留守だつたので、玄關口で其夫人に面會して暇を告げた。そこまでは先づ無事だつたが、彼は圖々しくも其儘上り込んで臺所まで夫人を附け廻し、接吻を强要して夫人が結局それに應じたので、更に其以上の暴行に及ばうとし、夫人の衣服を裂くに至つたのである。審理の筋道は略するが、被告の辯護士はテーラー氏と云ふ若手の賣出しとでも云ふべき雄辯家で、證人として出廷した被害者たる夫人を所謂クロス・エキザミネーション（反詰）で散々にこきおろした末斯う云ふ辯論をした。

『被害者と稱する婦人は如何にも不仕鱈な女である。自ら衛ることを知らざるフーリッシ・ウーマンである。夫の留守の夜半十一時に男を臺所までも引入れて接吻を許し且自らもそれを返した以上、これ正に男女相和して相戯れたに外ならぬ。たとひ其戯れが嵩じて其以上に及んだとした所で、暴行などと云ふべき筋合ではない。』

こゝで辯護士は特に陪審員席の方に向き直つて、一段と聲を張り上げた。

『扨て陪審員諸君。抑も諸君は此被告を何者とか見る。これ我帝國の軍人である。今や强敵對岸に臨んで國家危急存亡の秋、一兵卒と雖も貴重缺くべからざる時に當り、祖國の爲めに職業否身命までも擲つて義勇奉公の誠を致さんと奮つて應募せる此勇士を、今出征前の祝酒に驅られた小過失の爲めに躓かせんとは何事ぞや。諸君は果してこのカーキ服の戰士を、監獄に送らんと欲するか。將た又戰線に送らんと欲するか。』

實に立派な力强い辯論であつた。斯う日本語に譯すとどうも勢が拔けるが、"Would you send this warrior in Khaki—to prison, or to the front?" と結んだ時には、眞に滿場水を打つた如く、感動の色は並み居る陪審員の面上に溢れた。あはや此被告無罪かと思ふ所に、裁判長ニールド氏が儼然として立上つた。氏は知名の法律家で、イングリッシ、ジエントルマンの典型とも云ふべき眞面目な落附いた態度だつた。さうして斯う云ふ「サムミング・アップ」（綜合說示）をした。

『事件は極めて簡單であるから、特別の說明を要せぬ。唯だテーラー氏の辯論に關して二點だけの注意をしたい。第一に、テーラー氏は被害者がフーリッシ・ウーマンだと云はれた。成程私もさう思ふ。併し私は女がフーリッシなら男が之を犯してよいと云ふ理由を知らない。事によつたら女のフーリッシなのに乘じて之を犯す男の罪は一層深いかも知れぬ。故に陪審員諸君は女がフーリッシであつたと云ふ點を眼中に措くべきでない。第二にテーラー氏は被告は我帝國の軍人なるが故に云々と云はれた。私はそれについて一言なきを得ぬ。成程今日が一兵をも缺き得ぬ國家興亡の機であることは云はるゝ通りであつて、キッチナー將軍の募兵が成功せんことを祈るに於て私も人後に落ちぬ。併しながら諸君は今回の戰爭を如何なる戰爭と心得らるゝか。我國開國以來未だ嘗てあらざりし程の正義の戰である。平和を愛する我國民が決然として劍を執つて立つたのは、彼ドイツがベルギーの永世中立を侵した爲めであることと勿論であるが、殊に直接に我々の義憤を燃やしたものは、ドイツ軍人が占領地に於ける婦人に對する無禮暴狀である。其暴を伐つべき義戰に從ふ我軍の勇士は、汚(ケガ)れなき軍服(uniform without stain)を著けて出征せねばならぬ。罪人を驅つて罪人と戰はしむべきでない。故に陪審員諸君は被告が帝國軍人であると云ふ事を勘定に入れてはならぬ。女がフーリッシであれなかれ、男が軍人であれなかれ、こゝに一人の男が一人の女に對して斯く斯くの行爲あり、我國法上罪に當るべきや否や、唯だそれを判定すべきのみ。陪審員諸紳士、斷じて正しきを爲せ。(Gentlemen the Jury! Do justice, by all means.)』

私は今まで、日本でゞも西洋でゞも、斯んな正々堂々たる演說を聽いたことはない樣な氣がする。而して一演說によつて聽衆が斯くも嚴肅にされたのを見たことがない樣な氣がする。聖書に『學者の如くならず權威を有てる者の如く』とあるのも斯う云ふ語り方かと思ふ程であつた。十二人の陪審員は沈痛緊張の面持で別室に退いた。定めて愼重な審議をしたのであらう、約一時間の合議の末再び出廷した陪審員は其座長を通して『有罪』と云ふ判定を宣告した。そこで裁判長は再び起つた。

『陪審員諸君は有罪の判定をされた。然らば次に私が刑の量定を爲すべき順序であるが、其前に私は被告に一言したい。被告よ、私はカーキ服の被告が罪もあらうに此罪名で法廷に立つのを見ることを悲しむ。武士(ナイト)の眞精神はシヴアルリーに存し婦人(レデー)に對する尊敬は其重要な表現だからである。所で被告に尋ねたいのは、當夜被告は酩酊して居たとのことである

が、被告は元來酒を嗜むか、今までも酒の爲めに失策したことがありはせぬか。』

被告は渡りに船と、『實は私は酒が好きで御座りまして、度々失策を致して居りますが、實は當夜も酒の上で』とクドクド陳辯しかゝるのを、裁判長は抑へて、

『イヤ酒は暴行をジヤスティフアイしない。併し玆に私は改めて被告に問ふが、被告は將來酒を愼しみ品行を修めると云ふことを此際誓ふことが出來るか。』

被告が"Yes, Sir,"と答へるのにかぶせて、

『イヤイヤそんな輕い事ではいけない。國王陛下の法廷で、私及び列席判事諸公と陪審員諸紳士と而して傍聽公衆の面前で、汝は公けの誓言を敢てするか。』

被告は恐入つて云々と誓言を述べる。裁判長は威儀を正して、

『然らば宣告するが、私も實は辯護士の所論に情に於て同感であつて、軍國多事の際一人の勇士を獄裡に繋ぐは忍びざる所である。今被告の改過遷善の決意堅きを見るが故に、私は此裁判の刑の宣告を無期延期しやうと思ふ。往け、被告よ、汝の聯隊長殿に謝罪して出征の列に加はれ。而して今日法廷に受けたる耻辱を、明日戰場に雪ぐべし。』

秋霜烈日の法廷忽ち春風駘蕩たり。被告の感泣は云ふも愚か、辯護士も面を起す、陪審員もホツと息つく、傍聽人はもし法廷でなくば拍手喝采せん計り、實に花もあり實もあり義も立ち情も全い名裁判、『ダニエル樣の再來』と讃歎せざるを得なかつた。

私は勿論其兵士が其後どうなつたかを知らない。併し此大岡裁判の後日物語を極めて御定まりに戲曲化すれば、一旦英の難戰に際し身を挺して敵に當り壯烈な戰死を遂げた一兵士があつた、それはかの被告であつた、と云ふことにならざるを得ない。

長々しき挿話を宥されよ。私は唯だ、軍人を普通裁判に附することは軍人の名譽威嚴を損じ軍規を紊し士氣に關する、と論ずるでもあらう人々に斯う云ふ事實談もありますとだけ申したいのである。

二

こゝで一轉して結婚問題に入りたい。元來私が軍人なるが故の不必要な特別取扱を否とするのは、單に銃殺だけの問題ではないこと前述の通りであるが、更に又陸軍刑法だけの問題ではない。即ち百般に通じての話であるが、軍人なるが故の不必要

た特別取扱として兼々私の注意を惹いて居たのは、陸海軍人の結婚制限である。此結婚制限は最近まで『陸軍現役軍人婚姻條例』(明治三十七年勅令第四十五號)及び『海軍現役軍人結婚條例』(明治四十一年勅令第百八十號)によつて行はれて居た。今便宜の爲め前勅令は其主要條文を、後勅令は其全文を左に掲げる。

陸軍現役軍人婚姻條例

第一條　陸軍現役軍人婚姻ヲ爲サントスルトキハ、將官同相當官ニ在リテハ陸軍大臣ノ奏請ニ依リ勅許ヲ仰ギ、上長官士官ニ在リテハ陸軍大臣、準士官以下ニ在リテハ所管長官ノ許可ヲ受クベシ。

第二條　現役下士兵卒及諸生徒ハ婚姻ヲ爲スコトヲ許サズ。但シ滿六年以上服役ノ者ハ此ノ限ニ在ラズ。

海軍現役軍人結婚條例

第一條　海軍現役軍人結婚ヲ爲サントスルトキハ、將官同相當官ニ在リテハ海軍大臣ノ奏請ニ依リ勅許ヲ仰ギ、上長官士官ニ在リテハ海軍大臣、準士官以下ニ在リテハ在籍鎭守府司令長官ノ許可ヲ受クベシ。

第二條　候補生及二等卒以下ハ結婚ヲ許サズ。

第三條　配偶者タルベキ婦人ハ品行端正ノ者タルベシ。

此兩勅令は大正十年に改正された。其現行制度の主要條文は左の通りである。

陸軍現役軍人ノ婚姻ニ關スル件

(大正十年勅令第四百八十一號)

陸軍現役軍人婚姻ヲ爲サムトスルトキハ、親任官同待遇者ニ在リテハ陸軍大臣ノ奏請ニ依リ勅許ヲ仰ギ、其ノ他ノ者ニ在リテハ陸軍大臣ノ定ムル所ニ依リ許可ヲ受クベシ。

陸軍現役軍人婚姻取扱規則

(大正十年陸軍省達第七十三號)

第二條　前條以外ノ陸軍現役軍人ニシテ婚姻ヲ爲サムトスルトキハ、左ノ區分ニ依リ許可ヲ受クベシ。

一　將官同相當官　　陸軍大臣

二　上長官、士官及準士官　　所管長官

三　下士、兵卒　　所屬部隊長

第三條　士官候補生、主計候補生、現役見習士官、現役見習醫官、現役見習藥劑官、現役見習獸醫官及諸生徒ハ婚姻ヲ許可セズ。

海軍現役士官現役特務士官候補生及現役準士官ノ婚姻ニ關スル件

(大正十年勅令第四百八十三號)

海軍現役士官、現役特務士官、候補生及現役準士官婚姻ノ爲サムトスルトキハ、親任官同待遇者ニ在リテハ海軍大臣ノ奏請ニ依リ勅許ヲ仰ギ、其ノ他ノ士官及候補生ニ在リテハ海軍大臣、特務士官及準士官ニ在リテハ在籍鎭守府司令長官ノ許可ヲ受クベシ。

所で此結婚制限は、前記明治三十七年及び明治四十一年の兩勅令から始つたのではないのであつて、遡つて明治十四年に

『陸軍武官結婚條例』（陸軍省達甲第十三號）及び明治十八年に「海軍武官結婚條例」（海軍省達乙第十四號）がある。其陸軍武官結婚條例の第一條が左の通り此結婚制限の全趣旨を語つて居る。

第一條　凡ソ軍人ハ最モ其品位ヲ重ンズ。故ニ其配偶ヲ擇ミ以テ終身ノ活計ヲ維持セシメ、家政ヲ治メテ以テ其職掌ヲ確守セシム。若シ配偶其匹ヲ擇バズ之ヲ輕忽ニセバ、一ハ以テ其品位ヲ傷ケ、一ハ以テ其營生ニ煩ハサレ、遂ニ其職掌ヲ汚シ、隨テ全軍ノ精力ヲ殘フニ至ル。仍テ左ニ其制限ヲ設ク。

一三

斯くして軍人の結婚に制限を加へる趣意は成程一應尤もな様でもあるが、併しそれは軍人だけに限る問題だらうか。又法律の力で實現し得る事柄だらうか。アメリカの有名な自働車製造會社フオード工場では、職工の家庭に夫婦喧嘩其他の面倒があると忽ち仕事の能率に響くと云ふので、家庭紛議の調停機關を私設して成績が好いと云ふ話である。もし軍人の結婚が「全軍ノ精力」に關すると云ふならば、官吏の結婚の全官廳に於ける、事務員の結婚の全商店に於ける、職工の結婚の全工場に於ける、いづれも同じことであるが、誰しも官吏の結婚・事務員の結婚・職工の結婚に長官・商店主・工場長の許可を必要としようとは考へ附かぬであらう。然るに軍隊ではそれが考へ附かれて、たとひそれが明治十四年の考へ附きとしては時代相當としても、四十年後の大正十年に至つて――多少緩和はされたものゝ――やはり維持されたと云ふことは、寧ろ不思議な事柄である。イヤ軍人は他の職業と違つて「最モ其品位ヲ重ンズ」るから、と云ふのだが、結婚について普通人以上の制限監督を受けることが果して品位を重んじられる所以であらうか。併して其制限監督によつて所期の效果が得られゝばまだしもだが、私はそれを疑ふのであつて、どうもフオード工場の夫婦喧嘩仲裁機關程の役にも立たないのではあるまいかと考へざるを得ない。役に立たないのみならず種々の弊害がありはせぬかと危ぶまざるを得ない。

一四

一體軍人の結婚の許否は何を材料標準として審査決定するのだらうか。勅許の事は申すべき限りでないが、大臣以下の當局が許否を決するについての調査事項は、前掲陸軍現役軍人婚姻取扱規則によれば、配偶者たるべき婦人の（一）教育の程度（二）

平素の行狀(三)健康の狀態(四)父母の身分職業(五)資家の生計の概況等である。而して其調査は部隊長がするのであつて、下士卒の場合には部隊長自身許否を決し、其他の場合には部隊長が「婚姻ノ可否ニ關スル意見」を附して長官に報告すると云ふことになつて居る。いづれにしても部隊長の意見が重きをなすのであつて、部隊長の人物によつて點が甘くもなり辛くもなり公平にもなり不公平にもなりさうなことである。弊害の有無は知らぬが、弊害があり得る制度と云はねばならぬ。海軍の方も調査事項は大同小異だが、其材料は出願者自身が提出する市町村長の證明書故、陸軍の樣な積極的弊害はあり得ないかも知れぬが、先づ以て形式一遍に了りさうなことである。

要するに此制度は、其目的を達しやうと思つて實質的審査に骨折れば甚しい干渉になるし、骨折らずに形式的審査に止めて置けば唯だ無益の手數をかけるだけのことになる。後の方ならば先づ無事ではないかと云ふかも知れぬが、實はそれが中々無事ではないのであつて、やがて許可があることは豫期されても、其許可の手間取ることが關係者に取つての苦痛であり得る。場合によつては其爲めに折角の緣談が不調になることなどもないとは限らない。そこで更に斯う云ふ弊害を考へ得る。許可を受け得ない場合に、又は其手續を面倒なりとして、許可のないのに事實上の結婚をしてしまひ、婚姻屆をせずに所謂內緣の夫婦となつて居ることである。もし結婚許可制度を勵行した結果軍人には內緣の妻をもつ者が多いと云ふことになつたならば、軍人の品位を保つ爲めと云ふ目的とは正反對の結果である。私は勿論さう云ふ事實の多からざることを祈るが、戰死軍人の遺族扶助料を受くべき妻か內緣の妻なので取扱に困つたと云ふ樣な話を度々聞く樣に思ふ。元來內緣の夫婦なる一種特別な關係が多く存すること、卽ち事實上の婚姻と法律上の婚姻と認められるものとが一致しないことが、我國今日の一つの困つた現象であつて、それは勿論軍人社會だけの現象ではなく又軍人の結婚手續だけの罪ではないが、たとひ少しなりとも此現象を助長する制度として、私は軍人の結婚制限に反對せざるを得ない。大正十年の改正に際しては、前揭條文の比較によつてわかる通り、其制限が多少緩和された。前記の樣な弊害が少しは反省されたのであらうか。併し私は制限全廢の徹底的英斷がなかつたことを、同じく大正十年の軍法會議手續の改正の不徹底と共に、甚だ遺憾とするのである。

一五

更に此等の利害問題よりも一層深い根本問題がある。婚姻其

もの丶本質に反すると云ふ一番の根本論は措いて、私は前揭明治三十七年・明治四十一年及び大正十年の諸勅令を憲法違反だと思ふ。たゞに精神上の憲法違反であるのみならず、形式上も正に憲法に牴觸して居る。元來婚姻の要件は民法と云ふ法律に規定されて、卽ちこれこれの要件が揃へば結婚が出來ると法律上請合はれて居るのである。然るに勅令卽ち命令で其要件を追加し、軍人は民法上の要件を揃へただけでは結婚出來ぬとした。卽ち憲法第九條の『命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得ズ』と云ふ規定に眞正面から衝突して居る。殊に明治三十七年及び明治四十一年の兩勅令が『現役下士卒及び諸生徒』並に『候補生及二等卒以下』の結婚を禁じたのは、一時的ながら個人の婚姻の自由を剝奪するもので、實に亂暴千萬なことであつた。流石に大正十年の改正では前揭の通り此禁を解いた。殊に海軍の方では、兵卒の結婚には許可も要せぬことになつたのであつて、結婚制限を本職の軍人だけの問題にした邊、陸軍よりは確に數步を進めて居る。陸軍の方ではまだ士官候補生乃至諸生徒の結婚を禁止して居る。よしそれが軍隊教育上必要な事にしても、これは法律で規定せねばならぬ重大事項である。

こゝに命令で定められた軍人の結婚制限を憲法違反でなくする唯一の途がある。それはこれを純粹な軍規法と見ることである。卽ち許可なくして結婚した軍人は軍律上の規律罰に處せられ又は免職される等の制裁は受けやうとも、婚姻其ものは有效に成立すると云ふことにするのである。もし結婚制限が軍隊に取つて是非必要だとしても、それで充分であり且それが正當だと思ふ。併し現在さうは取扱はれて居ないのであるが、それは寧ろ陸海軍の罪ではなくて、民法第七百七十六條の規定又は其解釋の罪である。同條に『戶籍吏ハ婚姻ガ第七百四十一條第一項……ノ規定其他ノ法令ニ違反セザルコトヲ認タル後ニ非ザレバ其屆出ヲ受理スルコトヲ得ズ』とあるので、現役軍人の婚姻屆は結婚許可のない中は市町村長が受取つて吳れず、從つて法律上の婚姻が成立し得ないことになつて居る。私は此解釋を考へ直さねばならぬと思ふし、もし解釋では救ふことが出來ぬとならば立法上の改正を望む。丁度同條但書によつて、家族が戶主の同意書を添へぬ婚姻屆を出したならば戶籍吏は一應注意を與へ、それでも出すと云ふなら受取つて婚姻を成立せしむべく、其代り戶主は離籍又は復籍拒絕の制裁を行ひ得ると云ふことになつて居るが、軍人の結婚制限についても其程度が適當ではないかと思はれる。

一七

所で結婚制限の問題は軍人についてだけではなくて、華族についても存する。華族令(明治四十年皇室令第二號)第十四條乃至第十八條によれば、有爵者及び其家族は婚姻を始め其他諸種の親族相續關係の行爲をするのに宮内大臣の認許を要すると云ふことになつて居る。而して宮内大臣はかなり此監督權を勵行するらしく、軍人結婚の問題よりも華族の結婚等の許否問題の方が頻繁に新聞種にもなる樣である。これは結婚だけの問題ではないから、全體として一概には論じ得ないが、結婚制限だけについて見ると軍人の場合と大體似て居る。其趣旨、其實効、其弊害、命令で法律を變更して居ることとの不當等皆彼此相通じて居る。而して斯う云ふ取締が華族社會に必要相當であるとしても、これは畢竟取締に止まるべきで、それに違反した婚姻を不成立ならしむべきでなく、違反者其人に華族令上の制裁を加ふれば足る、と云ふ點に於ても軍人の結婚について述べたと同じ道理である。華族令第二十條に『宮内大臣ノ認許ヲ受クベキ者認許ヲ受ケズシテ第十四條乃至第十八條ノ行爲ヲ爲シタルトキハ、情狀ニ依リ華族ノ禮遇ヲ停止シ又ハ爵ヲ襲ガシメザルコトアルベシ』とあるのを、私は前記の趣旨と解するのだが、實際上はさう取扱はれて居ない。

一八

銃殺と結婚、軍人と華族、問題の末は岐れたが其根本は同一である。私はこの人間の世界の中に別世界が存することを忌むのである。人間世界と云ふ大集團の中に大小各種の集團が相亙なり相交ることは人間共同生活の當然の現象であつて固より否認すべきでない。而して其各集團がそれぞれ必要だけの特殊性を有すべきことはこれ亦當然だが、其根柢には出來得る限り大きな共通性がなくてはならぬ。其共通性とは何か。結局人間性である、「人間らしさ」である。『人に忍びざる心』と云ふ人間らしさを傷ける銃殺刑が不必要に維持せられ、人間らしさ其ものと云ふべき婚姻に特殊な干渉が行はれることは、軍隊の人間らしさを滅殺してこれを別世界たらしめる一端である。私は單に銃殺刑に反對するのではない。單に結婚制限を非難するのではない。軍隊を別世界たらしめたくないと熱望するのである。我國家内に別世界を見たくないのである。我國を隅から隅まで人間らしい國家にしたいのである。而してそれを推し擴げて世界全體を眞の人間世界にしたいのである。

科學と宗教の衝突問題より　原始佛教主義の提唱

文學博士　木村泰賢

去る一月の東京日々及び大阪毎日紙上に於て松村松年博士が十數回に渉りて科學と宗教の衝突に就て論述された。而してその結論としては、要するに科學的眞理の照らす所、宗教は次第にその弱點を暴露して遂には、少くとも識者の間には全くその勢力を失ふに到るであらうといふにあつた。然るにこの議論たるや卒直に言へば必ずしも新しいものではないけれども、矢張り讀書界に相當の注意を惹起し、之に對して種々の批評が出でた。中に就て基督教界の元老小崎弘道氏は之に對して同じく日々新聞紙上に數回に渉りて基督教的立脚地よりその攻擊の當らざることを指摘し、又關西方面にありては同志社大學の教授達を中心にして、之に對する評論やら反駁やらが發表されて、教界内に時ならざる一波瀾を起すことになつたのである。たゞ獨り怪むべきは、吾人の知れる限り佛教側からはこの説に對する有力な批評の未だ出でざることである。蓋し松村博士の論文は主として基督教に對したものであるから佛教側では之を對岸の火災視した結果であるかも知れぬけれども、該論文に於て同博士は佛教にも少し當つた所のある限り、佛教徒としても又之に對して一言なかるべからざるものがあらうと思ふ。

この小論文は、後に述ぶるが如く、必ずしも松村博士の論文のみに對するものではないけれど。亦それに激發された結果として提唱したものであることはこゝに斷つてかゝる所である。

一　論點の所在

松村博士の科學對宗教の所説に對して、基督教側から種々の辯護的反駁が出たが、吾人の解する限り、それは大凡二方面からせられたやうである。一は已に近代科學によつて何程か改造せられた、言はゞ進歩的見地に基く基督教觀からである。即ち處女の懷胎説やら、死後の復活説などは―之を具體的事件に關する解釋と見る限り―已に基督教界よりも捨てられたものであるから是等の説に對して攻擊するが如きは的なきに矢を放つに等しきことである。又創世紀の創造觀の如きも之を表面的に解すれば進化論などゝ衝突するけれども、その意味を深刻に解すれば必

ずしも進化論と不調和なものではない、といふが如きは即ちその一面よりの辯駁である。他の一面は宗教と科學とは元來その領域を異にするのであるから、科學的に眞理でないからとて、宗教的には必ずしも非眞理と言はれぬといふ根據論を基礎としての反駁である。

其等は果して基督教界全般の認容する反駁法であり、また松村博士流の科學者の首肯する答辯であるかは、吾人の詳しうせざる所であるから、こゝにはその評論を避くるとして、とにかくこの點に於て基督教は何時もながら苦しき立場に立たねばならぬといふことは爭ふべからざる事實である。

然らば之を佛教側の方からすればいかにといふに、幸にこの點からすれば佛教は、その根本思想にありては、基督教に比して、その立場の極めて氣安く感ぜらるゝものがある。蓋し佛教は總體として、その立場の人本主義的であり、その態度の哲學的であり、加ふるにその範圍の廣きために、近代思想との衝突をも避け得べき充分の餘地あるのみたらず、却て、近代思想に依りてその教理の光を増すべき點も尠くはないからである。佛教學者の中には好みて近代の流行思想と佛教とを結び付け、遠くはカント、ショーペンハウエルより近くはオイケン、ベルグソン、さてはアインシュタインといふが如くに、比較對照して佛教々理の近代化を計らんとする人がある。吾人は必ずしも佛教と流行思想との安直なる妥協に贊成するものではないけれども、ともかく廣き佛教内には是等の近代的思想と握手し得べき點の多きことは苟も佛教を學べる人ならば何人も異存のない所であらうと思ふ。松村博士が確か地獄かの事を引いて佛教をも攻撃したに對して佛教徒が基督教者の如くに敢て之に抗辯しないでゐるのも——それは無感覺に起因せざる限り——恐らく、かゝる末節の攻撃の如きは痛痒を感ぜずといふ自信によるものであらうと思ふ。

併しながら實をいへばこれは一面よりの觀察である。たとへそは本質に關せぬとした所で、佛教にはその範圍の廣いだけ、それだけ基督教に比して一層多くの迷信的非科學的要素をも含有してゐることは爭ふべからざる事實である。殊に所謂大乘佛教となれば、その深さを加へたと同時に廣さをも加へた結果としてその中には少くも表面上、劣等宗教と餘り異らざるが如く見ゆる要素さへも尠からず包含することになつた。

蒙古西藏のラマ教の如きは言ふまでもなく、日本支那の佛教的信仰中にも、少くも通俗的方面には淫祠と餘り異らざる現象のあることは今更細叙を要せざる所である。これ即ち一時基督教徒などは佛教を以て偶像崇拜の一種であるかの如くに誹謗し

た所以であらう。而も其等は何れも、名目上、大乘佛教に屬する所を以てすれば、或る意味からすれば大乘に來りて佛教は非科學的になつたと言はれても必ずしも辯解がなからうと思ふ。從てこの意味に於て若し之を量的に計算することが出來るならば科學的要素に富める點に於て、佛教は基督教に勝ると同時に非科學的要素に富める點に於ても亦勝るといひ得やう。たゞそれは本質的即ち教理の基調をして居らぬために佛教は最も哲學的な宗教として立ち得るのであるけれども、實際的方面にありては、科學上より非議さるべき要素を多量に含んでゐるといふことは吾人の率直に認めねばならぬ所である。從て、亦科學者からの佛教に對する非難に對しても虚心坦懷に之を調査し、勿論その越權や誤解に對しては斷乎として之を斥くべきではあるけれども、少くも科學の範圍に屬する部分に於ては、出來得る限り、その非科學的要素を洗滌し去るに努力すべきは軈て佛教をして近代人に適應せしむる所以の道であらねばならぬ。これ吾人は特に大乘教徒の一員として、この點に於ても亦大乘を精錬するの必要ありと機會のある毎に唱道して止まざる所以である。

然らば、佛教は一體、その源流よりして、かゝる非科學的雜要素を含有してゐたものであつたかといふに、吾人の最も意を强うするに足ることは、原始佛教にありては殆ど絶對にさることがなかつたといふことである。即ちあらゆる佛教思想の源泉たる佛陀直說の法門は世にも類ひ稀なる程、純潔にして合理的而して言ひ得るならば自ら近代思想に契ふものがあつたといふことである。勿論それは必ずしも大乘教の如く深廣でもなければ、小乘教の如くに綴密でもなかつた　しかしその單純な教理中に明確なる事實の判斷を寓してゐたことは、究明すればする程、益々明となり眞に驚嘆に價すべきものがある。從てその思想的價値も次第に重く見らるゝやうになり、殊に近時著しくその隨仰者を增して來たやうである。勿論之を研究的に云へば、西洋に於ける佛教は殆ど全部この原始佛教であるし、日本に於ても已にかなり早くより高楠、姉崎等の諸先輩によつてこの研究が提示されて來た。しかし、日本は流石に大乘國だけに、其等の研究も主として學究者の間に限られ、一般の味得となるまでに到らなかつたが、近時、我國にありても、所謂、原始佛教主義者を生じ、餘他の佛教主義を捨てゝ偏へにこの原始佛教に歸へることが眞の佛教精神に契ふ所以であり、且つ自己の魂と同時に現代を救ひ得る唯一の道であると主張する人々をも輩出するやうになつたのである。吾人自身としては、佛陀の眞の精神は矢張、大乘に到りて初めてその到るべき所にまで到達したと信

するものであるから、必ずしも原始佛教だけで澤山であるといふ説には賛同しかねるものである。しかし學問的見地から言つても、はた混濁せる大乘宗教を洗滌するの標準を確むる點からしても、この原始佛教主義は尚一層盛に提唱せらるゝことは佛教のためにも、全般の思想界のためにも必要なことゝは堅く信ずる所である。甚だ粗末なものであつたけれども、先きに「原始佛教思想論」を世に問うた理由の一半も亦實にこゝにあつたのである。

殊に之を差當りての問題、即ち科學對宗教の問題より眺むる時は、恐らく世界のあらゆる宗教中、これ程科學の非難を免れ得べきものはなからう。勿論、原始佛教は科學自身の研究を目的としたものではないから現代科學の如く凡てを實驗と計算とから割り出して觀察してゐる意味に於て科學的といふのではない。たゞその觀察の態度に於て世界人生に對する考の運びの上に於て、飽くまで眞實を握らむとした所、而してその結果は現代科學の成果と合する所、否、進んでは科學の未だ達し得ざる所までも把つてゐる所、到底、餘他の宗教の追隨を許るさゞるものがある。從てこの意味に於てこの原始佛教思想を特に科學の見地から、明にして見ることは、稍々もすれば科學と宗教とは根本的に相容れざるかの如くに妄斷する科學者又は實證主義者をして、少くも三省せしむるだけの資料となるべきや言ふまでもない所である。

從て亦若し之を松村博士の所論に對すれば、たとへそは間接ではあるとした所で、あの論文に對する佛教側からの一種の抗辯ともなるべきであらう。

かくして(一)大乘佛教からその混濁せる要素を除去するの清涼劑を提供するの意味に於て。(二)信仰と科學の衝突に苦めるものゝ趣くべき宗教を明にせんがために。(三)宗教嫌の科學者に對して、佛教の立場を明にし置かんがため。右の三ケ條の目的を些かなりとも達し得るならば混亂せる精神界に對して多少の補ひにもならうと感じたのは、即ちこの原始佛教主義の提唱ある所以である。

二、佛陀とその觀察の態度

原始佛教の思想的特徴を明にするためには先づ佛陀――歴史的佛陀の事物に對する考察の態度を明にしてかゝらねばならぬ。何となればその科學的なる世界觀も理想觀も一にその觀察の態度から流出した結論に外ならぬからである。

抑々佛陀當時に於ける印度の宗教界は、言ひ得るならば丁度現在を二千四五百年前に引きあげたやうなものであつた。一方

には雜多の迷信が少くも一般民衆の間には盛に行はれたと同時に、他方には標準信仰としての創造神梵天に對する崇拜も可なりの勢力を維持し、加ふるに當時勃興の新氣運に乘じて、言はゞ科學的唯物論的見地より宗教の權威を全然、否定せんとする運動もあるなど、宛然、現今の宗教界に似たものがあつたのである。然らば、佛陀は道を求むるに當つて、是等の思潮に對していかなる態度をとつたかといふに、勿論その低級なる迷信に對しては、佛陀の初より度外視してかゝつた所であるけれども佛陀がその出發點に於て最も苦んだのは、蓋し唯一神としての梵天信仰と新なる氣運に乘じて起れる自由思想（特に唯物論的思潮）とに對して、その何れに從ふことは眞に人生問題を解決する所以の正道であるかを定むるに惱めることとであつた。謂へらく、梵天信仰は一面よりすれば確かに吾等の無窮生命に對する要求に對して容易に滿足を與へ得るの便利がある、しかし理智に醒めたる眼よりすれば餘りに便利主義に傾くもので、到底認識の支へを有せざる空想的産物に外ならぬ恨みがある。之に反して科學的唯物主義は、少くも當時に於ける、事實に關する最高の智識を以て萬有の成立を解剖的に觀察した結果であるから極めて味ふべき點があるけれども、精神的要素を無視する點に於て餘りに極端に走つてゐる。のみならずその主義に從ふて人生問題を處理することは斷じて吾等の要求を滿足せしめ、人生の價値を高むる所以ではない――と。かくして修學時代の佛陀はこの兩端の間に挾まつて、恰も今日の智識ある青年士女が信仰と認識との衝突に苦んでゐるのと丁度、同じ苦しき經驗を味つたのである。近頃「苦惱の釋迦」とか「地に惱める釋迦」などゝいへる戯曲が世に頻出するがいかにも成道前の佛陀は種々の點に於て深刻なる惱みに苦んだ。しかし之を思想的に見る限り、右の兩端に挾まつて脫出し得ざるの惱みが、その最大なものであらねばならぬ。

かくして、成道前の佛陀はこの問題に對して、長い間苦心した結果として遂に到達した解決案は要するに事實の正視、殊に吾等の生命及び心理活動の法則をありのまゝに見て、之に依りて人生至高の方針を定むるといふことであつた。即ち望ましいからとて、ありもせぬことを構想したり、嫌ひであるからとてあることに對して眼をつぶつたりするが如きは到底、確實なる基礎に立ちて人生問題を解決する所以の道ではない。先づ好き嫌ひを離れて大胆に事實に當面するがあらゆる考察の出發點であらねばならぬといふのが、實に彼の遂に到達した求道的態度となつたのである。

彼のこの態度を最もよく明にする一例話が殘つてゐる。

彼嘗て修行時代に於て、森林の夜を極めて恐ろしく感じたことがあつた。蓋し所謂苦行林中には夜間に乘じて狐狼の徘徊もあつたらうし、梟の枯木に淋しく鳴いたこともあつたらうし、宮庭に人となつた佛陀としては、少くもその修行の初期に當りて、時に堪へ難き恐怖に襲はれたことのあつたのも亦、無理からぬことである。かくして彼はそれに對する恐怖心をいかにして征伏すべきかに就て自らも工夫すると同時に、道友にその事を謀つた。道友は之に答へるに「晝も尚ほ夜の如く、夜も尚ほ晝の如し」と觀念することによりて、その恐怖心を脱し得べき旨を以てした。しかし彼はその觀念法を以て強ゐて事實を昧まして自らを誑くの方法であるとして排斥し、飽くまでも夜は夜晝は晝と明かに辨別して、而も遂に夜に對する恐怖心を征伏するに到つたのである。この事は佛陀は他日その弟子に對して觀察の態度を明にする意味に於て物語つた經驗談である。即ち彼は飽まで事實を事實として認識し、その上に於てその要求を實現すべき方法をとつたといふことはこの一事によりても明であら。

この觀察の態度を佛陀はありのまゝの觀察法即ち術語で如實(yathâbhûtam)又は如是(yathatatha)の觀察法と名け、原始佛教に於ける基礎的方法論となつたものである。勿論ありのまゝと言つた所で、佛陀の目的は自然科學者が自然現象をありのまゝに觀察するを目的とするのとは異り、飽くまでも人生の價値をあるがまゝに判定せんとしたのであるから、之を稱して直ちに今日の意義に於て科學的態度と言はゞ疑もなくその鵠を失してゐる。しかし、人生の價値を正しく批判しその新なる價値を創造するためには、先づ事實の正當なる判斷を先きにすべきもので、斷じて要求を先きとして要求に應じて縱に事實に對する觀念を構成してはならぬとした點に於て著しく近代の科學的精神と共通すべきものがあるではないか。即ち佛陀は事實によつて要求を規定し、要求によつて事實を改造することが、人生の價値を高むる所以の眞の確實的方法と定めたのである從て亦佛陀は何事に對しても批判的態度をとつたのも言ふまでもない所で、所謂分別說(批判說)のみが佛陀の眞說であると後に決定せらるゝに到つた程、原始佛教の著しき特徴とされたものである。

佛陀はこの方法によりて當時の諸說を批判し、就中、神に對する信仰と唯物的人生觀とに對しては、その兩方を拒否すると同時に亦或る意味に於ては亦兩方を採用した。所謂、正反を止揚しての第三の合態的立場をとつたのは即ち佛陀の所謂中道說であつて、之によつて遂に佛陀はその出發點の苦惱を脱すると

同時に、こゝに新しき立場の宗教を開創することが出來たのである。

之を更に少し詳しく述ぶれば——當時の一神教者はその足の地上にあるを忘れて、たゞ傳說に基き信仰の翼に乘じて早くも上天してゐるかの如くに思惟してゐたのを佛陀は空想の然らしむる所と斷じた。而して飽くまで其足の地を離れざるを凝視せよと勸告した。しかし之と同時に足の地上を離れざる事實のみに執して、更に高く天上に飛揚せんと欲する吾等の要求を顧みざる當時の科學的唯物論者に對しては吾等の深き要求を無視してはならぬと警告した。かくして佛陀は足の地上にある事實に基きながら而も天上への飛揚を企てゝ成功したのは即ちその宗教である。即ち之を若し喩へ得るならば、佛陀の立場は昔物語にある魔術的飛行の代りに近代的飛行機による空中征伏に似たものであつた。御伽咄による空中飛行は極めて容易であるけれども要するに空想なるに對して、事實的飛行は非常の大難事ではあるけれども、現實的實在性を帶ぶるが如く、佛陀の宗教も亦さうであつたのである。佛陀の宗教的特徵は實にこの飽くまで事實に即して而も理想を實現せんとした所にあるといふことは、原始佛教を理解し之を批判する上に於て吾人の呉れ〴〵も忘れてはならぬ所である。

三　佛陀の思想内容大觀

かくして、茲に原始佛教の思想内容、即ち特に科學的に見た教理を述ぶべき順序となつた。乍併、その詳しいことは、とても論じ盡さるべき問題ではないから、今はたゞその方面を提示するの意味で、その主なる特徵に就て、極めて簡單に述ぶるに止めやうと思ふ。（詳しくは拙著原始佛教思想論參照）

イ、流動觀

佛陀の思想に於て近代的傾向を見るためには、先づその否定的方面を知るの必要がある。蓋し近世思想の一特徵は疑もなく古き偶像的觀念を打破した所にあるからである。

佛陀はその教理の建設に當りて、先づ最もその力を盡した所は、矢張當時に於ける二大偶像觀念の破壞であつた。即ちそれは神の觀念と靈魂の觀念とである。當時の信仰—特に婆羅門の標準信仰——に從へばこの世界は全智全能の神によつて創造されたもの、而して人々には各々不變常住の靈魂ありて生活機の原理となつてゐるといふのであつた。併しながら批判力に富める佛陀からすれば、かくの如きは要するに希求と[illegible]見との混成の上に立つ偶像であつて、到底事實の眞相に契はざるものである。神（梵天）を立つることは、希望をかける上に於て、何程

か功能があらうけれども、所詮は要求の投影に過ぎぬから苟も現實に醒むる限り、到底、之を事實として認むることが出來ぬ。佛陀は之を氏名も年齢も相恰をも知らざる女を戀ひすが如きものであると嘲笑した。殊に不變常住の靈魂觀となるや、獨り婆羅門社會のみならず、唯物論者を除いては當時一般に之を認容したにも關らず佛陀は斷乎として、之に反對し、所謂、無我論を以て佛教の主なる表幟とした。蓋し佛陀に從へば吾等の生命又は心理活動なるものも要するに種々の關係の上に成立する現象であるから、此間に別に小石の如き半物質的靈魂を認むるの必要がないといふのはその主なる理由であつたのである。

かくして佛陀は此二大偶像觀念を打破すると同時に、之を擴げてあらゆる固定觀念を排斥せんとした。謂へらく一切は悉く活動現象であつて、其間に一として固定したものがないと。かの諸行無常なる句も之を事實判斷と解する限り、實はこの活動觀を明にした句であつた。又佛陀は一切を業（karma＝活動）に歸したのも所詮、この意味に外ならぬと解すべきである。かくしてこの活動的觀察は、あらゆる佛陀思想の根底となつたもので、他の教理は凡てこゝから割り出された程、佛教の一大特徴となつたのである。

今之を近代思想と比較するに、――近代思想と古代思想との主なる相違點は實に事物を靜的に見るかはた動的に見るかにあることは改めて言ふまでもない所である。即ち古代の靜的世界觀を動的に直ほした所に近代思想の特徴がある。而もこれは主として近代科學の努力した結果として到達した轉回である。すれば、前述の佛陀の根本思想は、實に已に二千數百年前にありて、早くも近代的世界觀の先驅をなしたといふも强ち誣言ではあるまい。殊にその生命觀に於て、所謂靈魂説を排斥して之を流動現象と見た處、實に今に到りて初めてその光を放つものありといふべきである。蓋し西洋にあつては中世時代までは矢張、この生氣主義的靈魂觀をとつてゐたのが、近代に到りて僅かにバークレー、ヒューム等の哲學者を先驅として漸くその固定觀念を振ひ落したに反し、佛陀は之をその教理の標幟とした程初より力説したからである。かくして、佛教思想の特徴は飽くまでその流動觀にあるといふことは、佛教の根底を理解する上に於て吾人の忘るべからざる所である。

以下更に少しくその流動相に就て述べて見やう。

ロ　世界と法則

佛陀に從へばこの世界は神の所産でも何んでもなく要するに凡ては種々の關係の上に成立する流動現象である。即ち佛陀はこの點に於て所謂、相對主義者であつて、一切を相對依存の關

係によりて解釋せんとしたのである、術語で此關係を因緣といひ「諸法は因緣より成る」といふを以て佛教世界觀の綱領とする。乍併、佛陀に從へばその關係なるものは決して偶然に然るものではない。こゝに昧ますことの出來ない法則がありて、種々の關係に處して、そを規定してゐる。換言すれば種々の現象なるものは一定の關係卽ち法則によつて規定さるゝことによつて、そがあるが如くに成立し流動してゐるもので、この外別に創造者、支配者なるものなしといふは卽ち佛陀の宇宙觀である。

然らば佛陀はその關係の法則を幾種に分類したかといふに、之を細分すれば種々に分れるけれども（東洋哲學、本年度二―三月號所載、拙稿「因緣の分類とその發達の經過」參照）その最も根本的なものとして佛陀の提示されたものは、先づ主觀、（識）、客觀（名色）の關係であつた、卽ち主觀あるが故に客觀あり、客觀あるが故に主觀あり、而して主觀客觀あるによつて全世界ありこの關係を離れては何物もないといふのである。（原始佛教思想論一八―一二〇參照）この意味に於て佛陀の法觀中にはカント哲學と共通するものありといふべく、現に西洋の佛教學者中にはカントと佛陀とを比較して論じてゐる人も尠くはないのである。かくして佛陀は先づ靜的に世界成立の根本規定を明にすると同時に、更に其動的規定として提示したものは卽ち因果律である。前件は後件を規定し、後件は更に後々件を規定し、以て一定の秩序を追ふて無窮に連續繼起するのがこの世界の活動相であるといふのである。こゝに卽ち佛陀の世界觀中に科學のそれと共通するものあるを見よ。

勿論この兩法則も、ぎり〳〵の處を推せば遂に意志の法則といふことになるのであるが、しかし今はそこまで論法を進めぬとして、ともかく、之を表面的に解する限り、佛陀は世界を說くに認識關係と因果關係との二方式を以てしたといふことは疑ふべからざる事實である。而してこの世界の絕えず流動する所以も――動的意志の根底たることは暫らく措くとして――所謂有の二規定の具備的關係振り（他の種々の條件）の絕えず異るに起因すといふことは、佛陀の世界觀を解する上に於て吾人の忘れてはならぬ所である。而も吾人の注意すべきは佛陀はその法則の確實性を高調したことである。卽ち一切は流動するけれども、之を支配する法則となれば永遠に變らぬ點に於て自爾であり常住であると常に繰り返へしたことである。この意味に於て佛教世界觀の基調は之を抽象的に云へば法（dharma）の觀念であつたといふことも出來るのである。

神意說に代ゆるに法則の觀念を以てした所　近代的見地より

して極めて味ふべきものがあるではないか。

八、生命とその進化、化還

佛陀に從へば生命も要するに因緣即ち關係の上に成立する現象である。乍併、それは唯物論者の考ふるが如く、物質の組合せ又は摩擦によつて起る現象ではない。矢張生命活動といふ特有の力の現象である。その物理的勢用との相違に關しては、パウルダルケ氏は之を次の如くに解した。謂く物理的現象は所謂反動的事實（Rückwirklichkeit）として、之を本の狀態に戻すことの出來るに反し、生命現象は所謂能動的事實（Wirklichkeit）として、一刻一刻に新しき價値を創造し再び之を本の狀態に戻すことの出來ぬ經過的現象たる點にあると徹見するのが佛陀の眞意に契ふ所以だと（P. Dahlke: Buddhismus als Weltanschauung. Aufsatz IX）。吾人は必ずしも文字通りにこの解釋を採用するものではないけれども、ともかく佛陀の眞意に近い意見として之を珍重するものである。而も之は因緣生即ち關係現象と考へらるゝ所以は、前に述べた如く佛陀は固定的靈魂觀を排斥して是を生きんとする欲求を基礎として絶えず種々の事情（その性格と外界）に應じて、自己を經營し行く活動的經過その者と見たからである。佛陀はこの現象を表はすに生命（jiva）又は自我（ātman）といふが如き實體的に解せらるゝ語を厭ひ好んで業（Karma＝活動）といふ語を以てしてゐるのも實に之がためである。從て佛陀に從へば生命の當體は恰も燈火の、外見上、同相を維持しながらも、實質に於て、常に新陳代謝するが如く、行く水の流は絶えずして而も本の水にあらざるが如く一刻も休みなき流動である。たゞ生命現象の燈火や流れと異る所は、その一々の活動は一々自己に反應してその性格を形成して後時の自己經營の能動的勢用となる點である。同じ生物でありながら、之に種々相ある所以も、佛陀に從へばこの活動と反應とに基く自己經營の相違に外ならぬ。

從て言ふまでもなく、佛教では人間のみが生物中、特別の地位を占むるものとは決して言はぬ。人間でも猿でも、要するにその限りなき自己經營の經過中に於ける一現象に過ぎぬ。何となれば佛陀に從へばその自己經營の經過に於て——特に道德的立場からではあるけれども——進化あり退化あるによつて人間とも猿ともなるからである。佛教で言ふ所の輪廻とは所詮、この進化、退化を綜合した經過に名けたものに外ならぬ。從てこの意味に於て、佛教の生物觀中には、何程か進化論と提手し得べき點あるや、何人も容易に認め得べき所である。現に西洋の學者中にはこの點より佛教の生命觀に興味を感じてゐる人も尠くはない有様である。況してその生命の流動觀中には近來八ケま

しく論ぜらるゝベルグソンの考と共通するものあるなど、佛教の生命觀中には種々の點に於て、近代の學術的見地よりして味ふべきものが尠くはないのである。

二、事實と理想

以上、三項で述べた處は主なる事實問題に對する佛陀の觀察である。乍併、單に事實を事實として說明するのが佛陀の目的ではなく、正しき事實觀を背景としての人生至高の理想を實現せんとする所にあつたことは改めて言ふまでもない所である。

然らば佛陀はその理想の根據を何處に置いたかといふに、これは佛教々理上、非常の大問題であるから、こゝではその詳論を避くるとして簡單に結論を擧ぐれば要するに我が一心である。即ち吾等の宗教的要求たる無限生命への進展は外に向て求むべきものではなく、たゞ一心の迴轉によりて達せらるべきものであるといふのである。換言すれば叡智によりて我欲を征伏し、心の活動をして法（註二(三)）に合せしむることによりて初めて確實に永遠不死の實財を自らに實現し得べきであるといふが即ち佛陀の宗教觀であつた。而してその方法として佛陀の自ら實修し他に教へて實修せしめた所は要するに自らの心を淨うすると同時に他に對しては無限の同情と慈愛を以てし、常に精進努力して、以て言ひ得るならば內部の神に見參することであつた。從てそこには祈禱も要せず、禁厭も不必要、偶像の禮拜もなければ、死後の復活を望むこともなく、簡單に云へば、原始佛教には、今日よりして、不自然若しくは迷信と見らるべき所行は殆ど一つも含んでゐなかつたのである。實にも、佛陀の宗教は、餘他の宗教ならば自己以外の超自然に向けた一切の宗教的儀禮を悉く自己に向けたのをその特徵としたのである。即ち外的存在としての神を信仰する代りに自己內心の思念を高め、神に犧牲を供する代りに我欲の犧牲を尊び、頭に洗禮を施す代りに內心の洗滌を奬勵し、神壇に火を祭る代りに自心に光明を點ずべきを眞の宗道としたのである。而して之に依りて到達する解脫の境も、その事實觀に應じて極めて事實的なもので、天上界への往生でもなければ、死後の得脫でもなく、要するにこの事實的自己に即して而も永遠性と普遍性とを味得し悟證する義に外ならなかつた。而もこの境たるや、その動的立脚地に應じて、少くも內面的には絕對自由、從つて絕對無礙の活動境で言ひ得るならば、力の自覺であつたことは、吾人の屢々他所で論じた所である。その一端は本月號の哲學雜誌に於ても亦述べて置いた）

從つて佛陀の宗教的理想は、その飽くまで事實に即して理想を實現せんとした所に應じてその理想の基礎を、飽くまで現在

に置き、現在に卽して永遠をこゝに實現せんとした所にあつたことも言ふまでもない。

乞ひ問はむ、世にこれ程合理的な、從つて言ひ得るならばこれ程科學的な宗教があるであらうかを。

四、結論

以上、極めて簡單ではあつたけれども、主として提示的立場から原始佛教の大綱を叙し來りて、こゝに先づ第一に問ひたきは科學者に對してゞある。必ずしも松村松年博士と言はじ――一般に科學と宗教との衝突を論ずる科學者に對してゞある。卿等は科學による宗教の破産を主張する前に、少くも原始佛教の性質の右樣のものであつたことを知つての上であるか。佛教を破ぶるために地獄の例を出すが如きは抑々末の末を執へての議論である。苟も科學と宗教といふ根本問題に論及せんとする限り、先づその破らんとする思想の根本に立ち入つて論ずるの必要があるではないか。少くも原始佛教といふ宗教に於けるこの根本的思想の何處に非科學的の所があるか。寧ろ餘りに近代的に進み過ぎて多少の手持無沙汰と同時に、果ては物凄くさへ感ぜらるゝ程ではないか。その飽くまで事實を透視して、而もそれに卽して最高理想を實現せんとする所、言ひ得るならば科學者の求むる宗教を端的に打開したのは實に原始佛教であつたといふも誣言でなからうと思ふ。

之に對して或は難じて言ふかも知れぬ。かくの如きは所詮、佛教家の通弊たる迎合的解釋を施したる結果にして、經典自身の明示する思想ではない。原始聖典と稱せらるゝものを見るにこの中には矢張、地獄のこともあれば天堂のこともあり、梵天帝釋の如き神話より甚しきは惡魔のことさへ始終、出て來るではないか。何處に所謂科學的態度があるかと。然り、之を表面から眺むる限りこの非難は必ずしも當らないではない。正直に言へば自分もその初め阿含部聖典を一讀した際には、經典の通弊として、同じ事が繰り返へされたり、時に怪げな說き方があつたりしたので、内心では婆羅門教に屬する奧義書(ウパニシャッド)に比して思想的價値の必ずしも高からざるに失望したものであつた。年併その後更に之を漢譯と巴利文と對照精讀するに及ぶや次第に自分の眼が開けて來て、遂に失望は感激にまで變更し、時に思はず双頰に淚の下るを禁じ得なかつたこともある。蓋し佛陀の說相は概ね從容不迫にして而も時に比喩偶話等を交へて一般の理解に資したので、之を表面より見る時は、そこに幾多の怪げな說明も出て來るけれども、其等は根本思想自身には何等の關係をも有せざるものである。いかにも經典中には惡魔のこともあ

れば、種々の潤色に關する物語もある。しかし、何處に彼等が崇拜又は禁厭の對象とせられた所があるか。何處に彼等は佛陀及び其弟子達の上位に置かれた所があるか。彼等の演ずる役目は悉く佛陀の隨喜者か又は佛陀によりて破責せらるゝの對象となつたに過ぎないではないか。原始聖典を讀むに當りて這般の消息に通ぜないで、文句其者のみに執するが如きは斷じて、佛陀の眞意を得る所以の道ではない。かくしてその文句の裏に横る佛陀の眞意を讀み得るに到るや、前に述べた如き思想內容は自然にその中に湧いて來る結果で、決して强ゐて現代化した爲ではない。而もこの事は獨り吾人の一家言ではなく、西洋に於ける佛教研究者の又明に認めてゐる事實である。かゝる問題にまで西洋人の說を借り來ることは吾人の潔しとせぬ所ではあるけれども、科學と宗教の衝突論を提唱した本場の學者の意見を述ぶるも、亦、今の場合必ずしも不必要ではあるまいと思ふから、少しくその事に觸れて吾人の主張を確むるの資けにしたいと思ふ。

抑々西洋の佛教學者には種々の立場からするものあるけれども、苟も之を思想的に見んとする者にありては、概ねその思想の非常に卓越して而も近代的要求に應ずるの宗教たることを認むるが通例となつてゐる。殊に所謂科學と宗教との衝突に苦み抜いた學者、合理的宗教を求めんとする人にして、一度び原始佛教を研究し出すや殆ど感激に震へて、その讃美者となり隨喜者となる者が決して尠くはない。即ちかゝる人は概ね豐富な科學的智識を有し、科學の光によりて佛教を研究した極、遂にその信仰に入り堅き佛教徒となつた者である。試みにかゝる學者の二三の例を擧ぐるならば――かの米國の故ポール、ケーラス氏が全力を擧げて佛陀の福音を宣傳した理由も佛教の平和的道德的宗教たるの外、その教理の科學的なるに傾倒した爲めであつたことは、彼の數多の著書に徵して明である。又、獨逸の大戰爭で負傷したのを機として佛教の信仰に入つて、その喜びを他人にも分つべく著書を公にしたと傳へらるゝエルンスト、ホフマン氏（Ernst Hofmann）の如きもその理智的批判力のために在來の基督教的信仰より離れたのを遂に佛教によりて救はれたと自ら公言してゐる。彼曰く

初は基督教の熱心なる信者として、その基督教の理想と發展とに自己を沈潛せしめたのである。……然るにその神觀に對する矛盾は直ちに私をして教會からの完全なる分離をもち來し、私の內にある舊信仰の最後の部分まで洗ひ去つてしまつたのである。こゝに於て私は全く新しく私の信仰を建設し直すべく要求せられ、長い間の要求と試練とによつて私は

佛教々理の眞理が唯一の確なる根據をなすものであること、同時に又基督教といへど常に佛教の最も深き本質に於て生ずることを知るに到つた。この認識が私の心に生じてから再び私は神の觀念と和解することが出來るやうになつた(友松氏譯。佛教の根本思想一—二頁)

と。かくして彼の佛教の解釋たるや、自然科學と哲學との認識からしたものであるが、而もこは職業的佛教家が辯護的にやるのとは違ひ、初よりその點が彼をして佛教徒らしめた理由であつただけに、その解釋に附會といふべきものがない。更に一例を擧るならば目下伯林の郊外にありて佛教の研究と宣傳とに全力を注いでゐるパウル ダルケ氏 P. Dahlke の「世界觀としての佛教」(Buddhismus als Weltanschauung Leipzig)「道德及び宗教としての佛教」(Buddhismus als Moral und Religion 1914 Leipzig) との二名著をとりて見よ。佛教(原始佛教)を以て、有神的世界觀と唯物論的世界觀との兩非理を免かれて、ありのまゝの事實に合して而も理想を實現する唯一の道を明にした教であるといふのが彼の著書を貫く根本的見解である。殊にその動觀は彼の最も共鳴した處で、之を次ぎの如くに讃嘆してゐる。

凡そいかなる思想體系と雖も、その内部に横る動的觀察に關して佛陀のそれに勝るものがない。それは實にあらゆる思想體系中の終段にして、即ち斷案である。從て今日の吾等としては、たゞ佛陀の直感力を驚嘆しつゝそを讃嘆し追隨する外に、別に何等の道もないと言はねばならぬ。

されど、この俗流に反して進める(佛陀の)教たるや、その認容せらるゝ程度の進步の遲々たるも本よりである。この意味に於て吾人は嘗てベルネ(Börne)がエアン、パウルの紀念演說に於て云へる一句が正しく佛陀の場合にあてはまるものがあると思ふ。ベルネ曰く、「彼(エアン、パウル)はこの世紀の戶口に立ちて、その民の匍伏して彼に追隨するまで微笑しつゝ待つ」と。即ち之を佛陀の場合にてはむれば「彼れ佛陀は長時の戶口に立ちて全世界が匍伏して彼に追隨するまで微笑しつゝ待つなり」(Buddhismus als Religion und Moral pp 131—132。

と。かくして彼はこの見地より佛教の教理を專ら彼一流の科學により一縱横に解釋した所、たとへ、多少行過ぎた處があるにしても、佛教の隱れたる眞理を鮮明ならしめた點に於て、佛教思想の理解に對して多大の貢獻を致したのである。其外、かゝる意見を公表した人、若しくは之を確信して佛教を奉じてゐる歐米人となれば殆と數ふるに遑あらさる程であるが、要するに

その何れも佛教に入れる動機は概ねその科學的な處、合理的な處、而して之に依りて健全なる道徳的宗教的理想の確立せらるゝことを認識した所にあることは略ぼ同様である。

即ち知るべし、原始佛教の合理的なることと科學的なることを主張するは決して吾人一個の私見ではなく、寧ろ公認の事實であることを。科學と宗教とを以て總して衝突するものと考ふるが如きはこの事實に徹見しない處から來た早計の斷定であつて少くも原始佛教の場合にありては斷じてその正鵠を得たものではない。科學によりて宗教の破産を提唱した歐米の科學者によりて却て守り立てられつゝある宗教のあるといふとは、特に此問題に興味を有する科學者の見逃してはならぬ所ではないか。

科學者に對する警告はこの位にして、更により鋭く鋒を向けねばならぬのは言ふまでもなく、所謂大乘佛教の現狀に對してゞある。即ち先きに述べた如く一面に於ては深遠幽妙の教理を根柢をしながらも他面にありては、劣等宗教と擇ぶ處なき非科學的迷信的要素を包含してゐるその事實に對してゞある。

繰り返へして言ふが自分は決して原始佛教のみが眞に價値ある佛教で大乘教の如きは寧ろ頽敗した後の佛教であるといふ意見には斷じて同意するものではない。自分は佛陀の精神は矢張大乘まで進まねばその歸着點にまで達しなかつたと心から信じ且つ之を主張してゐるものである。乍併、之と同時に大乘の名に於て佛陀のいたく排斥された種々の迷信的要素を採用して、而も之に勿體振つた理屈を附して安じてゐるか如き遣り方に對しては痛惜を禁じ得ざるものである。自分は、佛教界の現狀を見て、源のあれ程まで清くして而も末流のか程までに濁れる歴史的事例は、佛教を除いて他にあるであらうかと常に怪んでゐる位である。勿論實際をいへば、其等の迷信的要素も佛教開展の歴史的事情を調ぶれば、そこに相當の理由があるけれどもともかく、この點に於て驚くべき敗頽現象であると言はざるを得ぬ。しかも吾人の最も痛恨に堪へざるは、多くの佛教々役者も信徒も、この事實に對して、餘りに無感覺なことである。甚しきに到れば、迷信的であればある程、篤信家の如くに自らも考へ人よりも考へられてゐる始末である。嘆はしき次第ではないか。知らずや佛陀は迷信的信仰を以て戒禁取見と名け一種の煩惱と判したことを。迷信はたとへそは佛教の名によりてせられたとしても眞の佛教からすれば斷じて眞の信仰ではなく、寧ろ三十棒に價すべき愚行たるを忘れてはならぬ。近時智識階級に屬する人々の稍々もすれば佛教より離れ行くのも、――勿論種々の原因があらうけれども――主としてこの附加的迷信的部分のその門に横るがためなることを思へば、佛教自身の隆盛と

いふ點からしても、彼等をして一刻も早くこの事實に醒めしむるの必要がある。況して、大乘佛教より共等の雜物を除去して改造淨化するならば、獨り日本のみならず行き惱める世界の人心に靈の力を與ふるの可能性ある以上、大きく云へば世界文化の進展上よりしてもこの事は一大急務であらねばならぬ。吾人の所謂新大乘運動といへるも教理の立場からすれば所詮、この淨化運動がその主要事を占むるのである。

かくしてこの淨化運動に對して標準となり、原動力となる役目を演ずるは即ち原始佛教であらねばならぬ。その科學的にして批判的なあの態度であらねばならぬ。而も一度び原始佛教に對する眞の理解の起る時は、こゝから末流に對する淨化の必要も標準も自ら湧いて來るべきである。而も之は決して創始者に背いての改造ではなく、寧ろ創始者の本意に契はんとするの擧たる以上、之を神秘的に云へば佛陀の所謂加庇力の加はるものありて勇氣も自信も自ら高まるものがあらう。從てこの意味に於て大乘佛教の淨化は原始佛教に還へること、即ち佛陀に還へることであると吾人は主張する者である。勿論吾人は大乘佛教徒の一員として、大乘の深遠な哲理までも原始に還えせよといのでは決してない。けれども、そのいかなる大乘主義に立つにせよ、ともかく一度びは源流としての原始佛教にまで戻りて、靜かに之を批判して見るの必要がある。然る後更に改めて、途中の雜物を刈除しながら、深みへ深みへと進みて本の立場にまで歸來することは、その混濁を淨化するの根本的方法たることは飽くまでも主張して止まざる處である。大乘教徒の一員として原始佛教主義を提唱する所以も實にこゝにあるのである。

（大正、十二、三、一〇）

極左極右排斥論

革命話閑

杉森孝次郎

わたくしは全的個性主義者だ。それゆゑに、わたくしは全的社會主義者だ。「わたくしは」といふ表現を、ここでは、「わたくしが考へる當在的各人は」といふ長い表現に代用した。

全的個性主義者も、全的社會主義者も、現實には、折り々々、一時喩としての外科手術が餘儀なくされる。内科療方や、まして健康療方では濟まない場合があるのだ。極左といへば、先づ外科療治主義を想はせる。一九一七年三月、殊に十一月のロシヤに於ける新興勢力が採つた方法がその一例だ。極右も、ムツソリニのやうに、それ自身一種の外科療治主義を想はせるものもあるが、ロシヤ革命を激發した歴代のザアの權力、フランス革命を激發した王、貴族、僧の一味のやうに、當體としてではなく、むしろ事情としての、すなはち、反意思的原因としての外科療治主義を想はせるものもある。

全的個性主義者と全的社會主義者は、その全を保持するために、成長と、頽廢と、疾病とが、絶えず多少支配するこの世界にあつては、常にいくらか、そして、時あつて大いに、排除する必要がある。盲腸を切り取るとか、ややぐらつきはじめたばかりに素人判断では考へられる、惜しい齒をも拔き去るとか、それから、克己、節制が意味する排除はいふまでもないとて、およそ、かやうな、いはばあら療治が、個人的にの如く、社會的にも、永い、短い時々に、大きく、小さく、客觀的にいへば進化的必然として自發してくる。

排せられべき極左または極右思潮があるとすれば、あるは、それの主張者や信者があるとすれば、なぜそれが排せらべきであるかといふわけは、その思潮に關する限りに於いて、

かれらは、比較的に、體に關する利害を、比較的に部分に屬する興味のために破壊するからだ。智識に於いてか、感情に於いてか、それらの兩者に於いてか、かれらは、全體としての社會から見れば、また全體としての人性から見ても、文化から見ても、破壊者だ。

形式的革命主義者と呼ばれべき人人がある。かれらは、革命の名とかたちとを崇拜する。革命するために革命したがる。しかし、これらの人人も、理性の判斷と、感情のいきさつと、利害の打算とに加へて、性癖、氣質に、恐らくはかれら自身が意識しうる程度より遙かに、遙かに深く決定されてゐるのだ。革命ずきのコール氏も、「制度の可否判斷は主として氣質の支配を受ける。氣質上の保守主義者は現存の制度に於いて社會の保護壁をみとめ、これに反して、氣質上の改革主義者は同じ制度に於いて進歩に對する最大障碍物をみとめる」というた。ただし、氏のこの言は、かなりいひ足らないと同時にいひすぎてゐる。すなはちいひあたらない。けれども、わけもなく、ただ一身の體質や情性や氣分に、客觀的には、もとづいて、社會革命を飽かず夢想し且つ企劃する少數者が、大抵の社會にある。世をあげて革命の前後と、最中と準備とに忙しい狀態にあるけふこのごろ、この種の少數者は比較的に幸福だ。ミレニアムの到來近きにありと豫期して、かれらの顏はほてり、まなこはかがやく。

しかし、革命のための革命信者としての形式的革命主義者は、いかなる變化も、現存の社會よりは優等の社會を意味するにきまつてゐると考へてゐねばならない人人だ。すなはち、かれらは、ある變化は、現存の社會を改良せずに、さらにあしくすることを意味するといふことを知らない、もしくは知ることを欲しない人人だ。かれらにとつて、革命は哲學だ。いなむしろ宗教だ。かれら自身だ。かれらが革命しないことは、ある意味に於いて、魚が水を離れることだ。けれども、かれらは、魚にあらずして人だ。多くの場合に、人なみ以上の氣力または才識をさへも有する人人だ。魚にとつての水は、眞實には、人にとつての情緒や氣分ではなく、全的反省であり、自覺であるべきだ。

現存の制度を根本的に否定する傾向の強い人人は、しばしば、よりよき成長としての再生を期待して、ある種類の草木をある季節にのぞんで燒き拂ふ栽培師のできそこないに似てゐる。あまりに根ぶかく燒くならば、かれらは、その植物の再生の原因を斷つことによつて、かれら自身の期待をほごにされる。枝葉を摘み、剪み、截除し、矯制することは、時あつて

か、一樹の全生のために必要だ。しかし、幹を伐り、根部にまでも斧頭を打ち込まば、その樹の生命としての、資本としての精が悲鳴をあげて、全體のためにその暴行者の反省を求めよう。あるひは、義憤を發してその暴行者を退治しよう。

革命を社會的ミユテーシヤンの意義に解するならば、すなはち、社會的飛躍進化の表現として見るならば、その意味の革命は、現代に於いて、實にその必要を廣く、深く告げてゐる。なほかつ、われらは、その意味の革命をも、なるべく、目的としてのみ信奉したい。手段としては、正しい意味の教育に集中したい。手段としての教育、目的または結果としての革命、これが現代文化人の一標語でなくてはなるまい。

日本に於いては、左方も、右方も、あまりに自立的でなく、模倣的だ。レーニン、ガンヂ、ムツソリニを、沒批判的にうれしがるのは近隣模倣だ。あるかたちの國家主義と資本主義とにしがみつくのは過去模倣だ。人は、自己の過去に加へべきであると同時に、自己の近隣に對しても、進化的に加へべきだ。

けれども、人の進歩するかたちは、一足を前方へけだし、他足を後方へふみかためることから成り立つ。一とつの社會內に、左傾と右傾とがあることは、潔癖的に、また神經的に嫌ふべきことではない。問題は、それのありかただ。聰明と健康が要件だ。それさへあれば、差別は、ヂスカツシヨンによつて決せられる。アーギユメントや、ましてクオレルには機會を與へない。

ついでながら、わたくしは、フランス革命と、ロシヤ革命とに對する批判的研究が、現代の一要事だと思ふ。

左傾者と右傾者は、中正者に比して、あらゆる意味に於いて小さいといふでなければ、非難される正當理由はない。中正者は、いかなる極端者、過激者よりも熱もあり、想像もあり、勇氣もあるでなければ、中正者は、青年とは本質的に薄緣だといはねばならん。けれども、青年は、いかに不完全ではあつても、社會進步の巨大なる一觸鬚だ。

極左極右の兩主張と行動とを排す

法學博士　堀江歸一

日本人の性質として、善惡正邪孰れか一方に趨る癖が強く、隨つて容易に中正を保ち難いと云ふ說がある。稗史小說等に描

き出された日本人の性質から見ると、此説は強ち棄てたものでないし、又實際の事實に徴しても、然りと考へられる。就中私は近頃社會問題又は社會改造問題に關する論議に徴して、或は右傾の極端に陷つて居るものもあれば、左傾の極端に趣いて居るものもあり、中正の宜しきを得たものゝ甚だ少ないことを認めて、如上感の愈々深からざるを得ざる次第である。世間に於て我國の國民思想は混亂を極めつゝあるとか、其如何なる邊に歸嚮するか、之を知るを得ないと云ふ嘆があり、貴族院邊りに於ても屢々此聲に接するようであるが、斯の如きも一面から考へれば、誠に無理からぬ事と思はれる。

極左の主張をする者の間には、確に現行の私有財産制度に疑を懷き、寧ろ法律を以つて、此制度を保障したり、財産權を確認したりすることを以つて、社會全體の爲めに、不利益であるとし、私有財産制度を撤廢し、又は私人に所有される財産の種類數量を極端なる程度に制限し、之に代ふるに財産共有の制度を以つてすることを有利であると考へるであらう。此方面に行はれる言論に對する我國官憲の監督は甚だ嚴重であるから、露骨に所信を發表することは、誰れにしても故意に避けるやうである、若しも正直に何でも所信を公表して、憚らない事と爲つたたらば、私有財産制度に對する我國一部國民の反感は餘程強いものと想像される。

然しながら一方には之に對する反動的意見も亦少なしとしない。政友會内閣の内務大臣であつた床次某氏の如きは、此種意見の顯著なる代辯者であつて、氏の内務行政に鞅掌した時代は必ずしも短かしとするを得ないに拘はらず、又其時代に於ては、常に資本勞働の關係の緊張するものゝあつたに拘はらず、床次氏なり、又斯人を閣僚とする官僚なりは常に反動的意見を以つて、勞働問題に臨み、或は資本家の勞働者に對して、有する溫情は勞働問題解決の關鍵とするに足るとか、或は勞働者の團結に依る勢力の操作は社會の平和を害するとか云ふような愚にも付かぬ理由を以つて、我國勞働問題の正常に發展す可き進路を妨碍したことの幾何であるか、殆ど測り知るを得ない。啻に一の床次某氏ばかりでなく、氏と嚮背を共にする大小政治家は一方に社會問題に對しては、極右的意見を持つと共に、純粹の經濟問題に對しては、極端なる金權尊重を事とするのであつて、彼等の政權を運用するや、殊更に物價を騰貴させたり、商工業に於ける空景氣を煽揚したり、事々物々金權者階級をして社會に勢力を伸張せしめることを工風して、怠らなかつた。

斯くて最近數年間我國の經濟社會は之を一の水流に喩へれば、其上層には溫流があるに反し、其下層には寒流があり、寒

溫一流の合する所には恐る可き渦を卷いて居るが如き有樣であつたのである。卽ち政府の保護の下に、金權者流は益々富んで、飽く所を知らざるの狀であると共に、下層社會は政府の誤まつた政策に虐げられて生活上に窮乏を訴へざるを得ざるに至つた。斯の如くにして、極右派は私有財產權の擁護を必要とするに對し、極左派は其廢棄を主張し、一の社會に於て、二ツの相容るゝ可からざる思想感情を釀成して、已まざることゝ爲つた趣きは頗る明瞭である。

啻に右の如き感情は國民の各自に依つて、懷抱されるに止まらず、時に彼等の行動をも支配したことの少なからざる趣きがある。現に或る團體の如き床次某氏の內務大臣在職中、同氏の掩護に依り、庇保を受けて、組織されたものと稱されるが、其爲す所は勞資兩者の間に爭議の起つた際に、暴力に訴へても、勞働者を壓迫し、以つて資本家の利益を發揚するに勉める一事に外ならぬ。卽ち彼等は公々然同盟罷業破壞、資本家擁護の任に當らうとするものであつて、斯る團體の存する限り、資本家は金權に加ふるに、暴力を擁するものであつて、斯の如くして社會正義は維持される道理はないのである。

極左的意見を持つ者が、之に對して爲す所は直接行動であつて、機械の破壞、工場の占領等爭議を利用して、武力に訴へ、以つて勞働者專制の實を收めようとする。斯の如くして極右派右の兩者が相對抗し、次第に灼熱し來つた曉に生ずる所は私有財產制度の維持か、倒壞かを天目山として爭ふことゝ爲るの外はない。私を以つて見れば兩者の孰れに向つても卽時に、又無條件に贊成するを得ない。從來の如く私有財產權が無制限に運用されゝば、其爲めに社會に禍害を及ぼすことの少なからざるは、何人も承認する所であつて、今日種々の方面に於て、私有財產權又は私有財產制度に對して、制限の行はれるに至ることも、亦敢て異とするに足らない。然しながら財產權其ものを否認する、又は財產私有其ものを廢止して、今日に於けると同じ程度に於て、人々に勤勞を刺戟し、又人々をして生產に努力せしめるを得るかどうか。今日人の世に處するや、我慾的精神を以つて、自己の生活を保維し、又發展せしめなければならぬ。自己の勤勞の結果は收めて自己の所得とし、所得の餘れるものは、之を自己の財產と、而して國家の法制が其獲得並に所有を保護することゝ爲つて居る爲めに、人をして勤勞を深ましめるものであるとすれば、人の精神を改造し、自己の利益に之を忘れて、社會公共の爲めに盡すと云ふ献身的所業を敢てすることを辭さない時代の出現しない限り、私有財產制度の廢止は人の生活に幸福を齎す所以と考へるを得ないのである。此事を考

へないで、單に極端過激の說を唱へ、殊に其說を實現するに急なるの餘り、所謂直接行動と稱して、社會の秩序と兩立しない所業に出づるが如き、私の何としても左袒し得ざる所である。

然しながら我國に斯る極左的主張の下に、破壞的所業を爲す者の輩出するに至つたのは、何故であるか。人心の廢頹とか、思想の動搖とか云ふような漠たる文辭を以つて、其原因であるとした所で、何等の用を爲さない、叉之を以つて單に西洋の思想に感染したものとも見るを得ない。私をして一言の下に所信を云はしめれば、我國の政治なり、經濟上の施設なりが常に極右的傾向を帶びることの甚だしき爲めに、却つて其反動として極左的思想の跋扈を來すものと考へるのである。卽ち極右的思想を背景とする政治に於ては、社會に金權の尊ぶ可きものゝあることを知つて、他あるを知らない。議會に提案される法律も、政府の實行する政策も盡く金權を擁護し、助長するものであつて、苟も之に反するものは、總て顧みられない。現實の出來事に就て之を見ても、工場法の改正は華盛頓會議以來幾年を經過した今日に於て、頗る未熟の狀態を以つて行はれようとし、勞働組合は何時まで待つても公認されるに至らないし、失業者は道途に橫はつても、之に對する救濟策は殆ど講ぜられないし、小作爭議は全國に蔓延しても、法律を以つて爭議に干涉を施す外に、何等小作人の地位を向上せしめるが如き政策は講ぜられない。斯る有樣であつては、强者と弱者との對抗は最も露骨に行はれて、前者の大と共に、後者の小を、成すの運命は必至の勢とせざるを得ない。偶々此勢に憤激して、極左的主張を爲す者があれば、之に動かされて、極左的行動に出る者のあるのも、亦敢て異とするに足らない。

思想の混亂、民心の動搖も表面に現はれた事實から判斷して、認められない次第でもないが、斯る狀勢の誘致されたことに、就ては、誤まつた政治に罪の存するもの、多々ある一事を知らなければならぬ。

そこで中庸第一

文學博士　三宅雪嶺

中庸ほど易しい事なく、中庸ほど難しい事なく、中庸ほど詰らぬ事なく、中庸ほど立派な事ない。中庸の必要は誰でも知つて居つて、知るの餘りに其必要を覺えぬ位になつて居る。風呂に這入るに、湯が熱いのが宜いか、微溫いのが宜いかと尋ねられれば、熱すぎても困り、微溫すぎても困り、熱くもなく微、

溫くもなく、好加減の所を擇ぶ。熱いと感ずるほどでは宜しくなく、微温いと感ずるほどでも宜くなく、孰れでもなければ別段に感ぜず、感ぜぬ所を結構として居る。感ぜぬ事が詰らぬでないかと云ふが、詰らぬとして熱くしたり微温くしては何うか。好加減といふ所が、風呂の湯で最も知り難く、丁度好加減といふのが、申し分ない事になつて居るけれど、好加減といふ語が詰らぬ事をも意味する。好加減の事を云つて居る、好加減の事を爲て居ると云ふのは、嘲りになつて居る。實に好加減の事ほど詰らぬ事はない。

其處が中庸の易しくて難しい所である。分り切つて居つて、いよいよ行ふ場合、事が頗る難しくならうとする。風呂の湯の好加減なのを望むとし、微温いと云ふて湯を入れれば熱すぎ、熱いと云ふてうめれば微温すぎ、幾度も湯を入れたり、水を入れたりする。誰でも同じければ世話なしなるが、殆ど人毎に違ひ、寒暖計を入れるのがあるけれど、それも豫め一定するに困しむ。丁度好加減と云ふには、多少の手數を要する。前後の事情が何時でも同じければ、好加減の所を定め得るも、事情が屢々變じ、變ずる每に好加減の所も變じ、冬の寒い日に風呂へ入ると、夏の暑い日に之に入ると、湯の加減を異にせねばならぬ。風呂場とは違ふけれど、熱病の時に氷で冷やし、足の冷えたのを熱湯で溫めたりする。普通ならば、冷たすぎ、或は熱すぎるのをば、特に選ぶ場合がある。特殊の事情に對し、特殊の程度に於て爲ねばならぬ。湯の加減は比較的簡單であつて、度を高くし低くするに難しくないが、漸く複雜を加へると共に難しく、終ひに人間の力で如何にするとも滿足し得ぬやうになる。背丈けは何の位が宜いかと尋ねられ、高からず低からずと云ひ、鼻に就いてもさう云ひ、眼でも口でも、大きくもなく小さくもないと云ふのを好いとする。或はさうでなく、眼は大いのが好く、口は小さいのが好いと云ふが、さらばと云ふて大目玉で、おちよぼ口でも困る。眼の大きいのが好とて、馬鹿に大きくては仕樣がないと稱する。大きくて馬鹿に大きくない所が難しい。

何でも其の調子であつて、一應頗る易しいやうで、いよいよとなつて難しくなる。何が故かとなれば、中庸を求めつつあるのであつて、さて其の中庸が何處に在るかを見出すに迷ふ。分り切つたやうで分らず、分つたと思へば間違つて居る。間違つて居るけれど、中庸を求めずに居れず、極端に奔るのも、他の極端に對して中庸を求めるのであり、若し自ら之を意識せぬならば、無意識にさうして居る。詰らぬと云ふのは簡單なる場合の事であつて、複雜なる場合に、詰らぬどころか驚いて眼を回

さねばならぬやうになる。枝を眞直にするのも中庸、右に曲つたのを一先づ左に曲げるのも中庸である。極端に對し、他の極端に奔るの必要あるが、極端それ自らを可いとするのでなく、中庸を求めるのである。初めから風呂が餘り熱くなければ、熱いとて少しの水を加へて濟む、煮えくり返つた湯ならば、何でも彼でも早く水を入れねばならぬ。併しそれで熱湯が好いと云ふのでなく、冷水が好いと云ふのでなく、熱湯に對するに冷水を以てするの必要あるのであつて、歸する所、丁度好加減にしようとするに在る。好加減の程度が種々雜多の事情で違ひ、各好加減にしようとしつつ、互に爭ひ、右に向ふ者に對し、自ら左に向かひ、他がいよいよ右すれば、己れはいよいよ左しようとする。右へ向ふ者は右に限ると考へ、左に向ふ者は左に限ると考へるけれど、何を以て其の是非を判斷するか。落着く先は中庸であつて、若し中庸が得ねば、互ひに攻め合つて紛亂狀態で續く。何程爭つても中庸に歸しようとするのは、競爭が進歩發達を助長するけれど、右へ傾き左へ傾き、振擺的に動搖して已まぬのは、退歩したり、衰弱したりする。競爭は或る程度まで進歩に必要とし、甚だしきに過ぎて害になる。ペンヂュラムは短ければ速く、長ければ遲く、短くて速いのと、長くて遲いのと、相平均するにせよ、甚だしく短いのと、甚だしく長いのとは、其の法則に離れて了ふ。一方が右に傾くに對し、他の一方が左に傾くを以て、勢の自然とするけれど、双方共に甚だしきに過ぎれば、分裂して破滅するに終る。其の加減が頗る難しい。

戰役を以て國運の發展する事があるけれども、或る程度を超えて、反對の結果を見る。歐洲列國間戰亂が多く、それで機械の進歩し、文明を促した跡あるとて、最近世界戰役の如く甚だしきに過ぎては、敵味方共に疲弊を極め、大西洋の向ひ岸から助力を仰がねばならぬ。米國では自分の方が大事とて助力に躊躇し、歐大陸で力づくに奪ひ合ふの餘儀なきに至つて居る　幾代か養成し來つた文明が木屑微塵にされた。利害の打算に鋭敏な國民が、何うして全く算盤に合はぬ事を爲るか不思議な位である。意地づくで仕方ないと云ふものの、意地で何を爲るに至るかを察し得られる。白人は意地づくで爭ひ、それで利益を得たけれど、損害をも招き、差引き如何にならうか。米洲で文明文化を續ければ好いやうなもので、折角の歐洲の文明文化を蕩無しにする事は惜しむべき限りでないか。

極端から極端に奔るには、或る點に於て氣力に富むが爲めとし、其の氣力で目覺しい働きするけれど、何時でもさうと限らす、鮪の居るべき卿の下に猫の死骸があつたりする。追にア

ングロ・サクソンは意地づくで極端に奔らうとも、向ふ見ずになりかけても、篤と考へ、此處が思案の爲どころとし、忍耐して適當　道を求めようとする。國民が國王の首を刎ね、之れ反逆人の首と呼んだのは英國であつて、其の英國は大陸で頻りに王位を廢したに拘らず、王室の基礎が最も鞏固と云ふ事になつて居る。米國が歐洲の戰場に乘り出し、大統領が到る處で歡迎せられた時、國民に於て餘計な事してはならぬ、深入りしてはならぬ、此處が締め括り時とし、他から何と哀願されても、催促されても、動かうとせぬ事、同じく持ち前の根性を露はして居る。非難すべき事がいろいろあつても、彼等は如何にするのが最も得策なるかを考へ、誤りかけて考へ直す所がある。之に較べて歐洲大陸は、極端に奔り、曾て佛國が革命で其の例を示し、今は露國が其の例を示して居る。他から觀れば面白い事もあり、痛快な事もあるけれど、つまりそれで何の利益あるか、生活にか、文明にか。假りに利益あるとし、必ずさうせねばならぬか。何でも經驗、試みねば分らぬとしようが、それほど分らぬものか何うか。分らぬとあつては、智惠の足らぬのを白白するに異ならぬ。他國に取つて參考になるの利益がある。如何にすれば如何になるかを事實上に明かにして居る。他國では好い試驗をしてくれたとして、感謝するかも知れぬが、その爲めに多數が難儀し、恢復に多くの歲月を要するとあつては、決して賞めた事でない。或は恢復して前に優るの文明を示すかも知れず、さうなつては今日難儀を忍ぶのは、文化の爲めに犧牲となるのであるけれど、その希望があると云へるか。希望あるとなし、それだけの犧牲を拂はずに、一層高い文明を實現する事が出來ぬか。希臘の文明が如何にして衰へたか。羅馬の文明が如何にして衰へたか、今日歐洲で樂觀を許さぬ所がある。

東洋で歐洲程の騷ぎがなく、塗炭に困しむと云ふても知れたものであるのは、氣力を缺くが爲めとも云へるが、何にせよ夥しい人口である。生き甲斐ないと云はゞ云へ、生きて居るだけの事がある。東洋とて全く劣等の事のみと云へぬ。支那・印度、何處に騷ぎがあるか知らずに過ぎるのがあるのは、蚯蚓に似て居ると云ふても、現に歐洲で羨んで居る所でないか。何とかして平和を得たいと望み、之を得ぬのに悶えるでないか。東洋人の意氣地ない所を眞似るに及ばず、眞似ようともすまいが、比較的平和に過ぎる所を考へるのも無益でない。

孔子は頻りに中庸を說き、其の困難なのを歎じ「爵祿辭すべく、白刃蹈むべく、中庸は能くすべからず」と云ひ、何とかして中庸を得るに努めた。君子は中庸し、小人は之に反するとした。併し君子と云ひ、小人と云ふが如き、中庸を得るの道か何

うか。善や正や、人が常に念とせねばならず、不正は斷じて敢てすべきでなく、不善不正に對して中庸を守るの困難を云ふのもあるが、特別に善良とか正義とか知られるのは、已むを得ぬ出來事を以てして居るではないか。大石内藏助は武士の標本とすべきであるが、標本とせらるるのは、或る特別の出來事を以てして居る。豫めその出來事を避け得たならば、人の大石を見樣が違つて來る。出來事なくして大石の評判が無くなるのが、善いか惡いか。孔子側では、出來事あつて評判になるのを賞揚し、老子側では、出來事なくて評判にならぬのを望む。老子に續いて種々の說あるが、風呂に入つて熱くなく微溫くなく、何も感ぜぬやうな事を道とするのが老子である、佛敎にも議論が伴ふが、釋迦の道とする所にこの趣きが無いか。涅槃は何を意味するか。歐洲で近頃印度のガンヂに注意して居るが、更に深く調べたならば、何事かを發見するでないか。日本でも、ただ他所事として、觀て居るべきでなからう。

正義と眞理は無產階級より

小川未明

吾々の生活が、無產勞働階級の力に依つて保證されてゐるといふことを考へないのか。

どんなに門を嚴重にしても、壁を高くしても、また火災や、地震から免かれるために、鐵筋コンクリートにしても、そんなことは、何の防禦にもならない。それに依つて生活は保證されないのだ。

勞働者は自覺してゐる。彼等が結束して、手を拱いて、口笛を吹きながら、街頭に立つた時、瓦斯は來ないのだ。水道も斷たれるのだ。家庭の電化を考へたり、浴槽の改良や食物、衣服の趣味をかれこれ言つたところで、其等は、一體誰の力でなされると思ふのだ。目に見えないところに、無產勞働階級の力が存在するからでないか。ブルジョアの生活は幹であり、葉であり、枝であつても、根は、プロレタリヤであるといふことを知らなければならない。

この社會は、實に、是等生産勞働者によつて活氣が呈せられつゝある。其の實、社會は彼等の手中にあるのだ。そして、近き未來に於て、彼等が表面に立つて、自分等の權力を主張することがないとなんで言へやう。

銀行も、工場も、會社も、其他一般の公衆機關は、今日のまゝの姿であつても、其れを支配するものは、今日のブルジョアではないだらう。そのことを考へないのが不思議だ、何も不思議でないかも知れない。未來は、何うであらうとも、現在は、資本主義の爛熟期である。最右黨にゐる人々が、失業者が道に溢ふれても、小作人が村に騷いでも、飢えて死ぬ者が巷にあつても「馬鹿な奴等だ」と言つて、自己享樂に耽つてゐるのを不思議でないと言へば、さう言へないこともない。

すべては、力の問題である。力は、自覺によつて產れて來る。第四階級の權力と、實力と反抗とは、いつたいどこから產れて來るか。第四階級の生活をする者の實感を離れて、其のことを考へられないのである。

社會の下積になつてゐる人々の憤り、反抗、正當なる權利、其れを措いて、今日の社會問題は、在し得ない。そして、現在、其の階級に屬する者の感情と生活とを離れてこの社會を批評する正當の立場は見出されないといつていゝのだ。

無産勞働階級の感情に、其の階級に屬する人々にとつて、正當であれば、また眞理でもあるのだ。この階級を離れた人々によつて、果して、其の感情を眞に理解することができるか。急進智識階級の如き、其の感情を理解するも、尙は、自から働らかざる者には、自から働く者　即ち彼等の如き權利はないのだ。

何故に、第四階級の感情は、正當であるか？

彼等は、ほんたうに苦しい仕事をしてゐるからだ、割の悪い、命の縮まるやうな勞役に從事してゐるからだ。そして、最もこの社會にとつて必要な仕事をなしつゝあるからだ、それに、かゝはらず酬いられるところが、一番少なく、しかも其の生存の權利さへ確實に保證されてない。

彼等が、同じ人間であるといふ自覺を持つたとき、そして、この社會を美くし、より善くする者は、實に自分等にあると悟つた時、橫暴な階級に對して、叛逆を抱く、心理は、やはり自身を離れて、何人も彼れ是れ言ふことが出來ない程、正しいからである。

試みに考へて見るがいゝ、雨に濡れ、泥濘に塗れて地下幾尺の溝渠の下で働き、彼等に瓦斯を送り、電氣を送り、而して、水を供給してゐるのは誰だ。彼等、ブルジョアに、何ができる

か？ 其れに對して感謝せず、また其れに酬いるだけのこともなさず、眼下に睥睨して、傍を自動車で過ぎて行く。

第四階級反抗の精神は、正當であるばかりでなく、眞理である。

しかし、私は、こゝに言はなければならない。この反抗も、憎悪も、憤怒も、自覺する勞働者が、甘んじて、この割の惡い勞役に、身自から從事することによつて、この感情は、火に油するごとく、ます／＼熾烈となることだ。そして、いよ／＼そこに階級的、闘争の觀念は生ずるのである。

「働かざるものは、食ふべからず」とは、自身の属する階級に關係しない。實に、社會的正義であり、人間としての義務であるからだ。

智識階級の政策は如何。

ブルジョアに代はるに、智識階級が起つたとしたところで同じことだ。

彼等が議會に於て、果して公正を期することを得るか？

公正といふことは、身自から、所信を行爲の上に實行することだ。議會に於て、かりに彼等が戰爭を可決したとする。戰線に、無產階級や兵士を送る前に、自身が自から戰線に立つて血を流す覺悟がなければならない。いかに彼等が、公正を期しようとしたところで、自から手を下して勞働をし、また、劍を持して戰はない限りは、生產や、生活に、ほんたうに關係をしてゐるとは言へないのだ。一種のブローカであることに於て、ブルジョアと去ることは、さう遠くはないであらう。

しからば、何が最も正しいか。そして、少なくも正義であると考へられるか。

日夜、實際、この社會のために、孜々として働いてゐる者が、――働いてゐる者だけが、――社會の機關を掌握し、支配すべしと認め得らるゝ事實である。彼等は、自分達の生活個條を、多くの經驗も、また誠意もないブルジョアに聞く必要もなければ、智識階級と呼ぶものゝ指圖によつて、左右させられなくてもいゝからである。

政治や、議會が、眞の無產勞働階級自身の表現であり、また、ものとならざる限りは、其の政治や、議會は、實際に於て、無產階階にとつて邪魔にこそなれ、必要とはならないのだ。而して、無產階級は、いつでも、否定する權利を有してゐる。

――二三、三月十日――

「右」と「左」の解剖と其相對關係

水野廣德

時代は進轉す。「右」と云ひ「左」と云ふも、時代の世相を標準としての言葉である。今日極右に屬する人も　明治維新當時に於ける極左の人に比すれば恐らく一層左進して居るであらう。今日極左に屬する人も、次の時代に於ては或は極右の人と爲るかも知れない。併しながら現代に於ける「右」と「左」とを抽象的に分類せば、右に屬するものは國際的には帝國主義、政治的には軍國主義、經濟的には資本主義、社會的には階級主義、思想的には保守主義であつて、大體觀に於て所謂國家主義なるものである。「左」に屬するものは國際的には世界主義、政治的には平和主義、經濟的には勞働主義、社會的には平等主義、思想的には進歩主義であつて、大體觀に於て所謂社會主義なるものである。素より國家主義と雖ども全然社會を抹殺することは出來ない。國粹伊太利にも社會は實在して居る。社會主義と雖ども全然國家を排去することは出來ない。勞農露國にも國家は儼存して居る。要するに思想的分量の相違である。

以上は專ら抽象的の分類である。併しながら今之を各人に就きて具體的に、此は右に屬するか左に屬するか、彼は國家主義であるか社會主義であるかを、的確に分別することは、極めて少數特種の人を除くの外甚だ困難なる問題である。人間は其の面の異なるが如く、其の心の異なるが如く、信念思想も亦頗る雜多樣である。或る者は國際的には帝國主義なるも、社會的には平等主義なる場合もある。又他の者は經濟的には資本主義なるも、政治的には平和主義なる場合もある。縱令理性的には成立し得ずとするも少くも、感情的に現存せることは爭ふべからざる事實である。

國民の正當なる生存權をも拒否せんとする外國の不法なる迫害を耳にする時、吾人の血は自ら國家主義に燃えざるを得ない。食ふや食はずの細民を搾取して不當の榮華に驕る資本家の横暴を見る時、吾人の心は自ら社會主義に傾かざるを得ない。對外的には國家主義となり、對内的には社會主義となるのが、今の資本國に於ける多くの國民の頭を支配せる思想である。彼の所謂國家社會主義なる鵺的變態主義は、恐らく斯かる二重思想の産物であらうと思はれる。歐洲戰爭の際、交戰各國の社會主義者が國家主義に豹變したのも、此の二重思想の表現に外ならな

い。由來感激性に富む我が國民に於て、特に此の現象が著しい樣である。

國家主義と云ひ、社會主義と云ふも、一歩進んで考ふれば、一は現在國際間に於ける不平等に對する反抗心か、否らざれば自國の優越慾を滿たさんとする利己心である。他は現在社會に於ける不平等に對する反抗心か、否らざれば自己社會の優越慾を滿たさんとする利己心である。此の不平等に對する道義的反抗か、若くは優越慾の利己心滿足と云ふ點に於て兩者相一致して居る。唯異なる處は前者は國家を本位とし、後者は社會を本位とせる點に於てのみである。左れば外國の壓迫を受け勝なる日本に於ては、國家主義的思想を有せざるものは極めて稀れなると同時に、資本家の跋扈烈しき日本に於ては、社會主義的思想を抱かざるものも亦極めて少ないと言ひ得るであらう。唯對國際反抗心が對社會反抗心よりも一層強烈なる者が國家主義者と認められ、對社會反抗心が對國際反抗心よりも一層濃厚なる者が社會主義者と許されるのである。左れば對社會反抗心の微弱なる特權階級や資本家等に國家主義者が多く、對社會反抗心の強烈なる貧民や勞働者等に社會主義者の多きは當然の數理である。

「右」即ち國家主義を黑とし、「左」即ち社會主義を赤とすれば、一國民中純黑純赤に屬する者は比較的少數にして、大多數は黑と赤との混合色である。素より各人の境遇個性教育信念等の相違に依り、其の混合比に種々濃淡厚薄の差を生ずるを免れない。而して其の純黑なるものが極右で、純赤たるものが極左である。前者は國家至上主義にして國家發展の爲めには個人の權利を蹂躪して憚らない。其の結果として對外的には侵略主義となり、征服主義となり、對內的には軍國主義となり、資本主義となる。後者は社會至上主義にして社會の幸福の爲めには國家の存在をさへ否定して惜しまない。之が爲めには對外的には世界主義となり、平和主義となり、對內的には共產主義となり、無政府主義ともなる。

極右主義者と極左主義者とは、彼等が利己觀念を離れて眞の信念の上に立つ以上、兩者共に等しく純潔熱烈の人である。勇往敢爲の人である。純潔熱烈なるが爲めに、彼等は自己の所信を其の儘實現せんと欲する。從つて思想的に專制主義となるを免れない。勇往敢爲なるが爲めに、彼等は力の信者である。從ふて手段として暴力或は物理力の行使を是認する。專制主義と暴力是認とは、國家社會の安寧幸福を破壞するものである。縱令其の精神に於て純潔にして、其の手段に於て勇敢なるも、吾人は未だ俄に之を承認することが出來ない。

現在極右黨の世界的代表者は伊國のムソリニにして、極左黨の其は露國のレニンに指を屈せねばならぬであらう。而かもムソリニの率ゐる純黑黨は八十萬人にして、レニンの率ゐる純赤黨は六十萬人と云ふことである。共に全國民中の僅少部分に過ぎない。

レニンと、ムソリニとは、現在文明國中に於ける專制政治家の好一對である。而して一は社會主義に立脚し、他は國家主義に立脚し、其の主義政見こそ相反すれ、兩者共に鋭意熱心、各其の國家社會の繁榮幸福の爲めに努力しつゝあるは明らかである。兩國民共に或は前政府當時に比して幸福であるかも知れぬ。併しながら暴力の革命或は脅嚇に依つて政權を奪取したる一事は、惡例を後に貽すものとして吾人の贊同し兼ぬる處である。政權の爭奪が暴力に依つて行はるゝに至らば早晩內亂を免れぬのであらう。是れ國家としても、社會としても、極めて忌むべく　めて恐るべきことである。

併しながら凡そ事の成るは成るの日に成るにあらずで、露國の共產革命も、伊國の國粹政變も、必ずしもレニンのみの力でない。必ずしもムソリニのみの力でない。露國の場合に於ては縱令戰亂の困厄ありしとは云へ、革命を激成したるものはロマノフ政府積惡の罪である。伊國の場合に於ては縱令共產黨の跳梁ありしとは云へ、ファッシスチ抑壓に對する前政府怠慢の罪である。之を以て露國の革命は窮鼠が猫を嚙みたるものである。伊國の政變は飼犬に手を咬まれたるものである。反對主義者に對する官憲の無理解なる暴壓と、御用暴力團に對する官憲の利己的庇護とは、其の害の及ぶ處同一轍である。

右と左との是非善惡は相對關係である。右の是とする處は左の非とする處、左の善とする處は右の惡とする處である。國家主義者の所謂思想の惡化、思想の善導とは、社會主義者より見れば思想の善化、思想の惡導かも知れぬ。左れば主義の是非善惡を定むるには、學問上の論理と、人道上の實際とより見て、右と左と、何れが果して正なるか、何れが果して邪なかるを檢することが先決問題である。若し正邪を判することが困難とすれば、せめて世相の推移、人心の趨向とより見て、何れが順にして何れが逆なるやを知ることが肝要である。順なるものは榮え逆なるものは衰ふるが天の命數である。今の日本の人心は「右向前へ」であるか、將た「左向前へ」であらうか。

民主平等は時代に目覺めたる若き國民の根本思想である。獨り日本のみならず、獨り現代のみならず、世界人類の思想は永久に連續に步一步左に向つて進みつゝあることは、歷史の明證する處である。最近多少の反動流あるが如きも、是れ岩に激か

る〻一時の澱みに過ぎない。流が岩を越ゆるの時、更に一段の猛勢を以て奔進するであらう。如何なる大英雄も、如何なる大學哲も、此の人類本然の大思潮を扼き止むることは出來ない。若し強ゐて遮ぎらんとせば、革命の大洪水となつて、人も、家も、田も、畝も、押し流さねば止まぬであらう。然るに特權部族や資本家や官僚の徒は、自家の利害と好惡とを標尺として思想の善惡を評定し、國民の心を流るゝ時代の此の大思潮を以て猥りに惡化と唱へ、危險化と叫び、之を善?導せんが爲めに動もすれば極右黨を利用して、暴力の行使をさへ默視するの傾向がある。極右黨の暴力を默認することは、反動的に極左黨の暴力を激成することである。畢竟内亂を助長するものである。

過度なる「右」と「左」との並存は相互の切瑳琢磨に依つて、一面には「右」の澁滯停頓を推進すると共に、一面には「左」の猪突暴進を牽制するの妙味がある。併しながら極右と極左との間には互に反撥あつて交渉がない。爭鬪あつて協調がない。極右が天下を取るも、極左が天下を取るも、血の洗禮は到底免れないであらう。是れ決して國家の正しき發展と、社會の正しき進歩とを望むの途ではない。之を以て吾人は主義に對してゞなく、實際問題の上よりして兩者共に之を排斥する。之と同時に爲政當局者等が、自己の地位を保持し、自己の利益を擁護せんが爲めに、一方を援けて一方を虐ぐる如き利己的政策を執ることを排斥する。斯くの如き偏頗の政策は所詮暴力革命の種子を蒔くものである。此の見解に於て現在日本の政狀を顧みる時、甚だ大なる危險の已に業に醞釀せられつゝあるを感知する。國民の大多數は今の政治機關に對して、何等の信賴も、何等の期待をも有して居ない。弱き者は諦めて逃避生活に隱れ、強き者は憤りの破壞作用を望んで居る。噴火山上の舞踏ならねど、國民を愚弄せる禪問答の議會政治が果して何時まで續くことやら、言論が力を失ひたる時、或は言論の力を奪はれたる時、國民は自ら物理力の信者とならざるを得ない。政治の局に當る者、偶には三味線の代りに國民の聲を聞け、折には自働車の窓から街頭の空氣を吸へ。

總ては人間性恢復の要求より

永井柳太郎

現代の特徴は一言にて云へば革命的といふ事だと思ふ。政治

界にも革命的傾向がある。經濟界にも革命的傾向がある。教育界にも革命的傾向がある。藝術界にも亦革命的傾向がある。何故であるか、現代の政治、經濟、教育、藝術の基礎である社會組織其物が人間性の完成に伴ふ總ゆる要求を壓迫して居るからである。ルソーは自然に還れと叫んだが現代人の叫びは人間に還れである。人間は政府の爲めに生まれたのではない。又資本の奴隷たるべく生れたのではない。政府も資本も人間が人間自身の生存と幸福との爲めに作つたのである。若し政府が恣いまゝに人間の生活を抑壓し、資本が夫れ自身の增殖の爲めに人間の幸福を奪ふならば、それは即ち本末顚倒である。現代の社會組織は即ち其本末顚倒の社會組織である。此社會組織を人間本位の社會組織に改善し、政府及び資本の適用の爲めに多年失はれて居た人間性を恢復せんとする事は恐らく人間人格の尊嚴を自覺した日本人全體の要求であるに相違ない。

勿論今日改造を論じ革新を叫ぶ人々の中には不眞面目な者もないとは云へぬ、所謂運動屋も居るに相違ない。けれども其淺薄な、或は俗惡な各種の運動の中にも、猶且つ眞劍なる、且重大なる原因が存在する事を認めざるを得ない。それは今日の社會組織が多くの點に於て人間の本性を抑壓し、其抑壓に伴ふて起る不平不滿が此社會に漲つて居る事を語るからである。政治界や、經濟界や、教育界や、藝術界や、種々の方面に現るゝ騷や、運動は其外觀に於て淺薄であり、又不眞面目なやうであつても、其根底に於て現代人の深刻なる不安と、其不安に伴ふ不平不滿とが潜在して居るのであつて、此潜在意識あればこそ一人の所謂運動屋の叫びも時に數百人の共鳴する所となり、一人の輕卒なる發案も時としては重大なる改革となるのである。

そこで今日の問題は如何にして人間性を恢復するかである。此恢復方法に於て或は過激なるものもあり、或は穩健なるものもある。然しそれは結局手段の相違で動機又は目的の相違ではあるまい。假りに穩健なる方法に依り出來る限り少き犧牲を以て人間性恢復の目的を遂げんとする者があつても、政府が先見の明なく、其穩健なる方法に依つて人間性恢復の目的を遂げんとする運動迄も極端に壓迫する事になれば、勢ひ穩健なる方法を棄てゝ政府其物と生存競爭を試みんとするが如き過激なる方法に移る事も有り得るのであつて、結局左傾する事の可否は其當時の支配階級の態度と、其當時の社會狀態とに依つて判斷せられ得るものと思ふ。左傾する事が如何なる時代に於ても、亦如何なる社會に於ても惡であるとは決して云へない。恐らく何人も歷史上に於ける總ての革命は悉く惡であつたと斷言し得る者はなからう。クロムウェルの革命がなければ英國今日の議

會政治はないであらう。ジョージ、ワシントンの革命がなければ米國今日の自由政治を見る事は出來ぬであらう。だから左傾は如何なる時代にも亦如何なる社會にも常に惡であると云ふが如き議論には斷じて與する事は出來ぬけれども、賢明なる改革家は常に最少限度の犧牲を以て最大限の効果を收むるに努むるのである。だから現在の日本に於ても直接行動に依らず立法手段に依つて人間性恢復の目的を遂げ得べき十分且つ豐富なる機會があるに拘はらず、他の合法的手段の盡き果てたる國々の夫れを模倣して直ちに我國に於ても亦直接行動に依らんとする如きは決して思慮あり、且つ見識ある者の態度ではあるまい。

新しき酒を古き革嚢に盛る事は出來ない。今や民衆の間には眞に人間らしく生きんとする熾烈なる意慾と其意慾の發現を阻止する舊勢力に對する白熱したる反感とが恰も新しき酒が沸騰する如き勢を以て沸騰し來り、將に一切の政治上及び社會上に於ける階級組織を突破して其上に氾濫せんとして居る。然し之れを其氾濫するまゝに放任すれば遂には階級組織のみではなく社會組織それ自身の大崩壞を見る危險なしとせぬ。玆に於て身自ら其民衆の突喊の先頭に立ち、其沸騰し來る新勢力を正導して純正國家の目的に一致し、日本民族の世界文化的使命に適合したるものとなす事が即ち現代に於ける政治家、思想家、學者等の任務でなくてはならぬ

思想と行爲とを截然區別せよ

安部磯雄

如何なる國にも昔から進步思想と保守思想とがあつて兩立相對峙して居た。一方に極端な進步主義あれば、他方に極端な保守主義があつて、互に其主張を枉げず、兩者の間には調和を見出す事が出來なかつた。然し實際に於ては何人がやるといふ譯でもなく、此相反した二種の思想は自ら妥協的中庸の道を執るのであつて、思想に於ては進步、保守と分れるが、夫が政治に現れる時には自然に其中間の路を行く事になるのである。それならば最初から極端に行かずに中庸を狙つて總ての社會政策、政治、外交を行つたらいゝ譯であるが、實際の社會はさういふ風にはなつて居ないので、理論でなく事實を見れば何時も極端に走るのが常である。一方に極左があれば、他方に必ず極右があつて之れに對立して居る。どうしてさういふ風になるかとい

ふ事は私が玆に述べやうとする範圍ではないが、簡單に云ふならば、人間は其思想の上に於て單調を厭つて複雜を好む性質があるので、人々が各自の考をいろ〳〵に考へ、他の人々と異つた考を持つ事に興味を感ずるからである。さういふ風な傾向が社會のために善いか惡いかは別問題で、それは哲學者の問題であるが、我々は單にそれを事實として認めれば好いので、我々の職分は事實に對して如何なる態度をとつたらいゝかといふ事にある。

で、思想其物は決して恐るべきものではない。危險思想といふが思想は危險ではない。思想は常に自由である。如何に極端なる思想と雖もそれは恐怖すべきものではなく、さういふ思想も人生に於ては何等かの役目を務めて居る。然るに多くの人々には其思想に於て先入主があつて、其人の平常の行爲を支配して居るが、一度其思想を持てば後生大事と守つて居るのが普通である。それは宗教思想などに於て甚しいので、所謂我宗旨尊しと云ふ通り、自分の宗教をのみ好いと考へる。自己の宗旨が好いと考へるのは決して惡くはないが、然し其態度から生れて來るものが惡いので、それは即ち自己の思想と違ふ立場にある思想を謬れる思想と考へるに至るのであつて、彼等は異端邪說と稱して反對の思想を排斥する。一般の思想に於ても、危險思想と呼ばれるのは、或他と異れる思想が反對の立場からさう呼ばれるのである。併し乍ら前にも云つた通り思想は之れを思想として取扱ふ事は自由であつて、其處に危險はない筈である。假りに誰でもの思想が皆同じであつたなら社會の進步といふものは有り得ないのであつて、種々雜多の思想が集つて、其思想と思想との間に於ける鬪ひに依つて比較的善き思想が生れ、社會は其思想に依つて指導される。一の思想のみが眞實で、間違つて居ないと云ふのは大なる謬りで、危險は寧ろさういふ考へに在ると云へる。だから完全なる思想といふものは有り得る筈がないので、多くの思想と思想との鬪ひに依つてのみ我々は比較的健全な或一の善き思想に到達する事が出來るのである。

然らば今日猶ほ危險思想と云ふ言葉が屢々使はれるのは何故であるか。極端な進步主義の立場から、極端な保守主義を危險と考へ、又同樣に極端な保守主義の立場から極端な進步主義をさう云ふ風に考へて、お互に危險呼ばはりをするのは何う云ふ處から來るのであるか。

思想は如何なる思想と雖も自由であつて差支へはないが、其思想が愈々現在の政治、或は社會制度、經濟組織の上に實現されやうとする時に、其處に兩者の間に衝突を來す事がある。現在の制度に適應されて其處に摩擦を生じた時に其思想を危險思想

と云ふ。然し此場合兩者の間に矛盾撞着が生じても、一方の思想の罪か、或は現在の社會制度、政治、經濟組織の罪かいづれともそれは容易に判斷を下す事は出來ない。或場合には思想は善いが制度が惡いために衝突を來すとも云へやう。又或場合には思想が惡くて現在の制度に對して不都合であると考へられることもあらう。然し單に衝突する恐れがあるといふことの爲めにその思想が危險なら、此世に危險思想でない思想はない。現在の制度が完全でない以上、其處に或思想と制度の間に衝突が起るのは免れない。だから思想は思想として唱へられて居る間は危險はないが、或思想が現在の制度と接觸するやうになつて來た場合には其處に衝突が起るのは止むを得ない。

今玆に二つの正反對の思想がある。其一は絶對平和主義の思想であつて、戰爭は勿論、人と爭ふ事を禁じ、裁判所で訴訟をする事などを以ての外と考へる。他の一つは競爭と戰爭のみが世の中の眞理で、"might is right" の信條の上に立脚する思想である。絶對平和主義者としてはトルストイがある。彼は無抵抗主義を唱へ、戰爭を此上なき罪惡と見た。バイブルの言葉を文字通りに解して人が右の頰を打てば左の頰をも打たせると考へた。一個人として此主義を實現する事は立派な道德を奉ずる者であり、世の中の人が全部此主義を實現したならば理想國が實現される譯で、此種の思想が危險と呼ばれる筈がないのであるが、斯う云ふ平和的な思想でも現在の制度と接觸した時に一部の人は之れを危險だと云ふ。近頃仙臺に於てあつた事であるが、一人の青年がトルストイの平和主義、無抵抗主義を信ずる所から、兵隊に徵集された際に宣誓式を拒んだ事は新聞に報ぜられたが、若し青年が最後まで其意志を枉げなかつたなら問題はもつと重大視せられたに違ひない。此青年の抱いて居た平和主義、無抵抗主義がそれならば危險であるかと云ふにさう云ひ切る事は出來ない。其思想が現在の社會の制度と接觸する所に衝突があり、其處に危險があるのだと云ふかも知れないけれど、思想其物と、思想が現在の制度と接觸するといふ事の二つの點は截然として區別されなければならない。思想が或制度、或組織と接觸して其處に衝突が起つたとして、其思想が危險視されるならば世の中には危險でない思想はない筈である。平和主義や無抵抗主義とは反對に、競爭と戰鬪のみが人生の原則であつて、敵を撃たねば敵が我を撃つか、敵か我かどちらかゞ死なねばならぬといふ風に考へる態度であつて、軍國主義で行からとする思想は思想其物としては別に危險ではない。生物學上に於ても、生物の競爭は之れを事實として認めねばならない十分の根柢がある。併しながら此思想が外部に表れて軍國主義とい

ふやうな形をとつた時に、樺太問題が起ると武力で之れを占領しやうとするやうな場合、或は獨逸皇帝や其人民のやうに自分達は世界を統一する運命を持つて居ると考へる場合に於て、其思想を或實際に應用する事になると其處に危險がある。又、國家に對する思想にしても、我々は思想其物に何等の危險を認める事が出來ぬ。此種の思想には出來る丈け國家の權力を縮小して、國家と云ふ組織を廢止するといふ國家否認論と、國家の力を無限に擴張して、國家萬能主義の下に政治も今のやうな議會政治は廢して、憲法も止め、眞に君主一人の考で國民を治めて行かうとする思想がある。之等の思想は思想として見て惡いものではなく、兩方とも學說として議論する價値は十分にあるのであつて、例へば國家否認の無政府共產主義も思想として見て恐ろしいものでも何でもない事を誰でも知つて居るのであるが、此思想は人生に一番密接な關係のある家庭生活が小團體ではあるが無政府共產主義の理想を完全に現して居るので、それを憧憬した結果社會全體に此理想を及ぼさうと考へた聖人も古くからあつた位で、つまりさう云ふ處から出發した思想なのである。社會に無政府共產主義が行はれゝば大なる家庭が產れるであらうと云ふ思想は非難する事が出來ない。然し今の社會にそれを實現するといふ事になると忽ち其處に矛盾撞着が生ずるので、其衝突を見て或人は其思想を危險と考へるかも知れないが、それは衝突するといふ點に危險があるのであつて思想其物にはない。反對の國家萬能主義もそれが思想の宣傳に止まる限り危險はないが、暴力に依つて憲法を止めたり、議會を否認するとなると現在の社會と相容れないで其處に所謂危險性が現れて來る。

そこで私の思想に對する考へは前にも云つたやうに、思想其物は勿論言論にも絕對の自由を許すと云ふ事になる。言論に現れない思想は分らないので、思想の意味は言論に於て初めて現れて來る。然し或思想が行爲となつて現れた時、そして其思想が現代の社會制度と衝突する場合には政府は初めてそれを取締るべきであると思ふ。然るに行爲丈けを取締るべき場合にも更に其思想までも取締るのは誤れる處置であつて、今日の政府に對して遺憾とする點であるが、それは行爲が生ずる原因は思想であるから、其原因である思想を取締らなければならぬといふ所から來て居る考へである。然し行爲は必しも思想からばかり來て居ない。世の中には惡事を働く場合に、單に普通の惡事であるならば、彼は泥坊とか、詐欺とか、人殺しとかありふれた罪名で刑を受ける事になるので、それではつまらぬから自己の惡名をいくら善化するために屢々或る思想を借用する事がる。或は或思想や主義を自己が信ずるかの如く自己の行爲に色

を着ける者がある。英語に「スモーク、スクリーン」と云ふ言葉があるが、それは戰爭の時に敵に正體を見せぬ爲めに爆發物に依つて煙を起し、其中に自分の姿を隱すと云ふのであるが、世には此「スモーク、スクリーン」を用ひる者が多くある。社會主義者とか無政府主義者とか云つて夫れ等の主義の名の下に隱れて惡い事を働く者も隨分あるが、極左黨の中にばかりさういふのがあるのではなく、極右黨の場合に於ても金持、富豪を嚇かしたり殺したりして、何々會、何々團とかいふ保守的團體の名の下に、或は愛國の名を借りて暴行をやる者が少くない。だからさう云ふ行爲を見て直ちに或主義を代表する思想を追窮するは無理な話である。で、前に云つたやうに思想其物は寛大に放任するが、それが現代の社會制度に現れて衝突する時には、思想其物には觸れないで、譬へ何々主義を標榜しやうが行爲丈けを處罰した方が好いと思ふ。(茲に一言附け加へて置く事は、今或思想が現代の社會制度と衝突した場合に、思想は善いが制度が惡いといふ時に、其善い思想を罰するのは不都合だと考へる者がある事である。無論現在の社會にはいろ/\不滿な事が多いのであつて、法律にも治安警察法の如き惡法もあるが、我々國民としての態度は、惡法に對する改正運動はやるのはいゝけれども、如何なる惡法と雖もそれが現存する間は服從しなければならない。人間の思想丈けが進み、社會制度が遅れて居ると考へても、國民としては其制度に服從しなければならない。法律が惡ければそれを改正するなり、廢止するなり、言論に於て戰ふ事はいゝけれどもそれに背反する事は惡い。)私の云はうとする所は結局簡單で、思想はありのまゝに在る時は如何なる思想でも取締るな、行爲に現れて夫れが現在の法律に違反するに至つて始めて取締るが好いと云ふ事である。今の政府は行爲を取締ると同時に其思想をも取締るのは甚だ遺憾である。進歩であれ、保守であれ、其思想の存在する事は許されねばならぬ。個人の場合に於ても思想の寛容は必要で、行爲に現れて法に牴觸する時は法の制裁を俟たねばならぬが、思想、言論は自由であつて、互に尊重しなければならぬ。自分の思想丈けが正しく、他人の思想は間違つて居ると云ふ考へ方、異端征伐をやる宗教家の態度は排斥しなければならぬ。例へば極左黨の人々の考へにしても、極右黨の人々に對する時は、政府や資本家に都合よき議論をすると云ふ故を以て、直ちに曲學阿世と云ふやうな一言で屈服させやうとするやうな傾きがあるのは面白くない。我々の希望する所は世の中に健全な輿論を作る事であるが、それは偶然には出來ない。言論の自由が許され、思想が思想と鬪ふ事に依つてのみ初めて輿論が生れるのであつて、それは言論の壓

迫からは絶對に生れない。極左、極右、そのいづれにもせよ、其思想及び言論を尊重し、耳傾けるやうな態度は斷に持たなければならない。

「極右」「極左」共に謬想

法學博士 吉野作造

○

社會思想の議論に「右」だの「左」だのと云ふ冠詞を附するは如何いふ意味かと云ふに、細かく云へば極めて曖昧なものだ。只大體の傾向に就て分類するに、現狀維持に執着して改善をあまり喜ばぬを「右」とし、此傾向の強い弱いに依て「極右」だの微溫的の「右」だのの細別を生じ、之に反して現狀破壞に急にして破壞の實際に及ぼす結果などを深く顧みぬを「左」とし、之に亦強弱の細別あることは「右」と異る所はない。

現狀に滿足せず多かれ少かれ之に改善を加ふるの必要を認むるに於て、今日の人間は誰しも異論のない所であらう。此點に於て現代人は概して左的傾向に立つと謂つてい丶。併し乍ら過去の經驗にも採るべきものがある、之に若干の弊害がこびり付いて居るからとて、後先の考もなく全然之を棄てる譯にも行かない。斯う考へると苟くも人として現實の生を營む以上彼は亦必ず右的傾向の一面を離るゝことが出來ぬ。「左」の一面に執着するは「右」の一面に執着すると同じく謬である。此點に於て極左的社會思想は、極右的社會思想と共に排斥せらるべき運命に在ることを免れない。

只實際問題として現代は大に改造を要する時代だ。改造の急要に迫られて居る時代だ。それ丈改造を主張する側の議論は大に強く力説するを必要とせられ又現に幾分誇張せられても居る而して之と同じ必要はまた右的議論の横行に對して警戒すべきを我々に教へる。そは理に於て正しい右的議論でも、實際に於ては左的議論の鋒先を不當に鈍らす目的に利用さるゝことがあるからである。斯う云ふ事情を考量の中に入れると、我々は幾分右的傾向に峻嚴にして幾分左的傾向に寛大であつても差支ないやうに思ふ。但し之は政略の問題だ。純粹の學問上の問題としては、何處までも我々は過ぎたるを過ぎたりとして、中正の途の何れに在るを正直に指示すべきである。況んや昨今行はるゝ極右極左の議論には、往々また許す可らざる謬想を根本に於て伴ふものあるに於てをや。

○

人間の社會に「進歩」といふ事あるを肯定する限り、絶對に現狀を固執す可らざるは言ふまでもない。然るに世上には今日仍ほ不思議に現狀の維持を社會經營の金科玉條とするものが少く無い。而して此種の保守主義者を細かに觀察して見ると大體三つの種類がある樣に思ふ。第一は「現狀」の過分の保護に浴し、其の變革に依て喪ふべき恩惠に戀々たる所より自ら保守的立場を取る利己主義者である。貴族・官僚・富豪・龍商等の間に意識して此の立場を執る者を少からず見るが、無意識的に自家階級の利害と國家全般の休戚とを混同する連中も亦皆此仲間だと謂つていゝ。第二は今なほ封建時代の傳統的陋習より脫し切らず過去の經驗の踏襲を處世の第一義と心得る連中である。德川時代の樣に日本が則ち世界の全部であつた世の中であれば、所謂祖宗の遺法に遵據して夢の樣な泰平を樂まうといふにも無理はない。「新儀停止」、が治安維持の第一義、普通の民家でも兎角先祖の殘した家法に背かぬ樣にと只管につとむる。而かも因循姑息の積弊が、如何に國際競爭の新舞臺に必要とさるゝ活動力の本源を涸らして居るかに氣附かない。今日でも先輩の老識者の間などに淳風美俗がどうの、昔ながらの國風がどうのと、氣の弱い輩を威す者の多いのには驚く。第三は改善更革の必要を多少認めつゝも其の實際の效果に對して甚だ自信のない連中である。今の儘では可かぬ、何とかせでは立ち往かぬが、併し、一部の人の云ふ樣に改正したからとて果して良くなるだらうか、と疑ひ思ひ迷うて、遂に元通り現狀に安定するのである。如何して改善の前途に自信を有ち得ぬかと云ふに、其由て來る所にも亦自ら三樣の種類がある樣だ。最も普通なるは、世上の突飛な改革論に度膽を拔かれ、あれでは困ると安價に自分の立場をきめる人々である。改善の必要あるを認めても、如何改むべきやを自ら研究するの勞を惜む橫着者の間に、此種の連中を多く見る。次には改善の結果を社會一般の人々が適當に味ふや否やに付き、猜疑の念を深うして移り難い人々である。貧乏人に金をやれといへば金をやつたつてうまく之を利用するかどうか分らぬといふ。勞働者の道の正當な要求を聽いたらどうかといへば、一歩讓れば其後どんな飽くなき要求を提出するから分らないと躊躇ふ。要するに物の道理の分つたのは自分丈けで、一般民衆などは自ら何を求むべきやを知らず一旦求めて得たりと味を占めると、其先鬪に乘つて何を云ひ出すか分らぬと決め込むのである。人を疑ふに慣れて、全く人を信ずることを知らぬ人々である。もう一つは、改善後の社會に於ける新なる道德的責任に盲目なことである。例へば自分の子供にしたところが、馬鹿で終らしたくないとすれば教育を授けねばなるまい。教育を

加へればそれ丈彼の開發に伴うてまた一層面倒な監督と指導とが必要になる。相手方の境遇を改善したからとて、それで放任していゝといふのではない。社會改善の問題になると、どう云ものか世人は不思議に此點を看却する。普通選擧が實行されるとする。之を喜ぶべしとする所以は畢竟吾人の道德的努力が此制度の下に於て一層よく酬えられるからだ。新しい形勢の上に於て新に爲すべき吾人の責任を等閑に附して輕々に社會改革の效果を是非してはいけない。將來に對する道德的責任につき深き決心と情熱とを缺く者、往々現狀滿足の姑息主義に墮するのは當然の事ながら甚だ憂ふべきことである。

所謂極右的思想は右の如き誤つた根據に立つの故を以て我々は理に於に之を斥ける。而して其の流行は種々の形に於て右述ぶるが如き謬想を橫行せしむるが故に、我々は亦儼として之を排すべき實際の必要をも認めるものである。

○

現狀維持にこだわつてはいけぬ、時に應じて改革せねばならぬと云つても、無暗に之に反對するものがあれば、勢不靜なる破壞運動の起るは已むを得ぬ。併し吾人の常に忘る可らざるは破壞そのものには本來何等文化的意義あるに非ることである。破壞は一面に創造的精神の必然的發露たるの本質を具有する時に於てのみ吾人の眞劍なる努力に値する。是れ社會改造運動が理想主義を背景とし又理想的條件に拘束されざる可らずとする所以である。然るに世上には只專ら破壞その事に終始する思想並に行動の可なり盛に行はるゝを見るは何ぞや。吾人は其の由て來る所をたづねてまた三つの根源を發見した。一は頑迷なる保守的態度に對する單純なる反抗である。露西亞帝政時代に於ける虛無黨の如きを其適例とし、我國に於ても官邊の過當の壓迫に惱む所謂主義者等の間に亦此部類に屬する者を見出すに苦まない。境遇の所產として我々は其間大に諒とすべきものあるを認むるも、現狀破壞の事業が多く此種の人々に依て取りまかなはるゝことは、決して人生の幸福ではない。二は社會組織さへ改むれば問題は徹底的に解決するとする唯物史觀論者である。文化價値を生むものは結局に於て人間の魂だとする說を採らず凡ゆる禍害の源は一に外的環境に存すと爲し、惡制の改善は直に人生を慶幸する所以だと信ずるのである。社會組織さへ改むれば一躍して黃金世界を現出すべしとするのだから、此見解を執る者は慨して社會の改造に手段を擇ばない。此點に於てこの立場の極左論は、境遇の變らざる間人間は碌な事の出來る者ではないときめてかゝる夫の極右論と、魂の權威を蔑にする點に於て彼此一脈相通ずるものがあると思ふ。官權財力に對し一層

左的改革の方針を強調する勞働運動家に、時々其部内に於て極右的專制主義を實行するに勇なる者を見るは、怪むに足らない。第三には斯くあれかしと冀ふ所のものを無條件に現出せしめんと欲して、動もすると理想を實現すべき地盤の顧慮を忘るゝ觀念論者である。思慮淺き教育家の中には、教育學の教說を直に實現せんとするに急ぎ、相手の兒童の心理等を全然無視することありとか。之と同じく彼等は現實の地盤を離れて幻想的に理想の實際的發展を妄信するのである。畢竟彼等は改革に專心するのあまり、殆ど何を改革すべきかを忘れるのである。鹿を追ふ者山を見ずとは正に之れだ。望む所意の如く運ばずとて遂に厭世的態度に轉ずる者もとかく此種の連中に多い。抑も改革の仕事は取も直さず過去の經驗の修整だ。果して然らば吾人は望む所の完全なる實現よりも寧ろ過去の經驗の蓄積の上に新しき生命の宿れる事に、本當の滿足を感ずべきではないか。

所謂極左的思想は、往々以上の如き先入の謬見に根據するものなるが故に、吾人は之に與みしない。而して其の流行はまた、種々の形に於て之等の謬想を流布せしむるの怖ありと思ふが故に、我々は亦大に之に警戒すべきを叫ばざるを得ぬ。

▼移轉廣告▲

◇渡部政盛氏新著◇

三版 最新哲學辭典

初版再版忽ち賣切 増刷出來

正價金五圓八拾錢 送料金廿七錢◇

菊判最上製 美本全壹冊 箱入六百頁

本書の特色(一)現代文化民衆の哲學慾を充すを目的として編纂したる事(二)文章平易記述繁簡宜しきを得一讀直ちに其の要點を捕捉し得る事(三)内容は哲學概論哲學史は勿論生物心理特に哲學藝術上の最近思潮等特に記述に萬遺憾なからんことを期す(四)所謂廣義の哲學以外現代の文學藝術社會問題經濟問題政治問題婦人問題等にも亘り其の重要なる記述は總てこれを收めた事等なりそして代價は文化生活への奉仕として正價を最低至廉ならしめ其の普及を圖つた事である。

荒井庸夫著

平將門論

(人間としての將門研究)

四六判最上製 金貳圓 送料十二錢

千年前社會變革の犧牲となつた平將門は反對者の爲に逆賊と誣ひられ世人からは惡魔と呪はれ後の史家に依つて極端に其眞相を誤られて了つた併し遺跡の實際と歷史の大勢とから公平に見た彼は要するに時代の波に漂蕩された只の人間であたに過ぎない。思ふにデモクラシー運動の盛んに起りつゝある今日彼を中心として見た武家階級勃興の史的發展は何等かの暗示を吾人に與へずには居まい。此邊の用意について本書は從來の囚はれたる將門觀と聊か撰を異にする積りである。尚將門と關係深き田原藤太と平忠常を論じて補足せり。

小林一郎著

六版

日蓮主義講話

四六判最上製本全壹冊五百頁 金貳圓五拾錢 送料十二錢

日蓮主義は現時の思想界に勃興せる新勢力なり。本書は從來の宗派を離れたる自由の見地より日蓮上人の事蹟と教義とを平易の語を以て講述し日本國民信仰の歸着點を指示せるものにして未だ信ぜざる者は之によりて新なる生命を得べく既に信に入れるものは之で現今の時勢と宗教の關係を了解し得べし。

東京市神田區表神保町七番地 大同館發行 振替貯金口座東京八七二番

泰西名著歴史叢書

本叢書に收むる所孰れも歐米諸國に於て既に典籍の中に數へられたもののみである。各原著者は畢生の心血を此に注き其の文は雄大、豪健、暢達、流暢、叙事といひ論賛といひ兩ら其の體を得、實に史乘の尤たるもののみを採擇したのである。

言ふまでもなくこれらの原書は啻に歴史として尊重せらるるばかりでなく、文學として亦絶大なる價値を有してゐる。現に歐米の一般家庭に迎へらるるを見ても、各大學に採用され又學者政治家に所藏さるるに徵しても自ら明白である。而も畫龍點睛を遺れたとの謗りを受けないため、譯者は各自其の專攻する部面に關するもの又は居常愛讀するものを擔當した。

譯文は流麗精緻で蓋し斯界空前の偉觀である。敢て天下の淸鑑を竢つ。

新時代に活躍の基礎を造る獨學機關は是れ

早稲田大學六大講義

經營將に四十年―講義錄界の權威

政治經濟科
一箇年半修了
毎月二回發行

法律科
一箇年半修了
毎月二回發行

文學科
一箇年半修了
毎月二回發行

中學科
二箇年修了
毎月二回發行

商業科
一箇年半修了
毎月二回發行

高等女學科
一箇年半修了
毎月二回發行

葉書にて申込次第　各科見本附規則書　直ちに送呈す

東京牛込
早稲田

早稲田大學出版部

電話 牛込 三四五
三四六
三七四八
三七四九



光雲翁昔ばなし

田村松魚聞書

(此の『光雲翁昔ばなし』は大正十一年十一月十九日(日曜日)の夜から始め出し、爾來毎日曜の夜毎に續き、今日に及んでゐる。先生のお話を聽いてゐるものは高村光太郎氏と私との兩人限りで、靜かな空氣をこわすといけない故、絶對に他の人を立ち入らせなかつた。最初の第一回は光太郎氏宅、他は今日迄先生のお宅でされつゝある。私達はかねてから、先生の昔ばなしを聽き度く希望してゐたので、二三前年程から此事を先生にお願ひしてあつたが、此頃になつて漸つとその時機が來たのである。先生のお話に對しては、時々私達は質問をしたり、或時は、話題を提出したりすることもあるけれども、多くは、先生は口述的にポツ〳〵と話し續けられて行つた。私は丹念にそれを口語の儘に聞書きして行つたのである。もつとも、筆記をする爲にお話しを伺つたので無く、お話しを聽きたい爲に話して頂いたのであるが、此の有益にして多趣味のお話を我々兩人の記憶にはとても殘らずは記憶し切れないと思つたので、失念遺漏を恐れ、私が筆まめなのに任せて凡てを聞書きしたのである。併し、私の最初の考へは(今もさうであるが)彫刻家としての先生の七十年の生活を詳しく知ることを希望したと同時に、もう一つ、それを現代の人々にも知らせたく、また後の世に殘して置きたいと思ふ意味もあつた。私に、さういふ

考があつた爲に、特に聞書きすることに丹精したのでもある。それで、後の方の意味に就いて、先生の御意見を伺つて見たら、それは、あなたの御勝手だ、といふことであるから、私は聞書を更に清書して、それを先生に御覽に入れた。先生は、また、私の丹精をよろこび、私以上に丹念にそれに筆を入れて下すつたのである。さうして、私はまたそれを淨書し、更に先生に御覽に入れた。先生は、また、それを丹念に讀んで、「これなら、よろしからう。」と云つて私に其稿本を戻して下すつたのが即ち此の本文である。但、先生は、私達後進に對して、過去の記憶を、記憶の儘に、不用意に、思ひ出してはポツ〳〵とお話しなすつたのであるから、必ずしも記憶に間違ひがないとは云へないと、度々私達にお斷りになつたことである。よつて、年月日、地名、人名、其他の事柄に就いての行きさつ、若くは其他いろ〳〵な事柄に就いても間違ひのやうなものが若しあつたとして、それは、先生の記憶違ひか、然らざれば私の聞書の誤謬である。此點は特に讀者へお斷りをして置きます。本篇を發表するに當つて、私に責任がありますから、爰に長々しく一言申添へて置きました。大正十一年十二月末松魚附記）

私の父祖のはなし

先づ、いろ〳〵の話をする前に、前提として私の父祖のこと、つまり、私の家のことを概略話します。

私の父は中島兼松と云ひました。その三代前は因州侯の藩中で中島重左エ門と名乘つた男。倅に同苗長兵衛といふものがあつて、是が先代からの遺傳と申すか、大層美事な髯をもつて居つた人物であつたから、世間から「髯の長兵衛」と綽名されてゐたといふ。その長兵衛の子の中島富五郎になつて私の家は全くの町人となりました。

富五郎の子が兼松、これが私の父であります。父の家は隨分と貧乏でありました。此れは父が道樂をした爲とか、心掛けが惡るかつたとかいふことからではありません。全く心柄ではないので、父の兼松は九歳の時から身體の惡るい父親の一家を背負つて立つて、扶養の義務を盡さねばならない羽目になつたので、その爲とう〳〵是といふ决つた職業を得ることも出來ずじまひになつたのであります。父としては種々の希望もあつたことでありませうが、つまり幼年の時から一家の犧牲となつて生活に追はれた爲に、習ひ覺える筈のことも事情が許さず、取り

遭つたものにならなかつたことでありました。

祖父に當る富五郎は八丁堀に鰻屋をしてゐたこともありました。其頃は遊藝が流行で、其中にも富本全盛時代で、江戸市中一般に此れが大流行で、富五郎も其道には中々堪能でありましたが、わけて總領娘は大層上手でありました。父娘とも藝事が好き上手であつたから自然其道の方へ熱心になり、娘は十か十一の時、もう諸方の御得意から招かれて、行末は一廉の富本の名人にならうと評判された位でありました。親の富五郎も鼻高々で樂んで居りましたが、不圖、或年悪性の疱瘡に罹つて亡くなつてしまひました。其爲富五郎は悉皆氣を落してしまひ、氣の狹い話だが自棄を起して、商賣の方は打つちやらかして、諸方の部屋へ行つて銀張りの博奕などをして遊人の仲間入りをするといふやうな始末になつて、家道は段々と衰へて行つたのでありました。

併し、此の富五郎といふ人は極く氣受けの好い人で、大層世間からは可愛がられたと云ひます。やがて、家業を變へて肴屋を始め、神田、大門通りあたりを得意に如才なく働いたこともありますが、江戸の大火に逢つて着のみ着儘になり、流れて淺草の花川戸へ行き、其所でまた肴屋を初めたのでありました。

花川戸の方も、所柄、中々富本が流行りまして、素人の天狗連が申合せ、高座をこしらへて、富本を語つて大勢の人に聞かせてゐる。（素人が集つて語り合ふことをおさらひと云ふ。此に月さらひ、大さらひとある）根が好きでもあり、上手でもあつた富五郎が此の連中へ仲間入をしたことは道理な話……所が富五郎が高座に出ると、大層評判がよろしく、「肴屋の富さんが出るなら聞きに行かう。」といふやうなわけでした。此おさらひは下手な者が先に語る。多少上手な者が後で語るのが通例である。其爲聽衆は先きに語る人に悪口を云ふ。下手な人が高座に上ると、「貴様なぞは早く語つて降りてしまへ、富さんの出るのが遲くなるぞ。」など騒ぎました。すると、其連中の中に、此の事を口惜しがり、富五郎の藝を嫉むものがあつて、私に湯呑の中に水銀を容れて富五郎に飲ませたものがあつたのです。其所は素人の悲しさに、湯くみが無い。湯くみは友達が替り合つてしたのですから、意趣を持つた男はその隙に悪るいことをしたのと見える。（本職の太夫は、他人には湯はくませはしない。皆門人を使ふことになつてゐる）富五郎は其晩から恐ろしく吃逆が出て、どうしても留らない、身體も變な工合になつて行きました。

すると、それを見たお華客先の大門通りの藥種屋の主人が、「此れあ不可ない、富五郎さん、お前さんは水銀にやられたの

だ、早速手當をしなければ……」といふので、その主人は一通り藥劑のことには詳しかつたので、藥劑をもつて手當をしました。すると、漸く吃逆は直りましたが、聲は全く立たなくなる。身體は利かなくなる。まるで中氣のやうな工合になつて、ヨイ〳〵になつてしまひました。

此の時は丁度私の父の兼松が九歳の時であります。九歳の時から一家扶養の任に當つて立ち働かねばならない羽目になつたといふのは此れからで、其上弟が二人、妹が一人、九ツや十の小供には實に容易ならぬ負擔でありました。

斯ういふ風の一家の事情故、其暫らく前から奉公に出てゐた袋物屋を暇取つて兼松は家へ歸つて來ました。家へ歸つて來はしたもの丶、何して好いか、十歳にも足らぬ子供の智慧には何う仕樣もない。けれど、小供心に考へて、父富五郎は體こそ利かぬやうになつたが、手先はまことに器用な人であつたから、「お父さん、何か拵へておくれ、私が賣つて見るから」と云ふので、小供乍ら手傳ひ、或る玩具を製らへ、それを小風呂敷に包んで緣日へ出て賣り初めたのです。

そのおもちやといふのは、今では見掛けもしませんが、薄い板を臺にして、それに小さな梯子が掛り、梯子の上で、人形の火消しが鳶口などを振り上げたり、火の見をしてゐたりしてゐる形であります。それがチョット思ひつきで人目を惹き、小供が非常にほしがるので、相當商賣になりました。で、細々ながら、先づどうにかやつて行く……其內、緣日の商の道が分るにつけ、いろ〳〵また親子で工夫をして、一生懸命に働いては、大勢の一家を小供の腕一本でやつて行きました。

斯ういふ有樣であるから、とても普通の小供のやうに一通りの職業を習得するは思ひも寄らず、糊口をすることが關の山でありました。其中、兼松も段々人となり、妻をも迎へましたが相更らず親をば大切にして、孝行息子といふので名が通りました。それは全く感心なもので、お湯へ行くにも父親を背負つて行く。頭を剃つて上げる。食べたいといふものを無理をしても買つて食べさせるといふ風で、兼松の一生は殆んど凡てを父親の爲に奉仕し盡したといつてもよろしい程で、洵に氣の毒な人でありました。けれども當人は至極元氣で、愚痴一つ云はず、薩張としたものでありました。

私の母は、埼玉縣下高野村の東大寺といふ修驗の家の出であります。其家の姓は菅原。道補といふ人の次女で、名を增と云ひました。斯うした家柄に育てられた增は相當の教育を受け、

和歌の道、書道のことなどにも暗からぬ程に仕附けられて居りましたので、先づ父の兼松には不相應な程出來た婦人であつた。察するに、増は、兼松の境遇に同情し、充分の好意をもつて妻となつたのであつたと思はれます。兼松には先妻があり、それが不縁となつて一人の男子もあつた。(是が私の兄で巳之助といふ大工で、今年七十八歳、信心者で毎日神佛へのお詣りを勤めのやうにして居ります。今は日本橋濱町で娘の所で、達者で安樂にしてゐる)其中へ、自ら進んで來てくれて、夫の爲、舅の爲に一生を盡した事は、私共に取つても感謝に餘ることである。

祖父富五郎は丁度私が十二歳で師匠の家に弟子入りした年、文久三年に七十二歳の高齢で歿しました。

また私の父兼松は明治三十二年八十二歳にて歿し、母は明治十七年七十歳にて亡くなりました。

私の子供の時のはなし

是れから私のことになる――

私は、現今の下谷の北清嶋町に生れました。嘉永五年二月十八日が誕生日です。

その頃は、隨分邊鄙なむさくるしい土地であつた。江戸下谷源空寺門前と云つた所で、大黒屋繁藏といふのが大屋さんであつた。それで長屋建で、俗にいふ九尺二間、店賃が、よく覺えてはゐないが、五百か六百……(九十六文が百、文久錢一つが四文、四文が二十四で九十六文、此れが百である。此を九六百といふ)

四五年は別に話も無いが……私の生れた翌年の六月に米國の使節ペルリが浦賀に來た。その翌年、私の二ツの時は安政の大地震、三歳は安政三年の大暴風――八歳の時は萬延元年で、櫻田の變、井伊掃部頭の御首を水戸の浪士が揚げた時である。――其時分の事も朧氣には記憶して居ります。

十歳の時、母の里方、埼玉の東大寺へ奉公の下拵へに行き、一年間居て十一に江戸へ歸つた。すると、道補の實弟に、奥州金華山の住職をしてゐる人があつて、是非私を貰ひたいと云ひ込んで來ました。父は無頓着で、當人が行くと云へば行くも好からうと云つてゐましたが、母は、只つた一人の男の子を行末僧侶にするは可愛さうだと云つて不承知であつたので、此の話は中止となつた。

私は十二歳になりました。この十二歳といふ年齢は、當時の男の子に取つては一つのきまりの附く年齢である。それは、十二になると、奉公に出るのが普通です。で、兩親達も私の奉公

先に附いてより〳〵相談もし心配もして居つたことであるが、私は、生れつきか、鋸や鑿などをもつて木片を切つたり、削つたりすることが好きで、よく一日そんなことに氣を取られて、近所の小供達と惡戯をして遊ぶことも忘れてゐるといふやうな風であつたから、親達もそれに目を附けたか、此の兒は大工にするがよろしからうといふことになつた。大工といふものは職人の王としてあるし、職としても立派なものであるから、腕次第でドンナ出世も出來やう、好きこそ物の上手で、俺に似て器用でもあるから、行々は相當の棟梁にもなれやうといふやうな考へで、愈々兩親は私を大工にすることにした。

一寸と其頃の私共の周圍の生活狀態を話して見ると、今からは想像の外であるやうなものです。現代では只の勞働者でも、繪だの彫刻だのといふやうなことが多少とも腦にありますが、其頃はさうした考などは、全くない。繪だの彫刻だのといふことに氣の附くものは、それは相當の身分のある生活をしてゐる人に限られたもので、貧しい日常を送つてゐる町人の身邊には、そんなことは丸で考へても見なかつたものです。早い話が、家のつくりのやうなものでも、作りからして違つて居る、今日ではドンナ長屋でも床の間の一つ位はあるけれども、その時代は、普通の町人の家には床の間などはない。玄關や門などは尙更のこと、……さういふものゝあるのは、居附き地主か、名主か、醫者の家位です。住居でも、衣食のことでも、萬事大層手輕なものでありますから、今云つたやうな繪畫彫刻といふやうなことに氣が附かぬのは當然なことである。何んでも手に一つの定職を習ひ覺え、握り拳で毎日幾金かを取つて來れば、それで人間一人前の能事として充分と心得たものです。

そんなわけで、私も單純に大工といふ職業を親達が選んで與れたので、私にもまた別に異存のありやうもなかつた。で愈々弟子入りをするといふことに話は進んで行くのであるが、そのまた弟子入りといふことも簡單なものであつた。弟子入りとして、弟子師匠と其所に區別が附いて相當の禮をして、師弟の關係の出來るのは、それは文學とか、武藝の方のことであつて、普通町人側の弟子入りは、單に「奉公」で「デッチ奉公」であります。デッチ野郎が小僧に行くことでありますから、別段特別の意味はないのであるが、只、其年期のことが普通一般の定則として、十一歲が其季に當つて居たのであります。十二歲になると、奉公盛り、十三、十四となると、些つと薹が立ち過ぎて使ふ方でも使ひにくくて困ると云つたもの……十四にもなつてぶら〳〵子供を遊ばして置く家があると、「あれでは貧乏をする

のも當り前だ。親達の心得が悪るい。」と世間の口がうるさかつたもの――だから、十二歳は奉公の適期であつて、それから十年間の年季奉公。それが明けると、一年の禮奉公――それを勤め上げないものは碌で無しで、取るにも足らぬヤクザ物として町内でも擯斥されたものでありました。

私は、其頃の幼名を光蔵と呼んで居りました。

「光蔵、お前も十二になつた。奉公に行かんではならん。お前は大工になるが好からう。どうだ。大工になるか。」

父の言葉に對して私は不服はありませんから、

「大工は好い……大工に行きませう……」

「さうか、それでは好い棟梁を探してやらう。」

父は斯う云ひましたが、丁度、私の父兼松の弟の中嶋鐵五郎といふ人の家内の里が八丁堀の水谷町に大工をやつて居つたので、他を探すよりも、身内のことでもあるし、此れが好からうと、愈々、明日は、おばさんが、私をその大工の棟梁の家へ伴れて行つてくれることになりました。

安床の「安さん」の事

町内に安床といふ床屋がありました。

それが私共の行きつけの家であるから、私はお湯に這入つて髪を結つて貰はうと、其所へ行つた。

「おう、光坊か、お前、つい、此間頭を結つたんぢやないか。淺草の觀音様へでも行くのか。」

主人の安さんが云ひますので、

「イエ、明日、私は奉公に行くんです。」

答へますと、

「さうかい。奉公に行くのかい。お前は幾齢になつた。」

などゝ話しかけられ、十二になつたから、八丁堀の大工の家へ奉公に参る旨を話すと、安床は、大工は、職人の王なれば、大工になるは好からうと大變賛成して居りましたが、不圖、何か思ひ出したことでもあるやうに、

「俺は、實は、人から頼まれてゐたことがあつた。……もう、惜しいことをした。」

と、殘り惜しさうに云ひますので、理由を聞くと、それは元、此の町内にゐた人だが、今は大層出世をして彫刻の名人になつてゐる。何んでも日本一のほりもの師だといふことだ。その人は高村東雲といふ方だが、久方振りに此店へお出でなすつて、安さん、誰か一人好い弟子を欲しいんだが、心當りはあるまいか、一つ世話をして呉れないかと頼んで行つたんだ。俺は、今、

お前の話を聞いて、その事を思ひ出したんだが、實に惜しいことをした……併し、光坊、お前は大工さんの所へ明日行くことに決つてるといふが、それは何うにかならないかい。大工になるのも好いが、彫刻師になる方がお前の行末の爲にはドンナに好いか知れないんだ。……といふ話を安さんが私の頭を結ひ乍ら、乘氣になつて話しますので、私も小供心にチョイと腦が動いて、

「小父さん、その彫刻師つてのは、あの稻荷町のお店でコツ〱やつてるあれなんですか。」と私は使ひに行く途中に其頃あつたある彫刻師の店のことを云ひ出しますと、

「あんなもんぢやないよ。あれは、ほりもの大工で、宮彫といふんだが、俺のいふ高村東雲先生の方は、それあ、もつと上品なものなんだ。佛樣だの、置物だの、手間の掛つた、品の好い、本當の彫刻をこしらへるんで、あんな、稻荷町の荒つぽいもんとは譯が違ふんだ。そりや上等のもんなんだ。だからお前、只の大工や宮師なんかとは譯が違つて素羽らしいんだよ。光坊、お前やる氣なら、俺がお前のお父さんに話してやる。何方も知つた顔だから、俺が仲へ這入つてやる。」

斯う安さんは頻りと私に勸めます所から、私も何時か其氣になつて、

「それぢやア小父さん、私は大工よりも彫刻師になるよ。」と承知をしました。

其所で、氣の逸い安床は、夜分、仕事を仕舞つてから、私の父を訪ねて參り、時に兼さん、此れ〱と始終のことを先づ話し、それから、

「その東雲といふ人は、お前の家の隣りにゐた人で、それ、日本橋通り一丁目の須原屋茂兵衛の出版した江戸名所圖會を專門に摺つた人で、奧村藤兵衛さんの悴の藤次郎さん、……是がその東雲といふ方なんで、今では淺草諏訪町に立派な家を構へ……」と、キサクな調子で、小肥りの身體を乘り出して話すものでありますから、父も心動き、

「聞けば、その東雲先生は、此の同じ長屋に生れた人だといふし、お前とは親しいお方といふから、それでは一つ其の彫刻の方へお願ひ申さうか。話の決つた大工の方は親類のことで却つて好いとも思つたが、また考へて見ると、奉公先の身内なのは事によつてはおもしろくないかも知れない。折角お前さんもさう云つて勸めてくれること故、これは一つお願ひ申すとにしやう。だが、まあ當人の志が何よりだから悴に聞いて見ませう」

といふと、「そのことなら本人はもう先刻承知のことだ。善は急

げで、髪も結つてゐることだし、早速それでは明日俺が伴れて行かう。」

と、爰で話が決まりました。

此の安さんといふ人は、其頃四十格好で、氣性の至極面白い世話好きの人でありましたから、早速、先方へその話をして、翌日、私を東雲師匠の宅へ伴れて行つてくれました。

それが、丁度私の十二歳の春、文久三年三月十日のことですが、妙なことが緣となつて、大工になる筈の處が彫刻の方へ道を換へましたやうな譯、私の一生の運命がマア此の安さんの口入で決まつたやうなことになつたのです。で、私に取つては此の安さんは一生忘られない人の一人であります。

後年私は此の安さん夫婦の位牌を佛檀に祭り、今日でもその供養を忘れずして居るやうなわけである。

私の父の訓誡

さて、愈々話が決まりました其夜、父は私に向ひ、今日迄は親の側にゐて我儘は出來ても、明日からは他人の中に出ては、そんな事は出來ぬ。それから、お師匠樣初め目上の人に對し、少しでも無禮の無いやう心掛け、何事があつても皆自分が惡るいと思へ、申譯や口返しをしてはならぬ。一度師の許へ行つたら、二度歸ることは出來ぬ。若し歸れば足の骨をぶち折るから左樣思ふて居れ。

家に來るは師匠より許されて、盆と正月、一年に二度しかない。又此近所へ使に來ても、決して家に寄る事ならぬ。家へ歸るのは十一年勤めて立派に一人前の人に成つて歸れ。……と斯う云ひ聞かされました。

そして、父は再び言葉を改め、

今一つ云つて置くが、中年頃に成つても、決して聲を出す藝事は師匠が許しても覺えてはならぬ。お前の祖父は其爲に身體を害し、それで私は一生無職で何んの役にも立たぬ人になつた。責めてお前丈けは滿足なものになつてくれと涙を流して訓誡されました。

此事丈けは私は今によく覺えて居ります。

其頃の床屋と湯屋のはなし

床屋の話が出た序故、一寸話しませう。當時の髪結床は、今のやうに小ざつぱりしたものではなく、特に斯ういふ源空寺門前と云つたやうな場末では、そりや、ぢゝむさいものでした。

源空寺門前といふ一町内には、床屋が一軒、湯屋が一軒、そ

ば屋が一軒といふやうに、チヤンと數が制限され、その町內の人がそのお華客で、何もかも一町內で事が運んだやうなものであります。で、次の町內のものが、其床屋へ飛び込むと、變な顏をして謝絕つたりしたものです。

床屋は一寸と今のクラブのやうな形で、一町內の寄合所なり遊び場でありました。

床屋の主人は何んでも世話を燒いて、此所で話が決まるといふ風。お祭禮の相談、婚禮の話――夫婦別れの悶着、そんなことに床屋の主人は主となつて口を利いたものです。

床屋は土間で、穴の明いた腰かけの板に客が掛け、床屋は後に廻つて仕事をする。側に鬢盥といふものがあつて、チヨイ〳〵水をつけ、一方の壁には鬢附油が堅いのと軟らかいのとを板に附けてある。客は毛受けといふ地紙なりの小板を胸の所へ捧げ、月代を剃ると、それを下で受けるといふ風で、今と反對に通りの方へ客は向いてゐた。

夜分は土間から、一本の木製の明り臺が立つてゐて燈心の火が細く點れてゐた。でも、結構、それで仕事は出來たもの。凡て何店によらず、小さな行燈一つを店先に置いて、それで店の人の顏も見えれば、書附けの字も見えたものだ。明るさに於ても、些つとも今とは違ひはしなかつた。燈火が明るくなればなる程、人間の眼が暗くなるので、昔はそれでよかつたものです。

湯屋では、八ケンといふものが男湯と女湯との眞中に點いてゐた。柘榴口を潜つて這るのです。……柘榴口といふのは、妙な言葉だが、昔から、鏡研師は柘榴の實を使つたもの、古い繪草紙などにも鏡研の側には柘榴の實がよく描いてある……でその名の意は、屈み入る(鏡入る)の洒落れから來たもの、……むかしは凡て斯う雅なことを云つたものです。

床屋は大人が三十二文、小供は二十四文、湯屋は八文であつた。

高村東雲の生立

其所で、此れから師東雲先生の生立を話します。

東雲師は元奧村藤次郎と云つた人で、前述の通り、下谷北淸島町(源空寺門前)の生れである。その師匠が當時江戶で一二を爭ふところの佛師高橋法眼鳳雲といふ有名な人でありますが、此の人のことは別に改めて話すことにする。

東雲師の姓の奧村氏が後に至つて高村となり、藤次郎が東雲と號したことに就いては所以のあることで、此の東雲といふ人は非常な師匠思ひ……隨て正直律義であり、製作にかけても中

々優れてゐる所からして、師匠鳳雲の氣にも入つて居りました。お決りの十一年の年季も立派に勤め上げ、さて、此れからは東雲は師匠と別れて、別に一人前として世に立つて行くことになりましたから、その別るゝに際し、日頃から特に師匠思ひの東雲師のこと故、謹んで申し出づるは、「さて、師匠、私も御丹精によつて漸く一人前の佛師と相成りましたが、お別れに望み御高恩を幾久しく紀念致したいと存じますによつて、何卒か、師匠のお名の一字をお貰ひ致したい。」と申しました。

「それはいと安いこと、然らば鳳雲の雲をお前に上げやう。藤次郎の藤を東に通はせて、今後東雲と名乘つたがよからう。」とのことに、東雲はよろこび、尚、言葉を繼ぎ、

「お言葉に甘えるやうでございますが、お序に、師匠の姓の一字をもお貰ひ致したい。高橋の高を頂いて舊姓奧村の奧と代へ高村と致し、高村東雲は如何でございませう。」といふ。「それは面白い。差し閊へない。それがよからう。」といふことになつて奧村藤次郎は其所で高村東雲となつて佛師として世に現はれたのでありました。

その頃は戸籍のことなども、至極自由であつたから、姓を變じても、別にやかましく云はれもしませんでした。

さて、東雲師は、愈々此の名前で淺草藏前の森田町へ店を出しました。即ち佛師の職業を開いたのである。

東雲師はまだその頃は獨身であつた。兄が一人あり、名を金次郎といふ。此の人は野村源光の弟子です。(源光のことも、いづれ別に話します。)金次郎は中々腕の出來た人であつたが、佛を彫刻することは不得手であつて、佛に附屬するところの、臺座とか、後光とかいふやうなものゝ製作が美事であつた。で、東雲師が佛の能く出來るのへ、丁度好い調和となつて店の仕事には却つて都合がよかつた。姉さんが一人、お悦と云つて後家を通した人、(後に私の養母である。)此の人が臺所をやるといふ風で、姉弟三人水入らずで平和に睦まじくやつてゐたのであります。

所で、此の藏前といふ土地は、江戸でも名代な場所――此所には徳川家の米藏が並んでゐる。天王橋寄りが一ノ口、森田町の方が中ノ口、八幡町に寄つて三ノ口と、三ツ門があつて、米の出し入れをして、相場も此所で決る。淺草寺に向つて右側で、御藏の裏が直ぐ大川になつて居り、藏屋敷の中を堀割になつて船がお藏の前に着くやうになつてゐた。(此の中之口河岸に水面に枝を張つた立派な松があつた。これが首尾の松と云つて有名なもの、此所は今の高等工業學校々内に成て居る)左側は、伊勢

屋、伊勢茂、和泉喜などいふ札差が十八軒もずつと並んでゐて豪奢な生活をしたものである。で、札差からの注文を受けるのは、必ず上等のもので、何職に限らず名誉の事のやうに思つた。東雲師は律義な人、人品もよろしい、氣持も純である處から、彫つてある置物でも見る人があると「お氣に召しましたらお持ち下さい。差上げませう。」と云つた風な寡慾で、サツパリしてゐますので、此の札差の旦那衆から同情されて、仕事は次から次からと店は繁昌する。先づ幸福に順調にやつて行きました。

斯くて、間もなく、東雲師は妻を娶つた。(生れは本所二ツ目の商人の娘)下谷七軒町に酒井大學といふ大名の屋敷に奉行をしてゐた婦人で、女藝一通り能く出來、(最も長唄がお得意であつた。)東雲師の妻として、好い取合はせでありました。それからまた間も無く、東雲師の店は淺草諏訪町へ轉じました。これは森田町は往來廣く空ッ風の強い日などは塵埃が甚くて、とても仕事が出來ないといふ有樣なので、轉居したのです。

まだ、其頃は硝子戸を入れる時代になつて居りませんから、何處でも塵埃の爲には困らされました。(其頃、タシカ、神田の於玉ケ池の佐羽といふ唐物屋が只つた一軒硝子戸を入れてゐたもので、中々評判でありました。硝子器の壜は「ふらそこ」と云つて、桐の二重箱へなど入れて大切にした時代です。)私が東雲師の家に行つたのは、此の諏訪町移轉後三四年のことだと思ひます。

店には私より以前に二人の弟子がゐた。三枝松政吉と、覺太郎といふものであつた。二人共、もはや相當に腕も出來てきた所から、もう一人小僧が欲しいといふやうな譯で、例の床屋の安さんへ弟子を頼んだのが計らず私が行くことになつたやうな順序になるのです。

私の行つたのは、文久三年亥年の三月十日の朝――安さんに伴れられて師匠に引合はされました。安さんが「……此れが、そのお話しの兼松の次男なんで……」と口上を云つてゐる。「ふむ、此れア好い小僧だ……俺が丹精して仕込んでやらう。」など師匠は申してゐられる。子供心にも初めて師匠との對面故、私は中々緊張して居りました。すると、師匠が、側にあつた人物の置物を私に指し、「お前、此の人を知つてるか。」と訊かれたので、私はオツカナビツクリ見ると、長い髯が胸迄垂れ、長刀を持つてゐるので、「此の人は關羽です。」と答へました。

師匠はニツコリ笑ひ、「よく知つてゐたな、感心々々。」と褒められたのでした。師匠は更に、「手習ひをしたか。」といふ。私は

母から少しばかり手解きをされて、まだ手習ひと云ふ程のこともしてゐないので、「手習ひはしません。」といふと、「さうか、手習ひはしなくとも好い。字はいらない。職人はそれで好いのだ。」と云はれました「算盤は習つたか。」と次の質問に、「ソロバンもまだ知りません。」と答へました「算盤もいらない。職人が銭勘定するやうぢや駄目だ、彫刻師として豪くなれば、字でも算盤でも出來る人を使ふことも出來る。唯、一生懸命に彫刻を勉強しろ。」といふやうなことで、極く簡短な口頭試験に私は及第したのであつた。

今でも耳に殘つてゐますが、その時、師匠が安さんに向つて「何にね、新弟子の人柄を見拔くには、穿き物の脱ぎ方を見るのが一番だよ。遠くの方へ引ッ散らかして置くやうな奴は碌なものはありはしない。滿足に揃へる程の小供なら物になるよ。」私はその時、滿足に穿物を揃へて脱いでゐたものと見えます。

彫刻修業のはなし

早速彫られることになる――

此の話は仕難い。が、先づ大體を話すとすると、最初は「割り物」といふものを稽古する。此れはいろ／＼の紋様を平面の板に彫るので工字紋、麻の葉、七寶、雷紋のやうな模樣を割り出して彫つて行く。是は道具を切らす迄の手續き。それが滿足に出來るやうになると、今度は大黒の顔です。此れが中々難儀であつて、木の先へ大黒天の顔を彫つて行くのであるが、圓滿福徳であるべき筈の面相が馬鹿に貧相になつたり、笑つたやうにと思つてやると、却つて泣いたやうな顔になる。中々旨く行かない。繰り返し／＼、旨く行く迄彫らされる。彫るもの丶身になると、眞に辛い。肥えさせればぼてるし、痩せさせれば貧弱になる。思ふやうには到底ならないのを、根氣よく毎日毎晩コツ／＼とやつてゐる中に、どうやら、おしまひには大黒様らしいものが出來て來ます。

と、今度は蛭子様――此は前に大黒の稽古が積んで經驗があるから、いくらか形もつく。大黒が十のものなら九つで旨く行つて、先づそれでお清書はたるのです。

すると、三番目の稽古に掛るのが不動様の三尊である。不動様は今日でもさうであるが、其頃は、一層成田の不動様が盛んであつたもので、不動の信者が多い所から自然不動様が流行つてゐる。不動様は先づ矜羯羅童子から始めます。此は立像で、手に蓮を持つてゐる。次が制吒迦童子、岩に腰を掛け、片脚を揚げ、片脚を下げ、捻り棒を持つてゐる。此の二體が出來て來ると、次は本體の不動明王を彫るのです。

次は三體に對する岩を彫る。次は火燄といふ順序で段々と攻めて行くのである。此の不動様の三尊を彫り上るといふことは彫刻の稽古としては誠に當を得たものであつて、此の稽古中に腕もめき／＼上つて行くのです。それは共筈であつて、此の三體の中には佛の種々相が含まれてゐるからです。矜羯羅が柔和で立像、制吒迦が岩へ「踏み下げ」て忿怒の相、不動の本體は安坐であつて、片手が劍、片手が縛繩、天地眼で、岩がある。岩の中央に瀧、即ち水の形を示してゐる。後は火燄で火の形である。ですから、此れで立像も分る。「踏み下げ」も分る。安坐も會得する。柔和忿怒の相から水火の形といふ風に諸々の形象が含まれてゐるのであるから、調法といふはをかしいが、材料としては洵に適當であります。併し、此の不動三尊を纏め上げるには容易なことではなく、三四年の歳月は經つてゐて、私の年齢も、もう十六七になつてゐる。話しでは如何にも速いが腦や腕はさう速く進むものではない。修業盛りのこと故、一心不亂となつて勉強をしたものです。

さて、それから佛師となるには、佛師一通りのことは出來ねばなりません。先づその一通りといふところを話して行くと、第一に如來です。

如來は、如實の道に乘じて、來つて正覺を成す、とある通り佛の最上美稱であつて、阿彌陀、釋迦、藥師、大日などをいふのであります。如來が一番むづかしいものとなつてゐる。佛工は古來より阿彌陀如來の立像と、地藏菩薩の立像を六ツケ敷い物の東西の大關に例へてある。

次に菩薩、此は大心ありて佛道に入る義にて、即ち佛の次に位する稱號。地藏、觀音、勢至、文珠、普賢、虚空藏などである。それから天部といふ。此は梵天、帝釋、辨天、吉祥天等。次は怒物といつて忿怒の形相をした五大尊、四天、十二神將の如き佛體を云ふ。諸佛の守護神です。それから俗分の肖像、例へば弘法大師、日蓮上人のやうな俗體である。一々話して行けば實に數限りもないことです。餘は略します。

それから、また、本體に附屬した後光がある。船後光の正式は飛天光といふ。天人と迦陵頻迦、雲を以て後光の形をなす。其他雲輪光、輪後光、籤の光明、(此は來迎佛などに附けるもの)等で各々眞行草があります。餘は略す。

臺坐には、十一坐、九重坐、七重坐、蓮坐、荷葉坐、多羅葉坐、岩坐、雲坐、須彌坐、獅子吼坐、圓坐、雷盤坐等で、壇には護摩壇、須彌壇、圓壇等がある。

天蓋には、瓔珞、羅網、花鬘、幢旛、佛殿旛等。

厨子は、木瓜厨子、正念厨子、丸厨子(此は聖天様を入れる)角厨子、春日厨子、鳳輦形、宮殿形等。

その他、なほ、舎利塔、位牌、如意、持蓮、柄香爐、常花、鈴、五鈷、三鈷、獨鈷、金剛盤、輪棒、羯摩、磬掛、雲板、魚板、木魚など、餘は略します。

前陳の各種を製作するに就き、是に附隨する飾り金物、塗り、金箔、消粉、彩色等の善惡を見分る鑑識も必要であります。

先づ「飾り」であるが、飾りには、金鍍金と「消し差し」の二つ。箔を燒きつけたものが鍍金で、消粉を燒きつけるのが「消し差し」です。

金物の彫の方では、唐草の地彫、唐草彫、蓮彫、コックイ(極印)蓮などで地はいづれも七々子です。

塗り色にも種々ある。第一が黑の臘色である。それから、朱、青漆、朱うるみ、ベニガラうるみ、金白檀塗り、梨子地塗など。梨子地には燒金、小判、銀、錫、鉛、(此類は梨子地の材料で金と銀とは一寸見ては分り兼る。)

塗りにも、塗り方は、堅地と泥地とあつて、堅地は砥粉地と桐粉地とあり、何れも研いで下地を仕上るもの。上塗りは何度も塗つて研磨して仕上るものです。泥地は胡粉と膠とで下地を仕上げ、漆で塗つたまゝ仕上げ、研がないのです。泥地でも上物は中塗をします。

箔にも種類があつて、一つの製品を金にするにも金箔を使ふのと、同じ金であつても、金粉を蒔いて金にするのと二色ある。

箔に就いても、濃色があり、色吉がある。中色、青箔、常色等がある。その濃色は金の位でいふとヤキ金に當る。色吉が小判で、十八金位に當る。それから段々十二金、九金といふやうに銀の割が餘計になつて來る。

箔の大きさは、普通三寸三分、三寸七分、四寸である。厚さにも二枚掛、三枚掛と色々ある。此は私が佛師となつた時代のことだが、今日ではいろ／＼の大きさの箔が出來てゐて調法になつてゐます。

彩色にも、いろ／＼あります。極彩色、生け彩色、俗にいふ桐油彩色など。その彩色に屬するもので、細金といふのがある。此は細金で模様を置くのである。描くとは云へない。それから金泥で細金の如く模様を描くのがあります。

極彩色は矢張り繪畫と同じ行き方で、胡粉で白地に模様を描き上げ、金にする所は金にして彩色にかゝる。生け彩色は一旦塗つて金箔を置いて、見られるやうになつた時、牡丹なら牡丹

の色をさす。葉は葉で彩どり、金を生かして、彩色をよい程に配して行く。此は中々好い工夫のものです。

桐油彩色は、雨にぬれても脱落ないやうに、密陀油に色を割つて、赤、青と胡粉を割つてやるのです。餘り冴えないものだが、外廻りの雨の掛る所、殿堂なら外廓に用ゐられる。

「木寄せ」其他のはなし

木寄せのことを、ざつと話して置きませう。

佛師に附屬した種々の職業が分業的になつてある中に、木寄師もその一つであります。是は材料を彫刻家へ渡す前に、その寸法を彫刻家の注文通り斷ち切る役なのです。

正式の寸法の割合として、例へば坐像二尺の日蓮上人、一丈の仁王と木寄せをして佛師へ渡します。結局、佛師が彫るまでの献立をする役です。これは附屬職業の中でも重要なもので、それに狂ひがあつては大變です。建築で云へば立前だから立前が狂つてゐては家は建たぬわけ、木寄師がまづかつた日には佛師は手が附かぬといふものです。

木寄師の仕事は此の外に天蓋の鉢、椅子、曲彔、須彌壇、臺坐等をやる。中々大變なものである。

それから、佛師塗師、佛師錺師等いづれも分業者である。江戸では其分業が一々際立つて、店の仕事が多忙しいとまでは行かないが、中古から(徳川氏初期からを指す)京都の方では非常に盛大なものであつた。寺町通りには軒並みに佛師屋があつてそれ〳〵分業の店々がまた繁昌をして居る。中古の(前同意義)佛師の本家は此所でありました。

京都には、由來寺々の各本山がありますので、淨土とか眞宗とか、地方の末寺の坊さんが京の本山へ法會の節上つて行く。その時、地方で、上等ものを望む人は、その坊さんに頼み、此れ〳〵のものを注文して來て下さいと依頼する。坊さんは、法會の間、十日、半月位を滯在してゐるが、その短期間に此れ此れのものをと注文する。一週間とか、十日間とかの間に、佛師はその注文品を仕上げるのであるが、例へば、厨子に入れて、丈け五寸の觀音を注文するとすれば、佛師屋では見本を出して示す。七圓、十圓と價格が分れてゐるのを、十圓のに決めて日限を切つて約束をする。其所で佛師屋では、小佛を作る方の人が觀音を作り始める。と、その五寸の觀音の臺坐を持つて來い、と、それ〳〵分業の店から、五寸といふ寸法で附屬品を取つて來る。それから、また、厨子を持つて來い、何を持つて來いとやる。まだ本尊が悉皆出來上らない中に、附屬品も、納まるものもチヤンと揃つてゐる。日限の日になつて觀音が出來上ると

萬事用意が整つてゐるのだから、五寸の立像の觀音は、迄るやうに厨子に納まり、其儘注文主の手に渡る。ほんの半月以内の短日月で斯う手早く揃ふのは、分業の便利であつて、繁昌すればする程、それが激しくなり、さうして其餘弊は佛師の墮落となり、彫刻界の衰退となりました。

で、京都では段々と佛師に名人も無くなり、隨つて佛師屋も少なくなり、今日では、寺町通りへ行つても、昔日の佛はありますまい。是は彫刻といふやうな特殊の藝術を需要の多いのに任せて濫作する弊……拙速を尙んで、間に合せをして、代金を唯一目的にする……即ち餘りに商品的に彫刻物を取扱ひ過ぎるところの惡習とも云へませう。

それに引代へ、江戸は八百萬石のお膝下、金銀座の諸役人、前に云つた札差しとか、或は諸藩の留守居役と云つたやうな、金錢に糸目をつけず、入念で、而かも傑作を欲しいといふ本當に目の開いた華客の多い此方では、觀音一つ彫らすのでも、念に念を入れさせ、分業物の間に合せでは無くして、臺坐も天蓋も、是と目指した彫刻師の充分な腕によつて出來たものを望むといふ氣風がありましたから、京の寺町とは趣を異にし、藝術的良心が根まで腐るやうなことはありませんでした。此は分業といふ話から餘談に亘つたが、先づ以上のやうなわけのものであつた。

甲子年の大黒のはなし

話が少し元へ返つて、私の十二の時が文久三年、十三が確か元治元年の甲子年であつた。此の甲子年は滅多には來ません。六十一年目に一度といふ……それで、その時の甲子年には、大黒の信者は素よりのこと、さうでないものでも、商賣繁昌の神のこと故、尊信するもの甚だ多くして、大黒樣をその年には澤山にこしらへました。

そして、その大黒さまを作る材であるが、それは、檜材である。日本橋の登る三枚目の板が大事にされたもの……王城の地を中心にして京を上としてある。で、登る三枚目とは、室町の方から渡つて三枚目の橋板を差すのである。時たま、橋の修繕の際、その橋板は皆が爭つて得たがつたものです。私の師匠の東雲師はその甲子歲には澤山の大黒をこしらへましたが、まだ私は十三の子供、中々その手傳ひは出來ませんでした。

さて、翌年が慶應元年の丑、私の十四の時ですが、押し迫つた師走の……あれは幾日のことであつたか……淺草に大火があつて、それは實に大變でありました。

佛師の店のはなし(職人氣質)

師匠東雲師の家が諏訪町へ引越して、三四年も經つ中に、珍らしかつた硝子戸のやうなものも、一般ではないが流行つて來る。師匠の家でもそれが出來たりしました。障子の時は障子へ「大佛師高村東雲」など書いてあつたもの。

仕事は店でやつたものです。店には兄弟子、弟弟子と幾人かの弟子がゐますが、その人々は唯腕次第、勉强次第でコツ〳〵とやつてゐる。別に現今のやう、その製作が展覽會などで公開され、特選とか推薦とか云つて品評されるわけでもなく、特にまた師匠が明らさまに優劣を保障するわけでもないが、何時となく、誰云ふとなく、腕の好いものと、拙いものとはチヤンと分つてゐる。それは自然自他共にそれを感ずるのであつて、自分が如何にお天狗でも人はそれを許さず、人の評判ばかり高くて虛名がよしあるにしても、楽屋内では、それを許さない。だから、自然と公平な優劣判斷のやうなものが、仲間のなかに分つてゐたものです。

例へば、或る佛師の弟子の製作があるとして、それが塗師屋の手に渡る。塗師屋の主人は、それを手に取つて、「オヤ、是は旨いもんだ。素張らしい出來だ。何處から來たんだ、誰の作だ。」と訊くと、

「それは、何さんの所の弟子の何さんといふ人の作だ。」といふ。それで、その作をした人の名が一人に分り、二人に記憶され、今度、例へば、其作人が其塗師屋へ使に行くとして、親方の挨拶が、ガラリ違つて、丁寧になるといふ鹽梅、それはをかしなものであります。

右の如く、弟子達は、仕事のことに掛けては、一心不亂、互に劣るまい、負けまいと、少しの遠慮會釋もなく、仕事本位の競爭をしますが、內面の交りとなると、それはまた親密なものでありました。

例へば、今夜はお鳥樣だから、一緒に出掛けやうといふ時に一人の弟子は、懐工合が惡るいので、行きしぶつてゐるとして、工面の好い連中が、「何を考へてるんだ。出掛けろ〳〵」と、一切飮食のことをも負擔したもので、中々うつくしいところがあつたものです。

と、云つて、また中々仕事の事になると許さない處がある。田舍から要事のある人が訪問て來て、或る佛師の店を覗き、「もし、お尋ねしますが、此店に佛師の松さんはゐますか。」と聞いたものです。すると、誰かゞ、

「佛師の松さんね。そんな人はゐないよ。」と返事をしたもの。

實は其所に松さんは隅の方で小さくなつて仕事をしてゐるが、それはまだ「仕上げ師」の方で、佛師と呼ばれる資格はないから、斯んな皮肉な返事をしたもので、田舍の人は、佛師屋の職人だから、佛師かと思つて何んの氣無しに云つたのですが、松さん當人は顔が紅くなるやうなわけ。中々許さなかつたものです。「仕上げ」をするのを、ケヅリ師と云つて、此はまだ未熟の職人の仕事で「刻り」をするやうにならなければ、佛師の資格は無いのです。けれども、當時は、各人其職に甘んじ、決して不平なんぞを云ひはしませんでした。それは自分の腕を各自が知つてゐたからでありませう。凡て、一尺以内の小者を彫るのを小佛師、一尺以上を大佛師と云つたもの、大佛師になれば大小を通じてやる腕のあることは勿論のことでした。

それで、腕は優れてゐながら、操行のおさまらぬ職人の中などに、何かすると、鑿と小刀を風呂敷に包み、「彫物の武者修業に出るんだ。」と云つて他流試合に出掛けたもんです。佛師の店へ飛び込んで、

「師匠と腕の比べつこをしやう。何んでも題を出せ。大黑でも辨天でも、同じものを同じ時間で始めやう。何方が旨く、何方が早く出來上るか、勝負を決しやう……」などゝ、力んだもの。

それで、面倒であつたり、又は、腕のにぶい師匠は、そつと、草鞋錢を出して出て行つて貰つたなど、是等も其當時の職人氣質の一例でありました。

大火以前の雷門附近

私の十四歳の暮、即ち慶應元年丑年の十二月十四日の夜の四ツ時(午后十時)淺草三軒町から出火して淺草一圓を烏有に歸してしまひました。淺草始まつての大火で雷門も此の時に燒けてしまつたのです。此所で話が前置をして置いた淺草大火の件となるのですが、その前になほ少し火事以前の雷門を中心としたその周圍の町並、或は古舖、又は其頃の名物と云つたやうなものを概畧と話して置きます。つまり、火事で燒けてしまつては何も殘らないことになりますから——

先づ雷門を起點にして、現今の淺草橋(淺草御門と云つた)に向つて南に取つて行くと、最初が並木(並木裏町が材木町)それから駒形、諏訪町、黑船町、それに接近して三好町とふ順序、これを更に南へ越すと、藏前の八幡町、森田町、片町、須賀町(其頃は天王町とも云つた)茅町、代地、左衞門河岸(左衞門河岸の右を石切河岸と云ふ。名人是眞翁の住居があつた)淺草御

門といふ順序となる。觀音堂から此所迄は十八町の道程です。

觀音堂から堂へ向つて右手の方は、馬道、それから田町、田町を突當ると日本堤の吉原土手となる。雷門に向つて右が吾妻橋、橋と門との間が花川戸、花川戸を通り拔けると山の宿で、それから山谷、例の山谷堀のある所です。それを越えると淺草町で、それからは家が無くなつてお仕置場の小塚原……千住となります。

花川戸の山の宿から逆に後に戻つて馬道へ出やうといふ間に猿若町がある。此所に三芝居が揃つてゐた。

觀音堂に向つて左は境内で、淡島のお宮、花やさしき、それを拔けると淺草田圃で一面の青田であつた。

觀音堂の後がまたずつと境内で、揚弓場が並んでゐる。その後が田圃です。丁度觀音堂の眞後に向つて田圃を距てゝ六郷といふ大名の邸宅があつた。そのも一つ先になると、淺草溜と云つた不淨の別莊地——此れは傳馬町の牢屋で病氣に罹つたものを下げる不淨な世界——其お隣りが不夜城の吉原です。溜に寄つた方が水道尻、日本堤から折れて這入ると大門、大江戸の是は北方に當る故北國と云つた。

それから雷門に向つて左の方は廣小路です。その廣小路の區域が狹隘になつた邊から田原町になる。それを出ると本願寺の東門がある。先づ雷門を中心にした淺草の區域はざつと斯らいふ風であつた。

私はまだ子供の事とて、師匠の家の走り使ひなどに、此の界隈を朝夕に往復し、町から町、店から店と頑是も無く觀て歩いたもの、今日のやうに電車などあるわけのものでなく、歩いて行つて歩いて歸ることでありますから、其頃の景物がまことに明瞭と、よく、今も記憶に殘つて居ります。斯うして話をしてゐる中にも、まざ／＼と町並、店々の光景が眼に見えるやうにさへ思はれて來ます。其所で、皆々しくあるかは知らぬが、名代、名物と云つたやうなものを眼の先にチラツク儘話して行きませう。

名高かつた店などの印象

雷門に接近した並木には、門に向つて左側に「山屋」といふ有名な酒屋があつた。(麥酒、保命酒のやうな諸國の銘酒なども賣つてゐた）その隣りが遠山といふ藥種屋、その手前(南方へ)に二八そば(二八十六文で普通のそば屋)ですが、名代の十一屋といふのがある。それから駒形に接近した境界に此も有名だつた伊阪といふ金物屋がある(是は刄物が專門で、何時でも職人が多く買物に來てゐた）右側は奴の天麩羅と云つて天麩羅茶漬を

たべさせて大に繁昌をした店があり、直ぐ隣りに「二太郎ぶし」と云つた店があつた。これはお歯黒をつけるには必ず必要の五倍子の粉を賣つてゐた店で、店の中央に石臼を据えて五倍子粉を磨つてゐる陰陽の生人形が置いてあつて人目を惹いたもの、是は近年まで確かあつたと覺えてゐる。その手前に「清瀬」といふ料理屋があつて中々繁昌しました。その横町が、些と不穩當なれど犬の糞横町……此も江戸名物の一つとも申すか……

清瀬から手前に繪馬屋があつた。淺草の生え抜きで有名な店でありました。何か地面訴訟があつて、双方お上へバンショウ（訴訟の意）した際、繪馬屋は舊家のこと故、古證文を取り出し、此は梶原の繪馬の註文書でござりますと差出した處、お上の思召しで地所を下されたとかで、此店が拜領地であつたとかいふことでありました。（並木と吾妻橋との間に狹い通りがあつて、並木の裏通りになつてゐる。此は材木町と云つて材木屋がある）それから、並木から駒形へ來ると、名代の酒屋で内田といふのがあつた。土藏が六戸前もあつた。横町が内田横丁で、上野方面へ行くと本願寺の正門前へ出て菊屋橋通りとなる見當——

内田から手前に百助（小間物店があつた。職工用の繪具一切を賣つてゐるので、諸職人は此店へ買ひに行つたもの）此の横丁が百助横丁、別に唐辛子横丁とも云ふ。その手前の横丁の角が鮨屋。（此は今もある）鮨屋横丁を眞直に行けば森下へ出る。右へ移ると、新炭問屋の丁子屋、其背面が材木町の町はづれになつてゐて、此の通りに前川といふ鰻屋がある。此も今日繁昌してゐる。それから駒形堂です。

堂は六角堂で、本尊は觀世音、淺草寺の元地であつて、元の觀音の本尊が祭られてあつた所です。縁起をいふと、その昔、隅田川をまだ宮戸川と云つた頃、土師臣中知と云へる人、家來の檜熊の濱成武成といふ兩人の者を從へ、この大河に網打ちに出掛けたところ、その網に一寸八分黄金無垢の觀世音の御像が掛つて上つて來た。主從は有難きことに思ひ、御像をその駒形堂の所へ安置し奉ると、十人の草刈りの小童が、藜の葉をもつて花見堂のやうな假りのお堂をしつらへ、その御像を飾りました。遠近の人々は語り傳へて參詣をした。それで駒形堂をまた藜堂とも稱へます。さうして主從三人は三社權現と祭られ淺草一圓の氏神となり、十人の草刈は堂の左手の後に十子堂をしつらへて祭られました。

駒形は江戸の名所の中でも有名であることは誰も知るところ……何代目かの遊女高尾の句で例の「君は今駒形あたりほとゝぎす」といふのがありますが、なるほど、駒形は時鳥に縁のあるところであるなと思つたことがあります。といふのは、その

頃ほひ、駒形はまことによく時鳥の鳴いた所です。時鳥の通り道であつたかのやうに思はれました。それは、丁度此の駒形堂から大河を距てゝ本所側に多田の藥師といふのがありましたが、此の叢林がこんもり深く、晝も暗い程、時鳥など澤山巣をかけてゐたもので、五月の空の雨止りの夜などには、その藪から時鳥が駒形の方へ飛んで來て上野の森の方へ雲をば横過つて啼いて行つたもの……句の解釋は別段だけれども、實地には、時鳥のよく鳴いた所です。そして向ふ河岸一帶は百本杭の方から掛けて、ずつと斯う薄氣味の悪いやうな所で、物の本や、講釋などの舞臺に能くありさうな淋しい所であつた。

さて、駒形堂から後へ退つて、「川升」といふ料理屋が大層流行り、觀音の市の折など、それは大した繁昌。客が立て込んで醉興な客が、座敷に出てる獅噛火鉢を擔ぎ出して持つて行つたのさへも氣が附かなかつたといふ一ツ話が殘つてゐる位、其頃はよく有名なお茶屋などの緒口とか銚子袴などを袂になど忍ばせて行つたもの、此は一つの酒興で罪のないわるさであつた。

諏訪町では向つて左が諏訪神社、師匠東雲の店は社の筋向ふの右側にあつたのです。町の中程には紅勘(小間物屋)があつて此も有名でした。紅勘で思ひ出すが、其頃、鉦と三味線で長唄を歌つて流して歩いた紅勘といふものがあつて評判でありました。此が小間物屋の紅勘と何か關係あるやうに噂されたが、實際は全く何んの因縁もなかつたものと云ひます。菊五郎であつたか、芝翫であつたか、此の紅勘のことを芝居にしたことがありました。(長唄の紅勘とは別の男ですが、五代目菊五郎がまだ羽左衛門で賣出しの時、鎌倉節仙太郎といふ者が、江戸市中を鉦三味線で、好い聲で飴を賣り乍ら流して歩いて評判でした。羽左衛門がそれをやつて大當りのことがありました。)

小間物屋の紅勘と近接した横丁には「みめより」といふ汁粉屋がある。それから「金麩羅」といふ天麩羅屋がある。いづれも繁昌。右側は乾(煙草屋)隣りが和泉屋(扇屋)此の裏へ這入ると八百榮(料理屋)それから諏訪町河岸へ拔けると此所は意氣な土地で、一中、長唄などの師匠や、落語家では談枝などもゐて、畏な人達が住つてゐた。河岸つゞきで、河岸には「坊主蕎麥」といふのがあつて、此は一流でした。主人は坊主で、聾のため「聾そば」で通つてゐた。その隣りが淺利屋といふ船宿。此所を淺利屋河岸と云つた。表通りの金麩羅屋の向ふに毛拔屋があつた。此店の毛拔は上手と云はれたもの、いろ〱七ツ道具が揃つてゐて、しやれた人達が買ひに來た。それから、錫屋といふのがあつた。此の店は江戸市中にも極く少ない店で、錫の御酒徳利、

お茶のつぼ、銚子などを賣つてゐた。
黒舟町へ來ると、町が少し下つて二の町となる。村田の本家（烟管屋）がある。また、榧寺といふ寺がある。境內に茅が植つてゐた。それから三好町、此所には戲作などをした玄魚といふ人のビラ屋があつた。

斯う話して行くと、記憶は記憶を生んで、何處まで行くか分りませんから、雷門へ一先づ歸つて、門へ向つて左側、廣小路へ出ませう。

此所にはまた菜飯茶屋といふ田樂茶屋がありました。小綺麗な姉さんなどが店先ででんがくを燒いてお愛想を云つたりしたもの、萬年屋、山代屋など五六軒もあつた。右側に古本屋の淺倉、此は今もある。それから奴（鰻屋）。地形が狹まつて田原町になる右の角に蕎麥屋があつて、息子が大纒と云つた相撲取りで、小結か關脇位まで取り、土地ッ兒で人氣がありました。此の向ふに名代の紅梅燒がありました。

觀音堂に向つては右が三社權現、それから矢大臣門（隨身門のこと）その右手の隅に講釋師が一軒あつた。
門を出ると直ぐ左に「大みつ」と云つた名代な酒屋があつた。チロリで燗をして湯豆腐などで飲ませた。劍菱、七ツ梅などといふ酒があつた。馬道へ出ると一流の料理屋富士屋があり、もつと先へ出ると田町となつて、此所は朝歸りの客を招ぶ蛤鍋の店が並んでゐる。馬道から芝居町へ拔けるところへ、藪の麥とろがあり、その先の細い橫丁が樂屋新道で、次の橫丁が芝居町となる。猿若町は三丁目まであつて賑はひました。

山の宿を出ると山谷堀……越えると淺草町で江戸一番の八百善がある。その先は重箱、鯰のスッポン煮が名代で、其頃、赤い土鍋をコグ繩で結へてぶら下げて行くと、「重箱の歸りか、しやれてゐるぜ」など云つたもの。

花川戸から、ずつと、もう一つ河岸の橫町が聖天町、それを拔けると待乳山です。「待乳沈んで、梢乘り込む今戸橋」など云つたもの、河岸へ出ると向ふに竹屋の渡船があつて、隅田川の流れを隔て墨堤の櫻が見える。山谷堀を渡ると、今戸で燒物の小屋が煙を揚げてゐる。戸澤辨次といふ陶工が有名であつた。

山谷堀には有明樓、大吉、川口、花屋などといふ意氣筋な茶屋が多く、此邊一帶江戸末期の特殊な空氣が漂つてゐました。

また元の道へ引返して、雷門の前通りを花川戸へ曲る角に「地藏の燈籠」と云つて有名な燈籠があつた。古代なものであつたが、年號が刻つてないので何時頃のものとも明瞭とは分ら

ぬ。小野の小町の石塔だといふかと思へば、弘法大師の作であるとか、いづれも當にはならぬ。中央に地藏尊を彫り、傍に一人の伜が敬禮をして居り、下の方に、花瓶に蓮を挿してある模樣が彫りつけてある。是は西佛と云へる人、妻と、男女二子の供養の爲に建立したものといふこと丈けは書きつけてあつた。大火の際焼けましたが、破片は今も殘つてゐて、花川戸の何處かの小祠にでも納めてあるでありませう。

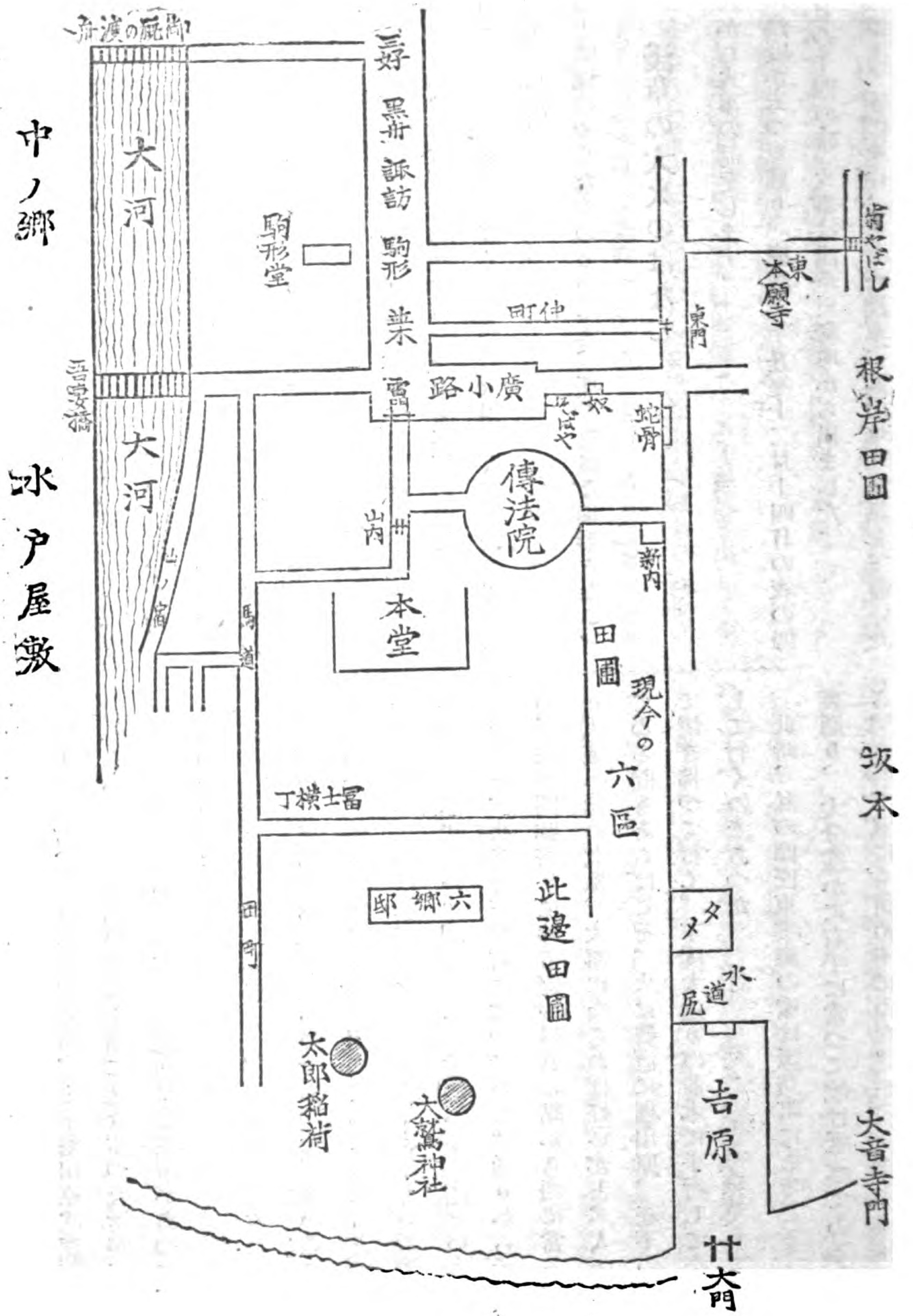
觀音の地内は、仁王門から右へ辨天山へ曲る角に久米の平内の厳めしい石像がある。(今日でも此は人の知るところ)久米は平内妻の姓であるとか。元は兵藤平内兵衛と云つた人、青山主膳の家臣、豪勇無双と稱せられた勇士です。石平道人正三(鈴木九太夫)の門人であつた。俗説に此の人、武藝の達人で、首斬りの役をして、多くの人命を絶つたにより、その罪業消滅の爲、自分の像を石に刻ませ、往來へ抛り出し、恨ある人は我を蹴つて恨を晴らせとの希望で、斯うして石像を曝らしたものであるといふ……されば、その足で「踏み附ける」といふ言葉をもぢり(文附る)と云ふ意にして、緣結びの心願の偶像となつたものとか、今でも祠の格子に多くの文が附けられてある。

雷門から仁王門迄の、今日の仲店の通りは、其頃は極く粗末な床店でした。屋根が揚げ卸しの出來るやうになつて居り、夜と、脚がくるりになつて揚げ緣になつてゐたもので、平日は、六ツ(午後六時)を打つと、觀音堂を閉扉するから商人は店を疊んで歸つてしまふ。後はひつそりと淋しい位のものでした。兩側は玩具屋が七分通り(淺草人形と云つて、土でひねつて彩色したもの、是は名物であつた)繪草紙、小間物、はじけ豆、紅梅燒、雷おこし(此は雷門下にあつた)など、仁王門下には御家賓といふ菓子、雷門前の大道には「飛んだりはねたり」のおもちやを賣つてゐた。蛇の目の傘がはねて、助六が出るなど、江戸氣分なもの、其頃のおもちやには中々暢氣なところがありました。

雷門は有名程立派なものではなく、平屋の切妻作りで、片方が六本、片方が六本の柱があり、中心の柱が屋根を支へ、前には金剛矢來があり、寒坐の岩に雲があつて、向つて右に雷神、左に風の神が立つてゐました。魚がしとかしんばとか書いた紅い大きな提灯が下つて何んとなく一種の情趣があつた。

仁王門は樓内です。樓上には釋迦に十六羅漢があるはず。樓下の左右には金剛力士の像が立つてゐる。

仲店の中間、左側が傳法院で、此は淺草寺の本坊である。庭が中々立派で、此の構へを出ると、直ぐ裏は、もう田圃で、左側は田原町の後になつて居り、蛇骨湯といふ湯屋があつた。非


御厩の渡舟
中ノ郷
大河
吾妻橋
大河
水戸屋敷
駒形堂
三好
黒船
諏訪
駒形
並木
雷門
廣小路
仲町
東門
東本願寺
根岸田圃
蛇骨
傳法院
山内
山ノ宿
馬道
新門
本堂
田圃
現今の六區
富士横丁
坂本
六郷邸
此邊田圃
田町
水道尻
太郎稲荷
大鷲神社
吉原
大音寺門

戸を掘つた時大蛇の頭が出たとやらで此の名を附けたとか。有名た湯屋です。後の方は其頃新畑町と云つた所、それからまた田圃であつた。

傳法院の庭を抜け、田圃の間の畔道を眞直に行くと、(右側の田圃が今の六區一帶に當る)傳法院の西門に出る。その出口に江戸俠客の隨一と云はれた新門辰五郎がゐました。右に折れた道が弘隆寺、清正公のある寺の通りです。それから一帶吉原田圃で、北の方に太郎稲荷(此社は筑後柳川立花家の下屋敷内にある)の森が見え、西は入谷田圃に續いて大鷲神社が見え、大音寺前の方へ、吉原堤に聯絡する。此の邊が例のおはぐろどぶのあるところ……總て、ばく／＼たる水田で人家と云つてはありませんでした。

さつと略圖のやうなものでいふと、斯んな風な地形となる。

淺草の大火のはなし

是れから火事の話をします。

前に幾度か云つた通り、慶應元年丑年十二月十四日の夜の四ツ時(私の十四の時)火事は淺草三軒町から出ました。

前述詳しく雷門を中心とした淺草一圓の地理を話して置いたから大體見當は着くことではあるが、此の三軒町は東本願寺寄りで、淺草の大通りから云へば、裏通になつて居り、町並みは田原町、仲町、それから三軒町、……堀田原、森下となる。見當からいふと、百助の横丁を西に突き當つた所が三軒町で、其所に三島神社があるが、その近所に襤褸屋があつて、火は是から揚つたのだ。

其夜は北風の恐ろしく甚い晩であつた。歳の暮に差し掛つてゐるので、町内々々でも火の用心をしてゐたことであらうが、四ツ時といふ頃ほひ、チヤン／＼／＼といふ消魂しい擦り半鐘の音が起つた。「そりや、火事だ、／＼」といふので、出て見ますと、火光は三軒町に當つてゐる。通りから云へば廣小路の區域が門跡寄りに移る際の目貫な點から西に當る。乾き切つた天氣へ此の北風、大事にならねば好いがと、人々は心配をしてゐる間もあらばこそ、火は眞直に堀田原、森下の方向へ延びて焼き拂つて行く。丁度大通りの並木に平行して全速力で南進して行くのであつた。

此時、私の師匠東雲師の家は諏訪町にあることゝて、火事は裏通り、大分遙かに右手に當つて焼け延びてゐるのであるから、さして氣にも留めずにゐた。

「先づ大きくなつた所で、此の風向きでは黒船町へ抜けるであ

らう。藏前の八幡の方へ……小揚の方へ抜けて行くだらう。此方の方は大したことはあるまい」と安心してゐる中に、燒け延びる丈け延びた火の手は俄然として眞西に變つて來た。

「おや〳〵風向きが變つた。西になつた。」

と、云つてる聲の下から、忽ち紅勘横丁へ火先が吹き出して來た。此は淺草の大通りだ。師匠の宅から正に半町程先である。と、見ると、火の手は、南進してゐたものが一轉して東方に向つて平押しに押し込んで、大通りに向ふ横町といふ横町へ、長蛇の走るよりも迅い勢で吹き出して來た。今の今迄安心してゐた主人を初め、弟子、下職、手傳ひに驅けつけた人々が、「もう、いけない。出せるものの丈け出せ。」といふので、荷物を運び出しました。

荷物を運ぶと云つても、人家稠密の場所とて、先づ駒形堂邊へ持つて行く外に道はない。手當り次第に物を持つて、堂の後の河岸の空地へと目差して行く。

荷物を運ぶのは何處も同じことですから、見る〳〵中に、此の邊は荷物の山を爲す。所が、横丁々々から一齊に吹き出した火は、長いなりに大巾になつて一面火の海となり、諏訪町、駒形一圓を黒烟に包んで暴れ狂つて來た。で、今度は廣小路の方へ追はれて出て、私達は廣小路の萬年屋(茶飯屋)の前へ荷物を運び出しました。(萬年屋は師匠の家のしるべでした。)

すると、風が西に變つて強くなつたものだから、一度南進した火先は、先方へ延びずに後へ退り、西風の餌として、火先へ延びず、逆に尻火に延び、反對に退却した形になつて仲町から田原町へと燒けて來た。それのみならず、今度は、その後退した火先は、西風に煽られて物凄い勢をもつて廣小路へ押し出して來たのです。

一體、淺草は餘り火事沙汰の無い所故、土藏など數へる程しか無つた。それに安政の大地震の際、土藏といふものが餘り役に立たなかつたことを經驗してゐるので、一層數が少なかつた。唯、酒屋の内田に五ツ戸前ばかり、他に少々あつた程だから、枯草でも舐めるやうにめら〳〵と恐ろしい勢で燒いて行く。一方は諏訪町、駒形方面から、一方は門跡方面から犇々と火の手が攻めかけて來るのだが、其間は横丁の角々は元より到る處荷物の山で、我も〳〵と持ち運んだ物が堆高くなつてゐる。それを火勢に追はれて逃げて來る人々は、唯、一方の逃げ口の吾妻橋方面へと逃げ出さうと急つてゐる。片方は大河で遮られて

ゐるから、此の一方口へ逃れる外には逃げ道はなく、まるで袋の鼠と云つた形……振り返れば、諏訪町、黒船町は火の海となつて居り、並木の通りを荷物の山を越へて逃げ雷門へ來て見れば、廣小路も早や眞赤になつて火燄が渦を巻いてゐる。雷門から觀音堂の方へ逃げやうとしても、危險が切迫したので雷門も戸を閉めてしまつたから、いよ／＼一方口になつて、吾妻橋の方へ人は波を打つて逃げ出し、一方は花川戸、馬道方面、一方は橋を渡つて本所へと遁げて行く。その遁げる人達は荷物の山に遮られ、右往左往してゐる中に、片ツ端から荷の山も燒け亡せて跡は一面に火の海となるといふ有様……只、もう物凄い光景でありました。

斯んな工合で、風が眞西に變つて不意打ちを食つたのと、大河に遮斷されて逃道の無いのとで、荷物を出した人などはない。出しには出しても、出した荷は山と積まれた儘燒けてしまふのですから、誰も彼も生命から／＼、只身一つになつて、風呂敷包一つも持たず逃げ出したもの……實に悲慘なことでありました。

さて、火勢は更に猛烈になつて、とう／＼雷門へ押し掛けて行きました。

廣小路から雷門際までは荷物の山で重なつてゐるのですが、それが燒け燒けして雷門へ切迫する。荷物は雷門の床店の屋根と同じ高さになつて累々としてゐる所へ、煽りに煽る火の手は雷門を渦の中へ巻き込んでとう／＼落城させてしまひました。

それで、雷門から藏前の取つ附き迄綺麗に燒き拂つてしまつた上、更に花川戸から馬道に延燒し、芝居町まで燒込んで行きました。三座は確か類燒の難はのがれたやうに思ひますが、何しろ、吾妻橋際から大河の河岸まで燒け拔けてしまつたのですから如何に火勢が猛威を振つたかは推測られます。それに、大河を越えて、本所の吉岡町へ飛火をして向ふ河岸で高見の見物をしてゐた人の命までも奪つたとは、隨分念の入つた火事でありました。

名代の雷門は此れで燒落ちましたが、誰か殊勝な人があつたと見え、風雷神の身體は持ち出すことは出來なかつたが、御首丈けは持つて逃げました。それが只今、觀音堂の背後の念佛堂に確か飾つてあると思ひます。此は其後になつて、門跡前の鹽川運玉といふ佛師が身體を造つて修理したのであります。

猛火の中の私達

私は十四の子供で、さして役には立たぬ。大人でも此の猛火の中では働きやうもない。私の師匠の東雲と、兄弟子の政吉と、

私の父の兼松（父は師匠の家と私とを心配して眞先に手傳ひに來てゐました。）それに私と四人は駒形堂の方から追はれて例の萬年屋の前へ持ち出した荷物を卸し、此所で、何うなることかと胸を轟かしてゐる。火勢はいやが上に募つて廣小路をも一舐めにせん有様でありますから、師匠は一同に向ひ、

「とても、此の勢では此邊も助かるまい。大事な物丈けでも、川向ふへ持つて行かうぢやないか。」といふので、籠長持に詰め込んである荷物を、政吉と父の兼松とが後先に擔ひ、師匠は大きな風呂敷包みを背負ひました。

「幸吉、お前は暫らく此所で荷物の番をしてゐてくれ、俺達はまた引つ返して來るから。」さう云つて三人は吾妻橋の方を差して出て行きました。幸吉といふのは私の其時分の呼名です。光藏といふ語音が呼び難いので、光を幸に通はせて幸吉と呼ばれてゐました。

出て行つた三人は、二三十間程も行くと、雷門際は荷物の山、人の波で、とても大變、籠長持など差し擔ひにして歩くことは愚か、風呂敷包み一つさへも身には附けられぬ程の大混雜、空身で無ければ身動きも出來ない。所詮は生命さへも危ぶないといふ恐ろしい修羅場になつて居りますから、「これでは、どうも仕方が無い。生命あつての物種だ。何にもかも抛り出してしまへ。」といふので、父の兼松と政吉とは籠長持を投げ出してしまふ。果ては人波に押され揉まれしてゐる中に三人は散々バラ〳〵になつてしまひました。

萬年屋の前に荷物の番を吩咐かつて獨り取り殘された私は、ぢつと殘りの荷物の番をして居りました。子供心にも、師匠や親から云ひつかつた荷の番の責任を感じてゐる上に、もう一度引つ返して來るから、と云つて出て行つた言葉もあることゝて一生懸命に荷物を守つて居りました。

すると、見る〳〵中に、兩側の家は燒け落ちて、今にも萬年屋の屋根を火先が舐めさうになつて來る。と、火消しの一群が火の粉を蹴つて驅け來り、その中の一人が、長梯子を萬年屋の大屋根の庇に掛けました。さうして、する〳〵と屋根へ上つて行きました。

「おい、お前、斯んな所に何をまご〳〵してるんだ。」

一人の火消しは私を見て怒鳴りました。

「私は荷物の番をしてるんだ。」

さう云ひますと、

「何に、荷物の番をしてるんだ？ 途方も無い。ぐづ〳〵して

ると、荷物より先きに手前の生命が無いぞ、早く逃げろ、早く逃げろ。」

　さう怒鳴りつけますが、さりとて、私は逃げ出すわけには行かない。師匠の預り物の番をしてゐるので、師匠や親が、もう一度此所へ歸つて來る迄は、何が何うあらうと踏み止まらうと、火消しの怒鳴るのをも係はず、矢張り荷物へ嚙り附いてゐました。

　すると、仕事師の一人が、突然、私を突き飛ばして、

「逃げなきや死んでしまふぞ。早く逃げろ。」

と、恐ろしい見幕で叫びながら、また私を突出して吳れました。私は突飛ばされたのだか、それが突出して吳れたのだか、そんなことも夢中で、兎も角自分の身體が荷物の側から大分離れた所へ彈き出されてゐて、二度とは、もう荷物の側へも行けないので、とう〳〵斷念めて何處かへ逃げて行かうと決心しました。

　併し、逃げるにしても、何處へ逃げて行つて好いか分りません。兎に角、師匠や親の行つた方角へと心差して逃げ道を雷門方向に取りました。

　一方、私の父は、何うしたかといふと、大混雜の中で、師匠や政吉を見失ひ、自分一人となると、さあ、子供のことが案じられて來ました。萬年屋の前に荷物の番をさせて置いた忰の身の上が氣遣はれて來ました。一念が子の上に及ぶと、兼松は顏の色が變り、必死となつて人波を掻き分け、元の道へ取つて返へしました。併し、荷物の山と人波に遮られ、あがひても、百掻ても人の先へは出られない。氣が急けば急く程身が自由にならないので、是れでは不可ないと、荷物の上へ躍り上り、箪笥、長持を踏み越へ〳〵、やつと、雷門の傍の大神宮樣の脇を潜り抜けて、心ばかりは萬年屋指して飛び込んで來ましたが、矢張り恐ろしい人波でニッチもサッチも行かないのでした。

　私は何時の間にか、雷門の方を向いて人波の中を泳いでゐました。泳いでゐると云つて好いか、揉み抜かれてゐると云つて好いか。人間と人間との間の板挾みにされ、兩脚は宙に浮いて身體が波の動搖の儘にゆさぶられてゐるのです。其癖、眼には晝よりも明るい一面の火の幕がハッキリと見え、人の顏と、眞ツ黑な頭の頂天のチョン髷とが影繪のやうに映つてゐる。さうした儘で、また良々暫らく揉まれ抜いてゐると、不圖、百千の人の顏の中から、父兼松の顏を見附けました。ハッと思ふと同時に、父の眼顏に、私を見附けたといふ喜悅の表情の動くのを見ました。父は、口を開いて、何かを叫び、兩手を上へ揚げて、一心不亂に私の方へ突進して來やうと焦燥つてゐる有樣。私は

私で、父を見附けると、只、もう、父の方へ、一本槍に進んで行かうと藻掻いてゐる。その間隔は只つた十人か十五人位の人垣によつて押し隔てられてゐるのですが、親も子の傍へ來ることが出來なければ、子も親の側へ寄つて行くことも出來ない。心は矢竹にはやれども吾れ人共に必死の場合とて、何うすることも出來ないのでした。

併し、私達親子の一心が通つたものか、兎に角、親子は犇と抱き合ひました。

「もう大丈夫だ。俺が附いてゐる。」

斯う父が確かりした聲で、私を抱いて云つた時、私は、一生に、此の時程うれしかつたことはありません。私の父兼松は生粋の江戸ッ兒で、身長こそは小さいが、火事なぞに掛けては、それはハシッコイ人物、……我子を兩手に抱いたうれしさに勇氣も百倍し、それから人波を押し割つて元の道に引ッ返し、大神宮際の床店の所まで父は私の楯となつて引き退いたのでありました。

其所で、父は、とある荷物の中から、一つの網戸を引つぱり出し、それを床店の屋根に掛けました。さうして、私の尻を押すやうにして、私を屋根に上らせました。（戸の棧を足場にして攀ぢ上る）續いて父も屋根に上り、更に網戸を大神宮の拜殿へ掛け渡して逃道を作りました。

「さあ、これで、もう、大丈夫だ。此所で一氣息吐からぢやないか。」

父はさも安堵したやうな顔をして私を見乍ら云ひました。私は、父の聲を聞きながら、荷物の番をしてゐた萬年屋の方を向いて見ました。すると、萬年屋の二階の雨戸が二三枚、朱に染つた虚空の中へ、紙片か何んぞのやうにひら〳〵と舞ひ上りました。と、雨戸のはづれた中から眞黑の烟がどつと出る。かと思ふと、今度は眞紅の焔が渦を卷いて吹き出しました。

「お父さん。萬年屋が……」

と、云つてゐるうち、見る〳〵一面の火となつてしまひました。

私は此の時仕事師の云つた言葉を思ひ出し、もう少しぐづぐづして居やうものなら……と思はず身體が震へました。

私達は、床店の屋根の上で、暫らく火事の樣子を見てゐました。急に安心をした故か、此時初めて恐ろしい風だといふことに氣が附きました。其迄は全く夢中でした。

それから、今日でもハツキリ記憶をして居りますが、萬年屋の前で荷物の番をしてゐる時、持ち出してある大酒樽の飲口が

抜けて、ドン／＼と酒が溢れ出る。その酒のしぶきが私の衣物をびつしよりにしてしまひました。私は濡れた儘で、仕事師に突出され、人波に揉まれ、父に扶けられ、今、此の床店の屋根に上つて、父の傍で、師匠の荷物も何もかも火の海と化し去る所を見てゐるのでありますが、萬年屋、山城屋(茶飯屋)などの火燄の煽りで熱くなつて、その酒に濡れた衣物が乾いて、烟が出てゐるのに氣が注きました。乾きかけた袂からは酒臭い匂ひが發散てゐました。

さうして、火は私達の上つてゐる屋根の前を一面に甜めて、花川戸の方へ燒延びて行きました。

やがて、父と私とは、家へ歸ることにしました。歸ると云つて私の師匠の家はもう燒失してしまつてゐますから、父の家へ歸るより他ありません。網戸を傳つて拜殿へ這ひ上り、其所からまた網戸を梯子にして大神宮樣の敷石の上へ降りました。

父は始終私の身邊を氣遣ひ、吾が身のことは忘れたかのやうに劬はつて與れました。降りた處は雷門の直ぐ後で、それから大神宮の大きな花崗石の鳥居を潜り(此の鳥居は後で見たら、中央からボツクリと兩つに折れてゐました。これは柳川力士雲龍久吉が納めたもので、その由を彫つてあつた。)仲店を仁王門に向つて、傳法院へ這入り、庭を拔けて田圃を通り、前述の新門辰五郎のゐる西門を、新門の身内のものに斷つて通る迄に、後を振り顧つて見ると、仲店から傳法院へ曲る角にあつた火の見櫓に火が掛り、眞赤になつて火柱のやうに見えました。

それから、左は蛇骨湯、右は清正公のあるお寺の通り、それから、上野の車坂の方へ眞直ぐに合羽橋を渡ると、右角が海禪寺(此は阿波樣のお寺)二丁程行くと、右側が東明寺で、左が源空寺……即ち源空寺門前の父の家のある所で、私は久し振り、我が家へ歸つて來たのでありました。

燒跡の身慘なはなし

歸つたのは九ツ過ぎ(十二時過ぎ)でした。流石の火事も其頃は下火となつて、やがて鎭火しました。

火事の危險であつた話や、父に扶けられた話や、久方振り、母との對面や何やかで、雜炊を食べなどしてゐる中、夜は白々として來ました。

さて、翌朝になり、燒跡は何うなつたか。師匠の家の跡は……と父と共に心配をしながら行つて見ると、師匠の家は無い。燒跡に、神田の塗師重の兄弟と、外に三人ばかり手傳ひがボ

オンヤリと立つてゐる。

互に顔を見合はせて、何よりも先づ昨夜の話、師匠は此れ此れ、我々は此れ〳〵と父が物語る、師匠兄弟も嘆息しながら、

「先づお互ひ様に生命に別條なく不幸中の幸……併し、我々は逃げ損くなつて實に酷い目に逢ひやした。逃げやうと云つて、藏前の方へも逃げられず、並木へと行けど、それも駄目也。止むを得ず河岸へ出たものだ。所が丁度引汐時であつたから、それへ荷物をウーンと出したものだ。すると、また上潮になつて來て、荷物は浮いて流れ出す。……それを綱で括つて流すまいとするその大混雜……其所へ、河岸へ火が出て來て猛火に煽られ、こげ附くやうになり乍ら、浮き上つた荷物の上へ、獅噛みつき、身體を水に濡らしては火の粉を除けるといふ騷ぎ、何んのことはない、火責め水責めを前後に受けて生きた心地もしなかつた。それに苦しい上にも苦しかつたことは、あの、「乾」の烟草屋の物置に火が掛ると、有り丈けの烟草が一度きに燃え出して、その咽ることは……焦熱地獄とは斯んなものかと目鼻口から涙が出やした。」

と、今は寒さに震へ乍ら、下火に當つての物語、……茫々莫々たる燒跡の眞黑な世界は、師走の鉛色な空の下に無慘な狀で投げ出されてゐました。

師匠の荷物は、此の兄弟が川の中で扶けたものばかりと、手傳ひの人が持つて歸つて、後に屆けて呉れたもの少々とが殘つた他には、何も殘りませんでした。笑ひ事ではありませんが、前述の萬年屋の前で、師匠が大事に背負つて行つた大風呂敷の包みは、諏訪町河岸に居た師匠の妹の夜具蒲團であつたので「わざ〳〵本所まで脊負つて行つたもの、此れは妹に返さねばならない」と、後で、師匠が苦笑しました。

所が、また不思議なことには、私の道具箱が何處に何う濟んでゐたか、其儘に助かつた。それは、まだ子供のことゝて、簞の折を道具箱にしたもので、切出し、丸刀、鑿、物差などが這入つてゐた。此れが助かつたので、後に大變役に立ちました。

何にしろ、今度の火事は變な火事で、藏前の人々は、家が殘つて荷物が燒けました。此は、荷物を駒形の方へ出した爲です。急に西風に變つた爲に藏前の家々は殘りました。丁度、黑船町の御廐河岸で火は止まりました。榧寺の塀や門は燒けて本堂は殘つてゐた。

此の大火が方附いてから、あの本願寺の門の前を通ると、駒形堂が眞直に見えました。さうして、大河の帆掛舟が「そんな

大火事があつたかい。」と云つたやうに靜かに滑つて行くのが見えました。

かくて、淺草は寂寞たる年の瀬を越し、淋しい初春を迎へたことであつた。

其頃の消防夫のことなど

江戸の所謂、八百八街には、火消しが、いろは四十八組ありました。

淺草は場末なれど、彼の新門辰五郎の持場とて、十番のを組と云へば名が賣れてゐました。もつとも、辰五郎は四十八組の頭の内でも巾の利く方でした。

云ふ迄もなく、消防夫は鳶と云つて、梯子持、纏ひ持など中中威勢の好いものであるが、其頃は龍吐水といふ不完全な消火機をもつて水を彈き出すのが關の山で、實際に火を消すといふ働きになると、今日から見ては他愛のない位のものであつた。龍吐水の水はやつと大屋根に屆く位、それも直接消火の用を足すといふよりは、屋根に登つて働いてゐる仕事師の身體を濡らすに用ひた位のもの……ゲンバといふ桶を棒で擔ひ、後から炊出しの這入つたれんじやくをつけて驅け出した。(此は非常箱で消防夫の食糧が這入つてゐる)それから、刺し子で、猫頭巾を被り、火掛りする。

火消しの働きは至極迂遠なものには相違ないが、併し、器械の手傳ひがない丈け、それ丈け、仕事師の働きは激しかつた。身體を水に浸しながら、鳶口をもつて、屋根の瓦を剝ぎ、孔を穿ち、其所から內部に籠つた火の手を外に出すやうにと骨を折る。此は火を上へ拔かすので、其頃の唯一の消火手段であつた。

で、此の消し口を取るといふことが其組々の一番大事な役目であつて、此の事から隨分爭ひを生じたものである。何番の何組が何の消し口を取つたとか、それによつて手柄が現はれたので、消防夫の功績は一に是に出つて成績づけられたものです。それで、纏ひのばれんは燒けても、消し口を取ると見込みをつけた以上、一寸も其所をば退かぬと云つて大層見得なものであつた。

消し口を取ると、消し札といふものをぶら下げた。此は箱根竹に麻絲で結へた細い木の札で、此が掛ると、其組々の消し口が裏書きされたことになつたのです。

其頃は、素家になると、百兩とか、二百兩とか懸賞で其家を食ひ留めさせたものです。斯ういふ時には一層消防夫の働きが凄まじかつた。

一體に、當時に町人の火事を恐れたことは、今日の人の想像も及ばぬ位である。それは、今の如く、火災保險などいふやうな方法があるではなく、また消火機關が完全してもゐないから、一度類燒したが最後、財産は殆んど丸潰れになりました。中には丸燒けになつた爲乞食に迄身を落した人さへある。今日では火事があつて、却つて財産を殖したなどいふ話とは反對です。隨つて火事と云へば直ぐに手傳ひに驅け附けた。生命の次ぎ程大變なことに思つてゐたこと故、見舞ひに走せ附けた人達をば非常にまた悦んだものである。

ですから、火事見舞は、當時の義理のテツペンでした。一番に驅けつけたは誰、二番は誰と、眞先をかけた人を非常に有難く思ひ、丁寧に取り扱ひました。差し當つて酒當は諸方から見舞として貰つた物を出し、明日は手拭に金包を添へてお禮に行くのが通例です。それで誰もかもヂヤンと云ふと、それツと云つて驅け出す。……知人の家が火元に近いと飛込んで見舞の言葉を述べる。一層近ければ手傳ひをする。それで、今の小遣ひを貰ひ、歸りには、それで夜鷹そばを食つたなど丶……隨分をかしな話しですが、それも習慣です。といふのも、畢竟町人が非常に火事を恐怖したところから、自然、大勢の人心を賴みにしました。何んでも非常の場合とて、人手を借りねば埒が明かない。それで、一般に町人の若い者達は、心掛けの好いものは、手鍵、差し子、草鞋、長提灯に蠟燭を添へて枕頭に置いて寢たものです。

普通、女、子供であつても、寢る時は、チヤンと衣物の始末を順よくして、ソレ、火事といふと、仕度の出來るやうに習慣附けたものであつた。特に、火事を重大視した端的な證據として、一旦、其家を勘當された悴とか、番頭のやうなものが、火事と聞いて、迅速に驅け附けますと、それを手柄に勘當が許されたもの、全く火事は江戸人の重大視したもの丶最たるものであつた。

俗に、火事を江戸の花とか云つて興がるもの丶やうに云ひなされて居りますが、實際は、興がるどころでは無く、恐怖の最大なものであつたのです。

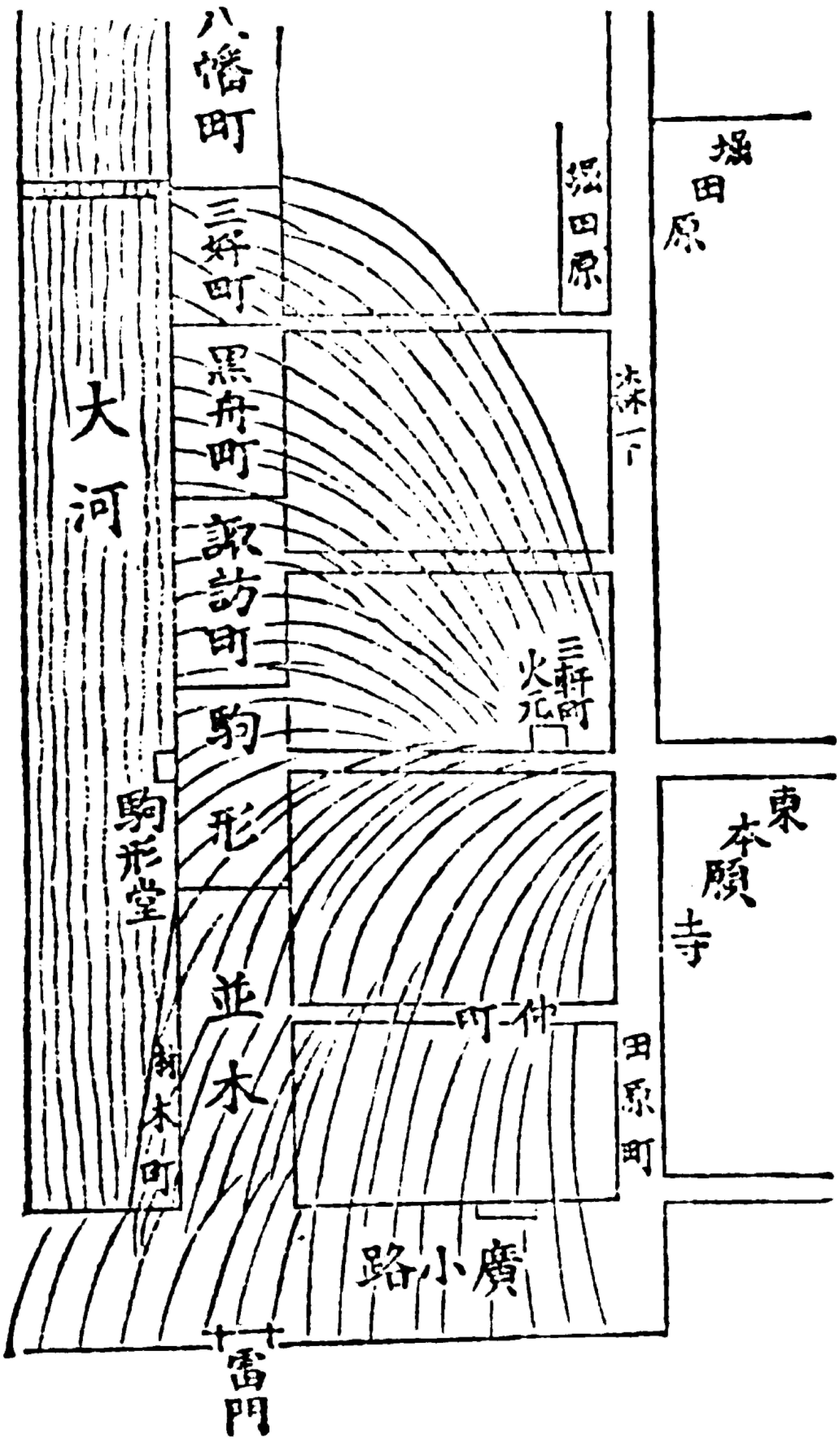
それで、大火となると、町家の騷ぎは云ふ迄もないが、諸侯の手からも八方から御使番といふものが、馬上で、例の火事頭巾を冠り、凛々しい打扮で押し出しました。此は火事の模樣を注進する役目です。一層大きくなれば、町奉行が出て、與力と同心といふものが働きます。

凡て、幕府時代に於ては、江戸の市中、大名、旗本の屋敷が

六分を占め、四分が町家である割合ですから、町家が火事を重大視した如く、武家もまた戰場のやうに重く視ました。近火の場合には、武家も町家も豪家になると、大提灯又は高張りを家前なり、軒下に掲げ、目じるしとして人々の便を計りました。

此の外、火事に就いてはいろ〳〵まだ話もあるが、先づ此で終りと致します。

ザツと淺草大火の燒跡を略圖にして見れば下の如し。



猫と鼠のはなし

少し變つた思ひ出ばなしをします。鼠の話を先にしませう。

私が十五六歳の時です。師匠の手元にゐて、彼是二三年も稽古をしたお蔭で、どうやら物の形が出來るやうになつて來ました。それで、そろ〳〵生意氣になつて、何か自分では一廉の彫刻師になつたやうな氣持で、師匠から當てがはれた佛樣の方をやるのは無論であるが、それ丈ではたんのう出來ないやうな氣持で、何か自分の趣向を立てたもの、思ひ附いたものを勝手にやつて見たいといふ氣が起つて來る。もつとも、斯ういふことは、師匠の眼の前で實行してはお叱りを受けますから師匠の眼に留らないやうな時を見て、朝がけとか、夜業のしまひとかいふ時にコツソリといたづらをするのであります。

けれども、まだ初心のことゝて、自分の腕に協ひさうなものでなければ手が附きません。其所で思ひ附いて彫り出したのが鼠であつた。

それは丁度實物大の鼠を實物をお手本にする氣で考へ〳〵、コツ〳〵と彫り出しましたが、彫り上げて見ると、何うやら形

になつたやうな氣持……それは檜の材でありますから、眞白であるのを、本當の鼠を行くのであるから、自分で考へて丁度な色をそれに附ける。手に取つて打ち返して見れば、流石に自分の拵へたもの故、ほんの遊びいたづらとは云ひながら、他のあてがはれた佛様よりも愛念の情が自づと深いわけ、或日、その出來上つた鼠をば、晝食を終つた僅かの休みの暇に、私かに店頭の棚に乘せて眺めてゐました。其頃の佛師の店は前にも申した通り、往來に面した店が即ち仕事場で、今日の佛師の店と大した相違もないやうな體裁、往來からも一目に店が見えるのでありますから、私は内外に氣兼ねをしながら見てゐました。

すると、奥の方から師匠の自分を呼ばれる聲がする。びつくりして師匠の前へ參ると、

「幸吉、お前、此れから直ぐに大傳馬町の勝田さんへ使に行つてくれ、急ぎの用だから、早く……」

と、いふお言葉。畏まつて、直ぐに店を飛び出して行きましたが、其時、急な要事といふので、鼠のことを打忘れ、其儘、棚の上に置きつぱなしにして出たのでありました。さうして、師用を濟まし、私は午后三時頃てく／＼歸つて來ました。

所が、その、私の留守中に、店へ來られたお客があつた。其方は上野東叡山派の坊様で、六十位の老僧、駒込世尊院の住職で、また芝の神明さまの別當を兼ねて居られ、中々地位もある方であつたが、此方が毎度師匠の許へ物を賴みに見えられます。今日も其等の用向きで參られて、師匠と店頭にて話をして居られました。

と、不圖、坊様は、師匠に向ひ、

「先刻から、あの棚の上に鼠がゐるので妙だなと思つてゐたのだが、あれは本當の鼠ではないのですね。彫物なんですね。誰が拵へたのですか。」

と云ひながら、起つて、その鼠を棚から卸して來て、掌に乘せて、つく／＼見乍ら、

「此れは、どうも、まことによく出來て居る。本物と私が見違へたのも無理はない。誰が彫つたのですか。」

坊様の興味ありげな言葉に、師匠も初めて心附き、それを見ながら、

「此は、あの幸吉のいたづらでありませう。」

と答へました。

「さうですか。彼兒がやつたのですか。此は私が貰つて置き度い。私は實は子の歳なので、鼠には緣がある。此は讓つて貰ひませう。」

「それはお安いことです。幸吉は今使に參つて居りませんが、いたづらにやつた鼠がお目に留つて、世倅に望まれて行けば何より……」

と、紙に包んで坊樣に呈げてしまひました。

すると、坊樣は、折角、幸吉が丹念に拵へたものを只で貰ふは氣の毒、此を彼兒へお小遣ひにやつて下さいと一分銀を包んで師匠へ渡しました。

私は留守のこと故、其場の容子は見てはゐませんから知りませんが、先づ斯うした順序の妙な事が起つたのでありました。其所で、一寸、師匠も困りました。實際ならば、まだほんの年季中の小僧の身のこと、師匠の云ひ附けもせぬものを勝手に彫つて見るなぞとはよろしくないと口小言を云つて將來をも誡むべきであるのですが、今、斯うして師匠自身も尊敬してゐる坊樣より、お禮の意味の金子を幸吉へと云ふて出されては、その處置に困つたのでありました。

それで、師匠は、その一分銀の使用法を考へて、坊樣が歸つてから、丁度時刻もお八ツ時となつたこと故（二時から三時の間）思ひ附きにて蕎麥の大盤振舞をすることにしたのでありました。物價の安い時、一分の蕎麥は中々ある。師匠の家庭は師弟平等主義で、上下の區別を立てず至極打ち解けた家風でありましたから、奥と店とが一緒で、一家内中が輪になつて、そのおそばを食べて居りました。

其所へ私が歸つて來ました。

師匠は私の顏を見ると、

「大きにご苦勞だつた。さあ、今日は蕎麥の大盤振舞だ。お前は蕎麥が好きだ。澤山にお食べなさい。」

といふ言葉。私は少し合點行かず、平生のお八ツとは大變に容子が違つてゐますから、何か、お目出度いことでもあつたのかと、その由を師匠に聞くと、

「まあ、好いから、澤山におあがり……」

といふ。私は好物のことなれば直ちに箸を取り、お禮を云つて食べてゐると、誰やら、くす／＼笑ひ出します。師匠の妻君も笑ひ出す。師匠の妹にて、お勝といふ臺所を仕切つてゐられる婦人も笑ひ出し、「幸さん、ご馳走樣……」など云ひ出して、如何にも容子が變であるから、一體、此のおそばは何うしたのですと、また問ひますと、今迄眞面目な顏をしてゐられた師匠も笑をふくみ、

「實は、此れは、お前の御馳走なんだ。お前の鼠は逃げて蕎麥になつたんだ。遠慮無しに澤山おあがり……」

斯う云はれて初めて氣が附き、あの鼠を棚へ上げた儘、忘れてしまつて使に行つたが、何うしたらう、と店へ行つて棚を見ると、鼠は何處へやつたか居りません。……併し、鼠が逃げてそばになつたとは、愈々をかしいと思つてゐると、實は斯々と師匠は私の留守に起つた一條を物語り、世尊院の住職のお目に留つたは好いとしても、今から勝手なことをするやうでは末始終身の爲にならぬからと、アッサリと注意をされ、其場は笑ひで終りました。

其後、此の上人が、鼠一匹のことから、何かにつけて私を愛してくれられ、幸吉へと指名して彫る物を頼まれたことも度々で大に面目を施したことがありました。此世尊院といふ寺は本郷駒込千駄木に今でもあります。

序に、も一つ猫の話をしませう。此は私の少し惡戯を仕過ぎた懺悔ばなしです。

誰でも奉公をした方は覺えがありませうが、發育盛りの十六七では、當てがはれた丈けの食事では、やゝともすれば不足勝なもの……小體の家では無いことだが、奉公人を使ふ家庭となると、臺所のきまりがあつて、奉公人の三四人も使つて居れば、大概お總菜など、朝は、しばのお汁、中飯に八ハイ豆腐か、晩は鹿尾菜に油揚の煮物のやうなものでそれは吝しいものであつた。(朔日、十五日、二十八日の三日には魚を付けるのが通例です)

或年の三四月頃、江戸では鰹の大漁で、到る處の肴屋では鰹の山を爲してゐました。それで何處の臺所へもざらに鰹が這入る。師匠の家でも或日鰹の刺身がお總菜に出るといふ鹽梅、大漁のお蔭にて久し振り我々は有難くそれを頂戴したことであつたが、今も申す如く、發育盛りの年輩ですから、おきまりの一人前の刺身位は物の數でもなく、忽ちそれは平らげられてしまひます。をかしいお話だが、實は口よごしと云つた位のもの……それで却つて物足りない氣がして、もつと心行くばかり今の刺身が食べたいといふ氣持になるは無理もなく、臺所には、まだ師匠や妻君の分が大分皿に盛られた儘晩食の分が取入らずに這入つて居りますので、私はどうも、それが氣になつて、何とかして一つそれをすつぱりとやつてみたくなりましたが、當時師匠の臺所は師匠の妹のお勝といふ婦人が仕切つてゐますから如何に奥店無差別の平等主義な家庭であつても、さう勝手に臺所の權利を攪亂するわけには行きませんから、何んとか旨い

案を考へて、その日當てのものを占領めてやらうと、店で仕事をしながら考へましたが、爰に一つ名案が浮んで來たので、私はそつと臺所へやつて行きました。

臺所へ行くと、其所に大根卸しに使つた大根の切れツ端がある。それを持つて來て、お手の物の小刀で猫の足跡を彫り出したのです。丁度それは梅の花の形のやうな鹽梅に……忽ちそれが一つの印形のやうなものに出來上つたのを、私は見てゐると自分ながらをかしくなつたが、併し、此が名案なのであるから、再びそれを持つて臺所へ行き、お勝さんの居ないのを幸、竈の灰を今の大根の彫りものゝ面へなすりつけ、竈の側やら、板の間やらへ猫の足跡そつくりの型をつけ、恰かも、泥棒猫が忍び込んだといふやうな趣向にした後で、私は鼠入らずの刺身のお皿を取り出し、美事に平らげてやつたのでありました。さうして知らん顏をして店へ來て仕事をして居りました。

暫らくすると、臺所の方で、お勝さんの聲で怒鳴つて居ります。何を騒いでゐるかと耳を立てると、案の條、鼠入らずの中の刺身が無くなつてゐることを問題にしてゐるらしく「あの畜生だ、あの泥棒猫の仕業だ。」と怒つてゐる。師匠の家にも三毛猫が一匹ゐるが、裏口合せの長屋の猫が質が惡るく、毎度此方の臺所を荒らすところから、疑ひは其猫に掛つて居る樣子であります。私は心にをかしく、中々名案だつたと思ひながら、なほ、臺所の方へ氣を附けてゐると、また暫らくしてから、臺所でガタピシと大變な物音がします。何んだらうと覗いてゐるとお勝さんが、疑ひを掛けたその裏長屋の泥棒猫を捉まへて、コン畜生、々々と云つて力任せに鼻面を板の間へ擦り附けて居ります。物音を聞いて、師匠も其所へ立ち出で、樣子を聞き「それはお勝、お前が手落ちなんだ。そんなに手荒らにしなさんなもう好いから許しておやり。」などなだめてゐる。

「いえ、いけません。此奴がお刺身を奪つたんです。以後の見せしめに、斯うしてやるのです。」

と、また鼻面をいやといふ程猫は擦すられて居りますから、私は、どうも甚だ恐縮……不埒な奴は其猫ではなく、悪戯半分の手細工は自分なので、何んとも早や氣の毒千萬、猫に對して可愛さうで、申譯が無いやうな立場、今更斯々と云つて出るのも變なもので、少し藥の利き過ぎたことを自分で驚き乍ら、漸つと臺所の靜かになつたのに胸を撫で卸したことがありました。

それ以來、私は、無實の罪を得て成敗を受けた猫の爲に謝罪する心持で、鰹の刺身丈けは口に上さぬやうに心掛け、六十一の還暦までは、それを堅く守つて居りました。六十一は一廻り

それからは赤ン坊から生れ還つた氣持ですから、今日では鰹の刺身も口にするやうになりました。他愛のない話であるが、何んの氣もなくやつた惡戯が存外深い記憶を印してゐるといふはなしで人間一生の中にはいろ／＼なことがあるものである。

一度家に歸り父に誡められた話

今の猫と鼠の話のあつた前後の頃ほひ(確か十五の年)は徳川氏の世も末で、時勢の變動激しく、何かと騷擾が引續く。

それにつけて、四時の天候なども甚だ不順であつて、凶作が續き、雨量多く、毎日、じめ／＼とイヤな日和ばかりで、米は一圓に二斗八升(一錢に二合八勺)といふ高値となる。今迄は圓に四斗もあつたものが、斯う暴騰すれば世の中も騷がしくなるは當り前である。併し、米は高くなつたからと云つて、日常のものが、それに伴れて高くなるといふことは無く、矢張り、百で六杯のそばは以前通り、職人の手間賃も元通りである。かと思ふと、一方には澤庵一本が七十二文とか天寶一枚とかいふ高いものになつて來る。つまり、經濟界が亂調子になつたことでありますが、斯ういふ世の中の行き詰つた折から「貧窮人騷ぎ」といふものが突發して來ました。

或人が中ノ郷の枳殼寺の近所を通ると、紙の旗や蓆旗を立てゝ、大勢が一團となり、鬨の聲を揚げ、米屋を毀ち壞して、貯手に米穀を奪らつて行く現場を見た。妙なことがあるもの、變な話しだ、と昨日目撃したことを隣人に語つてゐると、もう江戸市中全體にその騷擾が傳播して、其所にも此所にも「貧窮人騷ぎ」といふものが頻々と起つてゐる。それは實にその傳播の迅さと云つては恐ろしい位のもの、一種の群衆心理と申すか、世間は此の噂で持ち切り、人心恟々の體でありました。

また或人の云ふには、

「何某の大店の表看板を打ち毀して、芝の愛宕山へ持つて行つてあつたさうな。不思議なこともあるものだ。」

といふ話。その話を聞いてゐるものは、誰も彼も妙な顏をしてゐる。昔、矢張り米騷動のあつた折に、大若衆が出て來て、そんなことをしたものだといふ。矢張り、今度のそれも大若衆がやつたのであらうなど腹の中で考へて一層不安が増し、取沙汰が喧ましくなるといふ風で、物情騷然たる有樣であつた

私は、師匠の店にあつて仕事をしてゐる間、子供心にも、此等の世間話しを聞きますにつけて、自分の兩親達のことが心配でならないのでありました。一心に毎日の仕事をしてゐる中にも、不圖、家のことを思ひ出すと、仕事の手を留めて、茫然と

其事を考へてゐる。今頃、父はどうして居られることだらう。母樣は何をしてゐられることか。……と思ひ出しますと、どうも斯うして師匠の家に自分丈けが閑とはして居られない氣がして來るのでありました。

自分の父は、幼い時、その親が身體を惡るくされた爲に、自分の身を犧牲にして、一生懸命一家の爲に盡されたといふ。自分は、その父が家の爲に盡したといふ年齡よりも、まだ、ずつとおとなになつてゐるのに、斯うして、師匠の家に安閑として家のことや、親達のことを他所に見て居るといふは、何んたる不孝のことであらう。此は斯うして居る場合でない。自分も父のしたやうに、自分の父に對して、その危急を手助けしなければならない。――

斯う私は思ひ詰めぬわけに行かなかつた。

或日、日暮れに、ふら／＼と、默つて、師匠の家を出て、親の家へ歸つて來ました。

父は稀見な顏をして、私を見てゐました。母は、それでも、何かと私に優しいことを云つてくれてゐまし。

私は父に向ひ、

「實は、世間が如何にも騷々しく、いろ／＼な噂を聞きますので、家のことが心配でたまりませんから、明日からあなたと一緒に商賣をして、何なりとお手助けしやうと思ひ、それで戻つて參りましたので……」

斯ういふ意味のことを、恐る／＼述べました。それで父の意も解け、顏色も和らぐことかと思つたのは間違ひで、父は恐ろしく嚴勵しい聲で、私に怒鳴りつけて來ました。

「馬鹿野郎、汝は、もう俺の云つたことを忘れてしまつたか。汝が初め、師匠のお宅へ奉公に出る前の晩、俺は汝に何んと云つた。一旦、師匠の家へ行つた以上、何ういふことがあらうとも、年季の濟まぬ中に此の家の敷居を跨いではならんと云つたではないか。途中で歸つて來れば足骨をぶち折ると確に云ひ附けた俺の心を汝は何んと聞いたのだ。俺は子供の時、一家の事情によつて身に附くやうな職をも覺えず、中途半パな人間になつてしまつたが、汝にはそれをさせたくないといふ親の心が分らんのか。世間が騷がしからうが、貧乏をしやうが、汝の手助を當にする位なら最初から汝を奉公になぞ出しはしない。一旦師匠の家に住み込んで、年季も滿足に勤め上げず、中途で師匠を暇取るといふやうな心掛けで、汝は何が出來ると思ふ。歸つて親の手助をしやうなどゝ、生意氣なことを云ふな。俺には知己も交際もある。汝のやうな中途半パで歸つて來た不埒な奴を

家に置いたとあつては、俺が世間へ顔向きが出來ない。今日限り親子の縁を切るから勝手にしろ。豫て云つた通り、足骨を打ち折つてもやりたいが、今晩丈けは勘辨してやる。何處でも出て行つて、その腐つた性根を叩き直せ。」

斯ういふわけで實に恐ろしい見幕。ぐづ〳〵してゐると、本當に足骨を打ち折られさうでありますが、併し私は此の父の嚴しい譴責によつて、つく〴〵自分の非を悟りましたので、散々其場で父に謝罪を致し、以來決して不心得を致しませんによつて、今度丈けはお許しを願ひますと、涙を流して申しました。

「さうか。それが分ればそれでよい。俺には長男巳之助があり汝は次男だが、母には汝は一人の兒だによつて母に免じて今夜は許す。汝が一人前の人間になる迄、ドンナことがあつても俺は汝の腕を借せとは云はぬ。家のことなど考へず、一生懸命仕事に勵み、師匠の爲めに盡せ。それが汝のすることだ。分れば、それで好い。」

斯う云つた後、父も機嫌を直して吳れまして、それから母がお茶を入れ、菓子など食べ、早速、晩、師匠の家へ立ち歸り、一層身を入れ仕事に勵んだことでありました。

思ふに、此の時、父が斯く嚴しく訓誡してくれましたことは洵に親の慈悲であつて、此うした教訓を與へられず、甘い言葉を掛けられ、また父の都合上から、私の小さな力でも借りやうとしたならば、私の將來も殆んど想像されたことであります。若し此れが普通の人であつたら、斯うも私の父の如く、嚴しくキツパリと頭からやつゝけはしなかつたと思ひますが、全く、此の時、斯く手嚴しく譴責されたことは、私の身に取り、ドンナに幸福であつたことか分りません。父の賜によつて、將來世に立ち、先づ押しも押されもせぬ人間一生を斯く通り越し來たことは心に感謝する次第であります。

私の父は、前にも度々申した如く、まことに氣性の潔よい、正直眞ツ法で、それに乾兒のものなどに對しては同情深く、身錢を切つては盡すといふ氣前で、自分の親のことを自慢するやうであるが、中々よく出來た人であつた。後年隱居を致し、私から小遣を貰つて、神詣などに參りまして、貰つた丈けの小遣はそれ丈け綺麗に使つて來たもので……それも自分の爲といふよりは、何んでも、江戸の名物と名のつくものを買つて來て、家のものにお土産にして、皆で一緒にお茶を入れて、それを食べて喜んでゐる所など、昔ながらの氣性が少しも變りませんでした。よく、芝口のおはぎ、神明の太々餅、土橋の大黒餅などがお土産にされたものでありました。

上野戰爭當時のことなど

慶應四年辰年の四月十五日――私の十七の時、上野の戰爭がありました。

今日から考へて見ると、徳川樣のあの大身代が揺ぎ出して、とう／＼傾いてしまつた時であつた。その時、何もかも一緒にいろ／＼なことが湧いて來る。先程話した通り、四時の順環なども、ずつと變調で、天候も不順、米も不作、春早々より雨降り續き、三四月頃もまるで梅雨の如く、びしよ／＼と毎日い雨で、江戸の市中は到る處、溝渠が開き、特に、下谷からかけ、根岸、上野界隈の低地は水が附いて膝を沒し、往來も容易で無いといふ有樣であつたが、その四月十五日も矢張りびしよ／＼やつてゐる。たまに霽れたかと思へば曇り、むらにばら／＼と降つて來ては暗くなり、陰欝なことであつた。

當時、師匠の家は駒形町にありまして、私は相變らず修業中……その十五日の前の晩(十四日の夜中)に森下にゐる下職の塗師屋が戸を叩いてやつて來ました。私が起きて、潜りを開けると、下職の男は這入つて來て、師匠と話をしてゐる。

「師匠、どうも、飛んでもない世の中になつて來ましたぜ。明日上野に戰爭があるさうですよ。いくさが始まるんださうで。」

「何んだつて、いくさが始まる。何處でね。」

「上野ですよ。上野へ彰義隊が立て籠つてゐませう。それが官軍と手合はせを始めるんださうで。どうも、さうと聞いては安閑とはしてゐられないんで、夜々中だが、此方へも知らせて上げやうと思つて、やつて來たんです。どうも大變なことになつたもんだが、一體、何うすれば好いのか、まあ、其積りで皆んなで注意する丈けは注意しなくちやなりませんね。」

など、如何にも不安さうに話してゐる。

やがて、下職は歸つたが、さて警戒の仕樣もない。夜が明けたら、また何んとかならうなぞ師匠は私達にも話して居られたが、不圖、上野で戰爭といふことで氣が附いて困つたことは、丁度、そのいくさのあるといふ上野の山下の雁鍋の直後の處(今の上野町)に裏屋住ゐをしてゐる師匠の知人のことに思ひ當つたのであります。

其人は師匠の弟々子で杉山半次郎といふ人、鳳雲の家にて定規通り勤め上げはしたけれども、業が聊か鈍い爲、一戸を構へる所迄行かず、兄弟子東雲の手傳となつて仕事をさせて貰つてゐたのでありました。師匠は、此の半次郎のことを心配しだしたのであつた。

「幸吉、半さんが山下にゐるんだが、困るなあ。」
「さうですねえ。半さんは、いくさの始まるつてことを知つてるでせうか。」
「さればさ。あの人のことだから、どうか分らないよ。此方が先に聞いた上は、一つ、此りやあ半さんに報告(しら)せて上げなくちやなるまい。夜が明けたら、幸吉、お前は松を伴れて行つて知らしてやつて呉れ、ついでに夜具蒲團のやうなものでも持つて來てやつてくれ。」

斯んな話で其夜は寢に就きましたが、戰爭と聞いては何んとなく氣味惡るく、また威勢の好いことのやうにも思はれて心は躍る。

夜に明け、弟々子の松どんを伴れ、大きな風呂敷を背負ひ、私は師匠に云はれた通り、半次郎さんの宅へ行くべく家を出ました。

道は駒形町より森下へ出て、今の樂山堂病院の所から下谷御徒町にきれ、雁鍋の背後へ出やうと云ふのですから、七軒町の酒井大學様の前を通り西町の立花様の屋敷――片側は旗本と御家人の屋敷の並んでゐる。堀を前にした立花の屋敷の所へ差し掛ると、此邊一帶は溝梁(どぶ)が開いて水が深く、私と松どんとは、ぢやぶ／＼と川の中でも歩くやうに、探り足をしては進んで行くと、何んだか、頭の頂天(ちやうてん)の方で、シュツ／＼といふ音がする。まるで頭の側(そば)を何かゞ掠つて行くやうな音である。何んだらうと、私は松と話し乍ら、練塀へ突當つて、上野町の方へ曲つて行かうとすると、其所に異様な風體をした武士の一團を見たのであつた。

その武士達は袴の股立(もゝだ)ちを高く取り、拔身の槍を立て、疊をガンギに食ひ違へに積み、往來を嚴重に警衛してゐるのである。

私は風呂敷を背負つて、氣味が悪いが他の人も行くから其所へ進むと、
「小僧、何處へ行くんだ。」
と問ひますので、師匠の川向きにて此れ／＼と答へますと、早く通れ、といふ。それから二三ケ所も、同じやうな警護(かため)の關を通り拔けて行く間に、早や戰爭は始まつてるといふ話、今、道でシュツ／＼と異様な音の耳を掠めたのは、鐵砲丸の飛び行く音であつたことに心附き、驚き乍ら半さんの家へ驅け込みました。

半さんは長屋の中でも一番奥の方へ住んでゐる。至つて暢氣(のんき)な人で、夫婦にて、今、朝飯を食べてゐる所であつた。

所が、驚いたことには、此の騷ぎを、半さん夫婦は全く知らずに斯うして平氣な顏で朝飯をやつてるといふことが分つた時には、さすがに私も開いた口が塞りませんでした。半さんは、私から、師匠の報告是々といふことを聞き、また途中の樣子を聞き、

「ハヽア、さうかね。其奴は驚いた。些つとも其樣ことは知らなかつた。ぢやあ斯うしちやあゐられないな。」

と、急に大騷ぎをやり出しました。後で聞くと、半さんの妻君が少しお轉婆で、長屋中の憎まれ者になつてゐた爲、當日の騷のあることを知らせずに、近所の人達は各自に立退いたのださうですが、世にも暢氣な人があればあるものです。

私と松どんとは、半さんの家の縫道具を背負ひ、もう一度出直して來ることを云ひ置き、元の道を通り拔けて、一旦、師匠の家に歸り、樣子を話し、再び取つて返して來ましたが、其時は以前よりも武士の數も更に增し、シュツ／＼といふ音も激しくなり、拔身の槍の穗先がどんよりした大空に凄く光り、狀態甚だ險惡であるから、とても近寄れさうにもありません。ソレ彈丸でも食つて怪我をしては大變と松とも話し、一緒に家へ歸つて、師匠に市中の光景などを手眞似で話をして居りますと、ドヽン－／＼といふ恐ろしい音響が上野の方で鳴り出しました。それは大砲の音である。すると、また、パチ／＼、パチ／＼とまるで仲店で彈け豆が走つてゐるやうな音がする。ドヽン、／＼、パチパチ／＼といふ。陰氣な暗い天氣に此の不思議な音響が響き渡る。何んとも云へない變な心持であります。私達は二階へ上つて上野の方を見てゐる。音響は引き切り無しに續いて四隣を震動させてゐる。其所にも此所にも家根や火の見へ上つて上野の山の方を見て何か云つてゐる。すると間もなく、十時頃とも思ふ時分、上野の山の中から眞黑な焔が卷き上つて雨氣を含んだ風と一緒に渦卷いてゐる中、それが割れると火が見えて來ました。後で、知つたことですが、此れは中堂へ火が掛つたのであつて、丁度其時が戰爭の酣な時であつたのであります。

そして、小銃は雁鍋の二階から、大砲は松阪屋から打ち込んだが、別して湯島切通し、榊原の下屋敷、今の岩崎の別莊の高臺から、上野の山の横ツ腹へ、中堂を目標に打ち込んだ砲が彰義隊の致命傷となつたのだと云ひます。彰義隊は苦戰奮鬪したけれども、とう／＼勝てず、散々に落ちて行き、晝過ぎには戰が歇みました。

すると、その戰後の狀態がまた大變で、三枚橋の邊から黑門

あたりに死屍が累々としてゐる。私も戦争が止んだといふので早速出掛けて行きましたが、二つ三つ無惨な死骸を見ると、もう嫌な氣がして引つ返しました。廣小路一帶は今日とは大分違ひ、袴越しがもつと三橋の方へ延び、黒門と袴越の所が廣々としてゐた。山下の方には、大きな店で雁鍋がある。此の屋根の箱棟には雁が五羽漆喰細工で塗上げてあり、立派なものでした。(雁鍋の先代は上總の牛久から出て池の端で紫蘇飯をはじめて仕上げたもの)隣りに大野といふ大きな水茶屋がある。甘泉堂(菓子屋)五條の天神、今の潅膀は元岡村(料理店)それから山下は、今の上野停車場と、其隣りの山ノ手線停留場と、其脇の坂本へ行道が、元は、下寺の通用門で、その脇が一帶に大掃溜であつた。その側は折曲つて左右共床見世で、講釋場、芝居小屋などあつた。此小屋で粂八なぞが出たものです。娘義太夫、おでんや、稲荷すし、吹矢、小見世物が今の忠魂碑の建つてゐる邊迄續いて居りました。此邊を凡て山王下と云つたものです。

停車場の向側は山下町、その先の御徒町の電車通りの角に長雲寺がある。此寺は市川小團次の寺で法華宗です。山の上では今常盤花壇のある所は日吉山王の社で總彫物總金の立派なお宮が建つてゐました。其前の崖の上が清水堂、左に鐘樓堂。法華堂、常行堂が左右にあつて中央は通路を跨いで橋が掛り、これを渡つて中堂がありました。此所が山中景色第一の所でした。

此邊一帶をかけて、その戦後の惨状は目も當てられず、戦ひ歇んで、喧過ぎ騒ぎは一段落附いたやうなもの、、それからまた一騒ぎ起つたといふのは、跡見物に出掛けた市民で、各自に刺子絆天など着込んで押して行き、非常な雑踏。すると忽ち人心は恐ろしいもので欲張り出したのであります。それは官軍が彰義隊から分捕つた糧米を、その見物の連中に分配しますと、我も我もと押し迫り、そのゴタ〳〵中に一俵二俵と擔いで行く……大勢のことで、誰が何うしたのか、五十俵百俵は忽ち消えて無くなる。群衆の者は、もう半分分捕でもする氣になり、勝手に振舞ひ、果ては上野の山の中へ押込んで行き、もう取るものが無いと見ると、お寺の中へ籠み入つて、寺中の坊さん達の袈裟衣や、本堂の佛具、舎利塔などを擔ぎ出して、我勝ちに得物とする。倏ち境内のお寺は殘らず空ッぽとなり、金屬のものは何欄の金具や、擬寶珠の頭などを捥つて行くといふ騒ぎで、實に散々た體たらく……斯〳〵此の騒ぎの儘、日は暮れ、夜に入り、市民は等しく不安な思ひで警戒したことであつた。

さて、我々の方面はどうかと云ふと、淺草の大通り一帶も、中々安閑とはしてゐられない。吾妻橋は一つの關門で、本所一

固の旗本御家人が彰義隊に加勢をする恐れがあるので、此所へ官軍の一隊が固めてゐたのと、彰義隊の一部が落ちて來た爲一寸小ぜり合ひがある。市中警戒といふ名で新徴組の隊士が十七八人榧寺に陣取つてゐる。異樣の風體をしたものが右往左往してゐるといふ有樣でした。新徴組は市中取締りとは云ふものゝ官軍だか、賊軍だか分らず、武士の食ひ詰めものゝ集團で、餘り評判はよくないといふことであつた。

ですから、何事も無政府狀態で、市民一般財産生命の危險夥しく、師匠の家の近邊なども、官軍であるか、彰義隊か分りませんが、所々火を放つて行きなどしたもので、併し雨天續きの爲物にならず、燃え上つたのは人々見附け次第消しましたが、不用心極まることでした。師匠の家なども我々は疊を上げ、道具を方附け、いざと云へば何處かへ立ち退く算段……天候は惡るく、びしよ／＼雨で、春といふのに寒さは酷しい。師匠の家では、萬一を氣遣ひ、日本橋小舟町の金屋善藏といふのへ、妻君と小供丈けは預けやうといふことになり、私が妻君の供をして立退きましたが、淺草見附けへ行くと、番兵がゐて門は閉つて通ることが出來ない。一々、人調べをしてから、犬潜りから通してゐるので、私達も改められて潜り拔けたが、何んだが陰氣な不氣味なことでありました。

兎に角、上野の戰爭と云つても、私が目擊したことは右の通り位のもので、戰爭の實況などは分りはしませんが、後年知つたことで、當時御成街道を眞正面から官兵を指揮して黑門口を攻擊したのは西郷從道さんであつたと云ひます。此は私が先年大西郷の銅像を製作した際、松方侯の晩餐に招かれて行きましたが、其席に大山、樺山、西郷など薩州出身の大官連が出席して居られ、食卓に着きいろ／＼の話の中、當時のことを語られてゐるのを聞いて居ると、お國訛りのことゝて、能くは聞取れませんが、おいどんが、どうとか、西郷從道侯の物語りに、御成街道から進擊した由を承はりました。

先刻話した群衆の分捕問題は、後日に到つてやかましくなり嚴しい調査があるので、坊さんの袈裟を子供の帶などにくけて使つてゐたものは其筋へ上げられました。で、いろ／＼なものがはき出され、往來へ金襴の袈裟種々の佛具などが棄てゝあつたのを見ました。

遊藝には緣の無つたはなし

上野の戰爭が終んで後私が十八九のことであつたか。德川家に屬した方の武家などは急に生活の道を失ひ、ちり／＼ばらばらになつて、いろ／＼な身慘な話などを聞きました。でも、町

家の方はさうでもなく、矢張り、夏が來れば店先へ縁臺などを出し、涼みがてらにのんきな浮世話しなどしたもの……師匠は仕事の方には中々やかましかつたが、氣質は至つて樂天的で、物に拘泥しない人であり、正直、素樸で、上下に隔てなく、弟子達に對しても、家内同樣、友達同樣のやうな口の利き方で、これは好人物でありました。

或晩、家中、店先の涼臺で、大河から吹く風を納れて、種々無駄話をしてゐました折柄、師匠東雲師は、私に向ひ、

「幸吉、お前も仕事ばかりに精出してゐるのは好いが、何か一つ遊藝と云つたやうなものを稽古して見たら何うだい。俺は東雲師匠の傍にゐて、矢張り彫物をする外には何一つ是と云つて坐興になるやうなことを覺えもしなかつたが、人間は、何か一つ、義太夫とか、常磐津とか、乃至は歌澤のやうなものでも、一つ位は覺えてゐるのも惡るくないものだぜ。今の中はこれでも好いが、年を老つてから全くの無藝でも變テコなものだよ。私なぞもいろ／＼の寄合なぞの席で藝無しで困ることが度々ある。」

など云ひ出され、それから師匠は、仕事ばかりに熱中するは結構なれども、そればかりでは彫刻でもやらうといふものには、頭が固くなるとも云へる。それで、何か氣晴らしの緩和劑として、遊藝をやつて見よ。お前の性質ならば間違ひもあるまいから、など至極打解けたお言葉に、私も十八九の青年のことゝて心動き、何か一つ自分もやつて見やうかな、といふ氣持になつた。

併し、私は聲を出して歌を唄ふ方のことは、親から嚴しく止められてゐる。此は例の富本一件で、腹に滲み込んでゐることであるから、聲の方の藝事は問題ではないが、聲を出さない方の藝事ならば、師匠の申さるゝ通り、やつて見ても差しつかへもなからうといふことを考へました。其所で私は偶然思ひ附いたことがあつたので、此は旨い考だと思ひました。

其頃、師匠の家は駒形(今の鮨屋の眞向ふ)にあつて表通り、裏は駒形河岸、河岸の家の尻と表通の家の尻とが相接してゐて其所に長屋の共井戸が、丁度師匠の家の臺所口にある。隣家は津田といふ小兒科の醫者、その隣りが舟大工、その隣りが容居であつたが、近頃其所へ越して來た母娘の人があつた。此は徳川の扶持を離れた武家出の人で、母娘共に人柄であつたが、その娘の方が踊の師匠を此の家へ來てから始めてゐる。私が不圖思ひ附いたといふのは此れで、此所へ踊の稽古に行つて見やうかと思ひ立つたのであります。

併し、私は、今日迄、さういふことなど考へて見たこともな

い生初心な若者故、いざ行くとなると氣が差して中々行き澁る。が、或晩、晩飯を濟まし、裏口から、酒の切手を手土産にして思ひ切つて出掛けて行つた。何んだか冷汗を掻く思ひで敷居を跨ぎ、御免下さいと云つたものである。すると、應對に出たのが母親の人で、武家出のことゝて、芝居にでもあるやうな鹽梅で甚だつきが惡るい。

「何か御用でお出でどすか。」

と、云つたやうなことで、一寸挨拶に困つたが、實は踊の稽古をして貰ひたいので出ました、と自分が直ぐ表通りの佛師屋の弟子であることを話すと、なるほど、お見掛けしたお顏だが、お見それして失禮です。しかし、斯うしたお稽古はお宅のお師匠さんのお許しが無くては、後でまた面倒が起りますと、申譯がありませんから、など中々固苦しい。私は師匠から勧められ許を得てゐる旨を答へると、

「それでは、まあ、よろしいでせうが、斯ういふことは無闇と誰でもが遊ばすことでもないから……」など物堅く、やがて、一應、娘のその踊の師匠といふ人に引合はされなどしてから、

「まあ、お遊びのつもりで、一晩、二晩は御覽なすつてお出でたさい、今、お弟子の若い人が稽古をしますから。」

と話してゐる處へ、若い男の弟子が來て、そろ〳〵稽古が始まることになつた。

私は部屋の隅の方へチョコナンと正坐り、どんなことをするかと見て居りますと、やがて、お袋さんが地を彈き出すと、その若い男の弟子が立つて踊り出した。娘のお師匠さんが扇子で手拍子を取つて、何んとか聲を掛けると、若い男は變な腰つき手つきをして一生懸命に踊つて居るが、その狀態の變テコなことゝ云つては實に齒が浮き、見てゐても顏から火が出るやう……笑止と云つて好いか、馬鹿々々しいと云つて好いか、とても顏を上げて正面に見られた圖ではありません。

私は、飛んだ處へ輕はづみに飛び込んで、飛んだことをしたと、後悔の念やら、慚愧の冷汗やら、散々なことでありましたが、それにつけても思ふには、男と生れて、斯んな馬鹿氣た眞似の出來るものではない。一足飛びに上手になつて、初手から立派に踊が出來れば兎に角、斯んなことを毎晩見せられたり、やがては自分も斯んな腰附手附をして變挺極まる仕草をしなければならんとは、とても我慢の出來るわけのものでは無い。斯んなことで時間を費す位なら、夜業でもした方が餘程增しだ、と思ひ出すと、もう、とても大儀で、其所へ坐つてゐることが出來ず、とう〳〵中途で、挨拶もせず、こそ〳〵と其部屋を逃げ出して歸つて來て、ホツとしたことがありました。

それから、翌朝、裏の井戸へ顏を洗ひに行くにも、そのお袋さんが出ては來ないかと心配で、松どんに水を汲んで貰って井戸端へ出られないなど散々氣を揉みましたが、先方では、何か私に對して粗忽でもあつたかなど物固い人達とて氣にし、何ういふ譯で中途で歸られたか、心配をしてお袋さんが、師匠の家へ申譯に來るやら、師匠の妻君が云ひわけをするやら、師匠はまた私に、揶揄半分に、一遍切りで逃げて歸るなぞ笑ふやら、まことに馬鹿々々しいことであつた。

要するに、師などいふことは、眞面目に云ふと、私の性に合はなかつたものと見える。其頃ほひ、此の母娘のやうに、武士の家庭のものが生計の爲に職を求め、いろ／＼をかしい話、氣の毒なはなしなど數々ありました。

年季あけ前後のはなし

さて、今日から考へて見ても、當時私の身に取つて、いろいろな意味に於て幸福であつたと思ふことは、師匠東雲師が、まことに良い華客場を持つて居られたといふことであります。

例令ば、此前お話したやうに、札差しの中では、代地の十一屋、天王橋の和泉屋喜兵衛、伊勢屋四郎左衛門など、大商人では日本橋大傳馬町の勝田といふ荒物商（此は前の話の件で私が師匠の命で使に參つた家）山村仁兵衛といふ小舟町の砂糖問屋、同所堀留大傳（砂糖問屋）新川新堀の酒問屋、吉原では彦多樓尾張、佐野槌、藝人では五代目菊五郎、市川小團治、九藏と云つた團藏、それから田舍の方では野田の茂木醤油問屋など、孰れも上華客の方でありました。

武家の方は割合少なくて、町家の方が多かつた。此等の人々の注文は孰れも數寄に任せた贅澤なものでありますから、師匠自ら製作するのを見てゐても、私に取つては一方ならぬ研究となる。また手傳ふとしたら何更のこと、力一杯、腕一杯に丹念に製作するので、幾金で仕上げなければならないなどいふきまりもなく、充分に材料を撰み、日數を掛けてやつたものであります。隨つて、それに附屬する塗物、金具類に至つても上等なものを使ふこと故、其方へも自然私の目が行屆く。此はまことに師匠のお蔭で、今日考へても私には幸福なことでありました。また、名あるお寺の仕事もしましたが、此等は一層吟味緊密がやかましいので、師匠が苦心する所を實地に見て、非常に身の爲となつた。それに當時は私も專ら師匠の仕事を手傳ひ、また自分が悉皆任かされてやつたと云つても好いものもあつて、自分の腕にも胸にも少なからず爲になつたのでありました。

斯くて丁度私の年齢は二十三歳になり、その春の三月十日にお約束通り年季を勤め上げて年明けとなりました。即ち明治七年の三月十日で文久三年の三月十日に師匠へ弟子入りをしてから正に丸十一年で(禮奉公が一年)年明け即ち今日の卒業をしたのでありました。

で、師匠も大きに此を喜んで呉れられ、當日は赤飯を炊き、肴を買つて私の爲に祝つてくれられ、私の親達をも招かれました。其時父兼松は都合あつて參りませんでしたが、母が參り、師匠の前で御馳走になりました。其時師匠は改めて私に向ひ、將來に就いて一つの訓戒をお話しであつた。

「先づ、兎に角、お前も十一年といふものは、無事に勤めた。さて、是よりは一本立ちで獨立することゝなれば、また萬事につけて趣が異つて來る。それに附けていふことは、何よりも氣を許してはならんといふことである。年季が明けたからと云つて、俺はもう一人前の彫刻師となつたと思ふてはいかぬ。今日までは先づ彫刻一通りの順序を習ひ覺えたと思へ。是れからは古人の名作なり、また新らしい今日の名人上手の人達のものに就いて充分研究を致し、自分の思ふ所によつていろ／＼と工夫し、さうして自分の作をせねばならぬ。それにつけて、將來技術家として世に立つには少時も心を油斷してはならぬ。油斷は大敵で、油斷をすれば退歩をする。また慢心してはならん。心が驕れば必ず技術に上達せぬ。反對に下る。されば、心を締め氣を許さず、謙だつて勉強をすれば、仕事は段々と上つて行く。また、自分が彫刻を覺え、一人前になつたからと云つて、それで好いとは云はれぬ。自分が一家を爲せば、また弟子をも丹精して、種子を蒔いて、自分の道を傳へる所の候補者をこしらへよ。そして立派な人物を自分の後に殘すことをも考へなくてはならぬ。お前の身の上に就いては更にいふこともないが、此れ丈けは技術の爲に特に話し置く。」

斯う東雲師は諄々と私に向つて申されました。私は、如何にも御もつとものお話故、必ず師匠のお言葉を守つて今後とも勉强致します旨を答へました。

すると、師匠は、至極滿足の體であられたが、更に言葉を繼ぎ、

「お前の名前のことに就いてゞあるが、今後はお前も一人前となることゆゑ、名前が幸吉ではいけない。彫刻師として彫刻の號を附けねばならぬ。就ては、お前の幼名が光藏といふから、その光に、わたしの東雲の雲の字を下に附けて光雲としたがよろしからう。矢張り幸吉のコウにも通つてゐるから……」

と申されました。

此の事は私も不斷から、さうも考へ居り、又、その考へを師匠にも話したことなどあつたのでしたが、今日此の場で、師匠は改めて、私に光雲の號を許して與れられて斯く云ひ渡されたのでありました。私は無論のこと、母も大によろこび、お禮を申述べ、其日は母と一緒に、十一年振で我家に歸つて父にも其由を委しく話しました。父も非常に喜びました。

然るに人情といふものはをかしなもので、年季が明けて一旦我家に歸つては來ましたが、元來、十二歳から十一年間、師匠の家に居り、殆んど内の者同樣にされ、我が家のやうに思つて居つたことゝて、私の心は生みの親よりも却つて師匠になづんで居ります。それに家に歸つても、父の商賣は違つて居つて、何んとなく、私の氣持が自分の家に落附かぬ。一日師匠の家に居りませんと、どうも工合が惡るいやうな氣持であります。それで早速、師匠の家へ出掛けて行きますと、師匠は、是から先何うする考かといふ。私は、自分の心持を話しますと、師匠はお前が相變らず家に來てくれるなら何より好都合だとのこと、私に取つては尚更のことですから、早速翌日から參る旨を答へますと、親御達の考へもあらうから、差つかへなければ來てくれとの事に親達も異存なく、再び私は師匠の家に寢泊りして從前通り仕事することになりました。

併し、もはや、私も年季明けの身であれば、師匠も年季中のもの同樣に私を取扱ふことは出來ぬ。其處で、私の手間のことに就いて相談がありましたが、一日に一分(今の二十五錢)一月三十日の時は七圓五十錢、三十一日の時は七圓七十五錢の手間を師匠から貰ふことになりました。私も滿足でありました。當時立派な下職としても一分が相當、年季明け早々の私に一日一分が貰へるか何うかと内心でも考へてゐたことであつたが、師匠が私に對しての取扱方が立派な下職並みにして與れられたのでありました。當時佛師の手間は隨分安い方で、一日一分は上等の職人でありました。右の事など父に話しますと、

「それは結構である。我々は此の儘でどうやらやつて行けるから、お前はお前で隨意に彫刻をやれ。」

との事で、萬事私の都合はよろしく相變らず師匠の家で仕事をして居りました。

其所で私は自分も、もはや年季中の者ではなく、多少手間賃を貰ふようになつたこと故、相當兩親のことも考へねばならぬと思ひ、其一月の手間七圓五拾錢の中から半額は親の許にやり、半分は貯蓄して何かの時の用意にすることにしました。手元にあれば無駄遣ひをするから、それを師匠に預けることにした。當時はまだ銀行のこともよく分らず、郵便貯金などいふことは

更にありませんから、師匠に負けるのが一番確かでした。諸色の安い時のことであるから、一分といふ額は、一日分親子四人位で、どうにかやつて行けたものであります。

徴兵適齢のはなし

兎角する中、爰に降つて湧いたやうな事件が起りました。

明治六年に寅歳の男が徴兵に取られた。それはそれ切りのことゝ思つて念頭にも無かつた。その當時の社會一般に、人民が政治といふことに意を留めなかつた證據で、斯ういふ事柄に關する世の中のことは一向分らぬ。もつとも徴兵令はその以前に發布されて新らしい規則が布かれてゐたのであらうが、新聞と云つても讀賣りが半紙位のもので行るか無いかといふやうな時代、徴兵適齢が頭の上に來てゐることに私は氣が附かなかつた。

處が、明治七年の九月に突然今年は子歳のものを徴集るのだと云つて、扱所と云つたと思ふ、今日の區役所のやうなものが町内々々にあつて、其所から達しが私の處へもあつたのです。成程當年二十三のものは子歳で、私は正にそれに當つてゐる。何時何日に扱所に出頭して寸法や何やかを調べるといふ布令である。此は大騷ぎ。今日から思ふと迂濶極まることではあるが、今日とは物情大變な相違であるから、我々は實に意外の感。

先づ第一に親達の驚き。夜もおち／＼眠られぬといふ始末。また師匠の心配。私が兵隊に取られるとあつては、容易ならぬ事件。仕事の上から云つても、仕事先のこともあるから、今、私を取られては仕事其他種々差支へがあらうといふので、當人の私よりも師匠が先づ非常の心配をしました。

其所でいろ／＼調べて見ると、其所にはまた樂なことがある。云はゞ逃れ道があるのです。といふは、總領は取らぬといふことです。私は事實は總領のことをしてゐるが、戸籍の上では次男でありますから、此の逃道は何んにもならない。私は兵隊に取られる方である。所が、また、次男でも、親を一人持ち、戸主であれば取らぬといふ。それから、もう一つ、二百七十圓政府へ上納すれば取らんといふのです。

それで、金錢のある人は金を出して逃れる道をした。其當時何んでもない爺さま婆さまが、思ひ掛けなく、金持の息子の養子親となつて仕合はせをしたなどいふ話があつて、此を「徴兵養子」と稱へたものです。毎年此の徴兵令のことは打ち續いて行はれるのださうで、國家の爲、更に忌み嫌ふべきことではないが、師匠の考へでは、幸吉が此れから三年の兵役を受けることになると、今が正に大事な所、是から一修業といふ矢先へ、劍突鐵砲を肩にして調練に三ケ年の長の月日をやられては、第

一技術の進歩を挫き、折角の是迄の修業も後戻りする。親達の心配も無ぞかし。是は何してもその抜け道を利用して何んとか此の場を切り抜けて始末をせんければならないと師匠東雲師が先に立つて、いろ〳〵苦心をされ知合ひのうちに斯んなことを引受けて奔走する人があつて、其人に相談をすると、次男なら假りの親を立てれば好い。誰か假りの親になる人がないかといふことであつた。其所で師匠は直ぐに思ひ付き、

「それは格好な人がある。私の姉悦が、今日まで獨身にて私の家に居る。それに一軒持たして、幸吉を養子に、同時に戸主にしては如何でせう。」

といふと、其人は、それが好からう、然し、日限が迫つて居るから大急ぎといふ。で、師匠は右の趣を姉お悦に話すと、勿論承知で、早速、堀田原に、かねてから師匠が立退きの用心の家を一軒持つてゐた其家へ引移ることにしたのであつた。此の事に就き萬事其人が始末を附けて呉れました。

堀田原の家は二間あつて、物置が廣い。お悦さんが籍を移し、私が養子となり、今迄中島幸吉であつた私が高村幸吉となつた譯であります。私が高村姓を名乗るやうになつたのは全く徴兵よけの爲であつたので、此で一切始末が附いて、私は兵隊にならずに濟んだのでありました。今から考へると是はあまり良い事では無いやうです

右の如く、萬事都合よく行つたので、師匠は、廣小路の萬年屋の隣りの花屋といふ料理屋に骨を折つてもらつた彼の人を招いてお禮に夜食のふるまひをしました。私も少し預けてあつた金錢もありましたので、それを當夜の費用に充てるやう師匠に申しましたが、師匠は自分で凡てを支拂ひました。當夜の勘定其他總てゞ十五圓位掛つたやうであつた。

其時、その席で、師匠が彼の人に話してゐるのを私は聞いてゐたが、若し幸吉が悦の養子になれないとすれば、自分は二百七拾圓政府へ納める積りであつたが、お蔭で手輕く濟んでよかつたなど云つて居られました。思ふに師匠は私の爲に大金を用しても兵隊に取られぬやうにしやうといふ決心であつたと察せられました。師匠が如何に私のことを考へてゐられたか、今日でもその當時のことを思ふと師恩の大なることを感ぜぬわけに參りません。

さて、私はお悦さんの養子といふ名義になつたのですから、私はお悦さんに對し養子であるから、何か形をと考へて、月々一圓五十錢を小遣に差上ることに師匠に話しますと、それは自

分として甚だ困る。姉は私の親替りに私が何所迄も見る積り、今度の事は名義丈けだから別に心配はいらぬ。併し強ひてお前が氣が濟まぬといふならば、堀田原の家の家賃といふことにして、それを受けやう。そして、それを姉の小遣ひに差上げることにしやうと義理堅く、私は自分の志が通れば好いことだからさういふことにして貰ひました。

何かにつけて、東雲師は義理堅い人であつた。

家内を貰らつた頃のはなし

私の年季が明けると同時に、師匠東雲師は先づ私の配偶者のことに就いて心配をして居られました。もつとも年の明ける前から心掛けて居つたやうです。此は親達も感じてゐたことでありませう。母も其頃は大分弱つて居りましたので、相當なものがあれば、早く身を固める方がよいと思つて居つたことゝ思はれます。

併し、此の方のことは私は至つて暢氣で、能く考へて見る程の氣もありませんでした。といふは、兩親が揃つてゐて、其上に家内を持つとなると、責任が三人になる。其上四人五人になることゝ思ひ、只今の自分の境遇として、經濟上、それ丈けの責任を負ふことは大分荷が重い。で、今の所、もう三四年も働いて、聊か目鼻が明き、技倆も今一段進歩した時分、配偶者のことなど考へて見ても決して遅くはないと思つてゐたのであつた。

それに當時の自分では、本當に、自分としても、まだ自分の技倆が分らぬ。他人の中へ出て、愈々一本立ちとなつた場合、如何いふ結果になるものか、どうか、まだ、今日の場合、浮々と配偶者のことなどに係はつて居ることは出來ないといふ考であつたのでした。

けれども、師匠は私がどう考へてゐるかは頓着もなく、いろいろ相當と思ふやうな人を見つけて來たり、時には師匠の家へさうした人を置いたりしたこともあつた。が、私は、今申す通りだから更に顧みず、師匠の志を無にして居つた。

徴兵のことも方附き、配偶者の話が頻りに師匠や師匠の妻君の口から出ますけれども、孰れも私は承知をしません。私は心の中で、とても、今の身で、浮ッかりした所から妻など貰へはしない。自分のやうな九尺二間のあばら家へ相應の家から來て呉れてがあらうとも思はず、よし、またあると假定して上ツ飾りするのは御嫌。と云つて、つまらない權兵衛太郎兵衛の娘を妻には是も嫌也。第一、母の面倒を見て手助けとなることが一番の大事な役目であるから、その注文にはまつたものが、其所等にあらうとも思へず。また自分の取り前も考へ、境遇を考へな

どすると、全く配偶者のことなど脳中に置くがものはなかつたのであつた。

ところが、其中に、不圖、一つの話があつた。江戸彫刻師の随一人と云はれた彼の高橋鳳雲の息子に高橋定次郎といふ人があつて（此人は當時は研師であつた。後に至つて私は此人と始終往復して死んだ後のこと迄世話をした）其妹にお清とい婦人があつた。師匠は此の婦人を如何かと私に相談をしました。高橋家は彫刻師としては名家であり、定次郎氏は私とは年來の知己で、性情技倆共に尊敬してゐる人である。その人の妹娘といふのであるから、私もむげに嫌といふわけにも行かない。が、前申す通り境遇上、まだ妻を娶るに好都合といふ時機へも來てゐないのであるから、私は生返辭をしてゐた。定次郎氏の家は神田富山町にあつて、私も折々同氏を訪問し、妹の人とも顏は見知つて居る。器量も氣立ても好かりさうだなど自分も考へ、明ら様に斷りを云ふわけにも行かず、有耶無耶の間に日が經つて居ります中に、その娘の人は、不計、不圖した病氣で亡くなつてしまひました。

その年は暮れ、明けて明治八年、私は二十四となる。

半年ばかり、一時結婚談も中絶してゐましたが、またその話が持ち上る。同時に、私として、どうも、家内を迎へなくてはならないやうなことになつて來ました。

此は今迄、大分弱つて居られた母が、ドツと臥床に就くといふ程ではないが、大變に氣息切れがして、狭い家の中を掃くのさへ、中腰になつて、せい〳〵と云ひ、餘程苦しいやうな鹽梅である。私は、どうも、此れは不可ないと思ひ、何んとかせんければと心を痛めました。先づ、何よりも滋養分を澤山差上げるがよろしいと思ひ、其頃、廐橋側に富士屋といふ肉屋があつて、其所の牛肉が上等だといふので、時々牝牛の好いのを一斤づゝ買つて母へ持つて行つて呈げました。其頃、私は師匠の家に寢泊りしてゐた。當時は肉の佳いのは牝牛と云つたものです。ロースだのヒレーだのといふことは知りません。母は悴の心盡しですから、魚もきらひな人が此れ丈けは喜んで食べ、味噌や醬油につけなどして貯へて食べたりしました。けれども、醫師にもかけましたが、矢張り加減はよろしき方には向はず、段々大儀が增す計り故、遂に私も意を決し、此は母の爲に面倒を見るものが必要であると考へて來ました。所で、母の手助けをするには、女中を置いても事足ることではあるが、女中と云つてもお大層であり、また心身になつて母に盡すには、他人任せで

は安心が出來ず、矢張り、いつそ、此は家内を貰ひ、それに一任した方が一番確かであらうといふ考から、私は遂に家内の必要を感じ、今度は自分から妻を持たうと考へ出したのでありました。

此所で、話が八重になつて少しごた〳〵しますが、一通り順序を話します。

養母の住居である堀田原の家には養母お悦さんが住んでゐて、時々私は其所へ歸つて居つた。所で、此のお悦さんの妹が前述のお勝さん、其また妹がおきせさん（東雲師の末の妹）といふ人があつて、小舟町一丁目の穀問屋金谷善藏といふ人の妻となつてゐる。夫婦に子が無いので、善藏の兄に當る杉の森の稲荷地内（人形町の先）に當時呉服の中買ひをしてゐた金谷淺吉といふ人の娘お若といふのを引取つて養女にしました。

此はお若の父も亡くなり、間もなく母も世を去つて頼りなき孤兒となつたので、引取り養女としたのであつた。（お若は金谷善藏夫婦からは姪に當る）

然るに、金谷善藏がまた病氣になつたが、家は穀問屋で、御本丸へ出入などあり、中々手廣にやつてはゐたが、斯うした町家の常で、店は手一杯廣がつてゐて、充分氣樂に寢て保養をする場所がないので、妻のおきせさんが心配をして、堀田原にゐる姉のお悦さんの許へ來て、

「姉さん、これ〳〵の都合ゆえ、どうか、此方は人少なで廣いから、良人の保養の爲に一室借して下さいな。」

といふ譯で、姉妹のことで、お悦さんが早速承知をする。善藏夫婦がその家へ移つて來て、保養をすることになつたのです。

私は自分の養家のことですから、時々歸る。おきせさんが感心に良人の看病をしてゐる。私も氣の毒に思ひ、世話といふ程のこともしないが何かと心を附けて上げました。それを病中の善藏さんが大變によろこんで、私を何より頼としてゐる。其中遂に善藏さんは病重り、氣息を引取る際になつたが、其際、病人はいろ〳〵と世話になつたことを謝し、なほ、此上、自分の死後を頼むといふのであるらしいが、もはや最後の際でありますから、何を云はれるか、確とは言葉も聞き取れませんが、何しろ、自分の亡き後のことなど私へたのむといふことであることだけは分る。妻のおきせさんも附き添ひ、いづれも涙の中に、病人は繰り返し私に頼む、頼むと云ひ居りますので、私も、病人の心を察し、快よく、畏まりました。御心配のないやうにと云ひ慰めてゐる中に、遂に病人は其儘氣息を引取つてしまひま

した。

それで、おきせさんは未亡人になり、養女お若は血緣の叔父（即ち養父）に逝かれ、まことに心細いことゝなりました。併し相當遺産もあり、また里方（東雲師の家）もありますから、未亡人になつても困ることもないが、女の手一つでは穀屋を續けて行くことも出來ないので、店を仕舞ひました。

其所で、何んだか、おきせさんは中途半ぱな身になつてゐるので、養女お若の遣り場が無いやうな有樣になつてゐる。それで東雲師は、俺の家へお若を伴れて來て置け、何んとか世話をしてやらうなど云つて居られるのを私は知つて居りましたが、何んとなく、斯うした境遇に落ちて來たお若の身の上が氣の毒に思はれてなりませんでした。

さて、私は、自分の境遇を考へると、前述のやうな羽目になつてゐる。どうしても、此際、家内を貰はなければならない都合になつてゐる。と云つて上ツ冠りで、妻の身内の方から何かと助けて貰ふやうな狀態になることなどは好ましくない。今の自分の境遇相當、自分にもさして懸隔が無く、そして氣立ての確かりした、苦勞に耐え得る程の婦人があれば、それこそ、今が今と云つても、家内にしても差し閊へが無いと思つてゐるところへ、丁度、此所にお若といふ氣の毒な境遇に立つてゐる婦人を見出したのであつた。その娘は、今、何處と云つて行く所が無くて困つて居る。さて、自分は親が二人、まだ全く一本立ちといふには至つて居らぬ。而かも母は病氣で、家とても赤貧しい。斯ういふ處へ嫁に來るには、此の娘ならば丁度好くはないか。相當苦勞もして居れば、貧乏世帶を張つても、また病人の姑に對しても相當に旨くやり切つて行くかも知れない。どうも、あの娘ならば、それも出來さうである――と斯う私は思ひ立つたのであつた。

併し、自分はさうは思つても、先方の考へはどうであるか、薩張り分らぬ。只、どうも、よさゝうに思はれることは、お互ひに何もないこと、……無財産であることが第一面倒でないから、持つとすれば自分の妻には此の婦人がよからうと心を定めました。此は誰から勸められたのでも無く、全く自分の發案であつた。

其所で私は先づ此の考を母に話しました。すると、母もよろこび、此の緣を纏めたいといふ。さて、さうするとなれば、お若は、矢張り師匠の氣息の掛つてゐるものであるから、師匠にも一應相談をしなければならないが、其所を何んとなく、母から師匠に、母丈けの考としてお若を貰

たい旨を話して貰ふやうにたのみました。此は、さうする方が穩當でよかつたからでありました。

或日、母が病中乍ら、師匠の家へ出掛け、右の一件を話をすると、師匠は、是はと云つて大喜び。實は、お若のことはいろいろ心配をして居つたが、其所迄は一寸氣が廻らなかつた。燈臺元暗しとは此の事だなど、師匠は此方からの申込みを意外と感じてよろこんで、若し幸吉が貰つてくれる段になれば、此に越したことは無いが、併し、幸吉がお若で承知をして吳れるであらうか。元々、私は、此の組合はせは問題にしてゐなかつたのだが……お袋さん丈けの考とあつては、幸吉の承諾がどうも危まれる――など師匠の挨拶。所が、元來、當人の幸吉が承知の上で、自分で書いた筋でありますから、此れ程確かなことはないので、母も、幸吉に萬異存はございますまい、と云つて、大喜びで歸つて參りました。

話は早く、早速此の縁談は纏りました。

條件は、家が貧乏であること、母親が病人であること、此の二つを充分承知の上、よくやつて貰ひたいと云ふのであつた。娘の方で、これに不足をいふ境遇ではないことは勿論のことでありました。

其所で、媒妁人が無くてはならぬといふので、誰に頼むかといふことになつたが、私とて、まだ是といふ友人も出來ない時分、誰に頼んだものかと考へましたが、思ひ出したのは彼の高橋定次郎氏であります。此の人は私がかねてから、その人格其他を尊敬してゐる知人であるばかりでなく、先年、その妹の人とのこともあつて、何かと縁がつながつて居るやうに思ひます所から、媒妁人になつて貰へば、仲人親といふ位、若くして此世を早くした妹御の爲にも何かと由縁があるやう感じまして、右の義を師匠に話しますと、それは好い人を見つけた。早速頼むがよからうといふので、高橋氏に話すと快諾してくれましたので、形ばかりの結納を取り交し、明治八年の十一月七日に、九尺二間の我家で結婚の式を擧げたのでありました。

當時、高橋定次郎氏が自ら書かれた結納の書附けが今以て殘つて居る次第であります。當時、私は二十四歲、お若は十八でありました。

其夜のお客は、師匠東雲先生、お若の養母おきせさん、仲人の高橋定次郎氏、私の兄の家内に、兩親、我々兩人、其他一二名と覺えて居ります。

此の結婚式を擧げて來年が丁度五十年に相當致します。

堀田原へ引越した頃のはなし

私は結婚後稍らく親の家へ歸つてゐた。丁度それを境にして彼の金谷おきせさんは穀屋の店を疊んで堀田原の家に世帶を引取りました。

此家は私が戸主で、養母が住んでゐるけれども、それはほんの名義丈けのことであるから、萬事は師匠の意見、またお悦さんおきせさんなど姉妹の都合の好い儘に任せ、私は自分の家なる前回度々申した彼の源空寺門前の親達の家に居ることになりました。

もう此頃では北清島町といふ町の名前など附いてゐた頃であつた。

師匠東雲師の住居は駒形にあつたが、其時分藏前の北元町四番地へ轉宅することになつた。

此の家は舊札差しの作へた家で、間口が四間に二間半の袖藏が附いて居り、奥行は十間、總二階といふ建物で、木口もよろしく、立派な建築であつたが、一時牛肉屋になつてゐたので隨分甚く荒らしてあつた。此れが賣物に出たのを師匠が買ひ取つたのであるが、其頃の賣買ひが四百圓であつたとは如何に家屋の値段が安かつたかといふことが分ります。地面は淺草茅町の大隅といふ人のものであつた。師匠の手に渡ると、造作を仕直し充分に手入を致しましたが、是等の費用一切を精算して七百圓で上りました。當時江戸の佛師の店としては中々立派たものでありました。

私は毎日辨當をもつて北清島町から此の藏前の家へ通つて居つた。道程が可なりにあることで、雨や雪の降る時は草鞋穿などで通ふこともある。朝は早く、夕方は手元の見えなくなる迄仕事をして、それからてく／＼家に歸り、夜食を濟まし、一服する間もなく又候夜なべに取り掛るといふ仕末であつた。此といふも兎に角仕事に精を出さないでは、一日の手間二拾五錢では一家四人暮しの世帶を張つてゐては、よし父には父の取前もあるとは云つても、老人の事で私の心がどうも不安であるから、決まつてゐる手間の上に夜業をして餘分に幾何かを働いたやうなわけであつて、殆んど二六時中、仕事のことに沒頭してゐることであり、また朝夕の行き歸りの道も中々遠くもある處から隨分とそれは骨が折れました。さうして小一年も斯ういふ状態が續いて明治九年も暮れてしまひましたが、其年か翌年であつたか、私達一家が全部堀田原の前へ轉宅することになりました。

これは余谷のおきせさんが一旦世帶を堀田原へ移して一人でゐましたが、まださうお婆さんになつたといふではなく、再縁のはなしが出て或家へ嫁入りすることになつたので、随つてお悦さんが一人になること故、此の方は藏前の師匠の方へ手傳ひがてら一緒になるといふことになり、堀田原の家が明くによつて、師匠は私に其家へ來てくれては如何だといふ。私の方も堀田原へ移れば家も是迄よりは手廣になるし、通ふ道程も四分の一位になつて都合もよいので、師匠の意の儘に堀田原へ全部移轉したのであつた。

私に取つて思ひ出の多かつた源空寺門前の家とは、此れで縁が切れたことになるのです。

初めて博覽會の開かれた當時のことなど

堀田原から従前通り私は相更らず師匠の家へ通つてゐる。すると、明治十年の四月に、我邦で初めての内國勸業博覽會が開催されることになるといふ。所が、その博覽會といふものが、まだ一般其頃の社會に何んのことかサッパリ様子が分らない。實にそれはをかしい程分らんのである。今日ではまたをかしい位に知れ渡つてゐるのであるが、當時は更に何んのことか意味が分らん。それで政府の方からは掛りの人達が勸誘に出て、諸商店、工人などの家々へ行つて、博覽會といふもの丶趣意などを說き、また出品の順序手續きといつたやうなものを詳しく世話をして、分らんことは面倒な厭はず、說明もすれば勸誘もするといふ風に、中々世話を燒いて廻つたものであつた。

當時、政府の當路の人達は夙に海外の文明を視察して來て居つて、博覽會などの智識も充分研究して來られたものであつたが、其等は當局者のほんの少數の人達丈けで、一般人民の智識は、さういふことは一切知らない。その見聞智識の懸隔は官民の上では大層な差があつて、今日では一寸と想像の外であるやうな次第のものであつた。

右の通りの譯故、博覽會開催で、出品勸誘を受けても、どうも面倒臭いやうで、困つたものだといふ有樣でありました。所が師匠東雲師も美術部の方へ何か出すやうにといふ催促を受けました。師匠も博覽會が如何なるものであるか、一向分つて居りません。それでどんなものを出して好いかといふと、彫刻師の職掌のものなら、何んでもよろしい出してよい。從來製作して居るものと同じものでよろしいといふ。それではといふので師匠は白衣觀音を出品することにしたのでありますが、其所で師匠が私に向ひ、今度の博覽會で白衣觀音を出すことにしたから、此は幸吉お前が引受けてやつてくれ、他の彫刻師達もそれ

これ出品することであらうから、一生懸命にやつてくれ、といふことでありました。

私は斯うした晴れの場所へ出すものだといふことだから中々氣が張ります。師匠の言葉もあることで、腕限りやる積りで引受けて、いよ〳〵其製作に取り掛つたのであつた。

その白衣觀音は今日から考へても別段目先の變つたものではなく、從來の型の如く觀音は置物にするやうに製作へましたが、厨子などは六角形塗箔で、六方へ瓔珞を下げて、押し出しは中々立派であつた。それでその賣價はといふと、是が不思議な位のことで、觀音は大きさが一尺で、材は白檀、充分に手間をかけた念入りの作。厨子は是又腕一杯に作つてある。それで賣價七拾圓といふのであつた。今日では箱丈け樅で拵へてもそれ位の代價は掛るかも分りませんが、何しろ一ヶ月其仕事に掛り切つてゐても、手間は七圓五拾錢といふ時代であるから、自然さういふ賣價が附けられたことゝ思はれます。兎に角お話しにならぬ程安いものでありました。

さて、博覽會は立派に上野で開會されました。博覽會がどんなものかといふことを一切知らなかつた其頃の社會では多大の驚きであつたことですが、此等のことに就いての話はまた他日に譲るとしまして、兎に角、博覽會も滯りなく半ば過ぎた頃、或日、當會から師匠の許へ呼び出しが來ました。それは何時何日に出陳の品に賞が附いて、その賞牌の授與式があるのだといふことです。併し、師匠、私なども、賞が附くといふやうなことを一向知らぬ。只、拵へたものを出して置いた丈のものであつたが、師匠は呼出しが來たので、當日は袴羽織で(師匠の家の紋は三ツ柏であつた。)上野の會場へ出掛けて行きました。授與式が何ういふ有樣であつたかは私は知る由もないが、受けた賞牌は龍紋賞であつた。所が、またその龍紋賞が好いのか惡るいのかも師匠は知らない。呉れるものを貰つて來たといふ有樣であつた。

當日は、私は何かの都合であつたか、堀田原の家に休んで居りました。日暮れ少し前頃に、私の家の表ての這入口に地主の岡田といふのがあつて、その次男が私の宅へ飛び込んで來て、突如に、

「高村さん、あなたはえらいことをやつたね。」

と頓狂な聲で云ひますので、私はびつくりして、

「何を私がやつたんです……」

と譯が分らんから云ひますと、

「何をやつたつて、大したことをやつたぢやありませんか。君の觀音は龍紋賞を得たのですよ。」
「さうですか。その龍紋賞といふのは何ういふ賞なのですね。」
　など、私は流石に自分のことの話であるから聞いたりする。岡田の次男は豫てから、隣りづからのことで、私が白衣觀音を製作してゐたことなどを知つて居り、師匠の代をやつてゐた種を知つて居ることだから、私の手柄のやうに褒めそやして居る。そして、今日の新聞に(今の號外のやうなもの)其事が載つてゐるが、賞牌の一番が龍紋賞で、二番目が鳳紋賞、三番目が花紋賞といふのです。君の觀音は一番の賞牌ですよ、など物語る。私は岡田の云ふことばかりでは信がおけないから、やがて藏前へ出掛けて行くと、師匠は歸つて居られた。
「今日、賞牌をお貰ひなすつたさうですね。」
　私が訊きますと、
「ふむ。龍紋賞といふのを貰つて來た。龍紋といふのが一番好いのださうだ。」
と、師匠は云つてゐられるが、別段その事に就いては氣にも留めて居られぬやうな樣子であるから、私も其限りで家へ歸つて來ました。

　翌日、私は師匠の家で、例の通り仕事をしてゐる。其時分は仕事場は店でなく、二階が仕事場になつてゐて、表二階の方が私、奧二階が兄弟子の政吉の仕事場になつて居つて、皆々仕事をして居ると、表通りを其頃の讀賣が聲高々と讀んで通るのを聞くともなく聞くと、「當所藏前にて、高村東雲の作白衣觀音が勸業博覽會に於て龍紋賞を得たり。」と大聲で讀んで居りますので、一同はそれに耳を澄ますといふやうなわけでありました。それに師匠の家の隣家遠州屋といふ外療道具商でも外療器械を出品し、それが鳳紋賞を得たので、一町内から二軒並んで名譽のことだと、町内を行きつ戻りつ讀賣は讀んで歩いては、師匠の家の前では特に立ち留つてやつて居ります。其頃は事件のあつた時には善惡共にその當事者の家の前で特に聲を張つてやつたもので、藏前では例の高橋お傳の事件などやかましかつたものですが、此れは先づ名譽のことだといふので騷ぎましたから、自然、さういふことが町内の人々、また一般にも噂高くなりましたのでした。
　十年の博覽會も目出度閉會になりましたが、最初博覽會といふものが何んのことであるか一切分らなかつた市民一般も、是で、先づ博覽會の何んなものかを知りましたと同時に、また出品人の中でも、譯か分らなくなつて、面倒かつたり、困つたり

したものも、大きに了解を得、「成程、博覧會といふものは、好い工合のものだ。」など大に讃辭を呈するといふやうな結果を生じました。といふのは、當時、政府もいろ／＼意を用ゐたものと見えて、政府から出品者に對して補助があつたのでした。七拾圓の賣價のものに對しては約三分の一位の補助金が出た上、閉會後、入場料總計算の剩餘金を出品人に割り戻したので、出品高に應じて十圓か十五圓位を各自に下げ渡しました。

斯んなことで、先づ博覧會の評判もよろしく、さういふことなら、もつと高價なものを出品すればよかつた。自家のものは餘り安過ぎたなど、私の師匠なども後で申された位でありました。萬事斯んな譯で、十年の博覧會も一段落ついたことでありました。

それから、今の出品の白衣觀音でありますが、其は、開會當時は其儘であつたが、閉會後間もなく横濱商人の西洋人が師匠の宅へ右の觀音を買ひに來て、定價七拾圓で話がきまり、或日師匠がそれを持つて横濱の商館へ行かれましたが、此の時は丁度東京横濱間の汽車が開通して早々のことで、師匠は初めて汽車に乘つたので、歸つて來られてから、「どうも汽車つてものは恐ろしい迅いものだ。まるで飛ぶやうだ。電信柱はとんで來るやうに見え、砂利は縞に見える。」など膽をつぶして話されました。

店初まつての大作をしたはなし

彼是してゐる中に私は病氣になつた。醫師に掛ると、傷寒の輕いのだといふことだつたが、今日で云へは腸窒扶斯であつた。お醫師は漢法で柳橋の古川といふ上手な人でした。前後二月半程も床に就いてゐました。病氣が癒るとまた仕事に取り掛る。師匠の家の仕事も、博覧會の影響なども多少あつて、注文も絶えず後から後からとあるといふ風で、先づ繁昌の方であつた。私が專ら師匠の代作をしてゐることなども、知る人は知つて居つて、私を認めてゐる人なども自然に多くなるやうな風でありましたが、私としては何處までも師匠の蔭に居るものであつて、よし、多少手柄があつたとしても、さういふことは虚心で居るやうに心掛けて居りました。

師匠は私の名が表面に出て人の注目を惹くやうなことは好まれませんでした。世間の噂に私のことなどが出ても、私の耳へは入れませんでした。

さて、兎角するうち、明治十年の末か、十一年の春であつた

か、日取りは確と覺えませんが、その前後のこと、京橋築地にアーレンス商會といふ獨逸人經營の有名な商館があつて、その番頭のベンケイといふ妙な名の男と逢ふことになつた。

此人は年はまだ二十四であつたが、中々の利け者で、商賣上の掛引萬端、それはきび〳〵したものであつた。私は最初は此人を三十以上の年輩と思つて居つたが、二十四と聞き、自分の年齡に比較して、まだ二つも年下でありながら、知らぬ國へ渡つて、是れ丈け、立派に斬り廻して行くといふは、さて〳〵豪いもの、國の文明が違ふ爲か、人間の賢不肖によるか、孰れにしても我々は慚愧に堪へぬ次第であると、私は心秘かに此の人の利發さに驚ろいてゐたのであつた。

此のベンケイが師匠の家に來るやうになつた手續きといふのは、當時菊地容齋の高弟に松本楓湖といふ繪師があつた。此の人は見上げる程の大兵で、紫の打紐で大たぶさに結ひ、まち高の袴に立派な大小を差して、朴齒の下駄を踏み鳴らし、見るからに武藝者と云つた立派な風采。もつとも劍術なども達者であるとか聞きましたが、當時、住居は諏訪町の湯屋の裏にあつた。アーレンス商會では同商會の職工に仕事をさせるその下繪を此の楓湖氏に依賴してゐたので、今の番頭ベンケイが其衝に當つてゐた所から知合ひの中であつたから、折々、楓湖氏はベンケイを伴れて駒形町時代から師匠の店に彫刻類を見に來たことがあつたが、今度楓湖氏を介して改めてベンケイが東雲師へ仕事を依賴すべく參つたわけであつた。當時の楓湖氏は今日の帝室技藝員の松本楓湖先生のことで、私よりも更に五六年も老齡ではあるが、壯健で谷中淸水町に住つて居られます。每年の帝展へは必ず出品されて居ります。

當日は兩人で來て、仕事を賴むといふので、何ういふ御注文かといふと、唐子が器物を差上げてゐる形を作つてくれといふ。それは何に用ふるかといふと洋燈臺になるので、本國からの注文であるといふこと。高さは五尺位で一對。至急入用であるから、その積りにて幾金で出來るかつもりをしてくれといふ。唐子は生地丈けを作つて與れれば、彩色は自分の方でするといふことであつた。私も丁度病氣全快して師匠の家で仕事をしてゐた時であるから、此等の應對を聞いて居つた。

楓湖氏とベンケイが歸ると、間もなく、師匠は私に向ひ、

「幸吉、今夜、夜食に行かうではないか。」

と云はれるので、私は師匠と一緒に夕方外へ出ました。觀音樣の中店に『燗銅壺』と云つた料理店で夜食をしながら、師匠は少し言葉を改め、

「幸吉、實は、今度、お前に骨を折つて貰はなくちやならないことが出來たんだ。一つ確りやつて貰ひたい。」

今の洋燈臺の注文が來たことを師匠は話されて、一切萬事私に製作の方を仕切つてやつて呉れろといふ相談に預りました。

所が、今も申す通り、丈五尺の唐子で一對といふ注文、今日ではなんでもないが、その當時、徳川末期のドン底の、凡て作品が小さくなつてゐる時代の彫刻界では、丈五尺といふと、先つ中々の大物であつて、師匠の店に於ても、店初まつて以來の大作であつた。それを私が一個の手でそれを製作するといふは容易ならぬ重任、生やさしいことでは此の役目は出來ないのであるから、私も修業の爲にもなることゆゑ、一層勇氣も出て、師匠のたのみを引受けることに承知しました。

話がきまれば、早速つもりをして見ると、店初まつて以來の大作で、隨つてまた店初まつて以來の高價な注文品――凡そ、どの位の値段になつたかといふと、それが、よほどをかしい。一つが百二拾圓、一對で二百四拾圓といふ算盤になつた。もつとも、私の手間一年で百圓にはなりませんでした。是が江戸でも屈指の大店を張つてゐる大佛師東雲の店初めこの金高でありました。

さて、私は愈々製作に取り掛ることになる。

唐子の下繪は楓湖氏の筆になつたもので、それを見本として雛形を作る。所が、その唐子といふものはお約束通り、づんぐりとした身長のもので大層肥太つてゐる。先づその下繪によつて一尺位に彫り上げ、それを師匠に見せますと、是はよく出來たといふ。是ならばベンケイに見せてもよろしからふといふので、其旨を報せると、或日、アーレンス商會のその注文主のお客と、それからベンケイと外に一人で、三人が馬車に乘つてやつて來ました。で、早速下彫りを見せますと、案外で、どうも先方の氣に入らぬやうな風である。何か互に話し合つて批評をして居るが、その客人と覺しき人の表情を見ても氣に入つて居らぬといふことが私達にもよく分る。そしてベンケイの通辯で大體を聞くと、どうも、づんぐり、むつくりしてゐるのが客の氣に入らないのだといふ。つまり、ぶく／＼してゐては不可ないので、もつと、すつきりと丈がすらりと高くなくてはといふのである。師匠はそれを聞いて如何にも不滿の體でゐられる。やがて彼等は馬車に乘つて何かへ出掛けて行きました。多分淺草でも見物に行つたことゝ見える。

彼等が歸つた後で、師匠はぷん／＼怒つてゐられる。

「毛唐人に日本の彫刻が分るものか。氣に入らないなら氣に入らないで止したらよからう。此地で賴んでさせて貰ふ仕事ではない。向ふから賴みに來たのだ。いやならよすまでのことだ。唐子には唐子の約束があるんだ。而かも、此の下繪は楓湖さんがつけたのだ。毛唐人に日本の彫物が分つてたまるものか。」など、其所は所謂名人氣質で中々一刻である。私も、氣を張つて製へた雛形が落第とあつては師にも氣の毒なり、第一自分も氣まり惡い。

「どうも案外な結果になつて相濟みません。」といふより仕方ないのでした。所が師匠は、「お前の粗忽ではない。俺が好いと思ふから此れで結構と云つたのだ。私の責任だ。お前が心配をすることは一つもない。向ふの人間が分らず屋なんだ。」

と、一時は氣をわるくしても、私のことは、斯う云つて、サツパりした人ですから、怒つた後は笑つてゐる處へ、二時間程して再びベンケイが一人でやつて來ました。師匠の不滿な顏を見ると、にこ〳〵しながら、

「先刻はお氣に障つたかも知れないが、客が素人で彫刻を見る眼がないから氣に入らない風を見せたのですが、實は、云ふ迄もなく、あの雛形は大變旨く出來てるんです。けれど、單に外見の上から形が少し氣に入らないといので、……それは、つまり思惑が西洋の人と日本の人と違ふのです。といふのは、斯うなんです。西洋人は唐子の約束なんか分らず、人間なら人間のやうにもつとすらりと身長が高ければ好いので、あんなに、ぶよ〳〵肥太つて、ちんちくりんでは第一物を捧げてゐる態として恰好が附かないと、まあ、斯う云つた譯なんですから、今度は當り前の人間だと思つて、當り前にやつて見て下さい。西洋彫刻の人物は、凡て瘦せて、すらりとしてるんですから、餘り短かく、でく〳〵してると、不具者の人間見たやうだつて、あの人に氣に入らなかつたんです。氣に入らない處は只つた此れ丈けなんです。仕事の能く出來てることは、私は勿論、あの人達も充分認めてゐるんです。で、あの雛形を作つた人の腕前なら、それを、もつとすらりと瘦せて拵らへることは何でも無いことでせう。其點さへ心得てやり直して貰へば今度は必ず氣に入りますから、どうか、一つ、氣を惡くなさらずにやつて下さい。」

相更らずベンケイの應對は旨いもので、流暢な日本語でやつてゐる。一本氣で、ぷん〳〵怒つてゐた師匠も我を折つて、

「日本人と毛唐人との思惑違ひといふのなら話は分る。では、もう一度やり直して見やう。」

といふことになりました。私も傍で聞いて居つて、成程、べ

ンケイのいふ所至極道理であると思はぬわけに行きませんで、よく、先方の意味が了解された氣がしました。

ペンケイが歸ると、師匠は更に私に向つて、もう一度やり直しを頼むといふ順序となつた。其所で、今度は私も一層心配だが、先方の意のある所が充分腑にも落ちてゐることでありますから、今度は思ひ切つてこなして、下繪には便らずに自分勝手にやつて退けたと云つても好い位に大膽に拵へました。つまり思ひ切りこなしてから唐子の服をつけさせるといふ寸法に彫つて行つたのです。彼此半月ばかり經つて、先づ自分の考へ通りに出來たから、師匠に見せました。

「成程、此は好い。是ならベンケイが見ても屹度氣に入るだらう。」

といふので、先方へ知らせる。直ぐベンケイが來て、一目見て、

「是は結構、もう客に見せなくても、是なら大丈夫。私が責任を持ちます。有難う。」

と頗る意に適つた容子で歸りました。

其所で、いよ〳〵本當に製作に取り掛ることになつたのですが、何しろ、私も、生れて初めての大作のことで、可なり苦心をしました。

斯くて、十一年の十一月頃、全く製作を終り、店に飾り、先方の檢分を經つて唐子の彫刻は引取られて行きました。此の大作は私の修業としては中々爲になりましたと同時に、また一面には、斯うした作をやつたことなどから次第に外國向きの注文を多く師匠の店で引受ける素地を作つたことになりました。

此の時代から、そろ〳〵日本の從來の佛師の店に於て外國貿易品的傾向の製作が多くなつて行く一轉機の時代に這入つて來たのでありました。

引續き作に苦心したこと

されば追つかけて、また一つ外國人からの注文がありました。

今度は、獨逸公使館へ來た或る外國人からの注文で、同じく洋燈臺であつたが、趣きは以前と違つて居つた。此は前述のアーレンス商會からの注文の製作を其人が見て注文することになつたか、其所迄はよく分りませんが、アーレンスとは何んの關係はないのであつた。

注文の大體は、今度は純日本式の童男童女の並んで立つてる處をたのむといふのであつた。先づ一尺位の雛形をこしらへて貰つて、それを本國に持ち行き、先方にて話の上にて、更に大作の方をもたのむ計劃であるが、差し當つてはその雛形を念

入りに彫つて貰ひたい。是は雛形と思はずに、本物同様充分氣を附けてやつて欲しいといふのであつた。

今度もまた私が凡て製作することに師匠からの話がありましたので、私はそれに取掛りました。今度は以前のやうに下繪などの面倒なこともありませんので、師匠の差圖と自分の考案で、童女の方は十か十一位、桃割に結つて三枚襲ね。帶を立矢に結び、鹿の子の帶上げをしてゐるといふ所謂日本むすめの風俗で、極めて艶麗なもの。童男の方は、頭をチョン髷にした坊ちゃんの顔。五ツ紋の羽織の着流しといふ風俗であつた。

此は彩色無しではあるが、木地の儘でも、その物質その儘を感じ、また色彩をも感ずるやうに非常に苦心をして彫つたのであつた。假令ば、帶は繻子の帶ならば、その滑らかな地質が其物の如く現はれ、また緋鹿ノ子の帶上げならば、鹿ノ子に絞り染めた技巧がよく會得されるやうに精巧に試みました。また、衣物の縞柄、裾模樣の模樣などにも苦心し、男の子の着流しの衣紋なども随分工夫を凝らしてやつたのでありました。私が精巧緻密な製作を先づ充分に試みたと思ふたのは、其當時では此の作が初めてであつたと覺えます。此も中々修業となりました。出來上ると、師匠も、中々な出來際だとほめてくれられ、公使館の人が檢分に來た時は大變な氣に入りで、よろこんで持つて歸りました。此は本國へ送り、更に大作を注文するといふことではあつたが、如何なる都合であつたか、大きい方は其儘になつてしまひました。兎に角、斯ういふ風な西洋人の仕事が段々と殖へて來まして、その都度私が關係したのであつた。

師匠は先づ大體に於て、私の仕事を監督して居られたので、實際には手は下すことはなかつたのでした。

東雲師逝去のこと

それからまた斯ういふ特別な注文の他に、地の仕事もぽつぽつあります。其等を繰り返して佛の方をも相更らずやつてゐる。明治十一年も終り、十二年となり、是と云つて取り立てゝはなしもないが、絶えず勉强はして居りました。

すると、十二年の夏中から師匠は脚氣に罹りました。さして大したことはないが、どうも捗々しくないので一同は心配をいたしました。餘談に亘りますが、師匠東雲師は、まことに道具が好きで、佛の方のことは無論であるが骨董的な器物は何によらず鑑識に富んで居りました。それで東京中の道具屋あさりなどすることが何より好きで、暇さへあれば外へ出て、てく〳〵歩いてゐられる。歩くことが激しいから、下駄は後の方が直ぐ

減つてしまふので、師匠は工夫をして下駄の後歯へ引き窓の戸の鐵車を仕掛けて、それを穿いて歩るかれたものです。知人の處になど行つて庭の飛石を歩るく時にはガラ〳〵變な音がするには甚だ困るなど隨分此の下駄では滑稽なはなしがある位、それ程外出歩きを好かれた方であつたが、脚氣に罹られてからは、それも出來ず、始終、臥床に就くではないが、無聊さうにぶら〳〵して居られました。併し、店の仕事の方には私の兄弟子政吉もゐること故、手が缺けるといふことはなく、從前通りやつて居りました。

然るに一夏を越して秋に這入つても、病氣は段々と惡るくなるばかり、一同の心配は一方ならぬわけでありました。それに華客場の中でも、師匠の家の內輪へまで這入つていろ〳〵師匠の爲を思つてくれられた特別の華客先もありました中に、別して龜岡甚造氏の如きは非常に師匠のことをひいきにされた方でありましたが、此の方が大變に心配をして、何んとか、もう一度癒してやりたいと云つて居られます。

此の龜岡甚造といふ方は、其頃もはや年輩も六十以上の人で、當時は御用たしのやうなことをして居られた有福な人でありました。若い時、彼のペルリの渡來時分、お臺場の工事を引受け、産を造つたのださうで、此の龜岡氏は先代の目がねによつて龜岡家へ養子になつた中々立派な人でありました。師匠とは氣心も大變合つてゐて、內輪のことにまで心配をされました。また同氏は私にも中々よくしてくれられました。で、龜岡氏はじめ、我々、皆一同師匠の病氣平癒を神佛かけて祈りましたが、どうも重くなるばかりであります。醫師に見せても中々捗々しく參らず、其所で、私は先年傷寒を病んだ時に掛つた柳橋の古川といふ醫師が、漢法醫であるけれども名醫であると信じてゐましたから、師匠の妻君へ、此の人に診て貰ふやう話をしました。妻君も、それではと古川醫師に診察を賴みますと、どうも、是は容易でない。脚氣とは云つても、非常に質が惡い。氣を附けねばならんといふ診斷。醫者の紋切形とは思はれぬ。重大な容態は我々素人にもさう思はれるやうになつたのであります。

それで、弟子は四人ありますが、店の方の仕事のことがありますので、晝の中は附て居られず、奧の方では皆が附き切りになつて居る。師匠の家は親戚は無い。一家內師匠をのけては凡てが婦人で、妻君、お悅さん、お勝さん、それからおきせさんと此の四人が附き添ひ看護をして居られるので、私は、いろ〳〵師匠の病氣に就いての看護のことに心附いたことがあつても、さう深く奧のことにまで立ち入つて行くわけにも行きませんから、只、只管、師匠の病氣の少しにてもよろしくなることを祈

つて居る次第であつた。

然るに爰に師匠の家の筋向ふに眼鏡屋があつて、その主人が、丁度師匠と同じやうな脚氣に罹つて寢てゐました。近所づからのこと、また同病のことで、何かと奥の人達と往復して、平生よりもまた近しくなつた處、眼鏡屋の妻君のいふには、私の宅でも柳橋の古川さんに掛つて居りますが、どうも、更に験が見えません處を見ると、あのお醫者は鍼の方ではありますまいかなどいふ。此方でも、どうも、増々重つて行く處を見ると、餘り上手なお醫者さまとは受取れませんなど話が合ふ。私は、さういふ噂などチラ／＼小耳に挾む所から、或日、改めて古川醫師に師匠の容態を承はると、

「今日の處は、師匠の病氣はしのぐ時である。直す時機はまだ來ない。此所暫らくを通り越して、さて曙光を見た處で、初めて藥が利くので、それから漸次快氣に向ふわけであつて、今日の處は、拙者はそのしのぎをつけて居る。氣長に、鄭重に、拙者が引受けてやれば、萬、生命に係るやうなことはない。併し、藥は必ず油斷なく服せて呉れ。」

斯ういふ古川醫師の返答。私も尤のことと思ひ、何分共よろしくと申し、此上は此人の丹精によつて師匠の一命を取り止めるより他に道もないことゝ觀念致し居つた次第であつた。

所が、此所に一つ困つたことが起つた。

それは或る御殿に勤めてゐたとかいふお婆さんがあつて、その老婆は、只、擦する丈けにて人の病氣を癒すといふ。それを眼鏡屋にて聞き込み、右の老婆を賴んで、主人に擦らせた處、大きによろしいといふ。それを女同志のことで、此方の奥の人達が勸められたものか、自分達で其氣になつたか、兎に角、その婆さまに師匠を見せるといふことになつた。私は此の話を聞くと、此れは不可ないと思ひました。斷じて此際、さういふことをさせることは無謀の至りで、此は險呑至極と思ひましたが、前にも申す如く、奥の婦人達に向つて強つて口を入れて我意を張り通すことも、兎に角、元、私が醫師を世話した關係上、私としては言ひ兼ねもしたので、先づ、止むを得ず奥の人達の云ふ通りに從ひました。

婆さまが來て師匠をさすりました處、師匠は加減がいくらか好いやうだといふこと、本當に好いのか、ほんの病人の氣持丈けでさう思はれるのか、私は半信半疑でゐると、さて、更に困つたことには、その婆さまの云ふには、自分が病人を手掛けてゐる間は、醫師の藥を廢めてくれといふこと、是は眼鏡屋の方

でも同じことであつた。併し醫師の藥をやめるわけには醫師に對していかないが、先づ、のましたつもりにして婆さまのいふ通りに藥をやめさせた。二日間藥を止めたのであつた。

と、その少し前、眼鏡屋の主人がぽつくり死んでしまつた。古川醫師は、どうも可怪しい、不思議なこともあるものと首を傾けてゐると、此方の師匠の容態が、また危機に迫つたといふので、診斷して見ると、此はどうも大變なことになつてゐる。此はいけない。此は最早扶からない。併し、今日までの經過は、斯う迅く迫つて來べきでないが、何か、何うかしたのではないか。何等か特別な手落ちがなくては斯うなる筈はないと問ひ掛けられて、奥の人達は今更隱すわけにも行かず、實は此れ〳〵でと右の婆さんの一條を話し、藥は二日休んだと有體に申しました。古川醫師は、もはや、自分の匙の用ひ處もないと嘆息する。一同も途方に暮れ、手の出しやうもないのでありましたが、其夜十時頃、師匠東雲師は遂に永眠されたのでありました。それは、明治十二年九月二十三日の午後十時、師匠は享年五十四でありました。

法名は、光岳院法誉東雲居士。墓は下谷區入谷町靜蓮寺に御座います。

是より先、師匠の病篤しと聞き、彼の龜岡甚造氏には見舞ひに來られました。此人は平生でも手に珠數を掛けて居る人であつたが、師匠の病床に通つて、ちつと容態を見て居られたが、良々暫らくの後、其場を去り、他へ私を招き、只ならぬ顏色にて申すには、

「幸吉さん、今日、師匠の容態を見るに、もはや、餘命も今日限りと私は思ふ。とても明日までは持たれまいと思ふ。それで今夜はお前もその覺悟で居らねばならぬことゝ私は思ふが、不幸にして、さういふ場合に立ち至つたなら、どうか、遠慮なく、私の番頭を此方へ招き、お前の相談相手として萬事を宜敷頼みます。それで、私は明日また出直して參るが、番頭のことは遠慮なくやつて下さい。」

斯う云ひ置き歸つて行かれました。私は眞逆とは思ひましたが、果して此の龜岡氏の云つた如く、師匠は其晩不歸の客となられたのでありました。

龜岡氏の番頭さんといふのは、師匠の家の隣りの袖藏の側の露路に龜岡氏の別邸があつて、其所に留守居のやうにして住つてゐた人でありました。で、師匠の氣息を引取られると、直にその番頭さんが駈け附けて參り、間もなく報せによつて彼の高橋定次郎氏も駈けつけて參られた。奥の人達は只泣くばかり

で、私達は遠方に離れたことであつた。

此所で、順序として一寸と私の兄弟子三枝松政吉氏のことを云はねばならぬことになります。此の人は下總の松戸の先の馬橋村といふ所の者で、私よりは六ツ程年長、矢張り年季を勤め上げて、師匠との關係はまことに深いのでありましたが、どういふものか、師弟の情誼はまことに薄いのでありました。それはどういふ譯であつたか、つまり氣が合はぬとか、性が合はぬとかいふのであらう。何にかにつけて師匠が右と云へば左と云ひ、西と云へば東と云ふといふ工合で、どうも師弟の仲が好くないのでありました。

政吉といふ人は、別に深く底意地の惡るいといふ程の人ではないが、妙に大事の場合などになると其時をはづしてゐなくなつたりして、毎度、急がしい時などに困らされたものでありますが、さういふ時にも師匠は寛大な人ゆゑ、あれは、あゝいふ男だと深く咎めはされませんでしたが、今度の師匠の逝去の際に於ても、矢張り政吉は店に居らず、故郷の馬橋村へ歸つて居つたのでありますから、早速此へ報知をやりました。

政吉は歸つて來ましたが、斯ういふ場合に充分立ち働いて呉れることよりも、何かと餘計に事件をこしらへて、どうも私の考へとぴつたり調子が合はないやうな風で、私も甚だやり難いやうに思つたことでありました。つまりは、政吉の方では、師匠と私とが大變に氣心が合ひ、師匠は何事に就けても、幸吉々々と弟々子の私を先づ先に立て仕事もさせれば、可愛がりもしましたばかりでなく、徴兵の一件などにも力瘤を入れて盡力されたことなどが、彼に取つては面白く思はなかつたのも人間として無理ならぬことゝ思はれます。それで政吉の仕向けは、當た私には身に染まず、私の仕向けは彼には面白くなかつたことゝ思はれます。此のことは、まことに如何とも仕難いことで、師匠沒後早々にも斯うした感情を少しでも互に懐いたことは悲しむべきことでありました。

東雲師沒後の事など

さて、差し當つての責任として、私が主として師匠東雲師の葬送のことを取計らはねばならぬ次第となつたのであります。といふのは、師匠の息子は、丑歳の時に出來た子供であつて、それが當年十四五になつて居るが、此はまだ當面に立つことは出來ぬ。政吉は一種の變人で、何か人と應對などすべきことでもあると、隱れてゐなくなるといふやうな妙な氣風の人。後に私の弟々子が二人あつても、此は私にたよるばかり、奥は女の

人達ばかり、何うしても私が以前からの行掛り上、全責任を負つて立たなければならぬことになつた。また當然私も師匠の爲にはさう致すが當前とも思ひました。

處で、相談相手としては龜岡の番頭さん、それに高橋定次郎氏は私よりも二つも年長で師匠とは生前深い關係のあつた人。此の三人で先づやることになつたが、無論、龜岡氏は翌朝早々見えられ、自分の言の適中したことを大に悲しみ、懇ろに佛の前に禮拜をされて後、私を他へ招んで申すには、

「幸吉さん、今日の場合、何事も遠慮をしては不可んよ。それでは物が運ばん。此の際は充分にお前自身の思ふ通りやつて貰はんければ埒が明ん。それで、奥の人達にも私が念の爲にそのことを斷つて置いたから、遠慮は無用にして、ドシ／＼此の際のことは片附けて下さい。是は私が特に師匠の知己としてお前にお願ひする。」

さう龜岡氏はキッパリ云はれました。

そして金錢を五拾圓私に渡し、

「此は、葬式費用萬事の事に滯り無いやうにと思つて私が立て代へて置くのであるから、此で思ふやうにやつて下さい。一々奥と金錢のことで相談も入るまいから。」

との事であつた。其所で私は右の五拾圓を龜岡氏の番頭さんに渡し會計を賴んで金錢の入用の時はそれから支出して貰ふことにして、其他金錢の出入は此人に一任しました。萬事は高橋氏と番頭さん私と三人で相談して決めました。

今日から考へて當時のことを思ふと、まことに私に取つては大役でありました。かくて先づ別に落度もなく、師匠の葬式は後嗣がまだ子供の事故假葬ではありましたが、生前名ある彫刻師として、先づ耻しからぬ丈けのとむらひを出したのでありました。

それから、初七日、三十五日、四十九日の後のことなども私が主となつて先づ滯無く萬事を致したことでありました。

身を引いた時のことなど

さて、是から後の始末をつける段となるのでありますが、急に師匠に逝かれては、何うして好いか方角も附きません。併し相更らず仕事丈けはやらねばならぬから、先づ此の方のことを引締めて掛ることにしました。

此所で一寸と思ひ出しましたが妙なお話がある。それは師匠が生前丹精して寛永通寶の中から、俗に「耳白」と云ふ文錢を選り出しては箱に入れて集めて居られ、それが貯り／＼して大變な嵩になつてゐたのを、藏の中にある穴藏の中へ入れてありま

した。それを奥の人達が師匠歿後早々取り出し調べて見ると、勘算して丁度五拾圓程ありました。一文錢の五拾圓ですから、隨分大した嵩、一寸何うするにも困るやうなわけでありましたが、丁度彼の龜岡氏から用立てゝ頂いた葬式費用の五拾圓といふ借用の方へ、龜岡氏の望みでその文錢五拾圓でお拂ひを濟ましたやうなこともありました。龜岡氏は、師匠生前永の歳月を丹精して集められたもの故、自分は此を神佛へのお賽錢に使用するつもりである。と申されてゐたのを聞いて、私は涙ぐましく思つたことがありました。

師匠の假初の樂みが、偶然葬式の料となつたことなども考へて見れば妙なことゝ思はれます。

また或日のこと、龜岡氏は私に向ひ、

「師匠歿後の高村家の一切は、君が當面に立つてやつて貰はねばならぬ。此の事も未亡人にも私から話してあるから、其積りで萬事を遠慮なくやつて呉れるやう。政吉はあの通りの人であるから、決して當にせぬやうに。」

との事であつた。そして龜岡氏は高村家の爲に或る組織の下に店の業務を取り計らはうなど云はれたこともあつたが、さういふことは私などもまだ智識が足らぬ時分で能く分りもせず、そのことはそれ切りで實現はしませんでした。そして私は師匠の宅から（堀田原から壽町へ轉居）毎日通ひ、仕事の方のことをやつて居つたのでありますが、如何に私が表面に立つて師匠歿後の仕事を取扱ふ責任を持つとは云へ、私は一個の手間取りでありますから、高村家の後事に就いて一家の內事に迄指圖をするといふわけには參らず、甚だ工合の惡い立場に立つたのであつた。

それで、私は先づ專念仕事の方のことを處理するが何よりと、從來よりも一層仕事の上に忠實を盡し、凡ての注文の上に手一杯念入にして、東雲師歿後の彫刻に一層好評を得るやう心掛けました。これは、店の寂れることを用心するには、注文の品を手堅く念入りにして、一層華客場の信用を高めることが何よりと感じたからであつた。然るに、私の考と、政吉の考へとは、何うも一致いたしませんで、政吉は先づ差當りの儲けを見て行くといふ意見で、例へば私が下職の方の塗師の上手の方へやらうといふのでも、政吉は安手の方の塗師重で濟まして、手間を省かふといふ遣口。併し晝間は凡て私が積りをして、是れ〳〵の日算を立て、政吉に一應相談をすると、それが好いだらうと同意してゐる。私はその手順にして夜分家に歸ると、夜になつ

て、政吉は、未亡人に向ひ、

「幸吉は是々と積つてゐるが、あれでは儲が薄い。素人の客に馬鹿念を入れてやつて見たつて仕様がない。塗りのことなんぞ素人に分るもんぢやない。」

などいふ風に自分の意見を吹き込むので、度重なれば、未亡人は利潑な人であつても、矢張りその氣になつて、政吉の意見に從はうとする。それに政吉は當時師匠の沒後ずつと師匠宅に寢泊をして居つて、遠慮のない男で、夜になると、酒を火鉢で燗をしてのむなど甚だ不行儀で、其癖、必要な客との應對などは尻込みをして姿を隱すなど、中々奇癖のある人物で、私とはどうも性が合ひかねました。

先づ右のやうな行きさつで、私が一つ此際踏ン張るとすると、[illegible]兄弟子を下ッ取にしなければならぬ。それも嫌也。何ともつかずやれば成績は上らず、却つて邪魔をされ、邪魔されて師匠の沒後の家の爲にならぬに係はらず、のんべんだらりで附いてゐるは更に嫌なり。龜岡氏に話して此の成行を詳しくすれば、此又自然同氏から未亡人へ小言が行くことになる。何か物を云ひつけるやうな形になつて此又私の性として好まぬところ、あれや是やにてどうも面白からず思ひましたので、此れは此の邊にて、もはや見切りを附けるところか。今日まで獨立を思ひ立つても、義理にからまれ、それも思ふに任せなんだが、もはや年が明けて六年の歳月を聊か師匠にも盡したと思ふこともあるによつて、今日、此の場合、自分、身を引いたとあつても道にはづれたことでもあるまい。どうやら、自分の獨立する時機が自然と來たのかも知れぬ。また、一方から考へると、自分といふものが師匠沒後の事に當つてゐればこそ、政吉も當面に立つて充分に働きを見せぬが、自分が身を引けば、彼は立つて働くに相違ない。自分が未亡人と政吉と頭の上に二人人間があつて仕事の仕難いと同じやうに、政吉とても、自分があつては、矢張り同樣の感があるであらう。是は政吉を表面に立たせて働かすこそ却つて目下の爲であらう。――斯う私は考へました。

此の事は誰にも相談したのではなく、自分で斯く決心して身を退く覺悟をきめたのでありましたが、さり乍ら、足元から鳥の立つやう、今日からお暇を頂くといふのも餘り云ひ出し難く、月に半月づゝの暇を貰ひたいことを申し出ました。すると、未亡人は、では、さうして貰ひませうと、別に私を引止めもしませんから、成程、これなれば身を引くにも却つて好都合と、それから十日のものが七日、五日と段々足が遠のくにつれて、此方はます〳〵入れ子の人間となり、政吉は、果して、先づ立派

に店のことをやつて行くやうになりましたから、今は、もう、凡てを政吉に讓るべきであると思ひ、潔く私の身を引いたことでありました。

政吉は後年ずつと師匠沒後の家に居り、その二階で病死したのでありました。

さて私の其後のことに就ては、此所で初めて師匠の家を離れ、獨立することになるのであるから、私の境遇はまた一段と形が變つて來るわけであります。

私は、其頃は、堀田原の家を移つて森下へ拔ける壽町へ一軒の家を借り其所に居りました。堀田原の家は師匠在生中、藏前に移つたにつき、同所は火堅い所故、別段立ち退き用心の家も不必要の所から堀田原の家は賣られましたので、私は壽町へ轉じました。

堀田原の家で私の總領娘咲子が生れました。それは明治十年九月五日であつた。

壽町時代は翌十一年頃のこと。それから淺草小島町へ、次は下谷西町に移りました。

師匠沒後養母お悦さんは心細いことと思ひ私は出來る丈氣を附けて居りましたが、明治三十二年八月十九日、七十九歳の長命でおきせさんの家で沒しました。

神佛混淆廢止改革されたはなし

明治八年は私が二十三で年季が明けて、其明年私の二十四の時、其頃神佛混淆であつた從來からの習慣が區別されることになつた。

是迄は所謂兩部混同で何の神社でも御神體は幣帛を前に、其後には必ず佛像を安置し、天照皇大神は本地大日如來、八幡大明神は本地阿彌陀如來、春日明神は本地釋迦如來と云ふやうになつて居り、所謂神佛混淆が行はれてゐたのである。

此の兩部の說は宗教家が神を佛の範圍に入れて佛教宣傳の區域を擴大にした一つの宗教政策であつたやうに思はれる。從來は何處の神社にも坊さんが居つたものである。此の僧侶を別當と稱へ、神主の方は寧ろ別當從屬の地位にゐて坊さんから傭はれてゐたやうな有樣であつた。政府は此の弊を矯めるが爲に神佛混淆を明らかに區別することにお布令を出し、神の地內にある佛は一切取除けることになりました。

そして、從來神田明神とか、根津權現とか云つたものは、神田神社、根津神社といふやうになり、三社權現も淺草神社と改稱して、神佛何方かに方附けなければならないことになつたの

である。此は日本全國に亘つた大改革で、其爲に從來別當と稱して神樣側に割り込んでゐた僧侶の方は大傷手を受けました。奈良、京都など特に神社佛閣の多い土地では此の問題の影響を受けることが一層甚かつたのですが、神主側からいふと、非常に利益なことであつて、從來僧侶に從屬した狀態になつてゐたものが此の際神職獨立の運命が拓けて來たのですから、全く有難い。が、反對に坊さんの方は大に困る次第である。

其所で、例を上げて見ると、鎌倉の鶴ヶ岡八幡に一切經が古くから藏されてゐたが、此のお經も今度の法令によつて八幡の境内には置くことが出來なくなつて、他へ持ち出しました。一切經はお寺へ屬すべきものであるからといふのです。其所で此のお經は今淺草の淺草寺の所有になつて居ります。

それから、此の淺草寺ですが、混淆時代は三社權現が地主であつたから馬道へ出る東門（隨身門）には矢大臣が祭つてあつた。此は神の境域であることを證してゐる。觀音の地内とすれば、斯んなものは必要ない筈であります。もう一つ可笑いことには、觀音樣に神馬があります。此は正しく三社權現に屬したものである。（神馬は白馬で、堂に向つて左の角に厩があつた。氏子のものは何か願事があると、信者はその神馬を曳出し、境内の諸堂をお詣りさせ、豆をご馳走しお初穗を上げてお祓ひをしたものである）斯ういふ風に神樣の地內だか、觀音樣の地內だか區別が無いのです。法令が出てから觀音樣の境內と三社樣の境內とヘツキリ區別が出來ました爲に、諸門は觀音に附屬するものになつて、矢大臣を取り去つて二天を祭り、今日は二天門と稱してゐる。神馬も觀音の地內には置くことが出來ない故、三社樣の地內へ移しました。

右のやうな例によつて見ても、神佛の混淆してゐたものが悉く區別され、神樣は神樣、佛樣は佛樣と筋を立て大變嚴格になりました。此は、つまり、神社を保護して佛樣の方を自然破壞するやうなやり方でありましたから、さなきだに、今迄枝葉を押し擴げてゐた佛樣側のいろ／＼なものは恐く此の際打ち毀されて行きました。經卷などは大部なものであるから、川へ流すとか、原へ持つて行つて燒くとかいふ風で、隨分結構なものが、滅茶々々にされました。奈良や、京都などでは特にそれが甚かつた中に、あの興福寺の塔などが二東三文で賣物に出たけれども、誰も買ひ人がなかつたといふやうな滑稽な話がある位です。併し當時は別に滑稽でも何んでもなく、時勢の急轉した時代でありますから、何事につけても、斯ういふ風で、それは自然の勢であつて、當然のことゝして不思議と思ふものもありま

せんでした。また今日でこそ斯ういふ際に、どうかしたらなど思ふでせうが、當時は、誰もそれを何うする氣も起らない。廢滅すべきものは物の善惡高下によらず滅茶々々になつて行つたものである。此は今日では一寸想像に及び難い位のものです。

本所五ツ目の羅漢寺のこと

此の時代のことで、おもしろい話がある。これは神佛混淆の例證ではありませんが、矢張り神佛區別のお布令からして佛樣側が手酷しくやられた餘波から起つた事柄であります。

本所の五ツ目に天恩山羅漢寺といふお寺がありました。その地内に蠑螺堂といふ有名な御堂がありました。形は細く高い堂で、丁度蠑螺の殼のやうにぐる／＼と廻つて昇り降りが出來るやうな仕掛けに出來て居り、三層位になつてゐて大層能く出來た堂であつた。若し今日此れが殘つて居れば建築家の參考となつたでせう。堂の中には百觀音が祭つてあつた。上り下りに五十體づゝ並んで、それはまことに美事なもので、當寺の五百羅漢と並んで有名でありました。

此の百觀音は、羅漢寺建立當時から、多くの信仰者が、親の冥福を祈る爲とか、愛兒の死の追善の爲とか、いろ／＼佛縁をもつての關係から寄進したものであつて、孰れも中流以上の生活をしてゐる人々の手から信仰的に成り立つたものであります。それで、各自にその寄進の觀音をば出來得る丈け旨く上手に製作へて貰はうといふので、當時、江戸では誰、何處では誰と、その時々の名人上手と云はれてゐる佛師に依賴して彫らしたもので、それが一堂に配列されることであるから、自然と自分の寄進したものが、他より優れてゐるやうにと、一種の競爭心を生じ、一層此のことに熱心になるといふ傾向を爲します。一方依囑された佛師の方でも、各名人達の製作が並んで公衆の面前に開展されることでありますから、此も腕によりをかけるといふ風、伎倆一杯に丹精を凝らし、報酬の多寡などは眼中に置かないといふ有樣となる。そして、その寄進された觀音には京都の佛師もある。奈良佛師もある。江戸の佛師が多分を占めては居りますが、孰れも腕揃ひであつて、凡作は稀で、中々結構でありました。

そして、その中には、五百羅漢を彫つた當羅漢寺の創建者である松雲元慶禪師の觀音もありましたこと故、私の修業時代は、本所の五ツ目の五百羅漢寺と云へば、東京方面に於ける唯一の修業場であつて、好い參考佛が一纏りになつて集まつてゐるのでした。もつとも、五百羅漢、百觀音は、いづれも元祿以降の作であつて、古代な彫刻を研究するには不適當であつたが、思

に角、其時代の名匠良工の作風によつて、いろ〳〵と見學の功を積むには、江戸では此寺に越した場所はありませんでした。

それで、私などは、朝から、握飯を持つて、テク〳〵歩きで此の羅漢寺へやつて來て、種々と研究をしたものであります。日が暮れると、またテク〳〵とやつて家へ歸る。他に便利な乘物が無いから、弟子も師匠も、小僧も旦那も、其れ丈けは一切平等でありました。

右の如く、羅漢寺は名刹でありましたが、多年の風霜の爲め大破損を致して居る。さりながら、時代は前に述べた通り、佛さまに對しては手酷しくやられたものであるから、さながらに佛法地に墮つるといふ感がありました。で、此のお寺を維持保存するなどは容易のことではない。部分的に一寸した修繕をするといふことさへむづかしい。彼の百觀音を納めてある蠑螺堂のある場所を、神葬祭場にするといふ評判さへあつて、此の靈場の運命も段々心細くなるばかり……其中、とう〳〵蠑螺堂は取り毀すことになつて、壞し屋に賣つてしまひました。

所が、此の賣るといふことが、お話しの他で、買ひ手も無いと云つた頃、その頃の堂々たる大名、旗本の家屋敷、あるひは豪商大家の寮とか別莊とかいふものでも、いざ、賣拂ふとなると二束三文、買つても仕樣が無いと買ひ手も無い時節であるから、この榮螺堂を、壞し屋が買つた値段も想像されませう。兎に角、その建築物の骨をば商賣人が買つたが、その中に百觀音が納まつてゐる、さあ、此の觀音樣の處分を何うしましたか。これが涙の出るやうなことでありました。

蠑螺堂百觀音の成行

蠑螺堂は壞し屋が買ひましたが、百觀音は下金屋が買ひました。下金屋といふのは道具屋ではない。古金買ひです。古金買ひの中でも、鍋、釜、藥罐などの古金を買ふものと、金銀地金を買ふものとある。後の方のが云はゞ高等下金屋である。これに百觀音は買はれました。……といふのは、觀音の彫刻には孰れも精巧な塗り彩色がしてありますので、その金箔を見込んで買つたのである。單に箔丈けを商買人達は踏んでゐるので、他には何んの見込みをつけてゐるのではない。

下金屋は本所枕橋の際、八百松から右へ曲つた川添ひの所にあつた。その川添ひの庭に、百觀音のお姿は、炭俵や米俵の中に、三四體宛、犇々と詰め込まれ、手も足も折れたりはづれたりして荒繩でくゝつて抛り出されてある。これは、五ツ目から

此の姿の儘で茶舟に搭せられ、大河を遡つて枕橋へ着き、下金屋の庭が荷揚場になつてゐるから、直ぐ其所へ引揚げたものである。

さうして、彼等は此を何うするのかといふと、佛體は其儘火を點けて燒いてしまひ、殘つた灰をふいて、後に殘存してゐる金を取らうといふのです。今、彼等はその仲間達と相談して、やがて仕事に取り掛るべく、店頭で一服やつてゐる所でした。

此の妙な狀態を或人が見たのでした。その人は私の師匠東雲師を知つてゐる人であつた。話を聞くと、此々といふので、其人も隨分驚いた。昔に名高い本所五ツ目の羅漢寺の、あの蠑螺堂に納まつてゐた百觀音のお姿が、所もあらうに斯んな處へ縛られて來て、今にも火を點けて燒かれさうになつてゐるのだから、驚いたも無理はありません。其人は、何んとかして、此の危急な場合を好い都合に運びたいものと考へたと見え、かねて知人である佛師東雲へ此の話しをしたら、何んとかならうと思つたのでせう。其人は、吾妻橋を渡つて並木の方から東雲師の店(當時は駒形に移つてゐた)を差してやつて來たのでした。

その日は暑い日でした。何月頃であつたか、表通りの炎天を見ながら、私は店頭で仕事をしてゐました。其所へ一人の人が尋ねて來た。

「師匠はお宅ですかね。」

「師匠は朝から山の手へ要事があつて出掛けましたが……」

私がさう答へますと、その人は失望したやうな表情をしました。

「さうですか。ぢやあ、一寸とは歸りませんね。ア丶、生憎だなあ……惜しいことだなあ……」

と、何か容子ありげに嘆息して居ります。私は何うしたのかと思つて、其來意を尋ねると、實は此れ〳〵で……餘り見兼ねた故、此店の師匠に知らせて上げたら、何んとかなるだらうと思ひ、わざ〳〵やつて來たんだが、師匠が留守とあつてはどうも仕樣がない。此れが明日、明後日と待つてゐられることではないのだから、今一刻をも爭ふといふところだからね。だが、どうも仕方が無い。左樣なら。」

さうその人は云ひながら、歸つてしまひました。

この話を聞いて困つたのは私です。
何う所置をして好いか分らない。後刻とも云はさず、今が今といふ速急な話……斯うして困じ果てゝ考へてゐる時間さへも今の人の話の容子では危ない程のこと……ハテ、何うしたもの

かと考へた所で師匠は留守、歸りを待つてゐる中には萬事は休してしまふ。これは實に困つたと眞底から私は困り抜きました。

併し、困つたと云つて、斯うして腕を拱んで、阿呆見たいな顔はしてゐられない。どうにかしなければならないといふ氣が何よりも先づ先立つて來る。あの百觀音が今燒かれやうとしてゐる。灰にされやうとしてゐる。灰にされてしまつたらどうなるのだ。……あの、平生から眼の底に滲み附いてゐる百觀音が……自分の唯一のお師匠さんだつたあの彫刻が、今にも灰にならうとしてゐる……、もう、今頃はあのお姿の何れかに火が點いてゐるかも知れない。燒け木杭見たいになつてゐるかも知れない……さう思ふと情ないやら、懷かしいやら、またそれが如何にも無殘で、惜しいやら、私は唯もう、ふら／＼と其現場へ飛んで行きたくなりました。

と、云つて、私は、よし、その現場へ飛び込んだにしろ、その急場を扶ふには是非入用な金錢を持つて居らぬ。私に金錢などのある時節でありませんから。けれども、そんなことは問題ではない。何んでもあれ、兎に角、其場へ行つて見なければ氣が濟まないので、私は立ち上りました。

そして師匠の妻君へ、理由を話し、一寸の暇を下さいと申した。すると、妻君も驚いた顔をして、それでは行つてお出で、師匠が歸つたら、其の事を話すから、といふ。では、何うかさう願ひますと、私は師匠の家を飛び出しました。

駒形から、枕橋迄は、どれ丈けの道程でもない。私はドンドンと走つて行く……

その間にもまた考へましたことは、斯んな獨斷なことを師匠の留守にして、若しや、師匠が歸つて、馬鹿な奴だと云つて叱られるか知れない。といふやうな心配を繰り返しましたが、叱られたらそれ迄のことだ、ともう度胸も据つてしまつて、私は間もなく下金屋の店へ行き着きました。

それから、私が、下金屋の主人と仲間とが三四人一緒になつてゐる前へ行つて、私の來意を語り終る迄には、隨分間の悪るい思ひをしました。といふのは東雲師自身がやつて來たのなら話になるが、弟子の私では先方の信用が更に無いからです。先方は何んだか面倒臭さゝうに、いくらか輕蔑したやうな顔をして碌に話しを聞いても呉れません。けれども、私は、そんなことに閉口してはゐられない場合ですから、只、もう百觀音の運命が氣掛りでたまらないのですから、斯う主人に話し掛けました。

「……兎に角、私に、あの俵の中のお姿を二三體見せて下さ

い。」

すると、そんなことをされていぢくられちや、仕事の邪魔になつて困るといふ顔をしてゐる。中には、見る丈けなら見たつて好からう。と口を添へてくれたものもあつた。私は彼等の返事は碌にも聞かず、もう脚がづん／＼俵の傍に寄つて行き、手は早くも荒縄を解いてゐました。

所で、私の考へでは、此の百觀音の中に、優れたものが五六體ある。それを撰り出さう。先づそれを撰り出すことが何よりも肝腎だ、と斯う思ひましたから、あつち、此方と俵の縄をほぐしては調べて行くと、かねて目を附けてゐるものが出て來る。

「オヽ、此れだ。」

と私の悦は飛び立つ位。胸はどき／＼します。また、別の俵を開けて見ると、天冠臺坐が脱れ、手足などが折れたりしたなりで出て來る。

「オヽ、此れだ。此處にもあつた。」

と、私は其都度張合になつて、一生懸命に探し廻る。

私の見附け出した觀音様の中には、細金の精巧なものがある。是は京都佛師七條左京の作。又は天狗長兵衛と綽名のある名工の手の籠んだ作がある。それから羅漢佛師松雲元慶禪師の作がある。けれども、それ等が御首や、手や脚や、臺坐、天冠などが手荒らに取扱はれたことゝて、ばら／＼になつてゐるのを、私はまた丹念に探し廻つて、やつと、どうにか揃へました。

さうかうしてゐる中に、午になる。私が斯うやつて五六體を撰り出したことには理由のあることだ。それは何うにかして、此れ丈けは燒いて貰はない算段をしやうといふのである。師匠が歸つて來るまで、兎に角、一時手をひかへて貰はうといふ決心である。で、その旨を先方に話すと、先方は、いぢくり廻はされた上に、斯んなことを掛け合ふのですから、更に嫌な顔をしてゐる。

「そんな悠長なことは云つてゐられない。私達は此れから燒かうといふのだ。飛んだものが飛び込んで仕事の邪魔をして困るぢやないか。おい。そろ／＼仕事に掛らうぢやないか。」

「まあ、さう云はずに、此の撰り出した分丈けは手をつけずに置いて下さい。お願ひですから。」

など、押問答してゐる所へ、天の祐けか、師匠の姿が見えました。

「師匠が來た。まあ、よかつた。」

と思ふと、私は急に安心しました。

「幸吉か、お前よくやつて來てくれた。俺も心配だから飛んで來たんだ。家で様子を聞くと直ぐに……」

師匠は私にさう云つてから、下金屋と挨拶をしてゐる。かねてから、下金屋は師匠を能く知つてゐるので大變丁寧になる。
「先刻からお子弟さんがやつて來て、大分撰り出しましたよ。」
など云つてゐる。
　私は師匠に、名作の分丈け五六體は撰り出したことを話すと師匠が、
「幸吉、もう好いにしやうよ。そんなに買ひ込んだつて賣れやしないぜ。お前の撰り出した名作五體丈けにして置かふ。後は殘念乍ら止にして兎に角引取ることにしやうぢやないか。」
　其所で師匠は更に具體的に談判を進めました。で、つまり、幾金といふことになつたのです。
　斯うなつて來ると、下金屋の方でも慾が出て來ませう。今、江戸でも有名な佛師の東雲が、百觀音の中から五體丈け撰り出して、此れを幾金に賣るか？　といふとなると、彼等も一寸と首をひねらねばなりません。其所で足元を見て、一體を一分二朱で手放なさうといふことになつた。五體だから、一分が五つの一兩一分、二朱が五つで二分二朱、即ち五體で一兩三分二朱（今日勘定で一圓八十七錢五厘）といふことに相談が纏りました。當時の一兩三分二朱は現今の三十四円内外にも當りませうか。

其所で、車を借りてそれを乘せ、日の暮れる頃師匠の家へ運んで來ました。それから買つた後の九十五體の觀音は何で燒けてしまふのだから、その玉眼と白毫（眉間に嵌めてある寶玉、水晶で作つたもの）が勿體ない。私が片ツ端から眼目を刳つて抜き取りました。師匠と兩人で何んだか情無いやうな感じがしました。云ふ迄も無く下金屋が其等に何んの價値を認めないといふことで思ひ附いた仕事でした。

私の守り本尊のはなし

　さて、五體の觀音は師匠の所有に歸し「まあ、よかつた」と師匠と共に私は一安心しました。併し、私には此所で一つの希望が起りきした。私は、數日の後、師匠に向ひ、其望を申し出ました。
「師匠、あの觀音五體の中で一體を私にお譲り下さいませんか。私は其を自分の守本尊として終生祭りたいと思ふのです。もつともお譲り下さるならば、師匠がお求めになつた代を私はお拂ひしますから。」
　私は思ひ切つて斯う云ひました。
　私がそれを熱望した心持は、最初百觀音が灰にされるといふことを聞いて、驚き悲しみ、懐かしみ、惜みした心持と少しも

變りはないのでありました。

斯う私に望まれて見ると、師匠は五體揃つてゐるのですから、何んとなく手放しにくいやうな容子が見えましたが、元々私が此の事件には先鞭を附けてゐる手柄もあることを師匠も充分承知してゐることだから、

「さうか。それは讓つて上げてもよい。だが、いつたい、何の觀音をお前は望むんだね。」

斯う云つて師匠はその中で特に精巧に刻まれてある細金の一體を取り上げ、

「これを欲しいといふのかね。」

「いゝえ、私のおねだりするのは、それではありません。此れです。」

と云ひました。

私の撰み取つたのは、松雲元慶禪師のお作でした。

「さうか。それを欲しいのか。ぢや、讓つてやらう。お前が一生祭つて置くといふのなら……」

師匠は快よく私の請を容れてくれました。で、私は一分二朱を現金で拂つた時の嬉しさと云つてはありませんでした。

もう此の元慶禪師のお作の此の觀音は私の所有に歸したのだと思ふと、心が躍るやうでした。私は喜び勇んでそれを我が家へ持つて歸りました。

それから、私は、右の觀音を安置して、靜かに其前に正坐りました。そして禮拜しました。多年眼に滲みて忘れなかつたその御像は昔ながらに結構でありました。

けれども、お姿に金が附いてゐた爲にアワヤ一大御難に逢はれやうとしたことを思ふと、金箔のあるのが氣になりますから、いつそ、此は木地を出してしまふ方が好いと思ひ、それから長い間水に浸けて置きました。すると、漆は皆脫げ落れてしまひ、膠ではいだ合せ目もばら／＼になつてしまひましたから、それを自分で丁寧に元通りに合はせ直し、木地の儘の御姿にしてしまひました。此はお手のものだから格別の手入れも無しに旨く元通りになりました。さうして、それを私の守り本尊として祭りまして、現に今日でも私はそれを持ち續いて居る。

私は觀音の爲には、生れて以來今日迄いろ／＼の意味に於てそのお扶けを蒙つて居るのであるが、此の觀音樣はあぶないところを私がお扶けしたのだ。此も何かの佛緣であらうと思ふことである。

さて、師匠の所有の四體の觀音は、其後何うなつたかといふ

に、一つは淺草の伊勢屋四郎左衞門の家（今の青地氏、昔の札差のあと）一體は其頃有名だつた酒問屋で、新川の池喜へ行きました。それから、もう一體は吉原の彥太樓尾張へ行つた。もう一體は何處へ納まつたか覺えて居りません。

斯く師匠の手に歸した觀音も、日ならずして人手に渡り、ちり〱ばら〱になつてしまひましたが、私の所有の松雲元慶禪師のお作は、今以て私が大事にして祭つて居りますところを見ると、最初私が此の觀音の灰燼に歸しやうとする危い所をお扶けしやうとした一念が屆いて、斯くは私と離れ難ない因緣を作つて居るやうに思ひ、甚だ奇異の感を深くするわけであります。

此の禪師のお作は、德川期のものではあるが、中々恥しからぬ作であります。禪師は元來は佛師でありましたので、其道には優れた腕をもつて居られ、五百羅漢製作に於ても多大の精進を積まれ、一丈六尺の釋迦牟尼佛の坐像、八尺の文殊普賢の坐像、それから脇士の阿難迦葉の八尺の立像をも彫まれました。なほ、禪師に就いての話は他日別にすると致しませう。

寶物寫生といふことのはなし

明治八九年頃は私も既に師匠の手を離れて佛師として一人前とはなつて居りましたが、さて、一人前とは申し乍ら、まだ立派に世に立つに到つたとは云へない。師匠の家は出たけれども、自分の家から師匠の家に通つて仕事をして居りました。

所が、その時分は前に話した通り佛教破壞のあほりを食つて佛に關係した職業は何事に依らず散々な有樣でありますから、隨て佛師の仕事も火の消えたやうなことになりました。此の社會の傾向を見てゐると、私は、どうも考へぬわけには行かぬ。師匠東雲師のやうに既に一家を成して東京でも一二の佛師と知られてゐれば、如何に社會が變化して來ても根柢が固まつて居るから、左程に影響を受けもしませんが、また、受けるにしてもそれに受け應へることも出來ますが、私達のやうに、まだ一向に基礎の確定して居らぬものは、生活するといふことからも考へねばならぬ。佛師といふ職業が此儘職業として世の中に立つて行けるものか、よしまた行けるとして、從來通りの佛師でやつて行つて好いものか、其邊のことに就いて考へて見るに、どうも不安でなりません。自分の職業とする佛師の仕事其物にも不安であると同時に、佛師の仕事によつて糊口して行けるか否やに就いても不安である。いろ〱急激に社會の事物の變遷する時代は、何事によらず、其社會に生きて行く人の上には不安な思ひが襲ひ掛つて參るもので、私も大に熟慮を要しなくてはなら

ないと思つたことであります。

　されば、段々と佛師への注文が少なくなつて來る。師匠東雲師の店に於ても從前とは餘程仕事の數が減つて參りまして、此の先何うなることか心配をして居る……が、此所にまた時勢の變遷につれて、いろ／＼な事が起つて來る中に、横濱貿易といふものが恐ろしい勢で開けて來ました。それで、その貿易品が一般に流行する所から、貿易品的な置物のやうなもの丶注文が大分師匠の許に來るやうになつた。（其頃は貿易と云はず交易と云つてゐた）併し、從前通りの手法で佛様を長くやつてゐたこと故その習慣上貿易品向きのものを製作するとしても、どうしても佛様臭くなつて仕様がない。佛様を作るには佛様臭いのは仕方もないが、貿易品的のものに佛臭のあるのは面白くない。何うかして此の佛臭を脱して寫生的に新らしくやつて見たいものだといふことが私の胸に浮んで來ました。

　もつとも、此の考へは今更のことでなく、私の年季中から既に芽差してゐたことで、何かにつけ心掛けては居りましたが、いよ／＼社會の要求に驅られるやうになつて見ると、事實、その寫生的に行く方のやり方を實行して見たくなつたのであります。即ち、私自身としては自分の製作の態度や方法を一變して新らしくやつて見やうといふ心を起したのであります。

　其所で、先づ差當つては、何を其研究の資料にするかといふと、從來のお手本とは全く違つた方面のもので、例へば、西洋から輸入して來たいろ／＼の摺物、外字新聞の挿畫のやうなものや、廣告類の色摺りの石版畫とか、又は一寸とした鉛筆畫のやうなもの、さういふものが外人との交際の頻繁になるにつれて所在にそれがある。それを、いろ／＼の機會に見附け次第、買つたり借覽したりして見ると、どうも私の脳がそれに惹き附けられ、また動いて來る。といふのは、在來の彫刻の手本にした繪とか彫刻の手本とかいふものとは餘程異つた行方であつて、動物でも、草木、花、物品、凡てのものが眞に迫つて實物に近い。それは殆んど實物そつくりと云つてもよろしい。犬一匹描いてあつてもどう見ても本物である。特にその毛並みのやり方が目に立つて旨く出來てゐる。從來の彫刻の方でやる毛の彫り方は、まるで引ツ搔いたやうに毛が生えてゐるといふ心持ち丈けを肉の上へ持つて行つて現はすのであるが、西洋の繪は、毛は毛で、皮膚の上へムツクリとして被ひかぶさり、長い處、短い處、渦を卷いてゐる處、波状になつた處、撥ねた處、ぴつたりと引つ附いた處と、その毛並みの趣が、一々實物の趣きが現はされてゐる。それを私は見てゐると、どうしても在來の彫刻のやり方では、

それが一向適切に現はれて來ない。此は、どうしても此の西洋の繪畫の行き方のやうに彫刻の方でも工夫をしなければいけない、といふことを私は考へました。

そして、さういふ西洋畫の行き方に彫刻の方をやるには、矢張り西洋畫が寫生を主としたと同じやうに寫生を確乎りやらなければならないと、斯う考へました。今日から見ると、甚だ當り前のことのやうであるが、兎に角、私は此所へ着眼して一意專心に寫生を研究しました。丁度、それに畫家が實物を寫生すると同じやうに刀や鑿をもつて實物を寫生したのである。毛の上に毛の重り合ひ、或は波打ち、揺れ動く狀態等緩急抑揚のある處を熟視して熱心にやりました。で、萬事が此の意氣であるから、動物の骨格姿勢とか、草木、果實、花などの形に於ても矢張り同じことで、いろ／＼と實物を的にして彫刻するといふことに苦心したのであります。

此の研究が一二年續く中に、何時となく從來の古い型が脫れて、佛臭が去つたやうなわけであつて、其頃では、斯う云つてはおかしいが、私は新らしい方の先登であつたのであります。

脂土や石膏に心を惹れた話

丁度、其時分、虎の門際の辰ノ口に工部省で建てた工部學校といふものが出來ました。噂に聞くと、此校では西洋人を教師に傭つて、繪や彫刻を修業してゐるのだといふこと、繪は油繪であり、彫刻は西洋彫刻をやつてゐるのだといふ評判……さういふ話を聞くと、私はそれを見度くて仕方がないが、併し見るわけにも行かぬ。生徒には藤田文三氏、長沼守敬氏、大熊氏廣氏などいふ人達が入校つてゐるやうであるが、自分は純然たる佛師のことゝて、まるで世界が違ふ。其日々々の手間を取つて一家の生計を立てゝ行くその仕事の餘暇を見つけては、今申す通り、實物を教師にして寫生することを心掛けてゐるのであるから、中々、さういふ學校へ入學して其人々と共に研究修業することなどは思ひも寄らぬ。

併し、西洋の彫刻を西洋人の教師から習つてゐるといふことは、聞く丈けでも羨望に堪えぬわけでありますから、何にかにつけ、其噂を聞くことさへも心が惹かれるのでありましたが、或人の話に、工部學校では、木彫はやらないのださうな。何んでも「脂土」と云つて幾日經つても固まらない西洋の土を使つて實物を寫すので、その土は附けたり、減らしたり自由自在に出來るから、何んでも思ふやうに實物の形が作られる。さうして今度は、その出來た原の形へ「石膏」といふ白粉のやうな粉を水に溶いたものを被せ掛けて型を取るのださうな。だから、非常

に便利で、且つ原型をつくりのものが出來るといふことだ。といふやうなことを聞きます。けれども、實際、何ういふことをやつて居るのか、實地を見るわけに行かないが、話に聞いた丈けでもどうも甚だ都合が好さゝうに思はれる。かねてから、私は木彫といふのは一寸不自由な所があることを考へてゐた。それは、木彫は一度肉を取り過ぎると、それを再び附け加へることは出來ない。此の不自由なのに反して、増減自在で且つ幾日經つても軟らかな儘であるといふ「脂土」のことを考へると、どうも、其土が至極のものと思はれる。

「何うだらう。その脂土といふものは賣物はないだらうか。」

斯う私はその話をした人に聞きますと、

「そりや、賣物にはないだらうが、工部學校から、どうかすれば出ないものでもあるまい。しかし、非常に高價なものださうな。」

「高價と云つて何の位するものだらうか。」

「一寸四方一圓位ださうな。」

「成程、それは高い。とても我々の手にはまあ這入らない。」

私は殘念乍ら、斯ういふより外仕方がありませんでした。が、どうも、その土のことが氣になつて仕樣がありませんでした。

其後、或日、工部學校の前を通り、不圖見ると、お濠へ白水が流れてゐる。

「アヽ、此れだ。此れが石膏といふものだな。」と私は思ひました。

それで、またその石膏が脂土と同じやうに私の憧れの種となりました。

さて、私は斯うして一方には西洋彫刻のことに心を惹かれ、一方では自然の物象に就いて獨り研究しつゝ、相變らず師匠の家に通つて一家の生計をいそしんでゐる中、前述の横濱貿易が此の一二年間位の中に恐ろしい勢で盛り出して來ました。

師匠の許へは米澤町の澤田といふ袋物屋から種々貿易向きの注文が來て、その方が中々多忙がしくなる。今迄は佛様專門であつたが、今は不思議なものを彫る。例へば、枝珊瑚樹を臺にして、それに黑奴が大勢遊んでゐるやうなものを拵へる。枝珊瑚の根の方を岩にして、周圍を怒波と瀞とを現はし、黑奴が珊瑚の枝に乘つて喇叭を吹いてゐるとか、陸に上つて衣物をしぼつてゐるとか、遠見をしてゐるとかいふ形を作る。それは黑檀で彫るので、珊瑚の赤色には好くうつるので、外國人向きとして中々評判よろしく能く賣れるといふ。それで職業的には先づ斯うしてゐても生活の助けとはなるが、併し、私の賣物寫生の

研究と西洋彫刻に對する憧憬は少しもゆるみはせず、何うかして、一新生面を展き度いものである。此の儘、斯ういふことばかりしてゐてはゐられないといふ不安が始終私の心を鞭ち、その爲人知れぬ苦勞をもしたのであつた。

鑄物の仕事をしたはなし

兎角してゐる中、また一つ私の生活に變化が來ました。それは牛込神樂坂の手前に軽子坂といふ坂があるが、その坂上に鑄物師で大島高次郎といふ人があつて、明治十四年の博覽會に出品する作品に着手してゐた。

此は銀座の三成社(鑄物會社)が金主となつて大島氏に依囑したものであるが、その大島氏の息子に勝三郎(後に如雲と號す)といふ人があつて、まだ二十歳前の青年であるけれども、中々腕の勝れた人で、此の人が主となつてその製作をやつて居つた。處が、大作のことゝて、中々大島氏父子の手丈けでは十四年出品の間に合ひさうもない所から、十二年の暮頃から、頻りと製作を急いで來たがどうも手助ひを頼む人物が中々見當らない。其所で、父の高次郎氏が、何ういふ考であつたか、その助手を私に頼むことに決めたと見え、或日、突然、私の宅へその人が訪ねて來たのである。

高次郎氏に逢つて見ると「實は、此れ〳〵で仕事を急いでゐる。是非一つ來てやつて頂きたい。」

との頼み。併し、話を聞くと、先方の仕事は鑄物の方で、蠟作りでやるのだと云ふ。私は木は彫るが、蠟はいぢつたことは無い。まるで經驗のない仕事であるから、とても此れはやれない。折角ですが……と斷りますと、大島氏は中々承知せず、

「そんな心配は御無用だ。木彫の出來るあなたが蠟のひねられないといふ道理は無い。まあ、兎に角、來てやつて見て下さい。木のやれる腕前だ。蠟は何んでもない。是非一つ引受けてお貰ひしたい。」

と、一本槍に頼まれて、私も實は當惑した。といふのは、手練れないことを輕卒にやつて、物笑ひになるやうでは氣の利かぬ話と思つたからであります。けれども、大島氏は強つてと云つて中々許しませんので、經驗が無いといふことも、その經驗を作ることによつて、智識も啓け、腕も上達するといふもの、聞けば蠟作りといふものは、中々自由の利くもので、指でひねつて形を作るのであるといふが、此はかねてから心を惹かれてゐる彼の増減自在の「脂土」のことにも思ひ到り、手法は異ふにしても、蠟でやることも面白からん、此は大に彫刻のたよりとなるであらう。初めての仕事なれど、何も經驗である。行つて

見やうかと私の心は動いて來ました。

それに勝三郎といふ人の仕事の上手であることをも豫てから知つて居り、此の人と一緒に仕事することは、いろ／＼智識を開くことにもならう。また佛師の仕事と異つて、鑄物の方になると、思ひもよらぬ面白い仕事をするかも知れない。何も修業だ、と爰に決心しまして、承知の旨を答へました。

大島老人は大に喜び、早速、明日から來て貰ひたいといふので、まるで、足元から鳥の立つやうな話でありました。

さて、仕事に掛つて見ると、成程、彫刻の土臺があることだから、出來ないことはない。蠟を取つて指でひねつて物の形を作る……中々此は面白いと思ふ。二日三日と經つと存外手に入つて來る。

「それ見なさい。私の云つた通りでせう。」

大島老人はにこ／＼笑つてゐる。

斯くて、如雲氏と共に毎日仕事を勵み、とう／＼十四年出品の作物を鑄物に作り上げてしまひました。

此の製作品は龍王の像で、是は勝三郎氏作り、私は、お供と前立ちの方を主にやつたのです。さうして丸二年間大島氏の家に起臥して鑄金の仕事を修業したのである。

隨つて參考の爲、其頃の私の給料のことを話すが、それが面白いのは、大島の老人が餘計に給料を拂はうといふのを、私がそれを辭退して長い間押問答をしたことを覺えてゐる。仕事に來た其月晦日の夜の事、大島老人は、最初私に向つて、

「さて、あなたも、いよ／＼家へ來て下さることになつたから給料を決めやう。一體、幾金上げてよいか。お望みのところを云つて下さい。」といふ。私は是迄師匠の宅へ通つてゐる間、月給二十匁宛を貰つてゐたから、是迄通り、二十匁（此の二十匁は三日で六十匁壹兩に當る）でよろしいのだが、先づ壹分貳朱も頂けば結構といふと、

「今時の時節にそんな馬鹿なことがあるものか、壹分や貳分では何うなることも出來やしない。私は壹兩貳分差上げる。また急なものだから時々夜業をお頼みすることがあるから、それは半人手間といふことにして頂かう。」

と大島老人は云ふ。

私に取つて壹兩貳分などいふ給料は従來の二十匁に比してドンナに結構か知れません。しかし、そんなに貰つては多過ぎますので、私は散々辭退をし押問答の末、私から壹兩に決めて貰ひ、其代り、夜業は自分の隨意といふことにしました。

此の大島高次郎といふ人は、若い時から草鞋穿きで叩き上げ

た程な人ですから、中々確乎りした人物でありました。そして能く私のことを心配をして呉れ、私もまた同氏の爲には心から盡したので、博覧會が終んでも、まだ暇が貰へず、矢張り、二年越し此所へ勤めてゐたのでした。

然るに、或時、十四日勘定の給料を受取り、其晩家に歸りまして、翌十五日は休日故、家に居て、不圖道具箱の小刀の抽斗を開けて見ました。

すると、驚いたことには、小刀が悉皆赤錆になつて居ります。是を見た時、私は何とも云へない慚愧悔恨の念が胸にこみ上げて來ました。

私は、暫らく、その錆だらけの小刀を見詰めて居つた。胸に「ア、、これは大變なことをしてしまつた。」といふ思ひが一杯になつて、自分の所業を愧かしく感じ、孔へも入りたく思つたのである。自分は相當の給料を貰ひ、先づ心安く其日の生計をば立て行くことの出來るは結構なれども、さういふことの爲に、師匠譲りの木彫を粗略にし、二年間も小刀の手入れをせず、打つ棄つて置いたといふことは何とも濟まない。是は斯うしては居られない。自分は元の道に歸つて木彫を再びやらなければならん。と斯う決心しますと、もう矢も楯もたまらず、直ちに大島氏の家に行つて、右の趣を述べ、大島老人は物の能く分る人故、引留めもせず、誠に御尤もだと云つて機嫌よく暇を貰ひ、家に歸つて小刀を磨きはじめたことであつた。

象牙彫全盛時代のはなし

其時分の私の住居は、下谷西町三番地(舊立花家の屋敷跡の一部)にありました。大溝渠を前にした一室を仕事場にして、其所で二年振りに手入をした道具を備へ、愈々本職の木彫をもつて世に立つことにしたのであります。

私が、本當に他人の手から離れ、全くの獨立で木彫を家業として始めたのは此の時からであります。されば、自然と私の心も爽々しく、腕もまた、鳴るやうに思はれたが、佛師の仕事は前申す通り全く疲弊して居ることゝて、木彫の仕事は一向に無い。注文が更にありません。此には私も大に困じ果てました。

所が、木彫が斯んなに微々として振はぬに反して、象牙彫は實に盛んになつて來ました。此の時分は、正に、牙彫全盛時代と云つてもよろしい位、丁度、それは西洋人の趣味嗜好に投じ、横濱貿易の貿易品にそつくり適つたのでありますから、それはまことに素晴しい勢となつた。つまり、象牙彫は見る通り、美くしくて可愛らしく、それに中々精巧な細工が出來て、大人の

玩弄には持つて來いのやうに出來てゐるものであるから、西洋人の眼にそれが珍奇に見えて購買慾をそゝられたのは道理のことゝ思はれる。

けれども、まだ、明治八九年の頃は牙彫の流行も微々たるもので、根附師が二寸か三寸位の大きさのものを彫つてゐた位、もつとも材料に制限があることゝて、三寸か三寸五分位の大きさが頂上で、五寸とあるのは中々無かつた。それは、象牙木地は大部分は三味線の撥に取つて、其後の三角木地を根附師が使つたものであるからである。で、十年の博覧會に出品された象牙彫の作品も可也はあつたが、まだ／＼大きさも小さなもの、圖柄なども、貿易商人の好みの儘に、乘合舟、鳥追、猿廻しなど在來の型の通りで、中には花見歸りの男が樽の尻を叩いて踊つてゐる圖などもあつたが、一般にまだ極く幼稚でありました。

然るに、僅か三年位の間に、流行といふものは恐ろしいもので（もつとも、此は外國貿易品で、歐米人の嗜好が基ではあるが）彫刻の世界は象牙で眞ッ白になつてしまひました。さうして外人の嗜好に一層投じやうと、種々工夫を凝らす爲、隨つて大作と稱するものが出來、七八寸から一尺位、象牙の木地一杯に作つて其出來榮を競つたもの、されば、其頃は、彫刻と云へば象牙彫のことのやうに思はれ、木の代りに象牙が獨り全盛を極め、明治十四年の博覧會の時などは、彫刻は全部象牙で、「象牙にあらざれば彫刻に非らず。」といふ勢であつた。

されば、從來、木彫家であつた島村俊明氏なども世の好尚につれ、澤田（銀次郎）に勸められて牙彫の方へ代つてしまひました。（石川光明氏は最初より牙彫をやつた人で、當時の流行者の一人であつた。）また本郷天神前に、旭玉山といふ牙彫家がゐて弟子の五人十人も持ち、中々盛んであつた。當時の物價の安い時分でも、一日の手間三圓五十錢を得た位、師匠の作は素より弟子達の作でもドシ／＼賣れ捌けたものであつた。それで、象牙商といふものが四五軒も出來て大仕掛けに商賣をしてゐる。凡て此の調子で、象牙彫は一世を壓倒するの勢でありましたが、それに引き代へ、木彫は孤城落日の姿で、まことに散々な有樣でありました。

されば、其頃、此の流行を逆に行つて、木彫をやつてゐるなどは、誠に氣の利かない奴に相違なかつたのであります。それに木彫は破損し易いが、象牙彫は粘着力があつて、而かも、見た目に美しく、何んとなく手の中へ入れて丸められるやうな可愛らしさがありますから、時流に適したは無理のないこと。需

要の多いものを供給し、人の好むに投じて製作すれば、随つて收入多く、生計も忽ち豐かに、名聲もまた高くなるのでありますが、私は、どうも、をかしな意地を持つて、中々此の象牙彫をやる氣になれませんでした。

牙彫を排し木彫に固執したはなし

「苟くも佛師たるものが、自作を持つて道具屋の店に賣りに行く位なら、燒芋でも燒いてゐろ、團子でもこねてゐろ。」

此は高橋鳳雲が時々私の師匠東雲に云つて聞かせた言葉ださうであります。

私も亦、東雲師から、鳳雲は斯う云つて我々を誡められた、と云つて其話を聞かされたものであります。それで、私の腦にも、此の言葉が殘つて居る。云ひ草は下品であつても志は洵に高い、潔よい。我々佛師の道を傳ふるもの此の意氣が丸で無くなつてはならない。心すべきは今である……と斯う私も考へてゐる。それが私のをかしな意地であつたが、兎に角、象牙彫をやつて、それを風呂敷に包んで牙商の店頭へ賣りに行くなぞは身を斬られても嫌なことであつた。が、さればと云つて木彫の注文は更になく、注文がないと云つて坐つて待つても居られない。斯くては忽ち糊口に窮し、其日の生計も立つては行かぬ。

サテ、困つたものだと、私も途方にくれました。

併し、如何に困ればと云つて、素志を飜へすわけには行かぬ。

其所で私は思案を決め、

「よし、俺は、木で彫るものなら何んでも彫らう。そして、先方から頼んで來たものなら何んでも彫らう。」といふことにしました。で、木なら何んでも彫るとなると、相當注文はある。注文によつては是も何んでも彫る。何んなつまらないものでも彫る。其所で、洋傘の柄を彫る。張子の型を彫る。（此は龜井戸の天神などにある張子の虎などの型を頼みに來れば彫るのです）其他いろ〳〵のものを注文に應じて彫りましたが、其代り今年七十一（大正十一年十二月）になりますが、遂に道具屋へ自作を持つて賣りに行くことはしないで終りました。

斯ういふ風で、此の當時は、私の苦闘時代と云はゞ云つて好い時であつた。

前に申す如く、西町の三番地の小さな家の、一間は土間、一間は仕事場で、橋を渡つて這入れば竹の格子があつて、その中で私はコツ〳〵と仕事をやつてゐた。（通りからは仕事場が見えた。）

すると、或日、前に話した袋物屋の、米澤町の澤田銀次郎が

訪ねて來ました。此人は以前藏前の師匠の家にゐた當時、あの珊瑚樹に黑奴のとまつてゐる仕事をたのまれた關係で、舊知の人でありますから、久振り對面しますと「一つ木彫をお願ひしたい。」といふことである。今時分木彫をわざ〳〵賴みに來るのは不思議のやうであるが、此の澤田は貿易物の他に、地の仕事をも請合ふのですから、私に木彫を賴みに來たのであつた。布袋を彫つてくれ、といふので、早速私は彫りはじめたが、此の製作は、私がいろ〳〵西洋彫刻のことにあこがれ、實物寫生によつて研究努力した後の木彫らしい木調であつたから、私も長々研究の結果によつて充分心行くやうな新らしい手法をもつて彫り試みたことであつた。もつとも、圖は布袋であるが、從來の佛師の佛臭を脫した一つの行き方をもつて此の布袋を彫り上げたのであつた。

其所で、澤田へそれを屆けると、何金お禮をしたら好いかといふ。製作の日數の掛つた丈け一日一圓といふ割にして私は報酬を貰ひ受けた。

その次は魚籃觀音を一體、それから三聖人(三つ一組)を彫つた。此等も實費丈けを受け、決して餘計な報酬を得やうとはしなかつた。それで、澤田は氣の毒がつて、

「それでは、手間が掛る一方で、とてもお引合ひにはならんでせう。」といふ。

「いや、先づ、先の日の生計が、家業を斯うしてやつて附いて行くのだから文句もありません。」など答へると、澤田は、

「それは、然うでせうが、あなたが、若し、象牙をおやりなさると、そりや、立派な手間が拂へますのですが……此方も商賣ですから、見す〳〵あなたがお手數をかけて下すつたものでも、木彫では儲が薄いので、碌な手間をお拂ひ出來ません。手間が細くつて、手數ばかり掛る木彫よりか、一つ、何うです。象牙の方をおやんなすつちや……」

など、親切に云つて吳れますが、私はぶきやふで象牙などは到底彫れませんと斷り、碌に其方の話の相手にはならず逃げて居りました。

其後、或日のこと、澤田の奉公人が、風呂敷に二尺五六寸程もある長い棒を包んだものを持つて來ました。

「此をお預り下さい。後刻主人が參りますから。」

さう云つて歸つて行きました。

私は一目見て、その風呂敷の中には、何が這入つてゐるかゞ分りました。それは無論象牙の材である。

「ハハア、とう〳〵やつて來たな。」と私は思ひました。

所へ、澤田の主人が來た。

「此の象牙は熨斗を附けて差上ます……」

といふ前置で、澤田氏の云ふには、

「今日は是非一つ象牙を試みて頂きたく出ましたわけで、かね〲申上げたが御承知のない處を見ると、象牙に經驗が無いから謙遜してのお斷りかと思ひますが、此の材を差上げることにしまして彫つて、御覽になり、思ふやうに行かなくても、御自分の材なら御心配は無い。何んなりとお試めしに勝手に彫つて下さい。さうしてお氣に入つたものが出來ましたら、手前の方へお廻し下さい。すると、手前の方では、象牙の値と、手間とを差上ます。さうすれば、あなたにも御面倒がなく氣樂に仕事が出來るわけ、また私の方でも甚だ好都合…… 實は斯ういふ考へで上りましたが、是非一つ此の象牙を貰つて頂きたいものです。」

といふ口上、是れには私も澤田氏の行屆いた親切を感謝しないわけには行きませんが、併し私としては、さうは云つてゐらない。此所はキッパリするに限ると思ひ、

「御親切なお言葉甚だ有難く存じますが、實は、私が象牙を手掛けないことには趣意がありますことです。かねて師匠から小刀を讓られて、今更、今日に及び生計の爲と申して、その家業の木彫を棄てゝ牙彫をやるといふわけには參りません。打ち明けたお話をすれば、全く、私は、象牙は嫌なんです。イヤなのです。何卒か、私の趣意をお察し下すつて、此ればかりは他の方へお廻しを願ひたい。此のお持ちの象牙も今晩私が擔いでお屆け致しますから、其邊、どうか、惡しからず……」

斯ういふ意味で私はキッパリと謝絶ました。すると澤田氏といふ人も理のわかつた人とて、

「成程、左樣でありますか、今日迄、あつたが象牙をお手掛けなさらんことに就いては半信半疑でありましたから、實は今日のやうなことを申出たわけであります。が、只今、お話を承はつて、能く了解しました。では、象牙のことは今日限り打ち切りまして、矢張り從前通り、木彫の方をお願ひ致しませう。」

と、よく要領を得た答へに私もよろこび、其後相變らず澤田氏の注文で二三回も木彫の仕事をしたことがありました。實に、澤田銀次郎といふ老人は商人には珍らしい好人物で、誠に親切なお方でありました。中々長命で四五年前まではお健者でした。

貿易品の型彫をした話

それから、また暫らくの後、或日、私が仕事場で仕事をしてゐると、一人の百姓のやうな風體をした老人が格子戸を開けて

訪ねて來ました。

　其人は、チョン髷を結つて、太い鼻緒の下駄を穿き、見るから素樸な風體、變な人だと思つてゐると、

「一つ彫刻を頼みたい。」といふ。

「木で彫る方の彫刻なら何んでも彫りませう。」

と答へると、

「それは結構、では今夜私の宅へ來て下さい。能く御相談をしませう。私は神田旅籠町の三河屋幸三郎といふものだ。」

　斯う云ひ殘して歸りました。何ういふ人物か知らないが、兎に角、約束通り、私は、その宿所へ訪ねて見ると、それは中々立派な構、御成道の大時計を右に曲て神田明神下の方へ曲る角の、昌平橋へ出やうといふ左側に、其頃横濱貿易商で有名な三河屋幸三郎、俗に三幸と云ふ人の店であつた。

　私は、迂濶してゐたことををかしく思ひ乍ら、通されて逢ふと、幸三郎老人は中々話が分る。その筈で、此の人は維新の際は彰義隊に關係したといふ疑を受けたこともあり、後、五稜廓で奮戰した榎本武揚子とも往來をして非常な德川贔負の人であつて劍道も能く出來た豪傑、武士道と俠客肌を一緒につき混せたやうな肌合の人物で、此の氣性で、時勢を見て貿易商になつて居るのであるから、中々、話も分るわけである。

　其所で、老人の云ふには、

「私がお頼みしたいといふのは、貿易品にする種々の器具の型彫をして貰ひたいのであるが、今日迄、普通、下繪を繪師にかけてやつてゐるが、どうもおもしろくない。矢張、初手から彫刻師の刀にかけ、彫刻師自身の意匠で型を彫つて貰ひたいのだが、一つ勘考して頂きたい。型彫といふものは、鐵へ反對にメガタに彫つて、それが型となつて、貿易向きのマッチ入れとか、灰皿とか、卷莨入、布巾輪、たばこ盆、紙切、砂糖挾み、時計枠など、いろ〳〵外國向きの物品を作るのだが、それを一つあなたの意匠を凝らし、繪師の手を借りずに、ヂカ附けに彫つて頂かう。さうする方が出來が生きて面白く、同じ金屬で打ち出したものでも値打があるといふもの、一つ自由に腕を振つて見て下さい。」といふ注文、其所で、いろ〳〵な用途の器物の見本を見ると、中々興味があります。私も斯うした新らしい試みには以前から氣があるのであるから、

「では、何ういふものが出來るか、一つ行つて見ませう。」

と、引受けて歸りました。

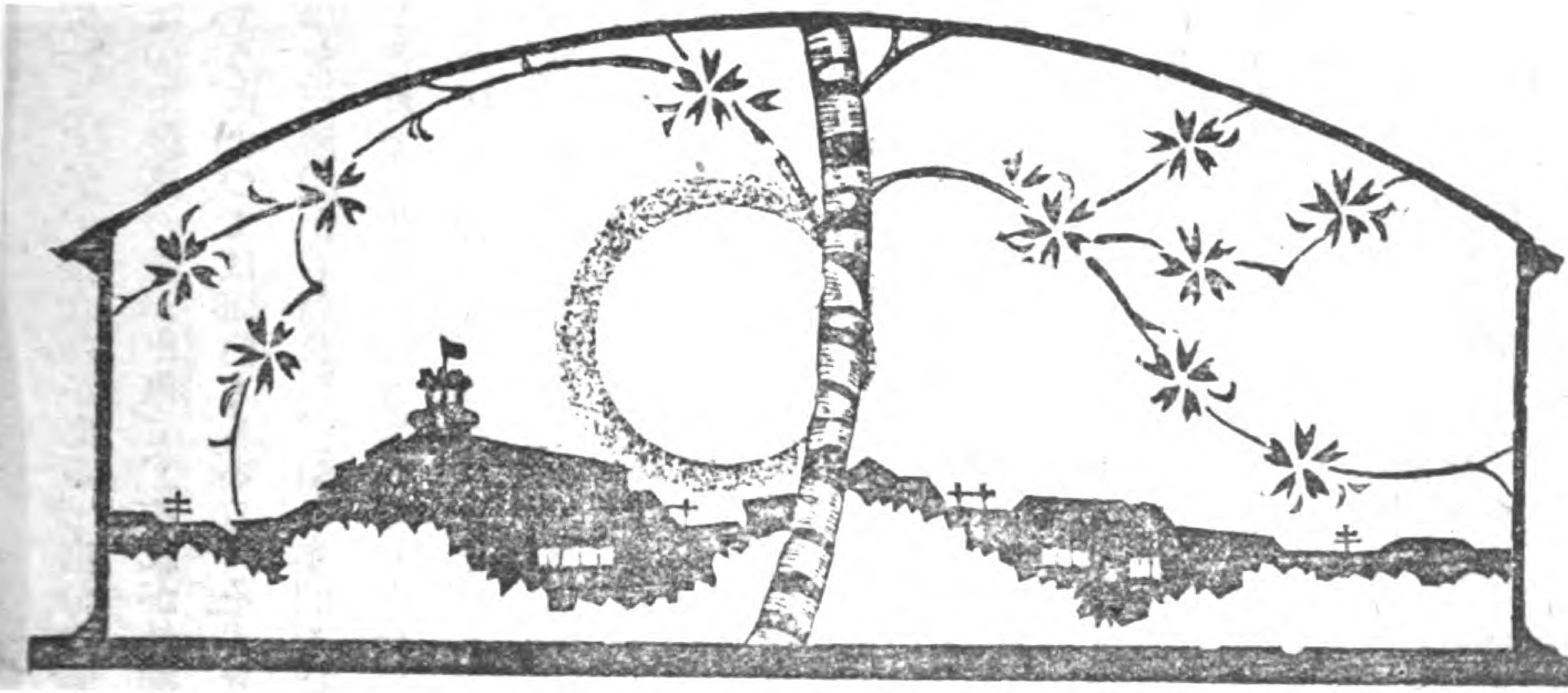
　私の仕事は矢張り金型をヘコサに彫る工人の手本になるので、その意匠を考へ考へして種々な用途の器具の内面又は外側に、旨く意匠づけたものを彫るのであるから、中々仕事に骨は

折れますが、張合ひがある。自分の意匠づけた一つの型が原になつて幾萬の數が出來て、それが外國へ行くといふことも考へやうによつては面白くもある。そんなやうな譯で、私は此の仕事を三河屋から請負ひ、四五年間も續けてやりました。

それで、生活の方も豐かではないが困るといふことはなく、先づ研究かた〴〵、ゆつくりと腰を据えてやつて居りました。丁度、明治十六年頃迄此の仕事を續けて居りました。其頃三幸の支配人で、現今湯嶋天神町一丁目に居られる草刈豐太郎氏には色々御世話になりました。

彼是してゐる中に、內地向きの仕事もぽつ〳〵有るやうになりました。また、私の彫刻の伎倆も、どうやら世間でも見て呉れる樣になり、生計の方に於ても順調の方へ向いて行くやうな有樣となつたのであります。で、思ふに、明治八九年から十五六年頃までの七八年間は、私に取つては實際經驗によつて修業の出來た時代で、生活其者は苦境であつたが、個人としての內容を豐富にするには洵に適當の時代であつたのであります。





私しや花待つ櫻の花を
そして誘ひに來る花を＝知秋＝
鐘ものどかに上野の山は
昔ながらの花の雲　＝白涓＝

麗かな春四月………松坂屋には特別の工夫こ新しい意匠に成る流行の御衣裳を始めショール、洋傘、帶地、御履物等に至るまで全商品すべて清新の氣に滿ち滿ちて華かに陳列してございます。

松坂屋の四月

◇春衣大賣出し（一日より）
◇特製染丸帶、友禪、小紋陳列（同）
◇五月人形陳列會（五日より）
◇單マント賣出し（十日より）
◇名古屋帶賣出し（同）

東京　**松坂屋いとう呉服店**　上野

江戸時代に於ける儉約強要

鳶魚

儉約といふことは德川氏の家憲でもあり、幕府の政綱でもあつたのだから、約三百年の間代々の將軍が等閑にするとはなかつた、何時の幕閣も大なり小なり儉約といふ題目を持ち出さないのはない、只だ儉約を振り廻さなかつた閣老は、田沼主殿頭意次一人くらゐいものであらう。家康秀忠の二代は自身が儉素質實な生活をしたのみならず、幕府の群僚も三河で長い間の屯田兵らしい生活だつたのを忘れずに居たから、新興の幕府も田舍の小諸侯の規模で頻に倚遣つて往かうとした。それが漸く戰國氣分を離れ、太平な世間に住み馴れて來て、稍文化の恩惠を受けることになると、勿論物資も豐富になる、其の時分から將軍のみならず民衆の生活までが變化しなければならなくなる。戰國の武士は殆ど家庭を知らないかとも見へた、春日の局も武士が鎧一領威す程な費用は、婦女の晴れ着にも支拂はねばならぬと云つたが、渠の猩々緋を旗や指し物又は陣羽織にすることは知つて居るけれども、妻や娘が綾羅錦繡を着ることは考へなかつたのである。戰場を晴れの舞臺と心得た戰國武士は、自分の家庭は樂屋ほどにも思つて居ない、哀れ攻城野戰の際に萬夫不當の武勇を衒ひ、一騎當千の雄姿を飾る武具馬具の美しさ、目覺しい伊達具足に一番槍の高名も、退き口の手柄も愈々晴れ晴れしく見へるのでもあつたが、陣頭に乘り出して遠からん者は音にも聞け、近くば寄つて目にも見よと、抑々の先祖の名前を呼び立てゝ、賣藥の能書きより顯著な長口上、今日でも講釋師に依つて傳へられる其の日の出で立ち、婦女の綺羅衣服が虛榮なら、戰國武士の長口上も伊達具足も虛榮でなくて何であらう。それでも彼等は伊達具足の目立つ爲めに、亂軍突戰の間にも敵味方の注意を惹くだけに、卑怯な事が遣り惜い、逃げ出すのにも都合が好くない、又た善い方から云つても、凄しい其の武者振は全軍の士氣を引立てもするから、戰場の偉飾は大に奬勵さ

れもしたのである。太平の世の中になつて大名奴旗本奴などゝ云はれる武士が、異様異粧を誇りかにカブキ者と呼ばれて憚らなかつた、今日では劇場でしか見られない葉の不倣名古屋の寛濶打扮も、決して虚設されたものでない、これが奢侈からばかり出現したのではなく、戰國傳來の彼等の思想に孕胎する武士の威風の表示であるやうにのみ考へるのであつた。戰爭を前に控へた生命の忙しい武士の身は、疊の上の御奉公とは違つて明日とは云はず御馬前の露塵にならねばならぬ、太十の初菊ではないが、責めて今宵は凱陣してと願つて見ても、堀川御所へ上使に來た辨慶が云ふ通り、國を出づる時、家を忘れ、境を過ぐる時、妻子を忘れ、敵陣に望んで我身を忘る、戀の愛のと云つて居て戰爭が出來るものではない、妻子を忘れないにしても家庭を餘所に矢玉の中を奔走する時間が多い。さうした時世の婦女は一日半日の同棲でも、それが何程樂しかつたらう、無事な本夫の顔を見るのが何程嬉しかつたらう、本夫に對する感情は今日俄に想像するのには困難である。一家の資力は擧げて、槍に刀に旗指し物に、美しい鎧の威毛に、輝く兜の筋金に惜しまず傾倒しながらも、本夫の晴れの行裝の鮮かなのを心遣りに、又た萬一討死した時でも最期を飾り死後の醜くないやうにと、平生から嗜みもすれば心掛けもする、悲しい中にも戰國の武門の婦女の情味の濃なことを、我等は何時も思ひ出しては滿足に思ふ。だが『予は胎内からの將軍である』と大見得を切つた三代家光の時になると、戰爭と云つても天草一揆の討伐に過ぎぬ。

『長生のしたき計が苦と成て、生老病死をかなしみ、四足の物を明暮と養生とては喰けり』と福齋物語にある、此の福齋物語が寛永二十年の刊行であるのみならず、和歌食物本草といふ假字書きの食養書が、寛永七年に出版されても居る。大阪落城は元和元年であつて、それが應仁以來長い戰亂の打切りにはなつたものゝ、其の元和元年から和歌食物本草の出版までは、僅に十七年經つたばかりである、其の中には

牛はたゞ腰膝ひゆる人によし筋骨つよめ血をあたゝむ

うしの乳はあまねくひえて年久にかはきの病とまらぬにのめ

などゝ云つた調子の食養を載せてある、戰爭と食養との距離は實に二十年に足らない時間に懸隔したものとは思はれない程のことで、此の間に如何に生活が變化したかを明白に考へさせる。生命は時世が保證する、法律制度に依つて安心して居られるが、さうなると病氣と老頽とが今更のやうに苦勞になる、其處で食養書も出て來るのであるが、戰爭だらけの世の中で矢叫びや鬨の聲ばかり聞へて居る時は、男子のみの世界らしいけども、食養を心掛けて長生を希望する時になると、男子も家庭の人であ

つて、夫婦も昔の夫婦ではない。太平の恩恵は決して婦女に勘い筈はなく、戰國以來の因襲、それも誠に據ない事情があつて婦女を家庭に封鎖したもの〻、戸外の一歩は直に戰爭といふ危殆に出會すればこそ、其の危殆のない世間になれば、婦女の天地は既に家庭だけでない。世の中の主たる仕事が戰爭であつて、それは婦女には堪へられぬ、男子の中でも武士だけが獨擅して、權威を壟斷して居つたが、太平の世の中では仕事が變つて了つた、大身の槍も鐵桿棒も主要な仕事に使用されぬ。權威赫々たる戰勝者も幕府の主人として、天下の群侯を一睨みにはするけれども、此の上にも兵力を加ふべきでない、今では政治といふとが、昔の戰爭と振替つた重大任務になつて居る。千代田城の大奥に構へ込んだ春日の局は、ある把握を獲て、幕閣の大臣を頤使し、天下の諸侯も彼の女の鼻息を窺はなければならなかつた、それは足利義教夫人富子とは全く違つた形勢を示して居る。婦女の出る幕は既に其の前に開かれて居た、慶長元和の際に女歌舞伎の巢の阿國が、公衆の前に立つて、其の演技を觀せた時、彼の盛聲は當代を覆ふばかりであつた。戰爭がなくなるか、ならぬかといふ瞬間に先づ阿國が出て、やがて春日の局が現はれた、斯る機會に婦女は決して猶豫しては居らぬ。

カブキ者宜淵者は戰國力以外に武士の威風を示したい心もあつたので、華美な行裝も奢侈とのみは見られないにもせよ、天の網島のおさんのやうに、『兎角男は世間が大事、私や子供は何着ずとも』と、それを傍看して居りはせぬ、果然奢侈は武家の婦女から進捗して來た。從つて食饌も調度も家屋も面目を改め、儀式立つても來れば階級立つても來る、奴婢の數も增し、家計も自然と膨脹するが、それまでの生活が戰時の非常であつて、斯うなつて普通の狀態にあつたとも云へる。それが全體に當然だとも云はれないにしろ、從前の戰時生活を肯定すべき筈はない、幾分かの不當然があるにもせよ、緊しく論難される項目は多くなかつたやうに思はれる。自體三河の片田舍で屯田兵のやうな生活をして居た德川氏の家來は、一朝にして主人が天下の政權を掌握し、幕府を創立して四海に號令することゝなり、急に身が廣く御直參と云はれるとになつた、俸給も增されたに違ひもないが、分限相應な格式を與へられ、召連れて出る供方の數をさへ定められた、しかし屯田兵生活を基本として增加された俸給なのだから、旗本だ御家人だと云つて太平な世に普通な暮しをしやうとすれば、直ぐに家計が立たなくなる。國侍は九百九十石まで鼻紙を遣はずに、手鼻をかむだとやら、大都の江戸に住んで御直參と云はれるだけに、二三十俵しか貰へたい御家人でも思ひ切つて手鼻と出掛けられもせぬ。增俸の殆ど

無い旗本御家人は、何としても足りない身上なのであるから、儉約するか破滅するかの外はない、故に彼等と儉約とは決して離れられぬ、又たそれを擴大したものが幕府なのである。

幕府の財政書類全部は、慶應四年に新政府へ引繼ぐことを避けて、本所のお竹藏へ持ち出して燒いて了つたから、今日に傳つたものは何もない、それ故に幕府の歳計は概數さへも知れないのである。幕府の歳入は云ふ迄もなく職として田租であつて、それも玄米を收納するのである、歳入は殆ど一定して動かない、只だ米穀の市價に依つての變化があるばかりなのだ、是は幕府のみでなく、大名も旗本御家人も御同樣のことである。今日の政府の歳計は支出を見掛けて租稅を增徵し、算盤の執れるやうに收入するが、江戶時代の歳入は既定のものであつて、如何なる場合にも增徵を許さない、量入爲出といつて歳入に從つた支出より外には、一文半錢も出所はないのである。我等は危險なことではあるが、幕府の歳計に就いて考察を加へて見よう、だが到底想像たるを免れぬ。

十五代將軍になつた慶喜公は末造の幕府の收入が約二百萬石であつたと云はれた、化政度には二百八十萬石と睨まれて居つた、此の收入の內から俵取と稱する旗本御家人等へ六十萬石內外の給與は、既定の支出で變更されないのと、將軍の家庭費が營繕費と共に二十萬石とは動かせない。慶喜公が二百萬石と云はれたのは、前の二項を差引いたもので、眞に幕府が手取りともいふべき收入を概算されたものであらうと思はれる。幕府でも大名でも軍隊組織になつて居る、兵力を常備するために家來の數が割合に多い、大名は分限の大小に拘らず、持ち高の三分の二乃至半額は家來への給與で、それが既定不動の支出なのだから、一藩の政治費、殿樣の生活費は割合に尠い。幕府にしても譜代大名といつて、家來の中でも分限の大きいのは封土を與へてある、旗本も采地のあるものは別で、前に云つたのは現米で給與するだけの計算である。江戶時代には餘り功能もなかつたけれども、兎に角に軍國の設備は立つて居たが、政治施設は其の政治費の如く僅少なものであつた、それが爲めに町村の自治は、必要のまゝに整頓するやうにもなつた。若し風水害其の他の爲めに、米の收獲が減少すれば、直に幕府の歳入に影響し、米價が下落すれば是も歳入を縮少する、大名も同樣であるのみか、現米で支給される旗本御家人等は、米價が下落すれば不時に減俸される勘定になる。然るに江戶時代の米價は、他の物價と比較して下向きのことが多かつたので、增收なき幕府、增俸なき幕臣は何程の苦しみをしたであらうか、さりとて米價が騰貴すれば、武士と農民は喜んでも、工商等の惱みになる。江戶

の政治家が苦心を續けた渠の米價調節は、覿面な階級爭鬪とも見られやう。政治に就いての經常費さへ乏しい幕府は、米價調節のやうな不時に發生する差置き難い事件に遭遇すると、忽に此の臨時費に差支へる、其處で富商豪賈に强制して御用金を徵發するのが定例のやうでもあつた。臨時費のない幕府は、朝鮮來聘などには全國の地主に費用を割り當てゝ出させもしたが、土木工事の如きは常に御手傳と稱して、二三の大名を特に指定して擔當させた。のみならず將軍の子女が嫁娶するに際して、定例の献上の外に諸大名に種々な物資を献納させた、諸大名は幕閣に就いて献上の品目を相談して、御都合の好い物什を献上するのであつた、將軍は聟に遣るにも嫁を取るにも、自分の子女の結婚の仕度に殆ど資金の必要がなかつたのである。是は諸侯を疲弊させて、長く幕府に順從させる政策のやうにも思はれて居たが、大工事の御手傳や献上物に依つて諸侯の資金を奪ふことは、果して列侯を駕御する方法ばかりであつたらうか。惮り多いことではあるが、明治元年の皇室費は御所、皇太皇后、後宮の三項を總べて現米十五萬石であつて、同年の平均相場一石金五圓九十八錢であつたから、八十九萬七千圓になる。それでも御所の御模樣は十萬石の大名の規模であつて、如何にも御質素であると、當時の誰彼が感服したが、皇室費は現米十五萬石で、徳川氏の奥向費用とは五萬石の差であるのから考へて、諸大名の献上が何程必要であつたか知れぬ。

千代田城の御表といふのが幕府の政廳であつて、奥向といふのが將軍の官邸である、奥と表との費用は別けてないのではないけれども、將軍が我儘氣儘な費消を禁遏する方法はない、將軍自身の費用が激增といふ程でなくても、假令僅少な分量であつても、それだけ乏しい政治費を裂くことになる。收入が既定不動なのであるから、何も彼も大凡二百萬石の政治費を融通して繰合せて往かなければならぬ、幕府の規模が定つて居る上は此の政治費も、容易に删減されもせず、特に元來豐富なのでもないのだから、迂濶に手を附ければ忽ち支障を生じる。此の經常政費を心掛けて儉約して濟むものならば、一代に一度の定例になつて居る上洛や日光社參をすたれさせはせぬ、誠に猶豫のないものであつたことは、將軍として一代一度の晴れの定例をさへ執行し得られなかつたのでも察せられよう。まして嘉永に米艦が渡來して、國防が攻究されることとなつて、費用を轉嫁すべき諸侯が已に自分の領土の沿海防備に堪へない有樣である、幕府は何よりも費用に堪へられないのは明白である。只だ將軍の心一つで自由になるのは自分の費用だけである、それ故に我儘氣儘な將軍が出ると、幕府は何時でも窮迫する、從つて幕政整

理と云へば何時でも將軍の身邊を中心として儉約が考へられ、衣服調度や三度の食事が節略に採用されるのも、餘り些細な行き方のやうであるが、幕府の歳計といふものは、それ程に窮詰つて居たのである。苟も全日本を支配する幕府の財政が、將軍の供膳の五汁七菜を二汁三菜にするといふ程な儉約に依つて、救濟されやうとは思はない人もあらうが、其處より外に伸縮自在にし得る費目は無かつたのである。山崎闇齋の盍徹問答から、中井竹山の華胥國物語まで、新古となく大名の財政整理を說いたものゝ數を盡して、町人借り倒しを敎へる外は、殿樣の身邊を簡率くする方法の他に何があつたか。それは大名の身上のことゝして看過されぬ、武門武士の江戸時代に於ける生計は規模に大小はあつても、皆な同樣な組み立てゞあつたのを忘れてはなるまい。

彼の日光廟の建築を敢行した三代家光は、幕府の浪費將軍の第一號であつた、貧乏な大名旗本等の救濟の爲めに尠なからぬ資金を散じた、勿論自身も贅澤であつた、それは太平の世に兵力以外で、諸侯を制壓するのには財力が宜しい、資金に於いても超越して居るのを見せ附ける爲めに、不急な土木を頻々と起しもしたのだと善解されても居る。其の家光の時に儉約令は出て居る、幕府の收支に頓着なく亂費したから、祖父家康の秘藏した遺金をドン／＼消耗せざるを得なかつた、餘裕のない幕府が此の非常準備金を消耗して、何時になつても回復の途のないのに、幕府にしては空前絶後とも云ふべき程に、家光の左右には酒井忠勝、松平信綱を初め賢明な家來が揃つて居ながら、幕府の金庫の窮乏するのを眺めて、如何ともする事が出來なかつた。四代家綱になつては家康の遺金は全く消耗し盡して了つた、儉約令は頻發したが、前代同樣更に効力はない、何故に効力がないのか、それでも此の頃から御勘略(簡略)といふ言葉が使用され初めた。當時の大老酒井雅樂頭忠淸は下馬將軍と呼ばれて、飛ぶ鳥が落ちる勢力家であつて、しかも厩橋の城主十五萬石の大名でありながら、繼ぎの當つた小袖を着て出仕したといふ。それ程に御勘略を當路の有司が服膺しても、法度は衣服食饌に及び、進んで民家の正月の松餝をすら禁止しても、寛文の儉約政策は別に成績の見るべきものがなかつた。此の成績といひ、効力といふのは、之に據つて幕府の財政を緩和しやうとするのであつて、歳計に幾分でも餘裕が出て來ない限り、世間が何程儉約した處が、一向埒の開く譯でない。今日の儉約宣傳と江戸の儉約強要と違ふ譯は、主として此處にあらう、幕府にしても大名にしても、苦しみ切れない程な財政難に陷つたからと云つて、將軍にせよ殿樣にせよ辭職して逃げられぬ、逃げられない

立場に居るだけに、貧乏が身に浸みもすれば、何とか切り拔けやうと懸命にもなれる。江戸の儉約令は將軍の貧乏に苦しむ唸り聲である、幕府を倒しては一大事と幕閣が必死にもなるのであつた、しかし大名旗本よりも民衆よりも、儉約令に依つて救はれるのは公方樣(將軍のこと)であり幕府である、公方樣は貧乏から脱れるために先づ一切の奢侈を棄てゝ、質素に簡易にならなければならぬ。公方樣の儉約に對して、大名旗本も民衆も其の生活費を引下げて權衡を保たせるのみでなく、拜借金と稱して大名旗本等の窮苦を救ふ爲めの餘儀ない支出も、此の際停止するには是非とも彼等に儉約を强要する必要がある。若し此の際に民衆が勝手に贅澤をするならば、忽に旗本御家人を刺戟して、鰻登りに大名の奢侈を來し、公方樣の家庭の婦女を誘つて、早速儉約令を打毀して了ふ。大奧の勢力は凄しいもので、約三百年間の江戸時代に有數の大政治家が、椎篦髷の連中の爲めに倒された例は多い、改革で名高い松平越中守定信、水野越前守忠邦も、其處から排斥されて沒落したではないか。民衆に儉約を强要する理由は、生活と位置とから權衡を保つ爲めばかりでない、儉約令は必ず奢侈品の供給を禁制するのからも考へなければなるまい。縱令奢侈品は民間で需要する積りであつても、武家の婦女に影響し、大奧へ反映しない譯に往かぬ、太平の世の中に婦女の力は善くも惡しくも侮り難い。峻嚴な改革で知られた水野忠邦が、大奧の儉約について御年寄(最高級の女官)姉小路の同意を求めた時に、姉小路は貴所に妾があるかと問いた、水野が有ると答へると、折返して人間には男女の慾がある、我々大奧に御奉公するものは、孰れも其の人間當有の慾を棄てゝ居るので見れば、多少の贅澤は已むを得ないと云つて、斷然水野の相談を蹴けた。松平定信が大奧で遣ふ文箱の紐、拇指ほどの太さで八ツ打ちの長い紐であるから、文箱を幾卷きも卷いてある、實用には渠の長さの半分でも十分だからと思つて、文箱の紐を短縮させやうとした、さうするとお使番の女中が、是は御壽命紐といふ紐で、それを縮めるのは上の御壽命を短くすることになる、以ての外の御沙汰だと抗議して、とう／＼强情を張り通した、定信は晩年に此の御壽命紐の話をしては歎息されたといふ。天和改革の時にも綱吉の生母桂昌院本庄氏が泣き落しで、奧向女中の增加やら館林藩士の處置やら寺社への寄進やら、屢々大老堀田備中守正俊の儉約政策を犯した。

儉約に依つて歲計の餘裕を見出すべき場所は、何と云つても將軍の身邊にあるので見れば、儉約令の度每に大奧を警戒するのは當然のことで、奢侈品の供給禁止と共に民間の質素を强要するのも他の理由ではない。幕府の儉約は幕府自身の當面の貧

苦から脱れる爲めにするので、聰明な將軍は一時の計のみならず、子々孫々政權を維持する爲めに、其の基礎を固める思慮があつた、だが分別の怪しい將軍になると、只だ一時の苦痛さへ除けばと思ふので、周圍から云はれるまゝに嬉しくもない儉約をせずに濟む方法を首肯するのもある。一時の苦痛を取り除けるとか、當面の難關を切り拔けるとか云ふ考へだと、只だ繰り廻しが附くやうにさへなれば宜しいのだから、何の遠慮もなく百年の計とか、民衆の幸福とかは忘れて、尙ほ且つ自身に苦しい儉約の方法を喜ぶことにもなる、畢竟世の中の爲めでもなく、民衆の幸福を將へるのでもなく、實際幕府自身の貧乏を治療したいだけの儉約令であるのだから、如何にも痛切な眞摯な叫びに訴へても、國を擧げて一致させる譯はない、底力のない弱い處がある。

　幕府は既定の收入の外に財源を見出して、新税を賦課することは、其の制度の上から不可能であつた、其處で窮策劣策であるのを厭はず、貨幣の改造に依つて其の質を惡化し、甚しい無理な利得を收めた。本邦に於て貨幣制度を樹立し、確實に金融を數し得られるやうになつたのは、誠に東照大權現の神慮に出でたとであつて、長く其の恩賚を仰ぐべきであるが、此の德川一世の貨幣制度は曾孫であつて五代將軍になつた綱吉の時に、

根本から破壞されて了つた。それ以來江戶の貨幣制度は紛更され、一般生活は屢々脅嚇されもした、無論幕府の財政も紊亂され易いやうに成行かなければならぬ、約三百年の間に金貨は八變、銀貨は七變したと云はれて居るが、金貨即ち小判を見ても德川一世が文祿四年から發行した古金（慶長金ともいふ）の後に、元字小判（元祿八年九月）、乾字小判（寶永七年四月）、正德金又た享保金ともいはれる新金（正德四年五月）、文字小判（元文元年六月）、草文小判（文政二年九月）、保字小判（天保八年十一月）、正字小判（安政六年五月）、萬延新金（萬延元年四月）、銀貨も德川一世の創定した丁銀（慶長六年五月）の後に、元字銀（元祿八年八月）、寶字銀（寶永三年六月）、二ツ寶（寶永七年三月）。三ツ寶（同年七月）、四ツ寶（正德元年二月）、新銀（正德四年五月）、文字銀（元文元年六月）、五匁銀（明和二年九月、是まで銀貨に價格を表記せしものなし、丁銀豆板とも秤量に依つて通用した）、二朱銀（明和九年九月、南鐐と稱するもの）、草文銀（文政三年七月）、文政二朱（同七年三月）、同一朱（同十二年七月）、保字銀（天保八年十二月）、同一分（同時最上銀といふ）、嘉永一朱（同七年正月）、安政新銀（同六年十二月、二朱とも）といつたやうに改鑄されて居る。我等は何の機會で通貨の變動から見た江戶生活の狀態を陳べたい希望を持つて居るが、差當つ

て厳しい天和改革の末に元祿の榮華を唄はれ、寛政の儉約の末に文政の全盛を說かれる、綱吉家齊兩將軍の一代の間に著しい變化を見た、其の因由が貨幣惡化にあつたことを見遁し難い。元祿の貨幣改惡は新井白石が算へ立てた通りの對外貿易に依る正貨流出を控へて、萬延の改鑄と同樣な喫緊な理由、他でもない外國相場との均衡を得なければならないにもせよ、是に由つて幕府が大なる利益を得たのは相違もない、外國關係で均衡を計策しなければならなかつたのは金貨だけであつたらうに、其の惡化した金貨に釣り合せる以上に、銀貨を濫鑄して極端に惡化したのは、幕府の貧乏を救濟するための不法行爲である。改惡程度を簡明に知らせるには、手近い安政七年の各百兩に對する引替歩合を見ても容易に想察されるだらう、

一慶長金百兩に付　金五百四十八兩
一元祿金同　金三百七十八兩
一元文金同　金三百六十五兩
一文政金同　金三百四十二兩
一天保金同　金三百三十七兩二分
一安政金同　金二百六十八兩三分、

此の差額が各貨の成分を表示して居る、それは正確でないかも知れないが、大略改鑄の度毎に幕府が利得した程度を想望するには宜しからう。幕府は貨幣を惡化しては、其の差額を利得し、之を御益金と稱して居た、それを貨幣秘錄の記者は憤慨して、『按に吹替に付ての出目納を、文政以來御益納と唱へ來れり、是小人上下を欺罔する辭なり、其品位を貶し、其輕重を損し、其數を細かにして益といふべけんや、假令ば一石の米を一斗ヅヽ分て、是に粃糠を加へ、各一石の數に充しめ、九分の益ありといふが如し、況屢々改鑄すれば、其度毎に吹欠と稱して、消鑠する物少からず、其實損ありて益ある事なし、故に元文以前益納と唱へし事を聞かず』といつて居る。元文以前には改惡差額を益金と云はなくつても、それを收益とすることは元祿度から始つて居る、一度德川一世の貨幣制を破壞して、改惡に依る利益を覺へてからは、鋭意復舊を企圖する六代家宣があつてもそれを繼承しやうとした八代吉宗が居ても、既に舊貨に依る價値標準を失つた後の物價調節のために、舊貨回復よりも新貨に依賴する方が便利であるから、正直に考へても復舊改善は行はれない。改造の度毎に段々貨幣が惡くなり、御益金が盛に勘定される、綱吉家齊の兩將軍が貨幣改惡に依つて儉約を御免蒙り從つて世間に質素を强要することも罷めて、氣樂に暮すのを喜んだのも、要するに國家の爲め民衆の爲めの儉約でなく、全く自己救濟の儉約であつたから、何にしても自分が苦しくなくな

れば、それで滿足されないことはないからである。此の幕府の貧乏免れにする貨幣改悪は、それだけで價値標準を動搖するのである上に、何時も其の數を激增するから當に通貨の膨脹をも來すのであるから、其の後の物價調節は大困難になり、一般に生活を脅迫されることに著しい。漸く物價が落ち着き、生活が安定する時分になると、又たしても貨幣が改鑄されるのである、改善ならば縮少し改悪ならば膨脹するのだが、改善は一度で他は孰れも改悪であつた、共に物價は變動するのだが、膨脹に依る物價の騰貴は富力を偏頗にする。物價が騰貴しても賃銀を伴ふから差支へはない杯といふが、江戸時代に物價と賃銀とが同時同率に高低したことは曾つてない、若し同時同率に騰貴した處が、當面の賃銀計算と多い所有物のある商賈の資産勘定とは云はずと知れた算盤面ではないか。斯うして元祿以來商賈の勢力が目醒しくなり、享保から中流生活は悉く町人に振替つて了つた、大名は特に制度の庇護が厚い爲めに、借金だらけでも潰れずに居た、幕府の家來(旗本御家人)も大名の家來も、さうした武士等は殆ど中流生活が出來ない有樣になつた。幕府が自分だけの貧乏除けに貨幣を改化すればする程、一時は自分だけ樂になつたやうでも、忽に自分を苦しめる、その爲めに隙なく世間は惱められ、只だ商人だけが都合の好い事になる。

江戸時代に顯著な改革は四度あつた、其の第一は綱吉將軍の初政に當つて、大老堀田備中守正俊が企てた改革で、正直に儉約して歳計の融和を謀らうとした、然るに堀田大老は貞享元年八月、若年寄稻葉石見守正休に營中で刺されて横死した、堀田大老は綱吉將軍が能を催された時に、俄に雨が降つて來たので、油障子を申附けやうとしたのに、能を御延期になれば宜しいと云つて、油障子を拵へさせなかつたといふ。綱吉の生母本庄氏も舘林に居つた時の方が樂しかつたと泣き言を云ふ程であるから、大奥の費用も手痛く縮めた、御臺所を初め女中等も多寡の知れた油障子をさへ拵へさせない程で見れば、隨分儉約を強行されたに違ひない。堀田大老は明白に儉約令は如何にして効果のあるものなのかを十分知つて居た、其處で將軍の身邊を一番手荒く遣つたのである。『國寛かなる時は民奢るものなり、奢るときは己れが事業に怠り易し、諸民衣食住諸事奢なきやうに取扱申さるべき事』と地方官に訓令した文面だけでは、堀田大老の儉約の骨法だに覗へない。彼は『身のために君を思ふぞうらめしき君のためにし身をば思はじ』と詠じて、死して悔ざる覺悟を以て此の儉約を斷行したのである、驕奢罪といふものは前代になかつたが、延寶八年五月廿四日石川六兵衛夫婦が驕奢を尤めて、其財産を沒收し、追放の刑に處し、引續いて四五

の町人をも罰した、町人にして門を建て、庭園を有する者は、悉く廢毀させた。武家も江戸の端々に構へた別墅を廢して地面を百姓に返すやら、庭園を破毀するやら、譴責されない内にと忙しく手廻しをするのが多い。寛文にも武士の分限に依り且つは其の使役する中間小者及び民間の男女の衣服を制限したが、其の時は女院御所姫宮の御服は一おもて銀五百目、御臺所の分は同四百目、御本丸女中の小袖は同三百目といふことであつたが、天和三年正月には一反二百目の品を賣買するのを禁じた。法令も寛文度の上に出たが、それよりも強要する力は一層猛烈であつた、さうして孰れの階級をも用捨なく睨め附けたのである。婦女の世界は奢侈になり易いのでもあるが、武士が家庭の味を嘗むやうになつて急に生活費が増加した、戰國時代に家庭を認めず、何處でも野陣を張つたやうな氣で非常な生活をして居たとは思はず、殿樣奧樣旦那樣御新造樣と對立するやうになつて入費が多くなつた、婦女が出て來て奢侈になつた、何でも異樣は浪費の根本だと、同視しては今昔を比較しながら、婦女に無理な注文をするのを、却つて至當な事だとする風のあつたことは法規の上に露出しても居る。それが爲めに夫婦は同一程度の生活をせずに、常に亭主よりも女房は餘程低い生活を強要されて居た、更に儉約をする事になると、又た男性よりも女性の方を手緊しく壓迫する。それでも女性生活の歴史に鑑み、相應な理解を持つか、何とはなく男性の仕向けに服從するか、さうならば賢女と云はれて時世の賞讃を受けるのであるが、何時だつて御誂向の人間はない。戰國時代と比較して現在の女性生活が多少とも進歩向上したと思ふ者はなく、當面の男性生活に引合せてのみ考へるから、孰れの儉約令でも森閑は大奧から反撥されたのである。

德川一世が貨幣制度を樹立してから、通貨は漸々に增加し、商取引が段々擴く行はれるやうだ、其の通貨は對外貿易の爲めに著しく流出したにも違ひはないが、如何に流出して減少したといつても、秀吉時代とは比較にならぬ。綱吉の貨幣改惡以前元祿六年の金銀流通高は千三百二十三萬八千四百五兩と云はれて居る、德川一世の貨幣制度以前には殆ど通貨がないと云ひたい程であつて、貨幣の効用は知らなかつた。慶長以來本邦の經濟狀態に多大の變化を來したのは、通貨の發行の爲めで、特に貨幣に依る購買力の盛んなことは、稻米其の他の代物換へと比較にならないのは當然だが、時人が吃驚仰天するのも亦た無理ではない。慶長から天和まで八十餘年を經て、商業は目醒しく發達し、民間の財力は意外に集積された、其の時に堀田大老が幕政整理を企たので、前に云つたやうな譯で民間の奢侈をも禁

過しなければならなかつたが、民間の財力は裕に奢侈品を受け入れ得た、西鶴が京の名人本國寺のおつやが六年掛つて二つ結ひ上げだ洗鹿の子の蟲蠱しを、一つは去る御所方へ納め、一つは江戸新吉原の太夫花月の着物になつた、其の代金五十兩、銀にすれば三貫目、衣裳法度で限定した二百匁(金一兩を銀六十匁に換算するのを通例とした)は金に換算して三兩一歩餘にしかならぬ。それは寛文の儉約令より前の話かも知れないが、新井白石が紳書に越後屋の呉服太物の賣れ高は一日千兩づゝある、それだけ本町筋の呉服屋が寂れる譯であるけれども、本町の呉服屋の賣れ高も萬治寛文度に一倍して居ると書いた。越後屋が絹物を賣り初めたのは貞享四年からである、越後屋の現金賣りに集まるのは民衆が多く、本町筋のも武士ばかりとは云へぬ、旁々以て民間の需要も考へられる。江戸の住居は六分が武家で、四分が町家だと云はれても居る、人數ばかりでなく商業も勞働も皆な武家へ仕向けた土地柄でさへ、町人の中から驕奢罪の優先者を出した。民間の奢侈品需給、それは財力の致す所であつて、所詮は通貨が儉約令を妨碍するのだ、未だ通貨額の尠なかつた元祿以前でさへ、相應に所謂奢侈を幇助したのに改鑄に依つて通貨を膨脹させるのだから、其の後の改革は愈々財力が加はるだけに、民間に儉約を强要する度合も激しくならなければならぬ、

何時の儉約令にしても幕府の財政の苦しい爲めにする改革であつて、一般の經濟狀態には關らない、何時だつて政府ほど大きな資金を動かすものはないのだから、儉約令の影響は著しい、特に江戸では甚しく不景氣になる。其の上に金銀貸借に關する訴訟は一切受理しないといふ法令を出した、是では德政のやうである、幕府は勿論、旗本御家人は踏倒しを許可されたのと同樣だ、引いて民間の不融通になるのは當然で、斯うでは一國の經濟を公然と攪亂して憚らないのだ。綱吉將軍は堀田大老の横死の後も、儉約令を持續して居たが、元祿八年貨幣改惡に至つて財源を發見して自己救濟の方途を得たから、以前の政策を拋棄して了つた。犬騷ぎや生類憐愍の話のみが綱吉將軍の横暴ではない、儉約令でも極端な無理を强要し、貸借訴訟不受理などといふ滅法界な事を遣つて、揚げ句が貨幣の惡化であるから、何程世間を苦しめた人であらうか。天和の改革は元祿の貨幣惡化で、メチヤ／＼になつたから、成績どころでなく只だ苛政を記念させるだけに終つた、しかし此の改革が其の後の儉約政治の模型にもなつたのであるが、それは法令に現はれた外、警察力を使用したから、虎よりも猛き暴政になつた。

例して云へば御目付が市中を巡回して武家屋敷で三味線の音

でもすると、御慰みであるか、誰ぞ御稽古であるかと問き質す、やがて三味線は公方様がお嫌ひだといふので、大名旗本の屋敷さへ如何なる所罰があるか知れないと氣間に思つて撥音がしないやうになり、民間でも遠慮して絃歌の聲を絶つた。民間の男女の衣服調度でも、巡回の警吏が睨め附け、一々本人を訊問して些少の猶豫もなく検擧する有様で、專ら倹約令を勵行し、苟くも強要を怠らぬのみならず、江戸中の大小の茶屋の間口は廣くとも、裏座敷奥座敷等を厳禁し、給仕女茶酌女を制限した上に、御徒目付御小人目付が巡視して間斷なく干渉するので淺草深川湯島黒門目黒芝高縄清水谷の茶屋は失業し、駒形本庄松本町高縄白山深川の看棚は閉店するに至つた。寛文に制限した屋形船を、長さ四間半幅七尺、船の内は二間に限ることにした、從來は八間九間の船があり、五間六間の多かつたのに、新しい制限は隻數から云へば同一であつても、大さから云へば半分もないのである。汁駕籠の法度も寛文に出て居る、五十歳以下の町人職人は辻駕籠に乘るのを禁じたが、今度は辻駕籠の體制を改めさせて、乘物と混同しないやうにし、其の上に前令を強行して町人職人の乘用を監視したから、舁夫や船頭は餓死した者があつたといふ。又た衣服の錦繡が禁ぜられると共に、金銀箔を使用した物什も法度になり、看板でも金看板は罷りならぬのである。一體倹約といひ奢侈といつても詳細な條目を掲げるよりも、意義を迫つて不測の刑罰を加へるのであつたから、民心は頗る不安の状況を呈し、只だ戰々恟々たるばかりであつた、今日も天保改革に水野越前守の峻酷であつたことをいふが、天和改革は天保以上の恐慌を示したのである、綱吉將軍は種々な弊政を殘したが、其の中に倹約も亦た苛政であつたことを忘れてはならぬ。

第二は吉宗將軍の享保改革で、後世からも明君と云はれ、賢將軍と云はれて居るが、江戸の約三百年間に、前後四度あつた倹約政治に成功したのは、只だ此の八代將軍一人だけである。享保元年五月に三十三歳で襲職し、延享二年九月に六十二歳で退隱するまで無慮二十九年、能く倹約に終始したのは凄しい。恰も能吏が多かつた中に享保八年四月に老中となつて、此の將軍の股肱となつた松平左近將監乘邑が、二十年餘の恪勤に堅忍敢當な精神を持續したことも驚くべきものである。享保の改革は實に領要を得たもので、主として幕府の自己救濟及び旗本御家人の賑恤を兼ねて居るのは勿論だが、民間に對して無理な強要をせずに濟ませた、畢竟十分に倹約の何の爲めであるかを知つて居たからであらう。吉宗將軍は襲職に際して幕府の財政狀態を知つて居られ、初めから改革の腹按があつたと見える、享保四年十一月貸金訴訟を受理しないことゝした、是は痛切に民

間に打撃を加へる横暴な法令だが、資金なしに旗本御家人を救濟するには、他に方法がないからである。先づ恩貸若しくは賑恤などの支出のないやうにして、五年五月には生産制限を命令した、元祿以來膨脹した通貨を收縮しやうとする六世家宣の遺業は、此の頃新金と稱する通貨の出廻りに依つて成立することになつた、新金は比較的良貨であり、特に著しく通貨を收縮するのであるから、物價に急激な變動を心配されたのと、多い需要は濫費を誘ふと考へられてのことらしい。享保七年五月に頻年の風水害の爲め、田租が滯納されるので歳計が支へられなくなつたといひ、別けて前年は收獲が不良である上に、國費も多かつたので官庫空乏し、御藏米を支給する吏僚の俸給が渡し切れなかつた、故に將軍は他に强要することなく、全く自己の倹約だけで、今春其の殘額を完給したと告げて、始めて倹約令を發した。將軍は先づ倹約令の前に一己省略を行ひ、それから前年全國の田圃の面積を申告させて置いたのを衡按して、諸大名に持高百分の一の上納を命じた、是は大名の所得税である。當時の大名は二百六十一人で、其の持高は千八百三十七萬石餘と思はれる、此の百分の一は十八萬三千七百石になる、さうして大名の所得税は八年間繼續した、其の第一年には三都平均米價にして二十九萬三千九百二十兩を收得した勘定である、次年からは頻に米價が動搖し、概して下落の傾向であつた、從つて此の年ほどの高直はなく、幕府の臨時收入も此の年に比較して四割前後の減退を免かれぬ。吉宗は享保六年の內歎に幕府の金庫を點検したのに、二代秀忠の時に在つた金銀の法馬（金四十四萬七百匁、銀四十六貫目）を初め二條大阪兩城の特別備金も皆無であつたといふ。三代家光の消費したのは此の法馬や備金の外の祖父家康の遺金であつたと傳へられて居るが、其の時既に此の備金にも手が附いて居たらしく、五代綱吉以前に既に耗盡したものと思はれると共に、元祿の榮華を唄はれる其の資金が何處から出たらう。正貨の海外へ流出するのを防止しなければならぬといふ理由はあつても、國內の經濟狀態を擾亂し、國民の生活を危殆にした元祿の貨幣惡化は、其の贏餘を利得して、倹約を抛棄する資本にした罪科は、史上に特筆大書せらるべきものである。吉宗將軍の文字金銀も貨幣改惡に相違ない、けれども物價調節に餘儀なくされたことゝ、其の利得を貪らうとせずに、終始倹約を一途に固持したことは、誰も元祿元文を同一に視ない譯である。文字金銀は元祿改惡の如く格段な惡作用がなかつたとは云へ、家宣の遺誤に依る新金と短い年限の間に代謝したのであるから、國民生活を動搖させない筈はない、しかし後世にも一人の問責者がない。勿論文字金は僅に四百萬兩（文政の

改悪までには金千九百三十九萬七千六十五兩、銀五十二萬五千四百六十五貫九百目に遞次增加した、此の增加は九代家重以後に著しい）を新鑄し、舊貨と混交して步合通用にさせるだけの用意はあつた。當時吉宗乘邑は吝嗇だとさへ云はれ、『公方（吉宗）は乞食に似たり、尾張（宗春卿）は天下（將軍のこと）に似たり』といふ落首がある、吉宗が出獵先での買物、淺草で御用になつた一疋の狆は金五兩の時價なのに金三分を支拂ひ、駒込で御用になつた十鉢の櫻草は、時價に從つて鉢八文づゝを下附した。從來將軍の御用といへば、金一枚とか銀一枚とかの支拂であつたのに、三分の支拂を受取るのに、家主五人組附添ひで町奉行所へ出頭し、二三日の隙を潰しては狆を無料で上納したと見ても、下げ金請取の費用だけをも償はない、まして櫻草十鉢八十文の支拂の如き、商人の迷惑は察するに餘りある。だが儉して用意周密な吉宗將軍が、如何に旗本御家人を救濟する資金がないからとても、何故前代の惡令である貸金訴訟不受理を蹈襲したらう。金銀貸借は武士と町人との間のみではない、農工商交互錯綜した關係が却つて大部分なのに、未だ儉約令さへ出さぬ、間に一番がけに貸金訴訟の不受理を何故持出したらう。是は吉宗將軍には似合はない往き方であるが、實に背に腹は換へられなかつたらしい、それは大名に所得税を課した享保七年の冬になつて、先代から滯つて居た商人職人への支拂金十六萬兩を交附した、それも金額の三分の二であつて、其の三分の一は打切つたのだといふ。自分の借金取りを防ぐためには、貨幣惡化の利得を貪らない程に、一己の苦痛を忍んでも、世間の安穩を心掛ける吉宗其の人が、貸金訴訟不受理を忙いで發令したのは、如何に其の時幕府が窮迫して居たかを思はせる。儉素といふことは誰にも惡い筈はないが、儉約令の性質から見て、民衆に强要すべき譯はあるまい、稍々もすれば通貨改惡といふ横暴に變化する幕府の仕癖から比較して、改惡した通貨の急激な膨脹よりも、無理な强要であつたにせよ、未だ儉約の方が宜しいに違ひない、それにしても儉約强要の爲めに人心を不安に陷れるのは政治でなからう。吉宗將軍は儉約强要のために、世間をビクシヤクさせなかつたのは體を得て居る、しかし差當つて幕府の窮迫をばお察し申さぬではないが、明君と云はれる人が貸金訴訟不受理令を襲用したのは遺憾千萬である。武士は貸金の元利に就いて差別なく、利子を一概に不當なやうに思ふ習癖がある、利拂ひといふことを借金踏み倒しの根據にする、更に若干の賣込では幾割の利益があるから、何程の賣掛金は拂はずとも宜しいだらうといふ推論をさへ憚らぬ。江戸時代の金公事（貸借訴訟）は債權者を損害するやうに計劃されて居た、云ふま

でもなく前記の思想が漲つて居るからである、其の思想を極端に暴露したものが金公事停止なのだ。賢將軍吉宗さへ過度に商人を虐げることが、却つて彼等を奸悪にすることを刻意されなかつた、町人と奸風とは眞直ぐには立たぬといふ諺もある、只ださへ正しくは為り難い商人、利益に味み勝ちな彼等に、其の利益を不法に侵害する、彼等が防禦しやうとして手段方法を擇ばず、進んで法度を凌駕した自衛策を採ることに導く。金公事停止は民財掠奪なのだ、さうして儉約と掠奪とは意義の違つたものであるのに、敢て同行併用するのは怪しからぬ、御用金徴發の方が時機と對手さへ詮衡すれば、餘程政治らしい。

だが吉宗將軍は民衆に強要することが尠く、武士階級特に大名を責め立てた、幕府の外聞を棄てゝ持高百分の一の上納米をさせ、將軍の威福を飾らずに、一切の寺社の建築修繕を禁めた、上野寛永寺の公遵法親王は同寺の建築を峻拒されたを憤つて退隱されたるやうな騒ぎも起り、又た南都興福寺の工費を幕府で負擔が出來ない爲めに、三笠付や取退無盡までも禁じたのに拘らず、據なく享保十七年七月から淺草寺で富突きを許し、それが繼延擴大して化政度までも、富突きが繁昌するやうなこともあり、開墾に依つて增收を計らうとして、新田見立役人が任命され、開墾計畫や開墾請負人が現はれて、後に山師と渾呼される虚業家の發生したのも此の時代である。さうして將軍自己としては種々な省略停廢もしたが、他に對しては、享保九年六月大名及び萬石以下の衣服調度饗膳禮物贈答等を制限し、小袖一着の法度として、縫物は三百匁染物百五十目（金五兩乃至二兩二分）を極とし、十四年十一月別に御家人に儉約を令し、十五年十二月に五百石以下の幕臣に恩貸を許し、更に前年の令を嚴重に再達し、二十年五月には大名旗本の婚家劇場に赴くを禁じ、寛保三年閏四月に銀の櫛笄を禁じ（是は享保三年九月の令を反覆したもの）及び調度其の他に金銀又は描金を止め、延享元年十月に至つて民間の男女は絹紬木綿麻布の外を差止めた。

民間では天和の儉約令に依つて、將た武士等の狀況に准じて、果して相當に注意して居たらうか　必ず左樣とも思はれぬ、けれども民間に強要する所の尠い享保改革は、是に至つて漸く幾令し、翌年二月又た反覆再命したのは、少數者の拔群な奢侈は無論天和元祿に比較すべきでないが、一般生活は遙に享保元文の方が立ち越へて居た。それを眺めながら悠々と、民間の狀況を餘所にして居たのでも、其の後に於ける強要なるもの丶程度が察せられやう、しかし手加減はあつても法律であるから、強要でないとは云はれまい。

元祿六年貨幣改惡の二年前には、江戸の住民は三十五萬三千

五百八十八人であつたが、享保六年、儉約令の出た前年には五十萬千三百九十四人になつて居る。此の住民の職業別は知れないが、幕府を初め諸大名が儉約令に依つて、新しく土木工事を起さないのみならず、不景氣になつて民間でも勞力の需要が減じた爲めに、非常に多數な失業者を生じ、お菰と稱する物貰ひが急に增加した。享保九年には辻非人（物貰ひ、所謂乞食）を含んだ非人の數は三萬餘と算へられ、前年の放火犯百餘件の內、九十餘件は非人が犯人であつた。非人の支配者は淺草の善七と品川の松右衛門とであつたが、松右衛門の配下だけに放火犯及び火災に乘じて泥坊をした非人が二百二十六人あつたといふことは何を語るものであらう。失業者は乞食になり、それから泥坊するために放火犯人になつたのであるが、實に痛ましい話ではないか、幕府は驚いて非人の取締を嚴にし、又た人返しといつて、浮浪を其の鄕里へ送還する法規を定めた、此の人返しは寛政天保の二改革にも幾分か條件を變更したが採用して居る。我等は天和に緡箱舁きが餓死し、享保に非人が激增し、江戸に火災を頻發させたのに對して、寛政天保の改革に天和享保ほどの慘話が傳らないのは、決して一二の理由ではあるまいが、職として民間の財力の關係から來て居ると信じる。

第三は松平越中守定信の寛政の改革である、一橋家から出た當將軍家齊は吉宗の曾孫、定信は田安家に生れて吉宗には孫なのだから、近親の間柄であつて其の定信が幕閣の首班となり、將軍の補佐となつてする改革なのだから、堅牢の地盤の上に立つて居たらしく見へる。しかし定信は天明七年六月に就任して寛政五年七月には引退しなければならなかつた、此の間は僅に六年有餘に過ぎぬ、それも大奥女中の反感が主要な原因なのである。爰で吉宗將軍は勉めて大奥女中を儉約圈外に置かうとされ、柳澤美濃守保明、田沼主殿頭意次が專ら大奥と提携したのが思ひ遣られる、江戸時代の幕閣は大奥女中に顚覆させられることが多い、殊に儉約政治は大奥女中から破壞されるのが恒例のやうでもあつた。定信去後の幕閣は本多彈正大弼忠籌、松平伊豆守信明等に依つて、儉約政治が維持されたけれども、文政元年八月水野出羽守忠成が幕閣に列するや否や、例の貨幣惡化を實行して、折角の儉約成績をメチヤ／＼にして了つた。定信は大規模の人物ではない、政治家の風釆は見へないが、正直律儀な處は儒者氣質であつたから、將軍の身邊を中心として、幕府の吏僚を範圍とする儉約には、誠に適當な人であつた。享保改革の遺意を得たとしての賞贊も、祖父吉宗の施設を自分の實踐躬行し得る輪廓だけに解し、小規模に取扱つたからであるが、それは幕府の儉約としては至當だからと見切つてゞはなく、定信

の人柄から自然の成行なのだ。渠の文武奬勵の如きものも、太田南畝の狂詠だといふ『世の中にかほどうるさきものはなし文武といつて夜もねられず』、寢られない程に强要されるのは武士だけで、民間の苦痛ではない。天明七年八月旗本等の服制を簡易にして縞物を着用させた、それを山東京傳が黄表紙の標題に採つて孔子縞于時藍染と遣つたのである、戀川春町の鸚鵡返文武二道は、南畝の狂詠と參照すべきもので、孰れも定信の儒者臭から案出したもの丶やうに覺へて居る。

定信の儉約令は享保のに見習つたものだのに、渠の貸金訴訟不受理も絶對でなく寛政九年以來の分は受理することにした又た民間に儉約を命じるのにも、質素奬勵といふ心持ちで、勉めて訓誡説諭の氣分を示し、法令の威力以外に効果を求めやうとした、斯うした模樣は享保よりも遙に多く眺められる。其の極めて溫和らしい行き方の中に、寛政元年九月の藏宿棄捐令は猛烈至極なものである、藏宿といふのは淺草米藏から俵で俸給を請取る旗本（領地のない者）御家人等の爲めに、其の請取る手續を代理する幕府指定の町人のことで、札差と呼ばれた。此の札差は彼等の俸給請取の手續のみならず、自家用以外の米を賣拂ふことも委托されて居た、さうした關係から金融を賴まれもしたが、此の程では旗本御家人が貧乏である爲めに、札差は今日の恩給年金立替所のやうなものになつて了つた。持高一俵に一兩の借り、即ち百俵取りに百兩の借りがあれば大借と云つたが、寛政元年の米價は大略一兩に三俵見當なのだから、三年の俸給を借り越して居る勘定になる、しかし當時は旗本に大借の者なく、百俵取以下でも借りのない者もあつて、大體半年分ほどの借り越しが多數であつたといふ。札差等の記錄にも寛政の棄捐利下げは、武家の御救ひ、札差共の御咎めだと書いて居る、其の棄捐といふのは六年以前までの貸出しを帳消しにさせるのであつて、此の時札差九十六人が拋棄せられた債權額は金百十八萬七千八百八兩三分銀四匁六分五厘四毛であつた、其の後の貸金は利子を一割に減ぜられた、享保九年七月札差公許の際には貸附利子一割六分七厘と極め、寛延二年に一割四分になつたのを更に制限されたのである。借用する旗本御家人も種々な手段で踏み倒しもしたが、札差も金融の謝禮を取つたり、三月縛りで利息の蹴りを取つたりして、隨分惡辣な暴利を絞つたから、遂に巨額な債權を拋棄させられたのだ、此の棄捐は旗本御家人の救濟としては適當なもので、被害者が札差だけで一般を損傷しない。棄捐は貸金訴訟不受理の變形であつて、却つて目的に相應するのみならず、一般を損傷しない處が頗る宜しい、此の際六年以前に札差の借入金に對しても訴訟不受理を令した、

部分的の貸金訴訟不受理令もあつたが、一般商工界から札差の融通資金を供給することはなく、此處への投資者は悪辣手段に依つて札差が法定利率を超過した暴利を目掛ける或る資本家のみなので見れば、札差の運命に殉じても據ない因縁があらう。

江戸の町々の町費は享保度にいろは組の消防夫を定め、各町の負擔とした時に膨脹したのであるが、其の前の大名火消十人火消は專ら民間の消防に當るものでないから、町火消の創設は民間の歡迎する所で、江戸を終るまで町入用の過半を費して惜しまなかつた。寛政の七分金も良制として、東京になつても嘖稱されて居る。定信は當時町々の經費を査定し、其の金額の七歩を出させ、年額金二万二千二百六十四兩銀三匁一分六厘四毛宛を積み立て、市民の災害救恤資とした、此の資金を以て柳原土手、深川大橋向、本所へ籾藏を建て、圍米をしたのである。大火流行病若しくは米價暴騰の際の救恤は、此の資金に依つて行はれた、是は幕府が臨時に支出しなければならなかつた救恤費の負擔を減ずる譯である、文化文政度に七歩金の制が廢たれたのを、水野越前守が復興し、明治の新政府が其の資金を東京府共有金として取續ぎ、養育院を拵める資金にしたと聞く。

第四は十二代將軍家慶の下に水野越前守忠邦が行つた改革である、忠邦は幕閣に立たんが爲めに、肥前唐津から遠江濱松へ領地を轉じた、唐津も濱松も六萬石と公稱されて居たが、唐津は二十五萬石に相當する實收があり、濱松は十五萬石相當の收納しか無かつたといふ。孰れの大名にも表高(公稱)と内高(實收)とあつて、誰も内高を目掛ける、表面祿高の增減を云はずに同じ表高の處へ轉封させても、内高に依つて痛切な褒貶があつたのである、唐津濱松は共に六萬石で公稱は同じでも、内高は十萬石違ふ。忠邦は十萬石の損を承知で濱松へ轉じた、唐津は西陲の要地で濱海防備の任務があるから、恒例として幕閣に立させない、老中(幕閣員)になるのには、是非共濱海防備の任務のない領地の大名でなければならぬ、それで忠邦は十萬石の損失を承知で濱松侯になつたのである。忠邦は最初から抱負があつて、大に經綸を行はうとしたので、只だ當面の儉約だけで滿足する者でない、當面の儉約の如きは寧ろ必然の附帶事業であつたらう。江戸大坂附近十里の地を收める爲めに、松平大和守酒井左衛門尉牧野備前守等十三諸侯及び旗本等の轉封を企てゝ自己の失脚を急にしたが、忠邦の意中では海防の事もあつたらうけれども、それより幕府の歳入を增加する方が力强かつたらう、印旛沼開墾も新しい財源を得やうとした計劃なのである。忠邦は初めに家齊將軍の寵姫おみよの方に縋つて擡頭し、家齊が西丸へ隱居して大御所樣になつても、西丸の奥女中等の

歡心を買つて進路の便宜を得て居た、それが大御所の薨去の後は、家慶將軍の信任を獲やうために、自分の養女をお妾に差上げたり、本丸女中の御機嫌取りに勉强した。忠邦は大奧に攀援するだけでなく、幕府の親戚たる三家の威光を借りる爲めに、水戸侯齊昭と結托して、內外表裏から自己の位置を支持することにした、後來水戸の烈公が大立物になつたのは、最初に忠邦が利用する爲めに持ち出したのを端緒とする。奧女中の御機嫌取り抔は全く一時の手段に過ぎぬ、雄心勃々たる忠邦は忍んで目的の爲めに敢てしたのであるから、愈々樞機を握つて權威を揮ふことになれば、是非共將軍の身邊に儉約を行はなければならない、早速ながら大奧の經費を制限しやうとする。本丸の奧で誰の庇護で今日の顯要な位置を得たのだ、恩顧を知らぬ水野めと憤り、西丸では大御所御在世の前後で態度を違へた、輕薄者の忠邦と憎み、家慶將軍の御膳部にもやし生姜がないのを尋ねられた機會に、儉約令に依つて靑物の早作りを禁じたことを言上し、彼が苛察な政治を行ふと讒して、將軍を驚し、轉封大名の中の川越侯松平大和守矩典は當將軍の弟大藏少輔齊省を養子とした因緣から、庄內侯酒井左衛門尉忠發は當將軍の叔父田安右衛門督齊匡の女を妻とした關係から、盛な側面運動が行はれるのに、大奧女中等は兼ねて水野を憎んで居るから大に馬力を加へ、忠邦を行詰らせるのを急いだ。彼は天保五年三月老中となつたが、抱負を現實しやうとする改革は天保十二年五月からである、さうして翌々年閏九月には免官になつた、其の間は僅に三十個月である。前後四度の改革の內で最短命な改革者は水野忠邦であつた、此の失敗を見て江戸時代の婦女に勢力がなかつたといふのを疑ふ、忠邦のみならず、大奧女中の爲めに政治的生命を縮めたことを思へば、文獻の上に女子供とあるのを眺めて想察するのは危險であらう。勿論水野は大奧女中のみが蹉躓させたといふでない、元來彼は頗る不利な時期に蹶起したのでもある。

　水野の去つた幕閣は土井大炊頭利位を首班とした、其の天保十四年十二月に幕府未曾有の令達があつた、『御勝手向之儀、今般御直に仰出され候趣も有之、去々丑天保十二年以來御入用格別相減候向も候得共、未だ御入用高御收納の凡一倍に相當り、所詮此儘にては御暮し方立ち難く候間、此後御自身の上は御不自由を厭はさせられず、永世の御主法立て置かれ度候』といふのだ、迚も暮して往かれないと、公方樣が生活難を叫んだことは、約三百年間に只だ是だけであらう。草文金銀に引續いて保字金銀と惡化して往つた文政天保の際は、歲計の不足は此の出目で補はれるから、將軍が暮して往かれないと泣き言をい

ふ筈はなからうと思ふ。伴帑總錄には天保十三年の歳入を金百七十六萬千百四十七兩餘とし、歳出を金百九十六萬三千九百十一兩餘とし、通貨惡貨の利得を金五十萬千四百四十五兩餘としてある、歳出入では金二十萬二千七百六十四兩餘の不足になるが、惡化利得があるから二十九萬八千六百五十一兩の剩餘勘定になる。それを内藤恥叟は入金百十萬千四十五兩、出金百六十三萬五千二百八十八兩とし、惡化利得を五十五萬七千三百二十三兩としてあるが、此の勘定でも三萬三千四百八十兩殘る。幅は無いにしても忍耐して現狀維持の出來ないこともなからうに、他に云ひ方もあらうに窮して往かれない抔と細民の擧げる悲鳴のやうな發表をするとは何事だ。しかし江戸の全盛期と思はれ、大御所樣は幕府の榮華を獨占したやうに考へられる時に、貨幣惡化に依つて歳計が支へられて居たのは、實に寒心すべきである、故に德川氏の家來が身を抽でゝ幕府の前途の爲めに改革を企てるのは、如何にも當然な事だ。

幕府は窮迫の餘り、幾度も通貨の惡化を繰り返す悲境にあつたが、民間は繰り返す惡化に依つて膨脹する通貨を抱擁して、町人共の資力は增長して居る。天保元年の貨幣流通額は四千六百五十七萬四千六百五十兩で、享保度よりは大凡三倍に殖へて居る、武士と町人とは米穀と貨幣との對抗とも見へ、政權と財力との威勢爭ひとも見られやう。我等は此の記述を簡明にしたいので、儉約令及び貨幣惡化に伴ふ物價政策の一切を省略したが、占賣に依つて市利を壟斷するものとして、天保十二年十二月菱垣樽兩廻船問屋及び十組問屋の仲間株札を廢し、併せて商工諸種の問屋仲間組合の制規を禁じたことは、物價問題の外に入用であるから云つて見やう。元來商工業の仲間組合は共吟味に依つて法令の遵守を嚴にするために起させたものであるのに團結して占買專賣の機關に變質し、營業者の申合せを以て市價を決定するやうになり、團結した人員以外の營業を阻止して、自由競爭を杜絕した。文化文政以來の町人の橫暴は實に甚しいもので、强固に團結して勝手に物價を支配した、それには新しい開業者は、既設の株式を收得しなければ、商工共に營業が出來ないのであつたのが頗る好都合であつた。此の株式は營業極目に依つて、一個四千兩から二三十兩迄の價格を持つて居た、然るに端的に破壞されて了つたので、町人共の狼狽困惑は其の極に達し、方途に迷ふ有樣だつたが、畢竟は町人の或る階級が仲間組合を變質させ、占買專賣して市利を壟斷して居たことは今日でも大に考へなければなるまい。嘉永四年二月に仲間組合は再興されたが、文化以前の性質に復舊したから、市利壟斷の機關になることはなかつた、是は忠邦の英斷の恩賚であつて、

長く武士も町人も感謝すべき譯である。一般は景氣の好いのに紛らされて、或る町人が市利壟斷階級を作つて居たのさへ憤激しなかつた、概して民間の資力が増長して來ても居るから、町人共が富に驕り財に誇る風があつて、盛に高價な骨董品を買ひ耽り、日常の生活にも華美を競ふ、衣食の費用も大名より多い者があつた。幾度かの通貨膨脹に依つて、流通額が其の度毎に殖へる、それについて考慮する者は尠く、一時金廻りが好くなつたのを喜ぶ者が多い。慶長には一分（一兩の四分の一）の金貨しか無かつたのが、元祿には二朱（一兩の八分の一）の金貨が出た、文政になると一朱（一兩の十六分の一）金貨がある、緡に穿した錢しか握らなかつた人も、金貨を使用するやうになる、斯うしたことも民心に影響することは著しい。交換價値は同じでも金銀銅の三貨が與へる微妙な心理作用は格別である。金貨の使用範圍が擴大するほど、一般の生活狀態は昂進する、それが民衆の幸福ではあるもの丶、金廻りが好い景氣が好いと云つて居る處へ、忠邦が俄に儉約を强要した。儉約令の必要は幕府自身にあるので、緊切な自家防衞なのだから、自體民間とは懸け離れて居る、矛盾衝突は有り勝ちなことだ、性質から云へば寧ろ儉約令は民間に强要すべきものでない。幕府の政治は武斷であつて、國民は壓服に慣らされて居ると云つても、政治は政治である、民意を得なければ決して行はれない、民間から妨碍されるやうでは到底物にならない。此處から云へば民間の奢侈が大奥女中を刺戟して儉約令の破綻を來す外に、民間の諒解を得て其の助成を求めることが大切である、故に民間に儉約を强要するのは、飽迄同意を求めるのであつて、民間が遵守して質素になる程度は、諒解の程度を示すものである。

天和享保寛政の儉約令は、饑饉凶歉若しくは天災の年柄に當つて出して居る、民衆の生計が困難になつて、各個も現狀に幾分の自覺ある機會を捉へる、是は一般の諒解を得るに最も便宜な時である。既往の改革家は儉約令が自家の爲めにするものなるのを知つて居るだけ、却つて此の邊の用意は周到なのに、水野忠邦は刻下の民意市況に頓着もなく、其の手腕を揮はうとした。彼は享保寛政の御趣意に依つて改革を行ふと云つた、それ故に此の改革を民間では御趣意と稱した程であるが、幕末は別として綱吉吉宗兩將軍ほど法令を多く出した者はなかつたのに忠邦は天保十二、十三の二年に、町々へ觸れ渡しただけで百六十餘度である。さうして警察力を使用したことも綱吉吉宗の兩將軍は歷代の中でも特に目立つたが、忠邦は總べて探偵（隱秘）を使用し、特に民間に强要する爲めに警察力を借りたことは、綱吉將軍の時代を髣髴させた、人心をして薄氷を履むが如き感

じをさせたことも同様である。世間を不安にしたことは、忠邦に反情した大奥女中の讒言する喙を長ぜしめ、家慶將軍を動かすのに便利でもあつた、又た誰にも苛政だと思はせた。忠邦の考按は幕府に利益でもあり、世間に有効な事もあつたのに、無雑作に挫折したのは、全く儉約に就いて自覺のない民衆に嚴しく強要したからである。町奉行鳥居甲斐守榊原主計頭が法令を徹底させやうとして、苛酷な手段を憚らなかつたとか、幕僚に人を獲なかつたからだとかいふが、幕府が苦しいからといつて民間には痛痒を感じない。澤山な階級で將軍様と民衆とを天地懸隔とでも云ひたい程に引き離して置いて、民衆に將軍様の貧乏についての諒解を強いる、夢にも見ない千代田城の奥向の様子に同情を惹かうとする。民意は儉約令に疎い、吏僚は其の疎い理由を考へずに、無闇に役人根性から強制する、追ひ目になつて押へ附ければ、愈々離隔するので、遂に感情も加つて苛酷な處置もするやうになる、民情民意の乖離する根本を忘れてはお話にならぬ。

民間の男に絹紬を限り、女の小袖も銀三百匁限り、染模様は銀百五十匁限りといふのは、前々からの例とも見へるが、櫛の代は百匁を限るのも未だ宜しいが、髷掛けの縮緬切れ、草履の天鵞絨鼻緒を禁じたのは細い。鼻紙入れは銀二十匁、烟管は五百文、子供の玩具は銀一匁乃至錢百文以上の物を許さず、飴一つ八文より高値なるを得ずなどは、隨分詳密なのが知れる。それよりも尚ほ驚かれるのは、天保十三年二月豆腐の安賣に關する指令である、豆腐は竪一尺八寸横六尺の箱に入れて拵へ、それを九丁に切り、各一丁を五十六文、燒豆腐は九丁豆腐を百二十六に切り、其の一つを四文、油揚げは豆腐一丁を二十二に切り五文宛に賣り來つたのであるから、昨今は九丁豆腐を十丁十一丁に切つて、豆腐は六十文、燒豆腐油揚げは五文に賣る、それ故九丁豆腐の割合よりも安く賣れと達した。

此の頃では一般生活が發達し、民衆の衣食も相應に甘美になつて居た、江戸趣味とか云つて今日も喜ばれる、渠の澁いといふ好みは目立たない地味な處を趣向とする、それは天保の儉約強要に負ふ處が多いので、絹布に十幾倍もする唐棧や更紗を流行させ、木棉へ凝つた染め方をして一反一兩以上に費用しもした結城紬が乙なものになつたのも此の時からで、額裏などゝいふことも其の頃から擴がつたのである。儉約を強要すれば横に離れて、斯うした狀況になつて來るのをも心附かずに、法令の行はれないのは幕府の威光に關はるとばかり考へて、役人根性のまゝに豆腐屋や餅屋を目の仇にした。警察力は猛烈に發揮されて、往來する婦女や子供の身邊から、奢侈品と認める限り取

上げる、何處の店頭からでも高價と見做される物は押收した、幕吏に儉約令の性質を知つた者がない、民衆の諒解を待つて行はれるべきものだといふこと抔は尙ほ知つた者がなかつた。

我等は卒然江戸時代に於ける儉約強要に就いて、平素思つて居たゞけを記述した、それの間違は謹んで大方の指教を待つと共に、幕府の儉約令の由來因緣及び主要なる前後四度の改革の成績に關して、讀者の御考慮を求めたい。附け加へて改革者として立つた各個の覺悟と態度とについては、別々に御觀察が願ひたい、事の成敗の外に玩味すべき處があるやうに思はれる。

ドンケル・クルチウス日本文典を主題として

法學博士　吉野作造

ドンケル・クルチウス日本文典

僕は一寸した興味にひかれて專門外の古本を購て讀み、讀んで其の時々興味を覺へた事どもを書きとめたり、又は多少進んだ調査を試みて其の結果を附け加へたりすることがある。玆に寄する一篇も斯種の書き留の最近のもの〻一つに外ならぬ。もとより自分丈の爲の一備忘錄に過ぎぬから、專門家の間に疾うの昔に知れ渡つて居る事などに無駄骨を折つた點が尠らずあるに相違ない。

今こゝで問題にしやうと云ふ本はドンケル・クルチウス(Donker Curtius)の日本文典の佛語譯だ。詳しく云へばドンケル。クルチウスが編纂し、ホフマン博士(Dr. Hoffmann)の校訂增補して出版せる日本文典を、其の蘭文の原書からレオン・パーゼ(Léon Pagès)が佛譯したものである。題して Essai de Grammaire japonaise といふ。而してこの譯本にはまたロドリゲース(Rodriguez)やコリヤードー(Collado)の文典からの拔き書に依て幾多の新しい注釋を加へたと書き添へてある。西洋に於ける日本文典の研究の模樣と之に關係した以上の人達

のことを一ト通り知つて置かうと云ふのが、此の古本を手にするに依てそゝられた僕の調査事項の主點である。以上に書き並べた人々は、我々日本人に從來全然親しみのない名前でもない。

ホフマン博士校訂の蘭文原書の方は東京帝國大學附屬圖書館に所藏されてある。この方の表題は Proeve eener japansche Spraakkunst となつて居る。杉田玄端先生遺愛の書で杉田家から寄附されたものだ。之と佛譯本とを對照して觀ると、順序や章別に著しい相違はあるが、內容の大體は大同小異と云つていゝ樣に思はれる。原書は一八五七年（安政四年）和蘭ライデン府の出版であるが、佛譯の方は一八六一年（文久元年）巴里の出版になつて居る。譯書の方には開卷第一にパーゼの序文があり、續いてホフマンの序文が載つて居る。後者が蘭文原書にある序文の忠實な譯たるは言ふまでもない。僕は之より兩者共通のこのホフマンの序文に依て本書出版の來歷を調べて見やうと思ふ。

本文典編纂の由來

本書の編纂者ドンケル・クルチウスは、長崎に於ける和蘭商館長として數年間日本に居つた人だとある。村上直次郞博士の名著「日蘭三百年の親交」の卷末の表を見ると、成る程其後の商館長として一八五二年から一八五八年商館廢止の時まで駐在したことが分る。此人が商館內の日本語學習用とする目的で一冊の文典を編んだのが即ち之れなのだ。多年苦心の結果たることは言ふを待たない。出來上つた後一本を長崎通詞團の檢閲に供し其意見を求めたが、時恰かも國內紛擾の際とて、豫期通りに返事が來なかつた。そこで彼はその儘原稿を本國の殖民大臣の手許へ送つたとのことである。之は一八五五年（安政二年）の事だと云ふ。

ドンケル・クルチウス自身の抱負は、右の原稿に添へた序文に明白である。ホフマン博士は其中から次の一節を引いて居る。曰く、此書は固より日本語精通の結果として出來たものではない。寧ろ初學者が自ら作つた覺書の樣なものと觀られたい。が、自分の私に信じて疑はないことは、甚だ不完全なものではあるが、本書の外に一冊の字引の助を藉らば、文典なしに三年もかゝる丈のものを、三ケ月位で覺へしむる丈の役には立たうといふ事である。尤も之に由て直ぐ樣日本の役人や識者と會話が出來るやうになれると思はれては困る。我々和蘭人が日本人の召使や諸職人商賈の言を解し、又自分の言はんと欲する所を彼國の語に移す場合に何かの役に立つといふ位が差當りの

本書編纂の主眼なのであると。

和蘭本國の殖民省では、一應之を専門學者の檢閲に附し、其上で出版する考であつたらしい。一八五六年にホフマン博士が右原稿の交附を受けて檢閲校訂を命ぜられたのである。ホフマン博士はもと獨逸の人、有名な東洋語學者で、當時ライデン大學の教授であつた。因に云ふ、此人は日本政府（徳川幕府）最初の留學生西周・津田眞道兩先生の恩人で、從てまた日本近代の文化には大なる關係を有する人だ。之等の事は後に別に説く。要するにドンケル・クルチウスの日本文典がホフマン博士の校訂の下に公刊せらるゝ因縁は、かく殖民省の依囑によるものである。而して出來上つた本はドンケル・クルチウスの力よりもホフマン博士の力が餘計に籠つて居るのだから、本來ならばホフマンの文典と云つた方が適當かも知れない。が、ホフマンにはまた別にホフマン自身の日本文典の著があるので、之と區別する爲に矢張りドンケル・クルチウスの文典と呼び倣されて居るのである。なほドンケル・クルチウスの書いた儘のものは出版になつて居ない。ホフマンの手を離れて後はライデン府の和蘭文學協會（Maatschappij der Nederlandsche Letterkunde）の圖書館に保存されて居るさうだ。先頃和蘭公使館の知人に就て聞いたら、之は同地大學圖書館の一部を成すものだといふ。

而して又彼が日本通詞團に提出した方の草稿はどうなつたか。多分長崎邊にあるのだらうと思ふがまだ調べて居ない。

ドンケル・クルチウスの原稿を受取つたのは、ホフマン博士が實は特に多年用意して居た自分の文典を公刊せんとして居る際であつた。彼の自ら記する所に依れば、印刷の準備も整ひ、日本字の新活字をさへ澤山作つた後であつたさうだ。が、ドンケル・クルチウスの折角の苦心を無にするに忍びず、且は日本在留の蘭人に早く斯種の便利な手引を供給するの必要をも思ひ合し、不完全なものと知りつゝ多少の增訂を施して先づ之を公刊することにしたとの事である。

ホフマン博士が手を入れんとした方面は主として三つある。第一は必要な注釋を附けることである。第二は足らざるを追補することである。第三は原著者の當初の目的を超え、日本文典として一層完全なものに訂正することである。此の第三點に就ては少しく説明を要する。ホフマン博士の觀る所に依ると、原著者は本書を專ら長崎商館員の學習用とする積りであつた所から長崎地方の俚言を文典編成の土臺として居る。之れではつまらぬと彼は考へた。即ち彼は一般の文書に認めらるゝ綴字法に從ひ、日本字を以て日本語を正確に書き現はすに役立つものでなければならぬと考へたのである。彼は曰ふ、原書の採る綴字

法は全然一般に認めらる、夫れとは異り、爲に在來の日本語文獻の攻究に適用が出來ぬと。又曰ふ、よし之等の點が正しいとしても、日本語を文法上又綴字法上正確に學習する爲には口語に着眼した丈けでは不十分であると。斯ういふ方針の下にホフマン博士は殖民省交附の原稿に對して可なり澤山の訂正を加へた。其中重なるものについては序文中にも意見を述べてあるが、之等は專門家の論究に委せて玆には述べない。

斯くして校訂本が出來上つた。然るにいよ／＼出版に取り掛つて約三分の二ばかり竣功した頃、原草稿に對する日本學者の批評といふのがホフマン博士の手に屆いた。之は通詞團の意見を求めた際いろ／＼の事情ですぐ返事をやらなかつたのを、一個人の資格でか又は通詞團代表の資格でかは分らぬが、兎に角一通詞の名義を以て後から書き送つたものであらう。夫れが殖民省からホフマン博士に廻つて來たのである。署名してN. M. Hatsjemon とある。Hatsjemon の八右衛門たるべきは疑ないが、N. M. をホフマン博士は『中村か』(Nacamoera ?)と推定して居る。僕の知る限りに於て中村といふ姓の通詞はないやうだ。長崎高等商業學校の武藤教授に照會したら、果して名村八右衛門なることが分つた。當時の大通詞で花蹊先生と號し、福地源一郎氏などの師事した人ださうだ。此人の事は福地氏の「新聞紙實歷」にも出て居るとのことである。さてその N. M. Hatsjemon の批評は斯うである。『日本駐在和蘭商館長ドンケル・クルチウス氏編纂日本文典ニ關シ、下名ハ、愼重ナル精讀ヲ遂ゲタル後、之ヲ日本語研究ノ目的ノ爲曾テ著作サレタルモノノ中最良最完ノ文典ナリト宣明スルヲ光榮トス。且下名ハ本書ガ啻ニ蘭國青年ニ對テノミナラズ、日本ノ青年ニ向テモ、口語實習上必要ナル諸規則ヲ整然タル順序ノ中ニ網羅セルモノナルコトヲ確認ス』。例の候文で譯せば當時の味は出るだらうとは思ふが、正確を期する爲に現代的に翻譯しておく。而して之は今日の我々から觀れば一片の御座なりの儀式的讚辭に過ぎぬと思ふのだが、ホフマン博士は餘程眞面目に取つたものと見へ、日本々國の權威ある學者が極度の推賞を惜まぬのに自分が獨り之を不完全として訂正するのは僭越であるまいかと、深く反省された樣である。之に就て更にまた數言を費して居る。が、併し又一方から考へると、殖民省に對して自分の立場を謙遜に而かも有力に辯明する爲の言葉であるかとも見られぬでもない。

之で本書公刊の來歷は明となつたであらう。猶ほホフマン博士の序文は一八五七年(安政四年)九月一日の日附になつて居る。

當時歐洲の日本語學者

ホフマン博士の序文の中には次の様な事も書いて居る。海軍の將校で男爵 Huyssen van Kattendyke といふ人、日本へ向け出發せんとするに際して本書公刊の説を耳にし、特にホフマン博士に賴んで、印刷の出來次第數葉づゝ取り寄せて勉强したとやら。出發前日本語を學習せる唯一の歐洲人だと賞めて居る。ホフマン博士の豫言通り日本に着いた後此人が果して語學に非常の進歩を示されたかどうか未だ知る所がない。何の爲に來た人か之も其のうち調べて見たいと思つてゐる。

序文の終りの方にホフマン博士はまた Sturler 少佐に謝意を表して居る。此人の父は一八二四年から一八二六年まで商館長として日本に駐在してゐる間澤山の日本の書物を集めて歸つたが、ホフマン博士は全部之を閲讀するの便宜を得たとある。ホフマン博士の譯せる養蠶秘錄は此の中のものなりしや否や明でないが、何かの便宜があらば其の目錄でも取つて置きたいものだと思ふ。

又ホフマン博士は本書公刊後最先に之を讀まるゝ學者は次の諸氏だらうとて數名の東洋學者を擧げて居る。之は暗に自分の本は之等專門の語學者にも決して看過されない筈だとの自負心を語るものと見てもいゝ。夫れ丈の學術的價値ありや否やは僕には分らぬが、有名なチエムバレン (Chamberlain) 先生は其著 Things Japanese の中で

Of the numerous grammars of Japanese composed in former days by European scholars who had never visited Japan, the most remarkable is that by the late Dr. J. H. Hoffmann, of Leyden.

と賞めて居る。尤も之は彼自身の別の文典を指したのかも知れない。さてホフマン博士の擧げた學者は四人ある。支那語及高印度の諸土語に精通するの稱ある Stanislas Julien と夫の有名な Wilhelm Schott と、又日本語研究の特志家たる August Pfizmayer 及 Léon de Rosny とである。其外に英國の倫敦派教會特派宣教師 Bettelheim 博士の名も見へて居る。右の中ショット教授は伯林大學の支那語學擔任として最も令名の高かつたことは人の知る所、その「支那文典」は斯界の一新路を開拓せるものと云はれて居る。フイツマイエルが日本辭書 (Wörterbuch der japanischen Sprache) の編成を企て一八五一年維納でその第一編を出したこと、又日本の小說詩歌の翻譯を册し、之に關する研究を公にしたことも看過してはいけない。

レオン・ドウ・ロスニイの「日語指針」(Introduction à l'étu

de de la langue japonaise, Paris, 1857）も中々立派な本ださうな。ベッテルハイム師が永く琉球に在て日本政府の監視の八釜しきにも拘らず一八五三年（嘉永六年）新約聖書の日本譯を本國の傳道會社に送つたのも特筆するの必要がある。ベッテルハイムのことは伊波普猷氏の名著「古琉球」の一章『琉球語の聖書』に詳しい。聖書中の耶蘇及使徒の傳記に係る部分を琉球語に譯して上海で出版した事もあるといふ。琉球語にも支那語にも日本語にも達して居た人と見へる。弘化三年（一八四六年）來八年間滯在し、政府の反對で信者は出來なかつたが、高尚なる人格に由て島民の信望を博して居つたさうだ。伊波氏は同氏の傳記研究の資料として、東亞之光明治四十五年七月號（東恩納文學士論文）横山健堂君著「薩摩と琉球」やペルリ提督日本遠征記等を擧げて居るが、鈴木周作學士の譯にかゝる「ペルリ提督日本遠征記」には「續いて軍艦が港内に這入つて行くと、市街（那覇）の北方に突出した岩上の一軒家で旗竿に高く旗を揭げた。之はベッテルハイムと云ふ猶太敎から改宗した宣敎師の住宅で、彼は英國海軍士官並に英國の信徒の有志者から成る或協會の庇護の下に最早此處に五六年琉球人の反對にも係らず住み通して居たのである」（二一一—二一二頁）と出て居る。

猶右の中フイツマイエルの翻譯は東京帝國大學附屬圖書館にも數部所藏されてある。參考の爲に僕の見たもの丈を年代順に列擧して置かう。

（一）Sechs Wandschirme in Gestalten der vergänglichen Welt (Wien, 1848)

之は柳亭種彦の浮世新形六枚屛風の翻譯である。原文を添て居る。而して其原文は繪も字も共に日本の書物そのまゝを復製し、薄い西洋紙を二つに折つて日本流に作つてある。横文の譯書の方も日本の香ひを保存する爲とて矢張り一枚の紙を二つに折つて製本してある。

（二）Die Theogonie der Japaner (Wien 1861)

之は栗田土滿の神代紀葦牙の譯だ。

（三）Die Ergänzte Japanische Sage (Wien, 1864)

本居宣長著神代正語の譯。

（四）Die Auslegungen zu den Nachrichten von den Schönen des Gottes Izanagi (Wien, 1865)

伊奘那岐神に關する研究

（五）Über den Text eines Japanisches Dramas (Wien, 1865)

之は柳亭種彦の正本製七編の「於染久松物語」の譯。譯者は和蘭より正本製七編八編の寄贈を受け、何人の著たる

を知らず、長編の脚本の一部ならんと解説して、其の一冊を譯したのである。

(六) Über Japanischen Archaismen (Wien, 1872)
山本明清の倚古假字格の譯とでもいふべきもの。

(七) Die älteren Reisen nach dem Osten Japans (Wien, 1880)
之は更科日記、富士紀行(藤原雅世)、武藏野紀行(平氏康)等の譯である。更科日記は大森夫人及土居文學士に依り、他の日記類と共に英譯されて、近頃 Diaries of Court Ladies of old Japan の名の下に出版された。合せ見たなら面白いだらう。

(八) Zwei Reisen nach dem westen Japans in den Jahren 1369 und 1389 n. Chr. (Wien, 1881)
之は今川貞世の道行ぶり及鹿苑准后義滿公厳島詣の譯である。

以上を通覽するに、彼は日本語には中々達して居た様に見ゆる。探題を「さぐり題」とよませるなどの滑稽もあれど、夫れ丈邦語の造詣の深さを思はせるものがある。原書は主として和蘭ライデンから取り寄せたやうだ。ホフマンの好意に倚るもの多きは、彼れ自身の書き殘したもの丶中にも見ゆる。飜譯書はみな先づ片假名で日本語の本文を書きあらはし、其下に横文で日本流の讀み方をあげ、夫れから獨語の譯文を出すといふ體裁になつて居る。

ホフマン博士

次にホフマン博士のことを一言して置く。僕がホフマンといふ名を强く印象されたのは森鷗外先生の西周傳を讀んでからだ。西周傳に就ても讀んだ印象を別に書き留めたものがあるが之は他の機會に發表しよう。玆に其中のホフマン博士に關するものを掻い摘んでいへば斯うだ。西周先生は津田眞道先生と提携して幕府當局に海外留學の志望を告げ、遂に許されて文久二年榎本釜次郎等と共に和蘭に向つた。到着後ライデン府に到り、先づ何や彼やの世話になつたのが此のホフマン博士なのである。出發前からホフマンの名を知つて居つたかどうか分らぬが、此の留學には元來和蘭政府でも大に骨折つて居るのだから、同政府からホフマン先生に日本青年の世話を托したものであらうと察せらる丶。ホフマン博士は兩名の來意をきゝ改めて彼等を同府大學のフイツセリング(Visseling)教授に紹介した。其結果毎週日を定めて同教授の宅で講義を聽くことになつたが、其の筆記が歸國後譯されて性法略(之は神田孝平譯が世に行はれて居

る西周譯は紛失して仕舞つたといふ）となり、泰西國法論（津田譯）となり、萬國公法（西譯）となつて、維新前後の政法思想の根柢を爲すに至るのである。其外公刊の書としては傳はらないが、フイツセリングの授けた課目に經濟學と統計學とがある。この五科目の大體に通ずれば本國に於ける國政改革の急要に應ずることが出來やうとの趣意らしい。斯んなわけで、我々は直接にはフイツセリング教授に深甚の感謝を表するものであるが、間接にまたホフマン博士の斡旋の勞を忘れてはならない。同博士の日本に盡した功勞は、著書翻譯に依て日本を西洋に紹介した丈けではないのである。

諸種の字書に依てホフマン博士の傳を調べて見ると、彼はもと獨逸巴威里のウイルツブルグ市の生れだ。さてこそ東洋殊に日本の事に興味を持つのも怪むに足らない。何となればウイルツブルグは即ちシーボルトの生れ故郷だからである。果せる哉彼の東洋研究に志したのも、一八三〇年七月偶然にシーボルトと會見せしに始るとやら（大英百科全書による）。彼は一八〇五年の生れだから當時は二十五歲の元氣旺盛の青年である。好むに任せて突進したさまも想像に難くない。最初はシーボルトの伴ひし支那人の教師郭成章（Ko-Tching-schang）に就て支那語を學んだ。其の爲に彼ほ郭の話し得る唯一の外國語たる馬來語の研究から這入つたさうだ。流石に東洋貿易のチャムピオンたりし和蘭國の事とて、當時馬來語は相當に研究の便宜はあつたのである。斯くて間もなく彼は支那語に熟達し、やがて又日本語の研究をも始め、而かもドン／＼上達したといふ。

彼はシーボルトを助け、其の大著「日本」（Nippon）に有益なる論述や翻譯を寄せて居る。「日本」は一名を Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben=und Schutzländern Jezo mit den südlichen Kurilen, Sachalin, Korea und dern Liukiu-Inseln（Leiden, 1832—51）といふ。以て其の内容を推知すべきである。一八九七年出版の第二版からは、ホフマン博士の寄稿にかゝる部分は削除された。庶莫第一版に現はれた彼の寄稿は當時の東洋學者を大に驚かしたのである。而して此の無名の一青年の東洋語學に於ける不可侮の素養に最も深く傾投したものにスタニスラス・ジュリアンがある。傳ふる所に依れば、彼は或る地位を提供してホフマンを巴里に招がんとしたとやら。ホフマンも亦意頗る動いたが、偶々和蘭の殖民大臣バウド（Baud）の四千五百圓の年俸以て厚く彼を聘するに遇ひ、乃ち欣然之に應じて任に日語翻譯官に就いた。之が彼の和蘭に仕官する始めである。

和蘭政府では其後彼を格別厚遇せなかつた。併し彼の學問上

の業績は段々各國に認められて來た。斯くて倫敦のキングス・カレツヂ（King's College）は彼を支那語學の教授として厚く聘せんとしたが、之を聞いて始めて和蘭政府は慌て出し、ライデン大學の東洋語學教授の地位を與へて大に優遇することにした。斯くて全く和蘭に落ち着き、一八七八年一月遂に海牙で死んだ。

彼は一八三九年に日語字書の編纂に着手し、未完の儘で終つたのを、セルリエー（Serrurier）が遺業をうけて其一部分を出版したが、この編纂の時も活字を得るに苦みては、自分で機械を作つたり、且つ出來上つた活字を自分で一々植字した程熱心であつたさうだ。今問題として居る文典に就ても多分同じ様な熱心を示したことゝ思はるゝ。蘭文原書に就て見ると、日本語の活字は假名（平假名は用いてない）も漢字も立派なものだ。

日本文典

その扉に出せる日本字の表題を原形のまゝ茲に寫し出して標本に供する。

又本書の序文にもあつた彼自身の日本文典は、一八六七年（慶應三年）和蘭語で、翌年には英語で、又一八七六年（明治九年）には獨語で出版されて居る。それぞれ Japansch Spraakleer, Japanese Grammar, Japanische Sprachlehre として知られ、いづれも殖民省の公命に依り出版せるものである。彼は其の序文に於て曰ふ。本書の組み立ては自己獨特のもので、他の何人のにも倣つたのではない。主として文章語を取扱つて居るが、之は專ら自分が書物で學んだのだ。時々口語にも論及して居るが、之は和蘭を始め英佛に來て居る日本人に就て學んだと。猶ま文章論（シンタックス）は目下用意中と書いてあるが、之は一八七八年に出した「日本語の研究」に收められて居ると云ふことである。

次に序ながら彼の編纂した日本語辭書のことを一言して置かう。僕の見たのは東京帝國大學圖書館にある英文の方である。Japanese English Dictionary といふ。蘭文の方は Japansch nederlandsche Woordenboek といふが、双方同時に作つたのである。先づ自分の見た英文の方に就ていふと普通の辭書體の大形の本で四百頁あまりある。前後三編に分れ、第一がAの部、第二がCの部、第三はBの部となつて居る。ホフマンの死後に出來たもので。直接出版の衝に當つたのは當初彼の助手たりしライデン府土俗博物館長代理のセルリエーである。因に云

ふ。この博物館は最初日本將來の物に依てシーボルトの建設せしもので永く日本博物館と呼んで居つたのだが、後蘭領印度等の物をも加へて土俗博物館と改稱する樣になつたものなさうだ。されば今でも同館の主たる觀物（みもの）は日本の部だといふ。さて本辭書の卷頭に載せたるセルリエーの序文によると、ホフマンは最初之を自分一己の參考用として書き集めたものらしい。基礎にしたものはシーボルトの拵へた和漢音釋書言字考で、先づその順序を直し、又他の字林玉篇等によりて增補したといふ。成る程さう云はれて見ると、此の辭書には漢語が非常に多いのに氣が附く。斯くて大體の骨組が一八三九年に出來た。然るに一八五四年（安政元年）の頃より日本の國情は俄然として變り、和蘭としても從來の面目を一新して大に貿易關係を活潑ならしめんとの望を抱くに至つた。そこで政府は更めてホフマン博士に命を下し、語學々習書と辭書との編纂を托したので、之より博士は大に奮勵し、一八六一年日本使節滯留の際の如きは好機失ふ可らずとして更に研讃に努められ、翌一八六二年には兎も角も一段落の綴りをつけられた。其中に博士は辭書よりも文法の出版を急なりとせられ、此方に力を注いで辭書の方を一時中斷された。文法の方は前記の如く一八六七年に出來たので、夫から再び辭書の方に取り掛つた。此際ホフマン博士を大に啓發したものは、同年に出來たヘボンの和英語林集成である。不幸にして此頃からホフマンの健康大に衰ひ、事業の進行捗々しからず、一八七五年遂に前記セルリエーを助手として仕事の一半を托することになり、やがてまた出版の事は著者の監督の下にセ氏に一切の責任を委すことになつた。其中にホフマンが死んだ（一八七八）ためまた暫く中斷されたが、セ氏再び勇を鼓して完成に努められたので、一八八一年九月ともかくも現に見るが如きものを公刊するに至つたのである。尤も公刊したのはホフマンの殘せる原稿の全部ではない。ホフマンの原稿ももと〳〵完全したものではないといふ。猶ほホフマンの原稿には、日本語はローマ字で書き、說明は獨逸語でしてあつたさうだが、セルリエーは之に假名文字を入れ、說明も夫れ〳〵蘭語又は英語に直した。セ氏がヘボンや佛のパーゼの辭書に依て增訂した部分も可なりあると云ふ。パーゼの辭書の事はまた後に說く。

次にセルリエーの序文の中にある次の一句は一寸注意しておく必要がある。曰く、一八七一年（明治四年）日本政府編纂の語彙なるもの送り來る。五冊より成るAの部を手にしたが、夫れ以上出版されぬやうだ。從來の辭書とは全く撰を異にする立派なものであつたのに、中止されたのは誠に遺憾な事だ。更に

係ホフマン先生も自分も之に依て大に自分達の辭書に訂正すべきものあるを敎へられたと。更にまた曰く、語彙の編纂振りに依て察するに、日本の學者はどうもホフマンの文典を參考したらしいと。問題は卽ちこの點だ。果してセ氏の推薦通り、ホフマンの文典に依て當時の國學者が多少でも啓發されたとすれば、是亦看過すべからさる事柄であらう。大槻文彦先生にでも伺つて見たいと思つてゐる。

語彙のことについては大槻先生の言海の跋から其の說明を求めやう。その初の方には『……八年二月二日本省報告課（明治十三年に編輯局と改められぬ）に轉勤し、こゝにはじめて日本辭書編輯の命あり……これよりさきに編輯寮にて語彙を編輯せしめられしに、碩學七八人して二三年の間にわづかに「あ、い、う、え」の部を成せりき』とある。船頭多くして船山に上るの嫌ありといふので中途でやめ、大槻先生一人に命が下つたのである。又後の方には辭書編纂の目的から說いて『辭書は文敎のもとゐたること論ずるまでもなし……されば文部省にても夙くよりこの業に着手せられぬ。語彙の擧は明治の初年にあり』と述べて居られる

孰れにしても、當時の和蘭が日本研究に斯くも鋭敏であつたといふことは、誠に驚歎に堪へさる所である。

其外彼には日本に關する著書他に數種あるが、玆に一寸特色のあるのは、一八四八年巴里にて出版せる飜譯物である。表題は Yo-San-fi-Rok; L'Art d'élever les vers à soie au Japon, par Ouekaki Mourikouni とある。卽ち上垣守國の養蠶秘錄の飜譯たることと疑ない。國書解題には『養蠶秘錄三卷、和漢養蠶の起源より古來桑蠶に關する沿革事蹟を輯錄したるものにて、自家の實驗說をも併記せり。享和二年壬戌の編にかゝる。著者上垣守國は伊兵衛と稱す、丹後の人なり』とある。非常にいゝ本だとて明治二十年之を復製して賣り出した人もある。

パーゼ佛譯の由來

轉じて今度はパーゼの序文に依て佛譯本の來歷を調べて見る。

之は巴里の亞細亞協會（La Société asiatique）の仕事らしい。同協會は現代日本の研究を目的とするものださうで、其の第一着手の仕事として、先きに一八二五年ロドリゲース日本文典の佛語譯を出版した。譯者はランドレス（Landresse）といふ人だ。斯學の權威たる京都帝國大家敎授新村博士の說に依れば、餘り立派な譯ではないさうである（同博士著南蠻記三七三頁參照）。夫から同會第二の仕事として本文典が擇れたのだ。譯

者はこの原書を以て最近の研究方法に基ける日本文典の最初の試みと云うて居る。パーゼが有名なる日本研究家たるは人の知る所で、一八六九年に公にせる日本基督教史（Histoire de la Religion chrétienne au Japon, de 1598 à 1656）はクラッセの日本西教史と共に有益なる典籍となつて居る。同年刊行の日本關係書目集も亦甚だ有益な著述として珍重されて居る。猶彼は更に第三の仕事として一六〇三年長崎でゼスエト派宣教師の作れる日葡辭書の飜譯に從事すると云つて居る。Dictionnaire japonais-français と題し、全部で四册、一八六二年一月までに完成する積りだとある。之が濟むと四册本の日本歴史に取り掛るとあるが、前記の基督教史は即ち之に應ずるものであらうか。

猶右の辭書は東京帝國大學附屬圖書館にもあるが、千頁に近い大形の本で、一八六二年三月二十五日の出版になつて居る。西班牙譯に依つて多少增補したとある。西班牙譯とは一六三〇年ドミニカン派の宣教師がマニラで出版したもので原名を Vocabulario de japon declarado primero en portugues por los padres dela compania de Jesus de aquel reyno, y agora en castellano en el collegio de S. Thomas de Manila, 1630 といふものだ。さて序文によると、之等葡西兩語の辭書の原本はロドリゲースの文典（大小二種ありランドレスの譯せるは小の方である）と共に巴里の國立圖書館（La Bibliothèque du roi 共和時代の今日は La Bibliothèque Nationale と改稱して居る）にあるさうだ。而してこは世界に於ける唯一無二の珍本だと誇つて居るが、しかし必しもさうでないことは後に說くであらう。

當時行はれし日本語辭書

ドンケル・クルチウス文典の表題の中に譯者がロドリゲース、コリヤードーの兩文典を參照して注釋を加へた旨を斷つてあることは先にも述べた。序文にもロドリゲースの文典の事は出て居る。其外に日本語學習の書物として當時歐洲人の手に入れ得る本として彼は次の貳種の辭書を擧げて居る。曰く Medhurst の English-Japanese Vocabulary (Batavia, 1830) 曰く Gochkevitch の和露字彙（St. Petersburg, 1857）。共に不完全なもので大した用を爲さぬとは云ふて居る。後者は函館圖書館の珍藏に係るものを同館長岡田健藏君の好意に依て借覽するを得たが、四六二倍大で四百頁あまりあり、いろは順に日本語をならべ之に露語の解釋を附したものである。扉の上の方に『和露通言比考』の別名を刻してある。外に Siebold の Thesaurus linguae japonicae をもあげて居る。之には括弧して Ya-kan

Won-Seki-Sjo-Gen-zi-ko と注してある。之は元祿年間に拵へた槇島照氏の和漢音釋書言字考節用集の謂はゞ飜刻に過ぎぬ。伊呂波別に漢字を集め、更に其の各々を乾坤、時候、神祇、官位、人倫、肢體、氣形、生植、服食、器財、言辭、數量、姓氏等の諸門に彙類せるものである。說明は漢文でしてある。前にも述べた支那人の郭成章の力を借りた所以はこれで分る。之は一八三五年ライデン府の刊行だ。此外シーボルトは Literarum Ideographicarum Thesaurus-Sin Zoo Zi Lin Gj k Ben の名の下に新增字林玉篇をも刊行して居る（一八三四年）。双方とも四六四倍大の立派な本で、前者は二百頁餘後者は百六十頁餘ある。併し之等は日本語の字引としては甚だ適當なものではない。寧ろ漢字の字引といへば當る。其限りに於てまた僅に日本語辭書の一部たるを得るに過ぎぬものである。

メドハーストの字書は、原名を An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary と云ふ。第十九世紀の中頃日本研究家の必ず手にせるものと見え、ヘボン（Hepburn）先生の和英語林集成にも引き合に出されて居る。メドハーストは英國會衆派の宣教師で、一八一六年マラッカに來たのが東洋在住の振り出し、其後彼南、バタビヤ、上海に轉々した。馬來語支那語に精通し、其の華英・英華字典と聖書の支那語譯改訂とは、彼の名を不朽ならしむるものであるさうな。日本語の辭書を作つたことはどの人名字書にも書いてないのは、辭書といふ程のものに非ず、いはゞ言語集に過ぎないからであらう。一八三〇年は卽ち彼のバタビヤ滯在期に當るのである。猶彼には Philosinensis てふ名の下に Translation of a Comparative Vocabulary of the Chinese, Corean and Japanese Languages, to which is added the Thousand character classic, in Chinese and Corean (Batavia, 1835) なる著述もあるさうである。

ヘボンは當時在留外人間に行はれし日語辭書として、右のメドハーストの外、一六〇三年長崎にて葡國宣教師の作つた日葡辭書をあげて居る。之は巴里の亞細亞協會で飜譯せるものと同一の辭書を意味することは疑ない。一六〇三年といへば丁度ロドリゲーズの日本文典が長崎で作られた前年に當るが、之と彼とを混同してはいけぬ。辭書の方の著者は誰だか今明でない。新村教授は『伴天連衆の編纂にして、ロ氏其の主たる編纂者たりしこと疑ふべからず』（南蠻記二六九頁）と推定して居らるゝが、多分其の通りだらうと思ふ。この辭書が全部完全に英國オックスフォード大學ボドレー文庫に在つたのを先年新村教授が悉く之を寫眞に撮つて持ち歸られ、今京都帝國大學圖書館に、

珍藏されに居る。先にも述べた如くパーゼは佛國國立圖書館にあるのが唯一無二の珍本だと云つて居るが、英佛兩國に少くも二部の原本が存在して居ることは之に由つて明だ。猶ロドリゲースの文典の原本も辭書と共に英佛兩國に於て同じ圖書館に現存して居るのであるが、ランドレス譯の小文典の原書は、英國に於ては別にキングス・カレッヂの圖書館にあるといふ（新村教授「南蠻記」二一五頁）。而して大文典の方は同じく新村教授に依つて寫眞にとられ、同じく京都大學の珍藏になつて居る。斯く原書は非常な珍本であるから、ヘボン先生といへども之を有つて居らるゝ筈はない。同氏の見たのは多分パーゼの佛譯であらう。マニラ版の西班牙譯とても決して容易に手に入るものではないとの事である。

さて一六〇〇年代の日本語辭書としては、右の長崎版又はマニラ版の辭書に限るのではない。外に一六三二年羅馬で作られたコリヤードーの辭書といふがある。東京帝國大學圖書館に所藏されて居るのは、文典と辭書と外にもう一部の書と三つが合本になつて居る。コリヤードーは西班牙の宣教師で、一六一九年に日本に渡つた人だといふ。文典（Ars grammaticae japonicae Linguae）は拉丁語で書いてあり、菊版形で七十頁あまりの至て簡單なものだ。辭書は本編（Dictionarium sive Thesauri Linguae japonicae compendium）百六十頁、追補（Additiones ad Dictionarium japonicum）二百頁足らずあり、拉丁語に日本譯を横文字で附けたものだ。第三部は茲には關係がないが非常に面白いものだから一寸紹介しておく。語り語學獨習の用に供する目的であらう日拉兩語を左右對譯の形で出しておるが、日本語の題は「日本の言葉の樣コンフエシオン（懺悔）を申す樣態と又コンフエソル（懺悔者）より御穿鑿めさるゝ爲に肝要なる條々のこと談義者の門派のフライ・ヂエーゴ・コリヤードーと云ふ出家羅馬に於て之を仕立て者也一六三二」とあり、各種の戒律に付いて犯せる罪の可なり露骨な告白が誌されてある。全體で六十頁あまりあるが、色々の意味に於て頗る貴重な史料と謂つていゝ。猶この本に就ては新村教授の南蠻記（三三七頁以下）に可なり詳しい解説が載つてゐる。原書はパーゼが一八六六年巴里で翻刻したものもあつて、西洋には珍らしくないとのことだ。

猶ほ新井白石の西洋紀聞に依ると、彼の對訊せし伴天連シドーチが『我國のことばをしるして彼方の語を以て解せし』デキシヨナアリヨムといふ長サ五寸許廣サ四寸許厚サ一寸餘の小冊子を持つて居つたとあるが、之はこのコリアードーの本ではなかつたらうか。但し之は彼方の語を我國の語を以て翻譯せしも

のだから白石の記する所とは違ふやうでもある。

ロドリゲース日本文典

上記の說述の中に屢々引き合に出たロドリゲーズの日本文典のことを序に書いておく。その原本の英國牛津大學ボドレー文庫に珍藏されて居るのを前掲辭書と共に全部寫眞に撮つて京都大學に備へ付けられてあることは先にも述べた。之に關する研究は殆んど新村教授の獨擅場であるが、大正十一年二月の「藝文」に寄せられたる『吉利支丹文學斷片』には遺憾なく本書の價値が述べ盡されて居る。大要を摘めば次の如くである。『……種々の語法形の實例を豐富に擧げて、一々日本言文古今雅俗の出典を明示してある所に、吉利支丹文學書の名が十餘見えてゐる……元來この文典はロドリゲースの編輯ではあらうが、その資料は當時の日本の信者中學問あるもの文事あるものが供給したに違ひなく、公家や武家からも、歌學者や連歌師からも、佛家や儒流からも、都人からも田舍人からも、書物からも方言からも、あらゆる方面の國語材料を網羅してゐる……漢籍や佛典の訓讀もあり、古今集や朗詠集中の古句をも引くかと思ふと、當代の書札の樣式をも細說してある……論語からも法華經からも採り、平家をも太平記をも引用する……撰集抄や發心集、謡曲や舞の本、鎌倉時代よりも室町時代よりも、材料を集めて來る……この文法書は主として當代の口語を取扱てゐるから、口語の語法形の出典には、例の伊曾保物語や天草版の平家物語の如き、吉利支丹の出版物を擧げたり種々の吉利支丹關係の文獻の名を載せたりしてあるのが目につくのは當然である……無論これらの邪宗書は何時何人の著であるかといふことは判らぬし、その書の內容も精しくは知れないのであるが、その書名とこの文典に引用する文句中の或る個所とから推察して、大抵吉利支丹關係のものたるを推定するに難くないのである云々』。續いて新村教授は同文典に引用せる書名と其書名の條に出てゐる文句とを擧げて居るが、いづれも非常に興味のあるものである。

僕はまだ右の現品を見ないから實物に就ての斷定は下し難いが、前記ランドレス譯の小文典の序文に依れば、この大文典は日本紙二百四十枚に印刷し、外に表題、允許證、序文、廣告もあるといふ。第二枚目の表には一六〇四年四月二十二日允許としるされて居る。字も印刷も粗惡で不鮮明だと附け加へてある。少くとも巴里圖書館所藏の方は斯うした體裁のものと思へば間違はない。

ロドリゲースは葡萄牙の宣教師で、永く日本に滯在し、語學には特別の天才であつたらしい。葡領印度總督の使節の資格で

天正十八年（一五九〇）に來たヴアリニアーニを案內して、翌年一月豐臣秀吉に謁見せしめ通譯の勞を取つたことも人の知る所である。新村教授の南蠻記にも此人の事が詳しく說かれてあつた樣に記憶する。

佛譯小文典

ロドリゲース佛譯小文典は Elémens de la Grammaire japonaiseといふ。その序文に斯んなことを云つて居る。古來日本語の文典としては次の三書がある。曰く、Alvarez の De Institutione Grammatica libri III cum versione japonica, (In Collegio S. J. Amacusano, 1593)。曰く P. J. Rodriguez の Arte da Linguae de Japam (Nangasaki. Collegio da Comp. de Jesu, 1604)。曰く、Collado の Ars Grammatica japonicae linguae (Romae, 1632)。いづれもまだ語學研究の幼稚な時代のもの故、詳しい割合に規則が多過ぎ又複雜過ぎて却て學習に不便だ。加之コリヤードーの外は日本での出版ゆゑ殆んど手に入れやうがない。是れ本書を飜譯せる所以であると。

新村教授の說に依れば、アルヷアレースの日本文典といふは、不思議に多くの人の思ひあやまれる所にして、實は文祿二年（一五九三年）に出版されたアルヷアレース式の拉丁文典の飜譯のことだといふ（南蠻記二六七頁）。して見ると本當の日本文典としては實はロドリゲースのとコリヤードーのとの二種だけしか無かつた譯である。

さて前にも屢述べた如く、ロドリゲースの文典には大小二種あり、大は前述の如く一六〇四年長崎の出版であるが、小は新村教授の報告に依れば一六二〇年媽港の版とある（南蠻記二一五頁）。ランドレス佛譯本の序文には、ロドリゲース自ら原文典の冗長に過ぐるを認め、初學者の爲に別に簡畧なる抄錄を作り、上司の允許を得て出版する積りであつたらうが、何うした因緣か草稿の儘國立圖書館の所藏に歸したとある。して見ると彼は媽港で版になつたことを知らなかつたらしい。眞逆この兩者は別のものではなからう。尤も此の草稿は支那紙にて九十六枚あり、表紙には一六二〇媽港にて編すと書いてあるさうだ。

佛譯本出版者の序文について原著者の序文がある。其中の一節に斯んな事が書いてある。曰く、先に出版せる大文典に在ては、我々歐洲人の語法と全く異つた日本語の特異なる性質を十分明ならしむる爲には、其の說明聊か煩瑣に過ぎたるの嫌があつた。既に相當の學識を具へ又熱心に研鑽の勞を厭はざる人々にはあれでも差支ないが、初學者には不便だらうと思はる丶。

故に先きの約束に從ひ又上司の命令もあつたので、初學用としてこの簡單なる抄錄を作つたと。

この小文典は本來三編に分れて居つた。第一編には日本語そのもの並に其の學習方法に關する一般觀念と語尾の變化及動詞の活用を說き、第二編には文章構成法の大要及初學作文法を述べ、第三編には語體に特有なる二三の規則と文書の理解に必要なる注意とを集めてある。然るに譯者は第三編の初めの部分は之を第一編の終りにつけ、後の部分は獨立の編を爲すべく餘りに短いとて第二編の附錄とした。斯くて前後二編に組みかへた譯になる。

緒論の中から一寸面白いと思つた二三點を摘記して見やう。亦以て原著者の日本文學に關する智識の程を推量するに足るものがある

(一) 歷史の教ふる所に依れば、漢字の日本に入りしは西紀二八五年頃(一說に二九〇年)十六代 Voyin Tenno(一名Fa-siman Daibosat) の十五年(一說に二十年)だといふ云々。之が王仁の來朝を意味するものとせば、應神天皇の十六年だから、西紀二八五年といふが正しいのである。

(二) すべての漢字は二樣の發音を有す。一を Koye とよび、音を意味す。多少日本流に轉訛しては居るが、支那に於けるが如く發音するものだ。二は yomi と稱し、辭の意味を現はすものである。例へば ten, chi, jin(nin) は Koye で、Ame, tsouti, fito は yomi だ云々。新村教授の「落葉集」の解說(南蠻記三二頁以下)の中に引ける同書の序文に「……の字書世にふりておほしと雖も、あるは字のこゑばかりにしてよみなく、あるはよみをしるしてこゑを記せず。是なん物の不足といふべきにや……」とあれば、こゑ・よみの稱呼は當時通用の語たりしや疑ない。落葉集は一五九八年の刊行である、

(三) その結果として日本には三種の言葉使が並び行はる。一は Koye を交へざる純 Yomi の言葉であつて、之は日本國民の最も自然なる又最も原始的なる言葉使ひである。和歌や軟文學に用ひらる。Ghenji Monogatari, Ize Monogatari などは之に屬する。二は純 Koye のもの。僧侶が經文の誦唱に用ふるは是れだ。三は Yomi と Koye との混交に成るもので、坊間通用の言語は即ちこれだ。猶ほ日常の會話に在つては、何れかといへば Yomi の方が多いが、少し改まつた應對になると、Koye の部分が著しく殖える云々。

(四) 日本は支那と同じ樣に、筆にする語と口にする語と違う。筆にする語を口に上ぼすは、口にする語を筆にうつすと同じく、甚だ滑稽にひゞく云々。

（五）日本の文學にはいろ〳〵種類がある。重なるものを擧げると、第一にMai（舞か）Sozi（草紙）があり、第二に宗教的なものとしてSenyisoがある。第三は歴史物即ち物語類で、平家物語、保元平治物語などが之に入る。終りに歴史物の中ことに重々しく取扱ふものに太平記の類がある云々。右の中Senyisoは何の謂であるか未だ解を得ない。此の部類に入るものとしてSaighiofosi（西行法師）Samono Zomei（鴨長明か）を擧げて居る。

オヤングーレン日本文典

なほ前記の佛譯ロドリゲース小文典には、オヤングーレンの日本文典に依る追補が二十頁ばかり附錄となつて居り、更に之に獨逸の碩學フンボルトの考證が載つて居る。オヤングーレンは交趾支那方面に來て居つた西班牙の宣教師で、直接日本の書物に依つて文典を編纂し、歸國の途中一七三八年メキシコで之を出版したのである。ロドリゲースやコリヤードーの文典が出來てから百年あまりも後のものだけれど、東洋に來てから始めて編纂の志を起したことゝて、之等先人の著は全く參考して居ないといふ。二百頁ばかりの本で表題をArte de la lengua japona (Impresso en Mexico, 1738)といふ。この本については幸ひ新村教授の詳細なる研究が既に公になつて居るから、茲に多く言ふの必要はない（南蠻記三七〇頁）。

駒ヶ嶽より羊蹄山へ

大町桂月

一　大沼

青森より函館への船中、同行の梅津和市氏に挑まれて、碁局に對し、一勝一敗する程に、傍觀したる一人の男、伎癢に堪へざらむ、自ら進んで戰を挑むに、辭すべくもあらず、攫みて、黒を取りて勝ち、白にて負け、黒にて勝ち、白にて負け、黒に

て持碁となりて、四五時間の船路面白く碁に果てたり。碁局以外の事は、一切頭に入らざるが、唯船は動揺せざりしやう也。

余の碁に於ける技術は、未だ堂に上らず。所謂笊碁也。されど笊碁としての必勝法を知る。他なし、勝負に重きを置かずして、考へずに、早く打つ也。始めの数番は或は負くるも、次第々々に勝つやうになり、数十番となれば、相手は必ず精力盡きて降参する也。

函館に上陸して直に汽車に乗り、大沼驛に下りて紅葉館に投ずるより早く、舟を雇ひて、梅津氏と共に大沼に浮ぶ。舟は和船にて、板の屋根あり。十数人を容るゝに足る。十八九歳の青年船頭にて漕ぐ。西大島と東大島との間より出で、左右に群島を顧み、正面の彼方に、駒ヶ嶽を仰ぐ。日本に駒ヶ嶽と稱する山多きが、概して峯形が将棊の駒に似たるより其名を得たるもの也。然るに此の駒ヶ嶽は、眞の駒に似たり。駒の首高く、前脚延び、脊は急に低くなり、腰は少し高まり、尾は斜に靡きたり。天馬空を行くとは、此にやとばかり思はれて、實に天下の奇觀也。島はみな小石の寄り集りたるものにて、水面より二三尺若しくは四五尺を抜き、山毛欅、楢などの落葉樹を帶びたり。其數甚だ多く、大小相並べるを親子島と云ひ、ほゞ同じ大さにて相並べる女夫島といふなど、名あるもあれば、名なきもあり。一島に相原周防守の墓を拜し、他の一島に東郷元帥の銅像を仰ぎて、日の出島に上陸す。攝政宮殿下の立寄らせ給ひたりけむ、四阿を柵して、人の入るを許さず。左に奇抜なる駒ヶ嶽を望み、右に圓滿なる横津嶽を望む。正面は島なく、烟波淼茫として、二三の小舟を點す。この島に橋ありて、他の島に通ず。その島にも橋ありて、又他の島に通ず。その島にも橋ありて、陸に連なる。陸には丘樹連續し、處々に小池あり。楓多きが、折り／＼白樺を見る。大山元帥の銅像を仰ぎて、後樂橋を渡れば、二三町四方の廣場あり。岸邊にいろ／＼の遊覽船集まる。岸に沿うて左し、家鴨の聲に迎へられて、紅葉館に戻り、見れば見るほど、奇抜なる駒ヶ嶽哉。雲烟その腰に搖曳して、天馬活きて走らむとする也。

二　第一回の駒ヶ嶽登山

朝起き出づれば、湖上は一面の霧也。されど、日出づる頃には、その霧次第々々に薄らぎ、島一つ現はるゝかと見れば、又一つ、二つ、三つ、四つ、見る／＼数十島現はれ、駒ヶ嶽の天馬も天上に現はる。その天馬へ登らむとて、大沼に浮ぶ。漕ぐ者は昨日の青年なるが、舟は和船ならで、ボート也。進行早し。湖心に出でゝ、前に駒ヶ嶽を仰ぎ、後に横津嶽を仰ぐ。陶

ヶ嶽の奇拔と横津嶽の圓滿とは、對照の妙を極む。奇拔は奇拔で、奇拔の特長あり、圓滿は圓滿で、圓滿の特長あるが、横津嶽ぐらゐの圓滿にては、未だ圓滿の特長を發揮するに至らず。駒ヶ嶽の奇拔は奇拔の特長を發揮して、大沼の價値の半以上を占む。海拔を云へば、横津嶽が三千七百九十五尺、駒ヶ嶽が三千七百六十二尺にて、駒ヶ嶽が少し低けれども、景致より云へば、横津嶽は凡山にして、駒ヶ嶽は天下の名山也。

千鳥ヶ浦に上陸す。梅津氏は他の戻りのボートにて、引返せり。今日中に、札幌に赴かざるべからざるを以て、共に駒ヶ嶽に登るだけの時間を有せざる也。青年導を爲す。路はだら〳〵登り也。數町にして木立盡きて、薮の原となり、又尾花の原となる。その尾花も盡きて、滿山砂礫、唯短小なる白樺の處々に立てるを見る。一合目にて大沼の全部を見下す。小沼の全部をも見下す。大沼と小沼とは相連りて、曲玉の形を成す。小沼共上部に當り、大沼共下部に當る。小沼は幅廣くして短く、大沼は幅廣くして長し。大沼の周圍は七里、小沼の周圍は五里もあるべし。三合目に至れば、小沼より十數町離れたる處に蓴菜沼現まる。これは小沼の四分の一ぐらゐの大さ也。ほ上れば、蓴菜沼の半分ぐらゐの小沼、三つ四つ現はる。五合目にりて、路少し急也。白玉と稱する高山植物、低く地に[illegible]す。結

花菓の如く、花と實とが一つなるが、大さは豌豆ぐらゐにて、其花白く、香氣高し。摘み取りて食へば、甘味の中に少し酸味ありて、清香口中に迸る。仙味とでも形容すべくや。青年に向つて、旨いから食つて見よと云ひたれど、西洋人が好んで食ふとのみにて、食はむともせざりき。

七合目に至れば、草木全く絶ゆ。顧れば、函館見え、津輕海峽も見え、陸奥の山々も見ゆ。十合目に至れば、即ち馬の脊と稱する處也。馬の頭は巖壁直立して天を衝く。その巖壁連りて中腹以下に及ぶ。峯傳ひには馬の頭に登らるべくもあらず。だら〳〵下りて噴火口に入れば、更に三つ四つの小噴火口ありてその中微に烟を噴くもの二つばかりあり。馬の頭を仰げば、馬の脊にて見たるよりも、巖壁猶一層高く直立し、頂は數個の巨巖に分れて、恰も劍を立てならべたるが如し。頂に登るべからざるのみならず、唯見ても、ぞつとするばかり也。湖上より駒ヶ嶽を眺めて、其奇拔なるに感服せしが、茲に近く馬の頭を仰ぎて、其雄偉なるに驚歎せざるを得ず。嗚呼駒ヶ嶽は四千尺にも足らぬ山なれども、活火山也。殊に其峯頭の奇拔にして雄偉なることは、天下の壯觀を極む。巖窟の中に鎭座せる駒ヶ嶽神社の前、此の壯觀を肴に、二合瓶の酒を喇叭呑みにし、サイダーの瓶を少年に與へて、共に午食す

大沼より見れば、駒ヶ嶽は駒なるが、噴火口より見れば、馬の頭は劍也。その劍を中心にして、一方は馬の脊より馬の腰に續き、外に向つても、内に向つても傾斜緩なるが、一方は傾斜の急なる外壁を以て、砂原嶽に連る。砂原嶽と馬の腰との間は、外輪山絶ゆ。外輪山まで、駒ヶ嶽に因みて、蹄鐵形を成せるも、亦一奇也。砂原嶽も巉巖直立して、噴火口内よりは登るべからざるが、砂原嶽と馬の頭との間の外壁は、急は急なれども登れると思はるゝ處二つ三つあり。その外壁に登りさへすれば、馬の頭にも登らるべく、砂原嶽にも登らるべしと思はる。少年に向つて、馬の頭に登れぬかと問へば、登れずと答へ、なほ語を繼ぎて、先年二人の西洋人が登りたることありて、案内者墜死したり。それに懲りて、案内する者なし。その墜死したる案内者の記念碑はあれなりと指さすまゝに、往いて見れば、巖の上に小さき石を建てゝ、明治三十六年、英國公使館員コーリヤ氏を案内したる者の墜死したる由を記せり。案内者は墜死したるも、コーリヤ氏は馬の頭を窮めたる也。年々大沼に遊ぶ者幾十萬人なるを知らず。駒ヶ嶽に登る者も二三萬人あるべし。然るに馬の脊を踰えて、噴火口に下るに止まりて、最高峯を窮むる者なしとは、餘りに意氣地なきなり、登山の趣味が低級なり、コーリヤ氏に對して顏色なきなり、日本に男兒なきなりと慨歎せざるを得ざる也。殊に馬の脊よりすれば、大沼より津輕海峽へかけて南方の眺望あれども、全く北方の眺望を缺く。駒ヶ嶽に登りても、最高峯、少くとも、北方の外輪壁に登らざる者は、眞に駒ヶ嶽に登りたりとは云ふべからざる也。

余は斯く思ひ込みて、氣自ら張れり。青年に向つて、北方の外輪壁を指さし、直接に馬の頭には登れざるが、あの外輪壁には登れると思はるゝ處二三箇所ありと云へば、この夏一人の西洋人が登りかけしが、恐しや／＼とて、中途より下れりといふ。その西洋人は一人なりしかと問へば、夫婦連れなりといふ。女も登りかけしかと問へば、いや／＼噴火口にも下らず。馬の脊にて待ち居りたりといふ。汝は登りかけざりしかと問へば、外輪壁の下に待つて居りたりといふ。その西洋人は登山に慣れざる人なるべし。或は登山に慣れて居りても、待たしてある女に心引かれて、眞に登らむと思ふ決心にはなれざりしなるべし。汝は待つて居れ。我れ登つて見せむとて、山央の最も登り易しと思はるゝ處を登る。壁急にして、砂落ち、石も落つ。折り／＼四つ這ひになり動かざる石より石へとたどり／＼て、終に外輪壁上に達し、手拭を振りまはして、おういと呼べば、下にておういと答ふ。下り口の印しにとて、手拭を殘し。其上に石を置きて風に吹飛ばされぬやうにし、馬の頭へとて二三十

歩進みしが、一面の霧也。風も强し。時計を見れば、午後三時也。釣瓶落しといふ秋の日をも顧みずに、この時刻、この霧、この風を冒して、不知案內の嶮山を攀づるは、無謀も亦甚し。よしや馬の頭に達しても、霧に眺望を遮らるべく、勞したる甲斐もなかるべしとて引返したるが、それにても舟に乘りて、湖に浮びたる時は、日早や暮れたりき。

三　羊蹄登山

明くる日、大沼を去つて、羊蹄山に向へり。馬の頭の登攀を斷念したるに非ず。天候險惡なれば、馬の頭の登攀は危險也。登攀を得るにしても、眺望を得ざる也。ゆる〳〵快晴の日を待たざるべからず。さるにても、馬の頭はほゞ見當が付きたり。氣にかゝるは羊蹄山也。今日は九月二十八日、既に登山の時期を過ぎたり。羊蹄山の高さは六千九百四十二尺、殆んど駒ヶ嶽に倍す。昨年十月の末、登攀せむとせしに、積雪ありて果さゞりき。今年も馬の頭の登攀に時日を費して、十月に入らば、又積雪の爲めに登攀を果すこと能はざるべしとて、羊蹄の登山を中に挾む也。

比羅夫驛に下り、一里ばかり徒歩して、日の暮れむとする頃、羊蹄山麓の山小屋に投ず。臨湖亭と稱し、蝦夷富士登山會本部を置く。羊蹄山は一に蝦夷富士と稱す。其形富士山に似たるを以て也。日本に形似を以て、富士を名乘る山嶽は一百に下らざるが、其中には一方より富士の如く見ゆれど、少し他に轉ずれば、少しも富士の如く見えざるもあり。四方より富士の如く見ゆれども、孤立せずして群峯中の一峯に屬するもあり。羊蹄山は孤立せる點に於て、四方より圓錐形に見ゆる點に於て、山麓を一周するを得る點に於て、噴火口を戴きて、頂上を一周するを得る點に於て、換言すれば、總ての點に於て、全く富士山と相同じ。高さに於て大に富士山より劣り、圓錐の形も富士山の如く秀拔ならざれども、東西に海を見渡し、偃松と御花畑とを有することは、富士山にも見られざる所にして、天下の名山たらずんばあらざる也。毎年七月十五日を以て、山を開き、九月二十日を以て、山を閉づ。同時に此山小屋をも閉づる筈なるが、今年は小屋の側に畑を開きて、高山植物を移植する仕事殘れる爲めに、山上の石室を閉ぢたるも、未だ此山小屋を閉ぢずして、二人の人夫殘り居りければ、偶然にも大に便宜を得たる也。

明くる日、天候惡かりければ、登山を見合はす。晴間を見て、半月湖に下る。二萬五千坪ばかりの小湖、數十丈の底に半月の形を成す。底の一半は樹林にして、その中央に一小湖あり。

天地は四壁に限られて、原生林の中に我も大古の人となりけるが、雨至りて、小屋に戻る。蠅多し。うるさくて堪らず。扇を揮うて蠅を征伐すること數時間に及べり。午後暴風殺到して、萬木みな叫び、山小屋動揺して、今にも轉覆せむかと思はれしが、夕方になりて、風衰へたり。夜、宿帳を調べしに、本年の登山者は千七百人に達す。相知れる人は一人もなし。年齢は大抵二十歳前後也。五十歳以上の人は、僅々數人に過ぎざるが、余より年長のものもあり。我黨の士なりと微笑す。

明くれば、依然として天候惡し。陰雲羊蹄山を鎖して、雨をり／＼到る。嗚呼今日も山に登れざる也。余の起きたる時、二人の山番未だ起きず、出口の處に、ぐう／＼と犬の聲す。障子を明くれば、犬は余ゝ見て、尾を掉る。戸を明けてやれば、犬喜んで出づ。思ふに、便を催したれど、外に出づる能はず、誰かが起きて戸を開くを待ち居りける也。ついでに、ざつと山小屋の構造を説明して見むに、八疊四間南北に連り、東の一面より北の一面へかけて、土間に板を張り、土足にて歩くやうにせり。便所はその西北隅に在り。出入口は東面の土間の南と北とに設く。二人の山番は、最北の一間に陣取り、余は最南の一間に起臥す。犬のぐう／＼言ひたるは、余の室に近き南の出入口也。

午前十時頃になりて、雨止みたり。風強くして寒し。昨日余の扇を免れたる蠅なほ少なからざるが、寒さに閉口したりけむ、みな天井に粘して、疊に下らず。今日は蠅征伐の必要もなし。煙草を相手に一日を暮らしつゝ、余の心は三十六年の昔に飛ぶ。三十六年前の今月今日、即ち九月三十日は、我が長兄の死したる日也。父は士族の商法に失敗して、財産の盡くると共に病死し、長兄は腰辨當に衣食しけるが、明治十八年の官制大改革に馘られ、休職の期限盡くると共に病死せり。父の病は腹膜炎にして、長兄の病は肺病なりき。財産なき身の職を失ひて、死病に取付かれたる長兄の心中を思へば、今もなほ腸のちぎるゝ心地す。肺病は長兄の敵也。肺病に罹りては、萬事窮す。長兄の轍は踏むべからずとの一念、余の精神を支配したるに、貴方も肺病の體質を有す。大に肉食して身體を丈夫にせられよと、代診より忠告せられて、益神經を惱ましたり。當時は西洋崇拜其極に達して、食物も肉に限るやうに、言ひはやされたれど、如何せむ、肉は貧書生の口に入らず。咳出づれば肺病では無きか、胸痛めば肺病では無きかと、いつもびく／＼したる末に、心配は却つて肺病の種と悟り、大に運動して肺病の來襲を防かむと心掛けて、あらゆる器械體操に身體を錬りたり。その結果、蝦夷富士の登山にも、最年長者の中に加はれる也。

山小屋に三宿して、今日は十月一日也、例のぐう〳〵言ふ犬と共に、外に出で、我も尿し、犬も尿す。嬉しや天候回復して一天晴れ渡れり。羊蹄の全山、鮮かに半空に浮ぶ。下部は夏の緑を存し、中部は紅葉黄葉相連り、上部は雪に白し。夏と秋と冬とを一時に見る心地して、世にも珍らしき景色なりと喜びたるが、氣にかゝるは、上部の雪也。羊蹄山に來ぬ前よりも氣にかゝり居りたり。あの雪にては登山すること能はざるかと、心も心ならず。今日は案内して貰へまじきかと、山番に云へば、あの雪にてはとて、應ずる色なし。明日になれば、天候又一變するかも知れず。登りて見て、危險なるやうならば、引返さむ。無理なることは爲さず。ともかくも案内してくれずやと云へど、なほ承知せず。さらば單身にて登らむと云へば、夏なら兎も角、今頃は熊が出沒して、單身にては危險なりとて、一人の男導を爲す。犬も尾を掉つて從へり。

燕麥の株のみ殘れる新開墾地、十數町にて盡きて、一合目となり、路急に險也。蝦夷松天を衝いて、巖石峨々たり。霧吹岩と指さすまゝに、穴の口にマッチを點ずれば、火炎外に向つて靡く。夏は涼しき風穴の中より吹くと云へり。導者は銃を肩にし、東京あたりにて豆腐賣りの吹鳴らす小さき喇叭を手にしけるが、目さとくも、泥土の中に熊の足跡を見出してより、幾んど絶間なく喇叭を吹く。熊をして避けしめむとする也。熊狩を爲すものあるかと問へば、もと有りたれど、今は無し。從つて一旦減じたる熊も、又多くなれりと云へり。

四合目に至りて、眺望開く。倶知安の市街は、マッチ箱を集めたるが如し。蝦夷松減じて、白樺多し。曲折ありたる路も、このあたりより幾んど直上す。峯稜に通ぜるを以て、左右の眺望も開く。五合目を過ぎたる處に、見返り松と稱する蝦夷松一本ありて、直立したるが、枝を山の頂の方にも左右にも伸ばさずして、麓の方にのみ斜に伸ばせり。これや蝦夷松の中の勇者、我に續きて、此處まで登るものは無きかとて、後を顧るにも似たり。喬木はこのあたりに盡きて、白樺も低くなり、深山はんのき、深山七竈など、高山木多し。而かも紅葉して山を飾る。六合目を過ぎて、章魚がんぴと稱する白樺の老木を見る。地上より直に數幹に分れ、更に十數大枝に分れて、恰も章魚の足を張れるが如し。相生松とて、見返り松以上の勇者あれど、惜しや、既に枯れたり。鳥居がんぴとて、白樺自から門の形を成す。このあたりには偃松を見る。その偃松の青きが、白樺の門の右に侍し、深山七竈の赤きが左に侍す。いろ〳〵の喬木に、路自から捗り、七合目に達して、こゝに始めて雪を踏む。されど、深さは僅か一二寸、踏めば土現はる。案じたる程にも無か

りきと安心す。前方に犬の足跡らしきものを見て、犬は後に在るにと訝れば、道者笑つて、狐の足跡なりと云へり。

登るに從つて、路急となり、雪さへあれど、毫も危険には非ず。がんこうらんの簇生せるに、高山の氣分を覺えて、いつしか八合目も過ぎ、九合目に達すれば、石室閉ぢられて、寂しげに立てり。地も平らか也。花なき御花畑を過ぎて、登るとなしに火口壁に達し、右して峯頭に後方羊蹄神社を拜む。天照大神、神武天皇、明治天皇の三柱の神を祀る。神の選擇其宜しきを得たりと云ふべき哉。

火口を左にし、偃松を踏んで南門臺に至りて午食す。頂上には雪なし。日光直射して寒からず。山の麓までも雲なきが、四五里の外には雲ありて、頻りに東に向つて動く。動くまゝに雲薄くなり、絶間も生じて、噴火灣隱見し、駒ケ嶽も隱見す。噴火口は一とすれば、一つなるが、分てば大と小との二つとなる。その小噴口を更に分てば、中と小との二つとなる。南門臺よりは大噴火口のみを見る。轉じて北門臺に至れば、大噴火口の外に、中小の二噴火口を見る。大噴火口最も深く、小噴火口最も淺し。この大中小の噴火口を圍める外壁は一里半もあり。突起せる峯も多きが、高さは、さばかりの差も無し。最も高しと稱せらるゝ望旭臺に至りて休息する程に、雲は忽解けて、脚底に洞爺湖現れ、東にも大海、西にも大海、四方八方の山々我に朝して、北海道の西半部悉く眼中に收まる。この眺望を得て、三日待ちし間の退屈、全く心より消え失せぬ。山頭の感興、人には傳へ難し。唯山靈と默契して歸路に就く。

二合目あたりにて、喇叭の音に驚きたりけむ、一匹の木鼠周章てゝ木に登る。其尾身體よりも長く、如何にも可憐也。熊や、狐や、唯其足跡を見て、其本體を見ず。往復ともに逢ひたる動物とては、唯この木鼠のみ也。

四　第二回の駒ケ嶽登山

山を下りて、先づ欲しきものは、風呂也。次に酒也。往復八時間を費し、羊蹄の登山を果して、山小屋に戻りけるが、風呂の設備なし。三日間は我慢したるも、今日は風呂が戀しき也。山小屋に來りてより、ビールにて我慢したるも、今日は酒が戀しき也。その風呂と酒とを得むとて、倶知安に行きて一泊し、再び駒ケ嶽へとて、大沼に戻りて又一泊す。

六日目にて、再び駒ケ嶽に登り、馬の頭を窮めむとす。惜しや、快晴の上天氣にて、風も無し。ボートにて沼を渡り、馬の脊を踰えて、噴火口に下り、駒ケ嶽神社の前に午食すること、すべて前遊に異ならず。唯道者は別人也。年は同じく十八九歲

なるも、人異なるにつれて、心も異なれり。先日の導者は勇氣なく、今日の導者は勇氣あり。北方の外壁の下に至りて、危險なれば、待て居れと、先日の言を繰返したるに、今日の導者は承知せず。行ける處までは行かむといふ。落ちて死にたる者がありたるぞと云へど、それは承知の上なりといふ。丁年未滿の者、萬一の事ありてはと當惑したるが、これも導者に取りての修業なりと思ひ返し、强ひて望むなら、登りても好し。その代り、一切我言に從ひて進退すべしと戒めて、同行を許せり。姓名を問へば、曰く夏堀先治。年齡を問へば、曰く十八歲。

　先日は外壁の中程の所を登りしが、今日は馬の頭に接する處を登る。足だけにては登れず。手を用ゐて、巖石より巖石へと身を持ちあげ、やつと外輪壁上に達して、ほつと一と息つく。噴火灣脚下に開け、灣の彼方の群山の上に、羊蹄山傑出して、さながら北海の王者の如し。何人が見ても、壯觀を感ずべきが、一昨日其頂を窮めたる余の身に取りては、親友に對するが如き心地して、懷しき上にも、なほなつかしきを覺ゆ。これ山に登らずして、唯下より山を見て樂む者の味ふ能はざる所也。

　いよ／＼進んで、馬の頭に就く。急なる砂壁、上は天に朝し、下は外輪の外側に垂れて、其盡くる所を見ず。若しもよろけたら最期、身は奈落に落ちむ。余四ツ這ひになれば、先治君も四ツ這ひになる。先治君に向つて、餘りに接近するなと戒む。砂動きて落ち。石も動きて落つ。大にして動かざる石を目がけては、それに取りつきて、身を支へ、又次の大にして動かざる石を目がく。雲ありては、上の見當つかず。風强くしては身は石と共に飛ばさるべし。飛ばされずとも、砂舞ひ、石飛びて我を傷づくべし。駒ヶ嶽の一山、馬の脊を越えて、噴火口に下るまでは、世にも安易極まる山路也。馬の頭に至つては、激變して、天下の至嶮也。

　苔を帶びたる巨巖に取り付きて、始めて安心す。巖動かずして、上より落つる石も砂もなきを以て、苔生ひたる也。姬小松も生ひたり。白玉も生ひたり。こゝは峯頭の北端也。巖傳ひに南進するを得ず。砂壁を迂回して又も苔の巖を攀ぢ登れば、思ひがけずも、石の觀音あり。おや／＼馬の頭を窮めたる者は、英國人のみにあらざる也。斯くとは知らずして、憤慨心を起したるは、早計なりきと自失す。なほ進めば、鐵鎖かゝりて、其上にも又石の觀音あり。こゝは人間の登り得る最高點也。なほ二三丈上に高く立てる巨巖が、駒ヶ嶽の最高點なるも、梯子を掛けざれば、登らるべくもあらず。天下に山嶽多けれども、幾どみな其の最高點を窮むるを得べし。駒ヶ嶽に至つては、最高峯は窮められても、最高點は窮められず。世界に其類多からざ

る也。宿志玆に遂げたり。山嶽に對して一杯、蝦夷富士に對して一杯、石の觀音を建てたる者に對して一杯、墜死者の靈に對して一杯、山頭の感興、酒に一層加れり。

駒ケ嶽の峯頭は、巨巖南北に連りて、其上に七つ八つ巖の劍を立つ。東と南とは、巖壁直下し、西と北とは砂壁斜下す。その斜面急にして、處々に斷崖あり。その斷崖は、大沼驛より北行する汽車の中より見ては、肉眼に入らざる也。峯頭よりも見えざる也。余は北より登り、西に下りて、始めて之を知れり。雲あらば、之を知るに由なくして、その斷崖の鬼となりたるかも知れず。一木もなくして、砂も石もずる〳〵落つる急斜面、知らず〳〵に崖頭まで來ては、最早身を支ふる能はず。危い哉。幸にして今日は雲なし。二三十歩の前に、斷崖を知り、洗治君を戒めて之を避くること、數回に及べり。方向を西南に取りて、もう南の巖壁が盡きたらむかとて南に下れば、巖壁未だ盡きず。今二三歩も進まば、砂の急斜面に身を支ふる能はずして斷崖に墜落すべかりし也。危かりし哉。雲ありしならばと、覺えず、身顫ひして引返し、二三町の下、巖壁中斷して、樹木生ひたる處を下る。熊の糞、一つ又一つ、駒ケ嶽も、このあたりには、今もなほ熊住むなりと、氣味惡し。谷底に下りて、身は樹林の中に沒すること數回にして、馬の脊越えの八合目に達することを得たり。先治君と相顧みて、無事を祝し合ふ。登路は思ひしほどには危險ならずして、降路は思ひしよりも危險なりき。駒ケ嶽の馬の頭は、一旦噴火口に下りて、北方より登るべき也。殊に風と雲との無き日を擇ぶべき也。

五　小沼山

駒ケ嶽の馬の頭を窮めたれども、余はなほ未だ大沼を去らず。駒ケ嶽の馬の頭に登れば、南に津輕海峽、北に噴火灣、東に太平洋を見渡して、世にも眺望の美を極むるが、大沼だけを味ふには、遠きに過ぐ。小沼と蓴菜沼との間に、小沼山とて、鐵鉢を伏せたるが如き小山あり。大沼を味はむには、この山に登らざるべからずと氣付きて、先治君に向ひ、明日は小沼に舟を浮べて、小沼山に登らむとす。來て呉れよと云へば、順番あれば、參られぬかも知れずといふ。君の勇氣が氣に入りたり。他の人はいやなりと云へば、さらば都合つけて參らむとて去れり。

明くれば濃霧天地に滿つ。朝食前に出でゝ散歩す。東大島を訪ひ、西大島を訪ひ、轉じて、後樂橋と折橋とを經て薔薇島に渡り、又橋を經て石楠岡に登り、線路に沿へる路を北に行き、漣の崎に立寄り、大沼と小沼とを連絡せる狹戶の橋を渡りて、

今上陛下の眺望させ給ひたる御野立崎に至り、爾まで引返して、小沼に向ひ、『百二十六島晴れて水の秋』と題する句碑を見て、巌谷小波を偲び、樹の中に鹿の遊べるを見て、宿に戻るに、凡そ一時間半もかゝりたり。朝食の後、先治君の來るを待ちかねてボートに乘り、狹戸を經て小沼に出づ。中心に孤立する辨天島、小沼に異彩を加ふ。小沼は大沼に比して島は少なけれども、近く山に圍まれて、幽趣大沼よりも優れり。右手に小沼山を仰ぎて、古小沼といふ小部落に近づけば、家より一犬出でゝ吠ゆ。山に反響して、數犬の聲となる。上陸すれば、犬は吠えず。網を干せる傍に、襤褸も干したり。家は三四戸、沼に衣食するにや、田畑らしきものは無くして、舟の數家よりも多し。坂路を四五町登り、四五町下りて蓴菜沼に出づ。こゝにも三四戸あり。宮崎といふ人の家には、明治十四年に明治天皇休憩せさせ給へりと聞き、其跡を拜せむとて、往いて訪ひたるに、一家擧つて外出して、一人も居らず。熊笹を押分け、雜木の中をくゞりて、小沼山の頂に達す。薄のみ茂りて、樹木なし。後に蓴菜沼を控へ、前に近く小沼、少し遠く大沼を控へ、右手に圓滿なる横津嶽を仰ぎ、左手に奇拔なる駒ヶ嶽を仰ぐ。風景の佳なること、想像どほりなるに、懷しとも懷し。小波の所謂百二十六島とは、大沼のみならず、小沼、蓴菜沼をも合せて言ふ也。その百二十六島を見渡すには、遠くて駒ヶ嶽、近くて小沼山、駒ヶ嶽にも登らざるべからざるが、小沼山にも登らざるべからず。然るに駒ヶ嶽に登るものは多けれども、小沼山に登る者なしと見えて、まだに路も開け居らず。惜むべき也。

下りて宮崎氏を訪へば、主人だけ一人戻り居りたり。乞ひて明治天皇御休憩の跡を拜す。床下に脚柱を用ゐて、母屋に續けたる一構へ、八疊と六疊との二間の疊新しくして、人の入るを許さず。廊下一段低くなりて、三方をめぐれり。汽車未だ通せざりし頃は、旅客はみな大沼を經ずして、蓴菜沼を經たりき。蓴菜沼の周圍は僅か一里ぐらゐのものなるべし。明治天皇のここに休憩あらせられたる頃の我日本を憶ふれば、この蓴菜沼なりしが、明治三十年の頃には小沼となり、明治四十年の頃には大沼となれり。世界古今の奇蹟たらずんばあらず。仰いで聖德を懷ひ、俯して鳳輦の跡を留めたる舊山川に對して、感淚自から下る。

大沼公園の名、今や天下に知れ渡れり。島多く、橋多く、その橋も一樣ならずして變化を盡し、橋にて島又島を連絡せり。林中の清き路をぶら〳〵逍遙しても氣持よく、島と島との間を舟にて廻りても心行く。背景に駒ヶ嶽を控へて、大沼は偉大なる庭園也。水は濁り、島は低く、常盤木もなきが、小沼驛附近、

普通世人の遊覽するあたりだけにては、狹義の大沼公園也。小沼を合せ、蓴菜沼を合せ、小沼山を合せ、駒ケ嶽を合せたる廣義の大沼公園は、多少の缺點を差引きても、優に天下の一大勝地也。若し山を云はゞ、駒ケ嶽は天下の名山也。北海道の西半にて、天下の名山を求むれば、先づ羊蹄山と駒ケ嶽となるべし。

余は嗚呼がましくも、前に笊碁の必勝法を說きたるが、碁のみにはあらず。駒ケ嶽と羊蹄山との登山にも、この必勝法を用ゐたるつもりなるが、如何にや。(終)

雪は消えて春は來る

相馬御風

○

「六七尺も積つてゐた雪が、いつの間にかすつかり消えてしまつた。解けた雪は解けるあとから殆ど全く人間に氣付かれずに、或は蒸發し、或は大地に吸ひこまれ、或は流れ去つて、どうして無くなつたか解らぬやうに無くなつてしまつた。」――私は嘗てこんなやうな事を何かのついでに書いたやうに記憶する。まつたく深く積つた雪は、不思議なほど穩やかに靜かに消えてゆくものである。「いつの間に消えてしまつたのであらう」――こんな驚きを年々に新らしく感じないではゐられぬほどに、それは人間の目に觸れぬ靜けさ穩やかさを以て消えてゆくのである。

雪の多く降らない地方の人達の口から、私達はよくこんな質問を受ける。

「こんなに澤山の雪が一時に消え出したら大變なことゝなりませんか。毎年こんなに澤山雪が積つて、それでよく洪水にならないものですね。」

いかに、これは尤もな疑問である。經驗のない人の眼で見たらば、さうした不安の件ふのも無理はない。けれども、雪國に住み慣れた人達はそんな不安を夢にも感じたことはない。彼等はそれほどまでに安んじて自然に信頼してゐる。

これは雪の降り積るのに對しても同じである。冬になつて始めて雪が七八寸も積ると、毎年同じやうに私達は慌てゝそれを掻き別けて道をつけたりするが、一尺積り二尺積りだん／＼深くなつてゆくにつれて、私達の心も日一日と雪に對して平氣になつて行く。どうにも仕樣がないと云ふ氣になり「いくらでも降りたいだけ降り積りたいだけ積るがいゝさ」と云ふ氣になる。本當の冬籠りらしい落付いた氣持のして來るのも、さうなつてからである。そしてもうその頃になると誰一人「寒くて困る」とか、「こんなに雪が積つてどうなるのだらう」など云ふ者がなくなる。むしろ人々は雪のおかげで屋内の生活におちつきの出來たことを喜んで、「いよ／＼これからが本當の休養期だ！」と云つたやうな氣持になる。良寛和尚の歌の

あし引の國上(くがみ)の山の冬ごもり、日に／＼雪の降るなべに、往き來の道のあとも絶え、ふるさと人の音もなし、うき世をこゝに門さして、ひだのたくみがうつ繩の、ただ一すじの岩清水、そをいのちにてあら玉の、ことしのけふもくらしつるかも

さよふけて岩間のたきつ音せぬは
たかねのみゆきふりつもるらし

かうした寂しい安らかさも、往來の道の跡も絶える程にどつしりと雪が積つた上でなければ得られないのである。「こんなに深く雪が積つてしまつては、もうどうにも仕樣がない」――さう云つたところまで行つて始めて人々の氣持が、本當に冬籠りらしい安らかさを得る。家の内部が急にほのぼのとした溫かさを呈して來る。天候の險惡や寒氣の烈しさなどが問題にされなくなる。毎年のことではあるが、私はさうした氣持の推移に限りない興味を覺えてゐるのである。そしてそのことについて何かと考へさせられもするのである。

今も私はそのことについていろ／＼のことを考へてゐるうちに、ふと數年前此の地方が海嘯といつてもいゝほどの激浪に襲はれた當時のことを想ひ出した。そしてその頃東京の或友人へ宛てゝ書いた手紙に、左の如き意味のことを書いたことをおもひ出した。

「……先頃此の地方一帶が、恐ろしい海嘯に襲はれた當時のことは、君も新聞や何かでほゞ知られたことゝ思ふ。僕も生れて初めてあんな猛烈な風浪に出遭つたので、一時はひどく慌

かされた。交通機關や通信機關は一時全く杜絶したので、他の地方の様子は知れなかつたが、僕のところだけでも隨分すさまじい光景だつた。浪は町中へまでもぶち込んだ。川と云ふ川は全部出口が砂で埋つたので、山寄りの方からは洪水が攻めかけて來た。避難の途は全くふさがれてしまつた。電燈は二晩と云ふものは全くつかなくなり、ランプも火災の危險があるので點火することが出來ず、眞暗な家の中で辛うじてつけられた蠟燭の明りの周圍へ家族一同が頭を集め、身をちゞめて、二晩と云ふもの全く眠らずに夜を明かした。絶え間ない暴風雪に、家は今にも覆されるかとばかりに、物悽い響を立てゝ搖れつゞけた。子供や女や老人は外へ出ようにも出られなかつたが、若い男女はそれでも急設の防波工事の爲めや、浪と洪水との模樣を見るために、戸外へ出て働いたり、見廻つたりした。事態は刻々に危險に瀕して行つた。しかし、策の施しやうはなかつた。それでも始めのうちは皆うろたえ廻つたり、叫んだりして、たゞ〳〵恐怖の擒となつてゐたのであるが、いつとなしに人々の心には一種の沈んだ靜かな諦めのやうなおちつきが出て來た。泣きわめいて居た子供等さへも、晝はすさまじい響と動搖との中に遊び戯れ、夜は物悽い暗黑と怖ろしい動搖との底に眠るやうになつた。かうして荒れ狂つた世界のうちに、一種の嚴肅な靜けさが、いつとなしに感じられるやうになつた。此の靜けさは戸外へ出て浪と嵐とに對して働いてゐる者にも、いつとなしに感じられるやうになつた。人々はあわてなくなつた。あせらなくなつた。怖れなくなつた。愕かなくなつた。」

その動亂の底に感じられた一種の嚴肅な靜けさ――あの折私の得た體驗が、私の心に稀有な深い影響を與へた事を、私はいなむことは出來ない。避難の途の全く絶えてしまつたあの怖ろしい自然の威嚇の下にありながらどうして私達はあのやうな靜かな安らかな氣持に住することが出來たのであらう、常時にあつてさへ時には一寸した事を氣にして眠ることの出來ない夜のあるやうな私達があれほどの危險に瀕してゐながらどうしてあのやうな穩やかな睡眠を得られたのであらう。何がそのやうな力を私達の心に與へたのであらう。

私は更にあの場合こんなことをも友達に書き送つた。

「僕は嘗て此の地方の人々には一個に現世の勞苦に對する根强い忍從性と、運命に對する不思議なほどゆつたりした一種の悟りに近い辛棒强さとが著しい特性を示してゐると云ふ事を云つた事があるが、それはとりわけ此の邊の漁師の間にきはやかに見られるやうだ。彼等の間からも無論生れた土地を離

れて行く若者などが年々多少はあるけれども、概して云へば彼等は此の荒海を相手として生活を持續して行くことに一種の愛著を感じてゐるやうにさへ見える。先頃のあの海嘯の後をうけて今年、冬ぐらゐ海荒れの日の續いた年は、此の數十年一度もなかつたと云はれたのであるが、さうした永い不漁期に遭遇しても、彼等は一向に海に對して愛想をつかさなかつた。「時にはこんなこともあるものだ」と云ふやうなおちついた態度で、うろたえずに凪ぎを待つだけの心の根強さを彼等の多くは持つてゐる〃しかし、それは必ずしも、あがいても、もがいても、仕方がないと云ふだけの消極的な引きずられ方ではないやうである。僕は彼等のさうした心持に、少からず僕などの學ぶべきものがあるやうにも思つたのだ。」

まつたく、自然に對するさうした根強い心の力は、どこからどうして出て來るのであらう。何がそのやうな力を彼等の心に養つてくれるのであらう。私は此の問題に逢着する毎に、いつも運命と人間との關係、自然と人間との關係のいみじさを今更の如くに痛感せずには居られぬのである。

人間生活の現象は宿命的なものであり決定的なものであるとか、又はそれは自由意志的なものであるとか云ふやうに、運命と人間との關係や、自然と人間との關係を一方へ片附けた觀方で考へることは、私には出來ない。或時は私は自分の生活はすべて宿命的であるやうにも思ふ。しかも又或時にはあらゆる生活現象は自分の意志一つでどうにでもなるやうにも思ふ。運命が、自然が、私達に向つて働きかける力は、私達の力ではどうにもならない。しかも、其のどうにもならない自然に對して、私達はそれをどうにもならないとして一切を投げ出す時、不思議に私達の心は何ものにも亂されない安らかさを得て來る。それは自分が運命に屈伏されたのでもなければ、又自分の方から運命を征服したのでもない。一種不可思議な微妙な心境である。

○

私達は健康な時に、しかも何かと仕事を前に控へてゐる時などに、往々「こんな場合に病氣にでもなつたらどうするだらう」と云つたやうな不安を感じることがある。ところが實際病氣になつて見ると、不思議に心がおちつく。しなければならぬ仕事がいくらあつても、妙にそれらが氣にかゝらなくなる。しかたなしに運命に屈從してゐると云ふやうな壓へつけられた心の狀態でなくして、どちらかと云へば積極的に運命を乘り切ると云つたやうな安らかな心境が開けて來るやうに思はれる。

それとはいくらか趣はちがふが、何かの具合で目が冴えて眠

れない夜に、眠らう眠らうと焦れば焦るほど目の冴えて來るのに反して「なに、一晩くらゐ眠れなくたつて何でもないさ」と云ふやうな投げ出した氣持でゐると却て眠る事が出來る——さうした經驗なども、私には頗る意味深く考へられる。

○

「或人がひどい怪我をして或醫師の手術を受けた。始めのうちは氣がいくらか遠くなつてゐた爲めにさまで痛みを感じなかつたが、時間を經るにつれて痛みがます／＼激しくなつて行つた。彼はその苦痛を醫師に訴へて、どうかしてくれと哀願した。醫師だとてもう施すだけの術を施したのだから、何ともして見ようがなかつた。患者は苦痛を忘れる爲めに睡り藥でも與へて貰へないかと頼んだ、しかし、それはむしろ危險なことだと云ふので斥けられた。患者はこんなに苦痛を堪へてまでも生きなければならぬかとまで訴へた。彼はもうとてもその苦しみには堪くられさうにはなかつた。その時醫師はだしぬけにかう云つた。

「我慢が出來なかつたら泣きなさい。もうかうなつては泣いてゐるより外にしやうがない。泣きなさい、泣きなさい。遠慮せずに泣きなさい。」

その瞬間、患者は不思議に非常な強い力を得たやうに見えた。急に心が安らかになつたやうに見えた。やがて眠りが彼を誘つたのであつた。

此の話を聞いて私は「なるほど！」と思つた。いかにもその醫師はうまいことを云つたものである。だが、その醫師だとて前から考へて置いて、そんな事を云つたのではあるまい。醫師にとりてもその場合さうでも云ふより外に仕樣がなかつたのであらう。それは彼としても困りぬいた果に出た言葉であつたらう。即ちそれは思わくの一切を絶して投げ出した心の底から出た聲なのであらう。慰めても慰めても慰め切れない、說き聞かせても說き聞かせても說得し切れない——その困り拔いた氣持から、何もかも投げ出すつもりで云つてのけたのが、その言葉であつたらう。そして彼はその場合に於ても、さう云つたらば患者はどうなるかなどゝ云ふやうた思わくからさへも超越してゐたにちがひない。かくの如くして醫師その人も自ら其の言葉によつて救はれたのであらう。「我慢が出來なかつたら泣いてゐなさい」と云ふことは、一寸聞くと不人情のやうであるが、しかしその場合に於てはこれ以上溫な同情のこもつた言葉は他になかつたのであらう。それは如何に慰めても慰め切れないせつなさの極まつた言葉である。投げ出したやうで、しかも一切を含んだ言葉である。そして醫師もその言葉によつて靜けさを得

た。患者もその言葉によつて安らかさを得た。その瞬間に於ける醫師の心持も、患者の心持も、共にいさゝかの思わくを持つてゐなかつた。それは幼な兒の心のごとく、自然そのものゝ心の如く、ほがらかであつたにちがひない。」

以上は以前私の書いた覺え書きの中の一節であるが、此の話も矢張前に掲げた私自身の經驗した二三の事實と同じやうな考察を私に與へるのである。

○

「私慢が出來なかつたら泣いてゐるがいゝ」かう云ふ醫師の言葉によつて、突如として不思議な心の安らかさを得たと云ふ此の患者の心持の轉換は、蓋しこれを自力による覺悟と見ることが出來ないと同時に、また偏に他力による救ひとも見ることは出來ない。その言葉は醫師その人にとりては如何に慰めても慰め切れないせつなさの極まつた刹那の聲であり、患者その人にとりてはそれは如何に求めても求めることの出來ない苦しさの極まつた刹那に投げられた天來の福音であつた。しかも、それは醫師にとりての心の救ひであつたと同時に、患者にとりての心の救ひであつた。即ち發した人と、受取つた人と、双方とも此の思ひがけない言葉によつて、思ひがけない救ひを得たのであつた。此の場合双方ともに自己の意志によつては動いてゐなかつた。しかも、亦双方ともに無關心ではなかつた。此の場合の二人の關係、此の場合の二人の心境——それは實に不可思議微妙な境地であつた。

「出來るだけのことはもうやりつくしてしまつた、その上どんなに苦しくてもそれはどうもならない、堪へられなかつたら泣いてゞもいるがいゝ。」こんな風に云ひ切つてしまつた醫師の心には、その場合何の思わくもなかつたに相違ない。それは思わくなどある者にはとても云へる言葉ではない。又それは一寸考へると甚だしく冷淡なやうであるが、しかし冷淡な心からは決して「泣いてゐるがいゝ」などゝ云ふ言葉は出て來る筈がない。それは實に同情の極つた心の底からの叫びであつた。それはせつなさの極我知らず發せられた、發した後で我ながら一種の驚きをさへ感じたらしく思はれるやうな、不思議な言葉である。

「我慢が出來なかつたら泣いてゐるがいゝ」——それは苦しんでゐる患者その人にとつては、あまりにあたりまへの言葉である。泣いて苦痛が去られるものなら、彼はもうとうに泣いてゐた筈だ。さうでなくとも、自ら苦痛に堪へられなくなれば、おのずから泣くにきまつてゐるのだ。現に彼はその場合泣かないまでも、唸りつづけてゐたのだ。それにも拘らず、彼はその際

りに明白な、あまりに當然な醫師の言葉によつて、不思議にも廓然とした心の安らかさを得たのであつた。その瞬間に於ける患者その人の心は何と云ふすなほさを持つてゐたことであらう。「そんな事はわかり切つてる、俺はそんなことを求めてるのではない、それはあまりに不人情な言ひ草ではないか」——なぜ彼はその場合醫師に對してさう云はなかつたであらう。「あんまり人を馬鹿にしてるぢやないか」——なぜ彼はそんな風に反抗しなかつたのであらう。

こんな風に考へて、私はその場合に於ける眞實に徹した二人の心と心との融會の如何に貴いものであつたかについてしみじみ思ひを潜めずには居られぬのである。おもふに、その場合に於ける醫師の心にも、また患者の心にも、少しも思わくなどはなかつたにちがひない。眞實に何とかしてやりたいと云ふ心、眞實に救はれたいと云ふ心、此の二つの心はつひにどうにもならないところまで行つてしまつた。しかも、そのどうにもならない極點で不思議にも二つの心はピタリと出會つた。そしてそこから期せずしてほがらかな、安らかな世界が展開した。一つの心の救はれが、同時に他の心の救はれであつた。一つの心から發せられた投げ出したやうで、しかも一切を含んだ言葉が、期せずして二つの心を同時に救つたのであつた。

それは決して消極的なあきらめの心持ではなかつた。無論それは自暴や自棄ではなかつた。それは實に自然そのまゝの淨化であり、有るがまゝの不思議な救はれであつた。何の思わくもなく眞實に求め眞實に行きつまつたものゝみに與へられる不可思議な救はれであつた。

○

俳諧寺一茶の『おらが春』の最後の一章にこんな事が書いてある。

「他力信心々々と、一向に他力に力を入れて頼み候輩は、遂に他力縄に縛られて自力地獄の焔の中へほだんと陷り候。其の次に、かかるまたなき土凡夫を、うつくしき黄金の膚になし下されと、阿彌陀佛に押し誂へに誂へばなしにして置て、はや五體は佛染みなりたるやうに、わる済ましなるも、自力の張本人たるべく候。問ひて曰く、如何やうに心得たらんには御流儀に叶ひ侍りなん。答へて曰く、唯だ他力なんのかのといふ、あくたもくたを、さらりと、ちくらが沖へ流して、さて後生の一大事は其身を如來の御前に投げ出して、地獄なりとも極樂なりとも、あなた樣の御はからひ次第、遊ばさり下されませと御頼み申すばかりなり。斯くの如く決定しての上には、南無阿彌陀佛といふ口の下より欲の網をはるの野に、手

長叚の行ひして人の目をかすめ、世渡る雁のかりそめにも、わが田へ水を引く盗み心を、ゆめ／＼持つべからず。然る時は、あながち作り聲して念佛申すに及ばず。願はずとも佛は守りたまふべし。是れ即ち當流に安心とは申すなり。穴かしこ。

ともかくもあなたまかせの年の暮」

一茶はまたこんな事をも書いてゐる。

「御佛は曉の星の光に四十九年の非をさとり給ふとかや。荒凡夫のおのれごとき、五十九年が間、闇きよりくらきに迷ひて、はるかに照らす月影さへ頼むほどのちからなく、たまたま非をあらためんとすれば、暗々然として、盲の書をよみ、跛の踊らんとするに等しく、ますます迷ひにまよひを重ねぬ。げに／＼諺にいふ通り、愚につける藥もあらざれば、なほ行末も愚にして、愚のかはらぬ世をへることをねがふのみ。」

一茶の此の日記の中での告白について荻原井泉水氏は嘗てこんな風に云つた。

「一茶といへば其の作に滑稽洒脱な味ひの多い事から、其の性格も普通には物に執着のない樂天的な風流人のやうに想像せられてゐるが、事實は之に反して翁は非常に執着心の強い、物事に綿密な性情であつた。此事は七番日記や其他の遺稿を研究する者には明らかで、一茶の詳傳を書いた故束松露香氏も其事を指摘してゐる。一茶は其執着心の爲めに、繼母及び義弟とは數年に亘る大きな爭をしたり、郷黨ともそりが合はぬ所があつた「五十九年が間暗きより暗きに迷ひて」とか「たま／＼非を改めんとすれば」とか云ふ言葉の內容は推察する事は出來ぬけれども、一茶は自分の性癖ともいふべき我執から、その我執を張つた後には暗い氣分に襲はれてゐたのではあるまいか、と思はれる。年六十にして自分が過去の生き方を總覽する時、翁の胸には深い感慨があつたに相違ない。然かも「なほ行末も愚にして愚のかはらぬ世を經る事をねがふのみ」と云つてゐる。之はあきらめのやうな言葉だけれども、あきらめるといふ心持よりも、寧ろ、やつぱり行るが儘の自分として生きやうといふ心持であるらしく思はれる。」

これは深い理解をもつた觀方である。いかにも一茶は執着の強い性情の人であつたらしい。そしてその強い執着心ゆゑに絕えず苦しみつゞけた人であつたらしい。その執着心ゆゑに彼は繼母とも相容れず、義弟とも爭つた。その執着心ゆゑに彼は故郷の人々とも和することが出來ず、當時の俳壇とも和すること

が出來なかつた。その執着心ゆゑに彼は或時は別れた妻を呪ひ、或時は愛兒の死を悲むあまりその乳親を人面獸心と罵り惡鬼の如く憎んだりした。

けれども一茶のその執着心には憎むべき意地惡さがなかつた。それには思わくとか策略とか云ふものが伴はなかつた。彼の執着心はいつまでも幼なさを失はなかつた。隨て彼の憎みも、訴へも、悲しみも、凡ては幼兒のそれの如くであつた。しかも亦彼はその執着心ゆゑに進んで自ら戰ふと云ふほどに強い意志の人でもなかつた。寧ろ彼は憎めば憎むほど、悲しめば悲しむほど、ます〱深く自己の内に退いて苦む人であつた。更に又理智の人でなかつた彼は、退きながらも世を白眼視したり茶化したり冷嘲したりして、自ら快しとするやうな事の出來ない人でもあつた。さうかと云つて彼は一切の現實を忘れて自らの空想の世界を唯一の樂土として遊んでゐることの出來るやうな所謂風流人でもなかつた。

一茶と云ふ人は、要するに、弱く且愚な情の人であつた。しかも、極めて幼い、そして極めて純眞な情の人であつた。

「こぞの夏竹植る日のころ、うき節しげき世に生れたる娘おろかにして、ものにさとかれとて、名をさとゝよぶ。ことし誕生日祝ふころほひより、てうち〱、あはゝ、天窓てん〱、かぶり〱ふりながら、おなじき子供の風車といふものを持てるを、しきりにほしがりてむづかりければ、とみにとらせける。やがて、むしや〱しやぶつて捨て、露ほどの執念なく、直に外のものにこゝろ移りて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それも直に倦て、障子の薄紙をめり〱とむしるに、よくした〱と譽れば誠と思ひ、きやら〱笑ひてひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく名月のきら〱しく清く見ゆれば、迹なき俳優を見るやうに、なか〱心の皺を伸しぬ。又人の來りてわん〱はどこにと云へば、犬に指し、かあ〱はどこにといへば鴉に指さすさま、口もとより爪先まで愛敬こぼれてあいらしく、いはゞ春のはつ草に胡蝶のたはむるるよりやさしくなん覺え侍る。……(中略)……かく日すがらを、しかの角のつかのまも手足をうごかさずといふことなくて、遊び疲れるものから、朝は日のたけるまでねぶる。その中ばかり母は正月と思ひ、飯焚そこらかたづけて、團扇ひら〱汗をさまして、閨に泣聲のするを目のさめる相圖とさだめ、手かしこく抱き起して、うらの畠に尿やりて、乳房あてがへば、すは〱吸ひながら胸板のあたりを打たゝきて、にこ〱笑顏をつくるに、母は長く胎内の苦も、日々襁褓の穢らしきも、ほと〱わすれて、衣のうらの玉を得

たるやうになでさすりて、ひとしほ喜ぶ有様なりけらし。

　蚤の跡かぞへながらに添乳かな

何と云ふ純眞な愛情の表白であらう。しかも、一面に於てかくまでに溫かな愛の歡びに浸ることの出來た彼は、却て、その純情ゆゑに他方に於てそれとは反對に驚くべき憎しみや悲しみの擒ともなるのであつた。

「女子と小人は養ひがたし、遠ざくれば妬め、近づくれば不遜迚、さすがの聖人、溜息してあぐみ玉ふと見へたり。況して末世に於てをや。老妻菊女といふもの片葉の芦の片意地強く、己が身のたしなみになるべきことを、人の教ふれば、うはの空吹風のやかましとのみ、露々守らさるものから、小兒二人共に非業の命失ひぬ。此度は三度目に當れば、又前の通りならんと、いとゞ不便さに磐石の立るに等しく、雨風さへ事ともせずして、母に押しつぶさるゝ事なく、したゝか長壽せよと赤子を石太郎となん呼ばりける。母に示していふ、此さゞれ石百日餘りも經て、百貫目の堅石となるまで、必ずよ、背に負ふ事なかれと、日に千度誡しめけるを、如何したりけん生れて九十六日といふ今日、朝とく背おひて、負ひ殺しぬ。あはれ今迄嬉しげに笑ひたるも、手の裏返さぬうち、苦々しき死顔を見るとは、思へば石と祝したるは、仇し野の墓印にぞあるける。かく災ひにわざはひ累ぬるは、如何なる過去の業因にや。」

何と云ふ愚かな悲しみ、何と云ふ愚かな憎しみであらう。

「此女、乳房を見するを嫌ひて、小兒の頭を懷に深く入れて、乳を吞ますする眞似して、やがて口に水をあてがふ業なれば、不思議にも男の乳のやうに平たく、乳房らしき氣はひ、ひたすらあらず、さてこそ知れ、始めより乳の代りに水をのまするをひしとつゝみ、只腹下るとのみいひて、今は只白く赤らみたる血と肉をのみ下すなんめり。如何に人面獸心の富右衛門なればとて、此様にむごくなさけなく振舞ひしと、皆々淚おろ〳〵とさすりぬ。きやつ、金を貪るばかりにてなせるにや、何ぞ怨める筋ありて致せりや、風上に置くも恐ろしくなん。」

これまでになると、彼の愚かさはもう其の極點を示してゐるとさへ思はれる。彼の歡びも悲しみも愛も憎もこのやうにあまりに幼なく、あまりに純眞で、時にはそれはあまりに愚かであつた。そして彼自らもそれを知つてゐた。しかも、彼にはそれをどうすることも出來なかつた。「五十九年が間、闇きよりくらきに迷ひて」と云ひ、「たま〳〵非を改めんとすれば、暗々然として盲の書を讀み蹙の踊らんとするに等しく迷ひにまよひを重

ね」と云ふ、それは彼自ら知り、彼自ら擲うつ言葉に外ならなかつた。しかし、自らそのやうに知りつゝも、彼にはそれがどうにもならなかつた。

かくして、歡び、悲しみ、愛し、憎み、そして絶えず迷ひ、苦しみつゞけた彼は、結局その愚かな自分をそのまゝ大自然の前へ投げ出すより外に仕様がなかつた。

「自力他力なんのかのいふ、あくたもくたを、さらりと、ちくらが沖へ流して、さて後生の一大事は其の身を如來の御前に投げ出して、地獄なりとも極樂なりとも、あなた樣の御はからひ次第、遊ばされ下さりませと御頼み申すばかりなり。」

しかし、これは決して謂ふところの自棄ではなかつた。捨て鉢ではなかつた。又決して謂ふところの諦めでもなかつた。それは實に自らの眞實を極め、自らの弱さに徹した刹那に於て彼に與へられた、不可思議な絶對歸依の心境であつた。それは一切を捧げて大地にひれ伏したやうな心境であつた。「一茶は幼少の時から家庭や世間の險しい冷たい空氣に虐げられて、死ぬまで、人間らしく苦しみ續けた人である、其苦みから救はれる爲に、自然の愛に縋つたのである」とは井泉水氏の評語であるが、そのやうに「苦みから救はれる」といふやうな念慮すらも無かつたのが一茶の心境の貴いところではないかと私は思ふ。「救はれる」とか「救はれない」とか云ふ事を問題としてゐる人々を一茶は寧ろ斥けてゐた。彼にとりては何よりも彼自らの煩惱、彼自らの愚かさが問題であつた。しかも彼はつひにその煩惱、その愚かさを如何ともすることの出來ない自分を見拔いたのであつた。そして其の煩惱の痛感に徹したのであつた。「地獄なりとも極樂なりともあなた樣の御はからひ次第遊ばされ下さりませ」と云ふ彼の言葉は、その時始めておのづから彼の心の底より叫ばれたのであつた。

なるほど結果から見れば一茶はそのやうにして救はれたのである。しかし、一茶の方からすれば、「救はれる」と云ふ事が問題ではなかつた。むしろ救はれない自分、どうにもならない煩惱――それの痛感が彼にとりての凡てゞあつた。しかもその痛感に徹した時、期せずして彼のたましひの上に不思議な安らかさが得られたのであつた。そしてつひに彼は

「然る時は、あながち作り聲して念佛申すに及ばず。願はずとも佛は守りたまふべし。是れ即ち當流の安心とは申すなり」

と云ふ積極的な信念をさへ持ち得るやうになつたのである。

けれども一茶のかうした心持が、謂ふところの「どうともなれ」の心持でなかつた事は、また云ふまでもないことである。それは決して謂ふところの捨て鉢の氣持などではなかつた。捨

て鉢の氣持はまだ對他的である。晩年の一茶はもうさうした對他的な境界を、遙かに脫してゐた。他人のことや、世間のことよりも、寧ろ彼自らの愚かさの痛感が彼の心に一ぱいになつてゐた。彼は此の自らの愚かさの痛感に徹して、つひに一切を擧げて大地にひれ伏したのであつた。そしてそこに始めて不思議な心の安らかさを得たのであつた。晩年の一茶は永い年月の間呪ひつゞけてゐた故鄕に歸臥し、惡鬼の如く憎んで來た繼母や義弟とすらもいつとなしに親しむことの出來る好々爺となつてゐたのであつた。

　かくの如くして一茶のたましひは最後の靜けさと安らかさとを得た。ながい年月に亘つて誌された一茶の日記は、かの有名な『七番日記』だけを見ても知らるゝ如く、それは殆んど類例を見ないほどの綿密なものである。しかもこのやうな驚くべき綿密な日記を永年の間書きつゞけたほどの彼でありながら、最後の彼は一言の遺言も、一句の辭世すらも殘さない彼であつた。それについて彼の歿後二年にしてなつた一茶句集の序文に左の如く書かれてゐる。

「文政丁亥の冬、身まかくれて後、教を請けし人々、遠き境までも、最寄〳〵に云ひ傳へ、早くも驅け集りて、殘れる人に物問ふに、云ひ置ける一言もなく、又殘し置ける一物もなし」

　一茶の最後は實にこの通りさつぱりしたものであつた。彼はこのやうにしてつひに文字通り裸のまゝで大自然の前に一身を投げ出したのであつた。

○

　私はここで再び前に述べた或一人の患者の話をおもひ出す。「堪へられなかつたら、泣いてゐるがいゝ、憚るところなく泣いてゐるがいゝ」と云ふ醫師の言葉によつて、不思議にも肉體の苦痛に搔き亂されない心の安らかさを得たと云ふ其の場合の彼の心持が、いかにもよく一茶の救はれ方と似てゐるからである。

○

　萬葉集卷十六の卷頭にしるされた櫻兒と云ふ少女の傳說は、私の好きな傳說の一つである。

「昔者娘子ありけり。字をば櫻兒と曰ふ。于時二壯士ありて、共に其娘を誂ふ。而して命を捐てゝ格競ひ、死を貪て相敵たりき。於是娘子歎きけらく。古より以來一女の身、二門に往くといふ事を聞かず。方今壯士の意和平び難し。妾死りて相害ふ事を永に息めたんに如かじと云ひて、乃ち林中に入り樹に懸り經死にき。其兩壯士哀慟血泣漣襟に敢へず。各心緒を

陳べて詠める歌二首

春來らば挿頭にせむと我が思ひし櫻の花は散りにけるかも

妹が名に懸かせる櫻花咲かば常にや戀ひむ彌毎年に

更にこんな風にもしるされてゐる。

或曰く、昔三男ありて同に一女を娉ひき。娘子字をば縵兒といふ。嘆息けらく、一女の身滅易きこと露の如し。三雄の志平び難きこと石の如しと云ひて、遂に乃ち池上に彷徨り水底に沈沒みき。於時其壯士等哀頽之至に勝へず、各所思を陳べて詠める歌二首

無耳の池し恨めし吾妹子が來つつ潜がば水は涸れなむ

足引の山縵の兒今日往くと吾に告りせば早く來ましを

足引の山縵の兒今日のごといづれの隈を見つゝ來にけむ

以上の二つの傳說の外に、かの下總の眞間の手古奈の傳說がある。いづれも大同少異である。これは或はもとは一つの話であつたのかも知れない。だがそのやうな事を私は今問題にしようとは思はない。

たゞ今の私にとりて此等の傳說の興味ある所以は、一人の少女が同時に多くの男から求婚されて、しかもその爲めに男達の間に命がけの爭ひすら起りつゝあるのを知り、迷ひ苦しみ惱んだ果てに彼女みづからを無くすることによつて一切を解決しようとした――その美しくいたましい生き方に心ひかれるのにある。そしてそれと同時に私は、此の傳說が旣に我國上代の人々の最も好ましい話材の一つとして盛に語りひろめられてゐたらしい事實にも、深く心を動かされるのである。

此の少女の美しい死の原因を、人によつてはひたすら少女の弱さにのみ歸するかも知れない。そしてそれを意志の薄弱から來た絕望的行爲に外ならぬと云ふやうに斷じ去るかも知れない。しかし、私はどうもそれだけでは濟ますことは出來ない。私は寧ろ少女の最後に選んだ其の生き方に、貴い積極的な意義を認めたいのである。

一人の少女を中心として、多くの男の煩惱が、慾望が、怖ろしい渦を捲き起した。怖ろしい人間の執着の爭鬪が始まつた。少女にとりては始めのうちは、どの男も彼女の愛の對象として考へられたであらうけれども、時を經るにつれていづれの男も彼女にとりては執着の權化としてより外見られなくなつて來た。そして弱く且清い彼女の心は、ひたすらその執着と執着との爭ひの怖ろしさに慄えた。「あれか、これか」と云ふやうな迷ひは、彼女にとりてはもう問題でなくなつた。一人に對する愛などゝ云ふ事は、もう露ほども彼女の心に殘らなかつた。彼女はたゞあまりに鮮やかに見せつけらた人間そのものゝ執着の爭

ひ煩惱の鬪ひの怖ろしさの爲めに苦しんだ。彼女の自殺は、その暗黑な苦しみの果てに、彼女に與へられた第三の、そして唯一の生き方に外ならなかつた。それは自らを殺すことではなくして、本當に自らを生かす道であつた。「古より以來一女の身二門に往くといふ事を聞かず、方今壯士の意和平び難し、妾死りて相害ふ事を永に息めなむに如かじ」から我が上代人はその刹那の彼女の心を說明してゐる。「一女の身滅易きこと露の如し、三雄の志平び難きこと石の如し云々」更にかうも說明してゐる。その場合に於ける彼女にとりての最大事が人々の間の爭ひをどうするかと云ふ事であつたと見る點に於て、わが上代人は、一致してゐたらしい。今の私にとりても上代人のその考へ方が、此上なく懷かしく貴く思はれるのである。

自分が此世に在る間は男たちの心は永久に和らがないであらう、そしてその事は同時に自分にとりても苦しみである、如かじ自らを退け自らを此世から無くすることによりて相害ふことを永遠に息めさせんには——そこまで深く一人の少女の死の意義を辿り入つた我が上代人の心を、私はどうしても懷かしまずには居られない。彼等の心眼に映じた一人の可憐な少女の死は、決して單なる絕望的自棄ではなかつた。それは永遠に人と人との爭ひを息めさせたいと云ふ貴い念願の現はれであつた。それは美しい死であると同時に、貴い生であつた。それは弱さの極致に徹した强さの極致を示す生き方であつた。

「あれか、これか」の選擇に向つて强く突進して、他を顧みないと云つたやうな生き方も、彼女にゆるされて居たことは云ふまでもない。そしてそれが寧ろ現世的には强い生き方であると云ふ人があるかも知れない。しかし、さうした自他對立の境地には徒らに戰ひがあるばかりである。かの少女の生き方が、永遠に人々の心を動かす所以は、さうした自他對立の境界を絕した生き方であつたからである。憎み、恨み、悲しみ、怒り、焦り、苦しみ、——さうした心の底に、一種靜寂な天地がある。その天地に入ると、そこに此世の縺れの本當の糸口が見えて來る。他に責任をなすりつけたり、他を憎んだり、責めたり、怨んだりする事の代りに、自分が全き責任を負ふやうになる。凡ての責任を一身に背負つて、凡ての人の爲めに祈り、凡ての人の爲めに念願せずには居られなくなる。それこそ眞實に苦しみ、眞實に悲しむ者のみの入ることの出來る天地である。眞實に自己の弱さに徹した者のみの入り得る天地である。たかぶりや、自負や、自恃などを捨て去つた、本當の弱さ、本當の謙虛に徹して、一切を擧げて大地にひれ伏した者のみの入り得る天地である。凡ての縺れ、凡ての罪、凡ての爭ひ、凡ての悩みの責

任が、此の自分にあつたことを痛感する者のみの入り得る天地である。

「一女の身滅易きこと露の如し、三雄の志平び難きこと石の如し」――それは何と云ふ謙虚な心であつたらう。かくてつひに少女はその露と觀じた一身に凡ての人の罪を背負つて死んで行つたのであつた。しかも、妾死りて相害ふ事を永に息めむ」かう云ふ貴い念願と共に 彼女は永遠の生を得たのであつた。

私は萬葉集にしるされた此の美しい傳說に限りない懷しさを感ずると同時に、その傳說を通していみじくも語られてゐる我が上代人の心を、たまらなく慕はしく思ふのである。

○

萬葉集にしるされた永遠の處女の物語は、はしなくも私に『黑谷源空上人傳』の中の左の一節を聯想させた。

「保延七年辛酉の春の比。時國（漆間）夜討の爲に殺さる。其敵は伯耆權守源長明が息男明石の源內武者所定明なり。造意の由來は、定明稻岡の庄を知行して、多の年月を送るに、時國下掌の身として、定明を輕ずるに依て、遂に對面せざりき。其遺恨なりとぞ。其夜九歲の小童、小箭を以て敵を射るに、定明が目の間に立つ。此疵によりて顯れんことを思ひ、即逐電してけり。見聞の上下、讃悅せずといふことなし。時の人みな小童を呼て小箭兒とぞ云ける。時國大事の疵を蒙りて今を最後の時、九歲の子に向て遺言すらく。我死去の後、世の風俗に隨て、敵を恨ることなかれ。これ偏に先世の報なり。若此讐を報んと欲はゞ、世世生生互に害心を懷て、在在所所に輪回絕ることなからん。生ずる者は皆死を悲む。秋愛更に限なし。我此疵を痛。人何ぞ痛ざらん。我此命を惜。人豈惜ざらんや。我が情をもて、人の思を知べし。然則一向に専自他平等の濟度を祈り、怨瞋悉消て、親疎同菩提に至らんことを願べしと。言をはりて、心を直し西に向て、高聲に念佛して、眠が如く命終し給ひけり。」

此の小童の名は勢至丸と云つた。此の勢至丸が即ち少年時代の法然上人であつた。

私は此の勢至丸出家の動機について考へる度に、彼の父時國が彼に遺した言葉によつて常に驚きと感激とを與へられるのであるが、今や更にそれが萬葉集にしるされた少女櫻兒の傳說中の、あの櫻兒の心を說明した言葉と、一脈の相通ずるところのあることを思ふに及んで、私はこれまでに覺えなかつた全く新たな感激を與へられたのである。

時國も亦櫻兒のやうに苦しみの底に徹して、始めて自己のうちに凡ての「業」の相を觀たのであつた。そしてそれによつて

彼は始めて對他的な憎み、怨み、苦しみから救はれたのであつた。是に於て彼は全ての責任を一身に背負うて、あらゆる罪をわれと我身に擔うて、安らかに往生をとげる事が出來たのであつた。そこに彼は眞に自分一個を救ふことが同時に萬人を救ふことである眞實一路を見出したのであつた。

「敵を恨むな。凡ては「業」のいたすところだ。お前が若し私の爲めに復讐をするならば、更に彼方の小供なり何なりがお前を敵として狙ふやうにならう。さうして次々に互に憎み合ひ、恨み合ふ者が出て來て、生々世々永遠に人と人との間の憎しみが盡きないことにならう。それはあまりに怖ろしい。凡ては惡業のいたすところだ。誰を憎み、誰を怨んでよからう。さう思つて先づ私の菩提を弔ひ、お前の救ひを求めてくれ。お前さへさうした煩惱と執着から脱しさへすれば、凡ての人が救はれるのだ。どうぞ其の自他平等の濟度を祈つてくれ。自分一人を救ふことによつて萬人の救はれる道へ進んでくれ。」——時國の最後の願ひはそれに外ならなかつた。而して法然の宗教は正にここに其の第一步が踏み出されたのであつた。

櫻兒は死んだ。時國は死んだ。勢至丸は更にそこから新たな生の第一步を踏み出した。若し勢至丸にして只自分の父の讎を報ひ恨を晴らすと云ふ事にのみ終始したならば、それはひとり他を害ねることではなくして、亦自らをも害ねることであつた。しかも、此の一人の恨みと憎しみと爭ひとは、同時に萬人の恨みと憎しみと爭ひであつた。そしてそれは永遠の苦惱への道であつた。しかし、彼は此の道へ往かずに、かの道へ行つた。それは勝つか、負けるかのいづれでもない第三の道であつた。自分が救はれると共に、他の救はれる道であつた。かくの如くして彼は父をも自分の內に生かすことが出來た。自分の生命を永遠の生命たらしめたと共に、父をも永遠に生かすことが出來た。

更に私達には勢至丸の父時國を殺した定明の子等が後年法然を訪れて其の弟子となつたと云ふ貴い消息さへ記し遺されてゐるのである。

○

雪は消えて行く。靜かに音もなく消えて行く。人間に氣づかれずに、いつとなしに消えて行く。雪に蔽はれた大地にも、目に見えない自然の活動が藏されてゐる。あらゆるものが春を待つてゐる。焦つたり、求めたりしなくても、來べき時に春は來る。草や木の靜かな姿は、その自然の心に從つてゐるのである。彼等はまた負ふべき運命の一切を默つて負うてゐる。彼等はむさぼらない。安らかに一切を委かせてゐる、投げ出してゐる。しかも、生きられるだけ生き、伸びられるだけ伸びやうとして

ゐる。常にありつたけの生命力を以て生きてゐる。しかも、寸毫の執着を持つてゐない、

雪の中ながらも何となく春らしい感じを與へる此の頃の晴れた夕空に、今にも空中へ溶け入りさうに高い梢をならべてゐるまだ冬枯のまゝの並木などを眺める時、私は涙ぐましいほどの快さを感ずる。ながい冬の間の苦しみの名殘などを聊かも見せないで、靜かに安らかに彼等は春を待つてゐる。

決定的であると見ようが、見まいが、運命は運命である。自由意志的であると見ようが、見まいが、生活は生活である。望んでも、望まなくても、積つた雪はいつとなしに消えて行く。待つ者にも待たない者にも、ひとしく春が廻つて來る。

○

きびしい寒さと烈しい風と、深く積る雪とに充ちた長い冬を持つ北國の住民の冬期間の生活の如何なるものであるかについては、前にも繰り返し述べたが、ここで又私はそれについての考を喚び起した。よく人はさうした生活を荒い自然と戰つてゐる生活だとか、荒い自然を征服しつゝ營んでゐる生活だとか云ふ。けれどもそれは外部から第三者が觀た上での解釋に過ぎない。實際それを營んでゐる者の氣持からすれば、それは決して戰ひではない、随て征服でもない。寧ろさうした逆らふ氣持だけでは、到底堪へ得るものではない。さうかと云つてそれは無論屈從でもない、壓服されてゐるのでもない。屈從とか壓服とか云ふことも、戰ふ、爭ふ、逆らふと云ふ事から來るのだ。爭ひや戰ひのないところに、屈從や壓服のあるべき理由がない。またそれは決してあきらめでもない。あきらめは消極的だ。しかし、事實はそれと反對である。

私はその北國人の荒い冬に生きる氣持を、どちらかと云へば自然との合體だと云つた方が當つてゐると思つてゐる。毎年々々彼等が冬を迎へ冬を送る氣持には、思わくと云ふものが聊かもない「どうすることも出來ない」と云ふほどの思わくすらもない。待ちもせず、拒みもしない。彼等はたゞそれに應じた彼等自身の生活上の要務にいそしむばかりだ。冬そのものに對しては彼等の心は極めて安らかだ。自然は又かうした氣持で對する者に、不思議に惠みを與へてくれる。私は今「對する」と云ふ言葉を使つたが、それは對他的と云ふやうな氣持で云つたのではない。そこが微妙なところである。

○

かうして私達をながらく埋もらせてゐた雪が、矢張私達の心に別段の注意を喚び起さずに、こつそりといつの間にか消えて行く。私達の方でも亦「そら雪が降る」「そら雪が消える」と云ふ

風に無暗と焦立たしく雪そのものを問題にすることなしに、いつとなしに春らしい氣持に移り變つて行く。そして久しぶりで土を踏むやうになると、その上で躍つて見たいほどの歡びを覺える。しかし、それだからと云つて私達は雪を憎み雪を呪つてゐるのではない。冬の初めに久しぶりで柔らかな雪を踏んだ時にも、私達はやはり云ふに云はれぬ一種の懐しさと歡びとを感じたのであつた。

○

『うまさうな雪がふうわりふうわりと』一茶はかう歌つた。今の子供はこのやうに歌ふ。

あそんだ
あそんだ
友だちとあそんだ
雪食つてあそんだ

更にこんな風にもうたふ。

降つた雪きえれ
ふる雪消えるな
ふつた雪はまづい
降る雪うまい
光る雪はなほうまい。

北國の子供たちは雪を食ふことをすらも喜んでゐる。

○

雪は消えてゆく。人間に氣付かれずに雪は消えてゆく。そして春が來る。(三月二日)

支那漫遊前記

田中貢太郎

一

私はこの數年間考へてゐた支那漫遊をこの四月いよいよ實行することにして旅裝を整へた。由來私は旅行が好きで一度家を出れば、淹留歸るを忘ると云ふ有様であるが、家を出るのが非

常に億劫で、行きたいと思ふ所があつてもすぐ行くことが能きない。それを出かけて行くには、必ず同行者があつて、中止することの能きないやうな機會を與へてくれなければならなかつた。それは漠とではあるが、短い一生を風に誘はれて飛ぶちぎれ雲のやうな、あはただしい旅に彷徨するのが、至人得道の障礙となるやうに思はれだしたのも原因の一つであるが、主なる原因は、殆んと宿命的になつてゐる酒につき纏はれてゐるがためである。

私は嘗て殖民地へ歸らうとして港で魔に憑かれ、船に乘ることが能きずに、港の街から街をさまよひ歩いてゐる男のことを書いたことがあるが、これは酒が酒に續いて、夜とも晝とも、暝寰とも仙界とも、春とも夏とも差別することの能きない、縹渺現麗の世界に住まはさせられる自分の經驗を原として創作した物である。私は復た嘗て、暮春のある日、神田のある町を歩いてゐて、急に何所を歩いてゐるのか、自分は何所へ何のために行つてゐるのか、何所から歩いて來たのか、ただ過去の經驗を持つた一存在が、現實の街の上に、土を踏まへ、街の左右に建ち並んだ建築物を見て周章してゐると云ふことを意識して、自分はどうなることであらうかと恐れたことがあつた。それは靜な午後のことで、夕陽の光が街の左側になつた土藏造の藥屋らしい二階家の横壁に黄ろく燐火の燃えるやうに燃えてゐた。その奇怪な頭の狀態は十歩ばかり歩くことによつて除かれたが、これも酒が酒に續いた日の出來事であつた。

酒には人間の情慾も、邪念も、計劃も、生活も、皆消磨されてしまつて、夢のやうな世界に彷徨するものであるが、一朝酒が醒めると、雨の空が急に晴れて、風の暖な美日が來たやうな氣がして、酒に沈湎してゐたことを後悔するのが酒徒の情であるが、現實の醜惡な、そして荒涼とした姿に面すると、復た耐られなくなつて再びその世界へと歸つて行く。これがために酒に肉體を傷づけられる者のあるのは、痛ましいことであるが、しかし醜惡な現實に對して魂を傷づけられる者は、猶更痛ましいことではないか。私の前には斯うした酒が酒に續くのであつた。

ある時、それは夏の宵であつた。下町のさかり場に酒を追ふてゐた私は、汗になつて氣持が惡いので、路次の奥になつた錢湯を見付けて入り、裸になつて流槽の湯溝の上を跨がうとした時に、不意に眩暈を感じて卒倒した。そして意識の歸つた時には、電話交換手の聲を思はすやうな早口で、自分の住居を訊いてゐる者のあるのに氣が注いた。私は何區何町何番地と口から出るままに云つた後で、それが先にゐた住居だと云ふことに氣

が注いたので、現住居を云はふ云はふとあせつたがどうしても思ひだせなかつた。私はその一方で、樺色の藻が女の髪のやうに長長と生えた水底へ入つて、眼の前を泳いでゐる小さな魚を捉まへやうとしてゐるやうな氣になつてゐた。其所には頭の上數尺の所に明礬色をした水の水面があつた。私はその水の中で藻を搔き別け搔き別けして魚に手を觸れやうとしたが、藻が蛇のやうに體に絡み付いて魚が捉まへられなかつた。

私のさうした奇怪な夢はすぐ覺めた。私は番頭に抱き起されて、洗面臺の前に行つて頭に水をかけてゐる現實の自分を意識することが能きたが、その日のことはどうしても思ひだすことが能きなかつた。ただ僅に自分の家からは湯に來てゐない、何所かで酒を飮んで歩いてゐる內に、途中の湯に飛び込んでゐるらしいと云ふことが判つて來たが、場所がどうしても判らない番臺に坐つてゐる者に訊くと、其所はすぐ電車に近い路次の奧の錢湯だと云ふことが判つたので、やつと心がおちついて戶外へ出たが、幾等歩いても浴衣著の人群の多いアセチリンガスの灯の漂ふた街が續いてゐて、電車通は來なかつた。私はしかたなしに車に乘つた。

二

私は長い間酒に曳きずられて、それがために日常生活まで傷づけられてゐるが、酒の斷れた時には、物珍しゝ身邊を眺め、心を眺め、窓を押して明るい戶外を眺め、晴れた空を眺め、興に乘じて街から街を散歩する。さうした時には、旅行のことを一番に思ひだして、名勝誌を讀み、地圖を開き、詩集を探り、芭蕉翁の文集をだしてみる。支那漫遊の考へもさうした日の所產であるが、すぐ酒の誘惑恍惚に魅せられて延び延びになつてゐた。

それが昨年の春、暫く見なかつた故鄕の陰曆の正月を見て、穴いちをして遊んだ少年の日を忍ばふと思つて、土佐へ歸省しての歸りに大阪へ寄り、故上村左川先生の知人であつた先輩を訪ふたために刺激せられた。私はその時、奈良へ遊びに行つたが、猿澤の池の傍で鹿の群に菓子をやる時にも、春日神社へ行く時にも、草を燒いた跡の若草山に登つた時にも、二月堂に行つた時にも、二錢出して鐘を突いた時にも、大佛を見てゐる時にも、支那漫遊のことばかり考へてゐたが、その結果、その先輩の厚意で、實行することが能きるやうになつたので、六月になつて出發することに定めてゐた。

然るに平和博覽會が開場になつて酒の日が復た多くなつた。土佐からは親戚の酒徒も來た。そして、その親戚の酒徒が歸つて行くと、恩義のある先輩が酒を病んだ。私は街路樹の鈴懸の若葉に霾を吹きつける街頭を車で驅け歩いたり他にも煩はしい事件があつたので、復た酒に隱れて、窓の先の白い物惱ましい陽の中に散る落花を朦朧とした眼で見てゐると、他の先輩の一人が二十年目に土佐へ歸ることになつた。私は厭な名狀することの能きない氣持から逃れるために、その先輩に隨いて復た土佐へと歸つたのであつた。

それがために支那漫遊は期を失して本年になつたがその正月の中頃、夜になつてひどい雪の降つた日、海員となつてゐる久しく逢はなかつた同鄕の知人が尋ねて來た。その知人は昨年から重慶宜昌間を航行しはじめた大阪商船所屬汽船の機關長として、楊子江を上下してゐる者であつた。知人は四月になつて長江に增水して、航海が能きるやうになれば、復た支那へ行くと云つた。私はその知人によつて期せずして長江を知るとゝもに、洞庭湖の增水期も知ることが能きた。私は四月には實行して、知人の乘つてゐる船で長江を溯らうと思つた。

さう思ひながら私は渾沌に浸つて、毎日白日夢を見てゐたが、その內に私を驚かして、いよ〳〵支那行を決心さしたことが起つた。それは俳人濱田波靜翁の急死であつた。數へてみると、昨年私の支那漫遊が傳はつて、それを心から喜んでくれた知人の中には、波靜翁をはじめもう三人の者が物故してゐる。私は自分にも人生の秋が來ない內に、思ひたつてゐる支那へ行つて來たいと思ひだしたのであつた。

私の支那漫遊を喜んでくれた三人の中で、最初に沒くなつたのは横田彥太郎君であつた。横田君はこの五六年來の知人と云ふに過ぎないが、卓落不羈その物に介意しない男性的な性格は、生涯忘るることの能きないものである。土佐高岡郡戶波村の人で、村の有志として村會議員を勤める傍、耕地整理の組合長をしてゐた。私が横田君に招かれて戶波へ行つたのは前後二回であつたが、二回とも夏で驟雨の候であつた。戶波は海岸に近い丘陵に圍まれた農村で、驟雨はその村の高峰となつてゐる虛空藏山を搔き消し稻田の稻の葉に注ぎ、赤土の郡道に潦をこしらへ、屋根瓦を洗ひ、莢行桃の紅を流した。雨の晴れ間には、鬻買ひ行き、自轉車走り、農夫が大聲に話しながら通り、犬が吠え、鷄が啼き、子供は家の前に出て唱歌を歌つた。私は横田君と家後の旅館の二階から終日この驟雨の趣を見てゐた。

はじめに行つた時には、その村から一里餘の東になつた水鄕の町で、横田君の知つてゐる女に逢つて三人で夜遲くまで酒も

りをした。私はその女の大きな姿見の裏へ俳句を書いてやつたことを覺えてゐる。その夜も烈しい驟雨で、電燈の光で見おろす家の前は、一めんの桑畑で、雨に厚ぼつたく濡れた青黒い葉には、電燈の光が映つて凄いうつくしさがあつた。其所は仁淀川の流域になつた所であつたが、その後で物部川の流域になつた町へ行つて、其所でも強風をともなつた驟雨に逢つたことがあつた。雨の晴れ間には馬蟬が騒がしく啼いた。雨の中には燕が俳畫の燕のやうに點點として飛ぶのを横田君と見た。

次に戸波へ行つたのは昨年の八月であつたが、その時横田君は酒を飲みながら僕は殺されることになつてゐると云つて笑つた。それは河川改修の工事に雇はれてゐる治太郎と云ふ工夫が、横田君はじめ組合の幹部七人を殺すと云つて、その五月から短刀二口を懐中してゐると云ふのであつた。横田君は復た、はじめは僕は入つてゐなかつたが、今度入つたらしいとも云つた。その治太郎と云ふのは、二十年ばかり前に賭博上の事から相手を日本刀で惨殺して、十五年の懲役に所せられてゐたが、十年の服役で假出獄になつてゐる者であつた。村の人達はそれをゴンと云ふ綽名で呼んでゐた。私は氣になるので、そんな危險な者は、こつちから先手を打つてどうかしなくてはならないだらうと云つたが、横田君は笑つてゐた。じつさいゴンの治太郎は危險な男であつた。精神にもすこし異狀があつた。夜半婦人の寢所を襲ふとか、飲酒して亂暴をするとか、村の子女をして鬼のやうに怖れさしてゐた。その兇漢は、俺は死にたひが何人か良い道連れはないか、などと云つてゐたが、改修工事に雇はれるやうになつてから、幹部の者をあれも殺すこれも殺すと云ふやうになつてゐた。私は東京へ歸つた後も、殺されることになつてゐると云つて笑つた横田君の詞が耳に殘つてゐて、時時それを考へだして氣味惡く思つてゐたところで、十一月の二三日頃になつて、高知市の新聞社にゐる友人から驚くべき通知に接した。それは横田君が殺人狂の工夫に惨殺されたと云ふ通知であつた。私は手紙を見るなり、しまつた、しまつた、しまつた、と續けさまに狂人のやうに叫んだ。横田君は十月三十一日の天長節の祝日の日、自分の家で新聞を讀んでゐる所を治太郎に襲はれたのであつた。横田君は三十五歳であつた。戯言讖をなして横田君とは斯うして幽明境を異にすることになつた。新聞社の友人の手紙には、あんな狂人の道連にせられては、仲の好かつた君でも弔つてやらなくては浮ばれまいと書いてあつた。私は横田君の不幸を悼むとともに、その未死の魂を心から弔ふ者である。

横田君が沒くなつてから間もなく、それは十月八日の暴風雨

の夜、十年間の知己であつた立田義元翁が忽焉として沒くなつた。立田翁はもう六十に達いてゐて私とは二十歳ほども年齢の差があつたが、二人の氣持にすこしも隔りがなかつた。雨の朝、月の夕と云ふ誓い詞があるが、じつさい立田翁と私とは、雨の朝も月の夕も一緒になつて盃を手にしてゐた。立田翁は車から落ちて脚を痛めて跛を曳いてゐた。その立田翁と私とが、神田あたりの街頭で、風に吹かれ雨に降られて歩いてゐた姿は、二人を知つてゐてくれる者の眼に慣れてゐるところであらう。

立田翁は文會堂と云ふ出版書肆の主人で、其所では支那の詩集の評釋をたくさん出版してゐた。和漢名詩鈔と云ふやうな童子用の講義本も出版してゐたが、その中の詩は何時も酒に醉つた立田翁の口から出た。立田翁の酒は深酷なはうで、飲みはじめると十日も二十日も晝夜なしに倒れるまで飲んで、體を痛めてからはじめて止めたが、止めると復た一ケ月も二ケ月も、ついすると一二年も飲まいなことがあつた。何時か三年ほど禁酒してゐたことがあつて、川崎の大師へ行つたが、日本橋へ歸つて來て午飯を喫つてゐると、隣にゐる客の取つてゐる銚子から湯氣の出てゐるのが眼に注いた。立田翁はその薄つすらと立ち昇る湯氣から酒の沸き具台を聯想して、どうしても我慢が能きなくなり、一本だけなら好いだらうと思つて注文したのが原で、禁酒が破れてしまつたと云ふやうな逸話をたくさん持つてゐた。私は立田翁の死を痛む中にも、時とすると斯うした逸話を思ひだして、淋しい氣持を引き立てるのである。立田翁は土佐宿毛の出身で、彼の林有造先生などとは同族であつた。

濱田波靜翁は日本派の俳人として、その句は續春夏秋冬などに採錄せられてゐる。恬澹寡慾、名聞を求めないので、世間的には知られなかつたが、俳句に對する造詣は非常に深かつた。この二三年は、土佐出身者でやつてゐる夜來吟社と云ふ句會の指導者になつてゐてくれたが、昨年の二月、夜來吟社の發起人であつた酒枝烏川君が沒くなつてゐるので、その追悼句會をやることになり、二月二十日、酒枝君のもと住んでゐた芝明舟町の家でそれをやつた際、私の旅行の話が出ると、その送別句會をやらうと云ひだしたのは濱田翁であつた。濱田翁は五十四歳であつた。土佐香美郡前濱村の出身で、私が少年の時には高知市で書肆をやつてゐたが、店に坐つて句作したり讀書したりして、客が來ても相手にならなかつたので、店も旨く行かなかつたと云ふやうなことを何人かに聞いたことがある。

濱田翁は一昨年勤めてゐた會社の用でジャワに行つてゐて昨年歸つて來た。今年になつて私が濱田翁に逢つたのは前後三回であつた。第一回は正月十日の夜、夜來吟社の新年句會を下谷

の會員の家で開いた時であつた。その會の歸りには電車の停留場の傍のバーで、濱田翁はじめ三四人の者で殆んど電車の無くなるまで俳句の話をした。次は濱田翁が珍らしく私の留守に尋ねて來てくれたので、その翌日、即ち二月十五日、私はその挨拶にと濱田翁を訪ふて、三時間ばかりも話しこんで來た。次は二十日の追悼句會の時であつたが、その濱田翁が復た追悼せられる身となつた。

濱田翁の沒くなつたのは、二月二十七日、酒枝君の一周忌の追悼句會を距る七日の後であつた。濱田翁はその前日の夕方、隣家の某氏の許へ碁を打ちに行つてゐたが、八時頃になつて氣持が惡いと云つて石を捨てたので、隣家では濱田翁を横にならして醫師を迎へて來た。醫師は診察して輕い腦溢血だと云つた。濱田翁の家からは夫人と子息とが來た。濱田翁は夫人に向つて、右の半身が痺れてゐるが、たいしたことはないなどと云つてゐたが、その内に容態が怪しくなつて、十時頃にはもう人事不省に陷つたのであつた。

私の旅行を喜んでくれた知人は、斯うして三人とも不歸の客となつた。私の故郷には善光寺に關する迷信があつて、生前に善光寺に參詣しない者は、死んでから參詣に行くと云ふやうなことを云つたものらしい。私が少年の時、私の父は、それに就いて、こんなことを云つた。それは村の某老人が善光寺へ行つてゐると、向ふからその頃死んだ知合の男がやつて來た、老人はその男が生きてゐる時に、善光寺へ參詣に來てゐないことを知つてゐるので、すぐ死んでから來たものだと思つた。そして、家内の者へ何か傳言があるか判らないから、聲をかけやうとしてゐると、その男はふいと横町へと折れて行つた。しまつたことをしたと思つて、復た歩いてゐると、向ふの方から復たその男がやつて來る。今度こそはと思つてゐると、復た横町へ折れたと云ふ話であつた。歲月人を待たず、私も三人の跡を追はない内に、支那漫遊を果してこなくてはならぬ。

三

最初私が支那と云ふ物を頭に入れたのは、馬琴蘭山譯の水滸傳であらう。それから文章軌範では赤壁を知り、岳陽樓から見る洞庭湖の澎湃たる水を知り、史記左傳では帝王の都城を知り、人の巧智を知り、黃河揚子江の流れの大なることを知り、唐詩選三體詩では、山川沼湖、野坡池塘の景趣を知り、詩人の風懷を知つたが、その少年の時の印象は、日清日露の戦役を經るに及んで、滿洲の印象のために消帳されてしまつた。其所には文明もなく、歷史もなく、野外を彩る花卉もなく、ある物に

一望際涯のない高粱畑で、その間に點在した都市には、煙のやうな砂塵が舞ひ、感情のない土人が行き、馬が嘶き、犬が屍に集まり、豚の群が下水のどろどろした陰地に寢そべり、蠅が食物の上に眞黑に止まつて、それがやがて水滸傳の殺伐な人物につながつてゐたが、この十年來、支那の小說隨筆を新らしい眼で見るやうになつて、別けて傳奇的な物語を好んで讀むやうになつてから、奇艶瑰麗な支那が繪のやうになつて私の前に露はれて來て、忘れてゐた輕の大臣の物語なども甦つて來た。輕の大臣は遣唐使として唐へ行つて、人のために毒物を飲まされて啞にせられ、頭に燈械を打たれて、燈台鬼となつてゐたが、日本から尋ねて來た我が子の弼の宰相を見て、指を嚙み切り詩を題して、父であることを知らすると云ふ傳說である。安倍仲麿の海上の遭難を悼んだ、李白の日本晁卿帝都を辭すの詩も思ひだすやうになつた。そして支那の傳奇的作物に筆をつけるやうになつてから、人に聞いても書物で讀んでも薄紙を隔ててゐるやうではつきり判らない。支那人の生活樣式も知りたくなつて、南支那に遊ぶことになつたが、先づ上海に行くことにした。

その上海には私の同鄕の知人の久竹次君が住んでゐる。私は先づ其所に旅裝を解いてから、上海を中心に蘇州杭州南京を遊ぶつもりである。由來支那の地名は時代によつて改まつてゐる上に、一冊の地理書も讀んでゐない私の頭の中の支那は、南方が北方になり、東方が西方になり、楊子江が黃河と入り違ひ、晋唐時代の地名がそのまま依然として生きてゐると思はれるが、私はそれを一種の詞賦として、遊行の場所に眼を注けることにしよう。

私の眼には先づ杭州の西湖が見えて來る。西湖の湖畔には吳越王錢氏の建てたと云ふ雷峯塔と呼ぶ塔がある。一人の秀才は麯院の蓮を見ての歸りに、舟を雷峯塔の下へ繋いで酒を飮んでゐたが、醉つて眠られないので舟をあがり、月の下を聚景園の方へと行つた。聚景園は宋の覆滅の趾を止めたところで、殿閣は皆頹毀してゐたが、その中に一つ昔のままの小軒が殘つてゐた。秀才はそれを見付けて其所へ行つてゐると、若い美貌の女が侍女を伴れてやつて來た。その女は自分からこの世の者でないと云つたが、秀才は耳にかけずに女と手を携へて內に入り、朝まで二人で話してゐた。その翌日、秀才は園內で宋の宮人何某と刻んだ墓を見て、女の素性を知つたが、それでもかまはずに女と逢つてゐると、女は秀才の家に來て同棲するやうになつた。秀才はその女を伴れて故鄕へ歸り、三年の後、再び杭州へ來て、二人で聚景園へ行つたが、その翌朝女は緣が盡きたと云つて消えてしまつた。

雙頭の牡丹燈を丫鬟の侍女に持たして、十七八の紅裙翠袖のすらりとした女が行く。その女は鎭明嶺の下に住む若い鰥の所へ通ふて行くところであつた。女の名は麗卿と云ふ名であつた。若い鰥の男は湖西へ女の素性を探りに行き、歸りに湖心寺に休んだが、寺の西廊の行き詰めの暗室で柩を見付けた。その柩の上には故奉化符州判女麗卿と題した紙を貼つて、柩の前には雙頭の牡丹燈を懸け、その下に盟器婢子があつて、その背に金蓮と曰ふ文字を書いてあつた。若い鰥の隣に住んでゐた老人は、後に若い鰥がゐなくなつたので、彼方此方と捜して、湖心寺へ來てみると、西廊の行き詰めの暗室の中にある柩の間から見覺のある衣の裾がすこし見えてゐた。寺僧に請ふてその柩を開けてみると、若い鰥は女の屍と抱き合つたままで死んでゐた。

　葛嶺のほとりに僑居してゐる若い男は、夕方門の外へ出て立つた。それはその時刻になつてその前を通つて行く少女を見るためであつた。緑の衣を著て雙鬟にした少女がその時もすぐやつて來た。若い男はその少女を誘ふて内へ入れ、とうとう一泊さしたが、小女はそれから毎晩のやうにやつて來て、朝になつて歸つて行つた。少女は宋の宰相賈似道の碁童の鬼であつた。後にその女が病死したので柩に入れて葬らうとしたが、柩が輕いので開けてみると、衣衾釵珥があるばかりであつた。

小孤山には家の周圍に三百の梅樹を植えて一人の處士が住んでゐた。梅が咲いて風の暖な日には、處士はそのあたりを歩いて詩を考へてゐた。その家には二羽の鶴を飼つてあつた。處士は時刻をはかつて鶴の籠を開けてやつた。

　蘇州の閶闔門の外、官河に臨んだ所に一樓があつて、其所に姉妹の若い女が住んで吟詠に耽つてゐた。夏の月の明い晩、その樓の下に舟を繋いでゐる若い男は、舟の舳で湯あみをしてゐた。樓の上からこれを見た姉妹の女は、茘支を取つて投げおろした。女の心を知つた若い男は、月の傾くまで舟の上に立つてゐた。鞦韆の索で縛つた竹橋が樓の上からおりて來た。若い男はそれに乘つて樓の上へとあがつて行つた。若い男は後に姉妹の女を夫人にした。

　南京の金陵に若い男があつた。松江に田があつて秋の租税を取り立てに行き、渭塘まで歸つて來たところで、朱欄曲檻の酒肆を見付けた。若い男は舟を著けて陸へあがり、酒肆へ入つて酒を飲んでゐると、幕の下から此方を覗いてゐる綺麗な女の顏や眼が見えた。若い男の眼はそれに引きつけられてゐたが、何時までもゐるわけに行かないので快快として舟へ乘つた。その夜若い男は、夢に酒肆の奥庭にあつた女の室へと行つた。女は喜んで若い男の手を執つて室の中へ入り、歡謔を極めて朝にな

つた。若い男は鷄の聲を聞いて眼を覺ましてみると、自分は舟の篷牕底に困臥してゐた。若い男はそれから家へ歸つたが、夜になると必ず女の許へと行つた。ある夜行つた時、女が燈の下で紅羅鞋に綉をしてゐるので、燈花を剔るとそれが鞋の上に落ち油の暈が附いた。復たある夜、女が紫金碧甸の指環をくれたので、若い男は扇につけた水晶雙魚の扇墜を贈つたが、朝になつてみると指環が手にあつて、扇の扇墜が無くなつてゐた。その內に翌年の秋になつた。若い男は復た松江へ行つたが、そのついでに渭塘の酒肆へ寄つてみた。女は若い男と別れて以來、病氣になつて癡のやうになつて眠つたり獨語を云たりしてゐたが、前日から若い男の來るのを知つてゐた。鞋の油痕も、指環と扇墜のことも、それ〲雙方に證があつた。それがために二人は結婚した。

夜秦淮に泊して酒家近しの杜牧の詩からは、畫舫のことが聯想せられる。臙脂の鎔けて流れる桃葉渡。

四

私は長江を溯つて重慶へ行つての歸りに、洞庭湖の水を見たいと思つてゐる。

洞庭湖にはいろいろの傳說がある。柳毅と云ふ書生は、洞庭の龍王の女を助けたために、富貴とその女とを得たが、後には洞庭の神となつた。

汪士秀と云ふ蹴鞠に妙を得てゐる男は、惡魔のために水にかくされてゐる父を救うて、魚妖を斬つた。

柳生と云ふ書生は、舟の上に醉ひ臥してゐて、舟に來て遊んでゐる水神の侍女の糭を嘗んだが、それが緣となつてとうとうその侍女と結婚し、毎年二回、水神の乘つてゐる樓船へ挨拶に行つて、そのつど金帛珍物を貰つて來て富豪になつた。

長江を上下する際には、赤壁も訪ひ、廬山にも登りたいと思つてゐるが、私はまだ廣東を見る必要があるので、長江筋にはそれほどゐられないかも判らない。

私は上海から長江にかけて三ケ月、廣東に一ケ月の豫定をしてゐるが、果して豫定通りに行けるだらうか

廣東には若い私の友人がゐる。友人はおちついた色の淺黑い顏をして私の行くのを待つてゐてくれるに違ひない。

廣東の料理のことを思ふと、すぐ蛇のことが浮んで來る。

天がこの行に幸してくれるなら、七月の末に復た東京の人となり、茗荷谷の陋屋に旅の汗と垢とを洗ひ落として冷奴で一杯やり、興に乘ずれば藤坂を登つて、ビールでも飲んで大平楽でもつくべきか。

春の歡樂と哀愁

早春の悦び・晩春の惱み

徳田秋聲

二月の末から三月の初めへかけて、今まで地上の有らゆる生物に脅威であつたところの寒氣が少しづゝ弛びかけて、午後の日ざしの暖かい時なぞに、緣端へでも出てみると、空の色がめつきり潤ひと柔かみをもつて來て、狹い庭の花壇のなかに凍てついたやうに萎れてゐた青いものが、一冬中枯れもしないで、漸く眠つてゐた生命を吹返さうとしてゐるのに氣がついたり、庭の隅にある木蓮の枝を見あげると、何時の間にか柔かい雛鷄のむく毛のやうなものが、無數に膨らみをもつて、もう蕾の用意ができてゐるのに驚かされたりする事が間々ある。その頃になると、障子を締めきつて部屋のなかに坐つてゐても、愉しい春が微かに脈動を傳へてくるやうで、堪らない旅情を唆つたり、それほどでなくとも、どこか息づまるやうな町中をはなれて廣い野へでも出て見たいやうな氣がする。この兩三年は京都附近を思ふやうなことが殊に多い。東京の花はどこも美しい自然の背景がないので、二三年に一度くらゐ、どうかすると上野の花なぞ見ることもあるが、この簇集的に見べき花も、たゞ花が多いと云ふだけでは、一向つまらない。荒川や熊谷にしたところで長い土手に花がたゞ雲のやうに續いてゐると云ふだけで、何の興趣もない。京都―殊に吉野の花を私は一度見たいと思ひながら、ひどい雜閙だといふことを聞いてもゐるし、ちやうどに暇がなかつたりして、行きそびれてゐるので、花時が近づくと、それを思ひ出すのである。それに氣紛れな私のことなので、色々な刺戟を感じたりして、さうした道樂氣な春興なぞ追つてはゐられないやうなこともあつたりする。

私は近頃毎年々々花が咲く頃になると、私はまだ生きて花を見る！と云ふ、歡樂とも哀愁ともつかない、微かな悅びを

感ずることがあるが、しかし前に言つた、春が少しづゝ目ざめて來つつあることを感じさせられる、二月の末から三月の初め頃が、年毎に老ひつゝある私の體にさはりがちな寒威から脫れるといふ事もその一つの理由となつて、とにかく生きる悅びを感ずる。どこか山の餘り深くない早梅なぞ咲いてゐる溫泉場なぞへ行つて獨り湯に浸りながら、ぽち／＼降つてゐる春雨の音など聞いてゐたいやうな氣もするし、海邊へ行つて、小松原の砂濱に橫はつて、紫色の莖をした防風の芽にうら寒い風のそよぐのを見ながら、ぼんやり日に照らされてゐるのも好い。でなければ氣のあつた二三の友達と、どこかの二階座敷で、酒の匂ひをかぎながら、美しい妓の太鼓や鼓をうつ手つきでも見てゐるのも、さう惡くはないだらう。

花が片枝咲いたと思ふと、一日二日の陽氣にそゝられて、一時にぱつと咲ききつてしまふことなどがあつて、どこかへ見に行かうと思つてゐるうちに、ふと閉ぢこもつてゐた門を出て、近いお宮の前へ出ると、そこの境內にある櫻が、いつの間にか小豆色の葉ばかりになつて、辛うじて殘つた花が風にさそはれて雪のやうに散つてゐたりする。勿論私の庭の垣根には山吹がさきはじめて、木蓮は實になりかけてゐる。年取つてから、それとも長い都會生活が、私を文明人にしたせいか、たまらない晩春の悲哀の感じ方は、惱みの多かつた青春時代のやうなことはないが、しかし花が散つてから、新綠の色がまだ明るすぎるけば／＼しい總てのものを落着かせない、過渡期の暫くは、あわただしい氣分がとかく散漫で、酒のさめぎわのやうな不愉快な氣持だ。

づつと以前の下宿生活をしてゐた私の暗黑時代、一年ばかり足を繁くして、さうした巷で、いつものやうに車に乘つて、歸つて來ると、午にちかい陽光に埃つぽく見えるその邊に、薄茶色の嫩葉の出かゝつた櫻を、人夫達が多勢して、そこにも此處にも掘返しては根拵へをしたり、車につんだりしてゐるのに出逢つた時と、それからその後、さう云ふ遊びがすつかり厭になつて、暮に大阪へ立つて行つて、それから早春の頃、病を養ふために、別府で一月の餘も遊惰に耽つてゐて、すつかり文壇とも遠ざかつてしまつた揚句、遙かにさうしてはゐられないやうな、苛々しさを感じて大阪へ引返すと直ぐ行李を理めて、途中京都へ寄つて、都踊を見たり、御室や嵐山などを見舞つたり……御室なぞにはまだ花があつたが、嵐山では山の翠黛のあひだから、辛うじて殘りの花が一片二片靜かに散つてゐた、その京都の四月半ば過ぎの情景とが、今でも淡い哀愁となつて心に殘されてゐる。

こんな季題趣味が自然其物さへ加工されやうとしてゐる――國立公園の企ての如き――時代では、無論次第に我々から消滅しつゝあるのは無論である。

京の春

近松秋江

長いく\〜冬に閉ぢこめられてゐた古い都の人間は、もう三月の聲を聞くと、いつまでも家の中にじつと縮つてばかりはゐられなくなつた。それに今年は陽氣の回復するのが例年になく早くつて、幾度か寒さの振り返へしがあつたにも係らず三月の中旬を過ぎる頃から、もうすつかり洛の內外に本當の春景色が調つてしまつた。

四條の大橋が、今日では日本に、たゞ一つ取り殘された此の古い都に不似合な鐵筋コンクリートに改築されたり、又この都の生命ともいふべき加茂川の流れに溯つて京阪電車を架設したりする文明的破壞力が思ふまゝに古都の雅致を破壞してゐるにも係らず、三條の大橋ばかりは、それでも尚ほ、少くともその外形だけは靑銅擬寶珠を飾つた古風な舊形を保存してゐるのであつた。自分はその橋の上を渡つて見ることに興味を持つてゐた。――死んだ島村抱月も嘗てそんなことをいつてゐたが――しかし、自分のやうに京都に殆と常住してゐる者にとつては、三條橋をたゞ單に渡つてみるといふことのみには興味が薄らぐのであるが、自分はもとより京都に滯在してゐても、京都の住民ではないので、なるべく常に觀光を目的とする旅客のやうな心持ちで居ようと心掛けてゐるのであつた。何處に住んでゐても常に一面旅客のやうな心の持ち方をしてゐるといふことは、一寸考へれば落着かないやうであるが、又一面に於ては、日常目睹耳聞の凡てに對していつも清新な刺戟を感じ潑溂とした興味を持つことができるのである。私は東京に居ても、つとめてその心掛けを失ふまいとしてゐる。

三條橋も見馴れては一向興味が少いが、それが、もうぼつぼつ外に出歩いても今までほど嚴しい寒さを覺えぬ頃になると、加茂川の河原の芝生に眞靑に春草がいつの間にか芽を出す。それは、こんな都の中央にあるとも覺えぬ鮮麗な綠の色をしてゐるのである。すると、それと時日を期して約束してゐたかと思はれるやうに西岸の塘堤に立つた柳の枝が自然と色づきはじめる。それを傍に立ち寄つて見るとそんなにまだ芽ぐんでもゐないやうであるが、遠くの方から見渡すと、しどく萌黄がゝつて

見える。

それでも三條橋の中央に立つて北側の欄干に凭たれながら川上に方つて遠く連亘してゐる鞍馬から雲ケ畑一帯の北山の方を眺め渡すと、まだなか〳〵に冬は深い。高野川の溪の奥、山と山とが襟を重ねたやうに折り重なつてゐる彼方に、丁度北極熊の背の如く、白くまる味を持つて一部分見えてゐるのは比良岳の肩背である。そちらの方から、春は四月になつてもまだどうかすると朔風の如き寒い風がこの都に吹いて來る。

けれども北の方にさういふ執拗な冬の名殘りを留めてゐるのにもかゝはらずこの古都にはもう早い春の音づれてゐることは、どうしても爭はれない。

そして、暖い日が五日六日も續いてゐると思ふと、その翌日あたりから絹絲のやうな春雨がしと〳〵と降り出して來た。それが、昨夜からかけて今日半日も降りつゞいてゐるうちに、陽氣が又雨のために寒くなつて、いやに空氣が濕つぽくなつて來たが、それでも戸外に立ち出て街を歩くのが怠儀なほどでもない。傘を翳して自分は祇園町の通りに出て行く、春の雨は絹絲のやうにしと〳〵と街衢を罩めて降り濺いでゐるが、西側の人道を歩いてゐる人脚も少くはない。それが、東京の銀座街を行く男女ほど新しくはないが、何となくこの古雅な市にふさはしい小奇麗な人間が多いやうに思はれる。畫のお座敷に行くのであらう、美しく化粧した舞妓が長い〳〵だらりを背に飾つて、小鳥のさへづるやうな黄色い聲で何か呼び交はしながら男衆に紺蛇の目の傘をさしかけられて相合傘で、雨に濡れた四條通を横切つてゆく。

祇園町の通りのちやうど中ほどの北側を横丁に切れる角の處に京人形を賣つてゐる店がある。それが、先達つて中嚴しい冬の間は、思ひなしにか、何となく道を行く人に見棄てられ勝ちであつたが、不思議なもので、陽氣がだん〳〵春めいて來ると自然と又傍を通る人を飾店の前に立ち止まらしめるやうになつて來た。ガラス戸の中には室町人形や、菊慈童や、筒井づゝなどのやうな瓢逸な、淡彩な物があるかと思ふと、小春治兵衛やお祭佐七のやうな纎巧な艶麗な物もある。道を行く人の心にも春が芽ぐんで來たのである。彼等はついその前に立ち止まつて見てゆく。

私はそこを北に折れて松井の町を眞直にどこまでも北に行くと、富永町末吉町の古めかしい花街を左右に見て、やがて狹い横丁の露地を向うに拔けると、そこに白川の流れに架した小さい板ばしがある。それは巽橋である。私はそれを何度渡つたか知れぬ。橋を北に渡るとそれが新橋通りの花街で、そこを今度

は右に折れるとすぐ又小さい板橋が架つてゐる。やつぱり流れは白川であるが、そこの處で流れが曲折してゐるのだ。その新橋の袂に古い柳が一本立つてゐる。私は、京都といふ京都の中で、おそらく此の柳ほど好きな柳はない。それは場處柄が既に祇園の花街である。祇園幾千の美人が紅粉を粧ひ、凝脂を洗つた使ひ流しの水の落ちてゆく白川の淺流に臨んで長く枝を垂れた青柳の風情が私には何となく興を惹くのである。私は、その柳が今日の春雨でどのくらゐ芽を吹いたかと思つて雨の降るたびにそこらあたりまで幾度となく見にゆくのが常であつた。

私には、まだ、この古い都に生々しい戀の創痕が殘されてゐる。それは今尙ほ思ひ返へすだに惱ましい思ひ出である。晝夜を分たず白川を流れ落ちてゆく水にも逝く春の怨みは盡きず殘つてゐる。新橋の畔の青柳は、あれからもう幾度か枯れては芽ぐみ、枯れては芽ぐみしたが、私の惱みの癒ゆる機なく私の怨みの融ける期はない。

私は春雨のしぶきを全身に浴びながら、それから花街をずつと一と廻はりして、祇園繩手から又四條の川端の方に出てくると、加茂川の兩岸は濛々と春雨に煙つてゐる。そこにも妓樓の畔の岸の柳が萌黄に色づいてゐる。四條橋の東袂の南座には大阪の花形に東京の役者が二三枚加はつて、派手な出し物に繪看板が客を呼んでゐる。

私は祇園町の南側に軒を並べた書畫屋だの骨董店などの飾窓の中を覗いて見ながら祇園神社の西門の石段下まで來て、そこらにある、時々買ひつけの花屋に入つて、椿の花と黄梅の枝を少許り買つて春雨に霑しながら花見小路の花街を、露地から露地に拔けてもどつてくると、演舞場の大きな建物の中で高い調子に太鼓を打つたり、三味線の合奏をしたりしてゐるのが靜かな春雨の中を傳つて響いて來る。

「あゝ、つい、うつかりしてゐた。もう都踊りの稽古をしてゐるのだな。」と思ふ。が、もうその都踊りを見る興も沸かぬ。そんなことを思ふて見るのも何だか惱ましい。

脚の早い、東京などでは、とても見られない、おとなしい京の春雨は一日降ると、もうその夕暮から晴れた。

翌日は雨上りの、丁度歩き加減の地濕りがして、折から彼岸の入りといふので、もう、長い冬の間から今日を待ちかねてゐた老若の男女の群れが、今年の春のはじめての人出といふほど出るわ〱。私も道を歩るく重苦しい外套は家に置いて、輕衣のまゝ東山の方に出て見た。なるたけ人通りの少い處を〱と縫ふやうにして、東山電車線を向うに横切つて、下河原から高臺寺の一の表門の前に出て、八阪の塔の下を通りかゝると、千

幾年と古りたる五重の塔の褪赭色を背景として、その前に立つてゐる彼岸櫻がもう三四分どほりは花を開いてゐる。櫻は梅と違つて花を開きかけると、瞬く間に開いてしまふ。それが何だか春を享樂するに心が追はれてゐるやうである。

それから五重の塔の脇をずつと廻はつて產寧坂の方に上ぼつてゆくと、淸水の方へ上がつて行くもの、下りて高臺寺から圓山の方に出やうとする群衆で、さすがに砂塵の立たぬ、この山の都も今日はめづらしく往來に塵埃が立つばかりである。

私はその群衆の中を分け〳〵、たうどう淸水の舞臺まで上がつていつた。そこには多勢の群衆が欄干に凭れて餘念もなく、遠く一眸の下に見渡せる洛中洛外の大景に眺め入つてゐる。愛宕は一と際高く頂の邊に薄い雲の切れを附けてゐるが、それから左の方にずつと、西山一帶が長く走つてゐる。その盡きる處に一ヶ處凹處があつて、遠くとほく雲とも霞とも水とも人煙ともわかぬ糢糊とした物がある。その左方にはすぐ男山八幡の丘陵が起伏して、それから又左へ〳〵と續いてゐる。その糢糊としてゐるあたりの狹隘が卽ち淀川の流域で、その向ふの方に大阪の平野が開展してゐるのである。それからずつと近くに伏見から下鳥羽の山城平野がやうやく早春の目を覺めようとして淡白い靄のやうなものを一面に被いでゐるかのやうである。

私はそんな物をあてもなく遠望してゐると、春の押寄せて來るのが樂しいといふよりも生中に淺い悲しみを促されるやうな心がする。それは何故とも解らない。戀の叶はぬせいか、そんな生々しい怨みでもない。紅顏の衰へるを惜む爲めか、それは夙に覺悟してゐる。これぞと口に明言することの不可能な氣持ちであるが、たゞ〳〵何となく春の音づれが、うすら悲しいのは、どういふところから湧いて來るものであるか捕捉することが出來ぬ。

私は淸水の境內をずつと一とめぐりして、今度は高い石磴を踏んで降り、舞臺の下の櫻樹の中の徑を又もとの西門の方に戾つて來て、そこから群衆に交りながら順路を高臺寺の前の松林の方に返つて來た。

そこから試みに瀟洒な石段を登つて高臺寺の境內に上つてゆくと、方丈の土塀の中にある彼岸櫻の老樹が、こゝではもう五六分通り開いて枝を垂れてゐる。あたりには人も居らず、靜かな境內に花は獨りで咲いてひとりで散らうとしてゐる。

高臺寺は豐臣太閤の室北の政所の菩提寺である。歷史の聯想は、私をして寂しく咲いてゐる老櫻のやがて散りゆく色を悲しましめた。（三月十日）

歡びも、哀しみも感じたのに

小川未明

うつとりとした春の晩を、私は、宿にゐて落付いて眠むることができずに、淡く酒にでも醉つてゐるやうな心地で、明るいところ、暗いところ、足の向くまゝに、差別もなく歩るいたものだ。

華かに、夜でも、燈火の光りに照らし出されて、瞳に燒き付くやうに、くつきりと映る女の着物の色彩は、青春の私の胸を波立たせずに置かなかつた。

木立の多い裏通りには、言ひ知れぬ悲しみを帶びた靜寂が潜んでゐた。うす暗がりにはやはり胸をそゝる花の香りが漂つてゐた。そして、人見知りする私は、譯もなく、燈火の黄色に道端に洩れる、若い男女の讃美歌の起る教會堂のあたりを慕つて行つて、その前に佇んでゐたこともあつた。そして、よく其の中へ入り込むことすらできなかつた。

思ふに　私は、詩にあるやうな愛を、あてもなしに眼に描いてゐたのだ。

また、街の建物や、水の上が、ほんのりと白く煙るやうに霞がかゝつて、並木の櫻の梢からは、紅い雫が、珊瑚を碎いて落すやうに、一粒づつぽたり、ぽたりと地の上に滴る、小雨の降る中を、私は、傘もさゝずに、思ふ存分に、しつぽりと體を濡らして、醉つたやうな氣持で歩るいてゐたことがあつた。

その時も、私は、あてなき戀にあこがれてゐたのだ。

私の體は、いつも熱つてゐた。そして、たへず脅かされてゐるやうに、胸は、わく〳〵としてゐた。

もう、春の逝く頃であつた。その時、私は、まだ若かつた。野心に燃えてゐた。隨分、相手の感情を犠牲にしてまでも、我執を通すことを格別罪惡とも感じてゐなかつた。

しかし、この女は、其等の女の中で、私の心を惹いた一人であつた。もう其時かぎりで、忘れてしまふことのできない、後まで心を惹く魅力を持つてゐた。

女は、私を、ある路次の出口まで送つてきた。片側には赤い提燈に火がついて、月の光りが、遠くまで、夢のやうに流れてゐた。

「また、ゐらつしやいね」

女は、言つて、うす暗がりの裡で、大きな眼を見張つた。

といふ大きな、いゝ眼だつたらう。

「いまから、そんなに、うす着して、寒くはないかい？」と、私は、言つた。

「だつて、まだ若いんですもの」

女は、活々とした大聲で、笑つて答へた。

その夜は、ほんたうに、いゝ夜であつた。しかし、これがこの女との最後であるとは思はなかつた。私は、重ねて、女をたづねた時には、もう女は、どこへ行つたか、こゝには居らなかつた。

けれど、私は、長いこと、其の女を忘れることができなかつた。電車に乘つて、街の中を走る時も、女に出遇はないかと見まはした。電車の窓を透して、赤や、白や、いろ／＼の店頭に揭げられた看板が、憂欝に、いたづらに私の眼に映つた。そして、やゝもすれば、私の心を倦怠させる埃つぽい風が吹いてゐた。

こんなやうな、味氣ない光景は、その後幾たびもあつたけれど、この女には出遇はなかつた。

私は、自身の青春が去つてしまつた、今日でも、春さきになつて、たま／＼其の女を思ひ出すことがある。

あの女は、いつたい、もう幾つ位になつたらう。まだ生きてゐて、道で出遇つても、互に、其の顔すら分らないおかみさんになつたにちがひない。しかし私の心の目に殘つてゐる彼女は、當時のまゝで若いのに！

私は、苟めにも、もう青春の去つてしまつたことを慨かないだらう。

たゞ、體だけは、こんなに健康であるから、また、年からいつても、たとへ今年の春を送つても、後に、幾たびかの春を迎へるであらうし、木々の芽ぶきや、花の咲くのを見ることができるにちがひない。少なくも今年の春を、最後の春だと思つて見る程、切實に、この麗はしい、愉快な自然に對して、驚きと怖れの瞳を見張ることができない。

獨り、私の年とつた兩親だけとは考へないが、すべての年とつた人々の眼には、この春の姿がどんなに映るだらう？また、明日をも知れない、病弱の友には？人生のさびしさに堪へない。そして、私の眼にも、やはり、一度は、最後の春があるのだ。それは、春ばかりではない。が、なぜ春ばかりが、こんなに人生を誘惑するのだらうか？

もう、センチメンタルのことは言ふまい。今の自覺した青年には、戀もなければ、また春も、冬もないのだから。

彼等は、何のために、禁欲の生活をするか？そして、其の中

のある者は、暗い、寒い牢獄の裡で、他の人達が樂しむ日に、ぢつと覺悟をして一點を見詰てゐるといふことを、私は知るから。

春は、忘れずに地上にやつて來るが、樂しみを知らない人間は、自分達のために春が來たことを感じなくなつてしまつた。

大地と共通な人間の情感

白鳥省吾

一、都市生活と春の自然

人間はその誕生の月に於て心身が最も活動的になるものだといふことを或る書物で見たことがあつたが、事實、私はその誕生の月であるところの二月末から三月はしめにかけてほど一年の期節のうちで、好ましい時はない。もつともそういふ意味なしでも、櫻の咲く前の早春とも呼ばるべき期間を好む人がなか〲多いやうだ。

魂の郷愁を湧き立たせるやうな晴れた日の埃つぽい風、どんなものでも生育させないで置かない豐かな雨、うるんだ街の灯、星、月、太陽、柳の芽、椿、菫、雲雀、雪が消えて淸らかな肌を表はす山、川のせせらぎ、土の柔かなうるほひ……そういふものを平凡に一々數へたてるまでもなく、早春の期節ほど人間がこれらの自然界の物象の中の一個の生物であり、それ等と共通した情感の潤ほひを感じさせることはない。早春は生の喜びと力とを與へる時である。そして四月にはいつて櫻の花の散る頃になると或る頽廢さと疲勞とがある。狂ほしさがある。律動から亂舞へといふ姿がある。

『木石の身に非ざれば』といふ言葉があるが、永い抑壓から解放されて、土や草木でさへ發生の惱みに燃えてゐる春に於て、人間の生活がいろいろの影響を受けてゐることは言ふまでもない。

ごく大ざつぱに考へても、歡樂と哀愁とは春につきもののやうである。しかし歡樂といふと通俗的な意味で、酒と女（それも狹斜の巷の）との享樂を連想するが、酒は一合位しか飮めず、また、遊びらしい遊びをしたことのない私には、そういふ歡樂にはあまり緣が無い。たゞ自然界の潤ほひのある現象や、それらに織り交る人間生活の一人として、また、傍觀者とし

て、殊に春のみに經驗する樂しさとか哀愁とかいふものはある。古い日記を繰つて見ると次のやうなことが書いてある。

三月廿七日。いつとなく土は柔かくなり、光が酒のやうに濃くなつた。朝起きるときの寢醒めの心地よさ。そして更に戸を開けて外を見れば何といふ晴々しさであらう、この頃はよく大風が吹く。そして時々、濃厚な雨が降りそそぐ、それ等は何といふ喜びだらう。砂塵のあがる風にしても地は必らずしも不幸ではないのである。自然のままに放置してた庭のヒヤシンスは既に花をつけはしめた。鶯は梅の木や椎の樹の繁みに來て啼いてゐる。その嬉しさうな聲のいかに美しいことよ。

•

四月二日。暖かく晴れた日である。不忍池の水、和みて汚なさが明らかに見ゆ、日當りよき大佛の前は櫻ちらほら咲き、蕾みな赤くふくらむ。圖書館より四時に歸る。若き心をそそる春の光よ、かかる夕ぐれほど心を樂しましむるはなし。今日、十二時頃、不忍池に下りる石の階段の處にて四歳ばかりの捨兒ありたる由。別に二つばかりの子を負ひるその母、捨ててよりその邊にうろつけるため、巡査に捕へられて連れ行かる。

四月八日。星が美しかつた、いかにも人間の生命の神秘を語るもののやうである。地球を宇宙の一つの遊星とすれば、その上に生息する人間は何物だといふ氣がする。平凡なことではあるが、春に於ては、殊に美しい憧れ心地にてしみじみとそう思はれる。

四月十六日。花滿地、きのふから庭の四五本の櫻、花を降らすこと頻りである。縁に日向ぼこする犬の背に、乾したる座布團に花びらが舞ひ込む。

夜、街に出でんと目白坂を下りる。月が暈をつけてゐる、朧ろ夜。廣い坂を車に重い荷をつけて下りゆく老爺、それを後から押へて助けてやる若者。ころころと遠くで蛙が啼いてる。沈丁花かほる頃はすでにすでに遠く、いつしか蛙なく頃となつたのだ。

顧みると私も東京に來てからいつしか十五年になるといふことに驚かれる。そして早稻田、大久保、雜司ケ谷といふ風に郊外にのみ住んでゐる私は、自然の推移を鮮やかに感じ得るのであるが、しかしそれはごくありふれた漫然とした。普通人の心

持に過ぎないやうな氣がする。トローとかジョン・バウローとかいふ藝術的な自然觀察者のことなどが今更らしく親みを新らたにする。レオナルド・ダ・ヴィンチも『自然の研究は神を喜ばせるもので、一種の祈禱である。……知ること少きものは愛することも少い、愛は知識の娘である。』と言つてゐる。

二、田舍の花見と踊り子

私の郷里である東北地方は櫻の咲くのは四月末で、しかも、梅も桃も梨も一時に開くのであるが、田舍のことゝて空氣がいゝので凡て淸楚な感じがする。東京に來てからたゞ一度、珍らしく春に歸省して田舍の花見といふものをしたことがある。

涌谷のお城山の櫻といふと宮城縣での櫻の名所であるが、それは大正九年の春、數日前に結婚したばかりの私達夫婦がS夫人や、義姉と連れ立つてお城山の花見に出かけたのであつた。妻の實家の門を出て土手にのぼると、江合川は遠い水源の山脈の雪どけ水のために溷濁つて豐かに流れて、お城山の滿山の櫻は川に影を映すほど近く向岸に眺められた。長い橋をわたつて、また土手づたいにゆくと、川べりで十人ほどの人達が、柳行李の材料にする同じ太さに切り取つた柳の枝の皮をむいてゐた。幾本もの枝が見る〳〵生々しく光る白さにむかれて行くのだつた。この地方は柳行李の產地である。

向ふから微醺を帶びた義兄が洋服姿でやつてきた。私達を見て、

『御案內しませう。』と引きかへした。それで、義兄夫婦と、私達夫婦と、S夫人といふ一行になつた。

『Sさんばかりはぐですね』と誰かがひやかした。もうお城山の麓であつた。花がしきりにこゝまで散つて來た。今日はこの町の製絲工場の花見といふことで、石段の昇り口の左側に花見委員らしいのが義兄に挨拶してゐた。石段を十數のぼると、左側に『出世瓦』の寄附受附が、幕を張つた內にテーブルを据ゑて、それにも係の人々が控へてゐる。この『出世瓦』といふのは近く改築される涌谷神社の屋根瓦のことであつて、その瓦を寄附した人は出世をするといふ意味である。涌谷神社は先代萩で有名な此の町の城主伊達安藝を祀つたものである。義兄は私達四人分の瓦を寄附して、櫻の造花をピンでとめたのを四つ貰つたので、みんながそれを襟にさした。

城址の平地が櫻の林のやうになつて、今がてうど見頃である。この城址は五郡に亘る平野中の高地なので眺望も頗るよく、若草が生へてゐるので、いくら人が雜踏しても塵埃のあがることが全くない。麓を洗ふやうに、江合川が汪洋と流れてゐ

る。町の老若はむろんのこと、近郷近在から若い衆、娘、内儀等がたくさん來て遊んでゐる。廣場で鬼ごつこしてゐる娘連もある。この邊で見馴れぬハイカラな美しい女も交つてゐるので、茶屋女かと思つてきくと、石卷の酒造家の一人娘とか養女とかなそうで、昨年の春も來て遊んでゐたと、派手好みの氣儘者として有名だといふことだつた。兩側に掛茶屋がたくさんあつて、三味や太皷の音が盛んにする。幾組もの藝人が踊り子を連れてあるいてゐる。

義兄は一軒の掛茶屋に私達を案内した。ゆで卵、蟹の鑵詰、正宗といふ御馳走である。前に來かかつた踊り子を呼び込んだ。すると前に澤山の人だかりがした。浪花節語りらしい三十五六の男が、太皷を手にもち女の踊り子（十七と八つ位の二人）、と男の踊り子（十四と十位の二人）とをつれて、それに三十位の女が三味線彈きとしてついてゐる。義兄が一圓のはなをやると、歌が始まり三味と太皷が鳴り、四人の踊り子が踊る。一番上の女の踊り子は十七位に見えるが四年程前から、これも毎春來て、その時と少しも背丈も顏も變つてゐない、實は二十位かも知れないと妻は言つてゐた。小さい方の男の子が泣きながら踊つてゐる。

『おい、財産を泣かしてはいけないぢやないか』と、義兄が注意したので、私達は思はず噴き出した。男の子は二人とも朝奈もどきに赤く隈取りをしてゐる。無表情なぎよろりとした顏をして、いかにも踊そのものが勞働といつた風だ。まつたく今朝からこの午後まで何度踊らされたか知れないだらう。男はどうしても浪花節上がりらしい、その聲で勇敢に、『香に迷ふ梅が軒端の匂ひ鳥……』と歌ひ出すのだから堪らない。人を喰つてゐることおびたゞしい、彼等は三十分餘も其處で歌ひ且つ踊つた。そのあとで酒を二三杯つづけざまに呷つて引上げて行つた。

私達も掛茶屋を出て、萱荻の枯れてる池のほとりを過ぎ、また次の石段をのぼつた。そこは本丸のあとで城址の最高部の丘であり、御堂がある。南の傾斜面の櫻の林は美事に滿開である。私達は人のけはひもないその下の小路を下りて、川端に沿うて歸路についた。江合川の橋をわたつて土手傳ひにゆくと私達のさきを、假裝の若者が二人、おかる勘平らしいのが思ひきつてけば〳〵しい滑稽な容姿をして、よろめきながら製絲場の方へゆく。

日は麗らかに川上の山脈の方に傾いて、川端の鍛冶屋で放してゐるといふ家鴨が四羽、豐かな川波の上にガアガアと啼いてゐた。

歡樂？哀愁？

室生犀星

歡樂？——そんなものがあるものか？

若しあつたとしても今の私には用のない肌の合はないものになつてゐるらしいのだ。——生活にしろ人生にしろ、そんなものを樂しみたい理想は人一倍持ち合せてゐるんだが、人一倍よけいに攝取したい僕なんだが、しかし結局詰らなくなつて何一つ旨くゆかないことを解つてゐるやうな今の僕に、そんな大それた花電車を見るやうな歡樂なんてものの正體をくどくどと書く元氣もなからうぢやないか？

も一度その歡樂といふ奴を考へて見ると、それは既うすつかり忘れてしまつたもので、そのため却つて耳新しくそんなものもあつたかなと思ひ出すくらゐなものだ。——さうして自分がそんなものの的を外れて暮したことに大した後悔も殘らない——。

哀愁？——それも大方詩人の囈言くらゐなものだらう——歡樂よりもつと月並で、そしてこれは十六七くらゐの女か中學生がよく知つてゐるだらう。僕の知つてゐるそれはこんなところで書くべき性質のものでなく、いつだつて一人でひつそりと考へてゐるそれで、一たいそれとは何んだと問はれたつて、すぐ答へることのできない、答へるすべさへ知らないそれだらう——が、僕にはその異體のわからないそれがあるのでどうやら人生といふものが分りさうな氣がするし、それがあるので退屈なときでも大して退屈しないでゐられる氣もするのだ。そしてこの哀愁（この文字はあんまり若い時分にれいの囈言づくめな詩をかいたために、今ではすつかり厭になつた文字なんだが）がなかつたらそれこそまるで退屈してしまつて、日干しになつた蛙みたいな心になつてしまふだらう。——ありがたいことには！全くありがたいことには、しよつちゆそれがやつて來て、けふはああでもないし、明日はこれこれでもない、まして昨日はけふの續きでも何んでもない別な生涯から切り離した一日！といふふうにはてもなく詰らなく考へつづめるのだ。——實際、一分間の相違で人間は十年もさきのことを考へることも勝手だし、百年後のことだつて想像できないことはないだらう——それにつきまとふのは、やつぱりその哀愁とかいふもののしわざで、それがどんなときだつて、つき纒つて來て、勝手に僕た

ちをいろどつてくれるらしいのだ。

僕は詩人だが――小說家だつていゝぢやないか――いやひがんでゐはしないんだよ、どちらだつて氣の向くときは勝手に風向きをかへるだけだ――その僕が詩人で、詩人らしい囈言をならべるとして……そして哀愁つてものをよく見ると、どうもそれは僕たちの第二番目の心のやうな氣がするんだ。――いつもよそにある心で、いつでも好きなときにやつてくる第二番の……正眞正銘の心がそれのやうな氣がする。

今朝、一浴の後に、朝日の中の夏蜜柑がたわわに下つてゐるのを見てゐると、脊高い野生の鶯が枯れた芭蕉を隔てて啼いてゐる。――朝日にかがやいてゐる巨大な夏蜜柑、そのまんまるい壯んなあぶらぐんだ黃ろさ――そんな暖國の樹の下へ立つたことのない僕が立つてゐるとやはり變な氣がする。そんな珍らしい果實をひよいと眺めたときにも、ちよつと驚いて、間もなく心が平靜にならうとして、さらに又驚いて樹の上の粒々たる實を見つめる……そして始めて異體の分らない或る喜ばしい氣持ちを經驗する。が、なほよく見てゐるうちに餘りに形が圓すぎるので、その圓すぎるのが些つと悲しい氣になる……こんな飛んでもない眞面目過ぎる歡樂！　そしてまたあんまりすつきりしたさえざえした新鮮過ぎる哀愁！

結局――ちぢめて言へば、何だつて歡樂だらうぢやないか――何も紅巷裡に酒杯を置かなくとも、微かな、それよりもつと仄かなものにも樂しみはある。そんなに仄かなものに樂しみを置くといふことも、れいの詩人の囈言からいへば結句しやはせだらうぢやないか？

この世の中のことは何だつて面白いことが一つもないやうにも言へるし、何だつてみんなそつくり面白く心を傾けるに足りるやうにできてゐるかも知れない。――歡樂！　そんなものはあるものか？　と、さう言つてみたが、しかし始めにいきなりさう言はずに、こんな途方もない話のすぢを辿れるものぢやない――。

むしろ僕の回答は極くくだらないものになつたかも知れない――それならそれで編輯者はあるひは沒書にしてしまふだらう――。

伊豆伊東にて

華々しい春の三四の記憶

野口米次郎

冬が總つて春になると、宇宙の現象が相互に交驩を始める通商が行はれる、人間と自然との握手や抱合が直接になつて來る。冬中、萬物が孤獨に閉籠つて無爲を自衞の方法として居つたのが、春になると、急に燃える地中の力を感じて、空中の生産力に富んだ生命に觸れ、相互に歡樂の雰圍氣を作つて來る。さうして宇宙の大合奏が始まる。

如何に樹木の汁液が漲り始めるであらう、如何に樹木のくすんだ色が急に綠に變つて、萎れた體が眞直になるであらう。如何に鳥が舞踏し乍ら空中を飛ぶであらう。如何に犬が嬉し涙を滴し乍ら、地上を走るであらう。私達人間も、自分等の魂に生えてゐる細かい根で地中の秘密に觸れるやうに感じ、それ等の根で吸上げる秘密の水が、私達の手にも髮の毛一本の末にまでも滲み渡つて、私達の體がぐんぐん大きく伸びるやうに感ずる。ああ、誰か春の歡樂を喜ばないであらう。一陽來復の言葉で盡きて居る……ただもう、生命の酒杯を上げて自然に感謝するのみだ。

歳歳年年一度は春が私達を見舞つて呉れて、私達もその都度この地上生活に對して感謝の涙を流すことであるが、過去を振返つて考へると、幾度の春が私達の記憶に上るであらう。私自身も、過去幾十年といふ長い歳月の間で、僅か數回の春だけより記憶して居ない……そして私の意識から忘れることが出來ない程の感銘を私に與へる春は、三十年前、私が初めてミラーの山莊で體驗した春だ。三十年といへば隨分昔のことだが、毎年春になると、如何にミラーの山莊で迎へた春が樂しくて、それが詩人としての私の一生にどんな偉大な影響を與へたかを考へさせられる。三十年前といへば私の十八九歳の時だ……特に生活難から逃れて初めて平和を摑むことが出來た心で眺めた春だ。自然を靜觀する反省力が若い血汐に蒸されて、眞實な抒情氣分となつて昇る紫色の靄のなかから眺めた春だ……私としてどうしてその春を忘れることが出來ようぞ。

ミラーの山莊といへば文字通りで、小さい山の上に建られた荒屋に過ぎない。山は小さいといつても、眼下に金門灣に太陽が沒する雄大な光景を眺め得る程度に高い。桑港灣を中に置いて桑港と相對する一都會ヲ　クランドの後にむくむくと持上つ

て居る小さい山だ。今日ではミラーの山も、私と老詩人、ミラー（今は死んで居るが）とが植えて置いた樹木が生長して鬱蒼な森林化しては居るが、私が初めてミラーの居候となつた時代には、全山一木も無しといふ坊主山であつた。その替り一陽來復して春となると、全山花を以て蔽はれたものだ……山を包んで仕舞ふ加州罌粟と毛莨（うまのあしがた）の美麗さ！　加州罌粟はカリホルニアン・ポピーで赤黄色の單瓣花である。夕方になると、花を閉ぢ、翌朝太陽に照らされて再び花の盃を開けます。かういふ綺麗な花の褥の上で、草雲雀が騒騒敷い程囀ります。四月に入ると櫻が咲き、櫻が散ると李の花が咲き始める。この李が幾百本と行儀よく並んで滿開した光景は實に見事なものである。ミラーの山莊にも百本近くの李畑が私共の家に續いてあつて、李の木の下には、薔薇の花の畦が幾つも並んで居て、馥郁たる清香を放つて居る。『暗香浮動月黄昏』の東洋的梅の情趣はもとより無いが、日曜の夕方など、ミラーの果實園のなかを、遠くのエンゼル島から聞えて來る海軍樂隊の音樂を耳に聞きながら散歩して居ると、今日思出しても嬉しい懐しい忘れることが出來ない一種の情調を味つたものだ、私はかういふ愉快な春の空氣に觸れて詩の世界へ一歩一歩と踏込んだのであります。東洋では歡樂極まると憂愁起るといつて、喜と悲を陰と日向のやうに接續させて居るが、かういふ米國の春に觸れると、歡喜はあるが憂愁が無い。自然に英語國では、春の悲哀を歌はないやうだ。否な、春の悲哀を語る詩も少くはないが、概して西洋人は、私達東洋人のやうに春の歡樂を憂愁と一つにして歌はないやうだ。

それから二三年過ぎて、私は今でも忘れることが出來ない見事な春の一光景に接した。それは私が徒歩で桑港から南の方ロサンゼルスに出掛けた途中で、サンノゼからロスゲトスとの間を一面に蔽つてゐる櫻の畑を眺めたことです。私は朝早くサンノゼを出ました。サンノゼの町外れから百姓の大八車に便乗を得て、數の知れない程續いてゐる櫻の林の間を通り、花が殆ど大洋の波にも比較することが出來る洋洋たる春の美はしい光景に陶れたことを、今日でも私は感謝して居る。一口に日本人は櫻は日本のもので外國に無いといふけれども、假令米國の櫻は果實が主で花は從であるとしても、幾十萬本といふ櫻の木が一時に咲いた有樣は、到底日本では見ることが出來ない圖でありませう。日本の櫻花は、外國の櫻花より花の莖（ステム）が長くて一寸した微風にも搖れてなよやかな情趣を添へるけれども、外國の櫻（こゝでは果實を主として居る加州の櫻を意味するが）は、花がごつちやに集つて楚楚たる姿が無い。けれども、朝日東の空を破

りだした頃に、浪のやうに蜿つて見える幾萬本といふ櫻を一目に見るといふことに對して、誰が神樣に感謝しないであらう。

私が最後に倫敦を訪問したのは、最早や小十年の昔ですが、倫敦へ入つた時は冬の初でもうそろそろ霧で都會がず黑く見えかけて居りました。私の用事は講演にあつたから、深い灰色の霧のなかを潜つて處處方方へ出掛けました。だが、三月の初になると、黃金の太陽の光線がくすんだ倫敦の町へ復活の呼氣をかけ始めて、急に若若しく見えだして來た。私がある日、レゼント街を步いて居ると、街上で見事なチユ　ツプを賣る花賣りの女を見たので、俄に倫敦郊外の景色に觸れたく感じ、そのままキユウ公園へ出掛けた。公園を隅から隅まで蔽ふ草は、靑靑として生氣に富んで居た、さうしてその若若しい草の間から靑葉で語ることが出來ないほど綺麗なチユリツプがぽつりぽつりと出て花を咲いて居た……水の上に咲く日本の蓮花も見事だが、かうして草の褥から頭を持上げるチユリツプも如何にも愛すべきもので、譬へると地中の魂が小さい仙女となつて、地上に姿を顯はしたものとでもいふことが出來る。其日より一二週間以前に、グランヴヰル・バーカーが興行して居つた沙翁の「眞夏の夜の夢」を見たが、その一幕で、大きな木の陰に澤山のチユリツプを作つて舞臺を飾つてゐた。それは成程實景から來たものだなと、キユウ公園でチユリツプの實景を見て思つた。空氣は溫いし鳥は歌つて居るといふ如何にものびのびした春の一日を獨り倫敦郊外で過ごした愉快は、今日でも忘れられない。

だが、日本の春はまた格別だ。思ふに、日本の春が表現するやうな歡樂氣分は、世界何處へ行つても見出すことは出來なからう。十九年以前、私が初めて米國から歸朝して經驗した日本の春の嬉しさ……それを思ふ丈けでも、心は喜悅で戰慄する。雲でも默つてゐるやうに思はれる上野の山の櫻花を、遙に松坂屋邊から眺め、私は嬉し淚を流したものだ。今日の上野とは異つて、十九年も前の上野を飾つた櫻の木は盛んな花を咲いたやうに記憶して居る。その點では向島も同樣である。向島の土手をぶら步いて一日を過ごし、夕方になると冷い薄ら寒い風が水上を甞める、太陽を西に送りこむ晩鐘が聞えて來る……春の憂愁がしみじみと身に迫つて來るやうに感ぜられる……この情調は、實に西洋では味ふことが出來ない所のものだ。

日本位自然に惠まれてゐる國は外にない。ああ、日本の春は歡樂の天地だ、そして憂愁の情調を漲す時に、日本の春は歡樂のクライマックスに達する。

躑躅から蕨へ

上司小劍

一

少年の頃、毎年四月の中旬頃に、行厨を携へて、山遊びに行く、それが私には無上の歡樂であつた。それ以後、それ以上の歡樂は見出せない。

行厨は高さ八寸、幅五寸四方ぐらゐのもので、鐶の附いた箱に入つてゐた。四重になつた黒塗りで、内部は赤塗りであつた。一番下が深さ四寸。其の上の三重は一寸三四分の深さであつたやうにおぼえてゐる。下の厚いのには海苔卷きの鮓を入れるが、其の海苔卷は直徑一寸ぐらゐで、具には椎茸と玉子燒とあなごの細いのを蒲燒にしたのと、三つ葉と紅生薑とを入れる。御飯の白、玉子燒の黄、椎茸とあなごとの黒ずんだ色、それへ三つ葉の青、生薑の紅が加はり、海苔の紺色が周圍を包んで、見たところ先づ色彩が美くしい。

上の三重には、鰒のふくら煮、玉子燒、蒲鉾、慈姑の煮たの、わけぎの酢あへなどが分けて入つてゐる。味琳を入れた小さな瓢に盃を添へたのがそれに附くのである。一行は私と下男と下女、下男は孫右衛門と言つて、痔を病む老爺、下女はお駒といふ愛らしい娘であつた。私の十歳ぐらゐの時から、十五六歳まで、山遊びは毎年〱其の顔ぶれでつゞいた。私は幾十年の後までも、さうした春がつゞくもいゝと思つてゐたのである。

二

孫右衛門が行厨と蓙とを持ち、お駒が赤い毛氈を抱へてゐた。登つて行く山は權現山と言つた。ちよつと名を聞くと頂上にお宮でもありさうだが、全山皆躑躅で、他の山々には松が青々と繁つてゐる中に、こゝばかりは、まるで禿山のやうに様子が變つてゐた。私たちの山遊びの頃には、其の躑躅に皆花を着けて、遠くから見ると、山が緋鹿の子をかけて寢てゐるやうにあつた。たいして高い山のない國だから、四圍の山々も登り下りに半日を費すのは尠いが、この山は、それ等の山々の間でも殊に低くて、私の家から頂上まで一時間とはかゝらずに登ることが出來た。躑躅の花の隙間を狙つて、孫右衛門が先づ蓙を敷くと、其の上へ、お駒が毛氈をのべた。場所は毎年きまつてゐた。其處よりほかには躑躅の花の隙間がないのである。花は皆紅で、紅の中へ緋の毛氈を敷くと、紅の色も緋の色も二つながら

ら引き立つた。毛氈がお駒の手でのべられると、直ぐ私が其の上へ腹這ひになつて、兩足をバタ〳〵と水に泳ぐ眞似をした。それも例年の例であつた。

『坊んち、また二寸大けならはつたで。』と孫右衛門は、毛氈の長さと私の身の丈とを比べて言ふ。それも毎年殆んど同じ言葉である。毛氈は去年のまゝの毛氈であるけれど、今年の私は去年そのまゝの私でなかつた。しかし私は來年もまたこのやうにして、野遊びの日が同じ樂しさで來ることを疑はなかつた。

『孫右衛門は去年の通りか。背の高さは。』と、私は不審さうにして訊いた。孫右衛門は笑つて『わたしはもう低うなつても高うならん、坊んちの時分が一番えゝのや、苦勞もなし、心配もなし。』と、溜息を吐いた。お駒は側でにこ〳〵と笑つてゐた、この娘も矢張り人生の春が永久に自分の上にあるものと思つてゐるやうであつた。

三

昨年も一昨年も、躑躅は同じ紅に咲き揃つてゐた。來年も再來年もまた。……さう思つて、私は年々歳々花が同じやうに咲くのを知つてゐたけれど、去年の私が今年の私でないことは知らなかつた。毛氈の長さに比べて、私の身の丈を測る孫右衛門のしぐさも深く念頭にはおかなかつた。孫右衛門は永久にこの通りの老爺で、私は永久にこの通りの少年で、お駒は永久に若い娘であると思つてゐた。私の春の歡樂は、この考へを根柢として醸酵した歡樂であつた。海苔卷きの鮓もうまい。鯛のふくら煮もうまい。玉子燒もうまい。慈姑の煮たのもうまい。わけぎの酢あへもうまい。まづいものは一つもなかつた。肉のない日でもく〳〵と慈姑を喰べて、味琳を二杯三杯と飲んだ孫右衛門は、ほろ醉ひ機嫌で鼻唄なぞをうたつた。しかし酒は猶に大毒であつた。お駒は味琳の口あたりのよいのに惹きつけられて、四五杯も飲んだ。さうして白い顔をば、ほんのりと櫻色にしてゐた。私も味琳を二杯ぐらひは飲んだ。春の歡樂は、其の盃の底から湧き出してくるやうであつた。

家の土産には、紅の躑躅の枝を二三本折つて歸るのが、これも例年の例であつた。昨年も一昨年も、來年も再來年も。……幾ら折つたとて、躑躅に染められた山の色が薄くなるといふやうなことはなかつた。『この花の枝折るべからず』なぞと、禁斷の制札を出すものもなかつた。『一枝を折るものは一指を切るべし』といふやうな惡らしさもなかつた。自由でさうして、歡樂の春！

四

この歡樂の春は、ひととせ、孫右衛門の死によつて、忽ち哀愁の春となつた。孫右衛門の痔疾は可なり進んでゐて、歩行にもひどく難儀してゐたやうであつたけれど、山遊びの歡樂を忘れかねてか、それとも私を失望させまいとしてか、とぼ〳〵と蓙を擔ぎ、力なく行厨を提げて、躑躅咲く山に登つた。さうして其の日、あゝ其の日、夥しい患部からの出血で、孫右衛門は終に昏倒した。血汐は緋の毛氈に滴つて、躑躅の紅と色を競ふた。海苔卷の鮓も、鮑のふくら煮も、よしや喰べたとて、うまくはなささうで、味琳は藥のやうに苦くなつたであらうと思はれた。お駒は周章てゝ村人を呼んで來たので、孫右衛門は、それに扶けられて漸く家に歸つたけれど、其の翌年の、躑躅の花咲く頃には、もう白骨となつて、權現山の隣りの北山といふ共同墓地に葬られてゐた。

『孫右衛門やアい。』

翌年の山遊びに、私は孫右衛門の骨を埋めた北山に向つて、權現山の躑躅の花の中からかう呼んだ。大きな聲で。……私とお駒と二人では寂しくて仕樣がないのだもの。

『孫右衛門やアい。……』

北山から木靈して、私の涙を帶びた聲が戻つて來た。私は到頭赤い毛氈の上で泣いてしまつた。孫右衛門の血は洗ひおとされてゐたけれど、毛氈の色は、例年よりも更らに赤いやうに思はれた。お駒も泣いてしまつた。行厨も味琳もドツサリ殘つて、山遊びはもう其の年きりで止めになつた。去年までは孫右衛門が持ち役の行厨と蓙とを、お駒が持ち、お駒が持ち役の毛氈を私が持つて、登つた時よりは、更らに寂しい心持ちで山を下つた。

五

其のまた翌年から、春になつても、私はもう決して權現山には登らなかつた。年々歳々、紅に咲く躑躅の花が、いつそ恐はしかつたのである。

私は何んの花も咲かない、雜木に繁つた駒塚山といふのに登つて、昔し或る武將の愛馬を埋めたといふ塚の畔で蕨を採つた。其の頃私は、少年ながらも史記を教はつて、伯夷傳をば、ひどく面白いと思つてゐた。あの哀愁に充ちた文章をスツカリ暗んじてしまつた。『……暴をもつて暴に易ふ其の非を知らず……』と言ふ言葉に無量の感慨をおぼえたのであつた。駒塚山の蕨を食つて、馬の墓の畔で餓死したいと思つたことすらあ

る。權現山の躑躅から駒塚山の蕨へと、私の思想は進んで行つたのであらう。歡樂から哀愁へ。——

孫右衞門も死んだ。お駒もそれから五年後に二十一で若死(わかじ)にをした。さうして其の遺骸は、北山でなくて、駒塚山に葬られた。駒塚山の名は、私に取つてまた新らしい意義が生じた。年々歳々駒塚山にはよく蕨が生えた。私はそれを採つて、ちのねばくする莖(くき)を嚙みながら、『……暴をもつて暴に易(か)ふ其の非を知らず……』と、伯夷の悲しい歌を口吟じてゐた。さうして、總べての政治といふ政治は、權力を背景とする限り、畢竟暴をもつて暴に易ふる、ものだといふ思想が、私の心に深く刻(きざ)み込まれた。(二三年三月十日)

春の幻

豐島與志雄

春を想ふと、たゞもやもやつとした世界の幻が浮んでくる。それは日向に蹲つてる猫で象徴される。日向の猫の眼が、細い瞳をぼんやり開きかけては、またうつとりと閉ぢてゆくやうに春の息吹きは、あらゆるもの丶眼を閉ぢさせる冷い空氣と暖い空氣とがもつれ合つて、なま溫い靄を蒸發させ、光と影とが入亂れて　茫とした夜映のうちに融け込み、物の輪郭がくずれて、太い柔い曲線にぼかされ、あらゆるもの丶露はな面が——その奧から覗く神秘な眼が、宛も息を吐けかけられた硝子のやうに、ぼーつと曇つてゐる。何一つはつきりしたものはない。凡てがぼやけてゐる。うとうととなごやかに假睡してゐる。

けれども、日向の猫の身體が、肉感的な微妙な觸覺をそゝる毛並を揃へて、何かしら獰猛な淫蕩なものを内に藏しながら、溫い息に揺いでるやうに、春の息吹きに曇つてるこの白いた世界も、喘ぐ……といふほどではなくとも、或る氣ぜはしない不安な呼吸に肉感的な波動をなしてゐる。觸れたら掌がむづむづとしさうな、無羞恥な蠢めきをしてゐる。脂濃い女の髮の、一筋一筋が生きてゐて、それが一塊にもつれ合つて、じつとりと寢亂れた形である。

日向にまどろんでる猫は、無神論者……といふより寧ろ、無神者である。彼が所有してる神もなければ、彼に君臨してる神もない。神のない世界に日向ぼつこをしてる彼は——淫蕩な身體をうつとりと橫たへてる彼は、刹那主義の享樂者である。そして、神のない地上の刹那刹那の享樂は、如何に雜感的できた力弱いことであらう！其處に、春の歡樂と哀愁とがある。一

面影を石に刻み込むだけの力強い執着は、この世界には存在し難い。一の面影から他の面影へと轉々と移りゆく所に、若々しい生命の喜びがあり、忘られた面影やまだ見ぬ面影が現在の面影の上に重なつてきて、やるせない惑はしが生ずる所に、神のない樂園の悲しみがある。

この世界を見つめてゐると、もやもやつとした中から、次第にさまざまな象が浮出してくる。——その少しを捉へてみよう。

桃や櫻や菜種や紫雲英などの花が咲き亂れてゐる。葉が少くて花ばかり多く群つてるのは、宛も人造花の姿である。自然に咲いた花によりも、室咲きの花、紙や布で拵へた花、それにより多く似てるそれらの花が、如何に華かでまた淋しいか！そして上には、日の光の疊つた盲いた空が、餘りに強い光や風を防がうとするかのやうに、輕やかではあるが低く狹く垂れてゐる。息苦しい陶醉が地上を支配する。自分の舞に眼の眩んだ蝶が、物狂はしく行方に迷つてゐる。自分の聲に魅せられてる小鳥が、喉の裂けるまで囀り交はしてゐる。そして今、それらのものをのせた大地の膚が、種子の芽ぐみ卵の孵る溫氣にじつとりと汗ばんで、間を切つて息してゐる。息と汗の蒸氣とがもつれ合つて、ゆらゆらと陽炎の立つ片隅に、まだ背肌の乾ききらない蛇が淫蕩なとぐろを卷いてゐる。叢の影から、蛙が大きな目玉をむいてゐる。朽葉の上には、蛞蝓が錻銀の粘液をぬたくりながら、匍ひ出しかねて角を潜めてゐる。彼等は——蛇と蛙と蛞蝓とは、互の恐怖から悚んでるのではない。無關心な眼で互に眺めながら、自分自分の猥らな思ひに、うつとりと考へ込んでゐる。そしてそのまはりを、紺青に金線のある蜥蜴が、ひよいひよいと頭をもたげては、また小足にすばしこく馳け續ける。やがて彼は喉が渇いて、顎をひくひくさせながら、池の水を飲みに行く。池の中には、泥にしつかと四足を踏み込んだ大きな牝蝦蟇の背中に、幾匹もの牡蝦蟇が群がつて、執拗な爭ひのうちに絡み合つてゐる。氣を失つた牝蝦蟇は、なほ背中に一二の牡からしがみつかれたまゝ、臍のない太鼓腹を上にして、ぽかりと水面に浮んでくる。

さういふ自然に取卷かれて、蜜蜂の羽音のする物影に、二人の男が若草の上に、寢そべつてゐる、その一人は上氣した艶やかな頰を輝かて、薄ら日の光を微笑の眼で迎へながら、獨語の調子で語り續ける、

——だつて、どうにも仕方がないのだ。僕の魂は風船玉のやうなんだ。一つ處に繋いでおいたら、空氣がぬけてしぼんでしまうばかりだから、風のまにまに飛ばしておくのさ。何か一つ

を選べつて? 選べるくらゐなら、こんなに彷徨し續けやしない。僕の眼には凡ての女性が、同じくらゐに、そして別々の色合で、みな美しいのだ。晝間の倦い明るみの中に居ると、僕の心はあの娘の處へ飛んでゆく。娘の小ちやな魂を、ぎゆーつと掌の中に握りしめて、空高く放り上げてやらうか、地面の上に踏みつぶしてやらうか、それとも胸にやさしく抱いてやらうか、何れともきめかねて、惑はしい思ひのうちに時間が過ぎる。その躊躇の間が樂しいのだ。馬鹿げた空想が次から次に起つてくる。そして空想の合間合間には、それが自分の選むべき娘だらうか、もつと他に優れた娘がゐはすまひかと、世界中の處女をよせ集めて、その顏を一つ一つ覗いてみたい氣がするのだ。そのうちに僕は凡てが懶くなつてくる。あるがまゝに凡てを受け容れたい氣になつてくる。けれども、しつとりとした宵闇の中に夜の灯が瞬きかけると、僕は蘇つたやうに身體を起して、華かな巷の方へ狙ひ寄つてゆく。豐滿な肉體を臙脂の香りに包んだ怪しげな女性が、ずらりと僕の前に並んでゐる。どの顏にも見覺えはないが、どの顏にも親しみがある。盃に映つた火影、なよやかな衣擦れの音、物に遮られた街路の擾音、凡てのものが、踊れ、踊れ、狂ふまで踊れ、と囁きかけてくる。ぢつとしてゐることが出來ないのだ。たゞむちやくちやに、心を怪しくそゝるやうなことがしてみたくなるのだ、しないではをれないのだ……。

それらの言葉を、も一人の男は眼を伏せて聞いてゐる。やがて彼は默つて立上つて歩み去る。首垂れて眼を地面に落しながら當もなく歩き續ける。どんよりとした空にいつのまにか蒼白い雲がかけて、細い雨が音もなく落ち初めると、彼は慌しく自分の室に戻つてゆき、いつまでもうつとりと考へ込む——片戀のまゝで別れた彼女のことを。心弱さのために我と自ら身を退いて、いつしか音信も途絶えてしまつた今、ふつと切なく思ひ出されて、如何したものだらうかと、やるせない迷ひのうちに、空想の輪を十重二十重に織り出して、彼女と自分とをその中に絡め溺らしてゆく……。

それらのものゝ上に、夜の露が繁く結ばれて、清浄な朝日の光が、澄みきつた爽かな世界を齎してくる。萠え出たばかりの瑞々しい花や葉や、眼覺めたばかりの汚點のない魂が、一度にぞつとおのゝいて、眼に見えない輝かしいもの——神とも云へるもの——の方へ、おづおづと瞳を擧げる。淸らかな求道の園である。然しそれはたゞ一瞬のことである。間もなく凡ての瞳が、春の息吹きにふーつと曇つてくる。そして、神のない地上の力弱い樂園が——刹那刹那の歡樂と其處から來る哀愁とが、

凡てを包み込んでゆく。

私の斯かる春の幻は、可なり不安定で搖ぎ易い、實際、春は餘りに慌しい。私一個の感じから云へば、櫻の花の開きそめる四月上旬までは、まだ多分に冬であるし、木の葉の出揃つた新緑の頃は、春と異つた別の世界である。

想華

打首問答

水野廣德

場所は郊外の新開地。二百坪ばかりの畑地を開いた地面に、當世流行の文化建築とか云ふ和洋折衷の新築家屋。青いペンキ塗の西洋窓の付いた六疊敷ばかりの狹い應接間。主人Aは多年潮風に灼かれた赤黑い顏に目玉がギロ〱、鼻下のチョビ髭には五六本の白髮が交つて居る。客のZは主人と同窓らしい男。

Z「エライ洒落た家を建たの。『サーベルが首を切られて家が建ち』などは川柳にもならんかね。では『華府は寢て待て』はどうだい。ハッハ。ところで一體切られ料いくら貰ふのかい。與三さんなら差當り三十四個所と極まつて居るんだが……。

A「相變はらず駄辯に駄洒落とを弄する男じやね。判つきりしたことは知らないが、中將で二萬圓と云ふから少將でまア一萬五千圓、俺等のところで一萬は下るまいと見當を付けて、此の家屋敷を買つたんじやがね、斯んな田舍でも貴樣、坪五十圓もするんだから叶はないよ。何でも此の地面などア七八年前に坪十圓ぐらゐで買つたんじやと云ふからの。金を持つて居る奴は獨り手に金を儲けるのじやね。

Z「一萬兩とは少々羨ましいなア。夫じやア、日獨戰爭の戰死者賜金よりも多いじやないか。矢張り、世の中に死ぬほ

ど馬鹿なものはなしかね。九段の神様よりや此處の主人の方が嬉しいからの。地代が高いの安いのと文句を言ふな、どうせロハで貰つたアブク錢じやないか。之で又貴様の息子が坪百圓ぐらゐで賣り飛ばして金儲けをするんじや。併しまア斯うやつて置けば、アイスや會社ゴロの食ひ物にならずと濟むから一番安全じや。軍縮手當のゲジ／＼が全國に網を張つて虎視耽々じやと言ふからの、ところで裏の方に大分空地がある樣じやが、借家でも建てゝ社會奉仕の爲め俺にロハで貸さんか。軍縮手當だつて、俺等の樣な浪人の汗も交つて居るんだぜ。

A「坪百圓なら息子の代まで待つて貰はなくても、今でも讓つてやるよ。軍縮手當が貴樣等の汗なら、貴樣達浪人の飼扶持も俺等の稅金から出て居るんじや。あまり大きな口は利いて貰ひたくないね。それに貴樣は涙金とか、アブク錢とか、イヤに惡口を言ふが、元々俺等は一生海軍に御奉公する積りで軍人になつたんじや。それを軍縮と云ふ國家政策の犧牲となつて、身を退くべく據なくされたんじやないか。政策の爲めに生ずる犧牲者に對して之を保護救濟するのは國家の義務であると同時に、犧牲者たる俺等は之を要求する權利があるんじや。會社の都合に依つて解雇せられる職工が退職手當を要求するのと同一理由じや。貴樣が恩給を頂戴して居るのも同じ事じやないか。御情けでも、御涙でも有りやしないんじや。

Z「ハツハツハ、そうまア向きになつて怒るなよ。何も貴樣の家へ火を付けて燒いて仕舞ふと言ふんじやないから。だが併し、恩給と軍縮手當とは多少性質が違ふぜ。抑も恩給なるものはじや、官吏が在職中に失つた生活能力に對する國家の賠償であつて、之を受くるは俺等の權利であることは、歷代の法制局長官の解釋じやから先づ間違ひは無いだらう。既に權利と聞く以上、俺等は賃金を請求する積りで正々堂々大きな顏して請取つて居るんじや。元來恩給なる文字が、抑もの間違ひで、宜しく退職俸とか、賠償金とかに改正すべきものなのじや。權利に對して恩給などゝ恩に着せるのは專制的思想の遺物じやよ。併し名義は何うでも構はない、多い程好いとしてサ、凡そ軍人を志願した者は貴樣ばかりじやない、皆んな一生奉公の積りで入つたんだぜ。然るに是まで現役停年に達しないうちに政府の都合に依り、中途で首を切られた者は何萬人とある。尤も俺等の場合は聊か事情を異にするがね。是等の切られた男は皆政策の犧牲じや

が、貴樣等の樣に一萬圓は愚か十圓の鼻糞金も貰つた者は無いのじや。だが暫らく理窟は拔きにして考へて見ろ、敢て貴樣に向つて言ふのじや無いから變に氣を廻はしちや困まるぜ。今度の陶汰者の中にでもじや、假令軍縮が無くても當然首になる連中が尠くないことは貴樣も承認するだらうね。其の他の者とても後二三年か、長くて四五年も經てば御拂箱になる手合ばかりじや。大將元帥となつて一生捨扶持を頂戴しつゝ、若い者から何とか、カンとか、死に損ひの樣に蔭口を言はれる樣な有難い身分になるものは、一人有るか無いかじや。そこで三四年首を繋がれて幸に腕の筋が一本ぐらい殖へたところで何うじやい。一萬、二萬の纒つた金が溜まるかい。まア港々を飲み歩いて田舍の不見轉に奉仕する位が關の山じやないか。何年經つたつて家の一軒も出來つこは有りやし無いぜ。尤も駐外武官や、殖民地稼ぎをやつた連中には相當小金を溜める奇特者も無いでは無いがね。新聞で見ると、毎月缺さず一千圓づゝ送つて來る外國勤務の閣下樣もあつたと云ふからの。俺の知つてる男で青島か滿洲かに二年ばかり行つて居たが爲め歸つて來ると早速立派な家を建てた佐官もあるが、斯んなのはまア例外じや。そこで前に戾つて、元來權利なるものは同一事情の下に於ては機會均等なるべきものじや、若し機會不均等の場合には、そこに必ず御情的恩惠があるに極まつて居る。同じ國家政策の犧牲者にして、或者は手當を貰ひ、或者は貰はぬとすれば、貰つた者は御情的恩惠に與つたものと云ふことが出來るじやないか

A「何だか譯の判らんことをペチヤクチヤと好く喋舌る男じやね。まア一歩讓つて御情けでも、恩惠でも宜いとして置かうよ。貰ふものなら夏も小袖じやからね。併し青島や滿洲でドロつて來たのぢやないから、夫だけは安心して吳れ。

Z「そう素直に折れて出られちやア議論にはならないがね。併し今度の軍縮手當は甚だ不公平で、而も過大じやと云ふ聲が高いぜ。十把一からげに進級はさして戴いた上、莫大な手當まで貰ふんだから、自然消滅黨の爲めには華府會議大明神樣じや。うつかり亞米利加の方へ足でも向けて寢ると罰が當るぞ。俺達が軍縮を唱へた時にや、貴樣等は國賊の如く惡口を言つたものじやが、今じやどうだい、チト手當の分合でもよこさんか。大骨折つて鷹の餌食とは此の事じやね、ハツハ……

A「妬く奴には幾らでも妬かして置くさ。だが待てば甘露の日和ありで、人間何でも噛ぢり付きに限るね、踏まれても蹴られても、ダニの樣にしがみ付いて離れないのが一番じや。貴樣の樣に自我を發揮すると兎角德はせんからね。俺だつて、劍を叩き折らうと思つたことは是迄に幾度あつたか知れないんだが、鼻の下の可愛さに今まで辛棒して居た御蔭で結局噛ぢり付き賃にあり付いた譯さ。世の中に盲從の美德と、叩頭の禮儀ほど尊いものはないぜ。

Z「イヤ仝じや。盲從の美德、叩頭の禮儀、貴樣の言としては近來の傑作じや。絕對自由の精神に生くべき政治家ですら、叩頭の禮儀を忽にせば議員に當選せられず、盲從の美德を失へば政黨に籍を置く能はざるが、今の日本の狀態じや。況して奴隸の如き服從と、機械の如き禮式とを生命とする軍隊に於ておやだね、盲從と叩頭とは世俗的出世の秘訣じやよ。『人間處世の秘訣は噛ぢり付きに在り』と、青年訓へでも書くかな。俺は最初から主義としては軍縮手當に反對しないんじやが、實際問題としては考量の餘地があるね。戰死者よりも餘計の金をやるなんて以ての外じや。Y女史の歌じやないが「君死ぬるなかれ」と、政府自ら軍人に敎へるのと同樣じや。第一政府にそんな金が有るなら、何故廢兵や遺族を救助しないんだらう。一方には彼等を路頭に迷はして置きながら、一方には貴樣等の樣な足腰の達者な者に莫大の手當をやる樣では、軍人精神も、忠君愛國もあつたものじやないよ。『お前達も戰爭に行つて怪我をしたら、斯んなに乞食にならにやならんのだよ』と、國民の前に生きた標本を示して居るんじやない瞉。撥兵達をして『足一本で九圓』など云ふ札をブラ下げてサ、帝都の眞ん中にデモンスーレーションを行はしむるに至つたのは實に國家の恥辱だぜ。師團の一個か、軍艦の一隻か減らしやア、癈兵や遺族なんか、どんなにでも優遇が出來るんじやないか。俺達には軍事當局者の氣が知れんがね。併し御互に指一本亡くさずに、御役を果して若隱居仰せ付かつたことは先づ〳〵以て仕合せだよ。そう思つて軍縮手當なんか潔よく吐き出して廢兵院へでも寄附しろよ。

A「御忠告誠に有り難う。だが俺は前にも云つた通り、軍人精神を奉體して盲從主義じや。格別こちらから要求もしないのに、御上の方から遣らうと命令されるものを頂戴せぬのは上命反抗で、軍人精神に反するからね。加藤首相だつて「賜つた優遇を拜辭することは餘程重大な問題じやから答辯の限りにあらず」と云つてるじやないか。撥兵や遺族の事

なんか、俺達の關係したことじやないんじや。

Z「薄情な奴じやね。斯んな男に一萬圓も遣つたところで、忠君愛國の相場は騰がらないがのウ。京都の御獵場で猪の名代をして撃ち殺された勢子の慰藉料が五千圓で、一の關とかの汽車衝突で殺された大學生の損害賠償金が三千圓じや。夫に比べると貴様の一萬圓なんさア、餘程節約の御趣意に反して居るぜ。

A「そう一萬圓〳〵云ふな、胸糞の惡るい。俺だつて之で一度や二度は砲煙彈雨の中も潜つて來たんじや。世の中にや、待合で別嬪を抱かされた上、何十萬と云ふ不正の金をセシめる奴も澤山あるじやないか。彼奴等に比べりや俺なんか、まだ大分不足があるんじや。

Z「慾の深い奴じやなア。だが貴様の云ふことが本當じや。俺の知つてる或るMPがあるがね。奴さん別に定職が有るではなし、唯面の皮の厚いのと、握掌術の甘いのとを運動資本として、議員になつたり官吏になつたりして居る中、十年あまりの間に素寒貧から今じや何百萬圓と云ふ大金を作つたといふ噂じやがね。貴様、アノ兼好法師といふ坊さんを知つてるじやろう、ソラ徒然草を書いた男サ、もつと具體的に說明すりや「色好まざらん男は玉の杯の底の無き心地ぞすべき」と喝破して、貴様達に隨喜の淚をこぼさしめた坊さんサ。彼の徒然草の中に、「昔より賢こき人の富めるは稀なり」と云つてる處より考へると、あの時代は馬鹿が金持になつたんじやね。ところが六百年の間に世の樣の移り變りでサ、大正の今日俺をして云はしむれば「今の世に正しき人の富めるは稀れなり」と訂正するの必要を感ずるね。兼好に從へば富は馬鹿の代表で、俺に從へば貧は正直の象徵じや。併し歷史は繰り返へすと云ふから、今後何十年か何百年かの間には、兼好の時代が再現するかも知れないよ。露西亞は既に實現して居るからね。兎に角其の道に懸けては御互に低能兒じやの、生れどきが丁度惡るかつた。

A「どの道に懸けたつて世の中に出りや、兵隊のお古は低能兒サ。どうも生きた人間は船の樣に船長さんの言ふ事を聞いて吳れないから困まるね。先達も貴様、或る處から現金の代りに小切手とか云ふものを受取つたのじやがね、郵便局持と同じ樣な積りで、何時でも受取れるものと思つて、抛つたらかして置いたのじや。其の後暫らく經つて序があつた

から銀行へ受取りに行くと、支拂期限が過ぎて居ると云つて拂つて呉れないじやないか。先方へ掛合つても、何だ、かだ、と云つて埒が明かないから、癪に障つて引き破つて仕舞つたがね。世の中は便利な樣で不便に出來てるよ。

Ｚ「そいつは御氣の毒だつたね。だが、まだ非道いのがあるぜ。大分前の話じやが、田舍から出て來た若い士官が三越か何處かの商品切手を貰つたんぢや。先生すつかり引換切手とでも思つたと見へ、三越へ現金と引換へに行つて恥を掻いたと云ふ話じやがね。そういふ俺もじや、實は滑稽な事があるんだよ。いつだつたか、婢の臍繰が少し許りあつたのじや。郵便局は利が安いし、滅多な銀行は危ないし何處か確實な銀行をと慾張つて考へた結果、日本銀行なら一番安全じやと思つて早速持つて行つたんじや。銀行の窓口で恐る〳〵「少し貯金をしたいんですが」と云ふと、係りの人が「左樣ですか、お幾ら位」と問ふから、三百圓と云つたものサ。すると其の人が妙な顏をして「それなら、お隣りの三井銀行か。向への正金へ御出になつたら宜しう御坐いませう、此處では小額の預金を扱ひませんから」と斷はられたのじや。變な銀行じやなアと思つたが、後で能く日本銀行の性質を調べて見て冷汗を掻いたがね。何しろ兵隊の爲ることは世間離れがして居るよ。海軍でも打首黨の爲めに講習をやつてると云ふが、貴樣は行かないのか、閑潰しに小切手の受取法でも習つて置けよ。

Ａ「そんな書き物が來るは來たがね。今更八十の手習じやよ、大學生の若い人さへ就職口が無くつて遊んで居るのが澤山あると云ふじやないか。軍縮手當を呉れたのも、一つは世間の失業緩和の爲めじや。禿爺が若い男と競爭して、ペコ〳〵書類の持ち運びでもあるまいじやないか。夫よりや人夫にでもなる方が優しじやよ。

Ｚ「感心〳〵、其の點だけは貴樣も聊か話せる。進級はする、恩給は貰ふ、過分の手當金は受取る、まだ其の上に仕事に有り付いて一儲しようなんて、チト虫が良う過ぎる話じやぜ。一體今後の首切問題で世間が餘まり騷ぎ過ぎるよ。一割位の首切は是まで他の社會には幾らでもあるじやないか。軍備を擴張すりや進級が早くなるし、縮小すりや切られる者の出來るのは當り前じやないか。軍備を擴張した時、進級が早や過ぎるからと云つて、俸給を値下げした話を聞かないからね。夫にしても海軍の切られ黨は陸軍に比べると、餘程捌け口が良いと言ふじやないか。中學校や女學校あたり

からの註文が大分有ると言ふことじやが、貴樣のところなど申込はないかい。

A「女學校なら行つても宜いが中學校の腕白相手は眞つ平じや、アッハッハ。

Z「其の年で、其の面でかい。人間死ぬる迄己惚は止まんものと見へるね。軍港のヘナチョコ藝者を相手にする樣な氣で、生徒を扱はれちやア溜まらないよ。何しろ船の奴と來たら、藝者と婦との外、女なるものを理解しないんだから叶はないサ。……どうだい、もう大概飽いただらう。

A「否いや、まだ足らん。艦長は良いね。あの味はトテモ一生忘れられもせんが、もう再び味ふことも出來ないと思ふと殘念だね。天上天下唯我獨尊の專制君主じやからの。小喧ましい法律の干渉は受けず、小うるさい社會の煩累には接せずサ。入つては王侯、出ては大盡じや。「艦長止められよか、止められうか艦長、艦長ならこそ持てもする」じやからね。俺なんか艦長をやらして吳れりや、一生進級なんかしなくつても宜いがの。

Z「テチこと仰つしやいましたかねじや。貴樣は夫で好くても山の神樣が御承知にならないだらうよ。第一小供の手前を考へて見ろ、早い奴は孫のある年じやないか。あゝ云ふ手合に高い月給をやつて抱へて置くのだから、冷靜に考へて見ると國家なんて云ふものは妙なものじやね。ところで、あの後どうしたい、甘く解決したか。あの時は隨分手小摺らしたぞ。何れ御挨拶があることゝは思つてゐるがね。

A「君子は人の舊惡を發かずじや。船の出來事は治外法權じやからの、アッハッハ。

Z「エライ乙なことを云ふね、時効に懸るにはまだチト早いぞ。ウイスキイ一杯で帳消しにするなんて、如何に時節柄でもあまり節約過ぎるぜ。山の神に素つ破拔けば、少くも牛鍋位にはなる問題じやからの。俺も浪人はしたつて、憚りながら未だ君子なんかに出世しないんだよ。

A「牛鍋とはエライ謙遜したものじやね。浪人すると、そんなに根性まで淋もしくなるものかの。

Z「下から出りや付け上がりやがる。まるで何國かの外交家みた樣な奴じやね。貴樣との談判なら赤坂以下では妥協しないよ。併し此の問題は當分まア保障占領として殘して置かう。ところで、斯う熟〳〵見渡せばじやね、之で狭しと

雖ども西洋間なり、裏打の柳行李と雖ども肱掛椅子あり、彼方の隅には關税逋脱の上海戸棚あり、向ふの棚には旅順堀出しの砲彈のカケラありじや。俺んとこの樣に、夜小供を嚇かすと、客を通す部屋さへ無いのに比べりや、聊か人間の棲み家然として居るね。唯恨むらくは、暖房裝置として此のヒビの入つた單丸火鉢を奈何せんやだ。當世流行の石油ストーブでも一つ張り込めよ。夫に此の「秋一」とお花魁煙管とが目障りじやね、シガーとまでは行かなくても、せめてネーピーカットぐらゐ接待用として供へて置かんか。西洋窓が泣いてるぜ。

A「馬鹿云へ、こりや國粹保存の爲めなのじや。夫に和製の煙草と來たら、火が落ちて着物を燒いて困まるんじや。俺などの着物は、寢間着から一張羅に至るまで、膝に燒穴の開かさるはなしじや。煙草は「刻み」に限るね。殊に斯う長い奴でやると、多少追懷の情も加はるしね、アッハッハ。

Z「巫山戯るなよ。だが日本じや目下國粹保存の大流行じや。國粹とか、國風とか、國柱とか、國の字の冠詞さへ付けりや、化石頭の役人や、慾張りの富豪などは喜んで御賽錢を投げるんだからね。何しろ立憲政治の下に變な暴行團が横行するんだから、貴樣ところの西洋室に單丸火鉢がノサバッて居るのも當世流かも知れないて。

A「そう云へば近頃頻りに物騷なのが出來る樣じやないか。後藤市長を追ひ廻はして居た何とか團と云ふのもあつたね。日本も今に伊太利の二の舞か。どうだ一つ和製ムッソリニにでもなつちや。

Z「候補者はそこら邊りに大分ゴロ〳〵して居る樣だよ。レニン一轉すればムッソリニ、ムッソリニ一轉すればレニンさ。どちらでも好い、泥の日向水で行水する樣な穢ない生温い政治では、不愉快で堪へ切れないね。どうせ此の儘じやア永くは續くまいよ。先達も軍人恩給増加團の大會を覗いて見たがね。一種の面白い空氣が渦卷ひて居たぜ。一つ舵を誤まつたら暗礁に乗り上げるに極まつて居るんじや。今の日本にや、思想を示す海圖も無けりや、思想を導くコンパスも無いんだからね。そこへ持つて來て、艦長さんも航海長も目が見へないと云ふんだから危ないものサ。

A「恩給増加運動が大分烈しい樣じやが、一體恩給だけで飯が食へるんかやね。俺達も頗る心細いんだが。

Z「食へるも、食へないも、無いじやないか。食へなけりや餓へ死ぬるか、叩き殺すか、二つに一つの途しか無いんじ

や。一體生きるとは何ぞやじや。息の通ふを以て生きると云ふなら、粥の汁を啜つて居たつて息だけは通ふからね、監獄の囚人だつて、養老院の爺さんだつて、息だけは通つてるサ。そこで恩給増加運動團では、恩給増加の要求と同時に貴樣にベラボウな軍縮手當をやるのが不公平だから、之を恩給増加の經費に當てと云ふんじや。貴樣も折角國粹保存の西洋室なんか建てゝ、ブル氣取りに收つて居るが、うつかりすると明智光秀の三日天下で殁落するかも知れないぞ。若し愈手當を貰ふことになつたら、在郷軍人團から特別部落として排斥するんだとサ。

A「非道いことを言やがるなア。併し特種部落でも何でも構はない、握つたが最後死んだつて放なしやしないんじやから。それに特種部落も近來相場が騰貴して、華族樣まで其の仲間入りを爲せられたのだからね。寧ろ却て光榮とすべしだらうよ。夫よりも俺は此頃日の暮らし方に困まるがね。朝から晩まで傳左衛門と睨みつこをして居たつて始まらないし、と云つて別に道樂があるでも無ければ、書物を讀むのは嫌ひだし、仕方が無いから鷄でも飼つて見ようかと思つて居るんだが、貴樣は何か極まつた仕事でもやつて居るかい。

Z「何かやりたくつたつて金が無くちや今時手も足も出せないじやないか。と云つて俺等の樣な氣儘者は使つて呉れ手も無しサ。縱しあつても、今更何時出勤何時退廳の腰辨生活は迚も勤まらないからの、だから依然として全くの浪人樣じや。尤も浪人と云つても色々あつてね、以前は支那浪人などは餘程羽振りが良かつたが、軍閥の凋落と共に今じや大分影が薄くなつた樣じやがの、其の他政黨浪人、勞働浪人、官營浪人などもある樣じやが、俺等のは純正浪人じや。併し浪人したつて、ちつとも退屈はしないよ、寧ろ日の經つのに早きを恨む位じや。俺なども今少し纒つた閑があれば、大學の聽講にでも行き度いと思つて居るんだが、何分にも貧乏忙はしくて困まつて居るんじや。貴樣なんかも今から鷄など飼つて隱居せずと、社會運動にでも活動しろよ。

A「社會運動も面白からうが、民間運動は黑框の危險があるし、それならと云つて、救世軍の向ふを張つて御用運動も氣が利かないからの。兵隊の古手じや、まア定價の極まつた煙草屋の番頭以外に使ひ道は無からうよ。尤も腰が低くて、酒が強けりや、會社には御役人絡範係と云ふ仕事も有るには有るがね。併しまア君子は危ふきに近寄らずサ。士族の商

賓と盲目の丸木橋とは、昔から危ないものと相場が極まつてるからね。

Z「馬鹿に君子振るじやないか。序に君子は軍縮手當を貪らずとでもやれ。何でも兵隊さんは恩給證書と自分の嬶とを後生大事に抱いてさへ居りや、夫が一番安全じや。恩給證書の抵當が三割以上も有ると云ふからの。新聞の廣告や、四ツ角の張紙を見ても大概想像が出來るが、本職と內職とを合はしたら東京だけでも恩給アイスが何百軒と有るそうじやよ。法律じやア恩給證書の抵當質入を禁じて居るが、需用供給の自然法則の前には法律の威力なんか無效と見へるね。世の中にや物好や醉興で借金をする奴は無いんじやが、斯んな規則が有る爲めに、已むを得ず見す〳〵アイスの喰物になる者が多いんじや。是なんどは溺れる人間を助けようとして、却て竿竹で突き沈める樣なものじやね。官營の自動車で飛ばす御役人のする事は萬事此の轍サ。

A「無暗に規則を非難するが、貴樣なども氷庫へ幽閉して居るんじやないかい、アツハツハ。

Z「幸か、不幸か、三月に一度づゝは令夫人が郵便局へ御走り遊ばすよ。

A「でも、貴樣なんかは羨ましいなア。筆の先で勝手な氣焰を吐いてさへ居りや飯が食へるんだから。世間じや、貴樣は現役を止めた方が收入が多ふからうと云ふ評判だぜ。俺達も言ひ度い事は澤山あるんだが、文は遣り度し書く手は持たずでね。

Z「ハツハツハ、夫こそかいたいの梅毒羨やみじや。兎角下司の目には他人の女房が別嬪に見へたり、他人の懷中が膨らんで見へたりするものサ。昔或る大名が、川原に裸で寢轉んで居る乞食を見て、ア、彼等は定めし淋しいことであらうと羨やんだと云ふ話もあるじやないか。貴樣等には勝手な氣焰と見へるかも知れないが、あれでも俺の爲めには本眞劍だぜ。折々變な無名の手紙が舞ひ込んで來たりするからね。併し又文を書く樂みは其處に在りだね。殊に贊成よりも反對に出會つた時の方が一層緊張的快感を催ふすね。だから反對說に對しては默殺するのが最良の策じやね。生じつか反對すると、敵に勇氣と快感とを與へる樣なものじやからの。夫に文章の效能は、中立者を味方に引き入れ、併せて同志に勇氣付けることに在つて、思想の既に固定した反對者を、文章の力に依つて屈服せしめることは殆んど不可能だ

よ。俺は演説の方は知らないが、文章でもじや、パン問題と利益問題とを離れたもので無けりや、本當に力の入つたものは出來ないね。鐵砲を打つのだつて、さうじやないか、大砲と標的との間に己と云ふものが入つた日にや中らしないからの。

A「そりや全くさうじや。だが世の中は己と云ふものを全然拔きにしたら生きて行けないから困るじやないか。近い話で今度の軍縮手當でもじや。心の中では何だか濟まない樣な氣がしながら、若し手當を廢して恩給の方に廻はすと云つたら、俺は大に反對するね。

Z「まアそれが人間の本性だらうよ。だが、そこには所謂「要領」と云ふ奴があつてね。俺等だつて全く己を拔いて仕舞つたら、今の日本じや文は書けないよ。孔子にして尚ほ陳祭の厄ありだからね。少し極端かも知れないが、今の日本にや弱者貧者の眞の言論なしと云つても宜いだらうよ。若し弱者の言論があるなら政治は今少し道理的になるであらうし、貧者の言論があるなら社會は今少し公平になるであらうと思ふがね。僕の處へも一度遊びに來て見い。附近唯是れ富豪長者の巣窟サ。芝堤石壁境を連ねて、雲深き處遠く樓屋を望むと云ふ光景じや。東京に過激派が起つたら、差し向き好目標となる場所じやね。尤も俺の家は先つきの名刺にある活字の通り顯微鏡で搜さにや判らん樣な家たがね。俺は外出する毎に、何故自働車を有する富豪なるものが市街の眞ん中に、斯くの如き廣大なる地面を獨占して御殿の如き巨屋を必要とするかを疑はざるを得ないんじや。此の中の一軒の家に就いて面白い話があるんじやがね。名前は預つて置くが、何でも主人は日本の大會社の重役とか云ふことじや。最初此の屋敷を建築し始めた時には壯大恰かも宮殿の如く田舍者が明治神宮樣かと尋ねた程じやからね。それがどうだい、忘れもせぬ四五年前の洲崎品川あたりに大海嘯のあつた大荒しの晩さ。ちつぽけな俺の家なんか吹き飛ばされはしないかと夜通ふし心配した程の大暴風でね。瓦が飛ぶ、垣が倒れる、樹が折れる、小供が毎日樂しみにして居た庭の柿の實が一晩の間に悉く落ちて仕舞つたと云ふ騷ぎサ。翌朝附近の損害見物の爲め通りへ出て見ると、八分通り出來上つた件の神宮的大邸宅が倒れて居るじやないか、潰れて居るじやないか。蟇がへるを石の上に叩き付けた樣に、見事にベチヤンコにズンで居るじやないか。何でも夜中に恐ろしい

音がしたと思つたが、多分其の時に倒れたのだらうよ。一本〳〵白紙で包んだ檜柱が雨に打たれ泥に塗れて散ら張つて居るじやないか、大きな棟木の一端が混亂せる木材の間から、斜めにニユツと物凄く突き出て居るじやないか。通行人は足を留めて愉快氣に見て居たね。成金反感の烈しかつた頃だから、痛快じやとか、良い氣味じやとかと云ふ囁きが多くの唇から洩れたね。多くの貧乏人どもが此の邸に對して如何に大なる惡感を抱いて居たかゞ窺はれたね、其後神宮式を改めて今の家に建て換へたのじやが、先達も此の邸へ大きな松の木を持ち込んだものじや。一本の松の木を塀を越して屋敷の庭へ運ぶのに、四日か五日の間、毎日多數の人夫が朝から晩まで汗水垂らして働いて居るじやないか。一本の松の木と多數の人間の汗と、どちらが尊といかと俺は考へさゝれたね。

A「實際東京の町を歩いて見ると、馬鹿〳〵しい程大きな地面を占領して居る家があるね。併し近頃大分華族や富豪の邸宅解放が流行る樣じやないか。結構なことじや。

Z「あれで社會奉仕だとか言つて居るそうじやから圖う〳〵しいサ。ロハ同樣で召し上げた上、税金らしい税金も拂はず、一坪百五十圓の二百圓のと云つて、社會奉仕が聞いて呆れるじやないか。體の好い營利事業じやよ。折角解放した土地を高く賣つたり、貸したりで、附近の地代は騰貴して却て貧乏人いぢめサ。でも御犬樣の運動場として遊ばして置くよりや幾らか優しだらうよ。頑冥專横なる華族富豪連が所有地の一部なりとも、社會に解放する樣になつたのは全く時代の力だぜ。彼等は思想の惡化と云ふが貧乏人の爲めにや思想の善化じやよ。邸宅地解放の如きも利巧者の退却準備に過ぎないんじや。と云ふと金持ばかりが惡い樣じやが、貧乏人の中にも隨分惡い奴があるからね。俺の知つてる家主の話に依ると、三年間も家賃を拂はず、出て與れと云ふと過大な移轉料を出せと云つて、挺でも動かん先生も有ると云ふからね。要するに世の中は一押し、二金と云ふが押が強いか、金が有るか、どちらかでなけりや駄目だぜ。押し方じや貴樣も餘りヒケは取らん方じやつたが、ハツハ……

A「何か知らないが、兎に角東京の家賃は高いね。俺とこたどは家族が多いから、どうしたつて五間は要るんだが、斯んな田舎でも五間で五十圓取られるからね。俺等も小供の教育上東京へ腰を据へたもの丶前途極めて暗澹じやよ。

Ｚ「假りに大佐の恩給から、家賃が五十圓、小供が一人高等學校へでも通つて居ると幾ら儉約しても五十圓は掛かると云ふから、夫を差引くと殘りタッタ五十圓じやないか。夫で一家眷族の衣食を辨ずるのじやから見ヂメたものさ。それこそ生の魚は朔十五日にチラと臭を嗅ぐ位なものだらうよ。此の上御上の御趣意を尊重して正直に節約でも仕ようものなら、生きたミイラになつて仕舞ふぜ。二番目の子供からは中學校へも滿足に通はすことは出來ないぜ。陸軍じや幼年學校を立てゝ貧乏士官の子弟を收容してやると御親切に仰つしやるが、親の情としてミイラ二世を作る程無慈悲にはなれないからの。先日も或る陸軍の浪人が來て、恩給をどうにかして與れなけりや、在郷軍人同盟して息子を軍人に出さないことに仕ようじやないかと云つて居たよ。餘程バロメーターが低いぜ。

Ａ「アノ貴樣、〇〇ね。今までは國家即海軍主義者で、青年の顏さへ見りや海軍になれ／＼と勸めたものぢやが、今度首になると、息子を海軍に入れたことを餘程殘念がつて居るぜ、人間は何處までも人間で、迚ても神樣にはなれないと見へるね。

Ｚ「ハヽ……そんなに變つたかね。併し夫で世の中が新陳代謝して宜いのじやよ。兎角職業の世襲は情實と因縁とに依つて、社會を沈滯腐敗せしめるからね。勳章と金ピカとを好む金持の子は軍人にならうし富を求むる軍人の倅は實業家にでもならうしさ。見い、軍人の息子で軍人に成つた奴に良いのは尠ないからの。つまり親爺の勢力を笠に着て勉强をしないからだね。俺なども本人が希望すりや決して止めはせぬが、小供に軍人になれと勸める氣にはなれないね。軍事當局者はヤレ將校生徒の志願者が減つたの、ヤレ素質が下つたのと泣言を言つてるが、そりや減るのが當り前じやよ、下がるのが當り前じやよ。中學校の生徒だつて、目もあれば性根もあるからね。第一今の軍閥の連中共が自分の倅は軍人にせずに置いて、他人の小供にのみ軍人になれ／＼と勸めるのは道德上の罪惡じやよ。御互にアノむつかしかつた入學試驗をパッスするだけの勉强をすりや、どんな學校へでも入れたんじやがね。唯學資の無かつたばつかりにサ。併し世の中は例はり持と云ふから、今頃軍人を志願する者は將來或は、德かも知れんぜ。

Ａ「世の中はまアそんなものだろね、塞翁の馬とは能く言つたものじや。

Z「要するに各人の持つて生れた運命さ。近い話が加藤首相でも見い、華府會議が一年遲けりや、首相どころか海軍大臣として切腹問題だつたんじやよ。夫が好い工合に華府會議が開かれたばかりに、切腹は免れるし、總理大臣にはなるし、今に論功に依つて子爵とか、肥シヤクとかになると云ふことじやないか。彼に取りては正に得意の絶頂じや。之も世間から兎や角非難されながらも、大隅、寺内、原、高橋と、主義政綱を異にせる四代の內閣に嚙ぢり付いて、盲從の美德を發揮した御蔭だらうね。東鄕大將の爲めには露西亞大明神じやが、加藤首相の爲めには亞米利加大明神じやよ。世間ではヤレ七割なけりや國防が危いとか、ヤレ大坂城の城の壕埋めじやとか、色んなケチを付けるが、俺等は華府協定は日本の大利益、加藤さんの大成功と確信して居るんじや。

A「だツて貴樣、ヒユーズの奴等が自國本位に勝手に定めた案を御無理尤もで承諾するなんて、餘り意氣地が無さ過ぎるじやないか。夫に第一國防力に差等を設けるなんて、國家の威信を損ずるのみか、國民の士氣を阻喪せしむる罪惡じやぜ。あんな盲判を捺して來る樣なら、小學校の生徒だつて出來るサ。

Z「ハツハツハ、困まつた男じやね。貴樣も矢つ張り「面舵」「取舵」の船頭仲間じやの。斯んな古臭い問題を今更蒸し返へして議論するのも馬鹿〳〵しいが、船の奴等も好い年をして田舍Sを相手に柄にもない「鯱掬ひ」なんかの稽古をする閑に、も少し頭と目玉とを世界的に、政治的に働らかせんものかね。斯んな判らず屋を押へ付けて、盲判でも何でも構はん捺して來た處は加藤でなけりや出來ない藝當じやよ。世間では蠟燭の燃へ殘りとか何とか惡口を云ふが、兎に角華府協定を成立せしめた點だけは、友さん一生の大手柄じやね。

A「理屈はどうでも付くがの。でも部內じや頗る評判が香ばしくないぜ。殊に今度の首切りに就いちや、滿々たる不平黨が多い樣じやよ。

Z「どうせ軍人なんて云ふ者は、政治觀念も經濟知識もなく、丁度赤ん坊が人形を並べて喜ぶ樣に、軍艦や兵隊の數さへ多ふけりや嬉しがつてる手合が多いんじやからね。軍艦を減らすなんて云ふことは、親の首を切る程に悔やしがるんじやから、部內で友さんの評判が惡るいのも已むを得ないだらうよ。夫に今度の首切だつて、一人〳〵を吟味すりや、文句

も出ようし、不公平な跡も無いでは無いが、大體から言へば此際致し方が無いだらうね。貴樣も水交社の御馳走に呼ばれたんだらうが、あの時は大分猛烈じやつたと云ふじやないか、

A「ウン、餘程面白かつたよ。海軍の宴會で、あの位痛快だつたことは始めてじやね、〇中將の突擊など丶來たら、隨分猛烈だつたからね。

Z「そうだつてね。人間誰しも己惚は有るからの、まさか首切られて悅ぶ者もあるまいよ。併し〇〇なんかは海軍じや、まだ使へる人間ぢやがね、是等が本當の犧牲さ。何と云つたつて、今ぢや加藤御大が海軍の絕對無限の君主だからね、誰が何と不平つたところで齒は立たないさ。だが空氣は頗る險惡な樣じやね。一體海軍の遣り方は何時でも馬鹿正直じやよ。之が識者の同情を博する所以ではあるが、個人的には非常に不利益だぜ。そこに至ると、陸軍はアノ傲頑不遜な態度を以て、國民なんか屁とも糞とも思つて居ないんだから、不埒と云へば不埒、横着と云へば横着じやが然度胸があるね。其の癖海軍は陸軍の卷き添へを食つて世間からは軍閥〳〵と一所くたに惡口を言はれて居るんだから御目出度いさ。併し最後の勝利はどちらか判らないがの。

A「ところが、首切られて悅んで居る連中が案外多いのじやからの。俺にしたつてサ、此後二年や三年軍艦の中で兵隊に意張つて見たところで、貴樣の云ふ通り家の一軒も出來つこは無いのぢや。夫が今度首になつた御陰で、斯んな豚小屋の樣なものでも出來たんじやからの。二三年使はれて裸で抛り出されるよりや、此の方が餘つ程有り難い譯さ。夫こそ軍縮樣じやよ。

Z「まア何でも好い、結構じや一萬圓も、二萬圓もやつて、其の上恨まれちやア國民は溜まらないからね、之で在鄕軍人も自分の家さへ有りやア、生活も精神も餘程安定するからの。家とこそ云へ、俺の同鄕の先輩に親任官まで勤めた人があるがね。此の人極めて名利に恬淡な方で、先年まで借家生活をして居た人じや。ところが、或る席で知人から「もう立派な家が出來たらう」と問はれたのじや。すると此の人の答が振つて居るじやないか。「有り難う、だが幸にまだ家作が拂へぬ程に貧乏をせんから、今に借家で濟まして居る」と云つたね。成る程泥棒にも三分の理窟あると云ふか、之にも

一理窟あると思つたから、俺も負け惜しみに、折々無斷で之を拜借して居るがね。併し世の中には棄てる神あれば助ける神ありで、借家に就いては俺は非常に幸運なのじや。前にも云つた様に、俺の今住んで居る家は家賃僅に三十圓で、顯微鏡的家屋ではあるが、出入りの用聞きの評價に依ると、正に時價の半額じやと云ふことじや。戸籍調べに來る御巡はりさんさへ、廉いのに感心して居る位だからね。之ばかりは我輩積善の餘慶と自ら慰めて居る次第で、大に貧友仲間の羨望の焦點となつてる譯サ。ところで聞いて呉れ。之れからが面白いのじや。何でも昨年の秋頃だつたと思ふがね、中學生らしい青年が二三人、俺とこの表札を見てサ「海軍大佐が斯んな不景氣な家に棲んで居るのかやね」と話しながら表を通ふるじやないか。其の時俺は丁度庭を掃いて居たので、別に癪に障つた譯でもないが、例のイタズラ氣が出てね、「オイ君！　一寸待て！」と内から聲を掛けたもんじや。すると書生さんビツクリしたものと見へ、ウワーと言ひながら下駄と靴とでガタ〳〵逃げ出したね。俺もツイ茶目氣になつて、表の戸をガラリと開けて外へ出て見ると、書生さん下駄を脫いで跣足のまゝ、後をも見ずに一目散に逃げて仕舞つたサ。おかしくもあるし、氣の毒にもあるしね。俺の家は家賃並に内部も無論貧弱じやが外觀は一層不景氣なのじや。學生は唯思つた儘、感じた儘を、正直に露骨に言つたに過ぎないので、俺は腹が立つどころか、掃き捨てる程ある大佐とか少將とかを買ひ被つて居る彼等の誤想を打破する實物教育を與へてやつたことを、寧ろ痛快に感じたね、ハツハツハ。

Ａ「そんな廉い貸家があるなら、一そ此の家を人に貸して、其處へ移つた方が德じやね。どこかに心當りは無いかい。

Ｚ「軍縮成金の辯にケチなこと云ふな。何なら俺と入り替つても好いがの。但し家賃は今の家同樣三十圓以上は出せないよ。冗談は扨て置き、之で俺などはサンガー夫人に弟子入りした譯ではないが、天佑に依つて子供はタツタ一人だし夫に閑つぶしにペンでも弄くつて居りや、某かの小遣錢にもなるがね。何んにも仕事が無くて子供の多い者など實際氣の毒じや。殊に主人でも亡くなつたが最後、遺族は乞食じやね。子供ばかりは生まん譯には行かず、生れたものを縊り殺す譯には尙ほ更行くまいしサ、一そのこと軍馬みたいに軍人は去勢して仕舞つたら、後顧の憂が無くつて宜いかも知れないぜ。

A「そんな事にでもしたら上官の睾丸を握る奴も自然に無くなつて好いだらう。兎も角も一般恩給の増額が出來なけりや、せめて英國の様に子供の頭數に應じて相當の養育料でも與へることが、當面の急務じやろね。日本じやア、サンガー夫人の入國を愚圖／＼言つたりする癖に、小供に對して何等の保護も加へなければ、何等の注意も拂はないんだから、お可笑しいじやないか。

Z「ナーニ、日本の特權階級や資本主義に取りては、貧乏人に成るべく多くの子供を產まして、無學無知な勞働者と兵隊さへ澤山作れば、彼等の地位と利權とは安全なのじやからね。此の節の中學校の入學難を見い。俺も今年は始めて經驗したが、所際小兒虐待じやね。十三や十四の小供をアンナに苦しめて、何で大きな強い國民が出來るかい。どうせ資本主義の國じや、多數の貧乏人は少數特權階級の踏臺じやからね。教育なんか、ささない方が彼等の利益だらうよ。併し御互に苦しみながらも子供を中學校へでもやり得るのは、之でまだ幸福の中じやぜ。先達も或る處で、恩給増加問題に就いて大分議論があつたのだがね。或人の言に依ると、目下全國小學校教員の平均月給額が五十圓あまりで、中等學校教員のが約百圓だそうじや、そこで是等の人は他人の小供を教育しながら、自分の子供を教育することの出來ないものも澤山あるんじや。之に比べると佐官以上の軍人の恩給は寧ろ多きに過ぎる位で、増額の必要を認めない。政府にそんな金が有るなら先づ教育者を優遇しろと云ふ意見なのじや。成る程そう云ふ事情を聞いて見ると、之も至極尤の意見で、軍人だとて、教育者だとて、人情に異はりはないからね。勿論俺は恩給増額には贊成なんじや。増額運動も是認するんじや。大は天下の政治から、小は臺所の用聞に至る迄、運動が成功の唯一手段たる今の世に於ては、之も亦已むを得ずと信ずるのじや。既に運動する以上宣傳も可なり、示威も可なり威嚇も亦可なりとするものじや。是に於てかじや、政府が吾人の要求を容れて増額して呉れば宜し、若し金が無いから増せないと云ふならばじや、在鄉軍人自分で天下を取るか、左も無けりや與へられたる恩給の範圍內に於て生活の道を講ずるの外は無いのじや。大將だつて、中將だつて、構ふことは無い、家賃が拂へなけりや九尺二間の裏長屋へ籠城もしようし、小供の教育が出來なけりや、男の子は丁稚に出さうし、女の子は下女奉公にでも交換姬にでも出さうしサ。夫でも尙ほ生活が出來なけりや、女郞屋の妓夫でも藝

肴屋の箱屋でも、何でもカンでも自分の身に適した仕事をやるさ。露西亞には革命當時、將官のポーターが居つたと云ふじやないか、獨逸には佐官のウエーターも居つたよ。日本でも閣下の妓夫が出來て、「旦那如何です、口開きに一つ御遊び下すつては」なんか、やる樣になると世の中が餘程洒落て來るぜ。西洋には元帥の樣な服を着た宿屋の客引や、芝居の案内人が居て、大に國威を發揚して居るからね。其の代りに當局者も、社會も、軍人の體面に關すなど丶野暮な窮屈なことは一切言はないことにしてね。演習や戰爭の時に、箱屋の旅團長や、三助の聯隊長などが出て來たら、定めし部下は能く働くことだらうよ、ハツハ……。

A「貴樣の言ふことは兎角極端に走つていかん。政府だつて增額はしたいんだらうが、金が無いんだらうよ。恩給を五割增すと、一年三千萬圓以上の金が要ると云ふじやないか。三千萬圓ありや、七千噸の軍艦が二艘造れるからの。

Z「極端か何か知らないが物の道理がそうじやないか。自分の利益に反することじやと、直ぐ極端じやとか過激じやとか、惡口を言ふのが日本人の良くない癖じやよ。政府に金が無いと云つた處で、出る樣にしなけりや、幾ら一等國だつて天から金は降らないからの、貴樣は恩給を增す金で七千噸の軍艦が、二艘出來ると云ふが、軍縮手當の六千萬圓では一萬噸の軍艦が三艘造れるぞ。國家の爲めに吐き出さないか。政府の先生達や口癖の樣に「金が無い〱」と言つてるが、其の癖西伯利亞の野つ原へ七億圓の大金を抛り棄て丶涼しい顏をして居るんだから呆きれるじやないか。歐洲戰爭中、ガリポリー半島出兵の失敗を議會で審査した樣な立憲的政治は、日本では望まれないんだから情ない次第さ。政府も政府じやが、國民も國民さ、自分達の汗と膏とより成る、あれ程の大金を使ひ捨てられて、古手拭一つ落した程にも驚かないんだから、太つ腹か、無神經か、三大國の一とかになると、馬鹿に氣前が好くなるもんじやね。三千萬圓や四千萬圓の金は、少し眞面目に軍縮をやれば譯なく出るじやないか。一體在鄉軍人などが恩給は增して貰ひたいが。軍縮には反對じやなんて言ふんだから無理な註文さ。そんな我儘は國民が承知せんからの。不必要に尨大な軍備さへ縮小すりや、教育費も、廢減稅も、恩給增加も、譯なく出來るんだよ。

A「何か知らないが軍縮〱の呼び聲で軍隊の精神的內容は今の處空虛じやよ。若し空虛じやなけりや混亂動搖じや。

残される者は前途を悲觀し、出される者は將來を憂慮すると云ふ有樣じやからね。そこへ持つて來て、部內と部外とに對する不平不滿が加はつて居るのじや。治療はチョツトむつかしそうだぜ。

Ｚ「政友會の出店みたいなことを言つてらア、此際思ひ切つた軍縮をやらなけりや、日本は文明國から落伍するんだぜ。軍人の士氣だつて、軍縮をやつて恩給を增してやりや吃度安定するんじや。夫に今度の馘首の不滿だつて、どうせ多數の人間を打首にする以上、如何に冷靜な友さんでも其の間に多少の情實もあるであらうし、多少の不公平もあるであらう。從ふて若干の不平不滿は到底免れないサ。そこで此の不平不滿を緩和するに唯一の策があるのじや。外でも無い、加藤御大自ら現役を退いて範を部下に示すことじや。華府會議が國家の爲めに利益であらうと、加藤の爲めに成功であらうと、兎に角彼れ自身全權として此の協定の成立に關與したる以上、而して其の結果として多數の部下を罪なくして首切らざるを得ざる以上、武士として、人間として、彼は心理上の責任を有する譯じやないか。然るに協定成立の功に依り、己は總理大臣の榮冠を贏ち得ながら、自ら手を下して大根の首を刎ねるが如く、多くの部下の首をチヨン切つて平然たる如きは、人の長として恥づべきことじや。殊に政治上より見るも、既に總理大臣として純政治家となりたる以上、現役を引退することが先帝陛下御勅諭の精神と憲法政治の主旨に合致する譯じやないか。若し夫れ豫備役大將を以て海軍大臣を兼ねるとすれば、是れ實に日本憲政の一大進步であると信ずるね。加藤大將にして眞に國家を思ひ眞に海軍を愛するならば、軍人としての武士道より言ふも、政治家としての進退より云ふも、此際自ら進んで現役を去ることが最良の策じや。加藤大將が總理になつた時に、「特に現役に列せらる」との優諚を奏薦した者も阿呆じやが、加藤首相も「賜つた優遇を拜辭するは重大問題である」などゝ澄まして居ると、海軍は今に內から潰れて仕舞ふぞ。

Ａ「それもそうかも知れないが、併し加藤さんが退くとなると、島村大將が亡くなつた今日、海軍では元帥になる者が無くなるからね。

Ｚ「貴樣も頭が古いね。今の世の中に裝飾以外に元帥なんかの必要が何處にあるか。現在の元帥を取り消す譯にも行くまいが、新に作る必要は絕對に無いのじや。若し成り手が無くて自然に消滅すりやモツケの仕合せじやないか。今の日

本で最も不合理なものが、元帥と勅選議員の終身在職制度じや。足腰も立たぬ瀕死の人間が、天皇の最高軍事顧問であつたり國家の大政を議する立法府に名を列ねたりする程、不都合なことは無いからね。俺等は軍事參議院すらも其の必要を認めぬものじやが、若し軍事諮詢の必要ありとすれば、軍事參議院も有るだんから、元帥などは無くたつて日本の國防上チツトも差支は無いんじや。萬一加藤大將にして元帥たらんが爲めに其の職に嚙ぢり付き居るとすれば彼は軍人の風上にも置けぬ人物じや。第一彼に依つて協定せられた軍縮の爲めに、首切られた多くの軍人の不平不滿の始末を何うするのじや。一平民を以て終始した原敬の偉さを學ばんことを彼に勸めるね。

A「そりや理屈を云へばそんなものじやがね。貴樣等の樣に千遍逆ツペ返へりをしても成れない者と、目の前にブラ下つて居る者とは同樣に言へないからの。俺等だつたら、貴樣等が幾ら唾を吹き飛ばして攻擊したつて決して退かないね。夫に今加藤さんが止めたら海軍としては陸軍との對抗上、非常に不利益な地位に立つ樣になるぜ、

Z「フフーン、糞土の牆は塗るべからずじや。何處まで頑固な頭だらう。今更陸海軍の權衡とか、對抗とか、勢力爭をやつてる時代じやないじやないか。立憲政治は道理の政治じや。道理の在る處に向つてグン／＼推し進んで行けば、夫で宜いのじや。此際加藤さんが元帥の候補權を拋棄して先例を示せば、陸軍だつて之に倣はざるを得ないだらう。殊に海軍として全國民を味方とせば、一二元帥の有無ぐらゐ問題じやないじやないか。

A「そうは行かないよ。貴樣は國民の力と云ふが、一體日本の國民にどれ丈の力があるんだい。一人の元帥の力は日本全國民の力よりも強いからね。近い例を言へば、今度の陸軍縮小でも見ろ。昨年議會一致で建議した軍縮案が、一元帥たる××の頑張りに依つて議會はグニヤ／＼と腰が拔けて仕舞つたじやないか。

Z「こいつは明論じや。成る程今の日本では一元帥の力が全國民の力よりも強いと云ふことを俺も殘念ながら承認せざるを得ない。併し之は決して國家の名譽でもなければ、國民の幸福でも無いよ。女賢しうして牛賣損ぬと云ふが、軍人威を恣にして國を滅ぼすじや。一元帥が斯かる勢力を有すると云ふことが、既に元帥並に之に類似の軍權を廢止することの必要を證明して居るではないか。凡そ文武を問はず、權勢が永く一所に停滯することは、橫暴と腐敗とを招く基じ

やからね。殊に階級思想の強烈な軍人仲間に於て最も其の弊が甚だしいのじや。山縣が大御所として威福を恣まゝにしたのも、彼が元帥として終身軍職を辱かしめ、尨大なる陸軍の勢力を背景として政治上にノサ張つたが爲めじや。海軍でも若し山本が元帥と爲つて居たら、彼は屹度海軍の勢力を踏臺として今尚ほ政治上にまで權勢を振ひ居ることは想像するに難くないからね。

A「大分話がむつかしくなつて來たね。俺等にや政治上の問題なんか薩張り判らないよ。

Z「馬鹿ッ。國民として自國の政治が判らない樣なことで何うなるか。軍人は政治に拘はらずなどゝ云ふのは、サーベルを吊つて居る間のことじや。一度現役を離れりや、立派に參政權を持つて居るんだぜ。そんなことで貴樣の有する尊とき一票は誰に向つて投ずる積りなのじや。貴樣はアノ強烈な普選の叫びを何と聞くか、國民が「我に選擧權を與へよ」と要求する聲じやないか。國民は是れ程熱烈に參政權を要望して居るのじや。夫れにも拘はらず貴樣等は要求もせずして參政權を與へられながら、政治に冷淡なるは何といふことじや。政治に參與することは國民の權利であると同時に、政治を監視することは國民の義務じやぞ、どうして日本の軍人は斯う政治的に無自覺で、思想的に頑迷なのかやね。

A「何だか叱られて居る樣だね。併し何だぜ、之で在郷軍人團などが生嚙ぢりの政治運動でも始めて、軍閥の提灯でも持たうものなら、夫こそ大變だぜ。

Z「ナーニ構ふものか、右にでも、左にでも、一歩退くか、一歩進むか、兎に角此の膿み腐つてブヨ〳〵した現狀を打破して、新らしき時代を作ることが必要なのじや。そこに國家としても、社會としても、躍動的生命が生れるのじやないか。勿論日本の在郷軍人團が政治的勢力を持てば、米國在郷軍人團の向ふを張つて、大に國威國權を振り廻はすだらうがね。若しそうなつたら鷄の蹴合をやらすまでサ。血みどろになるまで一度やらして見たら、どちらも目が覺めるだらうよ。之も革新の早道じや。俺は人間としても、國民としても、戰爭は好まないんだが、併し戰爭に依つて、砲口から叫り出される人間思想の進歩と、流血に依つて染め出される社會の改革とを考へると、戰爭も亦人類の發達を促進する有力なる手段として、強ち排斥する氣にもなれないね。要するに日本の前途は、改革か將た自滅かじや。尤もヤリ方

に依つて、外から他動的に改革さるゝか、内から自主的に改革するか、外からの壓迫に依つて滅ぼされるか、内からの腐敗に依つて滅ぶかの相違はあるがの。俺達は内から自主的に改革したいのじや。

A「鷄の蹴合も面白いが一歩誤まつたら獨逸の二の舞だからね、うつかりヤレないて、夫にしても佛蘭西は中々傍若無人にヤリ居るじやないか。

Z「まるで氣狂ひ國じやね。あんな無茶をやつても、世界が默つて見て居るなら、國際正義の滅亡じや。最早や國際聯盟も糞もあつたものじやない。併し天靜まれば天人に勝つからね、暴慢×の末路が見物サ。あんな×は世界の地圖から抹殺されても少しも惜しいとは思はないよ。日本にもアレに好く似た政黨があるじやないか。俺は日本の現狀が何だか佛國革命前の空氣に似て居る樣な臭がしてならんのじや。道を歩いても、電車に乘つても、新聞を讀んでも、話を聞いても何とか爲せなけりや、此の儘では收まらない樣な氣がするがね。思想の惡化か善化かは見る人に依つて標準が違ふだらうが、兎に角思想界は大動搖大混亂じやね、保守派は進步派を輕佻浮薄と非難し、進步派は保守派を頑迷不靈と攻擊し水火相鬩ぐの狀態じや。一例を擧ぐれば、一方には普通選擧をさへ危險思想じやと唱ふる政友會の代議士もあれば、他方には議會政治をさへ否認する急進社會主義者もあるんじや。靑年がマルクスを熟讀して居る反面に、貴族院には敬神建議が現はれたりするのじやからの。そして極左と極右とは共に、一戰爭やらなけりや日本は浮かばれないと云ふ點に於て一致して居るんだから面白いサ。尤も其の目的とする處は正反對じやがね。元來極右黨も、極左黨も、「力」の信者で、唯極右黨は之を國際的に用ゐて帝國主義を遂行せんとし、極左黨は之を社會的に用ゐて貧民獨裁を實現せんとするの相違あるのみじや。

A「すりや、何うすれば好いんだい。又叱られるかも知れないが、俺達や河童の陸上がりで、社會の事も、政治の事も詳しく判らないんだが。軍艦などでは思想の動搖など云ふことは餘り感じなかつたがね。

Z「だからサーベル連中はお目出度いと云ふんじや。日曜毎に兵隊を集めて御勅諭の捧讀さへして居りや、天下泰平と思つてるんだから單純サ。軍閥輩が己の此の單純な頭を以て、複雜な社會を律しようと己惚れるから、一歩誤まると露

西亜や獨逸の様に引つくり返へるのじや。軍人出の加藤首相なども、國民思想の安定法としては教育勅語以外に御持ち合せが無い様じやね。教育勅語誠に結構、吾人も之に異論は無いがじや、まア能く考へて見い、教育勅語を拜誦すればする程今の社會や政治は勅語の精神に背反せることが多いじやないか。「恭儉己を持し博愛衆に及ぼし」とあるが、今の富豪や資本家などが果して此の訓へを服持して居るかい。「公益を廣め世務を開き」とあるが、今の政治家なるものが果して之を實行して居るかい。御勅諭に忠實ならんと欲すれば欲する程、政治の改革、社會の改造を叫ばざるを得ないじやないか。今の政治狀態、社會狀態に滿足盲從する者は、つまり御勅語に對する反逆者だよ。軍隊だつてそうじやないか、今でも陸軍では無理由に下級兵を虐待することが屢新聞に出て居るが、之なども明らかに御勅諭に反ける譯で、御勅諭を讀んで聞かす上官自身が御勅諭に反する雛形を示す様なことで何の役にも立つかい。

A「もう澤山じや、議會へでも行つてヤツて呉れ。そこで貴様の云ふ改革とか、改造とかは一體何うすれば宜いと云ふんだい。

Z「今の日本に大小の改革改造を要するものは、國家制度、社會組織の殆んど總てだね。其の中でも重なるものを擧ぐれば、先づ普選の斷行、特權階級の廢止、軍閥制度の撤去、軍備の大縮小、外交の大刷新などの政治問題を始めとし、燃料、動力及び土地の國有、生活必要品の管理專賣等の經濟問題並に各種社會政策の實施じや。要すれば憲法の改正まで進むさ。扨て其の漸進か急進かが議論の岐れる處じやが、時代と國民とは慥かに急進を要求して居るね。今の内閣みたいに、口の先ばかりで尤もらしく「同感」したつて、實行しなけりや何の役にも立つものじやない。國民だつて、そう〱は飴を舐らないからの。糞ツ忌ま〱しい、馬鹿にして居やがらア。

A「オイ〱、そう机をなぐるなよ、毀れて仕舞ふが。加藤内閣も成立當時の期待に似合はず、近來頗る評判が良くない様じやないか。

Z「誰かの言ひ草ではないが、寄生蟲内閣や居候内閣に何が出來るものか。元と〱期待なんかするのが間違つて居るんじや。今の内閣は智は餘りあるが勇が足りないサ。だから思慮は有つても斷行が出來たいのじや。今の政府は消極的

誠意はあるが積極的經綸が無いサ。だから自ら惡事は働かぬが進んで善を行ふことが出來ないのじや。而かも積極的に惡事を働かぬと云ふことが一廉の善事視せられるのだから、勿體ない日本じやないか。感涙に咽んでヘドが出らア。寺内陸軍内閣は誠意の愚政府と云はれたが、加藤海軍内閣は誠意の無能政府じやね。内外の强要に依つて曲りながらも、山東問題の解決と、西伯利亞撤兵とを擬なくされた以外に、今の政府が内政上何一つ仕出來した事があるかい。蕎麥屋に舐められ、風呂屋に馬鹿にされ、裸の角力取にさへ背負投を食はされてサ。若し强ゐて捜せば貴樣等にベラボウな涙金を遣つて、在郷軍人の思想を惡化せしめた位のものじやないか。金魚の刺身とは穿ち得て妙じやね。議會は動物園化し、内閣は馬鹿殿のおもちやとなり、一體日本を何うすると云ふんだい。我々國民を何うして呉れるんだい。加藤も日本海々戰當時はモツト膽も勇も有つただらうにね。孫の病氣が國家の政治よりも重大となつては、人間もモウ仕舞じやの。御互に年は取りたくないものじやが、今ではチツト取り過ぎたわい。アヽ草疲れた、まア一杯つげよ。

A「とても能く喋舌るね。御蔭で睡の洗禮じや。アツハツハ、ハツハツハ。

時論

法學博士 吉野作造

水平運動の勃興

○

一度僕の紹介で本欄の讀者に見へたことのある千虎俚人君より再び次の一篇を寄せて來た。時節柄頗る注目すべき重要問題だと思ふので次に其全文を披露する。

○

最近水平運動なるものが大變世間の注目を惹いて居る。水平運動とは水平社の運動を意味する。水平社は即ち所謂特殊部落の解放を目的として集つた部落有志者の團體である。我國には目下全國に亘つて約三百萬の特殊部落民が居るさうだ。長い間不當にも有らゆる屈辱と迫害とに虐げられた彼等が、最近新思潮の刺戟を受けて遂に自家解放の爲に奮起するに至つたのは實は寧ろ當然であらう。今や彼等には階級的差別待遇に對する烈しき反抗的感情が燃えて居る。而してその集團的威力に至つては決して侮る可らざるものがある。彼等の地位は露西亞に於ける猶太人にも比すべく、其運動は重大なる一社會問題として決して看過すべからざる性質を有するものだ。從來這般の問題に着眼したものに公道會及び同愛會がある。熱心その解決に努力したのではあらうが、謂はゞ知名の人のする恩惠的施設に過ぎず、特殊部落民からは賣名的のものとさへ観られて居つた。從つて兎角十分に其の信頼を繋ぐことが出來なかつた。孰れにしても此種の運動は、勞働運動など丶同じく、第三者が主なる活動の中心たる間は眞劍なものとなり得ないものだ。故に漸く昨今に至り、特殊部落中の先覺者が長い間鬱積せる感情を爆發して遂に自ら起つて解放運動の烽火を擧ぐるに至つたのは、自ら來るべき處に勢の押し來れるものにして、玆に我々は眞劍なる一社會運動として注目を怠る可らざる所以を觀るのである。

とにかく此の水平運動は、勞動運動や朝鮮人勞働運動等と相並んで現代の日本に於ける最も眞劍なる民衆運動の一つと謂つていゝ。

○

特殊部落民の集團運動が、歐洲大戰後に起つた無產階級解放乃至民族自決等の新思潮の刺戟に由るものなることは、疑を容れない。全國に散在する部落民大同團結の氣運は、大正十年の末頃から著しくなつた。而して水平社の創立は、京都を中心とし、奈良、大阪、滋賀、東京等の各府縣の運動を連絡せる結果であつて、京都に於て其創立大會を開いたのは、大正十一年三月三日である。當日岡崎公會堂をめざして集るもの全國部落の代表者四十名、中々盛況であつた。而して此大會は次の如き綱領と宣言とを發表したのである。

綱領

一、我々特殊部落民は部落民自身の行動によつて絶對の解放を期す。

一、我々部落民は絶對に經濟の自由と職業の自由とを社會に要求し以て其獲得を期す。

一、我々は人間性の原理に覺醒し人間最高の完成に向つて突進す。

宣言

全國に散在する吾が特殊部落民よ、團結せよ。長い間虐げられて來た兄弟よ。過去半世紀に亘る種々なる方法と多くの人々とによつてなされた吾等の爲めの運動が何等の有難い効果を齎さなかつた事實は、夫等のすべてが、吾々によつて又他の人々によつて常に人間を冒瀆されて居た罰であつたのだ。そして此等の人間を勦るかの如き運動がかへつて多くの兄弟を墮落させたことを想へば、此際吾等の中より、人間を尊敬することによつて自ら解放せんとする者の集團運動を起せるは、寧ろ當然である。

兄弟よ。

吾々の祖先は自由平等の渇仰者であり實行者であつた。陋劣なる階級政策の犧牲者であり、男らしき產業的殉教者であつたのだ。ケモノの皮剝ぐ報酬として生々しき人間の皮を剝取られ、ケモノの心臟を裂く代價として暖い人間の心臟を引裂かれ、そこへ下らない嘲笑の唾まで吐きかけられた。呪はれの夜の惡夢のうちにも、なほ誇り得る人間の血は涸れずにあつた。そうだ。そして吾々は此の血を享けて人間が神にかはらうとする時代に會うたのだ。犧牲者が其の烙印を投げ返す時が來たのだ。殉教者が其の荊冠を祝福される時が來たのだ。我々がエタであることを誇り得る時が來たのだ。

我々は必ず卑屈なる言葉と怯懦なる行爲とによつて祖先を

辱しめ人間を冒瀆してはならぬ。そうして人の世の冷たさが如何に冷たいか、人間を勦ることが何んであるかをよく知つて居る我々は、心から人生の熱と光を願求禮讃するものである。

水平社はかくして生れた。

人の世に熱あれ。人間に光あれ。

大正十一年三月三日　全國水平社

○

創立大會の後、水平運動は恐ろしい勢を以て進展した。その波動は瞬く間に全國に及んだ。而して三月下旬に起つた別府的ケ濱事件は更にこの運動に油を注いだのであつた。四月二日には京都府水平社の創立大會が開かれ、同十四日には埼玉縣で、同二十一日には三重縣で水平社が生れた。五月十日には奈良縣の創立大會があり、七十二の部落が擧つて之に加入するを見た。東京にも水平社が出來た。和歌山にも生れた。更にまた少年水平社、少女水平社なるものも創立された。此種の運動は大阪にも起つた。全國の皮革事業界を動して居る西濱の大部落中にも共鳴者は少からず出來た。熱烈なる宣傳の結果、八月二十五日には大阪水平社の創立大會が開かるゝに至つた。西濱大部落に於ける成功は實に此地方水平運動の進展に一飛躍を促すものであつた。十一月十日には愛知縣水平社の創立大會あり、同二十六日には兵庫縣のそれがあつた。

○

斯くして出來た水平社は、不斷の宣傳と共に、差別待遇の事件起るや必ず往いてその解決に努力しつゝある。從來泣き寢入りですました侮蔑壓迫に對して、彼等は今や毫末も假借する所なく徹底的解決を期して居る。例へば穢多と云ふ樣な言葉が發せられたとする。水平社は直に其非を責め、嚴重なる制裁を要求する。近頃新聞紙上によく「小生今般穢多云々と申したる件誠に御申譯無之謝罪仕候也」といふやうな詫證文を見るは之が爲である。そして斯んな事件が起る毎に水平運動の勢を增して行くは言ふまでもない

○

本年の三月二日より三日に亘つて第二回の全國水平社大會が京都の岡崎公會堂に開かれた。參會するもの三府二十七縣の代表者五千人、背後に約三萬の社員を控へて居るといふ。(一)勞農ロシアに於けるユダヤ人の視察、(二)治安警察法第十七條の撤廢、(三)普通選擧問題、(四)小學校及軍隊內部に於ける差別撤廢、(五)水平社大學、(六)少年少女水平社、(七)婦人水平社等に付て協議を凝らした。日本勞働總同盟を始め、朝鮮人勞働團や米國・布哇方面の同志から送り來つた二百四十餘りの祝電

の披露もあつた。此の大會で宣言・綱領・決議の協定を見たが、宣言と綱領とは前掲と變らないから茲には繰り返さぬ、決議文だけを次に擧げやう。

一、我々に對し穢多及び特殊部落民其他の言行によつて侮辱の意志を表示したる時は徹底的糺彈をなす。

一、東西兩本願寺に對する募財の拒絕斷行を期す。

一、政府其他一切の侮辱的改善及び恩惠的施設の根本的改革を促す。

○

右の決議中にも見ゆる通り、水平運動と本願寺との關係はまた頗る注意を要する。昨年の四月十日、全國水平社は決議の結果東西兩本願寺にあてゝ「向後二十年間我等部落寺院及門信徒に對し如何なる名義による募財をも中止されたきこと」を通告した。之が募財拒絕の皮切りで、第二回大會でも之を繰り返して居る所を以て見れば、その決意の程は窺はれる。加之第二回大會の二日目には、會衆は十數丁に亙る大示威行列をなして先づ東本願寺の御彌陀堂にくり込み、滿場一致左の決議をなしたのであつた。

我等水平社員は東西兩本願寺開宗七百年に對する募財を拒絕す。

此決議文を東本願寺に差出して後、この大行列は更に西本願寺に向ひ、同じく之を差出し且本堂を占領した。代表達はこも〴〵淶錢箱の上にのつて本願寺攻擊の演說をはじめ、中には銅貨を阿彌陀本尊に投げつける者もあつた。「偶像を破壞せよ」とは會衆一般の異口同音に叫ぶ所であつたと云ふ。

抑も本願寺は多年特殊部落に傳道を續け、多數の忠實なる信徒を有つて居り、少くとも他宗に比し著大なる勢力を此部落に布いて居る筈である。然るに何故斯くも反抗を向けらるゝのであるか。是れ兩本願寺が部落民の信仰深きに乘じ從來過當な募財を要求するを常としたからであらう。部落の經濟的疲弊の主なる一因は確にこの募財にあるとは、多くの人の一致する所である。孰れにしても水平運動が部落解放の第一眼目として先づ經濟的改善に着目し、東西兩本願寺に向つて反抗すると云ふ破格の擧に出でたのは、當今の改造思潮とその一面の基調を同うするものとして、太だ注目に値する現象と謂はねばならぬ。

猶も一つ注意すべきは、部落僧侶間に亦一種の運動の起りつゝあることとである。本願寺は從來特殊部落を傳道區域としながらも、部落の僧侶即ち穢多寺の住職はとくに之を忌避し嫌惡する風があつた。之に不快の感を抱いた僧侶は、水平社に投じて本願寺の官僚的統制から免れんとした。堂班を投げすてゝ獨立

せんとする黒衣同盟は斯くして起つたのである。水平運動の傍系を爲すものであるが、本願寺に取つては是亦慥かに一個の脅威であらう。

○

この新しい水平運動に對し、政府當局の態度は如何と云ふに、直接には嚴重に之を取締ると共に、間接には溫情主義的な部落改善策に由て部落民の氣勢を和げんと欲するもの丶樣である。新聞の傳へる所に依れば、內務省警保局の得能保安課長は最近次の樣な意見を洩したとやら。『我々は水平運動をどう取締るかといふよりもどうしたら圓滿に發達するかといふことに頭を痛めて居る。綱領宣言を見ると實に立派だが、どうも動もすると秩序を亂し易い。不用意の言葉の中に侮辱的な言葉があつたとて、二三百人も押しかけて謝罪文を新聞に出させるとか、こうなれば立派な直接行動だから、我々は十分取締らなければならないが、それ以上に斯うしたことが社會の同情を失ひ、識者の擯斥を招く所以であることを水平社のために遺憾として居る。(中略)尤も彼の人々が差別待遇を受けて居ることは、全く不合理なことであり國家の不利益であつて、我等も深く同情して居る。內務當局も水平社の運動に對しては、積極的助長主義を取ることとして、社會局からも豫算が提出してあるが、我々と兩々相俟つて、此の不合理な問題を解決したいと思つて居る云々』

政府は昨年までは部落改良費として二十一萬圓を豫算面に計上し、以て三百戶以上の部落の道路改修費其他に充て丶居たが、今年からは地方改良費と改稱して四十九萬圓を計上し、從來の二十一萬圓を控除した殘額二十八萬圓で、部落民に學費を補給し、他日其の中心人物たるべき者の養成にあつるとか。本年の豫算に於ては各種の項目概して昨年よりも削減されて居るが常なるに、獨りこの地方改良費のみは、教育費の國庫補助と社會事業費と相並んで增額を見たのは、以て當局の意のある所を想見すべきである。併し乍ら斯くして果して所期の目的は達せられ、部落の改善と部落民の感情融和が夫れ丈で成功するだらうか。政府の部落改善方針なるものも、部落解放の眞諦にふれ、彼等の要求の核心にタッチするでなくては、却つて恐る、意外にも部落民の思想感情を惡化するの結果を見ざるやを。本期の議會に於ける星島二郎君の質問の次の一節の如きは、此點に於て大に味うべきものがあると思ふ。曰く、地方改良といふ表面に義名を掲げて居るもの丶、地方改良費の使途には尙ほ頗る疑しいものがある(中略)。政府は部落民の視察、監督、取締等に寄かに心を痛めて居るらしく、今豫算を增して益々之を嚴重にす

ることになれば、それだけ部落を惡化し、水平運動に油を注ぐことゝなつて、其結果は由々しき大事を惹起するかも知れない云々と。

○

最後に水平運動について特に注意すべきは、その無產階級化的傾向である。言ふまでもなく、この運動の創始の精神は階級的差別撤廢に在つた。だから其運動のリーダーはもと中產階級たるを妨げず又現にさうでもある。が併し、この運動の進展に連れて漸く無產階級的色彩を帶びつゝあるを我々は看過してはならない。何となれば、愛蘭にしても印度・埃及乃至朝鮮にしても、所謂民族獨立運動が段々其勢を增し眞劍味の加はるにつけ、概して其無產階級化と形影相伴ふを常とし、而して我が國部落運動の發展の概勢亦やゝ之に共通するものあるを思はしむるからである。況んや今日の特殊部落は、被征服民族たると同時に經濟的弱者の地位に居るに於てをや。

斯く考へると我々は當然に水平運動の前途と一般勞働運動との連繫に思ひ到らねばならない。何となれば、現下の資本主義的經濟組織の下に於て、彼等のみの經濟的解放の成功は期することが出來ないから。さうすると、彼等は經濟的解放に成功する爲に先づ勞働運動と提携するに至るやもはかられない。勞働運動に從事する者の中、早くも此趨勢を見て取り、無產階級解放運動はまた同時に部落解放の問題をも解決するものなりなどゝ揚言するもあれど、窮極の目標が全然同一でない所に、多少掛引の入る餘地はある。良かれ惡かれ、水平運動と勞働運動とは勢に於て大に接近するの傾向に置かれて居る。接近することに由て兩者共に大に其氣勢を高むべきは云ふまでもないが、更に之を連繫し且つ之を永續せしむるは、また双方リーダーの誠意とタクチクとの力に待たねばならぬ所であらう。

いづれにしても水平運動は最近起つた民衆運動の中最も顯著なものである。而して之が研究は經濟的、社會的、倫理的等の立場からも大に論辯せらるゝを要すると思ふので、本篇を切ッ掛けに大に各方面の論策の發表を希望する次第である。

小題小言數則

○支那が條約廢棄通牒に依て最も拙劣なる外交手段に出でた事は、何れ丈け日本の帝國主義者を喜ばしめ、世界の公平なる識者を顰蹙せしめ、又眞に支那の開發を思ふ者を失望せしめたか分らない。僕は支那の爲には勿論のこと、日本の爲に謀つて

も、兩者親善の障碍たる、少くとも古き反感の記憶をそゝるに止まる所の日支條約は、早晩大に改訂さるべきものと彼々考へて居た。支那の民衆が此條約の依然効力を續くるに付て――實際の結果の如何は兎も角として――不滿を有するは、確に同情に値するものがある。此點に就て我國の輿論が概して彼を理解するの雅量を缺き、動もすれば既得の地位の其儘の維持にのみ専念するが如き狹量を示すは、甚だ淺猿しい事だと考へて居る。今日は最早法律と條約とのみが物言ふ時代ではない。國際法がどうであらうが條約に何とあらうが、平和の要求と正義の指示に從つてさへやれば、國際關係の立て直しを無遠慮に問題としても相當に通る世の中である。斯くして今日までのところ、日支條約問題に付ては何とはなしに支那側に世界の同情が集つて居つた。日本人中にさへ我々の樣に支那の言分にも相當の理由ありと說き來れる者もある。それ丈け此點に關する支那の外交的立場には一段の强味があつたのだ。而して支那は此强味を利用してうまく廻つべきであつた(而して之を適當に利用するは實はまた必しも日本の損ではない)。然るにいよ〱具體的の問題になると、支那は此一件を極度の拙劣な狀況の下に取扱つた。何と云ふ腑甲斐ないことであらう。前後のイキサツは新聞にも詳しく出て居るから改めて述べぬ。とにかくあゝ出られては、嫁でも應でも斷乎たる拒絶に出づるの外はないではないか。支那の外交は之を譬へて云へば、必ず取れる筈の借金を意外にも返すに及ばぬといふ樣な形に於て催促する類のものである。吾人は支那の爲に深く之を惜むものである。

○

所謂水平運動に對して我々が相當の理解を有し、其上その中に一種の文化的意義をさへ認めんとして居ることは、別項千虎俚人の論文を推奬せるに依ても明であらう。併し乍ら、彼等の運動に同情し之を尊敬することは、必しも直に彼等の爲す總ての行動を是認することにはならない。我々がよく勞働運動などに於ても見る如く、實際の運動といふものは時に却て其運動に依て達せんとする理想に對する冒瀆たることがあるからである。水平運動に付ても實は此種の批難を耳にしたが、深く其の實情に付て聞く所がなかつたが、三月十二日の新聞に依て水平社代表と警保局長との會見記事を讀むに至つて予は始めて世上の批難の徒爾ならさるを想はしめられた。一代表者の談として傳ふる所に云ふ。『實は一月十五日私は京都府警察部長との會見に於て、私共に對する京都府下の差別問題に關し妥協が成立したのです。そして京都府下の何處に於ても、若し差別的侮辱を加へられた場合には、最寄りの警察官に訴へ、其警官の面前で

侮辱的言辭を吐いた者は、相手……私共同胞に向つて謝罪する事になつて居たのです。』警察の威力を藉りて相手の謝罪を强要するは、果して君子の態度と云へやうか。斯んな事を約束する警察も警察である。又曰ふ。『然るに彼京都大會當日、偶々十六歳の一パン屋の丁稚が十四歳になる私共の同胞の一少年に差別的侮辱を加へたのを大會の風紀係が聞きつけ、件の丁稚を取押へて附近に居た交通巡査に引き渡し、其處分を訴へたところ、子供の事なんか何うでもいゝぢやないかと巡査は膠もなく刎ねつけたので、事件は大きくなつてしまつたのです。』斯うなると問題は正しく紳士的境域を逸するの感なきを得ない。彼等が聊の侮辱に昂奮して常規を逸し勝なのは情に於て咎めない。併し事後に於て而かも指導の地位に在る人までが、仍然冷靜に還らずして舊日の過誤を誇稱して得々たるに至ては、我等は彼等の慎く尊貴なる精神の爲に深く之を悲むものである。新聞の報道には或は誤りがあるかも知れない。孰れにしても我々の苦言が少しでも彼の人達の聽く所となるを得ば、幸甚の至りである。

○

三月十一日の時事新報に大きな見出しで陸軍兵制改革と題し、陸軍當局は兵役制度の根本的改正を爲すべく兵制改革研究調査會を設けて之が準備的研究に着手したと報じて居る。この事に付ては僕もかねて多少聞かぬでもないが、新聞の報ずる所丈けに依ると、在營年限短縮の輿論の要求に對して、靑少年の教育に軍事課程を入るるの交換條件を設定せんとする方針は動かぬ所らしい。軍事思想を結局に於て國民的常識の一要素たらしむべく、從つて中小學に於ても此方面の課程を大に振肅して實效あらしむべきは、僕の固より大に贊同する所であるけれども、只之を策定するに方り呉々も注意すべきは、之は既に軍事問題に非ずして純然たる教育問題たることである。故に之が研究調査は須らく教育家の仕事たるべく軍人の仕事であつてはならない。軍人を加へたる調査會に攻究を托するは分つて居るが、軍人のみの調査會で成案を作るべき筋合のものでは斷じてない。軍務局長を委員長とし、陸軍省、參謀本部、教育總監部の佐尉官數十名を委員として原案を作るのだといふ報道が眞ならば、丁度我々が集つて作戰計劃を論ずる樣なもので、何處までも素人の空論たるを免れないのである。軍人が勝手に教育問題を攻明するは妨なしとして、若し茲處で將來帝國の具體的教育方針を按出するといふのなら、それは甚しき僭越であり、少くとも越權の沙汰である。當局の一考を煩す次第である。

○

最近の出來事でどう考へても腹の虫の治らないのは、聽面も

なく今頃競馬法案なるものが提出され、政友會の滿場一致の多數で下院を通過した事である。當り前の事ながら聊痛快を覺へたのは、毎度陸軍當局者の反對に依て葬り去られた荒川五郎君の非役壯丁稅の提議が、仙波將軍の熱烈な支持贊助を得たことである。議員の言論は上下兩院を通じて謂はゞ概念の遊戲に過ぎず、問題の實質的究明に稍吾人の視聽を聳てしめたのは僅に江木翼君其他二三氏あるのみ。陪審制度は憲法違反だの、退讓外交は先帝の御思召に背くなどいふに至つては誠に以て沙汰の限りと云はざるを得ぬ。

○

三月二日何禮之先生が死なれた。高齡の人とて最近は杳として聞ゆる所なかつたが、明治初年に於ける西洋文化の紹介者として我々は此人を忘れてはならない。モンテスキューの「萬法精理」が當年の讀書生の人口に膾炙したのは此人の御蔭だ。此外にも著譯頗る多い。福澤先生や加藤弘之先生と相前後した洋學者の最後まで生き殘つた人として、吾人は其長壽を羨むと共に、又こゝに深く其逝去を悼むものである。

○

僕は茲に二人の友人の好著を讀者諸君に推薦するを喜ぶ。一は小野秀雄君の日本新聞發達史で他は阿刀田令造君の西洋史概說である。

小野君は永く東京日日新聞記者として令名があつた。僕は同君を學友として見出したのは、單に同じ大學を出たといふが爲ではなく、同君が日本新聞史研究家として獨歩の地位を占めて居るが爲である。實をいへば僕はこの一兩年來維新前後の我國に於ける西洋文化の發達を研究したいと心掛けて居るが、何分資料に乏しく先蹤も至つて尠いので大に困つた。而して其間小野君は其所藏せられる材料の豐富なると其攻究し得たる智識の廣汎なるとに於て、僕の新研究に對し誠に得難い同好の友であつた。從つて同君の「日本新聞發達史」の公刊あるべきは早くから知つて居つたし、又之に續いで同じ範圍の他の新著の計劃ある事も知つて居る。餘りに同君を知つて居るので、今度の本に就ても、內容にまで立ち入つて紹介する氣にはなれないが、只一言して置きたいのは、同君の此の著は本當に纏つた新聞史としては唯一のものであること、同君自ら公言する如く多少公刊を急いだ事情あるに拘らず、可なりの苦心の餘に成つたことゝである。併し小野君の本邦新聞の發達に關する智識は、此の本よりも深くして廣い。本書に簡略にされた部分等につき、他日別種の良書を提供して斯方面に於ける文献を完備されんことは啻に僕一人の願のみではない。

阿刀田君は僕に取つて謂はゞ竹馬の友だ。併し同君の新著を紹介するは竹馬の友としての私情に基くのではない。公人として自ら僞らず又世を欺かざるの立場を執りつゝ、猶ほ三十年來の交遊に言及せんとするは、同君の爲人を一言する事に依て本書の面目を一層よく明にし得べきを思ふからである。同君は所謂當世風の才子的學者ではない。敦厚自ら持し、大局を透視するの明を藏して自ら學に親しみ又子弟に接せるは、僕の夙に敬服する所であり、同君の薫陶を受けたる者の亦齊しく推稱する所である。君の新著は一冊千頁足らずの中に數千年の發達を概觀せしむるのであるから、單に事實の精密とか考證の確實などいふ標準からいへば、格別言ふに足らぬものであるかも知れない。併し乍ら僕の本書を讀んで最も深く感銘を受けたるは、同君の人生觀が西洋史の說明の上に活きて展開して往くことであり、人類の發達に關する一種の眼識が紙上に躍動して居ることであつた。玆處に僕は明白に同君のものとして本書一編の通讀に非常の親しみを感じた所以であり、又同じ興味を廣く頒つ意味に於て之を江湖に推薦するの不當に非るを信ずる所以である。斯かる快心の著を中學以來の友人の手に見出したのは、僕の滿悅して措かざる所である。

▼移轉廣告▲

「婦人公論」女性への抗

（中央公論愛讀者諸

妹より兄への願ひ

兄上様！とかう呼んでもよい位親愛なる中央公論愛讀者諸君よ。中央公論の姉妹雜誌として、中央公論が多年我堅實なる智識階級を抱擁して誌界に覇を稱してゐると同じやうに、諸君の親愛なる子女並に姉妹の大多數を讀者にして、我婦人の進歩向上のために微力を效して來た婦人公論から特に折入つてのお願ひ、御相談を聞いて下さい。それは他でもない、今日の日本婦人は正當な發達を爲してゐるとお思ひになりますか、それとも生意氣になつたとでもお思ひになりますか。諸君の愛孃や諸君の姉妹は申すに及ばず、諸君のベター・ハーフたるべき同胞姉妹に對して、如何の感情と希望をお有ちになりますか。吾々、婦人の啓發に盡瘁して來た者にとつて、今日の男性の方が今日の女性に對して有せらるる感慨ほど聽きたいと思ふものはありません。又今日の婦人は、正當なる自分の途を歩んでゐるつもりですけれど、鹿を追ふ獵夫山を見ずの譬の通り、或はあらぬ途に踏み迷つてゐないとも限りません。前へ前へと馬車馬のやうに走つた結果は他を顧みるの餘裕が無かつたかも知れません。多年の壓迫から振ひ立つた武者ぶるひが動もすれば男性に對する非禮を敢てしたかも知れません。——それならば許して下さい。決して吾々は徒らに男性に反抗し敵對しようとするものではありません。女性を無視した男性の文化が不具であるのを知る吾々は、男性を無視した女性文化の創造せられる理由の無いのを知つてゐます。どうしても今後の文化は誠實な男女の協力に依らなければならないものであるのを知つてゐます。わけても何千年來今日の文化を建設して來た男性の力に對しては私かに敬意を表してゐます。

殊に昨年と一昨年の二回婦人公論の夏季臨時増刊『誇か恥か』號によつて聊か日本女性の爲めに氣を吐いた我婦人は、今や姑らく鳴りを鎭めて沈默修養すべき時代に入りました。さうして心を虚うして自分の越し方を振返り、またその行手を望んでゐます。今に於いて彼等女性の最も良き伴侶であるべき男性の批評、忠

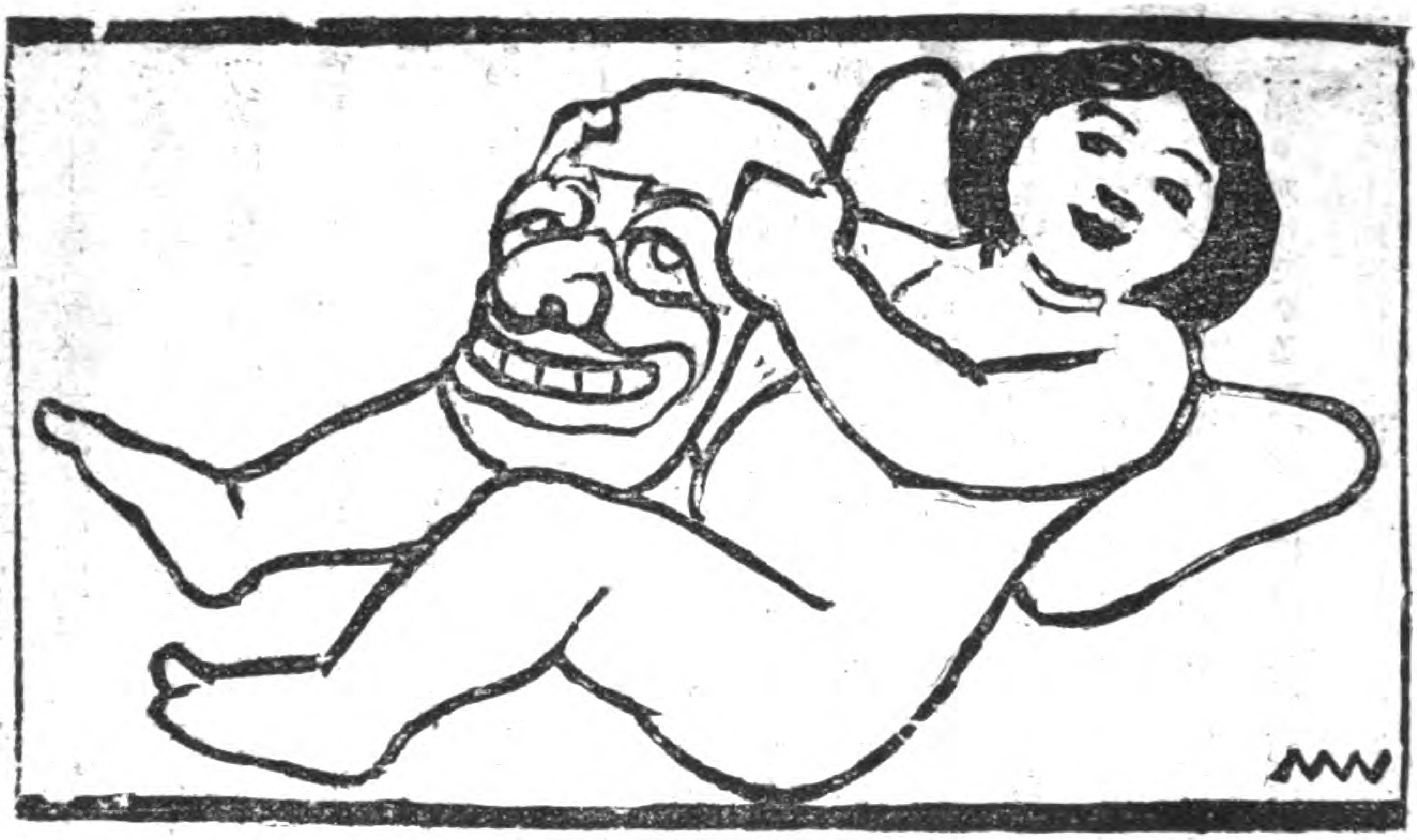
辯」號（夏季臨時增刊）原稿募集

君の投書を歡迎す（

言は、たとひいかなる非難、罵詈、惡口、雜言と雖も、之を聽いて自ら反省の資に供するだけの雅量と謙
虚な心持とを有つてゐます。少くとも、それが諸君の女性に對する親切な愛情から出發するものでありさへ
すれば、此際忌憚の無い批判を垂れて、吾々婦人を導いて頂きたいと思ふのであります。
親愛なる中央公論愛讀者諸君に御相談申上げたいと思ふのは此點であります。今日世の中に紛糾せる戀愛
結婚の錯綜事件は必ず諸君の眉を顰めしむるものがありませう。其他日常諸君の身邊にも之と似た事件の
頻出するものが無いでせうか。此等一般兩性問題の解決は、單に女性の問題でもなく又男性の問題でもあ
りません。此等の問題に關して深憂を抱かるゝ諸君子よ！さうして又江湖に隱れたる婦人問題、兩性問題
の研究者よ！諸君は諸君の平素の蘊蓄を傾けて、之を婦人公論夏季臨時增刊（七月十日發行）に發表し、婦
人を導き、併せて吾々兩性の上に繋ることの重大問題の解決に資せんとはし給はぬか。論文固より可なり小
說、戲曲、情話、報告、詩歌、感想、諷刺、形式は何でもよろしい。要は現代の日本婦人を目安にして、
之を敎へ導くものであつて欲しいのであります。然らば婦人公論は之を男性からの『女性への抗辯』と題し
て普く我國婦人の熟讀に供へませう。恐らくそれは日本婦人を啓發誘導するといふ上にも、又兩性問題解決の上に
も又併せて男女の融和發展の上にも必ず有益な結果を齎すであらうを信じます。〆切は五月十五日、長短は隨意、
中央公論社內婦人公論編輯部宛に送稿して下さい。但し『婦人公論臨時號原稿』と傍書して下さい。揭載した原稿
に對しては一枚（四百字詰原稿紙）二圓以上八圓以下を呈します。尙委しくは婦人公論三月號の折込豫告中の「投
稿規定」を御一覽下さい、尙四月一日以後は東京驛前　丸の內ビヂルンク七七四へ轉居しますから、同所へ御送稿
下さい。

男から女への忠言

中央公論第卅八年四月號（春季大附録號）創作



佗しすぎる

佐藤春夫

1

清吉の弟の妻——詳しく言へばつひこの間までさうであつた邦子が、或る土地から藝者になつて出てゐる。百合香といふ名ださうである。

2

その女は以前にも今度と同じその土地で藝者であつたのだが、無理をして清吉の弟の妻になつた。たしか、その時はまだ十八ぐらゐであつたらう。それを五年程經つた今日、清吉の弟は捨てた——と、どうもさう言はなければなるまい。

相談づくで別れたのではあつたが、その場合に清吉の弟は別れようとする者にすつかりを打ち明けたのではなかつたらしい。そのやうにして妻と別れるとすぐ、外の女をつれて朝鮮へ渡つてしまつ

た。からに無い仕事を思ひついたやうなことを言ひ出して、朝鮮へ行つたのもみんな今度の女の爲めであつたかも知れない。――さう邦子が澄江に言つたさうである。清吉は澄江からさう聞いたが、女同士はいづれ手紙でもやりとりしたのであらう。

芳藏に女があつた？　さう聞いて見れば思ひあたる事も無くはない。けれども自分の弟に女があつてそのために女房を離緣したとは、清吉も知らずにゐた。――たとひ知つてゐたにしたところでどうにもなりはしなかつたが。といふのは、彼等が夫婦別れをする時に、清吉は當時、一つ家に一緒に住んでゐながらも彼等のどちらからも相談をうけはしなかつた。いや然ういふより、相談されることを清吉の方で避けてゐたから彼等が相談をかけなかつたのかも知れない。現に、邦子の方の人たちが芳藏に向つて「兄さんもそばにゐらつしやることだから一とほりは相談をして見なすつたら……」と言つたのに答へて芳藏は言つたさうだ「さうですね。だが兄貴の言ひ草はきまつてゐるのです。自分のことは自分だけで考へて自分の一等尤もと思ふことをするんだね。それより仕方がないぢやないか――と、さう口ぐせに言つてゐる人だから、今度だつて同じことを聞かされるだけで、てんで相手にはしませんよ。」今になつて考へると芳藏は兄に相談しにくい事があるのでそんなことを言つたのかも知れないが、それにしても芳藏が清吉のことをさう言つたのは必ずしも嘘ではなかつた。彼等には兄でありながら清吉は、目の前に出來てゐる事に就て彼等のために何も言はなかつた。言へなかつた。さういふ清吉になつてしまつてゐた。一たい物ごとに就て他人に述べるやうな意見を持つてゐるためには自分自身しつかりした理想を抱懷してゐる人か、でなければごく淺薄なものの見方で滿足して結論する人かこの二通りだけであるが、清吉はもう今は何にも理想らしいものは持てなくなつてしまつてゐるくせに、それだのにもの事をさう上面（うはつつら）だけ見てはつきりした意見を押し立てるほどの淺薄でもなかつた――少くとも、男女關係のことに就ては

殊にさうであつた。といふわけは、清吉自身でも夫婦別れといふことは身に覺えのある、それも二度までも覺えのあることで、そればかりではない、つひその一年半ばかり前には、兄弟よりももう一層仲よくしてゐた或る友達の夫婦別れの中へ引き入れられて行つて、そこでひどい目にあつた經驗があつた。煮えた鉛を嚥まされるといふ言葉を、清吉はこの事件の追想と同時によくおもひ出す。その結果は仲間からは物笑ひになるし、尾鰭をつけて傳へられるし、その友人とはどうしてももう二度とはつき合へない氣持になるし、それでゐてその妻君の方の心持が忘れ難いし、全く何やかやと清吉はこの出來事に立ち入つたためにその二年ほどの間に、作り事のやうなことには鏡で自分を見ると小びんには白髮が出るし、口髭にさへそれが十二本も數へられた。——鏡にうつした自分ばかりではない。心のなかをふり返つて見て、一時はもうめちやくちやであつた心がやつと少しばかりは整頓したらうと突きつめてゆくと、なるほど靜かにはなつたやうである。しかしそれがいつのまにか、それこそごく消極的、獨善的な、個人主義的な、それも煮え切らないものになつてゐた。さうして彼の思想だけでは、しかし、他人の生活といふものと自分の生活とを、忘れても混合させまいと努めるやうになつてゐた。自分の心持でさへ考へつめれば解らなくなるのにどうして他人の心持まで解るものか。そのためにならば命を捨ててもいいとまで思ひ込みもしないで　うつかりしたことを言へるものぢやない。ところで自分のためにも捨てられない命が、どうして他人のために捨てられるものか。最初から最大の犧牲を覺悟しないで他人に同情を示すなどといふことは間違ひのもとだ。犧牲などは眞平なことにしよう。だからたとひ目の前で他人——白分以外の人間が死なうが生きようがただ凝つと見てゐてやらう。とこんなふうに清吉は多少意固地な氣持で決心をした折からであつた。さういふ清吉だつたから、弟の夫婦別れにも、早くからその空氣を感じてゐながらも一言も意見は言はなかつた。けれども意見を言はないといふ事は意見が心の中にわだかまつてゐないといふ事とは少し違ふ。清吉は事もな

げに別れようとしてゐる彼等弟夫婦を見ながら、當人たちよりも自分の方が辛い思ひをしてゐるのぢやないかとさへ思へた。清吉は根がそのやうな感傷的な男であつた。さうして自分の感傷的なことに氣がつけばつくほど、例の「他人の事は他人の事」といふ假面をしつかり自分の心から外すまいと用心した。それにつけても自分自身に覺えのある別離の心持、別れてしまつて久しい後の心持といふやうなものが、弟達のこの事件によつて事新らしくひしひしと憶ひおこされた。さうして今の芳藏夫婦を見ての辛い思ひといふのもやはりは彼等のために催されるのではなくて、唯ただ自分の追憶がさう感ずるのだらうかと考へもした。

それにまた、清吉としては邦子をやはり自分の弟の妻にして置きたい氣持がどつさりあつた。邦子は清吉が別れたふたりの妻をふたりともよく知つてゐたし、またつひこの間の清吉とその友人の妻君との妙な行きがかり、一さう切たくなり増つて行つた戀の出來事をも目のあたりに知つてもゐたし、それに妻を無くし家を無くして芳藏の家へ住むやうになつてから、邦子は、氣まぐれな清吉の癖の多い生活ぶりをもうおほよそ呑み込んで來てゐたし、それだから邦子は實に込み入つた清吉のどんな話題にでも立入つた調子で對話出來るやうになつてゐた。――すべての親愛といふのもつまりは永い話題をしつくりと持ち合してゐる間柄といふことではないだらうか――「あの時」「あの人」と手短かな一ことで互に同じ幻影を目の前に立たせることが出來る。更にはただ睫を動かしただけで複雜な氣持を知り合ふ。それが人間の親密である……で、清吉には今になつて見ると親密な人といふものは殆んど無くなつてゐた。もともと感情的なくせに強がりで、だものだから他人に自分を明しにくい性質で、いつも唯ひとりかふたりかの人に向つてより外には常に自分を匿してゐるさびしい清吉であつた。それがこの七年の間にそれぞれの狀態で妻を二人までつぎつぎに、それにつづいては、篠川のやうに往き來してゐた唯一の親友とその親友の細君――これが清吉の戀人になつて來てゐたので

あつたがそれだから、今度は親友と戀人とをふたり一度に失はなければならないはめになつた淸吉にとつて、もう、五に古い話題を持つてゐるといふ人は殆んどなくなつてしまつてゐた。さうして二十三四から三十までのこの六七年の月日が、淸吉にとつてはわけても波瀾の多かつた時であつて見れば、事毎に思ひ出はあつたし、また自分を匿す淸吉のまわりにはさまざまに人々からの誤解が絶えないにつけても、さまざまな折にふれて彼自身の生涯に就ての過ぎ去つた話題の爲めにだつても、淸吉は邦子を失ひたくはなかつた。さまざまな狀態にあつた淸吉を見て來ただけに、わり合ひによく淸吉を知つてゐる邦子であつた。親身の妹のやうになつてゐる邦子であつた。事實、淸吉のところへ出入する人たちで、それほど個人的でない人のうちには邦子のことを淸吉の本當の妹だと思込んでゐる人さへあつた。それほど彼等の感情が圓滑で自然であつたからではなからうか。さうして邦子の方でも言つたことがある——

「わたしにはもう兄さんといふ人は、このごろはつきり呑み込めて來たわ。はじめのうちは氣むづかしやの冷淡な人だとばかりしか解らなかつたのに——。兄さんも損なたちね。」

　そんなことを慰める邦子であつた。

「このごろはちつとも腹を立てないわね、兄さん。苦勞したので氣が練れたのか知ら。——だとすると、腹を立てないのは可哀想なわけよ。」

「何を！　生意氣を言ふない。」

　そんな對話をする彼等であつた。それを、弟がこの女を離別してしまへば、淸吉は邦子を廣い浮世の人ごみのなかに見失つてしまはなければならないのである。淸吉が以前に親愛し合つた人たちが彼の以前の生活を半分わけにして、何處が彼には何の關係もないところへ運び去つたと同じやうに、邦子もやつぱり淸吉の生活の或る部分を持つたままで淸

吉の眼界から遠く沒し去らうとしてゐる……。この氣持は人と別れたことのない人間には何とも說明のしようもないちよつとしたしかし身に泌みる心持だ――今に芳藏にも邦子にもわかつて來るだらう……

淸吉が、しかし、何と考へたところで邦子は淸吉の妻ではない。そればかりか、淸吉がそんな氣持、邦子に對するそんな好意をなまなかに抱いてゐるだけに、芳藏にむかつて意見を述べることは反つてやめたいやうな氣がする。――さういふ淸吉でもあつた。淸吉は飜つて芳藏の腹になつて見ることもした。すると芳藏の邦子を疎んずる心持も或る點ではわからないでもなかつた。これとても肝腎な、芳藏には外に女があつたことを知らないでは何にもならなかつたが、ともかくも邦子にもよくないところはあつた。といふのはこの女はどうもひどく家事の下手な、下手なばかりではない投げやりなふしだらなので、そのために臺所などはまるで男世帶よりももつと荒凉としてゐた。邦子は不運な家に生れて、十三の時から兄のために藝者屋町へ送られてそこで育つたのださうで、きちんとした家庭の生活といふのはどんなものだか見覺えたこともなかつたに違ひない。それだからそんな點で邦子をあまり責めても可哀さうではあるが、ともかくもその程度がだんだんと嵩じてくるので、淸吉も默つてそれを見てゐながらもむかし自分の最初の妻が、外に仕事を持つてゐたとは言ひ條、そんな風に流し元などがふしだらになつて來てそれから追々と夫婦仲が荒んで來たことなどを思ひ出しては絕えずうすら寒い氣がすることがあつた程であつた。一たいにそんな事などはどうでもいい淸吉でさへさう感ずる程なのだから　ごく世俗的できちんとした性格の芳藏になつて見ればそんな些細なことが相當に家のなかをいやにしてゐたかも知れない。事實、よく芳藏は日曜日で會社の休みの時など、舌打をしながら、そこらの小汚いものをつまみ上げたりして整理してゐるやうなことも度々あつた。それを見兼ねて淸吉は邦子にもう少しどうにか家のなかをきれいにするやうに勸めたこともあつた。そんな機會の或る場合に邦子は言つた――

「でもあの人が（と芳枝のことを指して）どんな氣持だかわかりもしないのに、家のなかなどきちんとしたりしても張合ひも何もあつたものじやないわ。わたしも、つまらないからもう投つ散らかしてあるんです。」

そこで清吉が「なるほど、それも尤もさ。だが兩方でそんな工合じや一層いけなからう。それにあれだぜ、――家のなかをきちんとするとかしないとかいふのはそんな理窟より人のくせだよ。」さう言つてから、彼は意味ありげな笑ひ顔をして冗談らしくつけ加へた「俺は、ひとりこんな女を見たことがあるがね、それや夫婦別れの話が持ち上ると、急に箪笥や行李を引き出して、別れようといふ亭主の着物やら襦袢やらほどき初めたのさ。さうして言ふにはね、きれいにして置いて上げなけや、いづれ當座のうちだらうが不自由をするだらうし、またあとの人に私がだらしのない人間だつたと思はれてもいやですからね――つて、さう泣きながらほどきものをしてゐるのさ。」

「もう解つてよ、兄さん。お京さんの話なんかもう澤山。いづれわたしなんかお京さんのやうなしほらしい眞似は出來さうもありませんよ。――馬鹿にしてゐるわ、兄さん。おのろけなんかおよしなさい……」

「何がおのろけだい。よその女房の話をさ。」

「だからおよしなさいてのさ。自分の女房でもありもしないくせに……」

「…………」

3

お京といふのは、清吉のついこの間までの親友の細君で清吉には戀人である（といふべきか？　あつたと言はなければならないか）その女のことである。

4

清吉はいつものやうに見かけだけ元氣よく歩いてゐた。彼の頭のなかをいつものやうな追想やら感懷やらがごちやごちやと往來した。それらの或るものは頭のなかをちらと閃き去つただけだつたが、或る者は彼の思案の表面へ忌々しく出沒した。無論、考へなければならない題目は澤山あつたが考へて面白いやうな題目は一つもなかつた。さつき買つた手袋はどうも最初から少し小さすぎたのを、店の奴が大丈夫ちやうどいいと言つて賣りつけたのだが、それがたえず氣になつてならない。どんよりとした十一月末の空は味氣なく寒かつたし、まだ早い夕闇のなかを列をなした街燈がそれぞれ一つづつ黄色い光のかたまりになつて中有にぼやけてゐた。で、それがどうといふわけも格別ないけれども何かにつけて全くくさくさする氣の滅入つて仕方のない日であつた。往還の人といふ人は歩いてゐる者も乘りものにある者も誰も彼も家庭の方へ急いでゐる――と少くも清吉にはさう見えた。さうして清吉には急がうにも急ぐべき家路はない。

一たい清吉は、弟の家庭が解散してしまつてから後、或る知り合ひの家の二階へほんの當座のつもりで世話になつてゐたけれども、その知り合ひの家にゐることは清吉には好ましくない豫覺は以前からあつた。けれども先方が勸めてくれる好意に對してちよつと辭り切れなかつたのである。といふのは清吉はこの知り合ひの家に對して今までに時折、五十とか百とかぐらゐの金を泣きつかれて貸したことが三四度あつた。それがどうもいつ拂へるといふ見込みもないから、住むところが無いなら當分來てはどうか――二階が明いてゐるからといふ話であつた。清吉はもとより貸した金は拂つて貰へるものとは思つてゐなかつたが、先方が拂ひたい意志を持つてゐてそれが出來ないのを苦しく思つた上で、その心持の負擔を輕くするために、宿なしになつてゐる清吉を世話しようといふ申入れに對してこれはどうも一時でも

受けて置いた方がいいと思つた。また事實、清吉はそれほど住む場所に就て急に困つてゐたのでもあつた。しかしその家へ來て見て清吉は、以前から腑に落ちない事に思つてゐたこの家の人たちが一層氣に入らない氣持がだんだんと増して來た。そこの二階へ住むやうになつてからも清吉は金のある時を見込まれると時をり彼等から金を貸りられた。返す見込みとてもちよつと無ささうに思へるのに、ちよつと一週間とか一ケ月とか言つて金を貸りられるのも、清吉にはもとより愉快ではなかつたが、それほどの困窮のなかへ他人を置いてくれようといふ親切が清吉には氣に入らなかつた。彼等がたとひ清吉に借金を申し込まないと假定したところが、氣持の上だけでも清吉にその困窮の空氣を感じさせるのだが、事實上でも清吉は金を借りられる事によつて清吉も貧棒をした。三ケ月ほどの間に合せて二百圓となにがしほども貸りられたのでは遊んで食つてゐない清吉にとつては痛事であつた。清吉は無論、その月月になにがしかの金は支拂ふつもりではあつた。しかし好意的に置いてゐることにしてかうして時々金を借りられるのはたゞ金の問題でなく不愉快であつた。清吉が自分を落して考へてもいいならこの人たちは最初から時々清吉に金を借りるために清吉をここへ置いたのだといふかも知れない。けれどもその人たちとて決してそんな腹の人ではなかつた。たゞその日その日が苦しかつたのである。さうして親切なことも親切ではあつた。けれどもその人たちには清吉の氣ごころは全くわからなかつたと見える。といふのは清吉は寧ろ人からなまなかな親切をされるよりはそつとして置いてもらひたい性質であつた。ところが運の惡いことに清吉は、その家へ來ると殆んど直ぐその日からえたいの知れない皮膚病にかかつた。さうして一ケ月半も患つた。そのうちに癒るだらうと思つたものが、だんだんとひどくなつて來て、しまひには足の甲などに出來たもののために立居さへ自由でなくなつた。どうしたつて同居してゐる人たちの手の親切を受けずにはゐられなかつた。その行き屆いた親切を清吉は感謝することは無論感謝した。それでも一口に言ふとその人たちと清吉とはどうして

も氣質が合はなかつたのだ。彼等の親切がどうも度を超えてゐるやうに淸吉には感じられた――すべてが彼等の生活の樣式に支配されることになつて、些細なことまで淸吉の好みは無視された。たとへばあの事である――あんまり髮がおどろになつたから洗つてやらうといふ。おできのために兩手ともつかへなくなつてゐる淸吉にはそれはうれしいが、さて主人が細君に命じてやれ金だらひだとか水差だとかそこへ敷く新聞紙だとかシャボンだとかタオルだとか小さな手拭ももう一枚、雲垢とり香水だの櫛だの、もうかうなると淸吉にはいけない。――大業にさういふものを持ち出されると淸吉には、この行屆いた親切が一そどうやらうるさかつた。それは決してわざとらしくは無いまでもあまり物々しすぎた。いつのころからかヴァカボンド魂を持つやうになつて身につける物の外は一切持ちたく無くなつてゐる淸吉にくらべて、淸吉を親切に取扱つてくれるこの家の人たちは例へばちよつとした旅行をするにもちやんと革紐でくるんだ毛布やらサックのなかへ納つたコップやらを持つて歩きたいといふのがこの人たちのやり方であつた。ただちよつとした好みの違ひだけである。けれども妙なところで我がままな氣むづかしい淸吉は、彼等の親切を有難いとは思ひながらもどうもそれを喜べなかつた。丁寧に、さうして式部官のやうに行き屆いた煩瑣で自分の頭が洗はれてゐるのを面倒に思ひながら、氣の合はないといふのは不思議なものだと淸吉はつくづくと思つた。さうしてあの時――二年前に病氣をした時、お京の手でアルコールで背中を拭いてもらつた日のことを一瞬間たのしく思ひ浮べたあとで、そんな優しい手が自分からもう永久に遠いところにあるのを淸吉は身に沁みて感じてゐたが、やつとの思ひで頭を洗つて貰つてほつとしたと思つてゐると、一たん下へおりて行つた主人が再び二階へ上つて來て、見るとその兩方の手が悔いた人の手つきのやうに擴げられてあつたから、どうしたのだらうと思つてゐると、彼は言つた――

「さあ、油をつけて差上げませう」その兩方の掌にはもう油をつけて來てゐるのであつた。

「油ですか。僕はどうも油はいやなのだが……」

「いや、髮を洗つたあとじや油をつけなけれや衞生上惡いと言ひますよ」

衞生も何もそんなことはどうでもいい。が、さう言はれて嫌やな表情をしたものの淸吉は、折角そのやうに用意して來てくれたものを、それも相手が好意づくである以上、淸吉はもう決然と斷ることも出來なかつたし、相手はまた人の表情などに氣をつける人じやなかつたから、淸吉はまだ濡れてゐる髮の上へねつとりと油を塗りつけられた。淸吉は相手が二階から下りるのを待ち兼ねて新聞紙で自分の頭をくしや／＼にふいてしまひながらそんなにまでいやなものを斷りきらなかつた自分を腹立しく感じると一緒に一種妙なをかしさがこみ上げて來て、淸吉は苦笑しながら心のなかで言つた――

「親切な人間といふものはたまらないな。人の生活の樣式をすつかり自分のの通りにしないぢやゐられないのだから。で、そのとほりにしないと腹を立てるのが俗人の親切だ……」

……その時の心のなかのひとりごとを、淸吉は今歩きながら、その時の光景と一緒にひよつくりと思ひ浮べた。さうしてその時の言葉のあとへつけ加へて考へた――それに親切を道德にしてゐる人間は、自分だけ親切をすればいいことに人にも自分への親切を要求するのだからな。だから比較的に金のある淸吉が貧乏をしてゐる彼等に金を都合してやることも當然な道德的な義務だと思ひ込んでゐるかも知れない。でもなければああ度々、事もなげに金を貸せと言へたものぢやなからう。それや彼等の貧乏もわかつてはゐる。――よくある奴だけれども、若い夫婦で生活の方針も何も充分には立つてゐない人たちである。人事ぢやない、淸吉ももう十年近く前に初めての女房を無理に持つた時が丁度それだつた。金の無いことの苦しいのは淸吉にだつて思ひ當ることがある。だから借せと言はれてみればどうにかしもする

が、あの人たちのやり方は一たいどうだらう？　不運つづきで思はしく行かない事情もよく聞かされるが、それにしても夫は毎晩、妻君を相手に酒を飲んできやつきやとふざけ合つてゐる。半年ほど前に新婚した夫婦で若夫婦とは言ふものの、もう淸吉と同じ年ぐらゐな男に二十二三にもならうといふ女だ。新婚と言つても男は以前金のあつたころには道樂をしつくしたと言つてゐる人だ。そのふたりが人前も憚らずにふざけながらの晩酌もいいが、淸吉にしてみればこの酒手を自分が出してゐるやうな氣もする。そんなケチなことまで考へさせられる。醉つぱらふとふざけ方が昂じて、目にあまるといふほどじやないまでもどうも淸吉の趣味に合はなくなつてくる。けれどもその同じ食卓にゐる淸吉はいやな顏一つせずに、出來ずにゐる。うつかりいやな顏でもして相手がそれに氣づいたら、それをただ趣味か犯されたからと思つてくれる相手ならいいがひとり者奴が妬けてゐるな！　とでもとられたのぢや自分が情けない――そんなふうにまわり氣な氣の差すへんな淸吉であつた。それ故、淸吉はそんな場合仕方がなければ「これも人生への御奉公だな」と思ひながら冗談口の一つも一緒に言はせられる。さうして一緒になつて打興じてゐるものと相手に思はれてゐるとすれば、その莫迦々々しさはまるで四重五重だ。最初にきつかりと斷ればよかつたものをその時の一時の氣の弱さから相手の好意を無にしかねてうつかりこんな氣の合はない人のなかへ厄介になつて來てしまつた自分が、淸吉にはその頃から少しづつ腹立しくなつてゐた。だがあの亭主の細君になつたわけぢやなし、あの細君の亭主になつたわけぢやなしさ。さう後悔するにはあたらない（さう淸吉は自分自身の氣持を滑稽化しながら）人の女房がひどく氣に入るのにももう懲り懲りしたが、あまり氣に入らないでも困りものだなあ。――ふいと、氣持を可笑味の方へ轉換することを覺えてゐる淸吉であつた。さうして自分自身をなだめるためには苦笑を、さうして悲しい或はそのほかの眞劍な氣持を他人に表出する時には複雜な冗談を。こんな方法で淸吉は寧ろ快活な人のやうに、或る時は不眞面目な人のやうに、或る時

は誠意のない人間のやうにのみ思ひ込まれてもゐた。それを知つても清吉はその他人に自分を徹しようとも試みなかつた。清吉は自己韜晦者であつた。さうして無言のうちにすつかり彼を理解しない人にとつては清吉はわかりにくい人間であつた。ことに異性には難解た人物らしいからな——清吉は例によつて道化た調子でさう考へて、幾年か同棲した末に別れなければならなかつた女たちのことを今はおぼろげに、けれども憎みではない寧ろ或る懐みをさへ持つて、さうして自分の孤獨な性格を認めることでその罪の一半を清吉自身でも自分の分前にしながら、おれは異性には難解な人物だといふ短い一言のなかへそのすべての氣持を込めてあつた。それにしても今はもうそんな家庭でさへもおれには無いのだからな……。清吉はむかしの女たちと相對してゐる夕餉のありさまを空間に一閃させた。さうしてそれが消え去つた後で、心のなかで言つた——

「全く何かにつけて、程を知らない人たちだ！」

それはむかしの女たちに對して言つたのぢやない。さつきまで考へてゐた現在の同居者夫婦との夕食の食卓の光景を最後にもう一ぺん思ひ浮べた時に、さつき一たん途切れてゐた彼等のことをさう結論したのである。さうしてもつと晴やかな氣持の時に考へればさすがにさうではなかつたらうが、清吉は何故か今日は到底、そこに自分の今日の夕飯が用意されてゐるであらうその食卓のある家——ともかくも今日の清吉自身の住み家である家へ歸つて行く氣にはなれなかつた。さうして清吉は意識的にその家とは反對の方向へすたすたと歩きつづけてゐた。すべての人がそれぞれに自分の家庭の方へ急いでゐるであらうこんな日のこんな夕方に。

お京の家の夕餉のさまが、言ふまでもなく今までにもう幾度か清吉の目にまざまざと浮び上りさうになつてゐた。それを掻き消すために清吉は精一ぱいで努めた——あんなにくどくどと現在の同居者外山夫婦のことを追つかけ追つかけ

考へつゞけてゐたのも、實はそれがとぎれる時にお京の家のことが憶ひ出されさうになつて仕方がなかつたのでそれを防ぐための一つの手段であつた。が、たうとう外山のことに結びついてお京やお京の亭主のことが、淸吉の心の表面へ浮び出てしまつた。――お京たちは外山夫婦をもよく知つてゐるのだし、またどうやら淸吉が外山のうちにゐることも知つてゐる筈だから、さうして日ごろから外山夫婦を不愉快がつてゐたあの男のことだから、お京の亭主はきつと淸吉のことを「彼奴は氣むづかしい神經質な人間のやうな面をしてゐるくせに、よくも外山のやうな奴と一日も一緖に居られるものだね。僕は外山タイプの人物は見るのもいやだがね」と、お京を相手にそんなことを言ひはしないかと、ふとさう空想された淸吉は、實際いま現にそんなことが言はれてゐる聲をでも聞いたやうに腹立しくなつて來た。それにしてもお京は何と答へるだらう……。淸吉は新らしい手袋のはまつたおぼつかなくもどかしい手で、煙草を一本、外套のポケツトのなかのモロツコ皮のシガレツトケースからやつとさぐりだした。その煙草を、吸ふでもなくただ吹かしながら淸吉はぢつと考へつめて歩いた。……「そんな思ひやりのない事を言ふものぢやありませんわ。淸吉さんは、だつて行くところがないのです」然うだ。お京さん、さう言つてくれ…………

往む家もない
戀もない
その日その日を
お京よ!
私は、私は

かうして
味ない煙草を
吸ふばかり

いつのまにやら、清吉の心のなかではそんな出鱈目な文句が出來上つてゐた。――とつぷりと暮れた夕方の擦れちがひざまに道行く人々がその香をふりかへつて見るほどの、新らしい鑵のロオド・バイロンを清吉は本當に「味ない煙草」と言つてゐるのである。贅澤には人の悲しみを癒す力がないからであらう。出鱈目のその文句を清吉は何度でもくり返してみた。何でもよかつたのだ。ただ、どうしても「お京よ！」と呼びかけたい氣持ちであつた。さうして繰返し繰返した。子供を眠らせようとあせるお母さんが出まかせな子守唄を熱心に歌ふやうに、清吉は自分の悲しさを、寢就かせようとしてゐるだけであつた。

すべての幸福な家庭ではもう夕餉が終つたに違ひない。さうして家庭のない人間だとても腹は空く。清吉は空腹をも感じながら歩いた――どこへといふ目あてでも別になかつた。

突然、清吉は立ちとまつた。

5

邦子が藝者をしてゐる土地はこの邊だ。さう、さう。たしか百合香といふのださうである。邦子が實家へ歸つたのは夏のはじめであつた――もう半年顔を見合はない。會へば邦子も思ひがけないことに喜ぶだらう。

佇んだ淸吉は時計を出して見た。それから自分の心のなかを見まわしてみた。さうして町の見當を見まわしてみた。淸吉は少しためらひながらもと來た方へひき返しながら、辿るともなくふるい記憶を辿つた。――そのころ未だ學校へ通つてゐた芳藏が學校仲間の惡友と一緒によく遊びに出かけるらしく、さうして彼らは時をり集つては遊び場所の噂などをしてゐることがあつたが、そのころ小耳に挾んだところでは、そのころは八重子と謂つた邦子の出てゐた家といふのは、淸吉が今步いて行く少しさきの或る大きな呉服屋の角を右へ折れてすぐとつつきの狹い通のもう一度右へまがつてどうとかすると、玉突場を兼ねた洋食屋があつてその近所のたしか「梅のや」とかいふ家であつた。いつか芳藏や邦子とこの邊を步いた時にも邦子が自分でそんな話をしたことがあつた。百合香になつた邦子も同じ土地の同じ家から出てゐるとすればやつぱり梅のやにちがひない。それにしても淸吉は一帶に藝者といふものを知らない上に、その土地のことなどは全くの不案内であつた。さうして未だ義妹のやうな心持の去らない邦子と一緒に今日の夕飯をどこかで食べようといふ自分の思ひつきを實行したく思ひながらも淸吉は、勝手を知らない場所へ踏み込んで行く不安があつた。それでもいつのまにやら、聞いたことのある方角の方へは步いてゐた。

それにしても――と、淸吉は考へた――芳藏は今どんな樣子であらう。あの時、いよいよ邦子とは別れるといふことを相談の形で實は報告された時に、淸吉はただ一言だけ芳藏に言つた――ごく自然な穩かな調子で、

「誰しも自分の思ふやうにするのが一番さ。ひとに相談するまでもないよ。自分の好きなことをして自分で責任を避けないのだ。俺もその流儀で來た。いいとも、勝手なことをしようぢやないか。そのうちにはてんでに人生といふものも追々と判つてくるだらうから。」

芳藏は默つて聽いてゐた。淸吉は、しかし、弟の家庭が解散されて荷づくりなどごた〳〵と始めるのを見るのが嫌で

あつたし、それに弟の家庭が無くなれば、さて直ぐに行くところとても無いので、旅に出てしまつた。清吉の旅の留守に芳藏は豫定より早く出發してしまつた。朝鮮へ行つてからはがきのたよりがあつたが、筆不精な清吉は返事もやらなかつた。清吉の筆不精は一族のなかでは有名だから、芳藏がそのために怒つてゐるやうなこともあるまいが、それつきり先方からも便りがないのは、默つて女をつれて行つただけに氣がひけてゐるのかも知れない。どんな女をつれて行つてどんな暮し方をしてゐるものやら。女と言へば、いつか夜おそく或る乘換場でひよつくり同じやうに家へ歸らうとする芳藏に出合つた時、今思へば芳藏は女をつれてゐた。そんなことは知らなかつたから、どんな女だつたやら見もしなかつたが、果してあの女かしら。女をつれて行つたことさへ敎へないくらゐだから從つて詳しいことを言つて寄來しようもあるまいが……。一たい、女があるならあるとあの時、打明けたところで別に小言を言つたり干渉したりするやうな清吉でないことは知つてゐる芳藏だのに、何故さうと言はなかつたのだらう。さう言へば邦子にしたところが、實家は仲のあまりよくない兄がゐるだけでその兄とてもささやかな洋服屋をしてゐるのだから、實家へかへつてからどうするといふ考へでもあるのかとさすがにいくらか心配して聞いた清吉に對して邦子も別にこれといふことは言はなかつた。そのくせどうやら二月もたたぬうちにまた藝者に出たところを見ると、別れ話の時からそのつもりもあつたのかも知れない。相談しても初まらないと言つてしまへば全くさうには違ひないものの、清吉の身になつてみれば芳藏からも、邦子からも何かと聞かせて欲しかつた。あれぢや全く、かげでつらひ思ひをしてゐた自分が芳藏からも邦子からもごく冷淡な人間と思ひ込まれてゐたのも同然だ——清吉はふとそんな輕い不滿を彼等に對して感じたが、氣がついて——ほい！　おれは全くの個人主義者になり濟してゐる筈だつた。人からも厄介なことを聞かされまい。自分でも人には言ふまいといふ方針ぢやなかつたか。自分では人に何も打明けないで人からは親身に相談をしてもらひたいと要求すれば、

これもまた一種の蟲のいゝことと言はなければなるまい。芳藏も邦子もつまりは、あれで淸吉の方針を尊重したことになつてるぢやないか。さう言へば今夜も邦子に逢つて何の用がある自分であらう？　別に邦子を慰めようとするのぢやない。慰められようといふのでもない。理窟はいらない。一緒に飯を食へばいいのだ。ただ話題のあるところへ行きたいのだ。さうして淸吉にはさしあたり邦子のところより外には話題のあるところはなかつたのである。

邦子が再び藝者になつた話を聞いたらお京はさぞびつくりするだらう。淸吉を信じ切つてゐる單純なお京は、芳藏のことを「淸吉さんに似合はず不人情な人だ」と思ふだらう。また「そばに淸吉さんが附いてゐながら……」とも思ふだらう。お京はたつた一度あの時（と、淸吉はそのあの時をありありと思ひ浮べながら）あの時に一度だけ邦子に逢つただけだが、邦子もお京を好いてゐたし、お京もひどく邦子を好いてゐたつけ。さうしてお京はよく邦子の噂をして言つた――

「もうかうなれば、淸吉さん、あなたと一緒になることはあきらめるより外はないのだから、ただわたしもせめて邦子さんのやうに、あんなにほがらかな氣持でいかにも樂しさうに『兄さん』と呼んで見たいわ。」

さう言つてお京は小聲で「兄さん」「兄さん」と邦子の聲音を眞似てゐたつけが……。お京、今日はまたどうしてかうお京のことが思ひ出されるのであらう。あ！　さうだ！　今日は十一月の二十四日か。思ひ出のある日だつた！　もしやお京も今ごろ、ひよつくり二年前の今日を思ひ出してゐたのぢやないかしら。淸吉は妙に耳をすまして見るやうな心持がした――どこかでお京の聲が遠くから聞えて傳はつてくるのぢやないかと。裏どほりにいつか來てゐて、ただ耳をすませば自分の靴音が聞かれる――

戀もない
その日その日を
お京よ！
私は、私は
かうして
味ない煙草を
吸ふばかり

6

「ええと……先づ、ホットウヰスキイを一杯と、それにこれだ。」

清吉はウエイトレスの持つて來たメニユーの上を指でおさへて命じながら、やつぱりさつきのつづきを考へつづけてゐた。――邦子をどこでどう呼べばいいだらう。知つた家とてもなし、夕飯をたべる場所とても知らない。これはやつぱりウエイトレスに電話をかけさして邦子から何かと聞くのがいい。さうだ、それまでは空腹ではあるが先づあんまり食べまい。さう決めた清吉は改めてその家のなかを見まわした。なるほどこの家に相違ない――玉突屋と洋食屋とを兼ねてゐる。――二階からカチ〱と玉の音が聞えてゐる。これが以前に芳藏などのよく出入したといふ家に違ひない。さうすれば邦子の――百合香の家といふのは間違ひなくこの近くなのだ。……近くでなくてもいい、何れ電話をかけて貰ふのだから。

「姐さん、ちよつと電話帳をかしてくれませんか」

ホツトウイスキイを先づ持つて來たところで、淸吉は電話帳を借りてみたが、どうしてだか梅のやといふ家の番號は見つからなかつた。

「姐さん、この邊にたしか梅のやといふ藝者屋がある筈だがね。無い？　電話の番號を知らない？」

「帳面には御座いませんか」

「見つからないやうだ」

そんな會話をしてゐると、突然にコック場のかげから女の聲しこ。

「梅のやさんならすぐそばぢやないか。」さう言ひながらおかみらしい三十ぐらゐの年增がちよいとコック場の方から顏を出して、淸吉を見ると、「いらつしやいまし。」と一目ちらりと見たやうであつたが言つた「梅のやさんへ何か御用事ですか。藝者衆？」さう言つて愛嬌笑ひをしたが、或はその女自身ももとはその藝者衆ぢやなかつたかと思はれる風情であつた。畜生！　この女までが中高で丸脂のせいでか年こそふけてゐるがどうやらお京に似てゐる――淸吉にはそんな氣がする。

「ええ、さうです」極く生眞面目な調子で淸吉は答へた「百合香といふのです。そんな名のが居ますか」

「百合香さん？　その方はもう去年ぐらゐからゐないのぢやありませんか知ら」

「はてね？　僕はつひこの間――さうこの七月か八月ごろにでも出たのだと思ひますがね」

「お若い方でせうか」

「いいや、二十三四ぐらゐの」

「ぢや、また新らしい百合香さんといふのが出たのか知ら。その方に御用でございますか。——それぢや電話の番號をさがすより、ちよつと一つ走り、お前行つてお上げよ。——梅のやさんならわけはないから」あとの方の半分はウヱイトレスに言つたのである。さうして彼の女は、まだ新米らしくそこを知らない若い方の女に、梅のやの場所を——そこの角を曲つて、車屋さんの……髮結ひさんの……といふ風におしへてから淸吉に言つた——

「で、もしその方がいらしつたら、ちよつとここまで顏を出して見てもらひませうか。ねえ？　お名前はおつしやらないでもいいでせうか。——あ、さうさう、これではね（さう言つておかみはウヱイトレスをふりかへつて）梅のやさんへ行つたら、百合香さんに來ていただきさへすれやわかるお方だとおつしやいよ。え、あそこの家はうちをよく知つてゐるのだから居さへすれやお見えになりますよ」

おかみの親切には何だか、何もかも間違つて呑み込んでゐるやうな調子があつた。それが、顏を直ぐ赧くするくせのある淸吉の頰をかつとさせるやうな氣がしたが、けれどもコツプに半分ほど飮んでゐる酒のために淸吉の頰は前からもう赤くなつてゐたので別に目立ちはしなかつた。

注文した皿を卓の上へ置くと若い女は早速、梅のやへ行つてくれたが、百合香は今出てゐて、貰へば貰へるお座敷だ、けれどもそれでもまだ一時間ぐらゐしなければ……といふ返事であつた。

「あ、然うですか。ありがたう。なにそんなにまでして用は無いのだ」

淸吉はさう言ひながら、邦子を待つて飯を食ふ者はあきらめて、その代りに今度は別に腹にたまりさうなものを改めて注文した。沈鬱さうな淸吉を相手にする人は誰もなかつた。おかみはさつきあれだけのことを取計らつてくれるとそのまま二階の玉突臺の方へ行つてしまつたし、若い女は大きな鏡の前で自分の髮を直してゐた。出前を主にしてゐるら

しいこの店は部屋も粗末だし、そんなことはどうでもいいが、まだストオブを用意してゐないからうすら寒い。淸吉の頭の上の方では玉臺をまわり歩く人の足音が鈍く傳はつて、その客の數は少いらしいがさつきのおかみの聲もまじつて何だか知らない談笑の聲のなかを縫ふやうに玉の音がカチカチと冴えてひびく。あの足音は太つた男のもので快活な笑ひ聲だな、そんな用もないことをふと思つて見たりしてそのもの音を聞きながら淸吉は、ホツトウヰスキイのつぎには冷いのをもう一杯飮んだ。顏は眞赤になり體は溫くはなつてきたけれども心持は少しも所謂醉つた人のやうではなかつた。さうして二階の賑やかさにくらべて淸吉は、自分の身のまわりは何だか足もとでこほろぎが鳴き出すやうな氣がして、自分と相對する人はみな默つてしまひ、自分の行くさきざきはその度ごとに方何間かの間さびれてしまふやうな氣がした。影がうすいといふ言葉があるが淸吉のはうすいのではなくへんな影がさして、さう言へば自分の顏はエル・グレコ筆の肖像畫のやうに一種の氣味惡さ、一脈の魔氣があつて、それだから女子供は何となく淸吉を憚るやうなところがある。さうして自分はしんから人と喜びを分ち合つた覺えはない――それが淸吉自身の誇張したつまりはセンチメンタルな氣持で、淸吉はもう少し醉つて來てゐるので、これが淸吉の酒くせなのである。

7

どうしてもひとりではいけない氣持であつた。されぱと言つて今、語り合ふべき人はやはりなかつた――どうしても邦子より外には。淸吉はあの洋食屋から出てくると一丁とは步かないうちにもう一度その家へ引きかへした。淸吉をおくり出して客のないひまを講談雜誌を見てゐたウエイトレスは、また歸つて來た客を表戸の口に發見して、忘れものでもしたかと頓狂な聲でたづねた。淸吉は半分ひとりごとの口調で答へた――

「いいや、さうじやない。ここまで來たのだから、やつぱり逢つて行かうと思ふのだ。あと一時間もすれば貰へるわけだね——百合香は。それぢや君、僕はこの邊の勝手は少しも知らないのだから、どこかそんなうちをおかみさんに聞いて見ておそへて下さい、面倒だが……」

二階から下りて來たおかみはうちの家號をおそへて、それだけぢや無論わからなかつたので、ウェイトレスと二人で外まで出て來て指ざしながら敎へてくれた。淸吉の後すがたを見送りながら、ふたりの女たちは囁き合つてゐる樣子であつた。そのすぢ向ふの酒屋の角を曲つてつき當つてまたまがるその角の奥まつた家といふのが、現にさう敎へられて淸吉が今來てゐるところなのだが、さういふ家に座り慣れないせゐか淸吉にはどうしても居心地がよくなかつた。馴染のない人には口の重い淸吉は、女中を相手には冗談を言ふ心持にもなれなかつた。なまなか酒をのめばへんに生眞面目になる淸吉である。それは初めから承知の上ではあつたが百合香はなかなか來なかつた。それにこの家は百合香が出入することのないうちらしかつた。年增の女中が言つた——

「いやですね、旦那は。時計をお肴にしておひとりで飲んでゐらつしやるのですね。もう一時間はたつぷりお待ちなすつたでせう。何しろこんな場所ではありますし、時間のほどは當てになりませんから、それまで誰か別の子でもお呼びになつてお待ちなすつてはいかがでせう」

「さうさ。それもいいが……」と淸吉はあいまいな返事をして、知らない女などがくればこの場合一さう息苦しい氣持になるだらうし、それに邦子に逢ふまではともかくもさう席をくづさないでゐるのがいいと思つた。さうして言ひつづけた「……だが、やつぱり、もう少しひとりきりで待つて見ようよ。別のひとが居たりしては叱られるからね」——淸吉の冗談は硬つてゐる。

「おやまあ、大へんですね」

「大へんも大へん。深い仲だからさ。――それに今夜はわけても他聞を憚るやうな話に、うまい金儲けの相談に來たのだからね。――だから君はさう氣を揉んでくれなくてもいいのさ。それにこのとほり僕はいけない口なのだから、忙しいところをお氣の毒だからひとりで放つて置いてくれれば結構。御邪魔だがさうして置いてくれたまへ」

「ええ、え。そんなことは何ですけれど、百合香さん、本當にどうしたのでせうね。こんなに待たれてゐる身になりながら……。ね、さうでせう？」

そんなことを言ひながら、それをしをにして女中は立つて行つてしまつた。どの座敷もしいんとして別に忙しいけはひとてもないが、女中はそんな陰氣な氣心の知れないお客を嫌つて氣づまりがしたからであらう。全く清吉自身でも自分が氣づまりであつた。氣分の轉換をしたかつたけれどもその方法とてもない。いや、ただこの場の氣分の轉換だけぢやない。生活全體が行きづまりになつて、それをどうにか開展しないでは居られないのである。あの時――もうお京とは逢へないと思ひあきらめた時から、どうにかしてその日その日でも月日さへ立てばいいと自分を自分で甘えかして生きて來たのが、知らない間にぼつぼつと嵩じて來て、自分は淺はかな安逸と甘つたるいさびしさとに自分の身をまかせてしまつてゐるのではないだらうか。何一つ信ずるところとてもなく、さればと言つて懷疑の海底へもぐり込まうといふでもなく……。さういふ理に落ちた、さうしてそれにふさはしく冷え切つた酒を清吉は手酌でついだ。

清吉は自分の心のなかに行き來するさまざまな人――男や女の影を澤山、つぎつぎに見つづけて行つた清吉の心は一つの十字街であつてそれらの影はそれぞれの方向へ歩き去つた。すべて皆、過去のものである。清吉の新しかるべき未來を暗示するものは一つもなかつた。たつた一つ、澄江だけが清吉の心の十字街のなかに未來の道を向いてぼんやりと佇ん

でゐる……。しかしそれをよく見つめてゐるとそれは澄江ではなくてやつぱりお京——その十字街を過去の方へしくしく泣きながら歩み去つたお京の姿になつて來る。それは淸吉自身にも苦しいし、澄江にだつて氣の毒ではあるし……

こんな氣持まで考へて來た時であつた。

「や！　來たぞ」と淸吉は突嗟に、伏せてゐた目を、外かわの方へ見上げて聽き耳を立てた。カタカタカタといふ急ぎ足の駒下駄の音が不意にその時、淸吉の居る表二階へ——さうして淸吉の記憶の耳へひびいて來たからであつた。邦子の足音だ！　聞き慣れた自分の家族の足音である。寒いころに外へ買ひ物に出て急いで歸つて來る邦子の足音だ！　淸吉にはこみ上げて來る氣持であつた。

「百合香です。今晩は！」

「あら、百合香さん。隨分お待ちですよ」

そんな會話がそれから何やらぺちやくちやと下から洩れて來て、足音ばかりではないその聲も邦子のものではある。けれども聲の方にどこかつくり聲で足音のやうに淸吉の胸にはひびいて來ない。あの足音を不意に聞きわけた瞬間には、ひとりの藝者の急ぎ足の幻影と邦子の姿とをごつちやに思ひ浮べた。それが淸吉には思ひもかけない悲しみであつた。弟のもとの妻を二度目とは言へ藝者などをさせるのは困るといふ抽象的な心持が、その足音を聞いた一瞬間に忽然と一つの具體的な心持に變つた。その悲しいとも濟まないともなつかしいとも味氣ないともつかない氣持で淸吉はぢつと百合香の邦子が部屋へ來るのを待ち受けた。さうして別の事を考へ込んでゐる間だのに突嗟にそんなものを聽きつけた自分の耳を不氣味にもいとしくも哀れにも感ずるのであつた。その時しづかに階段を踏む音がして、殆んど音もなく開いた障子のかげから手を突いて樣子ぶつた邦子が——いや、百合香が、おちよぼ口で硬ばつた表情で顏をのぞかせた。淸

吉は言つた。

「何だい？　その顏は！　ハ、ハ、ハ！」

百合香の邦子の硬ばつた顏が突然いぶかしさうな、それ故、全く自然な顏になつた。ぽかんと半分口を開けて目を見開いた。――それはまだ邦子がまだ弟のところへ來ても世帯やつれもせずに、三年も前までは豐かに持つてゐた無邪氣なのどかな麗朗とした表情と似てゐる。百合香の表情はすぐに變つた――全く邦子のものになつた――

「あら！　兄さんね！」邦子は疊の上をすべるやうな早足でもう淸吉の火鉢の向ふに座つてゐた「どうしたの。珍らしいこと！」

邦子は、火鉢の上にかざしてゐる淸吉の大きな骨張つた手を挾んで自分の小さな二つの手で掌と甲とから押へた……

「冷たいでせう」

――しばらくの無言のあとで邦子はさう言つた。さうしてこの思ひつのつたひとりでの動作にふと氣がついたかのやうに、そつと淸吉の手を解き放して、灰のかぶつてしまつてゐる火を掻き立てると、自分もその上へ手をひろげてかざした。

「……」淸吉の答は無言であつた。冷たいだらうといふ邦子の言葉には然したる意味もなかつたのだから。

邦子はほつと溜息をしたやうに淸吉には感じられた。淸吉は邦子がこんなところで自分に逢ひたくはなかつたのだらうか、それを聞かうとしたがそれを言ひ出さうとするとちやうど言葉がぶつつかるやうに邦子が言つた、

「ああ、ほんとうにうれしいわ。ここは知らないうちだから御名指だと聞いて誰かと思つて來たのよ。――兄さんは新陽亭で聞いて來たのですつて？」

「新陽亭といふのかね。ああ、向ふ角の洋食屋さ。――あそこは芳藏のよく知つてゐたうちぢやなかつたか知ら。おれは何だかじろじろ見られるやうな氣がしたが、それだとすると、芳藏とおれとはやはり似通ふたところもあるから、おれのことを芳藏が年とつたと思ひやしないかなどゝ思つてね」

「……」邦子は何か思ひ出しでもしたのか默つてゐたが「大丈夫――あそこは代が變つてしまつたから。兄さん。それよりはさあお酌」氣を換へるやうに邦子は急にそこにあつた銚子を取上げたが振つて見て「何だ？　空つぽぢやないの」さう元氣のいい聲で言つた。それから手を鳴らしかけて、ぐるつとあたりを見廻してつひ後にあつたベルの紐のボタンを押してから座り直して「兄さん、みんなひとりで飲んで？　飲めるやうになつたのね。藝者の言ひ分にすれや感心だわ――そのくせ赤くも何ともなつてゐないわ。」

氣がついたが、さういふ邦子も今までの座敷で飲まされたのか、ほんの少しは醉つてゐるやうであつた。それとも沈み勝ちな清吉を直ぐに見てとつてわざと努めたはしやぎ方とも思へる。さう思ひながら清吉は自分の頬をちよつと撫ぜて見て、

「あたり前さ。もう醒めちやつたよ」

「どうして？」

「どうしても無い。酒なんてものあ初めの三杯分赤くなれや、あとはいくらでも同じさ。あとからあとから醒めるさ――顏だつてもとの通りになるよ。ましてたかが一本の酒で、さ」

「えらい事を言ふわね。一たい何本飲むの。――いつの間にそんな馬鹿なことを覺えたの」

「それも藝者の言ひ分かね。だが馬鹿なことぢやない。酒を飲むのも案外精神修養さね。今のさつきも醉つぱらつて大

いに反省してゐたところだつた。だが、酒といふものはまづいな。おれには直ぐに酸つぱくなるぜ。――醉ひもしないのにさ。全く馬鹿々々しい飲ものだ」

その時障子の外から「おや、急に元氣におなりですわね」障子を開けた女中は心得て酒を持つて來たのだが、ちよつと腰を据へながら「百合香さん。こちらは本當に現金ね。あなたが來ないうちは鼠に引かれさうだつたのよ」

「うそだよ」と淸吉が言つた「え、姐さん。今だから白狀するが、どうして心中の相談を持ちかけやうかと思つてね、策略をめぐらしてゐたからさ」

「姐さん。それも無理心中よ」邦子もさう言つた。

三人は、三人してそれぞれ下手に笑つた。

8

女中が出て行つた後で邦子はやつと言つた――

「時に朝鮮から便りはあつて？」

「うん、一ぺんはがきが來たよ。こちらからも何とも言つてやらなかつたがそれつきりさ。」

「やつぱり誰かつれて行つたのですつてね」

「……おれもさういふ噂は聞いたよ」

「困つてゐるつてぢやないの？」

「？」

「お金のことではなくつてよ、そのひとの事でさ。兄さん、知らない？」

「それは聞かないよ」

「さう。それぢや言ふまい。わたしが餘計なことを言つちや惡いから……」

「いいよ。言つてごらん」

「でも、根が噂だし、告口のようだわ」

「いいてば。お前が告口するのぢやない……おれが詰問すると思つて」

「……それより、あの人、ほんとうに朝鮮に居るのでせうか。門司にゐるのだといふ人がゐてよ――おせつかいがゐてね、いろんなことを聞かせるのですもの」

「いろんなこととは？　だが京城にゐることはどうも本當のようだがな」

實際、芳藏が門司にゐるといふのは初耳であつた。それにいろいろな事情から見て、やつぱり朝鮮にゐるのは本當らしかつた。しかし、邦子がたうとう話し出したやうに、芳藏が女のことで困つてゐる――といふのは、その女の親たちといふのはよくない人たちで、それが朝鮮だか門司だかまで娘と一緒について行つて、店も何もその女の名義でさせてゐるし、新らしい事を思ひついても一つ一つ干渉はするし、會社をやめて見て一本立をしても折角の事業も何も自分の計畫どほりには運べず、それに女の親たちのやり口があまりきびしいのでさすが人好しの芳藏もいや氣がしてゐる――もうそんなことはやめて東京へ歸りたいと、その土地で逢つた或る人に芳藏が言つたのを別の或る人が聞いて來て、邦子はその第二の人から聞いたといふのであつた。邦子は心から心配さうにつけ加へた――

「兄さん。何とかして上げたらどう？　もしそれが本當ならばさ」

「うむ……」清吉は生返事をした。しばらくしてから言つた「が、別にどうと言つて仕樣もない。折角やりかけたことだ。序に精一ぱい苦勞をして來るがいい。させて置くが第一だらう」

「それもさうか知ら——兄さんの氣質では」

「あたり前さ。今時分になつてそんなことに干渉するほどなら、お前との別れ話の時にも言ふことはあつたよ——今は始まらないから言はないが。芳藏だつて男一疋だ。好きなやうにさせて置くのが本當の情だらうぢやないか。まあ見てゐようよ。おれの金でも費はれてゐるなら兎も角も、スツてゐるのはおやぢからの遺産さ。それも芳藏自身のわけ前だ。それに今直ぐまさか死なうと言つてゐるわけでもあるまいぜ。アハ、ハハハ」

「兄さんといふ人は他人のことにはいやにてきぱきしてゐるのね。——御自分はどう?」邦子は不平げであつた。

「おれだつて男一疋さ。見ろ、好きなやうにしたおかげさ——このとほりあがいてゐるのよ」

「えらい!」盃を五六度やり取りしてゐるうちに醉つて來てもともと深川生れの邦子はたうとうてきぱきした調子になつた。それから優しくからかふような口調で「で、兄さん。もう、あきらめはつきましたかね、お京さんは」

「そいつばつかりは今夜はよせよ。——氣がついたのさ、途中で。あんまり氣が滅入るから思ひ當ると今日は戀の二週年の祥月命日だつた。……お京と言へばあの亭主にはあれから遭つたのだよ」

「へえ? 添田に! いつ? どこで?」

「何、もう半年近くも前さ。ひよつくり路でぱつたりと顏を見合したのだ……」清吉はその時のことを思ひ出し思ひ出し話し初めた——

添田のことを、淸吉はあの時以來、添田とは言はずに「お京の亭主」と呼んでゐる。少くとも心のなかではさういふふうに呼んでゐる。といふのはあの男のことを添田と呼ぶと、どうやら以前まだ兄弟のやうにしてゐたころのなつかしい氣持にふいとなつてしまふ。その無二の友を無くしたことをはつきりと身に覺える。事實、淸吉のこころのなかにはそのなつかしい記憶がまだに生きてゐるのであらう──淸吉は、お京の夢はごく稀にしか見なかつたのに添田の夢は腹立たしいほどよく見るのであつた。それもいがみ合つてゐるやうな夢などではなく氣の合つた冗談を言ひ合ひながら一緒に散歩してゐるところである。さうしてそんな夢のなかの散歩がながくつづいてから、淸吉は夢のなかで不意に、さうだ、おれは以前添田ともう絕交してゐる筈だつだのにとさう思ひ出すと、いつもそのとたんに夢がさめるのであつた。──うつかり添田といふ名を口にしたあとでもちようどその夢のさめぎわのやうな氣持になる。淸吉にはそれが悲しかつたし、悲しいばかりではなくあの事件の解釋が一層こんがらがつて來るやうで考へ込まずにはゐられない。いつそ「お京の亭主」と呼んでしまへば同じ添田でも別の人に感じられる。それにすべてがお京と一緒にお京のために失はれたやうで、同じ失はれたにしてもあきらめやすい──と言はうか、あきらめにくいと言はうか、ともかくもお京の名によつて堪え忍ぶことも出來る。淸吉にとつてはさういふ添田であつた。

9

まだ夏も初めであつた。芳藏と邦子とのうちは解散してしまつてゐるし、旅から歸つた淸吉がともかくも外山のうちに落着いて間もない頃であつた。そのころまだ外山のうちに居た外山の甥といふ少年──まだやつと十五かそこらの子供をつれて淸吉は散歩に出た。子供の相手は氣が紛れた。

清吉は何氣なく、しかし俯向いて歩いてゐた。向ふから來る人も俯向いてゐたのであらう――ふたりの行人は擦れ違ふつひ三歩ほどの距離でふいと顔を上げ合つた――

添田だ！

兼ねて添田を知つてゐる外山の甥もその時氣がついたのであらう、慌てゝお辭儀をしながら、低い聲で

「添田さんだよ！　ねえ！」

少年は清吉の袖を引いた。清吉はちらと添田を見たきりだつた。ふたりはもう擦れ違つてしまつてゐた。ほんとうに添田であつた――清吉のこの時の感情では、その人は「お京の亭主」ではなく「添田」だつだ。さう思ひながら歩いてゐる清吉に向つて、少年はもう一ぺん言つた、

「添田さんだつたよ。――どうしてお辭儀をしなかつたの？」

深い事情を知らない少年は、むかしあれほどだつた友達同士がお辭儀一つし合はないで通つたのを怪しんで尋ねたのである。清吉は何とも答へずに、ただふり返つて見たいといふ感情を感じながらそれを抑へる感情もあつた。毎日顔を見合はずにはゐなかつた友達、さうしてもう一年半近くも見なかつた友達、添田もちらりと清吉を見上げたつけ。清吉は別にふりかへつては見なかつた代りに、瞬間的に捉へ得た添田の姿をもう一度思ひ浮べた。白い新らしいヘルメットをかぶつてゐた。白いズボンにホームスパンの上着であつた。――ひどく痩せてゐたと思ふが……

「ね」と清吉は少年に言つた「添田はひどく痩せてゐたね」

「ああ、痩せてゐたよ。若く見えたよ。けど、ひよつとすると添田さんは病氣ぢやないのかね。僕、ふとそんな氣がしたよ」

「何故？」

「でもね、添田さんは僕がお辭儀するとにつこり笑つたよ。あの人は面白い人で、僕が見てゐると今まで、元氣のない病氣のやうな時だけだよ──子供に笑つたりなんかするのは。元氣のいい時にはいつでも怒つたやうな顏をするよ」

この少年はなぐさみに小說なども讀むほど早熟であつたので、そんな觀察を持つてゐたのであらう。さう聞けばなるほど淸吉にも、それは添田らしい事にも思へた。それとも添田は近ごろ氣が優しくなつたのかも知れない。添田！お京にもそんなふうににつこり笑つてやれ、いつでも……

しかし、三町ほど步いてゐるうちに淸吉には「添田」はもううとましく「お京の亭主」といふ氣持になつてしまつて來てゐた。丸善の二階へ上つた淸吉は、さまざまな書物を手に取つては見たが、どんなことを書いた本だか現に見ながら氣がつかないほどであつた。といふより寧ろ、默つてふさぎ込んでゐる自分をあの早熟な少年に氣取られまいと思つて心にもない書物を取り上げて見てゐたのであつた。

──あのことがあつて以來、一層多く添田の夢を見るのぢやないか知ら。淸吉にはそんな氣もする……

邦子にはその時のことを手短かに話しながら淸吉自身ではとつきりこまごまと思ひ出してゐた。さうして淸吉は邦子に言つた──

「不意に顏と顏とを見合したのだからよかつたのさ。それが双方で一町もさきから氣がつき合つてゐたのであつてごらん、兩方とももつと複雜な不自然な顏つきをし合はなけれやならなかつたらうからね。──だとすると、僕は考へただ

けでも氣切ないよ」

「兄さん、氣が弱いからいけないのよ、何も惡いことをしやしまいし。恥しいのは添田ぢやありませんか。私だつたら睨みつけてやつてよ」

「フ、フ……」邦子が子供らしい單純な調子で言ひ放つたのが淸吉にはをかしくもあり可憐でもあつた「でね、邦子。それから三日ばかりしてからのことだがお京が通つたのだぜ――外山の家の前を、僕の二階の下をね、それを外山の妙が發見して『添田さんの奥さんが通るよ』つて隣の部屋の窓から頓狂な聲で知らせたものさ、僕は客があつて座を立てないうへに、その客がまた噂でお京や僕のことを知つてゐるのだらう――だから、さう言はれて覗いて見るわけにもゆかない。少年にして見れば先日添田とおれと妙な具合に行き逢つたことをうちへ歸つて話したらしく、それでいくらか例のいきさつがわかつたものらしいね――だからお京の行きすぎるのを僕に知らせたのだらうぜ。――ただひどく瞬向いてとほつたさうだよ、お京は。――お京も添田から僕の噂でも聞いたのだらうか。それで思ひ出して僕の二階の下を通つてくれたのだね。……」

「何だ！　そんなことなの？　そんなことがそんなにうれしいの？　いやな兄さん。いつまでもいつまでも」

「…………」

大分醉つぱらつて來てゐる蓮葉な邦子に話の腰を折られて淸吉はぷつと默つてしまつた。なるほど邦子の言ふとほりでもある……

「急に默つてしまつたのね。――兄さん慍つたの？」

「何が、慍るものかね。ただ氣の毒になつたのだよ――」

「お京さんが？」

「いやいや！　お京はあれでいい筈ぢやないか。氣の毒なのは手前のことさ！」清吉はから元氣を出して氣輕さうに言つた。さうして手もとの盃をぐつと一つ飲み干して、手酌でつぎかけた。

「おや、これは失禮」さう言つた聲も言葉も、それが突嗟に出た時、清吉にはいかにも、プロフエツショナルに悲しいものに感じられた。それをきつかけに清吉は氣を變へて言つた——

「ところで、百合香姐さん（とわざと邦子をさう呼んで）御稼業御繁盛ですかね」

「へい。おかげさまでぼつぼつ。それに御覽のとほりのいい旦那がありますからね」と邦子も一とほりの冗談を言つたが、ほんとうの聲になつて「わたしなどね、兄さん、まだしもむかしの事もあるので知らせてくれる御座敷もある方よ。新らしく出たての子などはそれや可哀さうなものよ、何しろこの不景氣でせう。……兄さん大分飲むぢやないの。あとで發しますよ——さすがに兄さんだけに心配だね、百合香姐さんも。」

11

なるほど、清吉はいつの間にかひどく醉つてゐた。便所のなかでふと「影は妹のごとくやさしく」といふ句を思ひ出して「影は妹のごとくやさしく」「影は妹のごとくやさしく」と何度も何度も口のなかでつぶやきながら部屋にかへる清吉の足もとはよろよろしてゐた。けれども頭のなかははつきりしてゐた。も一度いままでの座蒲團の上へ坐りながら清吉は時計を出して見たが、言つた——

「どうれ。もうそろそろ御歸館にしようかな。——外山家の二階へ御歸館ぢや佗しすぎるが」

「御歸館？」さう言つて邦子も帶の間から少さな時計を出して覗いた「兄さん。いけない。また早いぢやないの。十時過ぎたばかりよ。もう一時間は歸さないわよ。――話も少しあるの。その代り線香は自腹を切りますよ」

「これや、ひどい強引だな。さういふわけたら二三日居つづけをしてもいいよ。ところが、線香は自腹を切る代りに、よく聞いて見ると話といふのが金を借せぢやないのかい。ハ、ハ、ハ」

「違ひない。たうとう見拔かれちやつた」

口さきではやつぱり冗談を答へたものの邦子はひどく眞面目に見えた――見てとつた清吉に哀れを感じさせたほど。

さうして清吉が言つた――

「話といふのは何だい。言つてごらんよ」

「ええ。それともまた今度にしようか知ら。兄さんも醉つぱらつてゐるしわたしも醉つぱらつてゐるもの。――また來てくれるわね、兄さん」

「約束はしないがそんな氣持になればね。何しろその話といふのをお聞かせよ。折角言ひかけたのだ。氣になるから」

清吉はすつかり尻を落ちつけた。

清吉は何となく邦子自身の相談のやうに感じたのを、邦子にもその心持が通じたと見える

「言ふわ。――だが、わたし自分のことぢやないのよ。どうせわたしは自分のことなどは見切りをつけて成るやうにさせてゐるのだからね。澄江さんのことよ、兄さん。この間、ひよつくり澄江さんが來たの。わたしおどろいたわ」

「へえ、澄江が？　ひとりで？　これや面白いね――令孃が藝者のうちへ訪問するのだ。新派の一場面……」

「兄さん、冗談ぢやないわよ」邦子は醉つぱらひらしくなつてゐる清吉を、わざと強さうな聲で、しかしほんとうにた

じためながら「兄さん、澄江さんは涙をながして話しましたよ。兄さんの心持はどうしてもわからないといふの。さうしてほかに相談をする人もなしわたしのところへ來たのですつて。だからわたしは言つたのです——今までのわたしならそれやわたしからも話をして何とか相談をして上げないものでもない。けれど、わたしもかうなつてしまつちや、もう兄さんのところへ出入りをしていいものだやら惡いものだやらもわからず、遠慮をしなけれやならないとなつて見ると、かげながらの相談は出來るまでも、それより一そ御自分で兄さんに當つてごらんなさいつて。——でもね、澄江さんのおつしやるには、何が何でもそんなことは自分では出來ないのださうです。敎育のある人といふのは不自由なものだわね——澄江さんのつもりでは兄さんも私にならば好いてゐるとか嫌つてゐるとか打明けたところをおつしやるだらう。それをあけすけに聞いてほしいといふのだわね、つまりは。一たい、兄さんは好き？　きらひ？　その點だけでもあつさり言つてごらんなさいよ。」

「好きだね、あつさり言へば。前から好きだ、今でも嫌いぢやない。それにささくな性質のくせに、そんなことを自分で直接言へないところも僕には惡くない」

「それぢや何が惡いの？　器量？」

「器量もさう惡くはあるまいぜ」さう言ひながら淸吉は、澄江がさびしさうに片頰笑みした顏つきを思ひ出した「いや、惡いやうではあるが僕にはもつと美しくてもいやな顏立があるさ。それに顏なんてものはどうでもいいさ——不愉快でさへなけりや。器量のいい女房を持つのは、景色のいいところへ住むやうなものさ。たまに來て見る人はひどく感心する。住んでゐる當人にはいつの間にか何でも無くなる」

「それぢや、氣ごころ？　あの方は氣ごころよしですよ。何よりも氣ごころが一番いいわ」

「氣ごころも惡くはないさ。……氣ごころのいい女と住むのは間取のいい家へ住むやうなものだな」

「そんな餘計なことはどうでもいいわよ。——はつきりおつしやい。氣のない人ね、煮え切らないよ、兄さんは。今に始まらないけれど。氣が進まなけれや進まないで斷れやいいぢやないの。——もうお酒など飲まなくつてもいいぢやないの。みんな空ですよ(と言つて邦子は淸吉の手から盃をひつたくるやうに取上げながら)。……澄江さんの言ふのにはさ、嫌はれたものなら嫌はれたで、わたしだつても厭々でも行くところはある。自分では無とくも家ではさがしてゐる。はつきり厭だと言はれればあきらめもつく。それならそれで家のいふとほりにする、唯、好いてゐてくれるものやら嫌はれてゐるものやらどちらだかどうしてもわからない、それが苦しいのだ——とまづかう言つて泣いてゐたのだが、なるほど兄さんの話を聞いて見れや澄江さんのたよりない氣持も無理ではないわよ。それからまた澄江さんはかういふのよ——兄さんの態度があんまり煮え切らないやうだから、もしや兄さんがまだむかしの誰かを忘れ兼ねて何かそんな人と交渉をでも持つてゐるのぢやあるまいかつて。わたしは、だから答へたのよ。それや心持の上ぢや或はまだ憑きものがおちないかも知れぬ……」

「憑きものか！　これやうまい事を言つたな」

淸吉が思はず挾んだ言葉を抑へて邦子が言ひつづけた。

「……さうよ、お京さんのことよ。でね、私は答へたの——憑きものは落ちないかも知れないけれど、一たん別れた人とどうなどといふやうな氣性の兄さんぢやありません。それはわたしがよく知つてゐる。それにもとの人たちだつて皆もうそれぞれに旦那さんも持つてゐるのだから、つてね。さう言へば兄さん、千駄木町がお嫁入りすることは知つてゐる？」

「へえ？　知らないよ」

「私のところへ逢ひに來たわよ。もとはあんなに仲が惡かつたのに、わたしがかうなつて見ると話に來るのね。――邪推しちやいやよ、誰も兄さんの惡口など言やしないのだから……」

12

千駄木町といふのはもと清吉の妻であつた女のことである。いま邦子から聞くとその女が今度再緣するさうである。邦子もよくは知らなかつたが、相手は何でもキヤメラマンか何からしいので、結婚すれば遠方へ――といふのはアメリカちやないか知ら、ともかくも遠くへ行くらしいといふのである。さてさうと決つて見ると未練でも出るか、とさう邦子が冗談半分に尋ねた時、清吉が「いいや、もう澤山。（と手を振つて見せてから）未練どころか。いい氣持だ、安心をした」と答へたのには何の嘘もなかつた。事實、清吉には難題であつたあの女も、これで立派に卒業したと清吉自身で思つた――清吉は日ごろから「戀愛學校」といふ言葉を持つてゐたが、これは戀愛を學ぶ學校といふ意味では勿論なく、戀愛は人生を敎へる學校といふつもりであつた。全くあの女を通して清吉は澤山學んだ。清吉自身はもう濟んだつもりでゐたが、しかしその上に先方でもさう型がつくとあれば、本當に清吉も吻とする。卒業したと清吉が思つたのはそこのところであつた。さうして今更よけいなことだが、今度はうまくゆけばいいと思ふ。がそんなことよりも邦子から聞けば、あの女は時々銀座で清吉のうしろ姿を見かけると、いつも新らしい洋服を取交へて着てゐると言つたさうだけれど、いつあの女に銀座で見かけられたか知ら――そんなに度々。本當に清吉はつひこの間まで毎日のやうに銀座あたりをうろつき歩いてゐた。お京のことがあつてあまり徒然だからそんなことをしてゐたのだが、お京との噂がひろまつてゐることに氣がつくと、うつけてしよんぼりとした自分を見られまいと、知つた人などには逃げ隠れしながら歩いてゐた

のを、あの女がそんなに度々見つけたのか知ら。ちつとも氣がつかなかつた。そんなふうだとすればあの惨めな――見かけが立派な樣子だけにその惨めさが一層目立つであらう自分を、何時、誰が、何處で見かけたかも知れない。――さう思ふと淸吉にはこの事の方があの女の再婚よりはずつと問題になりさうな氣がする――あの時はあれより外に仕方もなかつたのだが、男にはもう少しは見えがあつてもいい。……そんなことを考へてゐる淸吉を邦子は何と看て取るかも知れない。淸吉は言つた――

「それでお前は何かい、また千駄木町に逢ふかね」

「ええ、遠くへ行くときまればいづれお別れに一緒に御飯でもたべませうと、つひこの間電話がかかつたから、約束をしてよ」

「それなら、もし噂が出たらおれのことも言つてくれ――喜んでゐるつて。……だがわざわざ言ふにもあたらないよ。あ、然うだ。それよりはね是非言つてもらひたい事がある。夫婦別れの時にいろいろ向ふの荷物へ紛れて行つたものがあるのさ。何つまらないものばかり――それに欲しいものは取つて置いてもいいとも言つたし。ただね伊萬里の――燒物の名前だよ――古い伊萬里の小さな手あぶりがあるのだ。煙草盆の代用にしてゐたのさ。オランダ模樣のうつしらしく妙な異人の繪があるのさ――お前も知つてるだらう。あれさ。あれは私の氣に入つてゐるのだ。何でもないものだが好きなのだ。多分向ふへ行つてゐるのだと思ふ。あれにだけは未練があるのだよ――僕のやうな暮をしてゐると自然とああいふものが身のまわりのなぐさめになるのだから。これは是非忘れずに言つておくれよ。何ならお前持つて來てくれると尙ありがたい。」

13

邦子は再び澄江の問題に歸つて、よほど熱心な態度で、それに執着してゐる。それは淸吉のさびしさを澄江が救ふだらうと邦子は思ひ込んでゐるからである。邦子のこころづかひは、醉つぱらつて來てゐる淸吉にもひしひしと解る。しかし淸吉は言つた――

「無論、そのとほりだ――澄江がいやで外にどうといふ女もあるわけぢやない。だからおれは澄江にはすまなくはない。それにしても澄江のどこが氣に入らないかといふだらう。そこだよ。自分でもよくは判らないのだ。ただまあ、お前も言ふとほり僕にはまだ憑きものも落ちないしさ。だが心配はするな――その憑きものも今では立派におれの詩の世界のものになつてゐる。あの女はおれに本當の愛を敎へたのさ。だからおれの心のなかにはいつでもおれと一緒に生きてゐる。そこで澄江だが、あれはちやんとした令嬢だよ――人生の不仕合せといふものは未だ知らない。知らなけや一生知らないで過せば何よりさ。だが妙なことを言ふやうだがおれは苦勞をした人間がすきだ。苦勞をしなかつた人間は色あさやかな南國の大きな花だし、苦勞をした人間は色はつつましく形も小さいが香の高い北の方の花だ――か果物だか、何でもそんなひねくつたことを言つた人があるが、その苦勞をして來てひねくれなかつた人間をおれは好きさ。……

「……今ふいと思ひ出したが、おれは昔、女房にすればよかつたにと今になつてさう思ふ娘をひとり知つてゐたのだがね。わき道へ這入るがまあお聞きよ、――この話は、邦子、お前にもまだ始めての筈だ。昔さ。おれが二十二のころだ下宿屋の女中だつたよ。が、しとやかな娘で、さうさそのころ十八だと言つた。下宿の女中にしてはあまりしとやかだからよく聞いて見ると、親も兄弟も無いので或るお屋敷で育つてつひこの間までそこで奉公してゐたと言つた。なぜそこをやめて來たと聞いたら、わけがあつて――いやなことを言はれたからと答へただけだつたが、主人に口說かれたとか、姿

だといふ噂が立つたとかそんなことではなかつたのかな。柄の大きな美しい子だつた。それがどうしたわけだかひどく僕を好いてね。下宿の女中をしてゐても末が案じられるから看護婦になる。その試驗を受けるから本を教へてくれと僕に言ふのだ。それから僕の靴を閑さへあれば日に三度くらゐは磨くのだ――自分できまり惡げに笑ひながらさう言つたつけ。それから部屋へうるさいほど這入つてくるのさ。をかしいことにはその都度いつも手拭で姐さんかぶりをして箒を持つてね。掃除に來たといふつもりだらう。そのくせいつでも僕の机のそばへ來てもぢ〳〵してゐるのだ。人の足音でもすると箒を持つて立つ。いま思ひ出してみるといぢらしいね。だが、そのころおれは未だ若かつた。或る綺麗なお孃さんにうつとりとしてしまつてゐてね。その可愛い女中はただ馬鹿々々しくをかしかつた。さうしてそれつきり忘れてゐたさ。つひこの間それを思ひ出したよ。――或る外國の小説を讀んでゐるとね、そのなかの男が相手の貴婦人に云ふ言葉がある――『私はむかし或る娘を知つてゐた。それや洗濯屋の娘で、洗濯の注文と一緒に度々文をとどけたつけが、私はその折釘流の文字を見てをかしかつた。そんな字をかく、娘におもはれるのが恥しいやうな氣がして、その折釘流の文字のなかにまごころがあらうなどとは夢にも思つて見なかつた――私はまごころといふものは襞のたくさんある絹の衣物の下にだけつつまれてゐるものと思ひ込んでゐた。何しろ私は若かつたから』とそんなことを言つてゐるのさ、その小説のなかの男は。讀みながら私もふいと思ひ出したのだよ、あの下宿の女中を。――いかにも『何しろ私も若かつた。』いまあの娘がゐればいいがな。どうしたか知ら。――さうだ、お京とは同じ年だな――おれは親も兄弟もないといふところが、思ひ出してへんに氣に入つてゐるよ、今では。……

「澄江は令孃だよ。素直な令孃だよ。赤木清吉の第三人目の女房にならなくとも行くところはいくらでもある。家で捜してくれるところへ行つて見てはどうか知ら。それやいさうとなれや赤木清吉たるものの些は淋しからうさ。だが……」

「……兄さんそれじや斷るの？　初めは貰つてもいいやうな顏をしてゐたくせに。――あ、さうか。兄さん。仕方がなけや外にも行くといふ澄江さんの言ひ方が兄さんの氣に入らないのぢやないか知ら――男といふものは我慢なものだからね。さうぢやない？　兄さん」

「外の男のことは知らない。が、おれがどうしてそんなことを言ふものか。さう言つてゐる澄江の心持は本當だとも。本當のことは他人にもまつ直ぐにわかるよ――いとしいほどわかる。或る人がね、或る青年に戀を打ちあけられて『それぢやその人のことを君はどれくらゐ長く思つてゐられる？』と問はれた時。その青年が『さうですね（としばらく考へてみて）まあ五分ぐらゐ』と答へたさうだが、いい答へさ――澄江も、あの人と一緒になれなけや死にますとも一生尼で暮しますとも言はないところがいい……」

「いいところづくめの澄江さんを、それぢや兄さんは何故いやなの。わからないわね。――赤木清吉の三人目の女房などと、兄さん自分でひねくれてゐるのぢやないの――苦勞をしてひねくれたのよ、兄さんは」

「――さうさう性急に横槍を入れちやいけない。いふだけのことを聞けよ。――苦勞をしてひねくれたのぢや折角の北方の果物が腐つてゐるやうなものだぜ。――苦難、たとひ苦勞はしたとしても決してひねくれない。ただね、年はとつた。見てくれ、この頃では三日に一本の歩合で白髮になるとさ。年をとつて女にのぼせ上らないのだ。誰だつておれを四十近いといふぜ。こんなに年をとるつもりぢやなかつた。「この秋や何ぞ年とる雲に鳥」か。「この秋や何ぞ年とる雲に鳥」。年はとつた、だが壯心を失つてなるものか……」

最後にもう一本といふ酒で清吉はひどく醉つぱらつて、どうしたのだか思ひがけなく雄辯になつて來てゐる。清吉は言ひつづけた――

「澄江に言つてくれ。――いや、今度逢つた時自分でよく話し合ふよ。おれはつひこの間まで人生の幸福を望んでゐた。だが今では幸福などはもう飽き飽きした――また味はないうちからうんざりする。高い枝の酸つぱい葡萄だからさう思ふのだらう。幸福もいいとも、幸福な人は幸福であれ――だ。だが赤木清吉には幸福に向かない。あいつは（と清吉は自分のことを第三人稱で呼んで）めちやくちやな性格だ。神樣はあんな奴には幸福はわけては下さらない。その代にや――然うだな、何かしら下さるだらうて。幸福を追うて赤木清吉の妻となるべからずさ。――そんな男のところへ親だつて娘をやりたがるまい。當り前さ。おれに娘があつてもおれもやらない。さういふ親をふり捨てて、人の世の幸福を無視する清吉のところへ來るのは、これや全く考へものさ。過を改むるに憚るなかれさ。」

煙にまかれたやうに邦子はぢつと清吉の顏を見てゐたが、邦子は靜かに言つた「それぢや、澄江さんがそこまで決心がついて來れば、いいの？」

「さう。先づ然うだ。だが人にうつかりそんなことを要求出來るものか……」

「それぢや兄さんはひとりの方がいいといふの？」

「それがさ、何もかもわからないのだ！　信ずることがないからさ。だからどんな些細なことだつて考へ込んでしまつて手も足も出ない。澄江のことだつてもそのとほりだ。大根がぐらついてゐる。澄江のことは宿題にしてくれ。お前がくどく言つてくれる氣持は解るさ。ありがたい――澄江の心はもとより。……おれはもつとしつかり自分の正體を突とめて見る。ねえ、ただ今のままでいけないこと、これだけは全く確だ。おれは窓を閉め切つて鎧戸までおろしてゐる――譬へて見ればさ。さうして置いて自分でああうす暗いいやな部屋だとこぼしてゐる。暗いのがいやなら窓を開け放せばいいのだ。ほんとうに暗いのが好きなら默つて暗がりを愛してゐればいいのだ。暗いのだか明るいのだか外も見な

いで、自分で閉め切つてそのうす暗さをかこつことを樂しんでゐる——間違ひだとも。……一流の詩人といふ名譽が何だ。名譽はおれが侮蔑してゐる連中だつても享有してゐるよ。目ざすものをしつかりと見つけて、日一日とそこへ近づいてゐる喜びだね——持ちたいのは。」

清吉は突然に默つた——それから目を伏せて火鉢のなかに林立してゐるロードバイロンの金口を見つけると唐突に言つた。

「おい、邦子。革命といふことがあるのだぜ！　お前知つてゐるかい。知らないだらう。知らなくつて幸さ。知つてれや柄になくおれがそんなことを言ひ出したのを笑ふだらうぜ、それとも怒るかな。何しろ、邦子。革命といふものがあるのだぜ。藝者なんてものは、その時には無くなるのよ。借金などは踏み倒してもいいのだぜ。好きた男といつでも一緒になれるんだぜ。それやどうだか知らないが、ともかくもおれのやうた煮え切らない人間は居なくなる。それからおれのやうなひとりぼつちの人間は居なくなる——誰でも「兄弟」と呼びかけ合ひさへすれやどんな心持でも今に分り合ふのだとさ。いいな！——嘘でなけや尚いいな。で、さういふ時代が來るために革命といふものがあるのだとよ！　さうなれやおれだつてそれまでのうちに——といつて何時のことだか知らないが、よく考へて置いてこの世の思ひ出に革命軍の一兵卒にならぬとも限らず、さてはそんなものをよそにして西行法師のやうに散る花に諸行無常を觀ずるかも知らずさ。それとも侘びて住むかね。芭蕉のやうに。——つまりは伊萬里燒の手あぶりなどと同棲するのだが。何でもいゝどうかして今のところを突き拔けるのだ……などと言ひながら一生をうやむやに暮すのだらうか。つまらないな。けれども人間はさらにある。その珍重でもない人間のひとりが何をしてかさうと神さまには何でもなからう——だ。人間にとつて見れや、一生は一つだから、さて何でもかまはずやつて退けるといふわけにもゆかない。思へば神さまは馬鹿だよ——

折角こしらへた人間といふからくりはこれやどうも出來損ひだぜ――殊にこのおれなどはさ！」

淸吉はぺら〳〵としやべつた。何を言つてゐるのだかもう自分でもよくはわからなかつたし、呑まれてゐるやうにぽかんとして控へてゐる邦子を見るのもをかしく氣の毒でもあつた。それから自分のことを「この醉つぱらひ奴、ひどく圖に乘つた調子だな」と氣づいてもゐた。それでも淸吉の氣持は不思議に冴え冴えとしてゐた。

14

時計は十一時半のところをすこしすぎてゐた。

「どうれ、いよいよお歸りだ」淸吉は立ち上つた。

「ちよつとお待ちなさいよ。いま自働車が直ぐくるわ。――だつてそんなに醉つぱらつてしまつてひとりぢや歸れやしないわ。」

「さうかなあ――そんなに醉つぱらつたか知ら。ぢや仕方がない。ブルジョアになるとしようか。」

淸吉は火鉢のわきへしやがみ直しながら、まだ殘つてゐたコップの水を飮み盡してから改まつた口調で言つた――

「お前が言ふまでもなく、澄江のことは僕もよく考へるよ。」

15

外へ出て見ると風が出てゐてその寒い夜風は淸吉の頰に氣持がよかつた。淸吉は帽子を脫いでしまつて、その序に空を見上げた。

「やあ、いい月夜なのだな」清吉は夕方のあの一面に重く垂れさがつてゐた雲を思ひ出して「おれの氣焔で雲は吹き飛ばされたのかな」

邦子は、けれども何とも答へなかつた。醉の醒めぎわなのであらう。ふさいで見えた。清吉はその邦子に言ひたかつた「お前も今日は飲んだよ。だが酒はおよし」――けれどもこの言葉は清吉の喉もとで消えてしまつた。清吉が嚙みころしたのだ。そんな言葉をわざわざ言ひ現すのは清吉の趣味に合はなかつたから。その代りに清吉は言つた

「ね、百合子さん――ぢやない百合香さん。君はお化粧は下手くそだよ。素顔の方がよつぽどいい。お白粉にしても眉を引くにしてもあまりきつぱりと硬すぎるのだ」

「さう」と邦子は素直に答へてから思ひ出したやうに速葉につけ加へた「いい事よ。どうせ兄さんに惚れられようと思やしないのだから。これこそおせつかいだわ。」

「ほい！　これは失禮」

清吉と邦子とはその横手を出て自動車の來てゐる表どほりまで出た。自動車のなかへ這入つて行く清吉には何も言はずにそこまで送り出た邦子は運轉手に言つた――

「愛宕下よ。まつ直ぐとつとと行けやいいんだわ。でも急いで衝突などしたくてもいい事よ。これでも兄弟の出來そこなひだからね」

清吉のひとり乘つた自動車は驅けて行く。ふと外を見た清吉は街の灯がぼやけて光が蜘蛛の巣のやうに見えるのを感じた。目のなかがくしやくしやして來てゐる。「はてな！　おれは泣いてゐるのか知ら。どうして？　何のために？　誰のため？　何も今更に泣くことは無かつたのに。いや、やはり泣いてゐるらしい。泣いてゐる。おれのなかのセンチメン

タリストが泣いてゐる。が、おれは泣いてはゐない。居ないとも」そんなふうに自分の心のなかで呟いたが急に大きな聲で――

「おいおい！」

と運轉手を呼びとめた。しかしその聲で運轉手が疾走をゆるめた時に、淸吉は

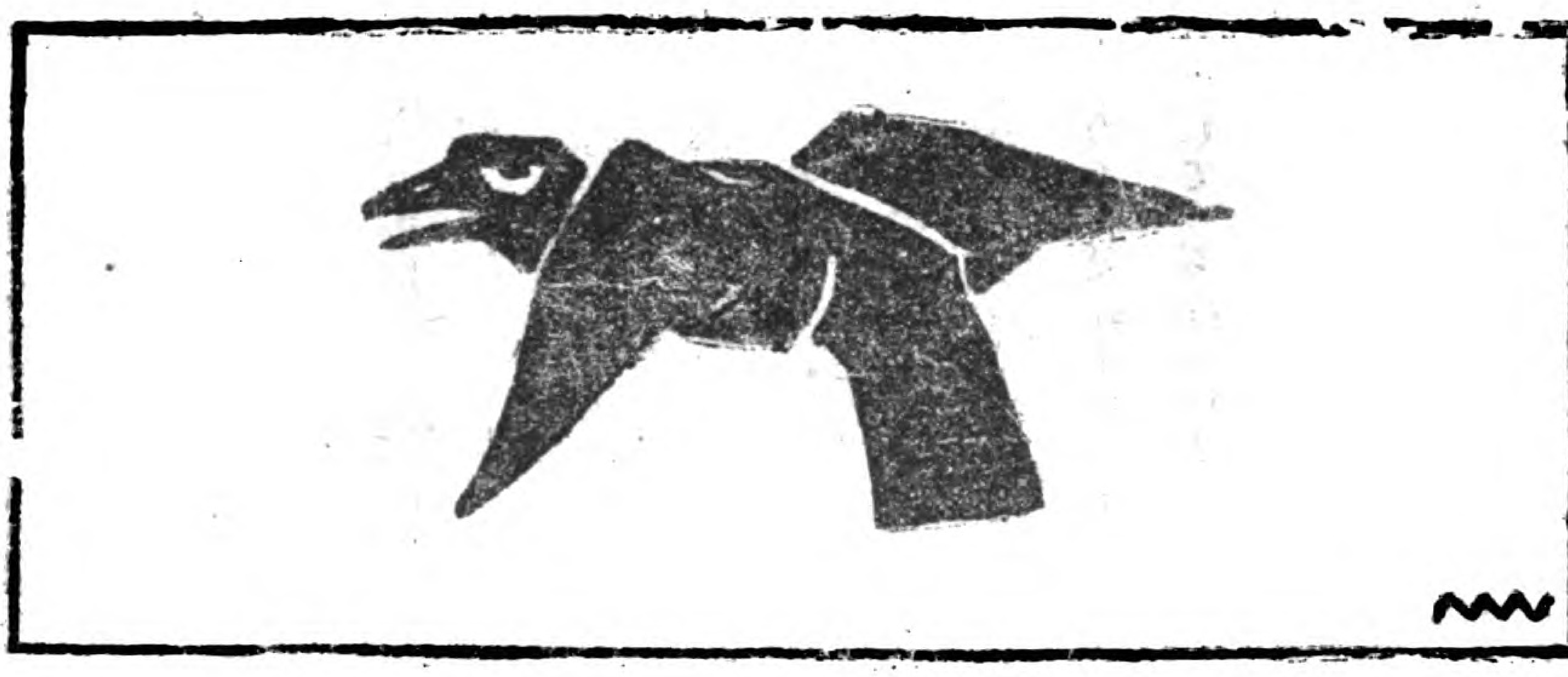
「いや、よしよし、何でもない」

と言つた。――淸吉は直ぐに愛宕下へは歸らずに、どこでもいいそこら中を精一杯走らせて見ろと運轉手に言ひつけやうとして、しかし馬鹿な！　と思ひかへしたのであつた。ただ醉らぱらひらしく呟いた――「佗しすぎるよ、まつたくあの二階は。」ふと向ふから來る自動車を見て擦れちがひざまに淸吉は、あの車のなかにはどんな人間がどんなことを考へながら乘つてゐるのかな？　そんなつかぬことを思つて見て淸吉は行き過ぎた車を見返つた。何もよく見られなかつた。淸吉は自分の車のなかを見まわしたが、今始めて氣がついたことには、この車は淸吉が時々乘つた事のあるボロ車ではなくて氣恥しいほど大きくもあり立派でもあつた――これやおれが乘るにはもつたいない。身のまわりに藝者とお酌とをうんと積み上げて乘り込む車なつたに。その立派な車の正面に小さく嵌め込んである楕圓形の鏡を淸吉は何氣なく見出して、それからまだくしやくしやしてゐる自分の目を手の甲で拭いてから、物珍らしげに自分の顏をぢつと見た――頰の嶮しく瘦せてゐるその鏡中の顏が醉ひざめて靑くなつてゐるのを。

（一九二三・二月―三月）

生まざりしならば

正宗白鳥



（一）

牛嶋夫妻は、芝の家を出ると直ぐに、小田原へ電報を打つて置いて、銀座でビスケットや餡パンや牛肉の罐詰や甘栗や、それに繪本だの玩具だのをドッサリ買つて、豫定の時刻に新橋から汽車に乘つた。四五日續いた酷寒のあとで、今日は急に春になつたやうに温かつたので、重ね着した肌は汗ばんで、スチームで温められた車室にぢつとしてゐるのが氣持が惡いくらゐであつた。おそではセルのコートを脱いで地味な大島の羽織をも脱いだ。成るべく氣に留めないやうにと心掛けてゐるのに關はらず、汽車に乘るたびに、人々の風俗が目についてならないのであつたが、今日は土曜日で、箱根へでも行くらしい客と、丸髷に結つた藝者とが彼女の眞向ひに乘合せてゐたので、ことに無關心ではゐられなくなつた。さほどの容色ではないが、歳が若くつて身裝がいゝから美しく

見られると思はれるにつけて、自分が浮世を棄てた氣で身じまひをかまはなくなつたことが顧みられた。いやに取澄してゐるその女の目が絶えず此方へ注がれてゐるらしいのが次第に煩く思はれだした。「なんだい、鼻の下の長い赭つ面の、口の中の臭さうな男にねだつて、たまに遠出をするのに、金滿家の奧樣にでもなつた氣でゐるから、チャンチャラ可笑い」と、反抗的な氣持にさへなつた。

「かう温いと小田原は梅が咲いてるだらう」と、夫の長吉が窓外の春めいた景色を眺めて云つたが、おそでは返事をしなかつた。

横濱から乘つた客の中にも、藝者連れの一組がまじつてゐた。この方は大勢で、誰れも様子ぶらないで、惡巫山戲をし合つては騒ぎだした。おそでは贔屓の藝者によつて焦立たしい思ひをさせられてゐたのを忘れて、新たな客の騒ぎを見ては、自分もその仲間に加つてゐるやうな思ひをして笑つた。停車場で買つたサンドヰッチや蜜柑なども、駄洒落を言合つていろ〳〵に戯れながら食べてゐるのを見ると、いかにも旨さうに思はれた。男の一人が甘納豆を手玉に取つて、口を空へ向けてその一粒々々を巧みに受けては自慢すると、他の男も藝者どもゝその眞似をした。若い藝者が紙捻をつくつてそつと男の襟に挿むのを見ると、おそでは自分だちが昔してゐた惡戯を思出して可笑しくなつた。一人の男が緣喜結びにした紙を老妓に貰つて、それを額に載せて顏を仰向けにして、額の紙を鼻の下まで辷り落して、突出した唇で受留めると、他の男も女も熱心にその藝當を眞似た。老いたる顏の長い男は、目をパチクリさせて紙を辷らせながら、「おれは長つ面だから前途遼遠だ」と云ふと、おそでもみんなと一しよに聲を出して笑つた。

「馬鹿なことをしてる」と、長吉は小聲で云つて、年甲斐もない老人の所行を苦々しく思つてゐたが、

「あんな人、氣さくでいゝぢやないの」と、おそでは云つた。この頃は次第に氣六ケしくなつて來た夫も、昔はあんな

馬鹿遊びをして日を暮したこともあつたのだと、昔を懐しがつてゐたが、

「俊一は停車場へ迎へに來てるだらうか」と、夫に話掛けると、周圍の騒ぎは他所事となつてしまつて、心は俊一の上にのみ集つた。

「氣分が悪くさへなければ迎へに出てゐますさ。上田さんにもこの前さう云つてあるんだから、樂みにして出掛けてるでせうよ。あの子の氣が向いたら明日は自働車で箱根へ遊びに行かうぢやありませんか。あの綺麗な湖水を一度見せてやりたいと思つてゐますの。屹度喜びますよ。湖水なんてまだ見たことないんでせうから」

「お前は時々妙なことを云ふね」と、長吉は柔和な切れの長い目に微笑を浮べて、「俊一が湖水を見たことがあるかないか、誰れよりもお前が一番よく知つてる筈ぢやないか」

「本當にさうでしたわね。上田さんが私だちに秘密で俊一を箱根なんぞへ連れて行きやしまいし、外にあの子をかまつて呉れる者はないんですから」と、おそでは自分と夫との外には、世界中で、あの羸弱い一人子の手頼りになるものは一人も半人もないことを、今更のやうに思詰めながら、「でも、私、時々はかう思ふんですよ。……あなたは笑ひなさるかも知れないけど。……俊一は私だちが氣がつかない間に、いろ／＼な變つた事を見たり聞いたりしてゐるんぢやないかと思はれるんです。この子は突拍子もないことを云ふつて、あなたは笑ひなさるけれど、俊一にはさういふことを云ふ譯があるのかも知れませんよ。私だちに分らないからつて、一概に笑つて濟ましちやいけないでせう。……上田さんの不斷の事だつて、なか／＼よく知つてゐるんですもの。學校へ行けないから、讀書は充分に出來ないけど、知慧は人一倍にあるんです。あなたは小いものだと、誰れをでも見くびつてゐらつしやるからいけないの」

「知慧はどうでもいゝから、身體がもつと丈夫になつて呉れゝばいゝんだがね」

「それは、身體だつて丈夫になりますさ。身體がよくならないのなら、なんであの子一人を小田原なんぞへ打やらかして置けるものですか。五年しか壽命のない子は、何處にゐても五年しか生きられないと極つたなら、私は一日だつて、あの子を私の側から手放しすりやしませんよ」

「それはおれだつてさうさ」

長吉も今日は、今までに例のないほどに俊一の身の上を案じてゐて、それに關連した自分だち夫婦の將來についてもおそでよりはもつと深刻に思惱んでゐたので、默つて獨りで考へてゐるのは堪へがたかつたが、俊一の事に深入りして話を觸れると、今日はおそでが人前をも憚らないで、非常識なことを云つたり、泣顏をしたりする恐れがあるので、蟲を殺して彼女に逆はないやうにして、わざとニコ／＼したりしてゐた。

おそでは例の藝者連れの一組の方へまた目を注いだ。そちらでは魔法罎やポケツトウイスキーが取出されて、酒盛がはじめられてゐた。

さつき泣きだしさうにしてゐたのに、もうあんな者を面白がつて見てゐると、長吉は妻の氣まぐれを淺間しく思つたが、その方が昨夕のやうな狂態を見せられるよりは無事でよかつた。小田原通ひも既に一年あまりになるのであつたが、彼れは今度ほど暗い氣持で汽車に乘つたことはなかつた。部屋借りなぞして俊一に不自由な思ひをさせるのが痛々しさに、無理な工面をして、小さいながらも去年の夏に別莊を建てゝからは、月に二三度夫婦連れで俊一を見舞ひに行くのは、何よりもの樂みになつてゐて、あの子のためにならどんな苦勞でも厭はない。衣服なぞどんな流行おくれの者を着てゐてもいゝ。たとへ借金に責められても、あの子だけには出來る限りの贅澤をさせてやりたい」と、夫婦は心を一つにして話合つてゐたくらゐであつたが、今日は別莊を建てたことをも長吉は後悔してゐた。自分が死んだあとまで

俊一が生殘つてゐたなら、どんなに悲慘であらうかと思ふと身の毛も彌立つやうで、いつそ今のうちに、自分たちに看護されながら穩かな往生を遂げて吳れゝばいゝと、かつて思ひもそめなかつたことを望んだりしてゐた。

國府津あたりまで來ると、俊一が出迎へに來てゐるかどうかと、二人は頻りに氣にしだした。が、小田原へ着いて見ると、看護婦の上田も來てゐなかつた。

「今日は加減が惡いのか知ら」と、おそでは心淋しくなつた。

「電報がおくれたのかも知れないね」と、長吉は氣休めを云つた。雜沓してゐる電車に乘るよりも今日は步いて行かうと云つて、土產物を兩手に提げて停車場を出た。そして、電車には乘れない俊一が、步くか、俥に乘るかして此方へ來かゝつてはゐないかと、それを待設けながら向うへ目をつけてゐた。

おそでは藝者連れの一組を乘せた自働車が、自分の側を威勢よく行過ぎるのを見送りながら、ちよつと眉を顰めた。

「あなたもたまには、あんな風に陽氣に遊びたいと思ひなさらない？」

「そんなことを思つたつて爲樣がないぢやないか。いつになつても餘分な金は出來やしないのに」

「お金のあるなしに關はらないでさ。あなたは全くあゝいふ氣持になれなくなつたのか知ら。人間の性分も歲を取ると變つちまふことがあるんですかね」

「おれは別段性質が變つたやうにも思はれないがな。變つたのは顏付くらゐなものだ」

「顏の變つたのは私ですよ。女は若くなくちや駄目ね。私たちの前にゐた丸髷に結つてた藝者は若いから艶があつて綺麗だつたわね。あなたたゞつて始終橫目を使つて見てゐたぢやないの」

「何だ、馬鹿な。前にゐる女を見るのに橫目を使つてどうするんだい」

長吉は苦笑した。彼れは若い時分の不身持のむくゐで、生れながらに病毒を宿してゐる俊一を生んだことを、この頃は果てしなく悔いるとゝもに、さういふ因果な子を自分のために生んだ田舍藝者の小千代に對して、稍々もすると憎惡の念を抱くやうにさへなつてゐたが、小千代ばかりではない、藝者といふすべての藝者を咀ふやうな氣持にさへなつてゐた。藝者の出る宴會をば成るべく避けるやうにして、たまにさういふ所へ行つても不快な感じに苦むのを例としてゐるほどで、さつきも、汽車の中でいろんな藝者連れの客と乘合せて、自分の愚かな昔を見せられるやうなのに惱んでゐたのであつた。

おそでは、夫が若い美しい女を見ても、以前のやうに心を動かさなくなつたらしいのが、本當だとしても、喜ぶよりも、男としての衰へとしてむしろ物足らなく思ふのであつたが、さうして氣取つて上べだけ裝つてゐるのだと思はれて小憎らしかつた。

「でもあの藝者はちよつといゝ女ね。あなたゞつてさう思ふでせう。高慢ちきなところがあるからいやだけど、騷いでた藝者とはまるで人柄がちがふぢやないの」

「それはさうだ……」長吉は、おそでが何時になつても、藝者といふ者を女の中の花でもあるやうに思極めてゐるのを卑んだが、自分が骨の髓までも藝者きらひになつてゐることは、おそでの痛い所に觸れる譯なのだから、決して口へは出さなかつた。

「あのくらゐな藝者を自分の者にして大威張で旦那顏をしようとするには大抵ぢやないわね」

「それはさうだ」

「あなたは四十にはまだ大分間があるのに、お爺さんじみちやつたんですね。男は陽氣なことが好きなやうでなくつち

や出世しないのぢやないでせうか」

「お前は時々は陽氣になつてはしやぎだすから仕合せだよ。尤も昨夕のやうに陽氣になり過ぎて取組合をやつたりしちや困るけれどな」と、長吉が笑ふと、おそでも笑つて、

「あの時は私の蟲の居所が惡かつたの。およねの奴もいやに突掛つて來るんですもの。……それは昨夕のやうな見つともない姉妹喧嘩なぞ止した方がいゝんですけどね。でも、私時々は陽氣な遊びをしたいと思ふことがあるんだから、今夜は俊一の所で、皆んなで何か賑かなことをして遊ばうぢやありませんか。俊一だつて喜ぶでせうよ」

「それもいゝだらう。だが、俊一の喜びさうな遊びは何だらう？ あの子が心から悦しさうな顏するのを、おれは一度でも見たいと思つてるんだけれど、駄目だな」

「さう思ふのはあなたの氣のせいなのよ。俊一の身體はいくら不自由だつても、他人が面白いと思つてることはあの子にも面白いんです。悦しくつてたまらないつていふやうにニコ〳〵してることがあるのに、あなたは感じないんですかね。あなたよりも私の方が俊一の氣持をよく知つてるんですよ」

ブラ〳〵歩いてゐるうちに、土產物の重みで手がだるくなつた。電車の線路を横切つて、狹い道を濱の方へ進むと、松葉杖をついた俊一の後姿がふと二人の目に映つた。

「俊ちやん」と、おそではあたりを憚らず、大きな聲で呼掛けた。

まん丸い顏した看護婦の上田が、足を留めて振返つて會釋すると、俊一も重い足を留めてニヤリと笑つた。

「今病院へ行つて來ましたのよ」と、上田は夫婦の近づくのを待つて云つて、一しよに家の方へ向つた。

「今日は元氣がよさゝうね。血色もいくらかよくなつたし」と、おそではいつも會ふたびに云ふやうなことを云つて、

俊一に寄添つて、鼻の尖つた目のドンヨリした痩せた顔を覗いて見ながら、彼れの身體中を舐め盡くしたいやうな情火に燃えてゐた。彼れの腰のまわりは、骨膜炎のために蜂の巣のやうに穴があいてゐて、そこには、一日として醫者の手當てを怠つてはゐられないほどに多量の膿が溜るのであつたが、おそでは出來るものなら、俊一の骨をも肉をも腐らせてゐるさういふ膿を、自分の脣で吸取つてやりたかつた。

夫妻は俊一を中に挾んで何か話しながらトボ〳〵と歩いた。

（二）

僅かに三室しかない少さな別莊で、間に合はせの安普請なのだが、病弱な子供を本位として造られてゐて、風通しも日當りもよかつた。寢臺を据付けて、そこから寢ながらガラス越しに庭や松林が見えるやうになつてゐた。庭には小さな池がつくられて、夏は金魚などを飼つたり水遊びが出來るやうになつてゐた。庭木戸から出ると、海は直ぐ近くなので、波の音はよく聞えて來たが、俊一は毎日の病院通ひ以外には戸外へ出ることを好まなかつた。退屈な思ひをしてゐる看護婦が、自分が遊びに行きたいために、屢々俊一を唆かすので、彼れは子供心にも、斷つてばかりゐては惡いやうな氣がして、三度に一度は誘ひに應じてゐたが、自分から進んで、活動寫眞を見たいとも海を見たいとも言出したことはなかつた。庭に鞦韆具が備へつけられてあつたが、それは近所の子供に利用されるか、時としては、看護婦と近所にゐる若い學生との遊び道具に用ゐられるばかりであつた。彼れは寢臺に横たはつてゐない時には、日當りのいゝ障子の側に、火箸のやうに細い、青白い足を投出して、冬になつても殘つてゐる蠅の動くのを見たり、木立の多い隣りの庭へ朝から晩まで來ては鳴いてゐるいろ〳〵な小鳥の聲を聞いたりした。あるひは繪本を見ることもあつた。看護婦がをり

く聽かせて呉れる昔噺や怪談や人情話にも耳を傾けた。學校へは一度も行つたことのない彼れも、いつとなしに文字を習ひたくなつて、此方へ來てからは、看護婦が新聞や雜誌などによつて教へて呉れる文字を熱心に覺えようとした。

ある時、彼れは母親が送つてくれた子供の雜誌を開けて見てゐるうちに、「ねてゐてころんだためしはない」といふ文句を、自分ひとりで讀得たのが悦しくつて、屢々それを口に出した。

「うまいことを云つてるわね。全くその通りだわ。俊ちやんのやうに何もしないで、家の中で寢てばかりゐるのが、間違ひがなくつていゝんですね」と云つて、看護婦は、欠伸凌ぎに小唄を唄ふのと同じ調子で、「ねてゐてころんだ」を繰返した。をり／＼遊びに來る分松葉の抱への三子にも「俊ちやんの名言」として吹聽した。

上田にでも三子にでもをり／＼揶揄はれるのが、腰部の痛みと同じやうに俊一の心に痛く響くのであつた。彼れは聲を上げて泣くことはなかつたが、どうかすると、首垂れて萎れてゐることがあつた。ふと癇癪を起して、繪本を破つたり玩具を壞したりすることもあつたが、元氣な子供のやうに暴れだす力はないのだし、顏付も薄弱く出來てゐるのだから、その癇癪も傍の者を驚かすには足らなかつた。

今日は日が溫かつたし、醫者の手當てを受けたあとだつたので、俊一の機嫌もよかつた。土産の玩具のうちでは天狗の面を喜んで、それを自分の寢臺の側に懸けた。「買つた時にはこんなものは爲様があるまいと思つたのだが、かうやつて見ると、成程ど面白いね。しかし、お前は夜こんなものを見ても怖くはならないか」と、長吉が訊くと、

「怖いものか。僕はこんな眞赤い顏が好きだ」と、俊一は答へた。

「へえ、お前は赤いものが好きなの？　はじめて聞いたわね」と、おそでは俊一の好みの一つをはじめて發見したやうに喜んだ。

彼女は東京の家にゐる時とはちがつて、此方では、氣持よく臺所働きをして、新しい魚を材料に二三品の料理を注意して拵へて、四人で食卓を圍んだ。銚子もつけて、彼女自身も久振りで猪口を手にした。酒をうまいとは思はないのだが、昔自棄飲みをした癖が殘つてゐるので、飲むとなると隨分飲めた。「お母さんの顏はあの天狗樣のやうになつたらう。女が眞赤い顏しちや見つともないけれどね」と云つたりして、醉ふほどに飲んだ。長吉も不斷より快く餘分に飲んで、上田にも勸めて、無理強いに二三杯猪口を重ねさせた。たゞ一人青白い顏してゐる俊一は、みんなの顏が紅味を帶びて來るのを不思議に思ひながら見廻してゐた。

「此間うちは寒う御座いましたから、俊ちやんは何處へもいらつしやらなかつたのです」と云つて、上田は公園の梅が咲きかけたといふ噂を傳へた。

「ぢや、明日はみんなで梅見にでも出掛けませうね」と、おそでは調子づいて云つたが、するとふと、片足の短い俊一の松葉杖突いた姿に衆人の意地惡い目が注がれる有樣が思出されたので、人目の多い所へ遊びに出掛ける興味は薄らいでしまつた。親子だけで、人通りの少い淋しい濱邊か野良の方を撰んで散歩したかつた。それよりも今夜のやうに家の中に閉籠つて、傍に氣兼ねしないで遊んでゐる方が却つてましなのかも知れないと思はれたりした。

「俊一は今何處か行つて見たいと思つてる所があるの？　公園へは行きたいの？　箱根の山へでも登つて見たかあないの？」と訊くと、俊一は首を振つた。

「僕は舟に乘つて見たいな。櫓が押せるといゝんだけれど、僕は駄目だらうな」

「だつて海は危いぢやないの。この邊の海は荒いから、舟がひつくら返つたら助かりやしないよ。お前は舟に乘つたことがないから、珍らしいものゝやうに思ふんだね。それなら、もつと身體がよくなつてから、汽船に乘せて上げようよ。

みんなで房州へでも行きませう。……ねえ、お父さん」と云つて、おそでは、長吉が悲しさうな目付で俊一を見詰めてゐるのを顧みて、「この頃、お父さんはお酒を召上ると、却つて沈んぢやつていけない。今夜は羽目を外して賑かに遊ばうつて、あなたも約束しなすつたぢやないの。……俊一の氣に入りさうな遊びつて何だらうね。……」と云つて、看護婦の方へ向いて、「上田さんはいろ〳〵な流行唄を知つてらつしやるから、唄つて聞かせて頂戴ね。私なぞ、長いこと、寄席へも淺草へも行つたことがないから、當節の唄は些とも知らないのよ。いつだつたか、雨がショボ〳〵降つてゐた日に、あなたは井戸端で洗物しながら唄つてらしつたわね。雨は降る〳〵城ケ嶋の磯につて。聲がいゝから、私聞惚れてゐたんですよ。私なぞ喉が干枯びちやつて駄目なんだけど、あなたは病氣したことがないし、歳も若いから、聲もいゝんですね」

「唄でも何でも、上田さんに隱し藝があるんなら、一つやつて貰いたいもんだね」長吉はいくら醉つても、今夜は妻子の顏を見るにつけて起つて來る鬱陶しい思ひを、播散らさうとして、お世辭でなしにさう云つた。

「私は無藝大食だから駄目ですわ。奧さんのを一度聽かせて頂きたいつて、三子さんによくさう云つてゐるんですよ」

「私は何をしてもカラツ下手なの。若い時分には逆立歩きはちよつと上手だつたのだけど、この歳でそんな眞似は出來ないわね」

おそではふと興に乘つて、汽車で見た瓢輕な遊びの眞似をした。紙捻をつくつて額に載せて、仰向けた平顏をゆすぶり〳〵唇のところまで辷らせて、「うまく行つたわね。あなたもやつて御覽なさい」と左右を見た。俊一は面白がつてニヤリと笑つたが、長吉は何を馬鹿なと云つたやうに苦笑した。

「サア、やつて御覽なさい」と、おそでが上田の額へ紙捻を押付けると、上田は半ばお義理に眞似て見たが、自分で笑

つてばかりゐて熱心が足らなかつたので、二三度やり直しても、いつも鼻のところから横へ落ちた。同じ平顔でも、艶のある頬の肉を微動させながら、紅い下唇を突出して、接吻をでも待受けてゐるやうな上田の動作は、長吉の目についた。俊一は上田のしくじりを更に面白がつて笑つた。

「サア、あなたもやつて御覧なさいな。俊一が面白がつてるぢやありませんか」

おそでは夫にも迫つた。長吉は妻や看護婦の頬で撫でられ、唇で濡らされた紙捻を額に載せて、同じやうに道化た眞似をした。俊一はます／＼面白さうに、聲を立てて笑つたが、「お前もやつて御覧」と、母親に勸められると、いやだと首を振つて後退した。

「極りが惡いの？　だつて、此處にはお父さんとお母さんと、上田さんと、みんなお前の好きな人ばかりゐるのぢやないの。遠慮することはありやしないよ。どんな惡戯をしてもいゝんだよ。思切り暴れて御覧なさい。誰れも叱りやしないから。……お母さんは俊ちやんと一しよに暴れてもいゝんです」

「お前に暴れられちやたまらないね」と、長吉は戯談らしく云つたが、心の中では本當にさう思つてゐた。喜怒哀樂の昂進した時のおそでの擧動の物狂ほしさを、彼れは危かしがつてゐたのであつた。「俊一はお父さんの髮を解いてお呉れ。以前は髮梳きが好きだつたのに、この頃はいやになつたのかい」と云つて、奇麗に分けてある自分の長い髮をわざと手で攪亂して、頭を前へ突出したが、俊一は母親の渡した櫛を手に取ることさへしなかつた。

「床屋さんはもう廢業したのね。お父さんの髮の毛は長くつて煩いから、鋏でチョキ／＼と切つて上げればいゝのに。俊ちやんが切るのなら、お父さんだつて怒んたさりやしないよ」とおそでは、不斷看護婦が繃帯や膏藥など切るのに用ひてゐた剪刀を引寄せて、自分で毛を切る眞似をして見せた。

「そいつは御免だ」と、長吉が頭を引込めると、

「いゝぢやないの。俊ちやんの慰みに切らせておやんなさい」と云つて、おそでは俊一を瞰しかけた。

「切らせたきやお前の髮でも切らせるさ」

「よ御座んすとも。罪ほろぼしにいつか切らうと思つてたこともあるんだから」

「俊一はお父さんやお母さんの髮を切つたつても、首を斬つたつても、幸福にも樂みにもなりやしないね。サア、お父さんのところへお出で。繪本を讀んで聞かせてやらう」と云つて、長吉は危險な剪刀は妻の手から取つて後の方へやつて、俊一を招いたが、俊一は萎れた顏して大儀さうにして、坐つた所を動かなかつた。

夫婦が戯れるにしても爭ふにしても、上田は傍で見てゐるのを快しとしないで、湯に行くと云つて出仕度をした。

「どうせ明日はお風呂を立てさせるのよ」とおそでは云つたが、上田は買物もして來ると云つて外へ出た。

「あの人はよく辛抱して呉れるけれど、他人は他人だから、やはり氣が置けていけない。親子三人でかうして暮してゐられたら、私迷はないでゐるんだけど、駄目ねえ」と、おそでは眞面目になつて歎息した。

「だからお前が思切つて此方に居つくことにしたらいゝぢやないか。おれは下宿住ひでも我慢すると云つてるんだから。さうすれば看護婦の高い給金だけでも助かるんだから、お前の收入がなくたつても、どうにかやつて行けんことはないだらう」と、長吉も眞面目に云つた。

「そりや、私にだつて、繃帶の掛け方くらゐは分らないことないから、看護婦まかせにして置くよりは、私が始終側についてゐた方が、俊一の身體のためにもいゝに違ひないんです。だけど、私が一錢の稼ぎも出來なくなつて、あなたの收入ばかりを當てにするやうになつちや、心細いんですもの。あなたどつて下宿生活を平氣だなんて今こそ云つてゐら

つしやるけど、長くは辛抱が出來やしませんよ」
「なに、おれは辛抱して見せるよ。それにおれ一人だつたら、一週に二度くらゐは此方へ泊りに來られるだらう」
「私を俊一の側へつけといて、あなたは東京で一人で暮してた方がいゝと思つてゐらつしやるの？　此間からの話の樣子ではどうもさうらしいわね」

　おそでは、一刻も俊一を離れてはゐられないと思詰めるたびに、自分の職業などは拋り出して小田原に定住する氣になるのであつたが、自分の目の屆かなくなつたあとの夫の身持が疑はれるので、さうも極めかねた。近年夫はどんな女とも關合ひをつけてはゐないらしいけれど、機會さへあつたら誰れにでも手を出しさうな樣子が見えてゐるのだから、少しでも油斷は出來やしないと、彼女の猜疑の目は、留守番と臺所の手傳ひのために同居してゐる妹のおよねの上にさへ及んでゐた。

「お前が此方へ來たいのなら、さうしようと云つたまでぢやないか」と、長吉は話を外さうとしたが、おそではこの頃の癖で、いやにこだはつて來だした。
「俊ちやん、お父さんはね、お前やお母さんを何時棄てゝ、他所へ行つちまふかも知れないんだよ。だけど、心配しないでおいで。お母さんは大丈夫、俊ちやんを離れやしないよ。どんなに貧乏しても、二人で仲よく暮しませうね」

　おそではさう云つて、俊一を抱締めて頰擦りしたが、俊一が悲しさうな顏すると、彼女も淚を落して、夫に棄てられたあとの母子の境涯を想像しては悲みに耽つた。
「下らないことを云ふものぢやないよ」長吉は妻のいやみな泣つ面を見ると、酒の醉ひも醒めるやうに感じながら、「俊一は此方へおいで。お父さんが面白いお話を聞かせて上げようね」と、兩手を差延べて、俊一の細つこい身體をぐつと

引寄せようとしたが、おそでは、取られまいとしてます〳〵抱締めるので、俊一はだし抜けに、「いたいよ〳〵」と叫んで泣出した。そして、驚いた二人が一度に手を離すと、彼れは力もなく横に倒れた。

やがて俊一が機嫌を直したころには、さつき嶮しくなりかゝつてゐた夫婦の心も和らいで、三人は火鉢を圍んで、甘栗など食べながら邪氣のない笑話に耽つた。昨日は何を食べたか一昨日は何を食べたか、この頃は夜よく眠られるかといふやうなことを、おそでは俊一に訊ねたが、上田が側にゐないのを幸ひに、彼女の日常の行爲をも彼れから訊らうとした。

「上田さんは笠間さんと箱根へ行く約束をしとつたよ」と、俊一は先日耳に留めたことを話した。

「××にゐる書生さんとかい。……今度の人は親切でよく辛抱して呉れると思つてゐたけれど、おや、あの人もそろそろいや氣がさして來たのだね」

「上田と笠間といふ人との仲が怪しいのかい」と、長吉は横から口を出した。

「それは極つてゐますさ。私は大分前から勘づいてゐたんです。そんなことはどうでもいゝんだけど、あの人が行つちまふと、また代りを捜さなければならないから、苦になるんです」

「どうでもいゝつてことはないよ。お前は何とも思つてゐないやうだけれど、若い男と女とが巫山戯た話なぞしてるのを俊一に聞かせるのはよくないよ」

「それは構はないぢやないの。この前の人もあゝだつたし、どうせ若い人を雇めば、そのくらゐなことは大目に見てゐなきや駄目ですよ。看護婦が色男をこしらへたからつて、あなたが嫉妬やかなくつてもいゝのよ」おそではツケ〳〵と夫をやつつけて、俊一には柔しく、「それで笠間さんはこの頃は毎日やつて來るの?」

「時々遊びに來るの。緣側へ腰を掛けて話をするんだけど、僕は側へ行かんやうにしてるんだ。昨日はお菓子を持つて來て、僕にも食べろつて云つたけれどね、僕行かなかつたの」

「なぜ？　笠間さんは活潑ない〻人ぢやないの」

「でも、僕はあの人好きぢやないよ」

「笠間さんがお前の氣に入らないことを云つたのかい。お前は何でもよく分るからね」

俊一は自分の病氣について侮辱的な言葉を笠間が云つたことをよく覺えてゐたが、それを兩親の前に打明けては惡いやうな氣がしたので默つてゐた。

「俊ちやんはこの頃も上田さんは好きなのだらう。あの人のすることで氣に入らないことがあつて？　かういふところがいけないと思つてることがあるのなら隱さないでお母さんに仰有いよ」

「そんなことない」

「お前は上田さんが好きなのね。この前の人よりも」

俊一が首づくのを見て、長吉が、

「ぢや、少々給料を增してもい〻から、もつとゐて貰ふやうにするんだな」と云ふと、

「六十圓だつて特別なんですもの。この上出してたまるものですか」と、おそでは、はじめ高い謝禮を出澁つた夫が、無雜作にさう云ふのを怪んだ。

「でも、俊一の氣に入つてるのなら、少々の金は惜まないで引留めといたらい〻ぢやないか」

「これはさうだけど、お金さへ出しやゐてくれるとは限らないわ」おそではさう云つて、掛時計を見て、「俊ちやんはも

う寢んねしなきやならないでせう。今夜はお母さんが寢かして上げようね」と、俊一に寢仕度をさせて、十歳にもなる男の子としては輕過ぎる身體を横抱きにして、寢臺の上へ運んだ。柔かい夜具をふはりと掛けてやつて、おとなしく目を閉ぢた俊一の細つそりした顏を暫らく見下ろした。

言葉が止切れると、東京とはちがつた周圍の寂しさが二人の心にしみ入つた。長吉は食卓の上に頰杖を突いて煙草を吸ひながら、寢臺の方へ目をやつてゐたが、おそでの身體が邪魔になつて、俊一の寢姿は見られなかつた。都會の濁つた空氣の中にゐては健康が長く保たれないといふ醫師の注意によつて、一人子をこの海岸に住はせることになつたのも、今になつて見れば、一時の氣休めに過ぎなかつたことが分るにつけて、自分だち親子三人の身は暗い闇に鎖されてゐるやうに思はれてならなかつた。そして、近年夫婦が、こんな不具な兒を生んだ罪亡ぼしのために心を合はせてゐたのが、昨今はお互ひの心に隙間が出來て來たので、大切な一人子の始末が長吉には言ひやうのない煩ひになつて來た。

「俊一さへ生まれてゐなかつたら、こんな愚かな女とはとつくの昔に別れてゐる。三十を過ぎたばかりで生氣を失つて末枯れた顏や肉體をしてゐるやうな女を、男盛りの自分が、後生大事に守つてゐるにはあたらなかつたのだ。それも俊一が人並に健かになる望みがあるのなら、それだけを樂みにして、外の事には目を瞑つてゐてもいゝのだが、どうせ望みはないに極つてゐる」と思ふと、いろんな苦勞に堪へる張合ひがなかつた。

彼れは寢臺の側に立つてゐるおそでの後姿を見ながら、せめて彼女を此方に定住させて、自分一人東京で氣儘な下宿生活をするやうにでもなつたらと望んでゐた。上田が俊一の氣に入つてゐるのなら、おそではどうならうとも、さういふ女に俊一の短い一生の介抱を頼むことにしたらいゝと、おそでの亡くなつたあとを空想したりした。そんなことを空想するにつれて、若い學生と上田との關係が不快に感ぜられだした。

「俊一はもう眠つきましたよ」と、おそでが火鉢の側へ戻つて坐つたところへ、看護婦も歸つて來た。湯上りで一層艶々してゐる上田の若い顏は、今度は不思議に長吉の目を惹いた。

「あなたも毎晩淋しいでせうね、波の音ばかり聞えて」と、おそでが云ふと、

「さうでも御座いませんわ。この頃は私もスッカリ小田原に馴れたんですね」と、上田は爽かな聲で應へて、「今三子さんに會ひましたのよ。だし拔けに後から私の肩を捉えてお酒臭い息を吹掛けるから、私吃驚しました。あの人は氣さくでいつも面白さうですのね。明日は此方へお伺ひすると云つてきました」

長吉は、妻が若い藝者など相手にして、得意になつて自分の昔を語つたりするのを好まなかつたが、でも、三子の快活な氣質と、太り肉の健かな若い身體に對しては不快な感じを寄せる譯に行かなかつた。

（三）

翌日も溫かい日であつた。俊一は誰れよりも早く目を醒まして、雨戸の隙間から差して來る朝の光で天狗の面を見たり、窓際へ來て鳴いてゐる小鳥の聲を聞いたりしてゐたが、昨夕は不斷よりもよく眠れたゝめに何が悅しいともなく、ひとりで微笑まれた。先日上田さんが笠間さんに、「あの子はいくら手を掛けたつてどうせ駄目なんです。一度風邪を引いても、それでおしまひなんです。何も知らないんだから可愛さうですよ」と小聲で云つてゐたのを、自分のことを話してゐるのだと、俊一は耳に留めてゐて、今もその言葉を思出したが、その言葉は少しも彼れを悲しませはしなかつた。父や母が傍にゐて呉れるのは何よりも悅しくつて、時々來て呉れるのが待たれてはゐたが、自分が兩親に隨いて東京へ歸りたいとも思つてゐなかつた。

炊事でも洗濯でも、すべての雜用を足して吳れる隣家の主婦が、臺所口から聲を掛けると、おそでは目を醒まして、

「今日は朝からお風呂を立てますから水を汲んで下さいね」と、寢床の中から云つた。

東京のゴミ〳〵した所で働いてゐる夫妻は、雨戸を開けて田舍の朝の空氣に觸れると、日頃の疲れが拭はれてしまふほどの快さを覺えた。長吉は朝餐の仕度の出來る間濱邊を散歩することにした。日はよく照つて風もないので、沙の上に蹲んで大海を見渡してゐたが、すると、そこへ笠間がやつて來て、顏を見合せると、先方から挨拶した。

「御散歩ですか」と云つて、相手の顏をよく見ると、以前と違つて血色がよくなつて頰に肉もついてゐるので、「大變お丈夫になりましたね」と云ふと、

「えゝ。身體はスツカリよくなりました。月が變つて溫かになつたら、此方を引上げようと思つてゐます」と、笠間は元氣よく云つて、目禮して行過ぎた。

「彼奴、おそでや上田にはよくお喋舌りしてるくせに、おれを嫌たがつてあんまり話をしたがらない」

長吉はさう思ひながら、笠間の方を見やつてゐたが、健かになつて東京へ歸つて行く笠間の幸福を思ふにつけて、俊一の事が新にいたましく胸に迫つて來た。そして、同じ人間の形を具へて生れて來ながら、俊一のみが悲慘な生存を續けねばならないのを、考へれば考へるほど諦めかねた。

で、家へ歸つて、

「笠間さんは肺病が根治したのだらうか。見たとこは大變達者さうになつてゐるね」と、誰れに云ふともなく云ふと、

「海岸でお會ひになつて？」と、上田は訊ねて、「あの方はこの頃は、病氣しない前よりも强くなつたから寒い日にでも海岸を運動してゐらつしやるんですつて」と、手拭を姉樣かぶりにして、障子に紙帚をかけながら云つた。

「難病が癒つたあとは格別に嬉しいものでせうね。肺病のやうな病氣でも養生次第で完全に癒るんですかね」

「あの方も一時は絶望してゐらしつたんですつて。だから、これからは生命ひろひをした氣で勉強するのだと云つてゐらつしやるんですよ」

　笹川の生國や通つてゐた學校について、二人が訊ねたり答へたりしてゐる間、おそでは側にゐながら口出しないで浮かない顔してゐたので、長吉が氣にして、言葉を掛けると、

「さつき上川さんのお手傳ひをして、俊一の繃帶を取替えたのですけどね。それはひどくなつてるの……」と、おそでは萎れて云つたが、その顔は不斷よりも一層婆さん染みてゐた。「以前よりもずつとひどいんです。五つも六つもの穴がぺつたり膿でふさがつてゐて、ガーゼを通すと、穴の中は横の方まで空虚になつてゐて、此方からあつちへガーゼが通るんですもの。まるで田舎のお面見たいに、口は別々になつてゝも、奥は一しよに穴が開いてゐるんぢやありませんか。あなたも一度よく見ておやんなさい」

「それはおれも醫者からよく聞いてゐるよ」

　長吉は、今更云はなくつてもいゝことを妻が口に出すのを苦々しく思ひながら顔を蹙めた。

「聞いたゞけでは駄目ですよ。病氣の本元をよく見なければ」

「おれは醫者ぢやないし、見たつて爲方がないぢやないか」

「顔だけ見てると、俊一も次第に丈夫さうになつてゐるから、あなたは平氣でゐられるんです」

　さう云つて夫の冷淡を攻めだしたおそでも、平生は俊一の患部を熟視することを恐れて、看護婦の手傳ひをする時でも、成べく目を外らすやうにしてゐたのであつたが、今朝は、事によつたら今後自分一人で病兒の世話をしなければな

らぬと覺悟して、勇氣を出して、日々の手當ての仕方を看護婦に教はつた。そして、地獄をのぞいたやうな戰慄を感じたのであつた。

掃除を済まして、不斷は亂雜になつてゐる家の中を綺麗に取片付けて、四人揃つて遲い朝餐の膳に向つたが、夫妻は氣持よく食物を味ふことが出來なかつた。風呂が沸くと、長吉が入つたあとで、おそでは俊一の身體を拭つてやつて、障りのない所を丹念に磨いてやつた。手の指先や手首などを、石鹸や垢磨を用ひていじり廻してゐると、俊一はおとなしく、愛撫によつて受ける快感を樂んでゐるやうにニコついた。湯の溫かみで彼れの青い皮膚にも、人間らしい艶が出て、頰にも紅味が差した。

「俊ちやんの身體にはこれだけ元氣があるんだから、いゝ空氣を吸つておいしい物を食べて養生してゐれば、次第に丈夫になるんですよ。さう心配することないの」と云つて、おそでは急にまた希望を回復して、自分の心を慰めた。

夫妻が案じてゐたやうに、看護婦が暇を呉れよと申出はしなかつたし、隣家の主婦の給金や家の費用も滯りなく支拂ふことが出來たし、子供を相手に一日遊び暮らして、夜の汽車で二人一しよに歸りさへすれば、例の通りなのであつたが、午過ぎに留守居のおきねから、盜難に會つたといふ意外な電報が來たので、二人は吃驚して顏の色を變へた。

「戸締まりをよくしなかつたんだらう。家を空けて遊びに出てゐたのかも知れない」と、おそでは妹の不注意を憤つて、側にゐたら毆りつけてでもやりたいやうに昂奮したが、衣類持物のすべてを盜まれてしまつたやうな氣がするとともにドンヨリした窶れた兩眼に涙が浮んだ。

「大切な物をみんな盜まれてしまつたら、これからどうするんですよ。今日の日から着のみ着のまゝで路頭に迷はなきやならないぢやありませんか」

「さう慌てなくつてもいゝよ。……しかし、電報が來たのだから直ぐ歸らなきやなるまいな」長吉は努めて落着いて云つたが、この頃自分の心の內や外に微見えかゝつてゐた惡運のおとづれが、この盗難を最初として續々起つて來るのではないかと恐ろしく感じた。

「なに、家ぢゆう捜したつて碌な物はないんですよ」と、强いて笑ひを浮べて、看護婦の慰問に答へて、おそでを促して歸り仕度に取掛つた。いくら急いだつて、汽車の中で二時間あまりもじつとしてゐなければならないのを思ふと、二人はもどかしくてならなかつた。

「お母さんは四五日したらまた來ますからね。上田さんの云ふことをよく聞いておとなしくしてゐらつしやいよ」と、おそでは俊一に別れを告げたが、俊一はいつもの通りで、ちよつと寂しい顏をしたばかりで、さして別れづらい樣子を見せなかつた。

「俊ちやんをお賴みしますよ」

「ぢや、お大事に」

上田は、戶口でいつもの通りの挨拶を取りかはして、二人がアタフタと出て行くのを見送つたあとで、家の中へ戾つたが、盗難の話を聞かされたゝめに、病兒と自分との二人生活が俄かに心細く思はれだした。

「俊ちやん、あなた怖かない？　東京のお家のやうに此處へ泥棒が入つたら困るわね」と云ふと、

「さうしたら何でも持つて行かせればいゝでせう」と、俊一は事もなげに云つた。

「泥棒つて、たゞ物を取つて行くばかりぢやないのよ」

「ぢや、どうするの？」

「刄物で斬つたり突いたりするかも知れないの。刄物を振廻されたりしたら、あなただつて怖いでせう。私今夜から此處で寢るのが怖くなつてよ」

「ぢや、あなたも東京へ歸つちまふの？」

「歸りたくつても、あなたを一人此處へ打やらかしといて歸りやしないわ」上田はふとこの病兒を不憫に思つてさう云つて、「俊ちやんはこの頃は東京へ歸りたかないんですか。たまにはお母さんに隨いて歸んなされぱいゝのに」

「歸りたい時にはいつでもさう云つてやれば、お母さんが迎へに來て呉れるんだからいゝ」

「お母さんが大事なひとり息子を田舍へ打やらして置くのも不思議だけれど、あなたが孤兒見たいにこんな所に一人ぼつちにされて、さう淋しいとも思はないのは、私不思議でならないわ。親子の仲はそんな筈ないと思ふんだけど、……」

さう云はれると、俊一も母親の懷かしい思ひが胸に迫つて來たが、口へは出さなかつた。そして、自分で寢臺の方へ行つて橫になつた。仰向けに寢たまゝ目をパッチリ開けて、低い天井を見ながら、窓外の物音に耳を留めてゐたが、其處では近所の子供が囂しい聲を立てゝ遊んでゐた。俊一には言葉がよく聞取れなかつたが、時々は煩さく感ぜられる子供等の騷ぎも、今日は心の慰みとなつた。彼れは障子を開けて、彼等の活潑な擧動を見下ろしたりした。四人も五人もの子供が、向ひの危かしい石垣の上に登つて、互ひに他を突落さうとし合つてゐた。拍子を取つて勢ひよく飛下りる者もあつたが、飛下りて平氣で地上に立つのが、俊一の目には不思議なことゝして映つた。彼れは誰れの足にも腰にも怪我のないのを不思議がつた。さういふ騷ぎの間に、小鳥が隣りの樹木から自由に此方へ飛んで來るのを、彼れの目は見のがさなかつた。

俊一が外へ心を惹かれてゐる間に、上田は緣側で日向ぼつこをしながら、朝のうち讀みそこなつた新聞を讀んでゐた

が、そこへ三子が湯屋の歸り途に立寄つた。髮をハイカラに結つてゐて、面長な引締つた顔立も、中流の奥様らしいがベタ〳〵したやうな歩きつ振りが、どうしても川合の藝者か酌婦見たいで本性をあらはしてゐた。「あの人は顔ばつかりお上品らしくしようとしてゐるけど、胴から下がだらしがない」と、おそでが上田に云つたことがあつた。

上田はいゝ話相手として迎へて、夫妻が例よりも早目に歸京した譯を話した。姉さんには是非聞いて貰ひたいことがあつたのに惜しいことをしたと、三子は大袈裟に云つて、

「此方の御別莊へ、有りつたけのお金をつぎ込んで、簞笥の中も金庫の中も空つぽだなんて云つてたけれど、泥棒に取られるやうな物がまだ有るんですかね」と、冷かすやうな口調で云つたが、「でも、お氣の毒ね。たまに俊ちやんに會ひに來なすつたのに」と、同情した表情をして、寢臺の方を覗いて、「俊ちやん。寢てゐらつしやるの？」と聲を掛けた。

俊一は振返つて微笑したが、直ぐに寢床に横はつて、二人の方から顔を背向けた。「あなたのお母さんはあなたの生まれる前には三子さんのやうだつたのよ」と、かねて上田から聞かされてゐたのだが、彼れはそのために却つて三子に親しみがたくなつてゐた。

「私この頃思餘つてることがあつて、姉さんの智慧を借りたいと思つてゐたのよ。姉さんがゐないから上田さんに聞いて頂かうか知ら」三子は馴々しくさう云つて、温まつてゐた肌の冷くなるのをふと氣遣つて、障子を締めて火鉢の側へ寄つて「かういふ家にゐて、氣儘に寢たり起きたりしてゐたらいゝでせうね」と、何かを考へこゐるやうな目をしてあたりを見廻してゐた。

「淋しくつて爲様がないわ。それに大切な病人を預つてるんだから油斷は出來ないんですもの。私さつきから考へてゐたのよ。俊ちやんの身體に極りがついたら、私の白衣生活もおしまひにしようと思つてゐたのですけど、それまで待つ

てゐられさうでないの」

「でも、もう少しの間でせうから、勤めてお上げなさいな。あなたならこそ、牛島さんも安心して俊ちゃんを任かせてゐられるのよ」

これまでにもをり〳〵話合つてゐたやうに、おそでが病兒を打やつて置いて、夫の側に喰附いてゐるのを、二人で非難して、口では何と云つてゐても、子供よりは御亭主の方が大切なのであらうかと、さういふ實感を持つてゐない二人は、いろ〳〵に當推量をし合つたが、話がそつちへ外れて、いやに眞面目になりだすと、三子は最初話しかけた話を進めるのが後見たくなつた。

「此方の主婦さんは嫉妬深いのね。今度なぞ側で見てるといやになるんですよ」と、上田が云つたので、

「それは嫉餅やきですとも。だから、私牛島さんには成べく口を利かないやうにしてゐるのよ。あなたも氣をつけてゐらつしやい。詰らない疑ひを受けちやいけないから」と、三子は應へて、「でも、上田さん、何よ」と調子づいて、「男でも女でも、あんまり燒かなさ過ぎるのも張合ひのないものよ。私の知つてる人の奥さんは、御主人が何をしてゐても、本當に平氣でゐるらしいの」

「ケーさんて方でせう。主婦さんに聞いてよく知つてますわよ」

「ケーさんでもコーさんでもいゝから、上田さん親身で聞いて下さいね。……私、その人に月に三度ともしみ〴〵會やしないのよ。一年の餘も喧嘩一つしないで照降なしに續いて來てゐるのだけど、その人のお腹の中が、私にはどうもよく呑込めないの。私の身をどうして呉れるんですよと、改まつて一つ訊けばいゝのだけど、それを口に出すのが怖いやうで、何時會つても云はれないのよ。……私は前から氣をつけてゐたから、大した借金は殘つてゐないのでせう。年末

にも、澁の××屋だの此處の××からいろ〳〵な反物を持つて見せに來るし、家の姉さんが傍から勸めるし、私も去年のので間に合はせるのは氣が利かないから、浮かり手を出しかけたの。下着も慾しい、長襦袢も慾しい、帶も慾しい。今年は山繭が流行つてるなんて、私だつて、お正月には切立ての新しい物を身體につけたいには極つてゐまつさ。だけど、ここが大事な所だと、私は考へちやつたの、まだ二年や三年稼がうと思へば稼げなかないし、ちつとやそつとの借金でこの先が暗くなるつてことはないのだけど、若しもあの人に心から私の身を引取つて與れる氣があるのなら、私の方でも今のうちにその覺悟をして、あの人に成べく餘計な迷惑は掛けないやうにしたきやならないと思つて衣服のことなんぞ目を瞑つて我慢したのよ。御覽なさい。私は指環さへ一つ持つてゐないのぢやないの。私だつて以前は負けること嫌ひな見榮坊だつたから、頭の物だつて、手足につけるものだつて、何處へ出ても恥かしくない物を、一身上持つてゐたのだけど、ある事のために、さういふものはみんな無くしたのです。……年末にあの人に會つた時に、お前はお正月の仕度は出來たかと訊かれたから、そんな者はどうでもいゝんですと、負惜みを云ふと、さうかつて、それつきりだつたの。見榮坊の私が、物はよくつても去年のお古を着てまがひ珊瑚の釵なんぞ挿して、見榮も外聞もかまはないで、お座敷へ出てゐるのは誰れのためだか何のためだか、あの人はよく知つてるくせに、とどの詰りの肝心なことを私の前で言出さないのだから、私じれつたくて仕樣がない。先方でも私の方から言出すのを待つてるのかも知れないけど、私どうしても思切つて口には出せないのよ。家の事情でお前の一生を見てやる望みはないから、これまでの緣だと思つてくれと云はれはしないかと、詰らないことが氣になつてならないの」三子はふと聲に力を入れて、「全體あの人の奥さんが燒餅をやかないからいけないんだわ。騷いでくれゝば、いゝか惡いか、どちらかにキツパリ道がつくのだけれど、奥さんがおとなしいから、張合ひがないつたらない」と云つて、「上田さん、あなたはどうお思ひになつて？」

「私には分らないわ」上田は相手の手放しの惚氣を座興として聞いてゐたのであつたが、ふと自分の胸に思當るところがあつた。「それで、その方があなたの一生を見てやると仰有つたら、あなたは直ぐにも今の稼業をお止めになるの？」

「さうよ。私今が丁度廢業にいゝ汐時だと思つてゐるの。看板の空いたのがあるからつて私の氣を引いて見る人もあるけれど、私氣乘りがしないの」

「あなたの稼業は傍で思ふほど面白かないんですかね」

「私別段稼業をいやだつて思やしないんですけどね。でも、好き好んで藝者なぞになるものぢやないわね。あなた方の御商賣の方が尊いのよ」

「さうでもありませんよ。私もはじめは白衣生活にあこがれてゐたのですけど、內輪へ入つて見るといやなことばかりなのですよ」上田はかねて見聞してゐる內輪のいやな事を話さうとしたが、相手に蔑視まれるのが氣になつたので、話を轉じて、「ケーさんとかはいくつにおなりなさるの？」

「牛島さんよりも一つか二つ上なんですよ。もうお爺さん」

「さう」

「變に思つてゐらつしやるわね。でも、男で本當に手賴りになるのは四十くらゐな人なのよ。あなたは二十代の若い方がお好きなんでせう」

三子は平氣でさう云つたが、上田はドギマギして返事をしないで目を伏せた。笠間のことを三子に知られてゐるのではないかと思ふと、顏が火照つて來て、向合つてゐるのが堪へられなくなつた。

「俊ちやんは私だちの話を聞いてゐたのね」と、三子は、目をパッチリ開けて此方を見詰てゐる俊一の方を顧みて云つ

たので、上田はそれを幸ひに

「俊ちやんはお醫者さんへ行かなきやなりませんね」と云つて座を立つた。

（四）

上田は三子よりは却つて三つ四つ年上であつたが、色戀についての經驗や知識は三子に及ばないと思つてゐたので、をり〳〵此處へ來ておそでや自分に向つて、無遠慮にしやべり立てる彼女の話をいつも好奇心をもつて面白く聽いてゐたのであつた。今日は三子が歸つたあとで、俊一を連れて病院へ往來する間に、三子の云つたことを思出してゐると、笠間に對する自分の氣持がそれによく似てゐるのぢやないかと思はれだした。お互ひに心の中で思合つてゐても、どちらかが口へ出して云はないかぎりは、煮切らない日がいつまでもつゞくのだと、上田は笠間と自分との仲をさういふことに極めてしまつた。「でも、あの女はケーさんに一生を見て貰へるか貰へないかが分らないだけで、一年の餘も關係は續いてゐるのだけれど、そこへ行くと、私たちの間は綺麗なものだ」と、自分の肉體の潔白を誇る氣にもなつたが、それをひそかに誇つたあとでは直ぐに、三子などのやうに自由に自分の肉體をあつかひ得られる境涯の人々の羨ましさが力強く胸に湧立つた。今までに二三度誘惑を斥けて自分の潔白を守つて來たことも、おそでなどに向つて口でこそ自慢げに吹聽したものゝ、眞實は幸福を取逃がした口惜しさが感ぜられてゐた。……そして、今差當つて自分をかまつて呉れさうな男は、笠間の外には無いのに、その笠間も月が變つたら東京へ歸つてしまふのだと思ふと、上田は愚圖々々してゐられない氣がした。

夜になると、平生の夜にまして淋しかつた。退屈醒ましに、俊一に童話を一つ二つ讀んで聞かせたが、氣乘りがした

かつたので、いつものやうな親切な說明は附加へないで、書物を押やつた。どうせ笠間は、近所の噂を憚つて夜は遊びに來ないに極つてゐる。誰れか話應へのある人が訪ねて呉れゝばいゝと、頻りに心待ちにされた。三子などは今時分、唄つたり喋舌つたり、いろんな男に巫山戯られたりしてゐるのであらうと想像すると、妬ましくなつた。いくらか報酬がよくつて氣楽であるために、病兒を相手に浮々と幾ケ月も過したことが後悔された。

「泥棒が來たらどうしようね、俊ちやん」と、默つてばかりゐるのが堪へられなくなつて、獨言でも云ふ氣で、ふと話をしかけたが、俊一が返事をしないので「泥棒だつて、あなたをどうもしないだらうけど、私はひどい目に會はされるかも知れないから、氣味が惡いわ。笠間さんにでも泊つて貰ふといゝんだけれどね」

「さうしたらいゝでせう。僕笠間さんが來たつて構やしないよ」

「あの人は本當にいゝ人よ。あなたはさう思はない?」

俊一はあの人は嫌ひだとは云ひかねて、ニヤリと笑つたゞけであつたが、上田は獨言を續ける氣で、

「私笠間さんがこの家へ毎晩泊りに來てくれるといゝと思ふのよ。あの人だつてあんな汚らしい貸間に一人ぽつちで寢てゐるよりや、此處へ泊りに來た方がいゝにちがひないのだけど、世の中は面倒くさいものね。俊ちやんも身體が丈夫でもつと歳を取つたら、屹度好きな女の人が出來るにちがひないわ。あなたは今どんな女の人をいゝと思つてゐて? 三子さんのやうな人? 私のやうな人?」などゝ云ひながら、俊一の側へ寄つて、自分の顏を押出して見せたが、俊一は返事はしないで微笑してゐた。三子や上田の若い艶のいゝ顏は、母親の顏とはちがつた味はひをもつて、彼れにも感ぜられてゐたのであつた。

「あなたはお父さんに似て、顏立は惡かないのよ。病氣のために血色が惡いから何だけど、本當はいゝ男なの。鼻筋が

通つて面長でちよつと品がいゝのね。鼻の恰好が笠間さんにも似てゐるのね」

上田はさう云つて俊一の鼻を抓んでいぢくつて、彼れが後退すると抱かゝへて、頬つぺたをおつゝけた。「私の鼻はあなたとはちがつてペタンコでせう」と、俊一の手を執つて強いて彼女の鼻をいぢらせた。毎日大小便の世話までしてゐるので、俊一の肉體のどこに觸れるのも珍らしいことではないし、いつも臭氣のある汚い肉塊のやうに彼れを見做してゐたのだつたが、今夜はかつて感じなかつた快感が感られた。……空想の昂奮した今夜の彼女は、鼻ばかりではなくつて、俊一の肉體のどこをでも笠間の肉體であるやうに夢見た。俊一自身も、彼女のくどい愛撫を避けるやうに身體を動かしながらも、彼女に手放されたくない氣持になつてゐた。

「さあお休みなさい」と、やがて、上田は俊一を寢臺の上へそつと置いた。そして、火鉢の上で滾つてゐた鐵瓶の湯を金盥にうつして、唇を拭い手を洗ひ、戸締りに氣をつけて寢床に就いた。

（五）

今度牛島夫妻が來たら、何とか口實をつくつて暇を貰ふことにしようと、略々極めて、上田は四五日の間ソハ〳〵して過した。その間に一二度笠間が縁側へ立寄つてくれたのだが、折惡く、隣りの主婦が庭の掃除に來てゐたので、通り一ぺんの笑話を取りかはしたゞけであつた。

「今月一杯でいよ〳〵此方をお立ちになるの？」と訊くと、

「えゝ、もういつでも立てるやうに準備が出來てるんです。僕のために送別會でもやつて呉れませんか」と、笠間は云つた。

「こんな土地にでも永くゐらしつたんだから、いよ〳〵お別れとなると、思ひの殘ることもあるでせうね」

「そりやあるかも知れませんね」

「私も少し事情が出來て、近々かに東京へ歸ることになるかも知れないんです」

「ぢや、僕と一しよに歸つちやどうです」

「御迷惑ぢやなくつて？」

それから互ひに揶揄ふやうな口を利き合つたのであつたが、上田はあとでの思出に、笠間の心の底がまだ見極められないので牴牾しかつた。牴牾しさのあまりに、あたりが鎭まつて、隣りの主婦も來てゐない夜には、病兒を側へ引寄せては、惜氣もなく、若い女の熱の籠つたキッスを、病兒の肉體のあちらこちらへ與へた。かうして、病兒が笠間と化してそこに寢てゐると思ふと、泥棒の恐怖も自から忘られた。

「×時の汽車で行く」といふ牛島夫妻の電報を見ると、上田は四五日以來の事を考へて、稍々後目たい氣持がした。早速鏡に向つて粉飾をして、俊一の顏をもよく洗つてやつて、時刻が來ると、外出をいやがる俊一を宥め賺して、停車場へ連れて行つた。途中で、「お母さんにいろんなお喋舌しちやいけませんよ。よ御座んすか」と、いく度も言聞かせたがそのたびに、俊一は首づいた。

窓から顏を出してプラットホームを見てゐた牛島夫妻は、汽車を下りると直ぐに、俊一の側へ寄つて行つたが、彼れの顏が、この前よりも著るく窶れて色が蒼褪めて、目元や口端に洩らした笑ひさへ淒いやうなのに驚いた。二人はこもぐ〳〵上田に訊札したが、上田は、

「別段お悪いつてことないんです」と云つて、「暫く家にばかりゐらしつたのに、久振りで此處までお歩きになつたので

疲れなすつたのでせう」

「ぢや、お迎へに來て背はなきやよかつたのにね」と云つて、おそでは俊一を衆人の目から庇ひながら停車場を出て、伜を連ねて家へ行つた。

いつものやうに土産は多かつたが、俊一は悦しい顏もしなかつた。

「先日あんな風に慌てゝ歸つたから、氣になつて、今度は早く樣子を見に來たのよ」と云つておそでは、上田の問ひに應じて盜難の話をした。……盜まれた物は二三點の衣類に過ぎなかつたので、留守居のおよねの身にも怪我はなかつたのだから、夫妻は歸つて見て安心したのだけれど、およねが恐れて、この後の留守番を堅く斷はつたのに困つた。で、いつそのこと、これを機會に、おそではある商店への通勤を止して、芝の家を片付けて小田原に定住することにして、長吉は下宿住ひをしようかと、夫妻の間に話が略纏まりかけてゐるのであつた

「さうなつたら俊ちやんのためにもよろしいんですね」と、上田が云ふと、

「盜難も、弱い子供を打遣らかしといた天罰かも知れないのね。以後氣をつけろつて、何處かの神樣か佛樣かゞ泥棒になつて私だちを戒めて下すつたのかも知れませんよ」と、おそでは此間から殊勝らしく感じてゐたことを云つた。

盜難を神佛のお諭しのやうにまで、おそでが祭上げるのは、長吉には可笑かつたが、それを緣に生活變更の覺悟を妻がしだしたのは、彼れの思ふ壺に嵌つた譯なので、何よりも悦しかつた。それで、妻のその覺悟を弛めさせないやうにと、此間から自分も眞顏で盜難をあがめ奉つてゐた。

「お前が俊一の看護に一心になつてゐてくれゝば、おれも安心して一生懸命に働かれるよ」と、屢々云つて、母親の愛情によつて子供の難病のよくなることを空想するとともに、彼自身の自由な生活の道が久振りで新たに開かれるのを空

想してゐた。今來て見ると、俊一は意外に衰へてゐたが、上田はこれまでよりも艷かしいやうに、彼れには思はれた。

その後の病兒の食事や睡眠などについて、夫妻は上田に訊糺して、變りはないと聞いて一時安心はしたが、俊一が例になく不機嫌に振舞つて、取つてやつた土産の西洋菓子を疊の上へ抛出したりするのを見ると、それが病氣の重くなつたゝめではないかと疑はれた。「氣持が惡いのかい」と、左右から訊ねたが、俊一は返事をしなかつた。

で、不斷のやうな陽氣な遊びやお喋舌りは自から遠慮されて、しめやかな夜を過した。上田自身の希望でもあり、おそでも覺悟してゐたので、看護婦解雇の打合はせもされた。

「私だつて二三日身を入れて上田さんに教はつたら、俊ちやんの看護や手當てが、間違ひなしに出來ないことはありません。長い間人まかせにしていゝ氣になつてゐたのがいけなかつたのです」と、おそでは決心を強めて云つた。そしてその夜は病兒の眠りを守るやうに、寢臺の直ぐ側へ自分の寢床をのべた。

俊一は寢仕度をしてゐる上田の方を見やつて、彼女が昨夕や一昨日の夜とはちがつて、きつい顏をしてゐるのを不思議に思つた。留守中の上田の所行ををり〳〵母親に向つて打明けてゐる彼れも、先日來の彼女の不思議な所行は誰れにも云つてはならないやうな氣がしてゐたが、上田が東京へ歸りさうな話をさつき傍で聞いてからは、彼女に別れることが何となく悲しくなつて、母親が代りに來てくれることもさして悅しくは思はれなかつた。それに上田が笠間と一しよに歸るらしいことを考へると、不斷から何となく好きでなかつた笠間が憎らしくさへ思はれだした。

「俊ちやんは眠れないの？」眞夜中にふと目を醒ましたおそでが、電氣を點けて、寢臺を覗いて云ふと、俊一は目を瞑つて夜具の中へ顏を引込めた。

「氣分が惡かないの？　脊が痛かないの？」

「どこも痛かないよ」と、俊一は力を入れて答へた。

「それだといゝけれど、夜中にでも氣持が悪かつたら、お母さんを起しなさいよ」

「ハイ」

俊一はキッパリ答へたが、母親が電氣を消して寢床に就くと、再び目を開いて闇の中を見詰めた。遊び友達と云つては一人ももたないで育つて來た彼れは、この土地へ來てから知合ひになつた隣りの主婦やその子供や、三子や笠間や、病院の醫師や看護婦などの言語動作を耳目に觸れて、わづかに世の中を知つてゐたのであつたが、みんなが彼れを「死にかゝつてゐる人間」「可愛さうな人間」として取扱つたり噂をしたりしてゐるのを、彼れはつねに胸に留めてゐて、自分は足が悪くつて外の人のやうに飛んだり跳ねたりが出來ないのに、夢の中では屡々外の人にもまさつて飛べもし驅けられもされるのを不思議に思つてゐた。そして、闇の中で目を開けてゐると、誰れかゞ寢臺の上へやつて來て、自分を捉へて何處か遠い所へ連れて行きはしないかと思はれて、多少恐ろしかつたが、連れられて行つて見たい氣もした。兩親には平生離れてゐるし、隣りの主婦や三子や醫師など、彼れの世の中のすべての人々の言語動作に懐かしみも親しみも寄せられないでゐる彼れは、知らない誰れかに連れられて遠い所へ行つても構ふことないと、ひとりで覺悟を極めてゐた。むしろさうなることを待設けることさへあつた。今夜は闇の中で目を開けてゐると、ことにさう思はれた。……波の音は不斷よりも強く響いて來た。風が吹いて雨戸が音を立てた。今にも誰れかゞ寢臺の側の窓の戸を開けて入つて來さうな氣がして、俊一は顔をそつちへ向けたが、そのまゝで知らず知らず淺い眠りに落ちた……再び目が醒めた時には、音のしてゐた雨戸の隙間は明るくなつてゐて、自分が同じ所に寢てゐるのを、彼れは知つた。

寒い風が吹いて日差しも鈍かつたので、夫妻は朝から火鉢に親しんで、内輪の暮し向きの話に耽つて、外へ出ようと

はしなかつたが、正午過ぎに三子の訪ねて來る前觸れがあると、長吉は彼女に會ふことを嫌つて、一人で家を出して公園の梅を見に出掛けた。

おそでは三子の此間の話を上田から聞かされてゐたが、今日はさういふ浮ついた他人の事に關はり合つて笑ひ興ずる氣にはなれなかつた。で、「姉さん」と三子が威勢のいゝ聲で呼掛けて入つて來ても、いつものやうに調子を合はせて迎へはしなかつた。盜難の事や夫婦別居の事など一通り話が運んだあとで、三子は、

「姉さんが小田原へ越してゐらつしやれば、私は相談相手が出來て心强くなるわね」と、喜んで、「それで、中島さんは一週に一度づゝくらゐ此方へ泊りにゐらつしやるの？」

「えゝ、さう。……毎日一しよにゐて喧嘩ばかしゝてゐるよりや、その方が二人のためにもいゝんですよ」

「姉さんも變つたわね」

「變つたつて？　何が變つたのさ。私が何年立つても亭主一人を後生大事に守つて、一日だつて放さないやうにしてるつて、あなた達は笑つたことがあつたわね」

「……でも姉さんは可愛い俊ちやんのために、旦那樣と別々に暮さうといふのだから、結構なことだけれど、私を御覽なさいな。あの人に奧さんがあるために、いつまでも一しよになれないで愚圖々々してるんぢやありませんか」三子は忌々しさうに云つた。

「……私は本當の事は知らないけど、話にだけ聞いてゐると、あなたは全く愚圖々々ね。成つちやゐないわよ。早くどちらかに極めたらいゝぢやないの？　あなたに腕があるのなら、ケーさんとかをうまく抱込んで、奧さまでも何さまでも、さつさと追拂出させるやうにしたらいゝぢやないの？　どうせ藝者稼業をしてゐるのに、お上品ぶつて世間の人に

遠慮や酬酢をするには當らないのさ」おそでは自分の昔を顧みて、三子のやうな場合を想像しながら、ふと昂奮して云つた。

「だけど、あの人のお腹の中が私には分らないんですもの」三子は甘えたやうな口調で、「それは私を可愛がつては吳れるのですけど、私の一生の手頼りになつて吳れるのだか吳れないのだか、それがハッキリ分らないの。姉さんだつたらあのくらゐな年輩の男の人の心がよく分るでせうけど、私には見當がつかないのよ」

「歲を取つた男はづるいからね。家の人だつてさうですよ。……三ちやんはケーさんにお金の迷惑も掛けないやうにして慾も得も棄てゝかゝつてゐるのに、その實意が先方へ通じなくつちや馬鹿らしいぢやないの？ いゝ加減あなたを釣つといて、いざとなつたら脊中を向けようつていふ腹なのかも知れないよ。當てにしないで用心しなきやいけないね」

「ケーさんは決してづるかないのよ。餘計な惚れしがらせなんかは云はないのよ。……姉さん一度ケーさんに會つて下さらない？」

「いやなことだね。お溫い所を見せつけられて溜るものぢやない」

「あら私眞面目なのよ。……ケーさんの樣子を通りがゝりにでも、姉さんに見て貰ひたいの。姉さんなら、私なんぞとはちがつて、一目見たら、あの人の價値が分るでせう」

さう云はれると、おそでもうかと得意になつて「全體ケーさんて云ふ人は何處の誰れだか、正體を明かして御覽な」

「姉さんが會つて吳れゝば明かしてもいゝわ」と云つて、三子はおそでが首づくのを見ると、次の室にゐて此方の話を耳を留めてゐるらしい上田に遠慮しながら、疊の上に書いて見せた。そんなことではおそでがよく呑込まないので、硯箱を持つて來て鼻紙に書いて、その人の家の道筋の圖取りまでもした。

「小綺麗ない丶家なのよ。奥さんが實家へ行つてゐた時に、私夜おそく庭木戸から忍んで行つて、夜明頃まで泊つたことが一度あつたの。夜中に私が鼾をかくと、ケーさんは私の耳を引張つちや起し〳〵するの」

「戯談ぢやないよ」おそでは睨みつける眞似をした。鼻紙に書かれてゐる名前は見るか聞くかしてゐるやうな氣がした。

「私姉さんにはまだ秘密で話したいことがあるのよ。姉さんに後立になつて貰つて一仕事して見たいことがあるんですよ。一日箱根へでも行つてゆつくり相談したいんだけど、姉さんは一人ぢや出られないか知ら。旅費は私の分は私が出してもい丶わ」

「箱根へでも何處へでもそのうち行つてもい丶けれど、當分は駄目らしいの。それよりも私一度この土地のお茶屋で遊んで見たいよ。お金が出來たら、三ちやんの家の人をみんな××へでも呼んで御馳走したいと思つてるんだけれど、こんなに貧乏ばかりしてゐちや駄目ね」

「お止しなさいよ、そんな無駄なことは。……それよりも、姉さんは此方へ越してゐらつしやることに極つたら、此方で一商賣はじめなすつちやどう？　私い丶ことを思ひついてるのよ」

「相談つてそのことなの？　あなたの思つてること大抵は察しがついてるさ」

おそでは意味ありげな笑ひを浮べた。上田を憚つて明らさまに口へは出さなかつたが、三子がかねて他所事のやうに話してゐたことを思出して、「叔父さんのお店のやうな爺むさい商賣のお手傳は私の性には合はないのだからね。俊一に手が掛か丶らなければ、もつと面白い稼ぎをして見たいのさ」と、ふと心が浮々した。色氣のある社會には、牛島が好まないために、長い間遠ざかつてゐるし、藝者屋だの料理屋だのを營むには、い丶手蔓もないし、資本も得られさうで

なかつたが、三子から聞いてゐる曖昧屋なるものは、自分の力でどもやつてやれないことはなさゝうに思はれた。地道な稼業ではうまい儲けの得られないことを長い間に知つて來た彼女は、普通つて來た社會が利益の多いところだつたやうに慾の上から思はれたし、第一いろ〳〵な男をあやつつたり、いろ〳〵な男に揶揄はれたりする樂みは、ともすると思出されてならなかつた。

「私には私の望みがあるのだしさ。姉さんは智慧もあるし腕もあるのに、面白い稼ぎもしないで、陰氣な顏してボンヤリしてちや損ぢやないの」

三子がおそでを唆かして歸つたあとで、おそでは上田を顧みて、今日は自分が俊一を病院へ連れて行かうと云つたが、

「俊ちやんは少し熱があるやうです。風邪をお引きになつたのでせう」と云つて、上田は檢温器を病兒の腋の下へ挿んだ。

（六）

長吉が公園から市街の方を散歩して、コーヒー店へ寄つたりなどして歸つた時には、病院の代診が上田に呼迎へられて、病兒の腰部の洗滌をして、發熱に對する注意をもして歸つて行つたあとであつた。おそでは代診に聞いたことを話して、

「昨日寒いのに停車場まで迎へに出たのがいけなかつたんです」と、昂奮して上田の不注意をもなじつた。

「さうばかりでもあるまいよ。」昨日停車場で見た時に非常に窶れてると思つた。」醫者は別段變つたことも云はなかつた

のだね」

「變つたことつて何も云はなかつたわね。上田さん」

「えゝ、何も仰有いませんでした」

長吉は寢臺の側へ寄つて、萎れて老人らしい相をしてゐる病兒の顏を見入つて、

「氣分が惡いのかい。身體の何處が痛いなら痛い、氣持が惡いなら惡いと云つて御覽」と訊ねたが、

「僕はどうもないんだ」と云つて、俊一は額を顰めて目を瞑つた。

「それならいゝが默つてゐちや駄目だぞ。上田さんでもお父さんでもお母さんでも、お前のために此處についてるんだから、安心して元氣を出さなきやいけないよ」

俊一は目を開けてうなづいたが、父の顏を見るのが煩さかつたので、再び目を瞑つた。……發熱とそれに伴ふ五體の疲勞によつて惱まされたゝめか、平生漠然として人の顏を見たり人の話聲を聞いたりしてゐた彼れも、今は　馴れた人間の顏も自分を苦めるものゝやうに思はれだした。父母の顏でも繪本で見た赤鬼や青鬼のやうに見えだした。彼れはふと手を伸して、寢臺の側の柱に懸つてゐる天狗の面を引たくつて疊の上へ抛出した。夫妻はそれを見て呆氣に取られた。

そこへ、隣りの主婦が冷し氷と病院の藥とを持つて來たので、上田は早速病兒に服藥させたが、俊一は顏や手を動かせて彼女の接近を避けるやうに努めた。竹間や三子の顏も目の前にちらつくやうで氣持が惡かつた。

「お藥はにがくつて？」と、上田が訊ねると、

「いゝえ、にがかない」と答へた。

「お薬を飲んで温かくしてれば直ぐに癒りますよ。お母さんは今夜は此處に泊るんだから安心してゐらつしやい」と、おそでが云ふと、

「みんなが默つてゐて呉れるといゝんだけれどな」と、俊一はこの別莊へ來て以來はじめてさう云つた。

夫妻は聲を潜めた。俊一は氷袋が額に載せられてゐるのも關はないで、顏を夜具の中へ引込めるやうにした。そして周圍の聲は暫く聞えなくなつたが、これまでに耳に觸れてゐる人々の言葉が棘をもつて一つ〳〵浮んで來た。さつき聞いてゐた三子と母親との話だつてハツキリ耳に覺えてゐたのだが、その話の意味がいくらか分ると、彼れの脆弱い頭には痛かつた。「風邪を引いてもあの子の身體は危い」と、上田がある日笠間に話してゐたことを思出して、お醫者さんや上田さんが云つてゐるやうに、僕が今風邪を引いてゐるのなら、僕は死ぬるかも知れないと、ひとりで考へられた。

「お前はとに角當分此方に泊ることにして、おれだけ歸つて行かう。俊一の病氣が若しも惡いやうだつたら、電報でも打てば直ぐにやつて來るよ」と、長吉はおそでに云つて、こま〳〵した家の用事をたがひにさゝやいたが、今日は病兒をうしろに夫婦の別居生活に關つた話をヒソ〳〵としてゐるのが、おそでには手頼りなく淋しく思はれて、しまひには、妻子を此處へ置いて自分一人東京で暮さうとする夫の心根を無慈悲の至りのやうに言ひだした。

「だつて、お前がさうしようと云つたのぢやないか。おれがこちらから毎日東京へ出勤する譯には行かないのだから、止むを得ないよ」と、長吉が穩かに云つても、おそではさういふ條理の立つた言葉にも耳を貸さないで、ブル〳〵首を振つた。

「今日の俊一は不斷とはちがふんです。いつか悲しい思ひをしなければならないと、何年もの長い間私だちが恐れてゐた日が來たのに、あなたは一人で東京へ行つて勝手な眞似をしようとしてるんぢやありませんか。あなたの顏を見てゐ

ればあなたがお腹の中で何を企んでるか、私にはちやんと分るんですからね」と、いきり立つて、姝のおよねの事まで持出して聲を荒らげた。

「ぢや、おれが店を止めて此處で何もしないでボンヤリ暮すのがお前の本望なのかい。俊一の治療代にも差閊へるやうになつてもいゝつて云ふのかい」

「私は今のやうな陰氣な貧乏暮しをするために、あなたの所へ來たのぢやないんですよ。若いうちを面白い目もさせないでこき使つて、俊一の身體に萬一の事があつたら、それをいゝ機會に私を追出さうと、あなたは思つてるにちがひないんだ」

二人の爭ひが募つてくると、上田は傍にゐるのがゐづらくなつて、そつと座を外して、隣りの家へ行つたが、他人がゐなくなると、おそでは夫の身體にむしやぶりついて惡對を吐きだした。殆んど一夜も離れないやうに同棲してゐながら、妻の肉體に嫌惡を覺えて疎々しくしてゐる長吉は、その代りに妻の惡對や取組合に苦しめられるのを我慢してゐたのであつたが、今夜は少しの理由もないのに、爭ひを起されたのを憤つて、拳をかためておそでの頰ぺたを毆りつけた。……十年の間お互ひに自分の望みを殺して同棲してゐた鬱憤を相手に對して一度期に晴らし合つてゐるやうに、二人は次第に五體にある力を盡くして爭つた。火鉢を引くり返したり、障子を倒すまでも止めなかつた。

上田や隣りの主婦が音を聞きつけて、そつと樣子を見に庭先へ來た時には、おそでは青褪めた顏して、ヒツ／＼と泣入つてゐた。そして、物心ついて以來、はじめてかういふ男女の爭ひを見せつけられた俊一が、ひとりで寢床を出て松葉杖突いて、寒い風の吹いてゐる戶外へ出ようとして、玄關先に倒れたのを、夫妻は知らないでゐた。



楠正成（五幕悲劇）

武者小路實篤

登場人物

楠正成
仝　妻
仝　正行
仝　正季
萬里小路藤房
快元和尚
和田正遠
湯淺入道
和田孫三郎
宇都宮某
長崎某
工藤某
其他大勢

序幕

正成の家の庭

（正成菊の手入れをしてゐる。正季登場）

正季。隨分美事に咲きましたね。之ではお兄さんが自慢なさるのも無理はありませんね。

正成。あんまり今年は出來がよくなかつた。

正季。之でもですか。

正成。もつとすばらしい立派なのが咲くはづで樂しみにしてゐたのだ。

正季。それでも皆おどろいてゐますよ。

正成。皆は感心してくれても、私には自慢は出來ない。だが、見てゐるとあきないものだ。陶淵明が菊を愛した氣持がわかるやうだ。これを見てゐるとなにもかも忘れてしまう。本を讀んだあとでこゝへ來てあつちの菊の世話をし、こつちの菊の世話をしてゐると本當に氣がのんびりする。

正季。お兄さんは何をつくつても本當にお上手ですね。この花壇のつくり方でも、何となく他の人とはちがつてゐますね。

正成。お前はそれに氣がついたか。之は私が道樂にやつてゐる城のつくり方によつてゐる。私は軍書をよむのが、實に好きなのだが、それでこの花壇の形も城の眞似だ。

正季。さうですか。道理で時々、花壇のつくり方がかはつてゐると思ひました。

正成。さうさ、いゝ考がつき次第、花壇の形はかへてゆく、其處が又たのしみなのだ。

正季。お兄さんが、源平時代に生てゐらしつたら隨分戰功をおたてになつたでせうね。

正成。どうだか。だが大概の戰爭の話をよむとはがゆい人間が多いね。あれでは兩方が負けつこしてゐるやうなものだ。敵に勝つ手を教へてゐるやうたものだ。

正季。日本では義經なぞはいゝ武將ではなかつたでせうか。

正成。他の人に比較したらましだらう。勢ひと云ふものを知つてゐたから。それに矢張り、平家の人達が安心しきつて油斷してゐる時に、一心に勉强してゐたから、矢張りそれだけのことがある。

正季。義仲の火牛の術も、田單の眞似ではありますがうまく功をさうしましたね。お兄さんがあの時平家にゐたらどうします。

正成。あゝなつては私でも駄目だらう。だがその前に地形や、敵の樣子をさぐらなかつたからいけない。前から知つてゐさへすれば逆に、火をやいて牛を逐ひ返すことも出來たらう。又落し穴を掘つておいてもよかつたらう。戰ひには傲る心が何よりいけない。油斷がなく、力が一つになり、皆が大將を信じ切ることが必要だ。狐疑は禁物だ。そして足が浮き出しては困る。

正季。義仲も、折角平家を都から逐ひ出しながら終りを完ふすることが出來ませんでしたね。

正成。德がなかつたからだ。人の心がはなれてしまつたからだ。戰ひに勝つことは出來ても、そのあと民の心をあつめることが出來なければ仕方がない。

正季。さう云へば北條ももう末路が近づいて來ましたね。世の中が物騷になりましたね。

正成。だがそんな話をしてゐるよりは、この菊に一杯水をやつた方がいゝ。籠城には何より水が必要だ。

正季。水を一杯くんで來ませうか。

正成。あゝ、くんで來ておくれ。

（正季、手桶をもつて退場。まもなく水を持つて登場）

正季。どれにやりませう。

正成。その箱までやつたから、その他のにやつてくれ。

正季。戰爭の話をしてゐると時のたつのを忘れます。

正成。北條高時は又和税を倍にしたさうだ。

正季。それで、犬を飼ふのださうですね。

正成。まさかそんなこともあるまい。

正季。それでも皆、犬に生れた方がいゝと云つてゐます。

正成。私も時々、何に生れたら一番よかつたかと考へて見るが、まあ何にゝ生れても面白いものはないね。まあ生れない方がいゝが、生れゝば矢張り人間だらうね。勿論他のものに生れたいと思つたつて生れることは出來ないが。

正季。人間にもいろ〳〵ありますが、私は自分を幸福だと思つてゐますよ。

正成。それはさうだ。私達は今時には仕合せすぎる。税は高いが、生活の心配をする必要はない。本のよみたい時は本が讀め、花壇の世話がやきたい時には花壇の世話が出來る。世の中の人が皆、私達のやうにくらせてゆけたら、何も問題はないはづだ。こんなに平和に、こんなに靜にくらしてゆけることを、私は本當によろこんでゐるのだからね。たゞ私の内の火が時々、何かことの起るのを待つてはゐるが、待ちぼうけをすることが出來れば、私達程仕合せなものはないだらう。

正季。お兄さんは戰爭をする夢をごらんにはなりませんか。私はよく見るのです。

正成。さうか。私も見ることがある。

正季。私はいつもお兄さんのお伴をして戰爭に出るのです。するとお兄さんはいつでもお勝ちになるのです。どんな大軍でもお兄さんと一緒にゆけば勝つのです。ですが私一人になるとから意氣地がなくなるのです。

正成。お前は私を迷信してゐてくれる。私も戰爭の夢で負けたことはない。こないだ大きな聲では云へないが、高時の軍勢と戰つて、もう少しで高時を捕虜にする處で目が覺めて、惜しい氣がした。もう少し目がさめなかつたら、あの君には無禮な、民には災ひの源になつてゐる高時をとつつかまへてやる處だつた。その時お前は菊水の旗をなびかせて先登に立つてゐた。その姿は更に立派だつた。あの夢はお前にも見せたかつた。

正季。それは本當ですか。お兄さん。お兄さんは私をそんなにまで信用してゐて下さるのですか。私はお兄さんの爲なら本當によろこんで死にます。

正成。それは夢の話しだよ。私達はあまりに呑氣なのでいろ／＼の夢を見て樂しんでゐるのだ。戰爭の恐ろしいことや、苦しいことなぞは忘れてゐる。

正季。私はお兄さんの持つてゐらつしやるその無限の智慧を本當に生かしてくれる時のくるのを待つてゐます。先日快元さんに逢つた時も、二人でそんな話しをしました。あの人は今度こそ北條がつぶれると云つてゐました。高時の振舞ひは度を過してゐると申してゐました。人心がすつかりはなれたと云つてゐました。

正成。私もそのことを考へてはゐる。しかしまだ北條の力に手向へるだけの力のあるものはあるまい。

正季。お兄さんの他には。

正成。せめて一萬の兵があつて、私の手足のやうに働いてくれたら。――まだ私にはそれだけの力がない。それに私はあまり野心が弱すぎる。向ふ見ずの性質がない。あまりにいろ／＼のことがわかりすぎる。そして天下をとろと云ふ

ことにあまり眞劍にはなれない。人民を幸福にはしてやりたい。だが私の生れでは、今の世では私の思ふ通りにはゆくまい。私は靜かに菊の世話でもしてゐる方が柄にあつてゐるだらう。

正季。もし泰平の世の中でしたら、お兄さんは平和をたのしんでゆかれるでせう。しかしお兄さんが立たなければ、天下がおさまりがつかなくなつたら、お兄さんは菊いぢりをやめて、劍をお取りになるより仕方がないでせう。

正成。時が來れば、私は力だけのことはする。だが、私はさう云ふ時が來てくれないことを一方望んでゐる。

正季。ですが、一方では又さう云ふ時の來るのを望んでゐらつしやるのでせう。

正成。まるで望んでゐないと云へば噓ついたことになるかも知れない。しかし私が出ないでもすむ仕事だつたら私は御免かうむるだらう。しかし他の人では出來ない、私が出なければおさまらない仕事だつたら、私はその時は菊いぢりはやめてしまうだらう。そしてこの片田舍に、私のやうな人間をそつとつくつておいたもの丶力を見せてやるだらう。私はいつでも立ち上る用意をしながら悠々と菊いぢりをしてゐる。其處にたのしみがある。嵐のくるのを私は恐れて許りはゐない。私の内には火が燃えてゐる。生たがつてゐる謀り事が胸の中に一杯になつてゐる。だが私は又平和をたのしむことを知つてゐる。

正季。お兄さん、私はかうやつて話してゐると力がうちにわいてきます。何かしたくつて仕方がありません。

正成。お前はまだ若いからだ。世の中はさわがしくなつた。官軍と六波羅の軍が戰ひを始めた。陛下が笠置寺に行幸になる、そんな風評がお前の若い血を燃やすのだ。

正季。お兄さんの血だつて燃えないことはないでせう。

正成。世がさわがしくなると皆の氣が荒くなる。皆ぢつとしてゐられないやうな不安を感じてゐる。

正季。私は時々お兄さんが菊いぢりしてゐるのがはがゆくなります。お兄さんは何處までおちついてゐらつしやるのでせう。

正成。私でもおちついてゐるのに骨が折れる時がある。

（正行、十位、同年の子供達と戰さごつこをして顯はれ、又走けながら退場。二人見送る。）

正季。お兄さん。笠置へお出かけになつたらどうです。私は人間を畜生よりもおとつたものにとりあつかう高時に我慢が出來ません。そして大君に手向つて、理不盡に陛下を島流しにしやうとする高時に我慢が出來ません。人民はますます税が高くなり、役人は貧乏人をふやすためにはたらいてゐてそして貧乏人の餓え死にするのを笑つてゐます。私にお兄さんの力があつたら、菊いぢりなんかしてゐません。私はお兄さんがきつと今に義兵をおあげになることを信じ切つてゐますが、私は時々はがゆいのです。

正成。お前はまだ若いからだ。私は自分の力を知つてゐる。陛下の信任があればともかく、私の方からたのんで出るのでは、私には何一つ仕事をすることは出來ないだらう。

正季。快元さんも、いつもはがゆがつてゐらつしやいます。ですがお兄さんのことですから、二人安心はしてゐるのです。

正成。まあ、安心してゐるがいゝ。しかしお前は戰がどの位いつらいものか知つてゐるか。そして北條の力がまだどの位い根づよいか知つてゐるか。三四十萬の敵を相手に三年間戰へるだけの豫算がお前には立つてゐるか。他人はたよりにはならない。私はまだ〳〵北條を倒すだけの力を持つてゐる人は出てこないと思つてゐる。

正季。その人が菊いぢりなんかしてゐるのですからね。

正成。今の私には五百の人間切りつかへない。それも陛下の信任を得ての話だ。そしてその人數の人間が三年の間食ふ兵糧の用意が必要だ。お前はたゞ戰ひさへすればいゝと思つてゐる。あとの責任は私にまかせて安心してゐられる。だが私はさうはゆかない。

正季。大塔の宮は不世出な英傑でゐられるさうです。又藤房卿は智と德を兼ねた方ださうです。

正成。だが半年とは三十萬の敵を引きうける力はあるまい。立つことはわけない。だが勝つ豫算が立たない間に立つたつてそれがなにゝなる。それよりは、靜かに菊いぢりでもしてゐる方がいゝのだ。

正季。ですがこの機會をのがしたら、もういくらお兄さんが偉くつても駄目です。高時を逆賊にすることの出來るのは今です。陛下の英邁と、大塔の宮の勇氣と、藤房卿の德とが一つになつてゐる今より他に、お兄さんの力の生る時はありません。今に官軍がまけてしまつたら、あとの祭りになります。私はこの菊をぬいてしまいたい。そしてお兄さんが劍をとつてお立ちになる姿が見たい。

正成。その時に私の一族はすべて死なゝければならない。あの正行も死ぬだらう。

正季。今の世に自分の生命のことなぞ考へてゐる暇はありません。

正成。私は死ぬより他に道のないことは嫌ひだ。それよりも菊いぢりの方がいゝ。その花の淸く美しいのを見ろ。戰爭のことなんか忘れてしまう。

正季。こんな花なんか、すてゝおしまいなさい。（ぬいてすてる。泣き出す）

（夫人登場）

夫人。快元さんが大へん立派なお客さんを一人おつれしていらつしやいました。あなたが菊いぢりしてゐると申しまし

たら、それは丁度いゝ、お客さんに菊をお目にかけたいと思つておつれしたのだとおつしやつてこちらにお客さんとおいでになりたいさうですが、どういたしませう。

正成。快元さんならかまはないからおつれしたらいゝだらう。

夫人。それならこちらへお通しいたしますよ。

正成。あゝ。

(夫人退場)

正成。正季、お前の好きな快元さんが來たさうだ。お客さんをつれて來たと云ふが、快元さんのことだからきつと氣樂なお客さんに違ひない。

(快元、藤房と登場)

快元。美事に咲きましたな。(會釋する)

(藤房は默禮する)

快元。お客さんが菊を拜見したいとおつしやいますから遠慮なく拜見します。

正成。どうぞ御遠慮なく、誠に耻かしい出來ですが。

快元。どうで御座います。私が自慢いたしましただけのことがございませう。

藤房。本當に聞いて想像したより立派なのにおどろきました。殊にあの楠の美事なのにはほと〴〵感心しました。

快元。どうです、お氣に入りましたか。

(段々菊を見るふりして正成達から遠ざかる)

藤房。氣に入つた以上です。陛下にお話ししましたらどんなにおよろこびになるかわかりません。私はまだこんなに一目見てたのもしく思つた人を知りません。

快元。それを伺つて私も安心いたしました。實際、あの人程、智慧のある人を私は存じません。

藤房。あの人は智慧許りではなく、誠實な點でも類のない人でせう。

快元。あなたのおつしやる通りです。

藤房。私は一目見てすつかり惚れてしまいました。

正季。お兄さん、今日は快元さんはどうかしてゐますね。それにあのお客さんはたゞの方ぢやありませんね。私はまだあんな立派な方を見たことがありません。

正成。私もあの人にはすつかり感心した。あの人が藤房卿だと云はれても、私は信用するだらう。私は自分の夢が本當になつて來たやうな恐ろしさを感じて來た。生れて始めて身體がふるへて來た。

快元。あなたのいらしつた本當の理由を知らせてもよう御座いますか。

藤房。どうぞ、あんな人が、この世にゐてくれたことは私達の運がまだつきない證據です。私達はどうしてもあの人を味方にしなければならない。

快元。大丈夫です。それではあの人になにもかも話します。

藤房。あのわきにゐる方は、弟さんですか。あなたの話してゐた。

快元。さうです。

藤房。それなら秘密にする必要はありませんね。

快元。大丈夫です。
藤房。それなら萬事、あなたにお任せします。
快元。承知しました。
正季。お兄さん。私もなんだかうれしいやうな怖いやうな氣がして來ました。
正成。まだはつきりはわからない。だが笠置からのお使ひかも知れない。
正季。私も、さう思ひます。快元さんがやつて來ます。
正成。快元の顏を見ろ。快元の背ろには運命がついてゐる。
藤房。(獨白)あゝ、あの決心した顏つき。始めて私は決心した男の顏を見る。この男を信用しないで、誰が信用出來やう。
快元。正成さん。正季さん。よく注意して聞いて下さい。私達は菊を見に來たのではなくあなた達を見に來たのです。私は一昨日笠置へお召しで出かけたのです。すると陛下から、このあたりに楠と云ふ姓をもつた男はないかとのおたづねがあつたのです。私はすぐ存じてをりますと申し上げましたら、陛下は思はず一膝のり出されて、お前はその男を知つてゐるかとおつしやるのです。至つて懇意にして居りますと申し上げましたら、どんな男だと性急におたづねになつたので、私の知つてゐることを正直に申し上げましたら、わきにゐた藤房卿を顧みられて、夢は矢張り正夢ぢやつたのうと仰せられてにつこり微笑まれました。藤房卿始め、その座に居りましたもののこらずおよろこびを申しあげましたら陛下には殊の外御機嫌よく、藤房卿にすぐ私と一緒にあなたの所へ行つて、あなたをつれてこいとの御言葉で御座いました。あすこにゐられるのが藤房卿で御座います。又陛下が御覽になつた夢と云ふのが大したものなので御座います。

です。陛下が紫宸殿の庭前のやうな處で大きな常盤木の下に三公百官を從へて坐つてゐらしつたのださうです。その木は殊に南の枝が榮へてをりましたが、その枝の下の上座に南向きに玉座がとつてあつたのださうです。そこには誰も座つてゐなかつたのださうです。陛下はそれを御覽になつて不思議に思はれると、二人の童子が出て來て陛下の前に跪づき涙をこぼし乍ら、申したさうです。今天下に御身を安らかにかくまへ玉ふ所は一所も御座いません。たゞその枝の下の南に向いた御座所だけは陛下のためにとくに私の主人が設けました席ですからどうか御心やすくあの席におつきになつて天下をお治め下さい。さう申して童子は天へのぼつていつたさうです。陛下はお目がおさめになつてから、木の南に南面してすはれと云ふのは楠の守護の下で、天下を治めよと云ふことだと云ふことをはつきりお覺りになつたさうです。それであなたの話しを私が申しあげた時、陛下を始め皆のもつが、夢のお告げの男はあなたにちがひないと思はれたのです。それで皆、無上によろこんだのです。あなたこそ天から授けられた方だと陛下を始め皆さう思ひ込んでおります。それで陛下はすぐ親任の御厚い藤房卿にすぐ私と一緒にあなたの所にゆき、そして是非つれてこいとの勅で御座います。あなたがもし御承知下さらなかつたら、陛下の御力おとしはどの位だかわかりません。そして他の人達もどんなに力をおとすでせう。藤房卿をおよびしてよう御座いますね。

正成。(靜かにだが聲がふるへてゐる)どうぞ。

快元。あの方は大層虚禮の御嫌ひな方です。それに今日はお忍びですし、何處に敵の内應者がかくれてゐるかもわかりません。それであなた達が藤房卿にたいしてあまり禮をあつくなさらないやうに、私と話す時と同じやうな態度でつきあつてほしいとのことで御座いました。どうぞそのおつもりで。

正成。畏まりました。どうぞよろしくおつしやつて下さい。

快元。御承諾下さつたと申しましてようございますね。
正成。藤房卿とよく御相談いたしましてからはつきり御返事することにしませう。ですが私の生命は陛下にさし上げることだけはお約束いたします。
快元。それを伺がつて、私は本當に重荷がおりました。ありがたう。（頭をさげる）
（快元、急いで藤房卿の方へゆく）
正季。お兄さん。ありがたう。先刻の失禮をお許し下さい。
正成。正季！私はお前の心をうれしく思つてゐたのだぞ。もう當分菊いぢりはやめた。今度又菊いぢりをする時は花壇の形もかはるだらう。お寺の形にでもするかなー。
正季。陛下の御らんになつた夢の話を聞いた時、私はもう……死んでもいゝ、死んでもいゝと思ひました。
藤房。結果はどうでした。
快元。およろこび下さい。生命は陛下にさしあげると申しました。
藤房。それでは一緒にすぐ、來てくれるのですか。
快元。それはあなたと御相談の上できめたいとおつしやいました。
藤房。さうですか。それでは菊を見ながらいろ〳〵お話しませう。
快元。（大きな聲で）正成さん、正季さん、この菊を一つ戴けないでせうかね。
正成。差上げませう。正季、一緒に行かう。
正季。はい。

藤房。あらたまつての御挨拶は致しませんが悪しからず。私のことは快元さんからお聞きのことゝ思ひます。私達は菊を拜見してゐるやうにして、いろ／＼御相談申したいと思ひます。

正成。畏まりました。正季、その菊をこれで切つておあげ。

正季。はい。

藤房。あなたは之からどうすれば一番いゝと思ひます。すぐ御一族をおつれ下さつて、笠置へ來て戴けますか。

正成。私の考へでは、私はそれも考へて見ましたが、それは面白くないと思ひます。

藤房。どうしてゞすか。

正成。私は田舍者にすぎません。皆さんの中に入つては、川にすみなれた魚が御殿の泉水に入れられたやうなもので、私の自由がきかなくなり、私のしたいことが一々出來なくなると思ひます。私はやはり住みなれた川で、其處の主として働きたく思ひます。其處では皆、私を信じてくれます。私の考はのこらず生きます。私の机で考へたり菊をいぢり乍ら考へてゐたことをそのまゝ實行しても誰も笑はないでせう。私のもつてゐるものは、私の世界ではのこらず生てくれますが、笠置では生きないと思ひます。

藤房。あなたのおつしやることは一々御尤です。それであなたのお力で四五十萬の敵をふせぐことが出來るとお思ひですか。

正成。出來るとは明言は出來ません。しかしどうにかして日本全國の同志が立ち上るまではもち耐えて見るつもりです。それに敵の力を一つに集めるよりは出來るだけ分つ方がいゝかと思ひます。戰には何よりも力が一つに集まることが大事です。私の過去に大きな武功を立てた歴史でもありましたら、皆さんが私の云ふことが腑におちてもおちないで

も、聞いて下さるかとも思ひますが、今の私ではどうしやうもないと思ひます。反つて私のゐることが意見を多くするにすぎないだらうと思ひます。私は自分の考へた通りをやつて見たいのです。

藤房。何處にたてこもるつもりです。

正成。私の考へではあの赤坂山がいゝかと思ひます。あすこは大軍を入れるには適しませんが、五六百の兵で守るのには適當してゐると思ひます。

藤房。もう前から義兵を上げる用意をしてゐらしつたのですか。

正成。さうです。私は狩が好きなやうな顔をしてこの五六年の間、この近處、いたる所を歩いて見ました。そして二つの處を撰びました。こゝですから申しますが、一つは千劔破と云ふ所ですが、こゝは千人あまりでまもるのに適當です。しかし今の私には、手足のやうに働くものは五百位いきり集める力はないでせう。それに敵は私を馬鹿にするでせう。又馬鹿にさせることが最初には得と思ひます。二度目にはその反對にうんと恐れさして見やうと思ひます。この花壇を見て下さい。之が私の考へてゐる赤坂城で、こちらが千劔破城です。赤坂城は敵がうんとあなどつてせめてくるのに都合のいゝやうにつくらうと思ひます。

藤房。こちらの城塀は二重につくるのですか。

正成。さうです。外がはのは敵がかぢりつきよぢのぼらうとする時、この繩をかう云ふ風に切つてやらうと思ふのです。

藤房。御名案です。

正成。敵が私を輕蔑してくれなければものにならないのです。しかし實際の場合にはまだ〳〵考へなければならないことが多いと思ひます。私の考へは、ともかく二三年籠城をして天下の義兵がならび立つのを待たうと思ふのです。今

の我々の力だけでは北條をたほすことは無理と思ひます。人心はことごとくはなれてをりますが、人々はまだ北條の力を恐れてゐます。そしてとても手向ふことの出來ないものと思つてゐます。私は小さい城で、手向へることを示すつもりです。五六百の兵で北條の大軍を防ぐことが出來るとわかれば、人々は自分達でも立ち上ることが出來ると思ふでせう。私は北條を恐れるにたりないものだと云ふことを天下に示して見せるつもりです。

藤房。あなたの御言葉を今の多くの人が聞いたらあなたを氣遂ひだと云つて笑ふでせう。だが私はあなたを信じ切つてゐます。一目見た時から、私はあなたを信じました。天は私達をお捨てになつてはゐないと云ふことを知りました。陛下はさぞおよろこびになるでせう。

正成。私は謙遜はいたしません。御信用には背かないつもりです。私は笠置に御加勢出來ないことはあなたからよろしく陛下に申し上げて下さい。そのかはり、私が生てをります限りは御心丈夫に思つて戴いてまちがひはないと思ひます。私はたゞ陛下のわきにあなたのやうな方がゐらつしやらないと困ると思つてゐました。それだけが氣になつてをりました。私はお世辭は申したくありませんが、本當のことを申せば、あなたがゐて下さるので私は安心して御加勢が出來るのです。陛下には私の心がわかつて戴けることを私は信じることが出來ました。私の力は生ることが出來るのです。

藤房。どうか、陛下と、國民のためにお骨折り下さい

正成。出來るだけのことはやつて見ます。

藤房。正季さん。あなたも出來るだけお骨折り下さい、

正季。（畏まり）はい。

正成。それでは家へ上つて少しお休みになつてはどうですか。
藤房。ありがたう。それでは快元さん、一寸休ませて戴いて又いろ〳〵菊つくりの御話でも伺ひませう。正成さん一緒に來て戴けますね。
正成。おともいたします。
藤房。正成さん。本當にいゝ世界を來させたいものですね。そして皆のよろこぶ顏を見たいものですね。
正成。本當に、私達が頭に描いてゐる、美しい世界を來させたいものです。
（正行、戰爭ごつこをして又出てくる）
藤房。あの大將になつてゐるお子さんはあなたのお子さんですか。
正成。さうです。
藤房。本當にいゝお子さんですね。あの子供さん達が大きくなる時分には、世の中も餘程よくなつてゐるでせう。
正成。本當にさうしたいものです。（皆退場幕）

第一幕

第一場

（赤坂城を望んで）

侍一。あすこに見えるのが赤坂城ださうで御座います。
大將。あれが赤坂城か。あの城で俺達に手向はうと云ふのか。あの小ぽけな城で。

侍一。さやうで御座います。

大將。隨分身の程を知らない奴だな。あれで天下の兵を一手にひきうけやうと云ふ身の程知らずにも程がある。あの城に何人位いたてこもつてゐるのだ。

侍一。五百人ださうで御座います。

大將。たつた五百人？それを味方は三十萬の大勢でやつけるのだから、兎がりをするやうなものだ。それで恩賞が戴けるのだからお前達は仕合せものだ。

侍二。本當に仕合せ者で御座います。

大將。一本の柱で傾く家をさゝへやうと云ふ者は、楠と云ふ奴のことを云つた言葉であらう。しかもその柱のか細すぎるのには、こつちの方で同情してやりたくなる。早く降參しない内に、兎狩をはじめるとしやうか。

侍三。一寸申し上げますが、楠と云ふ男は大へんな智慧者ださうで御座います

大將。はゝゝゝ。さぞ智慧者であらう。片手にのせて吹きとばすことが出來るやうな城に五百の人數でたてこもつて、大塔の宮が七萬の兵でもどうすることも出來なかつた味方をやつけやうと思ふのは、さぞかし自惚の強い智慧者であらう。狼に向ふ兎のやうな智慧者であらう。はつはつは。

侍一。本當に田舍にはよく身の程知らずがをりますものです。井の中の蛙とはあんな男をさすのでせう。きつとあの城をあれでも天下一の大きな城とでも心得てをるので御座いませう。

大將。蟷螂が龍車に向ふと云ふのは、こう云ふ男のことを云つたのであらう。はつはつは。今時分はさぞ、將軍に手向つたことを後悔してゐるであらう。なべのなかの魚の楠、今時分はふるへ上つてゐることであらう。身の程知らずの

いゝいましめぢや。必ず城にゐるものは生かしておいてはならないぞ。楠正成の首をとつたものには、厚い恩賞をとらせるぞ。それは功勞としてはとるに足らないでも、天下の見せしめとして不相應な褒美をとらせることを、皆のものに知らせてやれ。

侍三。兵法に小敵と云へどもあなどらずと云ふ言葉がございますが、あんな小さい城でおちつきはらつてゐる所を見ますと、何かたのむ所があると見えます。

大將。お前はいつもに似合はず臆病者になつたな。あのおちつきはたゞ自惚れから許り來てゐる。自分より賢いものにあつたことがないので安心してゐる。馬鹿な奴だ。

（侍四登場）

侍四。皆のものが、一刻も早くあの城を落し入れたがつてゐます。進軍の合圖をしてよう御座いますか。

大將。よろしい。一日も早くあの小ぽけな城をおとしてしまへ、そして味方の力を知らせて、天下のものが謀反することを思はなくするやうに骨を折れ。北條家は滅ぼすことの出來ないものだと云ふことを知らせてやれ。

侍四。はつ。

大將。それでは全軍を進ませることにしやう。皆のものも、この城をおとしぞこなつては、わざ〳〵關東から兎がりに來て、兎狩りを禁じられたやうなものだ。あの小ぽけな城、片手にのせてなげとばすことの出來る城を。一もみにもみつぶしてしまへ。全軍を進ませろ。

侍皆。はつ。

大將。こんなに呑氣な戰爭も滅多にやることは出來ない。皆遠慮はいらない。早くゆきたいものは早くゆけ。

第二場

（赤坂城の內、城壁のそば。正季、和田正遠、他に兵士數名）

兵士一。おゝ又あすこから敵がくる。
兵士二。一たい敵の數はどの位いあるのだらう。ひつきりなしにやつてくる。まるで蟻のやうだ。
兵士三。まだつゞいてゐる。皆、こつちを目がけて進んでくる。あゝ來てはいくら殺しても切りがないだらう。
兵士一。人間と云ふ奴はいくらでもゐるものだね。この小さい城をうつのに、あんなにかゝつて來なければならないのかね。
兵士三。なんだお前はふるへてゐるね。
兵士一。武者ぶるいだ。お前だつてふるへてゐる。
兵士三。お前の顏色はどうしたのだ。
正季。とう〳〵やつて來たね。之は面白くなつて來た。これだけくればはり合がある。
和田。本當に、之でこそ天下を敵にしたと云へます。男子にとつてこの位痛快なことは少ないでせう。之ではいくら負けても耻にはなりません。
正季。力が滿ちて來た。あのなかに猛虎のやうにとび込んでいつたらさぞ愉快だらう。
和田。殿樣にはきつといゝお考があるでせう。
正季。さう云へば、お兄さんは何處にゐらつしやるのだらう。一つよんで來やう。

正成。(登場しながら) こゝにゐるよ。敵兵が澤山來たさうだね。

正季。來ました、來ました。何十萬と云ひたい程來ました。本當に雲霞の如き大軍が爭そつてやつて來ます

正成。中々來るな。

正季。笠置がおち、大塔の宮が何處かへかくれてしまはれたので、敵の全軍がのこらずこつちへやつて來たのですね。

正成。かうこなければ面白くない。來れば私の思つた通りのことが出來る。

正季。あの軍勢はすぐこつちへやつて來ますよ。

正成。さうだ。やつて來さうだ。やつて來てくれゝば私の思ふつぼに落入ることになる。だがいくら馬鹿な敵でも、あれだけ人數が居るのだから、一人位いは智慧者が居てもいゝわけだが、矢張り居ないと見へるな。すぐやつてくる。之は思はないもうけものをした。さうだいよ〱やつてくる。

正季、正遠、三百の兵をつれて、あの山のかげにかくれてゐろ。そしてもし敵が矢を恐れずに堀を渡り出したら、敵軍のやうな顏して出て來て魚鱗がゝりでせめこめ、又敵がこの城をせめあぐんで引あげて甲冑をとつてやすんでゐたら、私がこの旗をふるから、そしたら、菊水の旗を松の嵐に吹かせてしづ〱と敵陣に近づき、敵が敵か味方かとあやしんでゐるすきを見て切り込め、その時城にのこつた二百人の仲間も皆敵陣へ切り込むだらう。さあ早く、敵に氣づかれないやうにゆけ。

正季。
和田。} はつ。

(二人退場)

正成。城にのこつたものは、いつも教へてあるやうに各自の場所について、そしていつも教へてあるやうに、私の合圖を待つて矢つぎ早やに敵を射殺せ。しかし敵が堀をわたつて切り岸につくまではどんなことがあつても靜かにしてゐろ。私の云ふことを聞けば必ず勝利を得る。私の云ふことを聞かないものは敵の内應者と見なすからさう思つてほしい。決して恐れてはいけない。敵も人間だ。私の云ふことさへ聞けば、百萬の軍勢も恐るゝに足りない。いつも練習してある手なみでやればまたゝくまに千人あまりは殺すだらう。敵はそれ以上向つては來まい。もし來れば外がはの城塀を切り倒せばいゝ。敵は味方を小勢としてあなどつてゐる。必ず安心して、いつも練習してある通りをやるより仕方がない。それが唯一の生る道だ。さあ、すぐに用意をするといゝ。私は見廻つてくるから。（退場）

（兵士達、各自弓矢をとりにゆき、自分の席につき、矢をしらべる。）

兵士一。どうだ。敵の數はます〳〵ふへるね。

兵士二。おどろいたね。

兵士三。大將の云ふ通りやれば大丈夫だらう。大將は天から陛下をおたすけする役目をおゝせつかつてゐるのださうだから。

兵士一。本當に大將は陛下のお前に出て、私が生てゐる間は御心やすくして戴きたいと云つたのださうだね。

兵士三。そしてその時陛下はお前だけがたよりだとおつしやつたさうだ。

兵士四。陛下は大將の守護さへおうけになれば、天下は又陛下のものになると云ふ、夢のお知らせを得られたのださうだ。

兵士二。和田殿もさう云つてゐらしつた。

兵士三。正季さまなぞの大將をお信じになること神樣のやうだ。
兵士一。それにしても、敵の多いのにはおどろく。
兵士三。大將は反へつてその方がいゝのだとおつしやつたね。
兵士一。それにしても少し多すぎる
兵士二。馬に乘つてゐる人間でも何千、何萬とゐる。冑に日光があたるので、見てゐるとまぶしくなる。
兵士一。よくも集まつたものだな。
兵士二。本當に少し氣持がよくない。たしかに味方が勝利を得るのだらうね。
兵士四。もうかうなつては仕方がない。大將の云ふ通りやるより仕方がない。病人は醫者の云ふ通りをきくより他、生る道はない。
兵士一。やつてくるな、本當にやつてくるな。
兵士二。いくらでもくるさ。
兵士三。皆、顏色がわるい。
兵士二。油汗がにぢみ出て來た。
兵士一。敵は段々近づいてくるな。
兵士四。この氣持は何とも云へないな。
兵士一。近づいてくる、近づいてくる。
兵士二。野も山も敵だらけだ。

兵士四。鼠一疋はい出るすきもない。

兵士三。大將は、あれは人間ぢやないさうだ。

兵士一。近づいてくる、近づいてくる。手がふるへる。

（正成急いで出てくる）

正成。弓や矢の用意は出來てゐるな。皆、私の云ふことを信じろ。私は神樣の申し子だ。私には毘沙門天がついてゐる。私は陛下が再び自ら政りごとをとられるやうになるために神からつかはされたものだ。私を信じろ、私の云ふことにまちがひはない。必ず今日の戰ひは味方の勝利だ。そして味方は最後の勝利を得るのだ。敵の人數におどろくな。神の御命令に背くのをおそれろ。

（正成急いで退場）

兵士三。ありがたい、ありがたい。大將は人間ぢやない、神樣だ。私は大將の後ろから後光がさしたのを見た。

兵士達。本當か、本當か。

兵士三。本當だ。たしかに見た。

兵士四。さう云へば私も見た。

兵士達。ありがたい。ありがたい。戰は勝つぞ。勝つぞ。

兵士三。もう何が來たつて怖くはないぞ。

兵士四。毘沙門天がくついてゐるのだからな。

兵士一。來たぞ、來たぞ。

（外でさけび聲聞える。正成あらはれる）

正成。討て、討て、討て。

兵士達。あたつた。あたつた。あたつた。あたつた。

正成。敵は逃げ出したぞ。足なみがくずれたぞ。うて、うて、うて。

兵士達。逃げたぞ。逃げたぞ。逃げたぞ。勝つたぞ、勝つたぞ。勝つたぞ。

（兵士達感極はまつて、おどつたり、だきあつたり、泣き出したりする。正成靜かに敵の方を見てゐる）

正成。靜かに。靜かにしろ。

（兵士達靜まる）

正成。敵はしりぞいた。そして今に休息するだらう。その時、山に行つてゐる仲間が、敵陣に切りこむだらう。その時、皆も私と一緒に敵陣を目がけて切つて出なければならない。しかしその時も、味方は必ず勝利を得、敵は算を亂して逃げるだらう。だが一瞬間の差で勝利と敗北はわかれるものだ。油斷をしてはいけない。皆刀の刄をしらべ目ぬきの樣子をしらべておけ。

皆。はつ。（刀をしらべる）

兵士一。殿樣。私達はもう生てはゐられないものと思つてゐました。きつと敵に今時分皆殺しにされてゐる時分と思つてゐました。

正成。馬鹿な奴だ。しかし敵の人數が多すぎるからさう思ふのも無理はない。

兵士二。本當にあの時は怖かつた。だがこんな嬉しいことはない。

兵士三。殿様のうしろから後光がさしたのを見てから私達は怖くなくなりました。
正成。静かに。敵は私達が追ひかけないので安心してゐる。逃げたのが口悔しいので、馬鹿にされないために、武裝をといてこつちに輕蔑を示してゐる。見てゐろ。今この旗をふると味方の軍勢が正季と和田につれられて靜かにおりてゆくから。敵は城の外に三百人の軍隊が出してあることは知らないから、味方でも來たと思ふだらう。見てゐろ。私の云ふことにまちがひはない。
（正成、小高い處にのつて旗を靜かに三度ふる。）
正成。そら、出て來たろ。
兵士三。はい。
正成。あのおちついた、靜かに進んでゆく姿を見ろ。あの風になびく菊水の旗の美しさ。あの小人數で、あの大軍に向ふのに一糸も亂れない大膽さ。お前達のあらはした功名にまけない功名をあらはさうと思つてゐるのだらう。敵はまさかあればつちの人數で自分達をせめにくるとは思つてゐないので安心し切つてゐる。どれ私達もそろ〳〵用意して、敵の荒膽をとりひしいでやらう。年よりのお前達二人はこゝをよく見はりしてゐてくれ。敵は大丈夫向つては來ないと思ふがよく氣をつけてゐてくれ。
兵士六。七はい。
正成。それではそろ〳〵用意をしやう。皆に城門に集まるやうに、知らせてくれ。私は城門に待つてゐるから。
（兵士六。七。の他退場）
兵士六。大將の大膽にはおどろいたな。

兵士七。おどろいた。それに高氏が大將の云ふ通りになるのだからおどろく。だが、いくら敵が安心し切つてゐても、あの大軍にあの小人數で切り込むのは大膽すぎる。大將はまだ若いから中々無鐵砲だ。だが負けたら大へんだ。
兵士六。正季さまや、和田殿ときたらなほ無鐵砲者だね。大將を信じ切つていらつしやるから、少しも心配せずに、あの小人數で平氣な顏して近づいてゆく、私達には出來ないことだ。
兵士七。さうさ、あの小人數であの大軍にこつちからせめこむなぞと云ふ考へは、あたりまへの人間には出來ない。とう〳〵敵陣に近づいたね。敵はまだ安心してゐる。
兵士二人。(同時に)あつ、切り込んだ。皆さわぎ出した。あの敵のあはて方。
(奥で正成の聲。)
正成の聲。城門をひらけ。かけ橋をおろせ。
(皆のさけび聲があがる。)
兵士六。味方の勝利だ。味方の勝利だ。あの敵のあはて方。鷹においかけられた雀のやうだ。味方の者のはたらき。劍をふり廻せば誰かにぶつかる。
兵士七。敵が逃げ出した。勝利だ、勝利だ。前代未聞の勝利だ。勝利だ。
兵士六。あの敵のさま。あのざま。あのざま。ありがたい。ありがたい。(平伏し)毘沙門天樣、ありがたう御座います。
(兵士七も平伏する。)

第三場

（赤坂城中の正成の室、正成、本を見てゐる。正季登場。）

正成。どうだ面白いことはないか。
正季。少しもありません。
正成。和田はどうしてゐる。
正季。力の出し處がなくつて困つてゐます。
正成。兵士達はどうしてゐる。
正季。退屈し切つてゐます。
正成。どうも敵をあまりおどかしすぎたやうだ。
正季。敵も手をかへ品をかへて攻めて來ましたがどうすることも出來なかつたので、とうとうあきらめたやうです。
正成。攻めて來ないのはいゝが、兵糧のつきてくるのには困つた。
正季。あの時、お兄さんがあまり農民のことを御心配なさつて、とりたてるのにあまり遠慮をなさりすぎたので、兵糧をあつめることが出來なかつたのは殘念です。
正成。そのかはり、人々は私達が勝つことを心から望んでゐてくれる。それは兵糧にはかへられない。人心を失つたら、戰に勝つたつて何にもならないからね。それは北條を倒して自分が又北條になるにすぎない。
正季。ですけど、兵糧がなくなつてはどうすることも出來ません。

正成。和田をよんで來てくれ。

正季。はい。

（正季退場、まもなく和田と登場）

正成。あと兵糧は何日分ある。

和田。あと四五日でなくなると思ひます。

正成。まだ四五日分はあるか。

和田。御座います。

正成。皆、腹一杯たべてだね。

和田。はい。

正成。敵はこの頃はすつかり用心してゐるね。

和田。はい。もう非常に恐れて用心してゐます。寸分もすきが御座いません。

正成。どうも戰さにまけるわけにもゆかないので、ついおどしすぎた。だが天下は廣いやうで狹いものだ。もう少しは敵に賢い奴がゐていゝはづだ。私の考へた半分も實行せずにすんでしまつた。しかしいくら私の智慧でも、米をすぐつくるわけにはゆかない。殊に戰ひは腹がへつては出來ない。敵はいつ又攻めてくるかわからない。油斷はないだらうが、なほ油斷をしないやうに注意しておけ。

和田。はい。

正成。私の考へでは、始めつからこの城にながくは籠城出來ないことを知つてゐた。しかし私にはあの時分はこの城に

たてこもる以上の力はなかつた。これよりも十分な用意をする力はなかつた。これ以上の事をすれば何處かに無理が出來て、それはあとのために面白くなかつた。しかし今の私はちがう。天下の兵を敵にしてこの小さい城にたてこもつて三十萬の大軍を玩具にして見せた。以前の私はこの近所の人に僅かの信用を得てゐたゞけだ。味方の兵士さへ、私の本當の力を知つてはくれなかつた。だが之からは私は天下の楠である。私は招かずして兵を得、兵糧も集るだらう。私にはこの城は小さすぎて來た。もうこの城を見すてるのも惜しくはない。だがこの大軍の圍みをやぶつて逃げ出すのは兵をそこねる許りだ。何かいゝ考へがあつたら知らしてくれ。

和田。あなたにいゝお考へがなければ、私達にあるわけはありません。

正成。正季！お前はどうだ。

正季。私もお兄さんにお任せして安心してゐます。

正成。感心な心がけだ。それなら私の考へを云はふ。私達は武力で勝つとは出來ない。相手が二三千ならどうにでもなる。又何處かに本當にたよりになる味方がゐてくれゝば此處までさへ逃げてゆけばいゝと云ふのならどうにでもなる。しかし私達のたよることの出來るのは、五百の兵と、その家族のものだけだ。あとは全部敵の味方だ。私達のたよりになるものは全部殺され、或は島流しにされた。私達のたよりになるのは私達ばかりだ。そしてすべての人はたゞ私達をたよつてゐる。今私達が死んだら、人々は北條の壓制に苦しむより仕方がない。それで私達は死なずに生てゆくことが必要だ。しかしそれだけ北條方にとつては私達を生かしておきたくないだらう。私達が生てゐる限り、彼等は私達をさがし出さないではおかないだらう。だから私達は生るためには死んだ眞似をしなければならない。それでその内、なるべく嵐の夜、私達は自殺したやうに見せかけ城に火をかけ、そして敵兵がそれに氣がついてかけつける時、

一緒に敵の風をして、まぎれ込んで逃げ出し、そして近所のものに私達が自殺したと云ふ噂をたてさせやうと思ふのだ。いくら北條でも死んだものは捜しはしまい。そして大軍は得意になつて引きあげるだらう。その後は、私達はいつでもすきな時に兵をあげることが出來る。お前達に異存があつたら云つてくれ。

正季。御座いません。

正成。和田、お前はどうだ。

和田。御名案と思ひます。

正成。それではさう云ふことにするから、明日でも兵士達にもさう云つておいてくれ。

和田。畏まりました。

正成。正季、碁でもやらないか。

正季。やりませう。（碁盤をとつてくる）

正成。和田も見てゆけ。

和田。はい。拜見いたしませう。

正成。今度は私は攻勢に出るよ。この城も敵にあづけておけばとられる心配はない。そしてこつちがとりたい時はいつでもとれるからね。その方が安心だ。それまでは今度は山に引こんで、木こりの眞似でもやるかな。それも又面白い。

（碁石をとり乍ら）樂みその內にありだらう。さあ始めやう。

（正季石をおく。）

第二幕

第一場

（正成の隱れ家。正成の妻、佛壇の前でお祈りをしてゐる。正成、櫻の枝をもつて登場。）

正成。もう櫻が咲き出した。すつかり春になつてしまつた。

妻。もう咲きましたか。本當に奇麗ですこと。

正成。本當に赤坂城をぬけ出たのが昨日のやうに思つてゐたが、もう半年近くなる。

妻。あなたが逃げていらしつた時程、うれしい時は二度とありませんでした。あなたにもうお逢ひ出來ないと許り思つてゐた所へ、思ひがけず歸つてゐらしつたので。

正成。あの時は實際あぶなかつた。流れ矢にもう少しでやられる所だつた。思ひ出してもぞつとする。死ぬと云ふことはなんでもないとも思ふが、お前や正行のよろこんでくれたのを見た時は、本當に生てゐてよかつたと思つた。

妻。今もゝの觀音經にお燈明をあげてお祈りしてゐた處です。一心稱名と云ふ所に矢がとまつてから、私は念佛をたやしたことは御座いません。

正成。不思議なこともあればあるものだ。私もあれから念佛をおとなへすると氣がやすまるやうになつた。私の生命は私の生命ではないと云ふことがはつきりして來た。

妻。かうやつて一生をくらすことが出來たらどんなにうれしいでせう。私はもう一度あなたと別れて生てゆかなければならないと考へるとどうしていゝかわからなくなります。

正成。戰國に生れた以上は仕方がない。早く平和な世の中にして、お前や正行と一緒にたのしく平和にくらせる世の中にしたいものだ。私は時々自分がもう少し馬鹿に生れたらよかつたと思ふ。私に力さへなかつたら、私は何にもしないでおとなしく幸福に生活が出來るのだがと思ふ。だが私はおとなしくしてはゐられない。私が立ち上らなければ、日本は亂れる許りだ。そして人々はいつまでたつても平和を樂しむわけにはゆかないだらう、

妻。あなたは又戰爭をなさらうと思つてゐらつしやるのですね。

正成。さうだ。私も男と生れた以上、自分のやりかけた仕事を仕上げるか、死ぬかどつちかを撰ばなければならない。平和にくらしたいとは思ふが、又一方、北條をたほして、自分の思ふ通りな平和な時勢をつくり出さないではおさまらない氣持もする。秩序のある平和、そして人々が自分の業をたのしんでやつてゆける世の中、私はそれをのぞんでゐる。

妻。私もあなたの妻ですから、あなたの御仕事の邪魔をしやうとは思ひません。ですけれど、この冬のやうなたのしい生活がつゞけられたら私はどんなにうれしいでせう。私は百姓の人達を見ると羨やましく思ひます。

正成。なんでもはたで見る程、樂しいものではない。

妻。ですが、毎日毎日一家のものが一緒に生活出來るのはたのしいものですわね。

正成。陛下を始め、藤房卿たちは私を本當に信じてゐてくださる。私は私の生てゐる間御心やすくおぼしめせとこの口ではつきり云つた。私はどんなことがあつても、自分の心にちかつたことはやり上げないわけにはゆかない。

妻。私にだつて、その御氣持がよくわかります。だから私は泣いても涙をお見せしないやうにしてをります。夜中に時々夢を見て泣いても、私はそれをお知らせしやうとは思つてをりません。ですが私は春がくるのを恐れてゐました。

あなたが、又出かけて、いつ歸つてゐらつしやるか、わからないことを考へると私は死にたくなります。左衛門の佐の局が藤房卿が笠置にゆかれたのをなげいて大井河に身を投げられた氣持もわかります。私に正行がをりませんでしたら、私も死になくなります。

正成。左衛門の佐の局の自殺されたことに私は同情はするが、あのことがあつたために藤房卿の心は淋しくなりすぎてゐる。私は藤房卿の心の内を察して左衛門の佐の局の死んだことがうらみたい氣がする。いつか又春が來ないとは限らない。私は必ず又春をこさせて見せる。その時、藤房卿は左衛門の佐の局が生きておてくれたらと思はれるだらう。あのことはよくなかつた。

妻。私はさうは思ひません。左衛門の佐の局にすつかり同情します。女の心は弱いのですから。

正成。お前は短氣を起こしてはいけない。お前が生てゐてくれるので、私は戰さに勝つよろこびが十倍されるのだから。

（正季登場）

正季。お兄さん。

正成。なんだ。

正季。本當に春らしくなりましたね。

正成。あゝ。もう櫻が咲いてゐた。

正季。兵糧も段々集まつて來ました。

正成。今度は千人の人が二年は籠城する必要がある。少なくも三四千石はあつめなければならない。

正季。大丈夫集まりさうです。陛下の爲ならよろこんでさし上ると云ふものが、ぞくぞく出て來ます。そしてあなたの

事は皆、神様のやうに思つてをります。生きてゐらしつたのかと泣いてよろこんでゐるものも御座います。

正成。さうか。しかしもう油斷はしてゐられないな。

正季。大丈夫です。皆北條を心から憎んでをりますから。しかしもう春になりました。そろ〱兵をあげる用意が必要かと思ひます。

正成。私はさつき山へ行つてい丶ことを考へたのだ。あの赤坂城にたてこもつてゐる湯淺入道は、毎月、月始めに國から兵糧をとりよせてゐるさうだが、私はそれを利用して一氣にあの城を奪ひとることを考へた。さうすると敵の注意は皆、私の一擧一動にあつまる。その時にお前は和田と一緒に千劔破の城を私の云つた通りに築き、そして兵糧を十分たくはへるとい丶。さうすればお前達は安心して手ぬかりのない用意が出來るわけだ。天水桶は出來るだけ多くつくるがい丶。又敵がかけ橋でもつかつて來た時の用意に油は十分たくわへておく方がい丶。その他私の云つた通り手ぬかりなくやつてくれ丶ば、今度こそ何十萬の兵が來やうが、一年でも二年でも三年でも兵糧のつゞく限りは籠城が出來る。その内には味方があつちこつちから立ち上つてくるだらう。そして敵は前後左右に敵を受けて、ついに滅亡するであらう。今はもう一息と云ふ所だ。處がその一息の役目をはたすことが出來るのは私達だけなのだから、手ぬかりないやうに用意しないといけない。私達が亡びてしまつたら、天下は治まる時は來ないであらう。國は常に二つの力の對立することで、いつも恐怖を感じないわけにはゆかないだらう。だから用意が十分出來るまでは私達は大事に大事をふまなければならない。

正季。赤坂城は一日でおちますか。

正成。大丈夫一日でおちる。敵の兵糧を途中で奪つて、味方を敵の武士や、人夫にばけさせ、そして米のかはりに物具

を入れて、城に運ばせるのだ。それを味方の兵が奪ふ眞似をするのだ。すると敵は兵糧を奪はれては大變と城門を切り開いて切つて出るにちがひない。その時味方はわざとまけたふりをする。すると敵はよろこんで兵糧をとつたつもりで城内に凱歌を上げて引きあげる。味方の兵士と共に。さうなればもう城はこつちのものだ。私達には味方はないから、城を遠まきにしてゐる時はない。又兵士を失なへば、かはりを得る見込もない。だから兵をそこねず、時をうつさず敵の城をおとし入れる必要がある。私はそれから方々をおどして歩き、出來たら京都の方までおどかして歩く。そして千劒破の城が出來上つたら、その時千劒破の城に引きあげるつもりだ。私の考へはわるくはないだらう。

正季。それはきつとうまくゆきます。私達は出來るだけその間に兵糧をあつめます。三年でも四年でも籠城出來るだけの兵糧をあつめます。

正成。米も大事だが、水も大事だ。またあの城をよぢのぼるにはかけ橋より他に道はない。その時、それをやきおとすために油が必要だ。十分たくわへるやうに注意をしてくれ。

正季。承知しました。

正成。あの城なら何百萬の兵が來たつて同じことだ。私は出來るだけ多くの兵を呼びよせて見せる。すれば他の方がそれだけお留守になるわけだ。それに兵糧だつて大したついへだ。さう長くは戰さをつゞけることは出來まい。私達は寢乍ら果報を待てばいゝことになる。

正季。本當にお兄さん。今度こそ私達が千劒破を出る時は陛下を京都にお迎へ出來、天下が平和をたのしむことが出來る時ですね。

正成。さうだ。今度こそ天下は本當に平和になるだらう。そして人々は泰平をよろこぶことが出來るだらう。そして租

税はやすくなり、民は安らかにくらせるやうになるだらう。陛下は私にそれを誓はれた。今笠置にゐられる氣持で天下をおゝさめになつて下さいと申し上げたら、仁德天皇を手本にして、民のためにつくされるとおゝせられた。私はその時の陛下の眞心を信じないわけにはゆかない。

正季。その時のことを思ふと力がわきます。藤房卿もさぞおよろこびになるでせう。

正成。あの人はもう人民のこと許り考へてゐる。あの人が居てくれるので私はどの位い氣丈夫か知れない。あの人と話をしてゐると私の決心が强くなり、私の心が淸まつてくる。

正季。本當に珍らしいいゝ方ですね。

正成。私は陛下のお前を下つた時あの人に天下を陛下の手におかへしゝて見せることを約束した。そしたらあの方はその時は、租稅をやすくし民を富まして見せることを約束された。二人は希望に燃えた。その時、あの人は泣いた。私も一緖にないてしまつた。私はあの時のことを考へると生命は惜しくなくなる。約束だけはどうしても果さなければならないと思ふ。

正季。それでは兵をおあげになるのはあと一ト月程、間がありますね。

正成。さうだ。あと一ト月程間がある。

正季。之から和田の處に出かけてその話しをしてよろこばしてやりませう。

正成。何處かに正行が居たら、歸るやうにさう云つてくれ。

正季。はい。（退場）

妻。あなたは一ト月たつと又お出かけになるのね。そして私は又正行と二人切りで淋しい日をおくらなければなりませ

んのね。

正成。それより仕方がないぢやないか。

（正行、登場）

正行。お父さん、唯今。

妻。何處へ行つてゐた。

正行。和田の叔父さんの處へ行つて來たの。和田の叔父さんが馬になつて坊がのつて遊んでゐたの。

正成。さうか。それはよかつた。

正行。お母さん腹がへつた。何かたべるものはない。

妻。すぐ御飯にするから待つておくれ。

正行。お父さん。いつ戰爭にゆくの、今度は坊もつれていつて頂戴ね。お父さんはいつでも戰さをすると勝つのですつてね。坊もお父さんのやうになりたいな。

正成。お前が大きくなる時分にはもう戰さなんかしなくつていゝのだよ。

正行。どうして。

正成。だつて、その時は、天下は皆、天皇陛下のものになつて、四海はおさまり、皆おとなしくしてゐればいゝのだよ。

正行。いやだ―、そんなこと。

正成。だがさうなれば、お前も私といつでも一緒に花を見たり、馬にのつたり、山へのぼつたりすることが出來るのだ

よ。そして一緒に兎がりしたり、川へ釣りに行つたり出來るのだよ。

正行。うれしいな。坊は釣をしたり、トンボとりをするのは大好きなのだ。お父さん今度、坊に奇麗な鳥をとつて頂戴ね。

正成。とつてやるとも、戰爭がすんだらな。

正行。早く戰爭がすむといゝな。

正成。今度戰爭がすんだら、お前に立派なお馬を買つて上げるよ。

正行。本當？お父さん。嬉しいな。嬉しいな。お母さん、お父さんが坊に戰爭がすんだら馬を買つて下さるつて、嬉しいな、嬉しいな。さうしたら馬にのつて、お父さんと一緒に山のぼりに行きませうね。

正成。あゝ、行かう。

正行。うれしいな。うれしいな。

妻。そんなにさわぐもんぢやありませんよ。

正成。まあ、さわがしておいてやれ。よろこべる間はうんとよろこばしておいてやれ。

正行。お父さんお馬になつてくれない。

正成。なつてやらうとも。

（正行、正成の上に馬のりになり）

正行。はい。はい。どう。どう。

妻。お父さんをそんなに馬なんかにしてはいけませんよ。

正成。よろこばしておいてやれ。油斷をしてゐるとはねるよ。

正行。お父さん。はねたつて大丈夫。はい。はい。どう。どう。はい〳〵。どう〳〵。

（妻、涙ぐみ乍らうれしさうに見てゐる）

第二場

（赤坂城の一部）

兵士一。敵がせめて來るぞ。

兵士二。恐れることはない。あれつぼつちの敵に何か出來る。

兵士一。だが相手は楠正成だ。どんなことを仕出かすかわからない。

兵士三。いくら楠だつて羽があるわけぢやない。この城壁をさうたやすくはとびこすわけにはゆかない。その内には六波羅から、援兵がくるにきまつてゐる。心配なことはない。

兵士二。だが今日は兵糧のとゞく日だ。うつかりして兵糧をとられたら大へんだ。

兵士一。さう云へばさうだ。厄介の時に敵が攻めて來たものだな。見つからなければいゝが。

兵士三。心配なことはないさ。兵糧をとられたつて、援兵はすぐ來るからな。

兵士二。相手が楠でなければ怖くはないが、あいつにあつては何んな謀計をつかうかわからないからこまる。

兵士三。お前はどうしてそんなに楠がこはいのだ。楠だつて三本手は持つてはゐまい、目玉だつて二つだらう。足は四本かも知れないが。あはつは。

（湯淺、侍を三四人つれて登城）

湯淺。矢張り、菊水の旗だ。楠にちがひない。しかしいくら楠だつて恐るゝには足りない。楠だつて鬼神ではない。私は楠の軍勢を一つやぶつて私の力を示してやる。だが敵がせめて來てもあまり遠くまで追ひかけてはいけない。敵にとつて不足のない敵だ。それだけ用心しなければならない。それにしても兵糧のつくのがおくれてゐるのが氣になる。

侍一。敵が方向をかへました。何かを見つけたのにちがひありません。

侍二。さあ大へんだ敵が兵糧を運んでくるのを見つけたのです。そらあすこから、兵糧を運んできます。

湯淺。さうだ、とうとう見つかつた。だが、つきそつてゐる兵士達も氣がついたらしい。逃げやうとはしないで、健氣に戰はうとしてゐる。

侍一。戰爭が始まりました。私達も助けに行きませう。

湯淺。さうだ早く三百人程つれて助けにゆけ。城は私が番してゐてやる。

侍一。お願ひします。それでは早速、助けにゆきます。

湯淺。早く行つてやれ。

侍一。はつ。

（侍一、退場）

湯淺。どうだ味方の兵士は中々强いだらう。さすがによりぬきの兵だけある。楠の兵も攻めあぐんでゐる。

侍二。本當に窮鼠猫を咬むと云ひますが、決心した兵士程强いものはありません。

湯淺。（沈默、暫く見てゐて）味方の勝利だぞ。うまくいつた。敵は逃げ出した。援兵も勇ましく走り出したぞ。敵は兩方からはさまれると大へんだと思つて逃げ出したぞ。楠と云ふ奴も聞きしに劣る臆病ものだ。さあ一つ迎へに行つて

やらう。

（湯淺、侍達と退場）

兵士一。どうだ、あれでも楠は偉いのかね。
兵士二。風評と云ふものはあてにならないものだな。
兵士三。それ見ろ楠だつてたゞの人間だ。目が二つ鼻が一つさ。あは、はつは。
兵士一。楠軍がせめて來たぞ。味方はあはて出した。だが大丈夫、兵糧はもう其處まで來た。楠はさぞくやしいだらう。
兵士二。あまり評判がいゝので少し高慢になつたのだらう。
兵士三。それにしてもあんまり利口ぢやないな。
兵士一。とう／＼まにあはなかつた。ざまあ見ろ。

（人夫達、俵をどん／＼かつぎこんでくる、湯淺達登場）

人夫頭。こゝでようございますか。
湯淺。御苦勞、御苦勞、十分休んでくれ。
人夫頭。へい。へい。ありがたう御座いました。本當にどうなるかと思ひました。
人夫一。本當におどろいたな。あゝ暑い。
人夫二。生命がないかと思つたよ。
湯淺。さぞびつくりしたらう。
人夫頭。本當にびつくりいたしました。さあ皆、こゝへつんだ／＼。

（皆、俵を持つて來ておいて汗をふく）

湯淺。御苦勞。御苦勞。敵はあきらめて引きあげたな。あぶなかつた。一寸の處だつた。

人夫頭。おかげで生命びろいいたしました。

湯淺。まあゆつくり休んだらいゝだらう。

人夫頭。ありがたう御座います。

湯淺。本當によかつた。幸先がいゝ。さあ向ふへ行つて休むとしやう。

（湯淺達退場）

兵士一。隨分びつくりしたらう。

人夫頭。びつくりしました。

人夫一。うまくいつたな。

人夫二。うまくいつた。

人夫三。思ふ通りになりましたね。

人夫頭。しつ。

人夫四。やつつけませうか。

人夫頭。まだ早い。

兵士三。本當にうまくいつたな。

人夫頭。ありがたう御座います。

兵士一。あぶなかつたね。

人夫頭。えゝ、もう少しでやられる處でした。運のいゝ時は運のいゝもので、おあつらへ向きにゆきました。

(人夫達笑ふ。兵士も笑ふ。侍登場)

侍。もう大丈夫で御座います。

人夫頭。よろしい。早くつかまへろ。殺すのだけは許してやれ。

(皆、兵士一、二、三、にかゝる)

兵士一。何するんだ。

兵士二。何するんだ。

人夫頭。聲を出すと首をはねるぞ。

(兵士達ゆはかれる)

侍。うまくゆきましたね。

人夫頭。うまくいつた。皆、自分のかゝりの俵をほどいて、用意をしろ。

人夫達。はい。

(皆、俵をあけてあはてゝ武装する。人夫頭、楠正成になる。皆小旗を城壁にのつてふる)

正成。門をあけろ。

(湯淺達とんで來る)

湯淺。どうしたのだ。

（湯淺達は拔劒した兵士達にかこまれる）

正成。（挨拶しながら）湯淺氏、始めてお目にかゝります。私は楠正成と云ふものです。長い間、城を番してゐて下さつてありがたう。その功によつて、皆さんをお許しします。何處でもおすきな所がありましたら、おいで下さい。

湯淺。あゝ、あなたが楠殿でしたか。さつきは失禮しました。どうぞ思ふ存分に私を處置して下さい。

正成。いや、私はあなたを憎みません。あなたと私とは假りに敵味方にわかれてゐますが、私達は手向はないものを殺しはしません。何處へでも勝手においで下さい。

湯淺。（正成の前に平伏し）今日から私達をあなたの臣下にして下さい。私はまだあなたのやうな人にあつたことはありません。

正成。ありがたう。それでは今後お互ひに助けあいませう。あなたの家來の人達の意見を聞いて下さい。手向ふものは殺します。行きたいところのある人は行かします。私の家來になりたいものはよろこんで家來にします。

湯淺。お前達はどうだ。

侍達。（正成の前に跪づき）どうか家來にお加へ下さい。

正成。ありがたう。あの人達の繩をほどいておあげ。私達は一寸前までは敵だつたが、今後は仲のいゝ味方だ。こんな嬉しいことはない。それではあつちへ行つて休むといたしませう。

湯淺。はい。

（皆退場。兵士一、二、三、一番おくれる）

兵士二。どうだ。どうだ。楠正成は矢張り偉いだらう。

兵士一。本當に感心し切つた。
兵士三。目は二つ、鼻は一つだが、俺達とやりは賢いやうだ。
兵士二。あたりまいよ。今日から楠の家來だ。天下に敵なしだ。ありがたいぞ。ありがたいぞ。
兵士一と三。うれしいぞ。うれしいぞ。

第三場

（天王寺内、正成一人燈の下で何かかいてゐる。和田孫三郎、湯淺登場）

和田孫三郎。殿樣、敵がまた攻めて來たさうで御座います。
正成。さうか。
和田孫三郎。宇都宮が大將で六七百騎ださうです。今夜は柱松に陣をとつてゐるさうです。小人數ですから、今夜逆襲して追ひ散したらどうかと思ひます。先日隅田高橋の五千の軍勢を一やぶりにやぶりました勢ひでは今度は子供を相手にするやうなものと思ひます。
正成。さうではない。この前は敵が大軍なのにほこりを持つてゐた。それでついせめこんではならない所にせめこんで來た。だから陣形がくづれて立てなほすひまがなかつた。今度は小人數で來た處を見ると敵は非常な決心をしてゐるにちがひない。戰つてこの一戰に勝つのはわけはないであらうが兵を多くそこねては味方にはつゞく兵士がない、敵にはいくらでもあとがある。入れかはり、ひつかはり出て來られては、味方はついにはつかれて最後の勝利を得ることはむづかしいであらう。私達は兵を大事にしなければならない。そして小敵に勝つた所が名譽にもならない。今度

は一度勝ちを先方にゆづつて、こゝを戰はずにひきあげやう。宇都宮は坂東一の弓矢とりで、それに從ふものは皆、生命知らずの連中だ。だからこの際私は一度退いて、そして相手が氣づかれし、臆病風がふき、生命が惜しくなるのを待つて戰はう。私には二三日の内にはこゝを一人の兵士の生命をそこねずに、とりもどすことが出來ると思はれる。まあ萬事を私に任せて、安心してほしい。私達はこゝでは敵の注意を集めるだけが仕事だ。千劍破の城が出來るまで、私達の實力を敵に買ひかぶらすことが必要だ。すると敵は私達を恐れて、大軍をさしむけるだらう。そしてそのために鎌倉や、六波羅の守りが薄くなり、敵の費がます〳〵多くなつて、遂に内からくずれるやうになるだらう。それには無理な戰ひをして、勝つてもこつちの兵士の生命を多く失つてはならない。大敵を恐れず、小敵をあなどらずと云ふのはこのことだ。敵は心を一つにし、生て歸るつもりのものはない、たゞ一人でも多くを殺し、差しちがへて死ぬつもりで來ておるにちがひない。そんな奴にぶつかるには味方の生命は大事すぎる。さあ、之から一つ逃げ出すことにしやう。そして相手をよろこばして、生ることのたのしさを知らせてやらう。そしていつ私達が攻めこむかわからないので、たへず不安をうけるだらう。大軍でないから、用心しすぎる。人間の神經や、力には限りがある。其處をどかして戰はずにひきあげさしてやらう。明日の晩から、山々の峯には松明はとぼるだらう。さて〳〵美しいことで御座らう。萬事は私にまかしてくれるだらう。

和田孫三郎。おまかせいたします。

湯淺。おまかせいたします。

楠。それなら之から逃げるとしやう。宇都宮はさぞよろこぶだらう。うんとよろこばすがいゝ、すると力がなくなり、生命が惜しくなるから、それではすぐ逃げるとしやう。

二人。はい。

第四場

（天王寺の庭、夕火をたいて宇都宮他四五人あつまつてゐる）

宇都宮。楠の奴はちつとも出て來ないな。まるで幽靈のやうな奴だ。毎晩山々にあかりをつけて、今にもせめよせさうな姿を見せて、さて來たかと思ふと、松の音と、波の音ばかりだ。

侍一。殿樣の武勇のほまれにおどろいたので御座いませう。

宇都宮。俺はこの矢で楠を射殺してやるつもりだつた。生命冥加のある奴だ。

侍二。京都では楠に勝つことが出來たのは殿樣許りだと云つて、大層な評判なさうで御座いますね。

宇都宮。そんな話だ。

侍三。凱旋なさつたら京の女たちはさぞさわぐでございませう。

宇都宮。それにしても一戰して、この矢であいつを殺してやりたいものだ。あいつを殺しさへすれば天下に恐るゝものはない。何しろ赤坂の城では三十萬の軍勢を玩具にして見せたと云ふ奴だから、敵にとつて不足はない。早くせめて來てくれゝばいゝのに。篝火だけでは相手にしやうがない。今日も亦今に篝火をたくだらう。

侍一。本當に氣味の悪い、幽靈のやうな敵ですね。

侍四。あ、火が又つき出しました。

宇都宮。一つ、二つ、三つ。おゝついた、ついた。おゝ美しいことだ。

侍四。段々近くになりました。
宇都宮。おどろいてはいけない。敵の策略なのだから、火の數は毎晩々々ふへてゆくがたゞおどかしにすぎないのだ。幽靈にすぎないのだ。
侍一。それにしても今日の火は又かく別です。敵は何萬ゐるかわからない程です。
宇都宮。さすがに楠だ。中々味なことをやる。臆病ものゝすることはちがつたものぢや。
侍四。海にも、山にも、野にも、林にも、楠に心をよせるもので一ぱいと見えます。
宇都宮。臆病者奴。弩をふるはすな。
侍四。正體のわかつた敵なら恐れはしません。
宇都宮。油斷をするな。火は近づいて來たぞ。皆は十分に用意してゐるだらうな。
侍一。えゝ、十分に用意してをります。
宇都宮。楠と云ふ奴はあてにならない奴だからな。居ると見せて居ず、居ずと見せて居る奴だからな、來るやうな顏して來ないかと思ふと、其處にのこつと來る奴だから、油斷をしては駄目だぞ。
侍一。大丈夫です。

（紀と清原登場）

紀。どうです、今日は又特別に火がもへますね。隨分近づいたやうですね。
宇都宮。それがあてになればいゝのだが、楠のことだから自分は呑氣に何處かで休んでゐるのかも知れない。また何處か他を荒してゐるかも知れない。さうかと云つて安心してゐるといつくるかも知れない。こんな幽靈のやうな敵を相

手にしたのは始めてゞさすがの私もどうしていゝかわからなくなつた、

清原。本當に皆、困つてゐます。疲れ切つてゐます。犬の遠吠、松風の音、波の音でも一々敵が來たのかと思はれて、神經が休まりません。死ぬのは皆平氣だが、之には閉口だと申してをります。皆、つかれて來まして、戰ふ勇氣もなくなつて來ました。いくら勇氣づけても、死んでもいゝと云つて居眠りしたり、都に歸りたいなぞと云ふ奴まで出て來ました。敵はきつと呑氣に休むだけ休んでゐるのですから、このまゝでは味方がやられるのは火を見るよりたしかと思ひます。もう見切り時で、之からそつと凱旋されたらどうかと思ひます。さうすれば、敵を追ひはらつたから歸つて來たと云へば、それで面目は十分たつと思ひます。

紀。もうこのまゝではとても皆、辛抱が出來ないと思ひます。

宇都宮。どうだ皆、幽靈と戰ふか。それとも歸るか。

皆。お歸りになる方がいゝと思ひます。

宇都宮。それでは歸るとしやう。

清原。皆もさぞよろこぶと思ひます。

宇都宮。楠と云ふ奴は本當に風のやうな奴でつかむことが出來ない奴だ。

清原。それでは皆に知らせて來ます。

（二人退場）

宇都宮。それでは都に歸ることにしやう。

侍達。はい。

（奥で歡呼の聲聞える）

宇都宮。皆、よろこんでゐるわい。それではいそいで引あげやう。

（皆退場。暫くして百姓四五人登場）

百姓一。とう〳〵引あげたな。逃げるのも早いな。

百姓二。楠様はなんと偉い方だらうな。

百姓三。私達の家をお燒きになるやうなことはなさらないし、お逢ひしても丁寧ないゝ方だね。

百姓四。本當にいゝ方だ。逃げたことを早速お知らせしやう。

百姓一。なにもう御存知だ。うちの息子がすぐ馬を走らせたゞからな。

百姓二。それぢやもうぢきいらつしやるな。

百姓一。あゝもういらしやる。本當にあの方はおとなしい、いゝ方だよ。おらのはなれをおかししただが、百姓の眞似もお上手だつたよ。そして今日明日には又こゝへ歸るのだと云つてゐらしつたよ。

百姓四。うはさをしてゐれば影がさすと云ふがもういらしつたよ。

（正成、湯淺、和田孫三郎、その外五六人つれて登場）

正成。とう〳〵又歸つて來ましたね。（百姓を見）隨分御世話だつた。おかげで勝つことが出來ました。ありがたう。

百姓達。お目出たう御座います。

正成。ありがたう。

湯淺。火が奇麗ですね。まるで芸のやうです。

和田孫三郎。本當にこんな美しい景色を見たことはありません。

正成。今、あの山の上で火が盛んに燃えてゐるでせう。今にこつちから合圖をすると、あれが消えます、すると方々の火が一度に消えます。見てゐらつしやい。(侍達に)お前達の持つてゐる松明で、あの峯に向つて、頭の上に三つ輪をかけ。

侍達。はい。(松明で頭上に三つ輪をかく)

(山の火消える、他の火も消える。)

正成。さあ家に入りませう。

(侍急いで登場。正成に書面を渡す。正成見る)

正成。やつと千劒破の城も出來たさうです。

(百姓達に)皆さんどうもありがたう。いつまでもおたつしやでゐて下さい。

百姓達。御機嫌よう。御身體をお大事に。

正成。ありがたう。(正成達退場、百姓達見送る)

第三幕

第一場

千劒破城內

(正季、和田正遠、正成を案內して登場)

正成。(方々調べ乍ら)よく出來た。之なら三年はおろか、四年でも、五年でも、日本中を相手にしても戰ふことも出來る。

正季。お兄さんはおくたびれになつたでせう。

正成。大丈夫。昨日はぐつすりねたので今日はもうすつかり元氣になつた。

正季。お兄さんが方々あれ廻つてゐらしつたので、味方も方々から頭をもたげたやうですね。

正成。大塔の宮を始め、赤松入道、平野入道達が兵をあげた。しかし之等もたよりにするわけにはゆかない。敵はあまりに大勢だ。しかしこの城だけはおとすことは出來まい。私が考へに考へたこの城をおとすことが出來るやうな人があつたら、私はよろこんでその人の家來になるだらう。だがそんな人が人間の内にあるとは思へない。私は人間の力を知つてゐる。人間には出來ることゝ出來ないことのあるのを知つてゐる。この城なら兵糧と水がつゞく限り、そして内應者が出ない限り、落ち入ることはないだらう。そして兵糧は十分にあり、水は又ありあまる。そして内應者は出るとは考へられない。この城から出る時は、陛下を京都にお迎へする時であらう。

正季。聖德太子樣のおかきになつた未來記には陛下が來年には京都におかへりになり、そして今度こそ本當に天下を親ら御政めになるとかいてあつたさうですね。

正成。かいてあつた。

正季。皆、それを信じ切つてよろこんでをります。

正成。可愛いゝ奴だ。今にあすこあたり、人間が一ぱいになるだらう。敵はたゞ私達許りを恐れ、味方はたゞ私達許りをたよりにしてゐる。赤坂城にこもつた時とはちがつて今度は更に大軍でせめよせるだらう。だがこの城はおとすことは出來まい。

正季。この前のやうに人が一ぱいになり、旗がなびき、甲冑や武器がかがやき、馬が嘶く樣は見物で御座いませう。

正成。さう云ふ景色が見られるのも半年ぶりだな。あの木かげ、山かげ、谷あいに、いろ〱の陣幕がはられ、旗がなびき、人が往來するのはさぞ美しいだらう。こゝから見下ろすと、人間は虫けらのやうに見えるだらう。だが恐しい敵とは見えず、可愛いゝ虫のやうに見える。

正季。この谷々は今に人間の死骸にうずめられ、血は流れて川をなすでせう。

正成。兵隊は可哀さうだがやむを得ない。この土地はさぞ肥へるだらう。さあ殘つた所を見せてもらうか。

正季。どうぞお調べ下さい。

（二人退場）

第二場

（前と同じ場所、兵士二人見張りしてゐる）

兵士一。寒いね。

兵士二。寒い。

兵士一。いやな風がふく。

兵士二。本當に冬になつた。

兵士一。いつまでこんな日がつゞくのだらう。もうあき〱してしまつた。

兵士二。本當だ。毎日〱同じ日がつゞく。

兵士一。戰にはいつも勝つが敵は益々ふるへる許りだ。

兵士二。そして味方は少しづゝへつてゆく、昨日まで元氣にしてゐた人間が一人々々死んでゆくのはいやなものだ。

兵士一。俺達の仲間も段々へつたね、

兵士二。敵の何百分の一切り死なゝいが、しかし赤坂城にたてこもつてからのこの二年の間には仲間も三四十人は死んでゐる。

兵士一。もつと死んでゐるだらう。山田も死んだ。江崎も死んだ。木田、高崎、大井、大村、

兵士二。もう數へるのはよしてくれ、隨分死んだな。

兵士一。生てゐるのが不思議な位だ。

兵士二。本當に江崎はいゝ奴だつたな。

兵士一。山田も、木田もいゝ男だつた。

兵士二。大井が生きてゐたら、こんなに退屈しないですんだらう。あいつは話がうまかつたからな。

兵士一。死んだ奴の夢を見る程いやなことはないね。昨日も山田にあつた夢を見たが、もうぢき君もくるね、なぞと云ひやがつた。ぞつとしてしまつた。

兵士二。本當に死んだ奴の夢を見ると氣持のわるいものだ。だが江崎の夢見たら泣いてしまつた。

兵士一。お前は江崎とは仲がよかつたからな。

兵士二。あんないゝ奴はない。

兵士一。本當にいつになつたら故郷に歸れるのかな。

兵士二。歸る前には死んでしまふだらう。

兵士一。そんな縁起のわるいことは云はないでくれ。俺は百までは生きるつもりなのだからな。

兵士二。あはゝゝ。慾の深い奴だな。

兵士一。そんならお前はすぐ死んでもいゝのかい。

兵士二。俺も死にたかないよ。

兵士一。同じこつちやないか。おゝ寒い。

兵士二。之は今に雪が降つてくるかも知れない。

兵士一。雪模様だ。へんに寒いな。

兵士二。大將の云ふやうに、味方が出てくれるだらうかね。なんだか俺には益々敵がふへる許りに見へるがね。

兵士一。それでも大將は、來年になると天皇陛下がおかへりになると云ふ豫言の本を御らんになつたさうぢやないか。

兵士二。だが大將のことだから、もしかしたら、つくり話かも知れないぜ。どうも俺はあの場にゐたが、あとで考へると、あやしいと思ふのだ。坊主とぐるになつて、あんな本をつくつたのぢやないかと思ふよ。大將は中々喰へないからな。

兵士一。さう云へば人を瞞すことはうまさうだな。

兵士二。俺達は今に處々から味方が出て、北條をぶつたほしてしまうと思つてたのしみにしてゐるが、俺は中々北條は倒れないと思ふのだ。何しろ今迄、いろ〳〵偉い方が出て、何萬と云ふ軍隊で戰つても一度も勝てたことはないのだからね。赤坂城だつておちてしまつた。吉野もおちてしまつた。もうこの城より他に味方は一人だつてゐないのだ。大將一人力んだつて何にもならないと思ふよ。

兵士一。だが俺は大將だつて、馬鹿ぢやないから負けるにきまつた戰ひはしはしまい。何か勝つ見込があるのだらう。

兵士二。それが味方が方々から出てくれて、敵の本陣があぶなくなるのを待つと云ふのだが、それがいつのことかあてにはならない。俺達は千人たらずで、何百萬と云ふ限りのない敵を相手にたゝかつてゐるのだから、こんなに張合のない仕事はない。

兵士一。そんならどうすればいゝと云ふのだ。

兵士二。他にしやうがないから、こゝにゐるより仕方がないが、心細い話だ。

兵士一。赤坂をまもつてゐた連中は、降參したら一人のこらず殺されたさうだね。

兵士二。そんな話だ。何處から聞えて來たのか。降參したがるといけないと思つて大將が又つくつた話かも知れない。

兵士一。俺はそれは本當と思ふよ。敵の捕虜の話だからな。

兵士二。どつちにしても俺達はこゝにゐるより仕方がない。だが、心細い話だよ。

兵士一。お前と話してゐると段々心細くなる。俺は大將の云ふことを信じてゐるのだ。

兵士二。信じられる者は仕合せだ。大將は今にも方々から義兵がむらがり起つて、幕府をたほしたり、六波羅をたほしたりすると思つてゐる。だが幕府だつて、六波羅だつて馬鹿ばかり集まつてはゐまい。自分のことだから大將が考へるよりは考へてゐるだらう。

兵士一。だがこの大軍ぢや、幕府や、六波羅にはさぞ兵士が殘つてゐるとは思へないね。

兵士二。馬鹿だな、貴樣は、天下は廣いものだ。人間はいくらでもゐるよ。

兵士一。さうかな。人間でどの位ゐるものだらうね。

兵士二。いくらだつてゐるね。もう俺達の手だつて五六千の人は殺したらう。だが少しはへつたかと思つて見ると、へ

つた所でなくふへてゐるのだからな。

兵士一。さう云やあ、本當にさうだ。今度は少しへつたらうと翌日たのしみにして起きて見ると、ふへてゐるのでがつかりする。

兵士二。それ見ろ。いくら殺したつておいつくものぢやない。そして味方は五六百も殺されて見ろ、もう手も足も出せやしない。千人殺されたらおつりが出る。

兵士一。まあ、そんなことを云つておどかすなよ。だがいつになつたら、俺達は故郷へ歸れるのかな。

兵士二。あの世に行つたら歸れるだらうよ。だが本當にあき〳〵したな。寒い風がふく。

兵士一。本當にいやな風がふく。

（正季、和田正遠登場）

正季。中々寒くなりました。

和田。本當に冬になりました。

正季。敵は益々ふへてきましたね

和田。百萬にはあまるさうですから。

正季。敵の身になつたら、早くこゝをおとして故郷に歸りたいでせうね。

和田。隨分いろ〳〵のことを敵もやつて見ましたね。

正季。だが兄の智慧はその上その上とゆくのですからね。

和田。本當に何處まで智慧がおありだかわかりませんね。

正季。さうです。孔明、張良も兄にはおよばないでせう。今度は敵がどんな方法でせめてくるか見物です。

和田。敵はもうすつかりこの城をせめおとすことは斷念したやうですね。水ぜめでしくぢつたので、今度は兵糧ぜめでもするつもりでせう。

正季。あいつたちの食ふ米は大したものでせうね。

和田。日に少くも百萬として六千石は食ふでせう。私達の千日分を一日で食ふわけですからね。

正季。大した費へですね。

和田。其處があなたのお兄さんのつけこみ所なのです。だから敵の兵がへること許り恐れてゐらつしやいます。

正季。さうです。兄は敵がふへる度によろこんでゐます。

和田。かうなつてはどつちの兵糧がながくつゞくかと云ふことで勝負がきまります。あいつ達を養はなければならない、百姓たちは隨分氣の毒です。

正季。今の世に生れて、氣の毒でない人間があるでせうか。いくら高時でも枕を高くしてねてゐるわけにはゆかないでせう。夢のなかに菊水の旗が忍び込まないともきまらないでせう。

和田。それはさうです。百萬の人數でもおとすことの出來ない城が一つあると云ふことはどんなに彼等の傲りを傷つけることかわかりません。

正季。それに反して味方にとつてはこの城がおちないと云ふことは唯一の力になるでせう。

和田。それだけになほ彼等はこの城がおとしたいので、兵をどん〳〵ふやすのでせう。しかしふやせばふやす程、自分達にとつて危險なことは知らないのです。

正季。其處が運のつきと云ふものですね。それにしても、北條の力もともかく大したものですね。之だけのものをこゝに派遣してまだ、鎌倉や、六波羅に多くの兵を養つてゐるのでせうから。

和田。それは日本全國をともかく押えつけてゐるのですから。しかし私達の同志は大きな川のやうなもので、全部を押へつけずに、一部許りを押えつけるのに夢中になつてゐて、そうすな所が出來ると、何處からか堤をやぶり出すにちがひありません。一つ堤か切れ出したら、もうしめたものです。

正季。堤はやぶれさうで中々やぶれませんね。

和田。中々、何事も思ふやうにはゆかないものです。

正季。本當にさうです。そして思はない時に道がひらけるものですね。

和田。ともかく私達は油斷は出來ませんが、たのしみです。希望が持てるのですから。

正季。本當にさうです。兄が死なゝい限り、私達は希望をもつことが出來ます。

和田。さうです。あなたのお兄さんがゐらつしやる限り私達は希望は失なうことは出來ません。

（正成登場）

正成。お前達はこゝにゐたのか。

正季。何か御用ですか。

正成。別に用ぢやないが、退屈したので、話をしやうと思つてお前の處へ行つたら居なかつたので、何處へ行つたかと思つてゐた。

正季。お兄さん、敵は益々ふへますね。

正成。ありがたいことだ。
正季。敵も、もうすつかり怖がつて攻めて來ませんね。
正成。どうしたらおとすことが出來るか考へてゐるのだが、まだいゝ考へが出來ないのだらう。
正季。お兄さんが敵の方にゐらしつたらどうなさいます。
正成。守る人によるが、まあ兵の數は五六千にへらすね。しかし後から敵がせめると困るから、五六萬はいつでも援兵に出られるやうにしておくな。十萬以上の兵をこゝにおくのは少し馬鹿にも念が入つてゐる方だらう。殺つぶしにすぎないからね。それだけの金があれば、まだ面白いことはいくらでも出來るだらう。これだけの人間を遊ばしておくのは少し勿體ないね。

（兵士三。藁人形に甲冑をつけたものをもつて出てくる）

兵士三。之でよう御座いますか。
正成。結構々々。
正季。之はなにになさるのです。
正成。之はあそびだよ。あまり敵がせめて來ないので退屈だから一寸いたづらしてやらうと思ふのだ。
兵士三。この通りのを二三十つくればいゝのですね。
正成。さうだ。
兵士三。皆に話しましたら、皆大よろこびでうまくゆけば面白いがと云つてをります。
正成。うまくゆくかどうかわからない所が又面白いのだ。

正季。それをどうなさらうと云ふのですか。

正成。さつき一寸思ひついたのだが、この頃皆、退屈してゐるやうだから、眠けざましをしてやらうと思つたのだ。之を明日くらい内に二三十門の前にならべておいて、皆が一度に、矢叫びしてそして少し位い矢を射つて引きあげるのだ。するとと敵は味方が死にもの狂ひでとう〳〵とび出したと思つてあはてゝ向つてくるだらうと思ふのだ。するとこつちは門の中に入つてしまうのだ。するとうすぐらい内に、ねぼけ眼と來てゐるからこの藁人形を人間とまちがへて、死に物狂ひに向つてくると思ふのだ。其處で氣の毒だが、上から石をおとして、つぶしてやらうと思ふのだ。どうだ。うまくゆきさうだらう。

正季。それはきつとうまくゆきます。

正成。時々は敵の荒膽をひしいでやらないと、敵の兵隊が逃げ出すと困るからね。赤坂城の時は敵に油斷をさすことが必要だつたが今度は敵を恐れさすことが必要なのだ。

正季。それでは皆と一緒に私達も手つだつて藁人形をつくりませう。

正成。それも面白いだらう。

（兵士一、二の外退場）

兵士二。さううまくゆくかな！

兵士一。うまくゆくだらうよ。

第三場

(敵の陣屋、大將達集まつてゐる)

長崎。又やられたのか。誰の許しでやつたのだ。

工藤。誰の許しと云ふこともなかつたのださうです。朝まだきに敵がせめよせるやうな氣合がしたので、皆、敵がいよいよ兵糧がつきて討つて出たのだと思つたさうです。それで皆、あはてゝ向つていつたのださうですが、朝早くつてまだあたりがくらかつたさうで、藁人形を人間とまちがへて進んで行つて、上から岩石を投げられてやられたのださうです。

長崎。馬鹿な奴だ。もの笑はれだ。

工藤。皆も、あんまりながくなるので、鎌倉の覺し召しも氣にしてゐたので、ついよろこんでしくぢつたのださうですから、どうか大目に見てやつて下さい。

長崎。今となつてはやむを得ないが、相手が楠だから用心に用心しろと云つてあつたのに聞かないからそんな目にあふのだ。

工藤。皆、後悔してをります。しかしあの場合無理はないと思ふのです。それにしても楠と云ふ奴は喰へない奴です。

長崎。あいつの喰へないのは今始まつたことぢやない。味方はいつも攻めてゆけば必ずやられるのだ。

工藤。だからと申しまして、このまゝにしてをりましたら、いつあの城がおちるかわかりません。鎌倉の方では、あまり城がおちないので御機嫌がよくないさうです。

長崎。しかしお前達にいゝ考へがあるか。名越の時だつて、お前が賛成して、あんな目にあつたのぢやないか、あいつは普通の人間ぢやないのだ。

工藤。しかしぐず〳〵してゐる内に段々敵の仲間が方々から頭をもちあげないとも限りません。
長崎。そんなことを私が知らないと思つてゐるのか。いゝ考へがあるなら云つて見るがいゝ。
工藤。さうおつしやられると私も困ります。
長崎。誰かいゝ考へのある人はないか。(沈默)誰もなければ矢張り今迄のまゝでやつてゆくより仕方がない。

(侍、登場)

侍。鎌倉からの飛脚がこのお手紙をもつて參りました。
長崎。さうか(文箱を押戴き、中をあけよむ)いさい承知いたしましたとつたへてくれ。
侍。はい。(退場)
長崎。又鎌倉から、あまり城をおとすのに日數がかゝりすぎるとの御言葉です。天下が段々不穩になつて來さうで、どうあつても、早く落城させるやうにとの御命令です。何かいゝお考がありましたら。どなたでもかまいませんから、御遠慮なくおつしやつて下さい。(間)このまゝにしてゐましては、鎌倉にたいして申しわけがありません。何か考へのある方はおつしやつて下さい。

(沈默)

長崎。それなら全軍にふれをして、いゝ考へがある人があつたら申し出すやうにさせませう。百萬人もゐるのですから、何處かに楠にまさつた男がかくれてゐてもよさゝうなものと思ひます。楠を退治ることが出來る謀りごとを考へたものはどんな人でも軍功第一として大名にとりたてるやうにします。又大名の方でしたら二倍の御加增をするやうに御骨折します。(沈默)どなたでもいゝお考へはありませんか。今、ありませんければ、二三日內に御考へ下さい。又折

さんの臣下の方でいゝ考へをもつてゐる人がございましたら御知らせ下さい。赤坂と吉野がまたゝく間におちましたのに、この城許りにつまづいて、この大軍でいかんともすることが出來ないのは、我等にとつてこの上ない耻と思ひます。よく〳〵御考へ下さい。

工藤。畏りました。

長崎。それでは今日の會議は之でやめます。

南部。一寸御待ち下さい。

長崎。何かいゝ御考へがあるのですか。

南部。私の家來に、一人中々の智慧者が御座いまして、いつもこの城を、自分の考へ通りにすればすぐおちるのだがと申してをります。今朝の戰ひでも、皆に、城のそばに近づくなと申してとめましたので私達の仲間のものは一人も生命をおとしたものは御さいませんでした。そのものを御召しになつて考へをおきゝになつたらどうかと思ひます。

長崎。それは是非聞きたいものです。あなたは何かその考へをお聞きになつたことはありませんか。

南部。なんでも非常な大きな梯をつくつて、それを敵の切岸にかけて、すきまをあたへず乘つてゆくのださうですが、くわしくは當人にお聞き下さい。

長崎。それでは後程、私の所によこして下さい。それを聞いた上で又御相談することにしませう。お話のことがうまくいつてこの城をおとすことが出來たら、大した恩賞があると思ひます。それでは今日の會議は之でやめるとしませう。之は私ごとですが、今晩私の所で又連歌をやりますから、お氣が向いた方はおいで下さい。

皆。ありがたう。

第四場

(正成、一隊の兵士をあつめ、皆水はぢきをもつてゐる。火が盛に燃え、油おけがおいてある。)

正成。まだ時間がある。もう一度油はぢきの稽古をしやう。

皆。はい。

正成。水をはぢけ。

(皆、目標に向つてはぢく)

正成。五番、もつと右へ、七番、もう少し左。九番、もう少し上。よし〳〵。やめ。(皆やめる)油の時もそれと同じことをやればいゝのだ。

(見張りの兵士城壁から聲をかける)

兵士。敵はます〳〵せめて參ります。

正成。よろしい。まだ堀の處まで來ないだらうな。

兵士。もう二三町で堀につきます。非常に大きな梯で御さいます。間は二丈程もあるかと思ひます、長さはどの位あるかわかりません。何千と云ふ人間がそれを車にのせてもつてきます。

正成。安心しろ。

兵士。はい。

正成。皆、どんなものを見ても恐れてはいけない。安心して、俺の云つた通りにしろ。さあ、火をもつとたけ、油の用

意をしろ。

（皆云はれた通りにする。正季見張りからおりて來る。）

正季。お兄さん。敵は途方もないものをつくつて來ました。前代未聞の梯です。

正成。いや未聞のことはない。魯般の雲の梯と云ふのゝ眞似をしたのだらう。馬鹿な奴だ。だが今度こそ、敵もあはてだしたと見へる。策がつきたのだらう。もうぐず〳〵してはゐられなくなつたのだらう。面白い、やつと待つてゐる時が來たと見へる。

（見張りの兵士登場）

兵士。敵はとう〳〵やつて來ました。

正成。面白い。それなら氣の毒だがやつけてやるかな。

（火益々盛んに燃へる）

正成。さあ皆、今日こそ、皆に地獄の様を見せてやる。あさはかな人間の智慧の恐ろしさを見せてやる。皆よく見ておけ。今度の戰ひがすめば、もう戰はしないでもすむだらう。そして皆に戰さと云ふものがどんなに恐ろしいものか、よく見ておいて話してやれ。

兵士一。恐ろしい梯だな、化物のやうだな。

兵士二。何千と云ふ繩でひつぱつてどうしやうと云ふのだ。途方もないものを考へたものだな。

兵士三。どうしやうと云ふのだ。

兵士二。なんだかすごくなつて來た。

兵士四。之から何をはじめやうと云ふのだ。

正成。おどろくな。あの橋をこの城壁にかけて、この城にせめよせやうと云ふのだ。だが氣の毒だが、あの橋は燒かれて谷間におちるだらう。そして人々は二百尺にもあまる高さから眞逆におちるだらう。私のするやうに薪のかゝりは火のついた薪をもて、そして橋の上に薪をなげるのだ。そして、油がゝりは正季のまねをして油を薪の上にかけろ。

皆。あつ。あぶない。

正成。さあ。薪をなげろ。油をかけろ。油をそゝげ。薪をなげろ。

皆。（恐怖を感じて）のぼつてくる、のぼつてくる。何千と云ふ人間がのぼつてくる。のぼつてくる。どうしやう。どうしやう。

正成。あはてるな。おちつけ。大丈夫だ。油をかけろ。薪をなげろ、なげろ、油をかけろ。五番もつと右、八番もつと左、十番もう少し右。さうだ。その見當だ。

（皆少し氣がくるつてゐる）

皆。登つてくる。登つてくる。

正成。大丈夫、大丈夫、燃え上つたぞ。

皆。燃えあがつたぞ。燃えあがつたぞ。燃え上つたぞ。

（くづれ落ちる強大の音）

皆。あゝ。おちた。おちた。勝つたぞ、勝つたぞ。あゝ助かつた。怖かつた。助かつた。助かつた。勝つた。勝つた。

正成。萬事はすぎてしまつた。敵はあつけにとられてゐる。

(皆おどり出す)

正成。石をなげろ。石をなげろ。あゝもう、許してやれ。あの死骸のありさま。

正季。うまくゆきましたね。

正成。うまくいつた。

和田。お目出たう御座います。

湯淺。(出てくる)お目出たう御座います。

正成。お目出たう。萬事はすぎてしまつた。

湯淺。どうなるかと思ひました。

正季。敵はひきあげます。ひきあげます。

正成。私の仕事はやつとおはつたやうなものだ。

(侍、登場)

侍。かう云ふ矢文がまいりました。

正成。(開いて見て喜こぶ)皆よく聞け、之は大塔の宮の命をうけて忍びのものからよこした矢文だ。陛下は隠岐の島からのがれられた。そして新田義貞が鎌倉を攻めるために兵をあげたさうだ。そして大塔の宮からそれも私達のおかげだとの感謝のおことづけがあつたさうだ。

正季。お兄さん。(泣き乍らだきつく)とうとう待つてゐた時が來ましたね。

正成。來たやうだ。私も泣きたくなつた。

（皆泣く。）

正成。（跪き）神様。ありがたうございました。

第四幕

第一場

（都大路、還幸の見物人ぞろぞろ歸つてくる。いろいろの人が通る。黙つてゐるもの。笑つてゐるもの。何か考へてゐるもの。お互ひに饒舌つてゐるもの。皆どんどん通りすぎる。）

（男一、二、登場）

男一。隨分立派でしたね。

男二。皆、得意さうでしたね。

男一。陛下はさぞおよろこびでせう。

男二。私は楠さんを見た時涙が出ました。

男一。あの人は泣いてゐたやうですね。（去る）

（男三、四、五、登場）

男三。人間の運と云ふものはわからないものだね。

男四。榮枯盛衰は常ならずと云つたのは本當だ。

男五。昨日まで敵だつたものが、今日はもうすつかり忠臣になりすましてゐる。（去る）

（女一、二、登場）

女一。本當にさぞおうれしいでせうね。

女二。立派にお勝ちになつて、お歸りになつたのですから。

女一。あの一番威張つてゐるのは足利さんね。なぜ楠さまが一番いゝ役におつきにならないのでせう。

女二。それはお生れがちがうから仕方がない。

女一。私は楠さまが一番、偉いと思ひますわ。

女二。あんな忠義な方は他にありはしない。（去る）

（男六、七登場）

男六。今度の戰爭で隨分人が死んだと思ふが矢張り、人間といふものは澤山ゐるものだね。

男七。それはいくらでもゐるよ。

男六。今度は本當に王政復古になるわけだね。どうかはるかね。

男七。どうかはつたつてこつちたちにはあまり影響はないだらう。矢張り大名が巾をきかせるのにかはりはないだらう。

（去る）

（男八、九登場）

男八。俺は高氏の得意さうな顏を見たが胸がわるくなつた。

男九。あの兄弟の人相はよくないね。其處にゆくとさすがに楠はいゝ顏してゐる。あの男は誠實な男にちがひない。嬉し淚をためてうつむいてゐた。他の奴はたゞ得意になつてゐる。

男八。楠の通つた時は、皆、さすがに興奮してたね。女なんか大さわぎしてゐた。(去る)

女三。本當に隨分御苦勞をなさつたのね。

(女三、四登場)

女四。本當に陛下と、楠さんだけは本當に御苦しみになつたのですわ。

女三。さぞおうれしいでせうね。(去る)

(男十、十一登場)

男十。本當にかう始終政變があつては、皆も困りますね。今度はもう之で戰爭も終りにしたいものですね。物騷でたまりませんからね。

男十一。今度は大丈夫でせう。楠さんがゐますからね。

男十。ですが矢張り、野心家が澤山ゐますから何を始めるかわかりませんよ。

男十一。本當に野心家には困つたものです。(去る)

(女五、六登場)

女五。私、楠さんてもつと立派な方かと思つてゐたわ。足利さんの方がずつと立派ね。

女六。それは馬だつて、なりだつて比較にはなりませんわ。

女五。私は楠さんと云ふのはもつと身體の大きい、立派な方かと思つてゐたのよ。

女六。泣いてゐらしつたやうよ、女見たいな方ね。

女五。私あんな顏大嫌ひ。(去る)

（男十二、十三登場）

男十二。評判できくと楠さんは他の人とはかはつた方のやうな氣がするが、見れば矢張り何處もかはつたことはありませんね。あれでそんなに利口なのですかね。一寸想像がつきませんね。私は宇都宮さんを楠さんかと思ひました。

男十三。さうですか。私は矢張り、あの方だけはちがつてゐると思ひました。他の方は皆、呑氣によろこんでゐらつしやいましたが、あの方だけは何か考へてゐらつしやるやうでした。

男十二。之で世の中も少しは靜かになるのでせう。

男十三。さうしたいものですね。税許り高くなつてはやり切れません。（去る）

（女七、八、九、登場）

女七。お姉さんは楠さまを見た時、泣いてゐらつしつたわね。

女八。お前だつて泣いてゐたぢやないか。

女七。だつて泣かないわけにはゆきませんわ、あんないゝ方てありはしませんもの。

女九。お姉さん。私もないたわ。

女八。お前も泣いたね。いゝ子だね。（去る）

（男十四、十五、登場）

男十四。あの行列の内で一番、よろこんでゐたのは矢張り楠さんだと思ふね。あの人は今日の日をどんなに待つてゐたらう。そしてその日がちやんと來たのだからね。夢でなく、本當に。

男十五。それはさうだ。そして楠さんの兵卒は他の兵卒よりずつと規律が正しく、立派だつた。身なりこそ、他のにおとつてゐたらうが、皆いかにも永い間苦戦、苦闘したことが一兵卒の顔にもあらはれてゐた。(去る)

(女十、男十六登場)

女十。本當に齢をとると、いろ〳〵の事を見るものですね。

男十六。さうだね。たつた昨日あんなに威張つてゐた人達が何處かへ逃げていつてしまうかと思ふと、昨日まで逆賊のやうに云はれてゐた人が、立派な風してのりこんでくる。之からあともどうなるかわかりはしない。世の中と云ふものは恐ろしいものだね。

女十。本當ですね。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

第二場

(楠の宅の一室。正成の妻と正行登場)

正行。お父さんは今日、お歸りになるのね。

妻。あゝ、もうぢき御歸りになるのだよ。

正行。うれしいな。お馬をもつて歸つてきて下さるでせうね。

妻。もつて歸つてゐらつしやるだらう。

正行。うれしいな。坊はお父さんと一緒にお馬に乘つてお山へのぼるのだ、そして戰の御話を伺ふのだ。うれしいな、お父さんが藁人形をつくつて、敵をおだましになつた話や、大きな大きな大石にもとどくやうな梯を敵がかけて來たのを、

水彈で御退治になつた話なんかもして戴くのだ。うれしいな。
妻。お父さんはなんでもお話しして下さるよ。
正行。その水彈を一つ御土產に持つて歸つて下さるといゝのだがな。その水彈だときつと水が天までとどくにちがひないね。お母さん。
妻。(笑ひながら)そんなにはとゞかしないよ。
正行。だつてお父さんがおつくりになつた水彈きだからきつと天までとゞくよ。お母さん。あの杉の天ぺんまで位いはきつとゞくわね。お母さん。
妻。うるさい子だね。それより今度からお前は行儀よくしないといけませんよ。
正行。なーぜ。
妻。だつてお前はお父さんのあとつぎで、大きな御國の御主人になるのだからね。皆の御手本にならないといけないのだよ。
正行。さうを、大きなお國をお父さんがいたゞいたの。
妻。あゝ。
正行。うれしいな。さうしたら、兎や鹿も澤山ゐるわね。お母さん。
妻。それはゐるだらう。
正行。さうしたら僕はお父さんと狩りにゆくのだ。戰爭はやめにしたかはりに、狩にゆくのだ。
(腰元登場)

展元。快元さんがお見へになりました。

妻。さうか。こゝへ御通しゝておくれ。

展元。はい。(退場)

(快元登場)

妻。よくいらつしやいました。(挨拶する)

快元。今日はお目出たう御座います。

妻。ありがたう。どうぞこちらに。正行御挨拶おし。

快元。坊ちやんも大きくなりましたね。

妻。えゝ。御かげで。

(正行退場)

快元。先日一寸京都に參りまして、御主人様にも一寸お目にかゝりました。

妻。さうでしたか。元氣にしてをりましたか。

快元。えゝ、非常に元氣にしていらつしやいました。都ではもう、楠さまと云へば大評判で、もう御主人程賢い方はないと皆、お噂してをります。陛下にも一寸お目にかゝりました時に、御主人のことを御知らせしたことを御よろこび下さつたので、大變、名譽をほどこしまして、うれしく思ひました。實際。御主人の御働きには皆感心しきつてをります。

妻。どういたしまして。大塔の宮様の御援助がなく、足利様や、新田様が兵をおあげ下さらなかつたら主人もどうする

ことも出來ませんでしたらう。

快元。皆はさうは申してをりません。陛下や大塔の宮樣のことは格別で御ざりますが、他の人達は日和見で、負けないときまつてから兵を擧げたのですから、誰もかげでほめるものは御座いません。

妻。主人もさぞよろこんでをりませうね。

快元。はい、隨分よろこんでをられました。之で重荷をおろしたとおつしやつてゐらつしやいました。早く家に歸つて又菊いぢりでもしたいと話してゐらつしやいました。それにしても、大塔の宮樣と、足利樣との仲のよくないのを大層、御心配になつて御いでゞした。

妻。そんな噂を一寸うかがひましたが、本當で御ざりますか。

快元。本當で御座ります。しかしどうにかまとまると思ひます

妻。本當に、うるさいもので御さいますね。大塔の宮樣は隨分御苦勞遊ばしたのですから、どんなにして上げてもおよろしいと思ひますが。

快元。さうです。しかし其處が足利兄弟のよくない處で、あの兄弟は何かたくらまないではゐられない男なのですが、陛下の御氣に入るためにどんなことでもするのですから、さすがに御賢明な陛下も、足利兄弟を殊の他御信用になつておいでゞす。

妻。さうですか。しかし大したことはないので御座いませうね。

快元。それは大したことはないと思ひます。

（正行登場）

正行。お父さんが歸つてゐらつしたよ。
妻。さうかい。どうして知らせてくれなかつたのだらう。
（正成登場）
妻。ちつとも、存じませんで
正成。いや、反つて知らせないやうに歸つて來たのだ。一刻も早く歸りたかつたので、正季と二人で馬を走らせて來た。
妻。さうですか。
正成。快元さん。よく來てくれましたね。
快元。反つて御邪魔かと思ひましたが、御逢ひしたくなつたので。
正成。よ　來て下さいました。私も御逢ひしたいと思つてをりました。
正行。お父さんお馬買つて來て下さつて。
正成。あゝ、買つて來たよ。正季お叔父さんがつれて來たから、見せておもらい。
正行。（お辭儀し）ありがたう。
（走けて退場）
正成。丈夫でいゝな。
妻。はい。
快元。大塔の宮様のことはどうなりました。
正成。萬事よくゆきました。御機嫌がなほつて、非常に御盛んな御行列で御入洛になりました。陛下とも御機嫌よく御

對面で、始めて顏をお合はしになつた時、大塔の宮樣は感きわまつて、お泣きになりました。私達も、一緒に泣きました。

快元。さうですか。それはよう御ざいました。

正成。なにもかも始めつからやりなほされるのですから、隨分大へんと思ひました。田舍者の私なぞが見てゐると、目がくらむやうに、いろ〳〵のことが一時にもち上つて來ます。京にゐるよりは、千劍破にゐる方が樂なやうな氣がして、早く家に歸りたくつて閉口しました。矢張り、野菊は、野に咲いてゐるに限ります。陛下もお氣の毒です。誰か一人憎まれつ兒がゐるといゝのですが、さう申しては失禮ですが、如才ない方が多いので、わるいことは皆、陛下のお袖の下にかくさうとするのですから困つたものです。しかし藤房卿も近い内にお戻りになりますから、どうにかなるかと思ひます。私達がいくら考へても、これ許りはどうすることも出來ません。

妻。あなたはすつかりお疲れになつてゐるやうですね。元氣でよろこんでゐらつしやると許り思つてをりました。

正成。陛下にお逢ひした時のよろこびは百年の苦しみもつぐなつてあまりあるものだと思つた。還幸のおともして京都へ入る時も私はどんなにうれしかつたか知れない。私は神樣に感謝の祈りをさゝげ通しにしてゐたと云つても嘘ではない。しかしその後、一日二日とたつ内に、私は段々氣が滅入つて來た。その原因がよくわからないのだ。そして人々に機嫌のわるい顏でも見せれば、私が他の人の恩賞を猜んでゐるやうに思はれる。私はそんな賤しい人間ではないつもりだが、あたりの空氣は、私を益々、孤獨に、淋しくする。傲慢と、虛僞と、お世辭、それに猜みと、野心、それ等がむらがり立つて、もつれからんでゐる。單純で、善良で、生命をすてることをなんとも思はない、私を信じ切つてくれた人々と切りつきあつたことのない私には宮廷の空氣は息ぐるしい。私は一年籠城してゐたよりは、十日、

宮廷にゐた方が諂をとつた。私は一日も早く家に歸ることより考へなかつた。都を出て、段々田舎に入るに從つて、私は胸がせい〳〵して來た。水をはなれた魚が、住みなれた水に歸つたやうな氣がした。私は自分の内にこんなに力のないことを感じたのは始めてだ。泣く元氣もない。たゞぐつすり眠りたいとそれ許り考へてゐた。

妻。それはお疲れが出たからですよ。あんまり御無理をなさつたからですわ。今に疲れがおなくなりになつたらそれは御元氣になりますわ、ね快元さん。

快元。えゝ、さうにきまつてゐます。

正成。私は都で見たことが、皆、夢だつたらいゝと思ふ。そして目がさめたら、千劍破城だつたら、さぞいゝだらうと思ふ。あの時は希望があつた。大きな、希望があつた。

妻。又ちがつた新しい希望がわきますわ、どうすることも出來ないことは氣になさらない方がよろしいわね、快元さん。

快元。さうですとも。いくらでも希望をつくり出すことが出來るものです。

正成。私の大きな希望はつぶれてしまつたか、いやまだ〳〵藤房卿がゐる。私はあの人が歸つて來たら、一度ゆつくり逢つて見たい。

快元。私はまたその内京都にゆきますから、藤房卿にお逢ひして、あなたのお考へをお話しませう。

正成。どうぞ。お前、心配しないでいゝ。私も正成だ。何處かに生る道を見出して見せる。私はあまりに子供だつたのだ。信じてはならないことを信じすぎてゐたのだ。今その罰をうけてゐるのだ。だが今に立ち上るだらう。その時は何も恐れずにすむだらう。心配しないでいゝ。さあ、一つ庭の樣子でも見せてもらうか。快元さん。一緒に來ませんか。

快元。ありがたう。今日は之で失禮しませう。又今度。

正成。藤房卿にお逢ひでしたらどうぞよろしく。

快元。承知しました。さよなら。

正成。さよなら。

妻。さよなら。又どうぞ。（皆退場）

第三場

（月夜、正成、緣側で月を見て凉んでゐる。）妻登場）

正成。正行はねたか。

妻。よく寢ました。

正成。仲々、利口で元氣だね。

妻。えゝ、仲々利口です。

正成。あいつの一生を仕合せにしてやりたい。

妻。世の中も、どうにかおちついてゐるやうで御座いますね。

正成。こゝにゐると世の中のことは知らずにすむ。いろ／＼のことが夢のやうだ。

妻。何事もなかつたやうですね

正成。さうだ。すぎたことは夢のやうで、赤坂にこもつたことも、千劒破にゐたことも自分ではないやうだ。北條が亡

んだが別にかはつたこともないやうだ。税は高くなつても、やすくはならないだらう。私の領地だけは少しは安く出來るつもりだが。そして人民の苦しみも前とふへてもへりはしまい。だが皆、あきらめてゐるやうだ。都にゐる野心家たちは何かくわだてゝゐるかも知れない。しかしこゝにゐれば別に氣にもならない。

妻。私はこの頃は實にたのしく、心うれしくくらしてをります。こんな時が、來てくれやうとは思ひませんでした。

正成。一寸さきは暗と云ふが、さきのことは人間にはわからない。私達はかうしてゐるといつ迄も平和にくらしてゆけさうにも思ふ。しかしかうしてゐる內に、どんなことが起つてゐるかわからない。高時は自分達が自殺しなければならないとは思はなかつたらう。又千劒破を攻めた長崎なぞは、自分が坊主になつて、降參して、そして首をはねられなければならないと云ふことは知らなかつたらう。今後どんなことが起るか誰も知つてゐるものはない。

妻。もう大丈夫だと思ひますわ。此間京都から來た人の話だと、京都は實に賑かになつて、御所なぞは目がさめるやうに立派になつて人々は泰平をたのしみ、君の御威德を讃美してをりますさうです。

正成。私の聞いたのは少しちがう。私は千種殿や、文觀僧正の生活を聞いたが怖くなつた。その贅澤は少しも北條一族にかはらない。殊に大塔の宮樣は粗暴のお振舞が多いさうだ。そんなはづはないとも思ふが。皆、苦しい時には隨分立派なことも云ひ、立派な振舞ひもする。だが位置がかはると、今迄自分達が呪つてゐた人達と寸分ちがはないことをする。人間は皆五十歩百歩だと思ふ。北條一族だけが出來のわるい人間ではない。人間があまりに權勢をもつと云ふことは恐ろしいことだ。

妻。ですけど都では皆、よろこんでさわいでをりますさうですよ。噂と云ふものは何んでも大きく聞へるものです。そして想像すると切りがありません。

正成。まあ靜かに見てゐるより仕方がない。

（腰元登場）

腰元。藤房卿がお見えになりました。

正成。藤房卿がお見えになつたつて。

腰元。はい。

正成。あゝさうか。

（正成、妻、腰元と迎へに立つ。）やがて藤房、正成と登場）

正成。本當に來て戴いて恐れ入ります。私の方から御訪ねしたいと思つてをりました。

藤房。快元和尚からあなたのことを聞いたら急に逢ひたくなつて來たのです。

（腰元座蒲團その他をもつてくる）

正成。どうも失禮な所ですが、反つて涼しくつて、それに月があまりよろしいので。

藤房。この方が本當に結構です。始終、あなたのことを思つてをりました。

正成。私こそ始終おうはさしてをりました。

藤房。あなたの御働きについては、私はなんと御禮していゝか、又何と云つてお賞めしていゝかわかりません。私の心の内は御わかりになつてゐて下さると思ひます。常陸に流されてゐても、たえずあなたのことを思つて心嬉しくくらしてをりました。

正成。さうおつしやつて戴くとお恥かしい氣がします。

藤房。恥かしいと云へば私の方の事です。あの時、希望に滿ちていろ〳〵お話し、そして陛下が政りごとをおとりになりさへすれば、あとは私は引きうけたやうなことを申したのが、恥かしく、穴に入りたいやうな氣がしてゐます。

正成。お察しします。

藤房。私は今度は隨分希望に滿ちて歸つて來たのです。いろ〳〵の計畫もたてゝをりました。しかし歸つて日がたつに從つて私は自分が馬鹿だつたことをはつきり知りました。私は歸つてからも、陛下にいろ〳〵申しあげました。しかし陛下は、他の人の云ふことの方が、御氣に召すので、私の云ふことは御聞き入れになりません。それは御無理ではないのです。だが恐ろしいことが起ります。あなたはまだ御存知ないでせうが、一昨日大塔の宮樣が謀反の嫌疑でおつかまりになりました。

正成。えつ。それは本當ですか。

藤房。謀反のことは知りません。しかしつかまへられ、一室に押しこめられたのは本當です。そして今日、不意に、足利直義に宮樣をおあづけになりました。直義は直ちに鎌倉におつれしたやうです。

正成。恐ろしいことですね。

藤房。足利兄弟は殘忍な男です。何をし出かすかわかりません。大塔の宮樣にも落度はまるでないとは云へないかも知れません。ですが、陛下をなきものにしやうとはおくわだてにはならなかつたでせう。ただ足利兄弟を亡ぼさうと御計畫なさつてゐらつしたことは事實です。足利兄弟が御繼母にあたる三位の局にとり入つて陛下の弱味をしつかりにぎつて放さないことは恐ろしい程です。三位局は隱岐にまでついてゐらつして陛下と艱難困苦を共にされ、三人の皇子をお產みになつてゐらつしやるのですから陛下が特別にお愛しになるのは御尤なのですが、其處につけこむ、彼等

兄弟は恐るべき人間です。殊に直義と來たらどんなことでも野心を滿たすためにはやり兼ねない男です。困つたことが起つたものです。今に何か起つて、天下はまた麻のごとく亂れるでせう。私はがつかりしました。

正成。あなたにがつかりされては、私達は誰をたよりにしませう。どうかしつかりしてゐて下さい。

藤房。私は陛下を限りなく愛してをります。笠置からおちた時なぞ、陛下も私も三日も何にもたべずに、うろつきまわりました。そして谷の清水をのんでは、私達で顔を見合はせ、少しの音にも私達は恐れを抱きました。その時、陛下は、「さしてゆく笠置の山を出でしよりあめが下にはかくれがもなし」とおつしやつたので、私はとめどもなく涙が出て「いかにせんたのむかげとて立ちよればなほ袖ぬらす松のしたつゆ」とお答へしましたが、その時のことなぞ思ひ起すと、陛下が少しでもよろこんでゐらつしやるのを見ると、私はうれしく思ひ、なほおよろこばせしたく思ふのです。ですが、あなたが快元和尚におつしやつたやうに、足利兄弟は、わざと、人々の恩賞をへらすやうに陛下に申しあげて、そして人々に陛下をお恨みするやうに持ちかけるのです。そのやり方の巧みなのにはおどろく程です。そして陛下に御注意申し上げれば、それは猜みからだと御思ひになるのです。何んでも思ひ込むと、それを何處までも押し通される御癖がさう云ふ時にもつきまとつて、私の云ふことは更におきゝがないのです。

正成。本當に今に恐ろしいことがおこりますね。

藤房。それは起ります。私はこの二三ケ月の間程、人間の弱さを知つたことはありません。随分立派な人だと思つた人が、猜んだり、憎んだり、女のくさつたのよりなほ圖太くなります。そして皆、惡鬼に逐はれたやうで、幸福さうには見へません。お互に疑ひあい、猜みあい、憎みあい、落し入れあい、そして第二の北條になりたい連中が少なくないのです。私はこの頃、よく考へますが、人間が權力を持ちすぎることは恐ろしいことです。人間の優しみがなくな

つて、權力許りをもとめ、惡鬼のやうになり、お互に倒しあはなければおさまらなくなります。

正成。新田義貞はどんな人です。

藤房。あれは眞面目な男ですが、器量が大きいとは云へません。とても足利兄弟の圖太さの敵ではありません。

正成。たよりになる人はありませんか。

藤房。ありませんね。あなたに、高氏の圖太さがないのは殘念なことです。

正成。あなたに直義の執念深かさのないこともなげかはしいことです。

藤房。（淋しき笑ひ）私はもう望も何んにもなくなりました。私にはもう目あてがつかないのです。

（妻御馳走をはこぶ）

妻。何にも御ざりませんが。

藤房。ありがたう。三年前にこちらにお伺ひした時は、隨分、たのしみでしたがね。

正成。（苦笑して）來て見たら、元の杢阿彌ですね。

藤房。天下が自分の勝手になると思つてゐたのが馬鹿なのですね。其處へゆくと、足利兄弟は仕合せものです。希望に燃えて、こつ／＼細工をしてゐますからね。

正成。私達の仕事は、北條のかはりに足利をおくためにすぎなかつたかも知れませんね。多くの人を殺したゞけが、私の仕事だつたのだと思ふと、私は本當にどうしていゝかわかりません。（泣く）

藤房。本當にあなたは見上げた方だ。私はあなたが今の世にゐて下さるのでどんなに氣丈夫か知れません。私は人間に愛想をつかしかけた時に之からもあなたのことを思ふでせう。すると心が淸まり勇氣づけられるでせう。

正成。あなたにさう云はれると耻かしい氣がします。私こそ、あなたのことを思ふと勇氣づけられます。

藤房。私は今日は本當は、何にもあなたに云はずに月がいゝので、あなたが笛がお上手だと聞いたので、二人で笛をあはせやうと思つたのです。

正成。上手と云ふことはありませんが、あなたとおあはせするなら本望です。

藤房。奥さんは琴が御上手ださうですね。

妻。あんまり下手で、おはづかしいのです。

正成。御遠慮する方が本當かも知れないが、之も一生の思ひ出になるだらう。遠慮せずにあはしておいたゞき。

妻。はい。

正成。正季をよんでおやり。

（妻退場）

藤房。靜かな晩ですね。

正成。えゝ。

藤房。私の弟は流されてゐる内に死にました。私は京都に歸れるやうになつた時、本當に同情しましたが、今になれば、どちらが幸福だつたかわからない氣がします。

正成。生てゐると云ふことは恐ろしいことですね。

（琴、笛を腰元もつてくる。妻、正季登場。藤房に叮嚀に挨拶する。）

藤房。暫らくでしたね。

正季。はい。

藤房。隨分お働き下さつて、感謝してをります。

正季。恥かしい話です。

正成。それでは初めませうか。

藤房。えゝ。

（二人合奏する）。奏し終る）

正成。藤房さん。あなたは出家なさりはしますまいね。

藤房。どうしてです。

正成。なんだか、あなたの笛の音を聞いてゐたらふとそんな氣がしました。

藤房。そんなら私一人でふきますから、あてゝ御らんなさい。

正成。はい。

藤房。あなたの笛を私の笛ととりかへてはくれませんか。

正成。それは私も望んでをりましたが、申し出すのを遠慮してをりました。

藤房。それではおかへしませう。

正成。はい。

（二人笛をとりかへる、藤房笛をふき出す。幕。）

第五幕

第一場

（正成の室。正成登場。御所から歸つたまゝだが、何か心に苦悶があるらしく、襖をしめて暫く端座する。ふと笛に氣がつき、靜かにふいて見る。外から正季。）

正季。お兄さん入つてよう御さいますか。

正成。入つてもいゝ。

（正季、登場）

正季。御くたびれになつたでせう。

正成。別にくたびれはしない。

正季。御前の首尾はどうでした。

正成。私の笛の音でわかつたらう。

正季。大へん靜かに聞へました。

正成。（うれしさうにゝさうか。

正季。それでは上首尾で御ざいましたのですね。

正成。わるいやうでもあるし、いゝやうでもある。

正季。それでは陛下は笠置へ行幸になることを御承知になつたのですね。

正成。さうぢやない。
正季。それでは陛下は何處に行幸になるのです。
正成。行幸はのびたのだ。
正季。いつ迄。のびましたのです。
正成。私が死ぬ迄のびたのだ。
正季。(うれしさうに)それでは、足利兄弟が九州の大軍をひきつれて京に征めのぼつてくると云ふ噂はうそでしたか。
正成。うそではない。
正季。それでは思はぬ援兵がそれ迄に到着することになつたのですか。
正成。さうぢやない。
正季。(考へる)。何かいゝお考がお浮びになつたのですか。私達がとても考へつかないやうな。
正成。さうぢやない。
正季。私には見當がつかなくなりました。それでは私達はどうすればいゝのですか。
正成。(斷乎と)兵庫にゆくのだ。新田殿をたすけに。
正季。それで勝てる見込がついたのですか。
正成。負けにゆくのだ。
正季。御冗談をおつしやらないで本當のことをおつしやつて下さい。
正成。皆。本當のことだ、

正季。それでも、お兄さんは陛下に笠置にもう一度行幸して戴くより他に仕方がない。とおつしやつてゐらつしたぢやありませんか。

正成。今でもさう思つてゐる。

正季。それでもなぜ兵庫へいらつしやるのですか。

正成。御命令だから。

正季。お兄さんは自分の考へをおつしやらなかつたのですか。

正成。云つた。

正季。一度京都へ足利兄弟を入れて新田殿とはさみうちする計畫をたてゝ、必勝疑ひなしとおつしやつてゐらつしたぢやありませんか。そのお考をおつしやつたのですか。

正成。くわしくお話した。

正季。それなのに御採用なかつたのですか。

正成。陛下は御採用にならうとした。しかし其處に稀代の智慧者が出て來た。

正季。お兄さんよりも、もつと智慧のある方がこの世にゐたのですか。

正成。ゐた。その男はかう云ふのだ。味方はいつも少數の兵で大敵に勝つのは謀によつてではない。陛下の御威光によつてだと云ふのだ。

正季。誰です。そんなおべつかをつかふものは。

正成。坊門の宰相清忠殿だ。そして戰はずして皇居をかへることは不名譽なことだといふのだ。

正季。それは正氣のさたなのでせうか。

正成。さうと見へる。其處にゐる勇士の面々一人のこらず、清忠殿の考へに同意された。私の考へに同意してくれた人はたゞの一人もなかつた。

正季。お兄さん。それは本當ですか。

正成。本當だ。

正季。それでお兄さんはどうなさりました。私がわきにゐなかつたのが、殘念です。私だつたら、怒鳴りつけてやつたでせう。釋迦に說法すると云ふ言葉がありますが、お兄さんの考が不名譽だなぞと云ふ人間を私はそのまゝにしてはおけません。

正成。そんなことを云つたら、世間の人をのこらず殺さなければならないだらう。世間の人は大概そんなことを云つてすましてゐるのだ。

正季。それでもお兄さんが、どんなに深かく御考へになつてゐるか、もう少しはわかつてくれてもいゝはづぢやありませんか。

正成。藤房卿もそれで愛想をつかして隱遁されたのだ。自分の意見がそのまゝ通るなぞと思つたら大ちがいだ。

正季。それでもお兄さんの考へに從ふより他に勝つ道はないのぢやありませんか。

正成。多くの人はどうすることも出來ない目に逢ふまでは目が覺めないのだ。

正季。それでお兄さんはどうなさいました。まさか彼等のまちがつた考をそのまゝ御承知にはならなかつたでせう。

正成。所が私があつけにとられてゐる内に衆議は一決してしまつたのだ。そして私にすぐ兵庫にゆけと云ふのだ。私は

もう少しで吹き出したくなつた。腹が立つよりも、笑ひたかつた。そして泣きたかつた。

正季。それで見すく負けることを知りながら、御承諾なすつたのですか。

正成。さうだ。口答へすれば、彼等はこの私を臆病ものだとさへ思ひ兼ねない人間だ。彼等は戰は正しい方がかつ、勇氣のあるものが勝つ。大敵と雖も恐れるなと云ふのはこのことだと云ふのだ。彼等は人數が多く、自分が出かけるのでもなく、ものがはつきりわかるのでもないから、調子にのつて偉らさうなことを云ふ。そしてそれが皆、おべつかになつてゐるのだ。そして誰もそれがどう云ふ結果になるかと云ふことは考へないのだ。

正季。救はれない馬鹿です。許すことの出來ない厚かましい奴ですね。お兄さんはなぜそれを押えつけてしまはなかつたのです。

正成。私も、それが恥かしい。自分の考が正しいのに、自分を潔ぎよくするために、がんばることが出來ず、見すく味方を死地におとし入れる自分の弱さがはがゆかつた。私は途中で何度あとゝもどりして、もう一度皆に考へなほしてもらおふかと思つたか知れない。だが私はその勇氣がなかつた。それは又無結果に終ることもわかりすぎてゐた。だが考へてくれ。どうしてあの人間共を承知させることが出來るか。それは私が第二の北條にならない限りは出來ないことだ。彼等はたゞ死を恐れる。彼等を生かしたまゝに默らすことは釋迦がゐらつしてもむづかしいことだ。彼等はいくら本當のことを云つて聞かしたつてわかるわけはない。お前は彼等を說きふせることが出來ると思ふか。それは藤死刑に處する權利をもつてゐるものだけを恐れる。又位階や、恩賞を與へうるものだけの云ふことを聞く。彼等はい房卿にも出來なかつた。さうして私にも出來ない。私が兵庫にゆくことに反對したら、彼等は私を君の命をきかないものときめるだらう。そして私を生命の惜しい臆病ものと云ふだらう。何と云はれてもかまはないとしても、私には

足利の眞似は出來ない。さうすれば兵庫にゆくより仕方がない。

正季。お兄さん。私は口惜しゆう御座います。足利兄弟は何と云ふ運のいゝ男でせう。清忠の奴は何と云ふ恩知らずの馬鹿でせう。お兄さんがゐらつしたからこそ、北條は滅びたのぢやありませんか。天下にたゞ一人の味方もない時、天下を相手にして、少しも恐れず、百萬の敵さへ、玩具にすることが出來たのはお兄さんだけぢやありませんか。お兄さんの云ふことさへ默つて聞いてゐればいゝのに、それに口答へする許りではなく、敎へてかゝり、臆病あつかいするに至つては本當に濟度しがたい馬鹿ものです。

正成。それにしても私は耻かしい氣がした。もし碁の名人があつて一生一代の晴れの勝負の最中、必ず勝つ手を知つてゐながら、碁をまるで知らない男の云ふことを聞いて必ず自分が負ける所に石を打たなければならないとしたら、それは碁の名人にとつて、どんなに耻辱だらう。その位いなら死んだ方がましだと思ふだらう。その氣持を察してくれ。

正季。お兄さんの御心はよくわかりました。私は口惜しゆう御座います。(男泣きに泣く)

正成。だが正季。私は一方うれしくもあるのだ。

(外で、妻、泣くのを耐え、耐えてゐるのが感じられる)

正成。私は覺悟が出來たのだ。私はもう未練がなくなつたのだ。何うかすれば自分の望む世界が來はしないか、自分にはまだ何かしなければならない使命があるのではないかと云ふ未練がなくなつたのだ。天は許して下さつた。私はするだけのことをした。私はしなければならないことはしてしまつた。そして私の到達した所は何處か。お前は知つてゐるだらう。さつきの笛の音が語つてゐたはづだ。私は歸るべき所に歸ることが出來るのだ。それはうれしくもなく悲しくもない。

外で妻の決心した聲。正行おいで。

外で正行の聲。はい。

（妻、正行登場）

正行。お父さん御土産は。

正成。正行！、お前はもう赤坊ではないぞ。私の云ふことをよく聞け。お前はお母さんの云ふことをよく守らなければならないぞ。そしてこの正成よりも大きな人間になれ。清濁合はせのむ人間になれ。そして私に出來なかつたことをしろ。お前は今日からはしつかりしなければならない。

正行。お父さん。坊は偉い人間になります。お父さんのやうに。

正成。私より偉くならなければならない。私より平氣で大きな仕事をする人間にならなければならない。だが。この子は私よりもなほ、潔癖で、一徹ものらしいな。この子の未來が思ひやられる。だが神や佛がこの子を守つて下さるだらう。

（妻、忍び泣く）

正行。お母さま、どうしたの。

正成。泣くことはないぢやないか。武士の妻が夫の戰死することの覺悟が出來てゐないでどうする。お前がそんなにわからない人間なら私はお前を妻だとは思はないだらう。正成の妻ともあらうものが、夫が戰場に出ると云つて泣く奴があるか。さあ、もう泣くのはよしてくれ。そして靜かに語りあかさう。私は心の底があかるくなつて來てゐる。私は歸るべき所に歸れるよろこびをかすかに感じて來てゐる。泣くのはよしてくれ。

妻。はい。

正成。お前の心はわかつてゐる。正行をたのんだぞ。お前よりは私の方が、仕合せものだ。お前達を出來たら守護してやる。私はうれしくなつた。私は一番お前を恐れてゐた。そのお前が本當に決心してくれた。それでこそお前だ。正成は心でお前を見上げてゐる。どうか、辛抱して、この子を立派な人間にしてくれ。正行、お前はお母さんに孝行にするのだぞ。そして、立派な人間になるのだぞ。

正行。えゝ。お父さん。坊は偉い人間になります。

正成。感心、々々、それでこそ私の子だ。さあ二人とも向ふへ行つてゐておくれ。私達は一寸相談しておきたいことがあるのだから。

妻。はい。正行、行きませう。

（二人淋しく未練をのこしながら退場）

正成。正季、今度は皆戰死してもらうことになるだらう。生命の惜しいものや、あとの困るものは、戰爭につれては行かないつもりだ。お前、和田と相談していゝやうにしてくれ。

正季。はい。承知しました。

正成。正季！お前はこんな兄を持つて氣の毒だつた。

正季。何をおつしやるのです。お兄さん。そんなことをおつしやると私は本當に怒りますよ。私はお兄さんの弟だと云ふことをどんなに名譽に思つてゐるか知れません。

正成。正季、ありがたう。

（顔を見合はせる、幕）

第二場

（戰場。兩軍、入り亂れてゐる。敵兵が逃げ出す。正季阿修羅のやうにあらはれ、敵を逐ひちらす。疲れて小さい小屋の椽に腰をかけて休む。味方の兵士が登場）

正季。お兄さんを見なかつたか。

兵士一。はい。氣がつきませんでした。

正季。お前達の働きの立派なのに感心したぞ。

兵士一。皆。手傷を負ふに從つて勇氣百倍して參りました。

正季。大軍を逐ひちらすのは面白いものだな。

兵士一。はい。

（敵がまた味方の兵を追つてよせてくる。正季、多くの敵を相手にして一歩も退かないやうに戰ふ。味方、苦戰、この時、正成、少しの味方をつれて顯はれてくる。その勢ひにおぢけて敵兵逃げる。）

正季。あゝ、お兄さん。

正成。あゝ、正季か。

正季。よく來て下さいました。もうお逢ひ出來ないかと思つてゐました。

正成。これでお前と五度、あつたわけだな。敵はとう〳〵四方を圍んだな。

正季。はい。

正成。どうだ、まだ戰ふ元氣があるか。

正季。大丈夫です。お兄さん。お血がたいへん出てゐますよ。

正成。大したことはない。

正季。あの小家で傷をゆはへてあげませう。

正成。それではゆはへてもらうかな。そしてもう一あばれあばれて見やう。

正季。えゝ。さうしませう。

正成。この家は死ぬのに丁度いゝ家だ。

正季。私もさう思つてゐました。

（二人家のなかに入り障子をしめる）

正季。（内で）痛くは御座いませんか。

正成。（内で）痛くはない。

（敵又、味方を逐つてやつてくる。）切りあふ。正成、正季あらはれる。椽に立ちながら）

正成。楠正成、正季、こゝにあり。生命の惜しいものは、逃げろ。逃げろ。

（敵、たぢろぐ。味方急に力をもちなほす。）敵逃げる。）

正季。それではお兄さん。御一緒に行きせう。

正成。行かう。又あとでこゝで逢ふことにしやう。

正季。はい。

(二人退場。)合戰　敵　味方追ひつ追はれつする。暫く、空。)

正季。お兄さん。お兄さん。

(兵士二、登場)

正季。お兄さんに逢はなかつたか。

兵士二。あすこで戰つてゐらつしやいました。

正季。さうか。

(正季その方へかけてゆく。)

(正成登場)

正成。正季。正季。正季は居ないか。

(和田登場)

正成。和田か、お前も隨分傷したな。

和田。あなたも、隨分お負傷なさりましたね。

正成。之で、私も獅子王にでもなつたやうな氣がするよ。

和田。あなたのお勇ましい姿を見ると、皆決死の勇がわきます。

正成。私は又皆の死を恐れない姿を見ると、私も負けてはゐられないと思ふ。

(敵又せめてくる。)

和田。五月蠅い奴だな。私は追ばらつてやります。

（和田、味方の兵と共に敵兵を追ひ散らす。正成それを見送る。敵兵一人正成の後ろから忍びよる）

正成。影がうつつてゐるぞ。逃げろ、逃げろ。

（敵兵逃げる。まもなく大勢で楠をとりかこむ。）正季。來て之を見、怒つておどりかゝり、敵を逐ひ散らす。）

正季。お兄さん残念しました。味方がもう少しで直義を殺す處でした。もう一息と云ふ處で敵大將が一人とびこんで來て、逃がしてしまいました。

正成。さうか。

正季。お兄さん。味方はどん〳〵やられ出しました。皆、さすがに疲れて來ました。手傷をおはないものは一人もないでせう。

正成。さうか、それならもう一度、戰つてそれで死ぬとしやう。

正季。それがよう御座いませう。

（和田、兵士達をつれて登場）

和田。前面の敵はおいちらしました。

正成。さうかそれは勇ましかつたな、皆、御苦勞だつた。

（敵兵、又攻めてくる）

正成。さあ、之が最後の戰ひだぞ。勇士の手なみを見るがいゝ。（敵兵のなかに最先に切りこむ。）

（暫し空。正成達、疲れ切つて歸つてくる。）

正成。敵は一先づ逐ひ散した。正季、もう思ひおくことはないだらう。
正季。はい。
正成。それでは一緒にゆくとしやう。和田、私達はあの家のなかで死なふと思ふ。それで靜かに死にたいから、氣の毒だが見はりしてゐてくれ。
和田。畏まりました。
正成。皆さん。勇敢に戰つてくれてありがたう。私達は御禮を云ふ言葉がありません。皆さんどうもありがたう。
（正成。正季。皆に叮嚀に挨拶して小屋の内に入り障子をしめる。皆、家のまわりに護衛として立つ。）
正成。正季！　とう〳〵私達は死ぬ時が來たな。
正季。はい。
正成。お前はかう云ふ死に方をすると思つてゐたか。
正季。思つてゐたやうな氣もします。前世でいつか、お兄さんとこんな所で死んだことがあるやうな氣がします。
正成。さう云へば、私もそんな氣がする。
正季。お兄さん隨分ひどいお負傷ですね。
正成。十二ケ處傷をうけた。お前も隨分ひどい負傷をうけたな。
正季。はい。
正成。お前は何か望みがあるか。死ぬ時の望みは叶ふことがあるさうだ。
正季。（笑ひながら）お兄さん。もし叶ふならば七度、生れかへつて野心家を殺してやりたく思ひます。第一の北條を、

第二の足利を。

正成。(笑ひながら)正季。お前は仕合せものだ。それなら用意はいゝか。

正季。お兄さん。お兄さんの御望みはなんですか。

正成。私は罪業深い人間だが、眠りに入つたら、もう目はさめたくはない。だがもし目がさめたら、今度こそ、自分より馬鹿ものの云ふことはきかずにすむ世界に生れたく思ふよ。私を殺せるものは足利兄弟ではない。私を殺すものは、坊門の宰相清忠、あの阿呆だ。だが私は死ぬことを恐れはしない。すべてはなるやうになるだらう。私は萬事をなにかに任せた。死んでもいゝ許しを私はそのものから受けとるのだ。用意はいゝか。

正季。はい。それでは、お兄さん。

正成。正季！

皆。あつ。(驚く)

(障子に血かゝる)　幕。(一三、三、三)

滋強飲料　カルピス　漫畫

脚本「初戀」の話

一平畫伯廣告漫畫試案



一、カル雄の友人に醍醐味之助といふ劇作家がある。中央劇場より頼まれ脚本『初戀』を書かうとしたが、新鮮な床しい感じが出ず苦しむ許り。



二、噂を聞いて味之助の處へカル雄が慰問に來た。カル雄『幸ひカルピスの香りは初戀の味に似て居るとの評だ。試に飲んで感じを得給へ』味之助『ウム』



三、味之助は不性不精カルピスの一杯を飲んでみた。不思議！たちまちその香りは花の如き乙女と化し初戀の優しき氣持ちを飲む人に囁く。



四、『初戀』は上場された。劇場は連日賣切れ。作者は又藝術家側よりも表彰された。然し、その人力以上の表現はどうして得たか、疑問とされた。

顧問　三宅驥一理學博士　販賣所・酒店・食料品店・藥店・製造元ラクトー株式會社

四人ぐらし

宇野浩二

それは全く一ト月の中で幾度と數へる程でしかないが、私は稀に私の家の人たちと一つの食卓を圍んで箸をとる事がある時、——と言ふのは私はいつも私の不規則な生活の爲に彼等と食事する時間が一致しなかつたり、さては又私の始終のヒステリ的な不機嫌が彼等の氣持に傳染することを恐れるの餘り、大抵の時は自分の居間と定めてゐる二階の四疊半にそれを運ばして食べたりすることが多いので、と言つて私の家の人たちと言つてもそれは私と私の母と私の妻とそして十六歳になる私の從兄弟の中學生とのたつた四人切りなのであるが、滅多に食事にそろつて顏を合はすことがないのである。（あゝ何といふ古風な、世紀末的な、飯櫃な氣質の主人を持つた一家の不幸よ！）だから、却つて稀に私が彼等の食事の仲間入りをする事は、彼等に一種の氣づまりを與へる爲に殊更に私がそんな風に感じるのであらうか？——箸を下ろす音、茶碗を運ぶ音、物を嚙む音、吸ふ音、その間にまじつて時々極く僅か「今日は寒い」とか「曇つてゐるので部屋の中が暗い」とか、「日曜だから公園の動物園は賑つてゐるだ

ら」とかいふ言葉のやりとりの外、徹頭徹尾謂はゞ靜かではあるが何となく陰氣で重苦しい、——私はいつだつたか、たつた一度子供の時分田舍の親類に行つて蠶の部屋に這入つた時、澤山の蠶がぶち〳〵むち〳〵と音さして、元より蠶のことであるから何の話をしようもないが、青い桑の葉の間にもつれてそれを食つてゐたのを見た光景を、何とも言へぬ子供心に不思議とも神秘とも感じられて、今だに時々思出すことがあるが、私は私たち四人が默り勝に食事に着いてゐる時屢々それを思出すのである、それは彼等を輕蔑して蠶のやうに考へると言ふのではなく、寧ろその反對で、不斷は私自身の考や氣分に浸り過ぎてゐる爲にそれこそ謂はゞ彼等が眼中にないのであるが、私が彼等をこの蠶と共に思出す時は最も彼等の「存在」を痛感する時なのである、不斷なら彼等も亦蠶のやうに、單に人の母とか人の妻とかいふ普通名詞に過ぎないやうにしか私の注意を引かないのであるが、この時に限つて私に今更ながら彼等も亦それ〳〵置き換へられない個性をもつて生きてゐることが痛感されるのである。(不斷の私の自分主義に呪あれ!)

私と言へば、私はまるで一人の居候のやうに、その居候もたゞの居候ではなく、何かイプセンあたりの近代劇に出て來る不思議な象徴的な役割をする人物でもあるかのやうに、二階の隅の私のものと定めてある四疊半の部屋に閉ぢこもつた切りで、それと隣の部屋との境目の唐紙さへ決して私の外の者の手で開け閉めすることを許さなかつた、だから季節が夏に向つて、その唐紙を簾に變へなければならなくなると、私は忽ち巣を人に見付けられた獸のやうに又別の隱れ家を探さねばならなかつた、が、元小さな借家住居をしてゐる身分のものであるから、私は毎年毎年の夏を自分の家の近くで成るべく目立たぬところに貸部屋を探して、その季節の間だけ借りるのが一昨年からの例になつてゐる位であるが、だから私の家の外の人たちは冬の間の私のその部屋を綽名して「開かずの部屋」などと呼んでゐた、彼等は多分その部屋の中で私が一所懸命に私の仕事であるところの文章を書いてゐるか、それとも彼等には何が書いてあるか一向分

らない難文字の本にでも讀み耽つてゐるかと想像して、敬遠してゐるに違ひないのである、それも大方間違ひはないので、なる程私はその部屋の中でさういふ時間も暮してゐるのである、だが恐らくそれに費す時間の三倍も私はそこで何にもしないで、唯ぼんやりと机に肘をついたり、寢轉んで天井を見たりして暮してゐることを彼等は知つてゐるであらうか。

私の妻は四年前まで信州の下――町で藝者をしてゐたものであつた、よく彼女のやうな職業の者が客の座敷に來て言ふ事がある、「私は堅氣になつたら朝は早く起きて旦那樣の起きない内に身仕舞をして、旦那樣の起きる時分には火鉢に火を起して、お茶をいつでも入れられるやうにしておいて、そしてお裁縫を勉强して、旦那樣の代筆位は出來るやうに字も稽古して、お料理も一所懸命に習つて、晝間日本食を上げたら夕方は洋食を出すといふ風に、そして旦那樣のお出かけの時とお歸りになる時とは玄關に出て手を突いて挨拶するの」云々。が、若し彼女等が例へばさういふ運命にめぐり合つたとしても、恐らくその百人の中の一人でもがその言葉通りにしないばかりか、多分悉くその反對を行つて再び元の身分に戻るのが普通である。私の妻を私が初めて見た時は、それは確かその田舍町の藝者の温習會の舞臺の上でだつた、舞臺のまん中で二人の踊り手が曾我兄弟の心で踊つてゐる背景に、彼女は赤い毛氈を敷いた壇の一番右の端に坐つて「富士の裾野」の三味線を引いて一旦つうたつてゐた、そしてそれはたつた四年前のことであるが、今私はその時のことを强ひて思出さうとしても殆ど出來ない程である、それ程彼女は變つてしまつて、彼女こそ文字通り朝は夫の起きない内に身仕舞をし、裁縫も勉强し、習字の稽古もし、料理の法もせつせと習ひ、さて夫の送り迎ひには玄關に出て手を突いて挨拶することも忘れないのである、一年のうちに三味線を持つことは十度以上なかつた、たつた一度私は珍しく私の機嫌の輕かつた或晩のこと、彼女に「富士の裾野」をやつて見ないかと言つたことがあつたが、彼女は昔のこと

を思出してか思出さなかつたか、私よく出來ないんですものと言つて到頭應じなかつたことがある。

その同じ四年前のこと、私は同じ下――の町の一人の藝者に心をとられた、言ふ迄もなくそれは今の私の妻ではないので、彼女は當時一歳の子を持つて、私が初めてその町へ旅の鞄を下ろした頃、偶然二度目の披露目をしたばかりの時であつた。私は少年の頃叔父の家に世話になつて、そこから中學校へ行つてゐたのであるが、或日その叔父の妻である、即ち義理の叔母がどういふ折だつたか、「私の親愛なる甥よ、」西洋流に言へば、彼女がこんな風な調子で私に言つたには、「あなたは私のやうな無學な者の言ふこと、何を愚かな事を言ふと思ひになるだらうが、又實際私たちの言ふことに自信を持つて言へるやうなことは何一つないが、唯一つ……」さうだ、今思出したが、その時私は何でも中學四年生であつたが、何か女の事で人々に心配さしたことがあつて、その事を暗に叔母が諭すつもりでこの話をしたのに違ひなかつた、――彼女が言つたのである、「……唯一つ、私の親愛なる甥よ、人間といふものは男でも女でも自分がこの人こそ好きと思つた人と一緒になるといふことは、そんな事はこの世にはないことなの、自分の本當に心から好きと思つた人と連れ添ふといふことは、それは出來ないものなんですよ。」

「叔母さん、それはどうしてゞす？」と少年の私は聞いた。

「どうしてつて、それは私にも分りません、分る筈がありません、」と彼女は言ふのである。そして彼女は尙言葉をつゞけて言つた、――それを又便宜上西洋流に言ひ直すと、「それはつまり神樣の思召しなんです、我々がこれが一番都合がいゝと考へたことでも、我々をお造りになつた神樣のお目から見るとさうでないことがある、神樣はもつと廣いところから、もつと高いところから、この人間の世界を知ろし召して入らつしやるに違ひないので、即ち今言つたこの世で最も好きな人同志が夫婦になるといふ事は多分その神樣のお許しにならないことなのでせう。然し、今私がこんな事を言

つても、私の親愛なる甥よ、あなたは屹度心で嗤つてゐるかも知れない、ですけど、これから二十年經ち三十年經ちした後に、あなたは昔のことを考へて、私の言つたことをすつかり忘れたり、又思出してもあの馬鹿な無學な叔母がと、大抵のことは笑ひの種になることばかりに違ひないが、この事だけは唯一つの取柄だと思當ることが屢々ありますよ、あんな愚かな叔母だつたが、なる程、あの人が言つた通り、これだけは本當だつたなと思當ることがありますよ。私の親愛なる甥よ。」

　それは多分叔母その人の經驗からの言葉だつたのであつたらう、が、それが亦その後屢々私の經驗となつて、謂ふ通りその度毎に彼女の言葉を私に思ひ當らした、思ふにこの言葉は私のやうな浪漫家に眞理であるやうに、現實家にとつてもさうであるに違ひない、何故と言つて、それは俗に言ふところの「逃がした魚が大きく思へる」といふ諺の別の言ひ方かも知れないからである。けれども、私はさうは思はず、又思ひたくなく、さてその私の愛したところの山の子持藝者であるが、私は彼女に到頭私の心持を打明ける暇がないうちに、先に言つた彼女の朋輩であるところの、今の私の妻と輕卒な夫婦の交りを結んでしまつたのであつた。さうは言ふものの、今も言つた通り私は彼女に到頭私の心持を打明けなかつたのであるから、從つて彼女に裏切つたことを彼女に辯解する必要もなかつた譯であるが、然しよしそんな事をする必要があるとしても、そんな事は詫びるにしても嘘を吐くにしても大して難かしい事でないが、難かしいのは自分の心に嘘を吐き自分の心をごまかすことである。あゝ、彼女がどんなに自分の思つてゐることを口に出さない、自然人の蔭口をきかず、自分自身を吹聽せず、昔にかいたキリストのやうに物事を堪へ忍んで物言はない性質の者であつたか、その事は私はこの三四年來幾度となく私の文章の中で讃辭をもつて書いたが、私は今の私の妻と夫婦の生活をしてからも、一日として彼女のことを忘れたことがないのである、そして彼女を思ふことは初は私に苦みであつたが、今

は私にそれはこの味氣ない世の中での唯一の空想であり詩であり光である。世の人よ、晴れの文章の上でこんなうつけた話をする私を笑ひなすな。そして、今、私は又かつての叔母の言葉を思出すのである、――如何にも人間を造つた神の心は廣大無邊で、私に失はれた彼女は今、多分失はれたが故に、私の光となつたと私は感謝するのである。

そこで、私はその後も一年に一度か二度づゝ私の妻に隱れて彼女のゐる下――町に行くことを樂みにしてゐたのである。行つたとて、言ふ迄もなく私は唯の客として、彼女は唯のそれに呼ばれる藝者として、私たちは會つて、私も彼女も物言はずの性質であつたから何の面白い話をするといふ事もなく、唯ぽつり／＼と四方山の話を交すだけで、通りすがりの人のやうに又別れて歸つて來るのであつたが、一昨年の春のことであつたが、ふと私は或人から彼女が二度目の子を腹に持つたと言ふ知らせを受取つた、私はそれを又他の人からも確めた、私は取るものも取敢ず彼女を見に山の町へ出かけて行かうと思つたが、さて、彼女がそんな體になつたとて、私は心で驚きもし悲みもするが、言ふ迄もなくそれを何の責める權利もないやうに、彼女の方でもそれを私に特に濟まなく思ふ譯もないのではあるが、然し何となく私はそんな體になつてゐる彼女を見に行くのが惡いやうな氣がした、そして彼女も亦多分私には外のどの客によりもそんな體を見られることを厭に思ふに違ひないと考へられた。それは私の單に自惚れであるばかりでなく、先にも言つたやうに、小說を書くことを仕事にしてゐる私は、彼女を見て以來、彼女の藝名のさよ子といふのに稍々響を似通はしたつもりで、そして私の夢であるといふつもりで、ゆめ子といふ名前をもつて、一ダースに近い短篇小說を發表したが、その中で私は初めて彼女に對する私の心持をたとへその十分の一でもを書き書きしたのである、而もそれ迄度數にすれば何十度となく彼女に面と向つて會ひながら、一度もそんな言葉を口にしたことはなかつたのである、だが、口では言はなくても、それが相手に感じられない筈はなかつたが、それでもそれ等の文章はその後一層それを具體的に證據立てたこ

とに違ひない、兎に角さういふ不思議な關係に私たちはあつたのだつた。然し、今度その二度目の子を生む爲に彼女が商賣を止めてしまつたら、今度又いつ會へるか、或ひはもう會ふ機會を持つことが出來ないかも知れない、そして私はさういふ心の狀態で迷ひ迷ひしてゐるうちに、到頭その年を暮してしまつた、そしたら、その年の暮に彼女は商賣を止めたといふ知らせを私は受取つたのである。然し去年の春、私はもう出かけて行つても彼女に會ふことの出來ないその町に何かの影を求めるやうなつもりで二三日滯在に出かけたことがある。

私はその下――町の四年この方行きつけた宿屋に坐つて、或晩のこと、つれ〲なまゝに彼女の朋輩でもあり又多少私たちの關係を知つてゐるところの藝者の一人を呼んだところが、その部屋に卓上電話があつてそれが戶外線に連接するやうになつてゐて、ふとその女がその卓上の受話器を手にしたのである、瞬間私は彼女が何處へそれを掛けるかを直覺した、「もし〱局へつないで下さい、」と彼女は言つた、果して彼女が局を通して掛けた先は即ちさよ子の家に外ならなかつた、「もし〱、あなた××家さん、さよ子さん入らつしやいますか、あゝ、あなたさよ子さん……」

先程から少しづゝ動悸し出してゐた私の心臟は忽ち震へ出さねばならなかつた。「あなたさよちやん？」と彼女がもう一度念を押した時、私はバネ仕掛のやうに手を上げて「一寸々々」と震へを帶びたさゝやき聲で叫んだ、が、その前に彼女の聲はつゞいてゐた。「私よ、私くれ葉よ、」と彼女が言ふには、「私今××に來てるの、あの三階のお座敷に……分つて？……」

「一寸々々」と私は飛んで行つて、電話の口のところを手で抑へながら、「あの、あの、僕が來てるつてことゝで言はないでくれ給へ……」

「さう……？」と彼女はその善良さうな目で私を見上げて言つた、そして一寸の間默してゐたが、やがてその口元から

私が手を離したところの電話口に向つて言葉をつゞけた。

「體はどう？　もう外へ出られない？……今私……珍しい方が入らしつてるのよ、珍しい方……。分つて？　分つて？分らない？」（だが、先方のさよ子にはその××といふ家と、三階のお座敷といふ事と、そして何よりもくれ葉の口振りと氣配とで、その珍しい方といふのが誰であるかを察したに違ひなかつた、然しそれを又分らないと答へたに違ひなかつた。）くれ葉はその先方の返事と今し方の私の言葉との爲に一寸の間混亂して見えたが、やがて言つた「さう。……ぢやあ、私歸りにでも一寸寄るわ、そしてお話するわ。ぢやあ、さやうなら。」……

そしてその翌日私は下――町を立つたのである。それから丁度一年經つたこの二月の初のことに、下――町から東京へ來てゐる私の友人から突然手紙があつて、故郷からの消息にさよ子さんが今度上――町の方から、そこには矢張り彼女の家が出してゐる藝者家の支店があるので、そこから出たさうですと知らして來た。そこで、私が上――町にゐる知人にそれに就いての問合せの手紙を出したところが、それが向うにとゞかぬ先に、丁度行き違ひになつてその上――町の知人の方からも同じ知らせが來て言ふには、さよ子さんが一週間程前にこの土地で出ました、元のさよ子でなく、あなたがこれ迄屢々小說の中でお用ひになつたゆめ子といふ名前でとあつた。すると又その二三日後に先の東京の人から彼の鄕里の新聞を切拔いたのを封入した手紙が來た、その切拔には「下――町のさよ子が今度當地でゆめ次と名乘つて出た、」云々といふ記事が出てゐたのである、そして手紙の中に、「ゆめ次とは、多分あなたの小說の中のゆめ子のゆめと、それからその作者であるあなたの名の清次の次とを合はしたものではないでせうか、これは私の想像ですが、取敢ず……」云々と認めてあつた。

そしてこの彼女が名を改めて出たことは本當らしかつた、といふのはその後の分の手紙と前後して彼女が今度出た土

地であるところの上——町の、前に私が見たのとは別の新聞社から、どういふつもりか矢張り彼女の新しい消息の出てゐる新聞を私のところへ送つて來たのである。——

又しても私は自分自身に就いて餘り多く語り過ぎる惡習慣を讀者の前に曝け出したが、說話の關係上もう少し諸君の寛恕を乞うてそれを續けると、話變つて、その半月程前であつたが、私は世話してくれる者があつて銀座に近い或路次の中にある仕事師の家の二階の部屋を借りる事になつたのである。この部屋は然し私に最も氣に入つたものと言ふ譯には行かなかつたが、やがて沮々と溫い季節が來るならば、先にも言つたやうに私の家の四疊半の部屋のその隣室との境界の唐紙を開けなければならないので、全然私のものになり切る譯に行かなくなる、それの準備として少し早過ぎはするが、と思つて、その氣になつたのである、電車を數寄屋橋で下りてとある横町を一町ばかり行つたところの左側に小奇麗な路次があつて、その中は右側は誰のどういふ家だか監獄の塀のやうな高い板塀になつてゐた、そして左側に二軒の仕舞太家があつたが、その取附きの方が私がその二階を借りるところの仕事師の家で、見たところ路次はそれ切りで行きづまりのやうに見えてゐたが、實はその突當りまで行つて見ると鍵の手になつて又鍵の手になつて、それが向うの横町まで突き拔けてゐた、その曲り角を境にして私たち即ち仕事師の家を含む側が極めて閑靜であるのに引きかへて、他の路次は中に小さなおでん家があつたり、或ひは大きな料理屋の勝手口があつたり、唄の師匠の家があつたりする陽氣な騷々しい一劃をなしてゐた、そしてこれは私に氣に入らない場所ではなかつた。去年私がそんな風にして二ケ月餘り借りてゐた部屋は私の家の近くの東榮館といふ貸間專門に建てられた半洋風の建物で、それは私の家から近かつたのと、扉の鍵を中から掛けさへすれば外からは絕對に闖入される恐れがなかつたのと、その上にそれは私が全く誰にも話さずに全然秘密で借り入れたのとで、私はその部屋の中でならば贋札をこしらへることも出來る位だつた、が、それか

ら思ふと今度のは六疊と三疊の二間あるのは便利だつたが、抑もそれを私に世話してくれた者がそれを知つてゐた、即ちそれは私がいつとなしに馴染んだ或山手町の三流藝者で、彼女はその町で母親と二人で二三人の抱えを置いて自前で働いてゐる者であつた、そしてその母親の情夫で、殆ど一ト月の大半を彼女等の家に來て暮してゐる男といふのが仕事師で、私が今度その二階を借りることになつたそれは彼の友達の同じ仕事師の家なのであつた、彼女は私に屢々自分の家に遊びに來いと勸めた、母親といふのも養母で、彼女の情夫の彼女等の家に入浸つてゐる仕事師といふものも謂はゞ彼女の居候で、つまりその一家を經濟上に支へてゐるのは藝者の彼女なのであるから、その家に遊びに來るのに何の遠慮も入らぬではないかと彼女は言ふのである、言ふ迄もなくこの女は三流町の三流藝者に違ひなかつたが、私は又私のをんなを賞めるでないが、縹緻は二の次のである代りに、不斷は至つて口數の少ない、下品な稼ぎをした者であるに拘らず何方かと言ふと心持は上品とさへ言へる性質を持つてゐた、だが、神よ、彼女はヒステリイであつた、彼女は私に自分の家へ遊びに來いと言ふことを切出すのに恐らく三ケ月も掛つたに違ひない、或時は一寸言ひ出しては止め、又他の時は冗談のやうに言つて顏を赤くし、又別の時は彼女の無智な頭の智慧のあり切りを働かして暗示する言ひ方で、然し要するに彼女は私を彼女の情夫に見立てたのに違ひない、母親の情夫は仕事師か、そして娘の情夫は小説家か、人々よ嘲りなすな、私は諸君に嘲られる前に、私自身さうならないうちから、何度私を嘲り、人知れぬ暗がりで赤面し、腋の下に汗したか知れない。だが、私のやうな、物を斷れない性質をもつてしても、到頭それだけは實行する氣になれなかつた。すると、私が夏になると、私が家の外に勉强する爲の部屋を探してゐるといふ話を彼女は覺えてゐて、今度のその銀座に近い下町の仕事師の家の二階を私に世話しようと言ひ出したのであつた、それを私は斷らなかつたのである。

格子戸を開いた中は色んな火消しの道具が置いてある、一坪ばかりのタヽキになつてゐたが、都合のいゝのはその玄

關は階下の爲よりも二階の爲に作られたかと思はれる程、取附きに、眞正面に二階への梯子段が附いてゐたので、たまにその右手の若い衆の部屋になつてゐるところの障子に嵌められた硝子の間からちらりと姿を見られる外には、外の人と顏を合はす事なしに二階の部屋に上ることが出來た。去年の東寧館の時には、勿論矢張り家には秘密にしたことなので、机とか本箱とか座蒲團とか、さういふ日常の道具を集めるのに並々ならぬ骨折だつたのに比べて、それは一月の末の或寒い風の吹く晩であつたが、私は女に連れられて初めてその部屋を訪問した時、私はこの女とこれ迄屢々會つてゐたところの何處かの待合の一室か、否それよりももつと近いのは矢張り藝者屋の藝者の居間かと思はれた程、そこには新しい長火鉢と茶簞笥と紫檀の机とメリンスの座蒲團と衣桁と、そしてそれだけは多分下の仕事師の家のを借りたのであらうか、古びた二枚折の屛風と、その他炭籠や火箸や茶瓶や花瓶や茶道具や拭布や、悉く新しい道具が明るい電燈の下に輝いてゐた、茶棚の棚の上にはこれも新しい硝子箱入りの「仲の町」と染めた半纏を着た人形や、それは多分彼女の家から持つて來たものであらうか、友禪の着物をだらりと着せられた三尺位の人形やが飾られてあつた。だから私はそこに去年のやうに自分で苦心して道具を集める必要を見出さなかつた代りに、それは一見して私の部屋ではなくて彼女の部屋であつた、私は甚だ迷惑しなければならなかつた、その時初めて氣がついたのであるが、長火鉢の向側に坐つて、「明日簞笥を一棹持つて來させる事になつてゐますの、簞笥は隣の三疊の部屋に置く事にしませうね、」と言つた彼女の髮が丸髷であるのに目を見張りながら、私は然し心の中で、よく考へれば初めから分つたことであるが、私の計畫の裏切られたことを悲みながら、「これで大抵道具はいゝと思ひますけど、又氣がついたら段々に買つて來ておきませう、」と彼女が言ふのを、「あゝ、さうしやう、さうしやう、」と上の空で返事した。

私は實際その光景を見て、きやつと叫んで逃げ出したい思であつた。元、私の求める私の部屋は即ち私の安息の部屋

でなければならなかつた、私が最も接近して住まねばならぬ者――私の家族からも離れそして隠れて、私が完全に私一人を樂みたい爲のものでなければならなかつた、が、これはその反對のものであつた、何故と言つて、去年私が東京館の部屋でしたやうに、この部屋の壁の彼方此方に、山のさよ子の寫眞などを貼りつけたなら、この部屋の別の主人であるところの女は立ち所にヒステリイを起して、それ等の寫眞を悉く烟に變へてしまふだらう、私が一人の空想に耽る爲に、寢ころんで一時間も二時間もぼんやりと天井を見てゐたら、彼女は忽ち癇を起して、何を考へてゐるんです、私がそんなに邪魔になるなら、いつでも歸りますよ、さよならと叫んで、そして歸つて行く代りに泣き出して、私の毛草や半分禿げた頭に殘つてゐる髮の毛を引き拔くでもあらう。――だから、この部屋は私が樂んで行くどころか、初から義務のやうにして通はなければならぬ部屋であるのを見出さねばならなかつた。

「あなた、わざ〳〵自分の立派なお家があるのにこんな他所の部屋に入らつしやるのは勉強をしたいからつて言つたぢやありませんか?」と彼女は詰問して言つた。「それなのにどうして昨日も一昨日も來なかつたんです、私に會ふのが厭だからなんですか? 私は夜分に來ませんよ、私は藝者ですから、夜分は稼がなければなりませんからね。」

だが、私が出かけて行くと、大抵の晩は、遲くなつてか、或ひは九時頃からか、そして或時は酒の爲に顏を眞赤にして、「あゝ、今日は晝間から出てたので疲れたわ、だから骨休めに來ましたの、」等と彼女は言ひながら、屹度そこに姿を現はすのである。だから、私が一日でもそこへ行くことを怠ると、忽ちそれが彼女に知れて、彼女の怒りを買はねばならなかつた。

その頃のことであつた、山のさよ子が再び名前を變へて藝者に出たといふ知らせが私のところにあつたのは。

だから、私は心でいつも山の彼女の事を頻りに考へながら、もうあの部屋で勉強する事は斷念して、せめて晝の間だ

け私の家の四疊半で出來るだけせつせと勉强して、それから夜になると厭な勤にでも出かける樣なつもりで、その仕事師の二階に向つて出發した。一日の中で、せめて私は私の家を出て、上野の公園を通つて、それから明るい町に出て、三十分ばかり電車に乘つて數寄屋橋まで行く、たゞそれだけの間を私の最も樂しい時間に數へねばならなかつた、私はその間にだけ、私の仕事である文章を書く事も、その爲の取引をする雜誌社との約束の事も、私の家の事も、又仕事師の二階の事も、彼女の事も、出來るだけ一切の事を忘れて私自身の空想を追う事に費してゐた。公園の、去年、博覽會のあつた跡はもう大部分取拂はれて、私が或木と木との梢の間からその建物の一つの屋根を眺めて、山の町の湖水と見間違ふのを樂んだことなどを微笑と共に思浮べながら、暗い寒い道を行くのであつた。

その頃私の母は耳を病んで、毎日夕方の食事を濟ますと神田の醫者に通つてゐた。母も私の妻も私がそんなに毎日日が暮れると驛長のやうに規則正しく外に出て行くことを、初のうちこそ心にかけてゐたであらうが、この頃ではもうそれを當り前のやうに感じてゐた、多分私の留守の間など彼女等が火鉢を挾んで向ひ合つた時、彼女等はそれに就いて話し合ふより、より多く無言の中で私が何處で何をしてゐるのだらうと心にかけてゐたに違ひなかつたが、今更そんな事を私に問ひ正すことも、私に注告することも恐く無駄であるだらうと諦めてゐた。他所の家の人たちはどんな風に暮してゐるのであらうかと彼女等は時々考へた。矢張り私たちの家のやうに、一家の主人が何をしてゐるか、何を考へてゐるか、外に出たら何處へ行くか、家の者は知らずにゐるのだらうか、いや〱そんな筈はない、これは自分たちの家だけのことであらう、して見ると、自分たちに自分たちの家の主人に不思議な氣儘な男を持つた事を諦めるより外に仕樣がないのだらう、それは無論贋金をこしらへてゐるとか、惡い商賣をしてゐるとか言ふ譯のものではなからう、恐らくそれは秘密な女でもこしらへてゐるか、或ひは花柳の巷にでも足を踏み入れてそこらの女にでも熱中してゐるかであら

う、それも仕様がないが、どうかその爲に自分たちを見捨てるやうな大事が起らぬよう、あゝそれも然し起つて見れば何とも仕様のない事だが……と彼女等は考へた。私の母は三十歳になつたかならなかつたかの頃に夫を失つて以來、今日の日まで寡婦の生涯を送つて來たものであつた、又私の妻は早く眞の兩親を失つて二十歳から三十歳近くまで先に言つた田舍の町で藝者をして暮してゐたものであつた、さういふ境遇は彼女等に物事に無抵抗的な諦めの心持を多分に持來したに違ひない。

「ねえ、母さん、」と私の妻が私の留守の時私の母に向つて、ともすると眞劍な口調になりさうなのを、彼女は一生懸命に冗談のやうにして言つた。「私たち、若し置いてきぼりにされるやうな事があつたら、月々手當を貰つて二階でも借りて暮して行きませうね、そしたらその方が却つて氣樂かも知れませんわね。」

「本當にその方が氣樂かも知れないよ、」と母も冗談らしく寂しい笑ひ聲を以て應じた。「さあ、風呂へでも行つて溫まつて來ようか、又雪でゝも降るのか知ら、寒いね。」――

だが、私が珍しく私の四疊半の部屋に閉ぢこもつて、夕方の食事を終つてからも、しんとして音も立てずに坐つてゐると、梯子段に母の足音が聞えて、彼女は向う側の部屋から私の部屋に向つて叫んだ。

「今夜はもう出かけないのかい、何處か身體でも惡いんぢやない？　私、これから神田へ行かうと思ふんだが、お前出るんだつたら途まで一緒に行かない？」

「えゝ、出てもよござんす、」と私は答へて、彼女に私の部屋に這入られる事を恐れるやうに、自分から隣の部屋に立つて行つた。

彼女が神田の醫者に通つてゐた頃は毎晩毎晩晴天つゞきであつた。私の家から電車通に出る迄に通らねばならぬ公園

の道は可成り長かつた、そこは暗くて元より人家のないところであつたから、自然天の星などが最も多く目に止まつた。私たちは共に口數の少ない性質であつたから、その長い道の間に幾言も言葉を交すことがなかつた。その頃さうして私は母と十度以上も毎晩そこを通つたものであるが、それを總計しても多分一枚の蓄音機のレコードの片面に仕込むことが出來た程に違ひない。

「こゝのところへ來ると、いつでもあの大きな木の眞上のとこに三つ星さんが並んで見えるの。」と母が言つた。

「えゝ。」と私は答へた。

然し、三つ星は誰にも懐しい星に違ひなかつた、多分私もさうであつたやうに、私のその頃よりも又二十年も前には、私の母もあの星を見出して、三ツ星の歌をうたつた記憶があるに違ひない。その證據に彼女は私とその夜の公園の道を歩いた何度かのうちで、この同じ三ツ星のことを一再ならず話題にした。すると、その度に私は忽ち山の手持藝者のことも、數寄屋橋の仕事師の二階の部屋で會ふ女のことも、私の家にゐる妻のことも悉く忘れて、子供のやうな心持になつた、母と並んで着物の袖をすれ〳〵に歩いてゐると、三ツ星がいつの間にか濡れて見えて來るのである。

「私はいつもこゝへ來るとさう思ふの。」と母は動物園の前を通る時言つた。「こゝへ突然この中の獅子や虎が檻を破つて出て來たら、どうしようと思ふの、恐いわね。」

「そんな事は滅多にありませんよ。」と私は言つた。

「さうかね。今頃、獅子や虎はみんな寢てるだらうか、矢張り夜になつたら寢るんだらうね、獅子の仔はどうしてるだらう?」

「矢張り寢てるでせうね。」

又別の時彼女が言ふには、「私お前に頼みがあるの、然しお前の都合のいゝ時でいゝんだけど……」

「何です？」

「私、毎年三月のお節句が來ると思ふことなんだが、」と彼女は遠慮しいしい、「私、木に彫つたお雛様が欲しいの。それやお前の都合のいゝ時でいゝんだけど、……お節句が濟んでからでもいゝよ。」

私は突然笑ひ出したが、泣けさうな氣が手傳つて、「何だ、そんな事ですか、えゝ、去年も到頭買ひませんでしたね、今年は何とかして買ひませう。」

「此間淺草へ友子と一緒に行つた時見といたんだけど、あれはもう賣れたか知ら？……家には人形が、友子の持つて來たのが一つ切り、外に碌なのがないんだからね。」

「さうですね。」

「ほら、」と彼女は私たちが精養軒の横手を大通に出たところで、突然空を指さしながら「こゝからもあそこに三ツ星様が綺麗に見えるだらう。……」

そして多分私の家から公園を通り拔けて、電車か或ひは乘合自働車かで私たちは須田町まで一緒に行つて、そこから私は數寄屋橋に向ひ、母は大抵歩いてそこから小川町にある醫者の家に行くのであるが、そして歸りは無論別々であつたが、その間に私たちの間に交される言葉はそれだけが大凡一日分であつた。然し彼女はその事を、こんなにも大きく成人した息子と一緒にたとへ二十分でも三十分でも一緒に並んで歩く事を、樂みの日課にしてゐるらしかつた、私にも亦さうでなければならなかつた。彼女はもはや六十歳であつた。さういふ老女が次第に獅子や虎や、三ツ星や、さてはお雛様やお人形に就いて、謂はゞ童話の國に思を寄せてゐると見えるのが、私に何とも言へぬ甘い悲みを覺えさせるの

である。けれども又言ふ迄もなく彼々にもその外に様々なこの世の心配があらねばならなかつた。そしてそれに就いて彼女は彼女の唯一人の息子であるところの私に相談したり打明けたりしたいと思つてゐるのであらうが、いつも家にゐる時は二階の自分の部屋にこもつた切りで食事にさへ滅多に顔を出さない私に、それをする機會を持たないのに違ひなかつた。そして又母の心として、子は隨分頭を使ふ仕事をしてゐるのだし、自分たちの心配就にいてはこれ迄とてもいつも何にも口には出さないが、彼一人の胸で判斷しそして裁いてくれてゐるのだし、それにそんな事を改めて女や老人から話しかけられるのを好まない性質と見えるから、と遠慮してわざと持出さないらしかつた。けれども、流石に女心の胸に餘る事が溜つた時、或ひはどうしても直接に私に相談しなければならぬ時、さういふ時が幾つも幾つも重なつて、彼女の腹はふくれて來るのに違ひないのである。それを矢張り公園の道を歩きながら彼女が言つた。

「お前、月に一度でも二タ月に一度でもいゝから、活動へでも物を食べにでも女子を連れて行つておやりよ。」その調子は矢張り遠慮しいしいだつたが、流石に動物園の話とは幾分趣が違つて聞えた。「他所の夫婦はどこの人でも、お前のやうなのはないよ。一週間に一度位は屹度夫婦二人で外へ散歩に出て行くのに、お前たちは未だ一度も二人で外へ出たことがないぢやないの？」

「一度公吉と三人で鳥屋へ行つたことがありますよ。」と私は言つた。

「たつた一度ぢやないの。」と彼女が續けて言ふには、「考へて見れば女子だつて可哀さうだよ、私の様なものでも姑となるとそこには遠慮もあるだらうし、親の家はなし、身内らしい身内はなし、女中だつて此頃は月に一度の休日があるのに、あの子には今日が樂みといふ日がないんだもの。ね、本當に何處へでもせめて月に一度位連れて行つておやりよ。」

「えゝ、さうしませう。」――

これも亦或晩の公園の道中での彼女との會話であつた。

「公吉のこともね、」と彼女は言つた。公吉と言ふのは先に言つた私の從兄弟で、即ち彼女の兄の子であつた。彼女の兄は今から七年前に三人の子を殘して墓に行つたものであるが、彼と彼女とは生前決して仲のいゝ兄妹でなかつたばかりか、彼女が長い貧しい寡婦の生活中にも彼は一向彼女の面倒を見なかつた、彼女はいつも彼を薄情な兄だと恨んでゐた。が、彼の甥である私は少年時代をずつと彼に引取られて養育の恩を蒙たものである。ところで、七年前に彼は死んで行く病氣で三月程床に就いてゐた時、ふと此世の果敢なさを感じたものであらうか、當時私はまだ自分一人の下宿代さへも支拂ひ兼ねるやうな狀態で、母を抱えて苦んでゐたが、或日突然彼女に來てくれるようにと電報を打つて來た、これは恐らくこの兄妹が一生のうちで、幼年の頃は知らないが、何方かゞ何方かを懷しく思つて呼んだ最初のそして最後だつたに違ひない、彼は多分五十五六歲で彼女は五十二三歲であつた。長い間薄情な兄だと心に恨んでゐたものではあるが、彼女はこの電報に接しると、私がやつとの事で調へた旅費を待兼ねるやうにして彼の病床に飛んで行つた。私はこの時のことを思出して今斯うして筆を取つてゐると、忽ち自分の書いてゐる文字が淚で流れ出して見えて來る、人情の自然さが私を打つのである。その時彼等は五六年振で會つたのである。

「お良さんも隨分年とつたね、」と病の兄が妹の顏を見るなり斯う床の中から言つた。「東京へ行つて隨分苦勞してゐるらしいな。濟次はまだ芽が出ないと見えるね。」

答の代りに母は忽ち淚ぐんだ、彼の言葉通り彼女は東京の私の傍に來て三年になるが、實際口に言へない苦勞をつゞけてゐたのだつたから……。そして又、さういふ彼の兄が流石に三月後に到頭死んだ位であるから、めつきり瘠せて衰へ一てゐるのを彼女は見た。彼等はその瞬間しみ〴〵と兄妹の情を搖すられたに違ひない。その時公吉は十歲であつた。

死んで行く叔父は子の公吉の行先を案じて、甥の私に後事を頼みたかつたといふ理由も勿論あらうが、それと共に彼は本能的に一生不幸であつた妹を悲む心や、自分が養育して今は男一人前の年になつてゐる甥が、未だに碌々として暮してゐるのを案ずる心やに充たされたのに違ひない。——

然し、今は幸にも私はその公吉を私の家に引取つてどうやら斯うやら暮す身の上になつたのである。公吉は中學の三年生でいつも一番か二番の成績をおさめてゐる。今、私の母が公園の道を歩きながら「公吉のこともね、」と言つたのは、此頃彼の國にゐる母親（伯父の妻で、即ち先に書いた、昔男女に就いて私に教訓した伯母のことである、）がこの人はよくある女の癖で目先の事ばかりに心を取られる性分で、誰かに公吉を中學などは止めさして銀行の給仕にでもしたら、母親の傍にもゐられるし又僅づゝでも月給がとれるから等と唆かされたのだらうか、そんな事を言つて來る、無論それには私も私の母もそして公吉自身も不贊成なのであるが、此頃頻りにその催促の手紙を寄越してどうかすると母親が迎へに來兼ねないのである、その事を私の母は心配して言ふのだつた。死んだ伯父は私を愛してくれた、彼は彼の妹である私の母の面倒を見る代りに、然しそれは理屈でなく感情で私を愛を以て養育してくれた、今私の母も、彼女は彼女の兄が生前彼女につれなかつた事は傍に置いて、彼の子である彼女の甥を感情を以て愛してゐると見えるのである。

今はだん／＼春の試驗が近づいたので、公吉は彼の居間である小さな二疊の部屋で毎日學校から歸つて來ると一心不亂に勉強してゐる樣子だつた。さうだ、春と云へば、私の家の三坪とない小さな庭の一本の楓の木を注意して見ると、昨日まで或ひは雪だつたり風だつたり氷雨だつたり、まだ一日として草木の滋養になる日があつたとは思へないのに、何といふ季節の力の素晴らしさ！　それ等の枝々には最早や紅い芽が萌して見えるのである。この季節は私の經驗に依ると人の心の常規を失はせる、現に私が斯うして七年前の伯父と母の樣子を書いてゐる最中にも、突然感傷的な氣分に

襲はれて紙の上に涙をこぼすのもその爲であらうか、頭痛持の頭が三日に上げず痛み出したり、私の母の耳が惡くなつたり、癇性な氣質のものの癇が昂ぶつたり、急に世の中が厭になつたり、不平の感情が高まつたり、苛々し出したりするのも皆この季節の持つて來るものであらうか。それは然し又私の考に依ると、人々は、どんな人々にもそれ〴〵の不平や屈托や悲や怒や喜や等がある、それは廟堂の大臣にも市井の紙屑屋にも同じことである、元より男にも女にも老人にも子供にも同じことである、然し人はそれ〴〵の性質に依つて、或ひはそれ〴〵のこの世の習慣や禮式や束縛や壓迫やの爲に、大抵はそれを胸に收めてしまはねばならぬ、そして私がいつか子供の頃に田舍の蠶の部屋で見たそれのやうに、唯桑の葉にまみれてぷち〴〵むち〴〵とそれを噛む音の外無言の營みを營まねばならぬ、そして私の考ではそれを噴き出させるのがこの季節であるのだ、即ちこの季節になつて、諸々の人は頭痛になつたり、癇癪を起したり、憂鬱病に罹つたり、即ち一口に言ふと男女に拘らずヒステリイの狀態になる、即ちヒステリイは人が彼等自身でこしらへたこの世に對する反抗の爆發に外ならない、そしてこれこそ凡人に與へられた最も生き甲斐ある時であり、或ひは最も正直に生きる時であり、又最も天才的になる時である。

「あなた、公吉さんがお部屋でさつき何だかしく〴〵泣いて入らつしやいますの、」と私の妻が私に言つた。「別に泣くやうな譯つてないやうに思ひますのに。」

多分少年の彼も亦この季節の病氣に見舞はれたのだらうと私は思つた。「そして今どうしてゐるんだ？」と私は暫くして聞いて見た。

「何だか寢て入らつしやるやうです、」と彼女は答へた。

が、その晩だつたか、彼女が又言ふには「秀の言ひますのに、公吉さんは何だかあなたの本を讀んで泣いてらしつた

といふ事ですが……？」
「僕の本ツて、僕の書いた小說本の事か？」と私は稍々驚い聞いた。私は不斷自分の書いたものは一切家の者に見せない規則にして、さういふものは悉く鍵の掛る本箱の中にしまつてあるのである。「そんなものどうしたんだらう？」
「何でもお友達の方にでも借りて入らしつたらしいんですよ。」
話はそれ切りであつたが、その翌日私は何かの用事で彼の部屋に這入つたところが、果して彼の机の上に私の昔書いた一冊の小說本が載つてゐるのを見出した。そこで、彼がそれを讀んで泣いてゐたといふのはどういふ所だらうと思つて、ばら／＼とその頁を繰つて見ると、成る程、それは先に一寸話した私の母とその兄、即ち彼にして見ると彼の父と伯母とが、父が死の三日前に何を思出したのか、伯母に三味線を彈かして、彼が病床の中で唄をうたふところを書いた一文だつた。私はそれを元の通りに伏せておいて、急いで二階の自分の部屋に歸つて來た。そして鍵に依つて本箱を開けて、同じ本を出してそツと同じところを讀んでゐるうちに、私も亦しく／＼と娘のやうに泣け出して來たので、それを止めて元の通りに收つておいた。
多分それと同じ晩の事であつたかと思ふ、その頃私は旅の計畫をしてゐた、それは例の山の町で一年振りで醫者になつたところのさよ子に會ふ目的だつたので、私は妻にその行先に就いては明かすことが出來なかつたが、私の考では何處か別の土地に行つてゐる友達に頼んで、その人からその地方の繪葉書を送つてもらつて、その繪葉書の一二枚に私がそこにゐる體にして家へ宛てた簡單な消息文を認めて、改めてその人のところへ送つておく、それを或日私がさよ子の町へ行つてゐる間、程よい日にその友達から豫め送つておいたその葉書を私の家の方へ出して貰ふ、——とそんな風にして私の行先を晦まさうと計畫してゐたのである、そしてその時の爲に私は妻に、突然の故に彼女を驚かさない爲に、

近いうちに一度氣保養がてら旅行して來たいと言ひ言ひしておいたのである、そしてその晩も私は何氣なく、「仕事を片附けて旅に出たいなア、」と半分獨言のやうに言つたのだつた。

彼女は近頃雜誌や書物の記事を手引にして毛糸の編物細工を稽古してゐた。その時も電燈の下で二本の長い編針を默つて動かしてゐたが、私のその言葉に長い間答へなかつた、けれどもその沈默は何か答へようとする氣配を十分現してゐるやうに見えた、だから私がその時頻りに雜誌か何かの頁を鹿爪らしく繰りながら、實は彼女が何と應じるかの期待で心を空にしてゐたやうに、彼女も亦夢中で編針を動かしてゐたに違ひなかつた。彼女の無言が私に何故となく訴へるやうな咎めるやうな氣配を感じさせた。

「あなた、」と到頭彼女が言ふには「あなたは私に何か打明けて下さらない事があるでせう?」

「僕はお前にも家の者にもいつも何にも打明けない習慣ぢやないか、」と私は反抗的に應じた。

「それはさうですけど、でも……」彼女はそこ迄言つて又長い間言葉を切つてから、「ね、私に打明けて下すつてもいゝ事で……?　お分りになるでせう?」

「分つたよ、」と私は言つた。「さよ子君が文藝者に出たといふ話だらう?」

「えゝ、さうです。私、いつかあなたの机の上に何處から送つて來たのか、田舍の新聞が散らかつてゐましたので、ふと何氣なしに開けて見ますと、赤い筋で括弧がしてあるところがありましたから、それで讀んだんです。――今度はいつもあなたの小說に書いてある名を名乘つて出たとか言ふぢやありませんか。」

「さうのやうだね。」

私はそこで何の用もないのに、何故かさうしなければならぬものゝやうに、彼女の頭の上の電燈の傍に寄つて行つて。

手にしてゐた雜誌を特に明るい所で讀むやうな恰好を裝つた。それ切りで私たちの會話が途切れてしまつたのが何故となしに、彼女が鼻をすゝる音さへ泣いてゐるのではないかと私には疑はれて、氣に掛つたのでもあつた。私は雜誌の頁から目だけを反らして、彼女を頭の上から覗いて見た。そしてふと私の目に止まつたのは、彼女が長い二本の編針を叉の字に組んだやうな恰好の中に、仕上げつゝあつた毛糸の細工物が、それは多分肩掛か何かだらうと此間から想像してゐた私の意外にも、派手な色糸を使つた赤ン坊の帽子であることだつた。

「何だい、それは？」と私は丁度言葉の次穗を失つてゐた時だつたのを利用して、彼女の頭の上から尋ねた。「子供の帽子ぢやないか？」

すると、彼女は答へる前の瞬間に、その細工物を胸の中に抱き隱すやうにして、「えゝ」と小さい聲で答へた。

「何處かへやるのかい？」と私は尋ねた。

「いえ、別に……」

そこで私は何か用事を思ひついたやうに裝つて、急いで四疊半の私の部屋に歸つて行つた。私は机の前に坐つてからもいつになく彼女の身の上が考へられた。隣の間の電燈の下で俯向いて誰といふ的もない（元より彼女に子はないのである。）子の帽子を編んでゐた彼女の頸筋の邊が、明暗の加減でかひどく心細さうに見えた畫像が、私の目から消えなかつた。如何にも私の母が言ふ通り、彼女は孤獨なものであるといふことが、その時程私に具體化されて見えたことはなかつた。男の私には心を傾ける仕事があるし、母には動物園や星の夢があるが、彼女はそれ等の何にもを持たぬのである。私は甚だ悲しくなつたので、その晩は、又の日に會つた時どんなに女の怒を買ふことがあらうとも、例の數寄屋橋の二階に行くことを止めて、せめて妻と話し合はぬ迄も彼女と隣同志の部屋で坐つてゐようと考へた。が、それから十

分と經たなかつた時、母が下から上つて來る足音がした。彼女は隣の部屋で妻に向つてこんな事を言つてゐた。「今夜はもう清次は出かけないのか知ら、何處か身體の具合でも惡いんぢやないの？」

「いゝえ、別にそんな樣子でも……」と妻は言つて、唐紙の向から私に聲をかけた。「あなた！」

「あゝ、出かけてもいゝよ。」と私は忽ち今迄の考を消滅さしてしまつて、妻に向つて、「母さん神田へ行くんだらう？ぢやあ、僕も出かけるよ。」

「母さん！」とそこで隣室の妻は私の言葉を取次いで、耳の遠い母に傳へた。「お出かけになるさうです。」

「さう、ぢやあもうぼつ〳〵出かけようか。」と母が向うから私の方に聲をかけた。すると、一寸それから間があつて、

「あの……私、」と妻が言ひにくさうに、それが私の部屋にもはつきり聞えるのであるが、多分母に向つてだらう、斯う言ふのが聞えた。「私、山下まで…電氣の球を換へに行きたいと思ふんですが、一緒にそこ迄行つてもいゝでせうか？」

「あゝ、行かう行かう。」と母が答へた。「電氣の球なら私がお醫者樣の歸りに寄つてもいゝけど、留守番は公吉に賴んで、散歩かた〴〵あんたも一緒に行かう。」

「えゝ、有難う。」と妻は言つて、今度は私の部屋の方に向つて恐る恐るのやうに、「いゝでせうか、あなた？」と言つた。

「いゝよ。」と私は答へた。

さうして私たち親子三人が連れ立つて、それは唯公園を北から南に通り拔けるのと、上野山下から須田町までの電車に同乘するのと、それだけの途ではあつたが、私たちの四年來での初めての出來事に違ひなかつた。が、私たちの交した口數は至つて少なかつた。動物園の前に來た時、例に依つて母が言ふには、「お猿は今頃どうしてるだらう。いつだつたかな、もう二週間にもなるか知ら？」と彼女は私の妻に言つた。「この前あんたと一緒に見に來たのは、——あの時お

腹の大きかつたお猿はもう生んだらうか？」

「もう生れたかも知れませんね、」と妻は應じた。

「明日のお午からでも見に行かうか、」と母は言つた。

そして私は須田町で彼女等と別れて數寄屋橋へと向つたのである。その頃は或晩は北の方から明日は雪を約束するかと思はせるやうな冷たい風が吹いたり、かと思ふとその翌晩は地震でもありはしないかと思はれるほど變に溫かだつたり、柱曆を見ても二十八日の次に突然三月一日と記されてあるのに驚かされるやうに、取分け季節の變化のあわたゞしさの感じられる時であつた。數寄屋橋の仕事師の二階で私の會ふ女は、その善良なことは喇叭を以て吹聽しても間違ひではないが、同時にさういふ性質のものがその職業と境遇とから應々感化されて陷るところの隨分我慢者でもあつた、そしてさういふ堪へ性のない女の當然の傾向として、この季節の變化の氣分をその體にも心にも甚だ鋭敏に感じるものに違ひなかつた。だから私は晝間は私の妻の極端な堪え性を見て、夜は私の情人のその正反對な性質に接しる譯であつた。彼女は一晩のうちに、それも私と彼女と會つてゐる時間はせい／＼三時間以上でなかつたが、これといふ譯もなしに必ず泣き顔と笑ひ顔とを何度交る交る見せるか知れない。私がその折角私の手に入れた部屋なのであるからと思つて、ぽつ／＼と家から私の本や畫の額やを運んで、初め彼女が私に用意した人形や羽子板やと目に立たぬやうに置き換へておくと、機嫌のいゝ日は彼女はその私の趣味を賞めた、が、反對の日はその事を憤慨した。そんなら一應この部屋を引上げようと私が機嫌を惡くして言ふと、彼女は無論泣出すのである。私は斯ういふヒステリイの女の氣質を、以前私がさういふ氣質の女と關係して苦勞した經驗を持つてゐるだけに、人一倍に了解し同情するものであつた。私は屢々こんな事を考へることがある、と言ふのは各々のヒステリイの女は、彼女等は世間一般の男からは相手にせられないし、又

間違つてそんな男と知り合つても忽ち仲違ひになつてしまふものだし、それを知つてゐて、彼女等はヒステリイだけが持つてゐる天才的な直覺力で、男を見る時最初の一瞥で相手が自分に適合するものであるかどうかを見別ける、と言ふよりは本能的にさういふ男に心を取られる、それは丁度神樣が人間以外の諸動物にそれ〴〵附與してあるところの自衛の本能に似てゐる、そして私のやうな性質のものは屢々ヒステリイ婦人に見出されるものではないか、と。――

それは三月二日の事で、私は夜の十二時近くに數寄屋橋の二階から女と二人で須田町まで同じ電車に乘つた、（須田町は電車の別れ路、そして女との別れ路――何の事か、斯ういふ呂律の廻らない文句がいつとなしに私の頭の中に出來てゐて、私はこゝへ來る度にいつの時でもこの文句に出鱈目の節を附けて口吟む習慣になつてゐた。交通巡査よ、電車の旗振りよ、そして目に見えぬ神よ、私を守り給へ！）そこで私たちは、彼女は左に私は右に別れて、あゝ今夜は又冬が來たやうに寒いな、と獨言ちながら、そして先に言つたヒステリイ婦人說に就いて考へながら私の家へと向つた。

私は每晩そんなに遲いので、表の戸だけ閉めかけて、家の者には先に寢てもらふことになつてゐた。戸を開けて、戸を閉めてこそ〳〵と鍵を掛けて、さて上つたところが二疊の玄關の間で、その次が直に二階に上る階段になつてゐる、階段の橫手を通り拔けた突當りに從兄弟の中學生の公吉が寢てゐるのである、又玄關の右手の四疊の茶の間には女中の秀が寢てゐるのである、が、私はいつもする通り階段の右手の奧の間に通じる唐紙を開けて、その右側の壁の釘に私の外套を脫いで掛けることになつてゐた。言ひ忘れたが、私がどんなに言ひ含めておいても、私の妻だけは必ず私の歸るまで起きてゐるのが習慣であつたが、何でもその二三日前から彼女はリウマチスを病んで、二階で寢た切りであつた、だから、彼女は私の歸つて來た氣配を聞いても、いつものやうに迎へには下りて來なかつたのである。だが、私が今言はうとするのはそんな事ではないのである。

母の寢てゐる奥の間は六疊で、その右の隅に間口一間半で奥行二尺位の變な床の間があつた、そこに戸棚になつてゐる高さ二尺位の置床が置いてあつたが、彼女はいつもその床の間に添うて緣側のある南の方を枕にして寢てゐた。年寄のことで、まして借家住居の事であるから隙間の風が寒いといふので、彼女は枕元に屏風代りに四枚折のべら襖を立てゝ、枕元に煙草盆と煙管と眼鏡と童話雜誌と、そして果物が好きなので大抵蜜柑か林檎かを一二箇と、それだけを子供がよくさうして並べる事を樂しむ樣に、正しく飾り並べて眠つてゐた。だがこれは私がいつの晩でも便所に通ふ度にこゝを通るので見馴れてゐる光景であつたから、今更私の注意を引く程のものでなかつたが、否、私がその晩その部屋の唐紙を開けるなり私の目に眞先に付いたのは、その寢てゐる彼女と並行してゐる置棚の上の光景であつた。あゝ、私はよしない自分自身の夢や痴情に耽つてゐて今年も彼女の希望にそはなかつたのである、何故と言つてその床の間にはいつもの、それは私の妻が田舍にゐた時分に名もない畫家の會か何かで買つたものに違ひない山水の掛軸の代りに、一對の立雛を畫いた軸が掛つてゐたからである、だがその次の瞬間、私は「はて?」と思つて、そつと寢てゐる母の目を醒まさないようにその傍に近寄つて行つて目を凝らして見て、忽ち電氣に打たれた樣に感動しなければならなかつた、といふのはそれは別の掛軸ではなくて、いつもの山水の軸を裏返したものゝ上に、玩具屋に賣つてゐる色紙でこしらへた立雛の紙人形を即製に貼りつけたものなのであつた。私は思はず笑つた。だがそれは間違ひなく一瞬間しか笑へなかつた、私は目と目との間の鼻の邊がきゆつと痙攣して來るのを感じた、そして忽ち濡れて來た目で、その軸の前に桃の花の活けたのと、(それは私の妻の丹精に違ひない、彼女は活花だけは可成り巧みであつた、)そしてその傍に彼女が持つて來た可成りもう年代ものの、それは母が常に「家には人形らしい人形は友子の持つて來たのが一つしかない、」と歎いてゐたところのものであるが、最早やその着てゐる友禪の着物も古く、中にもその顏は多年の塵を被つて赤黒くな

り、ところ〲に黑いしみさへあるやうに見えるそれが、ぽつねんと壁にもたせかけて多少斜めに傾いて置かれてあつた。そんな場合のさういふ人形に限らず、人形といふものはぢつと見詰めてゐると實に物悲しげな顏をしてゐるのが常である。そのつや〱光つた、心持ふくれた頰の具合と言ひ、そのおかつぱの髮の毛と言ひ、中にもその變に潤ひのある光つた目の玉と言ひ、それ等の總てが持つてゐる表情は何とも言へぬ憂ひを堪へてゐるものである。まして此場合寢てゐる母の傍で、彼女の安息を見守るやうに、置床の上で、安定の位置を失つて半ば傾きかゝつたまゝぢつとしてゐる人形の顏は、私に堪えてゐた淚を一時に呼出さねばならなかつた。人形の横に何合入かの瓶詰の白酒がぽつねんと貧弱さうに立つてゐて、その又傍にいつの間に仕上げたのか、いつか妻が編んでゐた毛糸の子供帽子も飾つてあつた。

けれども、幸なことにその翌朝は昨夜と變つてほの〲とした溫い日がさしてゐた。私たちは、いつか日の位置も變つて來たと見えて、それがその六疊の部屋の半まで日が這入つてゐるのを珍しい出來事のやうに話し合ひながら、いつになく私も口數多くなつて、朝の食卓に母と妻と從兄弟と四人そろつて就いたのである。そして裏返した掛軸に貼り付けられてある立雛の話も、私たちを愉快に笑はせる材料になつた。それは昨夜母と妻とが湯屋の歸りに思ひついて買つて來たといふ話であつた。冬の間殆ど出入りの時の外開いた事のない椽に向つて、障子もその朝は一ぱいに開かれた。すると、庭の中のたつた一本の木である楓の木の芽が、めつきりふくれて來たことも私たちの陽氣にする話の種になつた。さてはこれも私たちの家族の一員に違ひない一疋の犬も、日の蔭を追うて椽側に上つて來て、そこの段々少なくなつて行く日かげの中に丸くなつて眠つてゐるのである、彼は時々ふと目醒めて私たちの中の誰かの目と目を見合はすと、寢ころんだまゝで輕く物懶さうに尾を振るのである。



從妹

菊池寛

從妹と私とが、一緒に上京したのは、もう十二三年も昔の事である。そのとき、私は廿二で從妹は十九であつた。

そのころ、私は可なり失意な境遇にゐた。私は、その夏中學卒業後推薦で入學してゐた官立學校を除名されたのだつた。その學校にゐた頃の私は、何と云ふ原因なしに、亂暴で滅茶苦茶だつた。私は、その教員を養成する學校へ、心からの志望でなしに只一番學資がかゝらないと云ふ理由丈で、は入つてゐたのだ。從つて私は學校や學課に對し、尊敬も誠意も持てなかつた。羊の中に、狂犬が交じつたやうに、大人しい生徒の中で、私一人わが儘一杯に振舞つてゐた。私は、教科書を殆んど持つてゐなかつた。そして、授業の時間毎に、机を傍に並んでゐる級友の方へ寄せて本を見せて貰つた。又私は、學校を休み、そつと寄宿舍を脱け出して、芝居の大入場で、半日を過して歸ることも多かつた。私の行動は教授達の眉を、ひそめさせた。その中でも、私は舍監をしてゐた歴史の教授に、一番愛想を盡かされた。それは、春の終りの午後で

あつたが、私は歴史の時間に教室へ行つたとき、筆記のノートを、忘れて來たのに氣が付き、寄宿舍へ取りに歸つた。すると、寄宿舍の傍の、櫻の若樹に圍まれたコートで、顔を見知つた人達が、テニスをやつてゐた。私がは入ると、丁度三組になるのだつた。うらゝかな晩春の日を浴びて、テニスをやることが、いかにも樂しく思はれたので、私はフラ〳〵として、ラケツトを取つた。そして、私は、夢中になつて、二時間もやつてゐた。その裡にふと氣が付くと、コートに添つた道を寄宿舍の方へ歩いて來てゐた舍監が、私を見付けると、立ち止まつて、私の方を睨み付けてゐた。私は、何のために舍監が私を睨むのか、何うしても氣が付かなかつた。その日の夕方私は不意に舍監室へ呼ばれた。

「君は、何うして歴史の時間を休んだのかね」

舍監は、苦り切つて云つた。私は、やつと舍監が、テニスをしてゐた私を、睨んだかゞ分つた。

「氣分が惡かつたものですから」

「うん。それによくテニスが出來たね。」

私は、ハツと思つたけれど、こんな時、決して負けてはゐなかつた。

「テニスでもやると、氣分が晴れるかと思つたのです」

舍監は、私のへらず口に、呆れて私を憎惡の眼で見直した。

その上、私は級會があつたとき、その席上、教授達の忌諱に觸れる演説をした。それは、たゞ個人主義を主張した丈であつたのだ。その頃の、あゝした學校では、個人主義など云ふものは、可なり危險な思想であつたのだ。私は、忠實な學校大事な級友達の即座な反對を受けた。おしまひに、擔任の教授が、立ち上り、そして雜誌などで、讀みかぢつた思想を振り廻す危險を指摘した上、共同一致の美を說き、級のために團結しようと思ふ者は、一齊に乾杯しようと云つた。

忠實な學生達は、拍手してこれに應じた。私も、四面楚歌の裡に、仕方なく立ち上つて、リキユールの中の安葡萄酒を飲みほした。自分の心柄とは云ひながら、私は可なり不快であつた。

そんな譯で、私がその夏休みに歸省すると、除名の通知が、後を追ふやうにやつて來た。さて、除名されて見ると、私は當惑した。一番學資のかゝらない學校を、しくじつたのであるから、學資の乏しい私には、他に選ぶべき學校はなかつたのである。折角推薦した學校を、しくじつたと云ふので、私は中學校の先生達の信用も無くしてしまつた。家では、元々嫌な學校へは入つたのが、分つてゐたので、そんなに非難されもしなかつたが、父も兄もがつかりしてゐるらしかつた。私は、怏々として一夏を過した。

私は、もう他の學校へは入ることを斷念して、司法官か辯護士の試驗を受けることを考へ付いた。私は、法律などに少しの興味もなかつたのであるが、學資のない私には、それが世の中へ出る一の早道であるやうに思はれた。がそれにしても、二三年の間の學資は必要だつた。折よく私の家の遠縁に、小金を持つてゐる一人者の老人が居た。私が秀才だと云ふことは、私の家の親類の間では、迷信に近いほど信用されてゐたので、この金貸しでもしさうな鄙吝な老人が私の學資を出して置けば、五年もすれば、十倍にもなつて歸つて來るやうに考へたらしい。私が將來、この老人の養子になると云ふ條件で、私はこの老人から學資を得ることになつた。私は、學資を得ることさへ出來れば、それが盜人の懷から出てゐようと、介意はないと云つたやうな氣でゐた。

中學校を出て、直ぐ上京した時には、私は級中最初の上京者であり、最初の專門學校入學者であつたので、同級生や下級生から、私は華々しい見送りを受けたものだつた。が、私のこの二度目の上京は、コソ／＼と故郷を逃げ出すやうに、慘めなものだつた。私は、友人や中學の先生などにも、知らさずに、ひそかに上京しようと思つてゐた。

丁度、その時に、偶然私の從妹も上京することになつた。從妹は、その年の四月に、女學校を出たのであつた。彼女の父は、よほど前に死んで、母と姉と三人で、私の家の近所に住んでゐた。生活費は東京にゐる彼女の腹違の兄から送つて來てゐるのであつた。彼女の婚期が近づくに從つて、彼女の兄は、彼女を東京に呼んだのである。東京の兄の家で半年ばかり家事の見習をして、彼女の厄年を過し、來年になつたら、結婚させると云ふ豫定であつた。

「若い者、同志ぢやけども、豐さんなら、信用が置けるけに、」

「へえいへえ。豐さんなら、安心して一緒に行つて貰へるわ」

彼女の母や姉は、さう云つて、私と同行させることゝにした。無骨な寡默な私は、そんな風に信用があつた。

十九になる從妹は、十人並に美しかつた。目が、少し窪んでゐたけれども、色白で顏立はとゝのつてゐた。從兄弟姉妹と云つても、親疎の度は可なり違ふものだが、從妹と私の家とは可なり親しかつた。丁度、私の妹と彼女とが、同年であつたので、彼女は毎日のやうに、私の家へ來てゐた。私とは取りわけて、仲がよいこともなかつたが、彼女は私の周圍にゐるたゞ一人の美しい異性として、私は物心ついてから、初戀などと云ふもの迄へは行かなかつたが、それに似た淡い感情を、彼女に對してずつと持ちつゞけてゐた。

「豐さんのお嫁さんには、お澄さんが、丁度えゝわ。あの方、えゝ器量ぢやけに。」

私は十二三の時、近所のお神さんに云はれて、頰を赤くしたことを、後までもずーつと覺えてゐた。

が、その時、彼女が結婚するために、上京すると云ふのを聞いても、彼女の幸福をこそ祈れ、彼女を失ふ悲しみなど云ふものは、少しもなかつた。たゞ、私の失意な、引きたゝない上京に、若い異性の伴のあることは、その時の私に取つては、唯一の心やりであり、慰めであり、刺激であつた。

その時の出發や汽車中の模様などは、大抵は忘れてしまつた。たゞ、私は若い二人を、いぶかしげに見てゐる乘客達に對し、ある羞恥と、同時にある得意さとを感じたやうに記憶する。それから、私は旅行についてのあらゆる經驗と智識とで、彼女を世話したやうに思ふ。たゞ、彼女のことを注意するあまりに、私は危く自分の財布を、神戸の驛の切符賣場へ忘れかけて、駭いて取りに歸つたことを覺えてゐる。

何でも、神戸で乘り換へたときであつた。私達の最初は入つた車室には、乘客が多かつた。私は從妹を促して、空いた車室を求めた。すると、一の車室はガランとして、客が一人も乘つて居なかつた。私は、これ幸ひだと思つた。私はなるべく他の車室の方から見えないやうな奥へ進んで、腰をかけた。そして、從妹をさしまねいた。私は、彼女が私の傍へ並んで坐るのを待つてゐた。が、彼女は私の後について來たものゝ、傍に誰もゐないのを見ると、少しモヂ〳〵した後、私の坐席と一間も離れてゐる彼方へ腰を降した。私は、從妹のさうした思慮が、いやに冷たく寂しく思はれた。

新橋へ着いたとき、從妹の兄の夫人が迎ひに來てゐた。私も、最初上京したときには、この從妹の兄の家に厄介になつてゐた。そして、學校の保證人になつて貰つてゐた。が、除名されたゝめに、從妹の兄は、私を不良學生か何かのやうに誤解してゐるらしかつた。そして、私が何かの不品行のために、除名されたやうに思つてゐるらしかつた。從つて私も從妹の兄と、その場合顏を合すのが、嫌だつたので、從妹を、その兄の夫人に渡すと、止められるのを振切つて、停車場で別れ、中野にゐた友達の下宿へ行くことにした。

× × ×

私は、その後從妹に、長い間會はなかつた。從妹が寄寓してゐる彼女の兄の家へは、前に云つたやうな理由で、私は行かなかつた。從つて、私は從妹の消息も、國からの手紙で知つたのだつた。その手紙に依ると、從妹はその翌年の春

早々、彼女の兄の世話で、良縁を得たと云ふ話であつた。先方は、第×銀行と云つたやうな大銀行へ出てゐる若い銀行員で、その上、家に相當な資産があると云ふことだつた「電燈が、十一點いてゐる大きい家に住んでゐるとかで、金井の伯母さんは大よろこび」私の母は、そんな風に從妹の結婚後の生活を知らせて來た。電燈が、十一點いてゐる家、それはまだ電燈が點いて間もない田舍の町の十燭光一つか二つの家に、住んでゐる私の母や、伯母には、どんな驚異であつたかも知れなかつた。東京にゐた私にも、電燈が十一點いてゐると云ふことが、壯麗な大きい家を想像させたのだから。「すうちやんの仕合せ」それは、長い間、私の一族の話題になつたらしい。

「すうちやんの仕合せ」とは、反對に私はその一年間、何の希望もなしに過した。初め、法律をやるために、神田の私立大學に籍を置いたのだが、直きに飽いてやめてしまひ、中學時代から得意であつた英語で身を立てようと考へ直し、正則の夜學校の高等科へ通つたりした。私に學資を出してゐた老人は、私をその知人だと云ふ男へ紹介したが、その男は小石川區武島町の裏店に住んでゐた。私は、老人から送つてくる零細な學資で暮してゐた。ある晩、私は學校からの歸りに駿河臺下から、水道橋へ抜ける通を歩いてゐた。その時、私は咽喉が乾いて、堪らなかつた。私は、果物屋の前を通つたとき、其處の店頭の蜜柑が、喰べたくてたまらなかつた。私は、そのとき懷に一錢しか持つてゐなかつた。私は、恥を忘れて云つた

「蜜柑を下さい!」

「おいくらです!」

廿才前後の小僧が云つた。

「一錢」

彼は、私を輕蔑したやうな笑を洩しながら、うづたかく盛つてある蜜柑の山の中の中なら、一番小ささうな一つを、取り出して、私の掌の中へ入れて呉れた。その頃は、今よりは、物價が非常に安かつたが、一錢の蜜柑を買ふことは、可なり氣恥しいことだつた。そんなわびしい不自由が、私にはずーとつゞいた。

四月になると、私はまた學校を變つた。同時に卒業した連中に、二年も遅れたゝめ、私はあせりぬいて、ちつとも落着けなかつたのである。やつぱり、專門學校を正當に出る外ないと思ひ、私は ある私立大學の文科へ籍を置いた。元來利慾から投資してゐた老人は、私が文科へ籍を置いたと同時に、學資を送ることを拒絶して來た。思惑違ひをした彼は、私に學資を出したことを長い間後悔してゐた。それ以來、私の學資は家の痛ましい負擔になるのだつた。私が五圓使へば五圓、十圓使へば十圓宛家の借金になるのだつた。それにも拘はらず、高等學校の入學試驗が近づくと、又私は高等學校へは入りたくなつた。最初から高等學校へは入らないのが、間違つてゐたのだ。高等學校へは入れば、あんなことにはならなかつたのだ。二年遅れてもいゝ、高等學校へは入つてやらう。私は、そんな風に考へた。學資が續かないことは目に見えてゐたのだが、さう云ふ點では、呑氣で私の學才を信じてゐた父兄は、それを許して呉れた。

高等學校の試驗には、無事に及第した。私は、久し振で、華やかな氣持になつた。前途は遠いのだつたが、とにかく今川た時丈は、明るかつた。私は、入學した歡びを胸に包んで、一年振に歸省することになつた。その時に、私は結婚後の從妹に初めて會つた。私が歸省すると云ふことを、國の母から知つたと見え、國の家へ言傳するために、私の下宿へ訪ねて來たのだつた。その頃、私は動坂近くの汚い素人下宿にゐた。

從妹は今から考へると、お召か何かの着物を着てゐたらしい。着飾つた年頃の女が、私を訪ねて來たことは、下宿の女主人を驚かせた。從妹は、まだ東京化してゐなかつた。「さうで」とか「あらまあ」と云つたやうな、私と國の言葉で

話した。私は彼女の母への言傳を聴いた。親類などが、出世すると、いくらかでも、その恩惠にあづからうと云ふのが人情であるが、私もさう云ふ心持が動いたのかも知れない。從妹に一圓貸してくれと云つた。私は、その時一圓絶對に必要だと云ふ譯ではなかつたが、汽車賃を拂つてしまふと、辨當代もさう充分ではなかつたので、十一の電燈が點いてゐる家に住んでゐる從妹に借りたくなつたのであらう。從妹は石竹色の絹レースで編んだ小さい巾着を取り出して、中から一圓札を取り出して貸してくれた。私は、從妹の噂にきく裕福に比べては、何だかその巾着の内容が貧弱らしく思はれたので、私は少し心細いやうな氣がした。從妹が歸つた後で、下宿の主婦は「まあ。いゝお嫁さんですね」と、從妹を賞めてくれた。

私は其後十一年の間、從妹に會はなかつた。私は、その間どうか、かうか、長い學校生活を了へて世の中に出た。がその間に從妹は、かしま立の幸福に比べては、思ひもがけなかつたやうな、不幸のどん底に落ちてゐた。從妹が嫁いだ家は最初思はれたほど、財産のある家ではなかつた。その上若い夫が、放蕩を覺え、株に手を出し、一二年の内に、財産を蕩盡してしまつた。財産と同時に職業を失つた一家は、四谷の陋巷に落ち込んで行つた。其處で、窮乏の二三年を送つた。一家が手内職で、やつと其の日その日を過して行つたらしい。その間に、從妹は零落した夫を捨てずに、貞節を盡くしたらしい。そして、二人の子を生んだ。其の貧民窟の支配をしてゐる男が、從妹の貞節に感心し、從妹の夫のために、朝鮮の釜山にある漁業會社に、勤口を見付けて呉れた。一家は救はれたやうに、朝鮮へ行つた。從妹の不幸はこれで終るかのやうに見えた。が、それは空頼みで、釜山に居付いて、位置も進み、收入が殖えるにつれて、彼女の夫は、又放蕩を始めた。そして、娼妓に深い馴染が出來、到頭會社が不首尾になつて、東京へ歸つて來た。東京へ歸つてからの不幸は、前の窮乏とは比較にならなかつた。夫は間もなく、肺を病ひ出し半年ばかり病んで倒れてしまつた。

私か、従妹のかうした不幸を聴いたのは、京都の大學にゐた頃だつた。私は、幼馴染の彼女の不幸に、可なり心を痛めたけれども、無力な――他人から學資を貰つてゐた無力な私は、どうすることも出來なかつた。私はふと先年従妹に借りた一圓を思ひ出したので、従妹に返して與れと云つて、國の伯母の所へ一圓送つてやつた。

私は、學校を出て、東京へ來た。私は、従妹のことが絶えず、氣にかゝつてゐた。が、従妹の兄とは（腹違の兄で従つて私とは何の肉縁もないので）疎遠になつてゐたし、又その兄に従妹の消息を、わざ／＼訊くほど、私の生活に餘裕がなかつたので、つひ／＼其の儘になつてゐた。が私は、いつとなく従妹が、日暮里にゐると云ふことを聴いてゐた。私は、いつか知人の葬式に、日暮里に行つたとき、其處に並んだみじめな長屋の一から、従妹がひよつくり出て來さうな氣がして、何となくなつかしいやうな、何かを待ちのぞむやうな氣で、その邊を徘徊した。

私が、従妹に會つたのは、大正九年の春であつた。丁度、その時従妹の姉が、その夫と上京し、下谷の藍染町に家を持つた。そして「澄子も、近所にゐますから、ぜひ一度遊びに來い」と云ふハガキをよこした。

私は　従妹の姉が來たなど云ふことは、何でもなかつた。私は、たゞ十一年目に従妹に會へることを考へると、私は心が躍つた。私は、絶えず従妹の事が、氣にかゝつてゐた。氣にかゝりながら、その時まで、探しもしなかつたのは、従妹を尋ね出してみた所で、私は従妹に盡くしてやる丈の自信がなかつたのだ。が、今私は、多少とも餘裕が出來た。長い間、苦しみ抜いてゐる従妹に出來る丈のことはしてやらう。

本郷から、根津へ俥を走しらせてゐた私の心は、可なり興奮してゐた。あはれな従妹を救つてやれると云ふ欣びと、また救ひ得る力が、自分に出來たと云ふ得意さとで。私は二人の子供を抱へて、陋巷に苦しみぬいて來た彼女を考へると、私が彼女を少しでも救つてやることが、私の當然爲さなければならぬ聖い義務のやうな氣がしたのだ。悪龍に囚は

れてゐる王女を救ひ出しに行く勇ましい騎士の興奮と得意さ。私はそんなものの斷片をさへ心の裡に持つてゐたのだ。私は幼馴染の彼女と手を取り合つて、彼女の不幸を嘆いてやらう。彼女は、私の來たことをどんなに感謝するだらう。私は、そんなことを空想してゐた。

從妹の姉夫婦の家は、根津の電車通と平行してゐる裏通にあつた。格子を開けると、玄關も何もなしに、直ぐ八疊の居間から臺所が見渡せらると云ふ變な間取であつた。從妹の姉は留守であつた。姉の亭主は、やはり私達と同郷で、工藝的な彫刻家であつた。私とは、初對面であつた。色の青白い律義さうな小男であつた。姉の亭主と挨拶を濟ませると私は二階へ案内された。二階は、だゝ廣く六疊と八疊とが續いてゐた。

「すうちやんが、この近所に居るさうですね。私はすうちやんに是非會ひたいのですが。」

と云つた。彼女は、さうした呼方でみんなから呼ばれてゐた。

「へえ居ります。直ぐ近所です。子供に呼ばせて來ませう。が、あの人もすつかり變つて居りますぜ。」

私も、從妹が變つたと云ふことは、幾度も聽いてゐた。が、私は口數の少い、何ちらかと云へば、はにかみ屋であつた從妹が、どんな境遇の激變に逢つても、ある程度以上に變る筈はないと思つてゐた。

私は、其處で二十分ばかり待つてゐた。主人との話は少しもはづまなかつた。私は、十一年目に、從妹と會へると云ふ心持で、胸がつまつてゐた。

ふと、階子段を上つて來る音がした。私は、その息づかひで、從妹だと云ふ氣がした。私はなつかしい氣で一杯だつたが、梯子段を上り切つた彼女は、——梯子段は、六疊の方へ附いてゐるので、八疊の方に居る私には、見えなかつた——可なり息を切らしながら、

「あゝ、しんど！」

と云つた。私は、その聲を横越にきいてハツと思つた。十一年目に會ふ私に、挨拶をしない前から、丁度藝妓が馴染の客のお座敷へでも入つて行くときにでも呟くやうな、たしなみのない聲を出したことで、私の彼女に持つてゐた幻影は、忽ち破れ去つたと云つてもよかつた。彼女の顏を見ない前から、私の心は冷たくなつてしまつた。

が、彼女が私の居る座敷へは入つた時、彼女に對する私の心持は、また變つてゐた。

彼女は、よごれて縞目の分らないやうな黑つぽい衣物を着て、よれ〳〵になつたメリンスの帶をしめてゐた。そして私に會ふために、羽織つたらしい晴着の羽織は、もう幾度も、水に通つたらしい大島まがひの紡績だつた。彼女が、「あゝ、しんど！」と云つたのは、彼女の蓮葉から出たのではなくして、尾羽打ち枯した姿を、私の前に洒す恥しさを打ち消さうとする、テレ隱しであつたのかも知れぬ。さう思ふと、私は彼女に對する心持を努めて、元に返さうとした。

「あゝ豐さんですか。ほんとに久し振りですわねえ。」

顏が　ふとつて、目がいよ〳〵小さくなり、昔の美しさは、少しもなかつたけれども、色が白いだけに、それほど醜くはなつてゐなかつた。たゞ、身なりを少しも介意はないため、可なりみじめに薄汚く見えた。

「ほんとうに暫くでした」

「ほんとうに、しばらくですねえ。もう十年にもなりますわねえ。豐さんもお變りになりましたわねえ、立派になつて。お父樣やお母樣が、さぞ欣んでいらつしやるでせう。わたしはほんとうに不幸つゞきですよ……」

さう云つて　彼女は、眼を伏せた。私も暗然とした。

「私もね、貴君の噂は絶えず聞いてゐたのですがね。東京へ來てからも、貴君の所を探してゐたのですがね。今日姉さ

んから手紙を貰つたから、直ぐ來たやうな譯です。それでお子さん達は……」
彼女は、上げようとしてゐた顏を又伏せた。
「たしか、女のお子さんと男のお子さんと二人おありでしたね。」
彼女は、少し口ごもつてから
「實の方は、兄の所へ預けてあるのです。」
兄と云ふのは、麹町にゐる彼女の腹違の兄だつた。
「それで、女のお子さんは。」
彼女はうつむいたまゝ、中々顏を上げなかつた。
「今年の春、よく〳〵困つたものですから、他人にやつてしまつたのです。」
私は、愕然とした。
「人にやる！　ぢや、貴女は今一人身ですか。」
彼女は、顏を赤くして、うつむいた。私は、彼女の現在が略々分つたやうな氣がした。
「ぢや、再婚でもしたのですか。」
彼女はうなづいた。私は、先刻「あゝしんど！」と云ふ彼女の言葉を、聽いたときよりもがつかりした。子供を二人手離し、新しい男と同棲してゐる彼女を。いきり立つて救ひに來た私が、何だか馬鹿々々しくて、仕樣がなかつた。もう、私はこの従妹に對して、何等の義務もないと思つた。たゞ、私は他人にやつたと云ふ女の子のことが、氣にかゝつた。

「女のお子さんは、一體何處へおやりになつたのです。」

「長野の方へです。」

「長野と云へば、信州ですね。何うして、そんな、とつけもない所へやつたのです。」

從妹は、しばらくの間、默つてゐた。

「實は、近所のお神さんに勸められて、お金に困つたものですから、長野の藝者屋へやつたのです。」

私は、しばらくの間、物が云へなかつた。遠くても、私の肉親の一人が、藝者に賣られてゐようなことは、今まで夢にも思はなかつた。

「それは、何時のことです。」

「今年の二月です」

私は、三月遲く、從妹の住所を知つたことが、口惜しくてならなかつた。

「そして、お金はいくら借りたのです。」

「七十圓です。」

私は、凡てが情なく思はれた。

「さうですか。たつた七十圓ですか。その位な金なら、どうにかならないことはないでせう。僕が、どんなにでもして取り戻して上げませう。藝者屋に置いてをくなんて、そんな馬鹿々々しい話はありません。」

私は、溫和しい從妹が、上京の汽車の中で、私と並んで腰をかけることをさへ、きまりを惡がつた彼女が、自分の愛子をどんなに困つたとは云へ、藝者屋に賣り飛ばしてゐることを、どんなに駭いたか知れなかつた。私は、子供を、そ

れほど平氣に手離して、新しい男と同棲してゐる從妹には、もう多くの好意を持ち得なかつたけれども、まだ見ぬ今年十一になると云ふいたいけな「又從妹」に對しては、思ひがけない新しい義務を感じた。

從妹とのその夜の會話は、私が豫期したやうな、ロマンチツクな美しいものとは違つて、どちらかとへ云ば、幻滅的な、少しもピツタリしないものになつてしまつた。

たゞ、私は從妹に私の家を尋ねて來るやうに幾度も約束し、又私が彼女の愛子を、必ず取戻すことを誓つて、別れて歸つた。

×　　×　　×

私は、從妹が訪ねて來るのを待つ間、私の所へ時々訪ねてくれる法學士を訪問して、藝者屋との養女緣組を、いかにして取消したらよいか、又先方がそれに應じなかつた場合は、如何なる手續に出ればいゝかを訊いた。その法學士は藝者屋が、その養女に、不當な行爲を强いた事實がある場合には、直ぐにも緣組を破棄することが出來るが、然しまだ商賣に出ない前だとすれば、多少面倒になるかも知れない。先方の出樣では、訴訟をしなければならないかも知れないと云つた。そんな場合には、長野で判事をしてゐる友人に紹介してやらうと云つて與れた。私は、從妹と一緒に長野へ出かけて行つてもいゝと思つてゐた。

四五日して、從妹は姉と一緒に私の家を訪ねて來た。私は、彼女の着物が、此間の晩と、すつかり同じであるのを見て、寂しい氣がした。私の妻の不斷着よりも、ずつとひどいのを見ると、私は何だか濟まない氣がした。

私の妻との初對面の挨拶などが、濟んでから、私は云つた。

「この間の話ですがね。私は、いつでも彼方へ行つてもいゝと思つてゐるのですがね。」

彼女は一寸空とぼけたやうに云つた。

「この間のお話つて？」

「芳子さんのことです。」

「あゝ　芳子！　さう、さう。そんなお話がありましたわねえ。あゝ、さう〳〵奕、周旋して呉れた家へ行つて、向ふの家を聽いて置くんだつたけ。すつかり忘れてゐましたわ。」

私は、鼻柱を折られて、默つてしまつた。愛子を取り返すと云ふ事は彼女には、そんなにのんきな仕事なのかしらんと、はがゆかつた。

「ぢや、至急調べて、そして貴女の都合のいゝ時を知らして下さい。私は長野へ一緒に行きたいと思ひますから。私一人ぢやどうにも出來ないのですから。」

「はあ。調べて置きます。」

私は、彼女の熱のない返事がはがゆかつた

暫くして、私は從姉妹達を、妻に委せて二階へ上つて來た。すると、彼女の姉が、二階へそつと上つて來た。そして私の傍へ來て、小聲で云つた。

「豐さん。貴君が、芳子の事を、どんなに思つて下すつても、駄目ですよ。澄は、そんなに思つてゐないんですもの。麹町の兄も、芳子を手離したと云ふので、すつかり見離してゐるのですからね。澄は、あんまり、苦勞したので、性根がすつかり變つてゐるのですからね。昔の澄だと思つてゐると、間違ひますよ。」

私は、實の姉からも、こんなに云はれる從妹が、かなしかつた。昔は、姉の方がお轉婆で、町中の評判娘であり、妹

はそれと反對に温厚で親類中の、賞め者であつたことを思ひ出して悲しかつた。
その日、歸つたぎり、從妹から何とも云つて來なかつた。私は、一度督促のハガキを出した。が、それにも返事は來なかつた。私は藝者屋に賣られてゐる又從妹のことが、氣にならないではなかつたが、母親を差し越えてまで、私がその娘の運命に干渉していゝかどうか、又私が藝者屋を引き出して、果して幸福な人生を與へ得るかどうか。藝者屋にゐても、どんな幸運で、酒色の悲しい仕事をしないで濟むかも知れない。實際、十一も電燈が點つてゐる家に嫁いた從妹が子を賣るま 悲慘などん底に陷ちたやうに、藝者に賣られてゐるその子が、またどんな幸福で、浮び上らないとも分らないなど考へると、母親をさし越えて、我が出しやばることが、段々をつくうに、考へられて、私は到頭、「又從妹」のことは 努めて考へないことにした。
所が、その後長らく打ち絶えてゐた從妹から、その年の暮に手紙が來た。それは、年の瀬を越すに苦しんで、私に六十圓丈借してくれと云ふのだつた。私は、從妹の生活には、不滿であつた、が困つてゐることは、困つてゐるだらうと思つたから、六十圓送つてやりたかつた。が私は、その暮は支出が多くて、六十圓と云ふ金は、從妹のために拂ふのは、少し重すぎた。私は、ケチなことをするなと、自分で非難しながら半金の三十圓丈送つてやることにした。それに就いて、私はこんな云ひ譯を書いた。
「貴女が前の結婚のために、陷つた不幸は、それは本當の災難ですから、私は出來る丈のことをしてもいゝと思ひます。が、貴女が二人の子供を手離し、そして新しい方と同棲してゐる以上、その生活から起つて來る凡ては、みんな貴女の責任です。貴女は賴るべき筈の立派な良人がある筈です。私は貴女に對して何等の義務をも感じません。」
それは三十圓儉約するための云ひ譯だつたが、彼女の生活に對する私の非難も、少しはは入つてゐた。

が、私は從妹の云ふ丈の金をやらなかつたことが、氣が咎めた。所が、一年半ばかりも經つて、彼女はひよつくり、その轉宅先を知らして來た。私は、前よりもつと餘裕が出來てゐた。今なら六十圓位平氣でやれるのにと思つたので、今後月々少額宛、補助しようと云ふことを、此方から、云ひ出した。彼女は、欣んだ。そして久し振に私の家を訪ねて來た。私は快く彼女に會つたが、もう「又從妹」のことを話し出す勇氣がなかつた。もう十四になる、お雛妓にでも突き出されて、取り返しの付かない身體になつてゐるかも知れないと思ふと、私は口に出す勇氣がなかつた。私は、その時前よりは少し廣い家にゐた。從妹と話しながら、自分の家の電燈の數を數へてゐた。實際、メートルにして置く家だつたから、十一の電燈なんて、駭くに當らないと思つたりした。

その後、三四月間、送金してゐる裡に、忙しさに取りまぎれて、忘れるともなく送らなくなつてしまつた。從妹の方から、催促も來なかつた。從妹のことは、私の心からだん／＼薄れかけてゐるのだつた。

（完）

セルとネル

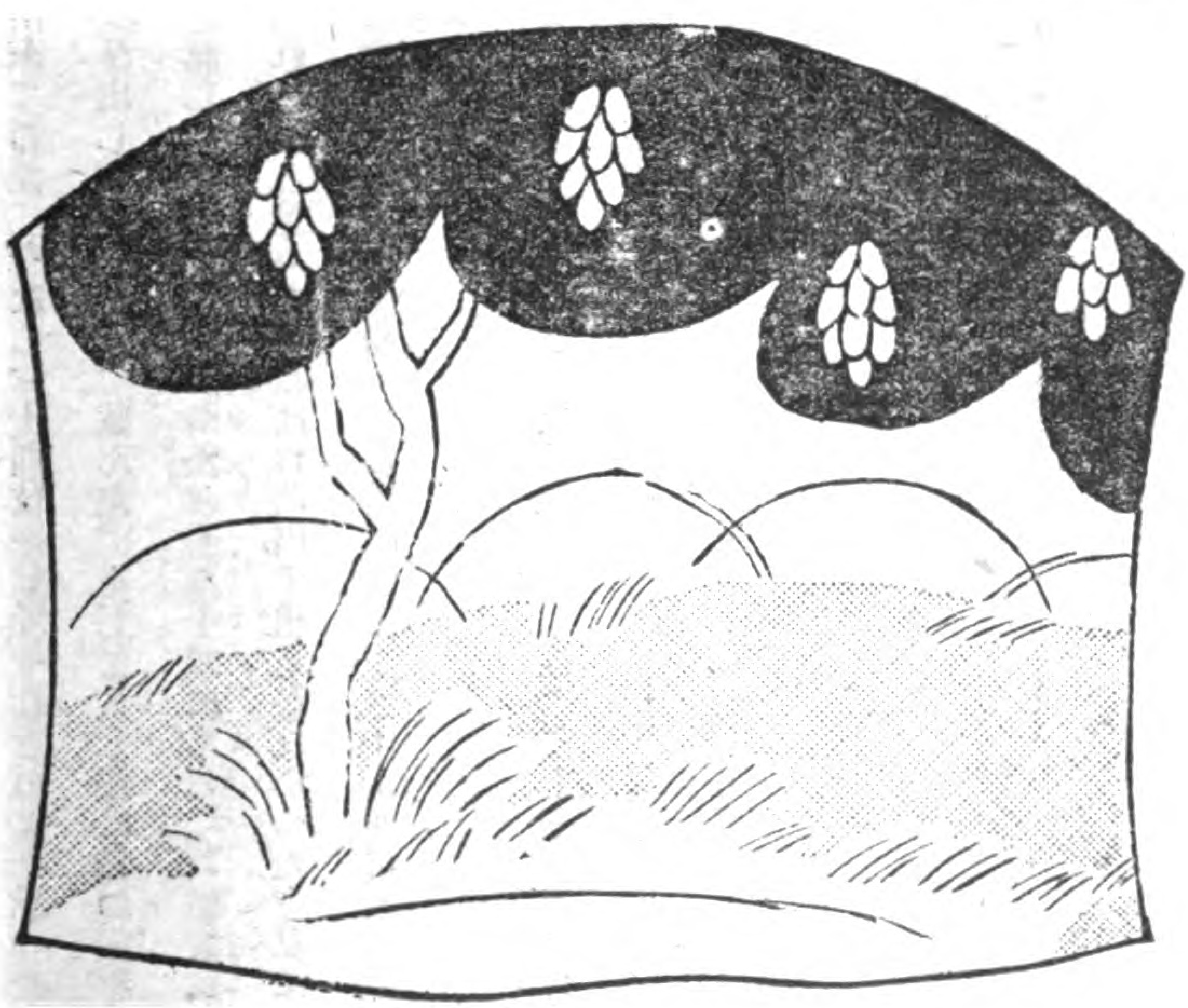
ことしは一体に、地色も縞色も明る目になり、地合には淡い藤がゝつた鼠系の夕ねずみ色、縞目には藤ローズ、紅藤、濃茶等を段ぼかしなどで按配したものが新柄で御座います。又、セルは近頃單衣地ばかりでなく袷向としても召し工合がよいので盛んに賞用されるやうになりました、一反八九圓から十二三圓迄で、昨年より二割方は御安くなつて居ります。

東京今川橋

松屋呉服店

電話 神田四〇番

振替 東京八八〇番





踏んだり蹴たり

長谷川如是閑

泰男の手紙の一

僕の頭の上に陰欝に蔽ひかぶさつてゐる結婚問題について佐喜子との相談は何うなつたかといふ君の手紙をもらつてからもう一月にもなるが、まだその返事を書くほどに形勢は動いてゐないのだ。例の投げやりからではない、あれから何度となく佐喜子に會つてゐるが、さうして問題はその度に二人の前に抛り出されるのだが、依然として君に返事を書くところまで行かずに停滯してゐるのだ。

最近にも、一方の追及が愈烈しくなつて來たので、此度こそは斷然決着をつけやうと云つて――非常の決心でそれをしないと愈僕等に悲劇が　るのだもの、――佐喜子に前の土曜日の晩に例のカフエで逢ふことを約束したのだ。『で愈きまつたか』なんて早合點をして貰つては困る。從つて此手紙を書く必要もない譯だが、たゞ僕の氣休めに、その會見が何んな工合に終つたかを君に話したくもあるのだ。

僕が此の問題について如何にやきもきしてゐるかは君も察してゐるだらう。でその晩こそ最後の運命が定まるのだと思ふと、約束は七時だつたが、とてもそれまで落付いてはゐられない。その一時間も前から出かけて行つて、待つてゐるといふよりは、逆ぼせてゐるといつた方がほんとうの氣持で座つてゐたのだ。座つてゐるといつても飛行機に座つてゐるので、確かに着陸が出來るか何うか疑しい從つて自分の命も受合はれないといつた工合で座つてゐるのだ。ウヰスキーなんかいくら飲んだつて舌にも咽にも感じやしない。所が君何うだらう、約束の時間にも佐喜子は姿を見せない。十分、二十分、三十分、一時間經つても來ないぢやないか。とう／＼三時間も待つたが佐喜子のさの字も現はれては來ないのだ。僕には此問題が僕にばかり重大だとは思へない、より以上に佐喜子にも重大なのだ。然るに當の佐喜子は氣乘りのしない用事でも賴まれたやうにぐず／＼してゐるのだ。癪に障らざるを得ないぢやないか。僕がいろ／＼な廻はし氣を起すのも無理ではあるまい。で自然、堪らなく淋しい氣になつて、何度となく、もう歸らうと思つて腰を浮かしたか知れやしない。

馴染の給仕女が、――さうして多分譯け知りのが――遠くの方から、又は傍を通りながら、氣の毒相な眼付で同情を投げて呉れるなんか、有りがたいよりは侮辱を感じて冷汗が出る。テレ隱しに、飲みたくもないいろ／＼の酒を飲むと頭ががん／＼するばかりでちつとも醉ひはしない。佐喜子は何處かそこらに來てゐるのぢやないかなんと思つて見廻すけれど、未來派の畫のやうな形がザク／＼と見へるばかりで、土臺、人間がゐるんだか居ないんだか解りはしない。それでもその時、此奴はいけない、と氣がついたらすぐ歸つてしまつたのだらうが、そんなことに氣付くやうな心理狀態は、もう數時間前に失つてしまつたのだ。

それでゐて、廻し氣だけは盛に活躍して、今こゝにそれを書くさへ馬鹿らしいやうな下らないことをのべつ幕なしに

考へたものだ。例へばだ、佐喜子といろ〳〵な男とを無暗と結びつけて見て、それが今現實に、僕の眼の前に現はれでも來たかのやうに、憤慨したり悲觀したり、それは確かに君の所謂『いけないね』だつたのだ。その無暗と佐喜子に結びつけた男の中にはあにさの秀二もゐるし、甚しいのは、佐喜子てどんな女だらうと、アテ噺でも案じてゐるやうに遠方からあの女を推察してゐる君も入つてゐたのだ。以てその馬鹿〳〵しさを察してくれたまへ。

で何度『もう萬事休すだ』なんてことを考へて立ち止つたかわかりはしない。所が休した筈の萬事が――少し汚たない聯想だが――垂れた糞が尻からぶら下つてゐるやうな不快さで、僕にこびりついてゐるのだ。といつてそれを振り落す勇氣も根氣もないのだ。どんな恰好で、僕はその時衆人稠坐の眞中に座つてゐたと思ふ。

たゞ混沌と坐つてゐると、突然、バサンと何か眞黒な大きなものが僕の眼の前に落ちた。ハッと思ふと、彼女が例の濃い草色のマントを卓子一杯にひろげて、僕の鼻の前に、あの、僕が始めて見た刹那に、彼女が僕のものであることを僕に信ぜしめなければ承知しなかつた顔――君は、それはあべこべで、僕が彼女のものであることを僕に信ぜしめなければ承知しなかつた顔といふだらうが、何方でもいゝ――があるのだ。

僕はちつとも實行力のない敵愾心で、何の、いつまでだつて口を利いてやるもんか。そんなつまらない決心をして、默り臭つて睨めつけてやつた。彼女も無論口を利かなかつた。けれども、彼女は、あのいやに冷靜な眼付で周圍の客を物色して、一寸顎で挨拶したりした。そんな餘裕の彼女にあつたことは、一層僕を憤慨させた。

二人揃つたので、給仕女は、頼んで置いた部屋の明いたことを知らせて來たが、僕はまだ知らん顔をしてゐた。すると彼女は澄して自分だけその部屋の方へ行くのだ。僕は、その後について入つて行かない譯に行かなかつた。いやに客のたて込んでゐる卓子の間を通りながら僕は隨分屈辱を感じた。

監獄の獨房のやうな部屋が、瓦斯ストーブで蒸釜のやうに熱せられてゐたのは、僕の其時の氣分と同じく、こんな問題を相談するに適した空氣ではなかつた。彼女はマントを脫ぐと、下には和服を着てゐた。それを忘れてゐるやうに、彼女は、例の調子でいきなり卓子に腰をかけて、片足をブラン／＼させてゐる。

『マア椅子にかけたまひ。』僕は、口を利かない自分との約束をそんな云はいでもの文句の爲めに破つてしまつて氣がつかないのだ。

彼女は、椅子にかけたが、片肱を卓子の眞中まで延して突張つた上にあの顏を乘せて、僕の鼻面にその呼吸を吹つかけてゐるのだ。さうしていきなり、

『いゝぢやないの、結婚なすつたつて。』さういふだらうぢやないか。

僕はムラ／＼として彼女の横面を張り飛ばしてやりたくなつた。尤も彼女がそれを言ふのを、僕はその晩始めて聽いたのでも何でもない。彼女に始めて此の問題の差迫つたことを打ちあけた時にも、彼女は直ちにそれを云つたのだ。で彼女がそれをいふ理由も、僕にはちやんと解つてゐるのだ。だから始めから、『それは又何ういふわけで』なんてことを彼女に尋ねやしなかつた。

だが愈眞面目に解決をつけるといふ段になつても、なほそんなことをいふ彼女に僕は何といつたらいゝのだ。僕は赫となつてしまつて叫んだのだ。

『よし、ぢや僕は結婚しやう。』

『えゝ、それが上分別よ。』さういつて、彼女は僕の生命を握つてゐるやうなあの顏にジョコンダのやうな笑ひを浮べてゐるぢやないか。

『それに大變美人だわね。寫眞では。』

そんな餘計なことまで附加へるのだ。

僕は何の爲めに半殺ろしに逢つてゐるやうな氣持を堪へて二時間も三時間も待つてゐたのかわけが解らなくなつてしまつた。さりして何う此場の結末をつけてい丶のか見當がつかないのだ。

『君は僕を玩弄物にしてゐる。』そんな風のことも僕は云つたらしい。

女は『フン』と云つたが、それ切り何とも云はずに、ストーヴの火を見つめて、例のジョコンダ笑ひをしてゐるのだ。

もう我慢が出來ない。と僕は思つたが、何う我慢が出來ないのか僕自身にもわからないのだ。彼女のさういふ態度を怨めし相に――多分そんな風だつたらう――眺めてゐたのは隨分長い時間だつたらう。何故といへば、僕の氣分のほとぼりが少しさめて來たことを自分に感じたのだ。容易な時間が、僕をさうする事の出來る筈はない。

で僕は漸く、自分の態度を彼女のそれに比べると、餘りに平凡――といふと語弊があるが――とにかく釣合ひの取れてゐないことを感じ出したのだ。僕の憤怒は正當であるにしてもそれを以て彼女に對するのは、此頃の流行語の『思想に對するに銃劍を以てする』やうなものだ。殊に『僕を玩弄物にするのか』なんて、まるであばずれ女に誑された道德家のいふやうなことを云つたのは、今考へても冷汗が出る。彼女だつて『フン』とでもいふ外挨拶の仕樣もなかつたであらう。

その時さう立派に氣が付いた譯ではないが、然しやゝ自分を取戻した氣はした。で大に暢んびりとした調子で、

『今夜はもう、そんな話はやめにしませう。』

此文句も、それまで何度繰り返したかわかりはしない。實際、何時になつても解決のつかないのは、佐喜子の責任だ

か何だか實はわからないのだ。何しろもういゝ加減口癖になつてしまつてゐるので、その晩もまたそれを云つてしまつた。

『何の話？』佐喜子は空ら恍るのだ。」

『例の僕の結婚問題なんか……。』

『ホヽ、定つてそんなことといふのね。私今夜は忙しいのに漸く抜けて來たのぢやないの。今夜こそ是非決着をつけるなんて仰つといて。』

『けどあなたが眞劍に私の相談に乘つてくれないから駄目です。』

『相談に乘るの乘らないのつてあなた。』佐喜子は呆れたやうに圓い眼をして『あなたまだ何も仰つしやらないぢやないの。』

成程さう云はれゝばさうだが、然し、そんな揚足を取るには當らない。折角落付いた神經がまたいら〳〵して來た。殊に彼女の神經が此方の神經の平衡を失ふと反比例に、益々精確さを加へて來るのが忌々しい。

都合よく、その時扉が開いて、女が紙片に何か書いたものを僕に渡すのだ。見ると、

『例の件で是非今夜話したい。一足先きに××亭に行つてゐるから、そこの用が濟んだら必ず來てくれたまへ。秀』と書いてある。

僕は面喰つた。こんな所へ、よし紙片ではあるにしても秀二が現はれて來やうとは思はなかつた。

『何なの？』佐喜子は紙片をのぞき込むやうにしてきいた。

『何でもない。一寸……』僕は出まかせにさういつた。例の問題についての催促に相違ないが、僕は、形勢が差迫つて

ゐることを幾度も佐喜子にいつた辯に、現にこんな風に迫られてゐるといふことを佐喜子に知られるのは恥かしいやうな氣がして、つひそんな出任かせを云つたのだ。でちつとも秀二に逢ひに行く氣がしてゐないに拘らず、その紙片に、

『一時間ほど後に行く。泰』と書いて女に渡してしまつた。さうして、

『僕だつて忙しいのだ。』と餘計な獨言まで云つた。それが別の用事であることを喚はせやうと思つたのか、佐喜子が忙しいと云つたのに對抗するつもりだつたのか、何れにしても、此の場合何の必要もない嘘を吐いた。

『實際、僕は結婚してしまふかも知れない。それが恐ろしいのだ。』僕は獨言ともつかず佐喜子にいふともいつかず、そんなことを口走りながら、何うし、秀二の奴、僕が今夜こゝに來てゐることを嗅ぎつけたのだらう。それほどまでにして僕を探し廻つてゐるやうでは愈形勢は迫つて來たのだらう。そんなことを考へてゐた。

君も知つてゐる通り、僕は如何に、父や自分の『面目』といふやうな不用なものを失くしても、あの結婚を蹴飛ばすに雑作はないのだが、それをするには、僕は何うしても佐喜子の一言が欲しいのだ。その佐喜子が、寧ろ結婚をすゝめてゐるといふ變挺な狀態の下で、僕は此の問題を片づける氣は何うしてもしないのだ。佐喜子がさうでない言葉を、何とでもいゝから、一言いつてくれれば、僕は斷然、父を始め一族と絕緣しても、この結婚問題を打ち切つてしまふことが出來るのだ。それは何でもないことなのだ。その何でもいゝ一言を佐喜子は何うしても僕に云つてくれないのだ。それを云はない心理は僕によくわかつてゐる。從つて僕は、佐喜子がそれを言はないでも、言つたと同じやうに今結ばれてゐる綱を絕ち切ることが出來なくてはならない筈だが、僕は、佐喜子からその一言を得ないでは、何うしても、それをするやうに勇氣づけられないのだ。それは佐喜子にもよくわかつてゐる辯に、彼女はまるで僕をぢらすやうに、それを云はないのだ。

『結婚するのが何うしてそんなに恐ろしいの？』

佐喜子は、大分經つてから興味のない聲でそんなつまらないことを聽くのだ。

そんなことに答へるほど僕はお人好しではないぞと腹の裡に思ひながら、何時の間にか、

『あなたは結婚といふ形式が少しも我々を拘束しないと確信してゐるか、さもなければ、その形式の下でそれを無視する反抗の快味を憧憬してゐるのです。それも一つの方法には違ひない。然し僕としては、それが爲めに一人の處女を犧牲にしてまで、自分だけの快味に耽る勇氣はないのです。尤も何うしてもそれをするより外僕の行き道がないとなれば、人殺ろしでもやる氣になるでせうから處女を犧牲にする位何でもないでせうがね。然し僕はあなたの決心次第で、そんな方に行かないことが出來ると思ふのです。――決心といふほどのことではなく……』

『決心て何んな決心？』彼女は待ち切れないのか、僕に口を利かせまいとするのか、さういつて遮るのだ。一體そんな間を彼女が僕に發する必要なんか何處にもありはしないんだ。僕は餘りだと思つたので眞劍で怒つた氣で、

『あなたは、そんなことまで更めて僕に尋ねなければならないのですか。』と傑へ聲でいつて身體を詰め寄せた。

『それは解つてよ。でも……』彼女は少しは慌てたやうに吶つて、『でも一寸聽いて見たのよ。そんなにムキにならないでもいゝぢやないの。』

『ムキになつた譯ではないが。』僕も少し氣の毒になつたので、『それにあなたの心持は僕にもよくわかつてゐるのだから怒る必要はないんだが、然しあなたは、すべてのことを何でもなく破壞する力が自分にあると信じ過ぎてゐるからいけない。いづれ幻滅の來るのは解つてゐる。あなたは、それに當面するまで自分の破壞力を信じて疑はないのだから始末にいけない。』

『私そんな七六かしいことなんか考へちやいやしないわ。』

佐喜子はこともなげにさういふが、然し彼女の若い、沸き立つてゐる血がたゞ〳〵反抗の快味に憧れてゐることを僕はよく知つてゐる。僕の結婚は、彼女と僕との關係に何の影響も與ふることは出來ない。そんな風に彼女は平氣で考へる勇氣を持つてゐる。だから冷淡なのだ。僕は彼女に會ふ毎に、何時でも、今度こそ彼女のそんなカラ勇氣を打ち破つてやらうと思はないことはないのだが、さてこうなつて見ると、何分にも手がつけられないといふ感じがするだけで、何うしていゝかわからなくなつてしまうのだ。然し、君が考へてもわかる通り、僕がそんな空想の卷添になる勇氣を持つことが何うして出來る。彼女のやうな空想が實現出來るなら、誰れも形式の束縛を殉教者的態度で打ち破らうと努力するものなんかない筈ぢやないか。僕がそんな風なことを考へてゐると、佐喜子は、

『あなたはいやに物事を考へてばかりゐる方ね。』と面白ろ相に笑ふのだ。

僕が默つてゐると、彼女は、あの堪らない瞳を一層輝かして、何をいふかと思へば、

『それで何うして私がすきになつたのでせう。ホヽ。』

僕はいきなり生温るい湯を頭に浴びせられたやうな氣がして、ぼんやりしてゐると、彼女は、

『でも隨分考へたでせうね？　ハツハツハ。』と男が笑ふやうなバスで笑ふぢやないか。

僕は何か負け惜しみがいひたくて仕方がなかつたので、

『あなただつて』と云つたが、うまいことが見つからないので平凡なことをいふ。『あなたのお父さんが結婚しろ〳〵ツていふ度に何んのかのいつて拒絶してゐるぢやないの？』

『でも拒絶が出來れば、その方が世話なしでせう。』

『では拒絶しきれなくなつたら結婚しますか。』

『それはするかも知れないわ。』

實際彼女はするかも知れない。然し、それは假設的の問題ではない、彼女にそんな結婚をしてしまはれたら、僕の結婚以上に、僕にとつて問題なのだ。ト彼女はつけ加へた。

『打ち壞はれるまではね。』

僕はそれを、僕の結婚に對する諷刺と解した。で露骨に言つて見た。

『結婚してすぐ打ち壞はせといふのですか。』

『私の話ぢやないの!? あなたのはあなたの御勝手よ。』

僕は又カツとした。でも彼女を相手にする氣になれなかつたので、獨言のやうに云つた。

『僕は自分を――人間をそんな風に二元的に扱ふことは出來ないんだ。そんな意氣地のないことぢやダメかも知れないが、僕は案外これで潔癖なんだから。潔癖もつまらん病だらうが、自分で何うすることも出來ないから仕方がない。』

『二元的ツて?』佐喜子は何うでもいゝといふやうな調子をあり〳〵と見せて、そんなことを口先きだけでいふ。

で僕が默つてゐると、

『あなたの口調でいつて見ませうか。』と佐喜子は眞面目な顏をして男をまねた聲で、心の歩いて行く通りを身體も歩いて行きたいのだ。でなければだ、身體の歩いて行く通りを心も歩いて行きたいのだ。でせう。わかつてるわ。』

『その通りだ。』僕は怒れもしないからさう答へた。

『私だつてさうだわ。』

『あなたのはさうぢやない。心が直線に進めば、身體は出線に進むのでなければ、人生は餘りに退屈だと思つてゐるのです。まるで脚本の中の人物でも扱ふ氣で自分や僕を扱つてゐるのだからやり切れない。もつと現實に考へて貰はなければ困る。』

『あなたは隨分空想家ね。』

僕は不意打を喰つて面喰つた。それは此方から彼女に今云はうと思つてゐたことだ。僕は自分の手にしてゐる棒切れで佐喜子に毆ぐられたやうな氣がした。

『呆れてしまう。あなたこそ空想家だ。』

『心が歩くの、身體が歩くのッて、夢遊病者であるまいし。私達にそんな面倒臭いことが出來るもんですか。あなたはそんな空想を考へてゐるから事が面倒なのよ。結婚してしまへはいゝぢやないの。ね、さうと定めてしまつて、何か飲まない？』

僕はすつかり興味を失つて、忌やで堪らない秀二の所へ飛んで行きたい氣がした。

それを我慢して無理に落付いて、

『飲みませう。』といへば、

『何ですそんな一元的の顔をして。フフだ。』

もう此先を書くのが忌やになつた。アトは察してくれたまへ。

泰男の手紙の二

このあひだの手紙に、秀二に例の問題で呼ばれたことを書いたと思ふが、あの晩はとう〳〵待ちボケを喰はした。矢張り佐喜子に引張られてしまつたのだ。でその後も秀二からやい〳〵云つて來るので、一週間ほど前に××亭で逢つた。君は大抵察しがついてゐるだらうが、秀二は格別この問題に興味を感じてゐるのでも何でもないのだ。此問題に、といふよりは、彼れは僕といふ人間そのものに何の興味も持つてゐやしないのだ。彼れは、早く兩親に分れて僕の親父に育てられたので、僕等同士も子供のうちから兄弟同然に思つてゐたので、今でもその感じに變りはないが、段々大人になるに從つて二人共、氣質の相違が際立つて來た上に、お互にひどく懸け離れた專門に入つてしまつて、仕事も目的も違ふし、思想傾向は無論の事、趣味や好尚や體格や擧動に至るまで、君も知つてゐる通り、隨分の違ひやうなのだ。見た所、向ふは金の有り相な樂天的實業家で、此方は貧乏で神經衰弱の藝術家(?)といつた恰好なんだが、全くその恰好の違ふ通りお互は外國人同士になつてゐるのだ。從つて何を話し合つても、喧嘩にもならない位喰ひ違つてゐるので、却つて無遠慮に別々の熱を吹くに都合がいゝといつた調子なのだ。

秀二が僕の結婚問題について僕を攻め立てるのも、泰男といふ人格に起つた問題としてではなく、自分もその一族であるところの來栖家といふ家族に起つた問題としてなのだ。泰男といふ人間は、秀二には何でもないのだ。そんな人間が何うしやうと彼れの商賣ものゝ電力が一分間停まつたほどの故障をさへ、此世界に惹起しはしないのだと考へてゐるのだ。實際又その通りなのだ。だから彼れは、僕の身上のことなんかについて暇をつぶすつもりはないのだ。一體藝術家なんてものは——彼れは僕を藝術家と思つてゐるのだ——自分の頭腦の裡に勝手氣儘の世界を作つて、そのなかで世

間構はず暴ばれてゐる人間で、從つて世間もそんなものに構つてはゐられないのだと始終さういつてゐるのだ。『君等は一體、日本の役にも立たないし、と云つて西洋の役に立つでもなし、生れた人間は殺してはならないといふ法律がある爲めに、辛うじて助かつてゐる人間だね。』なんてことをよく云ふのだ。それはまだいゝとして、そんなことばかり云つてゐては現代人としての理解が無さ過ぎると云はれるのを懼れて、『藝術家が何うしてそんな勝手氣儘な世界の中で不埒千萬な暴れ方をして見せて、尚ほ且つ死刑を脱れてゐるかといへば、そこが藝術家だけの特權で、しかもその特權は、彼等が何かの拍子で與へられた天才といふ一種の精神病に對して、世間が畏懼してゐるからだ。そいつも詳しい話だが、然し釋迦だつてキリストだつて、お直婆さんだつて、元々精神病者たるが故に大に畏敬されてゐるのだ。そこが君等藝術家の首のつながつてゐる所さ。』なんてことをいふのだ。さうして、さういふのが藝術家に同情したことだと思つてゐるのだ。『理解のない人間に云はせれば、君等の生きてゐるといふことは全く殃だとしか思へないんだ。少くとも同情は無論の事、諒解さへ出來ない現象なのだ。』そんなことを得意になつて捲くしかける男なのだ。

で秀二は、自分の叔父が、僕のやうな藝術家を產んだことは、何んといふ造化の惡戯だらう、叔父にとつてこんな不幸なことはないと、ひどく僕の親父に同情してゐるのだ。尤も、僕の天才が將來何う發展するか、その工合によつては親父の不幸が幸福に來栖家の不名譽が名譽に早變りしまいものでもないなんてことを考へてゐるのだから助らない。(尤もこれにはもうたいした望を抱いてゐはまいが、もしまだ抱いてゐるならもうすぐ失望するだらう。)だから彼れにとつては、僕といふ人間は『藝術家マイナス天才』即ち單純の精神病者に過ぎないのだ。そんな病人が結婚しやうがしまいが、志摩佐喜子なる女流藝術家と關係しやうがしまいが、秀二にはてんで問題ではないのだ。

けれども彼れは僕を一個の人格として見ないで、來栖家の一員、自分の一族の一人、自分の親切な叔父の一人子とし

て見ると、その人間の運命は、いろ〱の內親關係を通して、自分にも差し響いて來ると思つてゐるので。それは一個の精神病者の問題ではなく、秀二自身の一族の問題なのだから、勢ひ干渉もし盡力もしなければならない責任を感じてゐるのだ。彼れは考へてゐるのだ。『あの下らない夢のやうな人間を相手にするのは厄介千萬のことだが、それも一つの責任だ。家族的の責任であると同時に、日本人一人を取扱ふのだから國家的の責任だ。』

だから彼れは、僕をつかまへて事務的の話をする度に口癖のやうにいふのだ。『君と眞面目な相談をするのは、雲を掴むやうなものだ――といひたいが、寧ろ雲と喧嘩するやうなものだといふ方が適切だ もつと有用な仕事を山のやうに控へてゐる僕が、そんなことで暇をつぶすのは實際馬鹿〱しい。』その癖彼れは、好んで僕を相手にしたがるのだ。殊に眞面目な家族的の用向きで僕に向つて來たいのだ。その理由は單純なのだ。彼れは、僕といふ人間に對すると、世間的に自分の方が優勢だといふことを信じてゐるので、いつも目上のやうな口を利くことの出來るのが嬉しくて堪らないのだ。實際問題で僕をこづき廻すのが痛く〱たまらないのだ。『一體君は何うする氣だ』なんて、親父が倅にいふやうなことを僕に向つて云へるのが大得意なのだ。さうして、僕が彼れにそんな風に扱はれるのを忌々しがつてゐるだらうと思ふと愈嬉しく堪らないのだ。要するに彼れは、世間的には僕と比較にならない程優位に在るといふことを、僕に直接法で說明するのを何により名譽と心得、又愉快に感じてゐるのだ。罪もない男ではある。さうして、それが亦僕に非常に都合のよいことだ、といふのは、彼れはその慢心の爲めに、僕から金をねだられることを得意がつてゐるのだ。借りられるのでなく、ねだられるのが嬉しいのだ。その點だけは頗る都合よく出來てゐる男だ。

然し、そんな理由から、此度も、例の結婚問題について無暗と熱中して向つて來られるには實際困らせられる。それに彼れの商賣が商賣だからでもあらうが、大に氣乘りのしてゐることでも、根つから氣乘りのしない事でも、同じやう

な熱心さで取扱ふことの出來るといふ、彼等の同僚の多くが持つてゐるので、今度のことも彼れ自身、興味を感じてゐるかゐないか知らないが、とにかく馬鹿に熱心なので實際煩るさくてたまらない。

「一昨日の晩もさうだ。鷄鍋を突つきながら話したのだが、片時だつて僕の顏からあのいやに聰明らしいいけ好かない眼を離さないで、水だきの肉をおろし醬油につける時位は、そつちの方を見ても好ささうなものだが、ダラ〱汁をこぼしながら僕の顏ばかり見てゐるぢやないか。あの高慢な重役見たいな顏――實際重役なのだから仕方がないが――を間斷なく見せられてゐると、僕は下級銀行員にでも採用されたやうな氣がして、實際悲觀してしまふ。全く、人間と向ひ合つてゐるやうな氣がしない。人間の言語と智識と容貌とを惠まれたゴリラと話してゐるやうな氣がする。それに言ふこともたまらないが、それはいつものことで聞き流すにちつとも苦しくはないが、あの晩は、彼れ自身、僕の藝術家的心理には充分同感し得るといふ意味の文句をいろ〱に變形させて、一々文句の頭に序言として附加へるので、聽いてゐられたものではない。耳を塞いだつもりでも、その擽つたい言葉が何處からか入りこんで來るので、液の下に冷汗をかき〱どけた。何といふ愚鈍な男だらうと思つて見ると、あの聰明らしい男が却つて悲慘に見える。而かも一層やり切れないのは、僕がそんな風に考へてゐると、それも充分察してゐると言はぬばかりに、時々いやに苦笑して見せるのだ。さうして『僕等のやうな電氣屋の親方が君のやうな學者に向つて利巧らしいことをいふのは、チヤンチヤラ可笑しいが』だとか『人生とか社會とかいふことについては、君の方が眞劍に考へてゐる筈だが』とか、要りもしない文句を連發させて一つぱし當てこすつた氣でゐるのだから助らない。

つひ餘計な棚下ろしを長たらしく書いてしまつたが、その晩彼れはいつもの元氣もなく頗る殊勝の態度で眞から弱つたやうに懇々事情を訴へるのだ。僕の父も彼れも進退谷まつてゐるといふのだ。何しろ此方から望んで固い約束をし

て、令孃自身も長い間その氣でゐて、無論世間へも相當知れ渡つてゐるのだから、今更ら此方から破談だなんてそんな蟲のいゝことを申出された義理では無いのだ。事の起りは僕が曖昧なことをいつて逃げを張つてゐるので、先方が氣付いて騷ぎ始めたといふ譯なのだが、何しろ僕の氣が變つてしまつたのだから、此方から、約束通り履行するとは何うしても返事が出來ない、といつて破約を申出る譯には無論行かない。申出ても先方がおいそれと聽く筈がない。現に、先方では、僕が曖昧なことをいひ出したのは、何か娘に瑕でもあるといふのか、それならば娘の將來の爲めに打ち明けて貰ひたいなんて筋ッぽいことをいひ出して來てゐるのだ。それに對して此方では、泰男は決して約束を變更するつもりではない間違なく履行しますなんてその場凌ぎのことを、向ふからダメを押される度何度となく返事してゐたのだから、愈日取りを決める段になつて見るともう延ばす口實がなくなつて、まだ一年も先きのことだから何うにかならうと、親父は秀二と相談して好い加減の時日を云つてやつたのだが、その時日がもうとうに經過してゐるのだから、借金だつたらとうに強制執行がすんでしまつてゐる時分なのだ。親父も秀二もこればかりは金で始末をつけるといふ譯にも行かないので全く弱り込んでゐるのだ。

流石の秀二が泣き出し相な顏でそれを訴へるのを聽くと、如何にも可愛相にはなるが、僕だつて、それぢや結婚しやうといふ譯に行かないことは、秀二にだつてよく解つてゐるのだ。だからいくら責められたつて、泣きつかれたつて、僕の態度ももう動きが取れやしないのだ。秀二の泣事に對して、僕はたゞそれだけをいふより外仕方がないのだ。彼れは屢々先方が實業界の覇王で、自分の會社とも大關係があるので、それを敵にしては大變なのだといふことを云つては、後から氣がついて『そんなことは問題にならん話だがね』と取消すが、又暫時するとそれを云ふ。實際はそれが問題なのだ。しかも彼れ自身にとつてよりは、僕の親父にとつて一層の問題なのだ。『一家の浮沈に關する』。そんな仰々しい言

葉をさへ、彼れは不用意に使つてしまつて流石に苦笑するのだ。今日の人間にそんな紋切形が何の響きをも與へないことは充分承知してゐても、何しろ實際影響することが大きいのだらう、つひそんな陳腐な文句が「俺も現代人だ」と威張つてゐる彼れの口から出るのだ。

たゞ驚くべきことは、彼れの熱心だ。親父がいふやうな威どし文句で來るかと思ふと、母がいふやうな泣言を列べる。人情で來るかと思へば、利害で來る。それこそ、ためつすかしつ手を代へ品を代へてやつて來るので、僕も實際弱らせられた。もう二三年も僕が年をとつてゐたら、恐らく彼れに攻め落されたらうと思ふ。若いことにつく〲感謝しない譯に行かなかつた。

流石の彼れも次第にいら〲して來た。さうして尖つた調子を出しては自分で氣がついて、無理やりに目上らしい年長らしい調子に逆戻るのだが、いかにも苦し相で氣の毒だ。然し僕だつてその時はそんなことに會釋する餘裕なんかありはしない、向がそんな弱味を見せれば、それにつけ込んで頑張るばかりだ。時局は全く行き詰つて、無暗と搾取るのは飲むことだけだ。殊に始めには非常に警戒してゐた彼れは、中途からガブ〲やけにやり出した。醉ふと自慢の聰明が何處かへ行つてしまうことは彼れと雖も脱れないのだ。さうして餘計なことばかりしやべり出すことはちつとも聰明でない彼れの多くの友人と變りはない。

「然しだね。何といつても君は僕のやうに苦勞した人間でないから、僕にいはせれば一個のお坊ちやんに過ぎないんだよ。僕はこれで物心を覺えた時にはもう他人の飯を喰つてゐたんだからね。高等教育を受けるつたつて、君等は君に對して親たる義務を持つたものゝお蔭によつてゐるのだから全く苦勞なしだが、僕なんかは、叔父には違ひないが、僕に對して何の義務もない人の世話でとにかく大學までやらせて貰つたのだから、土臺、人間といふものに對する心理作用

が、君等とは全然違うよ。僕等は、コレツばかりのうちから世間といふもの丶中で揉れて來たのだ。君等の人生や社會てのは、つまり天才だとか學者だとかいふ、云はゞ一個何百圓もするやうなレンズを通して、こんな位のピントグラスに映つた人生社會なんだ。それは嘘の人生でも社會でも無からうさ、然し人間が肉眼で見た世界とは別のものなのだよ。實際、君でも僕でも、何方の世界に生きてると思ふんだい。なんぼ君でもまさかピントグラスに映つてゐる方が眞個の君や僕で、かうやつて肉眼で見へる君や僕は嘘なんだとは云へないだらう。天才か學者か知らないが、ピントグラスの外に出れば僕の方が敗けちやゐないせ。』

『それが何うしたといふのだよ。』僕はペラ〳〵出る彼れの言葉を堰め止めやうとしたが、無論もうかうなつては手遅れだ。

『だからさ、いゝ加減にごまかして行き給へといふのだよ。君は一體己ぬ惚れが强過ぎるよ。自分を天才だと信じ切つてゐるから、後世の歴史家が俺のことを書く時に、俺がこんな平凡なことを考へてゐたと思はれちや困る。こゝんとこを一つうんと革命的に考へたことにして貰はなければ天才の估券が下がる、なんてそんなこと考へてゐるのだからやり切れない。』

『誰れがそんな馬鹿なことを考へてゐるものか。』

『でも君は無意識にそんなことを考へてゐるのだよ。それでなければ君、僕等のことを、無意義な生活だの動物的だのつて云ふ理屈がないぢやないか。何んでもいゝんなら動物的だつて無意義だつてちつとも差支ないぢやないか。後世の歴史家なんかに、居たんだが居ないんだか解らないやうな人間なら、何うなつたつていゝぢやないか。君等は往來を歩くのに、通行人が八方から自分を見物してゐると己ぬ惚れてゐる人間の類ひだよ。誰れが君のやうな人間に氣をつけて

ゐるものか。だから水撒き車でも、まるで誰れも居ないと同様に水をひッかけて行くんぢやないか。皆忙しい人間だよ、閑ま人が考へてゐるやうなもんぢやないよ。一體君の生活が閑ま過ぎるのがいけないのだよ。君はいつも閑の爲めに死に瀕してゐるといふやうな顔をしてゐるぜ。自分の顔は見へなからうが何うだい僕の顔を見たばかりで自分のと大分違ふ位は解るだらう。』

實際、その通りなので僕は覺えず吹き出した。彼れは醉ふと時々眞個のことをいふ。

『さういふと君等は、これでも頭腦の中は多忙を極めてゐるのだ、人生の微を穿ち、宇宙の何とかを何とかする爲めに大多忙なんだなんかんといふにきまつてゐるが、それが大體いけないんだよ。身體にしよざいがないから、そんな百にもならない事を考案してゐるのだよ。監獄で何とかいふ一人きりの部室に入れられたものはしよざいがないので、物を考へてばかりゐるんで、少し長く入れて置くと大抵氣違ひになるといふぢやないか。君達もその類だね。元來大の男が、學校で一週に二時間や三時間西洋の小說を讀んで聽かせたり、年に二つや三つ小說だか脚本だか嘘八百を書いたり、そんな君、隙だらけの生活を續けられるといふのが土臺訝しいんだよ。健全の男子だつたら、第一身體の持つて行き所があるまいぢやないか。五十六十の老人なら知らぬ事、僕等のやうな若い人間がそんな、閑にあかして生きてゐますてやうな生活が續けられるかい。だから君なんか、志摩佐喜子が氣まぐれに云つて出鱈目を、三月もかゝつて眞劍に考へるなんてことになるのだよ。いかに君が閑だからつて、少しは仕事に追はれてゐる人間に對して遠慮するがいゝ。ね君、も少し仕事をしちや何うだい。仕事て奴は奇妙に下らない事を考へないやうにしてくれるものだよ。さう〳〵此の間君の所から借りて行つた雜誌の尻についてゐる小說を一つ二つ讀んで見たら、それが皆揃つて、丁度君のやうに閑な人間で、晝頃に目を覺して床の中で新聞を讀んで床を離れると晩飯になるてやうな生活をしてゐる人間がいろんな煩悶をした揚

何に、仕事によつてそんな煩悶から脫れる外はないと思ひつくといふ結末なんだから面白ろいよ。實際い丶覺悟だと思つたね。アッハッハ。』

何といつても反響がないので、

『オイ何とかいへよ。人にばかりしやべらせてないで。』

少し氣の毒になつて、相槌を打つ氣で意味もなく、

『僕は又君のやうに、レールを敷いたり電柱を建てたりして儲つたの損したのといふのを生活と心得て、得意になつて人に處世術の講釋するやうな安價な氣持になれたら嘸幸福なことだらうと思つてゐるのだよ。』

「美しからう』いつものやうに僕がムキになつて向つて行かないので、彼れはや丶チレ氣味で『まあそんなことは何うでもい丶として、例の結婚問題だがね。又話が前に戻るんだが、何うだい、い丶加減に落城してくれちや。お父さんの信用にもか丶わるが、それよりも、お父さんに對する僕の信用に拘わるので弱つてゐるんだよ。君は、お父さんが君に勸告する時に何時もやれ「身を堅めろ」の「義理を考へろ」のつて却つて承知が出來なくなるやうな文句ばかり列べるので腹を立て丶ゐるやうだが、そんなことを氣にするのは要らんことぢやないか。どうせ君の所謂石器時代の人間だもの、碌なことを云はないのは解つて居らあね。それよりも僕は一體、君が結婚といふことを、そんなに重大視するのがわからないのだよ。さも重大事件のやうに、眞鍮のパイプで考へ込んでしまうなんて愚劣だよ。何んだい。女一人位生かさうと殺ろさうと、そんな大問題ぢやないぢやないか。何んだい。』

頻りに『何んだい』を連發し出すと、流石の事務家も愈々お終ひなのだ。語調も自然荒つぽくなる。

『君のフイロソヒーなるものだつて元來さうだつたぢやないか。現代人が結婚なんかに拘束を感ずるなんて何んだい。

そんな意氣地のない奴が藝術もへつたくれもあつたものかい。僕には實際君といふ人間が解らずやとしか思へないよ。日本人だから日本の法律習慣に從つて結婚する、けれども人間は人間なんだから、人間の權利で行動の自由を留保する。それでいゝぢやないか。それなら僕も充分應援するよ。お父さんにだつて誰れにだつてさういへばいゝんだ。ナニ結婚したつて男の自由です。お父さんが若い時分取つてゐたやうな、いんや、今日と雖も現に取つてゐるやうな自由行動は私も立派に取る權利があります。それでいゝんだよ。皆さうなんだもの。何とか婦人協會が議會へ持ち出した法律の文句のやうなことを眞面目に實行してゐるものが何處の國にあるもんか。殊に君、君等のやうな天才的の生活の特權はそこにあるんぢやないか。」

「よく解つてるよ。けど僕は結婚なんかいやだよ。」あんまり馬鹿〱しいので、僕も我れ知らず口を容れる。

「そんなお乳母日傘のお孃さん見たいなだゞをこねるから、お坊ちやんだつていふんだよ。要するに君は恐れてゐるんだ。豪ら相に云ふけれども、要するに怖わいんだ。たゞそれだけなんだよ。だから僕は多少高壓的に君に是非結婚しろていふのさ。結婚なんてものはお辭義と同じでね、考へてするもんぢやないんだよ。たゞ人がするから俺もする、それでいゝんだよ。君のやうに考へ込んだら、他人の作つた世界にはそのまゝ棲んぢやゐられやしないよ。殊に親父の親父の親父の親父が作つた世界を、たいして修繕もしないで引繼いでゐるんだからね。不合理なことは云はずと知れてるよ。そんな講釋はお坊つちやんから承らなくたつて誰れだつて百も承知してゐるんだよ。けれども君、考へて見たまへ、澤山人間がその裡で生きて來たんだからね、それほど工合の惡いものでもあるまいぜ。もしも非常に工合が惡かつたら、自分だけ工合のよいやうにしたらいゝぢやないか。人間その位な度胸がなかつたら生きてる甲斐なんかありやしないよ。一體天才だの藝術家だのてものはそんな風に考へべきものぢやないかい？　小說なんか讀むとよくそんなのに出喰

はすが、あれは全部蓋そらことなのかな。あいつらは皆君のやうに實行力が皆無だと見えるね。』

際限がないので、流石の僕もうるさくなつたので、

『もう相談は濟んだ譯だね。親父の傳言てのはそれだけかね。』といふと、彼れは新しい接穗を得たといふ調子で又始めたのでうんざりした。

『相談はまだ濟んではゐないぢやないか。僕はお父さんに、今夜は何うでも君が、佐喜子と手を切つて、結婚を承知するやうに話をつけて來てくれと固く言はれて來たんだよ。所で今もいふ通り、僕はその點でお父さんと少し考が違うのだ。君と女流藝術家との關係なんか、手を切るも切らないもないと僕は思つてゐるんだよ。二人が結婚でもしなければ生きてゐないてんなら知らないが、全くそんな時代物とは質が違つて、僕等に云はせれば、まるでプラトニツクラヴなんだからね。誤解しちやいけないよ。關係の有るなしぢやないんだよ。つまり法律道德習慣規則に裁つて來ないラブだといふのさ。かういふ一件になると石器時代の人間にはわかりつこのない話なんだからね。だからつまり君達の自由の範圍内にある事なんだよ。――そんなに堅くなつて考へ込むことなんかあるもんかい。何んだい。――君は僕を不眞面目だと思つてゐるらしいが、それはいけないよ。僕は、考は君よりはずつと足りないからうがね、これでも眞劍なことは君に讓らないつもりだぜ。君は何てへと僕を朴念仁扱ひにするが、僕だつて君、血も熱もある若い人間だからね。』秀二はほんとうに眞劍になつたやうに、聲も調子も急に變つて、いやに僕の顏ばかり見てゐた眼を伏せて默つてしまつた。やがて盃に德利を持つて行くのに、醉つてゐる故でもあらうが、ブル／＼手を震はせて、半分過ぎ外に注いだりしてゐる。

僕は、何となく可愛相になつて來た。然し秀二が何んで急に血だの熱だのと云ひ出したのか見當がつかないで、聊か

滑稽にも感じたが、まさか笑ふ譯にも行かないので、氣の毒さうに默つてゐた。

『ねへ君、さうぢやないかつて話よ。』秀二は忽ち又元の上調子に返つて『ヘッヘッヘ』と醉漢らしい笑聲を立てたので、僕は却つて面喰つた。

『さうぢやないか。さういつちや何だが、君のお父さんだつて何んだい、君は何處の馬の骨かわからない貧乏士族で、いつ何ん時一家擧つて消へて無くなつたつてちつとも差支ない身分だつたんぢやないか、それが今日ぢや、來栖家の名譽だの、祖先が何うだのて、まるで高天原から昨日引越して來たやうなことをいつ一力んでゐるのだから笑らはせるよ。何れ男爵にでもならうといふには、一族のうちに不心得者でも出來たら萬事休すだからね。で君のことも心配するといふ理窟なんだよ。それこそ、何んだいツて話だ。が然しだぜ。』秀二は慌てたやうに僕の鼻の先を掌で抑へて『が然し、それを、君のやうに馬鹿〱しいの腹が立つのと躍起となるのは間違つてゐるよ。金魚が君、ぼうふらなんか喰うのは下等だつて憤慨して見たつて始まらないぢやないか。人間なんてものは要するにぼうふらを喰つて生きてゐるんぢやない、ぼうふらを喰はなければ生きて行かれない動物なんだからね。それが下らないなら、何が下るんだい? 僕は一體君達が癪に障るんだ。』秀二は又ムキになつて血走つた眼で僕を睨むのだ。隨分醉つてしまつたやうだ。

『何んだい、君達は「親爺々々」ツて動物扱ひにしてゐるが、その親爺連が作つた米を喰つて、親爺連の作つた學問ををそわつて、親爺連の作つた法律で縛ばられてゐるんぢやないか。それほど下らない親爺なら、ドシ〱征伐して君達が天下を取つて、見事親爺共を、君等が今されてゐるやうな奴隷にしてグイ〱壓迫するがいゝんだ。そんな元氣もなくつて、親爺の尻にぶら下りながら「親爺を滅ぼせ」が聽いて呆れるだ。そんな親爺にさへ征服されてゐる意氣地なしが、何を威張つたつて始まらないよ。結婚位放つぱなしたつて、外の事は皆奴隷ぢやないか。何んだい。上は內閣總理

大臣から下はボロ會社の社長に至るまで親爺ならざるなしなんだよ。君等が如何に悶いたつて、親爺の勢力範圍から逃げ出す力はありやしないぢやないか。だからいふんだよ、それがいけないてんなら、天下の親爺を鏖殺しにして君方だけの世界にして見せろてんだ。何うだい、出來やしまい。出來なきや許してやるから、親爺の作つた日本なんかにぐづ〳〵してゐないで何處へでも行つてしまひたまへ。何方も出來ないでピク〳〵生きてゐるから、神經衰弱のサンプルが出來するのだよ。殺ろすも死ぬも出來ないなら、下らない意地張りは廢したが好いよ。』

『もう僕は歸るよ。』全くいやになつたので僕も多少景色ばんで立ち上らうとすると、秀二は急に眼が覺めたやうに僕の中腰の姿をまじ〳〵と眺めて、

『歸る?』大に考へ込んで、俄かに狼狽して自分も中腰になつて、僕の前へピタリと兩手を伏せて、『まあ待つたり、坐つてくれたまへ。一體僕はこんなのんきなことをしやべつてゐる場合ぢやなかつたのだね。いや失敗〳〵、大にあやまる。でその例の問題をも少し目鼻をあけて貰はんと實際僕は立つ瀨がないのだ。今度といふ今度は。お父さんも眞劍で心配してゐるんだからね。まあ坐つてくれたまへ。』

秀二は頻りに居ずまゐを直しながら『しまつたね、〳〵』と獨言のやうに繰返した。頗る神妙になつたので、事務的に逆戻りされては堪らないと、僕は立ち上りかけたが彼れはしやにむに止めて立たせない。

『歸るなら僕も一緒に出るから少し待つてくれたまへ。さうして今夜は是非僕の所へ泊つて貰はんければ。妻君が君、近頃泰男さんがちつとも顏を見せないつてんで大にふさいでゐるんだよ。あいつは、御承知の通り君の崇拜者で、僕無かつせば、到底君を只は置かない女なんだからね、……又餘計な事を云つたね、怒りつこなしにしやうぜ、その、何か僕が君の機嫌を損つたに違ひないときめてゐるんで、今夜は、全くさうでないといふ證據物件として君を連れて歸らん

と動きの取れないことになつてゐるんだよ。どうも動きのとれないことが多くてね。アツハツハ。で是非一緒に來て貰はう。まあ君、腹を立てんでね、僕が勝手な熱を吹けるのは、天下廣ろしと雖も君だけなんだからね。大目に見てくれ給へ。アツハツハ、恐ろしく話が理に落ちちやつたね。まあ一つ飲み直して、それから一緒に出かけやう。』そんなことをいひながら、無意味に食卓の上のものなどを取片付けてゐる彼れを見てゐると、此の聰明至極の男が馬鹿に憐れつぽくなつて、僕はとても振り切つて歸る譯には行かなかつた。

　がそんな風で、結局此會合も、問題を後へも先きもやることは出來ずにしまつたのだ。

泰男の手紙の三

　友人達が僕の神經衰弱を非常に惡いやうに觸れ廻つたので、僕は何處へ行つても氣違ひ扱ひにされた。山地がそれを心配して、とう〱僕を引張り出して此の温泉に來たのだ。

　然し友人のプロパガンタのお蔭で、例の問題は僕の神經衰弱の亢進が理由となつて有邪無邪のまゝになつてゐる。白狀するがなどゝ斷る必要ないが、その後も佐喜子とは何度となく會合してゐる。秀二も同じ泣事を繰り返して絶えず攻めよせる。此の二人が僕の神經衰弱に毒藥なのだから當分二人の臭ひのしない所へ逃げ出せと、山地は僕を連れ出したのだ。

　此の甘い毒藥と苦がい――よりは臭ひ毒藥とが兩極端の心理から、まるで共謀してゐるやうに口を揃へて僕に結婚しろといふのだ。一方は僕を破壞の快感を漁る道連れにしやうといふのだし、他方は僕を因襲の道連れにしやうといふのだ。山地にそれをいふと、『の』と『か』の相違にそんな意味があるのかいなんて解らないことをいふのだ。何の事かと

いへば、『結婚したつていゝぢやないの。』といふのが佐喜子で、『結婚したつていゝぢやないか。』といふのが秀二だから、即ち『の』と『か』だけの違ひに過ぎないぢやないかなんて例の山地式を發揮するのだ。然し目下の僕は、かういふ男に引張られてこんな山奥見たいな所に來ることが、何よりも必要でもあり愉快でもあるのだ。

無論山地の連れて來るやうな所だから碌な所ぢやあるまいと思つたが、中央線のU驛を下りて、あの電車に乘つた時には實際驚いた。電氣が引張るよりも痩馬が引張る方が遙か似つかはしい箱が、まるで海嘯に流されてゐるやうに揺れるのだ。土臺變な調子になつてゐる頭が、暫らく乘つてゐるうちに、肩の上からケシ飛んでしまつたやうに感覺を失つてゐるのだ。胸はしきりにコミ上げて意地にも我慢が出來なかつた。乘り合はせた百姓が丸藥をくれたが、それが黴臭くて一層弱つた。

宿についてもフラ〳〵して、何のかのと山地を煩はすので、山地は、こんな位なら電車に乘るとすぐゲロ〳〵やる妻君を連れて來た方がよつぽど好かつたなどゝいふ。けれども二階から今通つて來た山と山との間に挾まれて半開きの扇なりに展開してゐる平野を見下ろした景色は中々よかつた。五六里も離れてゐる豆をこぼしたやうなUの町がその扇面の、夕陽をうけ金色の地紙に不規則な模樣を描き出してゐるのも珍らしい。僕はつひ昨夜までひたつてゐたあの蒸すやうなカフエの空氣を想ひ出して空恐ろしい氣がした。

宿は今は湯治期節でないので、全く僕等の獨占見たやうなものだ。部屋の眞中に電燈が下つてゐるのに、下女が古風な燭臺ランプを運んで來たので、此頃流行の停電かと思つて聽いたら、さうではなく、此村と電燈會社との間に何か紛擾があつて、最近村會の決議で村一同電燈をつけないことになつたのださうだ。いくら地方でもよく氣が揃つて不便をこらへてゐると思つた。尤もつひ此間までランプだつたのだから電燈よりもまだランプに執着があるのだらう。何し

ろ此山間の宿の靜かな夜に、ランプを灯して座つてゐると、何だか僕の生活の內だか外だかに解釋のつかない革命が起つて、昨日までのあの焦ら立たしい世界なんぞは、一世紀も後か先きかに離れてしまつたやうな氣がする。山地はそれを自分の手柄のやうに云つて、こゝに連れて來た甲斐があると威張る。

それは着いた晚のことだつたが、それからもう三日經つ。僕は何だか心細くなつた。さうして恐ろしくもある。昨日までの自分が何處かへ行つてしまつたやうで、さうして自分を失つた僕が永久にこんな原始時代に取り殘されさうで、不安でたまらなくなつた。山地は、それで愈得意になつてゐるが、僕はもう歸らなければならない。こんな所に一月も居るなんてことは、考へても恐ろしい。此次ぎの手紙は東京から出すだらう。

山地の手紙の一

來栖を此處へ連れ來ていゝことをした。來栖も此處に來た當座ひどく喜んでゐたが、二三日經つか經たないうちに、泣き相な顏をして『僕は何うしても歸る』といひ出して肯かないのだ。我輩は例によつて不得要領居士をきめ込んで、さうかい、なんて濟ましてゐるので、奴さん獨りで歸る決心をしたが、誰れかの云つた通り戀愛病者の決心ほど決心らしくないものはないで、電車が搖れるの、步けばくたびれるのと、當り前のことを故障にしてぐづ〱してゐるうちに、又氣が變つて、といふよりも、氣に關係なしにずる〱に停滯してしまつた。

此ずる〱の停滯は、實際、來栖の生活に驚くべき變化を持ち來し相な形勢になつてゐる。彼れが歸ると云ひ出したのは、此變化を蟲が知らして恐ろしくなつたのだらう。

何が來栖にそんな變化を持來したのか、又何んな風にその變化が彼れに來てゐるか、それは僕にはよくわからない

が、何しろあのうぢやぢやけた、熟つた無花果のやうな世界に入りびたつて嗅覺ばかり働かしてゐた身が、澄み切つた空氣を吸はせられて、彼れの所謂原始時代の自然や安斎園のやうにコツ〳〵した手觸りの人間やに接しただけでも何かの利目が見えずには居ないだらう。

實際來栖はこゝに來て、田吾作の巴里見物を逆にしたやうな生活をしてゐる。絣の布子に赤い襷で籠を背負つた娘の手拭の蔭に隠れた眼にチラと見られても、帝劇の裸踊りにピクりともしなかつた彼れの神經が喞筒のやうに働いて顏面の血壓を盛に増進させる、萬事がさういつた工合なのだ。要するに英國の金貨が南洋土人の部落で貨幣價値を失つてしまつたやうな鹽梅に、折角の來栖泰男がこゝではさつぱり通用しない。萬一來栖が此の村にうつちやられたら明日から喰ふことも出來ないだらう。彼れの出來ることは、此村では用はなし、此村の人のやつてゐることは彼れには一つも出來ない。而して双方とも日本人であるといふのが全く不思議だ。

來栖が第一に落第したのは、渡し場爺さんと呼ばれてゐる此村の主を以て任じてゐる名物爺との初對面だ。爺さんの家は、温泉場からは大分離れた何とかいふ河の「をやぢ橋」といふ橋の袂だ 二人で散歩してそこへ行つて、これも名物らしい團子を喰つたのは度々だが、爺さん大抵留守だつた。所が何時だか、天氣の好い時に店さきで、四ツ手網の修繕をやつてゐるのに出喰はした。成る程名物だけあつて、萎び切つてはゐるが何樣若い時分は猛烈なものだつたらうと想はれる恰好をしてゐた。

來栖は何の氣なしに、此の爺に話しかけたものだ。『君は此村で生れて、その歳になるまで、こんな淋しい、何にもない村で暮らしてゐて、随分……何だらうね……よく退屈しないね。』とか何とかいふと、爺さんは機嫌のいゝ聲ではあつた『なあに、おめへさまのやうに年中ブラン〳〵してゐるんでねへから、ちつとも退屈することはねへ。』といつてすまし

てゐるのだ。

僕は覺えず吹き出したが、來栖は苦い顏をして突立つたまゝ、折角口に入れた團子がまづくなつて困つた工合でクチャ〳〵やつてゐた。爺さんの言ひ草も無理はない。何しろ、來栖の風采といつたら、大島をぞろりと甲の隱れるほど前下りに着て、片手をまるで腕なしのやうな恰好に懷に突込んで、片方の手には、鉤なりに曲つた銀の頭のついた細いステッキを逆かにぶら下げてゐるのだもの、誰れが見たつて、これを稱して『おめへさまのやうに年中ブラン〳〵してゐる』と云はざるを得ない形なのだ。

爺さんの店には年頃の可愛らしい孫娘がゐるのだが、それが顏を赤くして『うちのお爺さんはほんとうに口が惡くて』とか何とか頻りに言譯をすると、爺さんは好い氣な顏でニコ〳〵してゐる。そこへ空車を曳いた若い男が通りかゝつて爺さんに挨拶すると、爺さんは仕事の手も休めずに、娘にいふやうに、

『だつて見なせへ、此の村のものは皆働いてゐら、何んかてへと演說をやりたがるこんな阿呆だつて、偶にはあんなにして車力もやつてゐら。さうぢやねへか青年。』てやうな意味のことをもつと地方語でいふのだ。

『死に損ひ默れツ。』青年は笑ひながら怒鳴つて行き過ぎてしまつた。

來栖は、あとであの爺、秀二の醉つぱらつたやうな奴だといつてゐたが、多少興味を惹いたと見えて、爺さんの經歷などを聽いて來て僕に報告した。

爺さんは、何十年か前にあの橋の架るまでは、そこの渡し場を預つてゐたので、今でも『渡し場の爺さん』で通つてゐる譯だ。若い時分から村の公共の仕事の先達で消防、水防、道普請、なんでも只で働く時の先頭に立たないことはなかつた。わけても隣村との水喧嘩には、何時もぬけ駈けをやるので、村では事が起り相だと、隣村の侵入者よりも先き

に自分のところの此の爺さんを警戒したものださうだ。消防や水防も赤筋の入つた兵隊のやうな帽子をかぶるやうになつてから、年を口實にして出なくなつたが、今でも出火や出水の際には、矢張り、火や水よりも先きに爺さんが出るといつて村の人は笑つてゐる。多年の經驗で、毎年のやうに出る水の度に村中は爺さんの指圖に盲從する外はないといふことだ。從つて普通ならば此頃村々で流行の表彰とやらに、とうに筆頭で擧げられてゐる筈だが、自信が強よ過ぎて、村長や村會議員などを孫のやうに扱ふので、やゝもすれば厄介視されてゐるのだ。

爺さんの渡し場が橋になる時にも、此渡し場は己れの親爺が開いたのだと頑張つて渡し場の廢止を肯かなかつたが、やつと橋の名を『をやぢ橋』とつけてやるといふ條件で納得させたといふから面白ろい。爺さんは、兩岸に渡した綱を曳いて渡しの小舟を進めながら、村の人を彼方から此方へ、此方から彼方へ搬ぶ間のほんの數分間、皆が此の小さい舟を倶樂部にして、いろ／＼のことを話し會つて、岸につくと名殘惜し相に分れて行くのに、此の上もなく興味を感じて、始めは無報酬で、その後は煙草錢にも足らない手當で、長年の間その生活を樂んで來たのに、橋が架つてしまつたので、その當座は氣ぬけがしたやうにぼんやりして、人の顏さへ見れば『橋てへ奴はちつともをかしくない。一人／＼別々にすまして渡つてしまやがる。』とこぼしてゐたさうだ。來栖が嬉れしがり相な爺樣だ。

それに、此爺さん、村の公共の仕事には眞先きに驅け出す癖に、橋が出來るので新道路がつけられた時、自分の少しばかりの田地の一部が削られるのをどうしても承認しないで、とう／＼猫の額ほどの土地に土地收用法が適用されるなんて珍事を惹起した。それも來栖は面白ろかつて、その時爺さんが村會か何かで『道路なんかそつちへ曲げろ、曲つたつて馬でも車でも通るぞ』と怒鳴つた聲色を使つて喜んでゐた。その癖、先年水電の水路問題で村中の地主が會社と大喧嘩をした時には、爺さんは自分の田地に交渉がないので、水喧嘩の際とは大違ひで、貧乏揺ぎもせずに泰然と退つ込

んでゐたさうだ。それも痛快だと來栖は馬鹿に爺さんが氣に入つてしまつた。で、時々出來けて行くが、食物にぶつかるとあんまり面白ろくないと見へて、いつも不機嫌になつて歸つて來る。

何しろ此頃は來栖もあんまり『歸らう』を云はなくなつた。血色も大分よくなつた、畫に描いた狐の眼のやうな眼付も大分癒つた。此の分なら先づ安心だ。たゞ餘り長くなると例の秀二が僕等のこゝに居ることを嗅ぎ出して乘り込んででも來ると厄介だから、近々何處か此邊の外の溫泉場へ行くかも知れない。實は彼奴に旅費を出させる時には、出鱈目の行先きをいつて置いたのだから。

山地の手紙の二

弱つた事が出來た。來栖が村の青年に毆ぐられて可なりひどい怪我をしたのだ。

前便にも書いた通り、あれからすぐ何處か外へ移らうとしたが、來栖が例の調子で、元來そわ〳〵してゐる癖に動けといふといやに泰然と構へてしまう、餘り煩くいふと東京へ引上げやうといふに定つてゐるからそつとして置いたんだが、その間の出來事なのだ．然かもその毆られた原因が赤馬鹿々々しくてお話にならない。

その數日前だ、來栖を崇拜してゐるといふＵ町のある文學青年が宿屋へ尋ねて來て、三人で飲んだ。その青年は町の小さな新聞の記者で、東京の文士の談話を新聞に掲げる光榮を得やうとしてやつて來た譯なのだ。來栖も、例によつて歐米の劇壇の事だか何だかスタイリストがどうだの、サンボリズムが何うのと、僕等に陳ぷ漢芬なことを云つてゐたが日本の地方新聞にヨーロッパの芝居でもあるまいなどゝ僕が混ぜ返したりするので、記者先生もいゝ加減に諦めて雜談をしてゐるうちに、此の村の電燈問題に及んで、その紛議のいきさつを話し出したのだ。何でも、會社では、自分の都

合のいゝ此溫泉場附近だけ電燈をつけて、村全體に對しては知らん顔をしてゐるので、村から請求すると、會社はそれは三期線だとか何期線だとか稱して應じない、然らば三期線とは何年度に實行するのかと聽くとそれは未定だといつて埒が明かない。村では既に水路問題で喧嘩もしてゐるので、大に憤慨して、水力の村營電燈を計畫して縣廳に願ひ出た。所が縣では此地方の電燈は既に會社に認可してあるからその既得權を害する村營は許可せぬといふ。然し双方の意地づくが昂じて來て、萬一不許可にでもなると村民が一揆をも起し兼ねない形勢になつてゐるので、縣廳も本省で調査中を口實として握り潰してゐる。村民は本省にも委員を出して陳情し、村では毎日のやうに演說會を開いて會社攻撃の火の手を擧げてゐる最中なのだ。殊に青年團はその運動の中心になつて、青年は腰辨當の鞋がけで奔走してゐる。といふ話をして、その記者は、村の青年會の名を署した宣傳ビラのやうなものを出して見せた。

驚いたことには、それはいろ／＼と新しい文句を使つて中々の大論文なのだ。所が相憎く『現代の社會組織の缺陷は』とか『制度の公正は失はれ』とか『資本家階級が民衆の生活を壓迫し』とか『政府は畢竟資本家の走狗である』とか、頭からしまひまで來栖の大嫌ひな文句が行列をしてゐるのだ。

一體來栖は、民衆運動だの納豆だのといふ平民の好くものに對しては、可なり同情を持つてゐるやうなことはいつてるが實は虫が好かないので、流行の宣傳ビラなんか見ると、食卓上の電燈に蛾が飛んで來たよりもいやな氣がするなどゝいつてゐる男なのだから、その青年會のビラが馬鹿に癪に障つたと見へて、來栖にしては珍らしいほど猛烈に罵倒したものだ。こんな山奧の百姓が民衆もないものだとか、現代の、社會組織のツていふ資格のある面をした人間は一體この村の何處にゐるんだいとか、こんな村は全滅したつて日本はちつとも困らないのみか野蠻人の數が減つて幸福だとか、僕が村の人間ならとても腕力沙汰を起さずに置けないやうなことを連發させる。無論酒に神經衰弱が手傳つてゐると思

ふから、僕もやんわり抑へてやらうとしたが、なまじそんなことをすると一層昂奮するので抛つて置くより仕方なかつた。所が終ひには『一體民衆とは何んだい、阿呆が千人寄つたら阿呆さが千倍になるだけぢやないか』とか『偉大な藝術家や哲學者は、民衆百萬人を殺して一人だけ獲られゝばいゝんだ』とか『澤山の人間を踏み躙つてその血を絞り上げると乾屍人間以上の眞と美とが獲られる』とか、村の電燈問題の話としては餘りに高遠の議論をオッ始めて際限がないので僕はハラ／＼して、結局記者なる青年を追ひ拂ふに如くはなしと、いゝ加減に賺かして歸つて貰つた譯だ。

少し落ちついてから僕が注意すると、來栖はぼんやりして『そんなことをいつたつけか』てな顔をしてるのだ。で僕は、まだ頭がほんとうでないのかとも思つたが、然し從兄の秀二なんかも少し飲むと矢張り此調子なんだから、これは來栖家の一族の遺傳的特質なのだらうと思つた。

然るに、如何に田舍の新聞とはいへ、こんな愚にもつかない病人の譫語に尾鰭をつけて――といひたいが、實は多少口吻を柔らげて――××村々營電燈問題に關する東都文豪の談話とか何とか一號見出しで書き立てたものだ。後から聽くと、その新聞は會社に買收されてゐて、始終會社側の提灯ばかり持つてゐるのだといふから、來栖の啖呵を、飛んだいゝ材料だと特筆大書した譯だ。然し此方は、そんな新聞をのぞいても見ないのだから、書かれたことなんかは少しも知らずに居たのだ。

所がそれから二三日後に、例の渡し場の爺さんの店へ二人で出かけて行つて團子をくひながらいつものやうに爺さんにからかつてゐると、電燈問題の演說會のあふれだらう青年達がゾロ／＼橋を渡つてやつて來たのだ。その中の一人が來栖の姿を見て、皆に何かこそ／＼云つてからづか／＼店に入つて來て、立てゐた來栖をつかまへて、一枚の新聞紙を目の前につきつけて怒鳴り出したのだ。來栖は吃驚して床几に尻餅をついて、目をパチクリやつてゐる。

僕も突然のことで、何を青年が怒鳴り出したのか耳にも入らなかつたが、その權幕が恐ろしいので、仲に入つて事情を聽くと、例の記事一件だ。僕は、その記事は大間違ひだとか何とかいつてごまかさうと思つてゐたのに、來栖はあれで、壓迫をうけると眞から反抗する男なんだから、あの議論が自分の本心であらうが無からうが、そんな調子で向つて來られれば、あゝ云つたが何うしたといふ氣になつて、『何處が間違つてゐるか云つて見ろ、僕等の議論が君達にわかつてたまるか。』なんて威丈高になつて怒鳴り出したのだ　連れ出さうとしても、もう逆上の氣味で聽かばこそだ。そのうち青年の數は益々殖へてもう逃げる隙もなく包圍されてしまつた。さうしてお互に譯もわからずワイ〳〵いつてゐるうちに、來栖はポカ〳〵八方からやられて、救ひ出さうとする僕も大分ひどい目に逢はされた。すると、それまで默つて見てゐた爺さんが、急に飛び込んで來て、あの老人にしては實に驚くべき敏捷さで、群がる青年をそれこそ左に拂ひ右に拂つて漸く來栖を助け出したが、その時はもう來栖は人事不省だつた。それを爺さんは奥へ抱いて行つて僕や娘に介抱させて、自分は店先へ立ち上つて、まだがや〳〵騷いでゐる青年に向つて、割れるやうな聲で怒鳴るのだ。

『もうおめへたちも氣がすんだらう。あんななまこのやうな青二才一匹を××村の青年が大勢よつて打ち殺したつて云はれちや隣村の奴等に笑はれるぞ。さア後はこの爺に任せてさつさと歸んなせへ。巡査でも來ると面倒だからみんなバラ〳〵に歸るんだぞ。』

青年が解散したのを見屆ると、爺さんはすぐと荷車を曳いて驅け出した。何處へ行つたのかと娘にきくと、一里もある醫者の所へ走つて行つてくれたのだ。來栖はぢきに氣がついたが、何しろ身體中を撲たれたので身動きもならない。弱つたことになつたと僕は殆んど途方にくれた。その中爺さんは荷車に醫者を乘せて大汗で驅け戻つて來た。幸ひ負傷はたいしたことはなく、たゞめちや〳〵に打たれたので氣を失つたのだと解つて安心したが、然し一週間程は治療を要す

るといふことだつた。爺さんは頻りに、自分に免じて表沙汰にしないやうと賴むのだが、無論僕にも來栖にもそんな氣は毛頭ないことを云つてやつたので爺さんも喜んだ。僕達は、始めて爺さんの頭を下げる恰好を見た。

醫者が繃帶を濟ますのを待つて、爺さんは來栖を宿まで背負つて來てくれた。實際爺さんの親切には淚がこぼれた。爺さんが居なかつたら僕達は何うなつたか全くわからない。殊にそれは、畢竟來栖をこゝに連れ出した僕の責任だといふことを考へて僕はゾツとした。然しそれを云つて、爺さんに禮を述べながらも、『あんななまこのやうな青二才一匹』と怒鳴つた爺さんの聲が耳についてゐるので頗る變挺な氣持だつた。

東京へ電報を打つて秀二でも呼ばうかと思つたが、來栖が泣き相な顏をして止めるのでやめにした。然し困つたことは、それ以來、宿屋までが無暗と僕達を冷遇して、身動きも出來ないものを抱いてゐるのに殆んど出て行けがしにするのだ。尤もそれは青年が宿屋へ來て、あんな客を泊めるなと責め立てるからだ。時々石などを僕等の室を見がけて投げつけるものもある。宿屋も迷惑には違ひない、と云つてまだ二三日は動くどころでないと醫者もいふ病人をつれて何處へ行く譯にも行かぬ。步けるやうになつたらすぐにも東京へ歸るつもりだ。

山地の手紙の三

東京へ歸る筈だつたが、まだ來栖の打身がほんとうに癒り切らないので、前の所よりも一驛先きの此T溫泉に來た。それについて、實に滑稽とも何ともいひ樣のない、僕等の迂濶加減を暴露した事件があるのだ。

前の溫泉宿での話だ。來栖もこゝ一日二日で東京へ立てるといふ頃に、宿屋が急に賑かになつて、最上等の座敷に多勢の客が入り込んだ樣子だ。それに訝しいのは警部や巡査や角袖が澤山下の座敷に泊り込んだといふのだ。まさか僕等

の毆ぐられた事件が知れたのではなからう。何事が起つたのかと聽いて見ると、例の電燈問題で、何うしても縣廳が村營を許可しないところから村民の形勢が愈險惡になつたので、本省の役人や何とかいふ此地方の代議士などの仲裁で、村と會社との間に何とか妥協をつけることになつて、その連中や會社の重役がこゝにやつて來たのだ。澤山の警官はその連中の警衛といふ譯だ。

ところがその晩僕は風呂でバッタリ秀二に逢つたのだ。おや君はこゝに來たのか、おや君は此處に居るのかといふ譯で、泰男は何うしてゐるといふから、もう寢たが、それより君はこゝに遊びに來たのかと聽くと、會社の用件で來たといふのだ。聽いて見ると何の事だ、來栖が命がけで掩護したこゝの電氣會社はとうの昔東京の秀二の會社に買收されたので、秀二は卽ちあのガタ〳〵電車の會社の重役なのだ。來栖が早くさうと知つてゐたら、如何に醉つぱらつてもあんなことは云はなかつたらう、あべこべに隨分會社をこき下ろして、毆ぐられる代りに靑年共から敬意を拂はれたらうに、惜しいことをしたと思つたがもう追付かない。で簡單に來栖の毆ぐられたいきさつを話すと、秀二は大に驚いて、早々湯から出て僕等の部屋に來た。

來栖は秀二が入つて來たので面喰つて、靑年に怒鳴られた時のやうな顏をしたが、僕が勝手に秀二を呼んだのだと思つて僕を睨むのだ。が秀二から事情を話されて、泣き出し相な苦笑を浮べたには全く同情させられた。

秀二は亦よせばいゝのに、來栖の毆ぐられた仇討にでも來たやうに、村の馬鹿者どもが何をもがいたつて、結局は會社の勢力と金力とに屈服する外はないのだ、一體此頃はこんな農村まで、デマゴーグに煽ほれて騷ぎ立てる風が盛になつて、思想の惡化がそれに油を注ぐので始末に行けない傾向になつてゐる。此の貧弱な日本が今からそんなことでは、殖産工業が何うだとか、斯うだとか、新聞に出た來栖の談話を商人が通譯したやうなことをいひ出すのだ。來栖はそれ

を聽くに堪へないやうに、つく〴〵後悔したやうな顏をして頭から蒲團をかぶりたさうな工合だつた。僕は見兼ねて秀二を部屋から連れ出してしまつた。秀二は何うしても村の奴を二三人縛らせなければ氣が濟まぬ、すぐと連れて來た警部に取調べさせる、と云つて聽かなかつたが、それだけは賴むやうにして願下げにした。

翌朝になると、來栖は何んでもすぐ歸るといつてきかない。僕もそれがいゝと思つて、秀二の止めるのをふり切つて立つことにした。來栖はまだふら〳〵なので、とてもあの、でなくとも恐ろしい電車――殊に秀二の會社の電車なんかに乘れる譯のものでないから、秀二の一行を乘せて來た自動車が一臺泊つてゐたのを賴んで、それで宿を立つた。所が驛まで來ると、長い間自動車に揺られたので何分にも來栖の疲勞が甚しく、そのまゝ東京まで汽車でゆられるのは危險なので、この溫泉に來て、も少し靜養してから歸ることにしたのだ。こゝは前の溫泉よりは少しは文明の程度が進んでゐて居心地もいゝし、經濟上もたいした差がないので或は少し長く居ることになるかも知れない。初めからあんな惡化村に行かずにこゝに來たら毆ぐられずに濟んだものをと、此間からいろ〳〵の智慧が後から出ることを二人して殘念がつた。

山地の手紙の四

昨日僕等は東京に歸つて來た。もう少し長くゐる筈だつたT溫泉を急いで立たなければならないことになつたのは、又あすこで妙な事件――ではない人間に出喰はしたのだ。何うも今度の旅行は突發事件が多いので面喰つてばかりゐた。

T溫泉の宿で出喰はした人間を誰れだと思ふ。尤もあすこでも來栖は大抵寢てゐたので、出喰はしたのは僕だが、出喰はしたと云つてもチラと見ただけでそのまゝ後ろを見さぜるを得なかつたのだ。

あすこも無論ガランとしてゐて風呂場なんぞに滅多に人の居たことはなかつたが、着いてから三日目の朝に、隣りの女湯の方で、こんな所で聽かれる筈のない日本人離れのした聲で西洋の歌を唱つてゐる女があるのだ。珍らしいことだ、何んな女だらうと好奇心に驅られて、その女が風呂場から出るやうだつたから一寸かい間見てやらうと思つて、此方の入口の戸を細目にあけて待ち構へてゐると、隣りの戸をあけて派手な衣裳をつけたその女が斜めに此方へ通つてゐる渡り廊下を歩いて行くのだ。見ると驚いた、紛ふ方もなく志摩佐喜子ぢやないか。僕は湯上りの身體に水を浴びたやうにゾッとした。

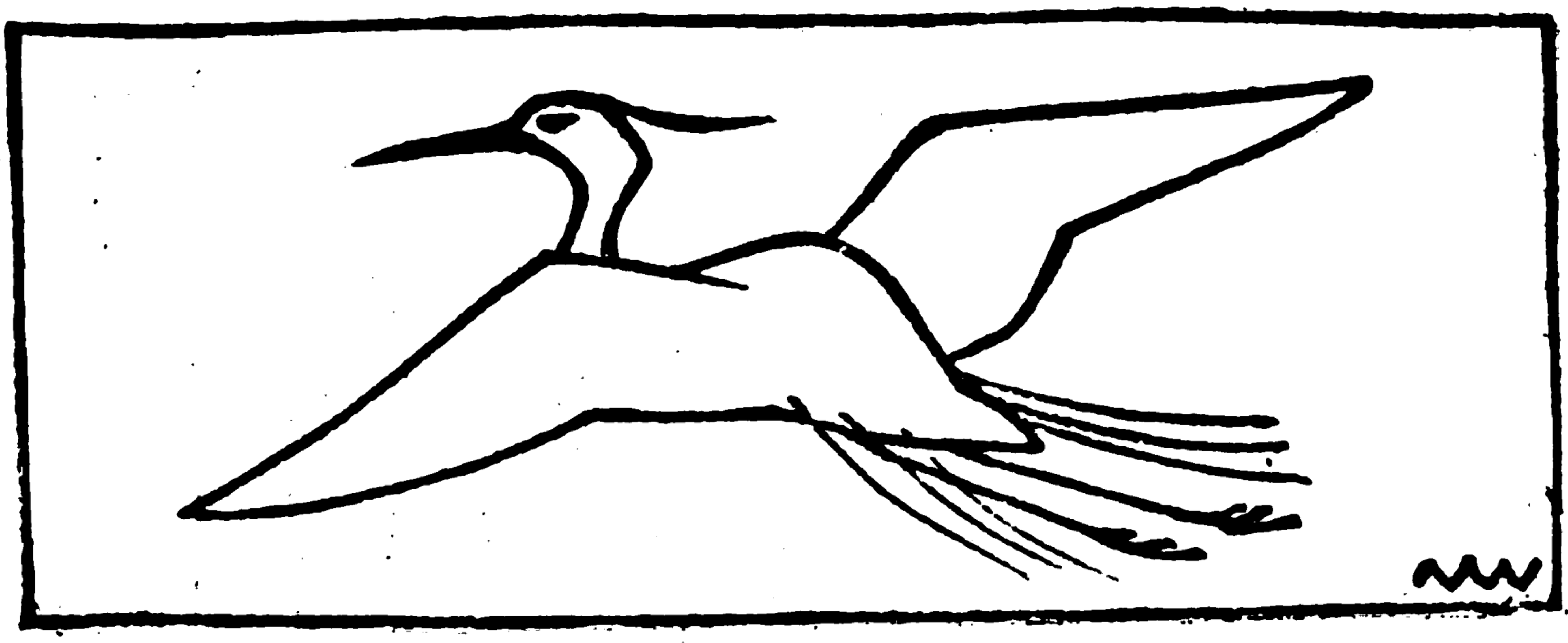
前の溫泉場では秀二に出喰はし、此方では佐喜子にぶつかる。僕は直覺的に何かを考へたんだが、何を考へたのだか自分にも思ひつかずに、風呂場を出て、部屋を歸らうとしたが、佐喜子のこゝにゐることを來栖が全く知らないとすると、うつかりそれを來栖に云つたら何んなことになるかわからないと思つて、女中の一人を空いてゐる部屋に呼び込んで彼の女について聽いて見た。

女中のいふ所は實際、僕自身の耳を疑ふほど意外だつた。彼の女は電氣問題で今騷いでゐる××村の電氣會社の重役の連れだといふのだ。驚いたのはその重役といふのがあの秀二なのだ。その重役は××村へ出張する度に、村の溫泉へは泊らないで此處に泊るのだが、滅多にあの婦人を連れて來たことはない、去年の何時だかに一遍と今年はこれで二度目だといふのだ。それもほんの一泊か二泊で女だけは歸つたが、今度は重役が××村に來てゐるので、女は昨日からこゝに來てそれを待ち合はして、重役の用事が濟んだら二三日一緒にこゝで滯在してゐる都合だといふ。

僕は、それをきいて、自分が來栖になつた氣で泣きたくなつた。何うしていゝか譯がわからなくなつて、ぼんやりしてしまつた。女中は僕の樣子を怪訝な顏で眺めてゐるのだ。さうだらう、知りもない他の女客のことを聽いたりして變

な樣子をするのだもの。でその場をごまかすつもりで、僕等は少し用事が出來たから或は明日頃立つかも知れないと女中に云つて、部屋に歸つたが、考へて見るとこれは矢張り、佐喜子と來栖とが出喰はさないうちにこゝを立つのが一番好いと思つた。餘り廣くもない宿のことだからそれまでの警戒も必要だつたが、それには來栖の寢てゐるのが都合よかつた。明日の朝にでも早速立つことにしやうと思つたが、それを來栖に切り出すのに苦心した。苦しまぎれに、僕は用事を思ひ出したから一足先きに歸るが君は一人で殘るかと云つて見たら、案の條來栖は一緒に歸るといつたので、善は急げだ、――僕は覺えずそんなことを口走つたのだ――と翌朝早く、朝寢の彼女が起き出ないうちに來栖を急き立てゝ慌だしい氣持で宿を出てしまつた。さうして汽車のうちでは、往きがけとは正反對に、來栖はのんきな顔をして、僕はいやにいら〳〵しながら飯田町に着いたのだ。

一體これは何うしたらいゝのだ。もう僕の手には終へない。僕は此の一個月間預つてゐた奈男を彼れに返してしまつたのだ。然し、彼れの毆ぐられた身體はまだほんとうではない。此のうへ踏んだり蹴たりされてはとても助からない、が何うしたらさうされることを脫れるのだ。（をはり）



おしの

芥川龍之介

此處は南蠻寺の堂内である。ふだんならばまだ硝子畫の窓に日の光の當つてゐる時分であらう。が、今日は梅雨曇りだけに、日の暮の暗さと變りはない。その中に唯ゴティック風の柱がぼんやり木の肌を光らせながら、高だかとレクトリウムを守つてゐる。それからずつと堂の奥に常燈明の油火が一つ、龕の中に佇んだ聖者の像を照らしてゐる。參詣人はもう一人もゐない。

さう云ふ薄暗い堂内に紅毛人の神父が一人、祈禱の頭を垂れてゐる。年は四十五六であらう。額の狹い、顴骨の突き出た、頬鬚の深い男である。床の上に引きずつた着物は「あびと」と稱へる僧衣らしい。さう云へば「こんたつ」と稱へる念珠も手頸を一卷き卷いた後、かすかに靑珠を垂らしてゐる。

堂内は勿論ひつそりしてゐる。神父は何時までも身動きをしない。

其處へ日本人の女が一人、靜かに堂内へはひつて來た。紋を染めた古帷子に何か黑い帶をしめた、武家の女房らしい女である。これはまだ三十代であらう。が、

ちよいと見たところは年よりもずつとふけて見える。第一妙に顏色が惡い。目のまはりも暗い暈をとつてゐる。しかし大體の目鼻立ちは美しいと言つても差支へない。いや、端正に過ぎる結果、寧ろ險のある位である。

女はさも珍らしさうに聖水盤や禮拜机を見ながら、怯づ怯づ堂の奧へ歩み寄つた。すると薄暗い聖壇の前に神父が一人跪いてゐる。女はやや驚いたやうに、ぴたりと其處へ足を止めた。が、相手の祈禱してゐることは直にそれと察せられたらしい。女は神父を眺めた儘、默然と其處に佇んでゐる。

堂內は不相變ひつそりしてゐる。神父も身動きをしなければ、女も眉一つ動かさない。それが可成長い間であつた。

その內に神父は祈禱をやめると、やつと床から身を起した。見れば前には女が一人、何か云ひたげに佇んでゐる。南蠻寺の堂內へは唯見慣れぬ磔佛(はりきぼとけ)を見物に來るものも稀ではない。しかしこの女の此處へ來たのは物好きだけではなさ　さうである。神父はわざと微笑しながら、片言に近い日本語を使つた。

「何か御用ですか?」

「はい、少々お願ひの筋がございまして。」

女は慇懃に會釋をした。貧しい身なりにも關らず、これだけはちやんと結ひ上げた笄髷の頭を下げたのである。神父は頰笑んだ眼に目禮した。手は靑珠の「こんたつ」に指をからめたり離したりしてゐる

「わたくしは一番が瀨半兵工の後家、しのと申すものでございます。實はわたくしの悴、新之丞と申すものが大病なのでございますが………」

女はちよいと云ひ澱んだ後、今度は朗讀でもするやうにすらすら用向きを話し出した。新之丞は今年十五歳になる。それが今年の春頃から、何ともつかずに煩ひ出した。咳が出る、食慾が進まない、熱が高まると言ふ始末である。しのは

力の及ぶ限り、醫者にも見せたり、買ひ藥もしたり、いろいろ養生に手を盡した。しかし少しも効顯は見えない。のみならず次第に衰弱する。その上この頃は不如意の爲、思ふやうに療治をさせることも出來ない。聞けば南蠻寺の神父の醫方は白癩さへ直すと云ふことである。どうか新之丞の命も助けて頂きたい。……………

「お見舞下さいますか？如何でございませう？」

女はかう云ふ言葉の間も、ぢつと神父を見守つてゐる。その眼には哀を乞ふ色もなければ、氣づかはしさに堪へぬけはひもない。唯殆ど頑なに近い靜かさを示してゐるばかりである。

「よろしい。見て上げませう。」

神父は顋鬚を引張りながら、考深さうに頷いて見せた。女は靈魂の助かりを求めに來たのではない。肉體の助かりを求めに來たのである。しかしそれは咎めずとも好い。肉體は靈魂の家である。家の修覆さへ全ければ、主人の病も亦退き易い。現にカテキスタのフツビアンなどはその爲に十字架を拜するやうになつた。この女を此處へ遣はされたのも或はさう云ふ神意かも知れない。

「お子さんは此處へ來られますか？」

「それはちと無理かと存じますが…………」

「では其處へ案內して下さい。」

女の眼に一瞬間、喜びの輝いたのはこの時である。

「さやうでございますか？さうして頂ければ何よりの仕合せでございます。」

神父は優しい感動を感じた。やはりその一瞬間、能面に近い女の顏に爭はれぬ母を見たからである。もう前に立つてゐ

るのは物堅い武家の女房ではない。いや、日本人の女でもない。むかし飼槽の中の基督に美しい乳房を含ませた、「すぐれて御愛憐、すぐれて御柔軟、すぐれて甘くまします天上の妃」と同じ母になつたのである。神父は胸を反らせながら、快活に女へ話しかけた。

「御安心なさい。病も大抵わかつてゐます。お子さんの命は預りました。兎に角出來るだけのことはして見ませう。もし又人力に及ばなければ、………」

　女は穏かに言葉を挾んだ。

「いえ、あなた様さへ一度お見舞ひ下されば、あとはもうどうなりましても、さらさら心殘りはございません。その上は唯淸水寺の觀世音菩薩の御冥護にお縋り申すばかりでございます。」

　觀世音菩薩！この言葉は忽ち神父の顏に腹立たしい色を漲らせた。神父は何も知らぬ女の顏へ鋭い眼を見据ゑると、首を振り振りたしなめ出した。

「お氣をつけなさい。觀音、釋迦、八幡、天神、――あなたがたの崇めるのは皆木や石の偶像です。まことの神、まことの天主は唯一人しか居られません。お子さんを殺すのも助けるのもデウスの御思召し一つです。偶像の知ることではありません。もしお子さんが大事ならば、偶像に祈るのはおやめなさい。」

　しかし女は古帷子の襟を心もち顋に抑へたなり、驚いたやうに神父を見てゐる。神聖な怒に滿ちた言葉もわかつたのかどうかはつきりしない。神父は殆どのしかかるやうに鬚だらけの顏を突き出しながら、一生懸命にかう戒め續けた

「まことの神をお信じなさい。まことの神はジュデアの國、ベレンの里にお生まれになつたジェズス・キリストばかりです。その外に神はありません。あると思ふのは惡魔です。墮落した天使の變化です。ジェズスは我我を救ふ爲に、

磔木にさへおん身をおかけになりました。御覽なさい。あのおん姿を？」

神父は厳かに手を伸べると、後ろにある窓の硝子畫を指した。丁度薄日に照らされた窓は堂内を罩めた仄暗がりの中に、受難の基督を浮き上らせてゐる。十字架の下に泣き惑つたマリヤや弟子たちも浮き上らせてゐる。女は日本風に合掌しながら、靜かにこの窓をふり仰いだ。

「あれが噂に承つた南蠻の如來でございますか？ 倅の命さへ助かりますれば、わたくしはあの磔佛に一生仕へるのもかまひません。どうか冥護を賜るやうに御祈禱をお捧げ下さいまし。」

女の聲は落着いた中に、深い感動を藏してゐる。神父は愈勝ち誇つたやうにうなじを少し反らせた儘、前よりも雄辯に話し出した。

「ジエズスは我我の罪を浄め、我我の魂を救ふ爲に地上へ御降誕なすつたのです。お聞きなさい、御一生の御艱難辛苦を！」

神聖な感動に充ち滿ちた神父はそちらこちらと歩きながら、口早に基督の生涯を話した。衆德備り給ふ乙女マリヤに御受胎を告げに來た天使のことを、厩の中の御降誕のことを、御降誕を告げる星を便りに乳香や沒藥を捧げに來た、賢い東方の博士たちのことを、メシアの出現を惧れる爲に、ヘロデ王の殺した童子たちのことを、ヨハネの洗禮を受けられたことを、山上の教へを說かれたことを、水を葡萄酒に化せられたことを、盲人の眼を開かれたことを、マグダラのマリヤに憑きまとつた七つの惡鬼を逐はれたことを、死んだラザルを活かされたことを、水の上を步かれたことを、驢馬の背にジエルサレムへ入られたことを、悲しい最後の夕餉のことを、橄欖の園のおん祈りのことを、…………

神父の聲は神の言葉のやうに、薄暗い堂内に響き渡つた。女は眼を赫かせた儘、默然とその聲に聞き入つてゐる。

「考へても御覧なさい。ジエズスは二人の盜人と一しよに、磔木におかかりなすつたのです。その時のおん悲しみ、その時のおん苦しみ、――我我は今想ひやるさへ、肉が震へずにはゐられません。殊に勿體ない氣のするのは磔木の上からお叫びになつたジエズスの最後のおん言葉です。エリ、エリ、ラマサバクタニ、――これを解けばわが神、わが神、何ぞ我を捨て給ふや？……」

神父は思はず口をとざした。見ればまつ蒼になつた女は下唇を噛んだなり、神父の顏を見つめてゐる。しかもその眼に閃いてゐるのは神聖な感動でも何でもない。唯冷やかな輕蔑と骨にも徹りさうな憎惡とである。神父は呆氣にとられたなり、少時は唖のやうに瞬きをするばかりだつた。

「まことの天主、南蠻の如來とはさう云ふものでございますか？」

女は今迄のつつましさにも似ず、止めを刺すやうに云ひ放つた。

「わたくしの夫、一番が瀨半兵衛は佐佐木家の浪人でございますが、まだ一度も敵の前に後ろを見せたことはございません。去んぬる長光寺の城攻めの折も、夫は博奕に負けました爲に、馬はもとより鎧兜さへ奪はれて居つたさうでございます。それでも合戰と云ふ日には、南無阿彌陀佛と大文字に書いた紙の羽織を素肌に纒ひ、枝つきの竹を差し物に代へ、右手に三尺五寸の太刀を拔き、左手に赤紙の扇を開き、「人の若衆を盜むよりしては首を取らりよと覺悟した」と、大聲に歌をうたひながら、織田殿の身内に鬼と聞えた柴田の軍勢を斬り靡けました。それを何ぞや天主ともあらうに、たとひ磔木にかけられたにせよ、かごとがましい聲を出すとは見下げ果てたやつでございます。さう云ふ臆病ものを崇める宗旨に何の取柄がございませう？又さう云ふ臆病ものの流れを汲んだあなたとなれば、世にない夫の位牌の手前へも伜の病は見せられません。新之丞も首取りの半兵衛と云れた夫の伜でございます。臆病ものの藥を飲まされるよりは腹

を切ると云ふでございませう。このやうなことを知つてゐれば、わざわざ此處迄は來まいものを、——それだけは口惜しうございます。」

女は涙を吞みながら、くるりと神父に背を向けたと思ふと、毒風を避ける人のやうにさつさと堂外へ去つてしまつた。瞠目した神父を殘した儘。…………

澄子

野上彌生子

五つ六つになつて漸く物心がつきかけた時澄子が一番に意識したことは、自分の親は決して本統の父親でも母親でもないのだと云ふことであつた。この發見は普通の貰ひ子や繼子の場合とは違つてゐた　皆んなが包まう〳〵としてゐて、それでいつとなしに悟られた、と云ふやうな順序ではなかつた。寧ろ露骨に、あらゆる機會に彼女はそれを周圍の者から聞かされたのであつた。

『あの子の本統の親は東京にゐるのだぞ。――何んでもはあ偉え學者の代議士だちうこんだがなあ。』

『どんな偉え學者だか代議士だか知んねえが、自分の娘を何年も他人の家へ預けつ放しで、里扶持一つ寄越さねえやうな人間が何になるづら。』

『學者や政治家ちう者は一體に金には緣の薄い者だで、あの子の親も大分困つてゐるのだあね。』

『お父さんがその調子だもんで東京ぢやいい氣になつてゐるんだぞ。この節ははあ、

こつちから出した手紙にさへ、碌々返事も寄越さねえぢやねえか。』

これは澄子がお父さんと呼び馴れて來た老人とその總領息子とが、いつも小さい彼女に就いて話す時の一例であつた。家にはその外に老人の連合のお婆さんと、三人の子供がゐた。而して澄子は老人を父親と呼んでゐたと同じやうに、そのお婆さんをば母親と呼び、三人の子供たちやまた總領息子をば兄さん、姉さんと呼ぶのに、何等の不自然をも感じなかつた。彼等が眞實の親でも兄弟でもないことを知つた後とても、その親しみの情には變化はなかつた。そんなことでいぢけたり臆したりする隙のない程、彼女が懐き切つてゐたためでもあつたが、重な原因は、皆んなが何んとか云ひながらも、家に生れた子供同様に彼女を可愛がることを忘れなかつたからであつた。澄子の實父の不誠實と忘恩を非難する總領息子でさへも、その怒を澄子に移すやうな無慈悲なことはしなかつた。

要するに、一家は年寄たちも子供たちも、揃つて人の善い涙つぽい性質なのであつた。その代り金は餘りなかつた。數年前、遠縁の者で東京に出てゐる男から里子の相談があつた時も、丁度母親が四人目の子供から八年ぶりに思ひがけない産をして、子供は生れると同時に亡くなり、要らない乳だけ殘つてゐると云ふ誂へ向きの事情であつたとは云へ、正直に云へば、子供について來る最初の三十圓と、月々の仕送の十圓に動かされたことは拒めなかつた。話が極まると、生れて五十日ばかりになつた澄子は、世話人の男に附き添はれて、一人の女中らしい女に抱かれて、東京から甲州の山の中の湖畔の村に來た。而してその女中の懐から今の母親の懐へ移されるとその儘、その貧しい百姓家の子供として育てられたのであつた。

世話人の男は極く手短かに赤ん坊の身の上を話した。彼女はその男が今抱え車夫として勤めてゐる屋敷の主人の娘であるが、夫人の手前公然引き取れない義理があつて預けるのだと云つた。それで今後も子供に關しての交渉は、直接主

人でなしに自分宛にして貰ひ度いと云ふことを堅く頼んで行つた。主人の名前は横井俊造と云つた。偉い學者で代議士だと云ふことも、その時聞いたのであつた。百姓に似合はず文字を知つてゐて、山梨××新聞を近所から借りて讀むにも、講談よりは先づ一二面から目を通すと云ふ風な老人の性格は、その一事に無關心ではゐられなかつた。さう云へば、たしかに横井俊造と云ふ名前は、新聞の政事欄か何んかで見た記憶があると思つた。善良な老人は、斯うして見も知らぬ里子の父親に對して、深い尊敬の念を持つと共に、そんな名士の子供を自分の家で育てると云ふことに、無邪氣な名譽を感じてゐた。それ以上の楽しい夢想をさへ抱いてゐた。彼はその娘を美しく育て上げた後で、自分の手で彼女をその父親に引き渡す時の厳粛な晴れがましい一と場をよく描き出して見た。――偉い學者で代議士がおれに頭を下げてお禮を云ふのだ。お蔭で立派な娘になつたと云つて悦んで呉れるのだ。どんな御恩返しでもしようと云ふのだ。――飛んでもねえこんだ。そんな事をして貰つちやならねえ。此方は何も慾徳づくで世話をした譯ぢやなし、ただあの子が可愛い、また可哀想なもんだ、と思へばこそ育てたんだから、と斯う潔白に出なければならねえ。――實際またさうなんだからな。全く可哀想なもんだ。ちやんとした親があつて、その親の傍で大きくなれねえと云ふのは、よく／＼あの子も不運な生れだて。――だが、死ぬまでの話になる。二頭馬車ちうものに一遍乘せてくれんかなあ。そんな時でもなければりや一生及びもつかんことだで、何んにも外にお禮は要りましねえ。ただ一遍だけ二頭馬車ちうもんに乘せて、東京ぢうの町を引きずり廻して下さい、と云つたらどんなもんづら。――いや、待てよ、旦那の家にや、まだ馬車があるちう話は聞かねえだぞ。さうだ。幾ら東京でも馬車となりや、華族様か大臣方か大金持でもないとさう／＼持つてもゐまいで、この望だけは駄目かな。それなら、議會を傍聽さして下さい、と斯う云ふだ。丁度その時分に娘を連れて行くとしてな。それが一番だ。それなら旦那にやお手の物だで、大威張で議會の見物が出來ると云ふもんだ。――

けれどもこの夢想は長くは續かなかつた。實父は極端に冷淡であることが分つた。ほんの極まつた仕送以外には、彼等はその預り子に對して、彼から何等の親らしい愛情のしるしをも受取ることは出來なかつた。その内に金が滯り出した。世話人の男は間に立つ自分の心苦しさを訴へながら、二三ケ月置にやつと一と月分の金を送つて來た。その狀態が一年餘續いた後、今度はすつかり送金が絕えてしまつた。催促の手紙には附箋がついて歸つた。世話人の男はもうその家にはゐないのであつた。田舍では怒つたり、溜息をついたりした末に、思ひ切つて實父の横井氏に交涉する事に決心した。老人は自分でもその位の手紙は書ける自信を持つてゐたのであつたが、大事を取つて村の小學校の先生に賴むことにした。云ふだけのことは何處までも云つてやり度いが、併し失禮にならないやうに、先方を怒らしては旲れないやうにと云ふ注文で書いて貰つた。老人はこの場合になつても、まだ東京の名士に對する幻影を捨て切ることが出來なかつたのであつた。それ故、折り返して横井氏から返事が來た時には彼は胸を躍らした。手紙は簡單であるが、冷淡ではなく、寧ろ率直な書き方で、自分は今或る事情で經濟上非常に困つてゐるので、心外な違約をしてゐるが、どうか今少し待つて貰ひ度い。屹度一度は貴下の御厚誼に報いる日があると思ふと云ふ意味が肉太な達筆で書流してあつた。それを讀んだ瞬間、二頭馬車と帝國議會がまた絮り合つて老人の圓く禿げかけた頭の中を驅け去つた。彼はすつかり感激してしまつた。横井氏に對する反感も怒も、また當てにしてゐた仕送の金の來ぬ失望も、さう云ふ人から斯んな打ち明けた手紙を貰つたと云ふ滿足で償はれた氣がした。彼はいつか甲府にでも出た時、横額になるやうに表裝させよう、と云ふ慾望に驅られながら、大事にその返事を手文庫の中にしまつて置いた。が、この際、老人は感激の餘りに一つの大事なことを忘れてゐた。――手紙は甲府で横額に仕立てようが、またその儘手文庫にしまひ込まれてあらうが、要するにいつまでも手紙であつて、決して食べ物でも、着物でも、穿物でもないと云ふことを忘れてゐた。

三つ四つになると澄子はもう乳で育つ譯には行かなかつた。殊に一日表で駈けずり廻つて遊んでゐるので、食べる物も一人前の子供ほど食べ出した。着物は尚ほ困ることであつた。初めに持つて來た三四枚は形もなくなつてゐた。東京からは前掛一つ送つて來なかつたので、後は全部此方で着せなければならなかつた。それも、杜絶え勝でもまだ仕送のあつた內は、都合がついたが、今の狀態となつては、どうにも仕方がなくなつた。お婆さんは今更のやうに東京の親たちの無情と義理知らずを罵りながら、皺くちやの、小さい鼻の先に眼鏡を乘せて、上の兄たちの着物――それも足らぬ勝の着古しから、はいだり、ついだりして漸く彼女の一枚を作り上げた。澄子は女の子らしい赤い物なぞは殆んど着たことがなかつた。――上が、男の子ばかりであつたから、いつも色のさめた紺絣の、だぶ〳〵した寸法違ひの着物にくるまつて、手足を土だらけにして表から飛び込んで來ると、直ぐねだつた。

『おらに芋お吳れ。腹が減つたよ。』

彼女はまた傍の湖水べりで遊んでゐては、よく水にはまつて歸ることがあつた。

『あつ、また着物を濡らして來たぞ、この子は。どうする積りづら。着換えもねえだに、ほんに困りもんだ。』

お婆さんはくしや〳〵して、淚を流しながら怒つた。またその度に東京の親に對する不平と愚痴が繰り返された。併し今となつてはどうもしやうがなかつた。澄子はお婆さんに取つてもお爺さんに取つても、既に手放せないものとなつてゐた。――斯うしてまた二年間。この可愛い厄介者は、一文の報酬も拂はないで、氣の毒な年寄夫婦から乏しい食料を奪ひ、面倒な保育の手數と共に愛撫を偸んで平氣でゐた。その時分、澄子が一番怖ろしかつたことは、東京に歸されると云ふことであつた。分らないことを云つてぐずつたり、云ふことを聞かなかつたりすると、屹度それで脅された。

『ほら、可い加減によさねえと、東京のお父さんのところへ歸すだぞ。明日兄さんが船津へ行く時、おぶはしてやる

だ。」

この一言は澄子を蘇ひ上らせた。彼女はどんなに激しく泣いてゐても忽ち泣きやんで、年寄たちの脊中にかぢりついた。

お爺さんは、でもその二年間は東京への交渉をまるで打ち捨てて置いた譯ではなかつた。彼は二三度、今度は自分で書いた手紙を出した。最初の一通に對しては、ペンで走り書をした當座遁れの葉書が來たが、後の手紙には何の返事もなかつた。その內居所が不明になつた。彼の屬してゐる政黨の用事で、外國へ行つたらしいと云ふ噂が、例の小學校の先生から傳はつた。それとても確かなことは分らないのであるが、どちらにせよ、横井氏が今までの本鄕區曙町十三番地の家にゐなくなつた事だけは事實であつた。お爺さんは途方に暮れた。

且つその二年間は、老人の一家に取つても、また村全體に取つても容易ならぬ心配事の起つた年で、結果は、その小さい里子一人の扶養を、以前に倍する重荷にして行つた。一體にそのS――村は甲州の湖水地方に散在してゐる多くの小村の代表的な一つで、富士山が眞正面に聳えて、その下に湖水があつて、非常に景色が美しいと云ふ以外には、何等の取得もない寒村であつた。堅い熔岩を地盤にしてゐる土からは、馬鈴薯と數種の野菜きり取れなかつた。その乏しい生產物を作り出す畑さへほんの少ししかなかつた。湖水の三方は二千米突を限度とした青い山々で圍まれてをり、殘つた一方も、同じやうなごつ〳〵した熔岩の森林地帶で、鍬を打ち込める場所はなかつた。富士山は丁度その森林の上から聳えてゐた。斯んな譯で、住民が僅かに探し出した土地とても、山の間々の、狹い窪地に過ぎなかつた。彼等の灰色の草屋根が五六十戸かたまつて形づくつてゐる村と云つても、云つて見れば、窪地の稍打ち開けた一つに過ぎなかつた。

質素な生活に甘んずることが、第二の天性になつてゐるとは云つても、住民は馬鈴薯ばかりで生きて行く譯には行かなかつた。またその馬鈴薯とても、彼等の一年中の食料の外に、着物や小使錢まで保證することは到底出來なかつたので、彼等は農業以外に何等か他の仕事が必要であつた。何處でもするやうな炭燒や養蠶は彼等も勿論した。けれどもその村には今一つ別な仕事があつて、畑の事などは皆んな女や年寄に任せて、全村の男の八割がその仕事に從事した。それは蠶の糸取に使ふ枠を作ることであつた。彼等はこれを、湖の周圍の山や森林から伐り出す檜で作つた。堅い地盤の上に生えて、育ちが遲く、從つて木肌の飽くまで細かいその木材は、蠶の糸枠としては何處の檜も及ばない最上なものとせられてゐた。彼等はこれを隣國の蠶業地に送り出した。而してその工賃を以つて田畑の不足を償つてゐた。傳習的なこの仕事は、長い間に村の家々の構造まで變へた。S――村の家は、一棟だけは普通の百姓家の通りであるが、今一棟は屹度右か左に小さい翼が附いて、坪庭の中に突き出してゐた。大抵三疊か長四疊位な疊敷で、それが仕事場であつた。而して天氣のよい日には前の庭には豆の莚干や、鷄小屋や、一寸とした靑物の寄せ植などに交つて、二寸角位に挽いた約一尺ばかりの檜の木片が、高く井桁に組まれたり、小さい尖塔に積まれたりして日に乾かされてあつた。

丁度その頃であつた。縣の當局者は湖水地方の美しい景色を保護するために、湖の周圍の樹木を保安林とする計畫を立てた。S――村のS――湖も元より撰擇を遁れる筈はなかつた。けれども、周圍の山々の所有に就いて、新たな委しい調査が始まつた時、村の者は方針がよく飲み込めなかつた。何んとか云つてまた税金でも上げる積りづら位にしか考へなかつた。それ故持つてゐる場所も持つてゐないやうに云はうとし、さう出來ない人たちでも、事實よりは幾割も少く申立てた。お上の帳面の上さへ逃げて置けば、後はお互ひ同士でどんな方法でも取れる。――實際、今までは縣の所有の森でも、枠の材料を伐る位は誰からも咎められたことはなかつたので、その點は彼等は極く呑氣に考へてゐたので

あつた。

結果は一村を吃驚させた。税金は増さなかつた代り、彼等は官有林に斧を入れることが出來なくなつたのは勿論、湖水に臨んだ部分は、たとひ自分の所有地でも、風致上その樹木をば決して自由にすることが出來なくなつた。これは大きく云ふと村の死活問題に關することであつた。云ふまでもなく、兎角美しい景色は見て樂しいが、美しい景色では彼等の食料にはならなかつた。尤も今少し東京に近くて汽車でも便利のよいところならば、東海道邊の多くの遊覽地のやうに、別な割りのよい收入の道も開けて、彼等は荒地の馬鈴薯を心配したり、安い工賃で終日糸枠を拵へたりしないでもすんだか知れない。けれども此の土地にそんなことは望まれなかつた。夏になると、それでも幾らか旅行者が來たが、大部分は米だてを着たり、テントを持つたりした學生ばかりで、村に落して行くやうな金は初めから持つてゐなかつた。さうでないものは殆んど外國人であつた。これは四季を通じて可なりの人數であつた。併し、彼等は村から湖水べり傳ひに小一里もある對岸の岩の上に、同じ外國の歸化人が別莊代りに建てたホテルへのみ泊つた。またそのホテルが村へ支拂ふ金は馬鈴薯の代金より外にはないと云ふやうな事情で、平常から村はホテルによい感情を持つてゐなかつた。その上内地のそんな偏僻な山の中に家を建てるほどの歸化人の自然癖は、彼等には到底理解されないものであつた。湖面にさし出た枝ぶりのよい一本の松を伐り倒したことから、曾つて村民と大喧嘩までしたホテルの主人は、彼等から見れば半分狂人であつた。其處へ今度の保安林問題が持ち上つたので、村民は彼等らしい自然な當推量をした。

『大方これもあの氣狂ひ毛唐の目論んだ仕事づら。ホテルの周りが裸山になつちや、商賣はあお仕舞ひになるで。ふん。ホテルが何んだ。』

その篆目が自分たちに何の關係があらう。——彼等は斯う思つた。縣の處置を恨むと共にホテルをも憎み怒つた。あ

の毛唐屋敷を焼いてしまへとまで息捲く者さへあつた。併し最後には矢張り諦めた。彼等は溜息をつきながらも再び勤勉に働き出した。もう湖水の周囲の樹木は使はれなくなつたので、彼等は險しい森林を横ぎつて、遠く數里の向ふにある富士の麓の高地まで材料を伐り出しに行かなければならなかつた。又湖の窪地に手入れをすれば今少し馬鈴薯の取れる場所があつても、畑にすることは出來なかつた。斯うして彼等の住む世界をいつまでも美しく保たうとした法令は、村民の勞力を數倍し、彼等の家の生活を段々と苦しくする結果になつた。

お爺さんのところとても、一般の不幸な例に洩れることは出來なかつた。家は澄子の來た頃よりもずつと貧しくなつてゐた。不足勝な食物と着物がいよ〳〵一家の眞劍な問題となつた時、人々の心の中には忘られてはゐないが、常は愛情で蔽ひ隱されてゐたもの――うちには餘計な者が一人あると云ふ考が、湧き上らないではすまなかつた。これまでとても、彼等は露骨にその事は云ひもし、他人にも愚痴をこぼした。小さい本人にさへづか〳〵云つて平氣であつた。が、今度は樣子がすつかり違つてゐた。皆んな同じ言葉を舌の先へ載せてゐて、口に表はすのを憚り合つた。一度云ひ出してしまつたら、もう取り返しのつかぬ事になりさうな氣がしてゐた。彼等は忌々しく、腹立たしかつた。この厄介者がと思ひながら、それで先よりも一層可愛がらないではゐられなかつた。殊にお爺さんとお婆さんは、馬鈴薯の一つでも誰よりも多くその餘計者にやらうとした。

が或る日、總領息子は終に澄子を東京へ歸すことを云ひ出した。

『あの子の不愍なのは、そりや誰も同じこんだが、斯う暮らしがえらくなつちや、お父さんも一つ考へて見ることだな。第一、斯んな田舍にいつまでもゐたんぢや、澄子のためにもならねえこんだで。』

『それだてお前、親の居所も分らねえで、あんな子供を何處へ歸せるだあね。何にもおらがあの子を引き留めて置く譯

ちやなし、歸さうにも歸す手筈がつかねえぢやねえか。』

『おらさうは思はねえな。お父さんがその氣にさへなりや、向ふは世間にも名の知れた人ちうで、探して分らねえ筈はないづら。』

『それならお前が探し出して呉れ。さうすりや明日にもおらがあの子を連れて行つて返して來るだ。――ふつ、どうしたらそんな薄情な氣になるづら。お前はあの子が東京の、繼母にかかつて苦勞するのを、可哀想だとは思はねえのか。』

お爺さんは激しい見幕で息子に突つかかつた。彼の涙は皺で出來た頰の上の溝を傳つて留め度なく流れた。――その癖息子は自分が云はうとした通りのことを云つてくれたのであつた。息子はまた息子で、若しお爺さんの方が先にその話を持ち出したのなら、今度は自分がお爺さんの云つ通りのことを云つて反對したかも知れなかつた。併しただ一つ二人の間にはつきりした相違があつた。それはお爺さんの方では、幾ら怒つても恨んでも、澄子の父親にかけた最初の幻影を滅しきれないのに對して、息子は飽くまでも冷淡に批評し得ることであつた。而してこの事は彼の結婚に依つて一層強められて行つた。

澄子が七つになつた春、十七年上の息子は同じ村の同じ位貧乏な家の娘を貰つた。この嫁は決して惡い性質ではなかつたけれども、勝氣な勘定高い女で、澄子のことを利害問題を超えて考へることなぞは出來なかつた。家のものは假令邪魔者だと思つても、云つても、事實は決して邪魔物扱ひにし得なかつたのと反對に、彼女には平氣にそれが出來た。その上澄子の實の親たちを狡猾な義理知らずと思ふ點では夫と一致してゐた。そんな譯で家の中にはこれまでにない不快な爭が澄子を中心にして時々起るやうになつた。

『あの狐奴、この間こそ來てゐて、生れ落ちるからはあ此處の家で育つたものを邪魔にするちう法があるもんでねえ。

萬の野郎も萬の野郎だ。あの女の腹卷にひつ包まれて、この節ちやはあ一つ腹になつてるだ。他處村の者ちやなし、あゝした子供のあることは百も承知で來た筈だに、今になつて、何んとか云つて見ろ　たゞは置かねえだ。萬が何んと云はうが、このおれが叩き出してやる。』

お爺さんが斯う云つて息捲く度に、お婆さんはおろ〱した。而して自分も本統は同じ位怒つてゐるに拘はらず、一生懸命お爺さんの心を和らげ、一方では若夫婦の機嫌を取つて、激しい衝突を避けさせようと骨折つた。お爺さんにはお婆さんが何故さう氣を揉むかが分つてゐた。それで一層忌々しがつて、何きつい事を云つて、時には氣の毒なお婆さんにまで當り散らした。併しそれは影辨慶で、面と向つては、決して若い夫婦を強く怒ることは出來なかつたのであつた。――原因は單純であつた。手が震えてよい枠の拵へられなくなつたお爺さんに代つて、總領息子が今では一人で仕事場を占領してゐることゝ、同じやうに嫁がお婆さんに代つて馬鈴薯を作つてゐた。と云ふことの二つであつた。その上彼女には機が織れた。斯うして、單に經濟上の見方からすれば、お爺さんお婆さんが旣に下の二人の息子と共に（次男は兵隊に取られて甲府へ行つてゐた）――嫁に云はすれば、枠の材料すら滿足に伐り出せない怠け者の大物食ひ等と共に、現在澄子に似た境遇に落ちかけてゐたのであつた。

丁度その頃、澄子の父親の居所が意外な手蔓から明白になつた。或る日對岸のホテルへ十二三名の日本人の客が打ち連れて泊まつたことがあつた。それは湖水地方に追々遊覽鐵道を布設する計畫があつて、敷地の視察かた〲湖水周りに來たS――黨の代議士連と、案内の縣廳の役人と新聞記者だと云ふことが村人に分つた。澄子の父が同じ黨の一員だと云ふことを忘れなかつた總領息子は、この機會を巧みに捕へた。都合よく近所からホテルのボーイに住み込んでゐた若者があつたので、彼はその友達に頼んで　父親にはまだ內證で聞いて貰つた。さうして譯なく知れた。

『お父さん、横井さんの家が知れただぞ、今ぢや代議士には出てゐねえさうだが、あんな旦那方に聞いてすぐ分つた位だで、相當立派に暮らしてゐるに違えねえだ 早速お父さんから手紙を出して澄子のきまりをつけて貰ふことだな。』

總領息子から出し抜けに斯う話された時のお爺さんの驚は想像以上であつた。而してこれは一家に取つてもまた本人の澄子に取つても何より悅ばしい知らせであるべき筈なのに、お爺さんは却つて不機嫌に塞ぎ込んだ。おれに一言の相談もなしに何と云ふ勝手な眞似をしたのだ――斯う思ふとお爺さんはむしやくしやした。併しそれを露骨に云ひ出して息子に怒る理由は見出せなかつたので、彼はすべてをホテルのボーイに持つて行つた。

『餘計なことを賴まれて、本統に何んと云ふ野郎づら。のう。婆さん、さうでねえか。一體に彼奴は毛唐人とばかり暮らしてゐるで、性根まで毛唐人根性になつて、こつちの心なんてものは察しもつかねえだ。』

彼はお婆さんを相手に散々そのボーイの惡口を云つた。お爺さんはただ怖くてたまらなかつたのであつた。實父の居所の判明したことが、澄子を自分の手から奪ふやうなことになりはしまいかと。

兎に角手紙は出さぬ譯に行かなかつた。お爺さんはその文言について一人で思ひ煩つた末、また小學校の先生のところへ持ち込んだ。何より先に彼が手紙の上に明かにして置き度いことは、自分たちは今日たりとも決して澄子を迷惑には感じてゐないと云ふことであつた。同時にまた里扶持の滯りは嚴重に催促して貰はなければならなかつた。その理由として自分たちの貧乏の有様はどんなにも委しく書いてくれ、とお爺さんは云つた けれども最後の大事な言明――約束の仕送りが今後實行されない場合には澄子を引き渡す、といふ一點には夢にも觸れようとはしなかつた。若しその手紙をお爺さん自身で書いてしまつたとしたならば、金の催促や、約束を守らぬ詰問などは何處へか行つてしまつて、自分たちは餓死しても澄子を手放せないこと、どんなことがあつてもあの子供を自分たちから引き離しては堪れない、と

云ふことのみを連ねた嘆願狀になかつたかも知れなかつた。

お爺さんの腹の底を見拔いてゐる小學校の先生は、老人の心持に同情しながらも自分の意見を述べた。

『書けと云へばそりや何んとでもお前さまの氣に入つたやうに書かないでもねえが、此處は一つお前さまも諦めて、あの子供を引き取つて貰ふやうに交涉しらやどんなもんづら。その方が始末がいいぞ。早え話が來年はもうあの子も學校だ。また金は送つて來ず物要りは嵩むとなりや、お前さまもえれい目に逢ふ譯だし。その上嫁さんに小せえのでも出來た日にや、また面倒がふえるといふもんだからな。』

先生は最後にこの手紙のことは自分に任せてくれまいか、決して惡くは計らはないと云つた。斯う云はれるとお爺さんは反對する理由を見出せなかつたので、萬事を一任した。併し諦らめはつかなかつた。單に引き取り方を交涉する手紙ならば、何も彼に賴むまでもないことであつた。決して必要はなかつた。自分ではどう考へても旨く書き表はせさうもない氣持──怒つたり、縋つたり、責めたり、賴んだりの矛盾だらけの心理を、手際よく文字に整理して貰ふために賴んだのであつたが、意外な結果になつてがつかりすると共に、息子が先廻りして先生に何か耳打ちでもしたらしいのが腹立たしかつた。

『あんな薄情ぢやなかつたのに、萬の野郎、女房を貰つてからまるで人間が變つた。』

お爺さんはこれを機會に彼にぶつ突つて、薄情な變心を責め罵つてやり度くてたまらなかつた。併し家の前まで歸つて來ると、坪庭の右手の仕事部屋では息子が持ち前の生眞面目な、むつちりした風で、かんな屑だらけになつて仕事をしてゐた。また家の奧の方からは嫁の織る機の音が響いて來た。お爺さんは矢張り何んにも云ふことが出來なかつた。その代り、こんな場合にいつもする通りにお婆さんを相手にした。お爺さんは、仕事場と反對の坪庭の隅で古莚を敷い

てぼろつ切れをいぢくつてゐたお婆さんを見ると、行きなりとげ〴〵しい聲で聞いた。

「澄子は何處へゐるだ。」

『今まで其處で遊んでゐたつけが見えねえだか。それぢや大方湖の方へでも行つたづら。』

『あんなに咳をしてゐたゞに、何故家の中に置かねえだ。惡りい風でも引き込んだらどうする。いつも云ふ通り、あの子はおれの子ぢやねえのだからな。里扶持の一年二年來ねえだつて、それでおつぽり放しにして殺したやうに思はれちや、おら世間に出す顔がねえだ。』

お爺さんは今本統に澄子が死にでもしたのを怒るやうに、ぷん〴〵しながら、家へは入らないで、その傾斜坂になつた石ころ道を湖水の方へ下りて行つた。三月上旬の晴れ上つた午後であつた。村の子供たちは白砂糖をかぶつたやうなまつ白い富士川を正面に据えて、寒い、きら〴〵した光線の中を、湖の上で盛んに氷辷りをやつてゐた。氷辷りの出來ない小さい連中は、鴨の下りたやうに濱邊に一列に並んで、小石を拾つてはそれを氷の上に投げて悦んでゐた。大きい方の仲間の中には、お爺さんの十四になる末子の姿も見出された。彼は朝から大室山に楢を伐りに行つてゐる上の兄を助けに行く筈であつた。伐り出した材木をかついで來るために、脊中には土地で「痱馬」と呼んでゐる、二本の棒と小布團とで出來た脊負ひ子をしよつてゐた。襤褸にくるまつて、絶えずお腹をすかしてゐながら、それで快活で、家ぢうのおどけ者で通つてゐるその少年は「痱馬」をしよつたまゝ辷つてゐた。誰かに借りたらしい簡單な金具で、鳶色の氷の上を縱横に辷り廻る度に、肩の上に突き出た二本の棒が、富士山の頂上で躍つてゐた。彼はわざと滑稽な辷り方をして見せた。子供等はわい〴〵云つて笑つてゐた。

『あの野郎、まだあんなところで道草食つてるだ。今に見ろ、兄貴に知れようもんならひでえ目に逢ふで。』

お爺さんは忌々しさうに、不機嫌な顔を一層曇らして舌打ちした。が、次の瞬間、彼の表情は一變してゐた。向の湖水べりにかたまり合つた小さい子供の群の端から三人目に澄子がゐた。隣りの子供と何かしやべりながら石を拾つて投げては高い聲をあげて笑つてゐた。その笑顔がお爺さんにすべてを忘れさせたのであつた。お爺さんはさもさも可愛くてたまらぬと云ふ風に、またそれが自分の足音に驚いて舞ひ立つ小鳥でもあるやうに、傍にも寄れないで、ぢつと遠くに離れて立ち留まつて見入つてゐた。でも本統を云ふと、黒瞳勝な大きな目を持つてゐる以前には、澄子は餘り器量のよい子供ではなかつた。赤い毛のおかつぱは短かく刈られて埃まみれになり、その下にある小さい顔は同じ位汚れて、幾分瘠せてさへゐた。そのせゐで一層大きく目立つ眼が、一體の顔つきに病人じみた感じを與へてゐた。身體も年よりは小さかつた、それにいつもの通り古びただぶだぶの絣絣を着せられてゐるので、一寸と見ると男の子か女の子か分らない奇妙な風に見えた。けれどもお爺さんの目には云ふまでもなく彼女が其處にゐるどの子供よりも一番美しく、一番可愛い子供であつた。

『幾らぼろにくるまつてても、生れは生れだけで爭はれねえもんだ。』

これが不斷からのお爺さんの誇であつた。

五分の後には、お爺さんは二人の子供をどちらもその遊び仲間から引き放して、息子をば短かい口小言で山の方へ追ひやり、澄子をば自分が手を引いて、湖水べりを家の方へ戻つて行つた。遊んでゐる間にひどく咳きはしなかつたかどうか、お爺さんはそれを心配して聞いた。ちよつとも咳きはしなかつた、と云ふ返事を澄子は三遍もさせられた。それでお爺さんは安心して、一層上機嫌になつて、村にたつた一軒ある荒物屋兼帶の荒物屋の前まで來ると、店の前に足を留めた。それから長い紐で頸に吊してゐた財布に手をかけた時には、澄子はもう何を買ふかをちやんと極めてゐた。お爺

さんが大事に取り出した一枚の一錢銅貨と引換に、店のかみさんは、草鞋だの、箒木だの、バケツだの、紙だの、煙草だのと一緒に、店先にごた〳〵並べた菓子箱の中から、黴臭い豆捻ぢを二本出して呉れた。澄子は食べながら歩いた。お爺さんはその顔をのぞき込みながら、又何度も旨いかと尋ねた。澄子が旨いと云ふ度に彼はにこ〳〵した。お爺さんは幸福でたまらなかつた。この生活が何かの理由で消滅してしまはうとはどうしても想像されなかつた。それ故お爺さんの今一番氣がかりなのは、東京からの返事であた。里扶持は以後間違ひなく送れる。その代り娘は今暫く預つて呉れ。斯う云つて來さへしたら――乾度さうに極まつてゐると思つた。お爺さんはこの自信を以つて、若夫婦に氣兼しながら心配するお婆さんを慰めた。またお婆さんにさう云つて貰つて自分をも慰めた。

併し一週間の後明白になつた返事は年寄たちの望みを全然裏切つた。東京からは早速澄子を引き取ると云つて來た。停滯の金に就いても相談し度いから、御苦勞ながら連れて來て貰ひ度いと云つて、十圓札が二枚封じ込めてあつた。お爺さんとお婆さんは今更のやうに周章てた。が、斯うなつてはもうどうする事が出來よう。話は直に總領息子と小學校の先生の間で取り極められて、澄子の出立の日まで決定した。

氣の毒なお爺さんは、朝起きる力さへなかつた。彼は打ちのめされたやうに、がつかりして、唸めいて寢てばかりゐた。實際、生理的にも幾らか病氣のやうに見えた。よく肝癪を起した。取り分け送つて來た二十圓の金のうちから嫁が澄子のために新しい着物を町へ買ひに行つたり、それを縫つたり、急にまめ〳〵しく世話をするのが、忌々しくてならなかつた。

『厄介物が追つ拂はれて、彼奴等はあ元氣づいてるだ。』

彼はひがんだ。殊に彼と同じ悲しみを分けてゐる婆さんが、その點になると嫁と一つ腹になつて、一緒に大騷ぎをし

て、嫁の好意を感謝してさへゐるらしいので、腹立たしくてたまらなかつた。

『ふん、今まで碌々着物の一枚も拵つてやらねえで、急にお體裁を作れば何になるづら。婆さんや、お前まで何んだ。そんなものを縫つてよ。どの子に、何處へ着せてやる積りだ。』

　或る時、お爺さんはひどい見幕で、せんべい布團から身體を乘り出すと、側に針仕事を擴げてゐたお婆さんの手から、新調のきれを引つたくつて、上間へ放り投げた。彼はまた澄子を誰が連れて行くかに就いて、總領息子と激しい口論をした。息子は子供連れの面倒と都會の不案内を慮つて、自分で連れて行く積りにしてゐた。するとお爺さんは飛んでもないことだと云つて爭つた。

『あの子はおれが預つた子供だで、おれが連れて行くのは當り前の話だ。東京だて、何處だて、人間が口と足さへありや行けねえ筈はねえだ。斯う見えたておら病氣一つしてる譯ぢやねえだぞ、登らうと思へば富士山へでも登つて見せてやるだに、何んで東京へ行けねえだ。』

　この言葉と共に彼は起き上つた。もうそれきり寢なかつた。而して自分の損はれてない元氣を證明しようとするかのやうに、また、さうでもしなければ身の持ち扱ひ方がないやうに急に家の廻りを駈けずり廻つて、大げさな片附物をしたり、太い薪割を振りかぶつて、今別にしなくもよい松の株を割つたりした。呆つ氣に取られてうろ〳〵するお婆さんは絶えず叱り飛ばされた。下の息子二人は父親が氣が違つたのだと思ひ、叱られたり打たれたりしないために毎日山の仕事へ逃げて行つた。若夫婦さへも今度は遠慮はされなかつた。彼は嫁に毒づき、息子に突つかゝり、露骨に罵つた。お爺さんのすべての悲、すべての怒、すべての不平が最後の爆發をしたのであつた。

『お父さんの腹になつて見りや無理もねえだ。――誰も歸さねえですむなら歸しはしねえが。』

嫁が訴へた時、總領息子は溜息をついた。罵られながら彼は父に同情することを知つてゐた。

小さい澄子はこの不幸な渦のすべてを感じてはゐた、が意味を會得する事は出來なかつた。たゞ幾らか分つたと云へば、お爺さんが怒つたり、どなつたりするのは、何か自分に關係した事らしい位で、それが自分の身の上にどんな重大な變化を及ぼすかと云ふことは、想像されなかつた。殊に先は皆んなが露骨に話し合つたのに、今度に限つて、お爺さんが怒鳴る時より外には、誰も小聲でこそ〳〵話したから、澄子には尚更分らなかつた。彼女はまた分らうともしなかつた。分る必要はなかつた。そんな事は自分の毎日の幸福に少しも關係はなかつたから、而かもその幸福は平生の五倍にもなつてゐた。お爺さんは毎日のやうに荒物屋に連れて行つて、この頃は二錢づゝ使はしてくれた。お婆さんはまた一年に一度お祭の時より外にはしたことのない馬鈴薯の甘煮を、お祭の時よりも又どつさり砂糖を入れて三日置には煮てくれた。よく白い眼で横睨みにされた姉さんさへ、いつも優しかつた。その上その人が自分のために新しい着物を縫つてくれてゐる。——

『ほら、いいづら、それが澄ちやんの着物になるんだよ。』

斯う云つて、片一方の袖だけついた縞入の表身ごろを、兩手で摘みあげて見せてくれた時には、澄子は女の子らしい悦で一杯になつた。

『それを着てお父さんと淺間樣のお祭に行くだ。なあお父さん。』

丁度仕事場から飯食ひに來てゐた總領息子が口を入れると、同じやうに爐端にゐたお爺さんは返事の代りにたゞ唸つた。けれども澄子にはそんなことを頓着する暇はなかつた。彼女ははしやいで、お爺さんの頸玉にかじりついて、その新しい着物を着られる淺間樣のお祭はいつかと聞いた。——彼等は申し合せた譯ではなかつたけれども、東京の家に歸

るのだと云ふことは最後まで誰も澄子には話さなかつた。

四月上旬の或る早い朝、澄子とお爺さんは、停車場のある大月まで見送る筈の三男の伊助と連れ立つて出掛けた。幾らか寒いが、晴れ上つた美しい日で熔岩の堅い小道を湖水に沿うて行くと、澄み切つた空の白い富士山は、かつちりと小さく凝結したやうに縮かんで見えた。足下には木立の絶間々々に湖水が現はれ、それが氷の厚いところでは鈍い鋼鐵色に沈み、解けたところは美しい碧色に輝いてゐた。澄子は少し歩いては伊助に負ばれた。而して今朝起きると躍り廻つて着せて貰つた新調の着物の脊中に、だん／＼暖さを増した日光が浸み通る頃には、早起の寝不足も手傳つて眠氣がさした。彼女は絶えずうと／＼してゐて、何處をどう通つたか、お爺さんと伊助が自分に就いてどんな話をしたか何んにも知らなかつた。がたゞ一つ彼女が非常に驚いたことは、目を覺ました度に湖と富士山があつたことであつた。最初の一瞬間は、まだ自分の村の近所を離れないのかと疑つた。よく見ると違つてゐた。周圍の山々が違つてゐた。湖の形と水の色が違つてゐた、一つの湖は小さく圓く、色が怖いやうにまつ青であつた。その次の湖は非常に廣く、晴れ／＼して、湖面は輕快な淺緑に閃めいてゐた。彼等はこの湖だけは湖水べりの道を遠廻りしなくもすんだ。丁度岸の村から炭を積んで出ようとしてゐる親子の百姓が舟の便を貸してくれたので、伊助は熱心に息子の若者と代り合つて櫓を漕いだ。父親はお爺さんと同じ年配に見えた。飲み手らしい赤つ顔の話好きで、無口に鬱いでゐるお爺さんには頓着なしに、この湖水は東京に一番便利がよいから旦那衆の別荘も段々と出來たことや地所なら當分手放してはならない、と云ふやうなことを一人で話し續けてゐた。除け者にされた澄子は、高く積んだ炭俵に凭りかかつて足を投げ出しながら、默つて物珍しさうに方々を眺め廻してゐた。彼女の目はもうはつきり覺めてゐた。湖畔には其處此處に村が散らばつてゐた。が、どの村にも白壁の家がきら／＼して、畑も多いらしく、何んとなしに自分の村とは様子が違つて見えた。また

舟が次第に對岸の町に近づくに從つて、村では小學校より外にない瓦屋根の夥しい群が現はれ、見慣れたホテルに似たやうな白い洋館が幾つもところ〴〵に見えた。澄子は初めて知らぬ土地に行きつゝあるのだと云ふ氣が強く起つた。淺間樣は何處にあるのか——分らなかつた 一瞬間彼女は本能的に深い淋しさを感じた。でも、直ぐ横にあるお爺さんの丸い猫脊の後姿を見たり、櫓拍子に合せてゐる伊助の掛聲を聞いたりすると何んともなくなつた。今一つ彼女を安心させたのは、此處にも富士山があることであつた。右手の岸一杯に長く裾を引いたこの湖の富士は、村の富士よりも途中で見た別な湖の富士よりも、一層大きく、高いやうに見えた。彼女は山が自分について來たのだと思つた。いや、村と人間のあるところには、何處でも屹度湖と山があるのだと思つた。その二つのものがある間は安心な氣かした。實際、山はその日の暮方大月停車場に近づくまで、至るところで彼等の前に現はれた。

澄子は一と晩ぢう不快な騷々しい動搖の中に眠つてゐた。粗いリズムを取つた奇妙な響音が絶えず耳の許で鳴つてゐた。寢床は今までの家の硬い寢床よりも一層硬く、且つ狹くて、何度も落つこちさうになつた。澄子はその度に驚いて薄目をあけた。けれどもその目をはつきり見張つて周圍の不思議な光景を見極はめるには、餘りに眠たかつた。彼女は明るいちか〳〵した光線と、その下に群がつてゐる黒い澤山な人間の頭をぼんやり意識しながら、それがどんな人達で其處が何處であるか、また耳許に絶えず鳴つてゐる音は何であるか、考へる暇なしに續きの眠りに落ちた。彼女は矢張り家でお婆さんに抱かれて寢てゐる積りであつた。樣々の夢を見た。富士山と湖、長い一列の田舍町、恐ろしく廣大な裾野、その中を悲しい笛を鳴らして走つた小さい馬車、川、田、停車場の町で夕飯代りに食べた熱いほか〳〵した饅頭——晝の間、この田舍育ちの小娘の初々しい神經を驚かし、疲らしたすべての物と事件は、雜多な組合になつて、影繪のやうに悉く夢に現はれた。その意味から云へば、彼女は眠つてゐると云ふよりは、晝間の旅行を今一度繰り返してゐ

るに過ぎなかつた。何となしに苦しかつた。いつものやうにぐつすり氣持よくは眠られなかつた。

やつと目が覺めた。硝子窓からさし込むきら〳〵した朝日の中にあたりを見廻した時、澄子は喫驚した。彼女は細長い奇妙な揺れる部屋にゐた。部屋の中には知らぬ人がぎつしり詰まつてゐた。而して窓の外にあるものは空も、雲も、森も、田畑も、樹木も、家も、人も、あらゆるものが駈足で、一生懸命で、後の方へ遁げて行つた。その奇妙な揺れ動く部屋が、何か怪物でもあるかのやうに。――澄子は目がぐら〳〵した。譯もなく心細く、恐ろしく、悲しかつた。若し傍にぴつたり身體をすりつけて腰かけてゐるお爺さんが見えなかつたら、澄子は大聲をあげて泣きわめいたに相違なかつた。

『おゝ、目が覺めたか。よく眠つただ。』

もう先に起きて、いつものやうに朝煙草を吸つてゐたお爺さんは、澄子が目を開けておど〳〵周圍を見廻してゐるのに氣がつくと、直ぐ聲をかけて笑顔を見せた。が、澄子はお爺さんの笑顔の中にも、自分と同じ不安な、泣き出しさうな表情のあるのを見逃さなかつた。同時に伊助がゐないのに氣がついた。

『兄さんは何處行つた。――もう山へ行つたのか。』

澄子の幼い知覺は距離と場所を正しく判斷することが出來なかつた。彼女は一瞬間矢張り家にゐる氣でゐた。

『さうだ、木を伐りに行つただ。』

お爺さんはそれを利用した。が、最後まですべてに疑惑を起させないですむかどうか、心もとなくそれを思ひ惱んだ。どちらにせよ、親許に送り屆けるまでには、一度は本統のことを云ひ聞かせなければならないであらう。若し、聞き譯なく泣かれたら――考へても堪らなかつた。涙がほろ〳〵落ちた。お爺さんは周章てて、横を向いて、空咳をしながら、

その涙を澄子に氣づかれはしないかと怖れた。それで汽車が停車場に停まる度に何か知ら買ひ込んでは、食べ物で彼女の注意を紛らさうとした。――それはまた自分自身の苦惱を紛らす方法でもあつた。澄子はあたりの知らぬ人に氣兼ねしながら、でも旨さうに食べた。その顏にお爺さんの瞬間の慰めがあつた。

小學校の先生の注意に依つて、お爺さんは特別の大奮發で飯田町の停車場からは車を雇つた。而して一時間以上、大都會の迷路を夢中で曳き廻された後、やつと靑山の横井の邸の花崗石の門柱の前に連れて行かれた時には、車の上から立ち上るのもよろ／＼するほど、疲れてがつかりして眩暈がしてゐた。ただがその中に一つお爺さんの氣を輕くしたことは、車の上ですべてを打ち明けて話した時に、澄子が意外におとなしくしてゐたことであつた。併し本統を云ふと、澄子はお爺さんの話がよく飮み込めなかつたのであつた。彼女に分つた一部分は、自分たちは淺間樣の代りにもつと面白い東京に來たこと、而してこれから彼女の本統のお父さん――それはこれまであらゆる話の中で、聞き飽きるほど聞かされてゐた人の家へ行きつゝあるのだと云ふことであつた。それがどうしたと云ふのか。――養父の說明によれば、本統のお父さんは澄子が今まで怖がつてゐたやうな人では決してない、親切な、優しい父親で、金持で、學者で、彼女の好きなものは何んでも買つてくれる。彼は今久しぶりの娘を見ようと思つて、悅んで、手をひろげて待つてゐるのだ。彼女は行きさへすれば村長の娘のやうに大事にされるであらう。その子供のと同じ位大きい人形だつて直ぐ買つて貰へる。何んと云ふ幸福なことだらう。――澄子は今まで實父について聞いて來たことと、今お爺さんが話す言葉の間に、どれだけの矛盾があるか、はつきり見破ることは出來なかつた。その上澄子は彼を信じてゐた。嘘をつく筈はなかつた。

『お父さん、おら小さい兄さんには鳥打帽を買つて行つてやり度えな。』

澄子は窮屈な車の中で身體を捻ぢまげて、後のお爺さんに斯んな計畫を洩らした位、落着いて、樂しんでさへゐた。

けれどもその言葉からも判斷される通り、彼女はこれから何が起るかよりは、その出來事を飛び越して、望み次第のものを買つて貰つて、再び村の家に歸つて來る時のことのみを考へ續けてゐたのであつた。それは想像される愉快な光景であつたに引き代へ、今一つの場合――實父との對面のことは、お爺さんから幾ら聞かされてもぼんやりした、不明な、何んとなしに奇怪な感じのするものであつたから。

玄關の横の、日本間を洋風に飾りつけた應接室に通されてから、彼等は十分とは待たなかつた。彼等を案内した取り次の書生が今一度現はれて、粗末な茶托に載せた番茶を二つ、綠色のきれのかかつた卓の上に置いて引き下ると入れ違ひに、一人の小さい妙な恰好をした紳士がちよこ〳〵と部屋に入つて來たかと思ふと、行きなり、張り上げたやうな聲で、

『やあ、これは。――僕が横井です。』

と名乘つた。彼は血色のよい細面に、鋭い目と、長い恰好のよい鼻と、その下に刈り込んだ濃い口鬚を持つて、幾らか薄い痘痕のあるのを除いては、缺點のない顏をしてゐた。が、彼の小さいのは普通の小さいのとは違つてゐた。脊丈は十二三才の子供より高くは見えなかつた。それで大人並のよい發育をした肩と胴を持つて、その胴體からはまた同じく發育のよい一人前の手足が伸び、强いしつかりした頸の上には、顏面の割合にしては非常に大きな、而してよく手入れの屆いた頭が載つてゐた。けれども單に脊の低いことや、胴體の不釣合や、大きな頭部が彼を無恰好にしてゐる直接の原因でないことは誰にでもすぐ分つた。致命的のものは彼の脊中に六吋以上飛び出してゐる大きな瘤であつた。この不幸な肉の隆起が、順當に成育さへすれば彼の顏と同樣に立派な均整を得たに相違ない彼の身體を、いびつに歪め、蜜蜂の腰のやうに押し曲げてしまつたのであつた。横から見ると大きな袋をしよつた蜘蛛の感じがした。けれども彼は斯んな種類の不具者にあり勝ちな、暗い、物に怯ぢけた樣子は微塵も持つてゐなかつた。寧ろ反對に傲慢に晴々しく見えた。

その態度は、相手が取るに足らぬ田舎者だから、特にさうだと云ふのではなく、一般の滿足な身體をした人間に對しても、自分のひけ目のために屈しまいとする習慣的な反抗心の表現であつた。彼にはそれが不似合ではなかつた。小形なりにきちんと身についたモーニング・コートを着て、人並に廣い胸をば、背中の重味を壓し通すやうに、稍々反り味に擴げて、ゆつたりと椅子に腰かけた風采には十分の威嚴さへあつた。

自分の古い幻影であり、また大事な里子の父親である人が、眞逆斯んな佝僂であらうとは思ひもかけなかつたお爺さんの驚は誰にでも想像されるであらう。けれども最初の心の騷が靜まると共に、而して彼をぢつと見たり、歯ぎれのよいてきぱきした挨拶の言葉を聞いたりしてゐるうちに、彼にはまた第二の別種の驚が湧き出た。

『どうしたら斯んな片輪の佝僂が――普通ならば乞食をしても卑しめられ、嘲弄されるべき筈の人が、世間に名を知られるやうなえらい人物になつただらう。』

矢張り尋常一樣の生れではないのだと結局感心した。お爺さんの尊敬は里扶持の不履行でも傷づかなかつたと同じやうに、彼の不具のためにも傷づきはしなかつた。それで今日のために長い間心で練習してゐた挨拶を丁寧に述べた末に、

『さあ、澄子、これがお前の本統のお父さんだ。傍へ行つて、一つ大きくなつたところを見て貰ふだ。』

と云ひながら、自分の椅子の腕にかぢりつくやうにして立つてゐる彼女を、實父の方へ推しやらうとした。澄子は叫び聲をあげた。而して今度はお爺さんにしつかりかぢりついて、今一言何んとか云はれれば、直ぐにも泣き出さうと待ち構へながら、それでも好奇心に充ちた目をしてじつと向ふの大きな箱のやうな椅子の中にちよんぼりとかけてゐる不思議な人を見守つた。

『あれが私の本統のお父さんだつて。何の事づら。あれは去年の秋のお祭の時、八幡樣の横の小屋で足藝をした一寸法

師でねえか。』

彼女の目は斯う云つてゐた。玄關に立つた時の臆した怖れの色は、今では幾らかの輕蔑さへ見せた大膽な凝視に代つてゐた。お爺さんはその目つきが父親にそつくりだと思つて腹の中で悦んだ。實際よく似てゐた。

父親は娘の態度には無頓着に見えた。强いて自分の傍へ引き寄せて彼女をよく見ようともしなければ、優しい言葉を一つかけるでもなかつた。初めから彼女の存在などには氣もつかないやうな顏をしてゐた。而してお爺さんのくど〱した挨拶に對しても、

『あゝ、左樣ですか。あゝ、左樣ですか。――成程。どうも色々有り難う。』

と云ふ風な、言葉だけは丁寧だけれども、熱心のないせか〱した間投詞を交へて聞き流してゐたが、そのうちに急に入口の方を振り向いたかと思ふと、喫驚するやうな大きな聲で誰かを呼び出した。

『お加代――お加代――。』

身體の小さい者ほど大きい聲を出さうとする。――彼の聲は丁度その最も良い一例であつた。書生が入つて來た。

『奥さんにね、田舍から子供を連れて來たから來てくれと云へ。』

『はい。』

書生は引き下つた。その時お爺さんには新しい怖れと不安が生じた。これまで澄子の親のことを考へたり、話したりする場合には、對稱となつたのは大部分父親であつて、母親は單に澄子の繼母だと云ふ意識以外には問題にならなかつた。(またそれだけで彼女の概念は十分なのであつた。――繼母に善い母がある筈はなかつたから。)澄子にしても、本統のお父さんと云ふ言葉はあらゆる事につけて聞いてゐても、本統のお母さん――否、東京のお母さんと云ふ言葉は、殆

んど一度も耳にしないで來たと云つてよかつた。それが彼も自然なのであつた。然るにその未知な新しい相手が今此處に現はれようとしてゐるのだ、と思ふと、お爺さんは自分の當惑はそれとして、澄子がどんなに驚くだらうかと心配した。また父親に示したやうな素つ氣ない風を見せて、初めから憎まれるやうなことにならねばよいが。假令內證兒だとは云つても自分の子供と分つたものを、外へ預けたほど氣兼ねをした奧様だから、屹度旦那も一目置くやうなきつい女に違ひない――お爺さんは一人で氣を揉んでゐた。

其處へばた〳〵と外の廊下を歩いて來るらしい、無樣な、引きずるやうなスリッパの音が聞こえた。而して、

『みいや、みいや。何んだねえ、そんなところへ登つてさ。早く下りといで。よう、――お前さんが先い立つてそんなとこへ出掛けるから玉も權兵衞もみんなお行儀が惡くなつちまうじやないか。さあ、お下りつてば。』

と何かに命令するやうな、それで決して怒つてゐない、甘つたるい女の調子高な聲が響いて、それと共に猫の啼聲がしたかと思ふと、入口の唐紙がさらつと開いて、一人の若い女が入つて來た。彼女は瑞々した丸髷に結つて、羽織と對の荒い大島の着物の胸のあたりには、大きな三毛猫を抱いてゐた。そればかりではなく彼女の後からは尙他に黑と白の二匹の小猫が、くつつき合つて、鼻聲で啼き立てながらついて來た。

『お入りよ、早くさ。』

二匹の猫が二人の見馴れぬ客を怪しむやうに、四つの靑い目を見張つて、脊中を心持ち圓くすくめて、敷居の上に立ち留まつた時、彼女は廊下でもさうであつたが、丁度人間に話すのと變らない言葉と調子でせき立てた。猫は入つた。女は彼等の長い尻つぽに氣をつけながら、やつと唐紙をしめて夾の左手の椅子にかけた。お爺さんと澄子は丁度その反對の側にかけてゐた。

『この子ですか。――まあ。』

横井から指示された時、女は斯う云つて、無遠慮にじつと澄子を見たが、にやりと笑つただけで、その後に直ぐ續けさうな可愛らしいとか大きいとか普通のお世辭らしいものは云はなかつた。またその笑ひ方も呆れたやうな嘲りを現はした無遠慮な仕方であつたにも拘はらず、その女はお爺さんが考へてひそかに怖れてゐたものとは非常に違つて見えた。

『これが家内です。』

と横井から紹介されても、本統とは思へなかつた位であつた。お加代はまだ二十を幾つも出てゐないに相違なかつた。白い面長な顔に、とろつとしたやうな艶のある一双の黒瞳が並んで、鼻の線も申分がなかつたが、一番特長のあるのは口許から頬にかけての輪廓であつた。その顔は完全な卵形をしてゐた。而してその中にくゝれ込んでゐる華奢な小さい唇を、ほんの僅、右か左か、また斜かにゆがめることに依つて、表情がまるで違ふらしかつた。でも、一體の顔立は上品であつた。その上自分の美しさを知つてゐる女の取りすました冷やかさを持つてゐたに拘はらず、威厳はちつともなかつた。口をきくと殊にそれが目立つた。

『いけないよ。また下りようともつて、ぢつとしておいで。――おや、今度は權兵衛が抱つこするのかい。よし、よし、ほらお出で。』

お加代は何んの用事で自分は此處に來たか、考へようともしないやうであつた。猫ばかりに大騒をして、三匹の猫を代り番こに抱いたり、下ろしたりしながら、聲まで出して笑つた。――一體これはどう云ふのだらう。悪い人だらうか、よい人か。東京の奥様と云ふものは斯んなものなのか。――お爺さんには見當がつかなかつた。彼にはまた、自分の妻の風變りな振舞を咎めようともせず、却つて笑顔で見てゐる横井の心持が分らなかつた。でも一方から云ふと、其處に

呆れて、目を見張つてゐる澄子を捕へて、無理に自分たちをお父さん、お母さんと呼ばせようとしたり、また急に六かしい行儀を強いたりしようとしないだけ、氣樂な氣もしないではなかつた。實際その間お加代が澄子に直接話しかけた言葉は三つしかなかつた。

『お前さん、何んて名前。』

『幾つになつたの。』

『猫、好き。』

澄子は三つとも答へられなかつた。胸がどき〳〵して、咽喉の奥にある變な塊りから聲を塞がれてゐた。お爺さんが取りなし顏に名前と年を云つてくれた。けれども三つ目の問に對して、

『はい、生き物は何んでも好きだで。――のう澄子、猫好きだのう。』

と返事をしながら、保證を強いるやうに彼女の顏をさしのぞいた時、澄子は急に大膽に首を振つた。

『いやだあ。』

『おや、おや、こりや大しくじり。』

お加代はちらと白い齒を見せて笑つた。――最初の嘲けつたやうな、冷たい笑ひと同じ笑ひ方で。併し別に氣を惡くした風はなかつた。却つてそのために前よりは打ち解けてさへ見えた。彼女は呼鈴を鳴らして、カステラを持つて來させると、木皿を澄子の前へ押しやりながら、またお爺さんの方へも會釋の目をくれて、兩方へ云ふやうに云つた。

『おあがりなさい。』

假令その調子が猫を呼びかける時の言葉ほど熱心ではなかつたとしても、善良なお爺さんを悦ばせるには十分であつ

た。その上、澄子の叔父の家で何かのもてなしを受けると云ふことに、特別の意味を感ずるお爺さんは、大の滿足でその立派な菓子の一ときれを摘みあげた。彼は澄子にも頻りと勸めた。

『ほら、奥さんがあゝ云つてくれるだ。(お母さんが――それは斯う呼ぶのが本統だと思ひながら、どうしても出なかつた)食べて見ろ。どれ程旨めえもんだか知れねえだぞ。』

けれどもこの滿足も、その珍らしい菓子の味も、先刻からお爺さんの心に蟠つてゐた最後の大事な用事を忘れさせることは出來なかつた。それは滯りの里扶持の問題であつた。彼は總領息子から念を押されて來てゐた。この機會を外づしては永久に取れる金ではないから、屹度話をつけて來るやうにと云はれてゐた。お爺さん自身にしてもさう信じてゐたし、むづかしかつた金を自分の手で立派に取つて見せてやる、と云ふことに一種の功名心を感じないでもなかつた。けれども何時どう切り出したものかと思ひ惑ふた。この場になつて催促がましいことを云つて失禮ではなからうか。――いや、手紙にもその事は書いて來てあるのだから、餘計な心配をしなくも今に屹度向ふから云ひ出すに相違ない。――顏見るから早々そんな話が出來るものではないから。――お爺さんは待つてゐた。が、横井は何んとも云はなかつた。彼は新らしく葉捲に火をつけて、匂ひのよい煙を悠々と吹かしながら、目の前の光景とはすつかり別な、何かの考へに耽り始めたかのやうに、默つて、すましてゐた。不意に思ひ出したやうにお爺さんに注意を向けたと思ふと、村の產業の模樣とか、人口とか、戸數とかに就いて質問した。お爺さんはそれを機會に村の貧乏話をしかけた。

『ふん、ふん、成る程、成る程。ははあ、ははあ。左樣ですか。』

感歎詞を二つ短かく重ねて發音するのが彼の癖らしかつた。お爺さんは思ひきつて今話し出さうと決心した。順序も極く自然だと思つた。口を開きかけた。すると意外な騷で妨げられた。

『おや、おや、おや。』

お加代が大仰な驚の聲をあげた。彼女は下にゐた二匹の小猫が後の壁際にある長椅子から美しい刺繍のクウションを引きずり下ろして、房飾りの玉を玩弄具にしながら兩方でじやれ合つてゐるのを見つけたのであつた。女主人の聲で自分たちの惡戯の發見を知つた二匹は、あはててクウションを放して逃げようとした。けれども細かい絹のかゞり糸の中に、からまつた爪は容易に拔けなかつた。走るとクウションが二匹の小猫にくつついて部屋ぢうを一緒に駈け廻つた。

『何んだねえ、その恰好は。――まあお待ちつたら――こら、待たないか。――』

お加代は怒つたり。おかしがつたりしながら、猫を留めるために椅子をたつと、今度は膝の上にゐた猫までが面白い騷の仲間入りをしようと決心したかのやうに、前の二匹の後を追うて駈け廻り出した。澄子は面白いよりは怖がつてお爺さんに抱きついた。實際、三匹の猫は急に憑き物でもしたやうで、お加代が幾ら聲をかけても、制しても留まらうともしなかつた。

『仕樣がないねえ。ちよつ、相田さん――相田さん――。よね――よね。――』

お加代は肝の立つた聲を、呼鈴の代りにふり立てた。書生と小間使が飛んで來て、やつと狼籍者を取り押へたまで室内の騷ぎはやまなかつた。漸くかたがついた時、お爺さんはしかけた大事な話を續けたものかどうか、考へた。續ける決心をした。すると今度は横井が時計を出して見て、もう外出の時間だと云つた。

『おい、新吉に車を廻すやうに云つてくれ。』

小猫を抱いて出ようとしてゐる小間使の後から彼は命令した。それから次にはお加代に向つて一つの注意を與へた。

『吉川さん（お爺さんの苗字）に歸りの旅費をあげなきやいけないよ。』

それは何の意味だ。——驚いて彼の顔を見詰めたお爺さんに對して、横井ははつきりした演說のやうな口調で話しかけた。

『もう晝だから何かお馳走してお貰ひなさい。何處かお供するとよいが丁度S——黨の會があるので。矢張り夜の汽車で立ちますか。それだともうお逢ひ出來ないかも知れないが、どうか僕を待たないで遠慮なくお立ち下さい。こうつと、話も殘つてゐますが、何しろ非常に忙しいので。——大抵のことは家内も承知してゐますから、何んとかするでせう。よく相談して御覽なさい。では僕は失敬します。——いづれまた。』

彼は云ひ終るとその儘部屋を出て行つた。お加代も後に續いた。而して數分の後には、主人を見送る人々の挨拶の聲が玄關の方で聞こえた。

澄子と二人きり部屋に取り殘されたお爺さんは、說明の出來ない心持を味つてゐた。これがあの長い間待ち望んでゐた日か。——彼の目からは留め度なく淚が湧き出た。もう隱さなかつた。彼は澄子を抱いて、一緒に泣きさうになつて見守つてゐる小さい顏の上に熱い滴を注ぎながら云ひ續けた。

『可哀想なもんだ。——可哀想なもんだ。』

其晚、奥の一つの部屋で澄子が眠つた時には、お爺さんはたしかに自分の横に寢てゐたに相違なかつた。けれども朝目を覺まして見ると、お爺さんの代りに小間使のよねが眠つてゐた。

『本統にあの時ばかりは困りましたよ。泣いて〳〵泣き死にさうでしたもの。どうにか機嫌を取つてと思つて傍へよると、男のお子さん見たいに足で蹴つて寄せつけないつて云ふ見務ですからね。——矢張り旦那樣のお子さんだけあつて、激しい氣象だと思ひました。』

およねがして聞かせる斯んな昔話を、强い懐しさで、また半分恥しながら耳傾ける頃には、澄子は漸く若い娘にならうとしてゐた。彼女はその頃のことは殆んど忘れてしまつてゐた。强いて思ひ出さうとすると、目の前に絕えず湖と富士山があつたこととか、或る時、富士山の下の森に熊が出たと云つて、村ぢうで熊狩りをして、一頭のまつ黑な大熊を打ち殺して持つて歸つたのを見て、怖ろしさに震え上つたことが、深い忘却の谷の向側にぼんやり殘つてゐるやうな氣がした。けれどもそれが本當の記憶であるかどうか、たしかな判斷はつかなかつた。澄子は屹度夢なのだと信じてゐた。

併し彼女の風變りな一つの過去のみは、決して夢でも作り物語でもない證據が殘つてゐた。それは甲州から着て歸つた着物であつた。あの勘定高い嫂が二枚の十圓札の中から奮發して作つた、荒い形付木綿の三つ身の綿入と、赤無地のメリンスの帶の二つのうち、着物だけが何處も洗濯して形も見えない程になりながらまだあつた。

『奥樣は汚らしいから雜巾にでもして仕舞へと仰しやつたのですけれども、私には考があつてしまつておきましたの。――あなたがお身大きくなつて贅澤をなすつたり、生意氣を仰しやつたりしたら、一つこれで取つちめて上げようともつて。如何でございます。この着物を召して、短いおかつぱさんのてつぺんには、リボン代りに甲斐絹の赤いきれがくつついてゐようと云ふ姿で、田舍のよぼ〳〵のお爺さんに抱つこしていらしたのですからね。』

澄子は泣き度くなつた。實際、それを云はれる度に、涙で目を一杯にしながら、飛びついてよねの口を手で塞しながら云つた。

『もう、澤山。』

それでもまた、幾度も同じ話を繰り返さして飽きなかつた。澄子は七つの田舍娘の自分が恥かしかつた。戀しかつた。

可哀想であつた。悲しかつた。けれども自分を連れて來たと云ふお爺さんに對しては、特別の懐しみや親しみを感ずる氣は薄かつた。——澄子はやつと十四になつたばかりであつたから。複雜な事情の中で年よりはませて育ち、殊に自分では一つぱし大人の氣になつてをりながら、その時分の若さから見れば、年寄りはどんな關係であつたにせよ、何んとなしに不氣味な、汚い、妖魔物じみた者以上ではなかつたから。斯うして生命の一つの芽を地上にしつかり植ゑつけるために、あれ程重い役目を演じた親切な手は、拔かれた葱が土を忘れるやうに、澄子の意識から離れてゐた。

では、誰がその手に代つたか。——父親でもなければお加代でもなかつた。父親は澄子が田舍から歸つて來た時に示した冷淡をいつまでも變へなかつた。お加代はまた虐めもしなければ、蔭口もきかなかつた代り、親切でもなければ、深入りもしなかつた。その點では猫の方がよつぽど親身に取り扱はれた。どんな時でも三匹はゐて、猫自身は變つても名前だけは代々同じくみい、玉、權兵衛と呼ばれてゐる彼等は、可愛がられもするだけ、若し惡い事をすると——臺所の肴をくはへ出したとか、唐紙で爪を研いだとか——ひどい糺明に逢つた。お加代は美しい顏を怒で眞つ赤にして、彼等を罵り、打ち、庭石の上に投げつけた。が、その反動は目覺ましかつた。彼女は丁度子供を折檻しすぎた後の母親のやうに、懲らした猫を抱きながら、優しい言葉と頬ずりで謝罪した。

『いゝかい、分つたね。これから二度とあんな惡さをするんぢやないよ。——よし、よし、分つたなら埋め合せにうんと御馳走してあげようね。——よねや、肴屋が來たら、みいちやんたちにも何か取つといておやりよ。』

お加代の聲は晴れ〴〵しく茶の間の長火鉢の前から臺所の方へ響き渡つた。

『私が猫だつたらどんなによいだらう。』

澄子は同じやうに打たれたり、叱られたりして見度いと思つたことがよくあつた。一遍もそんな機會がなかつたほど、

無關心で見過されてゐたのであつた。それは虐待以上にみじめな狀態であつた。實際、どんな點から云つても彼女は猫の相手ではなかつた。彼等は何處でも家の中ぢうお加代の後をついてふざけ廻り、甘へて啼き、旨い食べ物をねだり、腹が一杯になれば、研き立てた桑の長火鉢の猫板の上に、重なり合つて悠々と眠る權利を持つてゐるに反して、澄子はその火鉢の置いてある茶の間へすらも――否、茶の間へは殊に、滅多に入ることは出來なかつた。――其處には殆んど一日お加代が坐つてゐたから。小學校の上級になつて、もと納戸代りに使つてゐた北向の長四疊を自分の部屋として貰ひ出すまでは、澄子は殆んど女中部屋の片隅で代々の飯焚女や小間使を母親として、車夫を父親として大きくなつたと云つてもよい位であつた。長く變らなかつたゞけ、およねと新吉が一番久しく父母であつた。取り分けおよねは親身に澄子の面倒を見てやつた。

『私は自分が不仕合に生れついて來たから、誰でも可哀想な人を見ると人事とは思へない。』

これが彼女の口癖であつた。どちらかと云ふとおよねは醜い女であつた。そばかすだらけの小さい顏で、それに釣り合つたやうに頭も、肩も、腰も、手足も、身體の各部分が小さくちんまり出來上つてゐた。たゞ髮の毛が如何にもたつぷりあるのと、頸に顏のやうなしみがなくて、まつ白で、すべ／＼して、長いのが、美しいと云へば僅かな美しさであつた。今一つは、聲が普通の話聲でも笑ひ聲でも非常に可愛らしかつた。

この小さいおよねが、殆んど自分の倍もあるやうな大男の新吉と長い戀仲であることは、今では誰も知らぬものはなかつた。二人は一度暇を取つて小さい牛乳屋を開いたことさへあつた。梶棒に馴れた新吉が牛乳の箱車を曳いて廻ると、およねは店に新聞の四五種も置いて、書生さんのお客でも待たうと云ふ計畫であつた。けれども得意はちつともつかないで仕入れたほどの乳は皆んな腐つた。二三ヶ月目には二人は溜息をついて顏を見合せた。結句此苦い經驗は、今

一度住み馴れた女中部屋と車夫部屋に歸るのが一番安全な道だと云ふことを彼等に分らしたので結末がついた。

およねがもう三十近くになつて、小間使から飯焚女にまでなり下りながら(それ以來横井の家には小間使はなかつた。)辛抱してゐるのも、また新吉が給料を二三月もおくらされたり、お仕着の法被や、股引や、ゴム足袋をけち〳〵されたりするので肝癪を起しながら、強いてその家を離れようとしないのも、長年の情愛や、不具な主人に對する風變りな尊敬があつたにせよ、重な原因はそれであつた。今では主人はその關係を狡猾に利用してゐるかのやうにさへ見えた。月末の支拂でも新吉の給料は、時々はおよねのも、平氣で延ばされた。お加代が殊にその點は平氣に振舞つた。

『人を馬鹿にしてるわ。それならそれと何んとか一言云ひ譯らしいことでも云つてくれゝば、此方の氣もすむのに、洒々して威張つてゐるんだから憎らしくなつちまう。』

およねは女中部屋でぷん〳〵しながら、お加代の惡口を云つた。二人は奇妙な怒り方をした。新吉が怒る時にはおよねが諦らめ手になつた。反對におよねが怒る場合には、新吉が默り込んでたゞ煙草をすぱ〳〵吹かして考へ込んだ。

お加代が決して父の正しい妻ではないこと、父はあの女のためには最初の夫人とも別れ、勿體ないほど澤山の金も使つたこと、今だに毎月親許へ一定の金が送られて、四五人の家族がそれで生活してゐること――澄子がうす〳〵氣のついてゐた事柄にはつきり證明を與へたのも、そんな怒の後のおよねであつた。

『小鈴つて名で、たしか新橋から出てゐたのですつて。ほら、あの居間の簞笥の上に大事にしてゐらつしやる金唐革の手箱がございませう。鍵のかかるやうになつた、ね。あの中にはその時分の寫眞がどつさり入つてゐるのですよ。御機嫌がよいと、どうかして出して見せてくれることがありますわ。――ええ、ええ、そりやお綺麗ですとも。今だつてあ

の通りですけれども、その時分はまた身體の手入れからして別ですからね。』

およねには不思議な矛盾があつた。彼女はお加代の黒人上りの女らしい薄情と狡猾をば憎みながらも、その美しさに對しては強い讃美の情を捧げてゐるらしかつた。この近所のどの奥様よりも美しいと云つて自慢した。

『まあ、このお羽織は本統によくお似合になりますわ。』

お加代が外出する時になどは、屹度斯んな批評を加へながら、決してお世辭でなしに、眞から見惚れるやうにして玄關に見送つた。この意味に於て、幾ら時々腹を立てようが、また惡口を云はうが、およねがお加代の忠實な從者であることには變りはなかつた。澄子にさうであると同じやうに。

一層不思議なことには、およねに似た心持が、澄子にまでもあつたことである。彼女は自分が決してお加代から愛されてゐないことをよく知つてゐた。また自分とてもお加代を愛してゐるとは云へなかつた。(いや、愛に飢えてゐる彼女は、若し許されさへしたら、飛びついて、全心を捧げて愛したかも知れないのに、機會が全然拒絶されてゐたのであつた。その點から、絶えずお加代の後をつけ廻して、甘へて可愛がられてゐる猫達を、澄子は嫉妬し、憎んでゐた。)にも拘はらず彼女の若い心は、恩義のある筈のお爺さんさへ、その『老い』のために無氣味に、親しみ惡く見えたと同じ理由で、美しいものをばどんな關係にあつても美しいと思はないわけに行かなかつた。而してお加代がもと元藝者であつたと云ふ事實は、打ち勝つたやうな、子供らしい安心を澄子に與へると共に、強い好奇心をも抱かせた。

『人間が金で買へるのだ。』

澄子は驚くべきことのやうな氣がした。殊にその實例を自分の父親の妻に見出したことが、一層奇妙に感じられた。

『ではあの人の美しい身體が幾何で取引されたのだらう。』

ふと、斯んなことを考へて見て、彼女は一人で顏を赤くした。何んだか自分の家が人に見せられない、恥かしい秘密で充たされてゐる氣がした。また學校友達の家庭と自分の家とが何處となく違つて感ぜられるのも（どう違つてゐるか、はつきりは分らなかつたが）そのためであるらしかつた。而してその本體は、すべておよねから教はつた金唐革の手箱の中に隱されてゐるやうに思はれた。澄子は怖い物見たさに似た興味に捕へられた。それを見ることが恥しく、異樣であるのを知りながら、またどんなに不思議に美しいかゞ想像された。見度くてたまらなかつた。庭に向いた障子が偶然明けつ放しになつてゐる時があつた。するとその箱が正面の簞笥の上に、殆んど使つたことのない針箱と、白い大理石の飾時計との間に並んで置かれてあるのが目に入つた。澄子は通りすがりにちらつと素早い一瞥をその方へ投げると、周章てて、目をそらして居間の前を駈け拔けた。お加代がおよねを連れて下町へ買物へでも出掛けて、澄子が一人留守番をする場合などには、誘惑は一層强まつた。けれども大膽に入つて行つて、小箱に手をかけて見るほどの決心はつかなかつた。それは人の留守を侵すと云ふ後めたさのみではなかつた。どんなに氣をつけてしてもお加代に發見されないではすまぬことを知つてゐたからであつた。その點ではお加代の神經は病的なほど銳かつた。彼女は自分の手廻りの道具は、茶の間の長火鉢や座布團のやうな物まで、それ〴〵自分だけに分つてゐる一定の特殊な置き方――例へば疊の緣から幾つ目のところにその角を据ゑると云つたやうな具合で、位置をきめてあつた。他人の手の跡は忽ち嗅げつけられた。結果は激しい怒りと詮議立で、家ちうが大騷になつた。罪人が探し出されるまでは止まなかつた。これはお加代が横井に來るまでにゐた家での生活――人數にしては非常に狹い部屋に、負け嫌ひで狡猾な、それでお互ひ同士秘密の多い女たちが、ごた〴〵雜居してゐた頃の習慣から來た性癖に相違なかつた。

併し、本統を云ふとお加代がどんな性癖を持つてゐようが、その前身が何であらうが澄子には關係のないことであつ

た。彼女は決して澄子の母親ではないのだから。假りに母親と云ふ名前を呼ばれようとさへしないのだから。澄子はお加代のことを一度もお母さん、と呼んだことはなかつた。言葉が自然に流れ出なかつた。――丁度、小さい澄子を連れて來た時、お爺さんがお前のお母さん、と澄子に云へなかつたと同じやうに――呼んでも決してふり向かれはしないだらうと云ふ氣がした。實際、澄子はお加代に呼びかける名詞を持つてゐなかつたのであつた。それで用事は足りてゐた。澄子はまた意地悪い位潔癖な決心をさへ持つてゐた。自分の血を分けた本統の母親以外には、決して誰をも「お母さん」とは呼ぶまいと堅くさう思つた。その悲壯な決心に、子供らしい誇を感じてゐた。けれども誰が本統の母親か。――その人は今何處にどうして生きてゐるだらう。――この問題は澄子の運命的な悲しみであつた。同時にその不明な母親に對する彼女の想像は、時に依つて様々に變つた。或る時は如何にも若い娘らしい空想で、出來るだけ美しい母親を描き出し、また出來るだけ樂しい小説的なめぐり逢ひで結末をつけて見て自分を悅ばした。けれども反對の場合はみじめであつた。澄子は絶望してゐた。幾ら待つてゐても、また探し廻つても、自分が取つて置きの「お母さん」を浴びせかけて飛びつけるやうな人は、決して永久に現はれはしないのだと思はれた。自分は一生母親なしで死んで行くであらう。誰からも可愛がられないで、つんとして、知らん顔をされて。――澄子はせめて母親の名前だけも知り度いと願つた。それを話して聞かせ得る人は、この世の中にたしかに一人はある筈である。けれども澄子はその人に近づいて問く勇氣はなかつた。父親はお加代とはまた別な態度で、澄子とは離れて暮らしてゐた。父親の性格は、彼の身體が奇妙で風變りであると同様に、奇妙で、風變りに見えた。澄子はまだ父親がどんな人か本統によく分らなかつた。そんな譯で澄子が母親について悲しみを自由に打ち明けることの出來るのは、他の事でもさうであつたと同じく、ただおよねと新吉の二人きりであつた。けれどもその二人も、澄子がどうかして探し出さうとした此の一つの事については堅く口を

閉ぢてゐた。幾らかお饒舌のおよねさへそれだけは話さなかつた。

『本統に知らないのだらうか。』

疑はしかつた。知つてゐて云はないのだとすれば――あの二人だつて決して心から自分を愛してゐるのではないのだ。――こんな時ほど澄子は自分が獨りぼつちだといふ氣の強くすることはなかつた。誰も愛してはくれない、構つてはくれない。假令自分が今突然消えてなくなつたとしても、人々はちびた庭箒が一本見えなくなつた程の騷もしないに極まつてゐる。――澄子は昔の物語の中のお鶴のやうに、小さい巡禮姿で何處ともなく母親を尋ねてさ迷ひ歩く自分を想像した。而して激しく涙を流した。

けれども平生の澄子は決して陰氣な娘でもなければ、特別に怯づ〳〵してもゐなかつた。家庭の優しい注意を缺いで育つたと共に、面倒な束縛も持たなかつたので、氣象も態度も獨立的で、何んとなしに野育ちらしい腕白なところさへあつた。

『あんな利かない子つてありはしない。』

お加代はこれを澄子のすべての批評にしてゐた程であつた。學校でもよく出來る生徒で、勉强もすれば、騷ぎもした。毎日お腹をすかして歸つて來ると、直ぐ臺所へ驅けて行つておやつをねだり、足りなければ不足を云つてぐずる位、およねだけにはしかねなかつた。復習がすむと裏庭に出る。それは物干竿と並んで葡萄棚があれば、また一寸とした青物畑もあると云ふ風な、細長い三十坪たらずの空地に過ぎなかつたが、澄子に取つてはおよねのゐる女中部屋についでの親しい場所であつた。女中部屋に飽きた時の逃げ場は屹度其處であつたから。また家の中では何處にゐても、何をしてゐても絶えず無意識に感じなければならないものから、――恐らくは、お加代の言葉や、足音や、咳拂ひや、また父親

の無言な冷靜な顏や醜い不具の身體などから常に發散してゐるかのやうな重苦しい不可解な壓力から、——全然自由になり得るのは、僅かに其處のみであつたから。殊に日曜日には澄子は其空地で一人で遊びでもするより外に仕方はなかつた。誰も何處へも連れて行つてはくれなかつたし、友達はまた、學校では不足しなかつたが、家へ來たり行つたりする程の相手はなかつた。と云ふよりはそんなことは自分の家では望まれもしないことゝ直覺的に感じてゐた。またそれを淋しがつたり悲しんだりするには、餘りにその境遇に馴れてゐた。兎に角裏庭に出さへすれば、何か知ら友達はあつた。よい時候で、よいお天氣であれば尚更に、——澄子は高い空の雲に話しかけ、葡萄の葉をゆするそよ風に挨拶し、物干竿の肌にきら〳〵笑つてゐる日光に笑ひ返した。また黑い小さい畦の上に芽を吹いて、競爭で伸びようとして押しつくらをしてゐる摘み菜の行列も可愛らしかつた。一片の煎餅の屑を畑の端の穴の中に運び込まうとしてゐる五六匹の蟻の運動を見てゐるだけでも、二三十分は夢中でたつてしまつた。家の中に比べれば何もかも面白くて、氣輕で、呑氣だつた。澄子はぢつとしてゐられなくなつて、蟻の穴を起點として、二間ほど向にある一本の柿の木の傍まで幅飛をして見た。旨く飛べた。もう一遍、もう少し遠く塀際まで。——見事に轉んだ。彼女は横辷りに倒れて、傍に置いてあつた古材木の角でひどく膝頭をすり向いた。が、それでも樂しさうに笑つて、やつと起き上つたと思ふと、今度はその材木に腰かけてうたひ出した。初めは座敷の方を憚るやうな普通の聲で、そのうちに段々夢中になつて、思ひきつて、有りつたけの聲を張りあげて。——如何なる周圍の事情も、十四の娘の身體の中に脈打ち彈み立つてゐる生命力を抑壓し盡すことは出來なかつたのであつた

けれども彼女が美しくないことは六つの頃と變りはなかつた。子供から一人前の娘にならうとしてまだなりきれない中半端な身體の外觀には、未完成のものゝ持つ醜さへ添つてゐた。丁度不熟な果物のやうに見えた。あらゆる部分がか

ち／＼して、青く、硬かつた。而してどんな醜い娘の上にも一度は屹度溢れ出るに相違ない青春の輝きも、澄子の場合はまだかさ／＼した青白い皮膚の底に隱れてゐるらしかつた。ただ脊丈だけは無遠慮に伸びてゐた。手足がまたそれに比例して長く棒のやうにくつついてゐるので、肩に申譯ばかりの羽毛がついて、後は嘴と足のみから出來上つたやうな、殼から飛び出したばかりの鳥の子に似た感じを、見る者に與へた。まだ肉のつかぬ小さな顏、いつも乾いてゐる白つぽい唇、ぎろつとした持ち前の大きな目、これ等が一層その聯想を強くさせてゐた。

『何んて變な顏をした子たらう。』

呆れると云つた表情をお加代はその美しい顏の上に露骨にあらはしながら、ちつと檢査するやうに澄子を見詰めることがあつた。――實際もつと澄子が可愛らしい顏をした娘であつたならば、今ほど冷淡には取り扱はれなかつたかも知れなかつた。よい着物を作つてやる事にしても、一緒に連れて人中に出るにしても、美しくさへあれば、猫よりはもつと複雜な玩弄物になつた筈であるから。

横井は大抵終日留守で、夜もめつたに家で食事をすることはなかつたけれども、たまに早く歸る日があると、其晩は特別の料理を取つたり、酒も幾種類か並べたりして、夫婦は二人きりで長い晩餐を取つた。新聞も碌に讀めない程で、何等の新しい知識も、從つて話材も持たないお加代の話は、今でも、何年前かに何處かの小さい部屋で彼とさし向ひで職業的に話し合つたやうな話を、矢張りその時と少しも違はぬ調子で繰り返すに過ぎなかつた。而してその下卑た話は、きちんとした美しい奥樣姿に對して不釣合であればあるだけ、彼女を異樣に淫蕩的に見せた。

『ねえ、ちよいと、あなた。――』

お加代は斯んな時によく澄子の顏の話を持ち出した。

『――あの子は誰に似てるんでせう。――あなたにはこれぽつちだつて似たとこなんかありはしませんよ。』

『何云つてるんだ。』

横井がはぐらかさうとしてもお加代はやめなかつた。その時分には大抵醉つてゐた。（お加代は可なり強い飲み手であつた。）而して赤く染まつた頬と口許を、例の特長のある歪め方をして、かしげながら、にや〱して續けた。

『もしか、あの子が母親似だつて云ふのなら、お氣の毒様だけれども――は（彼女は名詞を發音する代りに茗荷の子のやうな小指をちよいとあげて見せた）餘り別嬪ぢやないのね。』

『下らないことを。よせ。』

『なぜさ。いいぢやないか。面白いもの。――ねえ、さうでせう。』

彼女は一人で聲をあげて笑つた。――さも可笑しいと云ふ風に、而してまた嘲り盡したやうな笑ひ方で。この場合お加代には嫉妬はなかつた。併しそれは寛大や憐みからではなく、自分の優越を信じてゐる女の自尊心から生じた心持に過ぎなかつたので、その嘲罵は露骨で冷酷であつた。

『さあ、一つ今夜はしんみり聞かうぢやありませんか、二人のそも〱の話つてところから。――ねえ。たゞぢや聞かれない話だけれども、あなたのことだから負けといて。――』

彼女はます〱笑ひつゞけた。

『だけど、本統に何處にゐるのだか、あなた知つてやしないのですか。』

笑ひきると、お加代は少し調子を變へてまた尋ねた。

『おれが知つてる筈はないぢやないか。』

『おや、おや、そんな薄情な話つてあるか知ら。――誰が知らなくたつて、あなただけは何處にどうしてゐる位は知つてやるのが本統ぢやないか。ねえ、どうです。ちび三さん。――だからあなたつて人はしどい人だつて云ふんだよ。氣が多くつて、それで薄情と來てるんだもの、やりきれやしない。』（そんな身體をしてゐる癖に――）流石に口には出さなかつたことを、彼女は大膽に目に叫ばしてゐるかのやうに、ぎろ〳〵した挑戰的な目つきをしてぢつと彼を見据えた。それ等の瞬間の彼女の顔には、自分自身でも氣づかない怒と絕望とが現はれた。常は運命への屈從と打算とで壓しつけてあるものが――買はれた妻の魂の嘆きが――醉と共に自由に發してゐた。

（今夜も私はこの片輪の佝僂に抱かれて寢るのか……。）

（編者附記）本篇は作者が最初の長篇小説の第一部を成すものにして、今後久しきに亘つて、第二部「お加代」第三部「横井俊造」或は「佝僂の父」と云ふやうの順序にて發表し、此等數篇の姉妹篇を聯ねて數百枚の一大作を完うする計畫なりと。「今までの作はみんな此長篇を書く爲めの習作のやうな氣がします」とは作者の言。以て此作に對する作者の抱負を窺ふべし。

▼移轉廣告▲

本社は來る四月一日より左記に移轉仕り候

東京市麴町區八重洲町一丁目一番地

丸ノ内ビルヂング七階七百七十六號室

◎編輯事務　自午前十時　至午後三時

◎會計事務　自午前十時　至午後二時

（但日曜、祭日休業）

中央公論社

▼移轉廣告▲

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本鄕區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價　金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾四錢）
但支那を除く

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
		以上郵稅共

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割さなれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

廣告取次所

博報堂　萬年社　告天社　正路喜社
豐國通信社　弘盛社　三誠社
金蘭社　大興社　一星社

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵券代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
一金拾圓迄　金八錢
（集金委託料及送料共）

一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌別當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十二年三月二十五日印刷納本
大正十二年四月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木酉三

東京市本鄕區本鄕三丁目六番地
發行所　中央公論社
電話 小石川一四四
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

明治三十一年一月廿九日第三種郵便物認可
大正十二年三月二十五日印刷納本

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

本號特價金壹圓六拾錢
郵税金三錢